348
309

始

14
エトW-76
348-309
帝國圖書館藏

編者寄贈本
大正 4. 9. 17 寄贈
348
309

明治三十四年五月二十六日、羣賢會于太田河原之櫻園賀予當輪界十傑之選也。因献眞影一葉、以為記念。

轉輪博士　那珂通世。

那珂博士滿洲文研究の紀念

明治二十九年頃より博士は滿洲語の研究に着手せられて以て晩年に及べり。其初めに參考せられたるは、

P. G. Von Möllendorf: A Manchu Grammar. (Shanghai, 1892.)

にして博士は滿洲語の原文に一々日本譯文を手寫せられたり。こゝに載するものは同書第十五ページなり。因にいふ、この原本もと博士の所藏にして、今は東京高等師範學校圖書館藏本たり。

1 きけば　きみ　いま　まんぢゅ　書をもつ　まなぶと　いふ。

2 はなはだ　よし。　まんぢゅ　ことばと　いふは、（もの）　われらの　まんぢゅ人の　第一の

3 第一　大切なる　事、　夫れ故に　主部人に如きの　あの　あの　所

4 の　ことばの　ごとく、　知らずば　あらんや。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十[illegible] 毅

[illegible]先生

義も等[illegible]

被仰候、是〻無沙汰

とて[illegible]存候ハゝ

委[illegible]一と

思召候[illegible]

可被成候[illegible]

恐惶謹言

十一月十八日　　[illegible]

羽柴[illegible]殿　進上

露光量違いの為重複撮影

348-309

寄上

[redacted]

斎郷械

露光量違いの為重複撮影

348-307

寄上

那珂博士台啓

肅郵椷

那珂博士閣下同洲異地念切蒹葭每聽
聲施欽遲曷已近維
著祺增重
台候勝常爲祝 僕忝正宗藩愧無建
樹行能隘陋自視歛然時思請業
通儒藉資學識乃日前川島君到京
備悉
近狀猥蒙

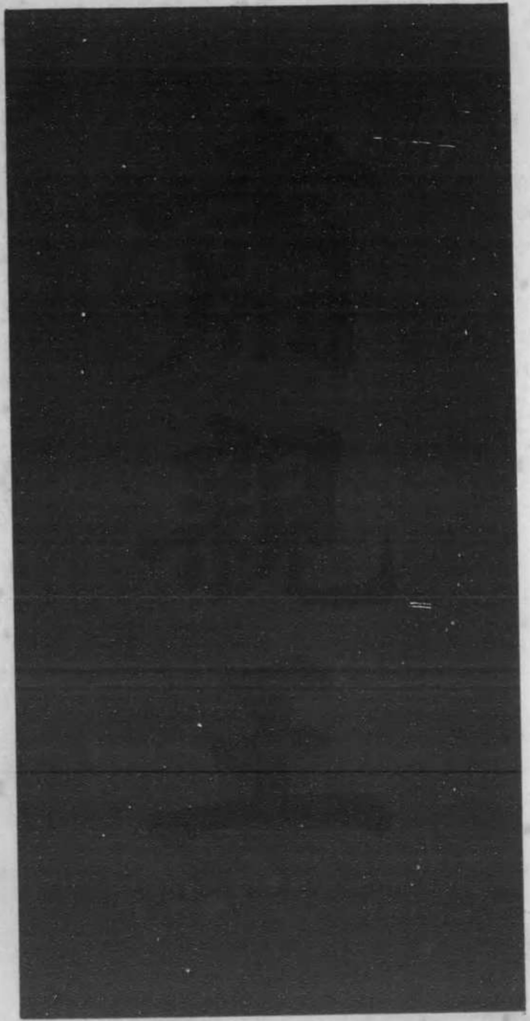
推愛以
大著見遺巨製煌煌洵屬空前之作
譯讀再四抱仰精髓熠燿千秋與
元帝律續並垂不朽矣肅啓致謝
聊表感忱順頌
撰安諸惟
心印
名正具

露光量違いの為重複撮影

文學博士那珂通世君傳

露光量違いの為重複撮影

文學博士那珂通世君傳



文學博士那珂通世君傳目錄

第一章　少年時代……頁 一
第二章　千葉師範學校長……一一
第三章　東京女子師範學校長……一七
第四章　東洋史の創設者……二五
第五章　元史の大家……三四
第六章　遺事逸話……四八
附　錄
文學博士那珂通世君年譜……五四
文學博士那珂通世君著述目錄……五九

文學博士那珂通世君傳

文學博士　三宅米吉述

第一章　少年時代

生家藤村氏　幼名莊次郎　養家江帾氏

文學博士那珂通世君は盛岡藩士藤村源藏政德君の第三子にして、嘉永四年正月六日盛岡城下に生る。幼時莊次郎と稱し、聰敏にして學を好み、夙く長兄莊助君（後名を肸と改む）に從ひて藩黌に通學せり。藩黌の教授江帾五郎通高君大に君の才を愛し、自ら男子なかりしかば藤村氏に請ひ君を養ひて嗣とせんことを約せり。通高君先に栗野氏（石巻栗野杢右衛門氏女）を娶りて一女あり名を貞子といふ、即以て君が他日の配と爲せるなり。

江帾小五郎通繼と稱す

君時に年九歳、是れより親しく養父の薫陶を受け其の指導によりて和漢の學を修めしが、元治元年十四歳にして公許を得て養家に入籍し、名を改めて江帾小五郎通繼と稱せり。

江帾氏家系

抑も江帾氏は藤原秀郷の後裔にして、秀郷六世の孫通直始めて常陸國那珂郡河邊鄉に住し、其の子通資同郡那珂鄉に移りて那珂氏を稱し、通資九世の孫通泰同郡江戸鄉に居りて江戸氏の祖となる。江戸氏の裔にして常陸守護佐竹氏に仕へしもの、關原戰後佐竹氏に從ひて出羽國に徙り、藩主の命により徳川幕府の城名を避け江戸氏を改めて江帾と稱せり。

通高君の父童春通英に至りて盛岡に徙り醫を以て南部氏に

養父通高君

仕へたり。其の長子春庵通誠家業を繼ぎて侍醫となり、通高君は次子なりしを以て別に一家を興せり。

通高君幼より穎異、弘化元年十八歳にして近習に擧げられしが、年少氣鋭にして四方遊學の念禁ずること能はず、一詩を賦して志を述べ（「不下以二羅名一驚中海内上、一生不レ入鬼柳關」の句あり、鬼柳關は境上の關門なり。）遂に脱藩して江戶に出て、安積艮齋、東條一堂等の大家に就て學びしかど意に滿たざる所あり、去て京畿に往き森田節齋に師事し、更に安藝に至り坂井虎山の門に入りて其の塾長となり、居ること歳餘にして江戶に還り、廣く志士と交遊せり、就中鳥山義所、吉田松陰、久坂玄瑞等と最親しく往來したり。時に故國權臣の非謀を企つる者あり、家兄春庵に迫りて其の事に與らしめんとせしが、春庵忠正にして之を聽かず爲に遂に寃死せり。通高君悲憤慷慨に堪へず、死を決して兄の爲に讐を報い國の爲に奸を除かんと欲し竊に畫策する所ありき。嘉永四年偶吉田松陰、宮部鼎藏の二氏東北諸州遊歷の擧あり、通高君は歸國の途二氏と同行して水戶に至らんことを約し、十二月共に江戶を發す。松陰は藩府の許可を俟たずして途に上れり。通高君は當時姓名を變じて安藝五藏といひしが、此の行更に鄕貫姓名を改めて藝州人那珂彌八と稱せり。通高君の水戶に至りし目的の一は其の祖宗墳墓の地を訪はんが爲なりしかば、水戶滯在中吉田宮部兩氏と共に往きて那珂郡の故地を巡視せり。三人水戶に滯留すること前後月餘にして、去て白河城下に至り、通高君は是より別れて獨故鄕に向へり。松陰此の行日記あり題して東北遊日記といふ。其の江幡氏との訣別を叙する所深厚なる友情の紙面に溢るるを見る、曰く

通高君吉田松陰と親交す

廿七日、晴、尙滯、（編者云、嘉永五年正月廿五日白河城下に到り尙滯るなり。）彌八將有所爲焉、故欲以明日訣、事甚秘不可紀、作一詩示之云、白水關下風蕭蕭、與君永訣在明朝、壯士策定休遲疑、勝敗天數非人爲、君不見我有忠光彼豫荊、素謀不成大節明、興來須盡洒千鍾、人間旣是無再逢。

廿八日、晴、斷然與彌八訣、午前發驛、初約與彌八訣於此、已久矣、及期情事難裁、買醉遣悶、所以致延留數日也、出驛越小坂行少許、道左有一路、是爲會津道、余與宮部將抵會津、取道于此、而彌八則直行矣、宮部痛哭、呼五藏々々數聲、余亦嗚咽不能言、五藏不顧而去、注視久之、及不得見而去、至飯豐而飯、天少雪、至牧內取便道、一里出永沼、從大道則二里、宿勢至堂、行程七里、與彌八訣之後、終日茫茫如有所失矣。

松陰等是れより越後佐渡に遊び出羽を經て陸奧に入り、三月十二日盛岡に至りて江幡家を訪へり。日記に曰く

至山陰村、訪江幡春庵母妻及遺孤文虎、至長町香殿寺、拜春庵假葬所、春庵忠義之士也、以侍醫從駕于江戶、爲奸臣所陷、繫于獄、乃自仰藥而死、拜哭之餘、不堪忼慨、鼎藏題國風二首、予亦題數句云、人衆勝天亦何久、請俟他年天定時、云、男兒報國一死足、黃泉之下君瞑目。

松陰等同月十八日仙臺に至る、通高君石卷に在りて之を聞知し、仙臺に出てて其の宿所を訪ふ、誤て二氏已に去ると聞き追跡して福島に至れり。東北遊日記に曰く

廿二日、………過刈田宮道逢彌八、彌八斬奸之策定、欲必逢吾輩、以廿日朝發鹽竈至仙臺、倍道兼行、日夜不休、追吾輩至福島、行程三十里、意遂不可追及、將復歸仙臺、至是相逢、無勝抃躍、相伴至白石同宿焉、………彌八白河別後、至湯村滯數日、至鹽竈又滯數日、至石卷寓栗野木工右衞門家、彌八復姓名曰安藝五藏、………別後有詩云、浮名恐累百年身、棄絕文章已幾春、昨夜松洲誤觀月、又呼筆硯作詩人、有歌云、明日茂又櫻翳而遊奈武今年計農春止思波、夜聞五藏定策、又爲語其家國近狀、酌酒劇談快愉甚。

廿三日、晴、吾二人將ニ迂路至ニ米澤一、過レ驛右折、取ニ路于翫山中一、行二里、道右八丁許、小原村有ニ溫泉一、浴者頗多、出ニ戶澤一、行程四里、……五藏送至ニ戶澤一、將下以ニ明日一永訣上、遂同宿、夜招ニ淨瑠璃語一、使レ語ニ忠臣藏十二回一、相見忼慨、涙數行下。
廿四日、晴、五藏期在ニ近日一、是以、訣別殊不レ勝レ情、五藏作下與ニ森田謙藏、鳥山新三郎、村上寛齋、來原良藏、土屋彌之助、井上壯太郎一書上、託ニ吾二人一、又招ニ淨瑠璃語一、使レ語ニ忠臣庫八回一、未後斷然捨ニ五藏一而去。

松陰の江戶に歸るや其の亡命の故を以て罪せられ、通高君は石卷に還り復粟野氏に寄寓して時機を覗へり。既にして藩主奸臣を罪し春庵の遺子文虎靜軒（後那珂通文と稱す）に祿を給し家を繼がしめければ、通高君再び江戶に出て、帷を下して教授す、是の時に當り江帾五郎の名已に都下に高く、來學從遊する者日に多かりき。

通高君作人館教授となる

安政六年藩主江帾氏を召還し其の舊罪を問はずして新に祿六十石を給し、翌萬延元年藩學明義堂の教授と爲せり。當時の藩主南部美濃守利剛は大に學校を擴張せんと欲して江帾氏等の意見を徵し、文久二年新に作人館を與して文學武術を教授し、藩士の子弟をして悉く入學せしむ。其の文學部には教授一名、助教、訓導師、句讀師各若干名を置けり。通高君乃其の教授に擧げられ、是れより六七年間作人館に在りて專ら人才陶冶の任に當れり。通高君は學和漢を兼ね、詩文を善くし又和歌に巧なりき。然れども文藝は其の末技のみ、夙に經世の大志あり、學問は畢竟實行にありとし、其の人を教育するや專ら國家有用の材を作るを以て目的と爲せり。

通高君和漢一致博議を著す

曾て「和漢一致博議」を著して和漢道德の一致を說き、忠孝も文武も政教も皆一途なるべきことを論じたり。藩主嘉賞して之に「學軌」の名を命じ、且卷首に「忠孝无二文武不岐」の八字を書して與へしが、慶應三年作人館に於て之を印行し普く藩士に頒てり。

作人館句讀師

通世君は夙に穎才を以て稱せられ、其の明敏の資を以て此の如き大人の手に教養せられしかば、學業の進步著しく養家に入籍するの後幾ばくもなく作人館の句讀師に擧げらるるに至れり。既にして明治元

戊辰の變

戊辰の年會津の役起るや、奧羽諸藩多く方向に迷ひ各藩內の騷擾名狀すべからず。南部氏亦藩內の議論一致せざるを以て其の行動兩端を持し遂に王師に抗衡するの罪を得たり。此の時に當り江帾教授は國事に奔走し、藩命を奉じて仙臺に使し奧羽諸藩の會盟に列せしが、若松城遂に陷り會盟諸侯も皆降るに及びて、南部利剛は領土を沒收せられ東京自邸に於て謹愼命を待つこととなり、子彥太郎（年尙少なりき、やがて利恭と名のる）白石城十三萬石を賜はりて家名存續の恩典に與かれり、而して叛逆首謀の家臣として通高君は楢山佐渡、佐々木直作等と共に東京に護送せられて麻布の藩邸に拘禁せられたり、時に明治元年十二月なりき。是

通高君の幽囚

れより通高君は幽居すること十餘箇月、其の間自ら日日の起居を注し又竊に見聞する所を錄せるものあり題して幽囚日記といふ。又雜書を借覽し讀むに隨て抄出せるもの積みて數十冊をなせり。其の幽囚たる固より朝廷の處分を待つものなれば、外は警戒甚嚴なるが如くなりしかど、內は舊藩の功臣として頗優遇寬待せられ、時に機密文書の起稿をさへ委囑せらるることもありき。

是の時に當り盛岡士民は遂に主家に離れて流落顚沛の運命に遭遇せしが、江帾氏の家族も故國に在りて具に艱苦を甞めたり。幽囚日記の中に通世君及び一族當時の消息を傳ふるものあり、其の著しきものを左に摘出すべし。通世君は時に年十九、小五郎通繼と稱せり。幽囚日記明治二年正月廿五日の條に曰く

藤木林今は藤森泰二郎と改めたるが、對面し度由故竊に廊下に出て其物語をきけば、姪靜軒姓名を田口小太郎と改め川上龍之助と共に……登り來り一昨日方より千住驛に滯留し居たりといひ、又宿許にては妻と娘の二人六日町なる姉君の家に同居し舊宅には通繼のみ殘り居、工藤壽太郎本堂圭十郎等

那珂姓

の教子等代々に行て泊るべく定めたるよし也といひ、さて後に明日隆之進（家老目時隆之進）御國へ下さるるにつき佐藤昌藏と諸共に附添下り被仰付たれば、一筆かきて給はり候へ、そを記しとして御宿元へ參り御樣子も爲知上可申抔云ふにより、取あへず扇に

かきかはすあとをかたみの浦千鳥立歸る波にねをのみぞなく

とかきてとらせたりき。

又二月十五日の條に曰く

夜に入り勇（福田勇）暇乞に來る……我は詩箋に五絶一首書して小五郎が許に遣しぬ、其詩

刀鋋知何日、優游已度春、承家唯是汝、仕國豈無人。

同十六日の條に曰く

此日靜軒一生士道を以て御奉公可申上旨命ぜられ、江帾と云姓は御差支之筋有之に付以來那珂氏に改めよとの御沙汰也とぞ、那珂は我家の舊姓なれば本意に叶ひたる心地せり。

と、靜軒は春庵の子、盛岡江帾氏の本家なり。從來醫を以て仕へたりしが、是に至りて士となりたるなり。那珂は江帾氏の舊姓、通高君曾て那珂彌八と稱せしことあるも未公然の改姓にはあらざりしが、今藩主の命によりて此の改姓あり、那珂氏の復姓此に始まれりと謂ふべし。而して當時江帾氏の名聲世に高し、其の御差支の筋ありと云へるもの知るべきなり。

五月九日の條に曰く

半助（淺沼半助）も郷助（太田郷助）の供にて明日下るべきよしを聞き、妻には大橋順藏が妻のかきたる夢路の日記、通繼には回天詩史を贈らばやとおもふにぞ、日記の端に書付たる歌

見し夢のあとをくらへて世の中にたくひなき身と思はすもかな。

おくれゐてなけきこる身となりぬとも植し小松の蔭なからめや。

回天詩史のあとには

死雪君寃計已灰、等閑死獄亦堪哀、何如把此回天字、付與阿兒身上來。

十九歳にして文章養父に勝れりとの許ありき

通繼も是非東京に登りたきとて文を作り織笠君（織笠弓太）に與へたるに、議論精到慷慨淋漓たりし故常作（久慈常作）に謀りしと君の物語也しが、常作も亦其文を賞し吾に勝れりとす、いかなる事か論ぜしにや心許なけれど、吾にも勝れりといはるることのいと〳〵うれしかりき。

と、織笠久慈兩氏は共に文を解せし者なり、其の激賞此くの如くにして養父を驚喜せしめし通世君當時の學力才藻の如何に非凡なりしかを想見すべし。通世君が上京の情願容れられて佐々木直作の子其の他數人と共に五月末盛岡を發し六月十一日着京す。幽囚日記六月十一日の條に曰く

上京

晝前通繼は更なり龍之助（川上）大二郎（富田）龍太郎（佐々木）陸郎（楓内）恒太郎（本宿）まで駕籠にて着せり、皆打揃て來見ゆ、佐々木氏と謀り蕎麥取よせたれば直右衛門（山本）より贈られたりとて酒肴持參す、同じ處に居流れて酒汲かはすに、去歲今はとて家を出たりし時のおもかげまで胸に浮びてそぞろかなしけれど、黃泉路ならではと思ひたりし人々に此世にて逢ひぬるも亦嬉しくて、只君恩のかたじけなさのみひたふるに仰がれつ……若き者共に未だ蚊やなければ……通繼と陸郎の二人は我方に宿りぬ、うれしさ限りなけれども明日にも命失はれんときに再度去年の咲きを見せんもわりなくて心のうちにかくなん

今はとて別れしものを又更に去年のなけきをみせんとやする

又十二日の條に曰く

通繼は姪及妻と西村との文もて來れり、妻よりは娘もみごもりて三月四月に成ぬべしといひおこしぬ、かねては先つ頃も婚禮させてよと泰助（藤森）などに頼みたるに、我心の如くなれるもいとうれし。

通世君は女婿なり、當時國亂れ家危く江幡家の將來測るべからず。只此の女婿を失はずば以て家名を維持し得べし、是れ其の婚姻を急ぎし所以なるべし。

藩主の近侍となる

通世君はやがて藩主利恭公の近侍を命ぜらる、藩主年尚少なるを以て專ら其の修學の補導をなせり。前藩主利剛公通世君を眷遇し、與ふるに通世の名を以てせり。幽囚日記六月十五日の條に曰く

通世の名は藩主より賜ふ所

通繼は實名を通世（歸納跙）と改めよと大殿樣より御直筆にて賜ひたり、繼字は御先君樣にもあらせらるるよし故かくは賜ひつらめど、實名拜領の事は容易に成がたきことなるをと辱きこと身にあまれり、華押は追て御工夫の上賜ふべしとの御事なるよし。

と、予君と交はること久しかりしかど、君が生前未曾て君が姓名に此の如き由來あることを聞かざりき。君が卒後此の日記を讀むことを得るに及びて始めて之を審にせり。君の故舊中予と同じき者亦少からざらん。

既にして藩主は新領地に就くこととなりて白石に向ひしが、幾ばくもなく朝廷其の哀願を容れ給ひて盛岡の舊領に復歸せしむ。通世君は猶東京に遺り留まりしが、藩主の白石より盛岡に移るに隨ひ歸國すべき命を受けたり。幽囚日記七月廿七日の條に曰く

年少藩主の教導

通世の物語をきけば大殿樣上意には彥太郎儀は何分取立吳候へ其方華押はあとより遣はすべくと懇の上意也しよし。

と、大殿は利剛公、彥太郎は利恭公なり、通世君利剛公より利恭公の教導を委託せらる、其の信任の厚かりしこと知るべきなり。日記に又曰く

今日は何事も心あはただしくて多くもらしつ、夜詩を賦して通世を送る、

孤囚不レ恨送二兒還一、垂老甘當鼎鑊間、幹蠱欲レ酬平昔志、拾遺勿レ辱侍從班、
杵程存趙非二徒爾一、莊嶽求齊豈等閑、一死吾知臣事畢、侯家既領舊江山。

盛岡に歸る

と、翌廿八日通世君は東京を發して白石に至り、更に藩主に隨ひて盛岡に歸れり。

通高君再度の幽囚　再度の上京

此の年十月通高君も亦謹愼を解かれ盛岡に歸ることを得たれども、其の再公職に就くことは許されざりき。然るに通高君歸國の後藩政に關與する所ありしかば、明治三年復捕はれて東京に護送せられ遂に越前藩邸に預けられたり。翌四年九月に至り赦に遇ひ罪ゆるされしが、是より先七月通世君上京して養父の赦免につき周旋奔走する所ありき。通高君は罪ゆるされて後家族を東京に移し、家塾を開きて生徒を集めしに入學を請ふもの少からざりき。九鬼隆一男の如きも當時君に就て教へを受けたる一人にして、爾來君及び通世君の爲に援助する所多かりき。通高君は一時大藏省雇となりしかど、數月にして之を辭し、更に文部省に出仕し小學讀本等の校閱に從事したり。

慶應義塾に入る

通世君は時勢の赴く所を察し是れより專ら英學に志し、初め山東一郎氏の早稻田の塾に在りしが、間もなく九鬼氏に寄寓し、尋て慶應義塾に入れり、是れ明治五年君が廿二歲の時なりき。福澤先生君が窮乏を愍み君をして塾中にありて相當の業務を執らしめ以て其の月謝を免じたりと云ふ。予の同塾に入るや、君は既に上級にあり、且予は童子局にありて君は大人寮にありしかば、直接相交はりしことなしと雖も君及び君と同級なりし藤田茂吉、箕浦勝人の諸氏について屢聞く所ありき、又日夕出入毎に相見しかば、今尚諸氏當時の相貌を記憶せり。明治七年報知新聞社の創設せらるるや、福澤先生其の記者を塾

生中より擧げらるるに當り、君藤田箕浦兩氏と與に其の候補者たりしやに聞及べり。而して試文の結果藤田氏其の選に當れりと雖も、三氏の文章各其の長所ありしと云ふ。

第二章　千葉師範學校長

巴城學舍敎師

洋洋社談

千葉師範學校敎師長兼千葉女子師範學校敎師長

通世君は慶應義塾卒業の後、明治八年五月巴城學舍の敎師となりて山口縣に赴任せり。當時の慣例として任期を一箇年とし、報酬一箇月金五拾圓の約束を以て招聘せられしかば、翌九年六月任期滿ちて歸京せり。是れより又一年有餘專ら學業に勉勵し、文學、歷史等を研究せられしが、此の頃養父通高君等が主として執筆せられし「洋洋社談」に屢其の論文を寄せられたり。洋洋社談は當時世に聞えし諸流の學者の社を結び日を定めて會合し互に談話を交換して之を筆記編輯したる學術雜誌にして、初め毎月二回後毎月一回發行せり。現時刊行の諸雜誌に比すれば固より小規模のものなれども、當時雜誌の刊行未多からざりしかば、大に世に歡迎せられたり。會員の重なる人人は伊藤圭介、大槻磐溪、木村正辭、黑川眞頼、小中村淸矩、榊原芳野、坂谷素、那珂通高、西村茂樹、依田百川等の諸大家にして、通世君は大槻磐溪翁の子息文彦君等と共に其の少壯なるものなりき。明治九年九月發行の洋洋社談第廿一號に「古代の文字」と題し、「通高嗣子那珂通世」と署名せる一篇あり、之を君が論文の同誌に見えたる初めと爲し、是れより同十一年に亘りて寄稿せられたるもの數篇あり。十一年一月發行の同誌第三十八號に揭げられたる「上古年代考」は漢文にて稍詳かに我が古史の紀年を論じたるものにして君が上古年代論の最初の發表なり。

明治十年十二月君は更に千葉師範學校敎師長に聘せられて千葉縣に赴任し、翌十一年十一月に至り千葉師範學校長兼千葉女子師範學校千葉中學校總理となりしが、居ること一年にして東京女子師範學校訓導兼幹事に榮轉せられたり。

千葉師範學校長兼千葉女子師範學校長千葉中學校總理

君の千葉縣に在ること僅に二年なりしかど、同縣の教育事業は實に君によりて振作發展せられしものと云ふべく、是に由りて同縣の教育家中には今に至り尚君を追慕するもの多し。當時の縣令柴原和氏は深く君を信用し學校の事を擧げて君に一任せしかば、君は十分に自己の意見を實行することを得たり。君は教員の缺勤する者ある時は其の學科の何たるを問はず自ら代りて教授せられたり、是れ君が學問の洽博なりしに由ると云ふべく、又實に君が深く諸學科の教授に興味を有せしに由るなり。當時諸學科の教授法は尚甚幼稚なりしかば、君は其の方法の改良につきて大に意見を有し且之を實行せんことに努められたり。而して君の才幹と博識とは職員生徒の長敬心服を獲て教授管理意の如く行はれたり。

假名文教科書

君が師範教育の任に當るや普通教育の事亦隨て其の任ずる所となれり。抑小學兒童の教育に於て教師の最も困しむ所のものは兒童をして許多の漢字を記憶せしむることなり。君は早く此に見る所あり、此の困難を排除するには讀本以外の教科書を盡く假字のみにて記すに如かずとて、先づ算術教科書を假名文にて作らんことを試みられ、當時新に聘したる教員手島春治氏等に命じてロビンソン著算術初歩を假字のみにて翻譯せしめたり。此の業遂に完成に至らざりしかど、假名文翻譯を爲すに當り種種の考究す

假名遣の改定

べき問題に遭遇せり。即第一には假名遣の問題なり、兒童に讀ましむる假名文には古來の假名遣を襲用すべきか、將現今口語の發音通りに假名遣を改むべきか、後者の便利なること固より言を待たざるなり。是を以て君は動詞の活用語尾を除く外皆口語の發音に隨て記すことに決定せられたり。第二には分

分語法

語法の問題なり、從來我が國の文章は全文連記せしが、假字のみにて連記したる文章は殊に讀み分け難く、歐洲諸國の文章の如く各語を分記するの便利なるに如かざるなり。されば君は假名文翻譯に於て分記の法を用ふることとなせしが、其の分語法即各語の分ち方については動詞、助動詞及びてにをはの如き頗る考究を要するものありき。而して是等の考究に當る者は先國語の文法に明かならざるべからず。君は既に和洋の文法に通曉せられしかど、手島氏等は當時未國語の文法に精しからざりしかば君が指導を受けて先之を研究したり。

英文譯讀法

文法の研究によりて手島氏は自家專攻の學科なる英文の譯讀法に改良すべき所多きを知り、君の指導の下に英語の動詞の法、時、前置詞及び接續詞等に國語の助動詞及びてにをはを對照して各適切なる譯

國語文法

語を定め以て舊來の蕪雜なる譯讀法を一新したり。かくて又君は師範學校中學校の生徒をして國語の文法を學ばしむるの必要を認めこれを其の學科に加へられたり。其の文法は大要英語文法書の組織に據りたるものにて今日にては普通のものなれども當時にありては尚世に稀なりき。殊に假名遣は古來の習慣法を蹈襲せず、動詞の語尾の外皆發音通りに綴らしめたり。當時國語の文法を學科に加へし學校は未あらざりしなり、況や發音通りの假名遣を用ひしが如きは全く例なきことなり。二十餘年の後文部省が國定教科書を作るに及びて字音假名遣を改定せしは君が實行の一部分を襲ぎしに過ぎず。然るに其の字音假名遣すら保守的思想の反對に遇ひて程なく復舊せられたり。當時君の改定假名遣が非難を免れざりしは言ふまでもなし。之を非難する者縣令に訴ふる所ありしが、柴原縣令は學校の事は一切那珂に委任したれば其の爲す所に自らも干涉せず又他の容喙をも許さずとて異論を採用せざりき。されど君の去りたる後非難尚罷まずして後任校長小杉恒太郎氏は遂に文法の教授を停止するに至れり。

假字論の先覺者

之を要するに君が小學教科書に假字を用ひて普通教育の進步を圖らんとし、且假名遣を改めて其の用法を簡易にし、又國語の文法を中等學校の教科に加へしは當時に在て寔に卓見なりしなり。國語の文法は後一般に中等學校の教科に加へらるるに至り、假字は明治十五年以後假名の會等盛に興りて之を日常

一般に用ひんことを主張し、其の中には假名遣の改正を唱ふるものもありき。次いて興りたる羅馬字會の如きも一時頗る盛なりき。是等の諸會は其の後漸く衰頽せしかど其の主義は廢滅せしにあらず。文部省が自ら小學校用教科書を編纂するに至りて漢字の數を制限し字音假名遣を改定したるが如きは其の主義の實行せられしなり。字音假名遣は今や復舊せられたれども、一進一退一顚一起更に大に進むの時あるべし。君は是等諸會には主動者として盡力せられざりしかど、常に先覺者として假字論者に敬重せられ、明治三十三年文部省が國語調査會を置くに及びて其の委員に擧げられしも、君が假字論者にして且國語に造詣深かりしを以てなり。

千葉女子師範學校

裁縫科

千葉女子師範學校は明治十一年の創立にして、其の草創の際君は教師長となりて之に赴き、次て總理となりて之が經營に勗められたり。抑も女子師範學校は大抵男子師範學校と其の學科を同じくすれども而も女子に特別なるもの數科目あり、其の最著しきものを裁縫科とす。裁縫科は當時小學校にもありて女子の必學ぶべきものとなしたれども、其の授業の方法に至りては一般に裁縫師の舊慣に委せられたり。君は此の科の授業法の改良せざるべからざるを思ひ、適當なる教師を索むるに苦心せしが、遂に渡

渡邊辰五郎氏

邊辰五郎氏を縣下鶴舞小學校に見出し之を拔擢して其の教授を託したり。渡邊氏はもと同縣下長生郡廳南の裁縫師なりしが、夙に小學校に於ける裁縫教授法の研究に趣味を感じ、考究數年にして一種の方法を案出し、其の成績見るべきものありき。君は渡邊氏の授業法を見て大に悦び、十二年十月氏を千葉女子師範學校訓導補に推薦せしなり。君の東京女子師範學校に轉任するや、又渡邊氏を同校に迎へて其の授業法を行はしめたり。渡邊氏は後東京裁縫女學校を興し其の校長として大に成功したり。君が渡邊氏を見出し其の授業法を採用せしは君の烱眼と謂ふべく、而して渡邊氏最後の成功は實に君の拔擢に負ふ所多しと謂ふべし。

割烹科

又割烹のことは當時未科目に加へられず學校にて教ふることなかりしが、君は其の女子に必要なるを思ひて其の科を設け女子師範生徒をして之を學ばしめたり。是れ亦當時他に見ざる所なりき。蓋偶之が授業を施さんと欲する者ありとも、適當なる教師を得ること甚難かりしなり。君は之が教師として一料理店の主婦を雇用し、生徒をして其の指導を受けしめたり。料理店の主婦は以て學校教師となすに不適當なること固より言を待たず、而も君が其の不適當なるを知りつつ之を用ひしは深く此の科の必要なるを見認め且自ら指揮監督して其の教授を行はしめんと期したるに由るならん、亦英斷と謂ふべきなり。

千葉中學校

千葉中學校も亦明治十一年の創立に係り、君の總理の下に開校せられたり。其の學科課程は大抵當時一般の教則に基づき適宜斟酌を加へて編制せしものなりと雖も、特に日本文典を一課として加へ且英語に重きを置き新なる譯讀法を用ひて之を教へたり。當時在學の生徒には木內重四郎、柴原龜二、白鳥庫吉、大和久（現今男爵石井）菊次郎等の諸氏ありき。予は君が東京に轉任せられし翌年同校の教師となりて諸學科の教授に當りしが、最初の間生徒の英語譯讀法の異樣なる、又其の試驗の答案等に假名遣の尋常ならざるものあるを怪みたり。而して同僚手島春治氏等の說明を聞くに及びて初めて其の由來する所あるを知り、予も亦是れより國語の研究に興味を有するに至りしなり。

かくの如く君が學識才幹を以て力を學校の經營に盡されしが、在職僅に二年にして帝都に榮轉せらせしかば、其の計畫せられし事業の未緒に就かざりしものも多かりしならん。

通高君の病歿

君の千葉在勤中明治十二年五月養父通高君病みて東京に歿せり、年五十三。通高君梧樓と號し、文章精練を以て知られ又詩歌を能くせり、家に其の集を藏す。墓は東京青山墓地にあり、門人故舊一大碑を

建て甕江川田剛氏の撰文を刻せり、其の銘に曰く、「初爲₌俠客₋中爲₌楚囚₋後則醇儒、經明行修、信哉善變、似₌南山彪₋文章炳烺、身死皮留」と。通高君は赦後自ら刑餘の身を以て世に立つを好まずとて、人の薦むることあるも謝して公職に就かれざりしが、唯文部省の委囑を受けて小學讀本等の校閲をなし以て國家教育の事業に貢獻する所ありき。著書數種あり、中に就て「文法捷徑」は明治十四年に通世君之を印刷に付し、「はゞかりながら」は二十五年に十文字信介氏之を出版し、「旅の苞」は二十六年に門人佐藤平次郎氏之を出版せり。

第三章　東京女子師範學校長

東京女子師範學校訓導兼幹事

明治十二年十一月通世君は東京女子師範學校訓導兼幹事の任を囑せられて千葉より東京に移れり。東京女子師範學校は明治八年十一月開業式を擧げしより玆に四年を經、大儒中村正直氏開校當時より攝理たりしが、攝理の下に幹事を置きて校務を處理せしめたり。從來幹事の職にありし訓導永井久一郎氏が内務省に轉任するに及び、君選ばれて其の後を襲げるなり。

攝理中村正直氏

同校當時の職員

當時同校の職員には明治十一年に米國より歸朝して訓導となり教場總監事兼幼稚園監事たりし神津專三郎氏あり、開校當時より訓導たりし宮川保全氏、淺岡一氏（當時雇教員となれり）あり、訓導秋山四郎氏、茂木春太氏あり、助訓松木荻江女、豐田芙雄女、武村千佐女、植村花亭女、保姆松野久良良女（獨逸人クララ、チーテルマン）、寄宿舍長福田米女、山川二葉女等ありき。既にして翌十三年四月君は攝理補兼訓導となり、五月中村正直氏攝理を辭し、六月議官福羽美靜氏攝理の任を囑せられ、訓導神津專三郎氏は其の任を解かれたり。

攝理補兼訓導

攝理福羽美靜氏

君は前任地に於て既に女子師範學校管理の經驗あり、女子の師範教育に關する君の意見は漸く熟したり。されば君の此の校に轉任せらるるや間もなく校則改正の議を起し、十三年四月之が草案を立て攝理の同意を得て之を文部省に提出し、七月に至りて其の裁可する所となりたり。同校第六年報草案中に君が自ら筆を執りて改正規則の要旨を記せるものあり、今左に之を抄出せん。

明治十三年の規則改正

本學年（編者云、本學年とは明治十二年九月より十三年八月に至る一年間なり。）は幹事攝理皆交替し教員の出入も亦頗多きに由り教育上著しき改良進步の狀を現さず、教則及諸規則の如きも舊慣を保守して以て殆ど學年の末に至れり。然れども改正に着手すべき事項頗多くして從來の規則に小增損を加へて止むべからず、之に依り後期の初（編者云、當時一學年を

前期後期に分ち、九月學年の始より二月十五日迄を前期とし二月廿三日より八月學年の終までを後期とせり。より規則全體改正の議を起し、四月中改正規則五章三十三條及本科豫科課程を草製して之を本省に稟し七月上旬省卿の裁可を得たり、即章末に附記する者是なり。此の規則の實施は次學年より始まると雖、着手は全く此の學年內に在るを以て爰に其の改正の要旨を記するは贅言に非ざるべし。

幼稚保育法

幼稚保育法　當校附屬幼稚園の幼兒保育は從來該園保姆專に之を擔任し、且保姆練習科を置き保姆たるべき生徒を養成せるを以て、師範生徒は第一級に昇りて後練習小學實地教授の餘暇を以て僅に之を參觀するに止れり。元來幼兒の保育法は女子の最注意すべき所にして、幼稚園と小學とは固り初等教育の連接せる者なれば、師範生徒にして保育の法を學ばずんば、假令小學の授業に熟達すとも完全なる女教員となること能はず。是を以て改正の規則には生徒養成の旨趣を擴充し小學の教員たるに要用なる諸學科の外に又幼兒の保育法を學ばしめ、卒業の上は小學教員たるのみならず幼稚園の保姆たるにも堪ふべからしむ。本科生にして既に保姆の術に通ずる時は保姆練習科を設くるは冗複に屬するを以て、該科規則は當學年限にて廢停せり。

保姆練習科を廢す

編者云、保姆練習科は明治十一年六月其の規則を創定し九月生徒を募集せしに、應募者僅に一兩名にして直に授業を開始し難く已むことを得ず之を延期せり。其の應募者の少かりしは當時世間未だ幼稚園の何物たるを解せざりしと、入學者に學資を給與せざりしと、入學試驗科目の高尚なりしとに由れりと云ふ。是を以て同年十月給費生五名を置くこととし又試驗の程度を斟酌し、十二年三月十一名の生徒を入れ十三年七月其の業を卒へしめたり。此の如き情況なりしかば該科を廢して本科生をして保姆の術を學ばしむることとせしは時宜に適したる改革なりしなり。

豫科の設置

豫科の設置　女子の敎育未海內に普洽せず尋常小學の外女子の就學すべき學校甚少くして當校に入學を望む者と雖、其の豫備の學頗淺ければ、入學の試業を高くして當校學藝の基礎を進むること能はず。是を以て曩時豫科の設ありしが、一昨年明治十二年三月故ありて廢せられ、其の生徒は私立女子師範豫備學校に移れり。然るに該校は當校管理の外にあるを以て其の學則課程敎授法等盡く當校の望に適ふことを得べからず。是に由り改正の規則には更に豫科を設け學力未本科に入るに足らざる者に敎授し、將來本科に登る階梯とするなり。私立豫備學校は元來當校の敎場及書籍器械を借用せしが、當校既に豫科の設あらんとするを聞き、其の借用せる敎場書器を返納し當學年七月九日閉校せり。

編者云、本校開設の翌年なる明治九年四月自費通學の別科を置き、本科に入るの豫備とし兼ねて小學年齡外の女子に修學の便を與へ、同年六月より授業を開始せり。十年七月に至り別科を改稱して豫科とせしが、十二年三月經費の節減によりて已むことを得ず之を廢止せり。而して該科の生徒をして遽に其の就學の途を失はしめざらんが爲同校教員等私立女子師範豫備學校を設けて之に移らしめたり。然るに今復豫科を置くに至りしは更に其の必要を見認められ經費の增加を得たるに由るなるべし。

本科の課程

本科の課程　改正規則の課程書は其の體裁舊敎則に異なるを以て之を比較すること頗難し。然れども其の變更の著しき者を摘記すれば諸學科の廢置及修學時間の增減等なり。各級每日の敎授時間は本學年は五時三十分間、前學年は五時間にして三十分の差ありと雖、其の差は唯前學年は體操の科を正課時間外に設け本學年は之を正課時間內に置きしより生ぜる者なり。學科の廢置等に關しては、講義書取の二科を廢し、文學の一科を置き之を講讀文法作文の三目に分ち、經濟學を廢し家政學を以て之

文學

家政學　禮節　古今の和文　文法　割烹　修身科　禮節演習

に代へ、更に幼稚保育術幼稚園實地保育の二科を設け、地理學史學習字の三科を本科より除きて之を新設の豫科の課程に移せり。修身學は從來單に修身訓に止りしが、更に禮節の一科を其中に加へ、又教育論の如きも從來専ら一級生の獨學に附せしが、更に二級生の課程とし一定の時間を設けて之を授くることとなせり。

編者云、講義は全校生徒を講堂に集め修身、教育、養生の事を講ぜしなり。文學は從來本科第四級以上にありて左傳及び文章軌範を讀ましめ、第四級以下には史學として皇朝史略、十八史略、續國史略、續々國史略、元明史略、清史擥要を講讀せしめしなり。改正規則にては史學を罷め豫科本科を通じて文學の科を置き其の講讀には國史略、十八史略、孟子（以上豫科）元明清史略、文章軌範、近世名家文粹を讀ましめ、且豫科の第四級第三級と本科の第五級第四級とに古今の和文を加へ、新に豫科の初二級と本科の初級とに文法を課したり。又從來本科第三級に課したりし經濟學を罷めて家政學を以て之に代へ、其の中にて割烹の事を教へ寄宿生徒をして之を實習せしむることとせり。又修身學は從來本科第四級以上に課せしが、改正規則にては豫科本科を通じて修身の科を置き、且豫科の最後二級に應對進退の節、本科の初三級に禮節演習を加へたり。

保姆練習科を廢して本科生徒をして保育術を學ばしむることとし、又前年廢したる豫科を再興したるが如きは固より大なる變革なりと雖も、是等は只一學校の制度組織に關せる事たるに過ぎず。學科の改正に至りては大に之と異なり、一般女子教育の方針に關するものなれば其の影響する所大なるものあり。漢文學の程度を低くし其の時間を減じて新に和文學を加へ、家政學を以て經濟學に代へ、割烹を實習せしめ、修身科中に禮節を加へしが如きは寔に女子の教科として適切なる改正にして我が國に於ける女子

小西信八氏　禮節取調　禮節教場　割烹練習室　校長兼教諭　明治十四年の規則改正　作文の改正

教育は此に一段の進歩をなしたるものと謂ふべし。

改正規則は明治十三年九月より實施せられ多く教員を要せしかば、同月三守守氏小西信八氏等新に任命せられたり。小西氏は先に君が千葉師範學校在勤中同校教諭に擧用せられ、今又君の推薦によりて此の校に轉任せしなり。尋て島田重禮氏修身講義を囑託せられ、文部一等屬水野忠雄、同七等屬松岡明義、小笠原清務、四等掌典長崎省吾の諸氏前後相次いて禮節の取調又は教授を囑任せられたり。

本校の建築は西洋式なりしを以て本邦禮節の演習に適せざりしかば、十四年一月其の教場を新築せり。尋て附屬小學校にも禮節教場を建設せり。又同時に本校生徒の爲割烹練習室を新築せしが、十六年新に寄宿舍を建造するに及びて六個の厨房及び食堂を設け、寄宿生徒をして遞番に自ら食膳を調理せしむることとし割烹練習室を廢せり。

明治十四年六月官制改まりて七月君は校長兼教諭に任ぜられ、攝理福羽美靜氏は校務囑託となり、水野忠雄氏は教諭に兼任し、宮川保全、山崎忠興、小西信八、秋山四郎、松本荻江女、武村千佐女等の諸氏助教諭に任ぜられ、宮川氏は教場監事、小西氏は幼稚園監事、秋山氏は舍中監事となれり。訓導茂木春太氏は此の年五月病歿し、三守守氏亦去りて、八月中川謙次郎氏教諭に任ぜられ尋て教場監事となり、九月鮫島晋氏文部一等屬より教諭に轉任して小學校監事となりたり。

前年改正の規則は猶女子の教育に適切ならざる所ありしを以て十四年更に改正を加へたり。即本科の三角術及び簿記を除き、本科初二級の元明清史略を削りて專ら古今の和文を課し、又同兩級に書法即習字を加へ、第二級の近世名家文粹を除き、第二第三兩級の作文の從來漢文なりしを和文（簡易なる古文）に改め、又本科と同じく修身科中に禮節

裁縫科
家事經濟

演習を加へ、初二級の國史略を內國史略に改め、豫科本科を通じて裁縫の時間を增加し、本科各級一週三時間、豫科各級一週四時間となし、家政學を家事經濟と改稱せり。是等學科課程の改正は孰れも前年改正の旨趣を擴充して益女子の特性に適合せしめしに外ならざるなり。就中裁縫に重きを置きて其の時間を增加し、更に其の教授法をも改良せんとして十四年五月渡邊辰五郎氏を千葉縣より招きて本校教員となしたり。

附屬小學校規則改正

附屬小學校は從來專ら師範生徒の實地授業を練習せしむる所とし練習小學校と稱したりしが、明治十四年一月本科生徒の練習所となすの外兼ねて又他の小學校の模範たらしむることとなしたれば、名稱を改めて單に附屬小學校と云へり。同年四月更に規則を改正し同小學生を女兒に限ることとなし、學科も簿記代數幾何化學經濟等を廢し、禮節家計を加へ、女紅（剪紙摺紙裁縫等の總稱）の時間を增加して專ら女兒の教育に適合せしめたり。かくて翌十五年又名稱を改めて附屬女兒小學校となせり。

附屬幼稚園規則改正

附屬幼稚園の規則も十四年七月改正する所ありて、說話を修身の話、博物理解を庶物の話と改稱し、新に讀み方書き方を加へ、其の他保育諸課の改廢ありき。讀み方書き方は片假名平假名の讀み書きにて小學校初級の課業に同じきものなりき。

明治十六年の規則改正

明治十五年七月文部省は東京女子師範學校教則改正の大旨を定め之に準據して教則を作るべきこと、及び豫科を廢し新に附屬高等女學校を設置すべきことを命じたり。是等の改正規則は十六年三月草案成り八月決定して九月より實施せられたり。新規則に據れば本科は修業年限を四年とし、女兒小學全科の教員たるべき者を養成するを目的とせり。修業年限は最初本科五年なりしを、後三年半とし豫科を四年とせしが、明治十三年の改正にて豫科本科各三年となしたりしを、今回豫科を廢して本科四年となせるなり。學校の目的は最初の規則には育幼の責に任ずる者を養成する所とすとありしが、十三年の改正には小學教員たるべき女子を養成する所とすとなして卒業生の資格を明瞭に示したり。而して其の小學教員と云へるは廣き意義に於ける小學なりしを、今回之を女兒小學に限ることとせり。然れども實際に於ては卒業生の多くは府縣女子師範學校、女學校等の教員となりて女兒小學校の教員となりしものは甚少かりしならん。

禮節科
讀書、和漢文
作文科
習字科
家政科

本科の學科課程には大なる變更あらざりしかども、其の分置改稱等稍著しきものあり。先づ禮節を修身より分ちて一科とし最後の一級を除きて各級に之を課し、又文學を讀書と改稱し各級に和文漢文を並べ課し、第二年前期に於て漢文を停めて文法を課し、作文習字を各一科とし、更に本邦歷史の一科を置き家事經濟を家政と改稱せり。

附屬高等女學校の創設

附屬高等女學校は彝倫道德を本として高等の普通學科を授け優良なる婦女を養成するを以て其の目的とし、小學六箇年の課程を卒りたるものを入學せしめ、修業年限を五年とせり。學科は教育に關するものの外本科に同じく其の程度も略相似たり。初め本科の外に別科を置き、本科に入るの豫備とし兼ねて學齡外なる女子に修學の便を與へしを、十年七月改稱して豫科となすに及びては自ら本科に連續せるものとなりたるが、是に至り之を廢して代ふるに高等女學校を以てし、先の別科の目的の一たりし高等普通學科を女子に授くる所となせしなり。

文部省直轄男女兩師範學校の併合

明治十七年駐英特命全權公使たりし森有禮氏歸朝して參事院議官に任じ文部省御用掛を兼ねたり。森氏は國家教育の施設につき豫て懷抱する所あり、十八年に至り政府の同意を得て學政の改革に着手し諸學校の改廢併合を行へり。就中國家の教育機關として最も重きを師範學校に置き、文部省直轄男女兩師範學校を以て國民教育の本源と爲し國運發展の根柢をここに培養せんとせしが、兩校の改善を圖るには

東京師範學校教諭女子部教頭

非職

女子師範教育上の功績

管理上經濟上之を併合するに若かずとなし、同年八月東京女子師範學校を東京師範學校に併せて一校となし森氏其の監督に任ぜられ、東京師範學校校務囑託西周氏、東京女子師範學校校務囑託福羽美靜氏は共に罷められ、東京女子師範學校長たりし君は東京師範學校教諭となりたり。當時東京師範學校長たりし高嶺秀夫氏は依然其の職にありて、同校教諭たりし後藤牧太氏は男子部の教頭となり、君は女子部の教頭となりしが、翌十九年一月に至り君は遂に非職を命ぜられぬ。十二年十一月君が初めて訓導兼幹事となりしよりここに至る凡六年にして、其の間君は專ら力を學校の改善に竭し漸次其の規模を擴張したり。而して我が國に於ける女子師範教育が此の間に著しき進歩をなしたりとせば、是れ實に君が其の中心たる東京女子師範學校の爲に盡瘁せられし効果の及べるものにあらずとせんや。

君は千葉縣に於て初めて女子師範學校を統理せし時より女子教育の男子教育と大に異なる所あるを思ひ、爾來常に學校の施設學科の選擇に心を用ひ、機會ある毎に益其の特色を發揮せんことに勗められたり。明治十七年二月東京女子師範學校の卒業式に於ける君が演說の一節に曰く

女子師範學科の規則も昨年大に改正せり。從來師範學科には男女の差異さまで著しからざりしが、昨年の改正にて女子師範科は女兒小學の教員たるべき女子を養成する者とし、隨て附屬の小學校をも女兒小學校とし、本校も附屬小學もその諸學科は女子に適切なることを擇びて之を授く。されば女教員の教育に從事すべき範圍は甚狹まりたるが如くなれども、女學を獨立せしめ女教を振起するが爲にこの改正は極めて今日に必要なる事と存ず。

と。女子學校の獨立、女子教育の振起は即君が學校長たりし間恒に主義とし方針とせし所にして、始終之が貫徹に努力せられたるなり。

共立女子職業學校の創設

近世朝鮮政鑑

日本地理小誌

支那史の編纂

支那通史

第四章　東洋史の創設者

明治十九年一月通世君非職となりて東京師範學校を去りし後、間もなく同校教諭宮川保全氏御用掛渡邊辰五郎氏等亦職を辭し、尋て宮川氏等共立女子職業學校を創設するに當り君の助力に待つ所多かりき。然れども君は一旦學校管理の劇職より離れて閑散の身となり、復讀書に耽り筆研に親しむの機會を得たれば、是れより主として著作に從事し、同年七月「近世朝鮮政鑑」に訓點を施して之を刊行し、翌年八月秋山四郎氏と共著の「日本地理小誌」を發刊せしが、是等は固より君が力を用ひしものと謂ふべからず。此の頃君の最も心力を傾注せしは支那史の編纂なりき。從來中等諸學校にては支那史の教科書として多く十八史略、元明史略、清史擥要等を用ひしが、是等の史籍は一面漢文學として一面支那史として尊重せられたるものなれども、之を歐米の歷史教科書に比すれば其の體裁大に異なり編纂の旨趣亦同じからず、歷史上肝要なる事項の選擇に於て遺憾とする所少からざるなり。されば我が國史も當時專ら國史略、皇朝史略、日本外史の類を教科書として用ひたりしかば、國史の改修も亦急務たりしが、君は特に支那史を擇びて其の改修を企て、而して之を記するに漢文を以てし、以て十八史略等に代へんことを期したるなり。かくて明治十九年其の起稿に着手し、二十一年九月より十二月に至る間に既に脫稿したる第一、第二、第三上の三冊を刊行し名づけて「支那通史」と云へり。中村正直氏之が序を撰して曰く「那珂通世氏此書、紀二事實一而及二制度一、略二古代一而詳二近世一、不三獨采二於支那史一、而兼收二洋人所一レ錄、簡易明白、一覽了然」と。又島田重禮氏の序に曰く「方今文教大闢、學官所レ頒科目頗多、其入二庠校一者、課業有レ程、不レ能二復專攻一」一

科如往時、則依古史之意、幷合二體、以便循覽、豈非今日之要務乎、那珂通世氏有見於此、尙書春秋而下、採摭諸書、兼參西洋史例、排纂數年、勒成一書、名曰支那通史、其爲書、擧歷代治亂存亡之跡、與夫地理風俗朝章國故之要、會萃而類別之、詳而不蕪、簡而有要、今日適用之書、莫過於斯編矣、憶余往年與其先人梧樓君交、文酒徵逐、縱談古今、常至燭跋燈灺、君嘗編小學讀本、未暇及其他而歿、忽忽十餘年、堂構有人、能成斯書、以紹述先志、若使君而在、其喜可知已」と。二老儒の稱贊する所此くの如し、然れども是等の言は未以て此の書の眞價を盡せりと謂ふべからず。

支那通史の內容

抑も君は何事を爲すにも用意周到にして其の書を著すや先づ其の材料の蒐集を十分にし其の選擇を嚴密にし而して精細なる編纂の仕組を立て事實の順序排列を苟もせず行文亦正確簡明を期せり。通史の內容乃之を證すべし。本書の首篇先づ地理の概略、人種の別、朝家の屢易れること即歷朝の概要を說き、而して上世史六篇に於て唐虞三代より春秋戰國に至る事蹟を叙し、終りに世態及文事、先秦諸子の二篇を以て上世の制度文化を明かにせり、之を第一冊の內容概目とす、以て本書の組織の一班を見るべし。其の首篇に地理人種を說き後章に世態文物を說けるが如きは歐米編史の體裁を應用せしものなれども、我國史及び支那史に在りては未曾て其の類例を見ざりし所なり。而して各篇數章に分ち、各章又數節に分ち、篇章節皆呼ぶに數を以てせるが、篇の數は每卷之を更め、章の數亦每篇之を更むれども、節の數に至りては全部を通じて之を更めず、是れ展前後參照相引用するに便ならしめんが爲なるべし。或は古代の地名には必現今の地名を註記し、又所所沿革地圖を挿入せるが若き、或は卷末附錄として歷朝興亡禪代圖、各朝及列國世系、帝王在位年數及年號、歷代官名沿革表等の諸表を揭げたるが若き、其の用意の周密なるを見るべきなり。而して行文簡易明白にして著名の故事言行を漏さざると同時に事蹟の要領を失はず。其の制度文物を叙するや又簡明にして考證精確なり、殊に西域諸國と交涉の事蹟に至りては歐人の研究せし所を稽査して其の要を採り、歐亞大陸諸國の史的關係を明かにせり。

支那通史の清國に於ける翻刻

此の書一たび出でてより諸學校に於ける支那史の教科に大なる進步を來し其の面目を一新したり。後清國の遽に教育制度を變改し諸種の學校を建設するや、亦本書を以て新教科に適切なるものとし、明治三十二年羅振玉氏之を上海に於て翻刻出版したり。其の序文の中に曰く「支那通史者、日本那珂通世之所作也、都若干卷、取精於諸史、而復縱橫上下於二千餘年之書、以究吾國政治風俗學術之流遷、簡而賅、質而雅、而後吾族之盛衰、與其強弱智愚貧富之所由然、可知也、此非所謂良史者歟、所謂持今世之識以讀古書者歟、以校吾土之作者、吾未見其比也、豈今人之果勝於古人哉、抑時使然歟、嗚呼、以吾國之史、吾人不能作、而佗人作之、是可恥也、不恥不能作、而恥讀他人所作之書、其爲可恥、孰過是也、故序而重刊之、世之君子以覽觀焉」と、其の讚歎かくのごとし。抑も本書の初め漢文を以て記されたるは之を以て當時我が中等學校教科書として使用せられし十八史略等に代へしめんとせしが爲なりしなるべけれども、其の後我が中等學校に於ては次第に本書の如き漢文教科書を用ひざるに至りしに、偶清國開進の運に當り本書の漢文なるの故を以て直に彼の國人の歡迎する所となり重刊流布せられしは、恰も著者が唯に我が國の爲のみならず又豫め支那の將來を察して本書を著作せしものの如く、寔に良史の範を中外に示せるものと謂ふべし。只惜しむべきは本書の宋代に止まりて遂に完　に至らざりしことなりとす。

支那通史の宋代に止まりたる所以

蓋君が學問上の研究に於て極めて綿密周到なりしことは已に云へるが如くにして、其の究めんと欲する所必之を盡さずんば止まざりき。されば支那通史の編修漸く進みて元代の部に至るや、君は廣く其の

史料を東西諸書に求めんとし、遂には其の原據たる蒙古文の史籍をも讀まんとして是等の講究に時日を費し、爲に通史の編纂は久しく停止せられ、終に之を續修するの期を失ふに至りしなり。然れども其の間別に成吉思汗實錄の如き大作ありて我が學界に不朽の名著を遺し、斯學に貢獻する所却て大なるものありき。

予は明治十九年歐米に遊學し東洋の歷史に就て多少研求する所あり、廿一年歐洲諸家の東洋に關する著書數十種齎し歸れり。歸朝後予は金港堂編輯所長となりて學校敎科書等の編輯に從事し旁ら「文」と稱する雜誌を發刊せしが、當時君は通史起稿の最中なりしかば、西域に關する歐人の研究を知らんと欲し予が齎し來れる諸書を精細に繙讀せられたり。予が所藏の洋書中に支那音にて記したる人名地名等の傍に一一漢字を朱記せるもの數冊あり、多くは當時君が閲覽の際記入せし所にして亦以て君が讀書に精緻なりしを見るべし。君が西域に關する研究は專ら支那史の爲なりしが、予の同一の研究は我が國史の爲にして我が文化の淵源を支那を通して更に其の西方に求めんとしたるなり。君は又我が國と支那との關係につきて一大著述をなさんとの計畫ありしが、彼我兩國の交涉は多く朝鮮半島に起りしを以て朝鮮の歷史を研究すること亦君が常に怠らざりし所なり。されば予は諸方面に於て君と同一の研究をなし君が研究によりて裨益を與へられたること少しとせず。

日本上古年代考

旣にして予は君が曾て我が國上古の年代につきて考究し「上古年代考」の一篇を洋洋社談に掲載せしことありと聞き、再び之を「文」雜誌に登載せられんことを求めしに、君快諾して直に筆を執り、增補敷衍全篇を改作して投寄せられたり、卽明治廿一年九月一日刊行の「文」第一卷第八號以下に連載せる「日本上古年代考」と題する一大論文是れなり。予は其の論說考證の可否を世論に問はんと欲し、書を發して當時我が學界に於ける諸大家の批評を求めしに、中村正直、神田孝平、加藤弘之、大鳥圭介、末松謙澄等諸氏の如き直に贊成の意を回答せられし者多かりしが、重野安繹氏を初め修史局員諸氏亦贊成を表し別に其の見解を記したる一大文章を寄せられ、又反對說としては國學者諸氏の所論を總括して小中村義象氏の寄せられたる一大篇ありき。我が學界は一時之を喧傳し到る處年代論を口にせざるものなく、君の名聲と共に「文」も亦大に其の名を揚ぐることを得たり。君は其の後更に日本上古年代考を補修する所ありて之を「史學雜誌」に登載し、又君が編纂しつつありし「外交繹史」の首篇に之を編入せられたり、蓋上古に於ける我が國と朝鮮支那との關係を論ずるには先づ彼我年代の一致する所を確定するの要あるを以てなり。

元老院書記官

明治廿一年十二月君は一旦高等師範學校幹事に復職して直に元老院書記官に轉任せり、是れ「文」雜誌に於て「日本上古年代考」を發表し尋て支那通史初二卷を刊行せし後間もなき時の事なり。元老院にありては第二第三兩課に兼勤し、翌廿二年一月帝室制度取調掛となりしが、同年十月元老院の廢せらるるに及びて再び非職となりたり。是に於て又史學の研究を繼續し、支那通史第四冊第三下卷は同年十二月に、第五冊第四卷は翌廿三年十二月に發刊せり。此の年十月敎育に關する勅語の頒布あり、君は秋山四郞氏と與に其の大義を解釋敷衍して「敎育勅語衍義」を著し翌廿四年一月に之を發行せり。同年五月復出て、華族女學校敎授に任ぜられ、學監補助となりたり。當時同校長は西村茂樹氏、學監は下田歌子氏にして北澤正誠氏幹事たりき。同年十月第一高等中學校より支那歷史の授業を囑託せられ、始めて同校に敎鞭を執ることとなりたり。二十六年七月に至り故あり遽に華族女學校敎授を罷めて非職となりしが、當時君が支那史家としての名聲已に高かりしかば、同年九月高等師範學校より支那史の講義を囑託せられ、

元老院廢せらる

敎育勅語衍義

華族女學校敎授學監補助

第一高等中學校講師

高等師範學校講師

第一高等中學校教授兼高等師範學校教授

子爵井上毅氏の書翰及び論文

第一高等中學校よりも更に漢文及び支那歷史の授業を囑託せられ、翌廿七年四月本官となりて第一高等中學校教授兼高等師範學校教授に任じ高等官六等に叙せられたり。

是れより先文部大臣子爵井上毅氏第一高等中學校を巡視し、君が支那歷史の講義を聽きて大に敬服し、此の年十月一書を送りて稱賛の意を致し且自著の論文一篇を示せり、乃卷頭に揭ぐる所の書翰にして其の文左の如し

昝而高等中學に於而老兄之支那史之講義を傍聽して佩服に堪へず生之素論と全く相符合することを喜へり別紙小文一則供覽候御一見御投却可被給候謹言

十月十八日　　毅

那珂先生

之に添へたる論文は「支那史を讀む」と題せるものにして、井上子爵の文集なる梧陰存稿に採錄せられたれども、語句の聊異なる所あり且頗る簡短なるものなれば左に揭ぐ。

支那史ヲ讀ム

字說ニ十口相傳フルヲ古トスト云ヘリ各國上古ノ事ハ皆之ヲ口傳ニ得有ルカ如ク無キカ如ク推究スヘカラス蓋支那ノ典謨アルハ文書事ヲ傳フルノ始ニシテ宇內史乘ノ最古ニシテ又最信據スヘキ者トス堯舜ノ時水澤未タ退カス水陸兼生ノ獸虁龍ノ屬仍氏害ヲ爲ス益ハ山澤ヲ焚キ禹ハ水土ヲ治メ后稷ハ稼穡ヲ教フ獵漁ノ民纔ニ進テ農耕ノ民ト爲ルノ景狀典謨及禹貢ヲ讀ムトキハ歷々トシテ目ニ在リ而シテ當時天曆地理百工ノ科粗〻其ノ端ヲ開キタルハ蓋偉大ナル事業ナリシコトヲ信シ得ヘシ堯舜ノ後周ノ文王ヲ盛ナリトス文王ハ西北化外ノ地ニ興リ（邠ハ禹貢化外ノ地ナリ孟子ニ文王ハ岐周ニ生ル東夷ノ人ナリト云ヘリ）民ヲ視ルコト傷ケルカ如ク大ニ農桑ヲ勸メ孥罪ヲ廢シ關市ノ稅ヲ免メ鰥寡孤獨窮民ヲ恤ミ政敎並ヒ施シ以テ寬仁ノ治ヲ行ヘリ自由政及社會政ノ祖ナリ蓋シ支那ノ版圖周ニ至リテ始メテ南陬ニ達ス當時詩書文學ノ郁々タル仁義ノ說禮樂ノ風適レ宇內ノ高古ナル紀念碑ト稱フヘキカ如シ

支那版圖廣大萬里ノ國ニシテ而シテ書文ヲ同クスルノ一事今日ニ至ルマテ其ノ一統團結ノ大勢ヲ維持シ分裂ニ至ラザルハ堯舜禹及文王ノ功業ナリ

惜ム可キ所ノ者ハ此ノ大業ハ秦漢以後ニ敗壞シタリ其ノ民一タヒ文弱ニ陷リテ北方游牧ノ民世々侵害ヲ肆ニシ强弱勢ヲ倒ニスルニ至レリ

盧騷氏ハ其ノ民約論ニ於テ支那帝國ノ將來ニ分裂スヘキコトヲ豫言シタリ此ノ豫言或ハ實事トナルモ知ルヘカラズ元人ノ宋ヲ論スルニ曰ク聲容盛而武備衰議論多而成功少ト蓋强豪ノ徒一タヒ勢威ヲ得レハ志驕リ氣滿チテ華奢ヲ窮極シ而シテ俗儒傅會シテ文物ヲ修飾シ專ラ人民ノ力ヲ剝キ强梗ヲ抑ヘテ優柔ノ風ヲ成シ元氣從テ消耗スルヲ致スナリ金ノ世宗曾テ此ニ鑒ミルコトアリ其ノ民ノ南服ヲ爲シ南俗ヲ習フヲ禁シタルモ子孫ノ前轍ヲ踐ムヲ制止スルコト能ハス文弱ノ害其ノ毒ナルコト此ノ如シ周ノ詩ニ云豈敢定居一月三捷ト國ヲ治ムル者百年無事ヲ保ツトモ一月三捷ノ氣象無カルヘカラサルナリ支那史ヲ讀テ今古ノ感アリ

高等師範學校教授兼第一高等中學校教授

東京帝國大學文科大學講師

第一高等中學校教授を罷む

君は翌二十八年高等師範學校教授兼第一高等中學校教授に任ぜられ、二十九年東京帝國大學文科大學講師となりて漢學支那語學第三講座に屬する職務の分擔及び歷史の授業を囑託せられ、三十年九月第一高等中學校教授の兼官を罷め、是れより專ら高等師範學校教授と帝國大學講師とを本務となしたり。

現今一般に用ひらるる所の東洋史といふ學科目は今より凡二十年前君が主唱によりて初めて設けられ

たるなり。明治廿七年高等師範學校長嘉納治五郎氏が同校教授及び大學教授、高等中學校教授等を會して中等學校に於ける各學科の教授に關し研究調査を爲したることあり。其の際君は歴史科の會合に於て外國歴史を西洋歴史東洋歴史に二分すべきことを提議したるに、列席者皆之に賛成したり、

東洋史といふ學科目の發端

是れを東洋史なる科目の發端と爲す。從來中等學校の教科には外國歴史と云ふ科目ありて其の中にて萬國史として歐米にて所謂世界史（歐米及び波斯印度等の歴史）を教へ、別に又支那史を詳細に教へたり。蓋我が國にては歐米の世界史に於けるが如く東洋殊に支那の事蹟を簡略にすることを得ざるを以てなり。我が國に於ける歐米即西洋諸國の歴史は歐米の世界史に準據して之を授けて可なれども、支那を初めとして朝鮮印度其の他我れに關係多き東洋諸國の事蹟に至りては特に之を較詳に教ふるの必要あるを以て別に我が國に適切なる是等東洋諸國の歴史を編成し以て世界歴史の一半を補はざるべからず。是れ中等學校教科中なる外國歴史を二分して新に東洋史の一目を設くるに至りたる理由なり。

尋常中學校歴史科の要領

此の時議定せし尋常中學校各學科の要領と云ふものあり、文部省に提出して當局者の參考に供せしものなり。（此の各學科の要領は明治廿七年九月刊行の大日本教育會雜誌第百五十五號以下に連載せり。）中に就て其の歴史科の要領を見るに、尋常中學校の歴史科は國史を主とし傍ら世界史を授くと云ひ、世界史を分ちて東洋史西洋史とし東洋史に於ては特に支那史を詳にすと云へり。而して第三學年（毎週二時）の一個年を東洋歴史に配當し、東洋歴史を説明して曰く「東洋歴史は支那を中心として東洋諸國の治亂興亡の大勢を説くものにして西洋歴史と相對して世界歴史の一半をなすものなり。」と。又曰く「東洋歴史を授くるには我國と東洋諸國と古より互に相及ぼせる影響如何に注意し、又東洋諸國の西洋諸國に對する關係を説明すべし。」「是まで支那歴史は歴代の興亡のみを主として人種の盛衰消長を説かざれども、東洋歴史にては東洋諸國の興亡のみならず支那種、突厥種、女眞種、蒙古種等の盛衰消長に説き及ぼすべし、其の教授の事項順序は大略左に示すが如くなるべし。」とて次下に其の教授の要目を列擧したり。又教科書に關し特に注意を與へて曰く「東洋歴史は世に未だ其の教科書あらざるが故に當分の間支那歴史の簡易なるものを用ひ口授を以て之を補ふべし。」と。かくて東洋史なる科目は君の首唱によりて新に設けられ、其の内容範圍も此の要領によりて略明かにせられたり。

東洋史の科目公認せらる

されば明治廿七年七月改正の高等師範學校校則には既に歴史の説明に本邦史東洋史西洋史と記され、廿九年の同校地理歴史專修科規程には本邦歴史、西洋歴史、東洋歴史と記されたり。三十年文部省の開催せし夏期講習會に君は東洋歴史講師を、箕作元八氏は西洋歴史講師を、予は本邦歴史講師を命ぜられたり、是に於て文部省も公然西洋歴史東洋歴史の區分を認むるに至りしなり。尋て同年九月文部省は尋常中學校教科細目調査委員を命じ、坪井九馬三箕作元八の二氏と君と予とを以て歴史科の委員と爲せしが、其の調査報告には外國歴史を分ちて東洋史西洋史となせり、而して其の東洋史の細目は專ら君の立案せし所なり。是れより後諸學校の教科には東洋史なる科目を用ふることとなり、東洋史と題する教科用書も此の頃より漸次出版せらるるに至れり。本章題して東洋史の創設者と云へるは即東洋史なる科目の起原上述の如くにして君が首唱の功沒すべからざるを以てなり。

第五章　元史の大家

公私の職務

通世君は明治三十年兼官を罷めて專ら高等師範學校教授に任ぜられ、是れより其の卒去に至るまで十二年の間此の職に在りき。其の帝國大學文科大學に講師たりしは明治廿九年より卅七年に至る間にして前後九年に亘れり。尙明治卅六年より早稻田大學に於て東洋史を講じ、又卅七年より淨土宗大學に於て佛敎地理を講じたり。其の他の私立學校にも聘せられしことあれども、去就の年月明かならざるを以て、今一一之を擧げず。

學問研究

君はかく諸學校に於て敎授の任に當り又公私種種の委員等に擧げられ、頗る多忙なりしかど、其の間曾て自己の學問を廢せず、殊に支那歷史の研究は益其の步を進めたり。君が研究考索の結果は其の著書となれるものの外に時時諸雜誌に見はれたるものあり、固より其の多くは專攻の支那歷史に關せるものなれども又他の方面の研究も少しとせず。今先其の他方面に屬するものの一二を擧げん。

行政區の名稱境界に關する私議

明治廿九年十二月刊行の國家學會雜誌第百十八號に於て發表せられたる「行政區の名稱境界に關する私議」は君の論文中最も有名なるものの一なり。是れは我が國當時の行政區畫たる府縣の境界と古代の行政區畫たりし國の境界と相脗合せざるを以て國の境界を改めて府縣の境界と一致せしめ、小國を廢し大國を二分し、府縣の名稱を更めて國の名稱と同一にし、又近時、殊に明治廿九年、諸郡の廢合に伴ひ郡名の亂れたるもの多きを以て之を改正し、且府縣を州とし市を府とし町村を鄉とし、特に東京市を直隷府とすべきことを論じたるものなり。此の論文は固より經國の大策にして我が國行政制度の變遷に通曉するものにあらざれば輙く立言すること能はざるものなり。されば此の論文は大に學者の間に好評を得たるが、明治三十六年吉田東伍氏が之を其の編輯せる「歷史地理」に轉載せんことを請ふに及び、多少の刪修を加へて又同誌に寄せられたり、乃ち載せて同年十月刊行の同誌第五卷第十號にあり。而して吉田氏は之が評論を草して同誌第十二號に揭げたり。其の首節に曰く「本卷第十號に那珂氏の論文「行政區の名稱、境界に關する私儀」の一篇を揭載しました、是は頗緊要の大文字と信認しました故、舊稿ながら、特に那珂氏に請ひて揭げましたが、時勢はまだ〳〵彼の一篇を有用なりとして留保して居る、原稿は舊くとも、議論は今に新しい、殊に歷史的地理の見地より、行政區劃の觀察研究を爲す者に取りても、先其大體を彼の一篇中に盡してあるは、如何にも有難い事である、今後の時勢が、謂ゆる「私議」を實行してくれるや否やは、必しも問はずとしても、孰れの道にても、世に留保せらるべき經國上緊要の大文字と信認して居ります。」と。吉田氏は更に此の論文を氏の評論と共に其の大著なる大日本地名辭書の首卷に汎論中の一部として揭載せり、蓋氏は此の論文を以て世に留保せらるべき經國上緊要の大文字と深く信認せしが故ならん。那珂通世遺書中に本論文を加へざるはかく大日本地名辭書中に其の處を得て永く世に傳はるべきを以てなり。

那珂通辰朝臣の贈位請願

君は又明治卅七年に遠祖那珂通辰朝臣が建武延元の際王事に勤め遂に節に死せし事蹟を詳錄して贈位の恩典あらんことを其の筋に請願せしことありしが、四十年十一月に至り恩命ありて通辰に正四位を贈られたり。其の請願書は舊記古文書等と共に「那珂通辰朝臣の事蹟」と題し、載せて明治四十一年一月發刊の「歷史地理」第十一卷第一號（通編一百號）にあり。其の文中に君が編纂せる那珂系譜の中より通辰朝臣の一條を引用せるが、

那珂系譜

此の那珂系譜は君が多年諸書を參考し、或は諸家の舊記を搜索し或は祖先の遺跡を踏査して資料の蒐集に努め、漸次編成せしものにして、那珂氏同族の系譜を初め藤原秀鄉の子孫諸流

に及び、頗る詳密を極めたるものなり。其の稿本は君が手書にして約二百枚あり。書中一般歴史の參考に資すべきもの少しとせざれども、全篇尚未定稿に屬し且其の記事那珂氏同族諸家の現代に及び半ば一家の私記にして世に公にすべき性質のものにあらざるべければ遺書中には之を省けり。

清國學士と交る

扨君は明治三十二年以後清國の學士文廷式、陳毅等諸氏と相識るに及び、君が支那歴史の攻究に種種の便益を得たり。當時清國の人士多く我が邦諸制度視察の爲に來朝せしが、陳氏は兩湖總督張之洞の命を受けて學制調査の爲に來航せしこと前後二回に及べり。其の第一回は三十二年九月にして我が邦に留ること半年許、第二回は三十五年二月にして又數月間滯在せり。陳氏は初め兩湖書院助敎たりしが、後師範學堂掌敎となりし人にして、學識あり尤好て歴史地理を研究せり。其の師梁鼎芬、沈曾植の兩氏は李文田、文廷式等諸氏と共に當時清國史家の著名なるものなりき。陳氏滯京の間君屢氏と相會し、語るに元代史料の我が國に乏しきことを以てし、氏の歸るに方り此の種の史籍の寄送を依囑せり。陳氏之を諾し歸國の後梁沈二氏と謀りて皇元聖武親征錄（何秋濤、張穆、李文田、沈曾植校）雙溪醉隱集、元儒攷略、元祕史李注補（李文田著）等を贈り來り、後又黑韃事略の抄本等を寄せ來れり。是等の書は今皆東京高等師範學校圖書館に收藏せらる。雙溪醉隱集の表紙には陳氏藏書印ありて番禺梁節庵師贈と記せり。又黑韃事略の表紙には清國陳毅抄贈と書したり。

支那史籍の翻刻出版　皇元聖武親征錄

かくて君は是れより新に得たる支那の史籍の中にて我が學界に裨益あるべきものを選びて漸次翻刻出版せんことを圖れり。初め陳氏の皇元聖武親征錄を送り來るや、氏は之を我が史學雜誌に登載せんことを望まれしかば、君は史學會に謀り同會叢書の一として之を出版するの計畫をなしたり。然れども何秋濤、張穆、李文田、沈曾植諸氏の註釋の未盡さざる所あるを以て君は先づ之が增補に着手し、其の稿殆成りし折しも、偶蒙古文元朝祕史を得之によりて更に改修を加へんとして數年を經過し、遂に其の業を完成するに至らざりき。其の舊稿は君が改修を加へんとして果さざりしものなれども、何氏等の註釋の誤れるを正し足らざるを補へる所多く、本書を讀む者の爲に尤有益なるものなれば今回之を遺書中に收めたり、即校正增註元親征錄と題せるもの是れなり。明治三十五年君は元史譯文證補を校訂出版せり。

元史譯文證補

本書は清の洪鈞の著す所、ラシッド、ドーソン等に據りて元史の誤を證し闕を補へるものにして、洪氏の歿後光緒二十三年即明治三十年に刊行せし新著なり。此の翻刻は全く白文の儘にして句讀をも加へず、蓋地名人名を正して之に訓點を施すが如きは一朝一夕の業にあらざれば刊行を急ぎて故らに之を避けたるなるべし。然れども君が原本として用ひし清國刊本の現に東京高等師範學校に在るを見るに君が手書にて殆全篇句讀を加へ旁訓を施したり。

崔東壁先生遺書

次ぎに三十六年には崔東壁先生遺書を校訂し句讀及び返點を加へ、史學會叢書として之を出版せり。此の書は初め狩野直喜氏の君に贈れる所にして、君之を一讀して深く著者の議論の高明精確なるを悅び、更に其の書の完備せるものを求めて熟讀校訂せり。本書に就ての君の意見は史學雜誌第拾參編第七號に載せられたる考信錄解題に詳かなれば爰に贅せず。抑本書の著者崔述は我が文化十三年（嘉慶二十一年）に七十七歳にて歿し、今より百有餘年以前の人にして、其の著書は門人陳履和が寛政九年（嘉慶二年）より文政五年（道光二年）に至る二十餘年の間に漸次刊行せしものなり。されば本書は凡百年前後の舊刊に屬するものなれども、曾て我が國に傳はりしことなく、君によりて初めて紹介せられたるなり。崔述は支那の古代の事實を專ら其の經書によりて斷定せるものにて、殆同時代に我が國の古典を闡明したる本居宣長と相似たる所あり。宣長の古事記傳は中古儒佛の僻見を排して古典の眞意義を明かにしたるものにして、東壁の考信錄

古來百家の異說曲解を斥けて古傳の眞面目を發揮せんとせるものなり。其の議論明確にして支那古今儒家者流に超絕する所ありと雖、遂に廣く當時の學者間に知られずして僅に少數の景仰者を得たるのみなりき、之を我が國に於ける國學の隆興に比し、淸國學界の衰弊已に久しきを知るべきなり。君の此の書を翻刻せし趣意は「支那の經傳子史百家の書を讀みて其の新古を鑑定し其の眞僞を甄別することは我が國人に望み難き業なれば、幸に此の書に賴りて其の勞を省くことを得べく、此の書は我が國の東洋史家に取りて缺くべからざる良書なり」と云ふにあり。君は三十六年に此の書の第一冊乃至第三冊を刊行し、翌三十七年に第四冊を刊行せしが、其の年重刊崔東壁先生遺書目錄を作りて之を第一冊の卷頭に加へたり。

那珂東洋小史　那珂東洋略史

君は三十六年に又那珂東洋小史と題し中等學校敎科用の東洋史を編纂發行し、翌年之を修正して那珂東洋略史と改題せり。君が始めて彼の支那通史を編纂してより既に十五年を經過し、其の間に中等學校敎科課程の組織は漸次變遷したれば通史は已に敎科用書に適せざるものとなりたり、且又君が東洋史の敎科を發案提議せし以來、其の敎科用書の編修を君に期待する者多かりしかば遂に此の書を撰述せられしなり。君は尙此の書を用ひて敎授する者の爲に參考の便を圖り大東洋史の編著を志されしかど遂に果されざりき、即小史の自序に「この書は、至つて簡略なれども、時代は四千餘年に涉り、範圍は世界の半を蔽へるが上に、その記事は、古來の謬說と世俗の誤傳とに雷同せざる所往往あれば、之を授くるには、史學に深き者に非ざれば容易ならず。余は、その事に任ずる人の爲に參考の便を圖り、稍委しき東洋史を撰述せんと欲し、今正に着手中なり。」と云へり。又東洋歷史地圖につきて曰く「歷史を學ぶに最も必要なる助けは、歷史地圖なり。東洋歷史地圖の出版せられたる者已に數種あり。何れも便益の書なれども、この書を授くるには、この書の內容に適合する歷史地圖あらば、殊に便利なるべきに由り、これも追て着手すべし。」と。君が東洋歷史地圖を作らんと志されしは久しきことにして、曾て第一高等中學校に於て君が監督の下に生徒をして作らしめたる東洋歷史地圖元代疆域部の大幅あり、明治三十三年に高等中學校にて之を出版したるが其の他は遂に完成に至らざりき。

東洋歷史地圖元代疆域部

蒙古文元朝祕史の翻譯

君が最後の努力は實に蒙古文元朝祕史の翻譯にして遂に之を完成して成吉思汗實錄の大著を後世に遺されたり。初め明治三十二年淸國の翰林學士文廷式氏の我が國に來遊するや內藤虎次郎氏舊識の故を以て日夕相會し、談偶元史に及び、文氏の蒙文元朝祕史を藏するを知り、切に其の鈔本一部を寄せられんことを求めたり。內藤氏又文氏を延いて君と會見せしめ蒙文祕史の事を語る、君亦之を見んことを欲して鈔本の寄送を懇囑せり。文氏歸國の後拳匪の亂ありて音信久しく絕えたりしが、三十四年末に至り約の如く鈔本一部を內藤氏の許に送り來れり。內藤氏は直に一部を影寫せしめて君の許に送れり、即東京高等師範學校藏本是れなり。君は更に此の藏本によりて一部を謄寫せしめ、之を早稻田大學に備へしめたり。本書は支那にても極めて珍しきものにして文氏が內藤氏に送れる鈔本の首に書して曰く

文廷式氏藏書の鈔本

此書爲錢辛楣先生藏本、後歸張石洲、展轉歸宗室伯義祭酒、余於乙酉冬借得、與順德李侍郞各錄寫一部、於是海內始有三部、其中部落之名、同功之將帥、漢文刊落者太多、得此可補其闕、又元時蒙文、今無解者、故元碑多不可讀、若用此書、合陳元靚事林廣記、陶南村書史會要各書、互證音譯、或猶可得十之三四乎、日本內藤炳卿熟精我邦經史、却特一代尤所留意、余故特抄此冊奉寄、願與那珂通世君、詳稽發明、轉以益我、不勝幸甚、
清光緖廿七年十二月朔日、萍鄕文廷式記

と、海內始有三部と云へるは其の知る所を擧げたるにて必しも然るにあらざるべきも其の稀有の書なる

ことはこれにて明かなり。君は成吉思汗實錄の序論中に內藤氏の初めて得たる抄本と東京高等師範學校の藏本と早稻田大學の藏本とを以て「我が海內にも始めて三部ある事となれり」と云へり。

元朝祕史の由來

本書は正集十卷續集二卷より成り、正集は元太祖成吉思汗在世の時に作られ續集は太宗窩闊台の世に補ひ加へられたるものにて、本來蒙古語にて綴り當時蒙古人の用ひし委兀兒文字にて記せしなるべし。後明朝の初めに委兀兒文字を漢字に書き改め、漢字を音標字として蒙古文を其の音の儘に記し、各語に漢字の旁訓を施して其の意義を示し、又別に數行乃至十餘行每に本文の大意を當時の俗文にて譯記したり。かくて本書中支那人の讀み得る所は唯其の大意を譯記したる俗文の部のみなれば、此の俗文のみを取り蒙古文を省きて一部の書となしたるもの即從來刊本となりたりし元朝祕史にして蒙古文なる完本は唯寫本にてのみ傳はりたるなり。

元朝祕史の原名

本書の原名は忙豁侖（モンゴルン）、紐察（ニウチャ）、脫卜察安（トブチャアン）にして譯して蒙古の祕密なる實錄と云ふべし、元朝祕史は即其の意譯なり。君は本書を獲て其の蒙古文を正確に我が邦文に翻譯せんと志し、先蒙古語滿洲語の辭書文法書等によりて蒙古語を研究し、漸く熟するに及て翻譯に着手し、又本書に關係ある支那及び西洋の諸書をも調査し、且譯し且註し斯業に從事すること前後殆三年にして、明治三十八年に至りて遂に全部十二卷の和譯及び註釋を完成せり。かくて本書の標題を改めて成吉思汗實錄と命名し、百頁に亙れる序論を草して元朝祕史・元聖武親征錄及び喇失愓額丁の集史の來歷、修正祕史、蒙古古文、音譯法等の事を論じたり。

新に成吉思汗實錄と命名す

內藤虎次郎氏に送れる書翰

此の年十月內藤氏に送れる書翰あり。內藤氏當時奉天府にあり、其の官庫にて蒙古源流の蒙文原本を發見して之を抄寫したりとの報知に接し之に答へたるものなり、其の全文を左に揭ぐ。

拜啓。蒙文蒙古源流御抄了の事承り大慶に存じ奉る。御歸朝の上第一番に御蔭を蒙るは、僕なりと、殊にありがたく存じ奉る也。

忙豁侖 紐察 脫卜赤顏 Mongholun Niucha Tobchiyan 十二卷、昨年頃より飜譯にかゝり、此頃全部譯し了り、其序論を七段に分け、第一元朝祕史の來歷、第二聖武親征記即ち聖武開天記の來歷、第三喇失愓額丁 Rashid eddin の集史の來歷、第四修正蒙古祕史の事 喇失愓の據れる阿勒壇迭卜帖兒 Altan Depter 即ち金冊は、察罕の譯せる所謂脫必赤顏と同本にして、その脫必赤顏は紐察脫卜赤顏の訛略にして、即ち祕史なり。その祕史は今の祕史の原本を修正刪損したる者にして、喇失愓も察罕も、その修正祕史に本づけり。その修正は、至て拙陋なる者にして、英雄の眞面目を蔽へる所多し。太祖の當時の實錄の原文を數百年後に讀むを得るに至れるは、不思議と云ふより外なし。 第五和譯本の標題 蒙古祕史も元朝祕史もやめて、蒙古古事記と名づけんと思ひしが、それもやめて、成吉思汗實錄と題せり。其理由を委しく。 第六蒙古の古文と和譯文、第七明譯本の音譯法として細字五十餘枚に論述したり。直ちに出版にかゝる積りなれば、御覽に入れ、且は文廷式の墓にたむくるも近き內ならんと樂み居れり。只物足らぬ心地するは、和譯にして漢譯に非ざる事なり。しかし是は已むを得ざる事にて、蒙文は阿勒泰語族に屬し、我と文法殆ど同じければ、和譯なれば、ことばごとに直譯して增も減も無く譯せらるれども、漢文にてはそれは出來ず、蒙文の眞味 殊に此書中に甚だ多き蒙古の韻文の面白みなど を失ふ事となる。僕も最初は先づ和文に譯し、後に漢文に譯せんと思ひしが、今は漢譯する事を斷念し、只序論だけは漢文を添へんかと考へ居れり。僕の此苦心と此愉快とは、世間に語るべき人只の一人もなき故に、かく管々しく申上ぐるなり。

蒙古源流を寫すことは、日本にては出來がたければ、今一部寫させることは、出來ませんか。費用は跡ても善くば、學校からでも僕からでも辨償すべし。原本祕史は貴重なる實錄にして、喇失愓も親征錄も拙陋なる修正祕史に出てたるを思へば、其記錄も、實錄以外の事あるのみならず、實錄には刪修むしろ文飾の事多くして、其記錄こそ太祖太宗二代の眞の實錄なるべし。 返す〴〵も是非御寫し取りありたし。

十月二十四日　　那珂通世　拜

內藤虎次郎學兄大人

君が蒙古文の研究は全く唯一人にて其の苦心の事も快心の事も共に語るべき人なく、君の研究を助くるは獨內藤氏あるのみなりしかば、遂に書を此の知已に寄せて實錄序文の事を縷述せられたるなるべし。

元朝祕史原文及び漢譯成吉思汗實錄譯文との比較

君の譯法如何は左の例を見て知るべし。抑も蒙古文と邦文とは文章の組立殆同じく、一語一語對譯すれば直に文を成すべし。然れども和漢の言語文字に精通する者にあらざれば、其の譯文の正確妥當なるを望むべからず。君が邦語の選擇に注意し成るべく原文の意義語勢を失はざらんやう務められたる苦心の跡は歷歷見るべきなり。

第一例　首節

蒙古文及び旁訓

成吉思(名) 中合罕訥(皇帝的) 忽札兀兒(根源)

迭額列舌(上) 騰格理舌(天) 額扯(處) 札牙阿禿(命有的) 脫列克先舌(生了的) 孛兒帖(蒼色) 赤那(狼) 阿主兀(有來) 格兒該(妻) 亦訥(他的) 中豁埃(慘白色) 馬闌勒舌(鹿) 阿只埃(有來) 騰汲

思 客禿勒周(渡着) 亦列罷舌(來了) 斡難(河名) 沐漣訥舌(河的) 帖里兀捏舌(源行) 不峏罕合勒敦舌中(山名) 納(行) 嫩禿黑剌周(營盤做着) 脫列克先舌(生了的) 巴塔赤罕(人名) 阿主兀(有來)

明朝俗文意譯

當初元朝的人祖。是天生一箇蒼色的狼。與一箇慘白色的鹿相配了。同渡過騰吉思名字的水來。到於斡難名字的河源頭。不兒罕名字的山前住着。產了一箇人名字喚作巴塔赤罕。

那珂氏成吉思汗實錄譯文

成吉思合罕の根原。

上天より命ありて生れたる蒼き狼ありき。(蒙語孛兒帖赤那蒙古源流布爾特齊諾。………)その妻なる慘白き牝鹿ありき。(蒙語豁埃馬喇勒、蒙古源流郭斡瑪喇勒。郭斡は美しきなり。)騰吉思(海又は大なる湖)を渡りて來ぬ。斡難木漣(斡難河、今の鄂嫩河)の源に不兒罕合勒敦(不兒罕嶽卽ち神が嶽。元史闕闕の傳不里罕哈里敦、蒙古源流布爾干噶拉敦、今の大肯特山)に營盤して、生れたる巴塔赤罕(蒙古源流必塔察干)ありき。

第二例

蒙古文及び旁訓

中合卜兒(春) 你刋(一) 兀都兒(日) 匡失列篾勒中豁級(羶羊) 赤納周(煮着) 別勒古訥台 不古訥台 中中不忽合塔吉 中不合禿撒勒只 孛端察

兒蒙合黑中 額迭(這) 塔奔(五) 可兀的顔(子每行) 者兒格連(列) 撒温勒周(坐着) 你只額勒(每一隻) 木速惕(箭簳) 中中忽忽魯惕渾(折折,您) 客額周(說着) 斡克罷(與了) 你只額(一隻行)

里 牙兀伯亦溫渾（怎教停住） 忽忽赤周（各折折着） 斡斡兒罷（去了） 巴撒（再） 塔奔（五） 木速惕（箭簳） 含禿（一同） 出刺周（東着） 忽忽魯惕渾（折折 您） 客額周（說着） 斡克罷（與了） 塔

不兀刺（五箇） 塔奔（五） 出黑台（東的） 木速惕（箭簳） 古兀列勒敦（每人） 把里周（拿着） 必禿溫勒周（輪着） 忽忽侖（折 折） 牙荅罷（不能了）

（中略）

巴撒（再） 阿闌豁阿 塔奔（五） 可兀惕（子） 帖延（自的） 雪余額兒（教訓） 兀格（言語） 嗚詁列論（說） 塔（您） 塔奔（五） 可兀惕（子每） 米訥（我的） 合黑察（獨） 客額里（肚皮） 額

扯（裏） 脫列罷（生了） 塔（您） 禿合侖（恰纔） 塔奔（五隻） 木速惕（箭） 篾圖（般） 合黑察（獨） 合黑察（獨） 孛魯（做） 阿速（呵） 帖列（那） 你只額勒（每一隻） 木速惕（箭） 篾圖（般） 客捏（任誰）

別兒（也） 乞勒八刺（容易行） 忽忽勒荅渾（被折折） 塔（您） 帖列（那） 出黑台（東的） 木速惕（箭） 篾圖（般） 含禿（一同） 你刊（一） 額也田（商量有） 孛魯（做） 阿速（呵） 客捏（任誰） 別兒（也） 乞

勒八刺（容易行） 也勒（如何） 孛勒渾（被壞） 塔（您） 客額畢（說了） 阿塔刺（住間） 阿闌豁阿（母） 額客 阿訥（他的） 兀該（無） 孛勒畢（做了）

明朝俗文意譯

春間一日他母親阿闌豁阿煮着臘羊。將五箇兒子喚來根前列坐着。每人與一隻箭簳敎折折。各人都折折了。再將五隻箭簳束在一處敎折折呵。五人輪着都折不折。

（中略）

阿闌豁阿就敎訓着說。您五箇兒子。都是我一箇肚皮裏生的。如恰纔五隻箭簳一般。各自一隻呵。任誰容易折折。您兒弟但同心呵。便如這五隻箭簳束在一處。他人如何容易折得折。住間。他母親阿闌豁阿歿了。

那珂氏成吉思汗實錄譯文

春の一日、臘羊を煮て、別勒古訥台、不古訥台、不忽合塔吉、不合禿撒勒只、孛端察兒蒙合黑、この五人の子どもを列へ坐ゑて、一條づゝの箭を「折れ」と云ひて與へたり。一條づゝをいかて留めん、折りて去けたり。又五條の箭を一つに束ねて、「折れ」と云ひて與へたり。五人にて、五條束ねたる箭を人ごとに取りて、廻して折りかねたり。

（中略）

又阿闌媛は、五人の子を敎ふる言に言はく「汝等、我が五人の子は、獨の腹より生れたり。汝等は、恰も五條の箭の如し。獨獨にならば、彼の一條づゝの箭の如く、誰にも容易く折られん、汝等。彼の束ねたる箭の如く、諸共に一つの商量あるとならば、誰にも容易くは何ぞならん(何ぞ敗られん)、汝等」と云へり。かく住める程に、阿闌媛なる彼等の母は無くなれり。

是等の例によりて君が翻譯の如何に原文に忠實なるかを知るべし。但し邦文としては時に耳遠き所なきにあらず、其の耳遠き所は即蒙古人の用語を其の儘に寫したるものにして、而も反て我が古代の語法に近似し恰も我が古事記の類を讀むが如き感を興さしむるものあるなり。

本書の註釋

君は啻に本書の譯文に意を用ひしのみならず、又博く東西の諸書を參考して本書の事實を稽査し、詳密なる註解を施して其の記事の不明なるものは之を明にし、其の誤れるものは之を正し、其の闕けたるものは之を補へり。其の中には十餘頁に亘りて一大論文を成せるものもあり。是等の註釋は本文と共に元史を研究する者の爲に裨益を與ふること大なるべし。

本書は明治三十九年印刷に附し四十年一月に至りて發行せり。君が何事にも用意周到なるは屢云へる所なるが、本書の譯文及び註釋に於て之を見るのみならず、其の印刷の體裁に於ても亦之を見るべし。文章の分節句讀、諸點諸符等は云ふに及ばず、殊に其の文體の漢字交り文なるに拘らず分語法を用ひて文字を配列し、漢字假字を論せず一語をなせる文字は皆之を密接せしめ、語と語とは相離して少しく間隔を置きたり。全部凡八百頁いづれの所も皆此の分語法を用ひたれば其の印刷校合には少からず苦心せられしなるべし。

明治時代屈指の名著

かくて完成したる成吉思汗實錄は種種の點に於て曾て我が國には其の比類を見ざる著作にして實に明治時代屈指の名著と謂ふべし。其の學界に貢獻する所甚大なるものあるは固より言を待たざるなり。

成吉思汗實錄續編

次いで君は成吉思汗實錄續編の編著に着手せられしが未脫稿に至らずして卒せられたり。本書は續編と題すれども全く君の原作にして本編の如き譯書にあらず。主として成吉思汗の諸臣の傳を輯錄したるものなれども、又問憲宗即位の事情、憲宗の高麗征伐、支那の砲術、克哩思惕教の東流等の如き事實の考證をも加へたるものにして、元史の研究には缺くべからざる參考書たるべし。されば其の未定稿に屬するに拘らず之を遺書中に收錄せり。

卒去

君は彼の蒙文元朝祕史の翻譯によりて蒙古語に通曉したればやがて蒙古文典を著さんとし、又博く蒙古に關する史料を探究せんが爲め露語獨語等をも學習しつつありしが、終に其の志を遂げずして明治四十一年三月二日遽に病みて卒せられたり、時に年五十八。君齡未耆老に至らず其の學殖と精力とは尙大に世を益すべきものありしに、卒然長逝せられしは寔に國家の損失、學界の不幸と謂ふべきなり。

第六章　遺事逸話

前數章に於て略通世君が生涯の主要なる事蹟を叙述せるが、尙公私內外に亘りて雜事の記すべきものあり。本章に於ては是等の諸事を收摭し且君が爲人の一面を窺ふべき一二の逸話を掲ぐべし。

文學博士

君が文學博士の學位を授けられしは明治卅四年四月にして西村茂樹、木村正辭、小杉榲邨、萩野由之、松本愛重、三宅雄次郎の諸氏と同時なり。而して予も亦其の列後に加はれり。是等諸氏の中にて西村、小杉、木村の三氏は既に君と相前後して世を謝せられしが、いづれも七八十歳の高齢に達したりしに獨君に於ては年尙耳順に至らず三氏に比して遙かに後輩たりしなり。

諸種の委員

君は屢文部省及び學校に於て諸種の委員に擧げられたるが、中に就て中等學校教員檢定委員には明治廿八年以來其の卒去に至るまで毎年任命せられ、常に東洋史の試驗を擔當し、歷史科の主任委員たりき。又卅年には尋常中學校教科細目調査委員に擧げられ、卅三年より卅五年に至る間國語調査委員たりき。

滿洲旅行

明治三十八年日露戰役の未終らざる際君は戰地視察の命を受けて嘉納治五郎氏等と與に淸國に差遣せられ、金州旅順等の戰場を巡視せしが、翌三十九年又學校生徒の滿韓修學旅行に監督として再同地に至り更に滿韓諸地に歷遊せられたり。

諸學會の役員

又君が諸種の學會等の役員に擧げられしこと枚擧に遑あらず。今予が記憶する所を擧げんに、明治十六七年の頃假名の會に評議役たりしことあり、同廿六七年の頃大日本教育會に常議員たり兼ねて編輯員たりしことあり。史學會には卒去に至るまで凡十年の間評議員として盡力せられたり。忠勇顯彰會には會長九鬼男爵を援けて其の忠勇傳に筆を執られしことあり。孔子祭典會には創立以來評議員たりき。

講習會

又屢公私講習會の講師となりしことあり。明治三十年文部省夏期講習會の講師となりて始めて東洋史を講ぜられしことは前章に述べたるが如し。帝國教育會の講習會にも數次講師となりしが、三十六七年

論語の講義

の間同會にて論語を講ぜられしことあり、聽講者其の說の斬新明快なるを悅べり。聽講者の一人たりし辻村靖女史、君の卒後當時を追懷し君の講說の遂に湮滅に歸せんことを嘆き、其の筆記の整理に着手し數年にして略成れるものあり。女史之を予に寄せて遺書中に加へんことを求められしが、遺書中に編入すべき種類のものにあらざれば其の請に應ずること能はざりき。

分數計算器の工夫

君が創意工夫の才能に富み且其の知識の多方面に亘りしことを證すべき一例あり。曾て君が東京女子師範學校に在職せし時小學兒童に分數の意義を直觀的に了解せしめんが爲に一の分數計算器を工夫せられたり。其の構造は同じ長さの板を二分せるもの、三分せるもの乃至十五分せるものを一枚の額面に數段に配列し、自由に之を拔き差しし得るやうになしたる頗簡單なるものなり。明治十七年英國ロンドン府に開設せし教育博覽會に、東京師範學校より後藤牧太氏の簡單物理器械、東京女子師範學校より中川謙次郞氏の簡單化學器械と此の分數計算器とを出陳せしに、各簡單器械は金牌を、分數計算器は銀牌を同博覽會より授與せられたり。其の後外國に於ても此の計算器を用ひし所ありと云ふ。

試驗答案の調査

君は外見或は縱放なるが如く見ゆることあれども其の實決して然らず、君が何事にも用意周到なりしは屢述べたるがごとし。されば學校に於ける諸種の試驗又は教員檢定試驗の答案を調査するにも、先自ら各問題に對する答案の要點を摘記し以て其の標準を定め、然る後各答案を調査し此の標準によりて評點を下せり。君が此くの如き用意をなして試驗答案を調査せられしことは予等の曾て想像せざりし所なるが、君の卒後君の遺されたる故紙中より其の一例と見るべきものを發見して初めて之を知りたるなり。

或は君の評點は甚苛酷なりとて之を訴ふるものもありしが、如何に低き點數にても是れ其の最初に定められたる標準によりて打算したるものにして君は之を以て正當の評點と爲し毫も苛酷なりとは思はざりしなり。

遊戯
圍碁

君は學問に熱心なりしが如く又遊戯にも熱心なりき。其の學ぶや一心不亂其の遊ぶや亦一心不亂にして君の如きは眞に善く學び善く遊ぶの人なりき。故に諸種の遊戯に堪能なりしが、就中圍碁の如きは初段の域に達し朋友知人の間には對手たるべきもの少かりき。而して君が圍碁を始めしは少年の時にして、養父梧樓君が其の幽囚日記に君が屢碁を打つを聞き之を憂へてかたく誡めたることを記せり。されば早くより此の技を好まれたりと見ゆ。

自轉車

君が自轉車に熱心なりしは皆人の知る所にして、始めて之を試みられしは其の第一高等中學校に教師たりし頃なり。是れより後十餘年の間日日乘用し、又毎年夏期休暇には必自轉車旅行を企て、四方に歴遊して道路の通ずる所殆轍迹を遺さざるなし。明治三十年に予は君と與に生徒を引率して京坂及び近畿地方に旅行せしことあり。此の時君は既に自轉車を用ひて頗得意なりき。三十四年には輪界十傑の内に擧げられ、自ら號して轉輪博士と云へり。本書卷頭に揭げたる肖像は即當時の撮影にして君が當選の賀宴に集りたる同僚知友に頒たれしものなり。自轉車旅行の際には屢危險に遭遇せられしが、曾て君の語られし所によれば、熊野路旅行の時其の山道にて日中獨車を走らせたりしに、身心疲勞の爲車上眠を催し、意はず路傍斷崖より車と與に墜落したり。幸に崖の中腹一段をなせる所ありて身は之に留まり下溪流に陷らざりしかども、墜落打傷の爲一時氣絕して僵れ仆したりしが、姑くにして漸く蘇生し周邊の狀況を見て始めて九死に一生を得たるを知り悚然たりしと云ふ。

又明治三十八年日露戰役の際旅順へ出張を命ぜられ、嘉納治五郎氏等數人と俱に出發し予も同行せしが、五月廿六日宇品出帆の御用船に便乘すべき豫定にて同所碇泊場司令部に至りしに御用船の出帆は廿八日に延期せられ、之と同時に東京より海上危險の虞あり出發を見合せよとの電報に接したり。初め其の理由明かならざりしが、やがて新聞紙號外等によりて敵艦將に對馬海峽を通過せんとし我が艦隊之を迎擊して海戰漸く酣ならんとするが爲なることを知れり。既にして廿八日の出帆は更に三十日に延期せられ、一行は空しく廣島宇品の間に滯留し、且三十日の出帆も亦延期となるべしとの豫想なりしかば、君は此の間暇を利用し獨自轉車を驅て藝備地方を巡歷せり。然るに日本海海戰は我が艦隊の大捷に歸し敵艦殆殲滅せしかば、予等は意外にも豫定の三十日に出發することとなりしが、此の時君の所在明かならずして一行は勿論知友諸氏も大に憂慮し、君の蹤跡を搜索して略其の消息を得、急電を發して速に歸り來らんことを促したれども、三十日午後一時一行の既に乘船するに至りても君は猶未歸り來らず。一行は遂に君を遺して出發せんとし船の將に動き出てんとする時君倉皇として自轉車を走らせ來り漸く一行に合することを得たり。

家庭

君は家庭に於て甚幸福ならざりき。夫人貞子は長く病痾に罹り遂に明治三十九年十月君に先だつこと凡二年にして歿せり。長女美世子も亦病身にして三十三年二月廿七歲にして歿し、二女永世三女千世は皆夭せり。然れども北堂老夫人の健在せるあり、長子又世君次子高世君亦壯健なり。又世君は久しく米國に在りしが、君が卒去の訃を得て直に歸朝し、家を繼ぎて善く老祖母を孝養せり。

家政

君は少壯にして皇政維新に際會し、藩地騷亂の後養父罪を獲て久しく囚禁せられ、一家艱苦の中に歲月を經たり。養父罪免されて一家東京に移り、君は是より泰西の學に志せしが、固より學資に乏しく他

の扶助により漸く其の業を脩むることを得たり。旣にして學校敎師となり校長となり又敎授となりて其の地位次第に昇りたれども、其の俸祿收入は唯一家を支ふるに足りしのみ。而して世路の險難なる、君の如きも非職となりしこと一再に止まらず。又家に病める妻子の在るあり、家計の常に裕かならざりしや知るべきなり。夫れ人安逸に處しては怠惰に陷り易く、患苦の中に在りては却て能く奮勵努力す。君が成功の一半は蓋窮厄患苦の賜ならずとせんや。

卒去

君は平素身體頗强健にして甞て病に罹りしことあるを聞かず。されば君が突然の卒去は實に友人等の意外とする所なりき。四十一年三月一日君外出して夜に入り歸宅するや、遽に胸痛を訴へ大に苦悶せしかば、家人驚き直に醫を迎へて治療を加へしかど、遂に其の効なく翌二日溘然逝去せり。友人等の其の訃を聞ける時殆皆之を信ずること能はざりしが、其の事實なるを知るに及て悲歎痛惜せざるはなかりき。七日青山墓地先代の塋域に葬る。此の日偶雪降る、學校職員生徒知友門下生等徒歩柩を送り、長蛇の如き葬列は肅肅として雪中を行けり、回顧すれば業已に八年の昔となりぬ。

才能性行

君は天資聰明慧敏にして學和漢洋を兼ね、博覽强記にして其の專攻の史學に於て造詣の深かりしのみならず、又廣く他の諸學科に涉りて豐富なる知識を蘊蓄せり。而して又文筆に長じ其の作れる所の和漢の文章は共に平正暢達にして他人の及ぶべからざる所あり。又時に興に乘じて詩を作り歌を詠ずることありしが、曾て自ら其の稿を留めざりしかば今に至りて殆其の傳はれるものあるを聞かず。君資性縝密事に當りて用意周到なりしが、而も精力亦絕倫にして能く心を一事に集注して努力勉强し、其の著述の若き多くは夜業にして時に或は數日に亙り夜を徹して之に從事することありき。其の刻苦勉勵此くの如し、然れども是れが爲日常の行迹に於て自ら不規則なるものあるを免れず、是を以て人往往君を見て磊落細事に頓着せざるの人と做せり。又其の剛直にして人に阿附苟合せず、矯飾を嫌ひ虛僞を疾み、言動敢て忌憚する所なかりしを以て動もすれば放恣なるが如く驕慢なるが如く見ゆることありて、他の誤解を招けり。然れども君が性格の高邁卓偉なりしは今や何人と雖も之を否議せざるべし。君の生涯を通觀するに明治新政の世多く人才を要するに當り君は專ら敎育文學の方面に於て其の卓絕せる才能を發揮し以て文化の進運に貢獻する所多かりき。君は一生を通じて寧ろ不遇の境涯にありしかども、明治時代の文化史上に於ける君が功績は永く後世に傳はり時を經るに隨て益顯著なるに至るべし。

文學博士那珂通世君年譜

年號	記事	年齡
嘉永四	正月六日盛岡に生る、幼名藤村莊次郎○江幡通高此の年吉田松陰等と水戸に到る	一
五		二
六		三
安政元		四
二		五
三		六
四		七
五		八
六	江幡氏に養はる	九
萬延元	江幡通高藩學の教授となる	一〇
文久元		一一
二		一二
三		一三
元治元	養家に入籍し、名を改めて江幡小五郎通繼と云ふ	一四
慶應元		一五
二	此の頃藩學作人館の句讀師となる	一六
三		一七
明治元	十二月養父通高罪を獲て東京南部邸に幽囚せらる	一八
二	六月上京、藩主南部利恭の近侍となり通世と改名す○七月藩主に隨ひ歸國す○十月養父謹愼を解かれ歸國す	一九
三	養父再罪を獲て東京越前藩邸に預けらる	二〇
四	二月長子又世生る○七月上京○九月養父罪免さる、家族東京に移る	二一
五	慶應義塾に入る	二二
六		二三
七	一月長女美世生る	二四
八	五月山口縣巴城學舍教師囑託（報酬一ヶ月五拾圓）	二五
九	六月解職歸京○九月洋々社談（第廿一號）に「古代の文字」と題する論文を載せ通高嗣子那珂	二六

	通世と署す、是れより屢同誌に寄稿す	
一〇	十二月千葉師範學校教師長兼千葉女子師範學校教師長囑任（月俸四拾圓）	二七
一一	十一月千葉師範學校校長兼千葉女子師範學校千葉中學校總理囑任（月俸六拾圓）〇一月洋々社談（第三十八號）に「上古年代考」を寄す	二八
一二	五月養父通高歿す、年五十三〇十一月東京女子師範學校訓導囑任、幹事兼勤（月俸六拾圓）	二九
一三	三月教則取調掛兼務〇四月東京女子師範學校攝理補兼訓導囑任（月俸八拾圓）〇七月臨時事務取調掛兼務	三〇
一四	七月任東京女子師範學校長兼教諭（年俸千二百圓）〇九月叙正七位〇同月那珂通高著文法捷徑を校訂刊行す	三一
一五	三月實母谷崎氏（藤村政德妻辨子）歿す、年六十二	三二
一六	七月增俸（年俸千五百圓）	三三
一七	十一月實父藤村政德歿す、年六十七	三四
一八	七月師範學校條例取調委員仰付けらる〇八月東京女子師範學校東京師範學校に併せらる〇九月任東京師範學校教諭〇十月次女永世生れ夭す	三五
一九	一月非職仰付けらる〇七月近世朝鮮政鑑上卷を訓點刊行す	三六

二〇	八月秋山四郎共編日本地理小誌を刊行す	三七
二一	十二月任高等師範學校幹事、轉任元老院書記官、奏任官四等、上級俸、第三課勤務、第二課兼務〇九月文雜誌（第一卷第八號以下）に「日本上古年代考」を寄す〇九月より十二月に至る間に支那通史第一卷、第二卷、第三上卷の三冊を刊行す	三八
二二	一月帝室制度取調掛仰付けらる〇十月元老院廢せられ非職となる〇十二月支那通史第三下卷を刊行す	三九
二三	十二月支那通史第四卷を刊行す〇同月秋山四郎共著教育勅語衍義を刊行す	四〇
二四	五月任華族女學校教授、奏任官四等、三級俸、學監補助兼務〇十月第一高等中學校支那歷史授業囑託（報酬一ヶ月三拾圓）〇十二月叙從六位	四一
二五	十月次子高世生る	四二
二六	七月華族女學校教授非職〇九月高等師範學校支那歷史講義囑託（第二學期間、報酬二百圓）〇十月第一高等中學校漢文及支那歷史授業囑託（報酬一ヶ年七百二拾圓）	四三
二七	四月任第一高等中學校教授兼高等師範學校教授、高等官六等、六級俸〇九月三女千世生る	四四
	三月第八回尋常師範學校尋常中學校高等女學校教員檢定委員を命ぜらる（是れより毎年檢定委員とな	

二八	（る一々揭げず）○四月任高等師範學校教授兼第一高等學校教授、高等官六等、五級俸○七月陞叙高等官五等○五月三女千世夭す	四五
二九	五月帝國大學文科大學講師囑託、漢學支那語學第三講坐に屬する職務分擔、其の外特に歷史授業囑託（報酬一ヶ年二百圓）○十二月國家學會雜誌（第百十八、九號）に「行政區の名稱境界に關する私議」を寄す	四六
三〇	四月京都大阪三重奈良滋賀の二府三縣へ出張す○六月師範學校中學校教員夏期講習會東洋歷史講師を命ぜらる○九月兼官を免ぜらる○同月尋常中學校教科細目調查委員を命ぜらる○十二月叙勳六等	四七
三一	一月陞叙高等官四等○三月叙正六位○六月增俸（六級俸）○同月東京帝國大學文科大學講師手當五百圓を給せらる	四八
三二	九月增俸（五級俸）○此の年支那通史淸國に於て刊行せらる	四九
三三	二月長女美世子歿す○四月國語調查委員を命ぜらる○六月陞叙高等官三等○九月叙從五位	五〇
三四	二月栃木宮城福島の三縣へ出張す○四月文學博士の學位を授けらる○十二月叙勳五等	五一

三五	二月國語調查委員を免ぜらる○十月淸國洪鈞著元史譯文證補を校訂刊行す	五二
三六	九月早稻田大學東洋史講師囑託○一月那珂東洋小史を刊行す○四月以降崔東壁先生遺書第一、第二、第三冊を校點重刊す○十二月那珂東洋略史を刊行す	五三
三七	四月淨土宗大學佛教地理講師囑託○七月東京帝國大學文科大學講師を罷む○此の年遠祖那珂通辰の爲に贈位を請願す○崔東壁先生遺書第四冊を刊行す	五四
三八	五月淸國（旅順）へ差遣せらる	五五
三九	六月叙正五位○七月生徒修學旅行監督として滿洲韓國へ出張す○十月夫人貞子歿す	五六
四〇	一月成吉思汗實錄を刊行す	五七
四一	三月二日叙從四位、勳四等、增俸（三級俸）○同日卒す	五八

文學博士那珂通世君著述目錄

○刊行書類

書名	編著校點等	冊數	發行年月
文法捷徑	那珂通高編 那珂通世出版	二冊	明治十六年七月
近世朝鮮政鑑	朝鮮朴齋絅著 那珂通世訓點 上卷	一冊	明治十九年七月
日本地理小誌	那珂通世 秋山四郎 共編	二冊	明治二十年八月
支那通史	那珂通世編	五冊	明治廿一年九月乃至廿三年十二月
教育勅語衍義	那珂通世 秋山四郎 謹撰	一冊	明治廿四年一月
東洋歷史地圖 元代疆域・部	那珂通世監修 第一高等中學校藏版	一幅	明治廿二年八月
元史譯文證補	清國洪鈞撰 那珂通世校訂	一冊	明治卅五年十月
崔東壁先生遺書	清國崔述著 那珂通世校點目錄補撰	四冊	明治卅六年四月乃至卅七年七月
那珂東洋小史	那珂通世撰	一冊	明治卅六年一月
那珂東洋略史	那珂通世撰	一冊	明治卅六年十二月
成吉思汗實錄	那珂通世譯注	一冊	明治四十年一月

○未刊書類

書名		
外交繹史	卷一乃至卷四	那珂通世遺書に收む
校正增注元親征錄	清國何秋濤等校注 那珂通世增注	同
成吉思汗實錄續編	未定稿	同
東洋史學要書目錄	稿本	同

皇朝官位比較表　那珂通世遺書中雜著に收む
周紀補訂　同
元史列傳多闕漏　同
那珂氏系譜
漢唐西域圖　稿本
三國史記　校訂
黑韃事略　校點
東洋史札記

○諸雜誌所載論文

題目	雜誌	卷號	發行年月
古代の文字	洋洋社談	第廿一號	明治九年九月
古今文字の沿革	同	第廿三號	同年十一月
日本の四大島	同	第廿六號	同十年二月
轉生の説　抄譯	同	第三十號	同年六月
上古年代考　漢文	同	第卌八號	同十一年一月
文學の授業法	大日本教育雜誌	第六、七號	同十七年四、五月
日本上古代年考	文	第一卷第八、九號	同廿一年九月
同餘論	同	第一卷第廿、廿一號	同廿一年十一、十二月

同餘論續編　同第二卷第一號　同廿二年一月

上世年紀考　史學雜誌第八編第八、九、十、十二號　同卅年八月以後

右上世年紀考は那珂通世遺書中の外交繹史卷の一を成せり

高勾麗古碑考　史學雜誌第四十七、四十八、四十九號　明治廿六年十月以後

朝鮮古史考　同第五編第三號より第七編第十號に至る凡十八回　同廿七年三月より廿九年十月に至る

右二編亦那珂通世遺書外交繹史中にあり

稱謂私言、同補遺　大日本教育會雜誌第百四十二號　同廿七年二月
第一高等中學校校友會雜誌　同年三、四月

右一編は那珂通世遺書中の雜著に收む

行政區の名稱境界に關する私議　國家學會雜誌第百十八、九號　同廿九年十二月及翌一月
歷史地理第五卷第十號　同卅六年十月

右一編は尙文學博士吉田東伍著大日本地名辭書汎論中に收めたり

支那正統論考　東亞學會雜誌第一編第二號　同三十年三月

右一編亦那珂通世遺書中雜著に收む

支那歷代年號索引　同第二編第二號附錄　同三十一年二月

釋迦種の說につきて井上文學博士に質す　史學雜誌第六編第十一號　同廿八年十一月

支那婦人纒足の起原　同　第九編第六號　同卅一年六月

右一編亦那珂通世遺書中雜著に收む

臺灣朝鮮滿洲研究の枝折　同第十一編第一號　同卅三年一月

考信錄解題　同第十三編第七號　同卅五年七月

滿洲研究參考書　廣島高等師範學校滿韓修學旅行記念錄

古の滿洲	地學雜誌第二百五、二百六號	同卅九年一、二月
臺灣談	歷史地理第六卷第三號	同卅七年三月
喜田君の天皇大友本紀の論を讀みて	同第六卷第十號	同年十月
那珂通辰朝臣の事蹟	同、第十一卷第一號、通編一百號	同四十一年一月

本目錄は予の調査し得たる所を擧げたるものにして恐らくは猶多少の遺漏あるを免れざるべし。

三宅米吉識

那珂通世遺書

例言

一故文學博士那珂通世君の著述に富めることは、同君略傳に附錄せる著作年表によりて之を知るべし。本會は發起の趣意に從つて、博士の遺稿を出版せんとするも、有限の資金を以て、悉く其著述を擧げて網羅することを得ず。乃ち單行本として世に行はるゝもの及び研究の餘力に成れる著述小篇と未定稿の一部は之を割愛し去れり。

一本書は前記の理由によりて全集とは稱し難し。遺書の名は、那珂博士特に淸の崔述の學風を慕ひ、崔東壁先生遺書を校點して之を我學界に紹介弘布し、遺書の名は、博士の好む所たりしにより、又其姓名を冠したるは、博士の素志に因るものなり。

一本書卷頭に博士の寫眞遺墨を載せ、內外貴紳の書簡を加へたるは、一は博士追慕の誠意を表し、一は博士の名聲內外に傳播せるの一斑を示さんが爲なり。

一本書編輯につきては、三宅米吉、白鳥庫吉、中村久四郎、箭內亙、松井等、齋藤斐章の六氏、其事務を分擔掌理せり。

大正四年五月二十五日

故那珂博士功績紀念會

那珂通世遺書目次

外交繹史　一……五五〇

校正增注親征錄　五五一…六九九

成吉思汗實錄續編　一……一五二

東洋史學要書目錄　一……七〇

雜著

一　皇朝官位比較表　一

二　周紀補訂　一……二八

三　元史列傳多闕漏　一……三

四　稱謂私言　一……一七

五　支那正統論考　一……一四

六　支那婦人纏足の起原　一……一七

外交繹史

外交繹史

序

一　先生ノ計畫ニテハ、外交繹史ハ、上篇ニ於テ、國史ノ上古ヨリ朱雀天皇ノ御世マデ、即朝鮮ニテハ三韓分立ノ初ヨリ新羅渤海ノ亡滅マデ、支那ニテハ兩漢ヨリ唐末マデノ間ニ就キテ、高句麗百濟新羅任那渤海及ビ兩漢魏晉南朝隋唐ノ事蹟ノ皇國ニ關係アル事ドモヲ考究シ、下篇ニ於テ、後高麗今朝鮮及ビ五代宋元明清ノ事ヲ考究スベカリシナリ。コノ計畫ニ由リテ、先生ガ作ラレタル總目錄ハ、左ノ如シ。

卷之一　上世年紀考	卷之二　朝鮮古史考
卷之三　太古外交考	卷之四　三韓朝貢志　上
卷之五　三韓朝貢志　下	卷之六　新羅朝貢志
卷之七　渤海朝貢志	卷之八　隋唐交聘志
卷之九　宋通商志	卷之十　高麗交通志
卷之十一　元寇志	卷之十二　明交聘志
卷之十三　朝鮮交聘前志	卷之十四　征朝鮮志
卷之十五　朝鮮交聘後志	卷之十六　清通商志
卷之十七　葡班通商志	卷之十八　荷蘭通商志
卷之十九　米歐通商志　上	卷之二十　米歐通商志　下

二　右ノ中、既ニ成レルモノハ、卷之一、卷之二、卷之三及卷之四ノ一部分ナリ。卷之一ト卷之二トハ、

嘗テ史學雜誌ニ揭ゲラレ、先生ノ定說トモ認メウベキモノナレドモ、卷之三ト卷之四トハ、先生ノ未定稿ニシテ、ナホ改訂ヲ加ヘラレントシテ果サレザリシモノニ係ル。

三 是ノ未定稿ノ中ニハ、闕文ノ箇所少カラズ。ソノ中、或ル引用書ノ中ナル字句、又ハ現今ノ地名ナドニシテ、正シク脫漏ト思ハルヽモノハ、皆之レヲ補ヒタレドモ、先生ガ、他日ノ增補ヲ期シテ、コトサラニ筆ヲ闕カレタルモノハ、總テ其ノマヽニ差シ置ケリ。

外交繹史卷之一 目次

上世年紀考

第一章 古史年紀ノ延長

一 序論

二 古事記ノ列聖ノ長壽

三 日本紀ノ文飾多キ事

四 日本紀ノ列聖ノ長壽

五 日本紀ノ年紀ニ差繆多キ事

六 日本紀ノ年紀ニ依レバ長壽ノ人多キ事

第二章 曆法ノ始マリ

第三章 辛酉革命ノ事

第四章 神功應神ノ二御代ノ考

第五章 國史ト韓史ト紀年ノ比較

第六章 古事記ノ崩年干支

外交繹史卷之二目次

朝鮮古史考

第七章　朝鮮古史史籍考
第八章　朝鮮樂浪玄菟帶方考
第九章　貊人考
一　貊ノ諸種
二　夫餘
三　沃沮
四　濊貊
第十章　高句麗考
一　句麗建國ノ舊土
二　句麗ノ五族
三　朱蒙建國ノ年代
四　漢代ノ句麗
五　魏代ノ句麗
六　晋代ノ句麗

第十一章　三韓考
第十二章　百濟考
第十三章　新羅考
第十四章　加羅考
第十五章　三國文化考

外交繹史卷之三目次

太古外交考

第十六章　須佐之男命ノ天降
第十七章　臣津野命ノ國引
第十八章　少名毘古那神
第十九章　鹿春神
第二十章　稻氷命、御毛沼命
第二十一章　天之日矛
第二十二章　任那國ノ朝貢
第二十三章　多遲摩毛理
第二十四章　呉太伯

第二十五章　徐福
第二十六章　山海經論衡漢書ノ倭人
第二十七章　倭奴國王 附倭國王帥升及檀石槐
第二十八章　魏志倭人傳
第二十九章　新羅古記ノ倭人

外交繹史卷之四目次

三韓朝貢志

第三十章　神功皇后ノ新羅征伐
第三十一章　百濟ノ服屬
第三十二章　阿直岐王仁等來朝
第三十三章　應神天皇ノ御世
第三十四章　秦造漢直ノ二族
第三十五章　高句麗古碑考
第三十六章　新羅ノ質子
第三十七章　仁德天皇ノ御世
第三十八章　履中反正允恭安康ノ四御世
第三十九章　雄略天皇ノ御世
第四十章　闕
第四十一章　宋齊梁書ノ倭國傳

（目次終）

緒言

皇國ハ大海ノ中ニ獨立シテ、外國ト土壤ヲ接スル所アラザレバ、歷代ノ治亂盛衰ノ變遷モ大抵自國ノ域中ニ限リ、外國ニ對シテハ和親爭戰ノ關係甚少カリキ。唯我ガ西隣ノ友邦ナル朝鮮國ハ、海路最近ク、其ノ國ノ東南部ナル慶尙道ハ、對馬ノ北端ヲ去ルコト十數里ニ過ギザル程ナレバ、古ヨリ兩國交涉ノ事甚多クシテ、上古ノ歷史ニ於テ外交ノ記事アルハ殆ド皆此ノ國ニ關セリ。此ノ國ニ次ギテ皇國ト交涉ノ事多キハ、又其ノ西隣ナル支那國ニシテ、皇國ノ政教風俗ハ支那ノ影響ヲ被レルコト甚深シ。今ヨリ二千年前ニハ、支那ノ漢ノ武帝朝鮮ノ地ヲ取リテ郡縣トナシ、其ノ境內ニ住メル濊貊諸種皆其ノ臣屬トナリ、只南部ナル今ノ忠淸全羅慶尙三道、謂ハユル三南ノ地方ニハ馬韓辰韓弁辰ト云ヘル三韓ノ種族アリテ、數十ノ部落ニ分レ、支那ノ管轄ニハ屬セザリキ。其ノ後今ノ朝鮮ノ西北境ナル鴨綠江ノ上流ノ地ニ高句麗國起リ、馬韓諸部ノ中ヨリ百濟國起リ、辰韓諸部ノ中ヨリ新羅國起リ、三國皆漸次ニ其ノ近傍ノ地ヲ略取シ、今ヨリ千四百七八十年前、東晋ノ世ニ至リテ、支那ノ郡縣ハ盡ク滅サレ、高句麗ハ今ノ黃海道以北ヲ併セ、百濟新羅ハ今ノ京畿道以南ヲ併セテ、長白山以南ノ地分レテ三國トナリキ。新羅ハ今ノ慶尙道ノ東部ニアリテ、最モ皇國ニ接近シ、開國以來屢我ガ邊民ノ侵伐ヲ被レリト見エシガ、神功皇后ノ親征ニ及ビテ、遂ニ降リテ屬國ト爲リ、百濟高句麗モ遙ニ聖化ヲ慕ヒ、臣ト稱シテ朝貢スルニ至レリ。此ノ時新羅ノ西南ナル古ノ弁辰ノ地ハ任那國トナリテ、皇朝ヨリ鎭府ヲコヽニ置キテ諸韓國ヲ統制シタリシガ、欽明天皇二十三年陳ノ文帝天嘉三年、任那ノ地ハ新羅ニ併セラレ、皇朝ノ鎭府モ此ノ年ヨリ罷ミタリ。三國ノ中百濟新羅二國ハ古ノ三韓ノ舊土ニシテ、高句麗ハ全ク三韓ノ外ニ在レドモ、後世ノ史書ニハ、此ノ三國ヲモ三韓ト稱スルコトアリ。殊ニ皇國ノ書ニ三韓ト云

ヘルハ、皆此ノ三國ノ事ニシテ、古ノ三韓ヲ謂ヘルコトナシ。コレヨリ韓ト云フ名ハ朝鮮國ノ別號トナリテ、皇國ヲ倭ト云ヒ、支那ヲ漢ト云フガ如クニ用フ。三韓並立ノ時ニ當リ、高句麗最モ强大ニシテ、百濟之ニ次ギ、新羅ハ最モ小ナリ。其ノ皇朝ニ對スル狀ハ、百濟最モ恭順ニシテ、高句麗ハ甚疏遠ニ、新羅ハ叛服常ナカリキ。天智天皇二年、唐ノ高宗龍朔三年百濟ハ唐ニ滅サレ、同七年、唐ノ總章元年、高句麗モ唐ニ滅サレシカバ、新羅遂ニ百濟ノ故地ヲ盡ク併セ、高句麗ノ故地ノ南部ヲモ併セテ、三韓一統ノ世ト稱セリ。サレドモ高句麗ノ故地ノ過半ハ、靺鞨ノ大氏ニ併セラレタレバ、新羅ハ今ノ朝鮮ノ全土ヲ有シタルニ非ズ。大氏ハ、元正天皇ノ御世、唐玄宗開元中、國ヲ渤海ト號シテ、今ノ吉林盛京二省及平安咸鏡二道ノ地ヲ領シ、國勢ノ盛ナルコト新羅ニ遜ラザリキ。新羅ハ唐初ヨリ以來專ラ唐ニ媚事シ、皇朝ニ對シテ藩禮多ク闕ケタリシガ、渤海ハ朝聘常ニ通ジ、禮又頗ル恭シク、國都ハ數百里ノ北ニ在レドモ、隣交ノ厚キコトハ新羅ニ愈レリ。渤海ハ國ヲ建ツルコト二百十五年ニシテ、醍醐天皇延長四年、後唐莊宗同光四年、遼太祖ニ滅サレ、新羅ハ三韓統一ノ後二百六十餘年ヲ經テ、朱雀天皇承平五年、後唐帝李從珂淸泰二年、高麗太祖ニ降リテ國亡ビヌ。高麗ハ本高句麗ノ略ナリ。南北朝ノ頃ヨリシテ三韓ノ高句麗ヲ略シテ高麗トモ云ヒ、隋唐ニ至リテハ、高麗トノミ呼ビ慣ハシタリシガ、高麗太祖ハ北方ヨリ起レルガ故ニ、其ノ名ヲ取リテ國號ト爲セリ。後人之ヲ三韓ノ高麗ニ別チテハ、後高麗又ハ王氏高麗ト稱ス。此ノ高麗ハ新羅ノ降ヲ受クルニヨリ十七年前、醍醐天皇延喜十八年、梁帝朱瑱貞明四年ニ國ヲ開キ、三十四王四百七十五年ニシテ、後小松天皇明德三年、明ノ太祖洪武二十五年、今ノ朝鮮ノ太祖康獻王其ノ位ニ代レリ。今ノ朝鮮ノ建國ヨリ今年明治二十六年マデハ二十六王五百二年ヲ歷タリ。

今本篇ノ目的ハ、國史ノ上古ヨリ朱雀天皇ノ御世マデニシテ、即朝鮮ニテハ三韓分立ノ初ヨリ新羅渤海ノ亡滅マデ、支那ニテハ兩漢ヨリ唐末マデノ間ニ就キテ、高句麗百濟新羅任那渤海及ビ兩漢魏晋南朝隋唐ノ事蹟ノ皇國ニ關係アル事ドモヲ考究セントスルナリ。後高麗今朝鮮及ビ五代宋元明淸ノ事ハ、更ニ續篇ニ於テ考究スベシ。

外交繹史卷之一

上世年紀考

第一章　古史年紀ノ延長

一　序論

皇國ノ古史ト朝鮮國ノ古史トヲ比較シテ、其ノ記事ノ異同ヲ稽フルニ、雄略天皇以後ノ記事ニハ、甚シキ牴牾ノ事アラザレドモ、允恭天皇以前ニハ、キハダチテ牴牾甚シク、全ク符合スル者ハ、一事モ見エズ、偶事實ノ符合スル所アレバ、其ノ年代ハ必違ヘリ。凡テ歴史ハ、時代ノ古キニ隨ヒテ、精確ノ記事少キ者ナリトハ云ヘドモ、サバカリ牴牾ノ甚シキハ、兩國古史ノ精確ヲ闕ケルガ故ノミニハアラズ、他ニ一ツノ原因アリ。ソハ、日本紀ノ允恭天皇以前ノ年紀ノ正シカラザルコトナリ。故ニ上古ノ兩國交渉ノ事ヲ考究セントスルニハ、先ヅ此ノ年紀ノ事ヲ論ジテ紀事ノ牴牾ヲ致セル根本ヲ正サヾル可カラズ。

日本紀ノ年紀ノ泥ムベカラザルコトハ、本居宣長大人ヲ初トシテ、先輩モ、之ヲ論ジタル人ナキニハ非ザレドモ、一般ノ學者ハ勅撰ノ正史ナルガ故ニ、顧慮スル所アリテ、心ニハ疑ヲ懷ケドモ、大抵ニ看過シタルガ如シ。史學ハ、單ニ皇朝ノ古書ニ據リテ、其ノ異同ヲ採會スルノミニシテ止ムベキ者ナラバ、年紀ノ正否ヲ論外ニ置キテモ、格別ノ差支ヲ生ゼザレドモ、各國ノ史志ヲ比較シテ、人類ノ發達ヲ考究シ、殊ニ隣邦ニ關係セル事實ヲ詳カニシテ、彼此相及ボセル影響ヲ明カニセントスルニハ、精確ナル年紀ヲ得ンコト、甚要

用ナリ。サレバ正史ニ記セル事ナリトモ、疑ハシキ所アラバ、俺マデモ精査シテ、古史ノ事實ヲ確ムルハ、史學ヲ講ズル者ノ務ムベキコトナリ。

且皇朝ノ古史ハ、我祖宗ノ盛德大業ヲ記述セル者ニシテ、支那人ノ伏羲神農ヲ說キ、朝鮮人ノ檀君ヲ談ズル類ト同視スベキニハ非ザルヲ、世人ハ、往々古代ハ邈タリト云ヒテ、敢テ之ヲ重ンゼザル者アルハ、蓋其ノ記述ノ中ニハ、乖謬悖理ノ事ノ打チ雜レルニ由リテナリ。故ニ今正史ナリトテ、徒ニ之ヲ墨守シ、乖謬悖理ノ事マデモ固執セントスル時ハ、遂ニハ人ヲシテ古史全體ノ眞僞マデモ疑ハシムルニ至ルベシ、コレ、余ガ最モ悲歎ニ堪ヘザル所ナリ。

凡テ史書ノ誤謬ヲ指摘スルハ、之ヲ破壞センガ爲ニ非ズ。其ノ誤謬ヲ訂シテ、正實ニ歸セシメンガ爲ナリ。昔宋ノ歐陽修宋祁ノ二大儒仁宗ノ勅ヲ奉ジテ、新唐書ヲ撰修セシニ、吳縝ト云ヘル人、其ノ誤謬ヲ指摘シテ、新唐書糾謬ト名ヅケタリ。吳元美其ノ序ヲ作リテ、「唐人稱杜征南顏秘書、爲左丘明班孟堅忠臣、今其觀推廣發明二子、信有功矣、至班左語意乖戾處、往々曲爲說以附會之、安在其爲忠也、今吳君於歐宋大手筆、乃能糾謬纂誤、力裨前闕、殆晏子所謂獻可替否、和而不同者、此其忠何如哉、然則唐人之論忠也陋矣」ト云ヘリ。誠ニ卓識ノ言ト謂フベシ。サレバ本居大人ノ誠忠ナルスラ、日本紀ノ短所ヲ攻駁スルハ、毫モ假借スル所ナカリキ。今勅撰ノ正史ナリトテ、其ノ紕謬ノ處マデモ曲庇シテ、之ニ阿附セントスル時ハ、コレ正史ノ佞臣ニシテ、カシコケレドモ日本紀ヲ監修シ給ヘル崇道盡敬皇帝ノ御心ニモ違フナルベシ。

二　古事記ノ列聖ノ長壽

日本紀ノ年紀ヲ論ズル前ニ、古事記ニ就キテ言フベキコトアリ。古事記ハ、天武天皇諸家ノ持テル帝紀本辭ノ、正實ヲ失ヒテ、虛僞ヲ加ヘタルコトヲ憂ヒ給ヒテ、僞ヲ削リ實ヲ定メテ、後葉ニ傳ヘント思ホシ立シ、舍人稗田ノ阿禮ニ勅語シテ、先代ノ舊辭ヲ誦ミ習ハシメ給ヒシカドモ、其ノ事未ダ行ハレズシテ、崩ジ給ヒシカバ、元明天皇、其ノ大御心ヲ紹ギ給ヒ、太ノ朝臣安麻呂ニ詔シテ、阿禮ガ誦メル舊辭ヲ撰錄シ給ヘル書ニシテ、文辭ヲモ飾ラズ、專ラ古ノ傳ヘヲ失ハジト勤メラレタルコト、此ノ書ノ序ニ見ユ。カクテ其ノ體裁ハ、漢史ノ本紀編年等ノ書トモ異ナレバ、事ヲ敍スルニ、年月ナドヲ揭グルコトナク、天皇タチノ天ノ下治シメシヽ年數ナドモ、太祖以來三十三代ノ中、唯顯宗天皇捌歲、武烈天皇捌歲、敏達天皇壹拾肆歲、用明天皇參歲、崇峻天皇肆歲、推古天皇參拾漆歲ノ六代アルノミニシテ、其ノ他ノ二十七代ハ、皆闕ケタリ。又タ其ノ原注ニ、列聖崩御ノ年ヲ干支モテ記シタル所アリ。コレモ、十五代ノミニシテ、十八代ハ闕ケタリ。列聖ノ崩年ト在位年數トハ、年代ヲ推スニ甚肝要ナル物ナルニ、カク闕漏ノ多キハ、書契以前ノ事ハ、當時ノ傳說又ハ記錄ニモ、既ニ其ノ傳ヘヲ失ヘル所アリシ故ナリ。

抑上代ニ文字ナカリシコトハ、本居氏ノ古事記傳ノ總論ニ「大御國に、もと文字なかりしかば 今神代の文字などいふ物あるは、後世人の僞作にていふにたらず 上代の古事ども、何も直に人の口に言傳へ、耳に聞傳はり來ぬ」ト云ヘル如クニテ、齋部ノ廣成ノ宿禰ガ古語拾遺ノ序ニハ、「蓋聞上古之世、未有文字、貴賤老少、口々相傳、前言往行存而不忘」ト云ヒ、三善ノ淸行ノ朝臣ノ革命勘文ニハ、「上古之事、皆出口傳、故代々之事、應有遺漏」ト云ヘリ。存而不忘ト應有遺漏トハ、反對ナルガ如クナレドモ、各其ノ一端ヲ云ヘルニテ、皆實ヲ得タル言ナリ、イカニト云フニ、祖宗ノ盛德大業ハ、更ニモ云ハズ、名族華冑ノ世系功勳、又ハ種々ノ奇事珍談ナドハ、人々語リ繼ギ言ヒ繼ギテ、忘レズニ傳ヘタルベケレドモ、年月又ハ數目ニ關スル者ハ、記誦スルニ最モ難ケレバ、其ノ傳ヘヲ失ヘル者、必多カリケン。古事記ノ在位年數ト崩年干支トハ、唯其ノ傳ヘアル者ノミヲ擧ゲテ、傳ヘナキ者ハ、

悉ク闕キテ、敢テ記載ノ整備ヲ求メザルハ、古傳ヲ質實ニ保存シタル所ニシテ、此ノ書ノ尊重スベキ所以ナリ。

然ルニ此ノ書ニ列聖ノ御年ヲイトモ悉シク記サレタルハ疑フベシ。綏靖天皇ヨリ開化天皇マデ八代ノ間ハ宮所ノ名ト御世系トノ外ハ一事モ後世ニ傳ハラザルニ、彼ノ記誦シ難キ聖壽ノ年數ノミ、口碑ニ存シテ忘レザル理アランヤ。

又清寧天皇以後ハ、顯宗天皇繼體天皇ノ御年ノ見エタルノミニシテ、其ノ外十代ノ天皇ノ御年ハ、皆闕ケタルニ、雄略天皇以前二十一代ハ、盡ク備ハレリ。此ノ書ハ、上代ノ傳ヘヲ記スコトヲ主トシテ、仁賢天皇以後ハ、凡テノ記事簡略ナレバ、御年モ、サル理由ニテ、近キ御世ハ略ケルニヤトモ思ハルレドモ、サニアラズ。后妃皇子皇女タチノ御名モ、悉シク擧ゲ、又在位年數ト崩御ノ年月日トハ、近キ御世ホド詳カナルヲ見ルニ、御年モ、實ニ傳ヘノアリタランニハ、殊サラニ略カルヽコトナカリケン。然ラバ、御年ノ闕ケタルハ、既ニ其ノ傳ヘヲ失ヒ、又ハ傳ヘノ確カナラザリシナリ。近キ御世スラ、御年ノ確カナラザルニ、遠キ御世ノ御年ノ盡ク傳ハリケンコトハ、信ズベカラズ。

又安康天皇ハ、御年伍拾陸歲トアリテ、其ノ御弟雄略天皇ハ、御年壹佰貳拾肆歲トアリ。雄略天皇ハ、日本紀ニ在位三十二年トアルニ據レバ、安康天皇崩御ノ時ニハ既ニ、九十二歲ニナリ給ヒテ、御兄ヨリ長ズルコト三十六歲ナルベシ。

且上壽一百ハ、人世ノ甚稀ナル事ナルニ、列聖ノ享壽百歲ニ過ギ給ヘル者甚多ク、神武天皇ハ壹佰參拾漆歲、孝安天皇ハ壹佰貳拾參歲、孝靈天皇ハ壹佰陸歲、崇神天皇ハ壹佰陸拾捌歲、垂仁天皇ハ壹佰伍拾歲、景行天皇ハ壹佰參拾漆歲、應神天皇ハ壹佰參拾歲、雄略天皇ハ壹佰貳拾肆歲トアリ。古事記ハ、古傳ヲ有ノ儘ニ記シタル書ニシテ、記者ノ私意ヲ加ヘタル所アリトハ見エザレバ、聖壽ノ年數ノ如キハ、語リ繼ギ言ヒ繼ギ來ツル人々ノ、古ヲ尚ブ心ヨリ、イツトナク次第ニ其ノ數ヲ增加シタルヲ、記者ハ、其ノ儘ニ記シタル者ナルベシ。

三　日本紀ノ文飾多キ事

日本紀ノ、文飾ニ過ギテ、虛僞多キコトハ、本居氏ノ神代紀髻華山蔭ニ「書紀は、いにしへぶみのあるが中に、もともたふとくめでたく、やむごとなき御典になむあるを、さるにとりては、古學のためにはしも、あかぬこと、はたおぼろげならずなむ有ける、しかいふ故は、まづふることしるす史は、おほかた古へのつたへを失はずあやまたずして、後の世に傳へむためなり。さればその史ども、ふるきは、上つ代の事をしるせるやう、たゞそのありかたのまゝにして、かざりそへたることなく、文のあや、はたおのづからにそなはりて、いとめでたくなむありしを、此書紀のつくりやうは、さる古傳書にはよりながら、當時の世ノ中の好みにかなへて、こと〳〵く漢ぶみぶりに改めて、詞にその方のかざりの多かるのみならず、事にさへ意にさへ、そのかざりをくはへなど、すべてよろづをいかてからめきたらむとつとめられたるほどに、なべての詞の、古にあらざることは、さらにもいはず、文の改めざまによりては、その事も意もおのづからいにしへの傳のおもむきとはたがへるともあり、あるは、いかなるよしとも聞えがたくなりぬるふしさへ、をり〳〵まじりなどして、大かた上つ世のこゝろは、うづもれはてゝ、世にしる人なくなむなれりける」ト云ヒテ、神代紀ナル潤色ノ漢本漢意ノ砂ヒヂリコヲ、ホリワケカキワケ書キ出シ、又古事記傳ノ總論ニモ、「此記あるうへに、更に書紀を撰ばしめ給へるは、そのかみ公にも漢學問を盛に好ませ給ふをりからなりしかば、此記の、あま

りたゞありに飾なくて、彼の漢の國史どもにくらぶれば、見だてなく淺々と聞ゆるを不足おもほして、更に廣く事どもを考へ加へ、年紀を立などし、はた漢めかしき語どもかざり添などもして、漢文章をなして、かしこのに似たる國史を立むためにぞ撰ばしめ賜へりけむ」トテ、其ノ由ヲ委曲ニ論ゼラレタリ。

然ルニ飯田武鄕氏ノ日本書紀通釋ノ總論ニハ、本居氏ガ、此ノ紀ノ文ヲ撰者ノ作リ給ヘルモノト思ヘルヲ非事ナリトシ、「撰者の心にも、あまりに漢風に過たる潤色どもは、厭はせ給ひて、除去たくは思ぼしめせる物から、それ又止事なく、皆から得避給ふまじき事どもありて、爲便なくさておき給ひしなりけり。まづ其潤色文華の因て起れる根原を探ぬるに、孝德天智の兩御代、甚く漢風を好ませ給ひて、神道を輕んじ、文人どもを寵し給ひければ、さる上の好に合へて、其御代の學士等各競ひ進みて、帝紀、國紀、諸家ノ記錄、氏文に至るまで、文華のさかしらを書加へ、世を欺き人を誣たる事ども、甚多く出來にけむ。しか兩朝と申すうちにも、殊にすぐれたる漢風の御所爲は、全く天智天皇の大御心にまし坐り云々、かれ天武天皇の、其をいたく歎かせ玉ひしは、信に尊く諸なる大御意にぞ坐ましける、さるは、古事記ノ序に「天皇詔之、朕聞、諸家之所賫、帝紀及本辭、既違正實、多加虛僞、當今之時、不改其失、未經幾年、其旨欲滅、斯乃邦家之經緯、王化之鴻基焉、故惟撰錄帝紀、討覈舊辭、削僞定實、欲流後葉」とあり。これ、かの兩御代の間の漢風を甚く歎かせ給へる大御詔なれば、親王の、此紀を撰び給ふも、御父天皇の大御心を御心と爲給ひし事は、推量奉りても知らるるなり。しかはあれども、當時の代には、朝廷の御本を始め、諸家の記錄等にも、先代以來文人學士の文飾のさかしら、入交りて、其を厭ふがあまり、皆がら避むとする時は、事實も、共に失はれゆく故に、止事を得ず、さながらおき給ひしもあるべし。もとより御父天皇の深く所思看す御旨もありしなれば、よしや此親王、漢意におはすとも、此御撰におきて、さるさかしら事を加へ給ふべきにあらずかし」ト云ヒテ、紀ノ撰述ヲ、唯舊記ヲ纂錄セルガ如ク言ヒナシ、其ノサカシラ事ノ根原ヲバ、オフケナクモ天智天皇ニ負ハセ奉レリ、此ノ論ハ、橘ノ守部氏ノ稜威ノ道別ノ總論ニ、イトモ巧ニ詳カニ述ベラレタルニ本ヅキタル者ナレバ、彼ノ書ヲ引クベキモノナレドモ、其ノ長文ヲ厭ヒテ、今ハ飯田氏ノ論ヲ節錄セリ。

諸家ノ舊記ニ、虛僞ノ加ハリタリケン事ハ、サル事ナガラ、紀ノ撰者ガ、彼ノ削僞定實ト宣ヘル詔旨ニ遵ヒ奉リタランニハ、舊記ノサカシラ事ヲ其ノ儘ニ纂錄シ給フベキ筈ナカラン。本居氏ノ指摘シタル如キ漢風ノ虛飾ハ、總ベテ舊記ノ文ナリト云フトモ、程ヨク删正ヲ加ヘナバ、ナドカ事實ノ失ハルヽコトアルベキ。橘氏ノ云ヘル「雄略天皇を桀王に奉比、武烈天皇を紂王に奉准」タル記事ノ如キハ、皆ガラ避ケテ事實ヲ失フトモ、惜カルマジ。又雄略紀二十三年ノ遺詔ハ、全ク隋書高祖紀仁壽三年ノ詔ト同四年ノ遺詔トノ文ヲ取リ、三百十四字ノ中、唯五十五字ノミハ、原文ト稍變リ、欽明紀二十三年ノ詔ハ、梁書王僧辯傳ナル盟誓ノ文ヲ取リテ、其ノ異ナル所ハ、唯侯景ヲ新羅ト改メ、高祖武皇帝ヲ息長足姬ノ尊ト改メ、梁朝ノ禍變ヲ任那ノ事ニ書キ易ヘタルナド、聊バカリナリ。カヽル類ハ、紀中甚多シ。カクテモ猶紀ノ撰者ハ、漢文ノ潤色ヲ嫌ヒ給ヘリト謂ハルベキカ。若又總裁シ給ヘル崇道盡敬皇帝ハ、橘氏ノ云ヘル如ク、眞ニ漢意ノオハサヾル皇子ニマシマストモ、其時專ラ筆ヲ執レル太ノ安麻呂朝臣等ハ、漢癖アル人ニゾアリケン。安麻呂ノ古事記ハ、稗田ノ阿禮ガ誦習ヘル舊辭ヲ撰錄シタルナレバ、漢メキタル事ハ更ニ雜ラザレドモ、其ノ序文ヲ見レバ、漢文ノ潤色ニハ頗ル巧ナル人ナリ。

橘氏ハ、天智天皇ノ漢風ヲ好ミマセル事ヲ謗リ奉リテ、天武天皇ハ、其ヲ歎カセ給ヘリトテ、ヒタスラ稱讃シ奉レドモ、當時漢風ノ好尙ハ、上下一般ノ流風ニテ、謂ハユル氣運トモ云フベキ有樣ナレバ、彼ノサカシラ事ノ根原ヲ、直ニ天智天皇ニ負セ奉ルハ、誠ニ畏コク負氣ナキ誣言ナリ。又天武天皇ノ漢風ヲ好ミマセル

事ノ、天智天皇ニモ劣リ給ハザリシコトハ、天武紀ニ昭々タレバ、彼ノ削僞定實ト宣ヘル詔旨ハ、諸家ノ舊記ニ見ユル事實ノ錯誤ヲ正サント思ホシ立シ、マデニテ、前朝ノ漢風ヲ改メンナドノ叡慮マシ〳〵シニハ非ズ。此ノ御世ノ十年ニ、川島ノ皇子等十二人ニ詔シテ、帝紀及上古ノ諸事ヲ記シ定メシメ給ヒシ事アリ。此ノ時ノ帝紀ハ、世ニ傳ラネバ、功成ラザリシガ如クナレドモ、今ノ日本紀ハ、此ノ書ヲ本トシテ修メラレタルコト、河村秀根ノ書紀集解ノ總論ニ論ジ明シタル如クニテ、記傳ノ總論ニモ、此ノ帝紀ヲ古事記ニ比較シテ「此（古事記）と彼レ（此ノ帝記）とは、其趣別なることゝ聞えたり。その別なるけぢめは、彼ノ撰は、潤色を加へて漢の國史に似するを旨とし、此レは、古の正實のさまを傳へむがためなるべし」ト云ヘリ。サレバ古事記モ日本紀モ、同ジク天武天皇ノ御志ヲ承ケテ、同ジク安麻呂朝臣ノ手ニ成リタレドモ、一ハ、削僞定實ノ詔旨ニ本ヅキテ、質直ヲ主トシ、一ハ、漢風ヲ好ミマセル大御心ニ從ヒテ、文飾ヲ主トシタルニテ、其ノ文飾ノ過ギタル所ハ、自ラ虚僞ニモ陷リテ、古事記ノ主旨トハ背馳スルニ至リタルナリ。

橘氏ハ、本居氏ノ説ヲ破ランガ爲ニ、努メテ紀ヲ辯護シタレドモ、紀ノ潤色多キコトハ、誠ニ本居氏ノ云ヘル如クナレバ、コノ潤色ハ、舊記ノ遺文ナリトモ、又ハ撰者ノ作ナリトモ、又ハ後人改修ノ僻ナリトモ、（記ニ改修ノ有リケン事ハ、伴信友氏ノ考證アリ。）其ハ、孰レニモアレ、潤色ノ爲ニ實ヲ失ヘル所ハ、ヨク心ヲ附ケテ見ワクベキ事ナリ。然ハアレドモ、此ノ書ハ、古傳舊記ヲ捜リ集メテ、記事ノ詳密ナルコトハ、古事記ノ及ブベキ所ニ非ザレバ、正史ノ冠冕トシテ戴キ尊ブベキハ勿論ノ事ニシテ、虚僞ノ雜レルガ爲ニ輕侮スベキニ非ズ。

此ノ書ノ文飾ノ最著シキハ、年紀ヲ立テ、月日ヲサヘ委シク掲ゲタルコトナリ。コハ、支那ノ本紀實錄ナド云ヘル史書ノ體裁ニ摸擬センガ爲ニ設ケラレタル者ニテ、書契以前ノ傳説ヲ輯錄シタル古史ニハ似合シカラザル書樣ナリ。書名ヲ日本紀ト題シタルモ、漢ノ荀悦ガ漢紀、晉ノ袁宏ガ後漢紀ナド云ヘル編年史ノ名ニ依レルナルベシ。本居氏ノ眞暦考ニ、上代ハ月次モ日次モ無カリシ由ヲ詳カニ論ジテ「然るを書紀には、神武の御卷に、是歲也太歲甲寅、冬十月丁巳朔辛酉云々、辛酉春正月庚辰朔、天皇即帝位於橿原宮ノなどあるをはじめて、すべて、上代の事にも、皆年月をしるし、又甲子にうつして、日次までをしるされたるは、いとも心得がたし。そも〳〵これみな後の世よりさかさまに推へて、長暦といふものをもて定めたりと、世の人は、事もなげに思ふめれど、まづ御代〳〵の年の數も、傳へ〳〵のかはり有てさだかならねば、某年といへるすら、うたがはし。されど年は、しばらく一つの傳へにつきても定めつべし。次に某月といへる事、上つ代には、月次も月の名もなかりしかば、いかゞなれども、もとは、たとへば春のはじめといひつたへしを、月次出來て後に、正月とはいひ傳へたりとせば、これも、さもあらむを、某日と日をしもさゝれたるぞ、いかにとも解べきよしなかりける、日次のさだまりなかりけむ世の事を、某日といひ傳ふべき由あらめやは」ト云ヒ、記傳（二十六ノ四丁）に「吉備ノ臣の祖御友別は、此（孝靈天皇ノ皇子ナル）若建日子ノ命の孫にして、應神の廿二年に見ゆ。孝靈の御世ノ末より五百年餘なるに、其御曾孫の存在たることいかゞ。されば書紀の年紀は、左右に疑はし、」又（同卷ノ十三丁ニモ。）「凡て書紀の年紀、甚く違へる事ども、彼レ此レありて、既に倭建ノ命の御年にも、前後違ひあれば、あながちには拘るべからず」ナド云ヒ、其ノ外、書紀ノ年紀ノ誤リ多クシテ憑據シ難キヲ言ヘルコトハ、記傳ノ中所々ニ散見セリ。

四　日本紀ノ列聖ノ長壽

日本紀ニ記シタル列聖ノ御年ノ長キコトハ、古事記ニモ過ギタル所多シ。今記紀二書ノ壽數ヲ對照センニ。

古事記ノ御年	日本紀ノ御年（立太子ノ時ノ御年ニ據リテ算スレバ）	在位年數

神武天皇	壹佰參拾漆歳	一百二十七歳		七十六年
綏靖天皇	肆拾伍歳	八十四歳		三十三年
安寧天皇	肆拾玖歳	五十七歳	六十七歳	三十八年
懿德天皇	肆拾五歳	闕	七十七歳	三十四年
孝昭天皇	玖拾參歳	闕	百十四歳	八十三年
孝安天皇	壹佰貳拾參歳	闕	百三十七歳	一百二年
孝靈天皇	壹佰陸歳	闕	百二十八歳	七十六年
孝元天皇	五拾漆歳	闕	百十六歳	五十七年
開化天皇	陸拾參歳	一百十五歳 注記	百十一歳	六十年
崇神天皇	壹佰陸拾捌歳	一百二十歳	百十九歳	六十八年
垂仁天皇	壹佰五拾參歳	一百四十歳	百三十九歳	九十九年
景行天皇	壹佰參拾漆歳	一百六歳	百四十三歳	六十年
成務天皇	玖拾伍歳	一百七歳	九十八歳	六十一年
仲哀天皇	伍拾貳歳	五十二歳 注紀	五十三歳	九年
應神天皇	壹佰參拾歳	一百一十歳	百十一歳 御生ヨリ算ス	四十一年
仁德天皇	捌拾參歳	闕		八十七年
履中天皇	陸拾肆歳	七十歳 注紀	七十七歳	六年
反正天皇	陸拾歳	闕		六年
允恭天皇	漆拾捌歳	闕		四十二年

此ノ表ヲ見レバ、太祖以下十七代ノ中、紀ノ壽數、記ヨリ多キ者十帝ニシテ、記紀同ジキハ、仲哀天皇ノミナリ。神武崇神垂仁應神四帝ノ御年ハ、記ヨリ短ケレドモ、猶皆百歳以上ナリ。景行天皇ノ御年ハ、崩年ニ據レバ、記ヨリ短ケレドモ、立太子ノ時ノ御年ニ據リテ算スレバ、記ヨリ長シ。此ノ外神功皇后ハ、記ニハ其壽ヲ載セザルニ、紀ニハ一百歳トアリ。

紀ノ壽數ノ斯ノ如ク異常ナルハ、蓋列聖在位ノ年數ヲ延長シタルニ因リテ生ジタル結果ナリ。右ノ表ニ據レバ、仁德天皇以上十六代ノ中、在位六十年以上ニ至リ給ヘル者十帝アリテ、其ノ最モ著シキ者ヲ舉グレバ、孝安天皇ハ、百年ヲ踰エ給ヒ、垂仁仁德天皇ハ、殆ンド百年ニ至リ給ヘリ。又應神天皇ハ、在位四十一年ナレドモ、母后ノ攝政六十九年ヲ合スレバ、百十年ナリ。又孝元天皇ハ、記ノ壽數ヲ以テ、直ニ在位年數トシ、崇神天皇ハ、記ノ壽數ヨリ一百ヲ除キテ、在位年數トシタルガ如シ、孝昭天皇開化天皇ノ在位年數モ、記ノ壽數ト相似タリ。仁德天皇ノ在位年數ノ如キハ、記ノ壽數ニ頗著セズシテ延長シタリト見ユ。

又應神以前諸帝ノ御年ト在位ノ年數トヲ比較シテ、其御降誕ノ年ヲ算スルニ、大抵父皇御年六七十歳ノ後ニ在リ、神武天皇ハ、八十歳ニテ綏靖天皇ヲ生ミ給ヒ、綏靖天皇ハ、六十六歳ニテ安寧天皇ヲ生ミ給ヒ、孝昭天皇ハ、八十歳ニテ孝安天皇ヲ生ミ給ヒ、孝安天皇ハ、八十六歳ニテ孝靈天皇ヲ生ミ給ヒ、孝靈天皇ハ、七十歳ニテ始メテ孝元天皇ヲ生ミ給ヒ、其ノ後三男二女（記ニヨレバ四男三女）ヲ生ミ給ヒ、孝元天皇ハ、（開化天皇の崩年ニ據リテ算スレバ）六十二歳若クハ（開化天皇ノ太子ニ立チ給ヒシ時ノ御年ニ據リテ算スレバ）六十六歳ニテ開化天皇ヲ生ミ給ヒ、開化天皇ハ、（開化崇神二帝ノ崩年ニ據リテ算スレバ）六十四歳若クハ（二帝ノ太子ニ立チ給ヒシ時ノ御年ニ據リテ算スレバ）六十一歳ニテ崇神天皇ヲ生ミ給ヒ、崇神天皇ハ、八十歳ニテ始メテ垂仁天皇ヲ生ミ給ヒ、其ノ後五男五女ヲ生ミ給ヒ、垂仁天皇ハ、崩年ニ據リテ算スレバ、九十五歳ニテ景行天皇ヲ生ミ

給ヒ、其ノ後三男四女（記ニヨレバ十男三女）ヲ生ミ給ヒ、景行天皇ハ、（崩年ニ據リテ算スレバ）五十九歳若クハ（太子ニ立チ給ヒシ時ノ御年ニ據リテ算スレバ）九十六歳ニテ始メテ大碓小碓ノ二皇子ヲ生ミ給ヒ、其ノ後男女八十人ヲ生ミ給ヒ、仲哀天皇ハ、壽五十二歳トアレドモ、嘗テ群臣ニ宣ヘル勅語ニ「朕未逮于弱冠而父王既崩之」トアルニ據レバ、景行天皇四十一年、御父日本武尊ノ薨ジ給ヒシ時ハ、既ニ十五六歳ニ成リ給ヒ、遺腹ノ皇子（應神天皇）ヲ生ミ給ヒシ時ハ、一百餘歳ナルベシ。

人壽ノ長短ハ、古ト今ト同ジカラズト云フコトハ、昔ヨリ世人ノ常ニ懷ケル想像ニシテ、幾分カハ其ノ事實ナキニモ非ザレドモ、平均今人ニ二倍セル程ノ長壽ノ世ハ、史錄アルヨリ以來、何クノ國ニモ、何時ノ時代ニモ、恐ラクハ例アルマジ。又縱令列聖ノ享壽ヲ今人ノ二倍トシ、其ノ成人ノ期モ、隨テ今人ヨリ後レ給ヒシト假定スルモ、六七十歳ヲ過ギテ後ニ、始メテ皇長子ヲ生ミ給ヘルガ如キハ、生理ノ常則ニ於テ有ルベカラザル事ナリ。

五　日本紀ノ年紀ニ差謬多キコト

日本紀ハ、右ノ如ク虛飾多キ書ニシテ、其ノ年紀モ、多クハ史家ノ推定ニ成リタレバ、年代ノ前後撞着シテ、通ジ難キ所頗ル多シ、今其ノ差謬ノ甚シキ者數條ヲ擧ゲン。

第一　安寧開化崇神垂仁景行成務仲哀應神履仲諸帝紀ノ崩御ノ所ニ記シタル御年ヲ、立太子ノ時ノ御年ニ據リテ算ヘタル數ニ比ブルニ、皆合ハズ。景行天皇ノ如キハ、其ノ差最モ甚シク、三十七年ノ出入アリ。前條ノ記紀壽數對照ヲ見ヨ。

第二　崇神紀元年ノ所ニ、「二月辛亥朔丙寅、立御間城姬爲皇后、先是后生活目入彥五十狹茅（垂仁）天皇云々」トアリ。此ノ文ニ據レバ、垂仁天皇ハ、崇神天皇ノマダ皇太子ニテオハセシ時生ミ給ヒシナルヲ、垂仁紀ニハ「天皇、以御間城（崇神）天皇二十九年歲次壬子春正月己亥朔生於瑞籬ノ宮」ト記セリ。

第三　景行天皇二十七年ニ、日本武尊ノ、熊襲ヲ擊チ給ヒシ條ニ「時年十六」トアレバ、其ノ生レ給ヒシハ、景行天皇十二年ナルベシ。然ルヲ日本武尊ト「一日同胞而雙生」ト云ヘル大碓命ハ、景行天皇四年ニハ、既ニ美濃ノ國ノ造神骨ノ女兄遠子弟遠子（記ニハ三野國造之祖神大根王之女名兄比賣弟比賣二孃子）ニ密通ケ給ヘルコトアリキ。書紀集解ニハ、「是月以下五十八字錯簡、疑應在于二十年巳後之紀」ト云ヘレドモ、是ノ歲ノ前文ニハ、春二月「天皇幸美濃」トアリ、後文ニハ、「冬十一月、乘輿自美濃還」トアリテ、美濃ノ國造ノ二女ノ事ハ、美濃ニ駐マリ給ヘル時ノ事ナレバ、錯簡トモ見エズ。黑羽本日本紀ニハ、大碓命ヲ譽津別ノ命ニ作レリ。コハ其ノ不都合ニ心付キテ改竄セル者ナルベシ。サレドモ譽津別ノ命ハ、垂仁天皇二十三年ノ詔ニ「譽津別王、是年既三十云々」ト宣ヘルコトアレバ、景行天皇四年ニハ、御年既ニ百十歲ニ及ビタレバ、上文ノ如キ事アルベシトモ思ハレズ。大碓命ノ事ハ、記ノ文殊ニ委シク、其ノ下文ニ「故其大碓命娶兄比賣生子押黑之兄日子ノ王、（此者三野之宇泥須和氣之祖）亦娶弟比賣生子押黑ノ弟日子ノ王（此者牟宜都君等之祖）」ト云ヒ、紀ニ、大碓皇子、東征ノ役ヲ逃レタル後「因此遂封美濃、仍如封地、是身毛津君、守君二族之始祖」ト云ヒ、姓氏錄左京ノ皇別ニ「牟義公、景行天皇皇子大碓ノ命之後也」トアリ。身毛津君、牟義公ハ、即記ノ牟宜都君ナレバ、二女ヲ娶リ給ヘルハ、大碓命ナルコト論ナシ。

第四　記傳境原ノ宮ノ卷（二十二ノ十六丁）ニ、景行紀三年ニ「屋主忍男武雄心命詣之（紀國）、居于阿備柏原、而祭祀神祇、仍住九年、則娶紀ノ眞遠祖菟道彥之女影媛、生武內宿禰」トアルヲ引キテ「此人の生は、成務卷に、初天皇與武內宿禰同日生之とあり。年紀合ず、其故は、まづ景行ノ御世の四年より十二年までの間にぞ生れ給ひけむを、成務天皇は、景行天皇ノ四十六年立爲太子、年二十四とあれば、二十三年に生坐るなり。然れば此天皇の生坐しは、かの十二年よりは十一年後なるをや。又此天皇、太子に立チ坐シしこと、景行ノ卷には、五十一年の事な

れば、四十六年とあるを誤として、五十一年に御年二十四として計れば、廿八年に生坐るなれば、彼ノ十二年より十六年後れたり。又此天皇崩時一百七歲とあるを以テ計れば、景行の十四年に生坐るなれども、其レにてもなほ二年後れたり」。又景行紀廿五年「遣武内宿禰、令察北陸及東方諸國之地形、且百姓之消息也」トアルヲ引キテ、「是レニ依ルに、かの生の年、いよゝ決めがたし。若シ十二年の生とするときは、廿五年には、わづかに十四歲なり。四年の生としても、廿二歲なれば、かゝる大任あらむことは、なほ少しおぼつかなけれども、倭建ノ命は十六歲にて、熊襲を征に遣され賜ひしかば、然ることもありけむ、但しさては彼ノ成務天皇の御年立といよゝ違へるをや」トアリ。

第五　日本武ノ尊ノ御子仲哀天皇ノ御年ハ、記紀共ニ五十二歲トアルコトニツキ、記傳訶志比ノ宮下ッ巻(三十一ノ五十二丁)ノ細書ニ「書紀に依るに、此ノ天皇九年に崩リ坐シて、御年五十二なるときは、生坐るは、成務天皇の十九年にあたれるを、其年は、大御父倭建ノ命、景行天皇の四十三年に崩リましてより三十六年後なるは、いかにぞや。凡て書紀の紀年の彼此合はざること、かくの如し。或は、此ノ違ひに因て、此天皇を倭建命の御子には非じなど疑ふは、中〳〵に非なり。そは疑ふべき方をば疑はずして、疑ふまじきかたを疑へるものぞ。彼紀の紀年の違ひ多さは、めづらしからぬことなるをや」ト云へり。又「朕未逮于弱冠、而父王既崩之」ト宣ヘル勅語ニ據レバ、一百餘歲ニテ皇子ヲ生ミ給ヘルコトヽナリテ、年紀ノ違ヒ益著シ。

第六　應神紀四十年ノ條ニ「天皇召大山守命大鷦鷯尊問之曰、汝等者愛子耶、對言甚愛也、亦問之長與少孰尤焉、大山守命對言不逮于長子、於是天皇有不悅之色、時大鷦鷯尊預察天皇之色以對言、長者多經寒暑、既爲成人、更無悒矣、唯少子者未知其成不、是以少子甚憐之、天皇大悅……、立菟道稚郎子爲嗣、即日任大山守命令掌山川林野、以大鷦鷯尊爲太子輔之、令知國事」トアル事ニツキテ、伴信友氏ノ中外經緯傳ニ云「その時稚郎子は、いまだ弱くておはしつる趣なるに、書紀に四十年の事としてしるされたるは、心得がたし、さるは、この皇子の御享年、書どもに見えざれば、詳ならねど、十五年に阿直岐が參來れる時、かれを師として物習ひ給ひたりとみえたるを、しばらく十五の御時とさだめて、推考るに、御詔別ありける四十年は、四十歲になり給へれば、此皇子の事をおもほしこめて、長與少孰尤など問はせ給ふべきにあらず。」

第七　仁德天皇ノ御年ハ、紀ニ闕ケタレドモ、記ニハ御年捌拾參歲トアリ。記ノ異本(慶長寫本、曼珠院本、寛永刊本等)ニハ、御宇捌拾參歲トアレドモ、記ニ在位年數ヲ擧ゲタルハ、皆治天下幾歲トアリテ、御宇ト書キタル例ナケレバ、宇ハ年ノ誤寫ナルコト明ケシ。此ノ天皇ト同日ニ生レシト云ヘル平群ノ木菟ノ宿禰ノ、百濟ニ使シタルハ、應神天皇即位三年ニアリ。勅命ヲ帶ビテ海外ニ使スルガ如キ重事ハ、幼年ノ人ノ辨ジ得ベキ事ニ非ザレバ、木菟ノ生レシハ、應神天皇即位ノ前、少クトモ、十餘年前ニアルベシ。然ラバ木菟ト同年ナル仁德天皇ノ即位ノ時ハ、御年既ニ六十ニ近ク、在位二十餘年ニシテ崩ジ給ヘル割合ナリ。然ルニ紀ハ、在位八十七年トシタレバ其ノ享年ハ、少クトモ百四十餘歲トナリテ、記ト合ハズ。

第八　履中天皇ハ、壽七十歲トアレバ、仁德天皇二十四年ニ生レ給ヒシナリ。然ルニ仁德天皇七年ニハ、既ニ去來穗別ノ尊(即履中天皇)ノ爲ニ壬生部ヲ定メ給ヒシコトアリ。黑羽本日本紀ニハ、壽八十七歲トアリテ、恰モ仁德天皇七年ニ生レ給ヘル割合トナレルハ、年紀ノ不都合ニ心付キテノ改竄ナルベシ。

第九　反正允恭二帝ノ御年ハ、紀ニハ闕ケタレドモ、古事記ニ反正天皇御年陸拾歲、允恭天皇御年漆拾捌歲トアルニ據レバ、反正天皇ハ、仁德天皇四十年ニ生レ給ヒ、允恭天皇ハ、其ノ六十四年ニ生レ給ヒシナリ。然レドモ御母磐之媛ノ命ノ崩ジ給ヘルコトハ、仁德天皇三十五年ニ見ユレバ、二帝ノ生レ給ヒシハ、其ノ前ニアリシコト明ケシ。又前ニ引ケル應神天皇ト大鷦鷯尊(仁德天皇)トノ御問對ヲ見ルニ、仁德天皇ハ、既ニ應神天皇

在位ノ時ニ、長子少子ナドアマタノ御子ヲ持チ給ヘル趣ナルニ、カノ御詔別アリシ年ハ、紀ニハ四十年トアレドモ、中外經緯傳ニ「記紀に見えたる御問對の趣をよみあぢはふるに、四十年に係て記されたるは、決く訛にて、十五年に阿直岐が參れる事の條に、また二十八年の條にも、然書されたるは、其時の御うへもて記せる文にて、かの十五年より前に御詔別ありて、太子として日嗣と定め給ひたりしなるべし」トアリ。コノ說ニ據レバ、仁德天皇ノ諸皇子ノ生レ給ヒシモ、カノ十五年ノ前ニアリテ、履中反正二帝ノ御年ハ、少ナクトモ百七十餘歲トナリテ、紀ノ履中天皇ノ御年、記ノ反正允恭二帝ノ御年トハ、皆百三四十歲、允恭天皇ノ御年ハ、イタク相違セリ。

第十　記傳朝倉ノ宮ノ卷（四十二ノ五十五丁）ニ此ノ天皇（雄略）の紀年、いと不審し。まづ書紀も信がたき事あるは、大后若日下ノ王は仁德天皇の皇女に坐スを、安康天皇の元年に、大長谷命のために聘ふとある其年は、大長谷命は、卅七歲にあたり、若日下王は、六十餘歲になり賜ふべし。たとひ御父天皇崩坐年に生レ坐りとしても、五十六歲なれば、聘賜ふべき御齡にあらず。又此天皇、允恭天皇の七年に生レ坐て、位に坐こと廿三年にて崩坐ては、彼ノ引田ノ部赤猪子が事なども、年ノ數合ハざればなり」トアリ。「安康天皇の元年に大長谷ノ命は卅七歲」ト云ヘルハ、允恭紀七年ニ、忍坂ノ大中姬ノ皇后「產大泊瀨天皇」トアルニ依リテ計ヘタルナリ。赤猪子ガ奇談ハ、姑ク置キテ、草香ノ幡梭皇女（即若日下ノ王）ノ、雄略天皇（即大長谷命）ノ皇后ニナリ賜ヘルコトハ、記紀共ニ同ジケレバ、雄略天皇ノ生レ給ヘルハ、必允恭天皇七年ヨリハ前ニアルベク、又仁德天皇ノ御世ト雄略天皇ノ御世トノ間ノ異ノ年數ハ、紀ノ如クハ長カラザルベシ。

六　日本紀ノ年紀ニ依レバ、長壽ノ人多キ事

長壽ノ人ト云ヘバ、昔ヨリ第一ニ武內ノ宿禰ノ大臣ヲ推ス。此ノ大臣ノ事ハ、日本紀仁德天皇ノ大御歌ニ「汝こそは、世の遠人、汝こそは、國の長人」トヨマセ給ヒ、古事記ニモ「汝こそは、世の長の人」トアリテ、大臣ノ答歌ニモ「我こそは、世の長の人」トアレバ、百歲餘リニモ至リタル人ナルベシ。サレドモ古事記ニモ日本紀ニモ、其ノ壽ヲ載セザレバ、幾歲ト云フコトハ、知ルベキ由ナキヲ、後世ノ好事者、色々ニ臆推シテ、二百八十歲（水鏡）二百九十五歲（公卿補任一說）三百餘歲（宋史日本傳ニハ三百九歲、公卿補任ニハ三百十二歲、海東諸國記ニハ三百四十歲、石淸水祉司系圖ニハ三百六十歲、愚管抄ニハ三百八十餘歲ノ類）ナド言ヒハヤスハ、其ノ歷事シタル景行成務仲哀應神仁德ノ五朝、年代甚長キニ由リテ起レル說ナリ。今日本紀ノ年紀ヲ捨テ、考フレバ、カヽル法外ナル長壽ニ至ラズトモ、高祖ヨリ玄孫マデナル五世ノ君ニ歷事スルハ、有ルベカラザル事ニ非ズ。成務紀ニ「天皇與武內宿禰同日生之」トアリ、又仲哀天皇ハ、成務天皇ノ御兄ノ長子ナレバ、成務天皇ト御年ノ差少カルベシ。カクテ仁德天皇ハ、仲哀天皇ノ御孫ナレバ、武內ノ宿禰モシ百歲ノ壽ヲダニ保チタラバ、仁德天皇ノ三四十歲ニナリ給ヘル頃マデ世ニ在ランコトハ、異ムニ足ラザル事ナリ。

苟モ日本紀ノ年紀ヲ信ゼバ、此ノ大臣ノミナラズ、他ニ幾人モ法外ナル長壽ノ人アルベシ。今其ノ二三ノ例ヲ擧ゲンニ、孝靈天皇ノ皇女倭迹迹日百襲姬ノ命ハ、御父ノ崩後百二十七年、崇神天皇ノ十年ニ、和珥坂ノ少女ノ歌ニ由リテ、武埴安彥ノ謀反ヲ覺リマシヽコト見エ、又其ノ下文ニ、「是後倭迹迹日百襲姬ノ命、爲大物主神之妻云々」トアリ。百襲姬命ノ弟彥五十狹芹彥ノ命、亦名吉備津彥ノ命ハ、同ジ年ニ、四道將軍ノ一人トシテ、西道ニ遣サレ、其ノ後同帝ノ六十年ニ、武淳河別ノ命ト共ニ、出雲ノ振根ヲ誅殺セリ。百襲姬命ノ御兄孝元天皇生レ給ヒシハ、孝靈天皇十八年ニシテ、父皇ノ御年既ニ七十歲ニナリ給ヘル時ナレバ、百襲姬ノ命吉備津彥命ノ生レシ年モ其レヨリ甚ダ後レタルコトハアラザルベシ。然ラバ百襲姬命ハ、百七八十歲ニテ大物主

神ノ妻ト爲リ、吉備津彥命ハ、二百二三十歳ニテ猶征討ノ勞ヲ取リシナラン。

景行天皇ノ皇后播磨稻日ノ大郎姬ハ、古事記ニ「吉備ノ臣等之祖若建吉備津日子之女」トアリテ、（若建吉備津日子ハ、大吉備津日子命ノ弟ニシテ、孝靈紀ニハ稚武彥命トアリ。）記傳二十六ノ四丁ニ「此ノ（若建日子）命ハ、孝靈天皇ノ御子、景行天皇ハ、彼ノ天皇ノ五世御孫に坐せば、其ノ御女に娶坐むことは、時代違へるが如くなれども、上代の人は、多く壽長かりしかば、深く疑ふべきに非ず。倭建命の東往の御從せし吉備建日子も、姓氏錄に依るに、此命の御子なるぞかし」ト云ヘリ。コノ皇后ノ入內ノ時ハ、未ダ年弱クテマセリトスレバ、若建日子命ノ、コノ皇后ヲ生メル時ハ、其ノ年既ニ三百歳ニ近カリケン。若又コノ皇后モ吉備建日子命モ、若建日子命ノ未ダ年老イザリシ時ニ生レマセリトスレバ、皇后ノ入內ノ時ハ、御年三百歳ニ近ク、吉備建日子ノ命ノ、倭建命ノ東征ノ御從セル時ハ、既ニ三百歳ヲ踰エタリケン。但吉備建日子命ハ、姓氏錄（左京皇別道下朝臣、右京皇別廬原公ノ條）ニ稚武彥ノ命ノ孫トモアリテ、其ノ說一定セズ、又記傳前文ノ續キニ「又若建吉備津日子ト吉備建日子ト、父子御名の似たるを以テ思ふに、此ノ間の世次にも似たる名ありて、二世三世の一世に混ひたらむも知リがたし」ト云ヘル如クナレバ、古事記ニコノ皇后ヲ若建日子ノ女トシタルハ、數世ノ孫ナルヲ混ヒタルニモアルベシ。凡テ若建日子ノ命ノ世系ニハ、コノ外ニモ猶疑ハシキ事ドモアレバ、コレラノ不都合ハ、日本紀ノ年紀ノ延長シタル故ノミニハ非ズ。

三輪ノ君ノ祖大友主ノ命ハ、垂仁天皇三年ニ、命ヲ受ケテ、天日槍命ヲ迎ヘタルコトアリシガ、其ノ後二百二十六年、仲哀天皇九年ニ大三輪ノ大友主ノ君ト見エタルヲ、集解ニ「蓋父子傳名而同者」ナド云ヘレドモ、然ル證モ見エズ。和珥ノ臣ノ祖難波根子武振熊ノ命ハ神功皇后攝政元年ニ、武內宿禰大臣ト共ニ忍熊ノ王ヲ討チテ、大功ヲ建テシ人ナルガ、其ノ後百七十六年、仁德天皇六十五年ニ、飛彈ノ賊宿儺ヲ誅殺セリ。紀ノ年紀ニヨレバ、此モ二百歳ノ老將軍ナルベシ。倭ノ直麻呂ノ弟吾子籠ハ、應神天皇ノ末年ニ韓國ニ遣サレタリシ人ナルガ、其ノ後百八年、允恭天皇七年マデ倭ノ直吾子籠屢見エ、又其ノ後四十年、雄略天皇二年ニ大倭ノ國ノ造吾子籠ノ宿禰ト見エタルモ、コノ人ナレバ、コレモ、二百歳ニ近カリシ人ナルベシ。

此ノ如キ長壽ノ人ハ、皇別神別ナル皇國固有ノ種族ノミニ限ラズ、支那三韓ヨリ歸化シタル諸蕃ノ種族ニテモ、一タビ國典ノ記載ニ上レバ、概長壽ノ人トナルナリ。秦始皇ノ裔ト云ヘル功滿王ハ、姓氏錄左京諸蕃太秦ノ公ノ宿禰ノ條ニ「足ツ仲ツ彥ノ天皇（諡仲哀）八年來朝」ト見エ、三代實錄仁和三年時原ノ宿禰春風ノ上言ニハ「帶ツ仲ツ彥天皇四年歸化入朝」トアリ。其ノ子弓月ノ君（姓氏錄ニハ融通王又ハ弓月王）ハ、應神天皇十四年ニ歸化セシコト、應神紀ニモ姓氏錄ニモ見エタリ。然ルニ雄略紀十五年ノ條ニ「秦民分散云々、詔聚秦民賜ノ秦ノ酒公」トアル酒公ハ、姓氏錄右京諸蕃秦ノ忌寸ノ條ニ「功滿王ノ三世ノ孫」ト云ヒ、山城國諸蕃秦ノ忌寸ノ條ニハ、弓月王ノ次男普洞王ノ子トアレバ、祖父ヲ去ルコト、百八十餘年、曾祖父ヲ去ルコト、二百七十餘年ニシテ、父子ノ年ノ差ノミニテモ、平均九十餘歳ナラン。其ノ長壽ナルコト推シテ知ルベシ。

漢ノ高祖ノ裔ト云ヘル王仁ハ、應神天皇ノ十六年ニ來朝シ、漢ノ靈帝ノ裔ト云ヘル阿知ノ使主父子ハ、同二十年ニ歸化セリ。王仁ハ、世ニ秀デタル博士、阿知ノ使主ハ、其ノ子都加ノ使主ト十七縣ノ民トヲ率テ參レリト云ヘレバ、孰レモ年長ケタル人ナルベシ。然ルニ其ノ後一百十餘年、仁德天皇ノ崩リマセル年、住吉ノ仲ツ皇子ノ亂ニ、漢ノ直ノ祖阿知ノ使主、皇太子ヲ扶ケ奉リシコト、履中紀ニ見エ、又古事記履中天皇ノ段ニ、阿知ノ直ヲ始メテ藏ノ官ニ任タマヒシコト見エ、古語拾遺ニハ、同ジ御世ニ「齊藏之傍、更建內藏、分收官物、仍命阿知使主與百濟博士王仁記其出納、始更定藏部」トアリ。コハ、履中紀六年ノ條ニ、「始建藏職、因定藏部」トアル時ノ事ナリ。然ラバ阿知王仁二人ノ享壽ハ、少クトモ、百四五十歳ナルベシ、又雄略紀七年、二十三年、清寧紀ノ初ナドニ、東ノ漢ノ掬ノ直ト見エタルハ、即都加ノ使主ナレバ、コノ人ハ、歸化ノ年ヨリ百九十四年ノ後マデ生

存セリ。タトヒ皇國ハ、燕齊海上怪迂ノ士ノ羨ミ望ミタル蓬萊島ナリトモ、昔ヨリ百歲ヲ以テ上壽トシタル秦漢ノ遺民、一タビ此ノ土ヲ蹈メバ、忽チ武內ノ大臣ノ流亞トナルハ、怪ムベキ事ナラズヤ。

第二章　曆法ノ始マリ

古ヘ文字モ無ク曆モ無カリシ時代ニハ、年月日ト云ヘル事モ、唯大ラカナル定マリノミナリケンコトハ、本居氏ノ眞曆考ニ詳カニ辨ゼラレタル如クニテ、年ノ始モ、季ノ始モ、キハヤカニ某日ヨリトハアラズ、月次モ日次モナク、又四季ノ運リニハツカデ、天ナル月ノ盈虧ニヨレル月ハアレドモ、月々ノ名モナク、何レノ月ヲ始メ終リト云フ次第モナク、年ノ來經トハ別事ナルヲ一ツニ合ス業ナドモナクテ、唯天地ノアルガマヽニテゾアリケル。

應神天皇ノ時、百濟國ヨリ阿直岐王仁等ノ儒士來朝シ、皇太子菟道稚郎子ノコノ二人ヲ師トシテ、典籍ヲ習ヒ給ヒシコトアリ。是レヨリ文學漸ク興リテ、履中紀ニハ、「四年秋八月、始之於諸國置國史、記言事、達四方志」トアレドモ、曆ノ事ハ未ダ見エズ、欽明紀十四年ニ至リテ、「六月遣內臣使於百濟云々、別勅醫博士易博士曆博士等、宜依番上下、令上件色人正當相代、年月宜付還使相代、又卜書曆本種々藥物可上送」トアリテ、同十五年ニ、曆博士固德王保孫ト云ヘル人來朝シタルコト見ユ。コレ皇國ニ曆法ノ傳ハリシ始メナリ。其ノ後推古天皇十年ニ及ビテ、紀ニ「冬十月、百濟僧觀勒來之、仍貢曆本及天文地理書並遁甲方術之書也、選書生三四人以俾學習於觀勒矣、陽胡史祖玉陳、習曆法、大友村主高聰、學天文遁甲、山背臣日並立、學方術、皆學以成業」ト見エ、カクテ同十二年ヨリ、其ノ曆ヲ用ヒ給ヒ、始メテ天下ニ頒チ行ハセ給ヒシナリ。其ハ政事要略ニ儒傳ヲ引キテ、「以小治田朝十二月歲次甲子正月戊戌朔、始用曆日」ト云ヒ、伊呂波字類抄ニ引キ載セタル本朝事始ニモ、シカ云ヘリ。紀ニハ、是日ニ「始賜冠位於諸臣、各有差」トノミアリテ、始用曆日ノ事見エズ。カヽル重事ヲ何故ニ記シ洩サレタルト云フニ、紀ハ人皇ノ始メヨリ日次干支マデモ委シク記シテ、古クヨリ曆日ヲ用ヒラレタル樣ニ作リ爲シタレバ、此ノ朝ニ至リテ、始メテ用フトハ云ヒ難クテ、殊サラニ略カレタルナラン。

サレバ皇國ニテ、曆法ヲ習ヒ知リテ、曆本ヲ作レルハ、推古ノ朝ニ始マリタレドモ、コレヨリ以前ニテモ、百濟ヨリ奉レル曆本ヲ其ノ儘ニ用ヒ給ヘル事ハ有リシナルベシ。又百濟朝貢以來ハ、支那三韓ノ士人歸化セル者、甚ダ多ク、概皆文書ヲ知リ、履仲朝ノ史官モ、此等ノ人ヲ用ヒ給ヒシナルベケレバ、當時ノ事跡モ、唯口々ニ相傳フルノミナラデ、諸ノ史氏ノ記錄ニ入リタル者モアルベシ。但當時ノ記錄ハ、年ヲ紀スルニ、天皇即位ノ年數ヲ用フルコトナク、唯歲ノ干支ノミヲ用ヒタルガ故ニ、某干支年ハ某天皇ノ若干年ニ當レルカハ、容易ニ知リ難キ者モ有リケラシ。

カクテ記紀撰修ノ時ニ當リ、修史ノ材料トナルベキ者ハ、口誦ノ傳說ト諸種ノ記錄トニシテ、記ハ、專ラ傳說ニ依リタレバ、歲時月日ヲ擧ゲタル所、甚少ク、叙事モ亦簡略ナリ。紀ハ、傳說ト記錄トヲ併セ採リテ、纂修セラレタレバ、叙事詳密ニシテ、記ノ稍詳ナル所、即顯宗天皇以前ノミヲ比較シテモ、既ニ四五倍ニ上レリ。然ルニ此ノ書ハ支那ノ正史實錄ノ體ニ倣ハシタレバ、事ヲ叙スルニ、年月ヲ揭ゲザルヲ得ズ。引用セル記錄中ニ年月ノアリシ所ハ、其儘用ヒテ、唯干支紀年ヲ數字紀年ニ改メタルノミナレドモ、上代ニ遡ルニ從ヒ、年月ノ知レザル所、益多カルベケレバ、此等ハ、皆撰者ノ意ヲ以テ、年月ヲ造リ成シテ、史體ヲ裝飾セリト見ユ。

古代ノ干支紀年ノ事ニ付テハ、舊修史局ノ詳細ナル考證アリ。今文學博士星野恒氏ガ嘗テ摘錄セル者ヲ左

ニ引用ス。

「古昔年號ナキ以前、年月ニ係ケテ事ヲ記スルニ、世人ハ、某宮馭宇天皇若干年ト書キシト思フナレド、左ニアラズ。皆干支ヲ以テ年ヲ紀セシナリ。今其ノ證ヲ擧グンニ先ヅ金石器物ノ銘文ニハ、法隆寺ナル藥師佛造像記ノ「池邊大宮治天下天皇大御身勞賜時歲次丙午年」ハ用明天皇元年ヲ云ヒ、銅像釋迦後光銘ノ「甲寅歲三月二十六日」ハ、推古天皇二年ヲ云ヒ、觀世音菩薩造像記ノ「歲次丙寅正月生十八日」ハ、同天皇十四年ヲ云ヒ、繡帳銘ノ「歲在辛巳十二月二十一日癸酉日入」ハ、同天皇二十九年ヲ云ヒ、立像釋迦如來後背銘ノ「戊子年十二月二十五日」ハ、同天皇三十六年ヲ云ヒ、好古小錄ニ載スル船氏墓誌ノ「阿須迦天皇之末歲次辛丑十二月三日庚寅」ハ、舒明天皇十三年ヲ云ヘル等ナリ。又典籍ニ記シタルハ、古事記ノ崇神天皇ヨリ推古天皇マデノ崩年、上宮聖德法王帝說ノ欽明天皇ヨリ孝德天皇マデノ記事、皆干支ヲ以テ年ニ係ケタリ、大化建元以後ニ至リテモ、年號ナキ時ノ記事ハ、皆干支ヲ以テ年ヲ紀セリ。其ノ證ハ、金石文ニハ、好古小錄ニ載スル小野ノ毛ノ人ノ朝臣ノ墓誌ノ「飛鳥淨御原宮天下天皇御朝云々歲次丁丑年十二月上旬」ハ、天武天皇六年、上野國山名村碑ノ「辛巳歲集月三日」ハ同天皇十年、博物館ニ藏スル美努岡萬連墓誌ノ「飛鳥淨御原天皇御世甲申年」ハ、同天皇年十三年、又好古小錄ニ載スル河內國石河郡形浦山碑ノ「飛鳥淨原大朝庭云々己丑年十二月二十五日」ハ持統天皇三年、又妙心寺鐘銘ノ「戊戌年四月十三日壬寅」ハ文武天皇二年ヲ云ヒ、其ノ書ニ見エタルハ、播磨風土記ノ「淨御原朝庭甲申年七月」ハ、天武天皇十三年ヲ云ヘル等ナリ。常陸風土記ノ「難波長柄豐前大朝馭宇天皇之世己酉年」ハ、孝德天皇大化五年、「難波長柄豐前大宮馭宇天皇之世癸丑年」ハ、同天皇白雉四年ヲ云ヘル類ハ、年號アル時ニモ、猶古來ノマヽニ干支ヲ以テ年ヲ紀セリ。大安寺流記資財帳ニ歷代佛像封戶等ヲ納メラレシ事ヲ記セル內ニ、「前岡本宮御宇天皇以庚子年」ハ、舒明天皇十二年、「袁智天皇坐難波宮而庚戌年」ハ、孝德天皇白雉元年、「飛鳥淨御原宮御宇天皇歲次癸酉」ハ天武天皇二年、「飛鳥淨御原宮御宇天皇甲午年」ハ持統天皇八年ヲ云ヘルナド、皆干支ニテ記シ、「平城宮御宇天皇以養老二年歲次壬戌云云」ヨリ以後ハ、始メテ年號某年ヲ以テ記セリ。サテ又異樣ナル年號ニテ記セル者アリ。釋日本紀ニ引キタル伊豫國風土記ニ載スル湯岡碑ノ「法興六年十月歲在丙辰」ハ推古天皇四年、法隆寺ナル金堂釋迦如來造像記ノ「法興元三十一年歲次辛巳十二月」ハ、同天皇二十九年ナリ。此類猶多シ。此等ノ諸證ニ據レバ年號紀年ノ外ハ皆干支ヲ以テ年ヲ記シ、絕エテ某天皇若干年ト稱スル者ナシ。タヾ藥師寺東塔擦銘ニ、「維淸原宮馭宇天皇即位八年庚辰之歲建子之月」トアルハ（通世云、庚辰歲ハ、日本紀ニ據レバ、天武天皇九年ナルヲ、此年ノ銘ニ八年ト云ヘルハ、天皇ノ二年癸酉ノ歲ヲ以テ、元年ト立テタルナリ。天武紀ノ元年壬申ノ歲ハ、實ハ弘文天皇ノ御世ナルヲ、後ノ御世ニ至リ、弘文天皇ヲ御代ノ數ヨリ除キテ、其ノ年ヲ天武天皇ノ元年ニ改メタル由ハ伴信友氏ノ長等ノ山風ニ、委シキ考證アリ）前ノ諸證ト異ナレドモ、狩谷棭齋ノ考ニ、コノ擦銘ハ文武天皇ノ時鑄造シタル者ナリトイヘバ、跡ヨリ追書セルモノニテ、前例ノ限ニアラズ。日本書紀ニ引ケル百濟記ニ、「壬午年、新羅不奉貴國」トアルハ、神功皇后攝政六十二年、「蓋鹵王乙卯年冬、狛大軍來攻大城」ハ、雄略天皇十九年、百濟新撰ニ「己巳年、蓋鹵王立」トアルハ、允恭天皇十八年カ、マタ「辛丑年蓋鹵王遣王弟琨支吾君向大倭」ハ雄略天皇五年、百濟本記ニ「大歲辛亥三月、師進至安羅、營乞乇城」トアルハ、繼體天皇二十五年ニシテ、何レモ干支ヲ以テ年ヲ紀シ、某王若干年トイハズ。百濟ハ皇國ニ忠誠ヲ致シ、貢聘相繼ギ文物ヲ傳ヘシコト、舊史ニ歷見スレバ、本邦ノ、干支ヲ以テ年ヲ紀セシハ、或ハ百濟ノ例ニ依ラレシカ。（以上局說採要。）

中根元圭ノ皇和通曆ニ「持統天皇遡至神武天皇、歲月支干、昭然可見、而推諸異邦諸曆、率多牴牾、伏稽崇神天皇時、遠荒不奉正朔遣六師討之、載有明文、則知吾邦神聖開基自有若天授民之教焉、世多慽曆古香邈湮滅不傳也、今特因史籍支干朔望之所在、推而求之、則其法具存矣、蓋千三百餘年間、三更斗憲、神武天皇

東征甲寅以至仁德天皇十年壬午、凡九百八十九年、一法、今號曰上古曆、同十一年癸未以至皇極天皇元年壬寅、凡三百二十年、一法、今號曰中古曆、同二年癸卯、以至持統天皇五年辛卯、凡四十九年、一法、今號曰晩古曆」ト云ヘリ。此ノ元圭ト云ヘル人ハ、曆道ニ卓レテ精シキ人ト聞ユレバ、日本紀ノ支干朔望ノ記載ニ三樣ノ差アルハ、サル事ナルベケレドモ、此レハタ上古ニ曆法アリシ證トハ爲ラズ。伴信友ノ日本紀年曆考ニモ「いはゆる上古中古晩古の三曆を神聖開基若天授民之教といへるは、そのかみの國史を熟く讀みて、世のさまを稽へわきまへざりつるが故に、曆法の異なるに惑ひ、書紀の崇神天皇の御世に遠荒不奉正朔と記されたる、此紀の例の漢文の潤飾の正朔の語に泥めるにて、かたはらいたき說なり」ト云ヘリ。

神武天皇以來ノ支干朔望ノ記ハ、推古天皇ノ時始メテ用ヒ給ヘル百濟ノ曆法ニ基キテ、倒ニ推シ上ゲタルニテアルベケレドモ、完全ナル長曆ノ有ラザリシニ由リテ、置閏ノ法ニ小差ヲ生ジテ、仁德天皇十年前後ニ、支干朔望ノ推算ヲ異ニシタルマデノ事ニシテ、上古曆中古曆ナド云ヘル言痛キ名稱ヲ附クベキニ非ズ。紀ノ撰者ガ年數ノ繰リ方ニ疎カナリシコトハ、列聖ノ崩年ト立太子ノ所ニ記シタル御年ト多クハ合ハザルヲ見テモ知ラルレバ、逆推ノ晦朔ニ違算ヲ生ジタルコトハ、何ゾ怪ムニ足ラン。

皇極天皇二年ヨリ曆法ノ改マリシコトハ、伴信友モ「百濟改曆の法なりしか、又はこなたにて改めさせ給へるか、考ふべき由なし」ト云ヘルガ如ク、紀ニモ明文ナケレバ詳カナラズ。

平田篤胤氏ノ天朝無窮曆ノ說ニ至リテハ、神字日文傳ト同ジク、最モ附會ニシテ、論ズルニ足ラズ。

第三章　辛酉革命ノ事

日本紀ニ記シタル上代ノ年月ハ、後世ノ逆推ニ出デタルコトハ前章ニ述ベタルガ如シ。カクテ神武天皇ノ即位元年ヲ、推古天皇以前一千二百餘年ノ辛酉ノ歲ニ置ケルハ、元來事實ニモ言傳ヘニモ基キタルニ非ズ、辛酉革命ト云ヘル讖緯家ノ說ニ據リタル者ナリ。革曆類ニ載セタル、昌泰三年庚申十一月二十一日文章博士三善宿禰淸行ガ預論革命議ニ「臣竊依易說而按之、明年二月、當帝王革命之期、君臣剋賊之運、凡厥四六二六之數、七元三變之候、推之漢國、則上自黃帝、下至李唐、曾無毫釐之失、考之本朝、則向上始自神武天皇、向下至于天智天皇、亦無分銖之違、然則明年事變、豈不用意乎云云、變革之際、必用干戈、蕩定之中、非無誅斬、何者帝王革命、此周易革卦之變也、按革卦、離下兌上也、離爲火、兌爲金、金雖有從革之性、非得火則不變、故金火合體、上下相害、版蕩之理已窮、君臣之位初定、國之不祥、無甚於此」トテ、群臣ヲ勅勵シテ、戒嚴警備セラレン事ヲ願ヒ、又昌泰四年辛酉二月二十二日同人ガ請改元應天道之狀ニ「一、今年當大變革命年事、易緯云、「辛酉爲革命、甲子爲革令」鄭玄曰、「天道不遠、三五而反、六甲爲一元、四六二六相乘、七元有三變、三七相乘、廿一元爲一蔀、合千三百廿年」春秋緯云「天道不遠、三五而反」宋均注曰、「三五、王者改代之際會也、能於是際、自新如初、則道無窮也」詩緯云、「十周參聚、氣生神明、戊午革運、辛酉革命、甲子革政」注曰、「天道卅六歲而周也、十周、名曰王命大節、一冬一夏、凡三百六十歲、一畢無有餘節、三推終則復始、更定綱紀、必有聖人改世統理者、如此十周、名曰大剛、則乃三基會聚、乃生神明、神明乃聖人改世者也、周文王戊午年、決虞芮訟、辛酉年、靑龍銜圖出河、甲子年赤雀銜丹書而至、武王伐紂、戊午日、軍度孟津、辛酉日、作泰誓、甲子日入商郊」謹按、「易緯以辛酉爲蔀首、詩緯以戊午年爲蔀首、今主上以戊午年爲昌泰元年、其年又有朔旦冬至、故論者、或以爲應以戊午爲受命之年、然而本朝自神武天皇以來、皆以辛酉爲一蔀大變之首、此事在文書未出之前、天道神事、自然符契、然則雖有兩說、猶可依易緯也、又詩緯以十周三百六十年爲大變、易緯以四六二六爲大變、二說雖異、年數亦同、今依緯說、勘合和漢舊記、神倭磐余彥天皇從

筑紫日向宮、親帥船師東征、誅滅諸賊、初營帝宅於畝火山東南地橿原宮、辛酉年春正月即位、是爲元年、四年甲子春二月、詔曰諸虜已平、海內無事、可以郊祀、即立靈畤於鳥見山中云云、謹按日本紀、神武天皇、此本朝人皇之首也、然則此辛酉可爲一蔀革命之首、又本朝立畤下詔之初、又在同天皇四年甲子之年、宜爲革命之證也」ト云ヒテ、和漢ノ史書ニ見エタル辛酉甲子ノ年ノ變事ヲ引キ合セ、推古天皇九年辛酉ニハ「聖德太子、初造宮于斑鳩村、事無大小、皆決太子、是年有伐新羅救任那之事」ヲ引キ、其十二年甲子ニハ、冠位ヲ制シ憲法ヲ定メ給ヒシヲ以テ、甲子革令ノ驗トナシ、カクテ神武天皇即位辛酉ノ年ヨリ齊明天皇六年庚申ノ年マデ千三百廾年ヲ以テ一蔀トシ、同七年辛酉ノ年ヲ第二蔀ノ首トシテ、其ノ年天皇崩ジ給ヒテ、天智天皇位ニ即キ給ヒ、ソレヨリ三年ヲ經テ、甲子ノ年ニ冠位ヲ換ヘ、諸ノ氏ノ上ニ兵器ヲ賜ヒ、民部家部ヲ定メ給ヒ、唐ノ使郭務悰等來朝シタル事ドモヲ引キテ、革命革令ノ徵ナリト論ジ、サテ「謹按、自天智天皇即位辛酉之年、至于去年庚申、合二百卌年、此所謂四六相乘之數已畢、今年辛酉、當於大變革命之年也云々、淸行去年以來、陳明年當革命之年、至于今年、徵驗已發、初有知天道有信聖運有期而已トテ、改元アランコトヲ奏議シタルコト見ユ。カクテ此奏ニ由リテ、ソノ年七月十五日延喜ト改元アリキ。天智天皇ノ即位ハ、天智紀ニ。「七年（戊辰年）春正月丙戌朔戊子、皇太子即天皇位」其註ニ「或本云、六年歲次丁卯春三月即位」トアリテ、辛酉年ヨリハ六七年ノ後ニアレドモ、實際天下知シメシタルハ、辛酉年ヨリノ事ニシテ、ソノ年ニ白鳳ト改元アリシコト、水鏡、如是院年代記、海東諸國記等ノ諸書ニ見エタレバ、辛酉ヲ以テコノ天皇ノ即位元年トシタル傳ヘモアリシナルベシ。「至于今年、徵驗已發」トハ、ソノ年正月菅原右大臣左遷ノ變アリシヲ謂ヘルナリ。此ヨリ後辛酉甲子ニ當レル年ニハ、必改元アリ、其ノ度每ニ、紀傳明經曆算陰陽諸道ノ博士助敎ヲシテ、革命革令ノ當否ヲ勘奏セシメ給フコト、爲レリ。

伴信友ノ日本紀年曆考ニ「上古の曆日のおもむきは、眞曆考にいはれたる、まことにさる事なるべきに、日本紀に記されたるもろこし風の年紀曆日は、いかにして定められけむ」トテ、淸行朝臣ノ請改元之狀ヲ引き、「さるはいと信がたき說ながら、もろこしにて、舊くより然る說をたてゝいひさわげるものありしなり。今其の論說につきて、さらに按ふるに、神武紀の首章に、東ノ征として幸ませる事を記して、始て年の干支を擧て、是年也大歲甲寅と記し、これより干支を擧て年紀を記されたり。さてその甲寅の干支も、もろこしにて、爾雅に十干先甲、十二支先寅曰攝提格、淮南子に天維建元常以寅始也、三五歷記に歲起攝提、元氣肇始、有神人號天皇といへる趣の說に合へるに似たり。又同紀戊午年に、御兄五瀨命軍中に薨給ひ、また饒速日命、長髓彥を殺して、歸順ひ奉りたる由記されたる事どもは、いはゆる革運ノ年ともいはゞいふべきに似たり。故つら〳〵考ふるに、そのかみもろこしにて作りたる干支を世に用ひられることのあるべくもあらず、年次月次日次の定まりすら、もはら後のごとくにはあらざるべきことわりなるに、件の甲寅戊午辛酉甲子の年に當りて、御所爲の合へるさまにきこゆるは、もろこしの曆法を用ひらるゝ御世となりて、それより上つかたの事どもは、曆によりたる年月日を當て書記せるものゝ、やうやくにいできたりけむを、はるかに遠き御世の古傳說は、近くさだかなる御世よりかづ〳〵推のばせて、神武天皇の御上におしおよびては、其かみの御所爲の次第にあはせて、件の四干支を當て、もろこしの星運の說に合せて、年紀をとゝのへられつるものなるべし。但しそは日本紀を撰ばるとて、あらたに然ものせられたるにか、續紀元正天皇の養老五年二月の詔に「世諺云、歲在申年、常有事故、此如所言云々」と詔へることみえたり。此前年、日本紀奏進ありき。そのかみはやくより、歲につけて吉凶などさだむる說のありて、世諺にもいふばかりなりし御世のさま、はたおもひ合すべし。扨かく考出たる事は、淸行朝臣の、革命革令の星運の說を主張して、神武天皇の御世の趣に牽き合せられたる說によりて、己は、反りて上古の年紀を定められたりけむ趣を推考へたるなり。またはやくより史などの、然年紀を作りて當たる書のありしにてもあるべし。さるははやく神功皇后の御時より、かづ〳〵漢文字を用ひ給ひ、年次月日などをば、もろこしざまの韓國の正朔を取

用ひ給ひたるめれば、其定に書記せるものもありけむを、古事記にはその御世のころはさらなり、うけはりてもろこしざまの暦を行はせ給へる推古天皇の御世まで記さしめ給へるに、年紀月日に係てきはやかに記ける事の、ひとつも見えたることなきは、天武天皇の大御慮に、ふかくおもほす趣ありて、みながら年紀月日をも記させ給はざりつるなるべし。古事記序に「天皇詔之、朕聞、諸家之所賫帝紀及本辭、既違正實、多加虚僞、當今之時、不改其失、未經幾年、其旨欲滅、斯乃邦家之經緯、王化之鴻基焉」とみえたるは、既に前世の事を年紀月次などを推量りて定め記せる書のありけるをも、「既違正實、多加虚僞」とのたまへる中のひとつにて、よろづにおほらかに記させいふべき御心しらひなかりしかばなるべし。されどもろこし書に比べては、あまりにはかなげにて、あかぬ事におもはるべき世のさまなれば、さらに日本紀を撰ばしめ給ひ、もろこし書にきそひて、ことさらに年紀月日をも定め當てゝ、知らるゝかぎりはくはしく訂して、よろづに委しく記し給へるものなるべし」ト云ヘリ。誠ニ古史ノ祕密ヲ看破シタル論說ナリ。サレバ清宮秀堅ノ新撰年表ノ題言ニモ、「或云推古以前ノ紀年ハ、修史ノヲリ逆推シテ定メタルモノナリ。ソレユヱ謚號モ、推古ト稱スト。此ノ言理アルニ似タレドモ、日本紀ハ、當時史料數種ニヨラレ、千有餘歳用ヒ來レル正史ユヱ、一概抹殺シガタシ。故ニ姑ク舊ニヨリ、改メズ」ト云ヒテ、其ノ自註ニ「或書云神武天皇辛酉ノ即位ハ、易緯ニ辛酉革命甲子革令ト云フ說ニヨラレ、其年ヨリヨキホドニクリサゲシナルベレ。後來辛酉改元甲子改元等モ、コレニヨラレシコトヽ見ユ」ト云ヘル或書ハ、伴氏ノ年曆考ヲ指セルナルベシ。

伴氏ガ爾雅淮南子三五曆紀ヲ引ケルハ、谷川士清ノ書記通證ニ引カレタルヲ又引キタルニテ、十干先甲、十二支先寅ヲ爾雅ノ文トシタルハ、通證ヲフト讀ミ誤レルナリ。通證ニ云ヘル趣ハ、爾雅ノ釋天ニ十干ヲ記スルニハ、甲ヲ先トシ、十二支ヲ記スルニハ、寅ヲ先トシテ「太歲在甲曰閼逢、太歲在寅曰攝提格」トアリト云ヘルナリ、又「天維建元、當以寅始起」ハ、淮南子天文訓ノ語ニシテ、同篇ニハ「太陰元始、建于甲寅」云々」トモアリ、史記ノ曆書、漢書律歷志等ノ說ニ據レバ、天地ノ成立シ終リタル天皇太帝元年ノ歲首ハ、閼逢攝提格、即甲寅ノ冬十一月甲子ノ日、夜半朔日冬至ニ當リテ、七曜皆會シ、日月如合璧、五星如連珠ナリシヲ、曆家ハ、握先紀ト號シテ、曆元ト立ツル由云ヘリ。三五曆紀ハ吳ノ徐整ノ撰ニシテ、今ハ其ノ書佚シタレドモ、彼ノ語ハ太平御覽藝文類聚、徐堅ノ初學記等ニ引用セラレタレバ、通證ハソレラノ書ヨリ又引キタルナラン。神代紀發端ノ一節ハ、全ク淮南子ト三五曆紀トノ語ヲ採リテ、文ヲ成シタルヲ見レバ、太祖ノ大御業始メ給ヒシ年ヲ、「是年太歲甲寅」ト記サレタルハ伴氏ノ云ヘル如ク、淮南子三五曆紀ナドノ說ヨリ思ヒ附キ給ヒテノ事ナルベシ。

伴氏ノ論說ニツキテ猶考フルニ、古事記ニ「神倭伊波禮毘古命、與其伊呂兄五瀨命二柱坐高千穗宮而議、云坐何地平聞看天下之政猶思東行即自日向發幸御筑紫、故到豐國宇沙之時云云、自其處遷移而、於筑紫之岡田宮一年坐、亦自其國上幸而於阿岐之國之多祁理宮、七年坐、亦從彼國遷上幸而、於吉備之高島宮八年坐、故從其國上行之時經浪速之渡而泊青雲之白肩津。此時登美能那賀須泥毘古興軍待向以戰云云」トアリテ、日向ヲ出デ給ヒテヨリ、長髓彥ト戰ヒ給フマデ、少クトモ十六七年ハ歷給ヒキ。サレバ記傳十八ノ十丁裏ニモ「此記の趣は、未ダ何國と定メ賜へることはなくて、唯東ノ方にと幸行て、行々美地を求メ賜ふと聞えたり。邇々藝命の國覓給ひしと同じさまなるべし。故レ阿岐ノ國にも七年、吉備ノ國にも八年座セり。若シ始メより大倭ノ國と定メて幸行むには、半途にかくまて久しく留りたまふべくもあらずかし」ト云ヘリ。然ルニ日本紀ハ、日向ニテ議リ給ヒシ時ヨリ、既ニ「東有美地、靑山四周云々、余謂彼地當足以恢弘天業、光宅天下云々、何不就而都之乎」トテ、大倭ヘト定メテ出立セル趣ニ書キ改メ、サテ筑紫ニ至リマセル翌月、安藝ニ至リ給ヒ、其ノ翌年、吉備ニ徙リ給ヒ、

後三年ニシテ、長髄彦ヲ討チ給ヒシ由記サレタレバ、發駕ノ年ヨリ僅ニ五年ニ過ギズ。サルハ、甲寅戊午ノ干支ニ合ハセンガ爲ニ、行々美地ヲ求メ給ヒシ途中ノ年數ヲ減ゼラレタル者ナルベシ。又倭國既ニ平ギタル上ハ、直ニ天日嗣知ロシメサンコトハ、當然ノ事ナルヲ、其ノ後三年ニ至リテ、「辛酉年春正月庚辰朔、天皇即帝位於橿原宮、是歳爲天皇元年」ト記サレタルハ、辛酉革命ノ年ヲ元年ト立テラレンガ爲ナリト知ラル。

抑讖緯ノ學ハ、支那ノ古代ヨリ行ハレタル陰陽五行ノ説ニ胚胎シ來リ、前漢ノ末ニ至リ、圖讖ノ書トテ、天文暦數ニ附會シテ後事ヲ豫言セル者、アマタ世ニ著レタリ。王莽、甚之ヲ尚ビケレバ、時人其ノ意ニ阿リ、競ヒテ讖文ヲ作リ、符命（上帝ノ示現）ト號シテ之ヲ奉リテ、莽ノ逆ヲ助ケタリ。光武帝モ又其ノ説ニ惑ヒ、人ヲ用ヒ政ヲ行フニモ、多クハ符命ヲ以テ疑ヲ決シ、遂ニ詔ヲ下シテ、讖書ヲ國内ニ宣布セシカバ、其ノ學大ニ世ニ行ハレ、馬融鄭玄ナド云ヘル大儒マデモ、皆其ノ説ヲ採リテ諸經ノ註釋ニ用ヒタリ。其ノ書、主要ナル者數十部アリ、儒者ノ七經ト經緯ノ用ヲ爲ストテ、緯書ト號シ、易緯書緯詩緯禮緯樂緯孝經緯春秋緯ノ七類ニ分ル、其ノ外讖緯ニ屬スル雜書、甚多カリキ。

支那ニテ緯書ノ最モ盛ニ行ハレタルハ、東漢ヨリ隋マデノ間ニシテ、晉武帝、秦王符堅、宋孝武帝、梁武帝ナド、皆圖讖ノ學ヲ禁ジタルコトアレドモ、其ノ令行ハレザリシガ、隋ノ文帝、之ヲ禁ズルコト逾々嚴シク、煬帝ニ至リ、使ヲ發シテ、國内ノ書籍ノ、讖緯ト關渉スル者ヲ捜リテ、皆焚カシメタリ。其ノ後唐ノ儒臣、五經正義ヲ作ルニ及ビテ、頗ル其ノ説ヲ排斥シタリシカバ、其ノ學遂ニ衰ヘ、今ニ至リテハ、其ノ書皆散逸シテ、易緯乾鑿度及乾坤鑿度ノ外ハ、一部モ全ク存スル者ナシ。皇朝ニハ、足利氏ノ世ノ頃マデ、緯書頗ル存シタレドモ、今ハ全ク失セタリ。淸行ノ引キタル春秋緯ノ語ハ、保延七年辛酉、右京大夫藤原敦光、建仁三年癸亥、陰陽博士阿部晴光等ノ勘奏ニ、春秋合誠圖曰ト云ヒ、後漢書郎顗傳ノ章懷太子注ニ合誠圖ノ此ノ文ヲ引キ、天道ヲ至道ニ作リ、宋均注ノ文ハ、「三三正也、五五行也、三正五行、王者改代之際會也、能於此際自新如初、則通無窮也」トアリ。詩緯ノ語ハ、嘉吉四年甲子、暦博士賀茂在成、文龜四年甲子、參議菅原和家等ノ勘奏ニ、詩緯推度災ニ曰ト云ヘリ、推度災ノ遺文ハ、明ノ孫瑴ガ古微書及ビ玉函山房輯佚書ニ數十條見エタレドモ、淸行ノ引キタル語ハ、已ニ佚セリ。易緯ノ語ニツキテハ、元應三年辛酉大外記中原師緒ノ勘奏ニ「易緯十卷之中無件文、此外有他緯哉否、會以愚管所不窺見也、粗考典籍、五經暦算引易說、有此文、同暦紀經歟、此書等、非聖人之著作、尙貽疑殆、出於緯候之說、可謂幽玄之義、我若无本書之所見、以何說立四六二六之乘數、可及革命當否之沙汰乎、今度宜被決群才、被垂法於將來者歟」ト云ヘリ。暦紀經ト云ヘルハ、唐ノ王肇ガ著セル開元暦紀經ト云ヘル書ニシテ、淸行ノ革命ノ議ハ、大抵其書ノ趣旨ニ本ヅキタルガ如ク見ユ。

漢學ノ皇國ニ入リタルハ、東晉南朝緯書流行ノ際ニ當リ、之ヲ傳ヘタル百濟人ハ、殊ニ陰陽占卜ノ說ヲ好メリ。宋書夷蠻傳ニ、文帝嘉元二十七年、百濟王餘毘（三國史記ノ毘有王）ノ「奏求易林占式腰弩」タルコトヲ載セ、通典邊防東夷ノ處ニ百濟ノ俗ヲ叙シテ、「俗重騎射、兼愛墳史、其秀異者、頗解屬文、又解陰陽五行、用宋元嘉暦、以建寅月爲歲首、亦解醫藥卜筮占相之術」トアリ。欽明天皇、百濟ヨリ醫博士易博士暦博士ヲ招キ給ヘル時、卜書暦本及天文地理書並遁甲方術之書ヲ貢シ、大友ノ村主高聰ハ、天文遁甲ヲ學ビ、山背臣日並立ハ、方術ヲ學ビ、皆業ヲ成セリ。其ノ後天武天皇ハ、天文遁甲ヲ能シ給ヒ、始メテ占星臺ヲ興シ給ヒ、此ヨリ陰陽道ノ一科起リテ、國家須要ノ一方術トナリ、遂ニ陰陽寮ナル一局ヲ設ケテ、大學寮ト並立シ、專ラ其ノ道ヲ講ズル事ト爲レリ。サレバ革命革令等ノ運數ノ說ヲ唱ヘタルモ淸行ニ始マレルニ非ズ。養老五年辛酉二月ノ詔ニ、「世ノ諺云、歲在申年、常有事故、此如所言、去庚申年、咎徵屢見、水旱並臻」ト云ヒ、實龜十一年庚申正月ノ

詔ニハ「今三元初曆、萬物惟新、宜順陽和播茲凱澤」トテ、大赦ヲ行ヒ、田租ヲ免シ、サテ明年辛酉正月朔、天應ト改元アリキ。淸行ノ時ヨリ稍後ノ事ナガラ、寛仁四年庚申十一月宇佐恒例使ヲ立テサセラレタル宣命ニハ、「世諺仁庚申辛酉能歳者、天下不靜登從古傳來禮利」ト云ヘルヲ見レバ、此等ノ運數ノ說ハ、古クヨリ行ハレタルコト著シ。

革命ノ期ト云ヘル事ハ、周易革卦ノ象ニ「革、水火想息云々、天地革、而時四成、湯武革命、順乎天而應乎人、革之時大矣哉」、其ノ象ニ「澤中有火、革、君子以治歴明時」ト云ヘルニ本ヅキタル說ニシテ、之ヲ辛酉ノ歳ニ當ツル理由ハ、寛仁五年辛酉、助教藤原頼隆ノ勘奏ニ、「禮記月令云、其日庚辛、注云、庚之言更也、辛之言新也、萬物皆新變更也、尙書洪範云、金爲從革、金性能改也、按五行大義、金之正方在酉、含煞氣矣、故以兌上離下象革卦矣」ト云ヒ、（五行大義ハ、隋ノ蕭吉ガ著セル五行書ナリ。）承暦四年庚申、東宮學士大江匡房ノ勘奏、永保四年、甲子、參義藤原實政ノ勘奏、何レモ開元曆紀經ナル「辛酉爲金、戊午爲火、火歳革運、金歳革命、尤協革卦之躰」ノ語ヲ引キテ、五運行ノ理ヲ述ベタリ。諸道ノ博士ノ論ズル所皆此ノ如キ附會ノ說ニ過ギザレドモ、當時ノ人ハ、之ヲ天理ノ當然ト信ジ、善相公江帥ノ如キ名儒モ更ニ之ヲ疑ハザリシナリ。

中原師緒ノ勘奏ノ續キニ緯說不可用事ヲ論ジ、「古文尙書正義云、其緯文鄙近。不出聖人、前賢共疑、有所不取也、又云、前漢之時、有東萊之張覇、僞爲緯也、毛詩正義云、緯候之說、僞多而實少也、禮記正義云、伏犧之後、年代參差、所說不一、緯候紛紜相乖背、且復煩而無用也、今就是等之文、按其義、緯候之說、僞謬而實少、不出於孔子之說、又非於門徒之錄、是故疑難之文、竹帛多存之、縱雖本書設文、不足爲證、矧亦其文不詳、彌招疑殆者歟、凡術數之藝者、聖人之所賤也、吾道、一以貫之、百慮而一致也、猥不據經史之義、可用讖緯之說乎」ト云ヒテ、辛酉改元ノ事ヲ難ジ、北畠准后親房公此ノ時中納言ナリシガ、「凡聖人之治天下、必自人道始、興衰治亂、在于德、不在于天、聞于人、不聞于神之故也、而儒家仍述符命之事、不本德政之道、豈非刻鵠之者爲鶩哉、後漢書曰、人情忽於見事、貴於異聞、觀聖王之處記述、以仁義正道爲本非有奇怪虛誕之事、今諸巧慧小材技數之人、增益圖書、矯稱讖記、可不抑遠之哉云々、就之謂之、如淸行朝臣密奏者、見幾而假事、古之王孫滿之流歟、非垂將來之法哉」トテ、改元スルニ及バザル旨論奏シタレドモ、採用セラレズ、先例ニ傚ヒテ元亨ト改元アリキ。

其ノ後三年、元亨四年甲子二月ノ仗議ノ事ニ付、花園院御記ニ「晦日丙戌晴、傳聞今日甲子仗議云々、後聞今年不當大變之由、多以議奏云々、又改元無沙汰云々、抑變命變運、古來所恐來也、而先度辛酉之時、緯候非聖人之著作、頗涉于迂誕之由有沙汰、余思緯候之綺聖人所不用也、以術數推天運、不先德也、而緯候之說、非偏爲虛說也、仍或用之、但壽夭無貳、修身俟命、是君子之志也、是以不用天運之術數、唯修德、緯候之書、不可邉學之故也、然者雖當變革之年、朝議豈可煩乎、詩緯之自新如始無窮云々、是古緯候之說又如此、況他書乎、用日新之道、不可關變革之運之條、文已分明、延喜元年雖有改元、四年無沙汰、有日新之道之故也、德若非日新者、緯候之說、又不可有違歟、唯在德之有無、更非變之當否者也、時宜之趣、誠有謂歟、後代君子宜據用、若不量己德、謬謂不關變革、豈免天運乎、能可有量耳云々」ト記サセ給ヘリ。此ノ時モ、改元ニ及バズト一旦ハ定マリシガ、遂ニハ又先例ニ從フコトヽナリテ、ヤガテ正中ト改元アリキ。其ノ後、一條ノ禪閤兼良公ハ、三革論ヲ著シテ、此等ノ事ヲ論ゼラレシガ、管々シケレバ、コヽニ引カズ。ソレヨリ後ハ永錄四年ト元和七年ト二回ノ辛酉ノ年ノミハ、故アリテ改元ノ沙汰ナカリシガ、其ノ他ハ先帝ノ元治元年甲子マデ、辛酉甲子ゴトニ必改元アリキ。

昔ノ學者ハ、辛酉革命ノ說ヲ信ジタルコト、右ニ述ベタルガ如クナレバ、年數ノ慥ナラザル神武天皇ノ元

年ヲ後世ヨリ推定センニハ、辛酉ノ年ナラデハ、之ニ當ツベキ年ナカルベシ。又此ノ紀元ハ、人皇ノ世ノ始年ニシテ、古今第一ノ大革命ノ年ナレバ、通常ノ辛酉ノ年ニハ置キ難ク、必一蔀ノ首ナル辛酉ノ年ニ置カザルベカラズ。淸行朝臣ノ說ニテハ、神武天皇元年辛酉ヨリ、齊明天皇六年庚申マデ千三百二十年、此即鄭玄ノ謂ヘル一蔀ニシテ、同七年辛酉天皇崩ジ給ヒテ、天智天皇位ヲ嗣ギ給ヘル年ハ、第二蔀ノ首ナリト云ヘリ。此ノ說ニ就キテ考フレバ、神武紀元ヲ推定シタル人ハ、先ヅ天智天皇ノ初年ヲ第二蔀ノ首ト定メテ、ソレヨリ、千三百二十年前ニ逆推シタル者ト思ハル。然ルニ此ノ千三百二十年ト云ヘル數ハ、甚疑ハシキ者ナリ。鄭玄ハ、明カニ「六甲爲一元、七元有三變、三七相乘、二十一元爲一蔀」ト云ヘリ。即一元ハ、六十年、七元ハ四百二十年、之ニ三ヲ乘ズレバ、千二百六十年ニシテ、千三百二十年ニ非ズ、千三百二十年ハ、二十二元ニシテ、三七相乘ノ數ニ非ザレバ、此ノ數ハ恐ラクハ千二百六十二年ノ違算ナルベシ。鄭玄ノ說ニ於テ。一蔀ハ、果シテ二十一元ナラバ、神武紀元ハ天智天皇ノ初年ヨリ推シタルニハ非ズシテ、其ノ六十年前ナル推古天皇九年辛酉ヨリ二十一元ノ前ニ推シタル者ナラン。推古朝ハ、皇朝政教革新ノ時ニシテ、聖德太子、大政ヲ執リ給ヒ、始メテ暦日ヲ用ヒ、冠位ヲ制シ、憲法ヲ定メ、專ラ作者ノ聖ヲ以テ自ラ任ジ給ヘル折柄ナレバ、此朝ノ辛酉ヲ以テ第二蔀ノ首ト定メテ、神武紀元ヲ第一蔀ノ首ニ置カレタルハ、蓋此ノ皇太子ノ御所爲ナラン。此ノ御世ノ二十八年ニ、皇太子、蘇我ノ馬子ノ大臣ト共ニ議リテ錄シ給ヘル天皇記及國記臣連伴造國造百八十部並公民等本記ト云ヘル史記ノ體裁ハ、極メテ支那ノ本紀世家ナド云ヘル者ニ擬セラレタルベケレバ、神武紀元ノ年ヲ何ノ年ト明記セズバ、體裁善カラジトテ、緯說ニヨリテ、一蔀二十一元ノ前ノ辛酉ト定メサセラレシナルベシ。是等ノ書ハ、蘇我氏ノ亂ニ焚ケ失セテ、僅ニ其ノ燼餘ヲ船史惠尺ガ疾ク取リテ中ノ大兄皇子（天智天皇）ニ奉リシ由ナレ共、全本ハ、世ニ傳ハラザリキ。斯テ日本紀撰修ノ時ニ當リ、此ノ紀元ハ太子撰定ノ舊ニ依リ、其レヨリ九百年許、即神功皇后マデノ事跡ニ關シテハ、紀ノ撰者ガ、長暦ニ依リテ、其ノ年月日ヲ作リ給ヒ、又其ノ後三百年間ノ事跡ニテモ、年月ノ知レザル者ハ、撰者ノ塡補シ給ヒシ者アルベシ。

青山延于ノ皇朝史略ノ凡例ニ、「是編、推古已前未行暦法、則槩不係年月、從古事記書法、推古十二年、始行暦法、自是已後、係以年月云」トアリ。是ノ書ハ、大日本史ヲ節略シタル者ナルニ、本書ガ日本紀ノ年月ヲ用ヒタルニ拘ハラズ、一概ニ省略シタルハ、史家ノ作爲ニ出デシ者ト判定シタルガ故ナリ。

事實ヲ直書スベキ歴史ニ於テ右ノ如キ作爲ノ事アリテハ、縱ヒ正史ニ立テラレタリトモ、世人ノ疑訝ヲ招クベキガ如ク思ハルレドモ、當時ノ人情ニテハ、サニアラズ。上下擧リテ漢風ヲ喜ベル時ナレバ、國史ノ體裁ノ改良セルハ、最モ世人ノ好尚ニ適シ、又國初ト云ヘバ、世界ノ太始ノ如ク考フルハ、國史ヲ讀ム人ノ通情ナリシカバ、神代ニ續キタル人皇ノ初世ノ、支那三代ノ末ナル東周ノ世ニ當レルヲ、イカデカ上リ過ギタリトハ思フベケン。列聖ノ長壽ノ如キハ、神代ニ近キ世ノ當然ノ事トシテ、誰モ怪ム者ハ無カルベシ。カクテ此ノ年紀ハ、一般ニ信用セラレタルナリ。

第四章　神功應神ノ二御代ノ考

日本紀ノ年紀ノ信ズベカラザルコトハ、前章ニ述ベタルガ如クナレドモ、列聖ノ年代ニ幾年ノ延長アルカハ、今考フベカラズ、唯神功應神紀ニ記シタル百濟王ノ世傳ヲ以テ、三國史記又ハ東國通鑑ナル韓史ニ比較スル時ハ、神功皇后應神天皇ノ御世ハ、略推定スルコトヲ得ベシ。今兩國ノ史ヨリ、百濟王ニ關スル記事ヲ上下ノ欄ニ抄記セン。

日本紀　　東國通鑑

神功紀四十六年(紀元九百六年丙寅)、遣斯摩宿禰于卓淳國云云、即以傔人爾波移與卓淳人過古二人、遣于百濟國、慰勞其王、時百濟肖古王深之歡喜厚遇焉。

同四十九年(紀元九百九年己巳)、以荒田別鹿我別爲將軍云々、屠南蠻忱彌多禮以賜百濟、於是其王肖古及王子貴須、亦領軍來會。

同五十二年(紀元九百十二年壬申)、(百濟王)乃謂孫枕流王曰云々。

同五十五年(紀元九百十五年乙亥)、百濟肖古王薨。

同五十六年(紀元九百十六年丙子)、百濟王子貴須立爲王。

同六十四年(紀元九百二十四年甲申)、百濟國貴須王薨、王子枕流王立爲王。

同六十五年(紀元九百二十五年乙酉)、百濟枕流王薨、王子阿花年少、叔父辰斯奪立爲王。

應神紀三年(紀元九百三十二年壬辰)、是歲、百濟辰斯王、失禮於貴國天皇、故遣紀ノ角ノ宿禰、羽田ノ矢代ノ宿禰、石川宿禰、木菟宿禰、嘖讓其无禮狀、由是百濟國殺辰斯王以謝之、紀角宿禰等、便立阿花爲王而歸

丙午、晉穆帝永和二年(紀元千六年) 百濟王契王薨、比流王第二子近肖古立、

乙亥、晉孝武帝寧康三年、(紀元千三十五年) 百濟王近肖古薨、太子近仇首立。

甲申、晉孝武帝太元九年、(紀元千四十四年) 百濟王近仇首薨、元子枕流立。

乙酉、晉太元十年、(紀元千四十五年)百濟王枕流薨、太子阿莘幼、王弟辰斯立。

壬辰、晉太元十七年、(紀元千五十二年)百濟王辰斯薨於狗原行宮、枕流之子阿莘立。

同八年(紀元九百三十七年丁酉)、百濟記云、阿花王立、无禮於貴國、故奪我枕彌多禮及峴南支侵谷那東韓之地、是以遣王子直支于天朝、以修先王之好也。

同十六年(紀元九百四十五年乙巳)、是歲百濟阿花王薨、天皇召直支王謂之曰、汝返於國以嗣位、仍且賜東韓之地而遣之。

同二十五年(紀元九百五十四年甲寅)、百濟直支王薨、即子久爾辛立爲王。

丁酉、晉安帝隆安元年、(紀元千五十七年)百濟與倭結好、遣太子腆支爲質。

乙巳、晉安帝義熙元年、(紀元千六十五年)百濟王阿莘薨、太子腆支質倭國不還、太子仲弟訓解攝國政以待太子之還、季弟碟禮殺訓解、自立爲王、腆支聞王訃、痛哭請歸、倭主以兵百人衞送、腆支既至國界云々、以倭兵自衞、依海島備之、國人殺碟禮、迎立爲王

庚申、宋武帝永初元年、(紀元千八十年) 百濟王腆支薨、長子久爾辛立。

神功紀四十六年五十五年ノ背古ハ、肖古ノ誤リニシテ、即韓史ノ近肖古、貴須ハ韓史ノ近仇首、阿花ハ韓史ノ阿莘、直支ハ韓史ノ腆支ナリ。肖古仇首ハ、各前後二主アリテ、枕流辰斯ノ父祖ナルハ、後ノ肖古仇首ナルガ故ニ、韓史ハ、常ニ近ノ字ヲ冠ラセテ、記セリ。前肖古ハ、百濟第五代ノ主ニシテ、紀元八百二十六年(漢桓帝延熹九年)ニ立チ、在位四十九年、紀元八百七十四年(漢獻帝建安十九年)ニ薨ジ、其ノ子前仇首立チ在位二十一年、紀元八百九十四年(魏明帝青龍二年)ニ薨ジキ。ソレヨリ沙伴、古尒、責稽、汾西、比流、契王ノ六代、總ベテ一百十二年ヲ歴テ、近肖古ノ世ト爲レリ。然ルニ日本紀ナル神功皇后攝政元年ト云ヘル年ハ、近肖古ノ時ニ先ダツコト百四十五年、紀元八百六十一年(漢獻帝建安六年)前肖古ノ三十六年ニ當リテ、神功紀ノ肖古ハ前肖古ナルガ如ク見ユルニ由リ、大日本史ノ外國傳ハ、百濟王ノ世傳ヲ叙スルニ、紀ノ肖古貴須ヲ以テ、韓史ノ前肖古前仇首トシ、枕流辰斯

ヲ以テ、直ニ之ニ接シテ、沙伴以下近肖古近仇首マデ、八王ノ名ヲ刪落セリ。サレドモ此等八王ノ世系事跡ハ、韓史ニ明記シタルノミナラズ、皇朝ニ歸化セル蕃族ノ中ニモ、沙伴、古爾、比流、近肖古、貴首諸王ヨリ出ダタリト稱スル者、甚多クシテ、姓氏錄ニ明記シタレバ、此等諸王ノ有リシコトハ、甚明カニシテ、王系中ヨリ除キ去ルベキ理ナシ。カクテ肖古仇首ハ、各二主アリテ、紀ノ肖古貴須ハ、枕流辰斯ノ父祖ナレバ、近肖古近仇首ナルコト、疑ヒナシ、續日本紀四十、延暦九年津連眞道等ノ上奏ニ「夫百濟太祖云々、降及近肖古王、遙慕聖化、始聘貴國、是則神功皇后攝政之年也」トアルモ、紀ノ肖古ハ、近肖古ナルコトノ明證ナリ。又古事記應神天皇ノ段ニ百濟國主照古王ノ時、阿知吉師ヲ遣シテ、馬ヲ獻リ、又ソノ後和邇吉師ヲ遣シテ論語十卷千字文一卷ヲ獻レルコト見ユ。百濟ニテ文學ノ興リシハ、前肖古ノ時ヨリ遙ニ後ノ事ナレバ、應神天皇ノ御世ニ當レルコノ照古王ハ、前肖古ニ非ザルコト明カナリ。

サテ近肖古以下六王ノ世傳ニツキ、紀ニ記シタル年代ハ、韓史ニ異ナレドモ、其ノ干支ノミヲ比較スレバ、甚能ク符合セリ。韓史ニ據レバ、近肖古ハ紀元千三十五年乙亥ノ歳ニ薨ゼシヲ、紀ハ、之ヲ其ノ百二十年前ニ置キ、其ノ干支ハ、同ジク乙亥ナリ。近仇首ノ即位ハ、韓史ニテハ、近肖古ノ薨年ニアレドモ、紀ニテハ、翌年丙子ニアリ。次ニ甲申ノ歳ニ近仇首薨ジテ、枕流立チ、乙酉ノ歳ニ枕流薨ジテ、辰斯立チ、壬辰ノ歳ニ、辰斯死シテ、阿莘立チ、丁酉ノ歳ニ、腆支入侍シ、乙巳ノ歳ニ、阿莘薨ジテ、腆支立チタルモ、紀ハ皆百二十年前ニ記シテ、其ノ干支ハ、違ハズ。唯腆支薨ジテ、久爾辛立チタルハ、韓史ニテハ、庚申ノ歳ナルヲ、紀ハ、百二十六年前ノ甲寅ノ歳ニ記シタレバ、干支モ、六年ノ差ヲ爲セリ。

兩國ニテ別々ニ編述セル古代ノ史書ニ、カヽル記事ノ符合アルハ、殆ト得難キ事ナリ。蓋當時百濟ヨリ歸化セル士人ノ、自ラ時事ヲ記錄セル者モアルベク、又紀註ニ引キタル、百濟記百濟新撰百濟本記ノ類、專ラ彼ノ國ノ事ヲ記シタル書モアリテ、紀ノ撰者ガ、倭韓交渉ノ事蹟ヲ記スルニ、材料乏シカラザリシガ故ニ、此ノ如ク、精密ナルナリ。

サテ兩國ノ史ニ於テ、記事モ干支モ、此ノ如ク符合セルニ、百二十年ノ差ハ、イカニシテカ生ジタル。此ノ事ニハ、本居氏モ早ク心附キテ、記傳卅三ノ廿二丁ニ「東國通鑑などには、阿花を阿莘と作て、其の元年は、晉ノ太元十七年とあれば、仁徳天皇八十年にあたり、其ノ薨たるは、其十四年とあれば、履仲天皇六年にあたれば、書紀と百二十年ばかり違へり。そも〳〵東國通鑑などは、信がたきこと多しといへども、此年代は、彼書の方よろしかるべし。書紀は傳への亂にて、年代違へりと見ゆ」ト云ヒ、又其ノ廿五丁ニ「東國通鑑には、腆支王の元年は、晉ノ義熙元年とあれば、履仲天皇の六年に當りて、書紀と年代大く違へり、されば上にも云る如く、書紀は、傳への亂にて、阿花王直支王は、此御代に非ず、後の御代のことゝおぼし云々」と云へり。紀ノ誤リハ、サル事ナガラ、コハ唯傳ヘノ混レニハアルマジ。紀ノ編者ガ、手中ノ材料ヲ整頓シテ、干支紀年ヲ數字紀年ニ改メラルヽニ當リテ、偶然ノ誤リヨリ、此ノ時代ノ事跡ヲ二周甲ノ前ニ置カレタルカ。然ラズンバ、神武紀元ヲ遙ニ千三百餘年ノ古ニ置カレタルガ故ニ、神功皇后應神天皇ノ御世ヲモ、自ラ其ノ相當ノ時代ニ置クコト能ハザレバ、殊サラニ諸帝ノ在位ヲ延バシ、遂ニ百濟ノ列王ヲモ併セテ、二周甲ノ前ニ移シテ、其ノ干支ノミハ、百濟ノ原書ニ合セ置カレタルナラン。

星野博士、嘗テ落合直澄氏ノ帝國紀年私案ヲ駁シタル論文「文ノ雜誌第二卷第二號」ニ、續紀ノ津ノ連眞道等ガ上表ト文忌寸最弟ガ上言トヲ引キテ「百濟ノ始メテ我ニ通ゼシハ、彼ノ近肖古王ノ時ニシテ、我ガ神功攝政ノ年ニ當リ、學士ヲ貢セシハ、彼ノ近仇首王ノ時ニシテ、我ガ應神帝御宇ノ年ニ當タリ、コノ二代ノ肖古仇首ハ皆近肖古近仇首ニシテ、初代ノ肖古仇首ニ非ザルコト、明々白々ナリ云々」「神功應神二代ノ百濟近肖古近仇首二王ト

相値ルハ、古事記續日本紀、皆明證アレバ、千古ノ鐵案斷乎トシテ動スベカラズ。史ヲ論ズル者、マサニ之ニ據リテ上世年代ノ樞軸ト爲シ、以テ上下古今ヲ推定シ、併セテ各國ノ年曆ヲモ照較スベシ。則チ眞正ノ年紀、心目ノ間ニ瞭然トシテ、悠謬ノ談ニ誑惑セラルヽコトナカルベシ。但吾輩ハ、信以傳信、疑以傳疑、知ラルベキ事理ハ、心力ヲ竭シテ求ムレドモ、知ルベキノ因ナキ者ハ、强テ知ランコト求メズ」ト云ヘルハ、誠ニ不易ノ格言ナリ。

第五章　國史ト韓史ト紀年ノ比較

右ノ百二十年ノ差ニ關シテ、其ノ誤リハ、國史ニ在ラズシテ韓史ニ在ルベシト疑フ者アリ。此ノ疑ヒヲ解カンニハ、先ヅ韓史ノ紀年ト國史ノ紀年ト比較シテ、孰レガ多ク信據スベキヲ考ヘザルベカラズ。新井白石ノ史論ニ、韓史ノ訛多キヲ辨ジテ、其ノ末段ニ「東史作于高麗之世、號爲粗略、況於三韓載籍無徵者乎、（三韓載籍無徵、三國僅有國乘、粗略太甚、出于朝鮮李克敦之言、）天朝舊史（即謂舊事記也）既成于三國鼎峙之日、而本記新撰世記等書、（即謂百濟本記、百濟新撰、高麗僧道顯日本世記等書也）雖係外史、亦皆當時實錄、互可以證、若彼東史之作、在乎千載之下、而出于三國之後、載筆之士、綴拾補葺、僅取于舊聞遺事、實惟存十一於千百而已、屬辭比事、尤多牴牾、豈可盡信哉」ト云ヒ、藤原貞幹ノ衝口發ナル妄言ヲ駁擊セル本居氏ノ鉗狂人ニモ、「これらの書（三國史記東國通鑑ナド）は、ことに後の物にして、信じがたき事おほく、年紀なども、たがへる事共おほくて、古の事共を記せるは、すべて據とするにたへざる物なるに、さる事をも思ひはからずして、ゆくりなく證據としたる論者の淺見、おしはかられてあはれ也」ト云ヘリ。新井氏ガ「東史作于高麗之世」ト云ヘルハ、三國史記ヲ指セルナリ。此ノ書ハ、高麗集賢殿大學士金富軾ノ編輯ニテ、近衞天皇久安二年宋高宗紹興十六年、高麗仁宗恭孝王二十四年ニ成リ、日本紀ノ奏上ニ後ルヽコト四百二十五年、東國通鑑ハ又其ノ後三百三十九年、後土御門天皇文明十七年、明憲宗成化二十一年、朝鮮ノ成宗康靖王十六年ニ至リ、達城君徐居正等ノ手ニ成リ、其ノ三國時代ノ記事ハ、專ラ三國史記ヲ以テ底本トセリ。

二史ハ、此ノ如ク晚出ノ書ニシテ、且其ノ文中ニハ、荒唐不經ノ談、又ハ記者ノ杜撰ト見ユル說ナキニハ非ザレドモ、大體ハ三國時代ノ舊記ト支那歷代ノ史鑑トニ本ヅキテ編輯シタル者ナレバ、徒ニ其ノ晚出ナルニ由リテ、其ノ舛訛多カランコトヲ速斷スベカラズ。文學博士坪井九馬三氏ノ三國史記解題（史學會雜誌第參拾五號）ニ「本書は金富軾年六十七、退職の後撰したりと見ゆれども、其材料は、十數年苦心して蒐集したるなるべし。今本書の記事引用書より之を推すに、富軾は、陳壽より歐陽修に至る漢土歷代史家の撰述、高句麗李文眞の刪修留記、新羅金大問の傳記、高僧傳、花郎世記、樂本、漢山記、崔致遠の帝王年代曆、桂苑筆耕文集等の韓籍、古碑銘（鸞郎碑序、金慶信碑、三郎寺碑文等）、及自家の旅行見聞等に據りて、本書を編纂したるなれば、本書の成るは、日本紀の脫稿に後るヽこと四百二十五年なりとて、決して本書を目して後世の妄撰なりとは爲すべからず」ト云ヘリ。彼ノサレバ二史ノ紀年ノ正否ハ、其ノ材料ニ用ヒタル三國史乘ノ性質ニ隨フコトナレドモ、此等ノ遺文ハ、彼ノ國ニテモ甚稀ナル由ニテ、之ヲ觀ルベキ便ナケレバ、今ハ三國史記ノ內部ノ徵證ト漢史ニ對スル關係トニ依リテ、其ノ紀年ノ正否ヲ判定セザルヲ得ズ。

英人あすとん氏ノ日本上古史論（英文亞細亞協會報告第六十卷第一篇）ニ曰ク、「朝鮮日本ノ上古記錄一般ニ付、兩國史ヲ比較スレバ、朝鮮史ノ方ニ、信用スベキコト多シ。基督紀元前ハ、姑ク置キ、紀元後ノ帝王在位年數ニ付キ、ぷらむせん氏ノ法ニ倣ヒテ稽査スレバ、日本史ニハ、初ノ四百年間ニ於テ、僅ニ七代ノ帝アルノミナレドモ、同年間ニ、高句麗ニハ十七代新羅百濟ニハ十六代ノ王アリ。此ノ七代ノ日本帝ノ平均壽ハ、百二歲ナリ。朝鮮諸

王ノ享年ハ、通例記載ナシ。治世ハ、何レモ非常ニ長キコトナシ（唯駕洛國ノ始祖金首露ハ、在位百八年、壽百五十八歳トアレド、コハ、寧ロ朝鮮本部ノ外ノ事ナレバ、誤リモアラン）。最モ長キハ、高句麗ノ一王ニシテ、在位七十年、壽九十八歳、其ノ諡號ヲ長壽王ト云フ。左ニ掲グル表ニ依リテ、四百年間諸國帝王ノ代數ノ平均數ノ大概ヲ知ルベシ。

國名	基督漢元	帝王代數
日本	一年ヨリ四〇〇年マデ	七
新羅	一年ヨリ四〇〇年マデ	一六
高句麗	一年ヨリ四〇〇年マデ	一七
百濟	一年ヨリ四〇〇年マデ	一六
支那	一年ヨリ四〇〇年マデ	三八
日本	四〇〇年ヨリ八〇〇年マデ	三三
新羅	四〇〇年ヨリ八〇〇年マデ	三二
支那	六六二年ヨリ一〇六二年マデ	三六
同	一〇六二年ヨリ一四六二年マデ	三五
同	一四六二年ヨリ一八六二年マデ	一七
佛蘭西	一〇〇〇年ヨリ一四〇〇年マデ	一六
同	一四〇〇年ヨリ一八〇〇年マデ	一五
英倫	一〇八七年ヨリ一四八七年マデ	一五
同	一四八七年ヨリ一八八七年マデ	二一
蘇格蘭	一一六七年ヨリ一五六七年マデ	一九
威爾士	八四〇年ヨリ一二四〇年マデ	一七

「此ノ表ニヨリテ見レバ、朝鮮史ニ記セル代數ハ、他ニ例ナキモノニ非ザレドモ、日本史ノ、四百年間ニ僅ニ七代ナルハ、他ニ例ナキモノナリ。他國ノ歴史中、余ノ見タル限ニテハ、十五代ヲ以テ此ノ年間ノ最少代數トス。コハ、朝鮮史ノ、日本史ニ勝レテ信用スベキ所アル重キ證ナリ。

「謂ユル神代文字ナル者ハ、姑ク後世ノ作リ物トシテ斥ケテ、今兩國ノ文字傳來ニ付キ考フルニ、支那學ノ輸入アリシマデハ、兩國共ニ口碑ニノミ依リタルコト疑ヒナキガ如シ。或ル工夫ニ依リテ記憶ヲ助クルニ非ズンバ、事蹟ノ傳ハルコト、二三代ヲ過ギズシテ紛亂スベケレバ、二國ガ始メテ文字ヲ知リ用フルニ至リタル事蹟ヲ尋ヌルコト、要用ナリ。支那文字ハ、基督紀元三百七十二年以前ニモ、日本朝鮮ニテ知ラレシコトノ明證アレドモ、始メテ文字ニ就テノ記載アルハ、此ノ年ナリ。東國通鑑ニ、支那西部ノ秦國ヨリ高句麗ニ佛法ヲ送リ來リシコトヲ記シ、之ニ次ギテ「高句麗立大學敎子弟」ト記セリ。其ノ後三年（紀元三百七十五年）ニ、又次ノ文アリ、「百濟以高興爲博士、百濟自開國未有文字、至是始有書紀。」新羅ニ付テハ、此ノ類ノ記載ナケレドモ、多分同國ニテ支那學ヲ始メシモ、此ノ頃ナラン。百濟ノ博士王仁ガ日本ニ渡リシハ、日本普通ノ紀年ニヨレバ、紀元二百八十五年ニ當レドモ、之ヲ四百五年ニ改ムベキコトハ、後ニ云フガ如シ。

「此等ハ、日本朝鮮ニテ支那ノ文學ヲ規則正シク學ビタル始メナルベケレドモ、支那文字ノ兩國ニ傳ハリシハ、猶遙ニ古キ事ナラン。朝鮮ハ、紀元前第二世紀ニ支那ニ屬シ、其ノ一部分ハ、長ク支那ノ所領タリシカバ、其ノ地ニハ、記錄モアリシナラン。支那文學ノ中心トモナリシナラン。支那學ノ影響アリシ證ハ、百濟

(紀元前二年)、新羅(紀元六年)ニテ宗廟ヲ立テ、百濟ニテ(紀元二年)五帝ヲ祭リ、又(紀元二十年)天地ヲ祀リシガ如キ、是ナリ。高句麗ノ一王ハ、紀元前十六年ノ頃ニ、支那ノ婦人ヲ娶リタリ、新羅ノ一王ハ、紀元百二十五年ニ百濟ニ書ヲ送リタリ。次ノ世紀ノ中頃ニハ、樂浪(今ノ平安道平壤府)帶方(今ノ全羅道南原府)二郡ヲ魏朝ノ太守支配シ、帶方ノ太守ヨリ魏ノ詔書ヲ倭王ニ送リ、倭王其ノ答表ヲ上リシコトモアリ。支那ト倭トノ間ニ、朝鮮ヲ歴テ使驛ノ通達アリシ事サヘ、記サレタリ。紀元三百四十五年ニハ、倭王ヨリ書ヲ新羅ニ送リシコトアリ。王仁ガ、日本ニ來リシ六十年前ナリ。此等ノ事實ニ據レバ、朝鮮ニテ支那ノ文學ヲ學ビ始メタルハ、日本ニ先ダツコト三十餘年ニシテ、兩國共ニ、是ヨリ先ニ支那文學ヲ知リシナルベケレドモ、朝鮮ハ、日本ニ比スレバ、之ヲ知ルノ好機會多カリシコト、明カナリ。

「年號ハ、紀元五百三十六年ニ新羅ニ傳ハリタレドモ、日本ニテハ、六百四十五年マデハ用ヒザリキ。余ハ是ヨリ先ニハ專ラ干支ヲ以テ年ヲ數ヘシナラントノ疑ヒヲ懷ケルガ、若サモアランニハ、此ノ年號ノ始マリヲ明カニ知ルコト、要用ナリ。干支ニテ年ヲ數フル法ハ、稍長キ年代ニハ誤謬ヲ生ズルコトノ免ルベカラザル者ナリ。

「朝鮮ノ史籍ハ、日本ノ史籍ニ比スレバ、質直ニシテ、奇怪ナル事蹟少ク、又朝鮮史ハ、三國ノ事蹟ヲ兼ヌルガ故ニ、三國互ニ制シテ、誇誕ヲ逞ウスルヲ得ザラシム。此亦朝鮮史ノ、日本史ニ勝レテ信用スベキ所多キ所以ナリ。

「朝鮮史ヲ正確ニ近シトスル最モ確ナル證ハ、支那史ト一致スル所多キ事ナリ。紀元第一年ヨリ五百年ニ至ル五世紀ノ間ニ、朝鮮ノ事蹟ニシテ、支那史ニ記セル者、十六條アリ。之ヲ朝鮮史ニ比較スルニ左ノ異同アリ。

第一世紀中、年代ノ合フ者一、合ハザルガ如キ者一、朝鮮史ニ闕ケタル者一。

第二世紀中、年代ノ合フ者三、全ク合ハザル者一、朝鮮史ニ闕ケタル者一。

第三世紀中、年代ノ合フ者二、他ノ一事ハ、東鑑ニ記載ナシ。

第四世紀中、年代ノ合フ者一、他ノ一事ハ、東鑑ニ記載ナシ。

第五世紀中、三事アリ、皆年代相合フ。

「右ノ如クナレバ、日本史ト朝鮮史トノ間ニ、相違殊ニ年代ノ相違アル時ハ、寧ロ朝鮮史ノ記スル所ヲ取ルベキナリ。蓋東鑑及ビ其ノ他ノ朝鮮史ノ、全ク正確ナリヤ否ヤハ、別問題ニテ、少クトモ第一世紀ノ記事ニ於テハ、疑ハシキ者頗多シト」云ヘリ。

同氏ハ、又彼ノ百廿年ノ差ヲ生ジタル理由ヲ論ジテ、干支ヲ以テ年ヲ數ヘタルニ由レリトシ、「此法ニヨリテ記セル記錄ヲ用ヒテ、不確ナル時代ノ歴史ヲ編スル時ニ當リテハ、干支ノ名ハ正シク共、猶適當ナル年紀ヲ誤ル事アルベシ。日本紀ノ編者ハ、即此誤リヲ爲シタリ。上ニ云ヘル如ク、朝鮮史ノ一般ニ信用スベキガ上ニ、此等ノ事ハ、大抵百濟王ノ繼統ニ關スル者ナレバ、我ガ史ヨリ、彼ノ史リ方必正シカルベシ。朝鮮史中、今論ジツヽアル時代ノ中頃ナル紀元三百八十一年ト云フ年ハ、支那ノ史ニヨリテ確メラルヽナリ」ト云ヘリ。

右あすとん氏ノ説ハ、局外ニ立チテ偏頗ナキ説ニシテ、頗ル取ルベキ所ナレドモ、其ノ考證ハ、猶疎漏ニシテ滿足シ難キコト多シ。同氏ハ、諸國帝王ノ代數ノ平均ヲ列擧シタレドモ、其ノ表ハ、血屬ノ直系ニ由リテ、其ノ世數ヲ算セシニ非ザレバ、簒弑引キ續キタル爭亂ノ世、又ハ兄弟叔姪代ル〳〵世ヲ嗣ギタル時ハ、代數非常ニ多クナリ、又佛蘭西ノ路易第十四世ノ如ク、在位ノ長キガ爲ニ、孫又ハ曾孫ニ位ヲ傳ヘタル時ハ、代數非常ニ少クナリテ、此等ヲ平均シタリトモ、何ノ標準トモ爲シ難シ。故ニ今直系ノ世數ニ由リ、每世平均ノ年數ヲ算スルニ、韓史モ、上代ニ遡ルニ隨ヒ、年歴ノ延長セリト覺シキ所アルコトハ、殆ト我ガ古史ニ

異ナラズ。今參照ノ爲ニ、皇朝及ビ漢韓ノ帝王ノ毎世平均ノ年數ヲ左ニ列擧ス。

帝王ノ御名	直系ノ世數	前後帝王ノ生誕又ハ即位ノ間ノ年數	平均一世年數
我ガ大祖神武天皇ヨリ第二十六代繼體天皇マデ	十七世	千八十七年	六十八年
我ガ第廿六代繼體天皇ヨリ第百廿一代今上天皇マデ	五十世	千三百六十七年	二十八年
夏后禹ヨリ第十七代桀マデ	十四世	四百三十三年	三十三年
商王成湯ヨリ第三十代紂マデ	十七世	六百十一年	三十八年
周武王ヨリ第三十七代赧王マデ	三十二世	八百三十年	二十七年
漢太祖高皇帝ヨリ第二十三代孝獻皇帝マデ	十六世	四百五十九年	三十一年
後魏太祖道武皇帝ヨリ第十二代文皇帝マデ	九世	百三十六年	十七年
唐高祖神堯皇帝ヨリ第二十代哀皇帝マデ	十四世	三百二十七年	二十五年
遼太祖天皇帝ヨリ第九代天祚皇帝マデ	九世	二百三年	二十五年
宋太祖皇帝ヨリ第十八代祥興帝マデ	十三世	三百四十四年	二十九年
金太祖武元皇帝ヨリ第九代哀宗帝マデ	六世	百三十年	二十六年
元太祖聖武皇帝ヨリ第十四代惠宗皇帝マデ	七世	百五十八年	二十六年
明太祖高皇帝ヨリ第十七代毅宗烈皇帝マデ	十二世	二百八十一年	二十六年
淸太祖高皇帝ヨリ第十一代今皇帝マデ	十世	三百十二年	三十五年
高句麗始祖東明王ヨリ第十一代東川王マデ	六世	二百六十三年	五十三年
高句麗第十一代東川王ヨリ第二十八代高藏マデ	十六世	四百十五年	二十八年
百濟始祖溫祚王ヨリ第十二代近肖古王マデ	八世	三百六十三年	五十二年
百濟第十二代近肖古王ヨリ第三十一代餘豐マデ	十四世	三百十六年	二十四年
新羅始祖赫居世居西干ヨリ第八代阿達羅尼師今マデ	五世	二百十年	五十三年
新羅第四代脫解尼師今ヨリ第十六代訖解尼師今マデ	七世	二百五十三年	四十二年
新羅第十七代奈勿尼師今ヨリ第五十六代敬順王マデ	二十一世	五百七十一年	二十九年
高麗太祖神聖王ヨリ第三十代忠定王マデ	十六世	四百六十年	三十一年
朝鮮太祖康獻王ヨリ第二十六代今王マデ	二十世	五百十七年	二十七年

我ガ天皇及ビ漢代以下ノ支那諸帝、高麗朝鮮ノ諸王ハ、御生年ニ由リ（繼體天皇ノ御生年ハ、古事記ノ享年ト、崩年ノ干支トニ據リテ推シタルナリ）、支那三代及ビ三韓ノ帝王ニハ、生年ノ知レザル者モアレバ、即位ノ年ニ由リ、其間ノ年數ヲ、世數ヨリ一ヲ減ジタル者ヲ以テ除シテ、一世ノ平均年數ヲ出ダセリ。此平均年數ヲ、數ノ多寡ニ依リテ次第スレバ、次ノ如シ。

六十八年	皇朝上代	五十三年	高句麗上代　新羅上代朴氏
五十二年	百濟上代	四十二年	新羅上代昔氏
三十八年	商	三十五年	淸
三十三年	夏	三十一年	漢　後高麗
二十九年	宋　新羅	二十八年	皇朝　高句麗
二十七年	周　朝鮮	二十六年	金　元　明
二十五年	唐　遼	二十四年	百濟
十七年	後魏		

此ノ表中、初ノ四行ヲ除ケバ、年數ノ最モ多キ者ハ、商ト清トニシテ、最モ少キ者ハ、後魏ナリ、商人ハ、兄終弟及トテ兄弟相嗣グノ風盛ニシテ、王統ハ、常ニ少子ノ裔ニ歸シ、清朝ノ家風ニテハ、皇嗣ヲ定ムルニ、長ヲ擇ブノ制ナク、大抵三四男聖祖ハ、世祖ノ第三子、世宗ハ、聖祖ノ第四子、高宗ハ、世宗ノ第四子、文宗ハ、宣宗ノ第四子、或ハ八九男太宗ハ、太祖ノ第八子、世祖ハ、太宗ノ第九子、甚シキハ十五男仁宗ハ、高宗ノ第十五子ヲ以テ位ヲ嗣ギタルガ故ニ、毎世ノ年數、此ノ如ク增シタリ。又後魏ノ諸帝ハ子ヲ生ムコト甚早ク、景穆太子ハ、十三歲ニテ文成帝ヲ生ミ、文成帝ハ、十五歲ニテ獻文ヲ生ミ、獻文帝ハ、十四歲ニテ孝文帝ヲ生ミ、孝文帝ハ、十七歲ニテ宣武帝ヲ生ミ、高祖父ナル景穆太子ト玄孫ナル宣武帝ト、年齡ノ差僅ニ五十五ナレバ、此ノ四世ノ間ノミニテハ、平均年數、實ニ十四年ニ過ギズ。商清ノ長キト後魏ノ短キトハ、皆希有ノ例ニシテ、平均年數ノ最モ普通ナルハ、二十五六年ヨリ三十一年マデノ間ニアリ、此ノ數ハ、即父子ノ年齡ノ差ニシテ、一世ノ平均年數ナリ。故ニ論語ノ「必世而後仁」トアルヲ孔安國ハ「三十年曰世」ト注シ、許愼ノ說文ニハ「三十年爲一世、從卅而曳長之亦取其聲」トアレバ、世ノ字ハ、本卅ノ義ヲ取レル字ナリ。然ルニ韓史上代ノ年紀ハ、此ノ普通ノ數ヲ超過シテ、殆ト二倍ニ至レリ。

又百濟ノ古爾王ハ、其ノ父蓋婁王ノ沒後六十八年ニ立チ、在位五十三年ニ及ビタレバ、古爾ノ壽ハ、少クトモ百二十餘歲トナルベク、比流王ハ、其ノ父仇首王ノ沒後七十一年ニ立チ、在位四十一年ニ及ビタレバ、比流ノ壽モ、少クトモ百十餘歲トナルベシ。新羅ノ上代ニモ、壽九十九歲ナル脫解尼師今アリ。又逸聖尼師今ハ、儒理尼師今ノ長子ニシテ、儒理ノ沒後七十七年ニ立チ、在位二十一年ニ及ビタレバ、壽百歲ニ過グベシ。訖解尼師今ハ、其ノ父于老角干ノ沒後五十七年ニ當リテ、「群臣議曰、訖解幼有老成之德、乃奉立之」トアルハ、既ニ不都合ナルニ、其ノ後在位四十七年ナルハ、又異常ノ長壽ナリ。高句麗王臣連ハ壽九十八歲ニシテ、長壽王ノ名ヲ擅ニシタルニ、其ノ上代ニハ、太祖大王ハ在位九十四年、壽百十九歲、其ノ弟次大王ハ、七十六歲ニテ立チ、九十五歲ニテ無道ヲ以テ弑セラレ、又其ノ弟新大王ハ、七十七歲ニテ立チ、壽九十一歲、新大王ノ國相明臨答夫ハ、壽百十三歲トアリ。又慕本王ノ弑ニ遇ヒシ時、群臣、王ノ叔父再思ヲ立テントセシヲ、再思ハ、年老イタルニ由リテ、其ノ子宮（即太祖大王）ニ讓レリト見ユレバ、是時再思ハ、少クトモ既ニ五十ヲ逾エタル人ナルベキニ、其ノ季子新大王ハ、コレヨリ三十六年ノ後ニ生レタリ。又駕洛國始祖首露王ノ壽百五十八歲ノ外ニ、首露ノ后許黃玉ノ壽百五十七歲ナルアリ。あすとん氏ガ、韓史ノ長壽者ハ、長壽王ノミノ如クニ云ヘルハ、疎ナリ。三韓ニ文學ノ行ハレシハ、紀元一千餘年、東晉ノ末世ヨリ後ニアレバ、此ノ諸王ノ事跡ハ、皆後史ノ追錄ニ成レル者ナルガ故ニ、カヽル不都合ノ事多キナリ。

然ラバ紀元千年以前ナル韓史ノ年紀ハ、皆信ズルニ足ラザルカト云フニ、コレ又然ラズ。高句麗ノ事跡ハ、後漢書三國志晉書ニ詳カニシテ、句驪王宮、即韓史ノ謂ハユル太祖大王ガ、漢ノ和帝元興元年紀元七百六十五年ニ遼東ニ入寇シテヨリ以後ハ、兩國ノ史ヲ對照シテ、其ノ世系年代ヲ考フルニ、甚シキ不都合ノコトアラズ。あすとん氏ハ西曆第一年紀元六百六十一年漢平帝元始元年ヨリ五百年紀元千百六十年、齊帝蕭寶卷永元二年マデノ間ニ、朝鮮ノ事蹟ノ、支那史ニ記セル者、十六條アリト云ヘレドモ、其ノ實ハ、四十餘條アリテ、十六條ニ止ラズ。且西曆第一世紀中ニモ、年代ノ合フ者一條アルガ如ク云ヘレドモ、コハ、後漢書東夷傳ノ文ヲ、三國史記ノ撰者ハ、其ノ儘取リテ、其ノ相當ノ年ニ記シタルノミニシテ、後漢書ノ文ニ句驪王ノ名ノ見エタルニモ非ザレバ、年代ノ合ヘル證トハ爲ラズ。故ニ高句麗ノ年代ノ考證スベキハ、西曆第二世紀以後ニ在リ。委シクハ朝鮮古史考ニ論ジタリキ。

百濟ノ上代ノ諸王ノ名ハ、漢史ニ一タビモ見エザレドモ、晉書簡文帝紀咸安二年紀元千三十二年ニ至リテ「遣使拜百濟王餘句、爲鎭東將軍、領樂浪太守」トアル餘句ハ、即近肖古王ニシテ、咸安二年ハ、近肖古王ノ二十七年ナレバ、年代合ヘリ。コレヨリ以後ハ、諸王ノ名、屢漢史ニ見エテ、年代考證スベシ。あすとん氏ガ「紀元三

百八十一年ト云フ年ハ、支那ノ史ニヨリテ確メラル」ト云ヘルハ、杜氏通典邊防一新羅ノ處ニ「苻堅時、其王樓寒遣使衞頭朝貢云々」トアルニ由リテ、三國史記新羅本紀奈勿尼師今二十六年（紀元千四十一年、晉孝武帝太元六年、即西暦三百八十一年）ノ處ニ「遣衞頭入苻秦貢方物云々」記シタルヲ指セルナリ。然レドモ通典ニハ、其ノ年ヲ明示セズ、且樓寒ノ名ハ、韓史ト合ハザレバ、此ノ一事ヲ以テ、年代ノ確證トハ爲シ難シ。總ベテ新羅ノ事蹟ハ、漢史ノ記載甚疎ニシテ、其ノ年代ヲ證スベキ者ナケレドモ、紀元千十六年（百濟近肖古王十一年）ニ即位セル奈勿尼師今以後ハ、百濟高句麗トノ關係漸ク頻繁トナリタレバ、同氏ノ云ヘル如ク、三國互ニ制シテ誇誕ヲ逞スルコトヲ得ザラシムルノ理アリテ、新羅ノミ年代ノ大差ヲ生ズルコト無カラン。サレバ百濟新羅ノ上代ノ年曆ニ延長セル所アリトモ、ソハ、百濟ノ契王、新羅ノ訖解尼師今以前ニ在リテ、近肖古王以下ノ時代ニ於テハ、年紀ニ疑フベキ所ナケレバ彼ノ百二十年ノ差ヲ以テ、韓史ノ誤リト見做スベキ理ナシ。

第六章　古事記ノ崩年干支

神功皇后攝政ノ御世ハ、百濟近肖古王ノ世（紀元千二三十年、晉哀帝々奕ノ世）ニ當レルコトハ津ノ連眞道ノ上表其ノ他ノ諸證ニ由リテ、已ニ明カナレバ、コレヨリシテ新羅御親征ノ年ハ、近肖古ノ何年ニ當レルカ、應神仁德履仲反正諸帝ノ眞ノ時代ハ、日本紀ノ年紀ヨリ幾年ノ後ニ在ルベキカヲ考究セントス。此等ノ年紀ヲ求ムルニ最モ必要ナル材料ハ、古事記舊本ノ註ニ崇神成務以下十五帝ノ崩年ヲ干支ニテ記シタルモノ、コレナリ。其ノ文、左ノ如シ。

崇神天皇ノ條ニ、戊寅年十二月崩。　成務天皇ノ條ニ、乙卯年三月十五日崩也。
仲哀天皇ノ條ニ、壬戌年六月十一日崩也。　應神天皇ノ條ニ、甲午年九月九日崩。
仁德天皇條ニ、丁卯年八月十五日崩也。　履中天皇ノ條ニ、壬申年正月三日崩。
反正天皇ノ條ニ、丁丑年七月崩。　允恭天皇ノ條ニ、甲午年正月十五日崩。
雄略天皇ノ條ニ、己巳年八月九日崩也。　繼體天皇ノ條ニ、丁未年四月九日崩。
安閑天皇ノ條ニ、乙卯年三月十二日崩。　敏達天皇ノ條ニ、甲辰年四月六日崩。
用明天皇ノ條ニ、丁未年四月十五日崩。　崇峻天皇ノ條ニ、壬子年十一月十三日崩。
推古天皇ノ條ニ、戊子年三月十五日癸丑崩。

此等ノ崩年月日ハ、眞福寺本、慶長寫本、（神龍院ヨリ出デタル原本ニ依リ、德川家康公ノ命ニテ謄寫セシ者）曼殊院本（寬永以前ノ古寫本）、學習院本、寬永刋本等、何レモ皆藏ヒタルニ、度會延佳ガ校刻セル鼇頭本ニハ、之ヲ刪落セルハ、其年月日ノ大概日本紀ト合ハザル故ナラン。本居氏ハ、鼇頭本ニ依リテ、記文ニハ此等ノ文ヲ省キタレドモ、傳ニハ必之ヲ引用シ、決シテ等閑ニハ看過セザリキ。

記傳二十三水垣ノ宮ノ卷、天皇御歲壹佰陸拾捌歲ノ條（五十六丁五十七丁）ニ「舊印本、眞福寺本、又一本などに、此ノ次に戊寅ノ年十二月ニ崩と云七字の細註あり。今は延佳本又一本に無きに依れり。抑如此くなる細註此より次々の御世の段にも、往々あり。下卷なる御世々々には、無きは少し、さて此は、みな後に書キ加へたる物ぞとは、一わたり誰レも思ふことなれども、猶熟思ふに、是レも甚古き事とぞ思はるゝ。其故は、何れも其ノ支干年月、皆書紀に記せると異なり。たゞ下卷の最末に至りてのは、書紀と合へり。若いたく後ノ世の人の所爲ならむには、必書紀の年紀に依てこそ記すべきに、彼ノ紀と同じからざるは、必ズ他古書に據ありてのことゝ見えたればなり。（支干年月などは、上代のは、必しも書紀の如きのみには非ずして、そのかみ古書とも、各異なることあるべければ、此と彼とは、正しくは合まじきことわりなり。さて此注、若後世人ならば、たとひ世にさる古書ともの遺てはありとも、書紀をさしおきて其には據まじきことなり）さて最末に至ては、書紀と合へるは、近キ御代にて詳なれば、何の書も異ならざりしが故なるべし

又此御世より先の段には、かゝる注なきは、其の據れる書に、開化天皇までは、崩の年月を記さゞりし故なるべし。此はた後世人ならば、必書紀に依て、神武天皇より以來漏さず皆注すべきなり。故ㇾ思ふに、若ㇱくは安麻ノ呂朝臣の、一書に據ㇼて自書ㇶ加へられたる物にもあらむか。本文に書連けずして、細註にせるは、阿禮が誦る詞に非ず、別に私に加へられたる物なる故なり。たとひ彼ノ朝臣には非ずとも、必古き世の人のしわざにてはあるべし。世人は、書紀に合ざるを以て此を取らざるめるを、已然れども、今これを取ㇻざる故は、稗田ノ老翁が誦傳へたる勅語の舊辭には非じと見ゆればなり。彼紀と合さるが返りて心にくゝ思はるゝぞかし。さて戊寅ノ年は、書紀にては、此御世の五十五年なれば、十三年の差あり、此ㇾも、一書の年紀なるべし。必ㇲ書紀に泥むべきには非ず。月は、合へり」ト云ヒ、成務仲哀應神仁徳諸帝ノ條ニモ、記ノ崩年月日ハ古ノ一ㇳノ傳ナルベキ由ヲ云ヒ、履中天皇ノ條ニハ「壬申ノ年は、書紀にては、仁徳天皇の六十年、又允恭天皇の二十一年にあたり、又月も日も合ざるは、各一ㇳの傳へなるべし。但し此記には、仁徳天皇を丁卯ノ年崩とあるに依るときは、壬申ノ年は、此天皇の五年にあたるを、若ㇱ仁徳天皇の崩し年を元年として計ふれば、六年にあたれば、書紀に六年とあるは、あへり」ト云ヒ、雄略天皇淸寧天皇ノ條ニ至リテハ、書紀ノ紀年ヲ離レテ、全ク此等ノ干支ニ依リテ年ノ數ヲ求ムベキ說ヲサヘ述ベラレタリ。故ニ本居內遠氏ハ、祖父ノ大人ノ遺意ヲ受ケテ、紀ノ歷代ノ年紀ヲ改正シテ、記ノ干支ニ合ハシメント欲シ、古事記年立ト云ヘル書ヲ著シタレドモ、未ダ稿ヲ脫セズシテ沒セリ。落合直澄氏、又其ノ趣旨ヲ擴張シテ、帝國紀年私案ヲ著シ、崇神天皇以前、記に崩年干支ヲ記サヾル時代マデモ、記ノ享年ト紀ノ享年及在位年數トヲ種々ニ錯綜轉換シテ、紀ト異ナル新年紀ヲ製出センコトヲ務メタリ。サレドモ內遠落合ノ二氏ハ、紀ノ年紀ヲバ破レドモ、歷代ノ年數ヲ減縮セザランコトヲ務メタルガ故ニ、神功應神紀ナル百濟王ノ年代ハ、舊ノ如ク韓史ト齟齬シ、第一章ノ第四第五第六條ニ云ヘル如キ不都合ノ事ハ、更ニ減ズル事ナクシテ、古史ノ疑點ハ益解釋スベカラザレバ、二氏ノ著書ハ、勞シテ功ナキ者ナリキ。

菅政友氏ノ古事記年紀考史學會雜誌第十七號ニ、「古事記ノ古キ本ドモニハ、何レモ崇神天皇ヨリ以下推古天皇マデヲ、干支年月日崩ト記サレタルニ、本居翁ノ傳本ニ載ラレザルハ、干支ニカケテシルサレタルガ漢ザマナルヲ疑ヒテナルベケレド、己レハ、其ノ干支モテ記サレタルガ却テ古キ傳ヘナリト按ハル丶ハ、往古年ニカケテ事ヲシルスニハ、某宮治天下天皇干支年ト、年ヲバ干支モテイヘルガ、常ノ習ヒニテ、其源ハ韓國ノ定メニヨラセ給ヒシコトハ、日本紀ノ註ニ引ケル百濟記ニ、「壬午歲、新羅不奉貴國、」百濟新撰ニ、「辛丑年、蓋鹵王遣王弟琨支君向大倭、」百濟本記ニ、「大歲辛亥三月、師進至安羅」ナドアルヲモテ知ルベシ。又記載ノ崇神天皇以前ニ及バザリシハ、崇神紀ニ「十二年、異俗重譯來、海外旣歸化」トモ「六十年、任那國遣蘇那曷叱智令朝貢」トモ見エテ、此ノ頃ヨリ外國人ノ、タマ〳〵ハ來リシカバ、ソレラノ人ノ、己ガ國ノ式モテ記シオキタリシモノモ、又朝廷ニテモ、其法ニヨリテシルサセ給ヒシモノモアリテ、カツ〳〵ハ世ニモ傳ハリタリシト覺シケレバ、コヽニ崇神天皇ヨリ以下ヲノミ載ラレタルハ、却テ古傳ヲソガマヽニ傳ヘタル一ノ證トスルニ足ラン」ト云ヒテ、古事記ノ仲哀天皇ノ崩ジ給ヘル壬戌ノ年ハ、紀ノ年紀ニテハ、仁徳天皇ノ五十年ニ當リテ、紀ノ崩年ヨリ百六十二年ノ後ニ在リトシ、應神仁徳以下諸帝ノ崩年ハ、其ノ以後ニ於テ順次ニ推定セリ。此ノ說ハ菅氏ニ始マレルニハ非ズ、舊修史局ノ說モ、大抵之ニ同ジクシテ星野博士ガ、嘗テ局說ノ要旨ヲ摘錄シタル者、金港堂雜誌「文」第一卷第十二號ニ見ユ。

今菅氏ノ說ニ從ヒ、記ノ崩年干支ニヨリテ、歷代ノ年紀ヲ推シ、前帝崩御ノ次年ヲ以テ後帝ノ元年ト定メ之ヲ紀ノ年紀及神武紀元ノ年數ニ配當シ、參照ノ爲ニ支那百濟ノ年紀ヲ附載スレバ、左表ノ如シ

干支	古事記崩年	在位年數	日本紀ノ年紀	神武紀元	支那ノ年紀	百濟ノ年紀
戊寅	崇神天皇崩		神功皇后攝政五十八年	九百十八年	魏帝曹髦甘露三年	古爾王二十五年

乙卯	成務天皇崩	垂仁景行成務三朝通計九十七年	仁德天皇四十三年	千十五年	晉穆帝永和十一年	近肖古王十年
壬戌	仲哀天皇崩	七年	仁德天皇五十年	千二十二年	晉哀帝隆和元年	近肖古王十七年
甲午	應神天皇崩	神功應神兩朝通計三十二年	仁德天皇八十二年	千五十四年	晉孝武帝太元十九年	阿莘王三年
丁卯	仁德天皇崩	三十三年	允恭天皇十六年	千八十七年	宋文帝元嘉四年	毗有王元年
壬申	履中天皇崩	五年	允恭天皇二十一年	千九十二年	宋文帝元嘉九年	毗有王六年
丁丑	反正天皇崩	五年	允恭天皇二十六年	千九十七年	宋文帝元嘉十四年	毗有王十一年
甲午	允恭天皇崩	十七年	安康天皇元年	千百十四年	宋孝武帝孝建元年	毗有王二十八年
己巳	雄略天皇崩	安康雄略兩朝通計三十五年	仁賢天皇二年	千百四十九年	齊武帝永明七年	東城王十一年
丁未	繼體天皇崩	清寧顯宗仁賢武烈繼體五朝通計三十八年	繼體天皇二十一年	千百八十七年	梁武帝大通元年	聖王五年
乙卯	安閑天皇崩	八年	安閑天皇二年	千百九十五年	梁武帝大同元年	聖王十三年
甲辰	敏達天皇崩	記曰治天下壹拾肆歲也宣化欽明敏達三朝通計四十九年	敏達天皇十三年	千二百四十四年	隋文帝開皇四年	威德王三十一年
丁未	用明天皇崩	三年、記曰、治天下參歲	用明天皇二年	千二百四十七年	隋文帝開皇七年	威德王三十四年
壬子	崇峻天皇崩	五年、記曰、治天下肆歲	崇峻天皇五年	千二百五十二年	隋文帝開皇十二年	威德王三十九年
戊子	推古天皇崩	三十六年、記曰治天下參拾漆歲	推古天皇三十六年	千二百八十八年	唐太宗貞觀二年	武王二十九年

菅氏ハ、垂仁景行成務三朝ノ年數ニ付「崇神天皇崩御ノ明年己卯ノ年ヨリ乙卯年迄ヲ、甲子一運リノ中ニテ算フレバ、三十七年、二運リニテハ、九十七年ナリ、他ニ證トスベキモノ無ケレバ、一運ナリシカ、二運ナリシカ、決メ難シ」ト云ヒタレドモ、三十七年ニテハ、次ノ仲哀天皇モ、在位僅ニ七年ナレバ、四朝ヲ合セテ、唯四十二年ナリ。仲哀天皇ノ四世ノ祖ナル崇神天皇ノ崩年ハ、四世孫ノ崩年ヨリ唯四十二年前ニアリトハ思ハレザレバ、三朝ノ年數ハ、前表ノ如ク九十七年ト見ル方、適當ナルベシ。サレドモ干支ヲ以テ年ヲ紀スルコトハ、百濟降附ノ後ニ始マレルニテ、ソレヨリ以前ノ崩年ハ、後世ヨリ追算セル者ナルベケレバ、崇神天皇ノ崩年ノ如キ、數代ヲ隔テタル干支ノ記ハ、固ヨリ其精確ヲ保スベカラズ。菅氏ハ、崇神天皇ノ頃ヨリ韓人ノ入リ來リテ、紀年ノ法モ始マレルガ如ク云ヒ、又吉田東伍氏ノ日韓古史斷ニモ、神功皇后ノ新羅征伐ニ先ダチテ、西北海表ノ交通往復ノ存在シタルコトヲ論證シテ、文字記錄ノ術ハ崇神ノ朝ヨリ始マレリト推定シタレドモ、皇國ノ文學ハ、應神天皇ノ御世ニ百濟國ヨリ傳ハリタルコトハ、史ニ明文アリ、世ニ定論アリテ、動スベカラズ。且崇神天皇ノ御世ハ、星野吉田兩氏ノ說ニ從ヘバ、漢ノ靈獻ノ間ニ當リテ、百濟近肖古王ノ末年ヨリ百八九十年ノ前ニアリ。菅氏ノ說ニ從ヒ、曹魏ノ世ニ當レリト見ルトモ、猶近肖古王ノ末年ヨリ百二三十年ノ前ニアレバ、彼ノ韓國スラ未ダ文學ノ開ケザリシ時ナルヲヤ。韓國ノ文化ノ事ハ、予嘗テ朝鮮古史考ニ詳論セリ。

星野博士ハ、應神ノ崩年甲午ハ、仲哀ノ崩年壬戌ヲ去ルコト三十二年ナリ、應神ノ、仲哀崩後ニ降誕セシハ、紀記異辭ナケレバ、應神ノ享齡三十三歲ナルガ如シ。然レドモ其間神功ノ攝政アリ。應神又長壽ノ傳說アリテ、生前ニ大山守大鷦鷯二皇子ノ數子ヲ擧グルヲ見レバ、三十二年ニテハ、年代稍促ルヲ覺ユ」トテ、仲哀天皇ノ崩年ヲ前表ノ壬戌年ヨリ六十年前ニ置キ、神功應神兩朝ノ年數ヲ九十二年トシタリ。日韓古史斷ノ年表モ、コノ說ニ從ヘリ。カクテハ仲哀天皇ノ崩年ハ、紀元九百六十二年、晉惠帝大安元年、百濟汾西王五年ニ當リテ、近肖古王ノ即位ヨリ四十六年ノ前ニアルコト、ナレリ。然レドモ百濟ノ始メテ朝貢セシハ近肖古ノ時ニシテ、其ノ朝貢ハ、仲哀天皇ノ崩後、神功皇后ノ新羅ヲ征シ給ヘル結果ト見ユレバ、其ノ間ニ數

十年ノ隔タリアルベキニ非ズ。サレバ彼ノ壬戌ノ年ハ前表ノ如ク近肖古ノ十七年ニシテ新羅ニテハ奈勿尼師今ノ七年ナリ三國史記ノ新羅本紀奈勿尼師今九年ノ處ニ「夏四月、倭兵大至、王聞之、恐不可敵云々、倭人恃衆直進、伏發擊其不意、倭人大敗走」トアルハ、勝敗ヲ顚倒シタル記載ナレドモ、前々年ノ役ヲ誤傳シタル者ナルベシ。

應神天皇ノ崩年甲午ハ、前表ニ依レバ、百濟ノ阿莘王三年ナリ。應神紀ハ、阿花王（即阿莘王）三年ヲ以テ天皇即位トシ、コノ五年以後ニ於テ、三韓交涉ノ事跡甚多クシテ、其ノ中ニハ特ニ天皇ニ關スル記事アリ。今紀ノ記載ノ順序ニ從ヒテ、之ヲ節錄センニ、「七年、命武內宿禰、領諸韓人等作池、因以名池、號韓人池」「八年、百濟人來朝（百濟記云、阿花王立云々、遣王子直支于天朝、以修先王之好也）」「十四年、弓月君自百濟來歸云々」「十五年、百濟王遣阿直岐貢良馬二匹云云」「十六年、王仁來之、則太子菟道稚郎子師之云々、是歲、百濟阿花王薨、天皇召直支王謂之曰、汝返於國以嗣位、仍且賜東韓之地而遣之」「二十年、倭ノ漢ノ直ノ祖阿知ノ使主、其子都加使主、並率己之黨類十七縣而來焉」「二十五年、百濟直支王薨、即子久爾辛立爲王、大倭ノ木滿致執國政、與王母相婬、多行無禮、天皇聞而召之」「二十八年、高麗王遣使朝貢、因以上表、其表曰、高麗王敎日本國也、時太子菟道稚郎子、讀其表怒之、責高麗之使、以表狀無禮、則毀其表」ナドアリ。

阿直岐王仁等ノ來朝ハ、古事記應神天皇ノ段、又續紀延曆九年津ノ連眞道等ノ上表、延曆十年文ノ忌寸最弟等ノ上表ニ據レバ、近肖古近仇首二王ノ時ノ事ナルヲ、紀ニハ阿花王ノ時ノ事トシテ、甲午ノ年ヨリ後ニ記シタルハ、錯誤トモ見ルベケレドモ、直支ノ來朝マタ歸國ノ事ハ、韓史ニモ明文アリテ、甲午ノ年ノ後ニアリシコト著シク、又韓人ニ池ヲ作ラセタル事、弓月ノ君、阿知ノ使主等ノ來朝ノ事ハ、古事記ニモ應神天皇ノ段ニ見エテ、コノ天皇ノ御世ノ事ナルコト、疑ヒナク、且星野博士ノ云ヘルガ如ク、コノ天皇ノ御年三十三歲ニテハ、短促ニ過ギタレバ、甲午ノ年トアルハ、戊午ノ年ノ誤リニシテ、允恭天皇ノ崩年甲午ト混シタル者ナルベシ。戊午年ハ、紀元千七十八年、晉ノ安帝義熙十四年、百濟腆支王（即直支王）十四年ニシテ、甲午ノ年ヨリ二十四年ノ後ニアレバ、韓人池ノ事、直支ノ來朝マタ歸國、弓月ノ君、阿知ノ使主等ノ歸化、菟道ノ稚郎子ノ太子ノ高麗ノ表ヲ毀レタル事ドモハ、皆紀ニ載錄セル順序ノ儘ニテ、コノ天皇ノ御世ノ事トナリ、又天皇ノ御年モ、五十七歲トナリテ、生前ニ二皇子ノ數子ヲ擧ゲ給ヘルモ協ヘリ。コノ天皇ノ崩年ニツキテハ、猶云フベキ事アレドモ、其ハ他日ニ讓ラン。

應神天皇ノ紀年ヲ戊午トスレバ、神功應神兩朝ノ年數ハ、通計五十六年ニシテ、仁德天皇ノ在位年數ハ、九年ナリ。カクテ仲哀天皇崩御ノ翌年ヨリ允恭天皇崩御ノ年マデ三世五代ノ年數ハ、通計九十二年ナルヲ紀ノ年紀ニテハ、實ニ二百五十三年トナリテ、其ノ延長セルコトハ、殆ド三倍ニ近シ。允恭天皇ノ崩年甲午ハ、紀ノ崩年癸巳ノ翌年ニシテ、コヽニ至リテハ、記紀ノ差僅ニ一年トナリタレバ、記傳（卌九ノ廿丁）ニモ「甲午ノ年は、書紀にては、安康天皇の元年なり、此は此天皇の崩し丶年を安康天皇の元年とすれば、合へり。」ト云ヘリ。雄略天皇以後ハ、紀ノ年紀、大抵韓史ニ符合シテ、大ナル錯誤アリトモ見エザレバ、年紀ノ延長セル所ハ、允恭天皇以前ノ世ニアリト斷言スルコトヲ得ベシ。

雄略紀五年ノ條ニ百濟ノ加須利君ガ、弟軍君ヲ遣シテ入侍セシムル事ヲ詳叙シテ、其ノ注ニ百濟新撰ヲ引キテ、「辛丑年、蓋鹵王遣弟琨支君、向大倭侍天皇、以脩先王之好也」トアリ。加須利君ハ、即韓史ノ蓋鹵王ニシテ、五年辛丑ハ蓋鹵王ノ七年ナリ。又「二十年冬、高麗王大發軍兵、伐盡百濟云々」トアルハ、三國史記ニテハ、蓋鹵王二十一年乙卯（雄略天皇十九年）九月ノ事ニシテ、一年ノ差アレドモ、紀ノ注ニ百濟記ヲ引キテ、蓋鹵王乙卯年ト云ヘルハ、精密ニ合ヘリ。又二十一年ノ條ニ、久麻那利ヲ以テ汶洲王ニ賜ヘルコト見ユ。汶洲王ハ、

韓史ノ文周王ニシテ、二十一年ハ文周王ノ三年ナリ。二十三年、百濟ノ文斤王（韓史ノ三斤王）薨ジ、天皇昆支王ノ子東城王末多ヲ援立シ給ヘルコトハ、韓史ニハ、皇朝ノ援ヲ得タルコトヲ記セザレドモ、二王ノ薨立ノ年ハ、合ヘリ。

雄略紀ノ年紀ハ、此ノ如ク精確ニシテ、錯誤アリトハ見エザルニ、記ニ己巳ノ年崩トアルハ、紀ノ崩年己未ヨリ十年ノ後ニアリテ、仁賢天皇二年ニ當レバ、己巳ハ、恐ラクハ己未ノ誤寫ニシテ、本ハ紀ノ崩年ニ同ジキ者ナルベシ。

記傳（四十二）朝倉ノ宮ノ下卷（五十四丁 五十五丁）天皇御年壹佰貳拾肆歲ノ條ノ細書ニ「此ノ天皇の紀年、いと不審し。まづ書紀も信がたき事あるは、大后若日下ノ王は、仁德天皇の皇女に坐スを、安康天皇の元年に大長谷ノ命のために聘賜ふとある其年は、大長谷ノ命は、卅七歲にあたり、若日下ノ王は六十餘歲になり賜ふべし。たとひ御父天皇崩坐、生レ坐りとしても、五十六歲なれば、聘賜ふべき御齡にあらず。又此天皇允恭天皇の七年に生レ坐て、位に坐スこと廿三年にて崩坐ては、彼ノ引田部ノ赤猪子が事なども、年ノ數合ハざればなり。故レ今書紀の紀年を離れて、別に此記の御代々々の細注に依て考ふるに、仁德天皇丁卯ノ年崩とある年は、即位五十五年なり。履仲天皇壬申ノ年崩とある年は、書紀にては、仁德天皇ノ六十年なり。反正天皇丁丑ノ年崩とある年は、書紀にては、仁德天皇ノ六十五年なり。允恭天皇ノ甲午ノ年崩とある年は、仁德天皇の八十二年なり。雄略天皇己巳ノ年崩は、書紀にては、仁賢天皇の二年なるを、此年紀に依りて、此ノ天皇御年百廿四歲なるときは、仁德天皇の五十四年に生レ坐るにて、大御父允恭天皇の五十歲の御時なり。さて安康天皇ノ段には細注闕たれば、姑く書紀に依て、其御世の三年崩として、次に此雄略天皇の元年は戊戌ノ年、御齡三十三の御時にて、書紀にては、仁德天皇八十六年とせる年にして、其より己巳ノ年まで在位九十二年なり。そもそも此ノ年紀に依るときは、仁德天皇又允恭天皇などの御世、書紀とはこよなく縮まりて、年ノ數いたく異なれども、其は、必しも書紀になづむべきに非ず。彼ノ紀に、繼體天皇は、廿五年に崩として、分注には、或本ニ云ク二十八年甲寅崩とあり。やゝ近き御世すら、なほかく異なる傳へありけむには、況て其より以往をや。此記の分注も、上に云る如く、古き一ツの傳へとおぼしくて、右の紀年に依るときは、仁德天皇の崩坐シしより安康天皇の元年まで、三十年に滿ざれば、大后若日下王の御齡も、たがふことなく、又此ノ天皇の御世久しければ、赤猪子が事も、よく年ノ數合ツなり。又安康天皇崩坐ッし時、此ノ天皇男童とあるは、何レの說に就ても合ざるが如くなれども、凡て袁具那と云稱は、必しも齡には拘らざりけむこと、傳四十の廿一葉に云るが如くなれば、是レはた違ふことなし。然れども右の細注の紀年にても、又いたく違ふことあり。意富祁ノ命袁祁ノ命は、御父押齒ノ王の殺され賜ひし時に、倭を逃去坐るよし見えたるに、若シ此ノ天皇の御世、九十二年を經たらむには、淸寧天皇の崩坐るころは、百餘歲になり賜ふべければなり。此ノ事はなほ次ノ御段に論ふべし。」甕栗ノ宮ノ卷ノ（傳四十三ノ十一丁）細書ニ「上に論へる如く、雄略天皇の紀年の、かにかくに不審しきにつきて、なほつらつら思ふに、此ノ二柱ノ王は、實は押齒ノ王の御子にはあらで御孫にや坐けむ。其は押齒王の殺され賜へる時に逃去賜ひしは、二柱にまれ一柱にまれ、其一柱は、此ノ意富祁ノ命の御父王にて、丹波播磨などに、民間に流離て薨坐けむ。さるは、御名を深くかくしぬびて、さる民ノ間に終世坐る故に、其ノ御名も傳はらず、世に知られ賜はぬなるべし。さて古は、子孫末々までも通はして子と云し故に、其王の御子だちをも押齒ノ王の御子と申して、遂に其ノ直の御子の如くに申傳へたるにや。次なる御名告にも、押齒ノ王の御子とは詔はて、末としも詔へるも、御孫なるが故にてもあらむか。若シ此ノ考への如くならば、此ノ二柱ノ王は、其父王の流離坐りし間に、丹波播磨などにて生坐て、此ノ時も實に童にぞ坐けむ。さて此ノ考へに就て思ふに、飯豐ノ王は、書紀の傳への如く、押齒ノ王の御子なりけ

むを、此ノ記に、二柱ノ王の姨とあるは、二柱ノ王は、押齒ノ王の御孫なれば、實に御姨なり。さて又雄略天皇を、上に云る如く、此ノ記の細注に依て、在位九十二年としたりとも、此ノ二柱ノ王を押齒ノ王の御孫とするときは、此時なほ童にても、年紀たがふことなし。但し此の時若シいまだ實に童ならば、生レ坐るは、彼父王の九十餘歳の時にあたるべければ、古ヘは百餘歳にても子ありしこととめづらしからざれば、其は、妨なし。さて上ノ件の考ヘ「こゝろみに一わたり擧ゲといへども、なほうけばりては云がたし、雄略天皇の御陵を毀たむと詔ひし事、又置目ノ姫が事などを思へば、押齒ノ王は、なほ御父とこそ聞えたれ、御祖父にては、物遠くぞきこゆる。されば此御事、慥には定めがたし。」トアリ。

右ノ論中、仁德天皇ノ皇女ガ、雄略天皇ノ皇后トナリ給ヘルコトニ就キテ、紀ノ年紀ヲ疑ヒ、記注ノ干支ニ依リテ、仁德天皇又允恭天皇ナドノ御世ノ年數ヲ縮メタルハ、然ルベキコトナレドモ、前章ノ推定ニ依リテ、應神天皇ノ御世ヲ紀元千年以後トスル時ハ、仁德天皇以下ノ四世ハ、本居氏ノ推定ヨリハ、一周甲ノ後ニ當リテ、允恭天皇ノ甲午ノ年崩ハ、紀ノ崩年ヨリ僅ニ一年後レタルノミナレバ雄略天皇ノ御世ハ、紀ノ年紀ノ儘ニテ更ニ不都合ナシ。此ノ天皇御年壹佰貳拾肆歳トアルハ、例ノ訛傳ナルベシ。彼ノ赤猪子ガ天皇ノ命ヲ仰ギ待チテ、八十歳ヲ經ヘタリト云ヘルハ、許多ノ年ヲ經ヘタル事ヲ形容セル辭ニシテ、眞ノ八十歳ニハ非ズ。又美和河ニ行幸シテ、赤猪子ニ仰言アリシハ、未ダ御位ニ即カセ賜ハザリシ時ノ御事ト見レバ、强テ在位年數ヲ延長セズトモ、年紀ノ合ハザルコトナシ。顯宗仁賢二帝ハ、押齒ノ王ノ子ニシテ、御父ノ殺サレ賜ヘル時ニ逃去リ賜ヒシ事、記紀ノ文意甚明カニ、又飯豐ノ王ハ、記ノ履中天皇ノ條ニ「青海郎女亦名飯豐ノ郎女」履中紀ニ「青海ノ皇女（一日飯豐ノ皇女）ト云ヘルハ、孰レモ押齒王ノ同母妹トシ、又記ノ清寧天皇ノ條ニ、「市ノ邊ノ忍齒別ノ王之妹忍海ノ郎女亦名飯豐王」ト云ヒ、顯宗仁賢二帝ニ對ヘテハ、其姨ト云ヒタレバ、履中天皇ノ皇女ナルコト論ナシ。唯顯宗紀ニ天皇ノ姉飯豐ノ靑ノ皇女トアレドモ、姉ハ決ク姑ノ誤寫ナリ。其ハ若天皇ノ御姉ニシテ、押齒皇子ノ御女ナラバ、皇女ト書カズシテ、女王ト書クベキ例ナレバナリ。（皇女モ女王モ、同ウクひめみこト讀メドモ、紀ノ例ニテハ、皇女ト書クハ、天皇ノ御女ニ限レリ。）又其ノ卷ノ初ノ分注ニ、譜第ト云ヘル書ヲ引キテ、市ノ邊ノ押磐皇子ノ三男三女ヲ擧ゲテ「其四曰、飯豐女王、亦名忍海部ノ女王」ト云ヒ、其ノ下ニ「一本以飯豐ノ女王列叙於億計ノ王之上」ト云ヒテ、飯豐王ヲ二柱ノ王ノ御妹又ハ御姉トセリ。コレモ、一ツノ傳ヘニハアルベケレドモ、紀ノ本文ニハ、皇女トノミアレバ、此ノ傳ヘニハ據ラレザリシナリ。履中天皇壬申ノ年崩トアル年ヲ、本居氏ノ推定ヨリ六十年ノ後トスレバ、紀ノ允恭天皇二十一年ニ當リテ、其ノ年ヨリ清寧天皇五年冬十一月飯豐ノ靑ノ尊崩マデ、五十三年ナレバ、履中天皇ノ皇女トシテ、年數合ハザルコトナシ。但扶桑略記ニ「甲子歳二月生、年四十五歳」トアレドモ、甲子歳ハ履中天皇崩御ノ八年前ナレバ、年四十五歳ニテハ合ハズ、六十一歳ニテ崩ジ賜ヘルナリ。彼ノ二柱王ヲ燒火少子ト云ヒ、又御名告ニ、押齒ノ王ノ末ト詔ヘル故ハ、記傳ノ本文ノ解釋、甚當レリ、「古ヘ火燒には、多く童子を用ひたりしなるべし。さるから必ズしも童ならぬをも火燒少子とぞ云けむ。さて此意富祁ノ命袁祁ノ命は、既に御父押齒ノ王の殺され賜へる時に逃去坐るよしあるを、其後雄略淸寧ノ二御代を經て、今童なるべきに非ず。袁祁ノ命治天下八歳、御年參拾捌歳と下にあるに依れば、此時は三十歳の御時なり。されば是レも火燒なるに因つて少子とは云るにて、實に童なりしよしにはあるべからず。然るを下文に坐左右膝上と云ヒ、書紀にも兩兒とあるなどは、火燒少子と云よりまぎれたる言なるべし。」又「直に御子なるを御子とは詔はて末とは大らかに詔ふなるべし」ト云ヘル解釋ニテ、聞エヌ事モアラザレバ、二柱ノ王ハ、記紀ノ明文ノ儘ニ、押齒ノ王ノ御子トシテ、何ノ不都合モナク、又雄略天皇ノ在位年數ヲ九十餘年ニ延長スベキ理由ハ更ニナシ。

顯宗天皇ノ在位年數ハ、紀ニテハ三年ナルヲ、記ニハ「治天下捌歳也」トアリ。コハ一ツノ古キ傳ヘナルベ

ケレドモ、清寧顯宗二帝ノ崩年皆闕ケタレバ、顯宗天皇ノ御世ハ、何ノ年ヨリ何ノ年マデ八年ナルカハ、考フベキ由ナシ。

武烈天皇ノ處ニモ、記ニ「治天下捌歲也」トアルハ紀ト合ヘリ。

繼體天皇ノ崩年ヲ記ニ丁未年トシタルハ、紀ノ崩年辛亥ノ四年前ナリ。コレモ、一ツノ傳ヘナルベケレドモ、繼體紀二十五年天皇崩ノ條ノ原註ニ「或本云天皇二十八年歲次甲寅崩、而此云二十五年歲次辛亥崩者、取百濟本記爲文、其文云大歲辛亥三月、師進至于安羅、營乞乇城、是月、高麗殺其王安、又聞日本天皇及太子皇子俱崩薨、由是而言、辛亥歲、當二十五年矣、後勘考者知之也」トアレバ、辛亥年トシタル方、タシカニ聞ユ。河村秀根ハ、コノ九十六字ヲ「私記攙入、或以爲本註非、凡撰紀時、有異同之說、則討論從實、豈復表其所出而如後世註家耶」ト云ヒタルハ、サル事ナレドモ、此ノ注ハ、痛ク後ノ世ノ者トモ見エズ。伴信友ノ日本書紀考ニ、今ノ日本紀ハ、數度ノ改修ヲ經シ者ナルコトヲ辯證セラレタルニツキテ考フルニ、此ノ註ニ引ケル或本ハ、改修ヲ經ザル紀ノ原本ニシテ、後人改修ノ時百濟本記ノ文ニヨリテ、二十八年ヲ二十五年ト改メタルナラン。二十五年辛亥ト安閑天皇元年甲寅トノ間ニ、壬子癸丑二年ノ空位アルヲ見レバ、紀ノ原本ニハ、繼體天皇ノ崩年ヲ以テ直ニ安閑天皇ノ元年トシタルヲ、改修者ハ、其ノ紀年ヲ辛亥ニ移シナガラ、安閑天皇ノ元年ヲバ舊ノ儘ニ置キタルガ如シ。

記ノ安閑天皇ノ卯年乙卯ハ、紀ト合ヘリ。

敏達天皇ノ崩年甲辰ハ、紀ノ崩年乙巳ノ前年ナレドモ、在位年數ハ、「治天下壹拾肆歲也」トアリテ、紀ト同ジ。コハ欽明天皇崩御ノ年ヲ以テ、直ニ敏達天皇ノ元年トシタルナリ。

用明崇峻推古三帝ノ崩御ハ、年モ月モ皆紀ト合ヘリ。唯用明天皇ノ在位ハ、紀ニテハ、丙午丁未ノ二年ナルヲ、記ニ「治天下參歲」トアルハ敏達天皇ノ崩年、紀ヨリ一年前ニアルガ故ニ、乙巳ノ年ヨリ計ヘタルナリ。崇峻天皇ノ在位ハ、戊申ノ年ヨリ壬子ノ年マデ五年ナルヲ、記ニハ「治天下肆歲」トアリ。四歲ニテハ、戊申年ハ、空位トナレバ、記ハ誤リナルベシ。推古天皇ノ在位ハ、癸丑年ヨリ戊子年マデ三十六年ナルヲ、記ニ「治天下參拾漆歲」トアルハ、崇峻天皇ノ崩年壬子ヨリ計ヘタルニヤ。菅氏ハ「漆ハ陸ノ誤ナラン」ト云ヘリ。

之ヲ要スルニ、安康天皇以下ノ十四朝ハ記紀撰著ノ時ヲ去ルコト遠カラザレバ年紀ノ差異モ甚少シ。但記ハ、一種ノ傳說ヲ其ノ儘ニ記シタルノミニシテ、殊ニ清寧顯宗仁賢武烈宣化欽明六帝ノ崩年ハ、皆闕ケテ考フベキ由ナキヲ、紀ハ各種ノ傳說ト記錄トニ依リテ撰述シタレバ、其ノ詳備セル事ハ、記ニ愈レリ。且武烈繼體欽明以下諸帝紀ニ見ユル三韓ノ事蹟ニツキテモ、其ノ年紀ハ、大柢韓史ニ符合スレバ、十四朝ノ年紀ハ、紀ニ從フヲ以テ安全トスベシ。

允恭天皇以前ノ年紀ハ、紀ノ儘ニテハ、信憑スベカラザレドモ、記ノ崩年干支、及ビ紀ノ記載ノ順序、韓史ノ年紀等ニヨリテ考覈スレバ、應神以下五帝ノ年代ハ、大概推定スベキコト、上文ニ述ベタルガ如シ。此ノ考ニヨリテ、仲哀天皇ノ崩年壬戌ヲ紀元千二十二年（晉穆帝永和十一年、百濟ノ近肖古王十年）ト定ムルトキハ應神天皇ハ今上ノ五十四世ノ祖ニマシ〳〵テ、其ノ御生年ハ今上ノ御生年ヨリ千四百九十年前ニアレバ、平均一世二十八年弱ナリ。成務天皇以前ハ、時代モ益古クシテ、他書ノ參考スベキモノナケレバ、唯記ノ崩年干支ニヨリテ算スルニ、崇神天皇ハ仲哀天皇ノ四世ノ祖ニマシ〳〵テ、其ノ崩年戊寅（紀元九百十八年、魏帝曹髦甘露三年）ハ成務天皇ノ崩年乙卯ノ九十七年前、仲哀天皇ノ崩年壬戌ノ百四年前ニアレバ、垂仁景行成務三朝ノ平均年數ハ、毎朝三十三年、仲哀マデ四朝ノ平均年數ハ、二十六年ナリ。

崇神天皇以前ノ年代ニ至リテハ、推考ノ達シ得ベキ限リニ非ザレドモ、試ニ一世三十年ノ率ヲ以テ、之ヲ

推シタランニハ、太祖神武天皇ハ、崇神天皇ノ九世ノ祖ニマシマセバ、崇神天皇マデ十世ノ年數ハ、三百年計リモアルベクシテ、神武天皇ノ創業ハ、今ノ謂ハユル神武紀元第七世紀ノ上半ノ頃（漢元帝ノ頃）ナルベク、綏靖安寧懿德孝昭孝安五朝ハ第七世紀ノ下半ヨリ第八世紀ノ末頃マデ（漢ノ哀帝ノ頃ヨリ順帝ノ頃マデ）ニ當リ孝靈孝元開化崇神四朝ハ、第九世紀ヨリ第十世紀ノ初メ、即紀元九百十八年戊寅年マデ（漢順帝ノ頃ヨリ魏帝曹髦ノ甘露三年マデ）ニ當レルナラン。コハ唯年代ノ概略ヲ試ニ推シタルマデニテ、數代ノ中ニハ、長キ御世モ短キ御世モアル習ヒナレバ、數十年乃至百餘年ノ違ヒハ免レザルコトナリ。

カク推考シ來レバ、第一章第五條ニ述ベタル、紀ノ年紀ノ差謬ノ由來ハ、解說ヲ待タズシテ、渙然ト氷釋シ、第四條ニ述ベタル、列聖ノ、六七十歲ヲ過ギテ皇長子ヲ生ミ給ヘリト云ヘル疑ヒモ、自ラ消滅シ、第六條ニ云ヘル、倭迹日百襲姫ノ命、大吉備津彦ノ命、稚武彦ノ命ノ子孫、並ニ秦漢ノ後裔ナドノ、法外ニ長壽ナルハ、年紀ノ延長ヨリシテ生ジタルコト、甚明カナリ。武內宿禰大臣スラモ、假令長壽ナリトモ、百歲若クハ百餘歲ニ過ギズシテ、人生ニ例ナキ者ニハ非ズ。

スベテ此等ノ疑點ハ、古史ノ事實ヲ蔽ヒ晦マセル雲霧ニシテ、之ガ爲ニ、記紀ニ記載セル祖宗ノ世系功德マデモ、人ノ疑惑ヲ免ル、能ハザルハ、イトモ歎カハシキ事ナルヲ、紀ノ年紀ヲ離レ、此等ノ雲霧ヲ排ヒテ、仔細ニ觀察スル時ハ、上代ノ事跡ト雖、奇怪妖妄ノ談ノ外ハ、信ズベカラザル理由アルコトナシ。英國人たいろる氏ノ言ニ「歷史ニ批評ヲ下スハ、之ヲ疑ハンガ爲ニ非ズシテ、之ヲ信ゼンガ爲ナリ。其ノ目的ハ、編者ノ誤謬ヲ發見センガ爲ニアラズシテ、其ノ說ノ採ルベキモノ幾何アルカヲ確知センガ爲ナリ」ト云ヘリ。余ガ、紀ノ允恭天皇以前ノ年紀ヲ採ラザルハ、即記紀ノ事跡ヲ信ゼンガ爲ナリ。

天明年間、藤井貞幹ト云ヘル學者、衝口發ト云フ書ヲ著シテ、神代ノ諸神ハ皆韓人ナリト放言シタル論中ニ、神武天皇元年辛酉ハ、日本紀ノ年紀ヨリ六百年後ニシテ、漢宣帝神爵二年辛酉ナリト云ヒケルヲ、當今ノ史家ニハ、卓見ナリナド評スル人アル趣ナリ。サレドモ藤井氏ガ、カク年紀ヲ縮ムル理由ハ、唯ニ須佐之男ノ命ヲ新羅ノ始祖ナリト思ヘルガ爲ニシテ、他ニ憑據アルニ非ズ。本居氏ノ鉗狂人ニ「日本紀の年紀を用ひずして、六百年違へりとする程のもの、辛酉とあるをば用ひたるは、いかに。かの元年の、かならず辛酉なるべきことは、何によりて知れるや。六百年を違へる物ならば、辛酉は、いよ〳〵おぼつかなき事ならずや。笑ふべし。さて論者の、かくの如く定めたる年紀も、又かの須佐之男ノ命を新羅王之といへると符合せず、いかにといふに、新羅の始祖元年は、漢の五鳳元年にあたり、神武帝の元年は、その三年前の神爵二年にあたらむに、帝の后の曾祖父なる須佐之男ノ命、新羅王ならば、かの始祖元年より百餘年の前に有べし。いかゞ」ト云ヘル如ク、イカニモ膚淺ナル考ナリ。太祖元年ハ、何ノ年トモ定ムベキ由ナケレドモ、紀ノ年紀ニ數百年ノ延長アルコトハ、上文ノ諸證ニ依リテ、疑ヒナキ事ナレバ、見ン人、此ノ論ヲ以テ、衝口發ノ類トナ思ヒ混ヘゾヨ。

又コノ年紀ノ推定ハ、古史考究ノ必要ヨリ出デタル者ニシテ、神武紀元ノ公稱ヲ改メントスルニハ非ズ。吉田東伍氏云「書紀々年は、我が帝國官民通用の大號なり。考定紀年は、我が歷史彼此參照の私稱なり。」彼ノ基督降生元年ナル者モ、近世史家ノ考究ニヨリテ、基督ノ眞ニ生レタル年ヨリ四年ノ後ナルコトヲ發見シタレドモ、之ガ爲ニ其ノ紀元ヲ改ムルコトナシ。況ンヤ太祖ノ創業ヲ六百餘年ノ後ニ繰リ下ゲタルハ、唯其ノ年代ノ概略ヲ推シタルノミニシテ、ソレト指スベキ年モ知レザル上ニ、謂ハユル神武紀元ハ、明治六年十月ノ官令ヲ以テ定マレル者ナレバ、日本紀ノ年紀ヲ信ズル人モ信ゼザル人モ、均シク通用スベキハ勿論ノ事ナリ。

外交繹史卷之二

朝鮮古史考

第七章　朝鮮古史史籍考

皇國ト朝鮮國ト交渉セル古代ノ事蹟ヲ明カニ知ラントスルニハ、先ヅ古朝鮮三國ノ建立沿革ノ略史ヲ考定セザルベカラズ。三國ノ史ヲ考究スルニハ朝鮮ノ古史ノミニハ據ルベカラズ、皇國支那ノ史書ニヨリテ其正譌ヲ稽フルコト、甚ダ必要ナリ。先ヅ支那ノ史ニテ朝鮮古代ノ事ヲ記シタルハ、漢ノ司馬遷ノ史記、後漢ノ班固ノ漢書、宋ノ范曄ノ後漢書、晉ノ陳壽ノ三國志、唐ノ房喬等ノ晉書、齊ノ沈約ノ宋書、梁ノ蕭子顯ノ齊書、唐ノ姚思廉ノ梁書陳書、北齊ノ魏收ノ魏書、唐ノ李百藥ノ北齊書、唐ノ令狐德棻等ノ周書、唐ノ魏徵等ノ隋書、唐ノ李延壽ノ南史北史、後晉ノ劉昫等ノ舊唐書、宋ノ歐陽修宋祁ノ新唐書等ナリ。其中後漢書ノ東夷傳ハ、三國志ノ東夷傳ニ依リテ、少シク增補改删シタルニ過ギザレバ、其ノ增補シタル所ノ外ハ、專ラ三國志ニ據ルヲ宜シトス。陳書北齊書ニハ外國傳ナク、外國朝貢等ノ事ノ本紀ニ見ユルノミナリ。南史北史ノ外國傳ハ、南北朝ノ諸史ヨリ節錄シタル者ナレバ、參考スベキ所甚少シ。新唐書ハ舊唐書ヨリ文省カリテ事增シタリト誇稱スレドモ、歷史ノ事蹟ヲ考フルニハ、舊書ニ如カズ、殊ニ外國傳ニハ、誤謬甚多シ。右ノ諸史ノ外ニ、唐ノ杜佑ノ通典、宋ノ司馬光ノ資治通鑑モ、參考スベキ所アリ。元ノ脫々等ノ遼史ノ地理志、清ノ顧祖禹ノ讀史方輿紀要等ハ、地理ノ考索ニ必要ナリ。

朝鮮古史ノ書ノ世ニ存スル者ハ、高麗ノ金富軾ノ三國史記ヨリ古キハ無ケレドモ、三國鼎立ノ時代ヨリ旣ニ修史ノ擧アリシコトハ、三國史記ニ見エタリ。同書新羅本紀眞興王六年（欽明天皇六年梁武帝大同十一年）ノ處ニ「秋七月、伊湌異斯夫奏曰、國史者、記君臣之善惡、示褒貶於萬代、不有修撰、後代何觀、王深然之、命大阿湌居柴夫等、廣集文士、俾之修撰」。又高句麗本紀嬰陽王十一年（推古天皇八年隋文帝開皇二十年）ノ處ニ「詔大學博士李文眞、約古史爲新集五卷、國初始用文字、時有人、記事一百卷、名曰留記、至是删修」。トアレバ、三國史記ノ中ニ古記又ハ古典記トシテ引ケルハ、此等ノ書ナルベシ。百濟ノ修史ノ事ハ、百濟本紀ニハ見エザレドモ、日本紀ノ注ニ百濟記百濟新撰百濟本記ヲ引キタル所往々アリ、百濟記ハ神功紀四十七年六十二年應神紀八年二十五年雄略紀二十年ノ五所ニ見エテ、大抵百濟近肖古王ヨリ蓋鹵王マデ九代ノ間ニ當リ、百濟新撰ハ、雄略紀二年五年武烈紀四年ノ三所ニ見エテ、蓋鹵王ヨリ武寧王マデ五代ノ間ニ當リ、百濟本記ハ本紀ト書ケル所モアリ、繼體紀ニ四所、欽明紀ニ十四所見エテ、武寧王聖王威德王ノ三代ノ間ニ當レリ。此等ノ書ハ、其撰者ノ名モ、撰述ノ時代モ、知ルベカラザレドモ、三書編成ノ先後ハ、蓋紀ニ引ケル順序ノ如クニテ、百濟紀最モ古ク、百濟新撰之ニ次ギ、百濟本記又之ニ次ギタルナラン。三書ノ文ハ、參考ノ爲ニ紀注ニ引カレタルノミナラズ、紀ノ本文ニモ、此等ノ書ニ據リテ記サレタリト覺シキ所甚多シ。又三國史記ノ中ニ屢引ケル百濟古記モ、此等ノ書ヲ指セルナルベシ。然ラバ百濟ニモ、日本紀若クハ聖德太子ノ舊史ノ撰修ヨリ以前ニ、旣ニ史乘ノアリケンコト疑ヒナシ。三國史記列傳第七ノ末ニ「金大問本新羅貴門子弟、聖德王三年、爲漢山州都督、作傳記若干卷、其高僧傳花郎世記樂本漢山記猶存。」トアリテ、三國史記及高麗ノ僧一然ノ撰シタル三國遺事ノ文中ニ、大問ノ語ヲ引ケル所往々アリ。聖德王ハ新羅第三十三代ノ主ニシテ、其ノ三年ハ、天武天皇慶雲元年、唐ノ則天武后ノ長安四年ナリ。其ノ後百數十年、新羅ノ季世ニ至リ、崔致遠ト云ヘル名儒アリ、少クシテ唐ニ學ビ、唐ノ

僖宗乾符元年清和天皇貞觀十六年新羅景文王十四年對策及第シ、光啓元年光孝天王仁和元年新羅憲康王十一年其國ニ歸レリ、其ノ著セル帝王年代暦ハ、蓋三國ノ古記ニ因リテ、之ヲ編年ニ綴レル者ニシテ、三國史記ノ世系年代ハ、多ク此ノ書ニ依レルナルベシ。

三國史記ハ、高麗ノ仁宗恭孝王ノ時、其ノ大臣金富軾、王命ヲ受ケテ修撰シタルナリ。富軾ハ高麗ノ名士ニシテ、高麗史ニ專傳アリ仁宗元年鳥羽天皇保安四年宋ノ徽宗宣和五年中書侍郎平章事韓安仁奏サク「睿宗十七年事業、宜藏史冊貽厥後世、請依宋朝故事、置實錄編修官」。ト申シケレバ、仁宗之ニ從ヒテ、富軾ヲ監修トシタリ。コレ高麗ニテ編修官アリ實錄纂アル始メナリキ。明年、睿宗實錄成リテ奏上ス。十三年崇德天皇保延元年宋ノ高宗紹興五年西京平壤ニ叛亂起リシ時、富軾元帥トナリテ之ヲ討ジ、明年ニ至リテ平定ス。コレヨリ官益尊ク、遂ニ宰相ト爲リ、二十年近衛天皇康治元年宋ノ紹興十二年上表シテ骸骨ヲ乞ヒシニ、仁宗之ヲ許シテ、大事アル時ニ特ニ議ニ參セシメタリ。二十三年近衛天皇久安元年宋ノ紹興十五年此ノ書成リテ奏上ス。其ノ時ノ官爵ハ、此ノ書ニ題シテ「輸忠定難靖國贊化同德功臣開府儀同三司撿校太師守太保門下侍中判尙書吏禮部事集賢殿大學士監修國史上柱國致仕臣金富軾奉宣撰」トアリ。

此書ハ、新羅本紀十二卷高句麗本紀十卷百濟本紀六卷年表三卷雜志九卷列傳十卷ヨリ成リ、卷數ハ合セテ五十卷ナレドモ、紙數少キ故ニ、通常九冊ニ裝釘セリ。

高句麗本紀ノ、太祖王以前ニ王代ノ脫落アルベキ事、新羅本紀ノ、訖解尼師今以前、百濟本紀ノ契王以前ノ年紀ノ信ジ難キコトハ、余別ニ上世年紀考ニ之ヲ論ジタリ。三紀共ニ、國初數代ノ間ニハ、荒唐不經ノ談アレドモ、コハ金富軾ノ固ヨリ信ゼザル事ニシテ、新羅紀ノ論贊ニ、新羅朴氏昔氏、皆自卵生、金氏從天入金櫃而降、或云乘金車、此尤詭怪不可信、然世俗相傳、爲之實事ト云ヒ、高句麗紀ノ論贊ニモ、新羅古事云、天降金櫃、故姓金氏、其言可怪而不可信、臣修史、以其傳之舊、不得刪落其辭ナドアレバ、此等ノ類ハ、三國最古ノ傳說トシテ史家ノ考察スベキ事ナリ。其他ノ記事ハ、疎撲質實ニシテ誇誕ノ言少シ。

新羅紀ハ、通篇大抵其ノ國ノ古記ニ據リ、唐代ニ至リテ往々新舊唐書ノ文ヲ取レリ。高句麗紀ハ、古記ト漢史トニ據リタレドモ、長壽王以後ハ、大抵南北朝隋唐ノ諸史ヲ撥拾シテ成レリ。嬰陽王ノ時、大學博士李文眞ガ古史ヲ删修シタル新集五卷ハ、金富軾ノ時既ニ存セザリシカ、若クハ存ストモ其ノ記事ハ、廣開土王以前ニ止マリシナラン。又百濟新羅ニ交涉セル記事モ、羅濟ノ古記ニ據リタルガ如ク見ユ。百濟紀ハ、新羅紀ノ如ク大抵古記ニ據リタレドモ、南北朝ノ諸史ヲ取レル所モ往々アリ。唐ニ擊チ滅ボサル、所ハ、全ク唐書ニ據レリ。三紀皆日食孛星其ノ他ノ天變ヲ詳カニ記シタルハ、一見スレバ、三國ハ古代ヨリ天象ノ觀察ヲ務メタルガ如クナレドモ、此等ハ皆、兩漢書以下諸史ノ天文志五行志又ハ本紀ヨリ謄寫シタル者ニテ、少シノ價値モナシ。コハ蓋崔致遠ノ帝王年代曆ニ鈔記シタルニ據リテ、富軾ハ之ヲ適宜ニ三國ノ本紀ニ分載シタルモノナルベシ。雜志ハ祭祀樂車服屋舍地理職官ノ六志アリ、大抵新羅ノ制ニシテ、高句麗百濟ノ事ハ甚疎略ナリ。列傳ハ大抵舊記ニ本ヅキ、唯乙支文德黑齒常之張保皐蓋蘇文ノ四傳ハ、隋唐書ヲ取レリ。此ノ書ノ普通ノ寫本ハ、誤脫頗ル多ケレバ、善本ヲ得テ校讐シタキモノナリ。東國通鑑ニハ、此ノ書ノ誤脫ヲ訂正セズシテ、其ノ儘ニ書ケル所アリ、又此書ヲ讀ミ僻メテ誤リ記セル所モアリ、注意スベシ。

三國史記ニ次ギタル朝鮮ノ古史ハ、三國遺事ナリ。此書ハ東國輿地勝覽卷六馬韓之域ノ註ニ「是書未知誰作、亦出於高麗中葉以後」。ト云ヘリ。明ノ武宗正德七年後柏原天皇永正九年朝鮮ノ中宗恭僖王七年ノ跋文アル刊本ニハ「國尊曹溪宗迦智山下麟角寺住持圓鏡冲照大禪師一然撰」トアリ。迦智山ハ全羅道長興都護府ノ北二十里ニアリ、麟角寺ト云ヘル寺ハ、輿地勝覽ニハ見エズ書中、高麗第十一代文宗仁孝王ノ世ニ金州官人ノ著シタル駕洛國記ヲ引キ、又中葉以前ノ諸王ノ諱ヲ避ケタルヲ見レバ、中葉以後ノ作ナルコト知ラル。書中ノ記事ハ、怪詭神異ノ談ノミ多ケレドモ、東國通鑑ニハ往々之ニ據レル所アリ。慶州府尹全平君李繼福ノ跋ニ「吾東方三國本史遺事、兩本他無所刊、而只在本府、歲久刓缺、一行可解僅四五

字、余惟、士生斯世、歷觀諸史、其於天下治亂興亡與諸異跡、尙欲博識、況居是邦、不知其國事、可乎、因欲改刋、廣求完本、閱數歲不得焉、其罕行于世、人未易得見可知、若今不改、則將爲失傳、東方往事、後學覺莫聞知、可歎也已、幸吾斯文、星州牧使權公輳、聞余之求、得求完本送余、喜受、具告監司安相國瑭都事朴候佺、僉曰善、於是分刋列邑、令還藏于本府云々」。トアリ。文中ニ本史トアルハ、三國史記ノ事ナレバ、三國史記モ同時ニ刋刻シタリト見ユ。其ノ刋本ヲ得タランニハ、寫本ノ誤脫ヲ訂正スルニ便ナルベシ。朝鮮ノ世ニ至リテハ、吉昌君權近ノ東國史略、達城君徐居正等ノ東國通鑑、某氏ノ東史寶鑑ノ類アレドモ、三國時代ノ事ハ、皆三國史記ヲ節錄シタルニ過ギザレバ、異聞ヲ廣ムル所殆ト無シ。

東國輿地勝覽五十五卷ハ、地理ノ書ナレドモ、歷史ニ關スル記事甚多シ。此ノ書ハ、朝鮮宣城府院君盧思愼等ガ、成宗康靖王ノ命ヲ受ケテ編輯シ、成宗ノ十二年（後土御門天皇文明十三年明憲宗成化十七年）ニ成リタルヲ、中宗恭僖王二十四年（後奈良天皇享祿三年明世宗嘉靖三年）ニ至リ、議政府右議政李荇等ガ增補シタル者ニシテ、其ノ體裁ハ、宋ノ祝穆ガ方輿勝覽ニ傚ヘリ。

東國文獻備考一百卷ハ、宋ノ馬端臨ノ文獻通考ノ體裁ニ傚ヒテ、韓國歷代ノ朝章國典ノ沿革ヲ彙集シタル書ニテ、英宗顯孝王ノ時、議政府領議政兼領經筵弘文館藝文館春秋館觀象監事金致仁等敎ヲ奉ジテ撰シ、淸ノ乾隆三十五年（後櫻町天皇明和七年）ニ奏上セリ。此書ハ象緯輿地禮樂兵刑田賦財用戶口市糶選擧學校職官ノ十三門ニ分チ、考證頗ル精密ニシテ、韓人ノ著述ニハ未ダ其ノ類ヲ見ズ。其ノ地理考ニ、朝鮮古代ノ地名ヲ考證シタルガ如キハ、輿地勝覽ノ紕繆ヲ訂スル所甚多ケレバ、古史ノ考究ニハ闕クベカラザル書ナリ。

右ノ諸書ハ、後章ニ於テ屢引用スルガ故ニ、便ニ從ヒテ其略稱ヲ用ヒ、三國史記ノ三國本紀ハ羅紀濟紀麗紀、東國通鑑ハ東鑑、東國輿地勝覽ハ東覽、東國文獻備考ハ東考ト稱スベシ。

第八章　朝鮮樂浪玄菟帶方考

史記（三十八）宋微子世家ニ「武旣克殷、訪問箕子云々、於是武王乃封箕子於朝鮮、而不臣也」トアリ。コレ、支那ノ書ニ朝鮮ノ名ノ見エタル始メニシテ、支那人ノ朝鮮ノ事ヲ記シタルニ、箕子ヨリ以前ニ及ビタルコトナシ。

漢書（二十八）地理志燕ノ地ノ條ニ「玄菟樂浪、武帝時置、皆朝鮮濊貉句驪蠻夷、殷道衰、箕子去之朝鮮、敎其民以禮義田蠶織作、樂浪朝鮮民犯禁八條、相殺以當時償殺、相傷以穀償、相盜者、男沒入爲其家奴、女子爲婢、欲自贖者、人五十萬、雖免爲民、俗猶羞之、嫁取無所讐、是以其民終不相盜、無門戶之閉、婦人貞信不淫辟、其田民飮食以籩豆、都邑頗放傚吏及內郡賈人、往々以抔器食、郡初取吏於遼東、吏見民無閉藏、及賈人往者、夜則爲盜、俗稍益薄、今於犯禁寖多、至六十餘條、可貴哉、仁賢之化也、然東夷天性柔順、異於三方之外、故孔子悼道不行、設浮於海、欲居九夷、有以也夫」トアリ。

史記ハ封於朝鮮ト云ヒ、漢書ハ去之朝鮮ト云ヒ、孰レカ是ナルヲ知ラザレドモ、書ノ新古ヲ案フレバ、史記ニ從フベキカ。遼史地理志ニハ、兩書ノ文ヲ兼ネ取リテ「周武王釋箕子囚、去之朝鮮、因以封之」ト云ヘリ、史東國史略ニ「箕子率中國五千人、避地朝鮮、詩書禮樂醫巫陰陽卜筮之流、百工技藝皆從焉、言語不能通、譯而知之、遂都平壤」ト云ヘルハ、何ニ據リタル說ニヤ、覺束ナシ。箕子ノ後裔ノ事ハ史漢共ニ記載ナシ。

史記（一百十五）朝鮮傳ニ「朝鮮王滿者、故燕人也、自始全燕時、嘗略屬眞番朝鮮、爲置吏築鄣塞、秦滅燕、屬遼東外徼、漢興、爲其遠難守、復修遼東故塞、至浿水爲界、屬燕、燕王盧綰反入匈奴、滿亡命、聚黨千餘人、魋結蠻夷服、而東走出塞、渡浿水、居秦故空地、上下障、稍役屬眞番朝鮮蠻夷及故燕齊亡命者王之、都王險

云々」トアリテ、箕子ノ後裔ヲ逐ヒ出セル事ヲ云ハズ。漢書モ亦然リ。眞番朝鮮浿水王險ノ位置ハ後ニ云フベシ。

三國志三十魏志東夷傳濊ノ處ニ「昔箕子既適朝鮮、作八條之敎以敎之、無門戸之閉、而民不爲盜、其後四十餘世、朝鮮侯準、僭號稱王、陳勝等起、天下叛秦、燕齊趙民、避地朝鮮數萬口、燕人衛滿、魋結夷服、復來王之云々。」又韓ノ處ニ「侯准既僭號稱王、爲燕亡人衛滿所攻奪」トアリテ、裴松之註ニ「魏略曰、昔箕子之後朝鮮侯、見周衰燕自尊爲王、欲東略地、朝鮮侯亦自稱爲王、欲興兵逆擊燕以尊周室、其大夫禮諫之、乃止、使禮西說燕、燕止之不攻、後子孫驕虐、燕乃遣將秦開、攻其西方、取地二千餘里、至滿潘汗爲界、朝鮮遂弱、及秦幷天下、使蒙恬築長城、到遼東、時朝鮮王否立、畏秦襲之、略服屬秦、不肯朝會、否死、其子準立、二十餘年而陳項起、天下亂、燕齊趙民愁苦、稍々亡往準、準乃置之於西方、及漢以盧綰爲燕王、朝鮮與燕、界於浿水、及綰反入匈奴、燕人衛滿、亡命爲胡服、東度浿水、詣準降、說準求居西界、故中國亡命爲朝鮮藩屛、準信寵之、拜爲博士、賜以圭、封之百里、令守西邊、滿誘亡黨衆稍多、乃詐遣人告準、言漢兵十道至、求入宿衛、遂還攻準、準與滿戰不敵也」トアリ。滿潘汗ハ、後漢書郡國志幽州遼東郡ニ番汗縣アリ、コレナルベシ。次ニ本文ニ「將其左右宮人、走入海、居韓地、自號韓王」トアリテ、其註ニ「魏略曰、其子及親留在國者、因冒姓韓氏、準王海中、不與朝鮮相往來」トアリ。

後漢書七十五東夷傳ニハ、「將其左右宮人云々」ヲ「乃將其餘衆數千人、走入海、攻馬韓破之、自立爲韓王」ト書ケリ。

サテ箕氏ノ盛衰ハ、魏略ノ文ニ依リテ始メテ委シクナレリ。此等ノ事ヲ史記漢書ニ一語モ言ハザルハ、怪ムベキガ如クナレドモ、史記撰著ノ頃ハ、朝鮮國內ノ事跡ニ關シテハ、未ダ傳聞ヲ得ザリシナルベク、又漢書朝鮮傳ハ、全ク史記ノ原文ニ依リ、東夷ノ事ハ、別ニ考究セザリシト見ユレバ、終ニカヽル脫漏ヲ致セルナリ。

今ノ朝鮮ノ廣原君李克墩ガ東國通鑑ノ序ニ「吾東方自檀君歷箕子、以至三韓、載籍無徵」ト云ヒ、同書凡例ニ「三國以前、史書漫滅、無傳、雜採諸書、作外紀」ト云ヒテ、外紀ハ目錄ニモ入レズシテ、其ノ前ニ附載セリ。此ノ外紀ノ文ハ、史記漢書三國志ノ朝鮮韓濊諸傳ヲ節取シタル者ナレバ、更ニ之ニ依リテ異聞ヲ廣ムルコトナシ。唯其發端ニ記シタル檀君ノ傳記ノミハ、漢史ニ本ヅキタルニ非ズシテ、全ク朝鮮人ノ作リタル者ナリ。三國遺事ニ「古記曰昔有桓因（謂帝釋也）庶子桓雄、數意天下、貪求人世、父知子意、下視三危大伯、可以弘益人間、乃授天符印三箇、遣往理之、雄率徒三千、降於太伯山頂（即太伯今妙香山）神檀樹下、謂之神市、是謂桓雄天王也、將風伯雨師雲師、而主穀主命主刑主善惡、凡主人間三百六十餘事、在世理化、時有一熊一虎、同穴而居、常祈于神雄、願化爲人、時神遺靈艾一炷蒜二十枚、曰爾輩食之、不見日光百日、便得人形、熊虎得而食之、忌三七日、熊得女身、虎不能忌、而不得人身、熊女者無與爲婚、故每於檀樹下、呪願有孕、雄乃假化而婚之、孕生子、號曰檀君王儉、以唐高即位五十年庚寅（唐堯即位元年戊辰、則五十年丁巳、非庚寅也、疑其未實）都平壤城（今西京）、始稱朝鮮、又移都於白岳山阿斯達、又名弓（一作方）忽山、又今彌達、御國一千五百年、周虎王即位己卯、封箕子於朝鮮、檀君乃移於藏唐京、後還隱於阿斯達、爲山神、壽一千九百八歲」トアリ。檀君ノ名ヲ王儉トシタルハ、平壤ノ舊名ナル王險ノ險ノ字ヲ人扁ニ易ヘタルナリ。此傳說ハ、佛法東流ノ後、僧徒ノ揑造ニ出デタル妄誕ニシテ、朝鮮ノ古傳ニ非ザル事ハ、一見シテ明カナリ。麗紀東川王二十一年「築平壤城、移民及廟社」ノ下ニ「平壤者、本仙人王儉之宅也」トアルハ、王儉ヲ列仙傳中ノ人物ト見テ、開國ノ太祖トハ見ザルガ故ニ、檀君之舊都ト云ハズシテ、仙人之宅ト云ヒタルニテ、酙酌アル書方ナリ。然ルニ彼ノ外紀ニ「東方初無君長、有神人、降于檀木下、國人立爲

君、是爲檀君、國號朝鮮、是唐堯戊辰歲也、初都平壤、後徙都白岳、至商武丁八年乙未、入阿斯達山爲神、」ト云ヘルハ、全ク僧徒ノ妄說ヲ歷史上ノ事實ト爲シテ、之ヲ飾錄シ、唯其ノ在位ノ年數ハ、權近ノ東國史略ニ據リテ、千四十八年トセリ。其ノ條下ニ、史臣ノ案ヲ記シテ「前輩以謂、其曰千四十八年者、乃檀氏傳世歷年之數、非檀君之壽也、此說有理」ト云ヒタレドモ、「載籍無徵」ト云ヘル時代ノ事ニシテ、證トスベキモアルニアラズ、且後世ノ僧徒ノ妄說ニ就キテ、强テ理解ヲ下サントスルハ、甚謂レナキ事ナリ。

衞滿自立ノ後ノ事跡ハ、前ニ引キタル史記朝鮮傳ノ續キニ「會孝惠高后時、天下初定、遼東太守即約滿爲外臣、保塞外蠻夷、無使盜邊、諸蠻夷君長、欲入見天子、勿得禁止、以聞、上許之、以故滿得以兵威財物侵降其旁小邑、眞番臨屯皆來服屬、方數千里、傳子至孫右渠、所誘漢亡人滋多、又未嘗入見、眞番旁衆國、欲上書見天子、又擁閼不通、元封二年、封使涉何誘諭右渠、終不肯奉詔、何去至界上、臨浿水、使御刺殺送何者朝鮮裨王長、即渡、馳入塞、遂歸報天子曰、殺朝鮮將、上爲其名美、即不詰、拜何爲遼東東部都尉、朝鮮怨何、發兵襲攻殺何、天子募罪人、擊朝鮮、其秋、遣樓船將軍楊僕、從齊浮渤海、兵五萬人、左將軍荀彘出遼東討右渠、右渠發兵距險云々、樓船將軍將齊兵七千人、先至王險、右渠城守、窺知樓船軍少、即出城擊樓船、樓船軍敗散云々、左將軍破浿水上軍、乃前至城下、圍其西北、樓船亦往會、居城南、右渠遂堅守城、數月未能下云々、天子使濟南太守公孫遂往征之、有便宜得以從事、遂至、左將軍曰、朝鮮當下久矣、不下者有狀、言樓船數期不會、具以素所意告遂曰云々、遂亦以爲然、而以節召樓船將軍、入左將軍營計事、即命左將軍麾下、執捕樓船將軍、并其軍、以報天子、天子誅遂、左將軍已并兩軍、乃急擊朝鮮、朝鮮相路人、相韓陰、尼谿相參、將軍王唊、相與謀曰、始欲下樓船、樓船今執、獨左將軍并將、戰益急、恐不能與戰、王又不肯降、陰唊路人皆亡降漢、路人道死、元封三年夏、尼谿相參乃使人殺朝鮮王右渠、來降、王險城未下、故右渠之大臣成已又反、復攻吏、左將軍使右渠子長、降將路人之子最、告諭其民、誅成已以故遂定朝鮮爲四郡云々、左將軍徵至、坐爭功相嫉乖計、棄市、樓船將軍、亦坐兵至洌口、當待左將軍、擅先縱、失亡多、當誅、贖爲庶人」トアリ。是ノ時設ケラレタル四郡ノ名ハ、漢書武帝紀ニ樂浪臨屯玄菟眞番トアリ、漢書朝鮮傳ニハ眞番臨屯樂浪玄菟ト序テタリ。其ノ後昭帝紀始元五歲（紀元五百七十九年）ニ至リテ、眞番郡ノ罷メタルコト見ユ。此ノ時、眞番郡ト同時ニ臨屯郡モ罷メタリト見エテ、漢書（二十八）地理志ニ、平帝元始二年（紀元六百六十二年）ノ調查ヲ記シタルニ、樂浪玄菟ノミアリテ、眞番臨屯ナシ、又後漢書（八十五）東夷傳濊ノ處ニモ「至昭帝始元五年、罷臨屯眞番、以並樂浪玄菟」トアリ。臨屯ヲ樂浪ニ并セ、眞番ヲ玄菟ニ并セタルナリ。

漢書地理志ニ、玄菟樂浪二郡ヲ記セルコト、次ノ如シ。「玄菟郡（武帝元封四年、開高句驪、莽曰下句驪、屬幽州）戶四萬五千六口、二十二萬一千八百四十五、縣三、高句驪（遼山、遼水所出、西南至遼隊、入大遼水、又有南蘇水、西北經塞外、莽曰下句驪）上殷臺（莽曰下殷、）西蓋馬（馬訾水西北、入鹽難水、西南至西安平、入海、過郡二、行一千一百里、莽曰玄菟亭、）樂浪郡（武帝元封三年開、莽曰樂鮮、屬幽州、）戶六萬二千八百一十二、口四十萬六千七百四十八、（有雲鄣、）縣二十五、朝鮮、詌邯、浿水（水西至增地、入海、莽曰樂鮮亭、）含資（帶水、西至帶方、入海、）黏蟬、遂成、增地（莽曰增土、）帶方、駟望、海冥（莽曰海桓、）列口、長岑、屯有、昭明（南部都尉治、）鏤方、提奚、渾彌、呑列（分黎山、列水所出、西至黏蟬、入海、行八百二十里、）東暆、不而（東部都尉治、）蠶臺、華麗、邪頭昧、前莫、夫租」、首ニ書キタル縣名ハ郡治ノ在ル所ナリ。

臨屯眞番ノ事ハ、漢書ノ顏師古註ニ「臣瓚曰、茂陵書、臨屯郡治東暆縣、去長安六千一百三十八里、十五縣、眞番郡治霅縣、去長安七千六百四十里、十五縣」トアリ。東暆縣ハ、樂浪郡ノ屬縣ニ見エタル者ト同所ニシテ、臨屯ノ罷メラレタル時ニ、樂浪ニ屬シタルナリ。三國史記ニ賈耽古今郡國志ヲ引キテ「今新羅北界溟州、蓋濊之古國、」東覽ニ「江陵大都護府、本濊國、漢武帝定四郡時、爲臨屯、」東考ニ三國史記ヲ引キテ（余ガ見タル三國史記ニハ見エザレドモ）「東暆、國郡」トアレバ、東暆ハ、江陵府若クハ其近傍ニ在リシナリ。

雲縣ハ、鴨綠江ノ上流ノ邊ト思シケレドモ、去長安七千六百四十里トアルハ、道程餘リニ遠シ。七千ハ五千ノ誤寫ニハ非ズヤ。東考ニ引キタル金崙ノ說ニ、「眞番遠臨屯、則我國界內不可得、似在今寧古塔近處矣」ト云ヘレド、イカヾアラン。眞番ノ罷メラレタル時、雲縣モ廢セラレタリト見エテ、地理志ニハ此ノ縣ナシ。地理志玄菟郡ノ註ニ「應劭曰、故眞番、朝鮮胡國」トアルニ依レバ、眞番郡ハ即眞番國ノ故地ニシテ、郡ヲ罷メテ玄菟ニ幷セタル後ニ、玄菟郡治ヲ、眞番郡ノ舊領ナル高句驪縣ニ徙シタルナリ。玄菟郡ノ原註ニ「武帝元封四年、開高句驪」トアルハ、高句驪ヲ開キテ眞番ノ屬縣トシタルヲ云ヘルニテ、玄菟郡治トナレルハ、昭帝以後ノ事ナリ。東考ニ云「史記曰、燕時略屬眞番朝鮮、置吏築鄣、秦滅燕、屬遼東外徼、漢書曰、東賈眞番之利、文獻通考曰、遼東南扼朝鮮東控眞番、然則眞番在遼東東明甚、而燕置吏築鄣、則與遼東不遠、可知也、大率漢以五國地、爲四郡、而朝鮮爲樂浪、濊貊爲臨屯、沃沮爲玄菟、皆有明證、獨高句驪二千里地、豈可只爲一縣哉、是必爲眞番也、應劭曰、玄菟本眞番國、然玄菟有二、一則漢武置四郡時玄菟、此東沃沮地也、一則昭帝爲二郡時玄菟、此自東沃沮移設於遼界者也、應劭所謂玄菟、乃二郡時玄菟也、屬縣有西蓋馬高句驪、西蓋馬在蓋馬山之西、其東即沃沮、其南即濊朝鮮也、高句驪在遼山遼水所出之處、其西即遼東、其北即扶餘也、以漢書所謂高句驪在遼東之東、南與朝鮮、東與沃沮、北與扶餘接者、較之、四履相合、無一違錯、應劭所謂玄菟本眞番者、在高句驪地內、無疑矣。」

玄菟郡治ハ、眞番ノ故地ニ徙リテヨリ、其西界ハ遼東郡ト相接シタルガ故ニ、後漢ノ世ニハ、遼東ノ舊領ナル高顯候城遼陽三縣マデモ統轄シタルコトアリキ。東考ニ「小遼水、今名渾河、西南流、、南蘇水未詳、而西北流、經塞外、則蓋歸於混同江者也、高句驪在二水發源之處、跨據遼山南北而爲縣」トアリ。又方輿記要簡覽興京ノ條ニ「漢置玄菟郡、高句驪故城、在城北」トアリテ、高句驪縣ノ故趾ハ、今ノ興京城ト北ニ當レリ。西蓋馬縣ハ平安咸鏡兩道ヲ分界スル蓋馬大山ノ西方ニ延ビタル支脈ニアル地方ト聞エ、東考ニ「縣在蓋馬山之西鴨綠江之上游、東與東沃沮、南與樂浪接、蓋今平安道廢四郡江界府等地方也」トアリ。

樂浪郡治ナル朝鮮縣ハ、箕氏衞氏ノ故都王險城ニシテ、今ノ平安道平壤府ナルコト、漢韓ノ諸史皆異辭ナシ。浿水縣ハ、浿水ニ依レル名ナリ。史記朝鮮傳ニ「漢興、爲其遠難守、復修遼東故塞、至浿水爲界」「滿亡命云云、東走出塞、渡浿水、居秦故空地、上下鄣」ト云ヒ、下文所々ニ浿水ヲ記シタル、孰レモ朝鮮ノ西界ニシテ、漢書註ニモ「臣瓚曰、王險城、在樂浪郡浿水之東」、トアレバ、朝鮮傳ハ、全ク鴨綠江ヲ指シテ浿水ト云ヘリ。サレドモ地理志ニ據レバ、鴨綠江ハ古名ハ馬訾水ニシテ、浿水トハ云ハズ。西蓋馬ノ原註ニ「馬訾水云々過郡二」トアルハ、玄菟遼東ヲ過グルコトニシテ、正シク鴨綠江ナリ。故ニ杜氏通典ニ「馬訾水、一名鴨綠水、水源出東北靺鞨白山、水色似鴨頭、故名之、去遼東五百里、經國內城南、又西與一水合、即鹽難水也、二水合流、西南至安平城、入海」、ト云ヘリ。地理志ノ浿水ハ、樂浪郡治ノ南ニ在リ。即今ノ大同江ニシテ、鴨綠江ニ非ス。周書隋書ニ、平壤城ノ事ヲ記シテ、南臨浿水ト云ヘル是ナリ。隋書六十四卷來護兒傳ニ「遼東之役、護兒率樓船指滄海、入自浿水、去平壤六十里、與高麗相遇、進擊大破之、乘勝直造城下、破其郛郭」トアルモ、大同江ニ泝リテ、平壤ニ至レルナリ。康熙字典ニ、闞駰ガ十三州志ヲ引キテ、浿水縣在樂浪東北ト云ヒ、地理志浿水ノ原註ニ「水西至增地、入海」トアレバ、浿水縣ハ、平壤ノ東北ニ當リテ、大同江ノ北源ニ濱シ、今ノ順川郡慈山郡ノ邊、增地縣ハ、其ノ下流ニシテ、今ノ江西縣若クハ三和府ノ邊ナルベシ。又說文ニ「浿水出樂浪鏤方、東入海、从水貝聲、一云出浿水縣」、水經ニ「浿水出樂浪鏤方縣、東南過於臨浿縣、東入于海」トアリ。二書共ニ、東ハ西ノ誤リナリ。鏤方縣ハ、地理志ニ昭明ノ次ニアリテ、樂浪南部ノ地ト見ユレバ、鏤方ヨリ出ヅルハ、大同江ノ東源ニシテ、鏤方ノ地ハ今ノ黃海道遂安縣谷山郡ノ邊ナルベシ。臨浿縣ハ、兩漢ノ

志ニ見エズ、猶考フベシ。東覽平壤府大同江ノ註ニ、「本國境內、蓋有三浿水」トテ、第一ハ鴨綠江、第二ハ大同江ニシテ、其ノ第三ハ「高麗史以平山府猪灘爲浿江、則百濟始祖、北以浿江爲界、及唐帝泊浿江西浦、布錢下陸、到松岳郡者、疑指此也」ト云ヘリ。唐帝布錢トハ、高麗ノ金敬叔ガ周官六翼ニ「唐宣宗、隨商船渡海、初到西浦、時方潮退、泥濘滿渚、從官取船中錢、布泥土、然渡下陸」トアル傳說ヲ云ヘルナリ。此ノ浦ハ、今錢浦ト呼ビ、京畿道開城府ノ西三十六里ニアリ。開城府ハ即新羅ノ松岳郡ナリ。東覽黃海道平山府猪灘ノ註ニモ、百濟始祖ノ疆域ヲ叙シテ、「若平壤浿江、則在高句麗都城傍、豈得爲百濟之境、所謂浿河疑即此水」トアリ。

地理志含資ノ原註ニ、「帶水西至帶方、入海」トアレバ帶方縣モ水ノ名ニ依リタル地名ナリ。帶水ハ樂浪南部ノ著名ナル川ナレバ、今ノ京畿道臨津江ナルベシ。濟紀溫祚建國ノ條ノ註ニ「(沸流)遂與弟(溫祚)率黨類、度浿帶二水、至彌鄒忽、以居之」トアル浿帶二水ハ、猪灘ト臨津江トヲ指セルニ似タリ。彌鄒忽ハ、今ノ仁川府ニシテ、二水ノ南ニアリ。又溫祚王十七年(王莽天鳳六年)ノ條ニ「漢水東北部落饑、荒亡入高句麗者一千餘戶、浿帶之間、空無居人」トアリ。浿水東北ハ、京畿道ノ北部ヲ云ヒ、浿帶之間ハ、又其ノ邊疆ニシテ、猪灘ノ南、臨津江ノ北ナリ。

又呑列ノ原註ニ「分黎山、列水所出、西至黏蟬、入海、行八百二十里」トアレバ、列水モ樂浪南部ノ大水ナリ。列口縣ハ、列水ノ海ニ入ル所ト聞ユルニ、「西至黏蟬入海」トアレバ、黏蟬ト水ヲ隔テ相對ヘル所ナルベシ。日韓古史斷ニ「疑今江華島、本名穴口、又海口郡」ト云ヘリ。菅政友氏ノ高句麗古碑考ニ、地理志樂浪郡ノ條ヲ引キ、「コノ諸水ノ序次ニヨリテ一郡ノ區域ヲ推スニ、北ハ馬訾水ヲ隔テ、遼東郡ノ西安平縣ニ對ヒ、浿(今ノ大同江)帶(今ノ臨津江)二水ヲ郡中ニ納レテ、列水ヲ限リニ南方ノ界ヲバ定メタルモノナラン」トテ、列水ニハ、「今ノ漢江ナルベシ」ト註シ、又東考ニ、韓百謙ノ說ヲ引キテ「韓江之外、無八百里大水、恐漢江爲列水、漢江之源、一出太白山、一出五臺山、西南與龍津合爲漢江、所謂呑列、恐亦不出此等地、而列口亦疑在漢江咽喉之地也」ト云ヘリ。方言ニ「朝鮮洌水之間」ト屢見エタルハ、即コノ川ナリ。然ルニ裴駰ノ史記集解ニ「張晏曰、朝鮮有濕水洌水汕水、三水合爲洌水、疑樂浪朝鮮取名於此也」ト云ヒ、朝鮮傳ニ、揚僕ガ齊ヨリ渤海ニ浮ビテ先ヅ王險ニ至レルコトヲ、下文ニ「兵至列口云々」ト云ヒ、山海經ニ「朝鮮在列陽」ト云ヘルナドヲ合セ考フレバ、列水ハ大同江ノ本流ニシテ、列口ハ即浿江口ト云フニ同ジキガ如ク聞ユレドモ、浿水ハ鏤方及浿水縣ヨリ出デ、、增地ニ至リテ海ニ入リ、列水ハ呑列ヨリ出デ、、黏蟬ニ至リテ海ニ入リ、自ラ別水ナレバ、菅氏及ビ韓百謙ガ列水ヲ漢江トシタル說、從フベシ。

魏志東夷傳ニ云「東沃沮、在高句麗蓋馬大山之東、濱大海而居云々、漢武帝元封二年、伐朝鮮、殺滿孫右渠、分其地爲四郡、以沃沮城爲玄菟郡、後爲夷貊所侵、徙郡句麗西北、今所謂玄菟故府是也、沃沮還屬樂浪、漢以土地廣遠在單々大領之東、分置東部都尉、治不耐城、別主領東七縣、時沃沮亦皆爲縣、漢光武六年、省邊郡都尉、由是罷、其後皆以其縣中渠帥爲縣侯、不耐華麗沃沮諸縣、皆爲侯國云々。」東沃沮ハ今ノ咸鏡道ニシテ、玄菟郡ヲ置キタル沃沮城ハ、今ノ咸興府ナリ。「徙郡句麗西北」トハ、即郡治ヲ高句麗縣ニ徙セルコトニテ、其ノ後郡治ノ東南ニ高句麗國起リシガ故ニ、追書シテカク云ヘルナリ。此郡治ハ公孫氏ノ遼東ニ據リシ時、又其西方ニテ、遼東郡ノ北ニ當レル所ニ徙リテ、魏晉皆之ニ沿リタル故ニ、晉人ハ漢ノ郡治ヲ指シテ、「今所謂玄菟故府」ト云ヘルナリ。吳志孫權傳ニ「玄菟在遼東北二百里」、又吳ノ使者秦旦張君羊等ガ、玄菟ヨリ逃レテ高句麗ノ丸都城ニ走レルコトヲ記シテ、「崎嶇山谷行六七百里」トアレバ、當時ノ玄菟ハ、遼東ニ甚近クシテ丸都ニ遠キ所ナルコト知ルベシ。(丸都ノ位置ハ第十章ニ云フベシ)「沃沮還屬樂浪」トアルニ依レバ、漢書地理志樂浪

諸縣ノ末ニ夫租トアルハ、即沃沮ナルベシ。單々大領ハ、蓋馬大山脈ノ中ニテ、東西ノ通路ニ當レル所ヲ云フ名ナリ。東部都尉ノ治ナル不耐城ハ、即地理志ノ不而ナリ。「別主領東七縣」ハ單々大領ノ東ニシテ、地理志ノ東暆以下七縣ナルベシ。此時樂浪ノ南部ニモ都尉ヲ置キタリト見エテ、地理志ニ「昭明南部都尉治」トアリ。其ノ領スル所ハ、大抵舊臨屯郡ノ諸屬縣ナリ。三國遺事ニ「前漢書、昭帝始元五年己亥、置二外府、謂朝鮮舊地平那及玄菟郡等、爲平州都督府、臨屯樂浪等兩郡之地、置東部都尉府」トアリテ、東鑑外紀之ニ依リ、東部都尉府ヲ改メテ、東府都督府ト書ケリ。コレ昭帝ノ時、四郡ヲ幷セテ二郡トシ、又樂浪ノ東南二部ニ都尉ヲ置キタルコトヲ誤傳シタルナリ。平州ハ、後漢ノ末ニ公孫度ノ始メテ設ケタルコト、魏志ニ見ユ。又都督ノ官モ、魏晋ヨリ始マリ、漢代ニハ此ノ稱ナシ。光武ノ時、南部ノ諸縣ハ、樂浪ノ直轄トナリタレドモ、東部ノ諸縣ハ、縣中ノ渠帥ニ與ヘタレバ、後漢書郡國志ニハ、東暆以下ノ七縣ナシ。

郡國志（順帝永和五年ノ調）ニ、玄菟樂浪二郡ヲ記セシコト、次ノ如シ。「玄菟郡（武帝置、雒陽東北四千里）六城、戶一千五百九十四、口四萬三千一百六十三、高句驪（遼山、遼水出）西蓋烏、上殷臺、高顯（故屬遼東）候城（故屬遼東）遼陽（故屬遼東）樂浪郡（武帝置、雒陽東北五千里）十八城、戶六萬一千四百九十二、口二十五萬七千五十、朝鮮、䛁邯、浿水、含資、占蟬、遂城、增地、帶方、駟望、海冥、列口、長岑、屯有、昭明、鏤方、提奚、渾彌、樂都」烏ハ馬ノ誤リ、浿ハ浿ノ誤リ、貪ハ含ノ誤リナリ。樂都ハ、呑列ノ改名カ又ハ別所カ、詳カナラズ。

魏志東夷傳ニ又云「韓在帶方之南云々、漢時屬樂浪、四時朝謁、桓靈之末、韓濊彊盛、郡縣不能制、民多流入韓國、建安中、公孫康分屯有縣以南荒地、爲帶方郡、遣公孫摸張敞等、收集遺民、興兵伐韓濊、舊民稍出、是後、倭韓遂屬帶方、景初中明帝密遣帶方太守劉昕樂浪太守鮮于嗣、越海定二郡、諸韓國臣智、加賜邑君印綬、其次與邑長云々、部從事吳林以樂浪本統韓國、分割辰韓八國、以與樂浪、吏譯轉有異同、臣智激韓忿、攻帶方郡崎離營、太守弓遵、樂浪太守劉茂、興兵伐之、遵戰死、二郡遂滅韓。」

帶方郡ハ帶方縣ニ治スルガ故ニ、縣名ヲ取リテ郡ニ名ヅケタルナリ。屯有縣以南ハ、蓋浿江以南ノ地ニシテ、帶方郡ノ管內ハ、臨屯郡及ビ樂浪南部都尉ノ舊領ノ西部ナルベシ。東考ニ「帶方、乃分樂浪南界諸縣爲郡、而其郡治在帶方者也、其地蓋在西海之沿、而南與百濟隣比、東與牛頭城、北與平壤、不甚相遠、帶水乃在漢山猪灘之間、而似今臨津江也、諸史家以高句驪犯遼東殺帶方令之文爲證、而謂帶方在遼東濱海之地、若然則樂浪亦可謂在於遼東乎」トアリ。景初中云々ハ、景初二年太尉司馬懿ノ燕王公孫淵ヲ滅シタル時ノ事ニシテ、樂浪帶方ハ、公孫氏ノ所領ナレドモ、高句麗ト諸韓トノ間ニ斗入セル地ナルガ故ニ、別ニ軍ヲ遣シテ之ヲ定メタルナリ。東夷傳ノ總叙ニモ、「景初中、大興師旅、誅淵、又潛軍浮海、收樂浪帶方之郡、西海表謐然、東夷屈服」トアリ。「二郡遂滅韓」ハ、韓人ノ叛亂シタル者ヲ滅セルコトニシテ、諸韓國ヲ盡ク滅シタルニハ非ズ。此ノ役ハ何ノ年トモ、明記セザレドモ、同ジ東夷傳濊ノ處ニ、「正始六年、樂浪太守劉茂、帶方太守弓遵、以領東濊屬句麗興師伐之」ト見エ、倭人ノ處ニハ「正治元年、太守弓遵云々、其八年、王頎到官」ト見エテ、王頎ハ弓遵ノ後ヲ承ケシナルベケレバ、遵ノ戰死ハ、正始七八年ノ交ニ在ルベシ。

晋書地理志平州郡國五ノ中「樂浪郡（漢置、統縣六、戶三千七百）朝鮮（周封箕子地）屯有、渾彌、遂城（秦築長城之所起）鏤方、駟望、玄菟郡（漢置、統縣三、戶三千二百）高句驪、望平、高顯、帶方郡（公孫度置、統縣七、戶四千九百）帶方、列口、南新、長岑、提奚、含資、海冥」トアリ。後漢ノ志ニ較ブルニ、西蓋馬、上殷臺、候城、遼陽、䛁邯、浿水、占蟬、增地、昭明、樂都ノ十縣滅ジ、望平縣ハ、遼東郡ヨリ玄菟郡ニ移リ、南新ノ一縣新ニ加ハレリ。南新ノ名ハ兩漢ノ志ニ見エズ、南方ノ新縣ノ義ナルベシ。羅紀婆娑尼師今五年（漢章帝元和元年）「南新縣麥連岐」伐休尼師今三年（漢靈帝中平三年）「南新縣進嘉禾」、奈解尼師今二十七年（魏文帝黃初三年）「南新縣人死、歷月復活」ナド見エタルハ、帶方ノ南新縣ヲ新羅ノ地トシテ書キタルカ、又ハ全ク別所カ。

帶方ノ地ハ、漢江以北ナルベキコトハ、前ニモ略述ベタレドモ、猶他ノ證アリ。續紀三十八延暦四年坂上ノ大忌寸苅田麻呂等ガ上表文中ニ「阿智王奏請曰、臣舊居在於帶方、人民男女、皆有才藝、近者寓於百濟高麗之間云々」ト云ヒ、姓氏錄未定雜姓ノ部ニ「朝明ノ史、高麗帶方國主氏韓法史之後者不見」トモアレバ、帶方ハ、百濟高句麗二國ノ間ニ在リテ、後ニ高句麗ニ幷セラレタル所ナリ。又魏志倭人傳ニ「從郡至倭、循海岸水行、歷韓國、乍南乍東、到其北岸狗邪韓國、七千餘里」トアルハ、帶方郡ヨリ狗邪即伽耶又加羅ニシテ、今ノ金海府、マデ海岸ニ沿ヒ、屈曲シテ七千餘里アリト云ヘルナレバ、漢江以北ニ非ズンバ、行程合ハズ。然ルニ東覽全羅道ノ部ニ「南原都護府、本百濟古龍郡、後漢建安中、爲帶方郡、曹魏時、爲南帶方郡、後唐高宗遣蘇定方、滅百濟、詔劉仁軌、檢校帶方州刺史」トアリ。唐ノ時、帶方州ヲ今ノ南原ノ地ニ置キタルハサル事ナガラ、漢魏ノ帶方ハ、此ノ地ニ非ズ。且帶方郡ハ只一所アルノミナルニ、之ニ南ノ字ヲ冠シタルハ、甚謂レナシ。コハ三國遺事ニ「漢分置三郡、謂玄菟樂浪帶方北帶方」「北帶方、本竹覃城」「曹魏時、始置南帶方郡今南原府」ト云ヘル誤リヲ承ケタルナリ。竹覃城ノ覃ハ、軍ノ誤寫ニシテ、コレモ唐ノ帶方州ノ地ニシテ、漢ノ帶方郡トハ全ク別所ナリ。三國史記地理志ニ、總章元年英國公李勣等ガ、高宗ノ勅ヲ奉ジテ、安東都護府ニ隷スベキ諸州縣ヲ分置シタル目錄ヲ引キタル中ニ「帶方州、本竹軍城、六縣」トアリテ、其ノ下ニ六縣ヲ列記シタル第五ニ「竹軍縣、本豆肹」トアリ。豆肹ハ、東覽全羅道羅州牧ノ古跡ニ「會津廢縣、在州西十五里、本百濟豆肹縣、新羅改今名來屬云々」トアル所ナリ。東考ニ云「我東、號爲帶方者多、唐時有帶方州二、一則滅百濟、以其地分置五都督府、幷爲帶方州、詔劉仁軌爲刺史者也、一則李勣滅高句驪後、以百濟南界置帶方州、而以至留軍那等縣爲屬者也。」此等ノ文ヲ合セ考フルニ、顯慶五年、齊明天皇六年、蘇定方ガ百濟ヲ滅シテ、五都督府ヲ置キタル時、豆肹縣ヲ竹軍縣ト改メテ、古龍郡今ノ南原府ナル帶方州ノ屬縣トシタリシヲ、總章元年、天智天皇七年、李勣ガ高麗ヲ滅シテ、都護府及九都督府ヲ置キタル時、百濟ノ州縣モ、便ニ依テ改更シ、帶方州治ヲ竹軍城ニ徙シ、其後新羅之ヲ取リテ、會津縣ト改メ、錦山郡今ノ羅州、ノ屬縣トシタルナリ。サレバ南原モ竹軍モ、皆唐ノ帶方州ナルヲ、遺事ニ漢魏ノ帶方郡トシタルハ非ナルノミナラズ、竹軍ハ南原ノ西南ニ當レルニ、竹軍ヲ北帶方、南原ヲ南帶方ト云ヘルハ、方位モ違ヘリ。東覽ハ、建安中ノ帶方ニ北ノ字ヲ加ヘザルニ、曹魏ニノミ南ノ字ヲ附ケタルハ、何ノ意ゾヤ。

右ニ述ベタル所ニ依リテ、兩漢魏晉ノ間、玄菟樂浪帶方ノ疆域大略考フルコトヲ得ベシ。前漢ノ末、玄菟ハ、小遼水ト鴨綠江ノ上流トノ間ニアリ、樂浪ハ、西ハ鴨綠江ヨリ、東ハ海ニ至リ、南ハ漢江ニ及ベリ。後漢ノ中葉ニハ、玄菟郡ハ、遼陽今ノ奉天府遼陽州城以東ノ地ヲ併領シ、樂浪ハ、嶺東七縣ヲ失ヘリ。公孫氏ノ時、樂浪ノ浿江以南ヲ割キテ、帶方郡ヲ置キ、魏晉皆之ニ因レリ。帶方ノ南新縣ハ、若羅紀ナルト同地ナラバ、今ノ慶尚ノ北境ニアリシナルベシ。玄菟樂浪ハ、高句麗ノ强盛ニ赴クニ隨ヒ、疆域漸ク蹙マリ、晉ノ初ニ至リ、玄菟ハ其境ヲ失ヒ、樂浪ハ其ノ北境ヲ失ヘリ。三郡ノ遂ニ高句麗ニ併セラルヽコトハ、第十章ニ言フベシ。サテ、コノ三郡ノ地ハ、既ニ高句麗ニ入リタレドモ、樂浪帶方等ノ名ハ、慕容燕拓跋魏ノ郡縣ノ中ニ猶見エタリ。讀史方輿紀要直隷大寧衞ノ條ニ「樂浪城、在營州西南、晉建興初、慕容廆僑置郡於此、以處樂浪流民、後魏初廢、正光末復置云々。」魏書地形志「南營州孝昌中營州陷、永熙二年置、寄治英雄城、領郡五縣十一」ノ下ニ、營丘郡天平四年置、領縣三云云、帶方元象中置、樂浪郡天平四年置、領縣一、戶四十九、口二百三、永樂興和二年置、」又「營州治和龍城、太延二年爲鎭、眞君五年改置、永安末陷、天平初復、領郡六、縣十四」ノ下ニ、「樂良郡前漢武帝置、二漢晉曰樂浪、後改罷、正光末復、治連城、領縣二、戶二百一十九、口一千八、永洛正光末置、有鳥山帶方二漢屬、晉屬、帶方、後罷、正光末復屬、」又「平州晉置、治肥如城、領郡二縣五」ノ下ニ、「北平郡秦置、領縣二云々、朝鮮二漢晉屬樂浪、後罷、延和元年、徙朝鮮民於肥如、復置、屬焉」トアリ。是等ノ郡縣ハ、半島ヨリ流徙セル亡民ヲ遼水以西ノ地ニ聚メテ、故地ノ名ヲ附ケテ僑置シタル者ニシテ、營州樂良郡ノ故城ハ、今ノ奉天省錦州府ノ西北百餘里ニ在リ、平州北平郡朝鮮縣ノ故城ハ、今ノ直隷永平府ノ北四

十里ニ在リ、南營州營丘郡帶方縣及樂良郡ノ故地モ皆今ノ直隸ノ東北境ニ在リ、名ハ樂良帶方ナド稱スレドモ、漢郡ノ舊地トハ相去ルコト甚遠シ。

第九章　貊人考

一　貊ノ諸種

支那ノ東北邊、今ノ滿州朝鮮ノ地ニ住ミタル古代ノ人種ハ、支那ノ史ニ據リテ考フルニ、長白山以北ニハ、肅愼氏アリ、肅愼氏ノ南、玄菟樂浪ノ旁地ニハ、貊ノ諸種アリ、樂浪ト貊トノ南、今ノ朝鮮南部ノ地ニハ、韓ノ諸種アリキ。

貊ハ、說文ニ貉ト書キテ、「北方豸種也」トアリ。魯頌ニ「淮夷蠻貊」、論語ニ「蠻貊之邦」、大學ニモ「蠻貊」、周禮夏官職方氏ニ「四夷八蠻七閩九貉五戎六狄」、墨子兼愛中篇ニ「商夏蠻夷醜貉」、孟子ニ「夫貉、五穀不生、惟黍生之、無城郭宮室宗廟祭祀之禮、無諸侯幣帛饔飧、無百官有司」トアルナド、何レモ東北ノ人種ヲ指セルナリ。大雅韓奕ノ詩ニ「王錫韓侯、其追其貊、奄受北國、因以其伯」トアリテ、毛傳ニ「追貊、戎狄國也」、鄭箋ニ「其後追也貊也、爲玁夷所逼、稍々東遷」トアルヲ、正義ニ「言其後云々者、以經傳說貊、多是東夷、故職方掌四夷九貉、鄭志答趙商云、九貊、卽九夷也、又秋官貉隸、注云、征東北夷所獲、是貊者、東夷之種、而分居於北、故於此時、貊爲韓侯所統、魯頌云、淮夷蠻貊、莫不率從、是於魯僖之時、貊近魯也、至於漢氏之初、其種皆在東北、於幷州之北、無復貊種、故辨之、玁狁之最彊 校勘記云「案此當作檢夷、夷之最彊、脱誤也」 故知爲玁夷所逼也」ト云ヘリ。史記匈奴傳ニ「趙襄子踰句注而破幷代、以臨胡貉」トアルハ、幷州ノ北ニ貊種アリシ時ノ事ナリ。「至冒頓、匈奴最彊大云々、東接穢貉朝鮮」トアルハ、貊種皆東方ニ遷リシ後ノ事ナリ。唯史記天官書ニ「其西北則胡狢月氏云々」トアル狢ハ、貉ノ省筆ニシテ、西北ノ夷ヲ指シテ貉ト云ヒ、漢書禮樂志ニ「隅辟越遠、四貉咸服」トアリテ、貉ヲ、夷ノ字ノ如ク、四夷ノ泛稱ニ用ヒタル如キハ、秦漢以後ノ濫用ニシテ、古書ニハ例ナキ事ナリ。

貊ノ種類ハ、周禮ニ九貉トアレドモ、九ノ數ハ、眞ノ數トモ思ハレズ、其ノ種名モ、物ニ見エタルコト無シ。又九夷ト云ヘルハ、論語子罕ニ「子欲居九夷」、國語魯語ニ「昔武王克商、通道於九夷百蠻」、禮記明堂位ニ「九夷八蠻六戎五狄」、爾雅釋地ニ「九夷八狄七戎六蠻、謂之四海」、尙書旅獒ニ「惟克商、遂通道于九夷八蠻」ナド見エテ、旅獒ノ孔傳ニ「九八言非一」正義ニ「偏檢經傳、四夷之數、參差不同、先儒舊解此、爾雅殷制、明堂位、及職方、幷爾雅下文云、八蠻在南、六戎在西、五狄在北、皆爲周制、義或當然、明堂位言、六戎五狄、職方言、五戎六狄、趙商以此問鄭、鄭答云、戎狄但有其國數、其名難得而知、是鄭亦不能定解」トアリ。戎狄ノ國名ニツキテ、漢儒既ニ定解スルコト能ハザレバ、九夷ノ國名モ、考フベカラザルコト知ルベシ。然ルニ後漢書東夷傳ノ序ニ「王制云、東方曰夷、夷者柢也、言仁而好生、萬物柢地而出、……夷有九種、曰畎夷于夷方夷黃夷白夷赤夷玄夷風夷陽夷」トアリテ、通典、之ニ從ヒ、又何晏ノ論語集解ニ「馬融曰、九夷、東方之夷有九種也」、皇侃ノ義疏ニ「四方、東有九夷、一玄菟、二樂浪、三高麗、四滿飾、五鳧更、六索家、七東屠、八倭人、九天鄙、南有八蠻云々、西有六戎云々、北有五狄、一月支、二濊貊、三匈奴、四單于、五白屋也」、爾雅釋地四極ノ疏、コレニ同ジ。日韓古史斷ニ伊藤長胤ノ盍簪錄ヲ引キテ、干夷ヲ奸(卽韓)ト註シ、白夷ヲ濊ト註シ、滿飾ハ、滿飾ト書キテ、「飾一作飾、今按滿州是、」鳧更ハ、鳧臾ト書キテ、「今按扶餘是、臾一作史又更倶誤也」、天鄙ハ、「鄙一作卑、今按鮮卑是、鮮天相近」ト註シタリ。サレドモ後漢書ナル九種ノ名ハ、凡テ史傳ニ見エタルコト無ク、皇侃ノ說モ、玄菟樂浪ハ、漢ノ都名ヲ取リ、高麗ハ、高句麗ノ略ニシテ、南北朝以來ノ通稱ヲ用ヒ、天鄙ハ、實ニ鮮卑ナラバ、東胡ノ裔ニシテ、漢ノ世ニ起リシ種名ナルノミナラズ、東胡

ハ、北狄ノ一種ナルヲ、東夷ノ中ニ列シ、又濊貊ハ東夷ノ一種ナルヲ、北狄ノ中ニ列シ、其ノ外、匈奴ト單于トヲ分ケテ二種トシ、南蠻西戎ノ種名モ、怪詭ニシテ、信ジ難キ者多ケレバ、古書ニ九夷又ハ九貊ト云ヘルハ、イカナル國ヲ指シタルニヤ、今考フベカラズ。九夷ハ、蓋東夷ヲ泛ク指シタル總名ニシテ、貊ハ、其ノ中ノ一大種ノ名ナルベシ。

サテ貊ハ、甚古キ名ナレドモ、古書ニ見エタルハ、只其ノ名ノミニシテ、其ノ事蹟ノ史ニ見エタルハ、漢書高祖紀四年八月處ニ「北貉燕人致梟騎助漢」トアルヲ始メトシテ、漢魏ノ際ニ至リテ、漸ク委シクナリ、夫餘高句麗沃沮濊貊等ノ諸種、世ニ著レタリ。此等ノ諸種ノ、貊人ナルベキコトハ、先ヅ漢書王莽傳「莽發高句驪兵當伐胡、不欲行、郡强迫之、皆亡出塞、因犯法爲寇」トアルヲ、嚴尤ノ奏言ニ「貉人犯法云々」ト云ヒ、後漢書光武紀建武二十五年ノ處ニ「遼東徼外貊人寇右北平漁陽上谷太原、遼東太守祭肜招降之」トアルヲ、東夷傳ニハ、遼東徼外貊人ヲ句驪ト書キ、又魏志東夷傳高句麗ノ處ニ「又有小水貊、句麗作國、依大水而居、西安平縣北有小水、南流入海、句麗別種、依小水作國、因名之爲小水貊、出好弓、所謂貊弓是也」ト云ヒ、又後漢書ニ「句驪、一名貊耳」トサヘアレバ、高句麗人ノ貊種ナルコト明カナリ。又麗紀琉璃王三十三年新大王二年、東川王二十年等ノ處ニ、梁貊ト云ヘル見ユ。大梁水ノ上流ニ住メル貊人ニシテ、句麗ト遼東トノ間ニ在リ。此モ、貊ノ一種ナリ。

魏志高句麗傳ニ「東夷舊語、以爲夫餘別種、言語諸事、多與夫餘同」ト云ヒ、魏書高句麗傳ニハ「高句麗者、出於夫餘」トテ、先祖朱蒙ガ、夫餘ヨリ逃レテ、東南ニ走リテ國ヲ建テタルコトヲ詳カニ記シタルニ據ルニ夫餘ハ、句麗ヨリ古キ國ニシテ、魏志後漢書ナル貊種ノ諸國ノ本土ト見ユレバ、漢書高祖紀ニ貉人ト見エタルハ、恐ラクハ夫餘人ヲ指セルナルベシ。

又魏志東沃沮傳ニ「其言語與句麗大同、時時小異」ト云ヒ、又「漢武帝云々、以沃沮城爲玄菟郡、後爲夷貊所侵、徙郡句麗西北」トアル夷貊ハ、即沃沮人ナレバ、沃沮人ヲモ貊ト云ヘルナリ。同傳ノ續キニ、沃沮ヨリ句麗ニ納ムル租稅ヲ擧ゲタルニ、「貊布」ノ名見エ、又「食飲居處衣服禮節、有似句麗」トモアリ。サレドモ沃沮ハ、地ノ名ニシテ、人種ノ名ニ非ズ。其ノ人種ハ、南隣ノ濊貊ト全ク同種ニシテ、ヤガテ濊ト云ヒシコトハ、同傳ニ、漢光武六年、邊郡ノ都尉ヲ省キタル後ニ、「以其縣中渠帥爲縣侯、不耐華麗沃沮諸縣皆爲侯國、夷狄更相攻伐、唯不耐濊侯、至今猶置功曹主薄諸曹、皆濊民爲之」トアルニテ知ラル。同書濊傳ニモ、此ノ事ヲ記シテ「自領以東七縣、都尉主之、皆以濊爲民、後省都尉、封其渠帥爲侯、今不耐濊、皆其種也」トアリテ、又東沃沮傳ノ續キニ、「北沃沮、一名置溝婁、去南沃沮百餘里、其俗南北皆同」トアレバ、北沃沮ノ民モ、同ジク貊種ナルベシ。

濊貊ハ、濊ト名ヅクル貊ノ意ニモ用ヒ、濊ト貊トノ意ニモ用ヒテ、用法一定セズ。濊ト貊トノ意ニ、用フル時ハ、貊ハ、濊ノ外ナル貊ノ諸種ヲ指セルナリ。但韓史ニハ、今ノ江原道春川府ノ地ニ住ミタリシ貊人ノミヲ特ニ貊ト云ヘルコトアリ。濊ハ、濊傳ニ「其耆老舊自謂與句麗……同種、言語法俗、大抵與句麗同」トアルニテ貊ノ一種ナルコト明カナリ。

然レバ夫餘、高句麗、小水貊、梁貊、南北沃沮、濊貊等ハ、皆貊人ニシテ、貊中最モ古キ者ハ、夫餘、最モ強キ者ハ、句麗ナリキ。皇國ニテハ、句麗ヲ高麗トモ狛トモ書キテ、こまト訓マセタリ。高麗ハ、高句麗ノ中略、狛ハ、貊ノ省筆ナリ。こまト唱ヘタル所由ハ、知ラズ。日韓古史斷ニ「我が古言にコマと呼べるは、三尺馬一名果下馬の產あるに因る」ト云ヘレド、イカヾアラン。狛ノ字ヲ用ヒタルハ、全ク句麗ハ、貊中ノ大國ニシテ、皇國ニ交通シタル頃ハ、實ニ唯一ノ貊國ナリシ故ナリ。

三韓ノ人種ハ、貊ノ別種ニヤト思ハル、コト無キニアラネドモ、史ニ明證ナケレバ、姑ク獨立ノ人種トシテ論ズベシ。但馬韓ノ一ナル百濟國ハ、魏書百濟傳ニ「其先出自夫餘……、其衣服飲食、與高句麗同」、又其王餘慶ガ後魏ニ上レル表ニ「臣與高句麗、源出夫餘」ト云ヒ、百濟ノ王家ハ、實ニ句麗ノ始祖鄒牟王ヨリ出デタルコト濟紀ニモ國史ニモ明證アレバ、諸韓國中、少クトモ百濟ノ王家ダケハ、純粹ノ貊人ナリ。又隋書新羅傳ニ「其王本百濟人、自海逃入新羅、遂王其國」トアルニ據レバ、辰韓ノ一國ナル新羅國ニモ、幾分カ貊種ノ混ジタルガ如シ。サレドモ三韓七十餘國ノ遺民ハ、二國ノ爲ニ絶滅スベキニ非ザレバ、二國ガ、南韓ノ全土ヲ分領シタル後ニテモ、其ノ人民ノ大部分ハ依然トシテ韓種ナルベシ。

コレヨリ夫餘沃沮濊貊ノ事ヲ、條ヲ分チテ、考フベシ。高句麗ハ言フベキ事甚多ギガ故ニ、次章ニ讓レリ。

二　夫餘

夫餘ノ名ハ、漢書ニ始メテ見エタリ。地理志燕地ノ條ニ「上谷至遼東、地廣民希云々、北隙烏丸夫餘、東賈眞番之利」ト云ヒ、王莽傳始建國元年、五威將、新室ノ印綬ヲ齎シテ四方ニ出デタル時、「其東出者、至玄菟樂浪高句驪夫餘、」同四年、嚴尤ノ奏言ニ「貉人犯法不從騶起、正有它心、宜令州郡且尉安之、今猥被以大罪、恐其遂畔、夫餘之屬、必有和、匈奴未克、夫餘穢貉復起、此大憂也」トアリ。此ノ國ノ起原ノ事ハ、支那ノ史ニ見エズ。王充ノ論衡ニ夫餘ノ祖東明王ノ神異ノ談アレドモ、此ハ、句麗國ノ始祖ノ事ヲ誤リ傳ヘタルナレバ、高句麗考ノ章ニ至リテ、委シク言フベシ。後漢書東夷傳ノ序ニ、九夷ノ名ヲ擧ゲタル中ニ風夷ト見エ、皇侃ノ論語義疏ニ鳬夷ト云ヘルヲ、爾雅ノ疏ノ一本ニ鳬臾トモ云ヘルハ、何レモ夫餘ヲ指シタルニヤアラン。

夫餘國ノ位置ハ、魏志東夷傳ニ「夫餘在長城之北、去玄菟千里、南與高句麗、東與挹婁、西與鮮卑接、北有弱水、方可二千里、戸八萬、其民土著、有宮室倉庫牢獄、多山陵廣澤、於東夷之域最平敞、土地宜五穀、不生五果」トアリ。挹婁ハ、古ノ肅愼氏ノ國ニシテ、魏志東夷傳ニ「挹婁在夫餘東北千餘里、濱大海、南與北沃沮接、未知其北所極、其土地多山險」トアリ。西ハ松花江ヨリ、東ハ日本海ニ至リ、長白山ヲ中央トシテ、豆滿江以北ニ散處セル人種ナリ。同傳ニ「自漢以來臣屬夫餘、夫餘責其租賦重、以黄初中叛之、夫餘數伐之、其人衆雖少、所在山險、隣國人畏其弓矢、卒不能服也」トアレバ、夫餘ノ盛時ハ、蓋挹婁ヲ屬國トシタルコトアルナリ。鮮卑ハ東胡ノ遺種ニシテ、匈奴ノ故地ニ據リ、其ノ東部ハ、遼水ノ濱ニ至レリ。弱水ハ、今ノ松花江ヲ指セルニ似タリ。夫餘ノ國ハ、遼水ノ東、松花江ノ南ニ在リテ、鮮卑挹婁高句麗ニ接シタレバ、大抵今ノ奉天府ノ東北境ナリ。新唐書渤海傳ニ、「扶餘故地爲扶餘府、常屯勁兵、扞契丹、領扶仙二州」、遼史地理志ニ「通州安遠軍節度、本扶餘國王城、渤海號扶餘城、太祖改龍州、聖宗更今名、保寧七年、以黄龍府叛人燕頗餘黨千餘戸置、升節度、統縣四、通遠縣、本渤海扶餘縣云々、歸仁縣、本渤海強帥縣云々」、又「龍州黄龍府、本渤海扶餘府、太祖平渤海還、至此崩、有黄龍見、更名、保寧七年、軍將燕頗叛、府發、開泰九年、遷城于東北、以宗州檀州漢戸一千復置、統州五縣三云々」方輿紀要簡覽奉天府ノ條ニ「開原縣、府東北二百里、古肅愼氏地、漢扶餘、遼龍州云々」、「遼黄龍故城、在縣境、歸仁廢縣、在縣東北」、盛京通志ニ「古扶餘府、唐時渤海大氏置、按其地在開原縣城西、遼爲黄龍府、其地跨龍岡、臨大漠、爲邊徼咽喉之路」トアルヲ合セ考レバ、夫餘王都ノ故地ハ今ノ開原縣ノ境内ニ在ルナリ。

夫餘ノ事跡ハ、後漢書東夷傳夫餘ノ條ニ「建武中、東夷諸國、皆來獻見、二十五年、夫餘王遣使奉貢、光武厚答報之、於是使命歲通、至安帝永初五年、夫餘王始將步騎七八千人、寇鈔樂浪、殺傷吏民、後復歸附、永寧元年、乃遣嗣子尉仇臺、詣闕貢獻、天子賜尉仇臺印綬金綵」、同傳高句驪ノ條ニ「建光元年秋、宮遂率馬韓濊

貊數千騎圍玄菟、夫餘王遣子尉仇臺、將二萬餘人、與州郡幷力討破之、斬首五百餘級」、又同傳夫餘ノ條ノ續キニ「順帝永和元年、其王來朝京師、帝作黃門鼓吹角抵戲以遣之、桓帝延熹四年、遣使朝賀貢獻、永康元年王夫臺將二萬餘人寇玄菟、玄菟太守公孫域破之、斬首千餘級、至靈帝熹平三年、復奉章貢獻、夫餘本屬玄菟、獻帝時、其王求屬遼東云」、魏志東夷傳ニ「夫餘本屬玄菟、漢末、公孫度雄張海夷、威服外夷、夫餘王尉仇臺更屬遼東、時句麗鮮卑彊、度以夫餘在二虜之間、妻以宗女、尉仇臺死、簡位居立、無適子、有孽子麻奈、位居死、諸加共立麻奈、牛加兄子名位居爲大使、輕財善施、國人附之、歲々遣使、詣京都貢獻、正始中、幽州刺史毋丘儉討句麗、遣玄菟太守王頎詣夫餘、位居遣犬加、郊迎供軍糧、季父牛加有二心、位居殺季父父子、籍沒財物、遣使薄斂送官、舊夫餘俗、水旱不調、五穀不熟、輒歸咎於王、或言當易、或言當殺、麻余死、其子依慮年六歲、立以爲王、漢時、夫餘王葬用玉匣、常豫以付玄菟郡、王死則迎取以葬、公孫淵伏誅、玄菟庫猶有玉匣一具、今夫餘庫有玉璧珪瓚數代之物、傳世以爲寶、耆老言先代之所賜也、（魏略曰其國殷富、自先世以來、未嘗破壞、）其印文言濊王之印、國有故城、名濊城、蓋本濊貊之地、而夫餘王其中、自謂亡人、抑有以也。」

尉仇臺ハ、蓋二人アリ。後漢書ナルハ、漢ノ安帝永寧元年ニシテ、紀元七百八十年、魏志ナルハ、公孫度ガ遼東ニ雄據セシ時ニシテ、漢獻帝ノ初年、紀元八百五六十年ノ頃ナレバ、其ノ間相去ルコト七八十年ナリ。「蓋本濊貊之地」ハ、夫餘ノ未ダ國ヲ建テザリシ頃ハ、此ノ地方ハ、總テ濊貊ト稱シタルニテ、夫餘王モ、其ノ初ハ濊王ト號シタルナリ。自謂亡人ハ、魏志ノ前文ニ「國之耆老、自說古之亡人」トアリ。此ノ文ニ據レバ、夫餘人ハ、古ヘ他處ヨリ遷リ來リシ者ノ如シ。其ノ本土ハ、考フベキ由ナケレドモ、本ハ遼水以西ノ地ニ住ミタリシヲ、東胡ガ、匈奴ニ逐レテ東遷セシニ由リ、夫餘モ、又東胡ニ迫ラレ、東遷シテ濊貊ノ地ニ據リタルナランカ。魏書序紀昭成皇帝什翼犍二年（晉成帝咸康五年）ノ條ニ「東自濊貊、西及破落那、莫不欵服」トアル濊貊モ、蓋夫餘ヲ指シタルナリ。

サテ依慮即位ノ後ノ事跡ハ、晉書東夷傳ニ「武帝時、頻來朝貢、至太康六年、爲慕容廆所襲破、其王依慮自殺、子弟走保沃沮、帝爲下詔曰、夫餘王世守忠孝、爲惡虜所滅、甚愍念之、若其遺類、足以復國者、當爲之方計、使得存立、有司奏、護東夷校尉鮮于嬰、不救夫餘、失於機略、詔免嬰、以何龕代之、明年夫餘後王依羅遣詣龕、求率見人還復舊國、仍請援、龕上列、遣督郵賈沉以兵送之、廆又要之於路、沉與戰大敗之、廆衆退、羅得復國、爾後每爲廆掠其種人、賣於中國、帝愍之、又發詔、以官物贖還、下司冀二州、禁市夫餘之口」、晉書前燕載記慕容廆ノ條ニ「率衆東伐扶餘、扶餘王依慮自殺、廆夷其國城、驅萬餘人而歸、東夷校尉何龕遣督護賈沉、將迎立依慮之子爲王、廆遣其將孫丁率騎邀之、沉力戰斬丁、遂復扶餘之國」、慕容皝ノ條ニ「永和三年、遣其世子儁與恪、率騎萬七千、東襲夫餘剋之、虜其王及部衆五萬餘口以還」トアリ。此ノ永和ノ役ハ資治通鑑晉穆帝永和二年ノ條ニ「初夫餘居于鹿山、爲百濟所侵、部落衰散、西徙近燕、而不設備、燕王皝遣世子儁、帥慕容軍慕容恪慕輿根三將軍萬七千騎、襲夫餘、儁居中指授、軍事皆以任恪、遂拔夫餘、虜其王玄及部落五萬餘口而還、皝以玄爲鎭軍將軍、妻以女」トアリテ、晉書ヨリ稍委シ。但「爲百濟所侵」ト云ヘルハ、恐ラクハ非ナリ。百濟ハ、句麗ノ南ニアリテ、夫餘ヲ去ルコト甚遠ケレバ、句麗ノ地ヲ踰エテ夫餘ヲ侵スベキ由ナシ。カクテ夫餘ハ、全ク慕容氏ニ滅サレ。慕容氏ノ亡ビタル後ハ、其ノ故地ハ、大抵句麗ニ幷セラレタリ。

又麗紀始祖東明王ノ條ニ「先是扶餘王夫解婁老無子、祭山川求嗣、其所御馬至鯤淵、見大石、相對流淚、王怪之、使人轉其石有小兒、金色蛙形、王喜曰、此乃天賚我令胤乎、乃收而養之、名曰金蛙、及長、立爲太子、後其相阿蘭弗曰、日者天降我曰、將使吾子孫立國於此、汝其避之東海之濱有地、號曰迦葉原、土壤膏腴宜五穀、可都也、阿蘭弗遂勸王、移都於彼、國號東扶餘、其舊都有人、不知所從來、自稱天帝子解慕漱、來都焉、

及解夫婁薨、金蛙嗣位、於是時得女子於太白山南優渤水、問之、曰、我是河泊之女、名柳花、與諸弟出遊、時有一男子、自言天帝子解慕漱、誘我於熊心山下鴨綠邊室中私之、即往不返、父母責我無媒而從人、謫居優渤水、金蛙異之、幽閉於室中」トテ、コレヨリ柳花ガ、日光ニ感ジテ、孕ミテ一卵ヲ生ミ、其ノ卵ヨリ出デタルハ、即句麗ノ始祖朱蒙ニシテ、難ヲ逃レテ、南ニ走リ、卒本川ニ至リテ國ヲ建テタルコトヲ記セリ。此等ノ傳説ノ荒誕ナルコトハ、暫ク措キ。解夫婁遷都ノ説ニ據レバ、朱蒙ノ生レタル所ハ、所謂東扶餘ニシテ、東海ノ濱ニ在リシガ如シ、サレドモ東海ハ、即日本海ニシテ、扶餘トハ相去ルコト甚遠ク、且魏書高句麗傳ニ朱蒙ノ事ヲ記シタルニ、「棄扶餘東南走」トアレバ、東海ノ濱ニテハ、方位合ハズ。廣開土王碑ニ「惟昔始祖鄒牟王之創基也、出自北扶餘」トアリ。夫餘ノ地ハ、疆域甚廣ク朱蒙ノ國ヲ建テタル卒本川ノ地モ、夫餘ノ界内ニシテ、卒本扶餘ト云ヘルガ故ニ、麗人ハ、其ノ本國ナル夫餘ニハ北ノ字ヲ加ヘテ區別シタルナリ。濟紀ニモ「朱蒙自北扶餘逃難、至卒本扶餘」、「又朱蒙在北扶餘所生子來爲太子」、其ノ原註ニ「北扶餘王解夫婁」ナド見エテ、東扶餘ト云ヘルコト更ニ無ケレバ、東遷ノ説ハ信ズベカラズ。

次ニ琉璃王十四年、（漢哀帝建平元年）春正月、扶餘王帶素、遣使來、聘請交質子、王憚扶餘强大、欲以太子都切爲質、都切恐不行、帶素恚之、冬十一月、帶素以兵五萬來侵、大雪、人多凍死乃去」。帶素ハ、東明王ノ紀ニ、金蛙ノ長子トアリ。二十八年（新王莽始建國元年）、「扶餘王帶素使來讓王云々」。二十九年、「矛川上有黑蛙與赤蛙群鬪、黑蛙不勝死、議者曰、黑北方之色、北扶餘破滅之徵也」。三十二年「扶餘人來侵、使子無恤率師禦之、無恤以兵少、恐不能敵、設奇計親率軍、伏于山谷以待之、扶餘兵直至鶴盤嶺下、伏兵發、擊其不意、扶餘軍大敗、棄馬登山、無恤縱兵盡殺之」。大武神王三年（新王莽地皇三年）「扶餘王帶素遣使送赤烏一頭二身云々」。四年「王出師伐扶餘、次沸流水上云々」。五年、「王進軍於扶餘國南、其地多泥塗、王使擇平地爲營、解鞍休卒、無恐懼之態、扶餘王擧國

出戰、欲掩其不備、策馬以前、陷濘不能進退、王於是揮怪由、怪由拔劒、號吼擊之、萬軍披靡不能支、直進執扶餘王斬首、扶餘人既失其王、氣力摧折、而猶不自屈、圍數重、王以糧盡士饑憂懼不知所爲、乃乞靈於天、忽大霧、咫尺不辨人物七日、王令作草偶人、執兵立營内外、爲疑兵、從間道潛軍夜出云々、王既至國、乃會群臣飲至、曰、孤以不德輕伐扶餘、雖殺其王、未滅其國、而又多失我軍實、此孤之過也、遂親弔死問疾、以存慰百姓」、「扶餘王帶素弟、至曷思水濱、立國稱王、是扶餘王金蛙季子、史失其名、初帶素之見殺也、知國之將亡、與從者百餘人、至鴨綠谷、見海頭王出獵、遂殺之、取其百姓、至是始都、是爲曷思王」。太祖大王十六年（漢明帝永平十一年）「曷思王孫都頭、以國來降、以都頭爲于臺」。

以上ノ事跡ハ、漢史ニ少シモ見エザレハ其ノ眞僞ハ考證スベキ由ナシ。但魏書ニ「如栗死、子莫來代立、乃征夫餘、夫餘大敗、遂統屬焉」トアルニ據レバ、夫餘ハ、句麗ノ征伐ニ遇ヒ、大敗ノ後遂ニ一時ハ句麗ニ服屬シタルナルベシ。太祖二十五年（漢章帝建初二年）及五十三年（漢和帝元興元年）ニ扶餘ノ使來獻ノ事アルモ、其ノ服屬ノ徵ナリ。如栗莫來ノ事ハ、高句麗考ニ言フベシ。

次ニ太祖王六十九年、（漢安帝建光元年）夫餘王ノ子尉仇臺ガ、漢兵ト力ヲ幷セテ句麗ヲ敗リシ事ヲ記シタルハ、後漢書高句驪傳ニ依レルニテ、其ノ後ノ扶餘ニ關スル事跡ハ、麗紀ニ悉ク闕略セリ。

サテ夫餘國ハ、晉ノ穆帝ノ時燕王慕容皝ニ滅サレタルコト、晉書資治通鑑ニ記シタル如シ。サレドモ其ノ種類ハ、悉ク絶滅シタルニ非ズ。廣開土王碑ニ「東夫餘、舊是鄒牟王屬民、中叛不貢、王躬率往討軍、到餘城、而餘擧國駭□□□」トアル東扶餘ハ、蓋夫餘ノ別部ニシテ、彼ノ鴨淥谷ニ國ヲ建テタル曷思王ノ如キ類ノ殘存セルモノナルベシ。魏志東沃傳ニ「北與挹婁夫餘接」トアレバ、鴨淥江ノ上流ニテ今ノ咸鏡道ニ接近セル所ニモ、夫餘人ノ住ミタリケンコト知ラル、麗紀文咨王三年（仁賢天皇六年、魏孝文帝太和十七年）「扶餘王及妻孥、以國來降」トアルハ、此

等ノ夫餘ノ遺種ナルベシ。魏書高句麗傳ニ、正始中、高雲ノ使者芮悉弗ガ、宣武帝ニ奏セル語ニ、「但黃金出自夫餘、珂則涉羅所產、今夫餘爲勿吉所逐、涉羅爲百濟所幷、國王臣雲、惟繼絕之義、悉遷于境內、二品所以不登王府、實兩賊是爲」ト云ヘルモ、夫餘ノ遺種ヲ境內ニ遷セルヲ云ヘルナリ。

夫餘ハ、遼東ノ古國ニシテ、挹婁ノ西南ニ在リシコト、魏志後漢書、以下諸書異辭ナシ。然ルニ魏書ニハ「豆莫婁國、在勿吉國北千里、去洛六千里、舊北扶餘也、在失韋之東、東至於海」トアリテ、失韋勿吉ノ東北ニ在ル豆莫婁國ヲ以テ北扶餘ノ舊地ト爲シタルハ決ク魏書ノ撰者ノ疎謬ナリ。坪井博士ノ古朝鮮形勢考（史學會雜誌第參拾五號）ニハ、此ノ魏書ノ文ニ據リテ、北夫餘ヲ遼東ノ夫餘ト區別シ、北夫餘ハ、高句麗ノ祖ニシテ、遼東ノ夫餘ハ百濟ノ祖ナリト云ヘリ。然レドモ魏書ノ文ヲ察スルニ豆莫婁國ノ水土風俗トシテ記シタル者ハ、悉ク魏志後漢書ナル夫餘傳ト同一ニシテ、一事モ異ナル所ナケレバ、所謂北扶餘ナル者ハ、即遼東ノ夫餘ニシテ、別所ナルニハ非ズ。然ルヲ「在勿吉國北千里」又ハ「在失韋之東」ト云ヘルハ、其ノ國ノ位置ヲ誤レルナリ。若クハ豆莫婁國ハ眞ニ失韋勿吉ノ東北ニ在リテ、夫餘トハ全ク懸隔セル所ナルヲ、夫餘ノ舊地ト誤認シタルニ由リテ、魏志ノ夫餘傳ノ水土風俗ヲ取リテ記入シタルニテモアルベシ。句麗人ガ夫餘ヲ北夫餘トモ云ヘルコト、百濟人ノ、句麗ト同ジク北夫餘ヨリ出デタルコトハ、廣開土王碑、魏書、麗紀、濟紀、國史等ニヨリテ明瞭ナレバ、坪井博士ガ南北夫餘ヲ區別シタルハ、附會ノ說ナリ。

三　沃沮

魏志東夷傳ニ云、「東沃沮、在高句麗蓋馬大山之東、濱大海而居、其地形、東北狹、西南長、可千里、北與挹婁夫餘、南與濊貊接、戶五千、無大君王、世々邑落各有長帥、其言語與句麗大同、時々小異、漢初、燕亡人衞滿王朝鮮、時沃沮皆屬焉、漢武帝元封二年、伐朝鮮、殺滿孫右渠、分其地爲四郡、以沃沮城爲玄菟郡、後爲夷貊所侵、徙郡句麗西北云々、其後皆以其縣中渠帥爲縣侯、不耐華麗沃沮諸縣、皆爲侯國、夷狄更相攻伐、唯不耐濊侯、至今猶置功曹主簿諸曹、皆濊民作之、沃沮諸邑落渠帥、皆自稱三老、則故縣國之制也、國小迫於大國之間、遂臣屬句麗、句麗復置其中大人爲使者、使相主領又使大加統責其租稅貊布魚鹽海中食物、千里擔負致之、又送其美女、以爲婢妾、遇之如奴僕、其土地肥美、背山向海、宜五穀、善田種、人性質直彊勇、少牛馬、便持矛步戰、食飮居處衣服禮節、有似句麗云々」。

東沃沮ハ、今ノ咸鏡道、沃沮城ハ、其ノ咸興府ナリ。蓋馬大山ハ、長白山ノ南支ニシテ、平安咸鏡兩道ヲ分界スル大山脈ナリ其地形、東北狹、西南長ハ、後漢書ニ「其地東西夾、南北長」ト書ケリ。何レニテモ聞ユ。沃沮諸城ノ中不耐城ハ、嘗テ樂浪東部都尉ノ治トナリ、其ノ名最モ著レタリ。其ノ所在ハ詳カナラネドモ、咸鏡道ノ南境ノ地ナルベシ、沃沮諸國、皆句麗ニ臣屬シタル後モ、不耐濊侯ハ、猶縣國ノ制ヲ失ハズ、魏ノ世ニ至リテハ、王爵ニ封ゼラレタル事サヘアリキ。魏志濊傳ニ「正始六年、樂浪太守劉茂、帶方太守弓遵、以領東濊屬句麗、興師伐之、不耐侯等擧邑降、其八年、詣闕朝貢、詔更拜不耐濊王、居處雜在民間、四時詣闕朝謁、二郡有軍征賦調、供給役使、遇之如民」トアリ。

東沃沮傳前文ノ續キニ云、「母丘儉討句麗、句麗王宮奔沃沮、遂進師擊之、沃沮邑落皆破之、斬獲首虜三千餘級、宮奔北沃沮、一名置溝婁、去南沃沮八百餘里、其俗南北皆同、與挹婁接、挹婁喜乘船寇鈔、北沃沮畏之、夏月恒在山巖深穴中爲守備、冬月氷凍、船道不通、乃下居村落、王頎別遣追討宮、盡其東界云々。」

北沃沮ハ、今ノ吉州以北ノ地ナルベシ。南沃沮ハ、即沃沮城ナリ。句麗ノ東ニ在ルガ故ニ、東沃沮トモ云ヒ、北沃沮ニ對スレバ、南沃沮ト云ヘルナリ。東考ニ「沃沮有東北南三名」トテ、南沃沮ヲ東沃沮ト別チタルハ、

非ナリ。挹婁喜乗船寇鈔ハ、豆滿江ニ由リ南下シテ、海濱ノ村落ヲ侵盗シタルナリ。

四　濊貊

濊ハ、漢書武帝紀ニ薉ニ作リ、漢書食貨志、王莽傳、晋書、魏書等ニハ穢ニ作リ、漢書地理志魏志、後漢書、通典等ニハ濊ニ作リ、隋書北史等ニハ獩ニ作ル、皆於廢切、音穢ナリ。漢書武帝紀元朔元年ノ條ニ「東夷薉君南閭等口二十八萬人降、爲蒼海郡」、食貨志ニ「彭吳穿穢貊朝鮮、置滄海郡、則燕齊之間、靡然發動」、又「東置滄海郡人徒之費、疑於南夷」、顔師古注ニ「本皆荒梗、始開通之、故言穿也」、後漢書東夷傳ニ「元朔元年、濊君南閭等畔右渠、率二十八萬口、詣遼東内屬、武帝以其地爲蒼海郡、數年乃罷」トアリ。此ノ濊人ハ、魏志濊傳ノ濊ニ非ズ、夫餘傳ニ「國有故城、名濊城、蓋本濊貊之地」トアル濊貊ナリ。三國史記地理志ニ「賈耽古今郡國志云、今新羅北界溟州、蓋濊之古國、前史以扶餘爲濊地、蓋誤」ト云ヒ、東覽ニモ、江原道江陵大都護府ノ古跡ニ滄海郡ヲ擧ゲテ、元朔元年置郡ノ事ヲ引キタレドモ、元朔元年ハ、朝鮮王衛右渠ノ未ダ滅ビザリシ時ナレバ、彭吳イカニ事ヲ好ムトモ、人ノ國都ヲ踰エテ、東海ノ國ヲ開通スベキ由ナシ。サレバ彼ノ薉君南閭ト云ヘル者ハ、夫餘ノ一部長ニシテ、衆ヲ率キテ遼東郡ニ降リタルヲ、武帝彭吳ニ命ジテ、其ノ駐留ノ地ニ就キテ、滄海郡ヲ建テタルニテ、今ノ江陵府ノ地ヲ以テ郡ト爲シタルニハ非ズ。然ルヲ東考ニ、東國古記ノ「南閭、乃扶餘君、而非在於朝鮮界内者也」ト云ヘル説ヲ駁シテ、「東海曰滄海、而濊居東海之濱、故名以滄海也、扶餘與東海遼隔、扶餘之非滄海明矣、舊説、扶餘君自稱亡人、國之耆舊、亦自稱古之亡人、南閭内屬、而爲扶餘之濊云、是説似得之矣」トテ、濊人ヲ東海ノ濱ヨリ扶餘ニ遷レル如ク云ヘルハ、時代ノ先後ト貊人南遷ノ大勢トヲ考ヘザル説ナリ。濊人ノ今ノ江原道ニ遷リシハ、何レノ世ナルカ、知ルベカラザレドモ、夫餘人ガ、濊貊ノ地ニ據レル時、濊貊ノ部落中、分離シテ南遷シタル者アルベシ。其ノ後句麗人ガ、夫餘ヨリ分レテ國ヲ建ツルニ及ビテ、曩ニ南遷シタル濊人ハ、又句麗ニ迫ラレテ、益東南ニ遷リ、遂ニ東海ノ濱ニ至リシナルベシ。夫餘句麗ノ人民ノ過半ハ、ヤガテ濊ノ遺種ナルベケレドモ、首領ト爲レル種人ト同化シテ、遂ニ濊貊ノ名ヲサヘ失ヒタレバ、後世ハ濊貊ト云ヘバ、江原道ニ住シタル種人ノミヲ指スコトトナレリ。羅紀南解次次雄十六年（新王莽天鳳六年）ノ條ニ「北溟人耕田、得濊王印獻之」トアルニ據レバ、江原ノ濊國モ、イト古キ國ノ如ク聞エレドモ、此ハ彼ノ夫餘傳ニ「其印文言濊王之印」トアルニヨリテ附會シタル説ニシテ、據トスルニ足ラズ。

魏志東夷傳ニ云、「濊、南與辰韓、北與高句麗沃沮接、東窮大海、今朝鮮之東、皆其地也、戸二萬云々、無大君長、自漢以來、其官有侯邑君三老、統主下戸、其耆老舊自謂與句麗同種、其人性愿慤、少嗜欲有廉恥、不請句麗、言語法俗、大抵與句麗同、衣服有異、男子、繋銀花廣數寸、以爲飾云々、其俗重山川、山川各有部分、不得妄相渉入、同姓不婚、多忌諱、疾病死亡、輒捐棄舊宅、更作新居、有麻布、蠶桑作緜、曉候星宿、豫知年歳豐約、不以珠玉爲寶、常用十月節祭天、晝夜飲酒歌舞、名之爲舞天、又祭虎以爲神、其邑落相侵犯、輒相罰責生口牛馬、名之爲責禍、殺人者償死、少寇盜、作矛長三丈、或數人共持之、能歩戰、樂浪檀弓出其地、其海出班魚皮、土地饒文豹、又出果下馬、漢桓時獻之云々」。不請句麗ハ、後漢書ニ不請匄ノ三字ニ作レリ。從フベシ。此ノ外、濊ノ名ノ漢史ニ見エタルハ、漢書王莽傳ノ「穢貉反」ハ、句麗人ヲ指セルニ似タリ。後漢書高句驪傳ニ「元初元年、復與濊貊寇玄菟」「建光元年春、幽州刺史馮煥等、將兵出塞擊之、捕斬濊貊渠帥」、「秋、宮遂率馬韓濊貊數千騎圍玄菟」、「其後濊貊率服、東垂無事」ナドアル類ハ何レモ句麗ノ國内ニ住ミテ、其ノ屬民トナレル濊人ヲ指セルニ似タリ。魏志高句麗傳ニ「沃沮東濊皆屬焉」、韓傳ニ「桓靈之末、韓濊彊盛」、又「國出鐵、韓濊倭皆從取之」トアル濊ハ、濊傳ノ濊ヲ指セルニ似タリ。此ノ濊國ハ、三國

史記及東覽東考、皆今ノ江陵府ナリト云ヒ、東覽江陵府ノ古跡ニ「濊國古城、在邑城東、土築、周三千四百八十四尺、今廢」トアリ。其ノ蹯據セル彊域ハ、大抵今ノ江原道ノ地ニシテ、其ノ南界ハ東考ニ「濊之南與辰韓接、未知在何地、而辰韓所統、不過十二國、後爲新羅、至阿達羅王時、始開鷄立嶺竹嶺路、新羅立國二百餘年、始開二嶺、則辰韓時必不及於此、而濊之地踰二嶺者可知」トアリ。

又濊貊諸部ノ中ニ、單ニ貊ト稱スル國アリ。羅紀儒理尼師今十七年（漢光武帝建武十六年）ノ條ニ、「華麗不耐二縣人連謀、率騎兵犯北境、貊國渠帥以兵要曲河西敗之、王喜與貊國結好」、十九年、「貊帥獵得禽獸獻之」トアリ。此ノ貊國ハ三國史記ニ「朔州、賈耽古今郡國志云、句麗之東南、穢之西、古貊地、蓋今新羅北朔州云々」トアル處ニテ、今ノ春川都護府ノ地ナリ。此ハ、貊中ノ一小部落ニシテ、漢籍ニ東夷ノ大種名トシテ用ヒタル貊人トハ異ナリ。但隋書百濟傳ニ「百濟自西行三日、至貊國云」トアルハ、西ハ東ノ誤リニテ、此ノ貊國ヲ指セルナリ。然ルヲ北史ニ「西行三日至貊國、千餘里云」ト、千餘里ノ三字ヲ加ヘタルハ、蛇足ナリ。

新唐書渤海傳ニ「濊貊故地爲東京、曰龍原府、亦曰柵城府、領慶鹽穆賀四州、沃沮故地爲南京曰南海府、領沃晴椒三州」、トアレドモ、渤海ノ時、濊貊ノ地ハ、新羅ニ屬シテ、渤海ニテ之ヲ領シタル事ナシ。下文ニ「龍原東南瀕海、日本道也、南海、新羅道也」トアルニ據レバ、龍原府ハ、沃沮ノ東北部、即北沃沮ノ地、南海府ハ、南沃沮ニシテ、新羅ニ接シタル處ナルベシ。然ルヲ遼史地理志ニ「海州南海軍節度、本沃沮國地、高麗爲沙卑城、唐李世勣嘗攻焉、渤海號南京南海府云々」トアリテ、遼ノ海州、即今ノ奉天府海城縣ヲ沃沮ノ故地トシタルハ、誤リナリ。明一統志、方輿紀要等、皆此ノ誤リヲ承ケタリ。東考ニモ之ヲ辯ジテ、「遼志、以遼東之海州爲沃沮國地、此與遼中京之有三韓縣、日本武莊州之有高麗郡、攝州之有百濟郡同、或俘其地之人以居、或夸大以名之也、」ト云ヘリ。但皇國ノ高麗（コマ）ノ郡百濟（クダラ）ノ郡ハ歸化ノ民ヲ置キタルニテ夸大ノ意アリシニ非ズ。

第十章　高句麗考

一　句麗建國ノ舊土

後漢ノ王充ガ論衡第二卷吉驗篇ニ云「北夷橐離國王侍婢有娠、王欲殺之、婢對曰、有氣大如雞子、從天而下、我故有娠、後產子、捐於猪溷中、猪以口氣噓之、不死、後徙置馬欄中、欲使馬藉殺之、馬復以口氣噓之、不死、王疑以爲天子、令其母收取、奴畜之、名東明、令牧牛馬、東明善射、王恐奪其國也、欲殺之、東明走、南至掩淲水、以弓擊水、魚鼈浮爲橋、東明得渡、魚鼈解散、追兵不得渡、因都王夫餘、故北夷有夫餘國焉」三國志東夷傳夫餘ノ條ノ裴注ニ魏略ヲ引キテ、「舊志云、昔北方有槖離之國者、其王侍婢有身云々」トアリテ下文ハ、大抵論衡ト同ジケレバ、舊志ト云ヘルハ、論衡ヲ指セルナルベシ。カクテ後漢書夫餘傳、梁書隋書北史ノ百濟傳等、皆此ノ事ヲ記セリ。但橐離ノ橐ノ字魏略ニハ槖ト書キ、後漢書北史ニハ、索ト書キ、梁ノ劉勰ガ新論第五卷命相篇ニハ、褒ト書キ、梁書ニハ、櫜ト書ケリ。又掩淲水ハ、魏略ニハ、施掩水ト書キ、後漢書ハ論衡ト同ジク、梁書北史ニハ淹淲水ト書キ、隋書ニハ、淹水ト書ケリ。此等ノ書ハ、何レモ東明ヲ以テ夫餘國ノ始祖トシタレドモ、其ノ實ハ、夫餘國ノ亡人ニシテ、高句麗國ノ始祖ナルコトハ、次々ノ文ヲ見テ明カナリ。

魏書（百一）高句麗傳ニ云「高句麗者、出於扶餘、自言先祖朱蒙、朱蒙母、河泊女、爲扶餘王閉於室中、爲日所照、引身避之、日影又逐、既而有孕、生一卵、大如五升、夫餘王棄之與犬、犬不食、棄之與豕、豕又不食、棄之於路、牛馬避之、棄之野、衆鳥以毛茹之、夫餘王割剖之、不能破、遂還其母、其母以物裹之、置於暖處、有一男、破殼而出、及其長也、字之曰朱蒙、其俗言朱蒙者善射也、夫餘人以朱蒙非人所生、將有異志、請除之、王不聽、命之養馬云々、夫餘之臣又謀殺之、朱蒙母陰知、告朱蒙曰、國將害汝、以汝才略、宜遠適四方、朱蒙

乃與烏引烏違等二人、棄夫餘東南走、中道遇一大水、欲濟無梁、夫餘人追之甚急、朱蒙告水曰、我是日子、河伯外孫、今日逃走、追兵垂及、如何得濟、於是魚鼈並浮、爲之成橋、朱蒙得渡、魚鼈乃解、追騎不得渡、朱蒙遂至普述水、遇見三人云々、至紇升骨城、遂居焉、號曰高句麗、因以爲氏焉」。朱蒙者善射也ハ滿洲源流考ニ「朱蒙、滿語卓琳莽阿、善射也」トアリ。麗紀ハ始祖朱蒙ノ事ヲ記スルニ、全ク魏書ノ文ニ據レリ。唯其ノ初ニ、扶餘王解夫婁ガ、金色蛙形ノ小兒ヲ大石ノ下ヨリ得タル傳説ト天帝ノ子解慕漱ヲ避ケテ、東海ノ濱ニ徙レル傳説ト、金蛙ガ、解夫婁ノ位ヲ嗣ギタル後、河伯ノ女柳花ヲ得タル傳説トヲ補ヒタルハ、其ノ國ノ古傳ニ依リシナルベシ。又烏引烏違等二人ヲ烏伊摩離陝父等三人ニ改メ、一大水ハ、淹淲水ト書キテ、「在今鴨綠東北」ト註シ、普述水ハ、毛屯谷ニ改メ、「至紇升骨城、遂居焉」ヲバ、「至卒本川、觀其土壤肥美、山河險固、遂欲都焉、而未遑作宮室、但結廬於沸流水上居之」ト云ヘリ。

論衡ノ東明ト魏書ノ朱蒙トハ、全ク同人ニシテ、其ノ傳説モ、甚善ク似タレバ、麗紀ニハ「始祖東明聖王、姓高氏、諱朱蒙」、ト云ヒテ、東明ヲ朱蒙ノ號トセリ。三國志東夷傳高句麗ノ處ニ「以十月祭天、國中大會、名曰東盟」トアルモ、始祖東明ヲ祀リテ天ニ配セル事ナルヲ、漢人ハ、東盟ヲ以テ祭祀ノ名ト誤傳シタルナリ。續紀四十延暦八年皇太后光仁天皇ノ皇后高野新笠姫ノ命ヲ葬ルノ條ニ、「后先出自百濟武寧王之子純陁太子云々、其百濟遠祖都慕王者、河伯之女、感日精而所生、太后即其後也、因以奉謚焉」トアリテ、謚ヲ天之高知日之子姫ト稱シ奉ル由見エ、又延暦九年津ノ連眞道等ガ上表ニ「夫百濟太祖都慕大王者、日神降靈、奄扶餘而開國、天帝授籙、總諸韓而稱王」ト云ヘリ。都慕王ハ即朱蒙ニシテ、高句麗王ノ始祖ナレドモ、百濟ノ始祖溫祚ハ、朱蒙ノ第三子ナレバ、百濟ニテモ、朱蒙ヲ國祖トシテ常ニ之ヲ廟祀セリ。感日精ト云ヒ日神降靈ト云フハ、魏書ノ日ニ照ラサレテ孕メリト云ヘル傳説ニ善ク合ヘリ。論衡ノ「有氣大如雞子、從天而下」ト云ヘルモ、全ク此ノ傳説ヲ聞キ傳ヘタリト見ユレバ、此ノ傳説ハ、高句麗ノ國初ヨリ傳ハリタル極メテ古キ者ナルベシ。

此ノ王ノ名ハ、麗紀ノ註ニ「一云鄒牟、一云象牟」ト云ヒ、濟紀ニハ「百濟始祖溫祚王、其父鄒牟、或云朱蒙」ト云ヒ、姓氏錄右京諸蕃ノ處ニ「長背ノ連、高麗國主鄒牟王一名朱蒙之後也」、山城國諸蕃ノ處ニ「高井ノ造高麗國主鄒牟王二十世ノ孫、沃安祈王之後也」ト云ヒ、廣開土王ノ碑ニモ「始祖鄒牟王」トアリテ、天智紀ニ仲牟王、羅紀文武王ノ處ニ中牟王、上ニ引キタル續紀、又姓氏錄諸蕃百濟ノ處ニ屢都慕王トアルハ、皆此ノ王ナリ。東明、東盟、朱蒙、鄒牟、象牟、仲牟、中牟、都慕、皆同音ノ轉訛ヨリ出デタル異譯ナリ。姓氏錄ニ鄒牟トモ都慕トモ云ヘルハ、高句麗ヨリ歸化セル人ハ、鄒牟ト傳ヘ、百濟ヨリ歸化セル人ハ、都慕ト傳ヘタルニヨリ、各家ノ傳ヘノ儘ニ記シタルナリ。韓史ハ、魏書ニヨリテ、多ク朱蒙ノ名ヲ用フレドモ、廣開土王ノ碑ニ依レバ、麗人ノ古クヨリ唱ヘタル名ハ鄒牟王ナリ。

鄒牟即朱蒙ハ、高句麗百濟ノ始祖ナルヲ、論衡ニ東明ヲ夫餘國ノ始祖ノ如ク記シタルハ、謬リナリ。サレドモ高句麗ノ舊都ハ鴨綠江ノ上游ニシテ、夫餘ヲ去ルコト遠カラズ、濟紀ニハ之ヲ卒本扶餘ト名ヅケ、其ノ地ノ舊王ヲ夫餘王ト云ヒテ、朱蒙ノ生國ヲバ北扶餘ト云ヒ、又津ノ連眞道等ノ表ニモ「奄扶餘而開國」ト云ヘレバ、卒本ハ本夫餘ノ諸部中ノ一部ナルベシ。三國遺事ノ註ニ「此卒本扶餘、亦是北扶餘之別都」ト云ヘリ。サレバ論衡ニ王夫餘ト云ヘルハ、夫餘ノ域內即卒本扶餘ニ割據セシコトヲ謂ヘルニテ、彼ノ槖離國ト云ヘルハ、北扶餘國ノ別名ナリシヤモ知レズ。又槖ハ、魏略ニ槀ト書キテ、高句ノ二字ノ誤寫トモ見ユレバ、夫餘ヨリ高句麗ノ出デタリト云ヘル傳説ヲ、本末ヲ顚倒シテ、高句麗ヨリ夫餘ノ出デタリト誤レルニテモアルベシ。然ルヲ隋書八十一東夷傳ニハ、槖離ヲ高麗ト改メテ、東明ヲ百濟ノ始祖トシ、高麗ノ朱蒙ノ事ハ、魏書ニ據リテ記シ、東明ト朱蒙トハ全ク別人ト爲シタルハ、其誤リ愈大ナリ。通典ニ「索離國、即高麗國」ト云ヘルハ、隋書ノ誤

リヲ承ケタルナリ。又遼史地理志上京道ノ處ニ「韓州、東平軍、下刺史、本槀離國」トアレドモ、コハ只魏略ニ「北方有槀離之國」ト云ヘル文ニヨリテ、扶餘城ノ北ニ當レル地ヲ槀離ニ推當テタルニテ、據ルニ足ラズ。因ニ云フ、遼史地理志ニハ、誤謬甚多シ。今其ノ朝鮮ニ關スル者數條ヲ擧グレバ、東京道ノ處ニ「東京遼陽府、本朝鮮之地」、遼陽府ハ、漢ノ遼東郡襄平縣ノ地ニシテ、今ノ奉天府遼陽州ナリ。晉末以來高句麗ニ屬シタレドモ、古朝鮮ノ故地ニハ非ズ。「元魏、太武遣使至其(句麗王安)所居平壤城、遼東京本此」、平壤ハ、漢ノ樂浪郡治ニシテ、遼ノ東京遼陽府ニハ非ズ。「忽汗州即故平壤城也、號中京顯德府」、舊唐書渤海傳ニ「祚榮東保桂婁之故地」、「睿宗以其所統爲忽汗州」、新唐書渤海傳ニ「祚榮保太白山之東北」、「天寶末、欽茂徙上京、直舊國三百里忽汗河之東」、又「以肅愼故地爲上京、曰龍泉府、其南爲中京、曰顯德府」、方輿紀要篩覽寧古塔ノ處ニ「渤海大氏於是並上京龍泉府」、又「渤海上京城、在城西南」トアリ。桂婁ハ、高句麗ノ郡名、太白山ハ、即長白山ナリ。此等ノ文ヲ合セ考フルニ、忽汗州即顯德府ノ地ハ、上京ノ西南、高句麗ノ舊土ノ北ニアリテ、上京ト相去ルコト三百里ニ過ギザレバ、平壤城ニ非ザルコト論ナシ。又顯州ハ遼河ノ西、醫巫閭山ノ下ニアレバ、顯德府ノ地トハ相去ルコト數千里ナリ。「遼陽府遼陽縣、本渤海國金德縣地、漢浿水縣」、「遼陽府紫蒙縣、本漢鏤芳縣地」、「興州、中興軍節度、本漢海宜縣地云々、在京西南三百里」、「崇州、隆安軍節度、本漢長岑縣地云々、在京東北一百五十里」、鏤芳ハ、鏤方ノ誤、海宜ハ、海冥ノ誤ナリ。浿水鏤方海冥長岑ハ皆樂浪郡ノ屬縣ニシテ、遼東郡ノ地ニ非ズ。「開州、鎭國軍節度、本濊貊地、高麗爲慶州、渤海爲東京龍原府」、濊貊ノ地ハ今ノ江原道、渤海ノ東京ハ、今ノ咸鏡道ノ東北部ニ在リキ。此ハ、新唐書渤海傳ノ誤ヲ承ケタルナリ。「海州、南海軍節度、本沃沮國地」、海州ハ、今ノ奉天府海城縣、沃沮國ハ、今ノ咸鏡道咸興府ナリ。「耀州巖淵縣、東界新羅、故平壤城在縣西南」遼ノ時ハ、新羅已ニ滅ビタレバ、新羅ハ高麗ノ誤ナルベシ。耀州ノ故城ハ、今ノ海城縣ノ西南四十里ニアレバ、高麗ヲ去ル事甚遠クシテ界ヲ接セズ。平壤城ノ位置モ、甚非ナリト云ヘル類ナリ。此等ノ誤ハ宋書ノ「東夷高句驪國、今治漢之遼東郡」ト云ヘル誤ヲ承ケ、且高句麗ノ平壤城ヲ漢ノ遼東郡治ナル襄平城ト混ラレタルヨリ起レルガ如シ。カヽル疎忽ハ遼史ヲ撰シタル元人ノ所爲トハ見ルベカラズ。遼人州縣ヲ建置スル時、古代ノ地理ニ昧キヨリ生ジタル者多カルベシ。

高句麗ノ地ハ、魏志東夷傳ニ「高句麗在遼東之東千里、南與朝鮮濊貊、東與沃沮、北與夫餘接、都於丸都之下、方可二千里、戶三萬、多大山深谷、無原濕、隨山谷以爲居、食澗水、無良田、雖力佃作、不足以實口腹云々」トアリテ、魏ノ頃マデハ、遼東ノ東、樂浪ノ北ニ當リテ、其ノ本據ハ、鴨綠江ノ上流、長白山脉ノ南麓ニ在リキ。朱蒙ガ住メル卒本川、一名卒本扶餘ハ、沸流水上ノ谷地ニシテ、魏志ニ「多大山深谷」トアル山谷ノ一ナリ。魏志ニ前漢ノ時、玄菟郡治ヲ句麗ノ西北ニ移シヽ由見エ、梁書高句麗傳ニ「其國、漢之玄菟郡也」、三國遺事ニ「卒本州玄菟郡之界」ト云ヘルニ據レバ、卒本扶餘ハ、今ノ興京界內ナル玄菟故城ノ東南ニ當レル所ナリ。沸流水ハ、魏志東夷傳ニモ毌丘儉傳ニモ見エテ、著名ナル川ナリ。其ノ川ノ上流ニ沸流國アリテ、其國王松讓、朱蒙ト辯ヲ鬪ハシ、射擊ヲ校ベタレドモ、抗スルコト能ハズシテ、國ヲ以テ來リ降レルコト、麗紀ニ見ユ。遼史地理志東京道淥州ノ處ニ、「正州本沸流王故地、國爲公孫康所倂、渤海置沸流郡、有沸流水、戶五百、隷淥州、在西北三百八十里」トアリテ、沸流王ノ故地ハ、鴨綠江ノ上流ナル淥州ノ西北ニ當レバ、沸流水ハ、漢書地理志ノ鹽難水即今ノ佟佳江ノ上流ナルベシ。

隋書東夷傳ニ、高麗ノ國都平壤城ヲ記シタル次ニ、「復有國內城漢城、並其都會之所、國中呼爲三京」トアリ。此ノ國內城ハ、麗紀琉璃王二十二年、漢平帝元始三年「冬十月、王遷都於國內、築尉那巖城」ト見エ、三國史記雜志地理ニ「總章二年英國公勣奉勅、以高句麗諸城置都督府及州縣目錄云、鴨淥以北已降城十一、其一國內城、從平壤至此十七驛、則此城亦在北朝境內、但不知其何所耳」、北朝トハ、遼ヲ指シテ云ヘルナリ。通典ニハ「馬訾水、一名鴨綠水云云、經國內城南、又西與一水合、即鹽難水也」トアリ。鹽難水ハ即佟佳江ニシテ、國內城ハ、佟佳江ノ東ニ當リテ、鴨綠江ノ上流ノ北岸ニアリト見ユレバ、彼ノ廣開土王ノ碑ノ現レタル盛京奉天府懷仁縣ナル洞溝ノ地ハ、蓋國內城ノ近郊ナラン。此ノ地ハ、鴨淥江口ヨリ八百餘里ノ所ニシテ、朝鮮平安道江界都護府ノ管內ナル滿浦鎭高山里堡二城ノ對岸ニアリ。遼史地理志東京道ニ「淥州鴨綠軍節度、本高麗故國、渤海號西京鴨綠府云々、都督神桓豐正四州事」トアル淥州ハ、即國內城ノ故地ニシテ、渤海ノ時ハ五京ノ一トナリ、遼ノ時ハ、鴨綠江

ノ上游ヲ都督スル藩鎭トナレルナリ。然ルヲ麗紀ニ括地志ヲ引キテ、「不耐城、即國內城也」ト云ヒ、東覽平安道義州牧ノ古跡ニ「國內城、一云不而城」ト云ヒ、又鄭麟趾ノ高麗史地理志及兵志ノ文ニ依リテ、「國內城、當在古麟州境內」ト云ヘルハ、皆非ナリ。不耐即不而ハ、本樂浪東部都尉ノ治ニシテ、單々大嶺ノ東ニアレバ、國內城トハ相去ルコト千餘里ナリ。此ノ誤ノ本ヲ尋ヌルニ、三國志毋丘儉傳ニ「刊丸都之山、銘不耐之城」トアルハ、本二事ナルヲ梁書ニ「到丸都山銘不耐城」ト書キタルヨリ、後人之ヲ見テ、不耐ハ丸都ノ邊ニアリト誤認シタル者ナルベシ。又古麟州ハ義州ノ南三十五里ニアリテ、鴨綠江ノ海ニ入ル處ナレバ、上流ナル洞溝ノ邊ヨリハ甚隔タレリ。

又魏志東夷傳ニ「高句麗云々、都於丸都之下」、其ノ下文ニ「伊夷摸更作新國、今日所在是也」、麗紀山上王二年、漢獻帝建安三年「春二月、築丸都城」、十三年建安十四年「冬十月移都丸都」トアリ。丸都ハ。唐書地理志ニ「自鴨綠江口、舟行百餘里、乃小舫泝流、東北三十里、至泊汋口、得渤海之境、又泝流五百里、至丸都城」トアリテ、鴨綠江口ヨリ六百三十餘里ノ處ニアリ。遼史地理志淥洲ノ處ニ「桓州、高麗中都城、故縣三、桓都神鄉淇水、皆廢、高麗王於此剏立宮闕、國人謂之新國、五世孫釗晉康帝建元初、爲慕容皝所敗、宮室焚蕩、戶七百、隸淥州、在西南二百里」トアリ桓都ハ、即丸都ナリ。桓丸音相通ヘリ。烏桓ヲ烏丸ト書クモ、此ト同例ナリ。中都ト云ヘルハ、丸都ハ卒本ト國內城トノ中間ニアルガ故ナルベシ。遼ノ世ニ桓州ト名ヅケタルハ、桓都ノ首字ヲ取レルナリ。此等ノ文ヲ合セ考フルニ、丸都城ハ、山上王伊夷摸ノ經營シタル新國ニシテ、コレモ、鴨綠江ノ上流ニアルナリ。且丸都ハ、江口ヨリ六百餘里ノ所ニアリテ、又淥州ノ西南二百里ニ當レバ、淥州即國內城ノ地ハ江口ヨリ八百餘里ノ所ニアリテ、其ノ位置ハ、洞溝ノ邊ト甚ヨク合ヘリ。サレバ丸都ノ故地、即遼ノ桓州ノ地ハ、洞溝ノ西南二百里ニシテ、蓋今ノ楚山府若クハ其ノ對岸ノ邊ナルベシ。カクテ朱蒙ガ卒本ニ都シテヨリ以來、再ビ都ヲ徙シタレドモ、鴨綠江ノ上流ヲ遠ザカリシ事ナカリシガ、第二十代長壽王十五年宋文帝元嘉四年ニ至リ、始メテ平壤城ヲ國都ト定メタリ。然ルニ東覽平壤府ノ古跡ニ「九梯宮、東明王之宮」、「麒麟窟、在九梯宮內浮碧樓下、東明王養麒麟馬于此」、中和郡北至平壤府界六里ノ陵墓ニ「東明王墓、在龍山」、成川都護府平壤府ノ東北八十里ノ地ノ沿革ニ「本沸流王松讓故都」、其ノ山川ニ「沸流江、即卒本川、俗稱遊車衣津、在客館西三十步」、其ノ故跡ニ、「卒本川、沸流國、鶻嶺、東明王三年、群神城郭ヲ築キシ所蟠原朱蒙山鹿ヲ倒懸シテ、天雨ヲ祈リシ所涼谷琉璃王、二宮ヲ造リテ不姬雉姬ヲ置キシ所等ヲ擧ゲテ、高句麗ノ舊國ハ、平壤ノ成川ノ邊ニ在リシガ如ク言ヘルハ、皆韓人傳說ノ誤リナリ。唐ノ章懷太子、後漢書掩淲水ニ註シテ、「今高麗中有蓋斯水、疑斯水是也」ト云ヘリ。此ノ川ハ、東覽平安道博川郡ノ山川ニ「大寧江、古稱蓋泗江、又名博川江、俗傳朱蒙自扶餘南奔到此、龜鼈成橋、因名利涉」トアル所ニテ、平壤ニ赴ク路ナリ。然レバ句麗ノ舊國ノ位置ヲ誤リタルハ、唐人ヨリ既ニ然ルナリ。東考ニ「漢昭帝元鳳元年、置二郡、而句麗開國、在元帝建昭二年、其間爲四十四年、是時漢道全盛、而樂浪太守、在於今平壤、自平壤、至成川、不過百數十里、松讓句麗何以割據乎、且今咸鏡道、爲沃沮縣、屬於樂浪、句麗又何以介於其間乎、所謂紇升骨沸流水、不當在於鴨江以南、而遼志所載、似得矣」ト云ヒ、又東史會綱ヲ引キテ「東明初起之地、其東北爲建州衛界、西北爲蓋州衛界、非我國圖籍所能考據、而東人俚俗荒誕之言、如東明驎馬等事、承訛襲怪、便作古實、今平安一道之內、山川城郭之名、皆傳會於東明國所見之名號、以實其奇誕、而輿地勝覽、不加證辨、直以東明爲起於樂浪、而遂以成川爲松讓國、龍岡爲黃龍國、優渤水爲在今寧邊香山、荇人國亦附於寧邊古跡之末、此處甚多、皆似誤也、金富軾三國史記地理志、卒本川、松讓國、優渤水、黃龍荇人等國、皆云未詳、此恐爲的論」ト云ヘルハ、大カタ然ル事ナリ。但卒本川松讓ノ國ハ、佟佳江ノ上流ナルベキコト、前ニ云ヘルガ如クナレバ、明ノ建州衛今ノ興京ノ東南ニ當リテ、蓋州衛今ノ奉天府蓋平縣トハ懸隔セル所ナルヲ、二衛ノ南ニ當レルガ如ク云ヘルハ、漢ノ西安平縣ナル小水貊ノ地ヲ東明初起之地ト誤認シタルニ似タリ。

又三國史記地理志ニ云、「漢書志云、遼東郡、距洛陽三千六百里、屬縣有無慮、則周禮北鎭醫巫閭山也、大

遼於其下置醫州玄菟郡、郡ハ軍ノ誤カ。遼ノ制郡名ナシ 距洛陽東北四千里、所屬三縣、高句麗、是其一焉、則所謂朱蒙所都紇升骨城卒本者、蓋漢玄菟郡之界、大遼國東京之西、漢志所謂玄菟屬縣高句麗是歟、昔大遼未亡時、遼帝在燕京、則吾人朝聘者、過東京、涉遼水、一兩日行至醫州、以向燕薊、故知其然也」、遼史地理志ヲ案ズルニ、遼ノ州軍ニ醫州玄菟軍ト云ヘル所ナシ。醫巫閭山ノ下ニハ、顯州奉先軍アリテ東京ニ屬シ、奉先山東歸義三縣ト嘉州遼西州康州トヲ統ベタリ。中京大定府ノ所管ニ「高州觀察、唐信州之地云々、開泰中、聖宗伐高麗、以俘戸置高州、屬中京、統縣一、三韓縣、辰韓爲扶餘、弁韓爲新羅、馬韓爲高麗、開泰中、聖宗伐高麗、俘三國之遺人置縣、戸五千」トアリ。高句麗等三縣ト云ヘルハ、蓋此ノ高州三韓縣ノ事ヲ誤傳シタルナリ。顯州高州ハ何レモ遼河ノ西ニ在リテ、玄菟ノ故郡ト相去ルコト千餘里ナレバ、此等ヲ以テ朱蒙ノ舊都ト爲セルハ、甚シキ誤リナリ。後高麗ノ時鴨綠江以西ノ地ハ、悉ク北朝ニ屬シ、且朱蒙ノ舊國ハ、麗人朝聘ノ路ニ當ラザルガ故ニ、麗人ガ玄菟ノ地理ニ暗キコト、此ノ如キニ至レルナリ。

二　句麗ノ五族

魏志ニ云、「本有五族、有涓奴部、絕奴部、順奴部、灌奴部、桂婁部、本涓奴部爲王、稍微弱、今桂婁部代之」又「涓奴部、本國主、今雖不爲王、適統大人得稱古鄒加、亦得立宗廟、祠靈星社稷、絕奴部世與王婚、加古鄒之號、」後漢書ハ、涓ヲ消ニ作リ、章懷太子註ニ「按今高驪五部、一曰內部、一名黃部、即桂婁部也、二曰北部、一名後部、即絕奴部也、三曰東部、一名左部、即順奴部也、四曰南部、一名前部、即灌奴部也、五曰西部、一名右部、即消奴部也」トアリ。

高句麗國ハ、麗紀ニ依ルニ、朱蒙建國以來易代ノ事ナシ、涓奴部本國主トハ、沸流國王松讓ヲ謂ヘルニヤ。麗紀東明王漢ノ元帝建昭三年「夏六月、松讓以國降、以其地爲多勿都、封松讓爲主、麗語謂復舊土爲多勿、故以名焉」トアリ。又濟紀ニハ「鄒牟一名朱蒙、自北扶餘逃難、至卒本扶餘、扶餘王無子、只有三女子、見朱蒙、知非常人、以第二女妻之、未幾扶餘王薨、朱蒙嗣位」トアレバ、涓奴部ハ、卒本扶餘王ヲ謂ヘルガゴトクニモ見ユ。沸流國若クハ卒本扶餘國ヲ涓奴部トスレバ、朱蒙ノ族ハ、桂婁部ト云ヒシナラン。此ノ名ハ、麗紀ニ見エズ。舊唐書渤海靺鞨大祚榮ノ傳ニ「祚榮遂率其衆、東保桂婁之故地、據東牟山」トアルハ、朱蒙ノ舊國ニ據レルナリ。東牟ノ名ニ東明又ハ仲牟ヨリ出デタル名ナルベシ。桂婁ヲ新唐書ニ挹婁ト改メタルハ、杜撰ナリ。舊唐書ニ、祚榮ノ嫡子大武藝ノ爵號ヲ桂婁郡王トモ云ヘリ。日本紀天武天皇十一年六月ノ處ニ「高麗遣下部助有、卦婁毛切、大古昂加、貢方物、」日本後記卷八延曆十八年十二月ノ處ニ「信濃ノ國ノ人外從六位下卦婁眞老等言、己等先高麗人也云々」トアル卦婁氏ハ、蓋句麗王ノ裔ニシテ、部名ヲ以テ姓トシタル者ナルベシ。又麗紀ニ貫那桓那沸流那ト云ヘル部族ノ名見ユ。貫那ハ、即灌奴、桓那ハ即涓奴ナルベシ。那ヲ奴ト書キタルハ、魏志倭人傳ニ夷守ヲ卑奴母離ト書キ、那ノ國ヲ奴國ト書キタルト同例ナリ。涓奴部ヲ卒本扶餘ノ族トスレバ、沸流國ノ裔ハ、沸流那ニシテ五部ノ外ナルベシ。魏志ニ「絕奴部、世與王婚」トアルハ麗紀ノ掾那部ナリ。掾那部ノ明臨答夫ハ、次大王ヲ弑シ、新大王ヲ立テ、國相トナリ、故國川王二年、漢靈帝光和三年、掾那部于素ノ女ヲ立テ、王后トシ、ソレヨリ王后ノ親戚、國ノ權柄ヲ執リ、遂ニ謀叛シテ誅セラレ、其ノ後王薨ジ、王后、再ビ山上王ノ后トナリ、東川王二年、魏明帝太和二年、王太后トナリ、其ノ四年、明臨於漱、國相トナリ、中川王元年、魏帝曹芳正始九年、「立掾氏爲王后」其ノ九年、魏帝曹髦甘露元年、「以掾那明臨笏覩尙公主」ナド見エタリ。順奴部ニ似タル名ハ、麗紀中ニ見當ラズ。東部西部南部北部ノ名ハ、麗紀ニ屢見ユレドモ、左部右部前後部ト云ヘル名ハ、見エズ。國史ニハ、左部右部ト云ヘルハ、見エザレドモ、前部後部ハ、屢見ユ。天武紀二年、高麗ノ使ニ前部大兄碩子、五年、高麗ノ大使後部主博阿于、副使前部大兄德富ナド見エ、續日本紀天平元年ニ後部王起、天平寶字五年、諸蕃人ニ姓

ヲ賜ヘル條ニ「前部高文信福當ノ連、前部白公等御坂ノ連、後部王安成等高里ノ連、後部高呉野大井ノ連、前部選理等ヰ柿井ノ連、前部安人御坂ノ造 前部蟲麻呂廣篠ノ連」又寶龜七年五月ノ處ニ「後部石島等六人賜姓出水ノ連」、延暦八年五月ノ處ニ「信濃ノ國筑摩ノ郡人後部牛養、宗守、豐人等賜姓田河ノ造」ト見エ、日本後紀延暦十六年三月ノ處ニ「信濃國人前部綱麻呂賜姓安坂」、十八年十二月ノ處ニ後部黒足、前部黒麻呂、前部佐根人前部秋足、前部貞麻呂等ニ姓ヲ賜ヘルコト見エ、姓氏錄ニ「福當連、高麗國人前部能章之後也」、「出水連、高麗國人後部能致元之後也」、「福當造、高麗國人前部志發之後也」、「後部ノ藥ノ使主、高麗國人大兄穆德之後也」、「後部王、同國長王周之後也」、「後部高、高麗國人正六位上後部高千金之後者、不見」、「後部高、高麗國人後部乙牟之後者、不見」ナドアリ。又後紀弘仁二年八月ノ處ニ「山城國ノ人高麗ノ人東部黒麻呂賜姓廣宗連」ト見エタルハ、即順奴部一名左部ナリ。コノ外ニハ東西南北ヲ以テ部名トシタルハ、見エズ。又麗紀東川王ノ處ニ、「下部劉屋句」ト云ヘル人アリ。國史ニモ上部下部ノ名屢見ユレバ天武紀二年高麗ノ使者上部位頭大兄、八年ノ使者ニ上部大相桓欠、下部大相師需婁、十一年ノ使者ニ下部助有ト云ヘル人見エ、續紀和銅五年ニ部王同、天平十七年ニ上部眞善、天平寶字五年ニ「高麗人上部玉蟲麻呂豐原連、上部王彌夜大理等ニ豐原造、上部君足雄坂連」姓ナ賜ヘルコト見エ、後紀延暦十八年ニ下部奈弖麻呂、上部豐人、下部文代、上部色夫知等ニ姓ヲ賜ヘルコト見エ、姓氏錄ニモ「豐原連、高麗國人上部玉蟲麻呂之後也」トアリ。東西部一名左右部トモ云ヒシニヤ。又ハ五部ノ外ニ上下部ト云ヘル者アリシニモアルベシ。內部一名黃部ト云ヘル名ハ、韓史ニモ國史ニモ見エズ。コハ王族高氏ナルガ故ニ、部名ヲ掲ゲザルナリ。國史韓史ノ中ニ、唯高某ト云ヒテ、別ニ部族ノ名ヲ標記セザル人ハ、大抵內部ニテ、即魏志ノ桂婁部ナルベシ。

三　朱蒙建國ノ時代

朱蒙建國ノ時代ハ、漢史ニ記シタルモノ無シ。新唐書ニ、總章元年李勣東征ノ時、侍御史賈言忠ガ高宗ニ對ヘタル語ニ、「高麗祕記曰、不及九百年、當有八十大將滅之、高氏自漢有國、今九百年、勣年八十矣」トアリ。三國史記ハ、朱蒙建國ノ年ヲ漢元帝建昭二年紀元六百二十四年トシ、其ノ年表ノ序ニ「高句麗二十八王、七百五年云云、其始終可得而考」ト云ヒテ、賈言忠ガ「今九百年」ト云ヘルヲ誤トセリ。羅紀文武王十年天智天皇九年、唐高宗咸亨元年、高麗ノ遺族安勝ヲ高句麗王ニ封ズル冊命ニ、「公太祖中牟王云々、子孫相繼、本支不絕、開地千里、年將八百」トアルハ、七百八九十年モアリシガ如ク聞ユレドモ、コノ文ハ句麗ノ隆盛ナリシコトヲ稱揚セル文ナレバ、殊更ニ大數ヲ用ヒタルナリ。天智紀七年ノ處ニ、「冬十月、大唐大將軍英公打滅高麗、高麗仲牟王初建國時、欲治千歲也、母夫人云、若善治國、可得也、原註ニ「若或本有不可得也」トアリ。集解ハ、有ヲ作ト改メ、其ノ註ニ「作原作有、據訓」ト云ヘリ。但當有七百年之治也、今此國亡者、當在七百年之末也」トモアレバ、麗紀ニ七百五年ト云ヘル數ハ、大ナル差謬ナカラン。宋ノ曾鞏ガ請訪問高麗世次箚子ニ、「蓋自朱蒙至藏、可考者、一姓九百年、傳二十一君而失國」ト云ヘリ。曾鞏ハ、未ダ高句麗ノ古記ヲ見ズ、唯漢史中ヨリ高驪世次ヲ掇拾シタルガ故ニ、麗紀ニハ二十八君ナルヲ、唯二十一君ノミヲ擧ゲタリ。其ノ年數ヲ九百年トシモ云ヒタルハ、賈言忠ノ語ニ據レルノミナラズ、北史ノ文ニモ本ヅキタルガ如シ。ソハ後漢書ニ「本消奴部爲王、稍微弱、後桂婁部代之云々、武帝滅朝鮮、以高句驪爲縣、使屬玄菟、賜鼓吹伎人」、トアルヲ見テ、北史ノ編者ハ、高句驪ノ建國ハ、武帝以前ニアリト誤認シ、魏書ニ據リテ、朱蒙、閭達、如栗莫來等繼承ノ事ヲ叙シタル後ニ、「漢武帝元封四年、滅朝鮮云々」ト記セリ。曾鞏ハ蓋コノ北史ノ誤リヲ承襲シタルニテ、武帝滅朝鮮ヨリ高驪ノ亡滅マデ、七百七十餘年ナレバ、其ノ武帝以前ノ年數ヲ百有餘年ト見積リ、有國九百年ト假定シタルナリ。

高句驪有國ノ年數ヲ七百年內外ト見ル時ハ、朱蒙ノ建國ハ、武帝ガ高句驪ヲ開キテ縣ト爲セルヨリ七十餘年ノ後、昭帝ガ玄菟郡治ヲコヽニ移セルヨリモ四十餘年ノ後ノ事ニシテ、高句驪ナル國號ハ、縣名若クハ其ノ地ノ舊名ニ沿ヒシナリ。然ルヲ魏書高句麗傳及ビ麗紀ニ、朱蒙ガ新號ヲ創メタルガ如ク書キ、又東史寶鑑ニ「高朱蒙生於遼東句麗山下、故以其姓高字冠於山名上、以爲國號」ト云ヘルハ皆非ナリ。

四　漢代ノ句麗

漢書百一王莽傳始建國四年紀元六百七十二年ノ處ニ「莽發高句驪兵、當伐胡、不欲行、郡强迫之、皆亡出塞、因犯法爲寇、遼西大尹田譚、追擊之、爲所殺、州郡歸咎故高句驪侯騶、嚴尤奏言云々、莽不慰安、穢貉遂反、詔尤擊之、尤誘

高句驪侯騶至而斬焉、傳首長安、莽大說、下書曰云々、其更名高句驪爲下句驪、布告天下、令咸知焉、於是貉人愈犯邊」トアリ。高句驪侯ハ、即高句麗王ナリ、王莽ノ時、四夷ノ君長ニテ王ト稱スル者ヲバ、皆侯ト改メタレバ、句麗王モ、其例ニ漏レザリキ。騶ハ鄒牟ノ略ニシテ、即始祖朱蒙ナリ。朱蒙ノ字ハ、魏書ニ始マリタレドモ、麗人ノ古クヨリ唱ヘタル名ハ鄒牟ナレバ漢人ハ、其ノ首音ヲ取リテ單名ニ呼ビタルナリ。王莽ハ、四夷君長ノ名ノ漢俗ニ似ザルヲ嫌ヒテ、匈奴ノ單于及ビ西域諸國ノ王侯ヲシテ、皆單名ヲ用ヒシメタレバ麗王ノ名ヲ記スニモ、其ノ例ヲ用ヒタルナリ。始建國元年ハ、麗紀ニ據レバ朱蒙ガ在位十九年ニシテ薨ジタル後ニシテ、第二代琉璃王ノ三十一年ト云ヘル年ニ當レドモ、麗紀ノ年紀ニハ誤アリテ、朱蒙ノ在位ハ、實ハ五十年ニモ及ビタルカ。然ラズンバ、朱蒙ノ即位ハ、誤リテ二三十年ノ前ニ上レルナルベシ。然ハアレドモ、朱蒙ハ、麗濟二國ノ太祖ニシテ、國史ニハ都慕大王ト稱シ、韓史ニハ東明聖王ト讃シ、新羅ノ文武王ノ冊命ニハ「中牟王積德北山、立功南海、威風振於青丘、仁教被於玄菟」ト云ヒ、津ノ連眞道ノ表文ニハ奄扶餘而開國、總諸韓而稱王」ナドアレバ、王莽ノ將ニ欺カレテ、首ヲ長安マデ、送ラレタルハ、此ノ王ノ身ニハアラズシテ、此ノ王ノ遣シタル將帥ナドニゾアルベキ。麗紀ハ、是ノ年ノ處ニ、漢書ノ文ヲ其儘採リテ、唯嚴尤ノ斬リタル高句驪侯騶ヲ我將延丕ト改メタルハ、據アルコトニヤ。東鑑ハ、侯ノ上ニ將ノ字ヲ加ヘテ、候羅ヲ其ノ將ノ名トセルハ、杜撰ラシク見ユ。

是ノ戰ノ後二年、麗紀琉璃王三十三年(王莽天鳳元年)ノ處ニ、「秋八月、王命烏伊摩離、領兵二萬、西伐梁貊、滅其國、進兵襲取漢高句麗縣」トアリ。此ノ事、漢史ニ見エズ。高句麗縣ハ、即玄菟郡治ナリ。果シテ此事アリセバ、後ニ漢又之ヲ復セシナルベシ。同書大武神王九年(漢光武帝建武二年)、「冬十月、王親征蓋馬國、殺其王、慰安百姓、毋虜掠、但以其地爲郡縣」。蓋馬國ハ、即西蓋馬縣、其王トハ其ノ縣令ヲ謂ヘルニヤ。若然ラバ、コレモ、漢又後ニ復シタルカ、又ハ後漢ノ西蓋馬縣ハ、別所ニ更ニ設ケタルニテモアルベシ。同十一年(漢ノ建武四年)「秋七月漢遼東太守將兵來伐、王會群臣、問戰守之計云々、入尉那巖城、固守數旬云々、遂引退」、同十五年(漢ノ建武八年)「夏四月王子好童遊於沃沮、樂浪王崔理出行、因見之、問曰、觀君顏色、非常人、豈非北國神王之子乎、遂同歸、以女妻之、後好童還國云々、勸王襲樂浪崔理出降」。崔理ハ、樂浪ノ太守ナルベシ。後漢書光武紀ニハ、此ノ年十二月「高句驪王、遣使奉貢、」東夷傳ニモ「建武八年、高句驪遣使朝貢、光武復其王號」トアリテ、麗紀ニモ、之ヲ採錄セリ。コハ王莽ニ侯ト改メラレタルヲ復セルナリ。一年ノ內ニ、夏ニハ漢ノ郡縣ヲ襲ヒテ、冬ニ朝貢シタルニテハ、漢朝ニテ優待スベキ筈モ無ケレバ、コ、ニ襲樂浪ト云ヘルハ、コノ年ノ事ニハ非ズ、此ノ後五年ノ役ヲ終言シタルニテ、麗紀同二十年(漢ノ建武十三年)「王襲樂浪滅之」トアルハ、即崔理ヲ降シタル事ナルベシ。同二十七年(漢建武十三年)「秋九月、漢光武帝、遣兵渡海伐樂浪、取其地爲郡縣、薩水已南屬漢、」薩水ハ、今ノ清川江ナリ。(東覽安州牧ノ山川ニ「清川江、一名薩水、源出妙高山、經州北城下、西流三十里、與博川江合入海」トアリ。)此等ノ事ハ、漢史ニハ一ツモ見エズ。サレドモ王莽ノ亂後、麗人一時樂浪ヲ併セテ、漢兵尋デ之ヲ復シタルハ有ルマジキ事ニモ非ズ。但光武紀建武二十年(即麗紀ニ光武帝樂浪ヲ取ルト云ヘル年)ニ「秋、東夷韓國人。率衆詣樂浪內附」トアリテ、樂浪ガ嘗テ句麗ニ陷リタリトモ見エザレバ、麗紀ノ記事、疑ヒナキニハ非ズ。

後漢書東夷傳建武八年云々ノ次ニ「二十三年、冬句驪蠶支落大加戴升等萬餘口、(光武紀ニハ「冬十月、高句麗率種人」トアリ。)詣樂浪內屬」、二十五年春、句驪(光武紀ニハ「春正月、遼東徼外貊人」トアリ。)寇右北平漁陽上谷太原、而遼東太守祭肜以恩信招之、皆復欵塞」トアリ。此等ノ文中、句驪王ノ名、更ニ見エザレバ、其ノ實ハ、何王ノ時ナルカ知ルベカラズ。麗紀ハ、此等ノ事ヲ一々其ノ年ニ記シタレドモ、コレ唯後漢書ノ文ヲ其儘用ヒタルニ過ギザレバ、韓史ノ紀年ノ漢史ニ合ヘル證トハ爲ラズ。

麗紀太祖大王三年、（漢建武三十一年）「春二月、築遼西十城、以備漢兵」。此ノ時遼東モ、未ダ句麗ニ屬セザルニ、遼西ニ城ヲ築クベキ筈ナケレバ、此ノ記事ハ全ク妄ナリ。其ノ四年、（漢建武中元元年）「秋七月伐東沃沮、取其土地爲城邑、拓境、東至滄海、南至薩水」。コハ魏志東夷傳沃沮ノ處ニ、「漢光武六年、省邊郡都尉、由是罷、其後皆以其縣中渠帥爲縣侯、不耐華麗沃沮諸縣、皆爲侯國、夷狄更相攻伐云々、國小、迫於大國之間、遂臣屬句麗」トアルニ本ヅキタル者ナルベシ、サレドモ、魏志ノ文ヲ察スルニ、光武ノ時ハ樂浪東部都尉ヲ罷メテ、諸縣ヲ渠帥ニ與ヘタルノミニシテ、句麗ニ臣屬シタルハ、又其ノ後ノ事ナレバ、濊ノ處ニモ、「今不耐濊、皆其種也、漢末更屬句麗」トアリ。然ルヲ麗紀ニ、光武ノ世ニ當リテ、既ニ其ノ土地ヲ取レリト云フハ、恐ラクハ非ナリ。

魏書高句麗傳ニ「初朱蒙在夫餘時、妻懷孕、朱蒙逃生一子、字始閭諧、及長、知朱蒙爲國主、即與母亡而歸之、名之曰閭達、委之國事、朱蒙死、閭達代立、閭達死、子如栗代立、如栗死、子莫來代立、乃征夫餘、夫餘大敗、遂統屬焉、莫來子孫相傳、至裔孫宮云々」、トアリ。麗紀始祖ノ處ニ「十九年夏四月、王子類利自扶餘、與其母逃歸、王喜之、立爲太子」、琉璃王ノ處ニ「初朱蒙在扶餘、娶禮氏女有娠、朱蒙歸後乃生、是爲類利云々、問母氏、我父何人、今在何處、母曰、汝父非常人也、不見容於國、逃歸南地、開國稱王云々、與屋智句鄒都祖等三人、行至卒本、云々、至是繼位」ト云ヘルハ、閭達ノ事ニ善ク合ヘレバ、閭達ハ、即琉璃明王類利ナリ。琉璃王ノ子太武神王無恤ハ、麗紀ノ注ニ「或云大解朱留王」ト云ヒ、廣開土王碑ニハ大朱留王トアリ。如栗ハ、朱留ト音稍近ケレバ、即武神王ナルベシ。武神王薨ゼシ時、太子解憂幼キニヨリ、國人、王弟閔中王解邑朱ヲ立テシガ、在位五年ニシテ薨ゼシカバ、解憂繼ギテ位ニ即キタリ、之ヲ慕本王ト云ヘリ。「如栗死、子莫來代立」ト云ヘルハ蓋閔中王一代ヲ脱シタルニテ、莫來ハ、慕本ノ誤寫ナルベシ。「莫來子孫相傳、至裔孫宮」トアレバ、慕本王ノ子孫相繼ギテ王トナレル者數人アリテ、宮ハ慕本ノ數世ノ孫ナルベシ。慕本ノ時代ハ確實ニハ知レザレドモ、麗紀ニ依レバ、漢ノ光武帝ノ世ニ當リ、又宮ノ後漢書ハ、此ノ間ニアルベシ。然ルヲ麗紀ニハ「太祖大王、（或云國祖王）韓宮、琉璃王子古鄒加再思之子也、慕本王薨、太子不肖、不足三以主社稷、國人迎宮繼立」ト云ヒテ、宮ヲ武神王ノ姪、慕本王ノ從弟トシテ、直ニ慕本ニ接セシメ、其ノ在位ヲ九十四年ト爲シタルハ、古記ニ數代ノ王ノ名ヲ逸シタルニヨリテ、宮ノ即位ヲ數十年前ニ繰リ上ゲタルナリ。麗紀ノ世系ト年紀トニ據ル時ハ、始祖ノ即位ヨリ其ノ五世ノ孫ナル東川王ノ即位マデ、僅ニ五世ニシテ、二百六十三年、前漢ノ宣帝ヨリ魏ノ文帝マデノ間ニ當リ、毎世平均五十三年トナル。コレ余ノ信ズル能ハザル所ナリ。試ニ太祖大王ヲ以テ慕本王ノ曾孫トナシテ算スレバ、東川王ハ、始祖ノ八世ノ孫ニ當リ、毎世平均三十三年ニシテ、古來例ナキ年數ニハ非ズ。（又前ニ云ヘル如ク、麗紀ノ年紀ニ誤リアリテ、朱蒙ノ即位ハ、二三十年ノ後ニアリトスレバ、八世ノ間ノ年數ハ、二百三四十年ニシテ、毎世平均年數ハ二十九年若クハ三十年トナルナリ。）

右ノ文中ナル「乃征夫餘、夫餘大敗」ハ麗紀大武神王五年、（王莽地皇三年）扶餘ヲ伐チテ、其ノ王帶素ヲ殺セルヲ云ヘルニテ、其ノ時扶餘ノ降服シタル事ハ見エザレドモ、太祖王二十五年、（漢ノ章帝建初二年）五十三年、（漢ノ和帝元興元年）扶餘ノ使來獻ノ事アルニ依レバ、魏書ニ云ヘル如ク、一時ハ句麗ニ統屬シタルナリ。但此ノ征戰ヲ、魏書ハ、莫來即慕本ノ時トシ、麗紀ハ、武神ノ時トシ。孰カ是ナルヲ知ラズ。

後漢書東夷傳前文ノ續キニ「後句驪王宮、生而開目能視、國人懷之、及長勇壯、數犯邊境、（此ノ文ハ、魏志ニ「宮生能開目視、其國人惡之、及長大果凶虐、數寇鈔、國見殘破」ト云ヘルヲ改竄シタルナリ。）和帝元興元年春、復入遼東、寇略六縣、太守耿夔擊破之、斬其渠帥、安帝永初五年、宮遣使貢獻。求屬玄菟、元初五年、復與濊貊寇玄菟、攻華麗城、建光元年春、幽州刺史馮煥、（安帝紀及本傳ニ據ルニ、煥ハ、煥ノ誤ナリ。）玄菟太守姚光、遼東太守蔡諷等、將兵出塞擊之、捕斬濊貊渠帥、獲兵馬財物、宮乃遣嗣子遂成、將二千餘人逆光等、遣使詐降、光等信之、遂成因據險阨、以遮大軍、而潛遣三千人、攻玄菟遼東、焚城廓、（魏志ニハ「焚燒侯城」トアリ。侯城ハ、玄菟ノ屬縣ナリ。）殺傷二千餘人……、夏復與遼東鮮卑八千餘人攻遼隊、殺掠吏人、蔡諷等追擊於新昌戰歿……、秋

（安帝紀ニ冬十二月トアリ。）宮遂率馬韓濊貊數千騎圍玄菟、夫餘王遣子尉仇台、將二萬餘人、與州郡并力討破之、斬首五百餘級」トアリ。コレ、句麗王ノ名ノ韓史ニ合ヘル始ナリ。麗紀ハ右ノ文ヲ全ク採リテ、唯嗣子遂成ト改メタリ。尉仇台ハ、魏志東夷傳ニ據レバ、獻帝ノ時ノ扶餘王ナリ。安帝ノ時ハ、其ヨリ七十餘年前ナレバ、後漢書ナルハ、同名ノ別人ニヤアラン。

次ニ「是歲（建光元年）宮死、子遂成立、姚光上言、欲因其喪發兵擊之、議者皆以爲可許、尙書陳忠曰、宮前桀黠、光不能討、死而擊之、非義也、宜遣弔問、因責讓前罪、赦不加誅、取其後善、安帝從之、明年、遂成還漢生口、詣玄菟降云々、遂成死、子伯固立、其後濊貊率服、東垂無事云云、質桓之間、復寇遼東西安平、殺帶方令、掠得樂浪太守妻子、建寧二年、玄菟太守耿臨討之、斬首數百級、伯固降服、乞屬玄菟云」トアリ。魏志ニハ「殺帶方令」ノ上ニ「於道上」ノ三字アリ。此ノ役ハ、樂浪帶方マデ寇ヲ被レルニ非ザレバ、令及ビ太守ノ妻子ノ殺掠セラレタルハ、遼東ヲ經過シタル時ノ事ナルベシ。麗紀ハ、宮ノ讓位ヲ建光元年、（紀元七百八十一年）ヨリ二十五年ノ後ニ置キ、遂成還漢生口ノ事ヲ省キ、寇西安平ノ役ヲ質帝本初元年、（紀元八百六年）八月ニ記シテ、太祖王ノ事ト爲シ、其ノ下文ニ「十二月王謂遂成曰、吾既老、倦於萬機云々、乃禪位、退老於別宮、稱爲太祖大王」ト云ヒテ、其ノ註ニ後漢書ノ文ヲ引キ、「案海東古記、高句麗國祖王高宮以後漢建武二十九年癸丑即位、時年七歲、國母攝政、至孝質帝本初元年丙戌遜位、讓母弟遂成、時宮年一百歲、在位九十四年、則建光元年、是宮在位第六十九年則漢書所記、與古記抵牾、不相符合、豈漢書所記誤耳」ト云ヘリ。此ノ二十五年ノ差ハ、後漢書ノ誤リカ、海東古記ノ誤リカ、今判定スベカラズ。伯固ノ即位ハ、漢史ニテハ、質帝以前（紀元八百六年以前）ニ在レドモ、韓史ハ、桓帝ノ延熹八年（紀元八百二十五年）トシ、建寧二年（紀元八百二十九年）ナル耿臨ノ來討ハ、韓史ハ其ノ前年即伯固ノ四年ニ記セリ。又漢史ハ、宮遂成伯固ノ三王ヲ以テ父子祖孫トシ、韓史ハ、之ヲ兄弟トセリ。三王年代ノ過長ナルヲ見レバ、祖孫三世ト爲セルコソ、事實ニ近キガ如クナレドモ、此ノ三兄弟承襲ノ顚末、及ビ遂成ガ兄ノ二子ヲ害シ、伯固ガ遂成ノ子ヲ封ゼシ等ノ事、韓史ニ叙スル所甚詳カナレバ、祖孫三世ト云ヘルハ、傳聞ノ誤リナルベシ、三王年代ノ過長ナルハ、太祖王即位ノ年ヲ數十年繰リ上ゲテ直ニ慕本王ニ續ケタルガ故ナリ。

五　魏代ノ句麗

魏志東夷傳高句麗ノ處ニ「公孫度之雄海東也、伯固遣大加優居主簿然人等、助度擊富山賊破之、伯固死、有二子、長子拔奇、少子伊夷模、拔奇不肖、國人便共立伊夷模爲王、自伯固時、數寇遼東、又受亡胡五百餘家、建安中、公孫康出軍擊之、破其國、焚燒邑落、拔奇怨爲兄而不得立、與涓奴加、各將下戶三萬餘口、詣康降、還住沸流水、降胡亦叛伊夷模、伊夷模更作新國、今日所在是也、拔奇遂往遼東、有子留句麗國、今雛加駮位居是也、其後復擊玄菟、玄菟與遼東合擊、大破之、伊夷模無子、淫灌奴部生子、名位宮、伊夷模死、立以爲王、今句麗王宮是也、其曾祖名宮、生能開目視、今王生墮地、亦能開目視人、句麗呼相似爲位、似其祖、故名之爲位宮、位宮有力勇便鞍馬、善獵射、景初二年、太尉司馬宣王、率衆討公孫淵、宮遣主簿大加、將數千人助軍、正始三年、宮寇西安平、其五年、爲幽州刺史毌丘儉所破、語在儉傳」トアリ。同書（二十八）毌丘儉傳ニハ「正始中、儉以高句驪數侵叛、督諸軍步騎萬人、出玄菟、從諸道討之、句驪王宮、將步騎二萬人、進軍沸流水上、大戰梁口、宮連破走、儉遂束馬縣車、以登丸都、屠句驪所都、斬獲首虜以千數……、宮單將妻子逃竄、儉引軍還、六年復征之、宮遂奔買溝、儉使玄菟太守王頎追之、過沃沮千有餘里、至肅愼氏南界、刻石紀功、刊丸都之山、銘不耐之城、所誅納八千餘口」トアリ。宮ハ、即位宮ナリ。同書齊王本紀ニハ、此ノ正始五年六年ノ役ヲ、七年ノ二月五月ノ事トセリ。麗紀ハ、又之ヲ七年ノ八月十月ノ事トシタルハ、其ノ古記ニ依レルニヤ。

公孫度ガ、董卓ノ命ニ由リテ、遼東ノ太守ト爲レルハ、漢ノ靈帝中平六年（紀元八百四十九年）ニシテ、故國川王男武ノ十一年ニ當レバ、魏志ニ、將ヲ遣シテ度ヲ助ケタル句麗王ヲ伯固トシタルハ、男武ノ誤リナルベシ。男武ノ薨ゼシ時、二弟發岐延優爭位ノ事アリ。麗紀ニ「故國川王之……薨也、王后于氏祕不發喪、……、矯先王命、令羣臣立延優爲王、發岐聞之大怒、以兵圍王宮、發岐知難、以妻子奔遼東、見太守公孫度、告曰云々」トテ、兵三萬ヲ假リテ、延優ヲ擊チ、克タズシテ死シタルコト見ユレバ、魏志ノ拔奇ハ、即發岐ニシテ、伊夷模ハ、即山上王延優ナリ。兩書ノ叙スル所稍異ナレドモ、同事ノ異傳ナルベシ。山上王「二年春二月、築丸都城」「十三年冬十月、移都丸都」ト云ヘルモ、「伊夷模更作新國」トアルニ合ヘリ。然ルニ三國史記ノ編者ハ、魏志ノ「伯固死、有二子」ノ語ニ泥ミテ、伊夷模ヲ直ニ伯固ニ嗣ギタル王ト誤リ認メ、故國川王諱男武ノ下ニ「或云伊夷謨」ト註シ、遂ニ男武即位ノ處ニ「漢獻帝建安初、拔奇云々詣公孫康降」ト記シ、又公孫度ヲ助ケテ、富山賊ヲ討ジタルコトヲ、伯固ノ五年、即靈帝建寧二年ニ記セリ。コノ建寧二年ハ、公孫度ノ未ダ遼東ニ入ラザリシ時、又建安ノ初ハ、公孫康ノ未ダ度ニ代ラザリシ時ナレバ、其ノ誤リ判然タリ。又麗紀山上王ノ處ニ「王以無嗣禱於山川云々、微行シテ酒桶村ノ女ヲ御シ、男郊彘ヲ生ミ、立テ、太子ト爲シ、後ニ名ヲ憂位居ト改ム」ト云ヘルハ、「淫灌奴部生子」トアルニ合ヘリ。酒桶村ノ女ハ、麗紀ニ「史失其族姓」トアルニ、魏志ニ灌奴部ト云ヘルハ、中川王ノ妾ニ貫那夫人アルニ由リテ混レタルナリ。又景初二年（紀元八百九十八年）正始三年、（九百一年）及正始七年、（九百六年）ノ役ハ、孰モ東川王憂位居ノ時ナレバ、位宮ノ憂位居ナルハ、疑ヒナシ。然ルヲ麗紀ハ、山上王諱延優ノ下ニ「一名位宮」ト註シ、其ノ下文ニ魏書（即三國志ノ魏書）ヲ引キテ、「宮生而開目云々、呼相似爲位」ノ說ヲ記シタルハ、伊夷模ヲ其ノ前代ナル男武ト認メタル誤リヲ承ケツギタルナリ。麗紀ハ、母丘儉來侵ノ事ヲ記スルニ、大抵魏志ニ據リタレドモ、東部密友ノ力戰ト東部紐由ノ殉難トノ二事ヲ補ヒ、且二人ノ爲ニ別ニ傳ヲ立テタルハ、高句麗ノ古記ニ依レルナルベシ。

麗紀東川王二十一年、（魏正始八年）春二月、王以丸都城經亂、不可復都、築平壤城、移民及廟社、平壤者、本仙人王儉之宅也」。此ノ時樂浪帶方ハ、魏ノ幽州ノ屬郡ニシテ、劉茂ハ、樂浪ノ太守、弓遵ハ、帶方ノ太守トナリ、「正始六年、以領東濊屬句麗、興師伐之、不耐侯等擧邑降、其八年（即東川王二十一年）詣闕朝貢、四時詣郡朝謁、二郡有軍征賦調、供給役使遇之如民」ト魏志濊ノ處ニ見エ、又本紀陳留王景元二年、（中川王十四年）「秋七月、樂浪外夷韓濊貊、各率其屬來朝」ナドアリテ、二郡ノ方ニ强盛ナル頃ナレバ、樂浪郡治ナル平壤ニ句麗王ノ都ヲ徙スベキ由ナシ。且東川中川西川烽上美川諸王ノ葬地、マタ此等ノ時代ノ記事ニ見ユル地名ドモハ、皆鴨綠江ノ上流ト見ユレバ、（類ハシケレバ引證セズ。）東川王ノ平壤ニ徙レル事ハ、信ズベカラズ。魏志ニ「伊夷模更作新國、今日所在是也」トアリテ、陳壽ガ史ヲ作レル頃ハ、依然トシテ、丸都ニ居リシト見ユレバ、魏軍ノ退キシ後、東川王再ビ舊都ニ還リ、ソレヨリ故國原王ノ時マデ遷都ノ事ナカリシナリ。

魏ノ景初二年公孫淵ノ滅ビタルヨリ五年前、吳帝孫權ノ嘉禾二年（紀元八百九十三年魏ノ明帝青龍元年、句麗ノ東川王七年）ニ句驪王宮ガ吳ノ詔命ヲ受ケ、臣ト稱シテ貢獻シタルコト、三國志ニ見エタリ。麗紀ハ、何故カ此ノ事ヲ全ク省略シタレドモ、當時ノ國勢ヲ觀ルニ足ル者アルガ故ニ、今其ノ文ヲ下ニ引ク。三國志吳書孫權傳嘉禾元年ノ條ニ「冬十月、魏遼東太守公孫淵遣校尉宿舒、閬中令孫綜、稱藩于權、幷獻貂馬、權大悅、加淵爵位、」二年「三月、遣舒綜還、使太常張彌、執金吾許晏、將軍賀達等、將兵萬人、金寶珍貨、九錫備物、乘海授淵、擧朝大臣、自丞相已下皆諫、以爲淵未可信、而寵待太厚、但可遣吏兵數百護送舒綜、權終不聽、淵果斬彌等、送其首于魏、沒其兵資、權大怒、欲自征淵、尙書僕射薛綜等切諫乃止、」裴松之註ニ「吳書曰、初張彌許晏等、俱到襄平、官屬從者四百許人、淵欲圖彌晏、先分其人衆、置遼東諸縣、以中使秦旦張群杜德黃彊等、及吏兵六十人、置玄菟郡、玄菟郡在遼

東北、相去二百里、太守王贇、領戶二百、兼重可三四百人、旦等皆舍於民家、仰其飲食、積四十許日、旦與彌等議曰云々、於是陰相約結、當用八月十九日夜發、其日中時、爲部中張松所告、贇便會士衆、閉城門、旦群德彌等、皆踰城得走、時群病疽著膝、不及輩旅、德常扶接、與俱崎嶇山谷、行六七百里、創益困、不能復前、臥草中、相與悲泣、群曰、吾不幸創甚、死亡無日、卿諸人宜進道、冀有所達、空相守、俱死於窮谷之中、何益也、德曰、萬里流離、死生共之、不忍相委、於是推旦彌使前、德獨留守群、捕菜果食之、旦彌別數日、得達句驪王宮、因宣詔於句驪王宮及其主簿、紿言有賜、爲遼東所攻奪、宮等大喜、即受詔命、使人隨旦還迎群德、其年、宮遣皂衣二十五人送旦等還、奉表稱臣、貢貂皮千枚、鶡雞皮十具、旦等見權、悲喜不能自勝、權義之、皆拜校尉、間一年、遣使者謝宏中陳恂、拜宮爲單于、加賜衣服珍寶、恂等到安平口、先遣校尉陳奉前見宮、而宮受魏幽州刺史諷旨令以吳使自效、奉聞之到還、宮遣主簿笮咨帶固等、出安平、與宏相見、宏即縛得三十餘人質之、宮於是謝罪、上馬數百匹、宏乃遣咨固奉詔書賜物歸與宮、是時宏船小、載馬八十匹而還」トアリ。東川王ノ吳ニ朝貢シタルハ、固ヨリ其ノ眞意ヨリ出デタルニハ非ズ。山上王ノ公孫康ト隙ヲ構ヘテヨリ常ニ隣寇ノ懼レアリシカバ、更ニ南方ノ大國ニ對シテ歡ヲ失フコトヲ欲セザリシナリ。サレドモ魏ノ幽州刺史ノ諷旨ヲ受ケテハ、猶豫ノ計ヲ懷カザルコト能ハズ。司馬懿ガ公孫淵ヲ討ズルニ至リテ、兵ヲ遣シテ師ヲ助ケ、遂ニ魏ノ屬國トナリテ、吳ノ交通ハ絕エタリ。然ルニ此ノ王ハ位宮ト云ハルヽ丈アリテ、太祖王ニモ劣ラザル英主ナレバ、俯伏シテ魏ノ命ニ從フコト能ハズ、兵ヲ出シテ、邊疆ヲ犯セルガ故ニ、遂ニ毋丘儉ノ爲ニ國都ヲ破壞セラルヽニ至リタルナリ。

六　晉代ノ句麗

樂浪帶方二郡ノ句麗ニ併セラレタルハ、イツノ頃ナルカ、漢史ニ明文ナシ。晉書地理志ニ「咸寧二年十月、分昌黎遼東玄菟帶方樂浪等郡國五、置平州」咸寧二年ハ、句麗ノ西川王七年ナリ。武帝紀ニハ、泰始十年句麗ノ西川王五年ノ處ニ「二月、分幽州五郡、置平州」トアリ。泰始モ咸寧モ、武帝ノ年號ナレバ、二郡ノ滅ビタルハ、武帝以後ノ事ナリ。五胡中原ヲ犯シテヨリ、司馬氏ノ政令、幽平二州ニ行ハレズ、段宇文慕容三部、割據シテ雄ヲ爭ヒタレバ、句麗ノ蠶食モ、蓋此ノ頃ニアルベシ。麗紀西川王七年晉ノ咸寧二年ノ條ニ「夏四月、王如新城、或云、新城、國之西北大鎭也。獵獲白鹿、秋八月、王至自新城」トアリ。新城ハ漢ノ玄菟郡ノ管內ニシテ、今ノ興京ノ北ニ在リ。魏晉ノ玄菟郡ハ、公孫氏ノ時ヨリコノ方、漢郡ノ故府ノ西ニ在リテ、故府ノ地ハコノ時ニ至リテハ、既ニ句麗ニ入リタルナリ。濟紀責稽王即位ノ年、晉ノ武帝太康七年、句麗ノ西川王十七年、「高句麗伐帶方、帶方請救於我、先是王娶帶方王女寶菓爲夫人、故曰、帶方、我舅甥之國、不可不副其請、遂出師救之、高句麗怨、王慮其侵寇、修阿旦城蛇城備之。」帶方王ハ帶方ノ太守ナルベケレバ、帶方郡猶存セリ。麗紀烽上王二年晉ノ惠帝元康三年「秋八月、慕容廆來侵、王欲往新城避賊、行至鵠林、慕容廆知王出、引兵追之、將及、王懼、時新城宰北部小兄高奴子領五百騎迎王、逢賊奮擊之、廆軍敗退、」五年晉ノ元康六年、「秋八月、慕容廆來侵 ...、王以高奴子爲新城太守、善政有威聲、慕容廆不復來寇。」新城ハ、句麗ノ西北大鎭ナリシ事、麗紀ノ註ニ云ヘルガ如シ。濟紀責稽王十三年、晉ノ元康八年「秋九月、漢與貊人來侵、王出禦、爲敵兵所害薨。」漢トハ、樂浪若クハ帶方ヲ云ヘルナリ。又晉書惠帝紀永熙元年句麗ノ西川王二十一年ノ條ニ「三月庚戌、東安公繇及東平王楙徙帶方、」東安公繇傳ニ「遂免繇官、以公就第、坐有悖言、廢徙帶方、永康中、徵繇復封、拜宗正卿、還尚書、轉左僕射」ト見エタレバ司馬繇ハ、永熙元年ヨリ永康中句麗美川王元年マデ流人トシテ帶方郡ニ居リシナリ。麗紀美川王三年、晉ノ惠帝太安元年、「秋九月、王率兵三萬、侵玄菟郡、虜獲八千人、移之平壤。」平壤ハ、丸都ノ誤リナルベシ。濟紀汾西王七年、晉ノ惠帝永興元年、句麗ノ美川王五年、「春二月、潛師襲取樂浪西縣、冬十月、王爲樂浪太守所遣刺客賊害薨。」

西縣ハ、考フベカラズ。麗紀美川王十二年、（晉ノ懷帝永嘉五年、）「秋八月、遣將襲取遼東西安平。」西安平ハ、遼東郡ノ屬縣ニシテ、鴨綠江ノ下流ノ西ニ在リ、今ノ安東縣ノ地ナリ。又讀史方輿紀要直隸大寧衞ノ條ニ「樂浪城在營州西南、晉建興初、慕容廆僑置郡於此、以處樂浪流民」トアルヲ見レバ、其ノ頃樂浪郡ハ句麗人ニ侵サレテ、人民多ク流移シタルヲ知ルベシ。建興元年ハ、晉ノ愍帝即位ノ年ニシテ、句麗ノ美川王十四年ナリ。麗紀ニ其ノ年「冬十月、侵樂浪郡、虜獲男女二千餘口。」其ノ翌年、即美川王十五年、（晉ノ建興二年）「秋九月、南侵帶方郡。」同十六年、（晉ノ建興三年）「春○月、攻破玄菟城、殺獲甚衆」ト見エ、コノ後、樂浪帶方二郡ノ名更ニ見エザレバ、二郡ノ全ク句麗ニ併セラレタルハ、東晉ノ初ニ在ルベシ。

資治通鑑晉紀、元帝大興二年、（句麗ノ美川王二十年）「平州刺史崔毖、自以中州人望鎭遼東、而士民多歸慕容廆、心不平……、陰說高句麗段氏宇文氏、使共攻之……、二國疑宇文氏與廆有謀、各引兵歸、宇文大人悉獨官曰、二國雖歸、吾當獨取之……、遂大敗、悉獨官僅以身免……、毖與數十騎、棄家奔高句麗、其衆悉降於廆、廆以其子仁爲征虜將軍、鎭遼東、官府市里、案堵如故、高句麗將如奴子據于河城、廆遣將軍張統掩擊擒之、俘其衆千餘家」又「高句麗數寇遼東、廆遣慕容翰慕容仁伐之、高句麗王乙弗利逆來求盟、翰仁乃還。」遼東ハ、コレマデ平州ノ刺史ニ屬セシガ、是ニ至リテ全ク慕容氏ノ宥トナリ、明年三月、元帝使ヲ遣シテ、廆ヲ安北將軍平州ノ刺史ニ拜セリ。其ノ年、又「高句麗寇遼東、慕容仁與戰、大破之、自是不敢犯仁境」トアリ。サレドモ、平州五郡ノ內、玄菟ノ故地及ビ樂浪帶方ハ、既ニ句麗ニ併セラレテ、慕容氏モ、之ヲ制スルコト能ハザリキ。乙弗利ハ、麗紀ノ美川王乙弗ナリ。成帝咸康五年、（句麗ノ故國原王九年）「燕王擊高句麗、兵及新城、高句麗王釗乞盟、乃還。」釗ハ麗紀ノ故國原王斯由ナリ。麗紀ノ註ニ「或云劉」トアルハ、蓋梁書ニ劉ト書ケルニ據リタルニテ、劉ハ、釗ノ誤リナリ。東鑑ハ、晉書魏書北史通鑑ニ皆釗トアルニ従ヒ、「改名釗」ト云ヘリ。咸康七年、（故國原王十一年、）「燕王皝以慕容恪爲渡遼將軍、鎭平郭……、屢破高句麗兵、高句麗畏之、不敢入境。」咸康八年（故國原王十二年）「十一月、皝自將勁兵四萬、出南道、以慕容翰爲前鋒、別遣長史王寓等、將兵萬五千、出北道、以伐高句麗……、諸軍乘勝追之、遂入丸都、釗單騎走、輕車將軍慕輿埿、追獲其母周氏及妻……、發釗父乙弗利墓、載其尸、收其府庫累世之寶、虜男女五萬餘口、燒其宮室、毀丸都城而還」明年、（康帝建元元年）「春二月、高句麗王釗遣其弟、稱臣入朝於燕、貢珍異以千數、燕王皝乃還其父尸、猶留其母爲質。」穆帝永和元年（故國原王十五年）「冬十月、燕王皝使慕容恪拔南蘇、置戍而還」。南蘇ハ、玄菟故郡ノ地ニシテ、今ノ興京廳界內ニ在リ。永和十一年（故國原王二十五年）「十二月、高句麗王釗遣使詣燕、納質修貢、以請其母、燕王儁許之、遣殿中刁龕送釗母周氏、歸其國、以釗爲征東大將軍營州刺史、封樂浪公、王如故。」以上ノ記事ニヨリテ、燕麗ノ關係甚詳カナリ。麗紀ハ、此等ノ事ヲ記スニ、全ク通鑑ノ成文ニ從ヒ、更ニ古記ニ依リテ補ヘル所ナシ。

麗紀故國原王十三年、即丸都ヲ毀タレタル翌年、「秋七月、移居平壤東黃城、城在今西京東木覓山中」東覽平壤府ノ山川ニ「木覓山、在府東四里、有黃城古趾、一名絅城、世傳高句麗故國原王、居丸都城、爲慕容皝所敗、移居于此」トアリ。此ノ時樂浪ノ故地ハ、已ニ句麗ニ屬シ、平壤ヲ以テ南疆ノ別都トナシタレバ、黃城ヲ築キテ、平壤ノ子城ト爲シタル事ハアルベケレドモ、廣開土王ノ碑ニ依リテ考フルニ、王都ハ鴨綠江ノ上流ナル國內城ニアリテ、平壤ノ近傍ニ徙レリトハ見エザレバ、右ノ遷都ノ說ハ、國內城ニ徙レル事ノ誤傳ナリ。杜氏通典邊防二高句麗ノ處ニ「自東晉以後、其王所居平壤城」其ノ注ニ「即漢樂浪郡王險城、自爲慕容皝來伐後、徙國內城、移都此城」ト云ヒ、三國史記地理志ニ「自朱蒙立紇升骨城、歷四十年、儒留王二十二年、移都國內城云々、都國內歷四百二十五年、長壽王十五年、移都平壤、歷一百五十六年、平原王二十八年、移都長安城、歷八十三年、寶藏王二十七年而滅。」其ノ注ニ「古人記錄、自始朱蒙至寶藏王歷年、丁寧纖悉若此、

而或云故國原王十三年、移居平壤東黄城、城在今西京東木覓山中、不可知其然否」トアリ。此ノ記錄ニ東川王ノ平壤ニ徙レル事ト故國原王ノ黄城ニ徙レル事トヲ言ハザルハ、誠ニ事實ニ合ヘリ。然レドモ山上王ノ丸都ニ徙レル事ハ疑ヒモナキ事實ナルニ、其レヲ記サヾルハ疎漏ナリ。蓋山上王十三年丸都ニ徙リテヨリ、百三十四年ヲ歷テ、故國原王十二年ニ至リ慕容皝ニ焚毀セラレタレバ、其ノ上流ナル國內ノ舊都ニ徙リ、其レヨリ八十五年ノ後、長壽王始メテ都ヲ平壤ニ定メタルナリ。故ニ東覽平壤府ノ沿革ニモ「高句麗長壽王十五年、自國內城徙都之」ト云ヘリ。丸都ハ、其ノ後廢墟トナリタレドモ、國內ハ、廣開土王ノ都城トシテ雄盛ノ地トナリ、東遷ノ後モ、猶西方ノ大鎭ト爲リタレバ、隋書北史ニ三京ノ一トシテ之ヲ擧ゲタリ。

麗人既ニ燕ニ破ラレテ、志ヲ西方ニ得ザルニ由リ、轉ジテ南略ヲ圖ル事トナレリ。麗濟二國ノ地ハ、樂浪帶方二郡ニ阻隔セラレシガ故ニ、建國以來攻鬪ノ事ナカリシガ、二郡既ニ滅ビ、兩國相接シテヨリ、釁隙始メテ開ケタリ。濟紀近肖古王二十四年故國原王三十九年、晉帝奕太和四年、「秋九月、高句麗王斯由、帥步騎二萬、來屯雉壤、分兵侵奪民戶、王遣太子、以兵徑至雉壤、急擊破之、獲五千餘級。」同二十六年晉ノ簡文帝咸安九年「高句麗擧兵來、王聞之伏兵於浿河上、俟其至急擊之、高句麗兵敗北。」此ノ浿河ハ、第八章ニ述ベタル平山府ノ猪灘ナリ。「冬王與太子、帥精兵三萬、侵高句麗、攻平壤城、麗王斯由力戰拒之、中流矢死、王引軍退、移都漢山。」魏書高句麗傳慕容皝ノ東伐ヲ記シタル後ニ「釗後爲百濟所殺」ト云ヘルハ此ノ事ナリ。コレヨリ以後、麗濟二國屢攻戰アリシコトハ、韓史ニ詳カナリ。

通鑑孝武帝太元十年、故國壤王二年「閏五月、燕主垂命帶方王佐鎭龍城、六月、高句麗寇遼東、佐遣司馬郝景、將兵救之、爲高句麗所敗、高句麗遂陷遼東玄菟」、「冬十月、慕容農云々、進伐高句麗、復遼東玄菟二郡」、梁書五十四諸夷傳高句驪ノ條「慕容垂遣弟農伐句驪、復二郡」ノ下ニ「垂死子寶立、以句驪王安爲平州牧、封遼東帶方二國王、安始置長史司馬參軍官、後略有遼東郡。」晉書後燕載記慕容盛卽位ノ年、晉安帝隆安二年、廣開土王七年「高句驪王安、遣使貢方物」、通鑑安帝隆安四年、廣開土王九年「高句麗王安、事燕禮慢、二月丙申、燕王盛自將兵三萬襲之、以驃騎大將軍熙爲前鋒、拔新城南蘇二城、開境七百餘里、徙五千餘戶而還」トアリ、燕王慕容寶慕容盛ノ世ハ、高句麗ノ廣開土王談德ノ時ナレバ、漢史ニ安ト云ヘルハ、蓋談德ノ漢名ナリ。次ニ通鑑元興元年、廣開土王十一年「高句麗攻宿軍云々」同三年「高句麗侵燕」義熙元年、廣開土王十四年「燕王熙伐高句麗、攻遼東云々、卒不克而退」同二年春正月、「燕王熙輕兵襲高句麗、」二月、「攻高句麗木底城、不克而還」同四年、「高句麗遣使聘北燕、且叙宗族、北燕王雲、遣侍御史李拔報之」ト云ヘルハ、孰レモ廣開土王ノ時ノ事ニシテ、韓史ニ悉ク採錄セリ。此ノ王ノ卽位ノ年ト薨年トハ、韓史ノ年紀ニ一年ノ差謬アリ。ソハ、余嘗テ高句麗古碑考ニ言ヘルガ如シ。

宋書夷蠻傳ニ「高句驪王高璉、晉安帝義熙九年、遣長史高翼、奉表獻赭白馬、以璉爲使持節都督營州諸軍事征東將軍高句驪王樂浪公。」璉ハ、廣開土王ノ子長壽王璉、義熙元年ハ、巨連ノ卽位元年ナリ、是ヨリ以來、南北兩朝南ハ晉安帝ヨリ、劉宋一代ヲ歷テ、齊ノ武帝マデ、北ハ後魏ノ太武帝ヨリ、孝文帝マデニ臣事シ、朝聘絕エザリシカバ、宋書、南齊書、魏書、皆之ヲ記セルコト甚詳カナレバ、今盡ク擧クルニ暇アラズ。委シクハ、三韓朝貢志ニ之ヲ論ズベシ。

長壽王以下諸王ノ名、麗紀ニ記セル所ヲ以テ漢史ニ比較スルニ左ノ如シ。

長壽王巨連一作璉、東鑑作臣璉、	宋齊梁魏周隋書南北史	璉
文咨明王一云明治好王　羅雲	齊梁魏書南北史	雲
安藏王興安	梁書魏書南北史	安
安原王寶延	梁書魏書南北史	延
陽原王或云陽崗上好王平成	魏書周書南北史	成

平原王（或云平崗上好王）陽成　周書隋書北史　湯

嬰陽王元（一云大元）　隋書北史新舊唐書　元

榮留王建武（一云武）　新舊唐書　建武

臧（或云寶藏）　新舊唐書　藏

今麗紀ニ據リテ高句麗諸王ノ系圖ヲ作リ、諸書ノ異同ヲ附註シテ參考ノ便ニ供ス

高句麗系圖

（一）東明聖王朱蒙（一云鄒牟、一云象牟、論衡魏略等作東明、麗碑姓氏錄作鄒牟、漢書王莽傳作騶、續紀姓氏錄又作都慕、天智紀作仲牟、羅紀文武王條作中牟、）

（二）琉璃明王類利（或云孺留、麗碑亦作儒留、魏書曰閭達、）

（三）大武神王無恤（或云大解朱留王、麗碑作大朱留王、魏書作如栗、）

（四）閔中王解憂（一云解愛婁、）

（五）慕本王解邑朱（魏書作莫來）

古鄒加再思

（六）太祖大王宮（或云國祖王、魏志後漢書皆曰宮、魏書以宮爲莫來裔孫、）

（七）次大王遂成（魏志後漢書曰、宮死子遂成立、）

（八）新大王伯固（固一作句、魏志後漢書曰、遂成死、子伯固立、）

（九）故國川王男武（故國川或云國襄、魏志佚此王名、而載其弟拔奇伊夷模、麗紀男武註曰、或云伊夷謨、蓋誤解魏志也、）

發岐（魏志作拔奇、音同、然以爲伯固長子、誤也、）

（十）山上王延優（魏志作伊夷模、音相近、且以爲伯固少子、與麗紀王系合、而麗紀延優註曰、一名位宮、本文又引魏志釋位宮名義之文大誤、）

（十一）東川王憂位居（東川或云東襄、憂位居魏志作位宮、音相近、以爲伊夷模庶孽子、與麗紀合、）

（十二）中川王然弗（中川或云中壤）

（十三）西川王藥盧（西川或云西襄、藥盧一云若友、）

（十四）烽上王相夫（烽上一云雉葛、相夫或云歃矢婁、）

古鄒加咄固

（十五）美川王乙弗（美川或云好壤、乙弗或曰憂弗、晉書通鑑作乙弗利、）

（十六）故國原王斯由（故國原一云國岡上、斯由、梁書作劉、蓋誤、晉書魏書北史通鑑皆作劉、麗紀斯由註曰、或云劉、是據梁書也、東鑑從晉書等、曰改名釗、）

（十七）小獸林王丘夫（小獸林王一云小解朱留王）

（十八）故國壤王伊連（我云於只支）

（十九）廣開土王談德（麗碑曰國岡上廣開土境平安好太王、麗紀或略云開土王、晉書梁書通鑑皆作安）

（二十）長壽王巨連（一作璉、東鑑作巨璉、宋齊梁魏周隋書南北史皆作璉）

古鄒大加助多（東鑑作早多）——(廿一)文咨明王羅雲（文咨明王一云明治好王、羅雲齊梁魏書南北史皆作雲、）

(廿二)安臧王興安（梁魏書南北史作安）

(廿三)安原王寶延（安原姓氏錄作安岡上、寶延梁魏書南北史作延、）——(廿四)陽原王平成（陽原王或云陽崗上好王、平成魏周書南北史作成、）

(廿五)平原王陽成（平原王或云平崗上好王、陽成周隋書北史作湯）——(廿六)嬰陽王元（一云大元、隋書北史新舊唐書作元）

(廿七)榮留王建武（一云武、新舊唐書作建武）

大陽王——(廿八)臧（或云寶臧、新舊唐書作藏）

第十一章 三韓考

魏志東夷傳ニ云、「韓在帶方之南、東西以海爲限、南與倭接、方可四千里、有三種、一曰馬韓、二曰辰韓、三曰弁韓、辰韓者、古之辰國也、馬韓在西、其民土著種植、知蠶桑、作緜布、各有長帥、大者自名爲臣智、其次爲邑借、散在山海間、無城郭、有爰襄國、牟水國、桑外國、小石索國、大石索國、優休牟涿國、臣濆活國、伯濟國、速盧不斯國、日華國、古誕者國、古離國、怒藍國、月支國、咨離牟盧國、素謂乾國、古爰國、莫盧國、卑離國、占離卑國、臣釁國、支侵國、狗盧國、卑彌國、監奚卑離國、古蒲國、致利鞠國、冉路國、兒林國、駟盧國、內卑離國、感奚國、萬盧國、辟卑離國、臼斯烏旦國、一離國、不彌國、支半國、狗素國、捷盧國、牟盧卑離國、臣蘇塗國、莫盧國、古臘國、臨素半國、臣雲新國、如來卑離國、蘇山塗卑離國、一難國、狗奚國、不雲國、不斯濆邪國、爰池國、乾馬國、楚離國、凡五十餘國、大國萬餘家、小國千餘家、總十餘萬戶、辰王治月支國、臣智或加優呼臣雲遣支報安邪踧支濆臣離兒不例拘邪秦支廉之號、其官有魏率善邑君歸義侯中郎將都尉伯長、侯淮既僭號稱王、爲燕亡人衞滿所攻奪、將其左右宮人走入海、居韓地、自號韓王、其後絕滅、今韓人猶有奉其祭祀者、漢時屬樂浪郡、四時朝謁云々、其俗少綱紀、國邑雖有主帥、邑落雜居、不能善相制御云々、辰韓在馬韓之東、其耆老傳世、自言古之亡人、避秦役來適韓國、馬韓割其東界地與之、有城柵、其言語不與馬韓同云々、今有名之爲秦韓者、始有六國、稍分爲十二國、弁辰亦十二國、又有諸小別邑、各有渠帥、大者名臣智、其次有險側、次有樊濊、次有殺奚、次有邑借、有已祇國、不斯國、弁辰彌離彌凍國、弁辰接塗國、勤耆國、難彌離彌凍國、弁辰古資彌凍國、弁辰古淳是國、冉奚國、弁辰半路國、弁樂奴國、軍彌國、弁軍彌國、弁辰彌烏邪馬國、如湛國、弁辰甘路國、戶路國、州鮮國、馬延國、弁辰狗邪國、弁辰定漕馬國、弁辰安邪國、馬延國、弁辰瀆盧國、斯盧國、優由國、弁辰韓合二十四國、大國四五千家、小國六七百家、總四五萬戶、其十二國屬辰王、辰王常用馬韓人作之、世々相繼、辰王不得自立爲王、魏略曰、明其爲流移之人、故爲馬韓所制土地肥美、宜種五穀及稻、曉蠶桑、作縑布云々、弁辰與辰韓雜居、亦有城郭、衣服居處、與辰韓同云々、其瀆盧國、與倭接界、十二國亦有王云々。」

韓ハ、借字ニテ、意義ナシ。書ノ序「成王既伐東夷」ノ傳ニ「海東諸夷駒麗扶餘馯貊之屬」トアルヲ、正義ニ「漢書有高駒麗扶餘韓、無此馯、馯即彼韓也、音同而字異爾」ト云ヘリ。字典ニ韓ハ「河干切、音寒」ト

アリ。馯ハ「侯肝切、音翰」ナレドモ、「又河干切、音寒、東夷ノ別種ノ名」トアリテ、國名ニ用フル時ハ、韓ニ同ジキナリ。又魏志鮮卑傳ノ註ニ引キタル魏書ノ文ニ、汗人汗國トモアリ。汗モ「侯肝切、音翰」ニシテ「又河干切音寒、可汗酋長之稱、讀若克韓」トアレバ、馯ト全ク同ジ。後漢書東夷傳ノ序ニ九夷ノ名ヲ擧ゲタル中ニ干夷トアルモ、韓ナルベシ。サテ韓ト云フ名ノ起リハ、其ノ國ニ數多ノ首長アリテ、干岐又ハ干ト云ヒタルガ故ニ、干岐ノ國ト呼ビタルナリ。參謀本部ニテ撰シタル滿洲地誌ニ滿洲源流考ノ說ニ據リテ「三韓ハ、本一國ニシテ、三汗アリテ之ヲ統ベシモノナラン」ト云ヘルハ違ヘリ。三韓ハ、七十餘國ニ分レタレバ、其ノ干岐又ハ干ト云ヘル者モ三人ニハ止マラザリシナリ。干岐マタ干ノ事ハ、第十五章ニ委シク云ヘシ。

三日弁韓ハ下文ニ弁辰トノミアリテ、弁韓ト云ヘルコトナク、後漢書東夷傳ニモ「三日弁辰」トアレバ、韓ハ辰ノ誤リナルベシ。「弁辰韓合二十四國」トアルハ、弁辰辰韓ト云フベキヲ略シタルナリ。弁辰ヲ弁韓ト書キタルハ、梁書諸夷傳ヨリ始マレリ。

古之辰國トハ、漢書朝鮮傳ニ「眞番辰國、欲上書見天子、又雍閼不通」顏師古注ニ「辰謂辰韓之國也」トアル是ナリ。魏略ニ云「初右渠未破時、朝鮮相歷谿卿、以諫右渠不用、東之辰國、時民隨出居者二千餘戶、亦與朝鮮貢蕃、不相往來、至王莽地皇時、廉斯鑡爲辰韓右渠帥、聞樂浪土地美、人民饒樂、亡欲來降、出其邑落、見田中驅雀男子一人、其語非韓人、問之、男子曰、我等漢人名戶來、我等輩千五百人、伐林木、爲韓所擊得皆斷髮爲奴、積三年矣、鑡曰、我當降漢樂浪、汝欲去不、戶來曰、可、辰鑡因將戶來出詣含資縣、縣言郡、郡即以鑡爲譯、從芩中乘大船、入辰韓、逆取戶來、降伴輩、尙得千人、其五百人已死、鑡時曉謂辰韓、汝還五百人、若不者、樂浪當遣萬兵乘船來擊汝、辰韓曰、五百人已死、我當出贖直耳、乃出辰韓萬五千人、辰韓布萬五千匹、鑡收取直還郡、表鑡功義、賜冠幘田宅、子孫數世、至安帝延光四年時、故受復除」トアリ。

此ノ文中ニ辰國トアルモ、辰韓ノ國ニシテ、諸韓ノ東ニ在ル故ニ、東之辰國ト云ヘリ。辰韓右渠帥ハ辰韓西部ノ渠帥ナリ、廉斯鑡ハ、廉斯ノ人、名ハ鑡ニシテ、廉斯ハ韓ノ地名ナルコトハ、後漢書東夷傳ニ「建武二十年、韓人廉斯人蘇馬諟等、詣樂浪貢獻、光武封蘇馬諟爲漢廉斯邑君、使屬樂浪、四時朝謁」トアルニテ知ラル。但魏志ニ列擧シタル國名ノ中ニハ、廉斯ノ名見エズ。岑中ハ、漢書地理志ノ長岑縣ナルベシ。今其ノ故地ハ知ラネドモ、漢書後漢書皆列口ノ次ニ序デ、晉書ニテハ帶方郡ニ入リタレバ、今ノ京畿ノ內ナルベシ。然レバ「乘大船入辰韓」ハ、漢江ヲ溯リテ忠州ノ邊ニ至リ、ソレヨリ嶺ヲ踰エテ慶尙ノ地ニ入リタルナリ。牟韓ハ、宋書ニ馬韓ヲ慕韓トモ書キタレバ、コレモ、馬韓ノ音ノ轉レルニヤ。然ラズハ牟ハ、弁ノ誤寫ナルベシ。辰王治月支國ハ、辰王ハ、辰韓ノ王ナルニ、月支國ハ、辰韓ノ中ニハ在ラズシテ、馬韓五十餘國ノ中ニ見エタル國名ナリ。下文ニ辰韓弁辰合二十四國ノ中、其十二國屬辰王、辰王常用馬韓人作之トアルヲ合セ考フレバ、月支國ハ、馬韓ノ東境ニアリテ、辰韓十二國ヲ統ベタル趣ナリ。臣智或加優呼云々之號ハ、韓ノ方言ト見エテ、句讀シ難シ、其ノ中地名ヲ取レルモノアリト覺シクテ、臣雲ハ、馬韓ノ臣雲新國、安邪ハ、弁辰安邪國、拘邪ハ、弁辰狗邪國、支廉ハ、廉斯ノ倒置カトモ聞ユレドモ、辰王ノ屬部ニ馬韓弁辰ノ諸國アルモ、イカヾナレバ、强ヒテハ解スベカラズ。

侯淮ノ淮ハ、準ノ誤リニテ、朝鮮王箕準ナリ。「走入海、居韓地、自號韓王」ハ、魏略ニ「準王海中、不與朝鮮相往來」トアリテ、韓地ノ南隅ニ據レルナリ。東鑑ニ「居韓地金馬郡」ト云ヘルハ、彼ノ地ノ古傳ニシテ、其ノ實ヲ得タル事ナルベシ。金馬郡ハ、舊名金馬渚、今ノ全羅道益山郡ナリ。東覽益山郡ノ古跡ニ「箕準城、在龍華山上、俗傳箕準所築、故名焉、石築周三千九百尺、高八尺、有溪、有泉井」トアリ。

「其後絕滅」ノ時代ハ。慥ニハ知ラネドモ、濟紀ニ始祖二十六年、（漢ノ王莽初始元年）「潛襲馬韓、遂併其國邑」トアル

ハ、箕準ノ裔ヲ滅シタルナリトハ、韓人ノ相傳ノ説ナリ。

「又有諸小別邑」ヨリ「總四五萬戸」マデハ、辰韓弁辰ヲ合叙シタルナリ。善クセズバ、混レ易シ。「辰王不得自立爲王」ハ、文意通ゼズ。辰王ハ、辰韓ノ誤リナリ。梁書新羅傳ニ「辰韓王常用馬韓人作之、世相係、辰韓不得自立爲王、明其流移之人故也、恒爲馬韓所制」トアルハ、魏志魏略ノ文ヲ取レルナレドモ、辰王ヲ辰韓トシタルハ、魏志ノ正シキ本ニ依レルナルベシ。

弁辰ノ「十二國亦有王」ハ、國ゴトニ王アルニハ非ズ。辰韓ニ辰王アル加ク、臣智險側ナド云ヘル渠帥ノ上ニ十二國ヲ統ブル王アリシナリ。

然ルニ後漢書ニハ「韓有三種、一曰馬韓、二曰辰韓、三曰弁辰、馬韓在西、有五十四國、其北與樂浪、南與倭接、辰韓在東、十有二國、其北與濊貊接、弁辰在辰韓之南、亦十有二國、其南亦與倭接、凡七十八國、伯濟是其一國焉、大者萬餘戸、小者數千家、各在山海間、地合方四千餘里、東西以海爲限、皆古之辰國也、馬韓最大、共立其種爲辰王、都目支國、盡王三韓之地、其諸國王先、皆是馬韓種人焉云々、初朝鮮王準爲衛滿所破、乃將其餘衆數千人走入海、攻馬韓破之、自立爲韓王、準後滅絶、馬韓人復自立爲辰王」トアリテ、辰王ハ辰韓王ニハアラズ、準後滅絶ニ次ギテ再興シテ、「三韓ヲ統一シタル者トセリ。此ノ文ハ、總テ魏志ニ本ヅキタル者ナレドモ、魏志ニハ「其十二國屬辰王」トアリテ、馬韓弁辰モ屬セリトハ云ハザレバ、「盡王三韓之地」ト云ヘルハ、非ナリ。又漢書魏略ニ辰國ノ名見エタルハ、箕準ガ韓地ニ入リシヨリ七十年バカリ後ニシテ、其ノ後裔ノ滅亡以前ノ事ナレバ、箕氏ノ時代ヨリシテ、辰王ハ、馬韓ノ西境ニ在リシヲ「準後滅絶、馬韓人復自立爲辰王」ト云ヘルハ、據ナキニ似タリ。「其諸國王先、皆是馬韓種人焉」トアルモ、イカヾ。三韓七十餘國ニハ、國每ニ長帥アルノミニテ、辰王弁辰王ノ外ニ、王ト稱スル者見エザレバ、諸國王トハ云フベカラズ。又魏志ニハ「辰王常用馬韓人作之」トコソ云ヘ、弁辰諸國ノ渠帥ハ皆馬韓人ナリトハ云ハズ。

三韓ノ地ハ魏ノ帶方郡ノ南ニアリテ、東西ハ海ヲ以テ限トスト云ヒ、又馬韓ハ西ニ在リテ、五十餘國、辰韓ハ馬韓ノ東ニ在リテ、十二國、弁辰ハ魏志ニハ「與辰韓雜居」トアレドモ、後漢書ニ據レバ、「在辰韓之南、亦十二國」トアレバ、其ノ位置甚明カナリ。即馬韓ハ、後ニ百濟ト爲レル所ニシテ、今ノ京畿道ノ南部及忠淸全羅二道、辰韓ハ、後ニ新羅ト爲レル所ニシテ、今ノ慶尙道ノ東北部、弁辰ハ、後ニ伽耶即任那ト爲リ、遂ニ新羅ニ併セラレタル所ニシテ、今ノ慶尙道ノ西南部ナリ。然ルヲ新羅ノ崔致遠ハ、「馬韓則高麗、卞韓則百濟、辰韓則新羅也」ト云ヒ、三國史記地理志ニハ、コノ説ヲ近似ノ説トシテ取リタルハ、甚誤レリ。高句麗ハ玄菟ニ起リテ其ノ盛時ハ樂浪帶方ノ故地ヲ併セタレドモ、帶方以南ノ地ニシテ句麗ニ入リタルハ、京畿ノ南部ニ過ギザレバ、馬韓則高麗トハ云フベカラズ。又百濟ヲ弁韓トスル時ハ、辰韓ノ正西ニ當リテ、後漢書ノ「在辰韓之南」ト云ヘルニ合ハズ。權近ノ東國史略ニ、高句麗ヲ弁韓トシタルニ至リテハ、南北ノ位置ヲ顚倒シ、其ノ誤リ尤モ大ナレバ、東覽京畿古馬韓之域ノ註ニ之ヲ辨駁シタルハ、當レリ。サレドモ東覽ハ、崔致遠及三國遺事ノ説ニ本ヅキテ、少シク斟酌ヲ加ヘ、京畿忠淸黃海三道ヲ以テ馬韓ノ舊域ニ係ケタルハ、猶舊説ノ謬リヲ因襲セリ。京畿ノ北部及黃海道ハ、帶方ノ故地ナレバ、馬韓ノ舊域ニハ係ク可カラズ。又弁韓ノ舊域ヲ全羅一道ニ止メタルハ、百濟全土ヲ弁韓ニ當テタル舊説ニ愈レヽドモ、弁馬ノ方位ノ違ヘルコトハ、百歩五十歩ノ間ニ在リシガ、韓百謙其ノ非ヲ辨ジテヨリ、韓人始メテ舊説ノ謬リヲ曉レリ。東考ニ云「弁韓馬韓、其南皆與倭接、弁韓在於馬韓南界之東、以北接辰韓、其四履正合駕洛之墟、駕洛即伽耶之一也、文獻通考以伽耶琴爲弁韓琴、是其證也」又云「古之論方輿者、常求三韓舊地於朝鮮之境、又以羅麗濟三國、分配於三韓之舊地、辰常不易、而卞馬互換、崔説兩失其眞、權説一是一誤、紛紜不定、殆至數百年之

久、輿覽一書始置三韓於南、朝鮮於北、並擧而對峙之、領略其大體矣、但以篤信崔說、故牽引卞馬邊幅、欲實麗濟之分占、然韓百謙之論、實源於輿覽、而開說分明、世以爲定論也」トアリ。三韓辨謬滿洲源流考ノ類、三韓ヲ以テ肅愼氏ヨリ出デタリトシ、遂ニ新羅ノ別號ナル雞林ヲ吉林ニ附會シ、魏源ノ聖武紀ニモ「肅愼國在今吉林寧古塔地…至漢分爲三韓、蓋三汗並治之徵」ト云ヘルガ如キハ、今ノ滿洲ヲ以テ三韓ノ故地ト爲タルナリ。其ノ古代地理ニ暗キコト驚クベシ。

三韓ノ位置ハ、右ニ述ベタルガ如クナレドモ、其ノ七十餘國ノ所在ハ、今考フベカラズ。唯其ノ中、伯濟國ノ百濟ナル、斯盧國ノ新羅ナルコトハ、疑フベキ所ナシ。又馬韓五十四國（魏志ニハ五十五國アレドモ、莫盧國ハ、同名重出シタルガ故ニ、後漢書ニハ五十四國ト云ヘリ。）ノ中卑離ト云ヘル所、七國アレバ、此ノ語ハ、馬韓ノ方言ニテ、地名ニ附クル尾言ニシテ、百濟ノ地名ニ多ク見ユル夫里ト同言ナルベシ。滿洲源流考ニ「諸國多繫以卑離二字、當是貝勒之轉音」ト云ヘルハ、取ルニ足ラザル附會ナリ。（所夫里、古良夫里、古沙夫里、夫夫里、未冬夫里、半奈夫里、毛良夫里、爾陵夫里、波夫里等ノ名、三國史記ニ見ユ。東考所夫里ノ註ニ「方言謂嘴爲夫里、指山之嘴也」トアレドモ、此等ノ地ハ、悉ク山嘴ニ當レル所ナルニヤ、猶考フベシ。）

馬韓諸國、盡ク百濟句麗ニ併セラレタル後モ、地名ハ舊稱ニ依レル者多カルベケレバ、試ニ稱呼相似タル者ヲ比較セン。魏志ノ爰襄國ハ、一本ニ奚襄トモアレバ、高句麗ノ薊長城、（或ハ國原城ト云フ。今ノ忠清道忠州。）ト音相近ク、牟水國ハ、百濟ノ武尸伊郡（今ノ全羅道靈光郡。）莫盧國ハ、百濟ノ發羅郡（今ノ全羅道羅州。）卑離國ハ、百濟ノ夫夫里縣、（新羅ノ澮尾縣ニシテ今ノ全羅道沃溝縣ノ東十五里ノ所ニ在リキ。）臣釁國ハ、百濟ノ眞峴縣、（今ノ忠清道鎭岑縣。）狗盧國ハ、百濟ノ古祿只縣（高麗ノ臨淄縣ニシテ、今ノ全羅道羅州ノ境內ニ在リキ。）兒林國ハ、百濟ノ舌林郡（今ノ忠清道舒川郡。）萬盧國ハ、百濟ノ馬老縣、（今ノ全羅道光陽縣。）辟卑離國ハ、百濟ノ波夫里郡、（高麗ノ福城縣ニシテ、今ノ全羅道寶城郡ノ北三十里ノ處ニ在リキ。）臼斯烏旦國ハ、百濟ノ丘斯珍兮縣、（今ノ全羅道珍原縣。）捷盧國ハ、百濟ノ沙羅縣、（一名沙尸羅、高麗ノ驪陽縣ニシテ今ノ忠清道洪州ノ南二十七里ノ處ニ在リキ。）若クハ高句麗ノ述爾忽縣、（新羅ノ峰城縣ニシテ、今ノ京畿道坡州牧。）牟盧卑離國ハ、百濟ノ毛良夫里縣、（今ノ全羅道高敞縣。）古臘國ハ、百濟ノ古龍郡、（唐ノ帶方州、今ノ全羅道南原府。）若クハ古良夫里縣、（今ノ忠清道靑陽縣。）如來卑離國ハ、百濟ノ爾陵夫里郡、（一名ハ仁夫里、今ノ全羅道綾城縣。）狗奚國ハ、百濟ノ果兮縣、（今ノ全羅道玉果縣。）乾馬國ハ、百濟ノ甘買縣、（高麗ノ豐歲縣ニシテ、今ノ忠清道天安郡ノ南二十七里ノ處ニアリキ。）若クハ金馬郡、（前ニ見エタル箕氏ノ故都。）蘇離國ハ、百濟ノ所力只縣、（今ノ全羅道全州沃野縣。）ト音甚近ケレバ、同名ノ異譯ナルカモ知ルベカラズ。

辰韓弁辰ノ國名ハ、總テ二十五アリ。（魏志ニハ二十六國ヲ列記シタレドモ、馬延國ハ重出セルガ故ニ、其ノ一ヲ省ケリ。）其ノ中、弁辰ノ二字又ハ弁ノ字ヲ冠シタル者十三國ハ、弁辰ニシテ、然ラザル者十二國ハ、辰韓ナリ。「弁辰亦十二國」ト云ヒ。弁辰韓合二十四國」トモアレバ、弁辰ノ十三國ニハ、一國ノ冗贅アルベシ。此ノ中、弁辰彌離彌凍國ハ、新羅ノ美里縣、（一名難省火、今ノ慶尙道大丘府解顏縣）弁辰接塗國ハ、新羅ノ漆吐縣、（今ノ慶尙道漆原縣、）弁辰古資彌凍國ハ、新羅ノ古自郡、（今ノ慶尙道固城縣）弁辰半路國ノ路ハ跛ノ誤リニテ、新羅ノ本彼縣、（今ノ慶尙道星州、）弁辰狗邪國ハ、伽倻國一名加羅國、（今ノ慶尙道金海府、）弁辰安邪國ハ、阿羅伽倻國一名安羅國、（或ハ阿尸良國ト云フ。今ノ慶尙道咸安郡。）ト音相近シ。弁辰甘路國モ、加羅國ナルニ似タリ。按フニ加羅ト云フ國ハ、數國ニ分レタレバ、其ノ中ノ一ナルベシ。瀆盧國ハ、「與倭接界」トアレバ、今ノ東萊府若クハ巨濟府ニアリシ國ナルベシ。日韓古史斷ニ「疑はくは今ノ東萊府多大浦ならん」ト云ヘリ。

馬韓ノ伯濟、辰韓ノ斯盧ハ、即百濟新羅ナレドモ、魏志ハ、之ヲ七十餘國ノ中ニ列記シテ、別ニ此ノ二國ニ重ヲ置カザルヲ見レバ、二國モ、此ノ時マデハ、微弱ニシテ、他ノ諸國ト大ニ異ナル所ナカリシナリ。後漢書東夷傳ハ、大抵魏志ニ依リタレドモ、七十餘國ノ名ヲ略キテ、「凡七十八國、伯濟是其一國焉」ト云ヒテ、特ニ伯濟ノミヲ揭グタルハ、范曄ガ史ヲ作レル頃ニ至リテ、諸韓國ノ中ニ百濟ノミ名高クナリシガ故ナルベシ。

新羅ハ、辰韓ノ一國ニシテ、弁辰ニ非ザルコトハ、斯盧國ノ上ニ弁辰ノ字ヲ冠セザルニテ明カナリ。故ニ梁書北史ニハ、皆「新羅者、其先本辰韓種也」ト云ヘリ。然ルヲ舊唐書ニハ「新羅國、本弁韓之苗裔也」ト云ヘルハ、蓋魏志ノ弁辰韓合二十四國ノ中ニ辰韓十二國モ籠レルコトヲ察セズシテ、悉ク弁辰（即梁書南史ノ弁韓）ナリト誤解シタルナリ。新唐書新五代史モ、又舊唐書ノ誤リヲ承襲セリ。遼史地理志中京大定府高州ノ處ニ云「三韓縣、辰韓爲

扶餘、弁韓爲新羅、馬韓爲高麗、開泰中、聖宗伐高麗、俘三國之遺人、置縣、戶五千。」扶餘トハ百濟ヲ云ヘルニ似タリ。コレ、唐書ニ因リテ、新羅ノ舊名ヲ誤レルヨリ、百濟高麗モ、順迭リニ皆誤リタルナリ。

晉書四夷傳東夷馬韓ノ處ニ、「武帝太康元年、其王頻遣使入貢方物、七年、八年、十年、又頻至、太熙元年、詣東夷校尉何龕上獻、咸寧三年、復來、明年、又請内附」（咸寧ハ、太康ノ前ノ年號ナルヲ、太熙ノ後ニ書キタルハ誤リナリ。）辰韓ノ處ニ「武帝太康元年、其王遣使獻方物、二年復來朝貢、七年又來」トアルヲ、武帝紀ニハ、國數ヲ列記シテ、「咸寧二年、東夷十七國内附、」「四年、東夷六國來獻、又東夷九國内附」「太康元年、東夷十國歸化、又東夷二十國朝獻」「二年東夷五國内附、」「三年、東夷二十九國歸化、獻其方物」「七年、東夷十一國内附、又馬韓等十一國遣使來獻」「八年東夷二國内附」「九年、東夷七國、詣校尉内附、」「十年、東夷絕遠、三十餘國來獻」「太熙元年、東夷七國朝貢、」（四夷傳ニ據レバ、此ノ七國ノ中ニハ牟奴國等ノ六國アリ。即馬韓ノ一國ト共ニ七國ナリ。）惠帝紀ニ「永平元年、東夷十七國、詣校尉内附」ナド見エ、又張華傳ニハ「東夷馬韓新彌諸國、依山帶海、去州四千餘里、歷世未附者二十餘國、並遣使朝獻」トアリ。コレ、張華ガ持節都督幽州諸軍事タリシ時ニシテ、太康三年ノ事ナリ。此等ノ東夷ハ、韓國ノミトモ限ラザレドモ、其ノ朝貢ノ年ハ太抵四夷傳ノ馬韓辰韓朝貢ノ年ニ合ヘルヲ見レバ、多クハ三韓濊貊ノ諸國ナルベシ。サレバ此ノ頃マデモ、韓地ニ數十ノ小國並ビ立チテアリシコト、明カナリ。白鳥庫吉氏、コノ馬韓辰韓朝貢ノ事ヲ論ジテ曰ク「晉の威力は大に衰頽したるに、前代にも似ず頻に朝貢するは如何なる故ぞと云ふに、是れ全く高句麗百濟新羅任那等が、樂浪帶方二郡の衰へたるに乘じて、其の近隣諸族を併呑せんとしたるに原因する事なるべし。殊に馬韓は百濟の侵略に逢ひ。辰韓は新羅の侵略に逢へるにより、晉室の威光を借りて存在せんと爭ひし如く見ゆ、果して然らば西晉の初め、二郡の衰頽したるは、即朝鮮半嶋を仕組みたる綱紀の弛みたるにて、强者は弱者を幷呑して、新社會の組織の成るまで、鎮まらざる亂脈の世となりたるなり。而して皇軍の新羅に伐ち入りて、半嶋の南端に確然たる威權を打ち建たるは、宛も此の時の事にして、決して偶然の事には非ず」ト云ヘリ。

東晉ノ世ニ至リ、馬韓辰韓ノ諸小國ハ、漸次ニ百濟新羅ニ蠶食セラレ、二國始メテ半嶋中ノ大國トナリ、高句麗ト鼎足ノ勢ヲ成セリ。「晉書一百十四前秦載記、太元五年幽州ノ刺史符洛謀反ノ處ニ「分遣使者、徵兵於鮮卑烏丸高句麗百濟及薛羅休忍諸國、皆不從」トアリ。薛羅ハ、即新羅ニシテ、資治通鑑ニハ、新羅ト書ケリ。百濟新羅ハ、此ノ時既ニ秦人ニ重ゼラレタルコト知ラル。休忍國ハ、朝鮮國志ニ「古休忍國在新羅東、亦三韓之屬、服屬於燕、苻秦滅燕、遂屬於秦、其後併於百濟」トアリ。東ハ、西ノ誤リカ。其ノ地、今考ヘ得ズ。六伽耶ノ一ナル古寧伽耶ニモアランカ。モシ古寧ナラバ新羅ニ併セラレタルニテ、百濟ニ併セラレタル事ナシ、猶ホ考フベシ。サテ百濟新羅ハ既ニ大國トナリタレドモ、諸小國ノ中ニハ未ダ二國ニ併セラレザル者モアリシト見エテ、宋ノ時倭王ガ自ラ稱ヘタリト云ヘル官爵ノ中ニ、「使持節都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事」トアリ。秦韓ハ即辰韓、慕韓ハ即馬韓ナレバ、百濟新羅任那ノ外ニ、辰韓馬韓ノ遺種ニシテ國邑ヲ保テル者幾分カ殘存セシナルベシ。

支那ノ諸史ニ據リテ、漢魏晉宋ノ間三韓ノ形勢ヲ考フルニ、大略右ノ如シ。然ルニ羅紀濟紀ニ、記シタル所ヲ觀ルニ、二國ハ、建國ノ初ヨリ既ニ半島ニ雄長タリシガ如クニテ、漢史ノ記載ノ趣トハ合ハザルコト多シ。其ハ次章ニ云フベシ。

第十二章　百濟考

濟紀首篇ニ云、「百濟始祖温祚王、其父鄒牟、或云朱蒙、自北扶餘逃難、至卒本扶餘、扶餘王無子、只有三

女子、見朱蒙、知非常人、以第二女妻之、未幾扶餘王薨、朱蒙嗣位、生二子、長曰沸流、次曰溫祚、及朱蒙在北扶餘所生子來爲太子、沸流溫祚恐爲太子所不容、遂與烏干馬黎等十臣南行、百姓從之者多、遂至漢山、登負兒嶽、望可居之地、沸流欲居於海濱、十臣諫曰、惟此河南之地、北帶漢水、東據高岳、南望沃澤、西阻大海、其天險地利難得之勢、作都於斯、不亦宜乎、沸流不聽、分其民、歸彌鄒忽以居之、溫祚都河南慰禮城、以十臣爲輔翼、國號十濟、是前漢成帝鴻嘉三年也、沸流以彌鄒土濕水鹹、不得安居、歸見慰禮都邑鼎定人民安泰、遂慙悔而死、其臣氏皆歸於慰禮、後以來時百姓樂從、改號百濟、其世系、與高句麗同出扶餘、故以扶餘爲氏。」漢山ハ、北漢山ニシテ、今ノ京城ノ地ナリ。負兒嶽ハ今、三角山ト云ヒ、楊州ノ南三十九里ニアリテ、京城ノ北ニ當レリ。彌鄒忽ハ、今ノ仁川府、慰禮城ハ、今ノ忠淸道稷山縣ナリ。東覽稷山縣ノ古跡ニ、「慰禮城、在聖居山、土築、周一千六百九十尺、高八尺、內有一井、今半頽圮」トアリ。聖居山ハ、縣ノ東二十一里ニアル山ナリ。國號十濟、マタ改號百濟ト云ヘルハ、イカヾ。百濟ノ名ハ、魏志後漢書ニ伯濟ト書キ、廣開土王碑ニハ百殘ト書キテ、モト韓語ノ音譯ナルヲ、隋書百濟傳ニ「初以百家濟海、因號百濟」ト云ヘルハ、漢字ニ拘リタル附會ノ說ナリ。然ルニ百家濟海ノ說ハ、百濟ノ古傳ナル十臣南行ノ事ト合ハザルニヨリ、濟紀ハ、更ニ杜撰ヲ加ヘテ、百濟ノ舊名トシテ、十濟ノ名ヲサヘ設ケタルナルベシ。

濟紀前文ノ註ニ「一云、始祖沸流王其父優台、北扶餘王解扶婁庶孫、母召西奴、卒本人延陁勃之女、始歸于優台、生子二人、長曰沸流、次曰溫祚、優台死、寡居于卒本、後朱蒙不容於扶餘、以前漢建昭二年春二月、南奔至卒本、立部號高句麗、娶召西奴爲妃、其於開基創業、頗有內助、故朱蒙寵接之特厚、待沸流等如己子、及朱蒙在扶餘所生禮氏子孺留來、立之爲太子、以至嗣位焉、於是沸流謂弟溫祚曰、始大王避扶餘之難、逃歸至此、我母子傾家財、助成邦業、其勤勞多矣、及大王厭世、國家屬於孺留、吾等徒在此、鬱々如疣贅、不如奉母子南遊、卜地別立國都、遂與弟率黨類、度浿帶二水、至彌鄒忽以居之」ト云ヘル一說ヲ引ケリ。日韓古史斷ハ、此ノ說ヲ取リテ、「百濟を高句驪の後と爲すは、誤れり」、「百濟と高句驪とは、自ら異性なり」ト云ヘリ。然レドモ高氏ト餘氏ト、異ナル姓ヲバ唱ヘタレドモ、二國ハ同族ナル事、鄒牟王ノ二國ノ共祖ナル事ハ、徵證甚多ケレバ、此ノ一說ハ從ヒ難シ。

次ニ濟紀始祖四年、漢ノ成帝永始二年、「遣使樂浪修好」、同八年、漢ノ成帝元延二年、「築馬首城、竪瓶山柵、樂浪太守使告曰、頃者聘問結好、意同一家、今逼我疆、造立城柵、或者其有蠶食之謀乎云々、由之與樂浪失和」。馬首城瓶山柵ハ、今考フベカラザレドモ、京畿道ノ南境ナルベシ。同十一年、漢ノ成帝綏和元年、「夏四月、樂浪使靺鞨襲破瓶山柵、殺掠一百餘人、秋七月、設禿川狗川兩柵、以塞樂浪之路。」禿山柵ハ、京畿道衿川縣ノ北五里ニ禿山アレバ、ソコナランカ。同十三年、漢ノ哀帝建平元年、「秋七月、就漢山下立柵、移慰禮城民戶、八月、遣使馬韓告遷都、遂畫定疆場、北至浿河、南限熊川、西窮大海、東極走壤、九月、立城闕、」同十四年、漢ノ建平二年、「春正月、遷都、秋七月、築城漢江西北、分漢城民」。漢山ハ、一名南漢山ニシテ、今ノ京畿道廣州府ナリ。濟紀ノ浿河ハ、黃海道平山府ノ猪灘ヲ指セルコト、第八章ニ云ヘルガ如シ。熊川ハ忠淸道ナル熊津江、走壤ハ、羅紀文武王十三年、「築首若州走壤城、一名迭巖城」トアル所ニシテ、今ノ江原道春川府、漢江ノ西北ハ即北漢山ニシテ、今ノ京城ノ地ナリ。同十七年、漢ノ哀帝元壽元年、「樂浪來侵、焚慰禮城」同十八年、漢ノ元壽二年、「王欲襲樂浪牛頭山城、至臼谷、遇大雪、乃還。」牛頭山城ハ今ノ江原道春川府ナリ。同二十四年。漢ノ王莽居攝元年、「王作熊川柵、馬韓王遣使責讓云々、王慙、遂壞其柵。」熊川ハ今ノ忠淸道公州ナリ、同二十六年。漢ノ王莽初始元年、「王出師、陽言田獵、潛襲馬韓、遂併其國邑、唯圓山錦峴二城、固守不下」、同二十七年、王莽始建國元年、「二城降、移其民於漢山之北、馬韓遂滅」トアリ。此等ノ事ハ、漢史ニハ一ツモ見エズ。百濟ノ古記ナル者ハ、前漢ヨリ數百年ノ後ニ成レリト見ユレバ、數百

年前ノ事ヲ此ノ如ク詳密ニ記シタルハ、既ニ怪ムベシ。當時樂浪郡ハ、鴨綠江以南二十五縣ヲ領シテ、東方ノ大鎭ナルニ、百濟ハ、馬韓五十餘國分立セル中ノ一國ニシテ、其ノ民衆ハ恐ラクハ樂浪一縣ニ比スルニ過ギザルヲ、濟紀ハ、常ニ抗敵ノ國ノ如ク記シタルハ、後史ノ文飾ナルベシ。又北漢山ハ、三國史記地理志ニ「漢陽郡、本高句麗北漢山郡、一云南平壤」又「至十三世近肖古王、取高句麗南平壤、移都漢城」トアリテ、本句麗ニ屬シ、句麗ニ屬スル前ハ、樂浪帶方ニ屬シ、百濟ノ之ヲ取リタルハ、近肖古王ノ時ナレバ、始祖ノソコニ城ヲ築ケリト云ヘルハ、恐ラクハ非ナリ。又百濟ノ滅シタル馬韓國ハ、韓王箕準ノ後ヲ云ヘルニテ、馬韓列國ヲ悉ク滅シタルニハアラズ。馬韓五十餘國ハ、曹魏ノ世マデモ現存シ、百濟ノ之ヲ兼幷シタルハ、東晉以後ノ事ナルニ、濟紀ニ記シタル如クナレバ、始祖ノ時ニ既ニ京畿忠淸全羅三道ヲ奄有シテ、馬韓ノ地ヲ統一シタルニテ、魏志後漢書ノ趣トハ全ク違ヘルノミナラズ、馬韓列國ノ分立セル痕跡ヲモ現サヾルハ、訝シキ事ナリ。後漢書ニ「安帝建光元年秋(句麗王)宮、遂率馬韓濊貊數千騎圍玄菟」トアルハ、麗紀ハ太祖王六十九年ト七十年ト二所ニ記シテ其ノ註ニ「馬韓以百濟溫祚王二十七年滅、今與麗王行兵者、蓋滅而復興者歟」ト疑ヒタレドモ、余却テ韓史ニ馬韓列國ノ事ヲ記サヾルヲ怪ムナリ。漢史ニ記セル事ハ無稽ノ謬傳カ。又ハ濟紀ハ夸誕ニシテ信ジ難キ書ナルカ。兩史ノ牴牾、斯ニ至リテ尤甚シ。

隋書八十一百濟傳ニ、東明ガ事跡ヲ誤リテ高麗ヨリ逃レテ夫餘ニ至レリト記シタル後ニ、「東明之後、有仇台者、篤於仁信、始立其國於帶方故地、漢遼東太守公孫度、以女妻之、漸以昌盛、爲東夷强國、初以百家濟海、因號百濟」ト云ヘリ。百濟ノ王ニハ、仇台ト云ヘル人ナシ。百濟ノ先ハ、夫餘ヨリ出デタルガ故ニ、隋書ハ魏志東夷傳ニ「夫餘本屬玄菟、漢末公孫度雄張海東、威服外夷、夫餘王尉仇台、更屬遼東、時句麗鮮卑疆、度以夫餘在二虜之間、妻以宗女」トアル尉仇台ヲ百濟ノ始祖ト誤認シタルナリ。帶方ノ故地ト云ヘルモ、當ラズ。帶方郡ハ、晉ノ世マデ現存セルコト、第十章ニ云ヘルガ如シ。

宋書九十七夷蠻傳ニ云、「百濟國、本與高驪俱在遼東之東千餘里、其後高驪略有遼東、百濟略有遼西、百濟所治、謂之晉平郡晉平縣。」在遼東之東ト云ヘルハ、其ノ祖先ノ夫餘ヨリ出デタルガ故トハ聞ユレドモ、建國ノ初ヨリ馬韓ノ一國トナリテ、樂浪帶方ノ南ニ居リ、東晉ノ世、句麗ノ遼東ヲ略有セシ頃ハ、遼西ノ地ハ、慕容氏ニ屬シタレバ、百濟ノ之ヲ略有セシト云ヘルハ非ナリ。南朝ノ疆域ハ、百濟ト相接セザルガ故ニカヽル誤聞モアリシナルベシ。資治通鑑晉紀(穆帝永和二年ノ條)ニ「初夫餘居鹿山、爲百濟所侵、部落衰散云々」トアルモ、之ト伴シキ誤傳ナリ。

サレドモ百濟ノ强國トナリシハ、實ニ句麗ノ遼東ヲ經略セシ頃ヨリノコトナリ。曹魏西晉ノ世ニハ、動モスレバ漢人ニ窘メラレ、責稽王ハ、漢兵ニ殺サレ、汾西王ハ樂浪ノ大守ノ刺客ニ殺サレシガ、樂浪帶方ノ句麗ニ滅サレテヨリ、麗濟始メテ接壤ノ國トナリ、近肖古王ノ時ニ至リテ、麗王ト戰ヒテ大ニ勝チ(北ラノ戰ニ關スル濟紀ノ全文ハ第十章ニ引ケリ)遂ニ都ヲ北漢山ニ移シテ帶方ノ故地ヲ領有スルコトヽナレリ。

百濟上代ノ年紀ノ信ジ難キコトハ、余別ニ上世年紀考ニ於テ述ベタリ。然レドモ百濟ノ王家ハ、都慕大王即魏書ノ朱蒙ヨリ出デタルコトハ、韓史ト續紀姓氏錄ト一致シテ、疑ヒナキコトナレバ、朱蒙ヨリ四百年許ノ間ニ世數ノ甚少キハ、句麗ノ例ノ如ク、王系中ニ數世ノ脫誤アルガ故ナルベシ。津ノ連眞道等ノ上表ニ「眞道等本系出自百濟ノ國貴須王、貴須王者、百濟始興第十六世王也」トアル貴須王ハ、濟紀第十四代ノ主近仇首王ニシテ、都慕王ヨリ數ヘテ第十五代ナレバ、濟紀ノ王系ハ、皇朝ニ歸化シタル百濟人ノ傳ヘシヨリハ、一代少キナリ。又姓氏錄右京諸蕃ニ「菅野ノ朝臣百濟ノ國都慕王十世ノ孫貴首王之後也」トアリ。濟紀ノ王系ニ據リテ、都慕ノ子孫ヲ直系ニテ數フレバ、近仇首ハ、九世ノ孫ナレバ、コレモ一世ノ差アリ。然レバ王系ノ脫

落ハ、僅ニ一代ニ止レルガ如クナレドモ、菅野氏ノ家傳ト雖、正確ナル者トハ見エズ、イカニト云フニ、朱蒙ノ即位ヲ、麗紀ニ據リテ、漢元帝建昭二年紀元六百二十四年トスレバ、九世ノ孫近肖古(即近仇首ノ父)ノ即位マデ三百八十二年アリテ、平均一世四十二年强トナレルハ、異史時代ニ例ナキ年數ナリ。百濟ノ文學ハ、第十五章ニ云フ如ク、近肖古ノ時ニ興リテ、紀元千年以前ノ事蹟ハ、皆後史ノ追記ニ成レルモノニシテ、皇朝ニ歸化セル人々ノ家傳モソレラノ追記ノ書ニ本ヅキタルベケレバ、上代ノ世數ノ正確ナラザルコトハ、濟紀ニ異ナラザルナリ。又姓氏錄左京諸蕃ニ「和ノ朝臣、百濟ノ國都慕王十八世ノ孫武寧王之後也」トアル武寧王ハ、濟紀ニテモ、十八世ノ孫ニシテ、符合シタル如クナレドモ、濟紀ニ武寧王ヲ蓋鹵王ノ曾孫トシタルハ、誤リニテ、雄略紀ニ見エタル如ク、蓋鹵ノ實子ナレバ、濟紀上代ノ王系ニ據レバ、武寧王ハ、都慕ノ十六世ノ孫ニ當レリ。又同書ニ「百濟ノ朝臣百濟ノ國都慕王三十世ノ孫惠王之後也」トアル三十ハ、決ク二十ノ誤リナリ。コレモ濟紀ニ合ヘレドモ、武寧ヲ蓋鹵ノ子トスレバ、惠王ハ、都慕ノ十八世ノ孫ナリ。此等ハ、我ガ傳ヘト濟紀ノ傳ヘト、上代ノ王系ニ於テ二世ノ差違アリシナリ。同書此ノ條ノ次ニ「百濟ノ公、同王三十世ノ孫汶淵王之後也」トアル汶淵王ハ、雄略紀ニ見エタル汶洲王ノ誤リナルベケレドモ、三十世ノ孫ニテハ叶ハズ。汶洲王ハ、蓋鹵王ノ弟ナレバ、武寧惠王ノ例ニ依レバ、十七世ノ孫トアルベキナリ。三十ノ字ハ百濟ノ朝臣ノ條ニ三十トアルヨリ紛レタルモノナルベシ。又異本ニ二十四世ノ孫トアルモ、合ハズ。此等ノ世數ノ事ハ、總テ今正シク考フルニ由ナシ。

濟紀上代十二王ノ名ハ漢史ニ一タビモ見エザレドモ、第五代肖古王以下ハ、姓氏錄ニ往々其名見ユ。肖古ハ、濟紀マタ遺事ノ年表ニ「一云素古」ト注シ、姓氏錄ニハ速古ト書ケリ、肖ト素ト速トハ、彼ノ國ノ音相通ヘルナルベシ。右京諸蕃ノ處ニ「春野ノ連、百濟速古王ノ孫比流王之後也」「面氏、同上」「巴汶氏、春野ノ連同祖、速古王、孫汶休奚之後也」、「汶斯氏、春野ノ連同祖、速古王ノ孫比流王之後也」ナドアル速古王ハ、皆コノ肖古ナリ。肖古薨ジテ、其ノ子仇首立ツ。仇首ハ、濟紀及遺事ニ「或云貴須」ト注セリ。此ノ王ハ、姓氏錄ニ見エズ。國史姓氏錄ニ貴須王又ハ貴首王トアルハ、皆近仇首ナリ。仇首薨ジテ、其ノ子沙伴立ツ。右京諸蕃ニ「半毘氏、百濟ノ國沙伴王之後也」トアリテ、一本ニ半ヲ伴ト書ケリ。沙伴廢セラレ、肖古ノ弟古爾立ツ。未定雜姓ノ部ニ「船子ノ首、百濟國人久爾君之後者、不見」トアル久爾ハ、古爾ヲ云ヘルカ。古ト久ト韓音相通ズ。古爾薨ジ、其ノ子責稽立ツ。責稽薨ジ、其ノ子汾西立ツ。汾西薨ジ、仇首ノ子比流立ツ。比流ハ、前ニ引キタル春野連、汶斯氏ノ條ニ見エ、又山城諸蕃ニモ「岡屋ノ公、百濟ノ國比流王之後也」トアリ。又攝津諸蕃ニ「廣井ノ連、百濟ノ國避流王之後也」トアル避流モ、同ジ。比流薨ジ、汾西ノ子契王立ツ。契王薨ジ、比流ノ子近肖古立ツ。近肖古薨ジ、其ノ子近仇首立ツ。近肖古近仇首ハ、當時ハ、單ニ肖古仇首ト云ヒシヲ、先代ノ肖古仇首ニ別タンガ爲ニ、後史ノ近ノ字ヲ加ヘタルナリ。第二十一代蓋鹵王ハ、全ク第四代蓋婁王ト同名ニシテ、三國史記列傳マタ三國遺事ノ文中ニ近蓋婁王トモ見エタレドモ、蓋鹵ト書キタル時ハ、鹵ト婁ト字異ナルガ故ニ、近ノ字ヲ冠スルコトナシ。當時ノ稱呼ニ近ノ字ヲ加ヘザリシコト知ルベシ。故ニ近肖古ハ、紀ニ肖古又ハ速古ト云ヒ、古事記ニ照古王ト書キテ、近ノ字ナシ。姓氏錄右京諸蕃ニ「三善ノ宿禰、百濟國速古大王之後也」河内諸蕃ニ「錦部ノ連、三善ノ宿禰同祖、百濟ノ國速古大王之後也」トアル速古ハ、近肖古ニシテ、一本ニハ、三善ノ宿禰ノ條ノ速ノ字ノ上ニ近ノ字アリ。左京諸蕃ニ「石野ノ連、百濟國人近速王ノ孫憶頼福留之後也」トアルハ、速ノ字ノ下ニ古ノ字脱チタルナリ。同卷ニ「大丘ノ造、百濟國速古王十二世孫恩率高難延子之後也」右京諸蕃ニ「眞野造、百濟國人速古王之後也」トアルハ、先代ノ肖古ヲ云ヘルカ、近肖古ヲ云ヘルカ、何レトモ定メ難シ。近仇首ハ、濟記ニ「一云近貴須」ト注シ、國史ニハ貴須又ハ貴首ト書キ、姓氏錄右京諸蕃、菅野ノ朝臣、雁高ノ宿禰ハ「貴首王之

後也」ト云ヒ、又「廣津、連、百濟國近貴首王之後也」トモアリ。

百濟王ノ名ノ、漢史ニ見エタルハ、近肖古ヨリ始マレリ。晉書簡文帝紀咸安二年、（紀元千三十二年、百濟近肖古王二十七年）「春正月辛丑、百濟林邑王、各遣使貢方物」、其ノ六月、「遣使拜百濟王餘句爲鎮東將軍、領樂浪太守」トアリ。餘ハ、百濟王ノ姓、句ハ、肖古ノ略ニシテ、即近肖古王ナリ。句ト古ト、韓音相通ズ。句麗王伯固ヲ三國遺事ニ一作伯句トアルモ、其ノ例ナリ。濟紀ニハ是ノ歳ト其ノ翌年（晉孝武帝寧康元年）ト兩所ニ「遣使入晉朝貢」ト記セリ。

梁書（五十四）諸夷傳百濟ノ處ニ「晉太元中王須、義熙中王餘映、宋元嘉中王餘毗、並遣使獻生口」トアリ。須ハ、貴須ノ略ニシテ即近仇首王ナリ。晉書孝武紀太元七年、（近仇首王八年、）「九月、東夷五國、遣使來貢方物」トアル五國ノ中ニハ、近仇首ノ使者モアリシナルベシ。濟紀ニハ、近仇首王五年（晉太元四年、）「春三月、遣使朝晉、其使海上遇惡風、不達而還」ト見エ、其ノ後五年、（太元九年、）夏四月、王薨ジ枕流位ヲ繼ギタル後ニ「秋七月、遣使入晉朝貢」トアルハ前王ノ遣シタル使ノ、秋ニ至リテ彼ノ地ニ達シタルコトニヤ。魏書（百一）百濟傳、其王餘慶ガ魏ニ上レル表文ニ、「臣與高句麗、源出扶餘、先世之時、篤崇舊欵、其祖釗輕廢隣好、親率士衆、陵踐臣境、臣祖須整旅電邁應機馳擊、矢石暫交、梟斬釗首」ト云ヘリ。此ノ戰ハ、近肖古ノ時ノ事ナレドモ、其ノ大捷ヲ得タルハ、太子近仇首ノ功ナルガ故ニ、臣祖須ト云ヘルナリ。又冊府元龜ニ「太元十一年、以百濟世子餘暉、爲鎮東將軍百濟王」トアル暉ハ、辰斯王ノ漢名ニシテ、太元十一年ハ、辰斯即位ノ翌年ナリ。辰斯ハ近首ノ次子ニシテ、兄枕流王ノ後ヲ承ケタレドモ、晉朝ニハ前王ノ世子ト稱シテ報告セシナルベシ。

餘映餘毗ノ事ハ、宋書（九十七）夷蠻傳ニ詳カナリ。「義熙十二年、以百濟王餘映爲使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍百濟王、高祖踐祚、進號鎮東大將軍、少帝景平二年、映遣長史張威、詣闕貢獻、元嘉二年、太祖詔之曰云々、其後每歲遣使奉表獻方物、七年、百濟王餘毗復修貢職、以映爵號授之、二十七年毗上書獻方物云々、毗死、子慶代立、世祖大明元年、遣使求除授、詔許、二年、慶遣使上表云々、太宗泰始七年、又遣使貢獻」冊府元龜ニハ「宋高祖永初元年、餘映進號鎮東大將軍、元帝元嘉七年、十七年、二十年、二十七年、並遣使獻方物、孝武大明元年、七年、並遣使朝貢、順帝昇明二年、王牟都遣使貢獻、詔授使持節都督百濟諸軍事鎮東大將軍」トアリ。映ハ、腆支王ノ漢名ニシテ、通典ニハ腆ト書ケリ。貴須ヲ須ト云ヒ、毗有ヲ毗ト云ヒ、慶司ヲ慶ト云ヘル例ニ依レバ、腆ト書ケル方、正シカルベク、映ハ腆ノ誤寫トモ見ユ。晉ノ義熙十二年ハ、腆支即位十二年ニ當リ、高祖ハ、宋ノ武帝、其永初元年ハ、腆支ノ十六年ナリ。景平二年、元嘉二年ハ、腆支ノ子久爾辛王ノ五年六年ニ當レ、バ、ソコニモ映ト書キテ腆支ノ世トシタルハ、誤リナリ。太祖ハ即チ文帝、毗ハ毗有ノ略、元嘉七年二十七年ハ、毗有王ノ四年二十四年ナリ。慶ハ、慶司ノ略ニシテ、濟紀ニハ「蓋鹵王、（或云近蓋婁、）韓慶司」トアリ。世祖ハ即チ孝武帝、其ノ大明元年（雄略天皇元年）ハ、蓋鹵王ノ三年、太宗ハ明帝、其ノ泰始七年（雄略天皇十五年）ハ、蓋鹵王ノ十七年ナリ。魏書百濟傳ニハ「延興二年、其王餘慶遣使上表云々」トテ、餘慶ガ高句麗ヲ征センコトヲ願ヘル上書ト魏ノ獻文帝ヨリ使者邵安ヲ遣シテ詔諭セントシタル事トヲ載セタリ。魏ノ延興二年（雄略天皇十六年）ハ、蓋鹵王ノ十八年ナリ。牟都ハ濟紀ニハ「文周王（或作汶洲）蓋鹵王之子也」雄略紀ニ汶洲王、姓氏錄ニ文周王トアリ。牟都文周汶洲、皆音相近シ。梁書南史ニ牟都ヲ單ニ都トモ云ヘレバ、宋書大明二年餘慶ノ表文ニ行輔國將軍餘都トアルハ、即チ此ノ人ナルベシ。又梁書南史ニ牟都ヲ慶ノ子トシタルハ、濟紀ニ合ヘレドモ、雄略紀ノ註ニ「汶洲王、蓋鹵王母弟也」トアレバ、實ハ弟ナルヲ、王統ヲ繼ギタル故ニ、子ト稱シタルナリ。昇明二年（雄略天皇二十二年）ハ文周王ノ薨ジタル翌年ニシテ、文周ノ子三斤王ノ世ナレドモ、其ノ使者ハ文周ノ命ヲ受ケテ、此ノ年ニ宋ニ達シタルナリ。

又冊府元龜ニ云、「南齊建元二年、百濟王牟都遣使貢獻、詔曰云々、又永明八年、百濟王牟太遣使上表云々、

遣謁者僕射孫副、策命太、襲亡祖父牟都爵、爲百濟王云々。」牟太又ハ太ハ、梁書モ之ニ同ジク、齊書南史ハ、牟太又ハ大ト書キ、梁書南史ニ牟都ノ子トシ、濟紀ニ「東城王諱牟大、（或作摩帝）文周王弟昆支之子」雄略紀ニ「昆支王五子第二末多王」トアリ。牟太牟大摩帝末多皆音相近シ。濟紀國史ニ據レバ、東城王ハ文周ノ姪ナルヲ、梁書南史ニ子トシタルハ誤ナリ。冊府元龜マタ齊書ニ襲祖父牟都トアルハ、東城王ハ、文周ノ子三斤王ノ後ヲ承ケタル故ニ、繼統ノ上ヨリ云ヘバ、孫ニ當レルナリ。齊ノ建元二年（清寧天皇元年）ハ、東城王ノ二年ニシテ、文周王薨ジテヨリ三年ノ後ナレバ、冊府元龜ノ年紀又ハ濟王ノ名ニ誤リアルベシ。永明八年（仁賢天皇三年）ハ、東城王ノ十二年ナリ。

齊書（五十八）東夷傳ニハ、脫簡アリテ、牟都貢獻ノ事見エズ。永明八年牟大上表ノ全文ト策命ノ事トヲ載セタル後ニ「是歲、魏虜又發騎數十萬、攻百濟入其界、牟大遣將沙法名、贊首流、解禮昆、木干那、率衆襲擊虜軍、大破之、建武二年、牟大遣使上表曰云々、去庚午年、獫狁弗悛、擧兵深逼、臣遣沙法名等領軍逆討云々」ト見ユ。庚午ハ即チ永明八年（東城王十二年）ナリ。此ノ役ヲ、濟紀ニハ、其ノ二年前東城王十年戊辰ノ處ニ「魏遣兵來伐爲我所敗」ト記セリ。建武二年（仁賢天皇八年）ハ、東城王十七年ナリ。

梁書ニ又云、「齊永明中、除太都督百濟諸軍事鎭東大將軍百濟王、天監元年、進號征東將軍、尋爲高句驪所破、衰弱者累年、遷居南韓地、普通二年、王餘隆始復遣使奉表、稱累破句驪、今始與通好、而百濟更爲彊國云々、五年、隆死、詔復以其子明、爲持節都督百濟諸軍事綏東將軍百濟王」。齊ノ和帝中興元年（武烈天皇三年、百濟東城王二十三年）冬十一月、東城王、其ノ臣ニ弑セラレテ、武寧王位ニ即キタルヲ、梁朝ニテハ、其ノ翌年天監元年ニ牟大ノ號ヲ進メタルハ、百濟ノ變報、未ダ梁朝ニ達セザリシ故ナルベシ。「爲句驪所破」ト云ヘルハ、句麗長壽王、自ラ將トシテ百濟ヲ攻メテ、蓋鹵王ヲ殺シタルヲ謂ヒ、「遷居南韓地ハ」、文周王、都ヲ熊津ニ移シタルコトヲ謂ヘルニテ、倶ニ東城王即位ノ前ニ有リシ事ナルヲ、梁書ハ、誤リテコヽニ記セリ。

餘隆ハ、濟紀ニ「武寧王諱斯摩（或云隆）」トアリ。普通二年（繼體天皇十五年）ハ、其ノ二十一年ナリ。「累破句驪」ト云ヘルハ、武寧王七年冬、句麗ノ寇ヲ擊チ退ケ、十二年秋九月、句麗ノ軍ヲ襲ヒテ大ニ破リタル類ヲ謂ヘルナリ。明ハ、濟紀ノ聖王明襛ニシテ、繼體紀ニハ「百濟太子明即位」ト云ヒ、欽明紀ニハ聖明王ト云ヒ、濟紀マタ姓氏錄ニハ明王トモアリ。武寧王薨ジテ、聖王位ニ即キタルハ、韓史ニ據レバ、普通四年ナルヲ、梁書ニ五年トシタルハ、一年ノ差アリ。繼體紀ニテハ、十七年（普通四年）ニ武寧薨ジ、十八年（普通五年）ニ太子明位ニ即キタレバ、武寧ノ薨年ハ、韓史ト同ジケレドモ、明ノ即位ノ年ハ、梁書ニ合ヘリ。

北史（九十四）百濟傳ニ「及齊受東魏禪、其王隆亦通使焉、隆死、子餘昌亦通使命於齊、武平元年、齊後主以餘昌爲使持節侍中車騎大將軍帶方郡公、百濟王如故云々、」周書（四十九）異域傳百濟ノ處ニ「齊氏檀東夏、其王隆亦通使焉、隆死、子昌立、建德六年、齊滅、昌始遣使獻方物、宣政元年、又遣使來獻。」餘隆ハ、北齊ノ簒奪ヨリ二十六年前ニ薨ジタレバ、周書北史ノ隆ハ、皆明ノ誤リナリ。又陳書文帝紀天嘉三年（欽明天皇二十二年）ニ「以百濟王餘明爲撫東大將軍」トアレドモ、明ノ戰死ハ、欽明紀十五年ニ見エテ、韓史トモ合ヒタレバ、陳書ノ明ハ、昌ノ誤リナリ。昌ハ、明ノ子威德王餘昌ニシテ、武平元年、（欽明天皇三十一年）建德六年、（敏達天皇六年）宣政元年、（敏達天皇七年）ハ皆其ノ在位ノ間ナリ。

隋書東夷傳ニ「開皇初、其王餘昌遣使貢方物云々、開皇十八年、昌使其長史王辯那來獻方物云々、昌死、餘宣立、死、子餘璋立、大業三年、璋遣使者燕文進朝貢云々。」開皇元年、（敏達天皇十年）十八年（推古天皇六年）ハ、威德王ノ二十八年、四十五年ナリ。餘宣ハ、韓史ノ法王宣、餘璋ハ、武王璋ナリ。濟紀ニ據レバ、開皇十八年冬十二月、威德王薨ジ、弟惠王季立チ、明年惠王薨ジ、長子法王宣立チ、又明年法王薨ジ、子武王璋立テリ。隋書ハ、昌

ト宣トノ間ニ惠王一代ヲ脫シテ、宣ヲ昌ノ子トセリ。大業三年（推古天皇十五年）ハ、武王ノ八年ナリ。惠王ノ事ハ、濟紀ニ「惠王諱季、明王第二子、昌王薨、卽位、」三國遺事ニモ「惠王（名季、一云獻王、威德子）」トアリテ名ハ、季ノ一字ナルヲ、東鑑ニハ、戊午ノ年ニ「百濟王昌薨、諡曰威德、第二子季明立、」巳未ノ年ニ「百濟王季明薨、諡曰惠」ト云ヒテ、季明ノ二字ヲ以テ名トセリ。コハ、東鑑ノ編者等、濟紀ノ文ヲ誤リ讀ミテ、明王ノ明ヲ上ノ季ニ連ケテ讀ミタルナリ。明王ハ、卽聖王明ニシテ、惠王ハ、聖王ノ第二子、卽威德王ノ弟ナルヲ、明ヲ以テ句トシタルガ故ニ、王第二子ト云ヘルハ、何王ノ子トモ解シ難ク、遂ニ遺事ノ說ニ依リテ威德ノ子トシタルナリ。

上文ヲ通觀スルニ、百濟ノ近肖古王以上ハ、漢史ニ據リテ年代ヲ證スルコトヲ得ザレドモ、近肖古王ノ末年ニ高句麗王釗ヲ殺シタルヨリ後ハ、年代沓合ヘリ。

今濟紀ニ據リテ、百濟諸王ノ系圖ヲ作リ、國史及諸書ノ異同ヲ附註シテ、考索ノ便ニ供ス。

（一）百濟始祖溫祚王—（二）多婁王—（三）巳婁王—（四）蓋婁王
　├（五）肖古王（一云素古、姓氏錄作速古王）
　│　├（六）仇首王（或云貴須）
　│　│　├（七）沙伴王（姓氏錄同、伴一作半）
　│　│　└（十一）比流王（姓氏錄同、或作避流）—（十三）近肖古王（國史多略近字、或作速古、或誤作背古、近背古、古事記作照古王、姓氏錄曰速古大王、或作近速王、晉書作餘句）
　└（八）古尒王（姓氏錄作久爾）—（九）責稽王（或云青稽）—（十）汾西王—（十二）契王

（十四）近仇首王（一云近貴須、國史作貴須又貴首、姓氏錄作貴首又近貴首、梁書魏書作須、續紀作貴須又久素）
　├（十五）枕流王（國史同）—（十七）阿莘王（或云阿芳、國史作阿花）
　└（十六）辰斯王（國史姓氏錄同）

（十八）腆支王（或云直史、國史亦作直支、姓氏錄曰腆支王、腆一作直、宋書梁書作餘映、通典作夫餘腆、）—（十九）久爾辛王（國史同）—（二十）毗有王（或云腆支王庶子、姓氏錄作比有王、又有魯王、松下見林云、魯當作毘有、宋書梁書作餘毗、）

（廿一）蓋鹵王（或云近蓋婁、諱慶司、東鑑曰、後改餘慶、東國歷代撮要云、蓋齒王、齒一作鹵、紀作加須利君、紀注亦作蓋鹵王、宋書梁書魏書作慶又餘慶、）—（廿五）武寧王斯麻（或云隆、梁書云餘隆、國史稱島君島王、亦號武寧王、韓史以爲牟太之第二子、紀註引百濟新撰、爲末多異母弟、今據紀本文及紀註、今案定爲蓋鹵之子、）

（廿二）文周王（或作汶洲國史亦然、齊書梁書作牟都、又省云都、宋書作餘都、姓氏錄、作文周王、又有都慕王二十四世孫汶淵王、淵洲之誤、韓史以爲蓋鹵之子、紀註曰汶洲王、蓋鹵王母弟也今據之）—（廿三）三斤王（或云壬乞、蓋三之誤、三國遺事曰、一作三乞、國史作文斤、）

昆支（紀作軍君或昆支王、紀註作崐支君、琨支君、或混支王子、姓氏錄作混伎王、宋書作餘昆、韓史曰文周王弟、是與文周共爲蓋鹵之子也然國史以爲蓋鹵之弟、姓氏錄亦云比有王男、今據之、）—（廿四）東城王牟大（或作摩帝、國史稱東城王末多、姓氏錄亦作末多、齊書作牟大、又省云大、梁書作牟太、又省云太、）

(二六)聖王明襛（襛或作禮、或作穠、國史梁書單名明、國史或稱聖明王、紀註曰、更名聖王、濟紀國史姓氏錄又云明王）

(廿七)威德王昌（國史同、濟紀又云昌王）

(廿八)惠王季（濟紀云、諱季、明王第二子、明王即聖王明也、東鑑則曰、百濟王昌薨、第二子季明立、是誤讀濟紀、以明屬惠王之名也、紀有王子惠、註云、王子惠威德王弟、蓋惠王也）

(廿九)法王宣（隋書以爲昌之子誤）

(三十)武王璋

(卅一)義慈王（國史漢史皆同）

(卅二)豐王

第十三章　新羅考

新羅建國ノ傳ハ、最モ荒誕ニシテ信ズベカラズ。先ヅ羅紀ニ、「始祖、姓朴氏、諱赫居世、前漢孝宣帝五鳳元年甲子四月丙辰即位、號居西干、時年十三、國號徐耶伐、先是朝鮮遺民、分居山谷之間、爲六村、一曰閼川楊山村、二曰突山高墟村、三曰觜山珍支村、四曰茂山大樹村、五曰金山加利村、六曰明活山高耶村、是爲辰韓六部、高墟村長蘇伐公、望楊山麓、蘿井傍林間、有馬跪而嘶、則往觀之、忽不見馬、只有大卵、剖之、有嬰兒出焉、則收而養之、及年十餘歲、岐嶷然夙成、六部人以其生神異推尊之、至是立爲君焉、辰人謂瓠爲朴、以初大卵如瓠、故以朴爲姓、居西干、辰言王」トアリ。閼川ハ、今東川ト云ヒ、慶尙道慶州府ノ東五里ニアリ。明活山ハ慶州府ノ東十一里ニアリ。六村ヲ稱シテ辰韓六部ト爲シタレドモ、實ハ辰韓十二國ノ一ニシテ、其ノ地ハ、皆慶州府ノ界內ニアリ。楊山蘿井ハ、東覽慶州府ノ古跡ニ「在府南七里」トアリ。次ニ始祖五年、（漢ノ宣帝甘露元年、）「龍見閼英井、右脇誕生女兒、老嫗見而異之、收養之、以井名名之、及長有德容、始祖聞之、納以爲妃、有賢行、能內輔、時人謂之二聖。」閼英井ハ、東覽ノ古跡ニ「在府南五里」トアリ。此等ノ怪誕ハ、羅紀ノ撰者モ、信ゼサル事ナレドモ、其ノ傳ヘノ舊キヲ以テ刪落セザル由ハ、第七章ニ云ヘリ。

始祖十九年、（漢ノ元帝永光五年、）「卞韓以國來降」トアルハ、後史誇張ノ言ナリ。是ノ時新羅ハ、未ダ辰韓諸國ヲモ統屬セザレバ、卞韓即チ弁辰諸國ヲ威服スベキ由アラズ。

同三十年、（漢ノ成帝河平元年、）「樂浪人將兵來侵、見邊人夜戶不扃、露積被野、相謂曰、此方民不相盜、可謂有道之國、吾儕潛師而襲之、無異於盜、得不愧乎、乃引退、」南解次次雄元年、（漢ノ平帝元始四年、）「樂浪兵至、圍金城數重、王謂左右曰、二聖棄國、孤以國人推戴、謬居於位、危懼如涉川水、今隣國來侵、是孤之不德也、爲之若何、左右對曰、賊幸有喪、妄以兵來、天必不祐、不足畏也、賊果退歸。」金城ハ、新羅ノ都城ナリ。東覽ノ古跡ニ「金城、在府東四里、始祖赫居世時所築、土城周二千四百七尺」トアリ。同十一年、（王莽天鳳元年、）「倭人遣兵船百餘艘、掠海上民戶、發六部勁兵以禦之、樂浪謂內虛、來攻金城甚急、夜有流星墜於賊營、衆懼而退云々、」儒理尼師今十三年、（漢ノ光武帝建武十二年、）「樂浪侵北邊、攻陷朶山城、」同十四年、（漢ノ建武十三年、）「高句麗王無恤襲樂浪滅之、其國人五千來投、分居六部、」同十七年、（漢ノ建武十六年、）「華麗不耐二縣人連謀、率騎兵犯北境、貊國渠帥、以兵要曲河西敗之、王喜與貊國結好。」當時樂浪郡ノ盛大ナルコトハ、新羅ノ抗敵スル所ニ非ザレバ、百濟ノ章ニ云ヘル如ク、此等ノ記事ハ、甚疑ハシ。

脫解尼師今即位（漢ノ建武中元二年、）ノ條ニ「脫解、本多波那國所生也、其國在倭國東北一千里、初其國王娶女國王女爲妻、有娠、七年乃生大卵、王曰、人而生卵不祥也、宜棄之、其女不忍、以帛裹卵、幷寶物置於櫝中、浮於海、任其所往、初至金官國海邊、金官人怪之不取、又至辰韓阿珍浦口、是始祖赫居世在位三十九年也、時海邊老母以繩引繫海岸、開櫝見之、有一小兒在焉、其母取養之、及壯身長九尺、風神秀朗、智識過人、或曰、此兒不知姓氏、初櫝來時、有一鵲飛鳴而隨之、宜省鵲字以昔爲氏、解韞櫝而出宜名脫解云々」、又脫解尼師今九年（漢ノ明帝永平八年、）「王夜聞金城西始林樹間有鷄鳴聲、遲明遣瓠公視之、有金色小櫝掛樹枝、白鷄鳴於其下、瓠公還告、王使人取櫝開之、有小男兒在其中、姿容奇偉、上喜謂左右曰、此豈非天遺我以令胤乎、乃收養之、及長聰明多智略、乃名閼智、以其出於金櫝、姓金氏、改始林名雞林、因以爲國號。」始林ハ、東覽慶州府ノ古跡ニ「在府南四里」トアリ。閼智ガ六世ノ孫味鄒ニ至リ、沾解王薨ジテ子ナカリシ時、國人之ヲ立テタリ。コレ金氏ノ王ノ始メナリ。」

新羅ノ王家ナル朴昔金三氏ノ始祖ニ關スル傳說ハ、右ノ如ク誕妄ナレバ、其ノ建國ノ由來ハ、實ニ邈然トシテ考フベキ由ナシ。姓氏錄新良貴氏ノ條ニ、鸕鷀草葺不合ノ尊ノ御子稻飯ノ命、新良ノ國王ト爲リマセリト云フ傳說アルハ、確實ナル事跡トハ見エザレドモ、（委シクハ太古外交考ニ云フベシ。）若カヽル事アリトスレバ、朴昔金三氏ノ中、何氏ノ祖ゾ、稻飯ノ命ニハマシマスベキ。金氏ノ裔（海原ノ造ハ、金加志毛禮ノ後、眞城ノ史ハ、金氏、尊ノ後、宇努ノ連ハ、新羅王子金庭興ノ後。）ハ、孰レモ姓氏錄諸蕃ノ部ニ入リタレバ、皇別ナル新良貴氏ト別族ナルコト、論ナシ。新羅國王ノ子天ノ日槍ノ命歸化ノ時代ニ關シテハ、種々ノ說アレドモ、（此ノ事モ太古外交考ニ言フベシ。）大抵稻飯ノ命ノ韓地ニ渡リマセルヨリハ、後ニシテ、金氏ノ祖味鄒王ガ始メテ位ニ即キシ時（紀元九百二十二年、魏ノ元帝景元三年、）ヨリハ前ナレバ、日槍ハ、昔氏ノ王ノ子ナルベシ。日槍ノ後ナル三宅ノ連、橘守、絲井ノ造等、皆姓氏錄諸蕃ノ部ニアリテ、昔氏モ、亦稻飯ノ命ノ御裔ニ非ザレバ、稻飯ノ命ニ當ツベキ者ハ、朴氏ノ始祖ノミナリ。

隋書東夷傳新羅ノ條ニ「其王本百濟人、自海逃入新羅、遂王其國」ト云ヘルハ、朴氏ヲ謂ヘルカ、昔氏ヲ謂ヘルカ、知ル可カラザレドモ、假ニ稻飯ノ命ヲ以テ理朴氏ノ祖ト爲セバ、百濟ヨリ入リタルハ、昔氏ノ祖脫解尼師今ナルベシ。駕洛國記ニ「忽有琓夏國含達王之夫人、妊娠彌月生卵、卵化爲人、名曰脫解、從海而來、身長三尺、頭圍一尺、悅焉詣闕、語於（首露）王云、我欲奪王之位、故來耳、王答曰、天命我俾即于位、將令安中國而綏下民、不敢違天之命以與之位、又不敢以吾國吾民、付囑於汝、解云、若爾、可爭其術、王曰、可也、俄頃之間、解化爲鷹、王化爲鷲、又解化爲雀、王化爲鸇、于此際也、寸陰未移、解還本身、王亦復然、解乃伏膺曰、僕也適於角術之場、鷹之於鷲、雀之於鸇獲免焉、此蓋聖人惡殺之仁而然乎、僕之於王、爭位良難、便拜辭而出、到麟郊外渡頭、將中朝來泊之本道而行、王竊恐滯留謀亂、急發舟師五百艘而追之、解奔入鷄林地界、舟師盡還、事記所載、多異與新羅」トアリ。記事ノ誕妄ナルコトハ、羅紀ニ異ナラザレドモ、脫解ノ自ラ駕洛ニ來リ、又鷄林ニ奔レリト云ヘルハ、大卵ヲ納レタル韞櫝ノ、金官及辰韓ニ漂ヒ至レリト云ヘル羅紀ノ說ヨリハ、稍事實ニ近カランカ。琓夏國ハ、羅紀ニハ、多波那國ト云ヒ、三國遺事ニハ、龍城國ト云ヒテ、其ノ註ニ「亦云正明國、或云琓夏國、琓夏或作花厦國、龍城在倭東北一千里」ナドアレドモ、イヅコヲ指セルカ、明カナラズ。脫解ハ、蓋百濟人ニシテ、海路ヨリシテ新羅ニ入リシヲ、後人、其ノ脫解ト云ヘル名ノ漢字ニ附會シテ、解韞櫝而出ト云ヘル奇談ヲ造リタル者ナルベシ。落合直澄氏ノ紀年私按ニ「多波那國ハ多知馬國ニテ即但馬ノ國ナリ。倭國東北一千里トアル倭國ハ、筑前ノ奴國ヲ指セルナルベシ。東北一千里トアルハ當レリ」ト云ヒ、吉田東伍氏ノ日韓古史斷ニ「多婆那國、筑紫國名、今肥後玉名郡、古稱玉杵名邑」トアレドモ、共ニ徵證ナキ推シ當テナリ。

新羅ハ、東韓ノ一小國ヨリ起リテ、數百年ノ間ニ、次第ニ諸旁國ヲ併呑シタル有樣ハ、三國史記ニ依リテ略伺ヒ知ルコトヲ得ベシ。東鑑卷之一ニ、壬寅漢ノ光武帝建武十八年新羅ノ儒理王十九年、「新羅伐伊西國滅之」トアリ。伊西國ハ、今ノ清道郡ニシテ、慶州府ノ東南ニアリテ、接壤ノ地ナリ。此ノ事ハ、三國史記ニハ見エズ。東鑑ハ、何ニ依リタルニヤ。羅紀儒禮尼師今ノ時「伊西古國來攻金城云々」ノ事アルニ據レバ、伊西國ハ、儒理ノ時ニ既ニ滅ビタリトハ見エズ。儒理ト儒禮トハ、字異ニシテ音同ジキニヨリ、東鑑ハ、後ノ儒禮ノ時ノ事ヲ、誤リテ前ノ儒理ノ時ニ記シタルニ非ラズヤ。

三國史記列傳第四ニ、「居道、失其族姓、不知何所人也、仕脫解尼師今爲干、時于尸山國、居漆山國、介居隣境、頗爲國患、居道爲邊官、潛懷併呑之志、每年一度、集群馬於張吐之野、使兵士騎之馳走、以爲新羅常事、不以爲怪、於是起兵馬、擊其不意、以滅二國」トアリ。居漆山國ハ、東覽東萊縣ノ沿革ニ「古萇山國、或云萊山國、新羅取之、置居漆山郡」トアリテ、本萇山或ハ萊山ト云ヘル國ナルヲ、新羅ノ郡名ヲ以テ追稱シタルナリ。張吐之野ハ考フベカラザレドモ、慶州以南東萊以北ノ原野ナルベシ。于尸山國ハ、「三國史記地理志ニ「有隣郡、本高句驪于尸郡」トアルニ由リテ、今ノ寧海都護府ナリト云フ說アレドモ、寧海ハ、慶尙道ノ北境ニシテ、地理合ハザレバ、蓋東萊ノ隣近ニシテ、機張縣蔚山郡ノ邊ナルベシ。

蔚山郡ハ、地理志ニ「河曲一作四縣、婆娑王時、取屈阿火村置縣、景德王改名、今蔚州」トアル處ニテ脫解ノ次ナル婆娑ノ時ニ新羅ノ縣トナレルナリ。

羅紀婆娑尼師今二十三年、漢和帝永元十四年、音汁伐國與悉直谷國爭疆……、王怒、以兵伐音汁伐國、其主與衆自降、悉直押督二國王來降。」音汁伐國ハ地理志ニ「音汁火縣、婆娑王時、取音汁伐國置縣、今合屬安康縣」トアリ。今モ安康縣ト云ヒ、慶州府ノ屬縣トナリテ、府ノ北三十里ニアリ。悉直谷國ハ、地理志ニ「三涉郡、本悉直國、婆娑王世來降」トアリテ、今ノ江原道三涉都護府ナリ。押督國ハ、地理志ニ「獐山郡、祇味王時、伐取押梁一作督小國置郡、景德王改名」トアル所ニシテ、今ノ慶尙道慶山縣ナリ。祇味王ハ、即祇摩尼師今ニシテ、婆娑ニ嗣ギタル王ナリ。奈解尼師今ノ所ニ獐山城ト見エタルハ、後ノ名ヲ以テ追書シタルニテ、即押梁郡ナルベシ。同二十五年漢ノ永元十六年、悉直叛、發兵討平之、徙其餘衆於南鄙。」

同二十九年、漢ノ安帝永初二年、「遣兵伐比只國多伐國草八國併之。」比只國ハ、今ノ昌寧縣ニシテ、洛東江ノ左岸ニアリ。多伐國ハ、沾解尼師今十五年、魏ノ元帝景元二年、「築達伐城」トアルト同所ナリ。東覽大丘都護府ノ沿革ニ、「本高句麗達勾火縣、一作達弗城」其ノ城郭ニ、「達城在府西四里、石築云々」トアリテ、慶尙道ノ中央ノ地ナリ。但東覽ニ高句麗トアルハ、新羅ノ誤リナリ。地理志ニモ高勾麗ノ舊縣トハ云ハズ。草八國ハ、今ノ草溪縣ニシテ洛東江ノ右岸ニアリ。

地理志ニ「奈靈郡、本百濟奈已郡、婆娑王取之、景德王改名」トアレドモ、羅紀ニハ見エズ。此ノ地ハ今ノ榮川郡ニシテ、百濟ニテハ、嘗テ榮川ノ地方ヲ領シタルコト無キガ故ニ、東覽榮川郡ノ沿革ニハ「本高句麗奈已郡云々」ト改メタリ。然レドモ句麗ノ疆域モ、婆娑王ノ頃ハ樂浪郡ノ北ニ限ラレタレバ、コノ地方ヲ領セザルコト明カナリ。若句麗ニテ之ヲ領シタルコトアリトセバ、其ハコレヨリ二三百年後ノ事ナルベケレバ、婆娑王取之トハ云フベカラズ。

祇摩尼師今十四年、漢ノ安帝延光四年、「春正月、靺鞨大入北境、殺掠吏民、秋七月又襲大嶺柵、過於泥河云々。」大嶺ハ、江原慶尙二道ヲ分界セル山脈ナリ。次ノ長嶺モ、同ジ、逸聖尼師今四年、漢ノ順帝永和二年、「靺鞨入塞、燃長嶺五柵。」同五年「北巡、親祀太白山。」太白山ハ、慶尙道奉化縣ノ北七十三里、江原道三涉府ノ西百二十里ニアリ、新羅ノ世、北岳トシテ中祀ニ載セタリ。同七年、「立柵長嶺、以防靺鞨。」

同十三年、（漢ノ質帝本初元年、）「押督叛、發兵討平之、徙其餘衆於南地。」地理志ニ、「祇味王時、伐取押梁小國」トアルハ、此ノ役ヲ云ヘルナリ。

阿達羅尼師今三年、（漢ノ桓帝永壽二年、）「開雞立嶺路。」雞立嶺ハ、俗ニ麻骨岾ト云ヒ、忠淸道延豐縣ノ北四十三里ニアリ、尙州ヨリ忠州ニ至ル道ナリ。同五年、（漢ノ桓帝延熹元年、）「開竹嶺。」竹嶺ハ、慶尙道豐基郡ノ西二十四里ニアリ。安東府ヨリ忠州ニ至ル道ナリ。此等ノ文ニ據レバ、後漢ノ末ニハ、新羅ノ勢力既ニ慶尙道ノ北境ニ達シタル趣ナリ。

伐休尼師今二年、（漢ノ獻帝中平二年、）「伐召文國。」召文國ハ、今ノ義城縣ニシテ。押督達伐二國ノ北ニアリ。東覽義城縣ノ古跡ニ、「召文國、古基在縣南二十五里、今稱召文里」トアリ。

助賁尼師今二年、（魏ノ明帝太和五年、）「以伊湌于老爲大將軍、討破甘文國、以其地爲郡。」甘文國ハ、今ノ開寧縣ニシテ、星州ノ北ニアリ。東覽開寧縣ノ古跡ニ、「柳城北。東院傍。甘文國時宮闕基猶在」トアリ。

同七年、（魏ノ明帝靑龍四年、）「骨伐國主阿音夫率衆來降、賜第宅田莊安之、以其地爲郡。」骨伐國ノ古址ハ、永川郡ノ東南五里ニアリ、慶州府ノ西隣ナリ。

昔于老ノ傳ニ云。「沾解王在位、沙梁伐國舊屬我、忽背而歸百濟、于老將兵往討滅之。」沾解ハ、助賁ニ嗣ギタル尼師今ニシテ、曹魏ノ末世ニ當レリ。沙梁伐國ハ沙伐トモ沙弗トモ云フ。今ノ尙州ナリ。東覽尙州牧ノ古跡ニ「沙伐國古城、在屛風山下、城傍有丘隆然、世傳沙伐王陵」トアリ。（屛風山ハ、州ノ東十里ニアル山ナリ。）

コヽニ至リテ、慶尙道ノ地ハ、弁辰ト聞エタル加耶諸國ノ外ハ、大抵新羅ノ所領ト爲レル趣ナリ。魏志ニ、辰韓十二國ヲ列擧シテ、別ニ斯盧國ヲ重ゼザルニヨリテ考フレバ、新羅ノカク强大ニナレルハ、晉ノ世ヨリ後ノ事ナルヲ、史筆ヲ執レル者、夸大自尊ノ心ヨリシテ、此等ノ事實ヲ漢魏ノ世ニ繰リ上ゲテ記シタルニハ非ズヤ。儒禮尼師今十四年、（晉ノ惠帝元康七年、）ノ條ニ「伊西古國來攻金城、我大擧兵防禦、不能攘、忽有異兵來、其數不可勝紀、人皆珥竹葉、與我軍同擊賊破之、後不知其所歸、人或見竹葉數萬積於竹長陵、由是國人謂先王以陰兵助戰也」トアリ。竹長陵ハ、儒禮ノ前代ナル味鄒尼師今ノ陵ナリ。此ノ文ニ據レバ、晉ノ世ニ至リテモ、辰韓ノ內部ニ猶自立ノ强敵ノ殘存セシナリ。且魏志ニ、「其十二國屬辰王、辰王、常用馬韓人作之、世世相繼」トアルヲ、羅紀ニハ、辰王ノ事ヲ初ヨリ一語モ云ハザルハ、訝シキ事ノ極リナリ。

又新羅百濟ノ關係ヲ考フルニ、羅紀脫解尼師今七年、（百濟ノ多婁王三十七年、漢ノ明帝永平六年、）「百濟王拓地至娘子谷城、遣使請會、王不行」トアリテヨリ、二國ノ間連年ノ攻戰アリシコトヲ記シ、同八年、「秋八月、百濟遣兵攻蛙山城、冬十月、又攻狗壤城、王遣騎三千擊走之、」同十年「百濟攻取蛙山城留二百人居守、尋取之、」同十四年、「百濟來侵、」同十八年、「百濟寇邊、」同十九年、「百濟攻西鄙蛙山城拔之、」同二十年、（漢ノ章帝建初元年、）「遣兵伐百濟復取蛙山城、自百濟來居者二百餘人、盡殺之」ナドアリ。娘子谷城ハ、地理志ニ「西原、一云娘臂城、一云娘子谷」トアリテ、今ノ忠淸道淸州ナリ。蛙山城ハ、東覽忠淸道報恩縣ノ山川ニ「蛙山在縣內」トアル、コレナルベシ。脫解ノ時ハ、新羅ノ疆域ハ、慶州府以東ニ限リ、其ノ西隣ニハ、音汁伐、押督、達伐、召文、甘文、沙梁伐諸國アリテ、百濟トノ間ヲ阻隔シタレバ、蛙山城ハ、新羅ノ西鄙トナルベキ由ナク、又百濟ノ南境ハ娘子谷ニ至レリトモ、二國疆場ノ爭ノ起ルベキ筈ナシ。コレラモ、後代ノ事實ヲ徙シテ古傳トナシタルナリ。

次ニ婆娑尼師今二十六年、（百濟ノ己婁王二十九年、漢ノ和帝元興元年、）「百濟遣使請和、」祇摩尼師今二年、（百濟ノ己婁王三十七年、漢安帝永初七年、）「百濟遣使來聘、」同十四年、（漢ノ安帝延光四年、）靺鞨入寇ノ時、「王移書百濟請救、百濟遣五將軍助之、賊聞而退、」阿達羅尼師今十二年、（百濟ノ蓋婁王三十八年、漢ノ桓帝延熹八年、）「阿湌吉宣謀叛發覺懼誅亡入百濟、王移書求之、百濟不許、王怒、出師伐之、百濟嬰城守不出、我軍糧盡乃歸、」同十四年、（百濟ノ肖古王二年、漢ノ桓帝永康元年、）「秋七月、百濟襲破國西二城、虜獲民口一千而去、八

月、命一吉湌興宣、領兵二萬、伐之、王又率騎八千、自漢水臨之、百濟大懼還其所掠男女乞和。」同十七年、（漢ノ靈帝建寧三年、）「百濟寇邊、」伐休尼師今五年、（百濟ノ肖古王廿三年、漢ノ靈帝中平五年、）「百濟來攻母山城、命波珍湌仇道出兵拒之。」母山城ハ東覽ニ「雲峰縣、本新羅母山縣」トアル處ト聞ユレドモ、雲峰縣ハ、全羅道ノ東邊ナレバ、コノ頃ハ、新羅ノ地ニ非ザリシコト明カナリ。同六年「仇道與百濟戰於狗壤勝之、殺獲五百餘級」同七年、（漢ノ獻帝初平元年、）「百濟襲西境圓山鄕、又進圍缶谷城、仇道率勁騎五百擊之、百濟佯走、仇道追及蛙山、爲百濟所敗、王以仇道失策、貶爲缶谷城主、」奈解尼師今四年、（百濟ノ肖古王三十四年、漢ノ獻帝建安四年）「百濟侵境、」十九年、「百濟來攻國西腰車城、殺城主薛夫、王命伊伐湌利音、率精兵六千、伐百濟、破沙峴城、」同二十三年、（百濟ノ仇首王五年、）「百濟人來圍獐山城、王親率兵出擊走之。」獐山城ハ、押督ノ故地ナルベキコト、前ニ云ヘリ。同二十七年、（魏ノ文帝黃初三年、）「百濟兵入牛頭州、伊伐湌忠萱將兵拒之、至態谷爲賊所敗云々。」牛頭州ハ、今ノ江原道春川府ナリ。濟紀始祖ノ所ニ樂浪牛頭山城トアリテ、樂浪郡ノ界內ナリシガ、今ハ新羅ノ地トナリシ趣ニテ、濟紀是ノ年ノ處ニハ「新羅牛頭鎭」トアリ。同二十九年、「秋七月、伊伐湌連珍、與百濟戰烽山下破之、殺獲一千餘級、八月築烽山城、」助賁尼師今十一年、（百濟ノ古爾王七年、魏帝曹芳正始元年、）「百濟侵西邊、」沾解尼師今九年、（百濟ノ古爾王二十二年、魏帝曹髦正元二年、）「秋九月、百濟來侵、一伐湌翌宗逆戰於槐谷西、爲賊所殺、冬十月、百濟攻烽山城、不下、」同十五年、（魏ノ元帝景元二年、）「百濟遣使請和、不許、」味鄒尼師今五年、（百濟ノ古爾王三十三年、晉ノ武帝泰始二年、）「百濟來攻烽山城、城主直宣率壯士二百人出擊之賊敗走、」同十一年、「百濟侵邊、」同十七年、（晉ノ武帝咸寧四年、）「百濟兵來圍槐谷城、命波珍湌正源領兵拒之、」同二十二年、（晉ノ武帝太康四年、）「百濟侵邊、圍槐谷城、命一吉湌良質領兵禦之、」儒禮尼師今三年、（百濟ノ古爾王五十三年、晉ノ太康七年、）「百濟遣使請和。」阿達羅十二年ヨリ味鄒二十二年マデ百十九年ノ間、兩國ノ攻戰ヲ記セルコト、此ノ如ク詳カナルニ、儒禮三年百濟請和ヨリ後、眞興王ノ初年マデ二百六十餘年ノ間ハ、兩國交涉ノ事甚少キハ、何故ゾ。縱令和親ノ際ナリトモ、疆土相接シタレバ、記スベキ事モ多カルベキヲヤ。總テ三國本紀ノ疎略ナルハ、其ノ古記ノ完カラザルガ故ニシテ、怪ムニ足ラザレドモ、魏晉以前、即チ三國ノ有史以前ノ世ヲ追記セル者ニシテ、右ノ如ク詳密ナルハ、却テ疑フベシ。三國遺事年表ニ「訖解王代、百濟兵始來侵」トアルハ、羅紀濟紀ノ記載ト全ク牴牾スレドモ或ハ却テ事實ニ合ヘリヤモ知ルベカラズ。

右ノ文中ニ見エタル母山城、狗壤、圓山鄕、缶谷城、腰車城、沙峴城、熊谷、烽山城、槐谷城ナドハ、何レモ兩國境上ノ地トハ聞ユレドモ、今皆考フベカラズ。當時辰韓諸國ハ、未ダ盡クハ新羅ニ併セラレズシテ、兩國ノ間ニ介マリタレバ、兩國、境ヲ接シテ相爭ヘルハ、是ヨリ後ニアルベキコトナルヲ、漢魏ノ世ノ事跡トシテ記載シタルハ信ジ難シ。

又助賁尼師今十六年、（高句麗ノ東川王十九年、魏帝曹芳正始六年、）「高句麗侵北邊、于老將兵出擊之、不克退保馬頭柵。」此ノ時樂浪帶方ハ、猶支那ニ屬シ、句麗ト新羅トハ、相去ルコト甚遠ケレバ、句麗人ハ、二郡ヲ踰エテ新羅ヲ侵スコトアルベカラズ。且魏ノ正始六年ハ、母丘儉ノ再タビ句麗ヲ征シタル年ニシテ、東川王位宮ノ逃竄シテ北沃沮レル時ナレバ、南侵スベキ餘力ナキコト、明カナリ。基臨尼師今三年ニ、（晉ノ惠帝永康元年、）「巡幸比列忽……、至牛頭州、望祭太白山、樂浪帶方兩國歸服。」比列忽ハ、地理志ニ「朔庭郡、本高句麗比列忽郡」ト、アリテ、今ノ咸鏡道安邊都護府ナリ。コヽナル太白山ハ新羅ノ北岳ニハ非ズシテ、長白山ヲ指セルニ似タリ。此ノ時樂浪帶方ハ、句麗ニ迫ラレテ、威勢甚衰ヘタレドモ、東韓ノ小國ニ服屬シタルコトハ、アルベカラズ。コハ、新羅王ノ二郡ト好ヲ修メタルコトヲ兩國歸服トハ記シタルナリ。

漢史ニ新羅ノ事ヲ記シタルハ、魏志ニ斯盧國ノ名見エタルノミニシテ、後漢晉宋南齊魏周諸書ニ皆見エズ。唯晉書前秦載記、太元五年符洛謀反ノ處ニ、薛羅トアルハ即新羅ナルコト、第十一章ニ云ヘリ。又其ノ翌年

ノ處ニ、「鄯善車師大宛嚈噠天竺康居于寘及海東諸國、凡六十有二王、皆遣使貢其方物」（資治通鑑ニハ「東夷西域六十二國入貢于秦」）トアル海東諸國ノ中ニハ、新羅モ加ハレリト見エテ、杜氏通典邊防新羅ノ處ニ、「符堅時、其王樓寒遣使衞頭朝貢、堅曰、卿言其海東之事、與古不同、何也、答曰亦猶中國時代變革、名號改易、今焉得同」トアリ。然ルニ此ノ時新羅ノ王ハ、奈勿尼師今ニシテ、其ノ前後ニモ樓寒ト云ヘル王ナケレバ、樓寒ハ、奈勿ノ別名カ。又新羅ノ王號ハ、儒理以來奈勿實聖マデハ、尼師今ト稱セシガ、奈勿ノ子訥祇ガ實聖ニ代リテヨリ四代ノ間ハ、麻立干ト稱セリ。樓寒ハ、立干ト音近ケレバ、支那人ハ、奈勿ノ朝貢ヲ其ノ後代ノ王號ト誤リタルニヤ。又三國遺事年表ニ、奈勿麻立干、實聖麻立干トアレバ、麻立干ノ號ハ、實ニ奈勿ヨリ始マリタルニヤ。羅紀ニハ、此ノ朝貢ノ事ヲ、樓寒ノ名ニ拘ラズシテ、奈勿尼師今二十六年即チ太元六年ノ處ニ記セリ。

漢史ニ新羅傳ノ始メテ見エタルハ、梁書諸夷傳ニシテ、「新羅者、其先辰韓種也云々、辰韓始有六國、稍分爲十二、新羅則其一也云々、魏時曰新盧、宋時曰新羅、或曰斯羅、其國小不能自通使聘、普通二年、王募名秦、始使使隨百濟、奉獻方物云々、無文字、刻木爲信、語言待百濟而後通焉」ト云ヘリ。新羅ハ、韓音しるらニシテ、其ノ文字ハ、種々ニ書キ來リシヲ、新羅ノ智證王四年、（武烈天皇五年、梁ノ武帝天監二年、）始メテ新羅ノ字ニ定メタリ。羅紀ニ「群臣上言、始祖創業以來、國名未定、或稱斯羅、或稱斯盧、或言新羅、臣等以爲新者德業日新、羅者網羅四方之義、則其爲國號宜矣、又觀自古有國家者、皆稱帝稱王、自我始祖立國、至今二十二世、但稱方言未正尊號、今群臣一意謹上號新羅國王、王從之」トアリ。サレバ斯盧斯羅薛羅新盧新羅、孰レモ同言ノ異譯ナリ。羅紀始祖赫居世即位ノ條ニ「國號除耶伐」トアルヲ、三國遺事ニハ徐羅伐ト書ケリ。（東鑑ハ、遺事ニ從ヘリ。）耶ト羅ト相通ズルハ、韓音ノ常ニシテ、加耶（羅紀）ヲ駕洛（三國遺事）加羅（宋書南齊書及日本紀）加良（三國史記强首傳）ト書キ、安邪（魏志東夷傳）ヲ阿羅（東鑑）安羅（日本紀）ト書キ、大耶（羅紀）ヲ大良（東鑑）多羅（日本紀）ト書ケルガ如キモ、其ノ例ナリ。徐羅ハ、即斯羅ニシテ、伐ハ、新羅ノ地名ニ多ク見ユル語尾、百濟ノ夫里、高句麗ノ忽ノ如シ。東覽二十「蔚山郡、本屈阿火村」ノ註ニ「新羅地名、多稱火、火乃弗之轉、弗又伐之轉」トアリ。國史ニハ新羅ト書キテ、しらきト訓メリ。しらきノきハ伐ノ轉レル火ノ又轉リタルニヤ。姓氏錄右京皇別ニ新良貴ト云フ姓アリ。欽明紀十五年ノ處ニ新羅、古事記允恭天皇ノ段又姓氏錄新良貴氏ノ條ニ、新良トモ書キ、出雲風土記ニ、栲衾志羅紀乃三埼トモ見ユ。古事記傳（三十ノ五十九丁）「或人、新羅ハ斯良と訓べし。岐は、具爾の約りたるにて、斯良岐は、新羅國の謂なれば、斯良岐之國とは云ふべきに非ずと云へり。是レも、一わたりいはれたることなり。然れども皇國言に、正しく斯良と云る例を、未ダ見ず、又百濟高麗を久陀良岐古麻岐と云る例もなければ、斯良のみ、國を岐と云むも、いかゞなり。然れば岐は、たとひ本は國の謂にもあれ、久陀羅古麻と並べて、斯良岐と云ヒ來つれば、斯良岐之國と云むに、なてふことかあらむ。國ノ名の淡海は、即淡海なれども、其海をばあふみの海と云るに非ずや。萬葉三（五十四丁）ニ、栲角乃新羅國從云々とあるも、シラギノクニユとこそ訓べけれ。シラノクニヨリと訓マむは、いかがなり」トアリ。又飯田武鄕氏の日本紀通釋に、「出雲風土記に志羅紀、萬葉十五に新羅奇など所見たれば、紀ノ字、淸て訓べきなり」ト云ヘルモ、然ルベキコトナリ。又播磨ノ國風土記ニ飾磨ノ郡ニ新羅訓村ト云フ所アリテ、「所以號 新良訓者、昔新羅國人來朝之時、宿於此處、故號新羅訓」ト見エ、神名式ニ、コノ同ジ郡ニ白國ノ神社ト云フアリテ、新羅人ヲ祭レル社ト聞ユレバ、しらきハ、モトしらくにトモ云ヘルニテ、きハ、くにノ約マレル音ナルコト著シ。

普通二年（繼體天皇十五年）ハ、新羅ノ法興王金原宗ノ八年ナリ。原宗ノ名ヲ梁書ニ募名秦ト書キタルハ、何故ナルカ、考ヘ得ズ。南史通典冊府元龜ニハ、皆「王姓募名秦」（南史ハ、秦ヲ泰ニ作リ、通典ハ募ヲ慕ニ作レリ）トテ、募ヲ姓トシタルハ、初代七王ノ姓ナル朴ノ字ト音近ケレドモ、當時ノ新羅王ハ金氏ナレバ合ハズ。「語言待百濟而後通焉」ト云ヘルハ、サモ

アルベケレドモ、梁ノ世ニ當リテ、「無文字」ト云ヘルコトハ、イカヾ。三國ノ文學ノ事ハ第十五章ニ云フベシ。隋書東夷傳ニ云、「魏將毌丘儉討高麗破之、奔沃沮、其後復歸故國、留者遂爲新羅焉、故其人雜有華夏高麗百濟之屬、兼有沃沮不耐韓獩之地、其王本百濟人、自海逃入新羅、遂王其國、傳祚至金眞平、開皇十四年、遣使貢方物、高祖拜眞平爲上開府樂浪郡公新羅王、其先附庸於百濟、後因百濟征高麗、高麗人不堪戎役、相率歸之、遂致强盛、因襲百濟、附庸於迦羅國云々。」新羅ハ。辰韓十二國ノ一ニシテ、魏志ニ旣ニ其ノ名ヲ記シタレバ、毌丘儉ニ討チ破ラレタル高麗人ヨリ出デタリト云フハ、非ナリ。新羅ニ漢人句麗人百濟人ノ雜リタルハサル事ナレドモ、沃沮不耐ノ地ヲ有ツト云フハ、當ラズ。二所ハ、皆蓋馬大山ノ東、今ノ咸鏡道ノ内ニアリテ、後漢ノ末ヨリ高句麗ノ地トナレリ、羅紀ニ記シタル始祖夫妻及昔金二家ノ所出ノ談ハ、何レモ怪談ニシテ、信ズルニ足ラザレバ、其王本百濟人、自海逃入新羅ト云ヘル說、却テ其ノ實ヲ得タルヤモ知ルベカラズ。

金眞平ハ、羅紀ノ眞平王白淨（白ハ東鑑ニ伯ニ作レリ。）開皇十四年（推古天皇二年）ハ、眞平王ノ十四年ナリ。北史（九十四）異域傳ニハ「傳世三十至眞平」トアレドモ、羅紀ニ依レバ、眞平王ハ、第二十六代ノ主ナリ、羅紀ノ上代ノ世系年紀ハ、疑ハシキ者ナレバ、實ニ傳世三十ナルヲ、羅紀ハ、四王ヲ脫シタルカ。或ハ實ニ二十六代ナルヲ、北史ハ、成數ヲ擧ゲテ三十ト云ヘルニヤ。孰レトモ定メ難シ。

其先附庸於百濟トハ、百濟ト與國タリシコトヲ云ヘルニテ、其ノ實ハ附庸ト云フキベニハアラザレドモ、國小キガ上ニ、自ラ支那ニ達シタルコト無キ故ニ、支那ニテハ、附庸ト看做シタルナリ。新羅百濟ノ與國タリシコトハ、羅紀ニ儒禮尼師今三年、百濟遣使請和トアリテヨリ、訖解尼師今二十八年、（百濟ノ比流王二十四年、晉ノ成帝咸康三年、）「遣使聘百濟、」奈勿尼師今十一年、（百濟ノ近肖古王二十一年、晉帝奕太和元年、）「百濟人來聘、」同十三年「百濟遣使進良馬二匹」ナドアリ。

同十八年、（晉ノ孝武帝寧康元年、）「百濟禿山城主率人三百來投、王納之、分居六部」トアル事ニツキテ、二國ノ間ニ問答アリシハ、幾分カ交情ヲ害シタリト見エテ、實聖尼師今二年、（百濟ノ阿莘王十二年、晉ノ安帝元興二年、）「百濟侵邊」ト見エタリ。納祇麻立干十七年、（百濟ノ毗有王七年、宋ノ文帝元嘉十年、）「百濟遣使請和、從之」ヨリ、二國復和親シ、其ノ明年ニハ「春二月、百濟王送良馬二匹、秋九月、又送白鷹、冬十月、王以黃金明珠、報聘百濟」トアリテ、コノ親交ハ、百廿餘年ノ間繼續シテ、常ニ句麗ヲ以テ公敵トセリ。同卅九年（百濟ノ蓋鹵王元年、宋ノ孝武帝孝建二年、）「高句麗侵百濟、王遣兵救之。」慈悲麻立干十七年、（百濟ノ蓋鹵王二十年、宋ノ劉昱元徽二年、）「高句麗王巨連親率兵攻百濟、百濟王慶遣子文周、求援、王出兵救之、未至、百濟已陷、慶亦被害。」照知麻立干三年、（百濟ノ東城王三年、齊ノ高帝建元元年、）「高句麗與靺鞨入北邊、取狐鳴等七城、又進軍於彌秩夫、我軍與百濟加耶援兵、分道禦之、賊敗退云々。」彌秩夫ハ、今ノ慶尙道興海郡ナリ。同六年（齊ノ武帝永明二年）「高句麗侵北邊、我軍與百濟合擊於母山城下大破之」同七年、「百濟來聘、」同十五年、「百濟王牟大、遣使請婚、王以伊伐飡比智女送之」同十六年、（齊ノ明帝建武元年、）「將軍實竹等、與高句麗戰薩水之原、不克、退保犬牙城、高句麗兵圍之、百濟王牟大、遣兵三千救解圍」同十七年、「高句麗圍百濟雉壤城、百濟請救、王命將軍德智、率兵以救之、高句麗衆潰、百濟王遣使來謝」法興王九年、（百濟ノ武寧王二十二年、梁ノ武帝普通三年、）「高句麗與穢人攻百濟獨山城、百濟請救、王遣將軍朱珍、領勁兵三千擊之、殺獲甚衆」ナドアリ。然ルニ同十一年、（百濟ノ聖王二年）「春正月、百濟拔高句麗道薩城、三月、高句麗陷百濟金峴城、王乘兩國兵疲、命伊湌異斯夫、出兵擊之、取二城增築、留甲士一千戍之」トアリテ、新羅ノ渝盟ニヨリテ、二國ノ和親復破レタリ。

「百濟征高麗」トハ、二國互ニ侵伐セシ事ヲ云ヘルニテ、此ノ事ハ、百濟近肖古王二十四年、（高句麗ノ故國原王三十九年、晉帝奕太和四年、）太子近仇首、句麗ノ寇ヲ擊破リシヨリ始マリ、阿莘王七年、（高句麗ノ廣開土王七年、晉ノ安帝隆安二年、）マデ三十年ノ間、攻戰十餘度ニ及ビ互ニ勝敗アリ。其ノ後七十一年、蓋鹵王十五年、（高句麗ノ長壽王五十七年、宋明帝泰始九年、）「遣將侵高句麗南鄙、」同二十

一年、（宋帝劉昱元徽三年、）ニ至リ、百濟大敗シ、蓋鹵王ハ、害ニ遇ヒ、國殆ト滅ビントシ、之ニ繼ギテ東城王武寧王聖王ノ三代、又各兩三回ノ攻戰アリキ。

「高麗人不堪戎役、相率歸之」ト云ヘルコトハ、韓史ニ見エズ。濟紀阿莘王八年、（晉ノ隆安三年）「秋八月、王欲侵高句麗、大徵兵馬、民苦於役、多奔新羅、戶口衰滅、」毗有王廿一年、（宋ノ文帝元嘉二十四年、）「秋七月、旱、穀不熟、民饑、流入新羅者多、」東城王十三年、（齊ノ武帝永明九年、）「秋七月、民饑、亡入新羅者六百餘家、」武寧王二十一年、（梁ノ武帝普通二年、）「秋八月、蝗害穀、民饑、亡入新羅者九百戶」ナド云ヘル事ヲ誤リ傳ヘタルニヤ。北史ハ、「高麗人」ノ三字ヲ除キテ、百濟人ノ新羅ニ歸シタルコト、爲セリ。

「遂致强盛、因襲百濟」ハ、眞興王十二年、（百濟ノ聖王二十九年、梁ノ簡文帝太寶二年、）百濟ト共ニ句麗ヲ擊チ破リタル後、密ニ句麗ト連和シテ、百濟ノ東北鄙ヲ攻メ取リシ事ヲ指セルナリ。

加羅國ハ、三國史記ノ加耶國、國史ノ意富加羅國、一名任那國ニシテ、法興王十九年、（梁ノ武帝中大通四年、）其ノ王金仇亥、新羅ニ降附シタレバ、眞興王百濟ヲ襲ヒシ頃ハ、既ニ自主ノ國ニ非ザリキ。其ノ後十一年ニシテ、遂ニ全ク眞興王ニ滅サレタレバ、新羅ノ迦羅國ニ附庸タリト云フハ合ハズ。故ニ通典ニハ、「襲百濟、附庸於迦羅國」ヲ「襲加羅任那諸國滅之」ト改メタリ。サレドモ迦羅ハ、本任那日本府ノ在リシ處ニシテ、諸韓國、皆日本府ノ統制ヲ受ケシカバ、神功皇后以來新羅ノ迦羅ニ屬セシハ、事實ナリ。サレバ此ハ、本百濟ト與國タリシ頃ノ事ナルヲ、隋書ハ、誤リテ百濟ヲ襲ヘル後ノ事ト爲シタルナリ。迦羅任那ノ事ハ、次章ニ云フベシ。

新羅王系圖

（一）朴氏始祖赫居世居西干（居西干、遺事作居瑟耶、）―（二）南解次次雄（次次雄、或云慈充、）―（三）儒理尼師今（遺事、理一作禮、又師作叱、下皆同、）

（七）逸聖尼師今（或云日知葛文王之子、）―（八）阿達羅尼師今（祇摩女壻、）

（五）婆娑尼師今（或云儒理弟柰老之子也、）―（六）祇摩尼師今（或云祇味、）

（四）昔氏始祖脫解尼師今（南解女壻、一云吐解、）―仇鄒角干―（九）伐休尼師今（一作發暉、）

骨正葛文王（一作忽爭）―（十一）助賁尼師今（奈解女壻、一云諸賁、）―（十四）儒禮尼師今（母柰音之女、古記作儒理、與第三王同名也、）
　（十二）沾解尼師今
　乞淑伊湌（一云、助賁王之孫也）―（十五）基臨尼師今（一云基立、）

伊買―（十）奈解尼師今（骨正女壻）―太子于老角干（或云、角干水老之子也）―（十六）訖解尼師今（助賁外孫、）
　王子利音伊伐湌（或作王孫柰音、）

仇道葛文王（助賁沾解之外祖父）―（十三）金氏始祖味鄒尼師今（助賁女壻、一云味照、或作未鄒、遺事引我道碑作未雛、）
　末仇角干―（十七）奈勿尼師今（味鄒女壻一云那密、）
　大西知伊湌（味鄒之族）―（十八）實聖尼師今（味鄒女壻、）

(十九)訥祇麻立干(味鄒外孫、實聖女壻、遺事、立一作禮、)—(二十)慈悲麻立干(實聖外孫、未斯欣女壻、)—(廿一)照知麻立干(未斯欣外孫、一云毘處、)

未斯欣舒弗邯

某—智寶葛文王—(廿二)智證王智大路(訥祇外孫、或云智度路、又云智哲老、)—(廿三)法興王原宗
　立宗葛文王

某—某—某—某—某—某

(廿四)眞興王彡麥宗(法興王外孫、或作深麥夫、)
　太子銅輪—(廿六)眞平王伯淨(立宗外孫、伯舊作日、據東鑑改、)—(廿七)善德王德曼
　　國飯葛文王(一云國芬)—(廿八)眞德王勝曼
　(廿五)眞智王舍輪(或云金輪)—文興王龍春—(廿九)太宗武烈王金春秋(眞平王外孫)

(三十)文武王法敏—(卅一)神文王政明(明之字日怊)
　(卅二)孝昭王理洪(洪一作恭)
　(卅三)聖德王興光(唐書曰金志誠)—(卅四)孝成王承慶
　　(卅五)景德王憲英

(卅六)惠恭王乾運

開聖金孝芳(奈勿九世孫、聖德王女婿、)—(卅七)宣德王良相(聖德王外孫、)

玄聖王法宣—神英王義寬—興平王魏文—明德王孝讓—(卅八)元聖金敬信(奈勿十一世孫)

惠忠王仁謙
　(卅九)昭聖王俊邕(昭聖或云昭成、)—(四十)哀莊王重熙
　　宣康王忠恭—(四四)閔哀王明
　(四一)憲德王彥昇(禮英女婿、)
　(四二)興德王景徽(昭聖王女壻、)

惠康王禮英(一云孝眞)
　翼成王憲員(一云草奴)—(四三)僖康王悌隆(忠恭女壻、一云悌顒)—懿恭王啓明
　成德王均貞
　　(四五)神武王祐徵—(四六)文聖王慶膺
　　(四七)憲安王誼靖(忠恭外孫、一云祐靖、)—泰封國王弓裔

(四八)景文王膺廉(憲安王女壻、膺廉一作凝、)
　(四九)憲康王晸—(五二)孝恭王嶢
　(五十)定康王晃
　(五一)眞聖王曼
　(五三)神德王朴景暉(阿達羅遠孫、憲康王女壻、)
　　(五四)景明王昇英(憲康王外孫、)
　　(五五)景哀王魏膺(同右)

某—某—某—神興王金孝宗（文聖王玄孫、憲康王女壻、）—（五六）敬順王傅（憲康王外孫、景明王表弟、敬順、一云孝哀、

第十四章　加羅考

加羅國ハ、垂仁紀ニ意富加羅國ト見エタリ。意富ハ、大ノ義ニシテ、彼ノ國ニテハ、其ノ方言ニテ唱ヘタリケンヲ、皇國言ニ譯シタルナリ。此ノ國ハ、數多ノ小國ニ分レタルガ中ニ、垂仁紀ニ見エタル加羅ハ、諸小國ノ宗國ニシテ稍大ナルガ故ニ、彼ノ地ニテ大加羅ト云ヘリ。神功皇后征韓ノ後、更ニ將ヲ遣シテ平定シ給ヘル七國ノ一ナル加羅國ハ、即此ノ大加羅ニシテ、應神繼體欽明紀等ニ屢見ユ。漢籍ニハ、宋書南齊書ノ倭國傳ニ、倭國王ノ官爵トテ、「使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事」ナド云ヘル事アリ、又南齊書ニ、加羅國傳アリ、隋書新羅傳ニ、「附庸於迦羅國、」通典邊防新羅ノ處ニ、「褒加羅任那諸國滅之」ト見エ、韓史ニハ、駕洛國記ニ、「國號大駕洛、又稱伽耶國、」三國史記地理志金海小京ノ條ニ、「古金官國、一云伽落國、一云伽耶、」懲毖錄ニ、「大伽耶國、」廣開土王碑ニ、「追至任那加羅、從拔城」トアルナド、皆同國ニシテ、其ノ地ハ、今ノ慶尚道金海都護府ナリ。崇神天皇ノ末年ニ、其ノ國ノ王子都怒我阿羅斯等來朝シテ、垂仁天皇ノ御世ニ、本國ニ歸ラントスル時、其ノ國ニ任那ト云フ名ヲ賜ヒタレバ、コレヨリ任那ハ、加羅ノ別號トナレリ。崇神紀ニハ、其ノ名ヲ以テ追書シテ、「任那者、去筑紫國二千餘里、北阻海、以在雞林之西南」トアリ。雞林ハ、新羅ノ異名ニシテ、其ノ地ハ、今ノ慶州府ナレバ、金海府ハ、正シク慶州府ノ西南ニ當リテ、位置善ク合ヘリ。任那ハ、本一國ニ賜ヘル名ナレドモ、後ニハ其ノ西方ニ、羅列セル加羅諸國ノ總名トナレル事ハ、後段ニ云フベシ。

加羅ト云フ名モ、任那ノ如ク、主ト大加羅國ヲ指シ、又ハ諸小國ノ總名ニモ用フレドモ皇國言ニハ、コノ名ヲ以テ、三韓ノ諸國ヨリ支那マデ及ボシ、凡テ海西ノ諸國ヲ呼ブ事トナレリ。其ハ、古事記傳（三十ノ六十八丁）ニ「加羅ノ國と云は、任那の舊名にて、崇神天皇の御代に、外ッ國の始メて參りしは、此ノ國なり。故レ西ノ方ノ諸ノ外ッ國の大名となりて、三韓をも漢國をも、みな加羅と云なり。然るに此レをたゞ三韓のみに限ぎる名と心得て、漢國などを然云を誤りなりと云は、中々に非なり。萬葉十九に、漢人とも見え、又同卷に、遣唐使のことを韓國邊遣とも、韓國爾由伎多良波之弖ともあるなどをば知らずや」ト云ヘルガ如シ。

大加羅國ノ開創ノ事跡ハ、三國史記ニハ漏レタレドモ、東覽金海都護府ノ山川、龜旨峰ノ處ニ其ノ事跡ヲ述ベタル荒誕ナル傳說アリ。東鑑卷之二ニ記シタル趣モ、ソレニ同ジクシテ、文稍略セリ。二書ノ文ハ、皆駕洛國記ニ本ヅキタル者ナリ。駕洛國記ハ、今ノ世ニ傳ハラザレドモ、三國遺事ニ之ヲ載セテ、「文廟朝太康年間、金官知州文人所撰也、今略而載之」ト云ヘリ。文廟ハ、高麗ノ文宗仁孝王ヲ謂ヒ、太康ハ、仁宗ノ年號ニシテ、後白河天皇承曆年中、宋ノ神宗元豐ノ初頃ニ當レリ。金官ハ大加羅國ノ故地ニテ、新羅ノ時、金官郡マタ金官小京ト云ヘリ。東覽金海府ノ沿革ニ「文武王置金官小京、景德王改今名、仍爲小京、高麗太祖降爲府、後又降爲臨海縣、未幾陞爲郡、成宗改金州安東都護府、顯宗降爲防禦使云々」トアレバ、文宗ノ時ハ、金州ト云ヒシヲ、古名ニ依リテ金官ト云ヘルナリ。

其ノ記ニ曰ク、「開闢之後、此地未有邦國之號、亦無君臣之稱、越有我刀干、汝刀干、彼刀干、五刀干、留水干、留天干、神天干、五天干、神鬼干等、九干者、是酋長、領總百姓、凡一百戶、七萬五千人、多以自都山野、鑿井而飮、耕田而食、屬後漢世祖光武帝建武十八年壬寅三月禊洛之日、所居北龜旨（是峰巒之稱、若十朋伏之狀故云也）有殊常聲氣呼喚、衆庶二三百人集會於此、有如人音、隱其形而發其音曰、此有人否、九干等云、吾徒在、又曰、

吾所在爲何、對云、龜旨也、又曰、皇天所以命我者、御是處、惟新家邦爲君后、爲玆故降矣、爾等須掘峰頂、撮土歌之云、龜何龜何、首其現也、若不現也、燔灼而喫也、以之蹈舞、則是迎大王歡喜踴躍之也、九干等如其言、咸忻而歌舞、未幾仰而觀之、唯紫繩自天垂而着地、尋繩之下、乃見紅幅裹金合子、開而視之、有黃金卵六、圓如日者、衆人皆悉驚喜、俱伸百拜、尋還裹著抱持、而歸我刀家、寘榻上、其衆各散、過浹辰、翌日平明、衆庶復相聚集開合、而六卵化爲童子、容貌甚偉、仍坐於床、衆庶拜賀、盡恭敬止、日日而大、踰十餘晨昏、身長九尺、則殷之天乙、顏如龍焉、則漢之高祖、眉之八彩、則有唐之高、眼之重瞳、則有虞之舜、其於月望日即位也、始現、故諱首露、或云首陵、（首陵、是崩後諡也、）國號大駕洛、又稱伽耶國、即六伽耶之一也、餘五人各歸爲五伽耶主、東以黃山江、西南以蒼海、西北以地理山、東北以伽耶山南、而爲國尾、俾創假宮而入御、但要質儉、茅茨不剪、土階三尺、二年癸卯春正月、王若曰、朕欲定置京都、仍駕幸假宮之南新沓坪、（是古來閑田新耕作、故云也、沓乃俗文也、）四望山嶽、顧左右曰、此地狹小如蓼葉、然而秀異、可爲十六羅漢住地、何況自一成三、自三成七、七聖住地、固合于是、托土開疆、終然允臧歟、築置一千五百步、周廻羅城、宮禁殿宇、及諸有司屋宇、虎庫倉廩之地、事訖還宮、徧徵國內丁壯人夫工匠、以其月二十日、資始金陽、暨三月十日役畢、宮闕屋舍、俟農隙而作之、經始于厥年十月、逮甲辰二月而成、涓吉辰、御新宮、理萬機、而懃庶務」。次ニ琓夏國王ノ子脫解、海ヲ渡リテ來リ、王ト術ヲ角シテ勝タズ、遁レテ雞林ニ入リタル事ヲ記シタリ。其ノ文ハ、前章ニ引キタレバ、コヽニハ略ケリ。

次ニ「屬建武二十四年戊申七月二十七日、九干等朝謁之次、獻言曰、大王降靈已來、好仇未得、請臣等所有處女絕好者、選入宮闈、俾爲伉儷、王曰、朕降于玆、天命也、配朕而作后、亦天之命、卿等無慮、遂命留天干、押輕舟、持駿馬、到望山島立待、申命神鬼干就乘岾、（望山島、京南島嶼也、乘岾、輦下國也、）忽自海之西南隅、掛緋帆、張茜旗、而指乎北、留天等先擧火於島上、則競渡下陸、爭奔而來、神鬼望之、走入闕奏之、上聞欣々、尋遣九干等、整蘭橈、揚桂楫而迎之、旋欲陪入內、王后乃曰我與你等、素昧平生、焉敢輕忽相隨而去、留天等返、達后之語、王然之、率有司動蹕、從闕下西南六十步許地、山邊設幔殿祗候、王后於山外別浦津頭、維舟登陸、憩於高嶠、解所著綾袴爲贄、遺于山靈也、其他侍從媵臣二員名曰申輔趙匡、其妻二人號慕貞慕良、或臧獲並計二十餘口、所賫錦繡綾羅、衣裳疋段、金銀珠玉、瓊玖服玩器、不可勝記、王后漸近行在、上出迎之、同入帷宮、媵臣已下衆人、就階下而見之即退、上命有司、引媵臣夫妻、曰、人各以一房安置、已下臧獲、各一房五六人安置、給之以蘭液蕙醑、寢之以文茵彩薦、至於衣服疋段寶貨之類、多以軍夫遴集而護之、於是王與后共在御國寢、從容語王曰、妾是阿踰陀國公主也、姓許、名黃玉、年二八矣、在本國時、今年五月中、父王與皇后、顧妾而語曰、爺孃一昨夢中、同見皇天上帝、謂曰駕洛國元君首露者、天所降而俾御大寶、乃神乃聖、惟其人乎、且以新莅家邦、未定匹偶、卿等須遣公主而配之、言訖升天、形開之後、上帝之言、其猶在耳、爾於此而忽辭親向彼乎、往矣、妾也浮海遐尋於蓬萊、移天夐赴於蟠桃、螓首敢叨、龍顏是近、王答曰、朕生而頗聖、先知公主自遠而屆、下臣有納妃之請、不敢從焉、今也淑質自臻、眇躬多幸、遂以合歡、兩過淸宵、一經白晝、於是遂還來船、篙工楫師、共十有五人、各賜粮粳米十碩、布三十疋、令歸本國、八月一日廻鑾、與后同輦、媵臣夫妻、齊鑣並駕、其漢肆雜物、咸使乘載、徐々入闕、時銅壺欲午、王后爰處中宮、勅賜媵臣夫妻私屬空閑二室分入、餘外從者以賓館一坐二十餘間、酌定人數、區別安置、日給豐羨、其所載珍物藏於內庫、以爲王后四時之費、一日上語臣下曰、九干等、俱爲庶僚之長、其位與名、皆是宵人野夫之號、頓非簪履職位之稱、儻化外傳聞、必有嗤笑之恥、遂改我刀爲我躬、汝刀爲汝諧、彼刀爲彼藏、五刀爲五常、留水留天之名。不動上字、爲留功留德、神天改爲神道、五天改爲五能、神鬼之音不易、改訓爲臣貴、取雞林職儀、置角干阿叱干級干之秩、其下官僚、以周制漢儀而分定之、斯所以革古鼎新、設官分職之道歟、於是乎治國齊家、愛民如子、其敎不肅而成、其政不嚴

而理、況與王后而居也、比如天之有地、日之有月、陽之有陰、其功也塗山翼夏、唐媛興嬌、頻年有夢、得熊羆之兆、誕生太子居登公、靈帝中平六年已巳三月一日、后崩、壽一百五十七、國人如嘆坤崩、葬於龜旨東北塢、遂欲[不]忘子愛下民之惠、因號初來下纜渡頭村、曰主浦村、解綾袴高岡曰綾峴、茜旗行入海涯曰旗出邊、媵臣泉府卿申輔、宗正監趙匡等、到國三十年後、各產二女焉、夫與婦踰一二年而皆捐信也、其餘臧獲之輩、自來七八年間、未有孳生、唯抱懷土之悲、皆首丘而沒、所舍賓館、閫其無人、元君乃每歌鰥枕、悲嘆良多、隔二五歲、以獻帝立安四年己卯三月二十三日而殂落、壽一百五十八歲矣、國中之人、若亡天只悲慟、甚於后崩之日、遂於闕之艮方平地、造立殯宮、高一丈、周三百步、而葬之、號首陵王廟也、自嗣子居登王、洎九代孫仇衡、永享是廟、須以每歲孟春三之日、七之日、仲夏重五之日、仲秋初五之日、十五之日、豐潔之奠、相繼不絕、洎新羅第三十王法敏、龍朔元年辛酉三月日、有制曰、朕是伽耶國元君九代孫仇衡王之降于當國也、所率來子世宗之子率支公之子庶玄匝干之女文明皇后、寔生我者、玆故元君於幼沖人、乃爲十五代始祖也、所御國者、已曾敗、所葬廟者、今尚存、合於宗祧、續乃祀事、仍遣使於黍離之趾、[納]近廟上上田三十頃、爲供營之資、號稱王位田、付屬本土、王之十七代孫賡世級干、祗稟朝旨、主掌厥田、每歲時釀醪醴、設以餅飯茶菓庶羞等奠、年々不墜其祭日、不失居登王之所定年内五日也、芬苾孝祀、於是乎在云々。」次ニ新羅ノ季世、金官ノ城主忠至匝干ノ僚佐英規阿干ト云フ人、廟享ヲ奪ヘルニ由リテ、祠堂ノ梁折レテ壓死セシ事、忠至、陰誅ヲ懼レテ、王ノ眞孫ヲ召シテ、祭奠ヲ復セシメシ事、英規ノ子俊必、又廟ニ詣リテ、禮ヲ失ヒ、暴疾ヲ得テ斃レシ事、賊徒廟ヲ犯シ、時、廟中ヨリ猛士出デ、雨射シ、又廟ノ旁ヨリ大蟒出デシ事、其ノ後廟祀ノ廢レザル事、國亡ビタル後、地名屢易リシ事、宋ノ淳化二年金海府量田使趙文善、陵田ヲ減ジタルニ由リテ、疾ヲ得テ道ニ死セシ事ドモヲ列記シテ、サテ次ニ四言三十韻ノ銘辭ヲ載セタリ、文中ニ、堯ヲ高ト云ヒ、武庫ヲ虎庫ト云ヒ、建安ヲ立安ト云ヒタルハ高麗ノ朝ノ人、太祖ノ諱建、惠宗ノ諱武、定宗ノ諱堯ヲ避ケタルナリ。

首露王ト王后許黃玉トノ談ハ、古來ノ傳說ト云ハンヨリハ、寧ロ佛法流行ノ後ニ成リタル小說ニシテ、其ノ荒誕不經ナルコトハ、檀君ノ談ニ異ナラズ。三國史記ニハ、加耶國ヲ所々ニ記シタレドモ、其ノ建國ノ奇談ハ、斥ケテ載セズ。唯金庾信傳ニ「十二世祖首露、不知何許人也、以後漢建武十八年壬寅、登龜峰、望駕洛九村、遂至其地開國、號曰加耶」ト記シタルハ、檀君ノ舊都ト稱スル平壤城ヲ「仙人王儉之宅也」ト云ヘルニ同ジク記者ノ迷信少キヲ見ルニ足レリ。

記中ニ見ユル地名ヲ考フルニ、龜旨ハ、金海府ノ北一里ニアル山ノ名ナリ。首露王宮ノ遺址ハ、府ノ內ニ在リ。望山島乘岾ノ名ハ、東覽ニ見エズ。阿踰陀ハ中印度ノ古國ノ名ナリ。主浦ハ金海府ノ南四十里、熊川縣ノ東三十里ニ在リ。綾峴ハ府ノ南二十里ニ在リ。旗出邊ハ、主浦ノ左ニ在リ。首露王陵ハ、東覽ニ「在府西三百步、每歲春秋、府中父老共會設祭」許王后陵ハ、東覽ニ「在龜旨山東、世傳云々、邑人祭王陵時並祀」トアリ。王后寺ノ舊址ハ、府ノ南四十里ナル長遊山ニアリ。此等ノ遺跡ハ、傳說ニ依リテ設ケタルモアルベク、地名ニ附會シテ傳說ヲ作リタルモアルベケレバ、其ノ地ノ有無ハ、固ヨリ傳說ノ虛實ヲ證スルニ足ラズ、但首露王ノ事ハ、羅紀ニモ金庾信傳ニモ見エ、其ノ陵墓ハ、加羅國ノ盛時ヨリ廟祀シテ千餘年絕エザレバ、古代ニ此ノ王アリシコトハ、慥ナレドモ、其ノ事跡ト年代トハ、好事者ノ構造ニ出デタル者ナルベシ。又「首露、或云首陵」ハ方言ノ名ヲ漢譯シテ二樣ニ寫シタルマデニテ、字義ニハ拘ルマジキコトナルヲ、其ノ字義ニ據リテ始現、故諱首露」ト云フハ、昔脫解ノ解釋ト同ジク、例ノ附會ニシテ、云フニ足ラズ。首陵ノ註ニ、「是崩後諡也」トアルモ强說ナリ。

六伽耶ノ東境ナル黃山江ハ、慶尙道第一ノ大江ニシテ、道ノ北部ナル群山ヨリ流レ出ヅル諸川、尙州ノ東

北ニ至リテ、合シテ洛東江ト稱シ、南ニ流レテ、星州及高靈縣ノ東ヲ經テ、昌寧縣ノ南ニ至リテ、東ニ流レ、金海府ノ北ニ至リテ、伽耶津ト稱シ、又南ニ流レテ、黃山江トナリ、金海府梁山郡ノ間ヲ經テ、海ニ入ル。西境ナル地理山ハ、多クハ知異山ト呼ビ、晉州ノ西、咸陽郡ノ南ニアリ。滿洲ノ長白山ヨリ分レテ、朝鮮半島ヲ縱ニ貫キタル山脈ノ南ノ終極ニテ、山勢高大ニシテ、數百里ニ雄據シ、慶尙全羅二道ノ天然ノ界ヲ爲セリ。北境ナル伽耶山ハ、一名ノ牛頭山ト云フ。慶尙全羅ヲ界セル山脈ノ東支ニシテ、星州ノ西南、高靈縣ノ西北、陜川郡治爐縣ノ北、居昌郡加祚縣ノ東ニ在リ、カクテ諸伽耶ノ地ハ、慶尙道ノ西南ニアリテ、東北ハ新羅ニ接シ、西ハ百濟ニ接シテ、不等邊三角形ヲ爲シ、宗國ナル大加羅ハ、其ノ最銳角ナル東端ニ國ヲ建テタルナリ。

自餘ノ五伽耶ノ名ハ、東覽龜旨峰ノ處ニ「高靈爲大伽倻、固城爲小伽倻、星州爲碧珍伽倻、咸安爲阿那伽倻、咸昌爲古寧伽倻」トアリ。東鑑ニハ、阿那伽倻ヲ阿羅伽耶ト書キ、碧珍伽倻ヲ星山伽耶ト書キ、五國ノ順序ハ阿羅古寧ヲ先ニシ、小伽耶ヲ最後ニ擧ゲタリ。阿羅伽耶ハ、日本紀ニ屢見エタル安羅國ニシテ、廣開土王碑ニモ、安羅人戍兵ト見エ、三國史記勿稽子傳ニモ、阿羅トアレバ、阿羅ト云ヘル方正シカルベシ。三國史記ノ地理志ニ「阿尸良國、一云阿那加耶」トアル阿尸良ハ、即本名ニシテ、尸ヲ略キテ阿羅ト云ヘルナラン。其ノ地ハ今ノ咸安郡ニシテ、大加羅ノ西、星山伽耶大伽耶ノ東南、小伽耶ノ東北ニ在リ、殆ド伽耶諸國ノ中央ニ當レリ。

星山伽耶ハ東覽星州牧ノ沿革ニ「本新羅本彼縣、（三國遺事以星山伽耶爲六伽耶之一、新羅取之、置本彼縣、詳見金海府山川下）後景德王改新安、屬星山郡、後改碧珍郡云々」トアリ。此ノ原註ナル、星山ヲ六伽耶ノ一ト云ヘル事ハ、刊本三國遺事ニハ見エズ。異本ヲ見ルベシ。又星州ノ屬縣ニ、「加利縣、在州南五十九里、本新羅一利縣、景德王改名星山郡云々、」其ノ山川ニ、

「星山、在州東八里」トアリ。然レバ星山ナル郡名ハ景德王ノ時、山ノ名ヲ取リテ附ケタルニテ、碧珍郡ト改メタルハ、又其ノ後ノ事ナレバ、星山伽耶ト云フモ、碧珍伽耶ト云フモ、後世ノ郡名ヲ以テ追稱シタルナリ。伽耶分立ノ當時ハイカニ唱ヘシカト云フニ、新羅、之ヲ取リテ、始メテ縣ヲ置ケルニ、本彼ト名ヅケタルハ、舊稱ヲ承襲シタルニテ、此ノ伽耶ノ國名ハ、本彼トゾ云ヒタリケン。サルハ、日本紀ニ屢見エタル伴跛ノ國ハ、百濟ニ接近シタル國ニシテ、星州ノ位置ニ合ヘレバ、本彼ト伴跛トハ、同音ノ異譯ト思ハルレバナリ。魏志ニ弁辰半路國トアルハ、路ハ跛ノ誤リニテ、即半跛國ト云ヘルニハアラズヤ。星州ノ山川ニ、「伽倻山、在州西南四十八里、」其ノ古跡ニ、「伽倻山城、石築、周一萬五千九百三十五尺、高五尺、今半頽落、內有六溪十泉、夷險半之」トアルハ、決メテ此ノ伽耶ノ古趾ナルベシ。

古寧伽耶ハ、三國史記地理志ニ、「古寧郡、本古寧伽耶國、新羅取之、爲古冬攬郡、（一云古陵縣、）景德王改名」トアリ。古寧ナル郡名ハ、景德王ノ創メタル者ナレバ、後世ノ郡名ヲ以テ伽耶ノ舊國ヲ追稱シタルニヤ。又晉書前秦載記ニ見エタル休忍國ハ、コノ古寧ト音近ケレバ、古寧ハ、古クヨリノ名ニシテ、景德王ハ、其ノ郡ノ名ヲ古名ニ復シタルニヤ。古寧郡ハ、今ノ咸昌縣ニシテ、前ニ云ヘル伽耶諸國ノ疆域ノ外ニ在リテ、伽耶山ヲ去ルコト、甚遠ケレバ、コノ伽耶ハ新羅ノ一善郡、（今ノ善山郡護府、）沙伐州（今ノ尙州牧）ヲ隔テ、慶尙道ノ北部ノ西邊ニ孤立セル國ナリキ。

大伽耶ハ、地理志ニ「高靈郡、本大加耶國云々、眞興大王侵滅之、以其地爲大加耶郡、景德王改名」トアリテ、今ノ高靈縣ナリ。東覽高靈縣ノ古跡ニ、「縣南一里、有大伽倻國宮闕遺址、其旁有石井、俗傳御井、」又「縣西二里許、有古藏、俗稱錦林王陵、」又「東京堤、在縣東十里、俗傳新羅謀攻大伽倻、擧兵來、知有備、而退、夜築此堤、以示其衆」ナドアリ。大伽耶ハ、小伽耶ニ對シテ云ヘル名ニシテ、伽耶ノ大國ト云フ義ニ非ズ。伽

耶ノ大國ハ諸伽耶ノ宗國ナル大加羅ニシテ、韓史ニ伽耶又駕洛ト云ヒ、國史ニ加羅ト云ヒテ一國ヲ專稱スル時ハ、必コノ大加羅ヲ指スナレバ、此ノ國ヲ指キテハ伽耶ノ大國ト稱スベキ者ナシ。且耶ト羅ト韓音相通ジ、伽耶ハ即加羅ナレバ、大伽耶ナル名ハ、大加羅ト混ジテ、區別ナキ者ナリ。按フニ大伽耶モ小伽耶モ、本ハ何ノ伽耶クレノ伽耶ト云ヒタリケンヲ、或ハ略キテ唯伽耶トノミモ云ヒタルヨリ、コノ兩伽耶ヲ區別センガ爲ニ、大小ノ字ヲ冠ラセタルナルベシ。

小伽耶ハ、東覽固城縣ノ沿革ニ「本加耶國、新羅取之、置古自郡、景德王改今名」トアリ。コヽニ唯加耶國トアルハ、本ハ某ノ加耶ト云ヒタリシヲ、其ノ本號ヲ失ヒタルナリ。今其ノ本號ハ、知ル由ナケレドモ、新羅ノ郡名ナル古自ハ、恐ラクハ此ノ伽耶ノ舊名ナルベシ。固城縣ノ山川ニ、「南山、在縣南二里、有古城基、」又「佛巖山、在縣西二里、有土城古基、」又「城山在縣北二十四里、有古城基址」ナド見エタルハ、此ノ伽耶國ノ故墟ニハ非ズヤ。

朝鮮八域志ニ、「星州、高靈陝川、古伽耶國也、三邑水田最上腴、少種而多收、故士著者富饒、少流離者」トアリ。陝川郡ハ地理志ニ「江陽郡、本大良(一作耶)州、景德王改名、今陝州」トアリ。國史ニ屢見エタル多羅ノ國ニシテ、任那列國ノ一ナリ。サテ任那ノ域內ナル小國ハ、此等ノ六七國ノ外ニ、日本紀ニ記セル者、猶五六國アリ。ソレラノ事ハ、三韓朝貢志ニ於テ考證スベシ。

林泰輔氏ハ、史學會雜誌第二十五號ニ於テ、「加羅の起源」ト題シ、朝鮮南部ノ古代ノ地名ニ、加羅阿羅多羅又ハ如耶阿耶大耶ノ如ク羅耶ノ附著セル者多キハ、佛書中ニ見ユル印度ノ地名人名ニ似タル事ト、許皇后來嫁ノ傳說トニヨリテ、加羅ハ印度人ノ開キタル所ナラント論ゼラレ、又「加羅の起原續考」(史學雜誌第五編第參號)ニ於テ、朝鮮古代諸王卵生ノ傳說ハ、印度ヨリ傳ハレリトテ、賢愚因緣經、法苑珠林、唐書南蠻傳、大越史記全書、山海經大荒南經、博物志、明一統志廣東瓊州府、山西平陽府ノ條ヨリ卵生ノ傳說ヲ列擧シ、コノ傳說ハ、印度人ノ東方ニ交通スルニ從ヒテ倶ニ東漸シ、後印度地方ヨリ支那ノ南邊ニ入リ、益進ミテ朝鮮ニ傳播シタル者ナレバ、古代印度人ノ馬剌加海峽ヲ超エテ、東方ニ交通シ、遂ニ加羅ノ國ヲ開キタリシコトハ明白ナリト論決セリ。卵生ノ傳說ノ印度ニ基キタルコトハサモアルベケレドモ、之ヲ以テ印度人移住ノ證トハ爲シ難シ。白鳥庫吉氏之ヲ論ジテ、「卵生の傳說は、印度固有のものにて、佛書中に載せられしを、彼の國々の僧侶が、自國の祖宗を賛美せんが爲の料に借り來りて、其の勇武を粧飾せしに過ぎざるべし。此の如きの例は、獨朝鮮國にも限らず」トテ、蒙古源流ナル智固本賛博汗ノ次子、博囉咱ガ卵生ノ例ヲ引キ、又「首露と脫解とが鷹鷲となり、雀鷂となりて、互に祕術を鬪はせし一條の物語は、純乎たる佛典中の譬喩談なり。首露王が阿踰陀國の王女を迎へ娶りたる事を記すに至りては、假構の跡、復蔽ふべからず。抑朝鮮の文化は、佛教の東漸に源因するが故に、上代の記錄には、僧侶の手に成れる者定めて多かるべし。されば其の用語の如きは、務めて之を佛典中に求めたりと覺しきもの尠からず、例へば魏志に狗邪國とあるを、後には專ら伽耶加羅と書き、甘路とあるを甘露と書き、孺留とも類利とも云へるを瑠璃明王と云ふが如し。大伽耶の跡を高靈と稱するも、佛說に基きし名稱ならんと思はる」ト云ヒテ、西域記摩揭陀國ノ條ニ「伽耶城西南五六里至伽耶山、谿谷杳冥、峰巖危險、印度國俗稱曰靈山」トアルヲ引キテ證トセリ。

三國史記ニ依リテ、新羅加耶ノ關係ヲ考フルニ、先ヅ羅紀脫解尼師今二十一年、(紀元七百三十七年、漢ノ章帝建初二年)「阿湌吉門與加耶兵、戰於黃山津口、獲一千餘級、以吉門爲波珍湌、賞功也。」黃山津ハ、黃山江ノ渡頭ニシテ、東萊縣ヨリ金海府ニ入ル所ナリ。東萊縣ノ地ハ、脫解ノ時、始メテ所領ト爲レルコトハ、三國史記居道ノ傳ニ見エテ、既ニ前章ニ引ケリ。東萊ノ地方、既ニ新羅ノ南疆トナリタレバ、コレヨリ黃山江上ハ、新羅加耶爭奪ノ場ト

ナレリ。其ノ江西ナル加耶ハ、金海ノ加耶即大加羅ナルコトハ、云フモ更ナリ。

次ニ婆娑尼師今八年、（紀元七百四十七年、漢ノ章帝章和元年、）「下令曰、朕以不德、有此國家、西隣百濟、南接加耶、德不能綏、威不足畏、宜繕葺城壘、以待侵軼、是月築加召馬頭二城。」此ノ令旨ニ「西隣百濟」トアレドモ、此ノ時二國ノ間ニ、數多ノ小國アリテ、實ハ其ノ地未ダ接セザレバ、加召馬頭二城ハ、何レモ加耶ヲ禦ガン爲ニシテ、東萊縣梁山郡ノ邊ニ在リシナルベシ。東覽居昌郡ノ屬縣ニ「加祚縣、在郡東十五里、本新羅加召縣、因方言相近、變召爲祚」トアレドモ、居昌郡ハ、洛東江ノ西、伽耶山ノ南ニアリテ、加耶諸國ノ域內ナレバコノ加召城ハ、ソコニハアラジ。

同十五年（漢ノ和帝永元六年、）「加耶賊圍馬頭城、遣阿湌吉元、將騎一千擊走之。」

同十七年、加耶人襲南鄙、遣加城主長世拒之、爲賊所殺、王怒、率勇士五千、出戰敗之、虜獲甚多、」新羅ノ南鄙ハ、即大加耶ノ東ニ接シタル地方ナリ。加城ハ、恐ラクハ加召城ノ召ノ脫シタルナラン。

同十八年、「擧兵欲伐加耶、其國主遣使請罪、乃止。」コレヨリ兩國和睦シタリト見エテ、同二十三年ニ至リテ左ノ記事アリ。

「音汁伐國與悉直谷國爭疆、詣王請決、王難之、謂金官國首露王、年老多智識、召問之、首露立議以所爭之地、屬音汁伐國、於是王命六部會饗首露王、五部皆以伊湌爲主、唯漢祇部以位卑者主之、首露怒、命奴耽下里、殺漢祇部主保齊而歸、奴逃依音汁伐主陀鄒干家、王使人索其奴、陀鄒不送、王怒、以兵伐音汁伐國、其主與衆自降、悉直押督二國王來降。」金官國ハ、即加耶ナルニ、コヽニノミ金官ト書キタルハ、其ノ引用セル史料ノ異ナルヲ、原文ノ儘ニ記シタル故ナリ。金官ノ號ハ、地理志ニ「金海小京、古金官國、」金庾信傳ニ「開國、號曰加耶、後改爲金官國」トアレドモ、コレハ、新羅ノ郡名ヲ以テ追稱シタルニテ、國號ヲ改メタルニハ非ズ。繼體紀ニ、新羅人、加羅ノ四村ヲ掠メタル中ニ、金官村見エタレバ、金官ハ、本加羅ノ一村ノ名ナルヲ、新羅ニテハ、其ノ村名ヲ取リテ、郡ニ附ケタルナリ。首露王ノ名ノ、羅紀ニ見エタルハ、此ノ一所ノミナリ、首露王ノ事蹟ノ信ズベキモ、實ニ此ノ一事ノミナリ。音汁伐國ハ、今ノ慶州府ノ屬縣ナル安康縣、悉直國ハ、今ノ江原道三渉都護府、押督國ハ、今ノ慶尙道慶山縣ナリ。

カクテ首露王ノ疎暴ニ由リテ、和親復破レタレバ、同二十七年（漢ノ殤帝延平元年）「命馬頭城主伐加耶」ノ事アリ。

同二十九年、（漢ノ安帝永初二年、）「遣兵伐比只國多伐國草八國幷之。」比只國ハ地理志ニ「火王郡、本比自火郡、一云比斯伐。眞興王十七年置州云々」トアル所ニテ、今ノ昌寧縣ナリ。日本紀ニ屢見エタル比自炑ノ國ハ、即此ノ國ナリ。此ノ國ハ、洛東江ノ左岸ニ在リテ、諸伽耶ノ疆域ノ外ニアレドモ、此ノ後荒田別鹿我別等ガ征服シテヨリ、皇朝ノ管轄ニ歸シテ任那諸國ノ中ニ加レリ。多伐國ハ、沾解尼師今ノ處ニ達伐城トアルト同所ニテ、今ノ大丘都護府ナリ。草八國ハ、地理志ニ「八谿縣、本草八兮縣、景德王改名」トアル所ニテ、今ノ草溪縣ナリ。此ノ國ハ比自火ノ西、洛東江ノ右岸ニアレバ、此ノ時新羅ノ國力ハ、既ニ諸伽耶ノ域內ニ踏込ミタルナリ。

祇摩尼師今四年、（紀元七百七十五年、漢ノ安帝元初二年、）「春二月、加耶寇南邊、秋七月、親征加耶、帥步騎、度黃山河、加耶人伏兵林薄以待之、王不覺、直前、伏發圍數重、王揮軍奮擊、決圍而退。」

同五年「遣將侵加耶。王帥精兵一萬。以繼之、加耶嬰城固守、會久雨、乃還」同十年（漢ノ安帝建光元年、）「築大甑山城」。大甑山城ハ、地理志ニ「東平縣本大甑縣、景德王改名」トアル所ニシテ、加耶ヲ拒ガン爲ニ築キタルナリ。東平縣ハ、今東萊縣ノ屬縣トナリテ、本縣ノ南十里ニアリ。

コノ後八十年ノ間、二國交涉ノ事闕ケタリシガ、奈解尼師今六年（紀元八百六十一年、漢ノ獻帝建安六年、）「加耶國請和」ヨリシテ、

二國復和睦セリ。

同十四年、「浦上八國謀侵加羅。加羅王子來請救、王命太子于老與伊伐飡利音。將六部兵往救之、擊殺八國將軍、奪所虜六千人還之。」加羅ハ、即加耶ニシテ、異義ナケレドモ、此ノ書ハ、常ニ加耶トノミ書キタルニ、コヽニノミ加羅トアルハ、イカニト思ヒシニ、勿稽子傳ヲ見レバ、加羅ハ、阿羅ノ誤リナルコト、知ラル。列傳第八ニ云ク、「勿稽子奈解尼師今時人也、家世平微、爲人倜儻、少有壯志、時八浦上國謀伐阿羅國、阿羅使來請救、尼師今使王孫捺音率近郡及六部軍往救、遂敗八國兵、是役也、勿稽子有大功云々、後三年、骨浦柴浦古史浦三國人、來攻竭火城、王率兵出救、大敗三國之師、勿稽子斬獲十餘級云々、」王孫捺音ハ、即伊伐飡利音ナリ。捺ト利ト、韓音相通ズ。浦上八國ハ、諸伽耶ノ南ナル海濱又ハ嶋嶼ノ小部落ナルベシ。其ノ中骨浦國ハ、地理志ニ「合浦縣、本骨浦縣」トアル所ニシテ、其ノ故址ハ昌原郡護府ノ西十五里ニ在リ。柴浦ハ、地理志ニ「漆堤縣、本漆吐縣、景德王改名、今合漆園縣」トアル處カ。漆園縣ハ今漆原縣ト云フ。古史浦ハ、考ヘ得ズ。竭火城ハ、屈阿火縣、即今ノ蔚山郡ナルベシ。

同十七年、「加耶送王子爲質」。コレヨリ後二百數十年ノ間、加耶ノ名、一タビモ見エズ、其ノ間ニ、荒田別鹿我別ノ征伐アリテ、任那諸國、皇朝ノ管轄ニ歸シ、新羅任那ノ交涉益多クナリタルコトハ應神雄略繼體紀等ニ詳カナルヲ、羅紀ニハ、此等ノ事更ニ見エザルハ、闕漏ノ甚シキナリ。

照知麻立干三年、（清寧天皇二年、齊ノ高帝建元三年、）加耶ノ援兵ト與ニ、高句麗ヲ禦ギシコト見エ、同十八年（仁賢天皇九年、齊ノ明帝建武三年、）「加耶國送白雉、尾長五尺、」法興王九年、（繼體天皇十六年、梁ノ武帝普通三年、）「加耶國王遣使請婚、王以伊飡比助夫之妹送、」同十一年、「王出巡南境拓地、加耶國王來會」ナドアリ。新羅ノ南境ハ、加羅ノ東隣ナルコト、前ニ云ヘルガ如シ。此等ノ文ヲ見レバ、加耶ハ、即大加羅ニシテ、新羅ト關係多カリシハ、此ノ國ナルコトハ、其ノ證甚明カナリ。此ノ如ク二國ノ形勢ヲ考ヘテ、サテ日本紀ニ見エタル韓土ノ事跡ニ就キテ、更ニ其ノ地理事情ヲ推究スル時ハ、一千數百年前、皇朝ノ藩屏タリシ任那諸國ノ盛衰ノ顚末ハ、瞭然トシテ掌ヲ指スガ如シ。其ハ三韓朝貢志ニ委シク云フベシ。

首露王ノ後嗣ノ事ハ、駕洛國記ノ末段ニ、「世祖已下九代孫曆數、委錄于下」トテ、左ノ如ク記シタリ。

「居登王。父首露王、母許王后、立安四年己卯三月二十三日即位、治五十五年、嘉平五年癸酉九月十七日崩、王妃泉府卿申輔女慕貞、生太子麻品、開皇曆云、姓金氏、蓋國世祖、從金卵而生、故以金爲姓爾。

麻品王。一云馬品、金氏、嘉平五年癸酉即位、治三十九年、永平元年辛亥一月二十九日崩、王妃宗正監趙匡孫女孤仇、生太子居叱彌。

居叱彌王。一云今勿、金氏、永平元年即位、治五十六年、永和二年丙午七月八日崩、王妃阿躬阿干孫女阿志、生王子伊品。

伊尸品王。金氏、永和二年即位、治六十二年、義熙三年丁未四月十日崩、王妃司農卿克忠女貞信、生王子坐知。

坐知王。一云金叱、義熙三年即位、娶傭女、以女黨爲官、國內擾亂、鷄林國以謀欲伐、有一臣名朴元道、諫曰、遺草閱閱亦含羽、況乃人乎、天亡地陷、人保何基、又卜士筮得解卦、其辭曰解而拇、明至斯孚、君鑑易卦乎、王謝曰、可、擯傭女、貶於荷山島、改行其政、長御安民也、治十五年、永初二年辛酉五月十二日崩、王妃道寧大阿干女福壽、生子吹希。

吹希王。一云叱嘉、金氏、永初二年即位、治三十一年、元嘉二十八年辛卯二月三日崩、王妃進思角干女仁德、生王子銍知。

鉒知王。一云金鉒王、元嘉二十八年即位、明年爲世祖許黃玉王后、奉資冥福、於初與世祖合御之地創寺、曰王后寺、納田十結充之、治四十二年、永明十年壬申十月四日崩、王妃金相沙干女邦媛、生王子鉗知。

鉗知王。一云金鉗王、永明十年即位、治三十年、正光二年辛丑四月七日崩、王妃出忠角干女淑、生王子仇衡。」

仇衡王。金氏、正光二年即位、治四十二年、保定二年壬午九月、新羅第二十四君眞興王興兵薄伐、王使親軍卒、彼衆我寡不堪對戰也、仍遣同氣脫知爾叱今留在於國、王子上孫卒支公等、降入新羅、王妃分叱水爾叱女桂花、生三子、一世宗角干、二茂力角干、三茂得角干、開皇錄云、梁中大通四年壬子、降于新羅。

鉗知以上八王ノ名ハ、羅紀ニ見エズ。仇衡ハ、羅紀ニ仇亥ニ作リ金庾信傳ニハ「仇亥或云仇次休」トアリ。三子ノ名ハ、羅紀ニ、世宗ハ、奴宗ニ作リ、茂力ハ、武力ト書キテ、季子トシ、茂得ハ、武德ト書キテ、仲子トセリ。上孫卒支公ハ、上ニ引ケル新羅王法敏ノ制旨ニ據レバ、世宗ノ子ニシテ、庶玄匝干ノ父、文明王后ノ祖父ナリ。金庾信傳ニ「祖武力云々、父舒玄、官至蘇判」トアル舒玄ハ、即庶玄ニシテ、蘇判モ匝干モ、匝飡ノ異稱ナリ。カクテ、金庾信及ビ文明王后ハ、三國史記ニテハ、仇亥ノ季子武力角干ノ孫トシ、駕洛國記ニテハ、仇衡ノ長子世宗角干ノ曾孫トセリ。孰レカ是ナルヲ知ラズ。

右ノ系譜ニ依ル時ハ、漢ノ光武帝建武十八年首露王即位ヨリ、後周ノ武帝保定二年加羅亡滅マデ、五百二十一年ノ間、新羅ニハ、二十二王、百濟ニハ、十七世二十五王、高句麗ニハ、十七世二十二王アルニ加羅ハ、僅ニ十世十王ナリ。首露夫妻ノ壽、各百五十餘歲ナルハ、更ニモ云ハズ、居登ヨリ伊尸品マデ、四世ニシテ二百九年、平均一世五十二年ナルハ、三國上代ノ年紀ト同ジク、著シキ延長ナリ。

三國史記地理志ニ「高靈郡、本大加耶國、自始祖伊珍阿豉王、一云內珍朱智、至道設智王、凡十六世、五百二十年、眞興大王侵滅之云々。」東覽高靈縣ノ沿革ノ註ニ「按崔致遠釋利貞傳云、伽倻山神正見母主、乃爲天神夷毘訶之所感、生大伽倻王惱窒朱日、金官國王惱窒靑裔二人、則惱窒朱日爲伊珍阿豉王之別稱、靑裔爲首露王之別稱、然與駕洛國古記六卵之說、俱荒誕不可信」トアリ。惱窒朱日ハ、地理志ノ註ナル內珍朱智ト音近ケレバ、蓋同名ナリ。此ノ王ノ時代ハ、加羅ノ始祖ト同ジクシテ、ソレヨリ末王マデ凡十六世トアレバ、加羅ノ僅ニ十世ナルハ、必脫漏アルベシ。

南齊書東夷傳ニ「加羅國、三韓種也、建元元年、國王荷知使來獻、詔曰、量廣始登、遠夷洽化、加羅王荷知、欵關海外、奉贄東遐、可授輔國將軍本國王」トアリ。荷知ハ、駕洛國記ノ鉗知ナルガ如ク聞ユ。然レドモ齊ノ高帝建元元年ハ、鉗知即位ノ年ト云ヘル武帝永明十年ヨリ十三年前ニシテ、鉒知即位ノ二十九年ニ當レバ、荷知ハ、鉒知ノ誤リカ、又ハ鉗知ノ年紀ノ誤レルニモアルベシ。神功紀ニ、加羅國王己本旱岐、繼體紀ニ任那王己能末多干岐ト云ヘル名見ユ。又姓氏錄ニ、任那人ノ後裔ト云ヘル者十氏ホドアリテ、其ガ中ニ、某王ノ後ト云ヘルハ、左京諸蕃ニ「道田ノ連、任那ノ賀室王之後也、」山城ノ國諸蕃ニ「多多良ノ公、御間名ノ國主爾利久牟王之後也、」大和ノ國諸蕃ニ「大伴ノ造、任那ノ國主龍主王ノ孫佐利王之後也、」攝津國諸蕃ニ「荒荒ノ公、任那ノ國豐貴王之後也、」未定雜姓ニ「三間名ノ公、彌摩奈ノ國主牟留知王之後者不見」ナドアレドモ、此等ノ王ノ名ハ、駕洛國紀ニ一人モ見エズ。此ノ中ニハ、大加羅ノ外ニアル小國ノ王ナルモアルベシ。唯賀室王ト云ヘルハ、南齊書ノ荷知若クハ駕洛國記ノ「吹希王、一云叱嘉」トアル王ナルベキカ。羅紀ニモ、加羅國嘉悉王ト云ヘル見エ、樂志ニハ、嘉實王トアリ。

ソノ樂志ニ云、「加耶琴、亦法中國樂部箏而爲之云々、羅古記云、加耶國嘉實王、見唐之樂器而造之、王以謂諸國方言各異、聲音豈可一哉、乃命樂師省熱縣人于勒、造十二曲、後于勒以其國將亂、携樂器、投新羅眞興王、王受之、安置國原、」國原ハ、今忠淸道忠州ナリ。羅紀眞興王十二年欽明天皇十二年、梁ノ簡文帝大寶二年ノ條ニ云、「王巡狩、

次娘城、聞于勒及其弟子尼文知音樂、特喚之、王駐河臨宮、令奏其樂、二人各製新歌奏之、先是加耶國嘉悉王製十二絃琴云々」明年、（梁ノ元帝承聖元年、）「王命階古注知萬德三人、學樂於于勒云々、業成、王命奏之曰、與前娘城之音無異、厚賞焉。」サテ其ノ後ノ事ヲ、樂志ニ、「三人既傳十二曲、相謂曰、此繁且淫、不可以爲雅正、遂約爲五曲云々、王聞之大悅、諫臣獻議、加耶亡國之音、不足取也、王曰、加耶王淫亂自滅、樂何罪乎云々、遂行之、以爲大樂」トアリ。コノ末段ノ問答ハ、眞興王二十三年加羅亡滅ヨリ後ノ事ナルベシ。此ノ傳說ノ趣ニテハ、嘉悉ハ、荷知ニモ叱嘉ニモ非ザルナリ。東覽高靈縣ノ古跡ニコノ加耶琴ノ故事ヲ引キテ、「縣北三里、有地名琴谷、世傳勒率工人肄琴之地、或云、此琴出於金海之伽耶國、但金海伽耶世代、無稱嘉悉王者、恐出於此爲是」トアリ。猶考フベシ。

大加羅ノ滅ビタルハ後周ノ保定二年、即眞興王二十三年ナルコトハ、欽明紀二十三年「新羅打滅任那官家」トアルニ符合シテ、更ニ疑フベキ所ナシ。然レドモ彼ノ國ニテハ、此ノ年紀ニ就キテ昔ヨリ開皇錄ノ如キ異說アリタレバ、三國遺事ノ撰者ハ、駕洛國記ノ後ニ書キ添ヘテ、「案三國史、仇衡以梁中大通四年壬子、納土投羅、則計自首露初即位東漢建武十八年壬寅、至仇衡末壬子、得四百九十年矣、若以此記考之、則納土在後周ノ保定二年壬午、則更三十年、總五百二十年、今兩存之」ト云ヘリ。今羅紀ヲ案ズルニ、法興王十九年、（安閑天皇即位前二年、梁ノ武帝中大通四年、）「金官國主、金仇亥、與妃及三子、長曰奴宗、仲曰武德、季曰武力、以國帑寶物來降、王禮待之、授位上等、以本國爲食邑、子武力仕至角干、」眞興王二十三年（欽明天皇二十三年、陳ノ文帝天嘉三年、後周ノ武帝保定二年、）「加耶叛、王命異斯夫討之、斯多含副之、斯多含領五千騎、先馳入栴檀門、立白旗、城中恐懼、不知所爲、異斯夫引兵臨之、一時盡降云々」又斯多含傳ニ「眞興王命伊飡異斯夫、襲加羅國、時斯多含年十五六、請從軍云々、及抵其國界、請於元帥、領麾下兵、先入栴檀梁云々、大兵乘之、遂滅其國、洎師還、王策功賜加羅人口三百、受已皆放、無一留者云々」トアリ。金官ハ、加耶ノ異名ニシテ、加耶ハ即加羅ナルコト、前ニ云ヘルガ如シ。コノ三條ノ文ヲ並セ考フルニ、法興王ノ時ハ、新羅ニ降附シタルノミニテ、國土モ食邑トシテソノ儘ニ與ヘラレタレバ、亡滅トハ云フベカラズ。眞興王ノ時、「加耶叛」ト云ヘルハ、既ニ降附シタル國ノ又離貳シタルニテ、此ノ時始メテ擊チ滅サレタルナリ。然レバ加羅亡滅ノ年ニツキテ、始メヨリ二說アリシニハ非ズ、三國遺事ノ撰者ノ疑ヒハ、降附ヲ亡滅ト混ジタル故ナリ。

仇亥ノ子武力ハ、眞興王十四年、（欽明天皇十四年、梁ノ元帝承聖二年、）新州ノ軍主トナリ、翌年百濟ノ聖王明禮ガ新羅ノ管山城ヲ攻メタル時、武力州兵ヲ率キテ、之ヲ擊チ破リ、百濟王及佐平四人、士卒三萬人ヲ殺セルコト、羅紀ニ見ユ。然ルニ此ノ事ハ、加羅亡滅ノ前ニアレバ仇亥ノ降附シタル時ヨリシテ、武力等ハ、既ニ新羅ニ仕ヘタルナリ。因ニ云フ、管山城ノ役ハ、羅紀ニ「百濟王明禮與加良來攻管山城云々」トアリ。コノ加良ハ、即阿羅伽耶即安羅國ナルコトハ、欽明紀ノ文ニテ知ラル。三國史記ニ阿羅伽耶ノ事ノ見エタルハ、前ニ引キタル勿稽子ノ傳トコヽトニ所ノミナリ。

又異斯夫ノ傳ニ「智度路王時、爲沿邊官、襲居道權謀、以馬戲誤加耶（或云加羅）國取之、至十三年壬辰、爲何瑟羅州軍主云々」トアリ。智度路王ハ、即智證王ニシテ、「爲沿邊官」トハ、羅紀智證王六年、（武烈天皇七年、梁ノ武帝天監四年、）「置悉直州、以異斯夫爲軍主」トアルヲ云ヘルナリ。サレドモ悉直州ハ、新羅ノ北邊ニシテ、加羅ト隣接ノ地ニ非ザレバ、此ノ時加羅ヲ收ルベキ由ナシ。眞興王二十三年、加羅ヲ滅シタルハ、實ニコノ異斯夫ナルヲ本傳ニハ其ノ事ヲ少シモ言ハザルヲ見レバ、智度路王ノ時ト云ヘルハ、全ク眞興王ノ時ノ事ヲ誤リタルナリ。然ルニ東鑑ハ、此ノ事ヲ智證王六年ノ處ニ附記シタルハ甚疎カナリ。

又眞興王ノ加羅ヲ滅シタルハ、大加羅ノミナラズ、加羅國ナリ。欽明紀「新羅打滅任那官家」ノ原註ニ、「總言任那別言加羅ノ國、安羅ノ國、斯二岐ノ國、多羅ノ國、卒麻ノ國、古嵯ノ國、子他ノ國、散半下ノ國、乞飡ノ國、稔禮ノ國、合十國」トアル國々ノ中ニハ、此ノ時既ニ亡ビタリシ國モアレドモ、多クハ此ノ年又ハ此ノ年頃ニ滅サレタルナリ。地理志高靈郡ノ條ニ「凡十六世、五百二十年、眞興大王侵滅之」トアルハ、高靈ノ加耶ノ建國モ亡滅モ、全ク大加羅ト同年ナル趣ナリ。又咸安郡ノ條ニ、「法興王以大兵滅阿尸良國、（一云阿那加耶）以其地爲郡」トアレドモ、安羅ノ國ハ欽明紀ニ屢見エ、百濟ノ聖王ノ語ニ、「夫任那者以安羅爲兄」トサヘアリテ、眞興王ノ時マデ、南韓ノ要地トシテ存立シタレバ、法興王ノ滅セリト云フハ、決メテ眞興王ノ誤リナルベシ。

然ルニ羅紀ハ、甚疎略ニシテ、眞興王二十三年加羅ヲ滅セル事ノ外ハ、諸加耶ノ滅亡ハ、總テ記載セズ。且地理志金海小京ノ條ニハ、「古金官國、自始祖首露王、至十世仇亥王、以梁中大通四年、新羅法興王十九年、率百姓來降、以其地爲金官郡」ト云ヒテ、唯加羅降附ノ年ノミヲ擧ゲテ、其ノ亡滅ノ年ヲ脫シタルニ由リテ、大ニ後人誤解ノ端ヲ開ケリ。即東鑑ノ撰者ハ、羅紀ノ金官降附ト加耶亡滅トヲ以テ、全ク別國ノ事トシ、法興王十九年ニハ、「駕洛國王金仇衡降于新羅、王授位上等、以其國爲食邑號金官郡、」眞興王二十三年ノ處ニハ「新羅滅大伽耶云々、以其地爲大加耶郡」ト書キタルガ故ニ、眞興王ノ滅シタルハ、高靈ノ加耶ノミニシテ、金海ノ加耶ハ、前ニ既ニ亡ビタル事トナレリ。東覽ニ記セル趣モ、之ニ同ジ。大日本史任那傳ノ注ニ、東鑑東覽ヲ引キテ、欽明紀ニ合ヘリトシ、「意富加羅者大伽耶、而爲任那無疑矣云々、然則任那專指大伽耶也」ト云ヘル按ヲ載セタリ。ソハ此ノ史ノ撰者ハ、三國遺事ヲ見ズ、三國史記ヲバ引キタレドモ、東鑑ト異ナル所ニ注目セズシテ、唯東鑑東覽ニ據リテ考ヘタルガ故ニ、カク誤レルナリ。

サテ任那ハ、金海ノ加羅ノ別號ナルコトハ、前ニ云ヘリ。此ノ名ハ、垂仁天皇ノ時、御父崇神天皇ノ御名ヲ取リテ其ノ國ニ負セ給ヘル名ニシテ、垂仁紀ニ「故號其國謂彌摩那國」トアリ。崇神天皇ノ御名ハ、御眞木入日子印惠命、略シテハ御間城天皇ト申シタル故ニ、其ノ御名ノ頭ノ二音ヲ取リテ賜ハレルナリ。那ト添ヘタルハ、大御名ヲ國ノ名ニ負フト云フ義ナルベシ。其ノ後漢字ヲ用フル御世トナリテ、任那ト書ク事ニナリタレドモ、姓氏錄ニハ、御間名トモ彌麻奈トモ書キ、又三間名ノ公ト云フ姓モアリ。彌摩ノ音ニ任ノ字ヲ用ヒタル所由ハ、伴信友ノ中外經緯傳ニ、「任ノ字は、ジンまたニンの音なるを、ニンのニとミと親く通ふ音なれば、そのかみ彼ノ國の訛音にミンとも唱へならひたるまゝに、ミマといふに叶へて、任那と書連ねたるものなるべし。なほいはゞ昔より壬生にミブとニブと二樣唱へ來れるも、もと壬ノ字をニンともミンとも唱へたる故なるべきこと、はた思ひ合すべし」ト云ヘルガ如シ。此ノ名ハ、彼ノ國ノ書ニハ、多クハ見エザレドモ、前ニ引キタル宋書南齊書ナル倭國王ノ官爵、及通典、廣開土王碑ニ見エ、又三國史記强首傳ニ「臣本任那加良人名牛頭」トアリ。廣開土王碑ナルハ、任那ノ字ノ物ニ見エタル最モ古キモノナリ。

神功皇后ノ時、將軍荒田別鹿我別、新羅ヲ伐チテ、比自㶱、南加羅、㖨ノ國、安羅、多羅、卓淳、加羅ノ七國ヲ平定シ、其ノ後イツノ御世カハ詳カナラネドモ、欽明紀ニ見エタル斯二岐ノ國、卒麻ノ國、古嵯ノ國、子他ノ國、散半下ノ國、乞飡ノ國、稔禮ノ國ナドヲ取リ、宰ヲ置キテ、諸ノ韓國ヲ統制シ給ヘリ。コノ宰ハ、大加羅國即任那ノ國ニ居リシ故ニ　其ノ統制スル南韓ノ諸國ヲモ總テ任那ト言フコトニナレリ。雄略紀七年ニ任那ノ國司、同八年ニ日本ノ行軍元帥、繼體欽明紀ニ任那ノ日本府ナドアルハ、皆任那ノ宰ナリ。繼體紀ニ哆唎ノ國ノ守トアルモ、任那ノ宰ナレドモ　加羅ニ居ラズシテ、哆唎ニ居リシ故ニ、哆唎ノ國ノ守トハ云ヘルナリ。繼體天皇ノ御世ノ末頃ニ近江ノ毛野ノ臣、綏御ノ方ヲ失ヒテ、加羅ヲ擾亂シテヨリ、日本府ノ威令モ、行ハレズナリタレバ、加羅ハ、遂ニ貳心ヲ懷キテ、新羅ニ內應セリ、羅紀ニ「金官國仇亥來降」ト云ヘル、コレナリ。欽明天皇五

年、百濟ノ聖王、卓淳㖨國亡滅ノ理由ヲ論ジテ、新羅ニ內應シタルニ由レリトシ、「歷觀諸國敗亡之禍、皆由內應貳心人」ト云ヘリ。コハ唯卓淳㖨國ノミナラズ、加羅ノ亡滅モ實ニ內應ニ本ヅキタルナリ。加羅、已ニ貳心ヲ懷キテハ、日本府ハ、新羅ノ勢ニ迫ラレテ、加羅ニ駐在シ難ク、遂ニ本鎭ヲ安羅ニ徙シヽガ故ニ、欽明紀ニハ、任那ノ日本府ヲ安羅ノ日本府トモ云ヘリ。任那府ノ外ニ、別ニ安羅府アリシニハ非ズ。其ノ後同紀ニ日本府ノ執事、日本府ノ卿、日本府ノ大臣ナド見エタルハ、何レモ安羅ニ駐在セル任那ノ宰ナルベシ。

カクテ任那ノ名ヲ用フルニ、廣狹ノ二樣アリ。大加羅一國ヲ指シタルハ、崇神垂仁紀ノ任那國、雄略紀八年ノ任那王、繼體紀二十二年ノ任那王己能末多干岐ノ類ナリ。南韓諸國ノ總名トシタルハ、雄略紀七年ノ任那ノ國司、顯宗繼體宣化欽明諸帝紀ニ屢見エタル任那、宋書倭國傳ノ「倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國」、廣開土王碑ノ任那加羅、三國史記强首傳ノ任那加良ノ類ナリ。末ノ二例ハ、何レモ任那ノ中ノ加羅國ノ意ナリ。又任那諸國ノ中ニテ、加羅ハ、諸伽耶ノ宗國ニシテ、ソノ名最モ著シ、南齊書ニ專傳アル程ナレバ、加羅ヲバ特ニ引キ分ケテ、自餘ノ諸國ノミヲ任那ト云フコトアリ。宋書ノ「倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國」、「倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國」、通典ノ「褱迦羅任那諸國滅之」ノ類ハ、皆加羅ノ外ニ任那アルナリ。此等ノ區別ヲヨクセズバ、史ヲ讀ムニ、事情ノ通ジ難キコアルベシ。

第十五章　三國文化考

漢學ノ三國ニ見ハレタル時代ヲ考フルニ、大抵東晉ノ世ニ當レリ。あすとん氏ハ漢學ノ影響アリシ證トシテ、百濟新羅ニテ廟ヲ立テタル等ノ事ヲ引ケリ。ソハ、東鑑卷之一癸卯（漢ノ成帝鴻嘉三年百濟ノ始祖溫祚王元年）ノ處ニ、「夏五月、百濟立東明王廟、」己未、（漢哀帝元壽元年、百濟ノ始祖十年、）「夏四月、百濟立國母廟、」壬戌（漢ノ平帝元始二年、百濟ノ始祖二十年、）「春二月、百濟王設大壇、親祀天地、自是每歲四仲、王祭天及五帝」丙寅、（漢ノ王莽居攝元年、新羅南解王三年、）「春正月、新羅立始祖廟」庚辰、（王莽地皇元年、高句麗ノ大武神王三年、）「春三月、高句麗立東日王廟」ノ類ヲ謂ヘルナレドモ、此等ハ、漢制ニ依レルニ非ズシテ、其ノ國俗ニ從ヘル者ナルベシ。

三國史記雜志祭祀ノ條ニ、「按新羅宗廟之制、第二代南解王三年春、始立始祖赫居世廟、四時祭之、以親妹阿老主祭、第二十二代智證王、於始祖誕降之地奈乙、創立神宮以享之、至第三十六代惠恭王、始立五廟……至第三十七代宣德王、立社稷壇」トアリ。南解王ノ、親妹ヲシテ始祖ヲ祭ラシメタルハ、皇國ノ上代ニ、皇女ヲシテ伊勢ノ神宮ヲ齋キ祀ラシメ給ヒシニ似タル制度ニシテ、漢國ノ禮ニハ嘗テ有ラザル事ナリ。新羅ニテ漢制ニ倣ヒテ、宗廟社稷ヲ立テタルハ、實ニ惠恭王宣德王ヨリ始レリ。麗濟ノ廟祀ノ事ハ、「高句麗百濟祀禮不明、但考古記及中國史書所載者以記云爾」ト云ヒテ、後漢書梁書北史唐書冊府元龜及ビ麗濟ノ古記ヨリ、祭祀ニ關スル事ヲ摘錄シタレドモ、其ノ禮制ハ考フベカラズ。魏志高句麗傳ニ「好治宮室、於所居之左右立大屋、祭鬼神、又祀靈星社稷、」又「涓奴部……亦得立宗廟、祀靈星社稷」トアリ。コヽニ宗廟ト云ヘルハ、上文ナル鬼神ヲ祭ル大屋ヲ云ヘルナリ。又「以十月祭天、國中大會、名曰東盟、」「其國東有大穴、名隧穴、十月國中大會、迎隧神還於國、東上祭之、置木隧於神坐、」周書高麗傳ニ「有神廟二所、一曰夫餘神、刻木作婦人之象、一曰登高神、云是其始祖夫餘神之子、並置官司、遣人守護、蓋河伯女與朱蒙云」トアリ。コレラハ、皆其ノ國俗ニ依レル祭祀ナレバ、魏志ニ宗廟社稷ト云ヒ、麗紀濟紀ニ東明王廟ト云ヘルモ、漢制ニ倣ヘル者ニハアルベカラズ。百濟王設大壇親祀天地モ、支那ノ禮ト異ナリ。魏書高句麗傳ニ「以三月會獵于樂浪之丘、獲猪鹿、祭天及山川」トアルト同樣ナル祭祀ナルベシ。始祖ノ時ヨリ每歲四仲ニ天及五帝ヲ祭レル事ハ濟紀ニ見エズ。東鑑ノ撰者ハ、周書ニ其王以四仲之月、祭天及五帝之神、」トアルヲ取リテ、始祖ノ條ナル

祀天地ノ下ニ書キ加ヘタルナリ。サレドモ周書ハソノ時代ニ禮俗ヲ記シタルナレバ、古代ヨリ始レリトハ定ムベカラズ。廣開土王碑ニ「自上祖先王以來、墓上不安碑石、致使守墓人烟戶差錯」ナドアレバ陵墓ノ制モ極メテ簡朴ナリシコト知ルベシ。

麗紀琉璃王三年紀元六百四十四年、漢ノ成帝鴻嘉四年、ノ條ニ云、「王妃松氏薨、王更娶二女以繼室、一曰禾姬、鶻川人之女也、一曰雉姬、漢人之女也、二女爭寵、…禾姬罵雉姬曰、汝漢家婢妾、何無禮之甚乎、雉姬慙恨亡歸、王聞之、策馬追之、雉姬怒不還、王嘗息樹下、見黃鳥飛集、乃感而歌曰、翩々黃鳥、雌雄相依、念我之獨、誰其與歸。」あすとん氏ハ、コノ漢女ヲ娶レルコトヲ引キテ、句麗ノ、漢化ヲ被レル一證トシタレドモ、コハ句麗ノ漢化ヲ被レルカ、又ハ漢女ノ、句麗ニ化シタルカハ、知ルベカラズ。四言二韻ノ古詩ノ如キハ、國語ノ歌ヲ、後人ノ漢譯シタルニテ、當時ノ物ニ非ザルコト決シ。

羅紀祇摩尼師今十四年紀元七百八十五年、漢ノ安帝延光四年、靺鞨ノ、大嶺柵ヲ襲ヒシ處ニ、「王移書百濟請救、」阿達羅尼師今十二年、紀元八百二十五年、漢ノ桓帝延熹八年、阿飡吉宣叛キテ百濟ニ奔リシ處ニ「王移書求之、百濟不許、」魏志倭人傳ニ、魏帝曹芳正始元年、紀元九百年、ノ事トシテ、「倭王因使上表、答謝恩詔、」羅紀沾解尼師今五年、紀元九百十一年、魏帝曹芳嘉平三年、「春正月、始聽政於南堂、漢祇部人夫道者、家貧無諂、工書等、著名於時、王徵之爲阿飡、委以物藏庫事務、」訖解尼師今三十六年、紀元千五百年、晉ノ穆帝永和元年、「春二月、倭王移書絕交」ナドアリ。此等ノ文ニ據レバ、漢魏ノ世ヨリシテ、皇國モ新羅モ、既ニ文書ヲ用ヒタリシガ如シ。然レドモ漢ノ世ニ當リテ、新羅百濟ノ交涉セル事跡ハ、第十三章ニ云ヘルガ如ク、總テ疑ハシキ物ナレバ、移書ト云ヘルコトモ、事實トハ取リ難ク、又其ノ實ハ、使ヲ遣シテ辭命ヲ傳ヘシコトアルヲ、後ノ史家等ガ、漢風ニ潤色シテ移書ト書キタルニモアルベシ。倭王上表倭王移書ナド云ヘルハ、筑紫ノ酋長ノ所爲ナルベキ事、余ガ太古外交考ニ述ブルガ如シ。當時皇國ニテ、既ニ文書ノ用ヒラレシトモ見エザレバ、モシ眞ニ此ノ事アラバ漢人又ハ韓人ナドノ渡リ來ツル者アリシヲ一時雇ヒテ書カシメタルモノナルベシ。

高句麗百濟ニテ、漢學ノ一般ニ行ハレタルハ、太抵佛敎ノ東漸ト同時ニアリキ。麗紀小獸林王二年紀元千三十二年、晉ノ簡文帝咸安二年、「夏六月、秦王符堅、遣使及浮屠順道、送佛像經文、王遣使廻謝、以貢方物、立大學、教育子弟、」三年晉ノ孝武帝寧康元年、「始頒律令、」「四年、僧阿道來、」「五年春二月始創肖門寺、以置順道、又創伊弗蘭寺、以置阿道、此海道佛法之始」トアリ。小獸林王五年ハ百濟ノ近肖古王三十年ナリ。濟紀是ノ年「冬十一月王薨」ノ下ニ「古記云、百濟自開國已來、未有以文字記事、至是得博士高興、始有書記、然高興未嘗見於他書、不知其何許人也」トアリ。是ノ後九年、枕流王元年紀元千四十四年、晉ノ孝武帝太元九年、齊ノ處ニ「秋七月、遣使入晉朝貢、九月、胡僧摩羅難陁自晉至、王迎致宮內禮敬焉、佛法始於此、」其ノ明年、「春二月、創佛寺於漢山、度僧十人、」麗紀故國壤王九年、紀元千五十二年、晉ノ太元十七年、「三月、下教崇信佛法求福、」トアリ。サレバ晉ノ簡文孝武ノ世ハ、二國ニ文學佛教ノ並ビ起リシ時ナリ。

羅紀ニハ、阿飡夫道ノ工書算ヨリ後ハ、文學ニ關シタル事見エザレドモ、駕洛國記ニ「坐知王、一云金叱、義熙三年即位、娶傭女、以女黨爲官、國內擾亂……卜士筮得解卦、其辭曰解而拇、朋至斯孚、君鑑易卦耳、王謝曰、可擯傭女、貶於荷山島、改行其政、長御安民也」トアル義熙三年ハ、晉ノ安帝即位十一年ナリ。駕洛國記ノ年紀ハ、慥ナル者ニハアラネドモ、大抵東晉ノ末ニハ、東韓ノ地ニモ文學既ニ行ハレシナルベシ。雄略天皇十六年、後魏ノ孝文帝延興二年、百濟ノ蓋鹵王十八年、百濟王餘慶ガ魏ニ上レル表文ハ、魏書百濟傳ニ見エ、同二十三年、宋ノ順帝昇明二年、倭王武ガ宋ニ上レリト云ヘル表文ハ、宋書夷蠻傳ニ見ユ。此ノ表ハ、任那人ノ書ケル者ナルコトハ、三韓朝貢志ニ言フベシ。此ノ二表ノ文辭典雅ナルヲ見レバ、當時百濟任那ノ文學頗ル上進シタリケンコト知ラル。羅紀智證王四年ニ國名王號ヲ定メテ、其

ノ明年、「夏四月、制喪服法、頒行、」又明年、「春二月、王親定國內州郡縣」ナドアリ、法興王七年（繼體天皇十四年、梁ノ武帝普通元年）ニ至リテハ、「春正月、頒示律令、始制百官公服朱紫之秩」トアリテ、其ノ制雜志ニ見ユ。高句麗始頒律令ヨリ百四十七年ノ後ナリ。

新羅ニテハ、佛法ノ行ハレシモ、二國ヨリ後レタリ。三國遺事ニ、毘處王（即炤智王）即位十年戊辰（仁賢天皇元年、齊ノ武帝永明六年、）內殿焚修ノ僧與宮主潛ニ通ジテ、誅ニ伏シタルコト見エ、羅紀法興王十五年、（繼體天皇二十二年、梁ノ武帝大通二年、）「肇行佛法」ノ下ニ、「初訥祇王時、沙門墨胡子自高句麗至一善郡、郡人毛禮於家中作窟室安置、於時梁遣使賜衣着香物、群臣不知其香名與其所用……、時王女病革、王使胡子焚香表誓、王女之病尋愈……、俄而不知所歸、至毗處王時、有阿道（一云作我道）和尚、與侍者三人、亦來毛禮家、儀表似墨胡子、住數年、無病而死、其侍者三人留住、講讀經律、往々有信奉者、至是王亦欲興佛敎云々」トアリ。訥祇王ハ、宋ノ世ニ當リ、毗處王ハ、齊ノ世ニ當リ、孰レモ梁ノ前ニアレバ、梁遣使ノ梁ハ、宋ノ誤リカ、サルニテモ、宋ノ時ハ、新羅ト交通シケル由見エズ。三國遺事ニ、宋ノ後廢帝（劉昱）ノ時、「新羅始通吳國」トアレドモ、コレハ、慈悲王ノ時ニシテ、訥祇王ヨリ後ノ事ナレバ、此ノ文、イカニモ疑ハシ。又阿道ハ、麗紀ニ據レバ、小獸林王ノ時、句麗ニ來リテ、伊佛蘭寺ニ住セシニ、其レヨリ百餘歲ノ後ナル毗處王ノ時ニ、新羅ニ至レリト云フモ、非ナリ。羅紀ノ原註ニ「此據金大問鷄林雜傳所記書、與韓奈麻金用行所撰我道和尚碑、所錄殊異」トアリ。三國遺事ニ引キタル我道ノ碑ニ據レバ、我道ハ、曹ノ魏人我崛摩ノ子ニシテ、句麗ニ生レ、十六ノ時、魏ニ往キテ學ビ、十九ノ時句麗ニ還リ、未雛王（即味鄒王）二年、（紀元九百二十三年、魏ノ元帝景元四年、）雞林ニ至リ、續林（今一善縣）ノ毛祿（祿與禮形近之訛）ガ家ニ留マリ、明年成國公主ノ疾ヲ治シテ、遂ニ興輪永興二寺ヲ創シタル由見ユ。遺事ニ之ヲ論ジテ、「若在未雛之世、則却超先於到麗甲戌百餘年矣、于時雞林未有文物禮敎、國號猶未定、何暇阿道來請奉佛之事……、訥祇既與獸林世相接也、阿道之辭麗抵羅、宜在訥祇之世」トテ、墨胡子ヲ以テ阿道ノ綽名トセリ。此ノ說、或ハ然ラン。サレバ訥祇ノ時、佛法既ニ始マリタレドモ、其ノ後又衰ヘ、百餘年ヲ經テ、法興王ニ至リテ隆興シタルナリ。

三國ニテ修史ノ擧アリシハ、漢學ノ盛ニ行ハレタル第一ノ結果ナリ。百濟ノ最モ古キ記錄ハ、百濟記ニシテ、其ノ編述ノ成レルハ、蓋鹵王ノ世（雄略天皇ノ御世）ノ末、若クハ其ノ後ノ事ナルベシ。新羅ニテハ、眞興王六年、（欽明天皇六年、梁ノ武帝大同十一年、）ニ至リテ、始メテ國史ヲ修撰セリ。高句麗ニテ、古史ヲ删修シテ新集五卷トシタルハ、嬰陽王十一年（推古天皇八年、隋ノ文帝開皇二十年）ノ事ナレドモ、ソノ古史ナル留記一百卷ハ、ソレヨリ前ニ成レリシナリ。委シクハ第一章ニ云ヘリ。

續博物志ニ云、「倭辰余國、或橫書、或左書、或結繩、或鍥木、唯高句麗摹寫類法、取正中華。」續博物志ハ四庫全書提要子部小說家類瑣語之屬宋人ノ末ニ收メテ、「舊本題晉李石撰、然第二卷稱今上於前朝作鎭睢陽、洎開國號大宋、是宋太祖時人矣、而又稱曾公亮得龍之脊、王安石得龍之睛、全摭陸佃埤雅之說、又引子華子陳正敏遯齋閒覽、曾慥集仙傳、均南北宋間之書、則併非北宋初人、別本末有其門人廸功郎眉山蔣黃宋泰跋、稱爲方舟先生、方舟爲宋李石之號、所作諸如例、已著錄經部中、則稱晉李石、誤也、然石爲紹興乾道間人、亦不應稱太祖爲今上、殆亦剽掇說部以爲之、仍其舊文、未及削改歟、」又其ノ冗復矛盾附會舛誤アルコトヲ摘出シテ、「特以宋人舊笈、軼聞瑣語、間有存焉、姑錄以備參考云爾」トアレバ、此ノ書ハ、晉代ノ古書ニ非ザルノミナラズ、其ノ記載ノ事項モ、確實ナル者トハ見エザレバ、據リ難キ事多カルベシ。サテ辰ハ、辰韓ニテ新羅ヲ云ヒ、余ハ百濟ヲ云ヘルナリ。百濟ノ王家ハ、夫餘人ノ裔ニテ、餘氏ト稱シ、又聖王明禮ノ時、都ヲ泗沘ニ遷シテ、國ヲ南扶余ト名ヅケシ故ニ、余國トモ云ヘリ。高麗ハ、高句麗ノ中略ニテ、齋梁以後ノ通稱ナルコト下文ニ云フ如シ。結繩鍥木ハ梁書新羅傳ニ「無文字、刻木爲信、」南史倭國傳ニ「無文字、唯刻木

結繩」ナドアルニ依リテ云ヘルナレドモ、横書左書ハ、イカナル文字ヲ云ヘルニヤ。據アル事トモ思ハレズ。世或ハ此ノ書ニ據リテ晉代以前ヨリ、三韓諸國ニ文書アリシコトヲ證セントスル者アルニ由リテ、今其ノ書採ルニ足ラザルコトヲ聊カ辯ジ置クナリ。

三國ノ官制王號姓名等ノ沿革モ、皆幾分カ其ノ文化ノ度ニ關係セリ。先ヅ其ノ官制ヲ考フルニ、新羅ハ、唐末マデ存立シタレバ、唐ノ時ノ制度ハ、三國史記雜志ニ詳カナレドモ、他ノ二國ノ事ニ就テハ、雜志職官ノ條ニ「高句麗百濟職官、年代久遠、文墨晦昧、是故不得詳悉、今但以下其著於古記及中國史書者、爲之志」ト云ヒテ、北史隋書新舊唐書冊府元龜ヲ引キ、其ノ古記ニ據リタルハ、句麗ニハ「左輔、右輔、大主簿、國相、九使者、中畏大夫、右見本國古記、」百濟ニハ「左輔、右輔、左將、上佐平、北門頭、右見本國古記」トアルノミナリ。

高句麗ノ官名ハ、既ニ魏志高句麗傳ニ見エタレバ、其ノ創設ハ甚古キ者ナルベシ。其ノ文、次ノ如シ「其國有王、其官有相加、對盧、沛者、古雛加、主簿、優台、丞、使者、皁衣先人、尊卑各有等級……其置官、有對盧、則不置沛者、有沛者、則不置對盧、王之宗族、其大加皆稱古雛加……、諸大加亦自置使者皁衣先人、名皆達於王、如卿大夫之家臣、會同坐起、不得下與王家使者皁衣先人同列。」高官ヲ加ト稱スルハ、夫餘ノ方言ト見エテ、同書夫餘傳ニ「皆以六畜名官、有馬加牛加猪加狗加犬使大使者使者」トアリ。優台ハ麗紀ニ于台ト書ケリ。主簿ト丞トハ、漢ノ縣吏ノ稱ニ因レルナリ。梁書高句驪傳ニ據レバ、晉ノ孝武帝ノ末年、燕帝慕容寶「以句驪王安爲平州牧、封遼東帶方二國王、安始置長史司馬參軍官」トアレドモ、此等ノ官名ハ、麗紀ニ更ニ見エズ。周書高麗傳ニ云、「大官有大對盧、次有太大兄、大兄、小兄、意俟奢、烏拙、太大使者、大使者、小使者、褥奢、翳屬、仙人、幷褥薩、凡十三等、分掌內外事焉、其大對盧、則以彊弱相陵奪而自爲之、不由王之署置也。」烏拙ハ通典ニ鬱折ト書キテ、主簿ノ方言ナリ。凡十三等トアレドモ、隋書ニ依レバ、凡十二等ニシテ、褥薩ハ、此等ノ官等ノ外ニアルナリ。隋書高麗傳ニ云、「官有太大兄、次大兄、次小兄、次對盧、次意俟奢云々（烏拙ヨリ仙人マデ周書ニ同ジ、）凡十二等、復有內評外評五部褥薩。」對盧ハ即大對盧ニシテ、高麗ノ最高官ナルヲ小兄ノ次ニ列シタルハ、誤リナリ。二書ノ官名ハ、曹魏ノ時トハ多ク變ジタレドモ、對盧使者ハ、猶舊名ヲ存シ、又烏拙ハ、魏志ノ主簿、仙人ハ魏志ノ先人ナリ。通典邊防高句麗ノ條ニ云、「其國建官有九等、其一曰吐捽、舊名大對盧、總知國事、次曰太大兄、次鬱折、華言主簿、次太大使者、次皂衣頭大兄、東夷相傳皂衣先人者也、以前五官、掌機密、謀政事、徵發兵馬、選授官爵、次大使者、次收位使者、次上位使者、次小兄、次諸兄、次過節、次不過節、次先人、又有狀古鄒加掌賓客、比鴻臚卿、以太大使者爲之、又有國子博士、大學博士、舍人、通事、典書客、皆以小兄以上爲之、又其諸大城置傉薩、比都督、諸城置處閭近支、比刺史、亦謂之道使、其武官曰大模達、比衞將軍、以皂衣頭大兄以上爲之、次末客、比中郎將、以大兄以上爲之、其次領千人以下、各有差等、」建官有九等ト云ヘレドモ、吐捽ヨリ先人マデ、實ニ十四等アリ。高等ノ五官ヲ除キテ、其ノ下ノミヲ數ヘタルニヤ。周書隋書トハ、次序稍異ナレドモ、名稱ハ、大抵同ジ。收位使者上位使者ハ、小使者ヲ二等ニ分チタルナリ。諸兄ハ、新設ノ官、過節不過節ハ、褥奢翳屬ヲ義譯シタル名ナルベシ。皂衣頭大兄ヲ古ノ皂衣先人トシタルハ、イカヾ。皂衣ト先人トハ、二官ニシテ、先人ノ名ハ、最下ノ等ニ見ユレバ、皂衣頭大兄ハ、即魏志ノ皂衣ナリ。周書ニ意俟奢トアルハ、恐ラクハ皂衣ノ方言ナルベシ。舊唐書高麗傳ニハ、「其官大者號大對盧、比一品、總知國事、三年一代、若稱職者、不拘年限、交替之日、或不相祗服、皆勒兵相攻、勝者爲之、其王但閉宮自守、不能制禦、次曰太大兄、比正二品、對盧以下、官總十二級、外置州縣六十餘城、大城置傉薩一、比都督、諸城置道使、比刺史、其下各有僚佐、分掌曹事」トアリテ、十二級ノ官名（大對盧太大兄ノ外

ハ、省略セリ。新唐書高麗傳ハ、通典及舊唐書ノ文ニ依リタレドモ、通典ノ太大兄收位使者小兄不過節ヲ除キテ、小使者ヲ加ヘ、又古鄒大加ヲ先人ノ次ニ加ヘテ、十二級ノ數ニ合セタルハ、杜撰ナル書樣ナリ。

百濟ノ官制ハ、周書百濟傳ニ「官有十六品、左平五人一品、達率三十人二品、恩率三品、德率四品、扞率五品、柰率六品、六品已上、冠飾銀華、將德七品、紫帶、施德八品、皂帶、固德九品、赤帶、季德十品、青帶、對德十一品、文督十二品、皆黃帶、武督十三品、佐軍十四品、振武十五品、克虞十六品、皆白帶、自恩率以下、官無常員、各有部司、分掌衆務、內官有前內部、穀部、肉部、內掠部、外掠部、馬部、刀部、功德部、藥部、木部、法部、後宮部、外官有司軍部、司徒部、司空部、司寇部、點口部、客部、外舍部、綢部、日官部、都市部、都下有萬家、分爲五部、曰上部前部中部下部後部、統兵五百人、五方各有方領一人、以達率爲之、郡將三人、以德率爲之、方統兵一千二百人以下、七百人以上、城之內外民庶及餘小城、咸分隷焉」トアリ。左平五人ハ、新舊唐書ニ據レバ、六人ト云フベシ。隋書百濟傳十六品官ノ名、周書ニ同ジ、唯達率ハ、大率ト書キ、扞率ハ、杆率ト書キ、克虞ハ、剋虞ト書ケリ。又地方官ノ事ハ、「長吏三年一交代、畿內爲五部、部有五巷、士人居焉、五方各有方領一人、方佐貳之、方有十郡、郡有レ將」トアリ。此ノ文ニ據レバ、

周書ニ郡將三人トアルハ、一郡ノ將ニシテ、十郡即一方ニハ三十人、五方ニテ百五十人アル割合ナリ。梁書百濟傳ニ「謂邑曰擔魯、如中國之言郡縣也、其國有二十二擔魯、皆以子弟宗族分據之」トアル擔魯ハ、即隋書ノ郡ナルベシ。然レドモ隋書ノ郡數ハ、五方ニテ五十郡ナレバ、二十二擔魯ノ數ト合ハズ。孰レカ是ナルヲ知ラズ。北史百濟傳ハ、周書隋書ヲ幷セ取リタルノミニシテ、異說ナシ。唯周書ノ穀部肉部ヲ穀內部ト誤リ、都市部ノ都ノ字ヲ脫シ、萬家ノ家ノ字ヲ脫シテ、萬ヲ方ト誤リ、方統兵云々ノ方ノ字、內外民庶ノ庶ノ字ヲ脫シタリ。又統兵五百人ノ上ニ、部ノ字ヲ加ヘタレバ、五百人ハ、一部ノ兵ニシテ、五部ニテ二千五百人アルコト、ナレリ。舊唐書百濟傳博ニ云「所置內官、曰內臣佐平、掌宣納事、內頭佐平、掌庫藏事、內法佐平、掌禮儀事、衞士佐平、掌宿兵衞兵事、朝廷佐平、掌刑獄事、兵官佐平、掌在外兵馬事、又外置六帶、方管十郡……、其王大袖紫袍、青錦袴、烏羅冠、金花爲飾、素皮帶、烏革履、官人盡緋爲衣、銀花飾冠、庶人不得衣緋紫」。六帶ノ帶ハ、方ノ誤リナルベシ。諸書皆五方トアルヲ、コヽニ六方ト云ヘルハ、北史ニ「都下有方」ト誤リテ書ケルニ據リテ、五方ト都下ノ方トヲ合セテ擧ゲタルニヤ。新唐書百濟傳ニ「官有內臣佐平者、宣納號令、內頭佐平、主帑藏、內法佐平、主禮、衞士佐平、典衞兵、朝廷佐平、主獄、兵官佐平、掌外兵、有六萬、方統十郡」トアルハ、全ク舊唐書ノ文ヲ故刪シタルノミナリ。六萬ノ萬ハ方ヲ万ト誤リタルナリ。

此等ノ制度ハ、周隋ヨリ唐初マデノ間、百濟ニ行ハレタル者ヲ記シタルノミニシテ、其ノ制定ノ時代ハ、知ルベカラザル事ナルニ、濟紀ニハ、古爾王二十七年、（紀元九百二十年、魏ノ元帝景元元年）「春正月、置內臣佐平、掌宣納事云云、（舊唐書ノ文ヲ取リテ、六佐平ノ職掌ヲ記セリ。）又置達率恩率云々（周書北史ニ據リテ、十六品官ノ名ヲ列記セリ。）六佐平並一品、達率二品云々、（周書北史ニ據リテ、品等ヲ記セリ。）十六二月下令、六品以上服紫（隋書ニハ、將德以上ノ處ニ服紫帶トアリ。）以銀花飾冠（隋書ニ「其冠制並同、唯柰率以上、飾以銀花」トアルニ據レリ。）十一品以服緋（舊唐書ニ「官人盡緋爲衣」トアリ。）十六品以上服青」（此ノ事、支那ノ史ニ見エズ。）二十八年、「春正月初吉、王服紫大袖袍、青錦袴、金花飾烏羅冠、素皮帶、烏革履、（全ク舊唐書ノ文ニ據レリ。）坐南堂聽事」ト記シタリ。然レドモ雜志色服ノ條ニ、「高句麗百濟衣服之制、不可得而考、今但記見於中國歷代史書者」ト云ヒテ、隋書北史舊唐書中、百濟ノ衣服ニ關スル所ヲ引キ、雜志職官ノ條ニモ、前ニ引キタル如ク、百濟ノ職官ノ詳カナラザル事ヲ云ヘル程ナレバ、六佐平、十六品官、君臣ノ服飾ノ事ハ、全ク支那ノ史ニ據リタル者ニシテ、百濟ノ古記ニ本ヅキタルニハ非ズ。サレバ其ノ制定ノ事ヲ古爾王ノ世ニ記シタルハ、恐ラクハ史家ノ臆想ヲ以テ其ノ時代ヲ定メタル者ナルベシ。若クハ古爾王ノ時官制ヲ立テタリト云ヘル

傳說ナドノアリシトシテモ、其ハ、極メテ簡朴ナル者ナルベケレバ、前記ノ如ク、整然トシテ秩序アル者ハ近肖古王以來、宋齊ニ交通シテ、文化大ニ進ミタル後ノ制度ナルベシ。

新羅ノ官制ハ、隋書新羅傳ニ「其官有十七等、其一曰伊罰干、貴如相國、次伊尺干、次迎干、次破彌干、次大阿尺干、次阿尺干、次乙吉干、次沙咄干、次及伏干、次大奈摩干、次奈摩、次大舍、次小舍、次吉士、次大烏、次小烏、次造位」トアリ。北史新羅傳モ、之ニ同ジ。伊罰干ハ、三國史記雜志新羅職官ノ處ニ、「伊伐湌、或云伊罰干、或云一伐湌、或云角干、或云角粲、或云舒發翰、或云舒弗邯」トアリテ、羅紀及列傳ニハ、角湌トモ書ケリ。伊尺干ハ、雜志ニ「伊尺湌、或云伊湌」トアリ。迎干ハ、匝干ノ誤寫ニテ、雜志ニ「匝湌、或云匝判、或云蘇判」トアリ。釋日本紀ニ「私記曰、蘇音匝、判音干」トアレバ、蘇判ト書キテモ、音ハ匝干ニ同ジキナリ。破彌干ハ、彌ハ、珍ヲ弥ニ誤リタルニテ、雜志ニ「波珍湌、或云海干、或云破彌干」トアリ。紀傳ニハ海湌トモ書ケリ。大阿尺干ハ、雜志ノ「大阿湌」ニテ、紀傳ニハ「大阿干」トモ書ケリ。大阿湌以上五級ハ、雜志ニ「自此至伊伐湌、唯眞骨受之、他宗則否」トアリテ、王族ノミニ授クル爵號ナリキ。阿尺干ハ、雜志ニ、「阿湌、或云阿尺干、或云阿粲、自重阿湌、至四重阿湌、」トアリテ、阿干トモ書キ、乙吉干ハ、「一吉湌、或云乙吉干」トアリテ、一吉干トモ書キ、沙咄干ハ、「沙湌、或云薩湌、或云沙咄干」トアリテ、沙干トモ書キ、及伏干ハ、「級伐湌、或云級湌、或云及伏干」トアリテ、級干トモ書ケリ。續紀大寶三年ニハ沙干ヲ薩韓、級干ヲ級韓トモ書ケリ。大奈摩干ハ、干ハ、衍字ニテ、雜志ニ「大奈麻、或云大奈末、自重大奈麻、至九重大奈麻、」奈摩ハ雜志ニ、「奈麻、或云奈末、自重奈麻、至七重奈麻、」大舍、小舍、吉士、大烏、小烏、造位ハ、雜志ニ「大舍或云韓舍、舍知、或云小舍、吉士、或云稽知、或云吉次、大烏或云大烏知、小烏或云小烏知、造位、或云先沮知」トアリ。紀傳又國史ニ韓奈麻ト云ヘルコト往々見ユ、大舍ヲ韓舍トモ云ヘルニヨレバ、韓奈麻ハ、即大奈麻ナルベシ。紀傳ニハ、此ノ外ニ選干迊干高干ナド見エタリ。迊干ハ、匝干ノ誤寫ナルベシ。撰干高干ハ、詳ナラズ。駕洛國記ニ、「取鷄林職儀、置角干阿叱干級干之秩」トアル阿叱干ハ、隋書ノ阿尺干ナリ。湌ハ、字典ニ「音飡、與餐同」又「按說文、餐或从水作湌、後人譌省作湌」トアリ。國史及東國通鑑等ニ多クハ湌ト書ケルハ、俗字ヲ用ヒタルナリ。湌ト干トハ、韻同ジクシテ、發聲異ナレドモ、韓史ニハ、常ニ換用スレバ、韓音相通ゼシナルベシ。

又此等ノ干ハ、正シクハ干岐ト云ヒケント思ハル、由アリ。其ハ、先ヅ神功紀ニ「以微叱已知波珍干岐爲質」トアル波珍干岐ハ、即第四等爵ナル破珍干ナリ。又梁書新羅傳ニ「其官名、有子賁旱支、齊旱支、謁旱支、壹告支、奇貝旱支」トアリ。支ハ、常ニハ音巵ナレドモ、字典ニ「集韻、翹移切、音祇、令支、縣名」トアリテ、祇ノ音ニモ用ヒタレバ、コヽモ然用ヒタルナリ。皇國ニテモ、支字ヲ、きノ假名ニ用フルハ、彼ノ國ニ倣ヘルニヤ。翹移切ニテハ、濁音ナレドモ、伎岐等ノ字モ、韻鏡ニテハ濁音ナルヲ、記紀萬葉ニ清音ニ用ヒタルハ、彼ノ國ノ舊音ニ依レリト覺シケレバ、コノ支モ、彼ノ國ニテ清音ノきニ用ヒタルナリ。同書倭傳ニ、壹岐國ヲ一支國ト書ケルモ、コレニ同ジ。壹告支ハ、告ハ、吉ノ誤リニテ、南史ニハ吉トアリ、又支ノ上ニ旱ノ字脫ケタリ。カクテ子賁旱支ハ、舒弗邯ノ訛、齊旱支ハ、匝干、謁旱支ハ阿尺干、即阿干、壹吉旱支ハ、乙吉干、奇貝旱支ハ、及伏干ナリ。南史ニハ子賁旱支ノ次ニ壹旱支アリ。コハ、伊尺干即伊湌ナリ。然レバ、阿湌級湌ナド云ヘル爵ハ、本ハ阿尺干岐及伏干岐ナド云ヒシヲ、略シテ阿尺干及伏干ト云ヒ、又略シテ阿干級干ト云ヒ、遂ニ轉ジテ阿湌級湌トナレルナリ。

此ノ十七等ノ創設ハ、羅紀ニ儒理尼師今九年（紀元六百九十二年、漢光武帝建武八年、）ノ事トシタレドモ、此ノ時代ノ年紀ハ、信憑スベキモノニ非ザレバ、慥ナル事ハ、知リ難シ。但此等ノ官名ハ、雜志ニモ「曰伊伐湌伊湌等者、皆夷言、不

知所以言之之意」ト云ヘル如ク、何レモ新羅ノ古言ニシテ、漢字ノ義ヲ用ヒシニ非ザレバ、其ノ創設ハ、百濟ノ十六品官ナドヨリハ古キ者ナルベシ。新羅ノ官制ニ漢文學ノ影響ノ現レタルハ、法興王四年、（繼體天皇十一年、梁武帝天監十六年、）「始置兵部令、」同十八年（繼體天皇二十五年、梁武帝中大通三年、）「拜伊湌哲夫爲上大等、總知國事、上大等官始於此、如今之宰相、」眞平王三年、（敏達天皇十年、隋ノ文帝開皇元年、）「始置位和府、如今吏部、」五年、「始置船府署大監弟監各一員、」六年、「置調府令一人、掌貢賦、乘府令一員、掌車乘」、八年、（用明天皇元年、隋ノ開皇六年）「置禮部令二員、」十三年（崇峻天皇四年隋ノ開皇十一年）「置領客府令六員、」四十四年、（推古天皇三十年、唐ノ高祖武德五年）「初王七年、大宮梁宮沙梁宮三所、各置私臣、至是置內省私臣一人、兼掌三宮、」四十五年、「置兵部大監二員」、四十六年、「置侍衛府大監六員、賞賜署大正一員、大道署大正一員」ナドアリ。此ヨリ以後官名ノ增設改正ハ、何レモ漢化ノ影響ニ非ザルハ無シ。

三國ノ君主ノ稱號ハ、新羅ノ始祖赫居世ハ、居西干ト號シ、第二代南解ハ、次次雄ト號シ、儒理ヨリ實聖マデ十六代ハ、尼師今ト號シ、訥祇ヨリ智大路マデ四代ハ、麻立干ト號ス。智大路麻立干ノ四年、（武烈天皇五年、梁ノ天監二年、）始メテ國號ヲ定メ、王ト稱セリ。コレ、即智證王ナリ。居西干ハ、三國遺事ニ居瑟邯ト書キ、羅紀ニ「辰言王、或云呼貴人之稱」トアリ。次次雄ハ、羅紀ニ「或云慈充、金大問云、方言謂巫也、世人以巫事鬼神、尙祭祀、故畏敬之、遂稱尊長者爲慈充」トアリ。コハ、國君ヲ呼ビテ巫ト云ヘルニテ、所謂祭政一致ノ風ナリ。魏志ニ馬韓ノ俗ヲ記シテ、「信鬼神、國邑各立一人、主祭天神、名之天君」トアリテ、長帥ノ外ニ、天君ト云ヘル者アリ。辰韓ハ、魏志ニ「不得自立爲王」魏略ニ「明其爲流移之人、故爲韓所制」トアリテ、長帥ノ事モ、天君ノ事モ見エザレドモ、其ノ巫ヲ尊ブコトハ、馬韓ニ同ジカルベケレバ、新羅ノ慈充ハ、恐ラクハ天君ト同義ナルベシ。尼師今ハ新羅ノ方言ニテ、謂齒理ト云ヘリ。羅紀ニ「初南解薨、儒理當立、以大輔脫解素有德望、推讓其位、脫解曰、神器大寶、非庸人所堪、吾聞聖智人多齒、試以餅噬之、儒理齒理多、乃與左右奉立之、號尼師今、古傳如此、金大問則云、昔南解將死、謂男儒理壻脫解曰、吾死後、汝朴昔二姓、以年長而嗣位焉、其後金姓亦興、三姓以齒長相嗣故稱尼師今」トアリ。師ハ遺事ニ叱ト書ケリ。麻立干ハ、遺事ニ「立一作禮」トアリ。金大問云「麻立者、方言謂橛也、橛謂□標、准位而置、則王橛爲主、臣橛列於下、因以名之」ト云ヘリ。

居西干麻立干ノ干ハ、辰弁諸韓ノ方言ニシテ、上ハ國君ヨリ下ハ村邑ノ長マデ、凡テ尊長ヲ云フ名ナリ。駕洛國記ニ、我刀干、汝刀干、彼刀干、五刀干、留水干、留天干、神天干、五天干、神鬼干ヲ載セテ、「九干者、是酋長、領總百姓、凡一百戶、六萬五千人」ト云ヒ、羅紀婆娑尼師今廿三年ノ處ニ、音什伐國主陀鄒干ト云ヒ、居道傳ニ「仕脫解尼師今爲干、」朴堤上傳ニ「堤上仕爲歃良州ノ干」、又「水酒村ノ干伐寶靺、一利村ノ干仇里、廼利伊村ノ干波老」ナド見エタルハ、一國一州一村ノ長ナリ。前條ニ云ヘル爵名ノ干モ、義ハ同ジ。尼師今ハ、齒理ト云フ說アレドモ、下ノ今ハ、干ノ轉レルニハ非ザルカ。廣開土王碑ノ新羅安錦、神功紀ノ新羅王波沙寐錦ノ錦ハ、即尼師今ノ今ナルベシ。此等ノ干ヲ、國史ニハ干岐ト書ケリ。垂仁紀ニ、意富加羅ノ國ノ王之子干斯岐阿利叱智干岐、神功紀ニ、卓淳ノ王末錦旱岐、加羅ノ國王己本旱岐、繼體紀ニ、任那ノ王己能末多干岐、新羅ノ上臣伊叱夫禮智干岐、欽明紀ニ、任那諸國ノ旱岐ナド多ク見エタレバ、君長ヲ稱スル干モ、正シクハ干岐ト云ヒケンコト、爵名ノ場合ト同例ナリ。然ニ淸ノ高宗ノ三韓訂謬ニハ「若夫三韓命名、史第列馬韓辰韓弁韓、（亦曰弁辰）而不詳所以稱韓之義、陳壽魏志、直云韓地韓王、魚豢魏略、且以爲朝鮮王準冒姓韓氏、其爲附會尤甚、蓋國語及蒙古語、皆謂君長爲汗、韓與汗音相混、史載三韓各數十國、意當時必有三汗分統之、史家既不知汗之爲君、而庸鄙者至謬韓爲族姓、何異和槃捫籥以喩日哉」ト云ヘリ。案ズルニ滿洲蒙古ノ方言ナル汗ト云フ名ハ、古ノ可汗ヨリ訛リタルニテ、諸韓ノ君長ヲ稱スル干トハ既ニ同ジカラズ。

又其ノ本言ナル干岐トハ益〻相遠シ。可汗ノ號ハ、魏書ニ據レバ、道武帝ヨリ二十餘世ノ前ナル酋長ヨリ用ヒ始メテ、新羅ノ始祖ノ居西干ト稱シタルヨリモ古キ者ナレドモ、漠北ニ僻居シタル索頭部ノ祖先ト半嶋ノ南端ナル諸韓ノ國ト、ソノカミ交通アリシ趣モ見エザレバ、索頭部ノ方言ノ南韓ニ遷リタリトハ考ヘラレズ。且可汗ハ匈奴ノ單于ノ如ク、北方ノ至尊ノ號ナルニ、干岐ハ國君ヨリ村長マデ兼用スル普通ノ稱ナレバ、自ラ別種ノ言ナリ。サレバ韓國ハ、可汗ノ國ニハ非ズシテ、干又ハ干岐ノ國ト云フ義ナルベシ。

三國史記ハ、新羅上代ノ君ヲバ、皆其ノ方言ノ本號ニ從ヒテ記シタレドモ、句麗百濟ノ君ハ、國初ヨリ皆王ト書キタレバ、東鑑ニ之ヲ論ジテ、「麗濟立國、皆後於赫居世、赫居世尚未稱王、朱蒙溫祚、艱難草創、僅能自保、其稱王、未可知也、金富軾作三國史、於赫居世本紀稱居西干、於朱蒙溫祚皆稱王、是固可疑云々」ト云ヘリ。周書百濟傳ニ云、「王姓扶餘氏、號於羅瑕、民呼爲鞬吉支、夏言並王也、妻號於陸、夏言妃也」。コノ鞬吉支ハ、新羅任那ノ干岐ト音近ケレバ、本ハ同ジ韓語ヨリ出デタル名ナルベシ。日本紀ニハ、百濟ノ國王又ハ國主ト云ヘルニ「コニキシ」或ハ「コキシ」ト訓ヲ附ケタルハ、其ノ國言ノ名ノ、古クヨリ皇國ニ傳ハレルニテ、周書ノ文ト合ヘリ。古事記傳三十ノ六十一丁に云、「書紀ノ釋に、王后、太子、私記ニ曰、古爾於留、又古爾世之、並ニ百濟之語也と云り。此ノ私記の文は、世之の下に、牟ノ字脱たるなるべし。書紀今ノ本の訓、大后に斤於流コムヲル、コニヲル、王后にもコニオル、太子にコニセシム、コムセシムなど附ケたり。コニともコムとも云は、王に就たる號と聞ゆ。王子にはセシムと附ケたり、又大夫人にハシカシ、夫人にハシカシとも、オリケとも、オリクとも附ケたり、その中に、高麗のを云るもあり。北史ノ百濟ノ傳に、王ノ妻號於陸、夏言ノ妃也と云るに依らば、オリケとあるは、クをケに誤れるにや。さて又百濟ノ國王をニリムと訓る、往々あり。其外にも異なる訓ども見えたれども、寫シ誤リなどもありと見えて、さだかならず……。抑三國の中に百濟のみ、其ノ國言の號どもの、彼此傳はれるは、百濟は、中にも殊に親しく奉仕れる故なるべし。」サテ鞬吉支於陸ノ號ヲ王及妃ト改メタルハ、何レノ世ナルカ詳カナラズ。古爾王、官制ヲ定メシ時若クハ近肖古王、文學ヲ興シ、頃ノ事ナルベシ。カクテ文書ニハ、王妃ノ號ヲ用フル世トナリテモ、口語ニハ、舊ノ如ク鞬吉支於陸ト云ヘルガ故ニ、周書ニ然記シタルナリ。句麗ノ王號ニ就キテハ、東鑑ノ撰者ハ、是固可疑ト云ヘレドモ、王莽ノ時、王ヲ降シテ侯ト爲セルヲ、光武復其王號トアレバ、古クヨリ王ト稱シタリト見ユ。

又句麗ノ諸王ハ、皆名ノ外ニ別號アリ。始祖朱蒙ハ東明聖王、二代類利ハ、琉璃明王、三代無恤ハ、大武神王ト號ス。本居氏ハ、「都慕と東明と、朱蒙と、音やゝ近ければ、韓國の音にては、殊に近く通ふなるべし」ト云ヒ、又類利ト琉璃ト甚近ク、無恤ト武神トモ、稍近ケレバ、三王ノ號ハ、唯其ノ名ノ下又ハ上ニ、聖明、大ナル美稱ヲ、後人ノ加ヘタル者ナルベシ。其ノ他諸王ノ追號ハ、大抵陵墓ノ地名ヲ用ヒタリ。閔中、慕本、故國川、山上、東川、中川、西川、烽上、美川、故國原、小獸林、故國壤ノ十二王、皆然リ。安臧、安原、陽原、平原、嬰陽、榮留ノ六王ハ、麗紀ニ明文ナケレドモ、皆陵墓ノ地名ナルベシ。大武神王ハ、大獸林原ニ葬リテ、別號ヲ大解朱留王ト云ヒ、廣開土王碑ニハ大朱留王ト云ヒ、小獸林王ハ、小獸林ニ葬リテ、別號ヲ小解朱留王ト云ヘレバ、獸林ハ蓋朱留ノ轉訛ニシテ、大朱留王モ、陵墓ノ地名ニヨレル追號ナリ。太祖大王、次大王、新大王、廣開土王、長壽王、文咨明王ノ六號ハ、文義ヲ用ヒタルモノナリ。但太祖、次、新ノ三大王ハ、本追號ナカリシヲ、後人、諸王ト例ヲ同ジクセンガ爲ニ、追撰シタル者ナルベシ。寶臧王ハ、末王ニシテ、追號ナキガ故ニ、史ニ其ノ名ヲ稱セラル。長壽王ノ薨ゼシ時、後魏ノ孝文帝ヨリ諡ヲ康ト賜ヒシアレドモ、其ノ外ニハ漢風ノ諡ヲ附ケタル者、絶エテ無シ。

百濟新羅ノ諸王ハ、大抵其ノ名ヲ以テ稱セラレ、別ニ諡號ノ類ナシ。百濟ノ蓋鹵王ハ、濟紀ニ「諱慶司」

ト云ヒ、東鑑ニハ「慶司立、後改餘慶、是爲蓋鹵王」トアリテ、蓋鹵ハ、號ノ如ク聞ユレドモ、サニ非ズ。濟紀ニハ「或云近蓋婁、」遺事ニハ「一云近蓋鹵王」ト云ヒテ、蓋鹵ハ、全ク第四代ノ蓋婁ト同名ナル故ニ、近ノ字ヲ附ケテ之ヲ別ツコト、近肖古近仇首ノ例ニ同ジ。サレバ蓋鹵ハ、即本名ニシテ、慶司ハ、其ノ別名ナリ。東城王牟大ハ、濟紀ニ「謚曰東城王」トアレドモ、東城ノ字ハ、謚トモ聞エネバ、東鑑ニ「號東城」ト云ヘル方、穩當ナリ。武寧王、聖王、威德王、法王、武王ハ、皆謚ナリ。其ノ中聖王ハ、濟紀ニ「國人稱爲聖王、」又「謚曰聖」トアレバ、生時ノ尊號ヲ以テ、直ニ謚トシタルナリ。惠王ハ、濟紀ニ「惠王諱季、」又「謚曰惠」トアレドモ、此ノ王ハ、威德王餘昌ノ弟ニシテ、欽明紀ニ「百濟王子餘昌、遣王子惠、（王子惠者、威德王之弟也。）」トアルト同人ト聞ユレバ、惠ハ、名ニシテ、季ハ、別名若クハ字ナルベシ。三國遺事ニ「一云獻王」トアレバ、謚ハ獻ナルベシ。

　羅紀ニハ、智證王十五年、（繼體天皇八年、梁ノ武帝天監十三年、百濟ノ武寧王十四年）「王薨、謚曰智證、新羅謚法始於此」トアリテ、其ノ後、法興王、眞興王、眞智王、眞平王、善德王、眞德王ハ、羅紀ニ、孰レモ謚トセリ。サレドモ智證王ノ名ハ、智大路ニシテ、智度路トモ、智哲老トモ書キ、智證ト音稍近ケレバ、智證ハ、即本名ノ換言ニ似タリ。羅紀ニ智證麻立干ト云ヘルモ、謚ニ非ザルガ故ナリ。又智證ノ字ハ、佛經ノ語ニ基キタル熟字ト聞ユルニ、智證王ハ、佛ヲ崇ビシコトモ無ケレバ、法興王、佛法ヲ興セル後ニ此ノ二字ヲ擇ビテ、本名ニ換ヘテ、追號トシタル者ナルベシ。法興眞興眞智ノ類モ漢風ノ謚ト云ハンヨリハ、寧其ノ崇佛ノ德ヲ讃シタル尊號ナルベシ。眞平王元年。（敏達天皇八年、陳ノ宣帝大建十一年、）「封母弟伯飯爲眞正葛文王、國飯爲眞安葛文王」トアル眞正眞安ハ、皆生時ノ號ナレバ、眞智眞平モ、恐ラクハ生時ニ上レル尊號ナルベシ。隋書北史新舊唐書、孰レモ眞平王善德王眞德王ノ本名（白淨、德曼、勝曼、）ヲ記サズシテ、直ニ眞平善德眞德ヲ以テ名トシタルハ、三王ノ生時、皆其ノ號ヲ以テ支那ニ聞

エタルガ故ナリ。新羅ニテ正シク漢風ノ謚法ヲ採用シタルハ、第二十九代太宗武烈王ヨリ始マレリ。

　夫餘人ハ、本姓氏ナシ。麗濟二國ハ、皆夫餘ヨリ出デタルガ故ニ、其ノ初ハ、姓氏ヲ稱セザリシガ、支那ト交通スルニ及ビテ、麗人ハ、國名ノ首字ヲ取リテ、高氏ト稱シ、濟人ハ、夫餘ノ夫字ヲ省キテ、餘氏ト稱セリ。魏書朱蒙建國ノ條ニ「號曰高句麗、因以爲氏焉」ト云ヒ、（周書隋書北史ハ、皆以ノ字ノ下ニ高ノ字アリ。魏書ハ、蓋高ノ字ヲ脱シタルナリ。）麗紀ハ、之ニ據リテ「始祖東明聖王、姓高氏」ト書キタレドモ、後漢書、三國志、晉書、梁書、魏書、南北史等ニ、句麗王騶、宮、遂成、伯固、伊夷摸位宮、乙弗利、釗、安等ノ名ヲ記スルニ、姓ヲ擧ゲタルコトナシ。第二十代長壽王ニ至リテハ、宋書、南齊書、梁書、皆其ノ姓ヲ加ヘテ、高璉ト云ヘリ。サレドモ、此ノ姓ハ、長壽王ヨリ始マレルニ非ズ。長壽ノ曾祖故國原王斯由ハ、漢名ヲ釗ト云ヒ、長壽ノ父廣開土王談德ハ漢名ヲ安ト云ヒタレバ、姓ヲ用フルコトモ、故國原王ノ頃ヨリゾ始マリケン。晉書後燕載記ニ、「慕容雲、字子雨、寶之養子也、祖父高和句、句驪之支庶、自言高陽氏之苗裔、故以高爲氏焉……、寶子之、賜姓慕容氏……、雲遂即天王位、復姓高氏、」通鑑晉紀隆安元年ノ處ニ、「雲高句麗之支屬也、燕王皝破高句麗、徙於青山、由是世爲燕臣、」義熙四年ノ處ニ「高句麗遣使聘北燕、且叙宗族、北燕王雲遣侍御史李拔報之」ナド見エ、高雲ノ父祖ノ漢土ニ徙リシハ、即故國原王ノ時ニシテ、其ノ高氏ヲ稱スルハ、宗家ノ姓ニ依レルナリ。「自言高陽氏之苗裔」トアルハ、赫連氏ノ、夏后氏ノ裔ト云ヒ、拓跋氏ノ、黃帝ノ裔ト云ヘルニ同ジク、世系ノ所出ヲ支那ノ古帝ニ附會スルハ、支那近傍ノ夷狄ノ常言ニシテ、取ルニ足ラズ。新羅ノ金氏ハ、「天降金櫝」ノ古傳アルニモ拘ラズ、又「自以少昊金天氏之後、故姓金氏」ノ說アリ。

　麗紀故國原王以前ニモ、姓氏ヲ賜ヘルコト屢見ユレドモ、恐ラクハ皆後人ノ附會ナリ。今其ノ二三ノ例ヲ擧グレバ、琉璃王二十四年、（漢ノ平帝元始五年）「王田于箕山之野、得異人、兩腋有羽、登之朝、賜姓羽氏、」大武神王四

年、（王莽地皇二年）「王出師伐扶餘、次沸流水上、望見水涯、若有女人舁鼎遊戲、就見之、唯有鼎、使之炊、不待火自熟、因得作食飽一軍、忽有一壯夫曰、是鼎、吾家物也、我妹失之、王今得之、請負以從、遂賜姓負鼎氏、」同五年、扶餘王ノ從弟「與萬餘人來投、王封爲王、安置掾那部、以其背有絡文、賜姓絡氏」ノ類ナリ。其ノ事ノ怪誕ナルハ、暫ク措キ、當時漢學未ダ開ケズ、君臣皆方言ヲ以テ名トシタルニ、漢字ノ義ヲ取リテ、姓トスル理ナシ。又琉璃王ノ妃ハ多勿侯松讓ノ女ニシテ、松氏ト云ヒ、故國川王ノ后ハ、掾那部于素ノ女ニシテ、于氏ト云ヘルガ如キハ、父ノ名ノ頭字ヲ取リタルニテ、姓ニ非ズ。中川王ノ后掾氏ハ、掾那部ノ略ニシテ、部族ノ名ナリ。サレバ「朱蒙在扶餘、娶禮氏女」ト云ヘル禮氏モ、父ノ名若ノハ部族ノ名ノ略稱ナルベシ。新大王ノ國相明臨答夫、東川王ノ國相明臨於漱、中川王ノ駙馬明臨笏覩ナド云ヘル明臨ハ、蓋方言ノ姓氏ニシテ、麗紀ニ眞ノ姓氏ノ見エタル始メナリ。太祖王ノ右輔高福章、山上王ノ國相高優婁及ビ麗紀ノ註ナル國祖王高宮ノ如キハ、後人ノ追加シタルニテ、當時ノ稱呼ニハアルマジ。百濟王ノ姓ナル餘氏ハ、晉書ニ餘句、冊府元龜ニ餘暉ト見エタルヲ始メトシ、宋書ニハ、餘映、餘毘、餘紀、餘都、餘乂、餘爵、餘流、餘婁アリ。南齊書ニハ、餘古、餘歷、餘固アリ。魏書ニハ、餘慶、餘禮アリ。梁書ニハ、餘暉、餘毘ノ外ニ餘隆アリ。陳書本紀ニハ、餘明アリ、隋書ニハ、餘昌、餘宣、餘璋アリ。濟紀ニモ、腆支王ノ庶弟ニ餘信アリ。孰レモ餘ノ一字ニシテ、夫餘ノ二字ヲ用ヒタルコトナシ。故ニ周書ニハ、王姓夫餘氏トアリタルヲ南北史ニ「王姓餘氏」ト改メタルハ、宜シ。然ルニ新舊唐書ニハ扶餘璋、扶餘豐、扶餘忠勝、扶餘隆ナド云ヒテ、複姓ト爲シタルハ、何故ゾ。ソハ百濟ノ唐ニ朝スルニ及ビテ、漢代ノ古國ナル扶餘ノ裔冑ナルコトヲ明カニセンガ爲ニ、自ラ複姓ニ改メタルカ。又ハ唐ヨリ百濟ニ命ジテ複姓ヲ用ヒシメタルナルベシ。サルニテモ、唐人ノ周書ヲ作ル時、前代ニ溯リテ、姓夫餘氏ト云ヒ、通典ニ腆支ヲ夫餘腆ト書キ、餘昌ヲ夫餘昌ト書キタルガ如キハ、全ク非ナリ。然ルヲ滿洲源流考ニ「百濟以夫餘爲姓、諸史往々刪去夫字、誤。」ト云ヒテ、周書ニ夫餘氏トアルヲ是トシタルハ、本末ヲ顚倒シタルナリ。南北朝諸史ノ中、唯宋書武帝紀ニ「鎭東將軍百濟王扶餘映、進號鎭東大將軍」トアリテ、複姓ニ書キタル所一所見ユ。コハ、全ク後人ノ唐書ニ見馴レタルヨリ、誤リテ扶ノ字ヲ書キ加ヘタル者ナルベシ。夫餘ノ夫ノ代リニ扶ノ字ヲ用ヒタルモ、唐ヨリ前ニハ例ナキ事ナリ。餘昌ノ名ハ、繼體紀ニモ見エ、齊明記ニハ、達率余自進、天智紀ニハ佐平餘自信アリ、又齊明紀ノ註ナル西部達率余宜受、續紀養老中ナル餘泰勝、餘仁軍、天平中ナル左大臣家令濟義仁、天平勝寶六年ナル太宰陰陽師余ノ益人、造法華寺判官余ノ東人、續後紀承和七年ナル備中介余ノ河成、右京大屬余ノ福成ノ如キモ、皆百濟王ノ裔ニシテ、余ハ、即餘ノ省字ナレバ、百濟王ノ單姓ナリシコトハ、疑ヒナシ。余ハ、餘ニ同ジキコトハ、欽明紀ニ扶餘ヲ扶余ト書キ、天智紀又姓氏錄ニ餘自信ヲ余自信トモ書キタルニテ、明カナリ。濟紀始祖建國ノ條ニ、「其世系與高句麗同出扶餘、故以扶餘爲氏」ト云ヘルハ、全ク唐書ノ誤リヲ承ケタルナリ。且百濟ハ、國初ヨリ十餘代ノ間ハ、君臣皆姓氏ナシ。近肖古王、餘句ト稱シテ、東晉ニ通ジタルハ、恐ラクハ姓ヲ用ヒタルベシ。濟紀ニ、近肖古王ノ朝廷佐平眞淨、辰斯王ノ兵官左平眞嘉謨、阿莘王ノ兵官佐平眞武ヲ、單ニ淨、嘉謨、武トモ書キタレバ、コレラハ、眞ヲ以テ姓ト爲シタルニテ、隋書北史ニ、國中ノ大姓八族ヲ擧ゲタル中ニ眞氏アルハ、即コノ姓ナリ。多婁王ノ右輔北部眞會、肖古王ノ將北部眞果、古爾王ノ右輔眞忠、内頭佐平眞可、比流王ノ内臣佐平眞義ナド見エタルハ、コノ眞氏ノ祖先ナルベシ、サテ阿莘王ノ世ヨリ後ハ、諸臣往往姓氏アリ。

新羅人ノ、姓ヲ用ヒタル起原ハ、知ルベカラズ。朴昔金三姓ノ起原ノ談ハ誕妄ニシテ、據ルニ足ラズ。蓋三家ノ後裔、皆新羅ノ名族トナリ、各其ノ姓ヲ稱スルニ至リテ、溯リテ之ヲ其ノ祖先ニ加ヘタルナリ。羅紀

儒理尼師今九年、（漢ノ光武帝建武八年、）「春改六部之名、仍賜姓、楊山部爲及梁部、姓李、高墟部爲沙梁部、姓崔、大樹部爲漸梁部、（一云牟梁、）姓孫、于珍部爲本彼部、姓鄭、加利部爲漢祇部、姓裴、明活部爲習比部、姓薛」トアリ。此ノ六姓ハ、皆純乎タル漢姓ニシテ、漢字ヲ學ビタル後ノ物ト見ユレバ、少クトモ儒理王ヨリ四五百年、智證王ノ國號ヲ定メシ頃ヨリ後ニ用ヒ始メタル者ナルベシ。

三國諸王ノ名ハ、本皆方言ナリシガ故ニ、二字或ハ三字ナリシガ、漢文ニ通ズルニ及ビテ、漢風ノ單名、漸ク行ハレタリ。高句麗王斯由（故國原王）ハ釗ト稱シ、談徳（廣開土王）ハ、安ト稱シ、巨連（長壽王）ハ璉ト稱シ、羅雲（文咨明王）ハ、雲ト稱シ、興安（安臧王）モ、安ト稱シ、寶延（安原王）ハ、延ト稱シ、平成（陽原王）ハ、成ト稱シ、陽成（平原王）ハ、湯ト稱シ（湯ハ、陽成ノ下略ナレバ、陽ト湯ト孰レカ扁ヲ誤レルナラン）寶臧ハ、藏ト稱セリ、唯建武（榮留王）ノミハ、二字ノ儘ニテ唐ニ聞エタリ、百濟ニテハ、近肖古ハ、句ト稱シ、近仇首ハ須ト稱シ、辰斯ハ暉ト稱シ、腆支ハ腆ト稱シ、毗有ハ、毗ト稱シ、慶司（武寧王）ハ、慶ト稱シ、牟都ハ都ト稱シ、牟大（東城王）ハ、大ト稱シ、斯麻（武寧王）ハ、隆ト稱シ、明濃（聖王）ハ明ト稱セリ。昌（威徳王）惠（惠王）宣（法王）璋（武王）義慈等ニ至リテハ、漢名ノミニシテ、方言ノ名ナシ。新羅ハ、支那ニ通ズルコト甚稀ナリシガ故ニ、諸王皆漢名ナカリシガ、眞興王ノ二子銅輪金輪、佛經ノ語ヲ取リテ名トシテヨリ後ハ、漢名專ラ行ハレタリ。

三國ノ中ニテ年號ヲ用ヒタルハ、韓史ニ據レバ、新羅ノミニシテ、法興王二十三年、（宣化天皇元年、梁武帝大同二年、）「始稱年號、云建元元年」トアレドモ、廣開土王ノ碑文ニ據レバ、句麗ニテハ、コレヨリ百四十五年前（晉ノ孝武帝太元十六年）ニ、永樂ノ年號ヲ用ヒタリ。コノ時支那ノ北部ニハ、苻秦、姚秦、西燕、後燕、西秦、後涼、後魏ノ七國、割據シテ、各〻自ラ年號ヲ用ヒシ頃ナレバ、句麗モ、之ヲ視テ倣ヘルナリ。サレドモ廣開土王ニ嗣ギタル長壽王以下ハ、年號ヲ用ヒタル者見エザルハ、魏ニ朝貢シテ、其ノ正朔ヲ奉ジタル故ナルベシ。

高句麗ノ名ハ、漢ノ高句驪縣ヨリ出デタルコトハ、前章ニ言ヘリ。兩漢書ニハ、縣名ト同ジク、高句驪ト書キ、魏志東夷傳ハ、驪ノ代リニ麗ヲ用ヒタリ。（帝紀及公孫度毌丘儉等ノ傳ニハ、仍驪ヲ用ヒタリ。）魏志後漢書共ニ通例高ヲ略シテ、句驪又句麗ト書ケドモ句ヲ略シテ、高驪又ハ高麗ト云ヘルコトナシ。宋書ハ、高句驪傳ニハ句ノ字ヲ略ケル所ナケレドモ、本紀ニハ、多ク高麗トアリ。百濟倭國ノ傳ニハ、高驪トアレバ（倭王武ノ上表ニハ、句麗トアリ。）沈約ノ史ヲ修メタル頃（齊ノ武帝永明六年、仁賢天皇元年、）ニハ、既ニ此ノ略稱アリシナリ。故ニ南齊書東夷傳ニハ、直ニ高麗國ト云ヒテ、高璉高雲ノ封爵モ、亦高麗王ト云ヘリ。魏書ニハ、猶高句麗トアレドモ、麗人ト宣武帝トノ問答ニハ、高麗トアリ。梁書ニモ、高句麗トアレドモ、武帝天監七年ノ詔ニハ、高驪王トアリコレヨリ以後ハ、公私皆高麗ト稱シテ、句ノ字ヲ加フルコトナシ。韓史ニハ、句麗ノ事ヲ記スニ多クハ漢史ニ依リタレドモ、其ノ高驪又ハ高麗トアル所ハ、皆高句麗ト改メタリ。コハ後高麗王氏ノ朝ニ至リテ、前高麗ノ國號ノ當代ニ同ジクシテ、混レ易キヲ嫌ヒタルガ故ト見ユレドモ、齊梁以後ノ封爵又ハ口語ヲ寫セル文マデモ、一々句ノ字ヲ挿入シタルハ妄ナリ。句麗人ノ、皇國ニ參リシハ、高句麗ト稱ヘタリシ頃ヨリ始マリタルヲ、國史ニハ句麗トノミ書ケルハ後世ノ略稱ニ從ヒテ追記シタルナリ。

外交繹史卷之三

太古外史考

第十六章　須佐之男ノ命ノ天降

外國人ノ皇國ニ交通シタル事ノ、明カニ國史ニ見エタルハ、崇神天皇ノ御世ニ、任那ノ國人ノ朝貢シタルニ始マリテ、神功皇后ノ、新羅ヲ言向ケ給ヒシヨリ後ハ、外國ニ關スル事ドモ、國史ニ記サレタルコト、イトモ委シクナレリ。此ノ皇后ノ御世ヨリ前ニモ、國史ニ、外國ノ名ノ所々ニ見エ、又支那三韓ノ史ニモ、皇國人ノ彼ノ國ニ往キタリシ事、屢見ユレドモ、孰レモ明確ナラザル事ノミニシテ、中外交涉ノ事情ハ詳カニハ知ルベカズ。サレドモ此等ノ記事ノ中ニ、事實ト覺ユル事、ハタ無キニシモアラザレバ、此ノ卷ハ、國史ト漢韓ノ史トニヨリテ、神功皇后以前ナル中外交涉ノ事ドモヲ掻キ集メテ、其ノ事情ノ考ヘ得ラルヽ限リヲ言ヒ試ミントスルナリ。

日本紀神代ノ卷鏇ノ川ノ段第四ノ一書ニ云ク「素盞嗚尊、所行無狀。故科以千座置戶而、遂逐之。是時素盞嗚尊、帥其子五十猛神、降到於新羅國、居曾尸茂梨之處。乃興言、曰此地吾不欲居、遂以埴土作舟、乘之東渡、到出雲ノ國鏇川上所在鳥上之峰。……初五十猛神、天降之時、多將樹種而下。然不殖韓地、盡以持歸、遂始自筑紫、凡大八洲國之內、莫不播殖而成青山焉。所以稱五十猛ノ神爲有功之神。即紀伊國、所座大神是也。」曾尸茂梨ハ、忌部ノ正通ガ神代口訣ニ「荒芒之地、猶言磽宍之空國也、」一條ノ禪閤兼良公ノ纂疏ニ、「在新羅之地名、或曰、人ノ名、未詳矣」ナドアレドモ、サダカナル事ハ、知ルベカラズ。玉木正英ノ神代ノ卷藻鹽草ニ、「和名抄ノ高麗樂ノ曲ニ、蘇志摩利ト云有リ、今其舞ノ圖ヲ閱ルニ、笠簑ヲ着テ腰ヲ折レリ。蓋シ素尊逐ハレ給ヒシ時、風雨甚シク、笠簑ヲ着テ、辛苦ツヽ、新羅ニ吟ヒ給ヘル姿ナルベシ、」松下見林ノ異稱本傳ニ、「高麗曲有蘇志磨利、（興曾尸茂梨訓近、）或ノ曰廻庭樂、蓋シ素盞ノ嗚ノ尊ノ所ノ作ヲ樂也、遺音載在仁智要錄」（仁智要錄ハ、仁和寺書籍目錄ニ見エテ、藤原ノ師長公ノ撰ナリ。）河村秀根ノ集解ニモ「體源抄舞部曰、蘇志摩、註曰、別裝束着簑笠舞之、大神氏世傳之、或名蘇志摩利、此舞、旱魃之時、爲請雨舞之、必有ト應。按蓋象素尊之狀、大神氏、則素尊之裔、傳之有以也」ナド云ヘリ。コノ蘇志摩利ノ名ハ、曾尸茂梨ナル地名ニ音近クシテ、由アリゲニ聞エ、又「象素尊之狀」トハ紀ノ天ノ石窟ノ段ノ第三ノ一書ニ、「諸神嘖素盞ノ嗚ノ尊……、乃共逐降去。于時霖也。素盞ノ嗚ノ尊、結束青草以爲笠簑而乞宿於衆神。衆神曰汝是、躬行濁惡而見逐謫者。如何乞宿於我、遂同距之。是以風雨雖甚、不得留休而、辛苦降矣」トアルニ由リテ云ヘルナドモ、外國ノ樂舞ニ皇國ノ神話ノ趣ノ傳ハリケンコト、イカヾアルベキ。建內繁繼ガ八阪社舊記集錄ニハ、彼ノ舞ノ事ヲ「恐らくは須佐乃男ノ尊、樂浪の國人に、田圃を營み、耕穡を敎へたまふ體を摸せるなるべし、范曄が後漢志に、后稷之祀ハ、舞者象敎田とある、同じ意なるをもおもふべし。大嘗祭式に、巳ノ日、多治比氏奏田儛ヲとあるも、耕穡を重じたまふ意なり」ト云ヘレドモ、須佐之男ノ命、樂浪ノ人ニ耕穡ヲ敎ヘ給フト云フハ、皇國ノ神話ニモナキ事ニテ、根據ナキ想像ナリ。

又右ノ八阪社舊記集錄ニ「須佐乃男ノ大神を牛頭天王と奉稱事は、神代紀に云々と有る曾尸茂梨は、即牛頭の韓語にして、欽明天皇十三年の紀に、新羅の牛頭方と見え、東國通鑑にも、樂浪牛頭山城云々、又永康元年三月、新羅王至牛頭州、望祭太白山、樂浪帶方ノ兩國來服と言へる處にして、此大神、韓國にては、檀君と顯れ給ひ、其國をひらき、法式を建給ふ……。さるを牛頭山天王の稱は、佛書より起ルと世人のおもへる

は、ゆゝしき僻事なり。かの諸經軌ノ中に牛頭天王と云名、いさゝかも有事なし。惑ふべからず。暦家に此稱を襲へるは、例の中昔よりの陋弊也けり。」又「韓語に牛を쇼스(ソシ)と呼、又約めて쇠(ソイ)とも云頭を모리(モリ)と云。쇼스모리(ソシモリ)は、韓國樂浪にある地名にて、山より出たる地の名なり。（曾戸茂利を牛頭の韓語とするは、吾友松浦道輔翁が、朝鮮の朴方實が東醫寳鑑藥名解の譯語によりて發明し出されし奇說也。引て證とす。）」ト云へリ。此ハ、ヨク考究スベキ問題ナリ。

牛頭ヲ、韓語ニそしもり、約メテハそいもりト云フコトハ、據アル說ト見エテ、史海第十八卷批評欄内ナル田口鼎軒氏ノ文中ニ、「余、先日朝鮮公使權在衡君に遭ひ、談餘、牛頭山（曾戸茂梨(ソシモリ)）の事に及びしに、君は、現今の朝鮮語にては「ソームリ」と云ふと言へり」トアレバ、そーむりノ古言ハ、そいもり即曾戸茂梨ト云ヒシモ、知ルベカラズ。

樂浪牛頭山ハ、今ノ朝鮮江原道春川府ノ地ニアリ。東國輿地勝覽春川都護府山川ノ條ニ「牛頭山、在府北十三里」トアル、是ナリ。文學博士星野恒氏ノ本邦人種考（史學會雜誌第拾壹號）ニ「樂浪ハ、今ノ平安道地方ニテ、其境内ニ牛頭山ナシ。今ノ江原道春川府ナル牛頭山ハ、漢時ニ在テハ、蓋臨屯郡ニ屬ス」ト云ヘルハ、委シカラズ。漢ノ昭帝、臨屯郡ヲ廢シテ、樂浪郡ニ併セショリ、今ノ江原道ノ地ハ、樂浪ノ所轄ト爲リタレバ、樂浪ノ南境ハ、斜ニ馬韓ノ東ニ延ビテ、直ニ辰韓ノ北境ニ接シタリ。故ニ三國史記百濟本紀始祖溫祚王ノ所ニ、「王謂臣下曰、國家東有樂浪……」トモ、「王欲襲樂浪牛頭山城」トモアリテ、春川府ノ牛頭山ハ、即樂浪ノ境内ナリ。其ノ後牛頭ノ地ハ、新羅ニ併セラレタレバ、仇首王九年（紀元八百八十二年魏ノ文帝黄初三年）ニハ「遣兵入新羅牛頭鎭……」トアリ。此等ノ境界ノ沿革ハ、前卷第八章ニモ云ヘリ。又牛頭ト云フ山ハ、春川府ノ外ニモ、所々ニアリ。輿地勝覽咸興府ノ山川ニ、「牛頭山在府東四十里、」慶尙道陝川郡ノ山川ニ、「伽倻山、一名牛頭山、在治爐縣北三十里」トアリ。治爐縣ハ、陝川郡ノ屬縣ニシテ、郡ノ北三十里ニ在リ。又居昌郡ノ山川ニ、「牛頭山在加祚縣東、即陝川伽倻山西支」トアルハ、治爐縣ノ北ニアルト同ジ山ナリ。加祚縣ハ、居昌郡ノ屬縣ニシテ、郡ノ東十五里ニアリ。曾戸茂梨ハ、眞ニ牛頭ナリトモ、ソハ、何レノ牛頭ナルカハ、未サダカナラズ。但牛頭山ノ名ヲ取リテ、州ノ名トシタルコトアルハ、今ノ春川府ノミナリ。

牛頭天王ト申ス事ハ、平田氏ノ牛頭天王暦神辨ニ、其ノ由緒(ユヱヨシ)ヲ委シク考ヘラレタレバ、其ノ要旨ヲ節錄センニ、先ヅ釋日本紀ニ引キタル備後ノ國風土記及廿二社注式ニ引キタル神社本緣起ニ、昔北海ニ坐シシ武塔ノ神南海ノ神ノ女子ヲ與波比(ヨバヒ)ニ出坐ス時ニ、日暮レテ宿借リ給ヒシニ、巨旦將來ハ、家富ミタレドモ、借サズ、蘇民將來ハ、貧シケレドモ、借シ奉リテ、粟ノ飯ナドモテ、饗奉リケレバ、後ニ年ヲ經テ、八柱ノ子ヲ率テ還リ來マシテ、我報答(アレムクイ)セント詔ヒテ、蘇民ノ家族ニ茅ノ輪ヲ腰ニ著ケシメ、即夜(ソノヨニ)蘇民ノ家族ヲ置キテ、皆悉ク殺シ滅シ給ヒ、サテ「吾(ア)ハ速須佐能雄ノ神ナリ。後ノ世ニ疫氣(エヤミノケ)在ラバ、蘇民將來之子孫ト云ヒテ、茅ノ輪ヲ腰ニ著ケバ、免レン」ト詔ヒキト云ヘル古傳アルヲ、阿部ノ晴明朝臣ガ簠簋內傳ニハ、之ヲ天竺ノ事トシ、且其ノ神タチヲ支那ノ暦神ニ附會シ、武塔ノ神ヲ吉祥天ノ王舍城ノ牛頭天王トシテ、天道神トシ、南海ノ神ノ女ヲ娑竭羅龍王ノ女頗梨采女トシテ、歲德神トシ、蘇民將來ヲ天德神トシ、巨旦將來ヲ廣遠國ノ鬼王巨旦大王トシテ、金神トシ、八柱ノ子ニハ、總光天王、魔王天王ナド云フ名ヲ附ケテ、八將神ニ配セ、又其ノ本地佛ヲサヘニ立テ、其ノ外五節ノ祭禮、二六ノ祕文ナド、種々ナル事ヲ造リテ、年中ニアル神事佛事モ、皆學此爲法例也ト云ヘリ。コノ造說ノ本ヲ尋ヌルニ、播磨ノ國飾磨ノ郡廣峰ノ社ノ舊記ニ、「元正帝養老元年、吉備ノ眞備公入唐、豐櫻彥ノ天皇ノ天平五年歸朝之日、止此地云々、老翁現出曰、吾是素戔嗚ノ尊也、爲守諸民保百王、來臨此峰尙矣、雖然與時變衰知者幾少也、汝速歸奏帝、公驚下山、發船赴京、奏此旨、帝忝被下綸命於吉備、而天平六年、賽經營之宿禱、」播磨國峰相ノ記ニ「吉備公歸朝日、於當山奉崇牛頭天王、歷年數爲平安城東方守護、奉勸請祇園荒

町、以當社爲本社也」改曆雜事記ニ「天平五年三月十八日、吉備公歸朝、於播州逢天王云々」ナドアレバ、須佐之男ノ命ヲ牛頭天王ト爲シタルハ、吉備公ノ所爲ニシテ、其ハ、天竺ノ牛頭山ニ出ヅル旃檀香ノ熱病ヲ治スルコト、或ハ唐土ニモ聞ユル牛頭山ノ事ヲモ聞得シヨリ、風土記ナル武塔ノ神ノ故事ニ附會セラレシ事ト見ユ。サレバ簠簋內傳ヲ除キテハ、漢籍ハ更ナリ、佛書ニテモ、慥ナル物ニハ、嘗テコノ說見エタル事ナシ。然ルニ天野信景ノ牛頭天王辨ニ、「牛頭天王、出佛說祕密心點如意藏王陀羅尼經 義淨三藏所譯也 凡天王有十種反身、曰武塔天神、曰牛頭天王云々、天刑星祕密儀軌、 三卷、不空三藏之所譯也、 有牛頭天王縛擊癘鬼、禳除疫難之事」ト云ヘリ。サレド此ハ、共ニ一切經藏目錄ニ載セザレバ、僞經ナルニ、況テ簠簋內傳ニ載セル事實ナキ上ハ彼ノ說モト天竺ヨリ出デタル證トハ爲ラズ。 此ノ經軌ハ、吉備公ノ造說アリシ後ノ密僧ラガ僞作ナリ。總テ密部ノ經軌ドモハ、彼ノ公ノ時ヨリ遙カ後ニ、空海法師ガ持渡リ初メタル物ナルト、謂ユル祕密心點經ニ武塔天神ト云フ名ヲ出セルトヲ思フベシ。武塔ハ、正ニ風土記ニ出デタル名ナルヲ、眞ノ梵經ニ此ノ名ノ有ラン物カハ。又天刑星ヲ祭ル事ハ、唐土ノ道家及ビ五行家ナドノ法ニコソアレ、佛法ニハ無キ事ナレバ、其ノ儀軌ノ有ルベクモアラズ。サレバ義淨譯不空譯ナドアリトモ、其ハ、皆僞作者ノ妄言ト知ルベシ。 サテ吉備公ノ附會シタル說ヲ記セル物ノ、阿部ノ晴明マデ傳ハレルヲ、彼ノ人ノ猶種々ノ說ドモヲ增加シテ、一書ト成シ、簠簋內傳金烏玉兎集ト云フ名ヲバ附ケタリケン。コレヨリ牛頭天王ト云フ名、世ニ弘マリテ總テ須佐之男ノ命ヲ祭レル社ヲバ、牛頭天王ト云フコトヽゾ成レル。山城ノ國愛宕ノ郡八坂ノ鄕ナル祇園ノ社ハ、貞觀年中播磨ノ國廣峰ヨリ遷坐セシコト、峰相ノ記、二十一社記、二十二社本緣起、二十二社注式ニ見エ、改曆雜事記ニ「貞觀十一年、始テ天王從播州遷坐、十八年作社也」トアリ。 注式ニ「昔常住寺ノ十禪師圓如大法師、依神託、貞觀十八年、奉移山城國愛宕ノ郡八坂ノ鄕ノ樹ノ下、其後昭宣公感威驗、壞運吾豪宇、建立精舍、今ノ社壇是也」、或書ニ「貞觀十八年に、疫神、祟をなし、萬民、病に沈む。時に其神輿を八坂の御門感神院と云ふ寺に置て、祇園といふ。神殿なき故に、昭宣公の殿を參らせて、神殿とす、是を精舍といふ。今に至るまで、神社作りに非ざるは、是ノ故なり」トアリ然レバ、十一年ニマヅ八坂ノ鄕ニ移シ、其後十八年ニ神殿ヲ作レルナリ。 以上ハ、曆神辨ノ大意ニシテ、猶祭神ノ事、祭禮ノ事、御靈會ノ事ナドヲ委シク、述ベラレタレドモ、コヽニ用ナケレバ、引キ出デズ。

牛頭天王ノ語ノ、佛書ニモ見エザル事ハ、誠ニ平田氏ノ論ノ如クナルベシ。サレドモ其ヲ吉備公ノ造說ト定メラレタルハイカヾアラン。後代ノ法師陰陽師ナドノ、作リ出デヽ、其ノ始メヲ吉備公ニ假托セシニハ非ザルカ。平田氏ハ、備後風土記ノ武塔神ヲたけあらきの神ト讀ミテ、皇國ノ古傳ニシテ、妄誕ノ說ニ非ズトシ、又風土記ノ文ノ趣ハ、天平五年ニ進レル出雲風土記ナドニ然シモ下ルマジク、古ビテ見ユト云ヘレドモ余ノ見ル所ニテハ、文體モ、サホド古シトハ思ハレザル上ニ、北海ノ武塔神、南海ノ神女、蘇民將來、巨旦將來ナド云ヘル名ドモハ、イカニモ皇國ノ古傳トハ聞エザレバ、此ノ文ハ、牛頭天皇ノ說ノ出デシ後ニ、其ヲ古傳ノ趣ニ書綴リタル者ナルベシ。平田氏ガ、武塔ヲたけあらきト讀マセタル故ハ、曆神辨ニ「延曆內宮儀式帳又延喜神祇式などに、塔云阿良々岐とあれば、其訓を借りて、荒氣の義に用ひたるなり」トアルヲ、建內繁繼ハ「塔ヲ阿良々岐といふは、伊勢ノ神宮の忌詞にこそあれ、字訓に用ふべき理なし。阿良々岐は、蘭蕎の本名にて、三重五重七重九重の佛塔、いさゝか蘭蕎の形狀に似たるを以て、忌詞に其名を呼のみ。普通にはタフと呼ふ」ト云ヘルハ、然ルベキ說ナリ。サレドモ建內氏ガ「牛頭の字を韓國の音に우두と呼ふと有り……。古へ韓國の宇豆の音を轉して、武塔と唱へしにやあらんと或人說へり」ト云ヘルハ、附會ノ度、一層甚シ。韓國ニテ漢字ヲ用ヒ始メシ時代ヲ考ヘ見ヨ。又コノ傳說ノ作者ハ、誰ニモアレ、牛頭ノ名ハ、印度ノ摩揭佗國ナル牛頭山ニ附會シタルニテ、支那ノ浙江臺州府、四川潼川府ナド、又朝鮮ノ所々ニ、牛頭山ノ名見エタルハ、何レモ山ノ形ニモ依リタレドモ、佛敎流傳ノ後、印度ノ山ノ名ヲ摸シテ附ケタルナリ。且コノ神號、朝鮮ノ地名ヨリ出デタルコトハ、物ニ見エタルコト無ケレバ、曾尸茂梨ト云フ名ノ、牛頭ノ韓語ニ近キコトハ、偶然ノ暗合ナルベシ。

然ルニ又建內繁繼ハ、舊記集錄ニ八坂鄕鎭座大神之記ト云ヘルヲ載セテ、「齊明天皇卽位二年丙申八月、韓國之調進副使伊利之使主再來之時、新羅國牛頭山座須佐之雄尊之神御魂齊祭來而皇國祭始、依之愛宕郡賜八

坂郷並八坂造之姓、十二年後、天智天皇御宇六年丁卯、社號爲感神院、宮殿全造營而、牛頭山坐之大神乎牛頭天王奉稱祭祀畢……」其ノ下文ニ「右舊記相傳年久、紙面損字蠹、其本文詳不可知也、且去慶應二年丙寅十二月六日、社内樓門中門罹祝融災、予家亦爲烏有、惜哉家藏社記古文書、燒失過其半矣、幸哉嘗有所謄寫、因聊抄出以傳焉」ト云ヒテ、感神院ヲバ、天智天皇以來ノ社號トシ、又日本紀略ニ「延長四年六月廿九日甲寅、供養祇園天神堂、修行僧建立之」トアルヲ引キテ、祇園ノ社ハ、延長年中、修行ト云ヘル僧ノ建立ニテ、廣峰ノ社ヨリ遷坐セシニハアラズ、感神院ノ御靈ヲ分テルナリト論ジ、廣峰ノ社ノ舊記、峰相ノ記、改暦雜事記、二十二社注式ナド云ヘル趣ハ、僧徒ノ妄説ニ欺カレタルニテ、古書ニ徴ナキ事ドモナレバ、論フニ足ラズト云ヘリ。

伊利之ノ來貢ノ事ハ、齊明紀ニ、二年八月「高麗遣達沙寺進調、大使達沙、副使伊利之、總八十一人」ト見エ、八坂ノ造ノ姓ハ、姓氏錄山城國諸蕃高麗ノ部ニ「八ノ坂造、狛國人萬留川麻乃意利佐之後也」ト見エ、ソノ外、左京右京大和攝津ノ日置ノ造、大和ノ鳥井ノ宿禰、榮井ノ宿禰、吉井ノ宿禰、和ノ造、日置ノ倉人、河内ノ島木氏、何レモ高麗ノ國人伊利須ノ使主之後也トアリテ、伊利之、意利佐、伊利須、皆同ジ音ノ轉レルナリ。サレドモ伊利之ガ須佐乃男ノ命ヲ祭レリト云フコト、コレコソ、古書ニ徴ナキ事ナラズヤ。星野博士ハ、曾尸茂梨ヲ牛頭トスル説ニハ從ヒタレドモ、カノ舊記ニツキテハ「伊利之ノ來貢ノ時、素盞ノ嗚ノ尊ノ神魂ヲ齋キ祭レルコトハ、イカヾアルベキ。又天智天皇ノ時、社號ヲ感神院ト名ヅクルコト、他ニ類例ヲ見ズ、「皇國」ノ文字モ、舊記ニハ珍シク覺ユ。而シテコノ舊記、慶應中燒失ニ罹リ、寫書ノミ傳ハルト云ヘバ、カタ〲疑ハシキコトナリ」ト云ヘリ。カノ舊記ト云ヘル者ハ、蓋牛頭ヲ曾尸茂梨ニ附會センガ爲ニ、八坂ノ神社ノ鎭座ヲ齊明紀ナル高麗進調ノ時ノ事トシテ、彼ノ廣峰山ヨリ遷坐セル事實ヲ掩ハントスル者ニシテ、後人ノ妄作ナルコト疑ヒナシ。

簸川上ハ、出雲風土記出雲郡ノ條ニ「出雲大川、源自伯耆與出雲二國堺鳥上山流、出仁多郡横田村、即經横田三處三澤布勢等四郷、出大原郡堺引沼村、即經來次斐伊屋代神原等四郷、出出雲郡堺多義村、經河内出雲二郷北流、更折西流、即經伊努杵築二郷、入神門水海、此則所謂斐伊河下也……。自河口至河上横田村之間、五郡百姓便河而居、」又同記仁多郡ノ條ニ、「横田川、源出、郡家東南卅五里鳥上山北流。所謂斐大河上、」又「室原川、源出郡家東南卅六里室原山北流。此則所謂斐伊ノ大河上」トアル、是ナリ。鳥上之峰ハ、同記仁多ノ郡ノ條ニ「鳥上山、郡家ノ東南卅五里（伯耆與出雲ノ堺。）」ト見エ、右ニ引ケル文ニモ見エタル如クニテ、記傳ニ「此山、今俗には船通山と云。此山の東に室原山あり。其間を越さば、伯耆ノ國日野ノ郡に至るとぞ」トアリ。

紀伊ノ國所座大神ハ、延喜式神名帳ニ紀伊ノ國名草ノ郡ニ「伊太祁曾ノ神ノ社（名神、大、月次、相嘗、新嘗）」トアル神ニテ、南紀名勝志ニ名草ノ郡山東ノ庄伊太祁曾村ノ西北一町ニ在リトアリ。伊太祁曾ハ、契沖阿闍梨ノ説ニ「曾ハ、疑くは魯の字の誤ならむ。紀中に遙々を波魯波魯と書けり」ト云ヘルヲ、記傳（十ノ二十八丁）に「一わたりさもと聞ゆれど、なほ思へば、わろし。こは五十猛有功ノ神と云なり。佐乎ヲ切れば、曾となるなり。故續紀、文德實錄、三代實錄、和名抄などにも、皆曾とあり。又今國人も、然云なり。但シ國人の祁を伎と云なるは、訛なり」ト云ヒ、平田氏ノ古史傳（第六十七段）ニハ「出雲ノ國仁多ノ郡ニ、伊我多氣ノ神社あり。此を、杵築ノ大社ノ記に、伊我多氣大明神は、五十猛ノ神是なりと有り。然れば伊は、嚴の省語なるか。太祁は、猛、曾は、熊曾の曾と同じく、此も、建きをいふ語なり」トアリ。紀伊ノ國ハ、即木ノ國ニテ、紀伊ト書クハ、必二字ニ定ムベシトノ御制ニ因リテ、紀ノ音ノ韻ノ伊ヲ添ヘタルナリ。此ノ例多シ。記傳ニ云、「右の如く木種を分播たまふ神の坐ス

故に、木ノ國とは名けしなり。」

又古史傳(同段)ニ云ク、「神名式、出雲ノ國意宇ノ郡ニ、玉作湯ノ神社、同ジ社ニ坐ス韓國伊太氏ノ神社、また揖夜ノ神社ノ同社ニ坐ス韓國伊太氏ノ神社、また佐久多ノ神社ノ同社ニ坐ス韓國伊多氏ノ神社、出雲ノ郡に、阿須伎ノ神社ノ同社ニ坐ス韓國伊太氏ノ神社、また出雲ノ神社ノ同社ニ坐ス韓國伊太氏ノ神社、また曾枳能夜ノ神社ノ同社ニ坐ス韓國伊太氏ノ神社。此レ等、みな伊太祁曾ノ神を祭れる社か。其は、韓國と冠たるは、韓に渡りて歸り坐せるに由あり。(豐前ノ國田川ノ郡に、辛國息長大姫ノ神社と云あり。此は、息長足比賣ノ命の、韓を伐て歸り坐る由をもて、辛國云々と白す、と聞ゆるをも思ひ合すべし。)伊太氏は、伊太祁と通ひて聞ゆればなり。(谷川氏も、早く韓國伊太氏ノ神社蓋シ此ノ神也と云へり。據有しにや。)また神名式に、紀伊ノ國名草ノ郡に伊達ノ神社(名神、大)、とあるも、同ジ神の社と聞ゆ……。陸奧ノ國色麻ノ郡に伊達ノ神社(名神、大)、とあるも、同神なること決なし。其は、播磨ノ國餝磨ノ郡にも、射楯兵主ノ神社二座とある社の祭神を、五十猛ノ神と須佐之男ノ命となりと物に見え、此社に並べて白國ノ神社といふあり。こは、新羅より渡坐るに由ありと聞ゆるも、思ヒ合さるればなり」ト云へリ。

又籤ノ川ノ段第五ノ一書ニ云、「素盞鳴尊曰、韓鄉之島、是有金銀。若使吾兒所御之國、不有浮寶者、未是佳也、乃拔鬚髯散之、即成杉、又拔散胸毛、是成檜、尻毛是成柀、眉毛是成櫲樟。已而定其當用、乃稱之曰、杉及櫲樟、此兩樹者、可以爲浮寶、檜可以爲瑞宮之材、柀可以爲顯見蒼生奧津棄戸將臥之具、夫須噉八十木種、皆能播生。于時素盞鳴尊之子號曰五十猛命。妹大屋津姫命、次抓津姫命、凡此三神、亦能分布木種。即奉渡紀伊ノ國也。然後素盞鳴尊、居熊成峰而、遂入於根國者矣。」

浮寶ハ、纂疏ニ「韻書曰、浮輕也、此言輕財也、又「下ノ浮寶、此言船也、舟浮水也」ト云ヒ、通證ニハ、「專指船而言、蓋韓國有金銀、則宜常往來以資國用、故不可無船材之意也、此神功紀神敎之起本、而所謂求財寶ノ國者、是也」ト云ヘリ。奧津棄戸將臥之具ハ、舊說ニ死人ヲ葬ル具ナリト云ヒタレドモ、鈴木重胤ハ、奧津棄戸ヲ家屋ノ義ト釋シ、飯田武郷ノ通釋モ、之ニ從ヘリ。說長ケレバ、引カズ。

大屋津姫ノ命、抓津姫ノ命ハ、神名式ニ、紀伊ノ國名草ノ郡伊太祁曾ノ神社ニ並ベテ、「大屋都比賣神社(名神、大、月次、新嘗) 都麻都比賣ノ神社(名神、大、月次、新嘗)」トアルコレナリ。

奉渡於紀伊ノ國也ハ、記傳(十ノ二十九丁)大屋毘古ノ神ノ細注ニ、「須佐之男ノ命の、三神を出雲ノ國より渡し奉りたまふなり。然後云々とあるにて、しか聞ゆ」ト云ヒ、古史傳(第六十七段)ニモ「此三柱ノ神を、何處より誰か木ノ國に遷渡し奉れると考ふるに、須佐之男ノ命は、出雲ノ國に御ッ坐せるに、彼ノ神に屬て坐せる神等なれば、共に出雲ノ國に坐けむこと決なし。斯有ば師說の如く、須佐之男ノ命の、彼ノ國より渡ッ奉り給へる也けり」ト云へリ。

熊成峰ハ、口訣ニ「在出雲國」トアレドモ、何レノ山トモ云ハズ。舟橋宣賢卿ハ、わになりト訓ミテ、「鰐淵山なり」ト云ヒ、藻鹽草ニ、「熊成峰ハ、出雲ノ國楯縫郡ニ在リ。今鰐淵山ト云。北ハ直ニ海ニシテ、杵築ト松江トノ間ニ高ク聳ヘ。此山ノ頂ニ素尊ノ御尊骸ヲ葬シ奉ルト云傳フ。即チ來成天王ト號シ、素尊ノ社アリ。今復鰐淵寺ト云フ佛寺ヲ建ツ」トアレドモ、記傳(十ノ二十九丁)ニハ「熊成峰は、即熊野なるべし。なすを切れば、ぬなり。此レをワニナリと訓て、鰐淵山のことゝするは、ひがことなり」トアリテ、古史傳モ、之ニ從ヘリ。熊野山ハ、出雲ノ國意宇ノ郡ニアリテ、今俗ニ天狗山ト云フ。記傳(九ノ四十二丁)須賀ノ宮ノ條ニ、「此ノ地は、出雲風土記を細に考るに、まづ大原郡須我山、郡家東北一十九里一百八十歩、須我小川、源出於須我山と見えて、又意宇郡野代川、源出郡家正南一十八里須我山とある此ノ須我山も、即チ右の大原ノ郡なるを云なり。(須我山は、大原意宇二郡にわたりて、共堺にあり。)さて同郡熊野山、郡家正南一十八里、所謂熊野大神之社坐と見ゆ。かゝれば須我山熊野山は、相並べる處なれば、(共に郡家ノ正南十八里とあればなり。)熊野ノ神宮ぞ、即此ノ須賀ノ宮處なるべき……。さて此ノ神宮山は、式に意宇郡熊野坐神社(名神大)とある、是なり」ト云へリ。熊野ノ大神ハ、出雲風土記ニ「伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃

命、」出雲國造神賀詞ニ「伊邪那伎乃日眞名子加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命」トアリテ、須佐之男ノ大神ヲ申セルナレバ、大神ノマシ〱タル熊成峰ハ、熊野山ヲ指セルコト、疑ヒナシ。

然ルニ星野博士ノ本邦人種考ニ、「熊成峰ハ、即チ久麻那利ノ山峰ナリ。久麻那利、一ニ熊川ニ作リ、又熊津ト稱ス。書紀巻十四雄略天皇二十一年ノ條ニ云、「天皇聞百濟爲高麗所破、以久麻那利賜汶洲王、救興其國久麻那利者任那國下哆呼利縣之別邑也 東國通鑑ニ是時ノ事ヲ記シテ「百濟移都熊津」トアリ。又書記巻十七繼體天皇二十三年ノ條「毛野ノ臣次于熊川」ノ傍訓ニクマナレトアレバ、コレ久麻那利ハ、熊川熊津ト同地ナルコト、知ルベシ....。但其境内ニ熊成峰ト稱スル山岳ナシ。輿地勝覽ニ據レバ、雞龍山最高大、新羅五岳ノ一ニシテ、山中祠廟ナドアレバ、或ハ此山ヲ謂ヘル歟....。サテ素盞嗚尊人新羅ニ主タルハ、諸書異説ナシ。又三井寺域内ノ新羅神社ハ寺門傳記補錄及ビ新羅ノ巻等、皆素盞嗚尊ヲ祠ルト爲ス。是等ノ書ハ、稍佛説ヲ雜フト雖、尊ノ嘗テ新羅ニ主タル旁證ト爲スニ足レリ」トテ、紀ノ一書ノ文ヲバ、素盞ノ嗚ノ尊、其ノ三子ヲ本州ニ遣ハサレテ、御身ハ、韓土ニ留マリ給ヘル由ニ解釋セリ。然レドモ熊川即くまなれハ、モト川ノ名ニシテ、轉ジテハ地ノ名トモ爲レルナリ。コノ川ノ名、轉ジテ山ノ名トナレリトスレバ、熊山ト云フベシ。熊川山ト云フハ、イカガナリ。又山ノ名ニハ非ズシテ、熊川ノ地ニアル山ト云フ義ナリトスレバ、熊成之山ナド云フベシ。熊成峰ニテハ、聞エ難シ。且素盞ノ嗚ノ尊ノ、出雲ノ國ニ住ミマセル傳説ハ、記紀風土記ヲ始トシテ、諸書皆異説ナク、彼ノ材木ヲ生ジ、樹種ヲ播シ給ヘル傳説モ、韓國ヨリ歸リ坐セル後ノ事ト聞ユレバ、熊成ノ峰ハ、本居氏ノ云ヘル如ク、出雲ノ熊野山ヲ指セルナリ。前後ノ文勢ヲ考フルニ、韓地ノ山トハ聞エズ。

根國ハ、釋日本紀ニ、「私記云、問伊弉冉ノ尊、既行黄泉、而今云從母於根ノ國、然則泉ノ國與根ノ國爲同哉、答先師相傳云、一名泉ノ國、上文云泉ノ國今此云根ノ國其實同耳」ト云ヒ、記傳ニ、「根とは、下つ底に有る故に云ふ底津根之國とも、祝詞に根ノ國底之國ともあり....。即チ黄泉國のことなり」ト云ヘリ。

古事記ニ、須佐之男命ノ御子大年ノ神、神活須毘ノ神ノ女伊怒比賣ニ娶テ生ミマセル御子五柱ノ中ニ、韓神曾富理ノ神ト云ヘルアリ。平田ノ大人ハ、内侍所御神樂式ト、大宗祕府略記トニ依リテ、此ノ二ツノ名ヲ五十猛ノ神ノ亦ノ名ト決メテ、サテ古史傳ニ「五十猛ノ神を韓ノ神と申す義は、韓國伊太氏神とも申す如く、蕃國々に渡りて還り給へれば、稱へり....。」又「神名式に、宮ノ内ノ省ニ坐ス神三座、並名神大、月次新嘗、園ノ神ノ社、韓ノ神ノ社、二座とあり....。此を宮中に齋祠り給へる事は、内侍所御神樂式に、韓ノ神之事ハ、素盞ノ雄ノ尊ノ子也、有帝基安泰之誓、故宮中祭之と有れど、何の御世といふ事、知べからず....。園ノ神の事は、大倭ノ神社注進狀に、大神氏ノ家牒曰、園ノ神舊記ニ云、件ノ神者、守疫神也、傳聞大巳貴ノ命之和魂、大物主ノ神也と見え、韓ノ神二座の事は、大宗祕府略記に韓ノ神者、伊猛ノ命號韓ノ神曾保利ノ神とあるに從ふべし。文の意は、宮内ノ省に坐す韓ノ神と申すは、伊猛ノ命を韓ノ神とも曾保利ノ神とも申す、其ノ二ノ名を二座と祭たる由と聞ゆ....。さて神樂譜に、韓神といふ歌あり。其歌に、本「三島木綿、肩に取掛、我韓神の、からをきせむや、からをきせむや」、末「八葉盤を、手に取持て、我韓神の、からをきせむや、からをきせむや」とあり。此ノ二首の韓招は、空招禱をかけて言へるにて、我は、三島木綿を挂け、八葉盤を取り持ち捧げて、神招禱するを、決めて禱に驗あらせむ。空招禮はせじ。我は、韓神の如く韓招は爲しと云ひ挂たるなり。然れば此ノ神は、韓招する神といふ古傳のあるに本づきて詠める歌と通えたり....。此ノ神の韓招すとは、何なる事を云ふならむと考ふるに、前段に、須佐之男ノ命の御語に、韓郷之島者、有金銀、於吾兒所御之國不有浮寶則、未佳也と詔へるは、其荒魂五十猛ノ神の御心なるが、仲哀天皇の御世に、神の御誨ありて韓國を征給ふべき由を語へるは即チ須佐之男ノ命の此御語の結びにて、其誨のまに〱韓を征伏へ給ひし以來、三韓は更なり、諸蕃國々より、種々の事物どもの參渡り來る事としも成ぬる、其本をいへば、五十猛ノ神

亦ノ名ハ韓ノ神、曾富理ノ神の、蕃國々を皇美廉ノ命に寄せ給ふ御心より起れる事なれば、韓神の蕃招し給ふと云ふ古語の有けむ事、知べし」ト云ヘリ。此ノ韓ノ神ハ、五十猛ノ神ナリト云フ事ハ、正シキ古書ニハ見エズ、又韓神ノ韓招シ給フト云フ事モ、慥ナル古傳ノ有ルニ非ザレドモ、此ノ説ハ、平田學派ノ、外國ニ對スル思想ノ根本トナレル者ナレバ、今其ノ要領ヲ載錄セリ。

又出雲ノ國風土記意宇郡ノ條ニ云、「安來鄉、郡家東南二十七里一百八十步。神須佐乃烏命、天壁立廻坐之爾時、來坐此處而詔、吾御心者、安平成詔。故云安來也」

天壁立ハ、天照ス大御神ニ白ス祝詞ニ、「天能壁立極、國能退立限云々」トアルヲ加茂ノ眞淵ノ祝詞考ニ「天の壁の如く、四方に側て見ゆ。退立ッは、遠放立なり」ト云ヘルガ如シ。平田氏ノ古史徵ニ云、「天ノ壁立廻ッ坐之とあるは、何時ならむと云に、簸ノ川ノ段第四の一書に、東渡到出雲國とあるは、新羅ノ國より渡到ませる時を云へるなれば、その新羅に到ッ給はざる以前、天より降り坐セる時、直に天ノ壁立ッ極を廻ッ坐し、さて新羅に居著ませると知られたり。」

安來ノ鄉ハ、古史傳ニ云、「古ッは意宇ノ郡に屬りしを、和名抄に、能義ノ郡に此ノ鄉ノ名を出せり。此は後に、意宇ノ郡を分て、能義ノ郡を置れし故なり。今は字を八杉と書とぞ。」

須佐乃ノ男命ノ天ノ壁立ッ極ミ、即世界萬國ヲ廻リマセル事ハ神道者流ハ、文句ノ儘ニ信用シテ疑ハザレドモ、近世ノ歴史家ハ、大抵之ヲ信用セズ。但コノ神ノ、新羅ノ國ニ降リマセリト云ヘル傳說ハ、歷史家ノ、往往引用シテ、事實トシテ解釋セントスル事ニシテ、林鵞峰ノ東國通鑑序ニモ「本書雖載本朝之事、至調庸貢獻、則悉略之、蓋爲其國諱之耳、若以我國史言之、則韓鄉之島、新羅之國、亦素盞ノ嗚ノ尊之所經歷、尊之雄偉、非朴赫朱蒙濕祚之所得企及、則推爲三韓一祖、亦不爲誣乎」ト云ヘリ。然レドモ、萬國ヲ廻リマセルコトモ、新羅ニ降リマセルコトモ、等シク皇國ノ神話ニアルノミニシテ、外國ノ史傳ニハ更ニ徵證ナキ事ナリ。畢竟此等ノ神話ハ、人事ヲ以テ解釋スベカラザル事ハ、後章ニ云フベシ。

第十七章　臣津野命ノ國引

出雲ノ國風土記意宇ノ郡ノ條ナル臣津野ノ命ノ國引ノ談ハ、最モ古風ナル神話ニシテ、史學上ノ考證ニハ價直少キモノナレドモ、其ノ文中ニ志羅紀ト云フ文字アルニ由リテ、上代新羅ト交通アリシ事ノ一證トシテ引用スル人ナキニ非ザレバ、其ノ全文ヲ擧ゲテ古傳ノ意義ノ通ジ難キ所ヲ解釋セン。

「意宇郡。所以號意宇者、國引坐八束水臣津野命詔、八雲立出雲國者、狹布之堆國在哉、初國小所作。故將作縫詔而、栲衾志羅紀乃三崎矣、國之餘有耶見者、國之餘有詔而、童女胸鉏所取而、大魚之支太衝別而、波多須々支穗振別而、三身之綱打挂而、霜黑葛闇々耶々爾、河船之毛々曾々呂々爾、國々來々引來縫國者、自去豆乃打絶而、八穗米支豆支乃御崎也。此而堅立加志者、石見國與出雲國之堺有名佐比賣山、是也。亦持引綱者薗之長濱、是也。亦北門佐伎之國矣、國之餘有耶見者、國之餘有詔而云々、國々來々引來縫國者、自多久乃打絶而、狹田之國、是也。亦北門良伎乃國矣、國之餘有耶見者、國之餘有詔而云々、國々來々引來縫國者、自手波打絶而、闇見之國、是也。亦高志之都々乃三崎矣、國之餘有耶見者、國之餘有詔而云々、國々來々引來縫國者、三穗之崎、持引綱者、夜見島、固堅立加志者、有伯耆國火神岳、是也。今者國引訖詔而、意宇杜爾御杖衝立而、意惠登詔故云意宇。」

八束水臣津野ノ命ハ、同記出雲ノ郡伊努ノ鄉ノ條ニハ、國引坐意美豆努ノ命トアリ。古事記ニ淤美豆奴ノ神ト書キテ、須佐之男ノ命ノ御子八嶋士奴美ノ神ノ曾孫ニテ、大國主ノ神ノ祖父ニ當リマセル神ナリ。平田氏ハ、此ノ神

ヲ八嶋士奴美ノ神ノ亦ノ名トナシテ、古史徵ニ其ノ由ヲ云ハレタレドモ、古書ニハ然ル說ナケレバ、記ノ傳ヘゾ、古ノ傳ヘノ儘ナルベキ。

狹布之堆國ハ、本居氏ノ玉勝間十ノ巻ニ、「堆字は、寫シ誤りなるべし。遠江ノ國人内山眞龍、此風土記の注を作りて、稚ノ字なりといへり。さも有べし。狹布よりのつゞきは、踈けれども、すべてにかけて、稚國とはいひつべきことゝ。古事記にも書紀にも國稚とあれば、よし有ておぼゆ」ト云ヘリ。平田氏ハ「字書に、堆ハ小壤也と注して、狹少き由なり」トテ、さはきト讀マセタレド、イカヾアラン。

志羅紀乃三埼ハ、玉勝間ニ云、「新羅ノ國の地の、東南ノ方の海へつき出たる御崎之。」

童女齋鉏所取ハ、伴信友氏云、「儀式大嘗ノ宮ノ條に、大嘗ノ宮の柱立る前に、大秡ありて、始メ作内院雜殿、造酒ノ童女執齋鉏、掘稻ノ實殿ノ四角ノ柱ノ穴、物部次之、役夫次之と有に思ひ合するに、國の餘を突分け屠り取むとして、まづ童女に齋鉏令取て、掘始めさせ、其齋鉏を臣津野ノ命の所取て、衝別給へるなり。」

大魚之支太衝別ハ、信友云、「大魚を段々に突分つ事の如く、彼ノ國の餘れる地に鉏を衝入れ、段々に分る狀を譬へたり」。

波多須々支ハ、幡薄ニテ、穗ノ冠辭ナリ。穗振別ハ、玉かつまニ云、「屠り分ヶ之。獸の肉などを切り分つを屠ルといふと同じ言にて、古事記崇神天皇ノ御段に、斬波布理其軍士とあるも、同じ。かの餘りある地を鉏もて切り分ヶるをいふ之。」

三身之綱ハ、玉かつまニ云、「身ノ字は、寫シ誤りなるべし。これを眞龍は、舟ノ字の誤として、みな然改めたれど、いかゞとおぼゆ。萬葉四ノ巻に三相二搓流絲とあるは、二すぢをより合せたるうへに、今一すぢをより合せたるにて、つよき絲なり。又書紀ノ孝德ノ御巻に、三綾之綱とあるも、然なり。されば搓の意に借りて、自と書るを、誤れるか。また會の誤にて、三合にても有べし。」

霜黑葛ハ、信友云、「黑葛は、山里人に尋ネ合するに、黑つゞらとも、黑かづらとも、黑藤とも、黑とづらとも云。防已の屬にて、其藤、地に就て蔓延るが、葉落ち霜枯ては、藤黑く成なり云々。さて黑葛を、色葉字類抄に、本朝式を引て、ツヾラと訓み、また太神宮儀式、延喜式などの古訓にも、然あり。蔓草のあるが中にも、黑葛は、當昔より、物を結ヒ束ぬるには、專と此を用ヒたるが故に、打任せて、ツヾラと云フ字には、黑葛と書習たるなり。今此文の黑葛も、唯にツヾラと訓むぞ、古意なるべき。さて霜黑葛とは、上に云る如く、藤の霜枯て黑くなる時を待て取る由の雅言なるべし。」闇々耶々爾ハ、内山眞龍ノ解ニ云、「闇ノ字を、諸本に闇また間などに誤れり。東万呂ノ大人は、闇を正字として、繰の義に取て訓れたり。今其に隨ひ、葛を繰ると訓つゞく。耶は余の轉にて、呼出す詞なり。」

河船之毛々曾々呂々爾ハ、加茂ノ眞淵ノ說ニ、「眞和眞和てふ語にて、河船を冠らせしは、河を逆上る船のそろ〱と上るに譬へたり」ト云ヒ、伴信友氏ハ「凡ての趣を思ふに、此は、河船に綱打かけて、流れを曳上すに譬へたり」ト云ヘリ。

國々來々引來ハ、信友云、「國々來々ト訓ベシ。こは、彼ノ衝分たる國の土へ綱うち挂て、繰々耶々に、毛々曾々呂々と引つゝ、國來よ國來よと、力聲をかけて、引來坐る由の古傳なるべし。」

自去豆乃打絕而ハ、玉勝間ニ、「去豆は、地名なり。楯縫ノ郡に、許豆ノ社、許豆ノ嶋、許豆ノ濱など見えて、出雲與楯縫二郡之堺とあり。乃は、誤字なるべし。其字、いまだ考へ得ず。打絕而は、堺をなして限るをいふ」トアリ。コハ、支豆支乃御埼ハ、楯縫ノ郡ナル許豆ノ濱ヲ以テ東ノ堺トシタル由ナリ。

八穗米ハ、出雲ノ國ノ造ノ神賀詞ニ「八百丹杵築ノ宮」ト云フ詞アリテ、八百丹ハ、祝詞考ニ云ヘル如ク、多ク

ノ土ヲ云ヒ、其ヲ杵モテ築クト云ヒカケタル冠詞ナル故ニ、玉勝間ニハ、米ノ字は、尒を誤れるなるべし」と云ヒタレドモ、伴信友氏ノ説ニ、「諸本みな米とあるに依て按ふに、八穂米は、字のまゝに訓て、彌穂米なり。米を杵築と係たる枕詞なるべし。和名抄に、米ハ穀ノ實也與禰とあり。こも、雅なる古言なり。」ト云ヘルモ、聞ユル説ナリ。支豆支之御崎ハ、玉勝間ニ云、「分てば、今ノ世に日之御埼といふ處なれども、こゝは、楯縫ノ郡の堺までの地を廣くいへる也。されば杵築の東ノ方までわたれる山をも御埼山と云へり。」

加志ハ、玉勝間ニ云、「和名抄ノ舟ノ具に、唐韻ニ云ク戕牁、所以繫グ舟ヲ也、漢語抄ニ云、加之とある物にて、前漢書ノ地理志には、牂牁と書て、註に係船杙也とあり。萬葉の歌にも見えたり。かくてこゝにいへるは、縫合せたる國を、又離れゆかざらむために、繫ぎ堅め給へりし戕牁なり。」

佐比賣山ハ、同風土記飯石ノ郡ニ、「佐比賣山、郡家ノ正南五十一里一百四十歩、（石見與出雲二郡ノ堺）」トアル山ニテ、今ハ三瓶山ト呼ビ、俗に石見富士ト云フ。三瓶ハ、佐比賣ノ訛レルナリ。

薗之長濱ハ、同記神門郡ニ、「神門水海、郡家正西四里五十歩云々、即水海與大海之間有山、長廿二里二百卌四歩、廣三里。此者、意美豆努命之國引坐時之綱矣。今俗人號云薗松山云々」ト見ユ。又出雲ノ郡ニモ、「薗長三里一百歩、廣一里二百歩、松繁多矣。即自神門水海、通大海、江長三里、廣一百二十歩。此則出雲與神門二郡堺也」トアルヲ、玉勝間ニ、「薗ノ長濱長サと有けむが、長ノ字よりまがひて、長濱ノ二字の脱たるにて、かの薗ノ松山と同所なるを、山は、神門ノ郡に屬き、濱は、出雲ノ郡に屬るにぞあらむ」ト云ヘルハ、然ル事ナリ。內山眞龍ノ解ニ、「此濱は、伊那佐の小濱を傳ひ、神門の海邊を石見の堺まで、東西に引延たる沙山なり」トアリ。

北門ハ、玉勝間ニ云、「出雲ノ國の北面の海をいふなるべし。」佐伎之國マタ次ノ良伎之國ハ、信友云、「良は、意の誤にて、意伎ノ國なり云々。抑ヽ出雲ノ國の大海の北ノ方には、隱岐ノ國の外には、國も島もある事なきに、北門云々と云るは、隱岐ノ國なること、決く思はるゝに就て、國圖を考ふるに、此ノ國四島に分レたるが中に、出雲に直に向へる一ツの島あり。いま向之島と云。其ノ後に二ツの島、西東に雙びたり。西の方なるを今知夫島と云ひ、東の方なるを今天之島と云ふ。此ノ三ツの島を統て、俗に島前と云へり。其ノ島前の奥なる大なる島國は、隱岐の本地なり。此を俗に島後と云へり。偖その島前は、島の前の義にて、是謂ゆる佐伎ノ國なるべし。（三島をすべて云。さて今向之島と云るも、本は佐伎之島なるを、向ノ字をば普てムカフと讀なれたるまゝに、唱變たるにもや有む云々、）島後は、島の後にて、奥の意、これ、謂ゆる意伎ノ國なるべし。かくて上ツ代出雲邊よりは、北門の前の國また奥の國と云へるを、普ては海の瀛つ國なれば、四島を管ても、意伎ノ國とは云るなり。」

「國之餘有詔而」ノ下ニ「云々」ト書キタル所三所アルハ、何レモ前文ニ同ジク、童女ノ胷鉏ヨリ毛々曾々呂々爾マデ、國引ノ狀ヲ述ベタル詞アルヲ略キタルナリ。其ノ心ニテ讀ムベシ。

多久は、同風土記島根ノ郡ニ多久ノ社アリ、又「多久川、源出郡家西北廿四里小倉山、西流入秋鹿郡佐太入海」トアリテ、秋鹿郡トノ堺ナリ。

狹田之國ハ、同記秋鹿ノ郡ニ佐太御子ノ社アリ、又「佐太川、源二、（東水源、島根郡、所謂多久川是也、西水源出秋鹿郡渡村）二水合南流入佐太水海、即水海周七里、（有鮒）水海通入海、湖長一百五十歩廣一十歩」ト見ユ。湖ハ、江ノ誤リナラン。佐太川ハ、今モ佐田川ト云ヒ、佐太ノ水海ハ、今濱佐田ノ水海ト云ヒ、秋鹿ノ郡ノ東邊ニアレドモ、前後ノ文ヲ以テ考フルニ、狹田ノ國ハ、秋鹿楯縫二郡ノ地ヲ云ヘルナリ。

手波ハ、玉勝間に「手染なるべきか。島根ノ郡に手染ノ郷あり。凡てのさまをもて考ふるに、こゝは、必ス上文の多久より東、下文の三穗之埼より西にあるべきところなれば、手染にて、地理よくかなへり」ト云ヘリ。

手染ノ郷ハ、同風土記ニ「郡家正東一十里二百六十四歩云々」トアリテ、出雲ノ國人岸崎時照ガ此ノ風土記ノ抄ニ、「手染郷、多須見、野原、別所、下宇部五村也」トアリ。
闇見ノ國ハ、同記島根ノ郡ニ久良彌ノ社アリテ、抄ニ「在餘戸里本庄村加波阿氣谷」、又掠見ノ社アリテ、抄ニ「鎮座新庄村久良美谷山頂大神也」トアリ。玉勝間ニ云、「此處は、多久川より手染までの地を廣くいへる也。」
高志ハ、越ノ國ナリ。都々之三埼ハ、信友云、「按フに越前の地名なり。平家物語に、越前に都々と云ふ地名見え、また此ノ國の產物に九十布と云が有しこと、國の古き書に見えたり。其都々てふ地今詳ならねど、熟按ふに、今敦賀ノ郡敦賀ノ津の北ノ方泉村に屬て、天筒山と云が有て、其ノ東方の、海に出たる山岬を金が崎といふ。古ヘ都々と云るは、必この邊の大名にて、金が崎の海邊のわたり、都々の三崎なるべし。」
三穗之埼ハ、同風土記島根ノ郡ニ、美保ノ濱、美保ノ埼見エ、又「美保郷、郡家正東廿七里一百六十四歩」トアリテ、島根ノ郡ノ東ノ終、出雲ノ國ノ東北ノ極ナリ。今モ三保ノ崎ト云フ。玉勝間ニ云、「上の例どもによらば、此ノ上にも自某處打絕而といふことのあるべきに、こゝにのみ其ノ詞なきは、此三穗の崎は、東の限りは、海なるが故なり。」
夜見島ハ、同記島根ノ郡蜈蚣島ノ所ニ「卽自此島達伯耆國郡內夜見島」トアリ。今ハ方濱ト云ヒテ、伯耆ノ國會見ノ郡ノ北ニサシ出デタル半島ナリ。
火神ノ岳ハ、玉勝間ニ云、「此ノ風土記の抄に、伯耆ノ國會見ノ郡の大山、これなりといへり。さもあるべし。それにつきて思ふに、大山は、神名帳に大神山ノ神社とあれば、火ノ字は、大を誤れるにはあらざるか。」
意恵ハ、玉勝間ニ云、「事に勞きて苦きを休息ふ時の聲なり。」
サテ右ノ傳說ハ、上代ヨリ傳ハリ來ツル神話ニシテ、祈年祭ニ伊勢ノ大御神ノ御前ニ白ス、祝詞ニ「皇大御神能見霽志坐四方國者云々、狹國者廣久、峻國者平久、遠國者八十綱打掛氏引寄如事、皇大御神能寄奉波云云」ト云ヘルモ、國々ヨリ貢キ奉ル事ノ盛ナル狀ヲ稱ヘ申スニ、國引ノ故事ヲ以テ譬ヘタルナリ。此ノ故事ハ、イカニモ稚ク聞ユルニヨリテ、寓言ナリナド說ク人アレドモ、全文ノ意ハ、更ニ寓言ノ趣ニ非ズ。カヽル稚キ意詞コソ、却テ古傳ノ眞ノ性質ナレ。鶴峰戊申ノ神代遺事集成ニ「謂曳國者、蓋太古神聖、自修太古神術、普化國人、能令海外之國歸化、以彼有餘、補此不足、是謂之國曳也、」又「按志羅紀、佐伎、良伎、都々者、並是外國地名、全文言引來其人、以爲神州之民也、其法蓋出於太古之神術云々」ト云ヘル如キハ、古傳ノ意ニ非ザルコト、論ナシ。サレバ國引ノ談ハ、歷史上ノ事實トシテハ、少シモ取ルベキ所アラザルヲ、文辭ノ古雅ナルヲ愛賞スル餘リニ全文ヲ管々シク解釋シタルハ、殆ト此ノ書ノ目的ノ外ニ奔逸セリ。見ン人願クハ之ヲ恕セヨ。

第十八章　少名毘古那ノ神

古事記上卷ニ云、「大國主神、坐出雲之御大之御前時、自波穗、乘天之羅摩船而、內剝鵝皮剝爲衣服、有歸來神。爾雖問其名不答、且雖問所從之諸神、皆白不知。爾多邇且久白言、此者、久延毘古必知之、即召久延毘古問時答白此者、神產巢日神之御子少名毘古那神。故爾白上於神產巢日御祖命者、答告此者、實我子也。於子之中、自我手俣久岐斯子也。故與汝葦原色許男命爲兄弟而、作堅其國。故自爾大穴牟遲與少名毘古那二柱神、相並作堅其國。然後者、其少名毘古那神者、度于常世國也。故顯白其少名毘古那神所謂久延毘古者、於今者山田之曾富騰者也。」
大國主ノ神ハ、亦ノ名ヲ大穴牟遲ノ神トモ葦原色許男ノ神トモ申シ、記ニ依レバ、淤美豆奴ノ神ノ御孫ニシテ、

須佐之男ノ命ノ六世ノ孫ナリ。紀ノ簸ノ川ノ段ニハ、此ノ神ヲ、素盞ノ嗚ノ尊ノ奇稻田媛ニ婚ヒテ生ミマセル御子トシタレドモ、同段第一ノ一書ニハ、稻田媛ノ生ミマセル兒淸之湯山主三名狹漏彥八島篠ノ神ノ五世ノ孫トナシテ、記ト合ヘリ。又第二ノ一書ニ、奇稻田媛ノ生ミマセル兒ノ六世ノ孫トアルハ、須佐之男ノ命ノ七世孫ニシテ、記ノ傳說ヨリ一世多シ。

御大之御前ハ、出雲風土記ノ三穗之埼マタ美保ノ埼ニテ、島根ノ郡ノ東ノ極ナリ。波穗ハ、記傳ニ云、「書紀神代ノ下卷に、於秀起浪穗之上起八尋殿云々、秀起此云左岐陀弖屢、又神武卷に浪秀とあり。凡て穗とは、著くあらはれ見ゆることを云て、波ノ穗は、書紀に秀起とある如く、浪の白く高く立ッさまを云ッ古言なり。」

蘿摩船ハ、神代紀ニ「以白蘞皮爲舟」トアリ。古史傳ニ云、「蘿摩は、俗に乳草、蜻蛉乳、加賀良比、鴛々芋、燒所花、見、白蘞和名也末加々美」トアリ。蘿摩ハ、和名抄に、「本草云、蘿摩子、一名芄蘭、和名加々美、白蘞和名也末加々美」トアリ。古史傳ニ云、「蘿摩は、俗に乳草、蜻蛉乳、加賀良比、鴛々芋、燒所花、碁賀長など、國々所々にて名替れり。物類稱呼に、蘿摩は、葉の形細長く厚く、兩對ひて、表に薄白く筋あり。實は、細長く三四寸ばかり有て、糸瓜に似たり。名けて蓋瓢と云。秋の末熟して、枯れて二ッにわれ、中より綿の如き物出る、是を俗に和の波牟夜と云と云るが如く、其ノ殼を割たるは、舟にいとよく似たる物なり。」

内剝鷲皮剝爲衣服ハ、神代紀ニ「以鷦鷯羽爲衣」トアリ。記傳ニハ、「鵝ノ字ハ、決て誤なり。此ハ、甚く小きことを云るに、鵝は、さいふばかりの小鳥にてはあらねばなり」ト云ヒテ、度會延佳が「蛾ノ字の誤ならむか」と云ヘルニ依リ、比牟志ト訓ミテ解カレタレドモ、古史傳ハ、加茂ノ翁ノ佐邪伎ト訓マレタルニ從ヒ、「鵝は、決めて鷦を誤れるなり。また若くは鵝ノ字を佐々伎の事と思ひ紛へて當たるにも有べし」ト云ヘリ。

鷦鷯ハ、紀ノ原注ニ「此云娑娑岐、」和名抄ニ「文選鷦鷯賦云、鷦鷯小鳥也、生於蒿萊之間、長藩籬之下、和名佐々岐、」纂疏ニ「俗云美曾佐々伊是也」トアリ。今モ然云フ鳥ナリ。

多邇且久ハ、記傳ニ云、「且ノ字、決く寫シ誤リなり。具ノ字なるべし。然云故は、萬葉五七丁に、多爾具久能、佐和多流伎波美、六二十五丁に、谷潛乃狹渡極、祈年祭詞に、谷蟆能狹度極月次祭詞にもありとあるに依れり。さて此レは、蟾蜍のことにて、具久は、鳴ク聲によれる名、谷と云は、物のはざまに居ル物なる故なり。此ノ物の靈異わざある事は、漢籍にも見え世ノ人も知れる如くなれば、今此の事も、由ありて所思ゆ。」

自我手俣久岐斯子也ハ、紀ノ簸川段第六ノ一書ニ、「自指間漏墮者必彼矣」トアリテ、久岐ハ、記ノ上文ニモ「集御刀之手上血、自手俣漏出、」又「自木俣漏逃而去」ナドアリ。記傳ニ云、「萬葉十十三丁に、伯勞鳥之草具吉、十七十一丁に、保登等藝須、木際多知久吉、又二十七丁波流乃野能、之氣美登妣久々鶯云々などあり、久具流と云は、此ノ久々を延たる言なれば、久伎は、久具理と云ことなり。」

山田之曾富騰ハ、記傳十二ノ十四丁に「こゝの文を按に、當時久延毘古と云しは、即チ今ノ世に至るまで、山田の曾富騰とて有ル物、是レなりと云意なり。然れば久延毘古、即チ曾富騰のことなり。さて曾富騰は、後の歌に曾富豆とよめる物にて、淸輔ノ朝臣の奧義抄に、田におどろかしに立たる人形なりと云り」トアリテ、即今云フ案山子ノ事ナリ。

度于常世國也ハ、簸川第六ノ一書ニ、「其後少彥名命行至熊野之御崎、遂適於常世鄕矣、亦曰、至淡島而、緣粟莖者、則彈渡而至常世鄕矣」トアリ、又釋日本紀ニ、伯耆ノ國風土記ヲ引キテ、「相見郡。郡家西北有餘戶里。有粟島。少日子命、蒔粟秀實離々。即載粟彈渡常世國。故云粟島也」トアリ。粟島ハ、今夜見島ト一連キノ陸トナリテ、米子ノ西北一里許ノ處ニ在リ。

常世ノ國ハ、釋ニ「或書、此國亦云蓬萊、然則是仙人之所居、自所在未詳、」纂疏ニ「常世指神仙之境云々、蓋二字之義、謂長生不死也」ト云ヘルガ如シ。藻鹽草ニ「常世ハ、常磐堅磐ニ靜謐不變ノ御世ノ義、又晝ハ事繁ク、夜ハ物靜ナルユヱ、夜ヲ指テ常世トモ云ヘリ、」又「常世ノ郷ハ、寂寞無爲ノ地ヲ云」ト云ヘルハ、常世ノ字ノマヽヲ本義トシテ、常夜ノ義ナルヲバ轉用ノ語トシタルナリ。

通證ノ寶鏡開始章ニ云、「常世、即常夜而常闇之謂也云々、凡紀中曰常世者多矣、皆自此章轉來、故今擧其例、蓋少彦名命、適於常世郷者、以其郷不可知不可迹也、三毛入野命、蹈浪秀而往乎常世郷者、以遠遯于海外不出也、言二神者、有事而不終功、投身世外、以爲閑人也、命田道間守、遣常世國者、謂絶海僻遠之祕區、伊勢國、常世之浪重浪歸國也者、謂勝地鍾秀靈、神風絶塵俗、此二者、無得而臻、無得而稱之仙區神域也、故浦島子入海到蓬萊、蓬萊訓曰常世、是也、雄略紀、大漸訓爲常津國、萬葉集云、常呼二跡吾行莫國、此似指黃泉、以無爲寂寞之境也」ト云ヘルハ、常夜ヲ本義トシテ、常世ノ義ナルヲバ轉用ノ語トシタルナリ。又寶劒出現章ニ、「熈近曰、常世郷、神仙之祕區也、神仙長生不老、故其境曰常世、其實指寂寞不變之地也、」垂仁天皇章ニ、「常世國、此謂絶域也、與鳫曰常世意同云々」トモ云ヘリ。又久米邦武氏ノ日本幅員沿革考（史學會雜誌第壹號）ニハ、「常世國とは、闇を常闇といひ、雞を常世長鳴鳥といふが如く、夜をいふなり。夜國とは、日沒處の義にて、西方の國土を稱するなり」ト云ヘリ。コレモ、又一說ナリ。

案フニ、常世ト云フニ、古ヨリ二義アリ。常世長鳴鳥、常世思兼神ナドアルハ、常夜ノ義ニシテ、此ノ二ツハ、本ヨリ別言ニシテ何レヨリモ轉用シタルニハ非ズ。カクテ常世國ハ、垂仁紀ニ「神仙祕區」トモ云ヒ、雄略紀ニ蓬萊山トモ書ケリ。皇國ハ、古ヨリ神ノ御國ト稱シテ誇レル國ナルニ、海外ニ神仙ノ國アリト思ヘルハイカニト疑フ人アレドモ、長生不老ヲ願ヒテ、羨ミ思フハ、人情ノ常ナルガ故ニ、支那人ガ、東方ニ蓬萊山アリト想像シタルガ如ク、皇國ニテモ、西方ニカヽル國アリト想像シタルハ、上古ノ人智ノ程度ニシテハ怪ムベキコトニ非ズ。サレバコノ常世ノ國ハ、古人ノ想像ヨリ現レタル者ニシテ、定マレル一國アルニ非ザレバ、御毛沼ノ命ノ、波穗ヲ蹈ミ給ヘルヲモ、常世ノ國ニ渡リ坐セリト傳ヘ、多遲摩毛理ガ、橘ヲ得タリト云ヘル國ヲモ、常世ノ國ト言傳ヘタルナリ。常陸ノ國風土記ニ「夫常陸國者云々、所謂水陸之府藏、物產之膏腴。古人云常世之國、蓋疑此地」ト云ヘルハ海外ニハ非ザレドモ、コレモ、イトモ珍タキ國ヲ常世ノ國ト云ヘルナリ。然ルニ本居氏ハ、常世ノ國ヲ字ノ如ク解スルコトヲ嫌ヒテ、底依國ノ義ナリト云ヘルハ、海外ニ神國アリト云フヲ諱ミタル狹隘ノ見ニシテ、底依國ト云ヘル語原ノ說モ、强辯ニ近シ。サレドモ其ノ說ハ、援據宏博ニシテ、參考スベキ價アレバ左ニ記傳（十二ノ十丁ヨリ十三丁マデ）ノ文ヲ載ス。

「凡て上ッ代に常世と云に、三ッあり。一ッには常世ノ長鳴鳥、常世ノ思兼ノ神などある、是レなり。こは、常世の義なること、上（傳八の廿二葉）に云るが如し。二ッには、下卷大長谷ノ天皇ノ大御歌に、麻比須流袁美那登許余爾母加母、書紀垂仁卷に、伊勢國、則常世之浪重浪歸國也、顯宗ノ卷室壽御詞に、拍上賜　吾常世等、萬葉一（二十丁）に我國者常世爾成牟、これらなり。こは、字の如く、常とはにして不變ことを云り。三ッには、常世ノ國と云、是レなり。右の三ッ其言は、同じけれども、其意は、各異にして、相關らず。さて常世ノ國とは、如此名けたる國の一ッあるには非ず、たゞ何方にまれ、此ノ皇國を遙に隔り離れて、たやすく往還がたき處を泛く云名なり。故レ常世は、借字にして、名ノ義は、底依國にて、たゞ絶遠き國なるよしなり。古に曾許を登許と通はし云ること、又曾許とは、下のみに非ず、四方上下何方にまれ、遠くゆき至リて極まる處を云ふ事、萬葉に、天雲乃遠極、遠鷄跡裳など云へる曾伎閇も、同言なることなど、委く天之常立ノ神の處（傳三の廿九葉）に云るが如し。考ヘ合すべし。凡て上代に常世ノ國と云るは、皆此ノ意の外なし。卷ノ末に、御毛沼命者、跳波穗、渡坐于常世國、中卷玉垣ノ宮ノ

段に、多遲麻毛理遣常世國、令求登伎士玖能迦玖能木實と見え、又常に歌に、雁の還往處を云など、皆是なり。さて又後には、人の死るを、常世ノ國にゆくと云しことあり。こは、極めて遠き所にて、便リもなく、往來こともかなはぬ意にて、右の意より轉したるものなり。萬葉四に、常呼二跡、吾行莫國云々、九に、遠津國黃泉乃界丹云々、書紀大長谷天皇遺詔に、不謂遘疾彌留至於大漸これら、其意なり。大漸を訓るは、字ノ義にはあたらねども、訓の意は、崩坐て、常世ノ國にまかりまさむと云ことなり。さて又人も何もとことはにして、變らず死ず、よろづにめでたき國を、常世ノ國と云ることあり。是レは、漢籍ごとに依ルこと多き世になりて、彼ノいはゆる蓬萊などの說によりて、此方に云ヒ來れる遙き國を云フ其ノ名を借れるものなり。かの蓬萊など云なる所も、海路はるかに隔りて、至りがたき所と云なれば、此方にいはゆる常世ノ國、是レに似たるうへに、又とことはにかはらぬことも登許餘と云ことさへありて、其名まで、あひかなへる故に、かれこれを以て附會たるものなり。然るを後ノ世ノ人は、たゞ常世と書る字に泥み、又漢の蓬萊などのことをのみ思ひて、上代の意を深く考へざるゆゑに、不變不死を常世ノ國の本義と心得居るは、ひがことなり。不變不死の意に云るは、萬葉四に、吾妹兒者、常世國爾住家良思、昔見從變若益爾家利、五に、等已與能久爾能阿麻越等賣可忘、九に詠水江浦島子哥に、常代爾至云々、老目不爲、死不爲而、永世爾有家留物乎云々、これらなり。書紀雄略ノ卷に、此ノ浦島ノ子が事を記されたるは、疑はしきがうへに、到蓬萊山、と書きたるは、彼ノ紀の癖として、よろづに漢をまねられしなれば、ゆめ此ノ文などに迷ひて、常世ノ國を蓬萊のことゝな思ひ誤りそ。又垂仁ノ卷に、彼ノ田道間守が言に、是レ常世ノ國ヘ則神仙ノ祕區云々、此語も、後世ノ漢籍ノ蓬萊のことなどを思ひて、書キ添へられたる潤色の文にして、さらに上代の言にあらず。凡て書紀は、如此き文によりて、古ヘの意を失へること數しらず多かり。さて右に云なれば、皇國の外は、萬ノ國、みな常世ノ國なり。かくて此ノ少名毘古那ノ命は、御祖神產巢日ノ神の御手俣より漏去坐つる神にて、此ノ段の文に依るに、其ノ行方も知られ給はざりし趣なり。さるは、此ノ葦原ノ中ツ國には降リ坐サずして外國に放往坐シしが故なり。さて此段に、海より依來坐るは、外國より渡來坐るにて、度于常世ノ國也とあるは、又外國に還坐るなり。さて息長帶比賣ノ命の御哥に、常世に坐とあれば、後まで外國に鎭マリ坐スなり。然れば此ノ神は、初メ高天ノ原にして御祖ノ命の御手俣より放去て降リ坐シしより、永く外國に坐ス神にて、其間に少時皇國には渡リ來坐しゝ事ありしなり。さて此ノ趣に據て、今つらつら按ふに、外國（三韓及漢天竺、其餘も四方の萬國）は、皆本此ノ神の經營堅成たまへるものなるべし。かくて後ノ世に至て、其ノ諸の外國より、くさぐさの事も物も渡參來て、其を用ふること多さは、此ノ神代に、此ノ神の、外國よりしばらく渡リ來坐て、大穴牟遲ノ神を助けて、もろともに經營成し給へりし趣と全符合り。いと深き理リあることなるべし。」

以上三章ニ述ベタル、須佐之男ノ命五十猛ノ命ノ、新羅ノ國ニ降リマセル事、臣津野ノ命ノ、國引キマセル事、少名毘古那ノ神ノ、常世ノ國ニ渡リマセル事ナドハ、何レモ天孫降臨以前ニアリシ事トシテ、傳ヘ來レル談話ニシテ、其年代ノ考フベカラザルハ、言フモ更ナリ、其ノ傳說ノ性質ハ、全ク神祇ノ談、即謂ハユル神話ニ屬スル者ナレバ、此等ノ傳說ヲ取リテ、直ニ歷史上ノ人事トシテ解スルハ、古史ヲ考究スル正シキ方法ニ非ズ。本居氏ハ、少名毘古那ノ神ノ、萬ノ國ヲ經營給ヘル事ヲ論ジテ、「神代の壽命年數は、こよなく久しく長かりしかば、此神などは、漢國にいはゆる伏羲などよりは遙に前代なり」ト云ヒ、平田氏ハ、神名祕書ニ引ケル神祇譜天圖記ニ、「國作大巳貴神、此神者、素盞嗚尊孫子天冬衣神子也、與高皇產靈神之長子少彥名神共經營天下、凡此神生子一百八十一神、以十五子爲珍子、而天下四方國人夫等令咸蒙恩賴、此之緣也」トアルヲ採リテ、古史傳ニ「十五柱ノ珍ノ子神たちを、御國の四方なる萬國々に班遣して、其ノ國々を經營固め、種々の事をも始しめて、其ノ國人等に恩賴を蒙らしめ給へるを云ふ云々。また此レに依て思ふに、漢籍佛書を始め、外

國々の籍等に、世の初〆に、某氏某天など云神の出て、其ノ國々の功德成せる趣の古傳も、數〻見ゆるは、前にも云へる如く、大名持少毘古那ノ神、及此なる十五柱ノ神たちの御態を訛り傳へたるにぞ有ける」ト云ヘリ。此ノ二大人ノ云ヘル事ハ、神道ノ正旨ヨリ出デタルモノニハアルベケレドモ、其ノ思想ハ、史學ノ考證ノ外ニ超越シテ、人界ノ事實トハ遙ニ離レタレバ、今論究スベキ限ニ非ズ。凡テ神祇ノ傳說ニ、外國ニ關スル談話ノ雜レルハ、古代ニモ外國ニ關スル事實ノ有リシニ本ヅキタル者ナルベケレドモ、其ノ事實ハ、旣ニ他ノ神異ノ談ト混ジテ、神話トナリタルヲ、其ノ神祇ヲ歷史上ノ人物ト見奉リテ、神話ノ中ヨリ事實ヲ抽キ出サントスルハ、謂レナキコトナリ。故ニ余ガ右ノ諸條ヲ擧ゲタルハ、神代ノ傳說ニ外國ノ事ノ見エタルハ、此ノ如キニ止マレル事ヲ示サンガ爲ニシテ、此ヨリ歷史上ノ確證ヲ見出サントスルニハ非ズ。建内繁繼ガ「須佐之男ノ大神、韓國にては檀君と顯れ給ひ云々」ト云ヒ、落合直澄氏ノ帝國紀年私按ニ、五十猛ノ神ヲ檀君ニ附會シタルガ如キハ、皆憑據ナキ事ニシテ、言フニ足ラズ。元來檀君ノ談ハ、彼ノ國ノ後世ノ作ニシテ、古傳ニモ非ザルコトハ第八章ニ云ヘルガ如シ。

第十九章　鹿神ノ春

釋日本紀第十ニ豐前國風土記ヲ引キテ、「田河郡鹿春鄕、昔者新羅國神自度到來住此川原、便即名曰鹿春神」、續日本後紀承和四年十二月ノ條ニ「太宰府言、管豐前國田河郡香春岑神、辛國息長大姬大目ノ命、忍骨命、豐比咩ノ命、總是三社、元來是石山、而土人總無至、延曆年中、遣唐請益僧最澄、躬到此山、祈云、願緣神力、平得渡海、即於山下爲神造寺讀經、爾來草木蓊鬱、神驗如在、每有水旱疾疫之災、郡司百姓、就之祈禱、必蒙感應、年登人壽、異於他郡、望預官社、以表崇祀、許之、」三代實錄貞觀七年二月ノ條ニ「豐前國從五位上辛國息長比咩神、忍骨神、並授從四位上」延喜式神名帳ニ豐前ノ國田河ノ郡ニ「三座、並小辛國息長大姬大目ノ命ノ神社、忍骨ノ命ノ神社、豐比咩ノ命ノ神社、」太宰管內志、此ノ神社ノ條ニ、舊記ヲ引キテ、「辛國息長大姬大目ノ命一殿、忍骨ノ神二殿、此兩社者、始自承和十年三月日、至于建仁元年二月十二日、叙正一位給畢云々」、又「第一の御殿は、大目ノ命、第二の御殿は、忍骨ノ命、第三の御殿は、空殿なり。第三の御殿は、豐比咩ノ命の御殿なれども、此御神、中頃より採銅所村に移し給へるによりて、常に空殿なり。」トアリ。

右ノ三社ノ神ハ、如何ナル神ニ坐スカ、知ルベカラズ。垂仁紀二年ノ條ノ一書ニ、意富加羅ノ國ノ王之子都怒我阿羅斯等ガ、童女ヲ追ヒテ渡リ來シコトヲ記シ、サテ「所求童女者、詣于難波爲比賣語曾社神、且至豐國ノ國前ノ郡、復爲比賣語曾社神、並二處見祭焉」トアルニツキテ、釋日本紀ハ、右ノ豐前ノ國ノ風土記ノ文ヲ引キタル後ニ、「案之豐州比賣語曾社、不見神名帳幷風土記也、而任那新羅同種也、辛國之□寄來歟、若田河郡之神社等爲比賣語曾神之垂跡歟」ト云ヒ、國之ヨリ社等マデ十四字、普通印本ニ無シ。今星野博士ノ引ケル前田侯爵所藏ノ古寫本ニ據レリ。蠹蝕ノ字ハ神ノ字ナラント、此モ、星野氏云ヘリ。又記傳にも「國前ノ郡は、豐後なり。此は、かの豐前の田川ノ郡の香春をかく傳へ誤りたるにやあらむ。豐後には此ノ神あること、物に見えたることなし」ト云ヘリ。然レドモ豐前ノ香春ノ神ハ、三社ニシテ、豐後ノ比賣語曾社ハ、一社ト聞ユレバ、自ラ別神ナルベシ。强テ幷スベキ理由ナシ。

辛國息長大姬大目ノ命ハ、古史傳ニ「此は、息長足比賣ノ命の、韓を伐て歸り坐る由をもて、辛國云々と白すと聞ゆ」ト云ヘリ。又正哉吾勝勝速日天之忍穗耳ノ命ノ御名ヲ、神代紀天降ノ段第六ノ一書ニ、天忍穗根尊、第七ノ一書ニ、天忍骨命ト云ヒ、又神名式山城ノ國宇治ノ郡ニ「許波多ノ神社三座並大、月次、新嘗」トアル社ノ祭神ヲ、釋ニ山城ノ國風土記ヲ引キテ、「宇治ノ郡木幡ノ社、祇社名天忍穗根ノ命」トアリ。サレバ香春ノ第二社ハ、忍穗耳ノ尊ヲ齋ヒ奉レルニヤトモ思ハルレドモ、第一社ハ、息長足姬ノ尊ニシテ、其ノ遠ッ御祖ハ、第二社ニ坐サンコト

イカヾアラン。古史傳ニモ、「忍骨ノ神社は、此神（天忍穗耳ノ尊）に坐か、非ぬか、思ひ定めがたし」ト云ヘリ。

然ルニ星野博士ノ本邦人種考ニハ、「忍骨ノ命ハ、即チ天ノ忍穗耳ノ尊ナリ」ト斷定シテ、遂ニ天孫降臨ノ傳說ヲモ、韓土ヨリ渡リ來マセル事トシテ解釋セリ。其ノ說ニ云ク、「古事記及ビ書紀（神代下）一書ニ據レバ、天照大神豐葦原ノ水穗ノ國ハ、忍穗耳ノ尊ノ知ラサン國ナリトテ、天降シ給ヒシニ、忍穗耳ノ尊、天ノ浮橋ニ立シテ臨睨シ、彼國ハ、未平トテ、更ニ還リ上リテ、大神ニ請ヒ給ヒシカバ、大神、天ノ菩比ノ神及建御雷ノ神等ヲ遣シテ、謀ラシメ給フ事共アリテ、國中和平ニ及ビ、再ビ忍穗耳ノ尊ヲ天降シ給ヒシ時、其御子邇々藝ノ尊、誕生アリシカバ、此御子ヲ代ヘテ降サントテ、大神ニ請ヒ給ヒ、遂ニ其御言ノ如ク、皇孫ヲ降サレテ、忍穗耳ノ尊ノ、本州ニ渡ラセラル丶コトハ、止ミタリキ。（書紀ノ本文ニハ、忍穗耳ノ尊ニ天降チ命ゼラレシコトハ、載セズ。）去共豐前風土記ノ「新羅國神自度到來住此川原云々」ノ文ヲ以テ、續日本後紀延喜式ニ參照スレバ、忍穗耳ノ尊ハ、息長大姬大目ノ命豐比咩ノ命ノ二神ト倶ニ、豐前ノ鹿春ノ郷ニ來住アリシガ如シ。彼ノ天ノ浮橋ニ立シテ臨睨シ給フ時、或ハ豐前マデ降臨アリシ歟。若シ然ラバ、更ニ還リ上リ給フノ語、著落アルヲ覺ユ。忍穗耳ノ尊ノ御正配ハ、高皇產靈ノ神ノ女ニテ、御名ハ、書紀ニ栲幡千々姬トアレドモ、古事記ニ萬幡豐秋津師比賣ノ命、書紀一書ニモ萬幡豐秋津姬ノ命ト見ユレバ、コノ豐比咩ノ命ハ、即チ御同人ニテ、忍穗耳ノ尊ノ嫡后ナラン。息長大姬大目ノ命ハ、續後紀延喜式ノ外、見ル所ナシ。去共其位次、忍穗耳ノ尊ノ上ニ在レバ、或ハ尊ノ御母ニ非ザルカ云々。サテ豐前風土記ニ新羅ノ國ノ神ト云ヒ、續後紀延喜式、並ニ辛國ノ二字ヲ冠スレバ、忍穗耳ノ尊ヲ以テ新羅ノ國ノ神ト爲スモノ丶如シ。此、大ニ紀記二書ノ載スル所ト同シカラズ、忽聽テ大ニ人ヲ駭セ共、古來ノ傳說、決シテ誣フベカラズ」ト云ヒテ、サテ正史ニ此ノ事實ヲ直書セザル理由ヲ論ジテ、「外國ニ示サント欲スルガ故ニ、避諱スル所ナキヲ得ズ」ト云ヘリ。

然レドモ天孫降臨ノ傳說ハ、日本紀撰定ノ時ニ構造セシ者トハ見エズ。稗田ノ阿禮ガ誦ミ習ヘル先代ノ舊辭ヲ撰錄セル古事記ニモ、諸國ノ故老ノ傳說ヲ輯錄セル風土記ニモ、齋部氏ニ傳ハレル上古ノ遺聞ヲ記セル古語拾遺ニモ、其ノ餘凡テノ古書ニモ、皇孫ノ命ノ、外國ヨリ渡リ給ヘルガ如キ形迹、更ニ見エザレバ、天ヨリ降リマセリト云ヘルハ、往古ヨリノ傳說ニシテ、香春ノ郷ノ三神トハ、全ク關係ナキ事ナリ。神名式ナル國々ノ神社ノ中ニハ、社ノ名ノミニシテ、神ノ名ノ知レザル者モ多ク、神ノ名ハアレドモ、イカナル神ナルカハ詳カナラザル者モ多ケレバ、息長大姬大目ノ命、忍骨ノ命ト云ヘルモ、何レノ世ニ韓國ヨリ渡リ來マセル神ナルカ今考フベカラズ。

且天孫降臨ヲ韓土ヨリ渡リマセル事ト解スル時ハ、須佐之男ノ命ノ、新羅ノ國ニ降臨シ給ヘルヲバ、イカニカ解スベキ。韓土ヨリ韓土ニ降リマセリトセンカ。又ハ天孫ノマシ〳〵ケル高天ノ原ハ、韓土ノ外ナル別國トセンカ。凡テ神祇ノ傳說ニ高天ノ原ト云ヘルハ、即昊天ノ事ニシテ、皇孫ノ命ヲバ、言葉通リニ天ツ神ノ御裔ト仰ギ奉レルナリ。然ルヲ高天ノ原トハ、皇祖ノ出デ給ヘル本土ヲ指セリナド解スルハ、皆牽強附會ノ說ナリ、サレバ神代紀ニ韓土往來ノ談ノ雜レルハ、博士ノ確信セラル丶如ク、上世ハ、日韓一域ナリト云フ明證トスルニハ足ラズシテ、唯皇國人ノ、韓土ニ往來シタルハ、有史以前ヨリ有リキト云フ薄弱ナル一證トナルノミナリ。

第二十章　稻氷ノ命、御毛沼ノ命

姓氏錄右京皇別ニ、「新良貴、彥波瀲武鸕鷀草葺不合ノ尊ノ男稻飯ノ命之後也、是出於新羅國王者祖合、日本紀不見」トアルヲ、本居氏ノ鉗狂人に、「姓氏錄此條、板本ハ、誤リ有て、其義聞えず、お

のれ、さまに古本二本を以て校合したりしに、いづれも、是出の出ノ字なく、國ノ字の下に、即爲國の三字有て是於新良國即爲國主とあり。是にてよく聞えたり。出於の出ノ字は、下にも出於とある本よりまぎれて、上にも入り、又即爲國の三字は、國ノ字の二ッあるよりまぎれて、脫たるなり。其下の文は、古本も皆板本と同じ、猶誤有べし。こゝろみにいはゞ、下の出於は、二字ともに衍にて、稻飯ノ命新良國王之祖也とや有けん。かならずかくの如くならでは、上文と意貫かず、聞えぬ事之」ト云ヒ、記傳十七ノ九十三丁ト卅四ノ四丁トニ此ノ文ヲ引キタルニ、「是於新良國即爲國主、稻飯命出於新羅國王者祖令」ト書キテ、「印本には、是ノ字の下に出ノ字有て、即爲國ノ三字脫たり。今は一本に依れり。かの出ノ字は、坐を誤れるにもあらむか、」又「出於ノ二字、心得がたし。者の誤か。出と草書似たり。又祖の上の者ノ字は、之の誤、令ノ字は、也の誤か」ナド云ヘリ。橋本稻彥ガ訂正シタル板本ニハ、本居氏ノ推定ニ從ヒテ、下ノ出於ノ二字ハ、直チニ者ノ字ニ改メ、者祖令ノ三字ハ、直ニ之祖也ト改メタルハ、武斷ノ所爲ナレドモ、原文ノ意ハ、決メテサル事ニゾアリケン。大日本史氏族志神別天孫ノ部ニ、「稻飯入新羅、立爲國王、其後爲新良貴氏」ト書キタルモ、本居氏ノ說ニ依レルナリ。古史傳ニ「稻飯命出於新羅國王者祖」ト讀マセタルハ、文字ハ、舊本ノ儘ナレドモ、意義ハ、稍通ジ難シ。サテコノ稻飯ノ命ハ、神武天皇ノ皇兄ニシテ、其ノ御事跡ハ、記紀共ニ記シタレドモ、新羅ノ國主ト爲リマセル事ハ、見エサル故ニ、日本紀不見ト斷レルナリ。

古事記上卷ノ終リニ、「御毛沼命者、跳波穗渡坐于常世國、稻氷命者爲妣國而入坐海原也」トアリテ、記傳ニ、「常世ノ國は、何國にまれ、皇國を離りて、易く往還がたき絕遠き國を云こと、上傳十二の十葉に委く云るが如し。さてかく御毛沼ノ命の、然る國に渡リ坐シし所以は、詳ならず。姓氏錄ノ右京皇別に云々とあるに依れば、新羅ノ國に渡リ坐て、其ノ國王に爲坐せるなるべし。さて其は御毛沼ノ命なるを、姓氏錄に稻飯ノ命とあるは、御兄弟の間の傳への異なるなり、」「爲妣國は、御母の國なるによりてと云むが如し。御母玉依毘賣ノ命は、海ノ神の御女に坐せばなり、」「入坐海原也とは、海底に沈ミ入坐を云なり。漢籍に、船に乘て海上へ逝くを、入海と云とは異なり。」ト云ヘリ。神武紀戊午ノ年六月ノ條ニ、「到熊野神邑、且登天磐盾、仍引軍漸進。海中卒遇暴風。皇舟漂蕩。時稻飯命乃歎曰、嗟乎吾祖則天神、母則海神、如何厄我於陸、復厄我於海乎、言訖乃拔劍入海、化爲鋤持神。三毛入野命亦恨之曰我母及姨、並是海神、何爲起波瀾以灌溺乎、踏浪秀而往乎常世鄕矣」トアルモ、稻飯ノ命ハ、海底ニ沈ミ給ヒ、三毛入野ノ命ハ、外國ニ渡リ給ヘル趣ナリ。化爲鋤持神ハ、記ニハ稻氷ノ命ノ御事ニハ非ズシテ、火遠理命ノ、海神ノ宮ヨリ上國ニ返リマシヽ、時ノ事トシテ「即載其和邇之頸、送出。故如期、一日之內送奉也。其和邇將返之時、解所佩之紐小刀、着其頸而返。故其一尋和邇者、於今謂佐比持神也」トアリテ、記傳ニ「名義は、かの賜れる紐小刀を有持る由なり。佐比は、書紀推古ノ卷ノ大御歌に、多智奈羅磨、句禮能摩差比、これ、吳の眞佐比をすぐれたる大刀のよしによませ給へるなり。私記に、吳ノ眞鋤良劍之名也と云り。又神代ノ卷に、蛇韓鋤之劍と云あり。吳ノ眞鋤と韓鋤と、ぱへ似たる名なり。心云々」トアリ。書紀通釋ニ、「記傳に云々云れたるにつきて考るに、こゝなるは、上に拔劍入海とあれば、海中に入ましつゝも、なほ劍を持給ふよしの御名ときこえたり。さて如何なる故にて、今海中に入に、劍を拔持給ふぞといふに、此時暴風のはげしきのみに非ず、惡魚海獸などさまざまのものども、現れ出て、皇舟を覆さむとせしなるべし。故其妖物を斬拂ひつゝ、容易く海宮に幸坐むと勇み健びて入坐しさまを云傳へしなるべし」ト云ヘリ。踏浪秀ハ記傳ニ「此時御毛沼ノ命の乘リ賜へる御舟は、何路ともなく遙に漂流て、終に破れ、若は覆りなどぞしたりけむ。書紀に灌溺とあるも、此ノ故と思はる。さて然御舟を失ひ給ひし故に、直に海ノ上を步ミ渡りて、遙なる國に著坐セりしなるべし。然れば二紀共に浪の穗を踏跳てとあるは、舟なきが故に、然爲シ賜ひしなるべし。さるは、海ノ神の御魂幸ひてぞありけむかし」トアリ。

星野博士ハ、右姓氏錄ノ文ヲ「普通印本ニ從フノ、文順ニ意穩ナルニ如カズ」トテ、其ノ文意ヲ推繹シ、「新良貴ノ姓ハ、鸕鷀草葺不合ノ尊ノ御子稻飯ノ命ノ後裔ノ姓ナルガ、コノ稻飯ノ命ノ系ハ、新良國主ヨリ出デシ者ナリ。去共稻飯命ノ、新羅國王ヨリ出ヅルト云フハ、日本書紀ノ文ニ見エズトナリ。但祖合ノ二字疑フベシ、重野博士ノ說ニ、但今ノ二字ノ誤寫ナラント云ヘリ。祖ト但ト、合ト今トハ、字形相似タレバ、遂ニ傳寫シテ誤ヲ致セシナラン。此文意ノ如クナランニハ、新良貴姓ノ系譜ニハ、必鸕鷀草葺不合ノ尊ヨリ以上ノ諸神ヲ以テ新良國主ト爲シ、因テ出ヅル所ノ國名ヲ取リ、其姓ト爲セル由、明記スルナラン」ト云ヘリ。若コノ說ノ如クナラバ、新良貴姓ヲ稱スベキ者ハ、何ゾ必シモ稻飯ノ命ノ後裔ニ限ラン。アラユル皇別ノ諸氏ハ、皆新良國主ヨリ出デザルハナク、畏カレドモ我ガ皇室ハ、諸氏ノ宗家ニマシ〳〵テ、第一ニ此ノ姓ヲ稱シ給フベキ筈ナリ。凡テ姓氏ハ、本宗ヨリ別レテ、氏々ノ祖先ト爲レル人ノ居住ノ地名又ハ特別ノ事實等ニ依レル者ナレバ、稻飯ノ命ノ後裔ノ、新良貴氏ト稱スル理由ハ、稻飯ノ命以後ノ事實ニ於テ求ムベシ。新良貴氏ハ、コノ一系ノミニシテ、他ノ皇別諸氏ニ、此ノ姓ヲ稱スル者ナキハ、カノ新良國主ノ語ノ、皇祖ニハ關係セズシテ、此ノ一氏ノミニ關係シタル明證ナリ。日本紀不見トハ、紀ニ拔劒入海トアレドモ、新羅王ト爲リ給ヘルコト見エザルヲ云フ。若皇祖ハ、新羅國王ニマシマストノ意ナラバ、明カニ紀ノ記載ト矛楯シテ、相容レザル事トナリテ、唯ニ見エズト云フノミニハ止ラザルナリ。若其ノ家系ニ、カヽル不都合ノ記載アラバ、姓氏錄ノ撰者、イカデカ訂正ヲ加ヘザラン。姓氏錄ノ序ニ「本系之與古記違、則據古記以刪定」、又「捃摭群言、沙汰金礫、裁舊記之煩蕪、採會新之機要、除新系之塗說、撮通古之折中」ナドアリテ、此ノ書ハ、謬傳僞說ヲモ其ノ儘ニ輯錄シタル者ニ非ザレバ、假令多少ノ錯誤ハ免レズトモ、右ノ如キ甚シキ矛楯ノ事ノアルベキ筈ナシ。假ニ博士ノ說ニ從ヒ、皇祖ノ新羅ニ主トナリ給ヘルコトハ、實事ニシテ、日本紀ハ却テ之ヲ避諱シタリト見ルトモ、姓氏錄ノ撰者ハ、日本紀ヲ正史トシテ、諸氏ノ系譜ノ僞妄ヲ訂シタレバ、博士ガ事實ト認メタルガ如キ記載アリトモ、撰者ハ、必僞妄トシテ排斥スベカリシニハ非ズヤ。

然ラバ稻飯ノ命若クハ三毛入野ノ命ノ、新羅國王ニ爲リマセル事ハ、確實ニシテ疑ヒナキカト云フニ、決シテサニアラズ。コノ事、モシ古來相傳ノ說ナラマシカバ、紀ノ撰者ハ、此ノ名譽アル傳說ヲ措キテ、タヾ拔劒入海ナド記スベキ筈ナシ。或ハ之ヲ本文ニ書カズトモ、一說トシテ原註ニ加フベキ事ナリ。然ルヲ紀ニ此ノ事ナキヲ見レバ、公行ノ傳說ニハ非ズシテ、新良貴氏一家ノ傳ナルベシ。又皇舟ノ暴風ニ遇ヘルハ、紀ノ國ノ熊野ノ海上ニ到リマセル時ノ事ナレバ、地理ノ形勢ヨリ考ヘテモ、新羅ノ國ニ渡リ給フベキ由ナシ。總テ彼ノ傳說ハ、神代紀ノ性質ヲ帶ビテ、常理ヲ以テハ解キ難ケレドモ、稻飯ノ命ノ、海ニ入リ給ヘルハ、日本武ノ尊ノ、東國ノ海中ニテ暴風ニ遇ヒ給ヘル時、弟橘媛ノ、「今風起浪泌、王船欲沒、是必海神心也、願以妾之身贖王之命而入海」ト啓シテ、瀾ヲ披キテ入リタル傳說トイトヨク似タル趣ニ聞ユレバ、入海ハ、文字ノ如ク海底ニ沈ミ入リ給フヲ云ヘルナリ。三毛入野ノ命ノ事ハ、外國ニ渡リ坐セル趣ナレドモ、コレモ、踏浪秀トアリテ、新羅ノ如キ遠國ニ漂ヒ給ヘル事トハ信ジ難ケレバ、謂ハユル常世ノ國ハ、イヅクヲ指シテ云ヘルカ、知ルベカラズ。

サレバ稻飯ノ命ノ新羅國主ト爲リ給ヘルコトハ、姓氏錄ニ明瞭ナラザル文句ノ見エタルノミニシテ、國史ニモ韓史ニモ、旁證トスベキ者、更ニナク、又其ノ御裔ナル新良貴氏ノ、新羅ノ國ヨリ何レノ世ニカ參渡リ來シ事モ、何書ニモ見エズ。三韓諸族ノ歸化ハ、紀又ハ續紀等ニ屢見ユルニ、太祖ノ皇兄ニシテ、蕃國ニ君臨シ給ヘル名族ノ裔ノ、宗國ニ歸リタルヲ、史書ニ記シ漏サレシハ、訝シキ事ノ限リナレバ、姓氏錄ノ此ノ一條ハ、舊家ニ傳ハレル一說トシテ、歷史上ノ參考ニ供スベキノミニシテ、確實ナル事跡トハ言ヒ難シ。

右ノ如ク日韓一域又ハ日韓同種ト云フコトハ、古書ノ確證トスベキ者ナケレ

ドモ、畢竟此ノ問題ハ、博言學、古物學、比較神話學等ノ考究ヲ積ミテ、證定スベキ者ニシテ、一二三ノ古書ニヨリテ速斷スベキ者ニ非ザレバ、此等ノ諸學ノ進歩ヲ待チテ、其ノ疑ヒヲ決セザルベカラズ。

第二十一章　天之日矛

古事記中卷應神天皇ノ段ニ云、「又昔有新羅國主之子名謂天之日矛。是人參渡來也。所以參渡來者、新羅國、有一沼、名謂阿具奴摩。此沼之邊、一賤女晝寢。於是日耀如虹指其陰上、亦有一賤夫、思異其狀、恒伺其女人之行。故是女人自其晝寢時妊身、生赤玉。爾其所伺賤夫、乞取其玉、恒裹著腰。此人、營田於山谷之間。故耕人等之飮食負一牛而、入山谷之中、遇逢其國主之子天之日矛。爾問其人、曰何汝飮食負牛入山谷。汝必殺食是牛、即捕其人、將入獄囚、其人答曰吾非殺牛、唯送田人之食耳。然猶不赦。爾解其腰之玉幣其國主之子。故赦其賤夫、將來其玉、置於床邊、即化美麗嬢子。仍婚爲嫡妻。爾其嬢子、常設種々之珍味、恒食其夫。故其國主之子、心奢詈妻、其女人、言凡吾者、非應爲汝妻之女。將行吾祖之國、即竊乘小船、逃遁渡來、留于難波。（此者、坐難波之比賣碁曾社謂阿加流比賣神者也。）於是天之日矛、聞其妻遁、乃追渡來將到難波之間、其渡之神、塞以不入。故更還泊多遲摩國。即留其國而、娶多遲摩之俣尾之女名前津見生子、多遲摩毛理、次多遲摩比多訶、次淸日子（三柱）此淸日子、娶當摩之咩斐生子、酢鹿之諸男、次妹菅竈由良度美。故上云多遲摩比多訶、娶其姪由良度美生子、葛城之高額比賣命。（此者、息長帶比賣命之御祖。）故其天之日矛持渡來物者、玉津寶云而、珠二貫、又振浪比禮、切浪比禮、振風比禮、切風比禮、又奧津鏡、邊津鏡、並八種也。（此者、伊豆志之八前大神也。）」

天之日矛ハ、垂仁紀ニ天日槍ト書キテ、通證ニ「蓋以所將來寶物得名也」ト云ヒ、記傳ニモ「此ノ名は、參來て後に、皇國にて稱へたるなるべし」ト云ヘリ。神代紀天ノ石窟ノ段第一ノ一書ニ「以石凝姥爲治工採天香山之金以作日矛云々」トアル、日矛ノ義ニツキテハ、釋紀以來種々ノ説アレドモ、日ハ、久志毘ノ毘ト同ジクシテ、日矛ハ、靈異ナル矛ノ義ナリト云ヘル説モアレバ、天之日矛ノ名モ、將チ來タリシ矛ノ靈異ナルニ依レルカ。將チ來タリシ寶物ノ中ニ、出石桙ト云ヘル物アルコト、下ニ引ケル垂仁紀ノ文ニ見エタリ。又古語拾遺ニ「新羅ノ王ノ子海ノ檜槍」ト書ケルニヨリテ、記傳ニ「此ノ字に依らば、檜ノ木の矛の謂以て稱へたるか。海の意は、あるべからず。こは、天ノの義なるべし」ト云ヒ、古史徵ニハ「天日と作るは、借字にて、名の義は古語拾遺に海檜槍と作れたる義にて、檜槍持てわたり來しか。何ぞ檜槍に由りて、かく名に負るならむ」トアリ。何レニテモ此ノ名ハ、皇國ニテ云ヘル名ニシテ、姓氏錄ニハ、天ノ日桙ノ命、播磨ノ國風土記ニハ、天ノ日槍ノ命ト、命ノ字ヲツケテ稱ヘタリ。彼ノ國ニ居リシ時ノ名ハ、傳ハラズ。

吾祖之國ハ、記傳ニ「父の國にて、皇國を指シて云るなり。其ノ由は、此ノ娘子は、彼賤女の陰上を、日ノ光の刺たるより妊て生れたるなれば、父は天日にして、天ツ日は、初メ伊邪那伎ノ大御神の御禊に因リて、筑紫の阿波岐原にして生坐つればなり。かゝれば、天照大御神、即チ天ツ日に坐々こと、古ヘノ傳ヘの趣、いよゝいちじろきものぞ」ト云ヘリ。此ノ傳説ノ意ハ、誠ニ皇國ヲ天ツ日ノ本ツ國ト爲シタル趣ニ聞ユ。

比賣碁曾ノ社ハ、神名式ニ「攝津ノ國東生ノ郡比賣許曾神社、（神名、大、月次、相嘗、新嘗。）」四時祭ノ式ニ「下照比賣ノ社一座、或號比賣許曾ノ社、」臨時祭ノ式ニ「比賣許曾ノ神社一座、亦號下照比賣、」ト見エテ、記傳ニ「此ノ社は、今ノ世に云フ高津ノ宮なりと云り。然るに此ノ高津ノ宮を、今は仁德天皇なりと申すは、心得ぬことなり。其は、彼ノ御代の高津ノ宮を思ひてのおしあてには非ざるか。今の高津と云名は、かの高津ノ宮とは別なるをや。今の高津は、孝德紀に蝦蟇ノ行宮とある所なるべし。うつぼ物語の哥にも、かはづとありと或人云り。さもあるべし」ト云ヘリ。

攝津ノ國風土記ニ「比賣島松原者、昔輕島豐阿岐羅宮御宇天皇之世、新羅國有女神、遁去其夫來、暫住筑紫

國伊波比乃比賣嶋。乃曰此嶋者、猶不是遠、若居此島、男神尋來、乃更還來、遂停此島。故取本所住之地名、以爲島名」トアリ。此ノ比賣島ハ、記ノ仁德天皇ノ段ニ「天皇爲將豐樂而幸行日女島云々」トアル所ニテ、記傳ニ「攝津ノ國西成ノ郡にあり。難波の古き圖を見るに、姬島は、九條島の南に並びたる島にて、今ノ世に勘助島と云處のあたりにあたれり。大阪の西の邊リにて、南によれる處なり。」トアリ。伊波比乃比賣島ハ、古事記國生坐ノ段ニ「次生女島。亦名謂天一根」トアル島ニテ、記傳ニハ「此は、今筑前の海中玄海島と肥前の名兒屋との間の海路にて、同國の唐津より今ノ道二里許東北ノ方にありと云姬島なるべし」トアレドモ、豐後杵築ノ人小串重威ガ姬島考に「女島は、豐後ノ國國東ノ郡にして、伊波比洋の西南にあり。今は姬島とかき、比賣語曾ノ神を赤水明神といへり。石の祠にて、むかし女神の居住給ふといふ屋形山より三町ばかり海邊の岩山にあり」トテ、記傳ノ說ハ、信ケ難キ由、委シク論ハレ、古史傳モ、其ノ說ニ從ヘリ。サテ此ノ風土記ノ傳說ニ依レバ彼ノ孃子ハ、難波ニ到レルヨリ前ニ、豐後若クハ肥前ノ姬島ニ暫ク往ミタルナリ。和名抄ニ、肥前ノ國基肄ノ郡ニ姬社ノ鄕アルモ、彼ノ社ニ由アリテ聞ユ。

阿加流比賣ノ神ハ、比賣碁曾ノ社ノ神號ナリ。記傳ニ「名ノ義、かの玉に依れるか云々。下照比賣と申すも、同ジ意にて、玉の光リ照る由か。又二ッ共に、玉に依るには非て、彼ノ孃子の容貌を美て稱へたる號か。何れにてもあるべし。神名帳に、攝津ノ國住吉ノ郡赤留比賣ノ命ノ神社あり。此は、比賣碁曾ノ社の神を、又別に此にも祭れるなるべし。然る例あり。出雲ノ國に櫛御氣野ノ命と申すは、意宇ノ郡熊野ノ大神の御號なるに、同郡に又別に久志美氣濃ノ神社あると同じ。」トアリ。

垂仁紀三年天ノ日槍來歸ノ條ニハ、彼ノ孃子ノ事ヲ記サズシテ、二年ノ條ノ一說ニ、富意加羅ノ國ノ王之子都怒我阿羅斯等ガ來朝ヲ、彼ノ孃子ヲ覓メテ追來タリシ由ニ記シタルハ、極メテ日矛ガ事ノ紛レタル傳ナリ。

其ノ文ニ曰ク、「一云、初都怒我阿羅斯等、在國之時、黃牛負田器、將往田舍、黃牛忽失、則尋迹覓之、跡留一郡家中。時有一老夫、曰汝所求牛者、入於此郡家中。然郡公等、曰由牛所負物而推之、必設殺食。若其主覓至、則以物償耳、即殺食也。若問牛直欲得何物、莫望財物。便欲得郡內祭神云爾。俄而郡公等到之、曰牛直欲得何物、對如老父之教。其所祭神、是白石也。以白石授牛主。因以持來置于寢中、其神石、化美麗童女。於是阿羅斯等、大歡之欲合。然阿羅斯等、去他處之間、童女忽失也。阿羅斯等、大驚之、問其婦曰童女何處去矣、對曰向東方。則尋追來、遂遠浮海、以入日本國。所求童女者、詣于難波、爲比賣語曾社神、且至豐國國前郡、復爲比賣語曾社神、並二處見祭焉」トアリ。此ノ傳說ノ趣ニテハ、彼ノ赤玉、即神石ノ生出シ所由モ、見エズ、彼ノ童女ガ、皇國ヲ指シテ逃渡リ來リシ所由モ、明カナラザレドモ、皇國ニテ阿加流比賣ノ神又ハ下照比賣ノ神トシテ、大社ニ祭レルヲ見レバ、此ノ神ノ緣起ハ、必ズ記ニ見エタル如キ、天ッ日ニ關係セル傳說ニ依リシナルベシ。又二處ニ祭ラレタル事モ、紀ノ文ニテハ、先ニ難波ニ詣リ、次ニ豐國ノ國前ノ郡ニ至レル趣ニ聞ユレドモ、攝津ノ國風土記ニ筑紫ヨリ難波ニ還レリト云ヘルゾ、古傳ノ儘ナルベキ。サテ日矛ガ、彼ノ娘子ヲ追ヒ來シ事ヲ、紀ニ阿羅斯等ト誤リタル故ハ、垂仁紀二年ノ條ニ「一云、御間城天皇之世、額有角人、乘一船泊于越國笥飯浦云々。問之曰何國人也、對曰、意富加羅國王之子云々、傳聞日本國有聖皇以歸化之。到穴門時云々、即更還之、不知道路、留連島浦、自北海廻之、經出雲國至於此間」トアル事ノサマ、此ノ日矛ガ、難波ヨリ還リテ、穴門ヲ廻リテ、但馬ノ國ニ泊テツルサマト善ク似テ、傳聞云々ナドハ、紀ニ日矛ノ事ヲ記セルト、文マデ同ジキヨリ、彼ノ事モ、此ト紛レタルナリ。

日矛ノ事ハ、垂仁紀ニ「三年春正月、新羅王子天日槍來歸焉。將來物、羽太玉一箇、足高玉一箇、鵜鹿々赤石玉一箇、出石小刀一口、出石桙一枝、日鏡一面、熊神籬一具、幷七物、則藏于但馬國、常爲神物也。一

云、初天日槍、乘艇泊于播磨國、在於宍粟邑。時天皇遣三輪君祖大友主與倭直祖長尾市於播摩、而問天日槍曰汝也誰人。且何國人也。天日槍對曰、僕、新羅國主之子也。然聞日本國有聖皇、則以己國授弟知古而歸化之。仍貢獻物、葉細珠、足高珠、鵜鹿々赤石珠、出石刀子、出石槍、日鏡、熊神籬、膽狹淺大刀、幷八物。仍詔天日槍曰、播磨國宍粟邑淡路島出淺邑是二邑、汝任意居之。時天日槍啓之、曰臣將住處、若垂天恩聽臣情願地者、臣親歷視諸國、則合于臣心欲被給、乃聽之。於是天日槍、自菟道河泝之、北入近江國吾名邑而暫住。復更自近江經若狹國、西到但馬國、則定住處也。是以近江鏡谷陶人、則天日槍之從人也。故天日槍、娶但馬出島人太耳女麻多烏、生但馬諸助也。諸助生但馬日楢杵。日楢杵生淸彥。淸彥生田道間守也、」又「八十八年秋七月己酉朔戊午、詔群卿曰朕聞新羅王子天日槍初來之時將來寶物、今在但馬、元爲國人見貴、則爲神寶也。朕欲見其寶物、即日遣使者、詔天日槍之曾孫淸彥而令獻。於是淸彥被勅、乃自捧神寶而獻之。羽太玉一箇、足高玉一箇、鵜鹿赤石玉一箇、日鏡一面、熊神籬一具、唯有小刀一、名曰出石、則淸彥忽以爲非獻刀子、仍匿袍中而自佩之。天皇未知匿小刀之情、欲寵淸彥、而召之賜酒於御所、時刀子從袍中出而顯之。天皇見之、親問淸彥曰、爾袍中刀子何刀子也。爰淸彥知不得匿刀子、而呈言、所獻神寶之類也。則天皇謂淸彥曰其神寶之豈得離類乎。乃出而獻焉。皆藏於神庫。然後開寶府而視之、小刀自失。則使問淸彥曰、爾所獻刀子忽失矣。若至汝所乎。淸彥答曰昨夕刀子自然至於臣家乃明旦失焉。天皇則惶之、且更勿覓。是後出石刀子、自然至于淡路島、其島人謂神、而爲刀子立祠。是於今所祠也。昔有一人乘艇而泊于但馬國。因問曰汝何國人也、對曰新羅王子名曰天日槍、則留于但馬國、娶其國前津耳一云前津見、一云太耳、女麻拕能烏、生但馬諸助。是淸彥之祖父也」トアリ。

日矛ノ持チ渡リキシ寶物ハ、記ニハ珠二貫トアルヲ、紀ニハ玉三箇アリ。記ニ奥津鏡邊津鏡トアルハ、紀ニ日鏡一面トアリ。記ニ比禮ト云フモノ四ツアルハ、紀ニハナクテ、小刀、桙、大刀、熊神籬ナドアリ。比禮ハ、記傳十ノ三十八丁ニ「何にまれ打振物を云。されば魚の鰭も、水ノ中を行クとて振物、服の領巾も、本は振む料にて、故に上代に、領巾は必振ことをいへり。皆本は一ツ意に名たる物ぞ」ト云ヘルガ如クニテ、コヽノ四種ノ比禮ハ、記ニ、須佐之男ノ命ノ、大穴牟遲ノ神ヲ喚入テ、其蛇ノ室ニ寢シメ給ヒシ時、「其妻須勢理毘賣命、以蛇比禮授其夫云、其蛇將咋、以此比禮三擧打撥、故如教者、蛇自靜故、平寢出之。亦來日夜者、入呉公與蜂室、且授呉公蜂之比禮、教如先故、平出之、」又職員令集解ニ、「饒速日命、降自天時、天神授瑞寶十種、息津鏡一、部津鏡一、八握劍一、生玉一、足玉一、死玉一、道反玉一、蛇比禮一、蜂比禮一、品之物、比禮一、教導、若有痛所者、合玆十寶、一二三四五六七八九十云而布瑠部。由良由良止布瑠部。加此爲之者、死人返生」トアル、蛇比禮蜂比禮ナド、同ジ類ナルベシ。記傳ニ「振浪は、那美布流と訓べし。浪を振と云意なり。次なる切振も、此レに准ふべし。さて浪を振とは、浪を起すといふ云々、」「切浪比禮は、切は、絶にて、浪を絶止むる比禮なり」、「振風比禮は、風を起す比禮なり云々、」「切風比禮は、風を止むる比禮なり。さて此ノ四種の比禮を用フる法は、各此レを出して振れば、忽チに浪又風の起りもし止もするなり。かの海神の、火遠理ノ命に授ケ奉リし鹽盈珠鹽乾珠と同じこゝろばへなり、」又「奥津鏡邊津鏡は、如何なる由を以てかく名けたるにか、未ダ思ヒ得ず云々。四種の比禮に准へて思へば、天ノ日矛、遠き海ノ上を經て來る道なりし故に、凡て此ノ八種は、皆其ノ備にて、海ノ上にして用ふべき徳用ある物にて、此ノ二ツノ鏡も、然る故に、奥邊の名は負ヘるにもや有ラむ。かの二貫の珠も、然にもやあらむ。書紀に出たる鵜鹿鹿赤石玉と云名も、竊明し玉にて、闇中にひそかに物を照し見る由にやと思ふに准へて思へばなり。」熊神籬ハ、玉勝間ニ「熊は、借字にて、隈隱などゝ同言にて、隱れこもりて、露ならぬをいふ。さてこは、韓國にて神を祭るに、其神ノ體を坐する具にて、世に佛ノ像をいれおく厨子といふ物などの如く作りたる物なるべし。そは、皇國の神籬とは、やうかはりて、外をかこみて、内の

あらはに見えず、隠れる故に、くまひもろぎと皇國にて名づけたるなるべし。もとより神籬のさまにはあらざれども、神の御かたを坐する物なる故に、其名を負せたる也」ト云ヒ、其ノ神籬ノ事ハ、記傳十五ノ四十一丁ニ「比母呂岐と云物は、榮樹をたてゝ、其を神の御室として祭るよりして云名にて、柴室木の意なるを、布志を切て比と云なり」ト云ヘリ。平田氏ハ、古史傳百三十五段「持天津神籬、降葦原中國」ノ傳ニ「此神籬は、常に榮樹をのみ生し建る類には非ずして、天ノ日槍が將來つる寶物の中に熊神籬一具とある物に同じ狀の具なりと所聞たり云々。日槍の將來れる寶物どもは、神武天皇の御世に、三毛入野ノ命の、かしこに渡リ坐る時に、此方より持往給へりし物等なるを、日槍、やがて其ノ御裔にて、そを持渡り來つるなれば、熊神籬も、元より皇國に有來し具と同かりし故に、しか稱へりと所思ゆ」ト云ヘリ。神籬ノ同異ハ、姑ク措キテ、日矛を三毛入野ノ命ノ御裔ト云フコト、イカヾナリ。姓氏錄ニ、新良貴氏ヲ稻飯ノ命ノ御裔トシテ、皇別ニ收メタルニ、日矛ガ裔ハ、諸蕃ノ部ニ入リタレバ日矛ハ、蕃種ニシテ、皇族ノ裔ニ非ザルコト、論ナシ。

此等ノ寶物ハ、記ト紀ト、數モ合ハズ、名モ皆異ニシテ、物モ多ク同ジカラズ。唯三年ノ一說ナルハ、數ノミ記ト合ヘリ。記ニ伊豆志之八前ノ大神ト云ヒ、神名式ニ「但馬ノ國出石郡伊豆志坐神社八座並名神、大」トアルモ、神寶ノ數ニ依レリト覺ユレバ、八種ト云ヘル傳ヘゾ、正シカルベキ。又古語拾遺ニ「新羅王子海檜槍來歸。今在但馬國出石郡爲大社也」トアレバ、八前ノ大神ハ、八種ノ寶物ヲ直ニ神ト祭レルニハ非ズ、日矛ノ靈ヲ祭リテ、寶物ヲ以テ靈代トシタルナリ。然ルヲ記傳ニ「此に擧たる八種と書紀なるとは、皆別物なるべし。さるは、初メ新羅より持チ渡リ來たる寶物は、種々多く有リけむ中に、此の八種は、あるが中に重く際殊なる物どもなりける故に、殊に出石ノ大神と齋祀りて、其ノ社の御靈實に坐々せば、倭へ召て見賜ふべき限リにはあらず。さればかの清彦が獻りしは、此ノ八種の餘の寶物にぞありけんかし」又「此ノ大社は、式にも八座とありて、此の八種の寶物を祠れること憶なるを、海ノ檜槍を祠れる如く云るは、誤なるべし」ト云ヘルハ、記紀ノ說ヲ兩ナガラ助ケテ都合ヨキ考ヘナレドモ、兩書ノ文ヲ見ルニ、何レモ將チ來タル寶物ノ限リヲ擧ゲタル趣ニテ、紀ノ三年ノ條ニハ「并七物、則藏于但馬國、常爲神物也」八十八年ノ條ニハ「今在但馬、元爲國人見貴則爲神寶也」トアリテ、此ノ外ニ、重ク際殊ナル物ノ、別ニ有ルベキ趣ニハ聞エザレバ、紀ノ七物ハ、即記ノ八種ニシテ、彼ト此ト輕重ノ二組アリシニハ非ズ。數モ名モ、同ジカラザルハ、全ク傳ヘノ異ナルニテ、何レカ一ツノ誤リアルベシ。「其ノ社の御靈實に坐々せば、倭へ召て見賜ふべき限にはあらず」ト云ハレタレドモ、日矛ノ靈代トアル寶物ヲ、天皇ノ召シテ見賜ハンコト、何ゾ怪ムニ足ラン。皇孫ノ命ノ天璽トシテ、天照大御神ノ授ケ給ヘル天ノ叢雲ノ劍スラ、倭建ノ命ノ東征ノ時、倭比賣ノ命ヨリ賜ハリテ、佩バセ給ヘル事アルニ非ズヤ。但紀ノ文ニテハ、清彦ガ、詔ヲ被リテ獻レルヲ、「皆藏於神府」トアリテ、還シ給ハザル趣ニシテ、記ニ「此者、伊豆志之八前ノ大神也」トアルニ合ハザル如ク聞ユルハ、此モ、傳ヘノ異ナルニヤアラン。釋紀ニ引ケル天書ニ「詔覽新羅王子天日槍所來獻神寶、使藏石上神宮」トアリ。此モ、又一說ナリ。

日矛ノ始メテ泊テタル所ハ、記ト紀ノ八十八年ノ末節トニハ、但馬ノ國トシタレドモ、紀ノ三年ノ一說ハ、記載最モ、詳カナレバ、眞ナルベシ。播磨ノ國風土記ニ日矛ニ關スル傳說ノ種々アルモ、嘗テ住ミタル國ナレバナリ。

日矛ノ世系ニ付、記紀ノ記セル所ヲ比較スルニ、左ノ如シ。

古事記

新羅國主某—天之日矛—多遲摩母呂須玖—多遲摩斐泥—多遲摩比那良岐—多遲摩毛理

多遲摩之俣尾—前津見

多遲摩比多柯
清日子
當摩之咩斐——酢鹿之諸男
　　　　　　菅竈由良度美
葛城之高額比賣命

日本紀

新羅王某—天之日槍—但馬諸助—但馬日楢杵—清彥—田道間守
　　　　　知古
但馬出島人太耳（前津耳 前津見）—麻多烏（麻拖能烏）

記ニ「俣尾之女名前津見」トアルヲ、紀ニハ「太耳女麻多烏」、又「前津見女麻拖能烏」トアリテ、父子ノ名反サマナリ。記ニテハ、多遲摩比那良岐ハ、多遲摩母呂須玖ノ孫ニテ、多遲摩毛理等ノ父ナルヲ、紀ニハ多遲摩斐泥ナク、日楢杵ヲ諸助ノ子トシ、清彥ヲ田道間守ノ父トセリ。故ニ清日子ハ、記ニテハ日矛ノ玄孫ナルニ、紀ニテハ曾孫ナレドモ、多遲摩毛理ガ、日矛ノ玄孫ナルコトハ、二書同ジ。

記ハ、日矛ノ事ヲ應神天皇ノ處ニ記シタレドモ「又昔云々」ト書キ出シタレバ、記傳ニ「昔とは此ノ御代より前なるよしなり。其は、何の御代と云ことは、傳への詳ならざる故に、泛く昔と云るなり。書紀には、此ノ事、垂仁天皇ノ三年に記されたれども、其は、疑はし。何と云に、同九十年に常世ノ國に遣し、田道間守は、天ノ日矛の玄孫なり。其ノ間八十餘年にして、成人れる玄孫のあらむは、決てあるまじきにもあらねど、他の例を合せて思ふに、なほ疑はし。故レ思ふに、此は、同八十八年天ノ日矛之曾孫清彥云々の事の末に、昔云々とて、天ノ日矛の渡リ參來し事を記されたる昔とは、かの三年の事を指シても云べけれど、なほ其ノ御代より往昔の事と聞えたり。されば日矛の來たりしは、其ノ御代よりは前の事なりけむを、かの清彥の事につきて、一ツにまぎれて、同ジ御代の事とも語リ傳へしにやあらむ。又津ノ國風土記に、比賣碁曾ノ社ノ神の渡リ來坐る事を此ノ明ノ宮の御世のこととして記せるも、たがへり。然るを此處にしも記せることは、異國の人々、彼此と多く此ノ御世に參來つることありしかば、其ノ因なるべし」ト云ヘルハ、然ル事ナリ。又伴信友氏ノ中外經緯傳ニ、日矛來朝ノ事ヲ「孝靈天皇の御世の頃にやあたるべき」ト記シテ、其ノ自註に「是に日矛が歸化れる時を、今孝靈天皇の頃ならむと定たるは、日矛が參渡れる事を、古事記應神天皇の條に、昔云々と記し出して、其子孫の名を擧たるが、玄孫多遲摩毛理清日子等、垂仁天皇の御世に仕奉れる事きこえたれば、其多遲摩毛理より日矛が世まで推上せて、大御代の數に合せて、推考て云るなり」ト云ヘリ。此モ、大方ハ然ル事ナルベケレドモ、猶日矛ノ世系ヲ委シク大御代ノ數ニ合セナバ、左ノ如クナルベシ。

孝靈天皇—孝元天皇—開化天皇—崇神天皇—垂仁天皇—景行天皇—成務天皇
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　倭建ノ命—仲哀天皇—應神天皇
　　　　　　　　　　　　開化天皇—日子坐王—山代之大筒木眞若王—迦爾米雷王—息長宿禰王—神功皇后

（記）新羅國主某—天之日矛—多遲摩母呂須玖—多遲摩斐泥—多遲摩比那良岐—多遲摩毛理
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　多遲摩比多珂—葛城之高額比賣命
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　清日子

（紀）新羅王某—天日槍—但馬諸助—但馬日楢杵—淸彥—田道間守　葛城高額媛

清彥ハ、紀ニ據レバ、天ノ日槍ノ曾孫ニシテ、垂仁天皇ノ末年ニ仕奉リ、田道間守ハ、又其ノ子ニシテ景行天皇ノ元年ニ、叫哭而自死之トアレバ、此ノ父子ハ、垂仁景行ノ二御世ニ當レル人ト云フベシ。カクテ日矛ハ、神功皇后ノ御母方ノ六世ノ祖ナレバ、其ノ歸化ノ時ハ、コノ皇后ノ御父方ノ六世ノ祖ニマシマセル孝元天皇ノ御世ノ頃ニヤ當ルベキ。コハ、推當ニ云ヘルノミニシテ、確ナル事ハ、固ヨリ知ル由ナケレドモ、垂仁天皇ノ御世ヨリ三四代ノ前ナルコトハ、疑ヒナカルベシ。

然ルニ播磨ノ國風土記揖保郡ノ處ニ「粒丘。所以號粒丘。天日槍命、從韓國度來、到於宇頭川ノ底、而乞宿處於葦原志擧乎命、曰汝爲國主、欲得吾所宿之處。志擧乎即許海中。爾時、客神、以劒攪海水而宿之。主神即畏客神之盛行、而先欲占國、巡上到於粒丘而飡之。於此自口落粒。故號粒丘。其丘小石皆能似粒云々」宍禾郡ノ處ニ「川音村。天日槍命、宿於此村、勅川音甚高、故曰川音村」又「奪谷。葦原志許乎命與天日槍命二神相奪此谷。故曰奪谷以其相奪之由、形如曲葛、」又「高屋里（土中上上）所以名曰高家者、天日槍命、告云此村高勝於他村。故曰高家、」又「伊奈加川。葦原志許乎命、與天日槍命占國之時、有嘶馬遇於此川故曰伊奈加川、」又「波加村。占國之時、天日槍命先到此處、伊和大神後到。於是大神大怪之、云非度先到之乎。故曰波加村云々、」又「御方里（土下上上）所以號御形者、葦原志許乎命與天日槍命、到。故墨志爾ノ嵩、各以黑葛三條著足投之、爾時葦原志許乎命之黑葛、一條落但馬氣多郡、一條落夜夫郡、一條落此村。故曰三條。天日槍命之黑葛、皆落於但馬國。故占但馬伊部志地而在之。一云、大神爲形見、植御杖於此村。故曰御形、」神前郡ノ處ニ「糠岡者、伊和大神與天日桙命二神、各發軍相戰。爾時大神之軍集而舂稻之。其糠聚爲丘云々、」又「所以云八千軍者、天日桙命軍在八千。故曰八千軍野」トアリ。葦原志擧乎ノ命ハ、大國主ノ神ノ亦ノ名ナリ。伊和ノ大神ハ、神名式ニ播磨ノ國宍粟郡ニ「伊和坐大名持御魂ノ神社（名神大）」トアリテ、此モ、大國主ノ神ニマセリ。宇頭川ハ、同記ニ「宇頭川。所以名宇頭川者、宇須伎津西方有絞水之淵。故號宇頭川。即是大帶日賣命宿船之泊」トアリテ、今ノ揖保川ノ下流ナリ。宍禾ノ郡ハ、同記ニ「難波長柄豐前天皇之世、分揖保郡、作宍禾郡」トアリテ、本ハ揖保ノ中ノ一邑ナリシ故ニ、垂仁紀ニハ宍粟ノ邑ト云ヘリ。此等ノ傳說ニ依レバ、日矛ハ、初メ揖保ノ地ニ泊テ、ヽ、宍粟ノ邑ニ居ヲ占メ、後ニ但馬ノ國出石ノ地ニ遷リタルニテ、垂仁紀三年ノ一說トホヾ合ヘリ。然レドモ其ノ來朝ノ時代ハ、大國主ノ神ノ國作リマシヽ頃ニシテ、二神、國ヲ爭ヒテ、軍ヲ發シテ戰ヒシ事サヘアルハ、記紀ノ傳說ト大ク異ナリ。

文學博士黑川眞頼氏ノ天ノ日槍歸化時代考（博物叢書第一卷）ニハ、歸化ノ時代ハ、コノ風土記ニ據リテ、神代ト定メ、記紀ナル天ノ日槍ヲバ、風土記ナル天ノ日槍ノ後裔ニシテ同名ナル人トシ「天ノ日槍トイフ名ハ、將來シタル寶物ノ中ニ槍アルヲ以ッテ、取ッテ名トセシナリ云々。神武天皇以後モ、其ノ子孫、其ノ日槍ヲ所持セルヲ以テ、世人、コレヲ天ノ日槍ト稱シテ、十數世播磨ノ國ニ在リシヲ、何ノ天皇ノ御宇ノコロニカ有ラン、朝廷ヨリ勅アリテ、住居スベキ地ヲ更ニ但馬ニ給フ。天ノ日槍、因テ居ヲ但馬ニ遷ス云々。諸助ノ父ナル天ノ日槍、但馬ニ居ヲ移シテヨリ、清彥ニ至テ四世、田道間守ニ至テ五世ナリ云々。又神代ニ歸化セシ初祖天ノ日槍ハ、大國主ノ神ト時代ヲ同ジクセレバ、此ノ天ノ日槍ヨリシテ諸助ノ父ナル天ノ日槍マデハ、十數世ヲ歷シナラン」ト云ヒ、吉田東伍氏ノ日韓古史斷モ、コノ說ニ從ヘリ。然レドモ日矛ノ、但馬ノ伊都志ニ遷レルコトハ、風土記ニモ見エテ、十數世播磨ニ住ミキト云フ事、更ニ徵證ナシ。唯時代ノ新古アルニ由リテ、已ムコトヲ得ズ日矛ヲ二人ニ別チタレドモ、時代ノ新古アルハ、傳ヘノ異ナルノミニテ、三書ニ記セル趣ハ、皆同人ノ事ナリ。サテ日矛ノ世系ハ記紀共ニ多遲摩毛理ノ四世ノ祖トシ、又記紀ノ大國主ノ神ノ傳說ニ、日矛ニ關スルコト、更ニ見エザレバ、歸化ノ時代ノ神代ニ非ザルコト明カナリ。然ルニ日矛ハ、外人來朝ノ最モ古キ者ニシテ、

其ノ傳說ハ、因ヨリ神異ノ談多ク、又宍粟ノ地ニハ、日矛ノ遺跡ト伊和ノ神社トアルニ依リテ、口碑ノ常トシテ、種々ナル附會說ノ傳ハレルヲ、風土記ハ、其ノ儘ニ書キ集メタルモノナレバ、其ノ說、概妄誕ニシテ、據ルニ足ラズ。

日矛ハ、新羅ノ王ノ子ナルコトハ、記、紀、姓氏錄、古語拾遺、皆同ジ。然ルヲ釋紀ニ引キタル筑前ノ國風土記ニ「怡土郡。昔者穴戸豐浦宮御宇足仲彥天皇、將討球磨噌唹幸筑紫之時、怡土縣主等祖五十跡手、聞天皇幸、拔取五百枝賢木、立于船舳艫、上枝挂八尺瓊、中枝挂白銅鏡、下枝挂十握劒、參迎穴門引島獻之。天皇勅問何誰人、五十跡手、奏曰高麗國意呂山自天降來日桙之苗裔五十跡手是也。天皇於斯譽五十跡手曰恪乎。(謂伊蘇志)云々」トアリ。高麗ハ、恐ラクハ、新羅ノ誤傳ナルベシ。日矛ノ歸化ヲ孝靈天皇又ハ孝元天皇ノ頃トスル時ハ、此ノ二御代ハ、第六章ノ推測ニ從ヘバ、紀元第九世紀ノ上半ノ頃ニシテ、新羅ノ逸聖、阿達羅、伐休尼師今ト云ヘル昔氏ノ王ノ世ニ當レヽバ、日矛ハ、昔氏ノ王ノ子ナルベシ。然ルニ羅紀ニハ、此ニ似タル事モ見エズ、又垂仁紀ニハ「以己國授弟知古」トアレドモ、羅紀ニハ、知古ニ似タル王ノ名モ見エザレバ、日矛ハ、何王ノ子ナルカ、今考フベカラズ。唯阿達羅尼師今ノ四年(紀元八百十七年 漢ノ桓帝永壽三年)ニ、東鑑ニ迎烏細烏ノ事アルヲ、記傳ニ引キテ、「やゝ似たることあり」ト云ヘリ。東鑑ノ彼ノ記事ハ、三國遺事ニ據リタル者ナレバ、今遺事ノ文ヲ爰ニ引カン。「第八阿達羅王即位四年丁酉、東海濱有迎烏郎細烏女、夫婦而居、一日迎烏歸海採藻、忽有一巖(一云一魚)負歸日本、國人見之曰、此非常人也、乃立爲王(按日本帝記、前後無新羅人爲王者、此乃邊邑小王、而非眞王也)、細烏怪夫不來歸、尋之、見夫脫鞋、亦上其巖、巖亦負歸如前。其國人驚訝、奏獻於王、夫婦相會、立爲貴妃、此時新羅日月無光、日者奏云、日月之精、降在我國、今去日本、故致斯怪、王遣使來二人、迎烏曰、我到此國、天使然也、今何歸乎、雖然朕之妃有所織細綃、以此祭天、可矣、仍賜其綃、使人來奏、依其言而祭之、然後日月如舊、藏其綃於御庫爲國寶、名其庫爲貴妃庫、祭天所、名迎日縣、又都祈野。」東覽慶尙道迎日縣ノ建置沿革ニ、「本新羅斤烏支縣、(一作烏良友)景德王改臨汀、爲義昌郡領縣、高麗改今名云々、」其ノ古跡ニ「日月池、(在縣東十里都祈野)」トアリテ下文ニ右ノ遺事ノ文ヲ節錄シ、サテ斷按ヲ下シテ、「今按、高麗初、改臨汀爲迎日、則非始於新羅阿達羅王時矣、迎烏之說、不見於金富軾三國史、權近東國史略而獨於遺事載之、無足取信」ト云ヘリ。迎烏細烏ノ事ハ、比賣碁曾神ノ談ト等シク、怪誕ニシテ信ズルニ足ラザレドモ、日矛ノ、新羅ヨリ參來シコトハ、疑フベクモアラズ、又其ノ時代ノ合ヘルニツキテ思フニ、日矛ガ、孃子ヲ追ヒ來シコトヲ、彼ノ國ニテ、女子、其ノ夫ヲ追ヒテ去レリト誤リ傳ヘタルニモアルベシ。彼ノ賤女ガ晝寢シタリト云ヘル阿具奴摩モ、都祈野ノ日月池ノ舊名ナリシモ知ルベカラズ。

凡テ此ノ傳說ノ性質ヲ察スルニ、彼ノ「日耀如虹指其陰云々、自其晝寢時妊身生赤玉」ト云ヘルハ、王充論衡ニ高句麗ノ始祖東明王ノ母ノ語ヲ記シテ、「有氣大如雞子、從天而下、我故有娠、」魏書高句麗傳ニ「朱蒙母、河伯女、爲扶餘王閉於室中、爲日所照、引身避之、日影又逐、既而有孕、生一卵」トアル傳說ニ、其ノ狀ヨク似通ヒテ、昔ヨリ彼ノ國ニ行ハレタル俗傳ノ趣ナリ。然レドモ日矛ノ持來タリシ寶物ノ中ナル比禮ト云フ物ハ、名モ用法モ、皇國ノ古傳ニアル物ト同ジク、其ノ奧津鏡邊津鏡モ、饒速日ノ命ノ授カリ給ヒシ十寶ノ中ニ見エ、又日神ノ御子トアル彼ノ孃子ガ、皇國ヲ指シテ吾祖之國ト云ヘルナドヲ合セ考フルニ、此ノ傳說ハ皇國人ノ作レル物ノ如ク聞エ。又日矛ガ「汝必殺食是牛ト云ヒテ、即其人ヲ捕ヘテ獄囚ニ入レムトス」トアルハ、記傳ニ「他人の牛を盜來て殺さむとするものぞと思へるなるべし」ト云ヘレドモ、盜メリト云フコトハ見エザレバ、此ハ、牛ヲ食フコトヲ重罪トシタルナリ。古語拾遺ニ「昔往神代、大地主神營田之日、以牛宍食田人。于時御歲神之子、至于其田唾饗而還、以狀告父、御歲神發怒以蝗放其田。苗葉忽枯損似篠竹」

トアルヲ、古史傳ニ「牛は、馬と共に宇氣母智ノ神の御頂に成きて、營田に要とある畜物なり。然るに其宍を田人に食しめ給へるは、最も甚じき御過失にぞ有ける。阿那畏」ト云ヘル如ク、牛馬ヲ食フ事ヲ惡ヘルハ皇國ノ舊俗ニシテ、日矛ノ彼ノ賤夫ヲ捕ヘシモ、サル心バヘト聞ユレバ、此ノ傳説ハ皇國ノ古俗ニヨリタル談話ナルコト、明カナリ。但韓土ノ古俗モ、皇國ノ古俗ト同ジク、牛馬ヲ食フ事ヲ惡ヒ、奧津鏡邊津鏡種々ノ比禮ナド云ヘルヲ尊ビテ、其ノ功用ヲ信ジタルニヤ。猶考フベシ。

サテ日矛ノ命ノ後裔ハ、姓氏錄左京諸蕃ニ「橘守、三宅連同祖、天日桙命之後也、」右京諸蕃ト攝津ノ國諸蕃トニ「三宅ノ連、新羅國王ノ子天ノ日桙ノ命之後也、」大和ノ國諸蕃ニ「絲井造、三宅連同祖、新羅人天日槍命之後也」トアリ。又前ニ引キタル筑前風土記ニ據レバ、怡土ノ縣主等モ、日矛ノ裔ナリ。三宅ノ連ハ天武紀十三年ニ「賜姓曰宿禰」トアルニ、姓氏錄ニハ連トノミアルハ、畿内ノ地ニハ宿禰ニナレル族ハ絕エテ、本ノ連ニテアリシ族ノミ殘レルニヤ。大日本史氏族志蕃別三宅氏ノ條ニ「桓武帝時、有越後蒲原郡人從八位上三宅連笠雄麻呂、（續日本紀）後冷泉帝時、有播磨ノ少掾三宅ノ朝臣光平、攝津ノ權少目三宅ノ宿禰安依、堀河帝時、有上野ノ少目三宅ノ宿禰武里、（除目大成鈔）朝臣蓋同宗也、其族後世居備後兒島者、曰兒島氏、（太平記、浮田家譜、○家譜云、昔有百濟人兄弟三人、爲兒時乘舟浮海、東至備前、得一島而止焉、舟中旗幟、皆書兒字、因名其島、曰兒島三兒之後、自以三宅爲姓、此說蓋後世好事者所附會、固不足取、然其言兒島氏本姓三宅出自百濟者、則有可考焉、姓氏錄、三宅連出自新羅王而新羅百濟、其地相接、故相傳之說、以彼爲此、因附會其事、竟覺與姓氏錄所載者、出自不同、其實蓋一姓也、故今訂之、）後醍醐帝時、兒島範長與其子高德、勤王著名、其派有和田、今木、中西、松崎等氏、（太平記）高德之裔、遷居三河賀茂郡者、復爲三宅氏、其派有浮田氏（三宅系圖、寬永系圖）」トアリ。橘守氏ハ、正倉院文書ニ橘守金弓ト云フ人見エ、續後紀承和七年十一月「勅橘戶、蝮橘、橘連、伴橘連、橘守、橘等六姓、與橘朝臣相涉、宜賜椿戶、蝮椿、椿連、伴椿連、椿守、椿等、自餘以橘爲姓之類、亦以椿換之」トアリ。氏族志橘守氏ノ條ノ注ニ「三代實錄、淸和帝時、有常陸久慈郡權主政椿戶宮成、即橘戶之後也、然諸姓（橘戶、蝮橘、伴橘連等）皆不出詳自、拾芥鈔有橘戶宿禰、蝮椿臣」トアリ。此等ハ、橘守ノ族ナリヤ然ラズヤ。

第二十二章　任那國ノ朝貢

古事記崇神天皇ノ條ニ「此天皇之御世、役病多起、人民死爲盡。爾天皇愁嘆而、坐神牀之夜、大物主大神、顯於御夢曰、是者、我之御心。故以意富多々泥古而、令祭我御前者、神氣不起、國安平。是以驛使班于四方、求謂意富多々泥古人之時、於河內之美努村見得其人貢進云々。於是天皇大歡以、詔之天下平人民榮、即以意富多々泥古命爲神主而、於御諸山拜奈意富美和之大神前云々。因此而役氣悉息、國家安平也」トアルヲ、崇神紀ニ「五年、國內多疾疫民有死亡者且大半矣。六年、百姓流離、或有背叛、其勢難以德治之、是以晨興夕惕、請罪神祇云々。七年春二月丁丑朔辛卯、詔曰云々。天皇乃幸于神淺茅原、而會八十萬神、以卜問之云云、時得神語、隨敎祭祀、然於事無驗、天皇乃沐浴齋戒、潔淨殿內而祈之曰、朕禮神尙未盡耶、何不享之甚也、冀亦夢裏敎之、以畢神恩、是夜夢有一貴人對立殿戶自稱大物主神曰、天皇勿復爲愁國之不治、是吾意也、若以吾兒大田田根子令祭吾者、則立平矣、亦有海外之國自當歸伏云々。天皇得夢辭、益歡於心、布告天下、求大田田根子。即於茅渟縣陶邑得大田田根子而貢之云々。十一月壬申朔己卯云々、即以大田田根子爲祭大物主大神之主云々。於是疫病始息、國內漸謐、五穀既成、百姓饒之」トアリ。又古事記孝靈天皇條ニ「大吉備津日子命與若建吉備津日子命、二柱相副而、於針間氷河之前居忌瓮而、針間爲道口以言向和吉備國也、」崇神天皇條ニ「此之御世、大毘古命者、遣高志道、其子建沼河別命者、遣旦波國、令殺玖賀耳之御笠」トアルヲ、崇神紀ニハ「十年秋七月丙戌朔己酉、詔群卿曰、導民之本、在於敎化也、今既禮神祇、災害皆耗、然遠荒人等、猶不受正朔、是未習王化耳、其選群卿、遣于四方、令知朕意。九月丙戌朔甲午、以大彥命遣北陸、武渟

川別遣東海、吉備津彦遣西道、丹波道主命遣丹波、因以詔之曰、若有不受教者、乃擧兵伐之、既而共授印綬爲將軍」ト云ヒ、又記ニ、大毘古命等ガ、建波邇安王ノ亂ヲ平ゲタル後ニ、「如此平訖、參上覆奏。故大毘古命者、隨先命而、罷行高志國。爾自東方所遣建沼河別、與其父大毘古共、往遇于相津。故其地謂相津也。是以各和平所遣之國政而覆奏。爾天下太平、人民富榮。於是初令貢男弓端之調、女手末之調。」トアルヲ、紀ニハ「冬十月乙卯朔、詔群臣曰、今反者悉伏誅、畿内無事、唯海外荒俗騷動未止、其四道將軍等、急發之、丙子、將軍等共發路。十一年夏四月壬子朔巳卯、四道將軍以平戎夷之狀奏焉。是歲異俗多歸、國内安寧。十二年春三月丁丑朔丁亥、詔、朕初承天位、獲保宗廟、明有所蔽。德不能綏。是以陰陽謬錯、寒暑失序、疫病多起、百姓蒙災、然今解罪改過、敦禮神祇亦垂敎而綏荒俗、擧兵以討不服、是以官無廢事、下無逸民、敎化流行、衆庶樂業、異俗重譯來、海外既歸化、宜當此時更校人民、令知長幼之次第、及課役之先後焉。秋九月甲戌朔巳丑、始校人民、更科調役、此謂男之弓弭調、女之手末調也」ト記シタリ。右ノ文中ニ「海外之國、自當歸伏、」「異俗多歸、」「異俗重譯來、海外既歸化」ナドアルニ依リテ、此ノ御世ニ、任那人蘇那曷叱知ノ朝貢セルヨリ前ニモ、外國ノ服屬シタル事アリシ如ク論ズル人アレドモ、此等ノ文句ハ、漢文ノ潤色ナルコト明カナレバ、外國服屬ノ證トハ爲シ難シ。記傳二十三ニ彼ノ「海外荒俗、騷動未止云々」ノ詔詞ヲ擧ゲテ、「此に海外とあるは、いかゞ。四道、みな海外には非ず。又四道將軍、みな夏四月同日に復命せるもいかゞ。漢文の潤色によりて、かゝることもあるなるべし」ト云ヒ、又調役ヲ科スル詔ヲモ、「此ノ詔ノ詞は、例の撰者のかざりに作りて加へられたるものにして、さらに上代の意言に非ず」ト云ひ、又馭戎慨言ニモ、「崇神天皇の大御代の七年に、天皇の大御夢に、大物主ノ大神のみさとしごと有て、同き十一年に、あだし國人あまた參りきつるよし見えたるは、いづれの國々ともしられねども、今思ふに、よものほとりのちひさき國どもの、そのかみはおのがひとりだちたるをさのありけむが、此御代よりまつろひまうきて、皇朝のみのりをばうけ給はりけむ。そはたゞ何の島くれの嶋などいひて、後には國々につける島々なるべし」トテ、外國ニハ非ザル由ニ云ヘリ。サレバ右ノ紀ノ文ハ、外交ノ考究ニ直接ノ關係アラザレドモ、其ノ外國服屬ノ證トシ難キコトヲ示サンガ爲ニ、記ノ文ト對ヘ擧ゲテ、其ノ潤色ノ跡ヲ明カニシタルナリ。

又塙保己一ガ螢蠅抄ニ、神明鏡、類聚大補任、八幡愚童記、伊豫三島社緣起等雜史ヲ引キテ、開化天皇ノ時ニ始メテ海寇アリト考證セリ。

崇神紀ニ「六十五年秋七月、任那國遣蘇那曷叱知令朝貢也。任那者、去筑紫國二千餘里、北阻海以在雞林之西南、」垂仁紀二年ノ條ニ「是歲、任那人蘇那曷叱智、請之欲歸于國。故敦賞蘇那曷叱智、仍齎赤絹一百匹、賜任那王。然新羅人、遮之於道而奪焉。其二國之怨、始起於是時也、」トアリテ、其ノ原注ニ「一云、御間城天皇之世額有角人、乘一船泊于越國笥飯浦。故號其處曰角鹿也。問之曰何國人也、對曰、意富加羅國王之子名都怒我阿羅斯等亦名曰于斯岐阿利叱智于岐、傳聞日本國有聖皇以歸化之。到于穴門時、其國有人名伊都都比古、謂臣、曰吾則定國王也。除吾復無二王。故勿往佗處。然臣究見其爲人、必知非王也。即更還之、不知道路、留連嶋浦自北海廻之、經出雲國、至於此間也。是時遇天皇崩便留之仕于活目天皇、逮于三年。天皇問都怒我阿羅斯等曰欲歸汝國耶、對諮甚望也。天皇詔阿羅斯等、曰汝不迷道、必速詣之遇先皇而仕歟。是以改汝本國名、追負御間城天皇御名便爲汝國名、仍以赤織絹給阿羅斯等返于本土。故號其國謂彌摩那國、其是之緣也。於是阿羅斯等以給赤絹藏于己國郡府。新羅人聞之、起兵至之、皆奪其赤絹、是二國相怨始也」トアリ。此ノ次ニ、彼ノ比賣語曾社神ノ奇談ヲ一說トシテ載セタレドモ、其ハ、天日矛ニツキテノ傳ヘノ紛レタルニテ、既ニ前章ニ引キタレバ、此處ニハ略キヌ。

任那國ハ、即意富加羅國ニシテ、垂仁天皇ノ賜ヘル名ナルヲ、崇神紀ニ此ノ名ヲ以テ記セルハ、追書ナリ。意富加羅ハ、大加羅ニシテ、駕洛國記ノ大駕洛、三國史記ノ加耶又金官國ナルコト、加羅ト云フ名ハ、韓史ノ伽耶諸國ヲ云フノミナラズ、後ニハ西方ノ諸外國ノ大名トナレルコト、彌摩那ヲ任那ト書ク所由、任那ノ名ヲ廣狹ノ二樣ニ用フルコト等ハ、第十四章加羅考ニ云ヘリ。

雞林ハ、新羅ノ別號ナリ。羅紀第四代脱解尼師今四年（紀元七百二十五年、漢明帝永平八年、）ニ「春三月、王夜聞金城西始林樹間有雞鳴聲、遲明遣瓠公視之、有金色小櫝、掛樹枝、白雞鳴於其下、瓠公還告王、使人取櫝開之、有小男兒在其中、姿容奇偉、上喜謂在右曰、此豈非天遺我以令胤乎、乃收養之、及長聰明多智略、乃名閼智、以其出於金櫝、姓金氏、改始林名雞林、因以爲國號、」其ノ後二百四十二年、基臨尼師今十年（紀元九百六十七年、晉懷帝永嘉元年、）ニ「復國號新羅」トアリ。此ハ、東漢ヨリ晉ノ初マデハ、雞林ヲ國號トシタル趣ナレドモ、三國志ニハ斯盧國ト云ヒ、梁書ニハ「魏時曰新盧」ト云ヒ、智證王國號ヲ定ムル時、群臣ノ上言ニ舊名ヲ擧ゲタルニモ、雞林ノ號ハ見エザレバ、國號ハ、始終しらニシテ、雞林ハ、唯雞怪ノ傳説ニヨリテ、後世ニ設ケタル異名ナルベシ。國史ニテハ、此ノ字ヲ書イテモ、讀ムニハしらきト云フナリ。新羅ノ國都ハ、今ノ慶尙道慶州府ニシテ、大加羅ノ故地ナル金海都護府ハ、正シク其ノ西南ニ當レバ、在雞林之西南トアルハ方位ヨク合ヘリ。

本文ノ蘇那曷叱智ハ、一説ノ都怒我阿羅斯等ト同人ナリ。蘇那曷ハ、都怒我ト音相近シ。叱智ハ、阿羅斯等ノ亦ノ名ニ于斯岐阿利叱智干岐トアル叱智ニテ、阿羅マタ阿利ノ阿ハ、曷ノ韻ニ含マリ、羅マタ、利ハ、略カリタルナリ。干岐ハ、君長ノ號ナルコトハ、第十五章ニ云ヘリ。

額有角人ハ、記傳（三十一ノ三十六丁）ニ「實の角には非じ。頭に冠りたりし物の形を角と見たるなるべし。」中外經緯傳ニ「贅の、角のごとく高く尖りたりしなるべし」ナド云ヘレドモ、コハ、都怒我ト云フ人名ヲ角額ト强解シテ附會シタル傳説ナルベシ。角鹿ハ、越前ノ國敦賀ノ古名ニシテ、笥飯浦ハ、即敦賀ノ入海ナリ。角鹿ト名ヅケタル故ハ、記ノ傳ヘニテハ、應神天皇、コノ濱ニ幸行ル時ニ、伊奢沙和氣大神ノ御所爲ニテ「毀鼻入鹿魚、既依一浦云々。其入鹿魚之鼻血臭。故號其浦謂血浦、今謂都怒賀也」トアレドモ、コノ天皇ノ大御歌ニ、既ニ都怒賀トヨマセ給ヘルニツキテ、記傳ニ「若シ初メは血浦と云たらむには、其ノ名の由縁、即チ此ノ天皇の御目のあたりの事なれば、即チ血浦とこそよみ賜ふべけれ。又彼ノ御世のほどは、此ノ名の始メよりいまだいくばくも經ざれば、轉りて都奴賀と云には至るまじ」ト云ヘル如クニテ、都奴賀ト云フハ、古キ名ナルコト明カナレバ、血浦ノ轉レル名トスルモ、附會ノ説ナラン。サレハ人名ノ都怒我モ地名ノ都奴賀モ、名ノ義ハ詳ナラザレドモ、試ニ言ハヾ、都怒我ト云ヘル名高キ人ノ上陸シタルニ由リテ、其ノ名ヲ地名ニ負セシニヤアラン。神名式越前ノ國敦賀ノ郡ニ角鹿ノ神社アリ。中外經緯傳ニ「角鹿ノ神社は、今氣比ノ神社の傍にありて、政所ノ神と稱ふ。都怒我阿羅斯等、此處に留りて在りしをもて祭れりと語リ傳へたり。又其從者の舞たる態を傳へたりとて、四月初卯日、獅子頭を蒙りて舞ふ祭事あり」ト云ヘリ。又通證ニ「延經曰、額有角、蓋所戴之冑也、神名式能登國羽咋郡久麻加夫都阿良加志比古神社、此疑阿羅斯等也」ト云ヒ、古史斷モ、之ニ從ヒテ、「彥は尊稱、熊兜は、其の（神社ノアル）郷名の熊來と同じく、熊は、猛きに喩へたるにて、熊兜被れる人の義と聞ゆ。同國能登郡にも、加夫刀比古神社、阿良加志比古神社二坐見え、鳳至郡には單に美麻奈比古ノ神社、美麻奈比咩ノ神社と云へるあり。これ皆恐らくは于斯岐の率來れる者の留まりて、永住せる民の故墟にやあらん」ト云ヘリ。

又姓氏錄左京諸蕃ニ「大市ノ首、任那國人都怒賀阿羅斯止之後也」「清水ノ首、同上、」大和國諸蕃ニ「辟田ノ首、任那國主都奴加阿羅志止之後也」トアルヲ、中外經緯傳ニ「阿羅斯等が、皇國に在ける程にもてる子のあり

て、其が裔にもやらむ。敦賀ノ郡氣比ノ神社の西北の入海に沿たる處を泉浦（シミヅウラ）と稱へ、泉村（シミヅ）と云ふ里もあり。清水の氏名に據ありて聞ゆ」ト云ヘリ。又未定雜姓ノ部ニ「三間名ノ公、彌麻奈國主牟留知王之後者不見」トアリテ、其ノ譜ニ右ノ垂仁紀一說ノ趣ヲ載セタレバ、牟留知王ハ、都怒我阿羅斯等ノ父ノ名ニヤアラン。古事記ニ記シタル崇神天皇ノ崩リマシ、戊寅ノ年ハ、第六章ノ推測ニ從ヘバ、紀元九百十八年、魏帝曹髦ノ甘露三年ニシテ、駕洛國記ニテハ始祖首露王ノ孫、第三代麻品王、一云馬品ガ世ノ六年ニ當レリ。サレドモ駕洛國記ノ世系ハ、正確ナル者ニ非ザレバ、阿羅斯等ハ、麻品ガ子ナリトモ定メ難シ。

伊都々比古ハ、村瀨之熈ノ藝苑日涉ニ「伊都、即伊覩也、下都讀與津同、語辭、彥此云比古、男子之美稱、蓋當時伊覩縣主窃懷異心歟、其所答可以併見」大意トアリ。此ノ說ニ依レバ、穴門トアルハ、伊都又ハ筑紫ナドアルベキニ似タリ。

「其二國之怨、始起於是時也」トアルニツキテ、新羅加羅ノ爭戰ヲ羅紀ニ據リテ考フルニ、脫解尼師今二十一年、（紀元七百三十七年、漢章帝建初二年、）「阿飡吉門與加耶兵、戰於黃山津口、獲一千餘級、」婆娑尼師今八年、（紀元七百四十七年、漢章帝章和元年、）加耶ノ侵軼ヲ懼レテ「築加召馬頭二城。」同十五年、（漢和帝永元六年、）「加耶賊圍馬頭城、遣阿飡吉元將騎一千、擊走之。」同十七年、「加耶人襲南鄙、遣加圖城主長世拒之、爲賊所殺、王怒率勇士五千、出戰敗之、虜獲甚多。」同十八年「舉兵欲伐加耶、其國主遣使請罪乃止。」此等ノ記事ニ據レバ、王子來朝ヨリ百數十年前ニ、二國ノ爭既ニ始レリ。然レドモ加耶國主罪ヲ請ヘルニヨリテ、和議成リタレバ、同二十三年、晉汁伐國ト悉直谷國ト疆ヲ爭ヒ、新羅王ニ決ヲ請ヘル時、加耶國首露王ヲ召シテ之ヲ決セシメタリ。然ルニ首露王、漢祇部ノ不敬ヲ怒リテ、其ノ部主ヲ殺シタルニ由リテ、和親破レタレバ、同二十七年（漢殤帝延平元年）「命馬頭城主伐加耶、」祇摩尼師今四年、（紀元七百七十五年、漢安帝元初二年、）「春二月、加耶寇南邊、秋七月、親征加耶、帥步騎、度黃山河云々、」同五年、「遣將侵加耶、王帥精兵一萬以繼之云々」トアリ。其ノ後八十餘年ノ間、二國ノ交涉ノ事見エザリシガ、奈解尼師今六年、（紀元八百六十一年、漢獻帝建安六年、）「加耶國請和」ヨリ、二國復和親シ、同十四年、浦上八國、阿羅ヲ侵セル時、新羅之ヲ救ヒテ、八國ノ將ヲ擊殺シ、同十七年、「加耶送王子爲質」ト見ユ。委シクハ、加羅國考ニ云ヘリ。サテ蘇那曷叱智ノ還リシハ、垂仁天皇ノ御世ノ初頃（紀元九百二十年頃）ニシテ、魏ノ元帝ノ初年ニ當リ、羅紀ノ年紀ニテハ、沾解尼師今ノ末年ニテ、加耶質子ヲ送リシヨリ四十餘年ノ後ナリ。然レバ二國ノ爭ハ、百餘年前ニ屢アリテ、數十年前ヨリ和親シタリシガ、是ニ至リテ、怨隙再ビ開ケタルナリ。

蘇那叱智ノ朝貢ハ、紀ノ本文ニハ崇神天皇ノ御世ノ事トシ、一說ニテハ島浦ニ留連シタルニ由リテ、崇神天皇ニハ仕ヘ奉ラザル由ニ記シタレドモ、何レニテモ唯朝貢シタルノミニテ、皇朝ヨリ彼ノ國ヘ使ヲ遣リ給ヒシ事ハ、見エザルヲ、姓氏錄ニハ此ト甚ダ異ナル記載アリ。左京皇別ノ下ニ「吉田連、大春日朝臣同祖、觀松彥香殖稻ノ天皇（諡孝昭）皇子天帶彥國押人ノ命ノ四世孫彥國葺命之後也。昔磯城瑞籬宮御宇御間城入彥ノ天皇御代、任那國奏曰、臣國東北有三巴汶地。（上巴汶、中巴汶、下巴汶。）地方三百里、土地人民亦富饒。與新羅國相爭、彼此不能攝治、兵戈相尋、民不聊生。臣請將軍令治此地、即貴國之部也。天皇大悅、勅群卿、令奏應遣之人。卿等奏曰、彥國葺命孫鹽乘津彥命、頭上有贅、三岐如松樹。（因號松樹君）其長五尺、力過衆人、性亦勇悍也。天皇令鹽乘津彥命遣、奉勅而鎭守。彼俗稱宰爲吉。故謂其苗裔之姓爲吉氏。男從五位下知須等、家居奈良京田村里間。仍天璽國押開豐櫻彥天皇（諡聖武）神龜元年、賜吉田連姓（吉本姓。田取居地名也。）今上弘仁二年、改賜宿禰姓也。續日本紀合」トアリ。

男ノ字ノ上ニ脫文アリテ、吉氏ノ來朝シタルコトヲ佚シタリ。天智紀十年。百濟ノ歸化人佐平余自信等ニ冠位ヲ賜ヘル所ニ、藥ヲ解レル達率吉大尙ニ小山上ヲ授ケ給ヘル事見エタレバ、吉氏ノ來朝ハ、余自信等ト同時頃ナルベシ。姓ヲ賜ヘル事ハ、續紀神龜元年五月ノ處ニ「賜從五位上吉宜、從五位下吉智首、並吉田連」ト

アリテ、智首ハ、卽姓氏錄ノ知須ナリ。宿禰ト改メタル事ハ、後紀弘仁二年九月ノ處ニ「右京人正六位上吉田連宮麻呂等改賜宿禰姓」トアリ。猶此ノ氏人ノ事ハ、續後紀承和四年六月ノ處ニ「右京ノ人左京ノ亮從五位上吉田ノ宿禰書主、越中ノ介從五位下同姓高世等、賜姓興世ノ朝臣、始祖鹽乘津、大倭人也（伴作心）（伴作繼）、後順國命、往居三己汶地、其地遂隸百濟、鹽乘津八世孫達率吉大尙、其弟少尙等、有懷土志、相尋來朝、世傳醫術、兼通文藝、子孫家奈良京田村里、仍元賜姓吉田連」文德實錄嘉祥三年十一月ノ處ニ「從四位下治部大輔興世ノ朝臣書主卒、書主、右京人也、本姓吉田連、其先出自百濟、祖正五位上圖書頭兼內膳正相模介吉田連宜、父內藥頭正五位下古麻呂、並爲侍醫、累代供奉、宜等兼長儒道、門徒有錄云々」トアリ。古麻呂ハ、後紀ノ宮麻呂ナリ。宮ハ、古ノ誤リナルベシ。

サテ鹽乘津彦ノ命ノ事ハ、甚疑ハシキ傳說ナリ。マヅ任那ノ人ノ來朝ハ、蘇那曷叱智ヨリ前ニハ見エザレバ、彼ノ將軍派遣ヲ請ヒ申セルハ、蘇那曷叱智ナリトセンカ。此ノ人ノ來朝ハ、崇神天皇ノ末年ニテ、一說ニ據レバ、天皇ノ崩後ニ入朝シタル趣ナレバ、コノ天皇、鹽乘津彦ヲ遣シ給フト云フハ、非ナリ。又外國ヲ管治シ給ヘル事ハ、外國朝貢ヨリモ重大ノ事ナレバ、眞ニ此ノ事アリセバ、紀ニ朝貢ノミヲ記シテ、コノ大事ヲ略カルベキ理ナシ。又小國ノ大國ニ事ルハ、通常ノ事ナレドモ、藩屬ノ約モ未ダ無カリシ國ニシテ、海外ノ大國ニ自ラ土地ヲ獻ジテ、鎭將ヲ請フコトハ、事情ニ於テ有ルマジキ事ナリ。又韓土ヲ官家ノ國トシテ、皇朝ノ宰ヲ置キ給ヘルハ、神功皇后征韓以後ノ事ニシテ、住ノ吉ノ大神、海表金銀之國ヲ以テ胎中天皇ニ授ケ奉レリト昔ヨリ言傳ヘタレバ、神功皇后以前ニ韓土ニ宰ヲ置キ給ヘル事ノ有ルベシトモ思ハレズ。又彼ノ奏セル詞ニ「與新羅國相爭、彼此不能攝治、兵戈相尋、民不聊生」トアルハ、紀ニ「二國之怨始起於是時」トテ是時マデハ怨隙ナカリシ由ニ記シタルト、明カニ矛盾セリ。又三ノ巳汶ノ地ハ、繼體紀百濟ノ奏ニ「伴跛國略奪臣國己汶之地、伏請天恩判還本屬、」又「以已汶帶沙賜百濟國、」「伴跛國乞已汶之地」ナドアル已汶ト同ジクシテ、伴跛國卽今ノ星州ノ近傍ノ地ナルベシ。然ラバ其ノ地ヲ新羅ト爭ヒタル任那國ハ、大加羅ニハ非ズシテ、伴跛國若クハ高靈ノ伽耶トセザルベカラズ。此等ノ國ハ、慶尙道ノ內地ニシテ、海濱ヲ去ルコト遠ケレバ、任那諸國ニ先ダチテ、皇國ニ來朝スベシトハ思ハレズ。又コノ巳汶ハ、彼ノ已汶トハ別所ニテ、大加羅ノ東北、今ノ梁山郡ノ邊ニアリトスレバ、續後紀ニ「其地遂隸百濟」ト云ヘルハ、地理合ハズ、又三國史記ニ引キタル唐ノ總章二年李勣ノ奏ニ、支潯州九縣ノ中ニ「已汶縣本今勿」トアルハ、今ノ忠淸道德山縣ナリ。已汶ト云フ名ハ同ジケレドモ、コレハ、忠淸道ノ西邊ニテ、任那諸國ト隔絕スレバ、自ラ別所ナリ。宰ヲ吉ト云フ事ハ、猶ヨク考フベシ。

右ノ如ク疑點ノ多キ傳說ニシテ、紀ニモ載セラレズシテ、一家ノ譜錄ニ止マレル者ハ、タトヒ姓氏錄ニ載セラレタレバトテ、盡ク信據スベキニ非ズ。然ルヲ、中外經緯傳ニ、彼ノ「異俗重譯來、海外旣歸化」ノ語ニ附會シテ、蘇那曷叱智朝貢ヨリ前ニアリシ事トシ、彼ノ松樹ノ如キ三岐ノ贅マデモ事實ト見ントシタルハ、伴氏ニモ似合ハザル妄信ナリキ。大日本史ノ任那傳ハ、蘇那曷叱智ノ朝貢ヨリ書キ始メテ、鹽乘津彦ノ事ハ、彥國葺ノ命ノ傳ニ附記シタルハ、稍斟酌アル書方ナリ。

若實ニ鹽乘津彦ト云ヘル人ノ、巴汶ノ宰ト爲レル事アルヲ、紀ニ記シ漏ラサレタリトセバ、其ハ、決メテ神功皇后ガ、荒田別鹿我別ヲ遣シテ、加羅安羅等ノ諸國ヲ定メサセ給ヒシヨリ後ノ事ニシテ、鹽乘津彦ハ、彥國葺ノ命ノ直ノ孫ニハ非ズシテ、數世ノ孫ナルベシ。鹽乘津ノ八世ノ孫吉大尙ノ事レル天智天皇ハ、應神天皇ノ十世ノ孫ニマシマセバ、鹽乘津ノ時代ハ、神功應神ノ御世ヨリ前ニアルベカラズ。然ルヲ崇神天皇ノ御世ト言ヒ傳ヘタルハ、任那國朝貢ノ事アルニ由リテ附會シタル說ナルベシ。又續後紀ニハ「始祖鹽乘津、大倭

人也」トノミアリテ、孝昭天皇ノ御裔ト云ハザレバ、皇胤ナリトノ說モ、イカヾアラン。文德實錄ニ「其先出自百濟」トアルハ、節略ノ爲ニ記シ誤レリトモ見ルベケレドモ、若クハ吉氏ハ、實ニ百濟ノ舊族ニシテ、皇胤ト云ヘルハ、却テ假冒ノ說ナルモ知ルベカラズ。

又大槻修二ノ開化天皇考ニ「橘守部の說に、弘仁私記一說に開化天皇御宇大伽羅人歸化、而以來旣有文字と見ゆと云へり。然らば彼の古語拾遺に應神以前文字未傳と曰はれたるは非なり。記誦家齋部氏の一家言ならん。又開化の諡號に因て考ふるに、開は、易經に開物成務の語あり。化は、禮記に化民易俗の語あり。卽チ帝は、文物を開き、異民をも化し玉へる德のましませること明かなり。然るに紀記の二史には、其の事を傳へず。蓋缺けたるなり。思ふに天平年中に歷代の諡號を定めまつれる當時には、なほ其の逸傳ありて、之を以てかく開化と稱し奉れる者なり。弘仁私記一說に合考すべし。又この天皇より以前は、紀記二書ともに、皇子を某の命と書けるに、此の天皇より初めて王の字見ゆ、古事記傳に之を論じて、記紀ともに王とあればいとどむかしの傳へのまゝと見ゆと曰へり。是又文字記錄の此の頃ほひより起りたる故にや。其の他、立皇后、また山陵の制などの變遷を按ずるに、いかにも帝の時伽羅の國俗の入り來りて變化せられたるにや云々」ト詳論セリ。

第二十三章　多遲摩毛理

古事記垂仁天皇ノ條ニ云、「又天皇、以三宅連等之祖名多遲麻毛理遣常世國、令求登岐士玖能迦玖能木實。故多遲摩毛理、遂到其國、採其木實、以縵八縵矛八矛將來之間、天皇旣崩、爾多遲摩毛理、分縵四縵矛四矛、獻于大后、以縵四縵矛四矛獻置天皇之御陵戶而、擎其木實叫哭、以白常世國之登岐士玖能迦玖能木實持參上侍、遂叫哭死也。其登岐士玖能迦玖能木實者、是今橘者也。」

多遲摩毛理ハ、天之日矛ノ玄孫ニテ、其ノ世系ナド、委シク第廿一章ニ云ヘリ。常世ノ國ハ、記傳廿五ノ五十三丁ニ「上卷少名毘古那ノ命ノ段に出て云る如く、皇國を遙に放離て、たやすく往還ひがたき國を泛く云ッ稱なり。委くは彼處に云り。考ヘ合すべし。此は新羅ノ國を指シて云るなるべし。其故は、多遲摩毛理は、新羅人の末なれば、其國に橘の有リて甚美き菓なることを傳聞居て、天皇に語奏せしより、此ノ事は起りたるべければなり。さらでは、そのかみ外國の通ひもいまだあらざりしに、橘のあることを所知看すべき由なければなり。さて此は、新羅とすべきこと、先ヅは右のごとくなれども、なほ細にいはゞ、橘は、漢國にても、南ノ方に在て、北ノ方の寒き國には無き物ときけば、三韓などにはいかゞあらむ。若シ韓には無き物ならば、此ノ常世ノ國は、漢國を云るならむ。若シ然らば、先祖の時より、漢國に此ノ菓のあることを傳へ聞キ居リてなるべし。此は、なほ今朝鮮國に橘ありや無しやをよく問ヒ聞て決むべきなり。若シ漢國ならむにても、なほ新羅より傳ひてぞ往けむ。古へは皆然る例なり。」ト云ヒ、通證ニ「荒井氏謂、此常世國、蓋指耽羅國而言、今朝鮮地方、唯此島產柑橘爲國珍、韓國本田道間守祖先之國、故出使之也」ト云ヘリ。耽羅國は今濟州ト云ヒテ、全羅道ノ南ノ海中ニ在リ。東覽ニ據リテ朝鮮國ノ土產ヲ稽フルニ、南部ノ諸郡縣ニハ、柚ハ產スレドモ、柑橘ハ見エズ。唯濟州牧ノ土產ニ「柑有黃柑乳柑數種、橘有金橘山橘洞庭橘倭橘青橘五種、青橘則結子、逢春乃熟、時過還枯、時至復熟。柚」ナドアリ。然ラバ多遲摩毛理ノ橘ヲ得タルハ、此ノ地ニテアルベキカ。久米邦武氏ノ日本幅員沿革考史學會雜誌第壹號ニ「支那の古語に橘柚渡江爲枳といふ。橘柚は、北方の寒地には產せず。支那揚子江以南の產なればなり。然れば常世國は、支那南部なるべし」ト云ヘレドモ、橘柚旣ニ耽羅ニモ產スレバ必シモ支那南部トハ限リ難シ。

登岐士玖能迦玖能木實ハ、垂仁紀ニ「九十年春二月庚子朔、天皇命田道間守、遣常世國令求非時香菓、今謂橘是也」トアリテ、訓注ニ「香菓、此云箇俱能未」トアルヲ、記傳ニ「訓注、能の下に許能二字ヲ脫せるには非るか。同字の重なれるは、よく脫すものぞ」ト云ヘリ。登岐士玖トハ、記傳ニ「書紀の字の如く、其時ならぬを、何物にても云」トテ、萬葉ノ歌ヨリ種々ノ證ヲ擧ゲテ、「さて橘子を然云故は、此菓は、夏より

なりて、秋を經て、冬の霜雪にもよく堪へ、又採て後も、久しく堪て腐敗れず、時ならぬころにも、何時もある物なればなり。」迦玖ハ記傳ニ「書紀に書れたる如く、香の意とは聞ゆれども、香は、常に迦とこそいへ、迦玖と云ることは未ダ聞カねば、玖の意は、詳ならず（迦具波志と云は、香の妙しきにて別なり。故清濁も異りて、迦具波志には何れも濁音の具を書き、迦玖の玖は、書紀の訓注にも清音の俱を書き、萬葉十八の歌にも香久可久など書て、混ふべからず。）若シくは三韓にて、此が名、香菓と云を、其ノ字音、彼ノ國にては迦玖か。（されば迦玖能木實と云は、三韓にて迦玖と云菓と云意なり。）又は香ノ字ノ音を、彼國にては迦玖と呼しか」トアリ。

縵八縵矛八矛ハ、記傳ニ「縵は、加宜と訓べし。加宜に此ノ字を書るは、蘿縵の意なり。其は、上代には蘿を主と縵にせる故に、此ノ字を書き、又其ノ蘿を加宜とのみも云る故に、其にも此ノ字を用ひたるなり」トテ萬葉ノ歌ニ蘿ヲ加宜トノミ云ヘル例ドモヲ擧ゲテ、「然れば此の縵は、借字なるが如くなれども、ひたぶるの借字にも非ず。蘿と云名も、本ト日の蔭と云意、持統紀に以華縵進于殯宮此曰御蔭とも見え、此の加宜も、蔭の意なればなり。さて此に縵と云るは、蔭橘子と云物、矛と云るは、矛橘子と云物なり。其は、内膳式に橘子四蔭また橘子廿四蔭、桙橘子十枝（同樣ノ例、猶三條ヲ引カレタレドモ略ス）、齋宮式にも橘子十蔭などある是なり。（これにはたゞ橘子若干蔭とあるを、今おして蔭橘子と云ゆゑは、桙橘子と並べ云る、其ノ桙橘子は、正しく此の矛八矛とあるに當るを、其に對へて若干蔭と云るなれば、其ももとは蔭橘子と云しこと此と相照して知るべし云々。）其は、各一種の橘の名には非ず、同じき橘ながら、採ざまの異あるなり。其狀はいかなりけむ、詳ならねど、今其ノ名に就て按ふに、蔭橘子とは、枝ながら折採て、葉も付ながらなるを云なるべし。凡て葉ある樹をば、常に蔭と云へばなり。矛橘子とは、やゝ長く折たる枝の葉をば皆除き去て、實而已著たるを云なるべし。其は、其ノ狀上代の矛の形に似たることぞありけむ」トアリ。

大后ハ、皇后ナリ。此ノ事ハ、記傳ニ委シキ論アリ。神功皇后ノ條ニ引クベシ。此ハ、垂仁天皇ノ皇后比婆須比賣ノ命ヲ申セリ。此ノ皇后ハ、此ノ記ニテハ天皇ニ後レテ薨坐セルサマナルヲ、垂仁紀ニハ既ク三十二年ニ薨リ坐セリト記セルハ、傳ヘノ異ナルニヤ。彼ノ野見ノ宿禰ガ、土物ヲ以テ生人ニ易ヘテ、陵墓ニ立テシハ、此ノ皇后ノ薨リ坐セル時ノ事ナレバ、景行天皇ノ御世ニナリテノ事ナレドモ、垂仁天皇ノ后ノ御陵ノ事ナル故ニ、其ノ御世ノ事語リ傳ヘケンハ、サルベキコトナレバ、紀ノ撰者ハ、其ノ方ノ傳ヘニ本ヅキテ、此ノ后ノ薨ヲ垂仁紀ニ記シタルナラン。

橘ハ、記傳ニ「此ノ名は、持來つる人の名に因て、名遲麻花と云なるべし。さるは、此ノ持來たる實を種として蒔しが、生生て、初て花の咲たる時に、多遲麻花と呼初しが、遂に名とはなれるならむ。明ノ宮ノ段ノ大御歌に迦具波斯波那多知婆那とよませ賜へり。古へは花をも實をも殊に賞し」トテ、萬葉集古今集ノ歌ドモヲ引キテ證シ、又「武藏ノ國に橘樹ノ郡ありて、橘樹ノ郷（多知波奈）御宅ノ郷（美也介）と並ビあり。由縁あることなるべし。又姓氏錄に橘守と云姓ありて、三宅ノ連同祖とあるは、公の橘樹を守ることを掌れる氏なるべし。此レも、初メの由縁を以て、多遲麻毛理の子孫に任し給へるなり（師ノ說に此ノ氏をもタヂマモリと訓べしと云れつるは、かなはず、此レは彼ノ人の名に關かることには非ず、たゞ橘を守リし由にこそあれ、若シ此ノ氏と彼ノ人の名とを一ツにしていはゞ、彼ノ人の名は、橘を守りし由なりとこそ云べけれ。然れども彼ノ名は、但馬ノ國に由れることにて、橘に因れるにはあらぬをや。）萬葉十一（五十一丁）に橘乎守部乃五十戸之とよめるも、古へ此ノ樹を殊に守リし事の有リしから、守部ノ里の枕詞とせるなり。（又思ふに、こは、たゞ守と云名に云かけたるのみにはあらで、此ノ里、即古へに橘を守る者の住る故に、守部と負るにもあるべし。）さて或說に、昔の橘は、今の密柑なり。今ノ世に別に橘とてある物には非ずと云、又或說に昔の橘、即チ今も橘と云物なり。密柑は、後に渡リ來つる物なるを、味の勝れる故に、世に多く弘まり、橘は、劣れる故に、けおされておのづから罕になれるなりと云り。此ノ二ツいづれよけむ。定めがたし」トアリ。狩谷望之ノ和名抄箋注ニ云、「古有橘無柑、柑甘於橘、故名甘子、是橘不如柑之甘美、可知也、然則今呼太知波奈者、即橘、呼加宇自者、即柑子、又蜜柑者、柑子之最甘如蜜者也。」又畔田伴存ノ古名錄果部園果類ニ「太知波奈（倭名類聚抄）漢名柑（本草）今名カウジ。按橘、總名也、本朝謂橘者、即包橘也」又「加無之（倭名類聚抄）漢名柑（本草）今名ミ

カン。華夷草木考曰、柑、甘也、橘之甘者也、莖葉無異於橘、但無刺爲異耳」トテ、猶ソノ證ドモヲアマタ舉ゲタリ。

此ノ事ヲ垂仁紀ニ「九十九年秋七月戊午朔、天皇崩云々、明年辛未朔壬午、田道間守至自常世國。則賚物也、非時香菓八竿八縵焉。田道間守於是泣悲歎之曰、受命天朝、遠往絶域、萬里蹈浪、遙度弱水、是常世國、則神仙祕區、俗非所臻、是以往來之間、自經十年、豈期獨陵峻瀾、更向本土乎、然頼聖帝之神靈、僅得還來、今天皇既崩、不得復命、臣雖生之、亦何益矣、乃向天皇之陵、叫哭而自死之。群臣聞皆流涙也、田道間守、是三宅連之始祖也」トアリ。記傳ニ此ノ文ヲ引キテ、「これに田道間守が云る語は、皆例の撰者の潤色に加へられたる漢文なり。當時に云べき言のさまに非。殊に常世ノ國、則神仙ノ祕區など云る言は、甚く古ノ意に違へることなり。ゆめかゝる虚文に勿惑はされそ。又臣雖生之何益と云ては、自ことさらに死たるにて、返て情深からず。此レも、實は此ノ記の如くにて、死むとは思はざりけめども、あまりに叫哭つるほどに、哭死たるなり。さてこそ哀さは深けれ」ト云ヘリ。

久米邦武氏ハ、右ノ田道間守ガ云ヘリト云フ語ヲ引キテ、常世ノ國ハ、支那南部ナルコトヲ證シ、「古の萬里は、今の千里に同じ。踏浪は、古事記の跳波穗に合す。弱水は、大河を云ふ。神仙祕區は、山深き地なり。然れば之を甯浙地方とすれば、合はず。福建地方とすれば、近し。必ず廣東地方にて、弱水は、珠江を謂なるべし」ト云ヒタレドモ、弱水ハ、史記大宛傳ニ「安息長老傳聞、條支有弱水西王母、而未嘗見也、」易林ニ「弱水之西、有西王母、生不知老、與天相保、」列仙傳ニ「蓬萊隔弱水、三十萬里、非飛仙不可到、」海內十州記ニ「鳳麟洲、在西海之中央、洲四面有弱水繞之、鴻毛不浮、不可越也、」又「崑崙、號曰崐崚云々、又有弱水、周廻繞匝」ナド云ヘル說ニ附會シテ加ヘタル文飾ノ語ニシテ、正シク指セル處アルニ非ザレバ、廣東地方ニハ緣ナキコトナリ。且橘ハ、今ノ多知婆奈ニマレ蜜柑ニマレ、サバカリ輕微ノ品ヲ求メンガ爲ノミニテ名モ知レヌ遠國ニ態々御使遣サルベギ筈ナケレバ、此ノ傳說ハ、事實ト云ハンヨリハ小說ニ近シ。或ハ橘ハ三宅ノ連ノ遠祖等ガ、歸化ノ時持渡リテ、但馬ノ國ニ生ヒ始メタルニヨリテ、此ノ傳說ノ起リシニハ非ズヤ。

伴信友氏ハ、後漢書光武紀ニ「中元二年春正月辛未、東夷倭奴國王遣使奉献」トアルヲ、此ノ田道間守ノ事ナリトシテ、中外經緯傳ニ「書紀の年立にては、四年後れたれど、此と彼との間いづれかさばかりの差はあるべきなり云々。さて當時もろこしの國ある事は、朝廷にはいまだよくも知食ざりけるを、田道間守が奏せるによりて、彼國に非時の香菓ある事を聞食して、それ求メ遣したりけるを、その國の號も詳ならざりつるから、そのかみいと遼遠き國をいふ古言もて、常世ノ國と語傳へたるを、其言のまゝに記しも傳へたるものなり。さて又田道間守は、筑前の怡土の縣主なりけるが、（筑前風土記に、日矛が裔の五十迹手を怡土縣主ノ祖といひ、その外こゝに辨へたる趣に相徵して、かくは考たるなり。）韓國より傳へて、其國人を導として、もろこしに到り、自ら怡土國の王なりなど稱ひて、土宜などを贈りて、賞歎びて得むとて、よきさまにこしらへて云へる事のありけむを、なほ皇國の事何くれと問きゝなどして、彼國の例として、そを奉貢と稱ひほこりて、おのが屬國の如くあへしらひて、かの漢委奴國王の印綬をも與れたるを、田道間守、勅命かゝふりたる橘を得まほしき一道の忠心を專とはして、しばらくかれが意に乘かずして、受て歸りたるにぞあるべき」ト云ヘリ。コハ、紀ノ年立ニ據リテ考ヘタル說ナレドモ、垂仁天皇ノ御世ハ第六章ノ推定ニ從ヘバ、紀元第十世紀ノ上半、晉ノ武帝ノ世ノ頃ニ當リテ、漢ノ光武ノ世ヨリハ二百餘年ノ後ナリ。又怡土ノ縣主等ガ祖五十迹手ガ、自ラ日矛ノ裔ナリト申シケルコトハ、筑前風土記ニ見エタレドモ、多遲摩毛理ノ裔トハ云ハズ。又五十迹手ハ、仲哀紀ニモ伊覩ノ縣主ガ祖トアリテ、縣主ニ任サレタルハ、多遲摩毛理ガ其ノ身怡土ノ縣主タリシ事ハ、更ニ其ノ證ナシ。又

後漢書ニハ遣使奉獻トアリテ、國王來朝ト云ハザレバ、田道間守ガ、自ラ怡土國ノ王ナリト稱ヒケント云ヘルモ當ラズ。且倭奴國ハ、怡土ノ縣トハ全ク別所ナルコトハ、後ノ第二十七章ニ述ブルガ如シ。サレバ多遲摩毛理ノ事ハ固ヨリ、倭奴國ノ朝貢トハ關係ナキ事ナリ。

又姓氏錄蕃別（左京右京及河內國）ニ「常世ノ連、燕ノ國王公孫淵之後也」トアルニ由リテ、古史斷ニハ、コノ常世ノ國ヲ遼東ナリトシ、「常世ノ連の祖は、燕破滅の日にあたり、國使に隨ひて投歸し故國已に破れて、永く本朝に留れる者なり。常世の姓字、偶然に非ず。されど燕は北地にて、柑橘なし。必ず燕に在りて、熱國の南人より獲たるならん。其は、公孫氏、海上通交の政略あるにて察すべし」ト云ヘリ。サレド常世ノ連ノ祖ノ投歸シタル時代ノ事ハ、物ニ見エズ。又熱國ノ產ヲ寒國ニ求メタルハ、大ニ解ヲ費ス。

第二十四章　吳太伯

晉書四夷傳倭人ノ條ニ「男子無大小悉黥面文身自謂太伯之後」トアリ。自謂太伯之後ト云ヘル事ハ、魏ノ魚豢ガ魏略ニ依リタルニテ、通典邊防東夷倭ノ條ノ原註ニ「魏略云倭人自謂太伯之後」ト見エタリ。梁書ニ「倭者自云太伯之後、俗皆文身」北史ニ「俗皆文身、自云太伯之後」ト云ヘル、何レモ魏略ニ本ヅキタルモノナルベシ。魏略ハ世ニ傳ハラネバ、前後ノ文意ハ知ル由ナケレドモ、晉書梁書等ヲ合セテ考フルニ、太伯ハ文身斷髮シテ吳ニ住ミタルニ、倭國ハ吳ノ東ニ在リテ、其俗文身ナレバ、太伯ノ後ナラント推シ量リテ記シタルナルベシ。本居氏ノ鉗狂人ニ云「かの自ら謂と記せるも、實はいかゞありけむさだかならぬことなれ共、もしは西國の邊鄙のをこの者などの、かの國にまかり渡りしが、かの國人に尊まれむために、僞りてみだりにいひし事も有やしけむ、とにかくにおぼつかなきこと也。」魏志倭人傳ニハ「男子無大小、皆黥面文身」ト記シテ、會稽ノ風俗ヨリ移リシサマニハ書キタレドモ、太伯ノ後ト云ヘル說ヲ取ラザリシハ、其ノ說ノ確據ナキガ故ナラン。

然ルニ支那ノ後代ノ史書ハ更ニモ云ハズ、皇國ニスラ此ノ說ニ惑ヘル者アリシカバ、北畠准后親房公ノ神皇正統記應神天皇ノ條ニ「異朝の一書(アルフミ)の中に、日本は吳の太伯の後なりといふといへり、かへすがへすあたらぬことなり、むかし日本は三韓と同種なりといふことのありしが、このことを桓武の御代に燒すてられしなり、天地ひらけてのち、素盞ノ嗚ノ尊韓の地にいたりたまひきなどいふ事あれば、かれらの國々も神の苗裔ならんこと、あながちくるしみなきにや、それすらむかしよりもちひざることなり、天地ノ神の御末なれば、なにしか代くだれる吳の太伯がのちにはあるべき」ト云ヘリ。

親房公ト同時ニ、圓月ト云ヘル法師、此ノ說ヲ唱ヘテ其ノ書ヲ焚カレタリキ。其ハ本朝名僧小傳ニ「中巖諱圓月、建仁寺妙喜庵開山、好讀楊子法言、嘗撰日本記、有朝議不行也、有文集語錄、後醍醐燒日本記。」又顯要抄ニ「後醍醐帝ノ御時ニ、釋圓月國史ヲ修スルニ、太伯ガ說ヲ用フ、朝議アリテ刑セラレキ。」ト云ヒ、又本朝通鑑續編曆應三年ノ條ニ「是年、僧圓月在鎌倉藤谷、修日本記」トアリテ、其ノ註ニ「傳稱、圓月謂、本朝吳太伯之後也、故有姬氏國之稱、且曰東方君子國、亦以此也、其書未成、聞於朝廷、朝議謂、圓月私修國史、除天神地神所以開此國、漫稱出自異方之人、其書不可行於世、乃焚其草、（月修日本記、其自敍譜以爲是年之事、然或爲後醍醐帝時事、誤矣。）」トアリ。林羅山先生モ此ノ說ヲ採リ用ヒテ、其ノ文集第二十五卷神武天皇論ニ云「東山僧圓月、嘗修日本記、朝議不協而不果、遂火其書、余竊惟圓月之意、按諸書、以日本爲吳太伯之後、夫太伯逃荊蠻、斷髮文身、與交龍共居、其子孫來于筑紫、想必時人以爲神、是天孫降于日向高千穗峰之謂乎、當時國人疑而拒之者、或有之歟、是大已貴神不順服之謂乎、以其與交龍雜居故、有海神交會之說乎、其所齎持而來者、或有墳典索丘蝌

蚪文字歟、故有天書神書龍書之說乎、以其三以天下讓故、遂以三讓兩字揭于伊勢皇太神宮乎、其牽合附會雖如此、而似有其理、夫天孫誠若爲所謂天神之子者、何不降畿邦而來於西鄙蕞爾之僻地耶、何不早都中州善國、而瓊杵彥火鷓草三世居于日向而沒耶、神武四十五歲、東征到安藝國、明年入吉備國、比及三年、修舟楫聚兵食、其後至河内國、與長髓彥大戰于孔舍衞坂、旣而獲克、遂殺長髓彥、入大倭國、建橿原宮、且夫以神武之雄略、其難如此、又何哉、天孫之有大巳貴、神武之有長髓彥、或相拒、或相戰、是亦可怪焉、想其大巳貴長髓彥者、我邦古昔之酋長、而神武者代而立者耶、云々。」林鵞峰先生モ羅山ノ學ヲ紹ギテ、其ノ說ヲ守リシト見エテ、寬文年中水戶ノ贈大納言光圀卿東國通鑑ヲ刊行スル時、鵞峰ノ撰シタル序文ニ「泰伯至德而基我王跡、箕子有仁以開彼土地、鈞是先聖之所稱也、共曰東方君子國者、不亦宜乎、中華姑舍是、六合之內、守綱常之道、仰文物之化、未聞如本朝及朝鮮者、豈非泰伯箕子之遺風哉」ト云ヘル語アリシカバ、光圀卿其ノ失體ヲ咎メテ、此ノ序ヲ刊本ニ載セラレザリキ。

サテ林家父子ハ、カヽル持論ヲ懷キタレドモ、畢竟一家ノ私說ニ過ギザレバ、幕府ノ命ヲ受ケテ撰シタル本朝通鑑ニハ此ノ說ヲ擧グルコトハサスガニ憚リタリト見エテ、其ノ神代紀ノ跋文ニ「以日本書紀爲正、而參校舊事紀古事記云々、聊倣劉氏外紀金氏前編之例、而附神武紀首、以尋神國之宗源、崇皇胤之正統、若夫少康泰伯之事、則異域之所傳稱、今不取焉」トアリ。少康ノ事ハ魏志ニ見エタリ。第二十八章ニ引クベシ。

其後藤井貞幹衝口發ヲ著ハシテ、神代ノ諸神ハ韓人ナリト云フヲ根本トシテ、萬ノ事皆韓ヨリ起レリト論ジタルガ、此ノ泰伯ノ說ヲ棄ツルコトノ惜ケクヤアリケン、神武天皇ハ泰伯ノ裔ニシテ、鸕鷀草葺不合ノ尊ノ御子ニハマシマサズト附會セリ。サテ此等ノ說ヲ確メントテ、古代ノ制度風俗ナドヲ管々シク擧ゲタレドモ、何レモ證トスベキ價ナキ事實ノミナレバ、本居氏ハ「狂人の言なり」トテ、鉗狂人ヲ著シテ之ヲ排擊セリ。

抑太伯ノ裔ノ皇國ニ渡リシコトハ、支那ノ古書ニモ見エズ。皇國ノ事ヲ委シク記シタル魏志モ其ノ說ヲ取ラザルヲ見レバ、固ヨリ根據ナキ說ナルヲ、漢學ニ心醉シタル輩ハ、彼ヲ中華ト尊ミテ、我ヲ自ラ東夷ト稱スル程ナレバ、彼ノ匈奴ノ赫連氏ハ夏后ノ裔ト云ヒ、鮮卑ノ拓跋氏ハ黃帝ノ裔ト云ヒ、高句麗ハ高辛氏ノ裔ト云ヒ、新羅ノ金氏ハ金天氏ノ裔ト云ヘル如ク、中華ノ聖人ノ後裔ト云フヲコヨナキ名譽ト心得タルニテ、イトモ哀レナル見識ナリキ。古學ノ隆興シテヨリ以來ハ、儒者ノ見識モ隨テ改マリタレバ、近世ハ、有名ノ學者ニシテ太伯ノ說ヲ唱ヘタル人ノアリシヲ聞カズ。

サレド又、コノ太伯ノ後ト云フ事ヲ熊曾ニ附會スル說アリ。鶴峰戊申ノ襲國僞僭考ニ「僞王ハ如何ナル者ノ後ゾト尋ルニ、先ヅ晉書ニ倭人自謂太伯之後ト記セル倭人ト云フ者、ヤガテ此ノ熊襲ノ事ニテアルベク、其ノ太伯ノ後トイヒシ所以ハ、吳太伯身ウセテ子ナシト雖、其ノ弟仲雍嗣ヲ立ツ、後十七世夫差ハ越王勾踐ニ破ラル、普陀山志ニ「越王勾踐欲放吳王夫差居之」ト見エル即普陀ナルベシ。去レバ夫差ハ、普陀ニ至ラズシテ、筑紫ニ來レル歟、又躬ハ死シテ子孫ノ逃レ來レルニヤ、資治通鑑ニハ吳支庶入海爲倭ト論定シテ記セリ云々。」「サテ吳人ノ我西邊ニ到レルヨリ、吾ハ太伯ノ後吳王ノ裔ナド、イヒテ、或ハ彼ノ從來ナル隼人ドモト相結ビ、朝廷ヘ今來ノ隼人ナド、奏聞シ、又孝靈帝ノ御宇ニ列滴トイフ年號ハジマリ、應神帝ノ御宇ニ璽至トイフ改元アリナド世ニ傳フルモ、是レ年號ニハアラデ、隼人ガ名告リシ漢風ノ稱號ヲカク傳ヘケンモ知ルベカラズ。果シテ然ランニハ、當時支那ノ文物ヲ將來シ、諸ノ器財マデ、故國ノサマニテアリケンコト思フベシ」ト云ヘリ大意。

日韓古史斷ニ云「弘仁姓氏錄、又吳王夫差の後を錄して松野ノ連と曰ふ、ますます明カに吳人の來歸を見るなり、後世本邦姬氏國の異名ある、亦此に因る日本紀纂疏に因るに、姬氏國の語は、寶誌の讖文に初見す。」「肥前風土記に、知珂島今五島人は「容

貌似隼人、恒好騎射、其言語異俗人也」と云へり、知珂は海路普陀に接し、筑紫より呉越に通ずる航道にあたり、呉人の來歸は必此に因れるならん、而て其の知珂隼人の相似たるは、共に西來の蕃種同屬なればなるべし」「神社啓蒙(林道春)に、大隅國府正八幡は呉太伯を祀るといふ異說ありと曰へり、顧ふに、正八幡は即謂はゆる鹿兒島神宮として、皇祖をまつれることまぎれもなきを、斯く紛れしは、今來の隼人の噌唹城にて僭借せし頃より己が遠祖呉王の家廟を舊來の神宮に混じまつれるより起りたる歟。(伊加倉俊貞鹿兒島外史云ふ「太伯新來辜之玄孫王、葬今隅府神城陵、此王庶孽、世號熊襲王、西居神城籬」と、因據ある傳歟」)

第二十五章　徐福

史記封禪書ニ云「自威宣燕昭、使人入海求蓬萊方丈瀛洲、此三神山者、其傳在渤海中、去人不遠、患且至則船風引而去、蓋嘗有至者、諸僊人及不死之藥皆在焉、其物禽獸盡白、而黃金銀爲宮闕、未至、望之如雲、及到、三神山反居水下、臨之、風輙引去、終莫能至云、世主莫不甘心焉、及至秦始皇幷天下、至海上、則方士言之、不可勝數、始皇自以爲至海上而恐不及矣、使人乃齎童男女入海求之、船交海中、皆以風爲解、曰未能至、望見之焉、其明年、始皇復游海上云々、後三年、游碣石、考入海方士、從上郡歸後、五年、始皇南至湘山、遂登會稽、並海上、冀遇海中三神山之奇藥、不得、還至沙丘崩。」又秦始皇本紀二十八年ノ條ニ云「齊人徐市等上書、言海中有三神山、名曰蓬萊方丈瀛洲、僊人居之、請得齋戒與童男女求之、於是遣徐市、發童男女數千人、入海求僊人。」三十七年ノ條ニ云「始皇出游云々、並海上、北至琅邪、方士徐市等入海求神藥、數歲不得、費多、恐譴、乃詐曰、蓬萊藥可得、然常爲大鮫魚所苦、故不得至、願請善射與俱、見則以連弩射之、始皇夢與海神戰、如人狀、問占夢博士、曰、水神不可見、以大魚蛟龍爲候、今上禱祠備謹、而有此惡神當除去、而善神可致、乃令入海者齎捕巨魚具、而自以連弩候大魚出射之、自琅邪北至榮成山、弗見、至之罘、見巨魚、射殺一魚。」此等ノ文ニ據レバ、徐市ハ屢海ニ入リタレドモ、神藥ヲ得ズシテ、空シク還レル趣ナリ。然ルニ同書淮南王安傳、伍被ガ王ヲ諫ムル語中ニハ、「昔秦絕先王之道云々、又使徐福入海求神異物、還爲僞辭曰、臣見海中大神、言曰、汝西皇之使邪、臣答曰然、汝何求、曰願請延年益壽藥、神曰、汝秦王禮薄、得觀而不得取、即從臣東南至蓬萊山、見芝成宮闕、有使者、銅色而龍形、光上照天、於是、臣再拜問曰、宜何資以獻、海神曰、以令名男子若振女與百工之事、即得之矣、秦皇帝大說、遣振男女三千人、資之五穀種々百工而行、徐福得平原廣澤、止王不來」トアリテ、徐福ハ海外ニ止マレル趣ニ言ヒ、本紀ノ傳ヘト異ナリ。

徐福ハ即徐市ナリ。市ハ字書ニ「分勿切、音弗、韠也、亦作韍」トアリテ、福ト音近シ。史記評林ニ「何孟春曰、徐市又作徐福、非有兩名、市乃古黻字、漢時未有翻切、但以聲相近字、音註其下、後人讀市作市廛字、故疑福爲別名」ト云ヘリ。松下見林ノ異稱日本傳ニ云「其所止、惟言平原廣澤、不言地名、後漢書以爲夷洲澶洲、北史及隋書以秦王國爲夷洲云、不能明也、圖書編別載徐福島、然義楚六帖歐陽全集太平御覽羅山集世法錄等書、指爲日本之地、而此日本傳、引義楚六帖等、故擧其所因循、王字、非也、徐福來于我爲詆、詳見後漢書、今按、見林亦謂、日本者神國也、徐福曰海中大神、似能言日本風、又推古天皇上隋帝書曰、東天皇、敬白西皇帝、西皇帝者、蓋本于西皇之語也。」

三國志呉志卷二孫權傳ニ云「黃龍二年春正月、遣將軍衞溫諸葛直、將甲士萬人、浮海求夷洲及亶州、亶州在海中、長老傳言、秦始皇帝遣方士徐福、將童男童女數千人、入海求蓬萊神山及仙藥、止此洲不還、世相承、有數萬家、其土人民時有至會稽貨市、會稽東冶縣人海行、亦有遭風流移至亶州者、所在絕遠、卒不可得至、但得夷洲數千人還。」後漢書東夷傳ニモ此ノ文ヲ取リ、孫權ガ兵ヲ遣シタル事ヲ省キテ記シ、且亶州ヲ澶洲ト書

ケリ。章懷太子注ニ、沈瑩ガ臨海水土志ヲ引キテ、「夷洲在臨海東南、去郡二千里、土地無霜雪、草木不死、四面是山谿、人皆髡髮穿耳、女人不穿耳、土地饒沃、既生五穀、又無魚肉云々」トアリ。臨海ハ、呉晉南朝ノ郡名ニシテ、今ノ浙江臺州府ナレバ、地理ヨリ云ヘバ、夷洲ハ琉球ノ八重山諸島ヲ指セルニ似タリ。亶州ハ夷洲ヨリ遠キ趣ナレバ、沖繩島ヲ指セルニヤ。サレドモ此ノ二洲ハ、海內十洲記ノ十洲ノ類ニシテ、本想像ヨリ出デタル地名ナルベシ。

サレドモ伍被ノ言ヘリト云フ徐福ノ談ハ、既ニ本紀ノ說ト合ハズ。後人又其ノ想像ノ地ヲ以テ、彼ノ平原廣澤ニ附會シタルナレバ、事實トシテ見ルベキ根據更ニナシ。熊野峰前徐福祠ト云ヘル者モ、後人ノ假托ニ出デタル者ナルベシ。

サテ徐福ガ皇國ニ渡リ來シ事ハ、支那人ハ更ニモ云ハズ、皇國ニモ信ズル人多クテ、神皇正統記孝靈天皇ノ條ニ「四十五年乙卯、秦の始皇即位、この始皇仙方をこのみて、長生不死の藥を日本にもとむ、日本より五帝三王の遺書をかの國にもとめしに、始皇ことごとくこれをおくる、その後三十五年ありて、かの國、書を燒儒を埋みければ、孔子の全經日本にとゞまるといへり、この事、異朝の書にのせたり、わが國には、神功皇后三韓をたひらげたまひしより、異國に通じ、應神の代より、經史の學つたはれりとぞ申ならはしたる、孝靈の御時より、此國に文學ありきとは、きかぬことなれど、上古のことは、たしかにしるしとゞめざるにや、應神の御代にわたれる經史だにも、今は見えず、聖武の御時、吉備大臣入唐してつたへたりける本こそ流布したれば、この御代よりつたへけんことも、あながちうたがふましきにや」ト云ヒ。林氏は（闕）

「徐福之來日本、在焚書坑儒之前六七年矣、想蝌蚪篆籀韋漆竹牒、時人知者鮮矣、其後世々兵燹、紛失亂墜、未聞其傳、嗚呼惜哉」ト歎息セリ。又異稱日本傳ニ云「夷洲澶洲、皆指日本海島、相傳紀伊國熊野山下飛鳥之地、有徐福墳、又曰熊野新宮東南、有蓬萊山、山有徐福祠、近沙門絕海入明、太祖皇帝召見、指日本圖、顧問海邦遺跡、勅賦熊野詩、海詩曰、熊野峯前徐福祠、滿山藥艸雨餘肥、只今海上波濤穩、萬里好風須早歸、御製賜和曰、熊野峯高血食祠、松根琥珀也應肥、昔時徐福求仙藥、直到如今竟不歸、見蕉堅藁、所謂徐福祠者、謂蓬萊山祠也、此祠屬熊野大權現、熊野大權現者、神代明神書於國史式條、昭々也、徐福觀國之光來止、脫於虎豹之秦、死爲神、在熊野三山之間、亦匪直人也、或曰、歐陽永叔日本刀歌曰、徐福行時經未焚、逸書百篇今猶存、劉氏引原始祕書曰、日本之學、始於徐福、然則其德可稱之、而爲始、我則不信也。」新井筑後守君美ガ同文通考ニ、新井祐登ノ增補シタルニ「今熊野ノ近クニ、ハダスト云處アリテ、文字ニハ秦住ト書クトナン、土人相傳ヘテ、徐福ノ住ル舊地ナリト云フ。ソレヨリ七八里ヲ隔テ、徐福ガ祠アリ。其間所々ニ古墳アリテ、家臣ノ塚ナリト云。カヽル舊跡モ今ニ傳ハリ、且又秦ノ氏アレバ、秦人ノ來リ住ルコトハ必定ナルベシ。」

第二十六章　山海經論衡漢書ノ倭人

支那ノ書ニ皇國ノ名ノ見エタルハ、山海經ニ「南倭北倭屬燕」トアルヲ始メトスベシ。新井白石ノ南島誌ノ序ニ「按琉球古南倭也、南倭北倭幷見山海經、而南倭復見海外異記、二書蓋皆後人所作、雖然其書幷出魏晉之際、知其所傳亦尙矣」ト云ヒ、其ノ蝦夷志ニ、北倭ヲ蝦夷ニ當テタリ。山海經ハ、荒誕ニシテ信ケ難キ書ナレドモ、小說トシテハ最モ古キ者ニシテ、四庫全書提要ニ「殆周秦間人所述、而好異者又附益之歟、觀楚詞天問多與相符、使古無是言、屈原何由杜撰、謂其反因天問而作、似乎不然云々、」トアリ。

倭ヲ南北ニ分テル事ハ、白石ハ、右ニ云ヘル如ク、蝦夷ヲ北倭トシテ、琉球ヲ南倭トシ、英人あすとん氏ハ

「古時ノ支那人ハ、大和ハ九州ノ南ニアリト相像セリト見ユ、故ニ北倭トハ、熊曾ヲ云ヒ、大和ヲバ南倭ト云ヘリ」ト云ヒ、吉田東伍氏ハ「穴門出雲越等の國々を北倭と見て、筑紫を南倭と定めたり」ト云ヒ、諸說定マラズ。畢竟コノ南北ノ分チモ、屬燕ト云ヘル事モ、ミナ確實ノ事ニ非ズ。唯倭ト云フ名ノ、古クヨリ知ラレシ事ハ、此ノ文ニヨリテ證スベキナリ。皇國ヲ倭ト云ヘル所由ハ、次ノ條ニ言フベシ。

山海經ニ次ギテハ、後漢ノ班固ノ漢書ト王充ノ論衡トニ、倭人ノ事アリ。漢書ハ、後漢書班固傳ニ「固自永平中始受詔、潜精積思、二十餘年、至建初中乃成」トアリ。永平ハ漢ノ明帝ノ年號、建初ハ章帝ノ年號ニシテ、紀元七百二十年頃ヨリ七百四十餘年マデノ間ニ當レリ。王充モ班固ト同時ノ人ニシテ、論衡ヲ著セルハ建初中ノ事ナリ。

論衡卷第八儒增篇ニ云、「周時天下太平、越裳献白雉、倭人貢鬯草。」第十九恢國篇ニ云、「成王之時、越裳献雉、倭人貢暢。」卷第十三超奇篇ニ云、「暢草献於倭。」暢ハ、鬯ニ同ジ。鬯ハ、說文鬯ノ字ノ解ニ「以秬釀鬱草、芬芳條暢、以降神也」トアリテ、支那ニテ古ヨリ祭祀ニ用フル香酒ヲ製スル草ノ名ナリ。又鬱字ノ解ニ「鬱鬯、百草之華、遠方鬱人所貢芳草、以降神、鬱今鬱林郡也」トアリテ、支那南方ノ產ナリ。此ノ草、古ヘ皇國ニ產セシトモ見エザレバ、倭人ノ貢セリト云ヘルハ非ナリ。凡テ此等ノ文ハ、聖王ノ德化ヲ述ベタル誇張ノ談ニシテ、且千餘年前ノ事ヲ追記シタル者ナレバ、事實トシテハ見ルベカラズ。

漢書地理志燕地ノ條ニ、朝鮮ハ箕子ノ化ヲ被リテ、禮義ノ國ナリシヲ、武帝ノ時、玄菟樂浪二郡ヲ置キテ、遼東ヨリ夷ヲ取リテヨリ、風俗漸ク壞レタル事ヲ叙ベタル末ニ、「然東夷天性柔順、異於三方之外、故孔子悼道不行、設浮於海、欲居九夷、有故也、夫樂浪海中有倭人、分爲百餘國、以歲時來献見云」トアリ。

樂浪郡ハ、今ノ朝鮮國ノ過半ヲ領シタル大郡ナリシ故ニ、其ノ東南ニ廣ガレル大海ヲ指シテ樂浪ノ海ト云ヘルナリ。倭人ハ皇國人ヲ指シタル名ニテ、胡人貊人ナドノ如ク、人種ノ名トシテ用ヒタルナリ。論衡及後漢書等ニ倭トノミ云ヘルモ、倭人ノ義、魏志ニ「倭人在帶方東南大海之中」トアルハ、倭人ノ國ヲ云ヘルニテ、後漢書鮮卑傳ニハ「東擊倭人國」トアリ。魏志後漢書ニ倭國トモアルハ、倭ト云フ國ノ義ニ非ズシテ、倭人ノ國ノ義ナリシガ、後ニハ國名トシテモ用フルコト、ナレリ。說文解字ニハ「倭順貌、从人委聲、詩曰周道倭遲」トノミアリテ、國ノ名トモ、夷種ノ名トモ云ハザレドモ、皇國人ヲ倭ト云ヘルハ、前漢ノ世、又ハ其ノ前ヨリ始マレル名ナルベシ。本居氏ノ國號考ニ「倭とはいかなる意にて名づけつるにか、その由はさだかに見えたる事はなけれども、かの漢書に、東夷天性柔順と書(カキ)出して、有倭人とつらねいへるを思へば、班固が意は、說文も此倭ノ字の本義(モトノコヽロ)を順貌と注したると同じくて、柔順なる故に倭人とはいふと心得たるごとく聞ゆめり。されどそれも、字につきてのおしはかりなるべし。」ト云ヘリ。清ノ段玉裁ノ說文解字注ニ「倭順貌」ノ下ニ、「倭與委、義略同、委隨也、隨從也。」トモアリ。若倭ノ字ニ柔順ノ義アラバ、班固ガ字ニ就キテ推量リタル如ク、前漢ノ人ノカク名ヅケタルハ、實ニサル心バエニテ此ノ字ヲ用ヒタルニモアルベシ。サレドモ星野博士ノ日本國號考（史學會雜誌第參拾號）ニ「順(ナル)貌ハ、順也ト云フト同ジカラズ、即チ周道倭遲又ハ委蛇委蛇退食自公ノ類、皆二字ヲ合シテ語ヲ成シテ、從順ナル狀態ヲ形容スルコトニテ、倭ノ字ニ從順ノ義アルニ非ズ」ト云ヘルモ、一理ナキニ非ザレバ、倭人ト云フ名ハ柔順ノ義ヲ取レリトモ、ウケバリテハ言ヒ難シ。青柳種麻呂ハ、「彼國にて皇國の有ことは、始めて韓人の語にて知たりと見ゆれば、其原(モト)は韓語に出たるも知べからず」ト云ヘリ。又此ノ倭ノ字ノ音ヲ渦(ワ)ト讀ムハ、後ノ世ニ轉訛シタルニテ、本ハ委ト同音ナリキ。漢書地理志倭人ノ註ニ「如淳曰、如墨委面、在帶方東南萬里、臣瓚曰、倭是國名、不謂用墨、故謂之委也、師古曰、如淳云如

墨委面、蓋音委字耳、此音非也、倭音一戈反、今猶有倭國云々」トアリ。如淳臣瓚ノ說ハ、文意明カナラザレドモ、顏師古ノ解釋ニ據レバ、如淳ハ、倭ノ音ヲ委ト讀ミタルナリ。如淳ハ魏ノ世ノ人ニシテ、當時ハ倭ト魏ト交通頗ル繁キ頃ナレバ、時人ノ稱呼ニ從ヒテ、音ヲ註シタルニテ、其ノ頃マデハ、委ト讀ミタリケンコト慥ナルヲ、梁ノ顧野王ノ玉篇ニ至リテ「倭、烏禾ノ切、國名」ト見エタレバ、南朝ノ頃ニハ、轉訛シテわト唱ヘタルナリ。然ルニ師古ガ、如淳ノ音ヲ非トシテ、音一戈反ト云ヘルハ、後世ノ訛音ヲ以テ古ニ及ボシタルニテ、其ノ說却テ非ナリ。

分爲百餘國ハ、鶴峰戊申ノ襲國僞僭考ニ「和名抄ニ據ルニ、九國一島ノ郡凡テ九十六也、古ハ郡ヲ國ト稱ス、當時百餘國有ケン事、推シテ知ルベシ」ト云ヘレドモ、和名抄ノ郡數ハ、大化以後屢分割ヲ經タルモノナレバ、此ノ數ヲ以テ上代ノ國數トハナシ難シ。又漢籍ニ倭國ト云ヘルヲ、筑紫ノミヲ指セリト云フハ、少シク窮屈ナル說ナリ。倭國ハヤガテ皇國ヲ指セルニテ、百餘國ハ、皇國ノ西部ヲ大カタニ云ヘルナレドモ、サダカナル數トモ思ハレズ。マシテ以歲時來獻見云ナド云ヘルハ、百餘國盡ク獻見シタリト云フニハ非ジ。同ジ魏志ニ、此ノ事ヲ「漢時有朝見者」ト書キタル如ク、百餘國中ニ獻見シタル者アリト云フ意ナルベシ。地理志ノ吳ノ地ノ條ノ末ニ「會稽海外、有東鯷人、分爲二十餘國、以歲時來獻見云」トアルハ、字句マデ倭人ノ處ト同ジサマナルニ、東鯷人ハ何處ヲ指セルニヤ、訝シキ事ナリ。漢ノ世ノ會稽郡ハ、今ノ江蘇省ノ南部ヨリ浙江福建マデノ地ニシテ、會稽ノ海ハ、即東海ナレバ、此ノ東鯷人ハ、皇國ヲ指セル如クニモ聞ユレドモ、皇國ノ事ハ、既ニ燕ノ地ノ條ニ記シタレバ、更ニ東鯷人ナド云フベキ筈ナシ。又硫球諸島ナドヲ指セリトスレバ、分爲二十餘國ト云フベクモ思ハレズ。此ノ東鯷人ノ事ノ、カク訝シキニ就キテ思ヘバ、倭人分爲百餘國ト云ヘルモ、決メテ朧ゲナル傳聞ノ說ナルベシ。

サテ當時、モシ皇國ヨリ彼ノ國ニ朝獻シタルモノアリトスレバ、其ハ筑紫アタリニ散處セル土豪ナドノ中ニテ、未ダ皇朝ニ馴服セザル者ドモノ所爲ニヤアラン。其ノ時代ハ、前漢ノ末ト見テモ、神武天皇綏靖天皇ノ御世ニ當リ、前漢ノ中葉ト見レバ、神武天皇以前ニシテ、後世ヨリ神代ト名ヅクル太古ノ世ニ當レリ。星野博士ノ國號考ニ「其所謂「以歲時來獻」ノ語ハ、膚泛ナル書樣ニテ、來獻ノ年月ナク、外國ノ朝貢ハ、本紀ニ載スルヲ通例トナスニ、此事ハ本紀ニ見エズ、又前漢ノ代ハ、三韓ト雖史ニ載セザルニ、本邦ノ貢獻ハイカヾアルベキ」ト云ヘルハ、然ルベキ疑ヒナレドモ、同氏ガ、倭奴國人ノ貢獻ヲ以テ、皇國人ノ彼ノ國ニ通ジタル始トシテ、倭ハ倭奴ノ略稱ナリト云ヘルハ、違ヘリ。倭奴國ト云フ名ハ、後漢ノ建武中元二年ニ一タビ見エタルノミニシテ、山海經論衡及兩漢書三國志以下歷代ノ史書ニ、倭人倭國トノミアリテ、倭奴ト書キタルコトナケレバ、倭ハ、本ヨリ彼ノ國ニテ皇國ノ總稱ニ用ヒタル名ニシテ、倭奴ノ略稱ニ非ズ。倭奴國ハ、倭國中ノ一國ニシテ、倭ノ奴國ト讀ムベキコトハ、次章ニ云フベシ。

第二十七章　倭奴國王 附倭國王帥升及檀石槐

後漢書光武紀中元二年春正月ノ條ニ云、「東夷倭奴國王、遣使奉獻。」東夷傳倭國ノ條ニ云、「建武中元二年、倭奴國奉貢朝賀、使人自稱大夫、倭國之極南界也、光武賜以印綬。」

建武中元ハ　四字ノ年號ニシテ、光武紀ニ只中元ト云ヘルハ、上ノ二字ヲ略ケルナリ。其ノ二年ハ光武ノ即位三十三年ニシテ、即光武ノ末年ナリ。（ソノ年二月ニ、光武崩ジタリ。）其頃漢ノ遼東郡ニ、祭彤ト云ヘル太守アリテ、匈奴鮮卑烏桓ヲ綏撫シテ、威聲大ニ震ヒ、夫餘高句驪韓濊貊人皆內屬シタル趣、光武紀及祭彤傳ニ見エタレバ、筑紫ノ邊民ニテ、兼テヨリ韓國ニ交通シタル者ドモハ、韓人ヨリ漢土ノ形勢ヲ傳聞キテ、遂ニ朝貢ノ使ヲ送

リタリト見エ。東夷傳序ニ「遼東太守祭彤、威讋北方、聲行海表、於是濊貊倭韓萬里朝獻」トアルニ據リテ書ケルナリ。大夫ハ使者ノ云ヘル語ヲ漢譯シタル者ナレバ、原名ハ何ト云ヒシカ、詳ナラズ。

倭奴國ハ、倭國之極南界也トアレバ、倭國ノ一國ナルコトハ、甚明カナルヲ、隋書ノ撰者ハ、後漢書ノ文ヲ等閑ニ見テ「倭國云々、都於邪摩堆云々、漢光武時、遣使入朝、自稱大夫、安帝時、又遣使朝貢、謂之倭奴國」ト記シタルヨリ、後人其ノ誤リヲ受ケテ、倭奴國ヲ皇國ノ舊號ト心得、舊唐書ニハ「倭國者、古倭奴國也。」新唐書ニハ「日本古倭奴也」ト記シタリ。蓋奴ノ字ニ奴隷ノ義アルニヨリ、古ヘ倭人ヲ卑メテ倭奴トモ云ヘリト思ヒ誤リタルナラン。然ルニ皇國人マデモ隋唐書ノ文ニ誤ラレテ、倭ハ倭奴ノ略稱ナリト思ヒ居ル者アリシガ、本居氏ノ馭戎慨言及國號考ニ、其ノ誤リヲ辨ヘ論ジテヨリ、倭奴國ハ、皇國ノ總稱ニ非ザルコトハ、人皆知リヌ。サレドモ其ノ國ハ、何レノ國ヲ云ヘルカハ、詳カナラザリシニ、今ヨリ百十年前、筑前ノ國志賀島ヨリ、漢倭奴國王ト銘シタル黃金ノ印出デタルヨリシテ、倭奴國ノ事ハ、史學上重要ノ問題トナリテ、先輩ノ考說多ク著レタリ。

其印ノ發見ノサマハ、筑前福岡ノ人青柳種麻呂ノ後漢金印略考ニ「天明四年甲辰二月二十三日戊申、筑前ノ國那珂ノ郡志賀ノ島の農夫、同島の南邊字はカナノ濱と云處の田を耕しけるが、田ノ中に一ノ大石あり、耕耘に妨なればとて、是を堀除しが、其下に三ノ石側立て、物を圍繞に似たり。農夫怪みて、鍬を入て、土を揮ふに、土の中に聲ありて、地に落る物あり。採て見れば、金印一顆あり。農夫、はじめは其何物といふを知らず、後に金印なることを知りて、國廳に献ぜり。その質は黃金、方七分八厘、厚サ三分、蛇鈕高サ四分、重サ二兩九錢也。其文に漢委奴國王の五字あり。白文にして篆體奇古なり。千古の物なることは、固ヨリ論なし」トアリ。

筑前舊志畧ニハ、かなの濱ヲ、宇叶崎ト云ヘリ。同地ノ略名ニヤ。又田ヲ耕シ云々ハ、「水利ヲ得ントテ田間ノ溝ヲ鑿リ直シタルニ、土中ニ一ノ巨石アリ。之ヲ發シタルニ、下ニ三石周匝、匣ノ狀ヲナセリ」トアリ。一大石ノ下ニ、三石側立テ物ヲ圍ムト云ヒ、匣ノ狀ヲナセリト云ヘルハ、古墳ノ石槨ナルニ似タリ。村瀨之煕ノ藝苑日渉ニ云、「按北堂書鈔、引應邵漢官儀曰、諸侯王黃金槖駝鈕、文曰璽、列侯黃金龜鈕、文曰印、今印用黃金、比之諸侯也、唯古印璽、不聞有蛇鈕之制、沈明臣顧氏集古印譜人序曰、世代沿革、制度同異、鈕或用螭用虎、用豸獸槖駝龜羊馬狻猊辟邪輪環連環瓦覆斗鼻、又漢晉印章圖譜、及秦漢印統所圖、並無蛇鈕之制、其似蛇者、意是螭鈕刓弊似蛇耳、曲尺七分之大半、實當漢一寸、漢書嚴助傳所謂陛下以方寸之印丈二之組、鎭撫方外、即是、大抵印璽制、至南北朝間、相承依舊式、諸侯王以下、並方一寸、則光武中元二年所賜即是、此印來歷可徵、制度可攷、可謂希世之珍已矣、浪華上田秋成精通國書、嘗爲筑前人、撰此印之說、亦與余說暗合如符契」トアリ。此ノ印、當時ノ國主ナリシ黑田侯爵ノ家ニ今モ傳ハレリ。其ノ印ノ形ハ、中外經緯傳ニ、「さきに筑前福岡人岡崎勝海が、其金印もて捺て、其印鈕をも摸し添てくれたるをもてり。めづらしければ摸し加へり」トテ、ソノ書ニ載セタレバ、今又左ニ摸シ加フ。

藤井貞幹ノ好古日錄ニ云、「幹按ニ、說文曰、倭从人委聲、於爲切、委从女从禾、於爲切（玉篇始テ倭、烏禾切、國名ト注ス。）倭半聲、委去聲ナレドモ、古昔倭委通ジ用ユ。委奴國ハ、後漢書倭傳ニ所謂倭奴國ナルコト知ベシ云々。倭國ハ此邦ノ總名、倭奴國ハ極南界ニアル國ナリ。（俗ニ倭奴國ヲ此國ノ古名トスルハ、非ナリ。）然レバ倭奴國ハ、魏志ノ倭傳ニ至末廬國、東南陸行五百里、到伊覩國、ト云者ニシテ、此即筑前ノ國怡土ノ郡也。日本紀ニ筑前ノ國伊覩ノ縣主ノ祖五十迹手アリ。此印、疑クハ伊覩ノ縣主使譯ヲ通ジテ、漢授ル所ノ印ニシテ、後漢書ノ倭傳ニ所謂使譯通漢者三十許國、皆稱王ト云者也。委奴倭奴伊覩怡土、皆通音也。」

青柳種麻呂モ、大抵同説ニテ、其ノ略考ニ云、「委と怡と音近し。伊怡と委倭とは、開合異なれども、（伊怡は韻鏡開轉に屬して、開口音也。委倭は、韻鏡合轉に屬して、合口音なれ共、唐ノ司業張參が五經文字に、倭一皮反、又於危反と見えたれば、平聲にて開轉に屬すべきか。此事は、猶能勘べき事也。夫はともあれ、異國人の話を聞て譯せんには、開合の混ひなどはあるべき也）おほよその似たるをもちて、委とは書たるなるべし。皇國にても、今の世によく人の混へてかく事ゝ云々。怡土郡を、魏志に伊覩國云々、世々有王とあり。世々有王といへるは、即ち怡土ノ縣主をいふなるべし云々。此縣主の祖は、高麗國王の王子なりしよし見えたれば、素より異國人なるゆゑに、はやく漢にも通ぜしなるべし云々。さてむかし、怡土國といへりし其封疆は、いづこよりいづこぞといふことの詳なることは、しられねども、今の怡土志摩の二郡は、本より同地と見えたれば、すべて怡土の國内なりけらし。さすれば此たび、金印を得たりし志賀島までは、わづか海上二里計隔つる地にしあれば、此島も封疆の内なりしも知べからず。かく同じ國内といふにも、殊に間近き地に金印の有しにても、倭奴國の怡土國なるべきことを思ふべし。」伴信友氏ハ、此ノ説ニ從ヒテ「まことに當れる考なり」ト云ヒ、遂ニ田道間守ヲ怡土ノ縣主トシテ、倭奴國ノ朝獻ヲ田道間守ノ橘ノ談ニ附會シテ解説セリ。

右ノ如ク先輩諸氏ハ、皆倭奴國ヲ以テ怡土ノ縣トシ、現今ノ史學家ニテハ、菅政友氏モ同説ナリ。星野博士ハ稍之ト異ニシテ、其ノ國號考ニ云、「古昔ノ、國ト云ヒ縣ト云フモ、其境域甚廣カラザルニ、怡土郡（即伊覩縣）ハ筑前ノ西偏ニ位シテ、直ニ西海ニ面シ、志賀島ハ、中部ノ海中ニ在リテ、糟屋郡ノ洲嘴ト連接シ、其方位稍隔離セリ。且和名抄郡名ノ怡土ハ以止ト注シ、又宗像郡ニ怡土郷アリテ、伊度ト注ス。コレ郡郷同字ナレドモ、音ニ清濁ノ別アリ。彼委奴ハ固ヨリ濁音ナレバ、宗像ノ怡土ニシテ、怡土郡ノ清音ナル者ト同ジカラズ。且後漢書魏志ニ伊覩國ヲ敍スル下ニ、委奴國王ノ事ヲ言ハズ。然ラバ伊覩縣主ヲ以テ直ニ委奴國王ニ當ツルハ、未確ナラザルニ似タリ。但宗像ノ怡土郷ハ、太宰管内志ニ「怡土郷、和名抄ニ宗像郡怡土（伊度）とあり、名義地理ともにいまだ考へず」トアレバ、其地詳ニシ難シ。去共和名抄ニ明文アレバ疑フベキニ非ズ」ト云ヘリ。「怡土郡ハ筑前ノ西偏ニ位シテ、志賀島ト隔離セリ」ト云ヘルハサル事ナレドモ、博士ノ主張スル宗像郡モ、筑前ノ北偏ニ位シテ、志賀島ト隔離セルコトハ怡土郡ニ異ナラズ。又宗像郡ノ怡土ハ、和名抄ニ伊度ト注シテ、濁音ナリト云ハレタレドモ、度ハ古言梯ニ清濁二音トアレバ、此ノ怡土ハ、郡ノ怡土ト清濁異ナリトモ定メ難シ。久米邦武氏ノ鎭西考ニハ「委奴は、前に熊襲ならむと謂たれども、今筑紫國造と斷定す」トアリ。按フニ筑紫ノ國ノ造ハ、成務天皇ノ御世ニ大彥ノ命ノ五世ノ孫ナル田道ノ命ニ任シ給ヘルモノナレバ、漢ノ光武ノ時ニハ、未ダ此ノ國造アラザリシナリ。然ラバ此ノ斷定ハ、甚輕卒ナル速斷ト謂フベシ。

倭ト委ト相通ズル事ハ、説文倭ノ字ノ解ニ「从人委聲」ト云ヒ、詩ノ小雅ニ「周道倭遲」トアルヲ、陸德明ノ釋文ニ「倭本又作委於危反。」字典ニ「與逶迤逶迆委蛇威遲委移並通」ト云ヒ、又國名ノ倭ノ字ヲ委ト讀ミタリシ事ハ、如淳ガ「如墨委面」ト注シタルニテ明カナリ。サテ皇國ニテ、倭ノ字ノ代リニ委ノ字ヲ用ヒタル例ハ、好古日錄ニ「按法隆寺所藏法華經義疏題下、(大倭國ヲ)大委國ニ作リ、醍醐地藏院傳フル所ノ古記、亦大委國ニ作ル」ト云ヒ、伴信友氏ガ青柳氏ノ略考ニ書キ加ヘタルニ、繼體紀七年ノ本文ニ、穗積ノ臣押山トアル人ヲ、其細注ニ、百濟本紀云、委意斯移麻岐彌トアリ云々、又萬葉集ニ倭文ヲ委文ト作リ、和名抄郷名ニモ、倭文ヲ委文ト作リ、古ハ中々ニ今ヨリモ字ヲサカシラセズ書ナラヒタルコト、和漢ノ古書ヲ照シ見テ然ナレバ、コレモ倭ト委ト通用ノ證トスベシ」ト云ヒ、又東大寺戒壇院ノ神名帳ニ、委文大明神トアルモ、神代紀ニ「倭文神、此云斯圖梨俄未」トアル神ヲ云ヘルナリ。又三宅米吉氏ハ「日本書紀ニ、任那ノ多々羅須奈羅委陀發鬼ノ四邑ノ名、所々ニ見エタル中ニ、委陀ヲ和陀トモ書ケリ。（繼體紀廿三年註、及推古紀八年ニ、委陀ト書キ、敏達紀四年ニ、和陀ト書ケリ。）コレモ委ト倭ト通用シ、倭和又通用スルカラ、隨テ委和又通用セシナラン」ト云ヘリ。伴氏ノ中外經緯傳ニ「後

漢書にとれる本書には、彼印文の如く委奴國ト書たりけむを、既く前漢書魏志等に、皇國の大號を倭と云へるによりて、それと同種の稱ならむを、人扁の脱たるならむと推量て、范曄が、さかしらに倭字に改て、倭奴國と作るものなるべし」ト云ヘルハ、本末ヲ違ヘル考ヘナリ。印璽ニ用フル篆文ニ字畫ヲ增減變易スルハ、通常ノ事ナルニ、倭字ハ、委ニ人扁ヲ添ヘタル諧聲ノ字ニシテ、昔ヨリ委ト通ジテ用ヒタレバ、印文ノ委ハ、倭ノ省畫ナルコト、何ノ疑ヒカアラン。

サテ此ノ倭奴國ハ先輩皆怡土ニ當テタレドモ、怡土ハ、倭奴ト音異ニ、又怡土郡モ、宗像郡ノ怡土鄕モ、金印ノ出デタル志賀島トハ隔タリタレバ、其說皆非ナリ。落合直澄氏ノ紀年私按ニ「倭奴國ハ、倭ノ奴國ノ義ナリ。奴國ハ、魏志ニ東南陸行五百里、到伊都國云々、東南至奴國百里トアリテ、筑前儺縣ナリ」ト云ヘルハ、實ニ然ル說ナリ。儺ノ縣ハ、仲哀紀ニ「到儺縣、因以居橿日宮」ト見エテ、今ノ那珂ノ郡ナリ。橿日ハ今ノ香椎村ニテ、糟屋ノ郡ノ內ニアレドモ、古ヘハ儺ノ縣ノ地ナリシナリ。神功紀ニ儺ノ河トアルハ、儺ノ縣ノ大水ニシテ、今ノ那珂川ナリ。又宣化紀ノ詔ニ「脩造官家那津之口」、齊明紀ニ「御船還至于娜大津、居于磐瀨行宮、天皇改此、名曰長津」トアルハ、儺ノ縣ノ海港ニシテ、儺ノ河ノ河口ニアリ、今博多ノ津ニ近キ所ナリキ。伊吉ノ連博德ノ書ニ筑紫ノ大津之浦トアルモ、此ノ津ヲ云ヘルナリ。青柳氏云「那ノ津は、那珂郡博多の古名なり。宣化天皇紀齊明天皇紀などに那ノ津と見えたる比までは、今の三宅村より仲村あたりをいふと聞えたり。三宅村は、今の博多より二里ばかり南にあり。三宅より仲村まで、又一里もあるべし。博多よりのぼれば、三宅は那珂河の右にあり。仲村はひだりのかたにあり。博多より仲村まで、三里ばかりあり。此邊の入海漸あせて、舟泊の遠くなるにつけて、那ノ津の人家をも、又北方にうつして、終には今の博多の津にいたれり」ト云ヘリ。スベテ地名ハ、狹キ所ノ名ヨリ後ニ廣クナレル例多ケレバ、なト云ヘル所モ、津ノ名ハ本ニシテ、往古奴國ノ首領ハ、此ノ津に住ミケル故ニ、其ノ住地ノ名ヲ國名ニモ負セタルナラン。志賀ノ島ハ、釋日本紀ニ引キタル筑前風土記ニ、糟屋ノ郡資珂ノ島ト見エタル所ニシテ、那珂ノ郡ニ入リタルハ、後世ノ事ナレドモ、橿日ノ宮モ儺ノ縣ノウチニアリシコト、右ニ云ヘル如ク、且魏志ニ據ルニ、奴國ハ筑紫ノ北部ノ大國ト聞ユレバ、往古ハ那珂ノ郡ノミナラズ、糟屋席田二郡ノ地ハ、皆ソノ境內ナリシナルベシ。三宅米吉氏ハ、此ノ奴國ノ事ヲ考ヘテ、其ノ漢委奴國王印考（史學雜誌第三十七號）ニ詳カニ述ベラレタレバ、其要領ヲ左ニ擧ゲン。

「漢委奴國王ノ五字ハ、漢ノ委ノ奴ノ國ノ王ト讀ムベシ。委ハ倭ナリ、奴ノ國ハ、古ヘノ儺縣、今ノ那珂郡ナリ。後漢書ナル倭奴國モ、倭ノ奴國ナリ。奴國ハ、魏志ニ擧ゲタル帶方郡ヨリ邪馬臺ニ至ル道中ニアリテ、九州北部ノ大國ナリシト見エ、魏志ニ擧ゲタル諸國ノ戶數ヲ比較スルニ、對馬千餘戶、一支（壹岐）三千許家、末盧（肥前松浦）四千餘戶、伊都（筑前怡土）千餘戶、奴國（筑前儺ノ縣）三萬餘戶、不彌（未詳）千餘家、投馬（備後備中ノ內ナルベシ）可四萬餘戶、邪馬臺（大和）可七萬餘戶ニテ、奴國ハ、九州北部諸國ノ中、戶數特ニ多シ。カヽル大國ナレバ、九州北部ニテ最有力ナル國ナリシナラン云々。倭國之極南界也ト云ヘルハ、即其ノ奴國ノ位置ヲ云ヘルナリ。極南界ト云ヒテハ、怡土ニシテモ、儺縣ニシテモ、合ハズ。蓋コレハ、後漢書ノ編者ガ、魏志ニ擧ゲタル倭ノ諸國ノ最後ニ「次有奴國、此女王境界所盡、其南有狗奴國云々、不屬女王」トアル奴國ヲ思ヒ合ハセテ、倭國ノ極南界トハ云ヘルナルベシ。コレ伊都ノ次ナル奴國ト、最遠ノ奴國トヲ取リ違ヘタルナレド、尙之ヲ以テ、此ノ編者ガ倭奴國ヲ倭ノ奴國ナル意ニテ書キタル一證トナスベシ。星野博士ハ「極南界トアルハ、女王國ノ極北界ナルヲカク書シタルハ麁漏ナリ」ト云ハレタルガ、如何ニモ麁漏ニハ相違ナケレドモ、唯考ヘナク北ト南トヲ書キ違ヘタルニハアラデ、上ニ云ヘル如ク、奴國ノ思ヒ違ヘヨリ起リシモノナリ。范曄ハ、實ニ倭奴國ヲ倭國ノ極南界ナル奴國ト思ヒシナラン。博士ヲ始メ、倭奴ヲ

怡土郡ト見ル人々モ、之ヲ怡土ト見ルガ故ニ、南ノ字ニ故障ヲ云フナリ。是レ范曄ノ意ヲ解セズシテ范曄ヲ攻撃スル者ト謂フベシ。余ガ極南界ヲ范曄ノ誤解トスルハ、伊都ノ次ギナル奴國ノ位置ト、此ノ金印アルトニ據レルナリ云々。」次ニ委倭相通ノ事ヲ論ジテ、サテ、「次ニ委奴ノ音、いとニモいどニモアラザルコトヲ云ハン。先倭ハ、音烏禾反わニテ、委モ之ニ同ジ。サレド、今委ノ本音ニ就テ云ハンニ、其ノ音於爲反ゐニテ合音ニ屬ス。即起音wニテ、和行ノゐナリ。サレバ怡土ノいトハ全ク別ニテ、魏志ノ伊都ト書ケルコソ怡土ノ正音ナレ。委伊兩音ノ相異ナルハ、著シキコトナルニ、外人ノ我ガ方音ヲ聞キ書キセルニハ、サバカリノ違ヒハアルベシナド云フ人多シ。コハ近來、我ガ邦ニテゐノ音殆亡ビテ、人々ゐいノ區別ヲ能クセヌカラノ考ヘナリ。支那ニテハ、開ト合トノ發音ニ注意スルコト極メテ嚴ナリ。實ニ支那語ノ性質トシテ、此ノ區別ヲ明カニスルヲ必要トスルナリ。支那語ニテ、若シ此ノ區別ヲ明カニセズバ、言語殆相通ゼザルベシ。且魏志ハ、現ニ怡土ヲ正シク伊都ト書ケルニアラズヤ。委ノ字、怡土ノいニ當ラザルコトカクノ如シ。次ギニ奴ノ字、亦とニモアラズどニモアラズ、其ノ音鼻音ニテ、ぬの等即起音nナリ。其ノ韻ハ變化シテ、ぬのな等ニナレドモ、其ノ起音ハ決シテ變ズベカラズ。猶倭字モ、其ノ韻變ジテわトモゐトモナレドモ、其ノ起音ハ動カズシテ、和行ヲ出デザルガ如シ。奴ヲどトヨムハ、支那ノ原音ヲ忘レタル說ナリ。奴字ハ、魏志倭人傳ニ此ノ國名ノ外猶多ク用ヒラレタリ。卑奴母離ト云フアリ、奴佳鞮ト云フアリ、狗奴國其ノ他何奴國ト云ヘルモ多シ。本居宣長、コレラノ地名ヲ附會シタルニ、奴ノ音ヲな又ハのニ取リタリ。菅氏モ、奴國ヲ儺ノ縣トシ、卑奴母離ヲひなもりトヨミシニアラズヤ。他ニ於テハなトヨミナガラ、倭奴ニ於テノミ之ヲどトヨムハ、如何ニゾヤ。委奴國宜シク倭ノ奴ノ國トヨムベシ。カクテ委奴ハ、怡土郡ニモアラズ、怡土鄕ニモアラズ、其ノ近隣ナル奴國即儺縣ナリ。金印ノ出所、即古ヘノ奴國ノ中ナリ。志賀島、恐ラクハ奴國王墳墓ノ地ナリシナラン。サレドコハ、尙後ノ穿鑿ヲ待テ判定スベキナリ。」

後漢ノ建武中元二年ハ、紀元七百十七年ニシテ、懿德天皇ノ御世ノ頃ナルベシ。當時ハ筑紫ノ地方ニテ國造縣主ナドニ任サレタル者ノアラザリシ頃ナレバ、奴國ハ未ダ儺縣トハ爲ラズ、唯ニソコヲ占領シタル豪族アリテ、なノ國ノ長ト云ヘリシヲ、漢人ハ、奴國王ト稱シタルニテ、其ノ國ヲ縣ト唱ヘ改メタルハ、景行天皇成務天皇ノ頃、筑紫ノ諸國皆皇化ニ從ヒテヨリ後ノ事ナルベシ。抑筑紫ノ島ハ、地勢五ツニ分レ、西北面ハ筑紫ノ國、（今ノ筑前筑後肥後）東北面ハ豐國、（今ノ豐前豐後）西面ハ火ノ國、（今ノ肥後）東南面ハ日向ノ國、南面ハ熊曾ノ國（今ノ大隅薩摩）ト云ヘリキ。古事記眞福寺本ニハ「此島亦身一而有面四、毎面有名、故筑紫國、謂白日別、豐國謂豐日別、肥國謂建日向日豐久士比泥別、熊曾國謂建日別」トアルヲ、平田氏ハ、延佳本マタ一本ナドニ、肥國云々ノ一句ヲ「肥國謂速日別、日向國謂豐久士比泥別」トアルニ從ヒテ、古史徵ニ其ノ山ヲ述ベテ、有面四ノ四ヲ五ト改メタルハ、古書ノ改竄ナレドモ、地勢ヨリ考フレバ、必然ルベキ事ナリ。コノ五面ハ、天然ノ別チニシテ、神代ヨリアリシモノナレドモ、其ノ國名ハ、後世ニ至リテ附ケタル名ナルヲ、神代ニ及ボシテ書ケルナリ。サルハ豐國ハ、豐後風土記ニ、景行天皇名ヅケ給ヘリト云ヒ、肥ノ國ハ、景行紀ニ、天皇此國ニ幸セル時名ヅケ給ヘリト云ヒ、肥後國風土記ニハ、崇神天皇名ヅケ給ヘリト云ヒ、日向ノ國ハ、景行紀ニ天皇子湯(コユ)縣ニ幸セル時號ケ給ヘリト云ヒ、熊曾ノ國ハ、記傳ニ「彼ノ梟帥(タケル)どものいと建(タケ)かりし故に、熊曾とは云なり云々」ト云ヘル如ク、景行天皇ノ時、熊曾建(クマソタケル)ノ荒ビタルヨリ負セタル名ナリ。筑紫ノ國ノ名ハ、何レノ御世ヨリ始レリトモ物ニ見エザレドモ、蓋豐國肥ノ國ナド、同ジ頃ナルベシ。神武天皇中州ヲ平ゲ給ヒシ時、諸功臣ニ封土ヲ授ケ給ヘルハ、何レモ畿內近國ニシテ、神武紀ニ猛田ノ縣主、磯城ノ縣主、倭ノ國ノ造、葛城ノ國ノ造見エ、國造本紀ニ凡河內、山代、伊勢、紀伊ノ國ノ造ナド見エタレドモ、四方ノ遠キ國ニハ、未ダ封建ノ事アラザリキ。

國造本紀ニ橿原ノ朝ノ御世ニ、素賀ノ國ノ（遠江ノ國佐野ノ郡素賀村）造、宇佐ノ國ノ（豐前ノ國宇佐ノ郡）造、津島ノ縣ノ（對馬ノ國上縣下縣ノ郡）直ヲ任シ給ヒシコト見エタレドモ、栗田寛氏ノ考ニ「橿原ノ朝のほどは、今いふ畿內の地にこそ國ノ造は定賜たるべけれ。此地には未だ經略も及び給はぬばかりの形勢なれば、國造など置るべき謂なし」トテ、橿原ノ朝ト云ヘルヲ非トシ、「後を前にめぐらして、其祖先を擧ていへる文なり」ト云ヒ、津島ノ縣ノ直ニツキテハ、記傳ニモ早ク其ノ誤リナルコトヲ云ヘリ。カクテ崇神天皇ノ御世ノ頃マデハ、皇朝ノ御稜威モ未ダ遠方ニ及バザリシカバ、筑紫ノ地方ハ、天然ノ別チニ依レル國名モ定マラズシテ、アマタノ魁帥ハ各地ニ占據シテ、數十ノ部落ニ分レ自ラ化外ノ有樣ナレバ、其ノ中ニテ稍大ナル者ハ、外國ニモ朝聘シタリシヲ、支那ノ史ニ、何ノ國王、クレノ國王ト記シタルナリ。崇神天皇四方ヲ經略シ給ヒテ、遠キ國々モ漸ク皇化ニ從ヒケレバ、國造本紀ニ十一國ノ國造ヲ任シ給ヘル事見エテ、其ガ中ニ火國造、瑞籬朝御世、以大分國造同祖志貴多奈彥命兒遲男江命、定賜國造トアル火ノ國ノ造ハ、肥後ノ國ノ大半ヲ賜ハリ、阿蘇ノ國ノ造ハ肥後ノ國阿蘇ノ郡ヲ賜ハリシナリ。但景行紀ニ「吉備津彥遣西道」トアル西道ハ、イヅコマデヲ云ヘルカハ詳（サダカ）ナラネドモ、古事記ニ「大吉備津日子命、與若建吉備津日子命、言向（コトムケヤハス）和吉備國」トアリテ、二皇子ノ平ゲ給ヒシハ、今ノ中國ノ地ナレバ、西方ノ經略ハ未ダ筑紫ノ島マデハ及バザルベク思ハルレバ、此ノ二國造ノ事モ、後ヲ前ニメグラシテ、祖先ヲ擧ゲテ云ヘルニハ非ザルカ。景行天皇御自ラ熊曾國ヲ征シ給ヒ、豐日向火筑紫ノ國々ヲ巡撫シ給ヒ、又皇子倭建ノ命ヲ遣シテ熊曾建兄弟ヲ誅セシメ給ヒテヨリ、全島大カタ馴服シタレバ、葦分ノ國ノ（肥後ノ國葦分ノ郡）造ハ此ノ御世ニ任ジ給ヒ、又薩摩ノ國ノ造ノ條ニ「纒向日代朝、伐薩摩隼人等鎭之」トモ見エ、又碩田ノ國（豐後ノ國大分ノ郡）ハ、此ノ天皇ノ幸セル時名ヅケ給ヒシ由、景行紀及豐後風土記ニ見ユレバ、火ノ國ノ造ノ條ニ見エタル大分ノ國ノ造ヲ定メ給ヘルモ、蓋此ノ御世ナルベシ。成務天皇、御父天皇ノ御志ヲ繼ギマシテ、大國小國ノ國造ヲ定メ賜ヒ、又國々ノ堺マタ大縣小縣ノ縣主ヲ定メ賜ヒテ、大八島ノ中、大抵國ノ造縣主ノ支配ヲ受ケザルハ無ク、國造本紀ニ、コノ御世ニ定メ賜ヘル六十三國ノ國造ヲ列記シタル中ニ、筑志、（筑前ノ國筑後ノ國）筑志ノ米田（メタ）、（肥前國三根ノ郡米多ノ郡）豐、（豐前ノ國豐後ノ國）國前、（豐後ノ國國崎ノ郡）比多（豐後ノ國日高ノ郡）松津、（肥前ノ國ノ內未詳）末羅、（肥前ノ國松浦ノ郡）天草、（肥後ノ國天草ノ郡）葛津、（肥前ノ國藤津ノ郡）ノ九國アリ。縣主ノ事ハ詳カニ知ラレネドモ、景行紀ニ見エタル長峽（ナガヲ）縣、（豐前ノ國京都ノ郡長尾村）熊ノ縣、（肥後ノ國球麻ノ郡）八代ノ縣、（肥後國八代ノ郡）高來ノ縣、（肥前ノ國高來ノ郡）八女ノ縣（筑後ノ國上妻ノ郡下妻ノ郡）ナドハ、成務天皇ノ定メ給ヘル縣ノ名ヲ以テ追書シタルニモアルベシ。此ノ島ノ魁帥ドモノ中ニテ、熊曾ハ最モ猛ク强カリシカバ、兩度ノ征誅ニ遇ヒテモ、猶餘黨ノ滅ビズシテアリケルヲ、仲哀天皇御自ラ筑紫ノ訶志比ノ宮ニ幸シテ、其ノ國ヲ擊タントシ給ヒシニ、事成ラズシテ崩リ給ヒシカド、神功皇后ノ御稜威ニヨリテ、熊曾ノミカ海外ナル新羅ノ國マデ、皇化ニ從フ事トナレリ。カクテ應神天皇ノ御世ニハ、日向ノ國ノ造ヲ定メ給ヒ、仁德天皇ノ御世ニハ、大隅ノ國ノ造ヲ定メ給ヒ、コノ五面ノ大島、悉ク國造縣主ノ地トナリタレバ、今ハ私ニ外國ニ朝貢スル如キ不忠ノ族ハ絶エテ有ラザルコトヽナリキ。カク奴國ナドノ漢ニ朝貢シタルハ、何レモ皇朝ノ縣トナラザリシ時代ニ限レル事ナレバ、古史ヲ講ズル者ハ、第六章ノ說ニ據リテ、善ク時代ヲ比較シテ、當時ノ有樣ヲ考フベキコトナリ。

奴國ノ首長ニシテ儺縣主トナレル者ハ、イカナル氏族ナリシカ、記紀姓氏錄等ニモ見エザレバ、慥カナルコトハ知ルベカラザレドモ、綿津見ノ神ノ裔ト稱スル阿曇連等ガ遠祖ナルベシト思ハルヽ由アリ。綿津見ノ神又阿曇ノ連等ガ事ハ、先ヅ古事記御禊ノ段ニ「伊邪岐ノ大神……到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐原而禊祓也。……次於水底滌時所成神名、底津綿津見神、次底筒之男命、於中滌時所成神名、中津綿津見神、次中筒之男命、於水上滌時所成神名、上津綿津見神、次上筒之男命、此三柱綿津見神者、阿曇連等之祖神以伊都久神也。故阿曇連等者、其綿津見神之子宇都志日金折命之子孫也。其底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命、三柱神者、

墨江之三前大神也」トアリ。日向ハ、記傳六四十一丁ニ「二ッの義あるべし。一ッには比牟加比乃と訓て、日の向ふ地を云るなり。龍田ノ風ノ神ノ祭ノ詞に、吾宮者朝日乃日向處云々、萬葉十三七丁に、三野之國之高北之八十一隣之宮爾日向爾云々などある如く、上ッ代には、日向ふ地を賞稱たること多し。其事なほ下に朝日之直刺國とある處傳十五の八十六葉に委く云べし。されば此ノ禊したまひしも、然る地なるべし。此ノ考へに依るときは、竺紫とは筑前筑後の域を云るにもあるべし。今一ッには比牟加乃と訓て、即日向ノ國のことなるべし。……此ノ考へに依るときは、竺紫とは九國の總名なり。右の二ッの考へ何れよけむ、決めかねたり。」橘小門ハ、同巻四十二丁ニ「日向ノ國に此ノ地名物に見えず。古へは大隅薩摩の地までかけて日向と云るを、其國々にも凡て見えず。今も聞ゆることなし。但し日向ノ國に今現に此ノ舊跡はたしかにありと云り。然れども古書に依て舊跡を設け作ること、世に多ければ、かろ〴〵しくは信がたし。されば日向とあるは、日向ノ國のことならば、後に此地名は失つるなるべし。若シ又日向ふ地を云るならば、九國の内にて尋ぬべし。貝原氏の説に、筑前ノ國糟屋ノ郡に立花と云處あり。又席田ノ郡にも、早良ノ郡にも、靑木村と云もありて、海邊なりと云り。信に此ノ御禊に成リ坐る墨江大神又志賀ノ海ノ神の鎭座も、みな彼ノ國なれば、由ありて覺ゆ。」綿津見ノ神ト云フ名ノ義ハ、記傳五三十六丁ニ「師ノ説に、綿は海、津は例の助辭、見は毛知の約りたるにて、海津持てふ意なり。これ海を持神なればなりとあり。此説に依べし。」海ヲ和多ト云フハ、「師ノ説に、渡ると云ことなり。古書に、山には越といひ、海には渡るといへり。萬葉一ノ巻に、對馬乃渡中爾などよめるを思へとあり、」トアリテ、サテ記傳六六十七丁ニ「此ノ神は、官帳に筑前國糟屋ノ郡志加海ノ神社並名神大とある是なり。貞觀元年に、此神に從五位上を授奉たまへること、三代實錄に見ゆ。この御社志賀ノ島と云に有て、今は那珂ノ郡に屬りとぞ。（志賀ノ島福岡より海上三里なり）書紀景行ノ巻に、志我神とあり。萬葉七二十一丁に、千磐破金之三崎乎過鞆吾有不忘牡鹿之須賣神、又十六に、糟屋ノ郡志賀ノ村、和名抄

同郡に志訶鄕あり。（今の本、訶を阿と誤れり）書紀釋に風土記を引て、糟屋郡資訶島、昔息長足姬尊幸於新羅之時、御船夜時來泊此島、有陪從名云大濱小濱者、便勅小濱、遣此島、覓火、得早來、大濱問云近有家耶、小濱答云、此島與打昇濱近相連接、殆可謂同地、因曰近島、今訛謂之資訶島とあり。此處は、萬葉ノ歌などにも多く見えて、名高き地なり。（此地名、萬葉にあまた所に出たる、鹿とも四可とも之加ともかき、其外古書どもに、多くは淸音ノ字を用ひたれば、加を淸むべきなり、今も淸て呼ぶとぞ、）此外海ノ神ノ社は、播磨ノ國明石郡ノ海ノ神ノ社、（名神大云々）對島ノ島上ノ縣郡和多都美ノ神ノ社、（名神大）（和多都美ノ御子ノ神ノ社名神大）下ッ縣ノ郡和多都美ノ神社（名神大）など、式にも國史にも見ゆ。」阿曇ノ連ハ、同巻六十九丁ニ「阿豆美といふ由は、（阿曇と書く、曇ノ字は、ドムの音を轉して用ゆるなり）書紀應神天皇三年、處々海人訕哤之不從命、則遣阿曇連祖大濱宿禰、平其訕哤、因爲海人之宰、（又履中ノ巻に、對ッ日淡路ノ野島之海人也、阿曇連濱子（爲仲皇子令追太子）云々。此段なども考フべし。是も海人を掌れる據なり。）とあるを考るに、此ノ氏は海神の子孫なるから、固より海人のことを執し故に其ノ訕哤を平げしめたまひ、さて其ノ宰に爲ては、いよ〳〵其ノ事を掌りつるを以て、海人つ持と負せしが約りたるなるべし。（麻を略き、母智を約メて美と云なり。其例は既に前へにいへり。）かの志訶の海人の名高き（書紀神功ノ巻にも見え、萬葉ノ歌にも多くよめり。）も、此ノ由なるべく、又姓氏錄に海犬養海神綿積命之後也、凡海ノ連、同ッ神ノ男穗高見ノ神之後也などあるも、海人に依れる姓なるべし。又高橋ノ朝臣（皇別膳臣ノ後）と此ノ姓と、世々御膳のことに與れり。高橋の然る由緖は、景行天皇の御世の故事、書紀にも姓氏錄にも見えたるを、此ノ姓のことは、如何なる由とも物に見えず。是レも海人を掌るより事起りしなるべし。海人は御饌物を取ル者なればなり。和名抄に、筑前ノ國糟屋ノ郡に阿曇ノ鄕あり（今ノ本、曇ヲ雲に誤れり）こは此ノ氏人の住し故の地名なるべし」トアリ。又糟屋ノ郡ニ犬養村アリト云ヘリ。阿曇ノ連ノ族ナル海ノ犬養ノ連又ハ阿曇ノ犬養ノ連ノ住ミタル地ナルベシ。サテ此ノ氏人ノ住ミタル糟屋ノ郡ハ、古ハ儺ノ縣ノ地ナリシ上ニ、其ノ祖神ノ鎭座セル名高キ志賀ノ島ハ、彼ノ金印ノ現レタルニ由リテ、奴國ノ領地ナリシコト著シキノミナラズ、奴國ノ首長ノ墳墓ノ地トサヘ覺シキナリ。凡テ地方ノ名神大社ハ、多クハ其ノ地ヲ領シタル古

代ノ豪族ノ、己ガ祖神ヲ齋キ祭リタル者ニテ、謂ハユル祭政一致ノ世ニハ、領主ハ即祭主ナリケレバ、志賀ノ島ヲ領シタル奴國ノ首長ハ、決メテ志加ノ海ノ神ノ祭主ニシテ、阿曇ノ連等ガ祖ナルベシ。日韓古史斷ニ「海童國は即那珂ノ縣なり」ト云ヘルハ、卽コノ考ヘニ同ジ。但彦火々出見尊ノ海宮ノ神話ヲ取リテ「海童の國に至り、其の援を得て還る」ナド解スルハ、附會ニ近シ。又「此の祖神を、海童とも筒男とも稱ふ」ト云ヘルモ、信ケラレズ、底筒男、中筒男、上筒ノ男、三柱ノ大神ハ、神功皇后征韓ノ役ニ顯レ給ヘルヲ、穴門ノ直之祖踐立津守ノ連之祖田裳見宿禰ヲシテ祭ラシメ給ヒシハ、其ノ神ノ裔ト聞ユル氏人モナク、阿曇ノ連等モ、其ノ裔ニ非ザルガ故ニ、他ノ氏人ヲ以テ祭主トシ給ヘルナリ。津守氏ハ、姓氏錄ニ天孫ノ部ニ入リテ、火ノ明ノ命ノ後ナリト見ユ。サレバ墨ノ江ノ三神ト綿津見ノ三神トハ、同時ニ成リマセリト云ヘル神ナリトモ、「三神みな二名づゝ負はせたり」トハ云フベカラズ。墨ノ江ノ神ノ事ハ第三十章ニ云フベシ。

奴國ノ地ハ、筑紫ノ要地ニシテ、土地沃饒ナル上ニ、其ノ首長ハ、海神ノ裔トシテ、近海ノ漁人ヲ率キテ、海上ノ利ヲ收メタレバ、其ノ國ノ繁盛ナルコトハ、魏志ニ「有二萬餘戶」トアルニテ知ルベシ。カクテ航海ノ業ハ、其ノ國人ノ長所ナレバ、遂ニ大海ヲ渡リテ、漢國ヘモ通ジタルナリ。征韓ノ役ニ、海上ノ視察ヲ命ゼラレタル吾瓮ノ海人磯鹿ノ海人ナドハ、皆儺ノ縣主ノ部屬ナルベケレバ、皇后此ノ縣ニ在シテ、軍議ヲ凝シ給ヘルニ、此ノ縣人ノ力ヲ得給ヒケンコト、推料ラルヽナリ。サテ奴國ノ長儺ノ縣主ハ、那ノ津ニ住ミタラント思ハルヽニ、阿曇ト云フ名ハ、僅ニ糟屋ノ郡ノ鄕名ニ殘リタルハ、後ニ阿曇氏衰ヘテ、其ノ地ヲ筑紫ノ國造ニ取ラレタル故ナルベシ。筑紫ノ國造ハ、孝元天皇ノ皇子大彥ノ命ノ裔ニシテ、成務天皇ノ御世ニ國造ニ定メラレタリ。初ハ筑紫ノ國ノ中央ノ地ノミヲ有チシガ、後ニハ大キクナリテ、繼體天皇ノ御世ニ、國造磐井謀反シテ誅セラレタル時、其子筑紫ノ君葛子「獻糟屋屯倉、求贖死罪」トアレバ、儺ノ縣ノ地ハ皆國造ニ屬キタリシナリ。サレバ阿曇ノ連ハ、糟屋ノ地ノ一隅ニ住シテ、僅ニ海神ノ祭祀ヲ繼續シタリ。サテ此ノ氏ノ族ハ、皇極紀ニ阿曇ノ山背ノ連比羅夫海ノ犬養ノ連勝麻呂アリ、天武紀十三年十二月「阿曇連、凡海連、海ノ犬養ノ連、賜姓曰宿禰、」姓氏錄右京神別ニ安曇ノ宿禰、海ノ犬養、凡海ノ連、八木ノ造、攝津ノ國神別ニ凡海ノ連、阿曇ノ犬養ノ連、河內ノ國神別ニ安曇ノ連アリ。

後漢書安帝紀永初元年ノ條ニ云、「冬十月、倭國遣使奉獻。」東夷傳ニ云、「安帝永初元年、倭國王帥升等、献生口百六十人、願請見。」此ヲ通典邊防ノ部ニハ「永初元年、倭面土地王師升等献生口」ト載セタリ。馭戎慨言ニ云、「面土地の三字いかにいへるにか、さだかならねど、何とかや一ツのちひさき國の王めきても聞え、又面土地と王師升と、かしこへまかれりし二人の名の如くも聞えたり。」菅政友氏云、「コヽニ倭國王帥升等トアルヲ、通典ニ倭面土地王師升等ト作ルハ、唐ノ世迄ハ、必ズ後漢書ニ採レル本書ノ存リテ、其ニ據ラレタリト覺シ……。倭ハ全國ノ總稱ニテ、面土地ハ帥升ノ住メル國名ト按ハルレド、此ノ面土地ヲ如何ニ讀ムニヤ、此ニ當ツベキ地名モ、今ハ聞エネバ、或ハ字ノ誤ニテモアランカ。又帥升、師升、何レカ正シカラン。此モ、決メ難シ。此ノ王等ハ、百六十人ノ生口ヲ、遙々遠キ漢ノ洛陽マデ送リシト云ヘル、ソノ威權ノ程モ思ヒヤラレヌ。時ニ遼東ノ太守耿夔、數々句奴貊等ヲ討破リテ、威名世ニ高ク聞エタレバ、面土地王ノ彼ニ通ジタルモ、遼東ニ其人アルヲ知リテノ業ナリケンモ料ルベカラズ。」カクテ是ヨリ魏ノ景初三年マデ百卅三年ノ間ニハ、漢籍ニ絕エテ倭ノ通信ヲ記サズ。案フニ樂浪遼東邊ニハ、爾後年毎ノヤウニ、句奴鮮卑ノ寇絕エズシテ、東方ト漢土トノ往來ハタヤスカラズ、マシテ公孫氏遼東ニ據ルニ及ビテハ、倭國ヲ始メ東方國々ノ消息ハ、全ク絕エハテシナリ。」

後漢ノ永初元年ハ紀元七百六十七年ニシテ、孝昭天皇若クハ孝安天皇ノ御世ノ頃ナルベシ。

後漢書鮮卑傳「光和元年冬、又寇酒泉、緣邊莫不被毒」ノ次ニ「種衆日多、田畜射獵、不足給食、檀石槐乃自循行、見烏集秦水、廣從數百里、水停不流、其中有魚、不能得之、聞倭善網捕、於是東擊倭人國、得千餘家、徙置秦水上、令捕魚、以助糧食」トアルヲ、異稱日本傳ニ「檀石槐東胡人也、蓋此時蝦夷之地、防禦不備、故異類來侵邊境、若クハ其然也」ト云ヒ、新井白石ノ蝦夷志ニモ、コノ倭人ヲ「北倭にして、蝦夷にやあたらん」ト云ヘレドモ、此ノ時鮮卑ハ何奴ノ舊土ニ據リテ、支那ノ西陲ナル酒泉郡ニモ寇スル程ナレバ、其ノ地ハ朝鮮ノ西北、支那ノ正北ニ當リテ、我ガ蝦夷ノ地トハ相去ルコト極メテ遠ク、又我ガ西陲ヲ侵セリトスレバ、鮮卑ノ東南ニハ、遼西遼東玄菟樂浪ノ諸郡、句麗濊貊三韓ノ諸國アリテ、檀石槐イカニ慓悍ナリトモ此等ノ地ヲ踰エテ來寇スベキ由ナク、且胡人ハ騎射ニハ長ズレドモ、操舟ニハ拙ケレバ、海上ノ寇掠ハ彼等ノ思ヒモヨラザル事ナリ。此ハ魏志鮮卑傳ノ裴松之註ニ、魏書ヲ引キテ「鮮卑衆日多、田畜射獵、不足給食、後檀石槐、乃案行烏侯秦水、廣袤數百里、渟不流、中有魚、而不能得、聞汗人善捕魚、於是檀石槐東擊汗國、得千餘家、徙置烏侯秦水上、使捕魚、以助糧、至于今、烏侯秦水上、有汗人數百戶」トアレバ、檀石槐ノ擊チタルハ、汗國ナルヲ、汗國ト云フ名ノ疑ハシキニヨリテ、范曄ガ、サカシラニ倭人國ト改メタルナリ。按フニ汗ハ、韓ナリ。書ノ序ノ孔傳ニ駒麗扶餘馯貊トアル馯ハ、正シク韓ヲ云ヘルニテ、馯ト汗トハ、又全ク同音ナレバ、倭國ハ即韓國ナルコト何ノ疑ヒカアラン。

第二十八章　魏志倭人傳

魏志東夷傳倭人ノ條ハ、皇國ノ事ヲ記セルコト甚詳カニ、解說ヲ要スル事モ多ケレバ、十餘段ニ分チテ言ハン。先ヅ「倭人在帶方東南大海之中、依山島爲國邑、舊百餘國、漢時有朝見者、今使譯所通三十國。」

倭人ヨリ國邑マデ十七字ハ、漢書地理志ノ顏師古注ニ、魏略ヲ引キテ、「倭在帶方東南大海中、依山島爲國、度海千里、復有國、皆倭種」ト云ヘル初ノ二句ニ同ジクシテ、唯三字多キノミナレバ、魏志ノ文ハ、決メテ魏略ニ據レルナリ。「度海千里、復有國、皆倭種」ト云ヘル三句モ、魏志ノ下文ニ「女王國、東渡海千餘里、復有國、皆倭種」トアリ。顏師古ガ他書ヲ引クニ、常ニ字句ヲ節略シタルニツキテ思フニ、魏略ノ原文ハ、魏志ニ取リタルガ如クアリシナルベシ。魏略ハ、今ノ世ニ傳ハラネバ、其ノ體裁モ詳カナラザレドモ、唐ノ劉知幾ガ史通ノ古今正史篇ニ、「魏時、京兆魚豢、私撰魏略、事止明帝」トアルニ依レバ、其ノ書ノ成レルハ、魏帝曹芳以後ノ世ニアリテ、武帝文帝明帝三代ノ事跡ヲ紀傳體ニ書キタル者ナルベシ。又史通ノ題目篇ニ、「魚豢姚察著魏梁二史、巨細畢載、蕪累甚多、而俱牓之以略、考名責實、奚其爽歟」トアルハ、題目ノ適ハザルヲ咎メタルニテ、其ノ書ノ惡キヲ云ヘルニアラズ。舊唐書經籍志正史類ニ、「魏略三十八卷、魚豢注」トアルハ、即此ノ書ニシテ、注ハ撰ノ誤リナルベシ。三帝ノ事跡ヲ記シテ、三十八卷トナリタレバ、敍事ノ詳密ナリケンコト、推量ラル。又同書雜史類ニ、「典略五十卷、魚豢撰」トアルハ、自ラ別書ナルベキヲ、新唐書藝文志雜史類ニ、「魚豢魏略五十卷」トアルハ、典略ヲ魏略ト誤レルナリ。又鄭樵ガ通志ノ藝文略ニ、コノ魏略五十卷ヲ編年類ニ收メタルハ、新唐書ノ誤リヲ襲ギタルニテ、史通舊唐書ガ正史ニ入レタルニ違ヘリ。裴松之ガ引キタル魏略ノ文ニヨリテ考フレバ、四夷列傳マデモ委シク記シタル記傳體ノ史ナリシ事、疑ヒナシ。サテ魏明帝及曹芳ノ時、倭魏兩國ノ使者互ニ往來シタル事ノ魏志ニ詳カニ見エタルハ、蓋コノ魏略ノ文ヲ取レルナリ。史通ニ事止明帝トアレバ、曹芳ノ世ノ事ハ、他書ニ據レルカトモ思ハルレドモ、事止明帝ハ、本紀ヲ云ヘルニテ、列傳ノ記事ハ、次帝ノ世ニ涉レルヲモ終言シタルナルベシ。彼ノ使者往來ノ事ドモハ、魚豢ノ目ニ睹、耳ニ聞キテ記シタル事實ナルベケレバ、之ニ據レル魏志ノ文ハ、事實ト同時ニ成レル記錄トシ

テ見ルベキ價アルナリ。

帯方ハ、漢ノ末ニ、公孫康ガ樂浪郡ノ南部、今ノ黄海京畿二道ノ地ヲ分チテ置キタル郡ナルコト、第八章ニ云ヘルガ如クナレバ、帯方東南大海之中ト云フハ、漢書ニ樂浪海中ト云ヘルト、其ノ義同ジ。後漢書東夷傳ニ、「倭在韓東南大海中」ト改メタルハ、地理ニハ善ク合ヘリ。依山島爲國邑ハ、皇國ハ山多キ國ニシテ、海上ヨリ望メバ、各島皆山ナルガ如ク見ユル故ニカク云ヘリ。

「舊百餘國、漢時有朝見者」ハ、漢書ノ「分爲百餘國、以歳時來献見云」トアルニ依レルナリ。「今使譯所通三十國」ハ、蓋魚豢ノ舊文ニ依レルニテ、今トハ魏ノ世、兩國交通頻繁ナリシ時ヲ云ヘルニテ、晋書四夷傳ニモ「舊有百餘小國相接、至魏時、三十國通好」ト云ヒ、隋書北史ニモ「魏時使譯通中國、三十餘國」ト云ヘリ。西晋ノ世ニ至リテハ、武帝ノ泰始二年、一タビ入貢シタルノミニシテ、交通遂ニ絶エタレバ、今ト云フ字ハ、陳壽ガ自ラ現時ヲ指セルニハアルベカラズ。サテコノ三十國通好ノ事ヲ、後漢書ニ「倭云々、自武帝滅朝鮮、使譯通於漢者、三十許國、國皆稱王、世々傳統」ト書ケリ。コハ漢書地理志燕地ノ條ニ「玄菟樂浪、武帝時置、皆朝鮮濊貉句驪蠻夷」トアリテ、末段ニ、倭人献見ノ事アルニヨリ、魏志ノ三十國ヲ以テ之ニ附會シタルナリ。サレドモ前漢ノ倭人献見ハ、其ノ年代モ詳カナラズ、其ノ國數モ見エザレバ、三十許國ト定ムベキ由ナシ。使驛ハ、劉攽ノ説ニ、「案郵驛、中國可有之、不可通於四夷、自前書皆言使譯、使即使者、譯則譯人、故合作使譯、此書内有自作使譯處、明是後人不曉妄改之」トアル如クニテ、范曄ハ、本魏志ニ依リテ、使譯ト書キシナルベシ。「國皆稱王、世々傳統」ハ、魏志伊都國ノ下ニ「世有王」トアルニ依レルナリ。サレドモ「世有王」ハ、伊都國ノミヲ云ヘル語ニシテ、スベテ邪馬臺國王ノ外ニ王ト云ヘルコトノ見エタルハ、伊都國王ト狗奴國王ト、後漢書ノ奴國王ト、通典ノ面土地王トノミナリ。コレラハ、諸國ノ中ニテ稍大國ナル趣ナレバ、其ノ首領ヲモ王ト云ヒタレドモ、魏志ニ列記シタル諸小國ニハ、王アリト云ヘルコトモ見エザルニ、范曄ガ「三十許國、國皆稱王」ト書ケルハ、杜撰ナリ。コノ三十許國ハ、イカナル國ナラント思フニ、馭戎慨言ニ「そのかみ御おもむけの、いまだ天の下にあまねからざりし程、いと〳〵かたほとりの國造別稻置などやうの、一しま一鄕をうしはきゐたりけん人々共などの、わたくしにかの國へことかよはしゝ事などは、おのづから有もやしけん、」又「百餘國といひ、國皆稱王といへるは、國々の國造また別稻置などのともがらの、おの〳〵其所々をうしはきゐたりしを、王とはいへる也。からぶみも大きなるちひさきをいはず。一國一島にまれ、うしはきて獨だちたるをば、皆そこの王といへり」ト云ヒ、中外經緯傳ニ「上代の大御政は、殊に大らかなりしかば、私に外國に通交する事をも禁め給はず」ト云ヘレドモ、イカニ上代ノ大御政ハ大ラカナリトモ、國造別稻置ナドノ榮稱ヲ賜ハリテ、皇朝ノ藩屏トアルベキ人タチノ、我モ〳〵ト外國ニ朝貢スルコトハアルベカラズ。其ヲ又皇朝ヨリ禁メ給ハザルベキ由モアラズ。日本紀ノ年紀ニ據レバ、三十國ノ通交シタル魏ノ世ハ、神功皇后ノ御世ニ當リテ、筑紫ノ地方ニモ、國造縣主ノ定マレル時ナルガ故ニ、カヽル考ヘモ出ルナレドモ、古事記ノ年紀ニヨリテ推測スレバ、魏ノ明帝及曹芳ノ頃ハ、崇神天皇ノ御世ニ當リテ、皇化ノ未ダ天下ニ洽カラズ、國造縣主ヲ定メ賜ヘル所モ、イト〳〵少カリシ程ナレバ、彼ノ國ニ朝貢シタルハ、國造縣主ニハアラズシテ、邊陲ノ地ニ占據セル魁帥ドモノ所爲ナルベシ。菅政友氏ハ、古事記年紀考ニ、崇神天皇以下ノ年代ヲ考證セラレ、又漢籍倭人考ニ、「崇神天皇ノ御世ノ頃ヨリ、皇威モヤウ〳〵筑紫ノ島ノ北ノ方ニハ及ビタリケン」ト云ハレナガラ、後漢書ノ國皆稱王ヲバ「實ハ國造縣主ノ類ナリケン」ト云ヘルハイカニゾヤ。

次ニ「從郡至倭、循海岸水行、歴韓國、乍南乍東、致其北岸狗邪韓國、七千餘里。」

郡ハ帯方郡ナリ。帯方ノ郡治帯方縣ハ、今ノ京畿濱臨津江口ニ在リタレバ、ソコヨリ皇國ニ至ルニハ、馬

韓諸國（今ノ京畿道ノ南部及忠淸全羅二道）ノ西岸ト、馬韓弁辰諸國（今ノ全羅道及慶尙道ノ南部）ノ南岸トニ循ヒテ、航行シタルナリ。乍南乍東ハ、菅政友氏云、「古昔大船ノ無キ世ニハ、小船モテ地方ニソヒテ航行スメリ。サレバ海灣ノ屈曲シ島嶼ノ散點スル處ニイタレバ、ソレニツレテ、或ハ南ニ走リ、アルハ東ニ向ヒテ、カラクシテ進メルナリ。」狗邪韓國ハ、弁辰ノ一國ニシテ、三韓傳ニ弁辰狗邪國トアリ。三國史記ノ加耶國、日本紀ノ加羅國ニシテ、今ノ金海都護府ナリ。其北岸トアルハイカヾ。韓ノ北岸トスレバ、狗邪國ハ韓ノ南岸ニシテ北岸ニ非ズ。若クハ「其」ノ字倭ヲ受ケタルニテ、皇國ヨリ北ニ當レル對岸ノ義ナルベシ。然ルニ後漢書ニハ、此ノ三字ヲ其西北界ト改メタルガ故ニ、狗邪韓國ハ、皇國ノ界內ナルガ如ク聞エテ、事實ニ違ヘリ。

次ニ「始度一海、千餘里、至對馬國、其大官曰卑狗、副曰卑奴母離、所居絕島、方可四百餘里、土地多深林、道路如禽鹿徑、有千餘戶、無良田、食海物自活乘船南北市糴。」

「始度一海」ハ、狗邪韓國マデノ航行ハ、地方ニソヒテ進ミタルヲ、コヽニ始メテ洋海ヲ渡ルナリ。千餘里ハ遠キニ過ギタリ。古代航行ノ艱難ナルガ爲ニ、實ノ里程ヨリハ遠ク感ジタルナラン。下ノ二所モ然リ。對馬國ハ、古事記ニ「次生津島、亦名謂天之狹手依比賣」トアリ。記傳（五ノ十五丁）ニ「名義は、萬葉十五（二十六丁）に、毛布禰乃波都流對馬とよめる如く、韓國の往還の舟の泊る津なる島なり」ト云ヒテ、其ノ細書ニ、「魏志と云から書に、此島のことを對馬國とあり。こは此方にて、古へより如此書るを見て取れるかとも思へど、さには非ず。彼書のいできつるは、晋の世なり。そのかみ、御國にかゝる假字のつかひざまあるべくもあらず、ただ津島と云を、彼國にて聞傳へ誤りて、かくは書る物なり。さて書紀に、やがて此文字を假字に取用て、對馬島とかゝれたり。津島の假字に、對馬とかゝむは、さる例あれば、さも有なんを、島ノ字を添られたること、いと心得ね。島々と重ねて云ッ名はあるべきことかは。淡海の海など云例とは異なるをや。敏達ノ御卷には、津島とかゝれたるところあり。是レ古ヘの書ざまなり」ト云ヘリ。魏ノ世ハ、崇神天皇ノ頃ト覺ユルニ、既ニ津島ノ名アリテ、漢國マデモ其ノ名ニテ聞エタル程ナレバ、此島ハ、神功皇后征韓ノ前ヨリ、大加羅王子來朝ノ前ヨリ、早ク韓國ノ往還ノ要津トナレリシナリ。然ルニ皇國ノ古傳ニハ、素盞嗚ノ尊ノ渡海ノ神話ト、天之日矛ノ來朝ノ奇談トノ外、韓國ノ往還ノ事見エザレバ、古傳ノ脫略多キナリ。其大官曰卑狗、副曰卑奴母離ハ、菅氏云、「卑狗ハ、ヒコノ假字ニテ、御國人ノ名ヲ彥某、アルハ某彥ナド呼ベルヲ、官ノ名ト思ヒ誤メタルナラン。卑奴母離ハ、ヒナモリト訓ヒテ、夷守ノ義ナルベシ。ヒナハ、都ノ外ヲ何處ニテモナベテイヘル稱ナリ。景行紀ニ「十八年、天皇將向京、以巡狩筑紫國、始到夷守云々、乃遣兄夷守弟夷守二人令覩」トアル夷守ハ、地名ナレド、モト其ノ官アルモノヽ住ミタル故ノ稱ニモヤアラン。」方可四百餘里ハ、伊能忠敬氏ノ實測錄ニ「上之島、沿海周廻五十里一十四町二十一間半、下之島、沿海周廻一百三十五里三十一町一十九間半」トアルニ比ブレバ、甚短シ。岬灣ノ屈曲ニ拘ラズシテ、大カタニ云ヘルナルベシ。有千餘戶ハ、國ノ廣サニ比ベテ、戶數少シ。明治二十五年刊行ノ統計年鑑ニ、明治二十三年十二月調ノ國別人員ヲ擧ゲタルニ、「對馬三一七一九」トアリテ、今モ戶口少キ所ナレバ、古代ノサマハ推量ルベシ。無良田ハ、主稅式ニ、「對馬島、正稅三千九百二十束、」マタ「凡筑前筑後肥前肥後豐前豐後等國、每年穀二千石、漕送對馬島、以充島司及防人等粮」ナド見エ、朝鮮ノ申叔舟ガ海東諸國記ニモ、「四面皆石山、土磽民貧、以煑鹽捕魚販賣爲生」ト云ヒ、明治八年正院地誌課編纂ノ日本地誌提要ニ「對馬租稅總五千零八拾三石九斗四升六合、」佐久間舜一郞ノ日本地理正宗（明治二十三年出版）ニ「平地少ク、田圃僅ニ三千二百二町餘ノミ」トアリテ、今モ良田少キ島ナリ。乘船南北市糴、南ハ壹岐ノ島筑紫ノ島ヲサタリ、北ハ諸韓ノ國ヲ云ヘルナリ。

次ニ「又南渡一海千餘里、名曰瀚海、至一大國、官亦曰卑狗、副曰卑奴母離、方可三百、多竹木叢林、有

三千許家、差有田地、耕田猶不足食、亦南北市糴。」

瀚海ハ、史記匈奴傳ニ翰海トアルト同ジ名ニテ、斐駰集解ニ「如淳曰、翰海、北海名也、」索隱ニ「崔浩云、群鳥之所解羽、故云翰海」ナドアレドモ、壹岐對馬ノ間ノ海ヲ然云ヘル故ハ、知ラレズ。至一大國ノ大ハ、支ノ誤寫ニシテ、壹岐ノ島ヲ云ヘルナリ。梁書ニコレヲ一支國ト書キタルハ、魏志ノ文ニ依レルナレバ、魏志ニモ本ハ支トアリシナリ。一ハ壹ト同音ニテ、伊ノ音ニ用ヒタリ。岐ヲ支ト書キタルハ、梁書新羅傳ニ、旱岐ヲ旱支ト書キタルニ同ジ。（前巻第十五章ヲ見ヨ。）壹岐ノ島ハ、古事記ニ「次生伊伎島、亦名謂天比登都柱」トアリテ、記傳（五ノ十八丁）ニ「伊伎ノ島は、萬葉十五（二十五丁二十六丁）に、由吉能之麻と見え、和名抄にも、壹岐ノ島ハ由岐とあるに因て、由伎を古訓と思フ人あれど、書紀繼體ノ巻の歌に、以祇とよみ、此記にも伊ノ字をかき、壹ノ字も由の假字にあらねば、本は伊伎なること明けし。然れども懷風藻に、伊支ノ連と云フ姓を、目錄には雪ノ連とかき、又かの萬葉の由吉とあるなどを以て思フに、必ズ由伎とも通はし云べき故ある名ノ義ト見えたり。（行も、通はして伊伎とも云リ、これも同じ例なり。）云云」ト云ヘレドモ、名ノ義ハ確ナラズ。魏人ノ一支ト書ケルハ、古クヨリ伊伎ナリシ明證ナリ。「方可三百里」ハ、實測錄ニ「壹岐國、沿海周廻三十五里一十五町五十九間半」トアルニ、大カタ合ヘリ。「有三千許家」ハ、對馬ノ戶數ヨリ多シ。統計年鑑明治二十三年十二月調ノ國別人員ニ「壹岐三五七一一」トアリテ、今モ對馬ヨリ稍多シ。「差有田地」ハ、對馬ニ比ベテ言ハルナリ。民部式ニ「壹岐島、正稅一萬五千束」トアリテ、對馬ノ四倍ニ近シ。日本地誌提要ニ「壹岐、租稅總壹萬三千六百三拾石壹斗三升八合」、日本地誌正宗ニ「肥沃ノ地多ク、田圃總計凡五千三百六十餘町」トアリテ、今モ田圃ハ、對馬ヨリ多ク、稅額ハ二倍餘ニ當レリ。

次ニ「又渡一海千餘里、至末盧國、有四千餘戶、濱山海居、草木茂盛、行不見前人、好捕魚鰒、水無深淺、皆沈沒取之。」

末盧國ハ、今ノ肥前ノ國松浦ノ郡ニシテ、古事記仲哀天皇ノ條ニ筑紫ノ末羅縣、神功紀ニ火前ノ國ノ松浦ノ縣トアリ。又國造本紀ニ末羅ノ國造アリ。松浦ト名ヅクル故ハ、神功紀ニ「北到火前國松浦ノ縣、而進食於玉島ノ里小河之側、於是皇后勾針爲鉤、取粒爲餌、抽取裳糸爲緡、登河中石上、而投鉤、祈之、曰朕而欲求財國、若有成事者、河魚飲鉤、因以擧竿、乃獲細鱗魚、時皇后曰希見物也、（希見此云梅豆邏志）故時人、號其處曰梅豆羅國、今謂松浦訛焉」トアレドモ、魏ノ時ハヤク末盧ト云ヒ、又國造本紀ニ「末羅國造、志賀高穴穗朝御世、穗積臣同祖大水口足尼孫矢田稻吉、定賜國造」トアレバ、此ノ名ハ、神功皇后ノ時ニ始レルニ非ズ。又始メヨリ末羅ニシテ、梅豆羅ノ訛レルニモ非ザルナリ。又此ノ地ハ、記紀共ニ縣トアリテ、記傳ニ「末羅も、古ヘ御縣にぞありけむ。凡て此記に、某縣とあるは、古の稱のまゝにて、實に阿賀多と云し地なり」ト云ヘルハ、サル事ナルニ、國造本紀ニ定賜國造トアルハ、國ト縣ト同ジ所ニハアラズシテ、並ベ置カレタルニゾアリケン。鈴木重嶺ノ說ニ「松浦ノ國ノ造は、後世のいはゆる五島氏の祖と思はるゝ由あれば、此國造のよさゝれたるは、彼島なるべし。景行天皇巡狩の時より、近島の名あれば、本は値嘉ノ國ノ造なりけんを、後に松浦ノ値嘉ノ國ノ造など云けんが、其値嘉の名逸して、末羅ノ國造と唱ふるには非るか」ト云ヘリ。若然ラバ國造ハ、西ノ島々ヲ領シテ、東ノ陸地ハ、縣主ノ所管ニ屬セシナルベシ。サテ此ノ國造縣主ハ、成務天皇ノ御世ニ定メ賜ヘル者ナレバ、魏ノ使ノ往還セシ時、末盧國ヲ領セシ魁帥ハ、國造ニモ縣主ニモ非ザルコト、前條ニ云ヘルガ如シ。松浦ノ浦ハ、古代韓國ノ往還ニ、多ク歷タル所ニシテ、記傳ニ「萬葉十五（二十三丁）に、多良思比賣御船波弖家牟松浦乃宇美とあるに依れば、新羅より還リ渡リ坐る時も、御船此ノ浦に泊しなるべし云々。是レに准へて思ふに、初メに、新羅に御船發ありしも、此ノ浦にぞありけむ。凡て古ヘ韓國へ渡るには、多く此浦より船開せしにや。萬葉五に見えたる佐用比賣が故事など思ふべし」ト云ヘリ。肥前ノ國風土記ニ「松浦郡値嘉島、在郡西南之海

中、西有泊船之停二處、一處、名曰相子之停、應泊三十餘船、一處、名曰川原浦、應泊一十餘船。遣唐之使、從此停發、到美彌良久之濟、（即川原浦之西濟是也）從是發船、指西度之」トアルハ、支那ヘ渡ルコトナレドモ、萬葉集十六ニ「神龜年中、太宰府差筑前國宗像郡之百姓宗形部津麻呂、充對馬送糧舶柁師也云々、自肥前國松浦縣美彌良久埼發舶、直射對馬渡海」トモアレバ、菅氏ノ說ニ「漢土ニ渡ルニモ、對馬ニ趣クニモ、コノ美彌良久埼ヨリ船發キセシナリ。西北ニ向フニ便リヨキ地ト思ハルレバ、海路モオシハカリ知ラルベシ」ト云ヘリ。魏ノ使ノ行程モ、下文ニ末盧ヨリ伊都マデ、行程五百里トアレバ、壹岐ヨリ渡リ著キタル所ハ、松浦郡ノ西ニ寄レル所ナルベク聞ユ。松浦壹岐對馬ノ海路ハ、實測錄ニ「從肥前國松浦郡呼子浦、至壹岐國石田郡鄕之浦、渡海直徑七里一十二丁」「從壹岐國壹岐郡勝本浦、至對馬國下縣郡嚴原、渡海直徑一十二里二十四間」トアリテ、壹岐對馬ノ間ヲ、イカニ迂廻シテ航行ストモ、又壹岐ヨリ松浦ノ何レノ浦ニ至ルニモ、漢里ニテ二百里ニハ過グマジキヲ、魏志ニ各千餘里トアルハ、イカニ大カタニ云ヘリトモ、疎謬ト言ハザルヲ得ズ。

次ニ「東南陸行五百里、到伊都國、官曰爾支、副曰泄謨觚、柄渠觚、有千餘戶、世有王、皆統屬女王國、郡使往來常所駐。」

伊都國ハ、今ノ筑前ノ國怡土ノ郡ニシテ、古事記ニ、筑紫ノ國之伊斗村、仲哀紀ニ、伊都ノ縣主、神功紀ニ、伊都ノ縣、筑紫風土記ニ、逸都ノ縣、筑前國風土記ニ、怡土ノ縣主ナドアリ、伊都ト名ヅクル因緣ハ、仲哀紀ニ「筑紫ノ伊都縣主祖五十迹手、聞天皇之行、拔取五百枝賢木、立于船之舳艫、上枝掛八尺瓊、中枝掛白銅鏡、下枝掛十握劒、參迎于穴門引島而獻之云々、天皇卽美五十迹手、曰伊蘇志、故時人、號五十迹手之本土曰伊蘇ノ國、今謂伊覩者訛也。」筑前國風土記ニモ「怡土ノ郡云々、天皇於斯譽五十跡手、曰恪乎（謂伊蘇志）、五十跡手之本土、可謂恪勤國、今謂怡土郡訛也」トアレド、記傳ニ「今思ふに、かの五十跡手と云名も、此ノ地名に因れる如く聞え、又からぶみ魏志の皇國ノ傳に、伊都國と云るも、正しく此ノ地のことゝ聞ゆれば、訛には非るか」ト云ヘル如クニテ、伊都ハ、魏ノ時旣ク彼ノ國ニ聞エタレバ、伊蘇ノ訛リト云ヘル傳ヘハ、梅豆羅ノ國ト同ジク、固有ノ地名ニ就キテ附會シタル說ナリ。又伴信友云、「書紀に、伊都としも書るは、此魏志に書ると字さへ相同じきをおもへば、もともろこしにて、寄語に然書ておこせたるを、やがて書なれ來つるを、書紀にも用ひられたるものなるべし。對馬も、津島の寄語なるを、書紀に用ひられたるも、同じ趣なるべし云々。かの國にて、末盧と書るに、古事記などに末羅と書れたるも、似たる書ざまなり。また一支は、北史隋書にも如此書り云々。後には壹伎壹岐なども書たりけむを、書紀に壹伎と書れたるは、これももとは、もろこしの寄語にて、伊都對馬などと同じ趣なるべくや。末盧も准へつべし。」東南陸行五百里ハ、末盧國ヲ松浦ノ西偏（今ノ長崎縣北松浦郡）トスレバ、五百里トモ云フベキ路程ハアレドモ、東南ト云ヘルハ、方位違ヘリ。怡土ハ、松浦ノ東方ニシテ、寧ロ北ニ偏レリトハ云フトモ、南ニヨレリトハ云ヒ難シ。爾支モ、泄謨觚、柄渠觚モ、考ヘ得ズ。青柳種麻呂ハ「爾支は主なるべし。そは縣主などの主にて、官といふにはあらねども、貴人をさしいふ稱なれば、自官の如くおもへるならむ」ト云ヘレド、イカヾアラン。世有王ハ、本居氏ヲ始メトシテ、「伊覩ノ縣主なるべし」ト云ヘル人多ケレドモ、伊覩ノ縣主ハ、五十迹手ヲ以テ祖トスルコト、仲哀紀及筑前風土記ニ見エタレバ、五十迹手ノ時ヨリ百餘年前ナル魏ノ世ノ伊覩國王ハ、縣主ニハ非ズシテ、其ノ地ニ據レル魁帥ナルベシ。サテ其ノ魁帥ハ、實ニ五十迹手ノ祖先ナルカ、祖先ニ非ザルカハ、知ルベカラズ。藤井氏青柳氏ガ、此ノ王ヲ伊覩ノ縣主トシテ、金印ノ委奴國王ニ附會シタル說ノ非ナルコトハ、前章ニ云ヘルガ如シ。皆統屬女王國ノ皆ノ字ハ、伊覩國ノ世々ノ王ヲ指シタル辭ナルベシ。若クハ王ヲ指シタルニハアラデ、對馬一支末盧伊都ノ四國ヲ指シタル辭カトモ聞ユレドモ、下ナル郡使往來常所駐ハ、伊都國ノミヲ云ヘルナレバ、コレモ伊

都國王ノミヲ指セルナリ。郡使ハ、帶方郡ノ使ナリ。此ノ使ノ往來ゴトニ、伊都ニ駐リシ所由ハ、下文ニ見ユ。

次ニ「東南至奴國、百里、官曰兕馬觚、副曰卑奴母離、有二萬餘戸、東行至不彌國、百里、官曰多摸、副曰卑奴母離、有千餘家、南至投馬國、水行二十日、官曰彌彌、副曰彌彌那利、可五萬餘戸。」奴國ハ、名高キ金印ノ委奴國ニシテ、今ノ筑前ノ國那珂ノ郡博多ノ邊ナルコト、前章ニ委シク云ヘリ。博多ハ、怡土郡ノ東ニ當リテ、稍北ニヨリタレバ、東南ハ又違ヘリ。百里ハ大カタ合ヘリ。有二萬餘戸ハ、末盧國ノ五倍、伊都國ノ二十倍バカリニシテ、戸口甚盛ナレバ、此ノ國ハ糟屋席田那珂早良ノ諸郡ヲ兼ネタル大國ナルベシ。馭戎慨言ニ「奴國は、仲哀紀に儺縣、宣化紀に那津とあるところにて、筑前不彌國も同じき國にて、明宮御宇應神天皇のあれましゝ所を、宇瀰となづけしよしあれば、それなるべし。投馬國は、それより南水行二十日といへるにつきて尋ぬるに、日向ノ國兒湯ノ郡に都萬神社有て、續日本後紀三代實錄延喜式などにみゆ。此所にてもあらんか」トアリ。宇瀰ハ、古事記神功皇后征韓ノ段ニ「渡筑紫ノ國、其御子者阿禮坐、故號其御子生地、謂宇美也」トアリテ、神功紀ニハ宇瀰ト書キ、筑紫風土記ニハ芋湄野ト云ヒ、紀傳ニ「書紀應神ノ巻に、生於筑紫之蚊田とあれば、其處の舊名は蚊田とぞ云けむ。さて今も、筑前ノ國糟屋ノ郡に宇瀰村ありて、宇瀰ノ神社もあり」ト云ヘリ。不彌國ハ、實ニコノ宇瀰ナラバ、宇瀰モ古キ名ニシテ、名ノ因縁ノ説ハ、後人ノ附會ナルベシ。但宇美村ハ、糟屋ノ郡ノ南隅ニシテ、博多ト程遠カラヌ所ニテ、古ハ奴國ノ域内ナルベク、又東行百里ノ文トモ合ハザレバ、不瀰國ハ別所ナランカ。菅氏云、「和名抄ニ穗波ノ郡穗波美布奈トアル、是モ不瀰ニ似ヨリテ聞ユ。ナホ地理ニ委シキ人ニ問ヒテ決ムベシ。」都萬ノ神社ハ、續後紀ニ妻ト書キ、三代實錄延喜式ニハ都萬ト書キ、太宰管內志ニ「兒湯郡妻万村に妻万宮とてある、是レ都萬ノ神社なり。木花咲也姫を祭ると云傳ふ。佐土原ノ城主より、神領三百十五石を寄附し玉へりと云々」トアリ。其ノ村ハ、今モ妻村ト云ヒテ、佐土原ノ北一里餘、一ノ瀬川ノ西岸ニアリ。投馬國ハ、可五萬餘戸トアリテ、奴國ヨリモ戸口多キ大國ナルニ、妻村ハ小村ニテ、其ノ墟址トモ思ハレズ。又其ノ國名ノ、郡鄕等ノ名ニ殘ラザルモ、イカゞナレバ、ソコトモ定メ難シ。尙ヨク尋ヌベシ。鶴峯戊申ハ、至不彌國ノ下ナル百里ヲ、不彌國ヨリ投馬國ニイタル里數トシテ、「投馬は、和名抄筑後ノ郡名上妻加牟豆萬下妻准上とある妻なるべし。兵部式諸國驛傳馬に、筑後國傳馬御井上妻狩道各五疋とあり。此處より水行二十日にして、大隅國噌唹郡に至るべし。今上妻下妻の間に矢部川あり、即チ柳川の川上なり。此川を下りて、また內海に浮び、南方に到るべし」ト云ヒタレドモ、百里ハ不彌國ニ至ル里數ニシテ、水行二十日ハ、投馬國ニ至ル海程ナルコトハ、文意甚明カナレバ、投馬ヲ筑後ノ內トシテハ、協ハズ。近藤芳樹ノ征韓起原ニ「肥後國託摩郡の事なるべし」ト云ヒ、修史局撰著ノ國史眼ニハ、投ヲ設ノ誤リトシテ、薩摩ノ國ニ當テタリ。日韓古史斷ハ、國史眼ノ說ニ從ヒタレドモ、猶「再按和名抄（薩摩國）、高城郡有托摩鄕、或疑即是」ト書キ添ヘ、サテ「不彌より南行、御笠御原等を經、筑後河に至るまでは、陸路に因らざる能はず。恐らくは水行二十日の上に脫文あらん。」又「水行二十日は、筑後河の舟筏と、不知火の內浦航路にして、設馬は五萬餘戸、今の薩摩の全境にして、阿久根以南を云ふ」ト云ヘリ。三宅米吉氏ノ、備後備中ノ內ナルベシト云ヘルハ、南トアル方位ニ合ハズ。猶ヨク尋ヌベシ。兕馬觚、多摸、彌彌、彌彌那利、皆考ヘ得ズ。菅氏云、「子湯郡ニ美々津トイヘル地名アリ。コノ彌彌ニ由アリゲナリ。」

次ニ「南至邪馬壹國、女王之所都、水行十日、陸行一月、官有伊支馬、次曰彌馬升、次曰彌馬獲支、次曰奴佳鞮、可七萬餘戸、自女王國以北、其戸數道里、可得略載、其餘旁國遠絕、不得可詳、次有斯馬國、次有

已百支國、次有伊邪國、次有都支國、次有彌奴國、次有好古都國、次有不呼國、次有姐奴國、次有對蘇國、次有蘇奴國、次有呼邑國、次有華奴蘇奴國、次有鬼國、次有爲吾國、次有鬼奴國、次有邪馬國、次有躬臣國、次有巴利國、次有支惟國、次有烏奴國、次有奴國、此女王境界所盡、其南有狗奴國、男子爲王、其官有狗古智卑狗、不屬女王、自郡至女王國、萬二千餘里。」

邪馬壹ハ、後漢書梁書ニ邪馬臺ト書キ、隋書ニ「都於邪靡堆、則魏志所謂邪馬臺者也」トアレバ、魏志今ノ本ノ壹ハ、決ク臺ノ誤リナリ。邪馬臺モ、邪靡堆モ、やまとノ音譯ト聞ユルニ、隋書ノ邪靡堆ハ、天皇ノ都シ給ヘル大倭ノ國ヲ指セルコト明カナレバ、昔ヨリ誰モ〱、コノ邪馬臺モ然ナリト思ヒシニ、本居氏始メテ其ノ非ヲ辨ゼラレタリ。其ハ馭戎慨言ニ、魏志ノ文ヲ擧ゲテ「此時にかの國へ使をつかはしたるよししるせるは、皆まことの皇朝の御使にはあらず、筑紫の南のかたにていきほひある熊曾などのたぐひなりしもの丶、女王の御名の、もろ〱のからくにまで高くかゞやきませるをもて、その御使といつはりて、私につかはしたりし使也。其故は、まづ右の文に、かの國の帶方郡より、女王の都にいたるまでの國々をしるせるは、かのかしこの使の、大和の京へまゐるとて、へてきつる道の程をいへる如くに聞ゆれど、よく見れば、まことは大和の京にはあらず。いかにといふに、まづ對馬一支末盧伊都までは、しるせる如くにてたがはざるを、其次に奴國不彌國投馬國などいへるは、漢呉音はさらにもいはず、今の唐音をもてあてゝも、大和への道にはさる所の名共あることなし。又不彌國より女王の都まで、南をさして物せしさまにいへるも、かなはず。大和はつくしよりは、すべて東をさしてくる所にこそあれ。また自女王國以北といへるも、たがへり。以西とこそいふべけれ。みづから來たらんに、かく北南と西東とをわきまふまじきよしなきをや。又投馬國より女王の都まで、水行十日、陸行一月といへる水行十日は、さも有りぬべし、陸行一月はいと心得ず。月の

字は日の誤なるべし。さて一日としては、いづこの海邊よりも大和の京へはいたりがたく、また一月ならんには、山陽道のなかからのほどより、陸路をのぼりしとせんか。さることあるべくもあらず。古へ西の國よりやまとへのぼるには、すべて難波の津までは、船より物するぞ、定れることなりける。かくあまたがへる事共のあるは、大和の京にあらざりしるしにて、誠にはかの筑紫なりしもの丶、おのれ姫尊之といつはりて、魏王が使をも受つるにあざむかれつるものなれば、其使のへてきたりけん國々も、女王の都と思ひしも、皆筑紫のうちなりけり。されば不彌國といふより、投馬國などいへるも、みなつくしのしまの東べたを、南をさして物せし海つ路にて、その過し方を、以北といへるも、この故なり。また周旋可五千餘里といへるも、筑紫の洲にて、ほとりの島々かけたる程に、よくかなへり。さて女王國ノ東渡海千餘里、復有國皆倭種といへるも、大和にしてはかなはず。これもつくしより海をへだてゝ、東なる四國をいへるなり」ト云ヘルハ、大カタ然ル事ナリ。但女王ノ御使ト僞レリト云ヒ、己レ姫尊也ト僞レリト云ヘルハ、本居氏ハ、神功紀ノ年紀ニヨリテ、神功皇后ノ御世ハ、魏ノ世ニ當レリト思ヘル故ニ、考ヘ出デタル說ナレドモ、此ノ御世ハ、實ハ魏ノ時ヨリ百年餘リ後ナレバ、彼ノ女王ト云ヘル者ハ、筑紫ノ南方ニ據レル女酋ニシテ、神功皇后ニハ固ヨリ關係ナキ者ナリ。然レドモ其ノ國名ヲやまとト云ヘルハ、恐ラクハ本國ノ舊名ニハアルマジ。彼ノ女酋等、其ノ黨類ノ强キヲ負テ、天皇ノ都シ給ヘル上國の名ヲ借シテ、自ラやまとノ王ト稱シタルナラン。

サテ其ノ國ハ、何處ト云フニ、本居氏ハ「熊曾などのたぐひなり」ト云ヒ、鶴峯氏近藤氏伴氏皆熊襲ノ國ナリト云ヘリ、熊曾ノ國ハ、古事記國生坐段ニ「熊襲國、謂建日別」トアリテ、記傳ニ、「熊曾國は、曾ノ國なり。曾と云は、もと書紀神代巻に、日向ノ襲とある地にして、和名抄に大隅ノ國噌唹郡ある是なり。國ノ名となりてありし事は、書紀景行ノ巻に、十二年十二月議討熊襲、於是天皇詔群卿曰、朕聞之、襲國有厚鹿文迮鹿文者、是兩

人熊襲之渠帥者也、衆類甚多、是謂熊襲八十梟帥、其鋒不可當焉云、又十三年五月、悉平襲國などあり。是レを以て、襲ノ國即チ熊曾なることをも知べし。彼ノ梟帥どものいと建かりし故に、熊曾とは云なり。熊鰐熊鷲熊鷹なども、皆猛きを云稱なり。さて曾と云名ノ義は、古語拾遺に、天ノ鈿女ノ命は、古語天乃於須女、其ノ神強悍猛、固故以爲名、今ノ俗、强女謂之於須志、此ノ縁也と見え、源氏物語帚木ノ巻に、かくおぞましくはいみじき契ヲ深くとも、絶て又見じと見え、俗語にも、おぞきおそろしきなど云。されば曾は、此ノ於曾の約りたるにて、是も猛き意なるべし。書紀に襲と云字をしも用ひられたるも、本ノ言於曾なる故なるべし。又思ふに、曾は勇男のつゞまりたるか。佐平をつゞむれば曾にて、伊を略くは常なり。書紀に渠帥をもイサヲと訓り。又功をも伊曾と云を思ふべし」トアリ。コノ熊曾ノ領シタル所ハ、今ノ大隅薩摩二國ノ地ナリシカバ、上代ハ筑紫ノ島ヲ五ツニ分ケタル南ノ面ノ大名ヲ、熊曾ノ國ト云ヘリ。景行紀ニ襲ノ國トアルモ、是ナリ。景行天皇神功皇后、相續ギテ熊曾ヲ征ケ給ヒテヨリ、其ノ大名ハ失セテ、隣國ノ日向ト云フ名ハ、其ノアタリマデノ大名トナリケレバ、曾ノ國ト云フ名ハ、纔ニ殘リテ、ソレモ日向ノ中ニ入リテ、後ニハ一郡ノ名トナレリ。彦火ノ瓊々杵ノ尊ノ天降坐セリト云ヘル筑紫ノ日向之高千穗之久士布流多氣ヲ、神代紀ニ日向ノ襲之高千穗ノ峯ト書カレタルハ、日向大隅ニ跨レル霧島山ヲ指シタルニテ、其ノ山ヲ襲ノ國ニ附ケテ、又ソノ襲ノ國ヲ日向ナル大名ニ附ケタルナリ。又瓊瓊杵ノ尊ノ陵ハ、薩摩ノ國高城ノ郡水引郷ニアリ。彦火火出見ノ尊ノ陵ハ、大隅ノ國始羅ノ郡溝邊郷高屋ニアリ。鸕鷀草葺不合ノ尊ノ陵ハ、大隅ノ國肝屬ノ郡始羅郷ノ北ニアリテ、何レモ古ノ熊曾ノ國ノ中ナルヲ、神代紀ニ日向ノ可愛之山ノ陵、日向ノ高屋ノ山ノ上ノ陵、日向ノ吾平ノ山ノ上ノ陵ト云ヘルハ、大隅薩摩マデヲカケテ日向ト云ヒシ時ノ名ヲ以テ追書シタルナリ。景行紀天皇西征ノ條ニ「到日向國、起行宮以居之、是謂高屋宮」トアルモ、彦火火出見ノ尊ノ陵ノアル處ニテ、今ノ大隅ノ國ナリ。サテ大隅薩摩ノ二國ヲ置レタルコトハ、續紀大寶二年十月ノ條ニ「唱更ノ國司等（今ノ薩摩ノ國也）言」トアリテ、本ハ唱更ノ國ト名ヅケラレタリシヲ、後ニ薩摩ノ國ト改メラレ、又和銅六年四月ノ條ニ、割日向ノ國肝坏贈於大隅始䆀四郡始置大隅國ト見エタリ。」

抑熊曾ノ種族ハ、古事記木花之佐久夜毘賣、火中ニテ御子産シケル條ニ、「其火盛燒時所生之子名、火照命、此者隼人阿多君之祖。」日本紀ニハ、火照ノ命ヲ火闌降ノ命トシテ、「即放火燒室始起烟末生出之兒號火闌降命、是隼人等始祖也」トアル隼人ニ同ジクシテ、彦火火出見ノ尊ノ御兄ノ御裔ト言傳ヘテ、西國ノ名族ナリシカバ、曾ノ國滅ビテ後モ、其ノ族黨ハ、猶其ノ故地ニ住ミテ、隼人ト呼バレテ、勇悍ノ名世ニ聞エタリ。氏族志神別天孫ノ部阿多氏ノ條ニ「初火闌降命以彦火火出見尊有神德、自請爲俳優之民、衛護宮門、執吠狗之役、其子孫爲隼人、（日本書紀）世居薩摩大隅等國、種類蕃滋、俗頗獷悍難馴、屢勞師徒。（日本書紀、續日本紀。）」記傳十六ノ四ニ「隼人は波夜毘登と訓べし。和名抄にも、隼人司ハ波夜比止乃豆加佐とあり。隼人と云者は、今の大隅薩摩二國の人にて、其ノ國人は絶れて敏捷く猛勇きが故に、此ノ名あるなり。古言に、猛勇きを波夜志とも登志とも云へば、波夜と云に猛き意もあるなり。隼ノ字を書クことは、迅速きこと此ノ鳥の如く、又波夜夫佐てふ名も合へればなり。景行仲哀の御世のころ、熊曾と云し者も是にて、即チ其ノ名を熊曾ノ國と云き。」又（同巻ノ四十二丁）「阿多君は、地名に由れる姓なり。さて火照ノ命は、廣く隼人の祖と聞えたるに、分て阿多君の祖としも云るは、隼人の諸ノ姓の中に、殊に顯れたる氏にこそありけめ。或説に此の隼人阿多ノ君を、隼人と阿多ノ君と二ツとし、又隼人ノ國の阿多ノ君と見たるなど、皆わろし。唯阿多ノ君は隼人なる故に、隼人とは云るなり。さて阿多てふ地は、和名抄に薩摩ノ國阿多ノ郡阿多ノ郷あり、是なり。此ノ名今も存り。書紀に吾田ノ長屋ノ笠狹之崎、神武ノ巻に日向ノ國吾田ノ邑（古へは薩摩までかけて日向ノ國と云しこと、上に云るが如し。日向ノ國舊杵ノ郡英多あれど、其にはあらず。）などある、皆此ノ地を云り。天武紀持統紀などに、阿多ノ隼人とあるは、此ノ地の隼人なり。さて書紀に、始起烟末生出之兒號火闌降ノ命、是隼人等始祖也、次云

云、次生出之兒號火明命とあるは、此ノ記と此ノ神の生坐る次第も違ひ、又隼人ノ祖も異なり。されどその生坐る次第に就て、第一なるが隼人ノ祖なることは同じきなり。」又古事記神武天皇ノ段ニ「坐日向時、娶阿多之小椅ノ君ノ妹名阿比良比賣云々」トアル傳二十ノ一丁ウニ「阿多は地ノ名にて、薩摩ノ國にあり。此の阿多も、彼ノ上卷なる阿多ノ君と一ツにて、姓とこそ聞えたるに、地ノ名なりといへるは如何といふに、此ノ御代のころは、いまだ姓を云る例なければなり。但シ此はなほ地ノ名ながら、後に姓となりつれば、即チ彼ノ阿多ノ君にてはあるなり。」「小椅君は、地ノ名に依れる人ノ名なり。阿多は大名にて、其中にある小椅といふ地なるべし。此ノ地物に見えざれども、必然るべし。今此ノ名の地は無きか、大隅薩摩の國人に尋ぬべし。さて小椅ノ君は、其ノ地をうしはける人にて、即チ名に負るなるべし。又此は名には非ずして、阿多氏ノ中より別れたる一ツノ姓の如くにも聞ゆめれど、若シ姓ならむには、必ズ下に其の人の名あるべきに、名をいはて、妹と云ること いかゞ。某ノ氏の妹とは云まじければなり。書紀ノ神代ノ卷(海神ノ宮ノ段)に、火闌降ノ命即吾田君小橋等之本祖也とある小橋も、此ノ人を指て云るなり。」「阿比良比賣は、和名抄に大隅ノ國ノ郡名始羅(阿比良、又同國大隅ノ郡始䕺熊毛ノ郡阿枚是レらの中の地ノ名に因れる名なり。書紀には娶日向ノ國ノ吾田ノ邑ノ吾平津媛爲妃とあり。是レにも姓を擧ずして、吾田ノ邑とあるを以て、此記の阿多も、此は地ノ名なることを知べし。」

日韓古史斷ニハ、彥火ノ瓊々杵ノ尊ノ幸シ給ヘリト云ヘル大山祇ノ神ノ女木花開耶姬ノ一名ヲ神吾田津姬トアルニ由リテ、吾田ノ一族ハ、大山祇ノ裔ナリトシ、火闌降ノ命ノ裔ハ、隼人ノ長トナレルニテ、其ノ隼人等ハ、山祇ノ族ニシテ、天孫ノ族ニ非ズト論ゼラレタレドモ、紀ニハ明カニ、「火闌降ノ命、是隼人等始祖也」ト云ヒ、續紀ニ隼人曾ノ君、隼人某ノ君ナド屢見エ、姓氏錄神別天孫ノ部ニ、阿多ノ隼人、大角ノ隼人ナドモアレバ、隼人ト隼人ノ長トヲ別族トスベキ由ナシ。

サテ神武天皇ノ御祖タチノ、高千穗ノ宮ニ坐シシ程ハ、熊曾ノ祖先等モ服從ヒ奉リテ阿多之小椅君ハ、妹阿比良比賣ヲ神武天皇ニ配セ奉リテ、皇家ノ外戚トナリシガ、倭ニ遷リマシテ後ハ、東西忽隔絕シテ、筑紫ノ島ニハ、皇化モ及バズナリテ、各地ノ土豪、皆己ガ儘ニ振舞ヒケル中ニモ、噌唹ノ郡ノ地ニ住ミタル族類ハ、最モ强クシテ、熊曾ト呼バレ、遂ニ其ノ名ハ、筑紫ノ南面ノ大名トモナレリ。コノ熊曾ガ、魏ノ國ニ交通シタル頃ハ、景行天皇ノ征伐ヲ被ラザリシ前ニシテ、其ノ國ノ最モ强盛ナル時ナレバ、筑紫ノ北面ノ國々マデ、其ノ威令ヲ奉ジタルコトハ、下文ニ見ユルガ如シ。

鹿兒島縣ニテ編纂シタル薩隅日地理纂考ニ「大隅國贈於ノ郡國府鄉上小川村、隼人城、上古大隅ノ隼人の居地なり。姓氏錄に、大角ノ隼人者、出自火闌降ノ命之後也と見ゆ。其長を曾ノ君と號して、世々此地を領せり。其資質勇猛强悍にして、勢ひ强大なるに任せ、屢朝命に叛き奉りしは、景行天皇仲哀天皇等の紀に見えたるが如し。城中に大なる巖洞ありて、長袋と號す。隼人の酋長か居處なりしと云、」「拍子橋、隼人城より寅卯ノ方十町許にあり。今俗庚申橋といふ。土人相傳て、熊曾梟帥、隼人の城中に親族を集め、酒宴舞踊して在りけるを、日本武ノ尊に逐れ、此橋本にて誅せられしに因り、拍子橋の名を負へりと云、」「襲山鄉重久村、止上神社、創建の年月詳ならず。社說に、景行天皇此神の御稜威に因り、盡く熊襲國を平げ給ひし故に建立ありしと云ふ」トアリ。土人ノ口碑ハ、盡クハ信用シ難キ者ナレドモ、贈於ノ郡ハ熊曾建ノ故地ナルコトハ、疑ヒナキ事ナレバ、女王之所都ト云ヘルモ、必其地ナルベシ。又同書贈於ノ郡淸水鄉姬木村ニ姬木城アリテ「此城、北は曾於郡より續きたる連山の尾崎にて、東南及び西は、水田山下を繞り、實に天險の名城なり」トアリ。姬木ハ即姬ノ城ニテ、姬木ノ城ト云フハ、對馬島ト同例ナル重複ト聞ユレバ、コレモ女王ノ傳說ニ關係アル地名ナルベシ。

女王ハ、熊曾ノ女酋ナリ。委シクハ下ニ云フベシ。水行十日、陸行一月ハ、菅氏ノ考ニ、「兒湯郡アタリヨリ贈於郡ニ至ランニ、海陸トモニサバカリ多クノ月日ヲ經ベキニモアラネバ、本居翁ノ考ノ如ク、月ハ日ノ誤リニテ、此ハ船路ヨリ、直ニ今ノ大隅國佐多岬ヲ廻リテ、鹿兒島灣ニ入リタルモノト覺シ、水行十日ニテ、陸行一日トアランニハ、サモコソト思ヒナサル丶ナリ」ト云ヘレドモ、筑前博多ヨリ、贈於郡ニ至ルニ、豐前豐後日向ノ東ニ沿ヒテ、佐多岬ヲ廻リテハ、イカニ地理ニ暗キ古代トハ云ヘド、餘リノ迂廻ナレバ、信ケラレズ。日韓古史斷ニハ、「既に隼人海峽（黑迫門）を踰え、薩摩潟を涉りて、噌唹に着する者にて、十日水行せば、開聞の海角を迂回すとも、ほゞ櫻島の內灣に達し得べく、別に陸行一月の長程を要せざれば、月は日のあやまれるなり。又按ずるに、舟にて加世田港まで來り、陸に上り、一日にして谿山に至り、又舟にて噌唹の大津に達せしにや」と云へり。此等ノ說、稍前說ニ愈レルニ似タリ。近藤芳樹ハ、邪馬臺國ノ所在ヲ「肥後に菊池郡山門郷あり、是なるべし」ト云ヒタレドモ、菊池郡ニテハ、不彌國ヨリ水行二十日、又水行十日ト云フベキ由ナケレバ、やまとト云ヘル名ニハ拘ルベキニ非ズ。然ルニ星野博士ハ、又其ノ轍ニ倣ヒテ、神功紀ニ「轉至山門縣、則誅土蜘蛛田油津媛」トアル山門ノ縣、即筑後ノ山門ノ郡ヲ以テ邪馬臺國トナセリ。此ノ山門ノ郡ハ、筑前ナル國々ト相近クシテ、魏志ノ行程ニ合ハザルコトハ、近藤氏ノ山門ノ郷ヨリモ甚シ。博士ハ、魏志ノ文ヲ引クニ、伊都ノ國ヨリ邪馬臺マデノ行程ヲバ略カレタレドモ、コレラノ行程ハ、國々ノ位置ヲ求ムルニ必要ナル者ナレバ、多少ノ誤謬ハ免レズトモ、全クハ棄ツベキ者ニアラズ。今其ノ略カレタル行程ヲ算スルニ、東南百里、東行百里、水行二十日、及十日、陸行一日ニシテ、少クトモ水陸三十餘日ハ費シタルニ、怡土郡ヨリイカニ迂廻シテモ、陸行四五日過ギザル山門ノ郡ヲ以テ之ニ當ツルハ、地理甚違ヘリ。

官名ハ總テ考ヘ得ズ。可七萬餘戶ハ、都城ノミニハアラデ、熊曾ノ直轄ノ地ナル、今ノ大隅ノ國ノ戶數ヲ、大凡ニ見積リテ舉ゲタルナリ。對馬國ヨリ投馬國マデノ戶數モ、皆然リ。

其餘旁國云々ハ、馭戎慨言ニ「此道すぢにはあらぬ國々をいひて、其名共の中に、斯馬國、鬼國、爲吾國などいふがあるを、志摩ノ國、紀の國、伊賀ノ國にて、大和のかたはらの國ゞと思へる人あれど、よく思へば、斯馬は筑前ノ國志摩ノ郡か、或は大隅ノ國噌唹郡の志摩ノ郷かなるべし。鬼國は肥前ノ國基肄郡ゝ。爲吾は筑後ノ國に生葉郡あり。然ればこれらも、みなつくしなりけり。その外、姐奴國は伊豫ノ國周敷ノ郡に田野郷あり。對蘇國は土佐をいふか。邪馬國は豐前ノ國下毛ノ郡に山國あり。又景行紀に八女縣といふも見ゆ。烏奴國は周防ノ國吉敷ノ郡に宇努郷あり。又大野といふ所も、西の國々にこゝかしこ見えたり」ト云ヒ、日韓古史斷ニハ「斯馬國は櫻島（今北大隅郡）なり。已百支國は伊爾敷（今鹿兒島郡伊敷村）歟。伊邪國は伊作（今南北伊佐二郡）なり。郡支國は串伎（今給羅郡加治木郷）なり。彌奴國は湊（今日置郡市來郷）歟。好古都國は笠沙（今川邊郡加世田郷）なり。不呼國は日置（今日置郡日置郷）歟。姐奴國は谿山（今谿山郡）歟。對蘇國は多布施（今阿多郡田布施郷）歟。蘇奴國は噌唹（今西噌唹郡）歟。呼邑國は鹿屋（今肝屬郡鹿屋郷）なり。華奴蘇奴國は噌唹の別邑歟（今東噌唹郡にや）。鬼國は城（今高城郡）歟。爲吾國は可愛（今薩摩郡高江郷）なり。鬼奴國は阿久根（今出水郡阿久根郷）なり。以上十五國、皆熊曾の旁邑、今薩隅二國に在り。耶馬國は八女（今山門及上妻下妻郡）なり。躬臣國は審にし難し。蓋今三瀦御井の地にあたる。巴利國は原（今御原郡）なり。支惟國は基肄（今基肄郡）なり。烏奴國は大野（今三笠郡大野山）なり。奴國は女王國境界の盡くる所、即儺にして、古の海童ノ國なり。以上六國、皆水行海路を終へ、陸に就きて經歷せる者、今二筑の地に外ならず」ナド云ヘレドモ、何レモ推當テノ說ニシテ、確カナルコトハ、知リ難シ。

其南有狗奴國ハ、菅氏云、「大隅ヨリ南ニハ、種子屋久ナドイフサヽヤカナル島々ハアレド、共ニ攻擊スル程ノ國無ケレバ、此ノ狗奴國ハ、モト下ノ「女王國ノ東、渡海千餘里、復有國、皆倭種」トアル地ノ內ナルヲ、陳壽ガ、東ヲ南ト誤リタルナラン。サレバ後漢書ニハ、之ヲアハセテ、「自女王國、東度海千餘里、至狗奴國、

雖皆倭種、而不屬女王」ト改メタリ。其ノ狗奴國ハ、馭戎慨言ニ「伊豫ノ國風早ノ郡に河野郷あれば、それなどをいへるか、魏志に狗奴國の男王といへるも、すなはち此河野のわたりをうしはきゐたりしものをいふなるべし」トアリ。日韓古史斷ハ、更ニ進ミテ、狗奴ハ河野ニシテ、其官有狗古智卑狗ハ、河野氏ノ遠祖子致彥ヲ云フト云ヘリ。其ハ國造本紀ニ「小市(伊豫國越智郡)國造、輕島ノ豐明ノ朝ノ御世、物部ノ連ノ同祖大新河ノ命ノ孫子致命定賜國造、」氏族志神別越智氏ノ條ニ「大新河孫子致命、應神帝時爲國造、(舊事本紀、)云々、文武帝時、有越智玉興者、爲伊豫大領(本書不言何郡、蓋越智郡也)、玉興弟玉澄居河野、其後爲河野氏云々。(河野系圖、豫章記、)越智氏累世居伊豫、支族蕃滋云々、而河野氏尤著(河野系圖)」トアルニ由リテ、ソノ子致ノ命ヲ子致彥トシテ、狗古智卑狗ニ附會シタルナリ。又國造本紀ニ「久努ノ(遠江ノ國山名ノ郡久努ノ郷)國造、筑紫ノ香椎ノ朝ノ代、以物部ノ連ノ祖伊香色男ノ命ノ孫印播ノ足尼定賜國造」トアルニ由リテ、「河野は初め久努に作る、久努ノ國ノ造は即越智氏同族にして、伊豫より出てたり。すべて越智の一族、東國に遷れる者、三河遠江伊豆駿河に蕃息し、三島を氏神として尊崇するは、伊豫なる大三島ノ神の氏子たる明證なり。」又「越智(小市)風早(風速)の二國造、應神の朝に定め賜へりと(國造本紀ニ)云へれども、是の時初めて入國せりと思ふべからず。從來早く土著したりしならん。越智は物部氏と同祖なれば、自ら別系なり。越智の祖伊香色雄は、蓋孝元帝の時の人なり。其の子は大新河にして、又其の子は十千根なり。十千根は、垂仁帝の時、物部ノ連の尸を賜はりて、物部氏の祖となれり。されば孝元垂仁の間に、伊豫に越智氏の領國すでに定れるなるべし」ト云ヘリ。又「男子爲王」ハ、下文ニ、男王卑彌弓呼トアルニヨリテ、日韓古史斷ハ、卑彌弓ヲ日子ト讀ミテ、「伊豫國造の皇別より出てゝ、當時來りて其の國を鎭めたまへるを謂ふに似たり。越智氏、武臣として、世々皇子王孫を奉戴して、地方を綏撫せしものと思はる」ト云ヘり。伊豫ノ國ノ造ハ、古事記ニ「神八井耳ノ命者、伊奈ノ國ノ造等之祖也、」國造本紀ニ「伊奈ノ國ノ造、志賀ノ高穴穗ノ朝ノ御世、印幡ノ國ノ造ノ祖敷桁彥命男速後上ノ命定賜國造」トアル者ニテ、古史斷ニハ、栗田寛氏ノ考ヲ引キテ「この國造は、成務帝ノ時に定まれるにあらず。早く崇神帝の朝に賜はりしならん」ト云ヘリ。此等ノ說、イト巧ニハ辨ゼラレタレドモ、想像ニ成レル事多クテ、確證少ケレバ、慥ナル事ハ知リ難シ。

「自郡至女王國、萬二千餘里」ハ、遠キニ過ギタレドモ、此ノ書ニ里程ヲ記シタルハ、總テ實ノ里程ヨリ遠キ故ニ、總計ハカクナレルナリ。帶方縣ヨリ不彌國マデノ里數ハ、郡ヨリ狗邪韓國マデ七千餘里、狗邪韓國ヨリ對馬國マデ千餘里、一支國マデ又千餘里、末盧國マデ又千餘里、伊都國マデ五百里、奴國マデ百里、不彌國マデ又百里ニテ、合セテ一萬七百餘里ナリ。此ノ一萬七百餘里ヲ萬二千餘里ヨリ減ズレバ、殘リ千三百里計リハ、不彌國ヨリ女王國マデノ里數ニシテ、末盧ヨリ不彌マデノ里數ノ二倍ニ過ギズ。此モ女王國ハ、筑紫ノ內ニ在リテ、大和ノ國ニ非ザル一證ナリ。然ルニ史學者ノ中ニハ、方位ニモ距離ニモ拘ラズシテ、女王國ハ即大和ノ國ナリト考フル人アリ。英人あすとん氏ノ日本古史考ニ、山海經ナル「南倭北倭屬燕」ヲ引キテ「古時ノ支那人ハ、大和ハ九州ノ南ニアリト想像セリト見ユ。故ニ北倭トハ熊曾ヲ云ヒ、大和ヲバ南倭ト云ヘリ。第三世紀ニハ、狗奴ト號シテ、大和ヨリ海（尾張灣）ヲ隔テヽ東ニアリシ第三ノ獨立國聞ユ、」又魏志倭人傳ヲ譯出シテ「支那人ハ、此ノ時ニ、大和ハ、對馬ノ殆ド南ニアリトノ奇異ナル誤想ニ執著シタリシコト明カナリ。此ノ事ハ、此ノ文中數條ノ疑難ヲ解釋ス。文意ヲ明瞭ニセンニハ、唯南ヲ東ト、北ヲ西ト讀ムベシ、」又「十七國ノ中、志摩紀伊伊賀ハ、稍朧ゲニ認メ得ラル。此ノ記事ノ本ヅキタル支那ノ旅客ハ、恐ラクハ九州ヨリ少シモ先ニハ嘗テ往カザリケン」ト云ヘリ。此等ノ說ハ、女王卑彌呼ヲ神功皇后ナリト思ヘルヨリ出デタル說ナレバ、卑彌呼ノ西國ノ女酋ナル事ダニ明カニナリタランニハ、右ノ如ク方位ヲ强解スル必要ナカルベシ。

次ニ「男子無大小、皆鯨面文身、自古以來、其使詣中國、皆自稱大夫、夏后少康之子、封於會稽、斷髮文身、以避蛟龍之害、今倭水人皆沈沒捕魚蛤、文身亦以厭大魚水禽、後稍以爲飾、諸國文身各異、或左或右、或大或小、尊卑有差、計其道里、當在會稽東冶之東、其風俗不淫、男女皆露紒、以木緜招頭、其衣橫幅、但結束相連、略無縫、婦人被髮屈紒、作衣如單被、穿其中央、貫頭衣之、種禾稻紵麻、蠶桑緝績、出細紵縑緜、其地無牛馬虎豹羊鵲、兵用矛楯木弓、木弓短下長上、竹箭、或鐵鏃、或骨鏃、所有無、與儋耳朱厓同。」

此ノ段、皇國ノ風俗ヲ記シタルニ、事實ニ違ヘルコト多クシテ、漢書地理志粤地ノ條ニ記シタル儋耳珠厓郡ノ風俗ト相似タリ。先ヅ夏后少康之子云々ノ語ハ、粤地ノ條ニ「其君禹後、帝少康之庶子云、封於會稽、文身斷髮、以避蛟龍之害」トアルヲ、其ノ儘ニ取リ、「作衣如單被、穿其中央、貫頭衣之」ハ、儋耳朱厓ノ「民皆服布、如單被、穿中央爲貫頭」ニ同ジク、「種禾稻紵麻、蠶桑緝績」ハ、「男子耕農、種禾稻紵麻、女子桑蠶織績」ニ同ジク、「其地無牛馬虎豹羊鵲」ハ、「亡馬與虎」ニ本ヅキ、「兵用矛楯木弓」ハ、「兵則矛盾刀木弓弩」ヲ節略シ、「竹箭、或鐵鏃、或骨鏃」ハ、「竹矢、或骨爲鏃」ニ依レルナリ。カクテ末ニ、「所有無、與儋耳朱厓同」トトヂメタリ。此ノ二郡ハ、今ノ廣東瓊州府、俗ニ海南島ト云フ處ニテ、儋耳郡治ハ、今ノ瓊州府儋州ノ地ニ在リ。珠厓郡治ハ、同府崖州ノ地ニ在リキ。熟々按フニ、漢ノ世ニハ、海中ノ大島ニテ、其ノ風俗マデモ知ラレタルハ、儋耳珠厓ノミニシテ、臺灣島ノ事モ、未ダ知ラザリシ頃ナレバ、依山島爲國邑ト云ヘル倭人ノ風俗ハ、儋耳朱厓ト同ジカラントノ想像ヨリ、漢書ノ文ニ依リテ記シタル者ノアリシヲ、陳壽ガ取リテ、此ノ傳ニ插入シタルモノナルベシ。菅政友氏モ「此ノ一段ハ、全文敍次ノ例ニモ違ヒ、中ニ風俗不淫ノ語ハ、下文婦人不淫トイヘルニ重複セルナド、蓋シ此傳ノナレル後、更ニ他ノ一説ヲ取リテ、補入シタルモノト覺シク、イトイトミダルナル事多シ」ト云ヘリ。

黥面ノ事ハ、履仲紀ニ、阿曇ノ連濱子ノ死罪ヲ免シテ、墨(額刻ム刑)ヲ科セ給ヒシ事、又河内ノ飼部等ノ黥ノ氣ヲ伊弉諾ノ神ノ惡ミ給ヘリトテ、飼部ヲ黥クコトヲ止メ給ヒシ事、雄略紀ニ、菟田ノ人ノ面ヲ黥シテ鳥養部ト爲給ヒシ事、古事記安康天皇ノ條ニ、面黥老人山代之猪甘ナド見エテ、記傳ニ「黥は、罪ある人の面を刻て、墨を入るゝを云て、米佐久と訓む字なり。そは、目のあたりを裂ゆゑに、然云るなるべし。」又「黥者をば、皆諸ノ飼部とせられたりと見ゆ。但諸ノ飼部、皆黥者のみにてはあらざりけむ。さて此の黥を、面黥とも書き、ヒタヒキザムとも、メサクとも云る、面と云額と云目と云る、皆同じことなり。めさくと云ふも、實に目を裂には非ず。目の邊リを刻むなり」ト云ヒ、又菅氏ハ「諸ノ飼部ハ、モトヨリ賤シキ部ナレバ、黥キテ其ノ印トハシタル習慣ト知ラレタリ」ト云ヘリ。サレバ黥ハ、一種ノ刑、若クハ賤奴ノ印ニシテ、男子無大小ナド云ヘル一般ノ風俗ニハ非ズ。又文身トテ、身體ニ黥スル事ノ如キハ、絕エテ古書ニ見エタルコトナケレバ、其ノ誤リ著シ。菅氏ハ「皇國ニテハ、古來ヨリ黥ヲ賤シメ嫌ヘル趣ナルニ、筑紫國ニハ、却テ「後稍以爲飾、」或ハ「尊卑有差」ナドイヘルガ如キ一種ノ習慣モアリシト按ハル」トテ、琉球談琉球漫錄ニ見エタル、琉球國ノ女子ノ、手ニ黥スル事ヲ引キテ、「此ハ邪馬臺國ノ風俗、自ラ此地ニ存在シニテモアルベシ」ト云ハレタレドモ、琉球ノ黥ハ、女子ノミニシテ、魏志ノ趣ト異ナレバ、筑紫ノ風俗ノ殘レリトモ云ヒ難シ。會稽東冶ハ、漢書地理志ニ見エタル會稽郡冶縣ニシテ、或ハ東冶縣トモ云ヘリ。縣治ハ、今ノ福建福州府ノ地ナレドモ、其ノ東界ハ、浙江溫州府ノ東北ニ及ベリ。コヽニ此ノ方位ヲ擧ゲタルハ、倭國ノ文身ノ俗ノ、百粵ニ同ジキヲ以テ見レバ、倭國ハ、會稽ニ近キ故ニ、粵人ノ俗ノ傳染シタルナラント云ヘル意ナリ。

其風俗不淫ハ、下文ニモ、婦人不淫不妬忌トアリ。男子皆露紒、紒ハ音髻ニテ、結髮ノ義ナリ。露紒ハ結ヘル髮ノ露ハルヽニテ、冠ル物ナキヲ云フ。上代ノ男ノ裝ハ、美豆羅トテ、髮ヲ左右ヘ分ケテ、角ノ如ク結

綰ネタルコト、記傳六ノ十一丁ニ云ヘル如シ。山海經ノ郭璞ガ註ニ「其俗露項、」隋書北史ニ「頭亦無冠、但垂髮於兩耳上、」舊唐書ニ「百姓皆椎髻、無冠帶」ト云ヘルモ、皆露紒ノ義ナリ。以木緜招頭、木緜ハ、近代ニ弘マレル木綿ノ事ニハ非ズ。和名抄木ノ部ニ「杜仲陶隱居本草注云、杜仲、一名木緜、折之多白絲者也、和名波比未由美」トアル物ヲ云ヘルナリ。サレドモ杜仲ハ、皇國ニテ布ニ織リタルコト、物ニ見エズ。記傳八ノ三十八九丁ニ白丹寸手ノ條ニ、古語拾遺ナル「令天日鷲神、以津咋見神、穀木種殖之、以作白和幣是木綿也」又「穀ノ木ノ所生、故謂之結城郡、」又寶基本紀ノ「謂以穀木作白和幣、名號木綿」ヲ引キテ「木綿は、穀ノ木ノ皮以て織れる布にて、古へはあまねく用ヒたりし物なり。此レを布にすること、漢籍にも見えたり。和名抄に穀ハ加知木ノ名也と云ひ、字鏡にも、穀ハ楮也、加知乃木とあり。さて布にせしことは、いと古へのことにて、やゝ降りては、たゞ紙にのみして、布にすることは絶つと見えて、和名抄にも、穀紙は見えて、布のことは見えず。さて師は、この穀ノ字を、やがて由布と訓れき。さも有べし。然るを古書どもには、由布にはたゞ木綿ノ字をのみ用たるは、杜仲の一名を取れるなり。されど其は、穀を杜仲と思ひ誤れるにて、實に杜仲を用ヒたるには非ず」トアリ。然ラバ皇國ニテ用ヒタル布ハ、穀ノ木ノ皮ヨリ成レル者ナルヲ、魏人ハ又杜仲ト思ヒ誤リテ、木緜ト記シタルナラン。招頭ハ、菅氏云「招ハ、字典ニ揭也トアリ。木緜モテ頭ニカヽグルコトニテ、其ハ飾リノ爲ナルベシ。萬葉集十一相聞歌ニ、肥人ノ額髮結在染木綿ト見エ、大和ノ法華寺ニ童子ノ旗捧ゲタル古畫アリ。頭ハ髮ヲ左右ノ耳ノ邊ニ綰ネテ、ソレニ赤キ帛布ヤウノ小片ヲ結ビタリ。此等ヲ招頭トバイヘルニヤ。」其衣横幅ハ、菅氏云「我ガ上古ノ服制ノ、書ニ見エシモノ詳カナラネバ、横幅トイヘルハ、考ルニ由ナシ。法隆寺ニ傳ハリシ天壽國曼荼羅推古天皇二十九年ニ造レルモノニ、立チタル一人ノ男子アリ。其服ハ、下廣クシテ、筑後ノ國人形原ナル石ノ偶人ノ委ニ似タリ。丹靑モテ横サマニ彩リタルバ、横幅トモイフベキサマナレド、他ニ證ナケレバ、決メ難シ。」

但結束相連、略無縫ハ、身體ニクル／＼ト卷キテ、結ビ附ケタルノミニシテ、針モテ縫ヒ綴レル所ナシト云フ義ニテ、山海經ノ郭璞註ニ「衣服無針功」ト云ヘルモ、此ノ文ニ本ヅキタリト思ハル。サレドモ、古事記崇神天皇ノ段ニ「以閉蘇紡麻貫針、刺其衣襴、」應神天皇ノ段ニ「一宿之間、織縫衣褌及襪沓」、神功紀ニ「皇后勾針爲鉤、取粒爲餌、抽取裳糸爲緡」ナド見エテ、針モテ衣服ヲ縫ヘルハ、上代ヨリノ事ナレバ、魏志ニ記シタルサマハ、皇國ノ風俗ニハアルマジ。若クハ邊陲ノ地ニハ、カヽル風俗モアリシニヤ。

婦人被髮屈紒ハ、隋書北史ニ、婦人束髮於後トアリ。菅氏ノ説ニ「上古ノ女ハ、被リタル髮ノ末ヲ、項ノ邊ニテ屈メ束ネテ、散ラヌ樣ニモノシタルナリ。記ニ天照大御神丈夫ノ御裝束ヲ爲賜フコトヲ、「即解御髮纏御美豆羅」トアルハ、此ノ項ノ邊ニ束ネタル御髮ヲトキテ、ヤガテ男子ノ委ヲマネビテ、美豆羅ニ結ビカヘ給ヘル義ナリ」ト云ヘルハ、記傳ニ「上ッ代に結と云しは、本を一ッにあつめ擧て結て、其ノ末は後へ垂たりけむ」ト云ヘル説ニ愈リテ聞ユ。作衣如單被、穿其中央、貫頭衣之ハ、漢書地理志ニ、儋耳珠厓ノ男女一般ノ風俗トシテ記シタルヲ、婦人ノ事トシテ取リタルニテ、皇國ノ古代ノ風俗ニハ、カヽル衣服アリトモ覺エズ。

種禾稻紵麻蠶桑緝績モ、漢書地理志ノ文ニ因リタレドモ、此ハ皇國ニ固ヨリ有リシ事ニシテ、細紵縑緜モ、上代ヨリノ產物ナリ。細紵ハ紵布ノ上品ヲ云ヒ、縑ハ、釋名ニ、「縑兼也、其絲細緻、數兼于布絹也」トアリ。緜ハ、俗ニ云フ眞綿ナリ。其地無牛馬虎豹羊鵲ハ、漢書ノ「亡馬與虎」ノ文ニ因リテ、筆ノ序ニ牛豹羊鵲ヲ加タルナリ。虎豹羊ナキハ、サル事ナガラ、牛馬ノ有リシ事ハ、古書ニ明文アリ。又鵲ハ、播磨ノ國風土記讃容ノ郡船引山ノ條ニ「此山住鵲、世俗云韓國烏、栖枯木之穴、春時見、夏不見」ト云ヒ、本草綱目啓蒙ニモ、朝鮮ガラス、高麗ガラス、筑前筑後唐ガラス肥前等ノ名ヲ擧ゲタレバ、本ハ韓國ヨリ渡リ來シ鳥ニテ、上代ニハ無カ

リシナラン。但鵠ノ有無ハ、風土ヲ記スニ切要ナル事トモ見エザルニ、後漢書ハ、此ノ文ニ因リテ記シタルニ、章懷註ニ「鵠、或作鶏」トアレバ、コノ鵠字モ、鶏ヲ誤レルニハ非ズヤ。若鶏ナラバ、鶏ハ牛馬ト同ジク、皇國ニ上代ヨリ有リシ者ナレバ、魏志ノ文ハ妄ナリ。兵用矛楯木弓ハ、何レモ上代ヨリノ兵器ナレドモ、皇國ニテ殊ニ重ジタル刀ヲ擧ゲザルハ、イカニ。コレモ漢書ノ「兵則矛盾刀木弓弩」トアルヲ、筆ニ任セテ刪略シタルニテ、皇國ノ兵器ヲ善ク知リテ記シタルニ非ズ。木弓短下長上ハ、弓ノ中央ヨリ下ノ方ニ、弣ヲ付ケタルニテ、皇國ノ弓ノサマナリ。竹箭、或鐵鏃、或骨鏃モ、漢書ノ文ニ依レルナレドモ、皇國ノサマニモ合ヘリ。鐵鏃ノ事ハ、綏靖紀ニ「倭鍛部天津眞浦造眞麛鏃」ト見エ、又古事記允恭天皇ノ段、輕太子ガ兵器ヲ備作リ給ヘル所ニ「爾時所作矢者銅其箭之内」トアルヲ、記傳ニ「内ノ字は前を誤れるなり云々。銅とは、鏃は、凡て神代より、鐵以て造ることとなるを、今新に銅以て造れるなり」ト云ヘリ。骨鏃ハ、記紀ニハ見エザレドモ、東大寺獻物帳（天平勝寶八載）ニ、白黑交羽骨鏃箭ト云ヘルアリ。菅氏云「皇國ニテハ、當時鐵ヲ採ル術ノ精シカラデ、產スルコトモ少カリシカバ、骨モテ造レル鏃ヲモ交ヘ用ヒシモノト覺シク、勝寶ノ頃マデモ、ナホ其製ノ殘レル由ハ、獻物帳ニシルサレシニテモ思ヒヤラルヽナリ。骨ハ獸ノ骨ナルベシ」。

所有無與儋耳珠厓同ハ、此ノ一段ノ要領ニシテ、前條種々ノ妄謬ハ、皆此ノ一句ノ想像ヨリ出デタルナリ。然ルニ後ノ史家ハ、察セズシテ、後漢書晋書等、皆其ノ謬リヲ承ケタリ。然レドモ此等ハ、海外ノ風土ニ昧キガ故トモ云フベケレドモ、後漢書ニ、此ノ一句ヲ「與朱崖儋耳相近、故其法俗多同」ト書キ改メタルハ、東海ト南海トヲ一ツニシテ、方角ヲモ辨ヘザル記シザマナリ。後ノ人モ、之ニ心附カザルニヤ。隋書北史モ後漢書ニ因リテ、「與儋耳相近」ト記シタリ。

次ニ「倭地溫暖、冬夏食生菜、皆徒跣、有屋室、父母兄弟、臥息異處、以朱丹塗其身體、如中國用粉也、食飲用籩豆手食」。

倭地溫暖、冬夏食生菜ハ、後漢書ニ「土氣溫暝、冬夏生菜茹」ト改メタリ。此ハ筑紫ノ南方ヲ主ト云ヘルナルベシ。皆徒跣ハ下ザマノ者ノコトナラン。古事記應神天皇ノ條ニ沓襪ナド見エタレバ、國內ナベテ徒跣ナルニハアラズ。有屋室ハ、記紀ニ宮殿室ナドアリテ、石窟土窟ニ住メル土蜘蛛ナドノ外ハ、大抵宮室ヲ造リシナリ。父母兄弟臥息異處ハ、父母ト、諸子ノ夫婦ト、別室ニ臥息スルコトヲ云フ。後漢書註ニ引ケル沈瑩ガ臨海水土志ニ、夷州ノ俗ヲ記シテ「此夷、舅姑子婦、臥息共一大牀、略不相避、」隋書高麗傳ニ「父子同川而浴、共室而寢」、又琉球傳ニ「父子同牀而寢」ト云ヒ、其ノ外支那ノ書ニ、夷狄ノ風俗ヲカヽル有樣ニ記シタル者多カルヲ、皇國ノ風俗ハ之ト異ナルサマヲ云ヘルナリ。

以朱丹塗其身體ハ、皇國ニカヽル風俗ノ有リシ事ハ、物ニ見エネドモ、隼人等ガ遠祖ト言ヒ傳ヘタル火照命ガ、御弟火遠理ノ命ニ惚苦ラレテ、僕ハ今ヨリ以後、汝命ノ夜晝ノ守護人トナリテ、仕ヘ奉ラムト申セルコトヲ、神代紀海宮ノ段第四ノ一書ニ「兄著犢鼻、以赭塗掌塗面、告其弟、曰吾汚身如此、永爲汝俳優者云々」トアレバ、此ノ古傳ニヨリテ、熊曾ノ國ニハ赭ヲ塗ル風俗ノ起リシニヤ。又ハ其ノ風俗アルニヨリテ、此ノ古傳ヲ作リタルニモアルベシ。

食飲用籩豆手食、籩豆ハ、爾雅釋器ニ「竹豆謂之籩、木豆謂之豆」トアリ。竹木ヲ以テ造レル高坏ニシテ、支那ノ古代ニ、祭祀燕享ニ用ヒタル器ナリ。皇國ニテハ、カヽル器ヲ用ヒタルコト無ケレドモ、漢書地理志ニ、朝鮮ノ俗ヲ記シタルニ「其田民飲食以籩豆」トアリテ、朝鮮ニテハ、此ノ器ヲ用ヒタル由ナレバ、皇國ニテ坏椀ナドヲ用フルコトヲ、魏人ノ傳ヘ聞キテ、コレモ籩豆ナラント推シ量リテ、記シタルナルベシ。手食ハ、箸ヲ用ヒヌコトヲ云ヘルナレドモ、崇神紀ニ箸ノ墓ノ古傳アリテ、箸ヲ用フルハ古キ事ナレバ、コレモ

徒跣ト同ジク、下ザマノ風俗ヲ云ヘルナラン。

次ニ「其死有棺無槨、封土作冢、始死、停喪十餘日、當時不食肉、喪主哭泣、他人就歌舞飲酒、已葬、擧家詣水中澡浴、以如練沐、其行來渡海、詣中國、恒使一人不梳頭、不去蟣虱、衣服垢汚、不食肉、不近婦人、如喪人、名之爲持衰、若行者吉善、共顧其生口財物、若有疾病、遭暴害、便欲殺之、謂其持衰不謹」。

有棺無槨。槨ハ椁ニ同ジ。禮記檀弓ニ「棺周于衣、椁周于棺、土周于椁」トアリ。棺モ椁モ、皆木モテ造レル故ニ、其ノ字ハ木ニ從ヘリ。皇國ニハ、石椁ハ有リシカドモ、木椁ハ物ニ見エズ。古事記垂仁天皇ノ條「定石祝作」ノ傳廿五ノ六十六七丁「祝ノ字は、棺の誤なりと、師の云れたる、信に然るべし。草書より誤れるならむ。伊斯紀都玖理と訓べし云々。さて書紀神代ノ巻に、素盞嗚ノ尊云々柀可以爲顯見蒼生奥津棄戸將臥之具とあるに依るに、内ノ棺は、上代より木以テ造れりと見ゆれば、此に石棺とあるは、外ノ槨なるべし。なほ外なる總ての石構までをかけて、皆伊斯紀とぞ云けむかし云々。さて石棺を造る工は、世に舊よりも有リつらむを、此ノ御世に、更に其部を定められたるなり。此ノ御世に始めて、石棺を作れりと云にはあらず」トアリ。此ノ石槨ハ、貴人ノミニ限レル物ニシテ、平人ハ、今ノ世ノ如ク、木棺ノミヲ用ヒシ故ニ、棺アリテ槨ナカリシナリ。

封土作冢ハ、皇國ノ古ヨリノ風ナリ。

停喪十餘日ハ、十餘日ノ間、葬ラザルナリ。當時不食肉、喪主哭泣、他人就歌舞飲酒ハ、後漢書ニ「家人哭泣不進酒食、而等類就歌舞爲樂」ト書ケリ。意ハ異ナルコトナシ。喪ヲ停ムル間、歌舞スルコトハ、皇國ノ古俗ニシテ、古事記上巻天若日子ノ死タル時「天若日子之妻下照比賣之哭聲、與風響到天、於是在天天若日子之父天津國玉神、及其妻子聞而降來哭悲、乃於其處作喪屋、而河鴈爲岐佐理持、鷺爲掃持、翠鳥爲御食人、雀爲碓女、雉爲哭女、如此行定而、日八日夜八夜以遊也」トアル趣ニヨク合ヘリ。記傳十三ノ五十四丁ニ「遊也は、阿曾備伎と訓べし。遊とは、管絃歌舞たぐひを云て、樂ノ字に當れり云々。上ツ代には、殯ノ時も、むねと樂せしこと、此餘も、古書にあまた見ゆ。書紀ノ允恭ノ巻天皇崩坐し處に、新羅ノ王聞天皇既崩、驚愁之、貢之調船八十艘及種々樂人八十云々。泊于難波ノ津、則皆素服之云々、張種々樂器、自難波至于京、或哭或歌儛、遂參會於殯宮也、新羅は、戎狄ながら蕃國なれば、御國の禮を奉仕れるなり。天武ノ巻、天皇崩坐し處に云々、次に國々造等、隨參赴各誄之、仍奏種々歌舞、持統巻に、元年春正月丙寅朔、皇太子率公卿百寮人等、適殯宮而慟哭云々、奠華、膳部采女等發哀、樂官奏樂、二年冬十一月乙卯朔戊午、皇太子率公卿百寮人等與諸ノ蕃客々、適殯ノ宮而慟哭焉、於是奉奠、奏楯節儛云々。これも同天皇の大御殯の時なり。又繼體ノ巻に、近江の毛野臣が新羅より還さまに、津島にて死りしを、本郷に返へし葬るとて、淀川を船より上る時に、妻の哥に、比攞哿駄喩輔曳輔枳能朋樓云々などあり。喪葬令に、遊部とある者も、師は此ノ遊ヒをなす者ならむと云れき。義解の説は、誤なるべし さて喪に、加此樂せしは、何の所以ぞと云に、まづ人の死たるは、彼ノ天照大御神の天ノ石屋に隱坐て、世の闇夜になれりしに類たる故に、萬葉二に、天武天皇崩坐しことを、天ノ原石戸を開、神上上座奴とよみ、又三に、河内ノ王豐前鏡山に葬し時の哥に、豐國乃鏡山之石戸立隠爾計良思などよめるも、此意なおもへり。其時の故事をまねびて、哥樂て、其人を復此ノ世に還りたまへと招禱る意より起れり。そは鎭魂祭ノ儀にも、彼ノ古事をまねぶ儀あるにてさとるべし。然るを書紀には、たゞ八日八夜啼哭悲歌とのみ云て、樂のことを記されざるは、御國の古禮を忘れて、ひたぶるに漢ざまに書キなされたるものなり。悲歌とのみにては、古意に背ける物をや」トアリ。已葬、擧家、詣水中澡浴ハ、死人ニ觸レタル穢ヲ除カントテ、禊スル事ヲ云ヘルニテ、コレモ皇國ノ古俗ナリ。其ノサマハ、古事記伊邪那岐ノ大神ノ禊祓ノ段ニ委シク見エテ、記傳六ノ四十四丁ニ「美曾岐は身滌なり。下ノ文に迦豆伎而滌とあるを始めて、書紀に當滌去吾身之濁穢、また將盪滌身之所汚など見え、萬葉に潔身身秡などもあるを以テ知べし。今も除服などに、海川ノ邊に出て淸まはり、又許理とて、水浴ることとする

は、みな禊の意ばへなり」トアリ。練沐ハ、字書ニ、練ハ小祥服ナリトアリテ、彼ノ國ノ禮ニ、父母ノ喪ニハ一年ヲ過ギテ、小祥ノ祭ヲ行フ時、沐浴シテ練衣ヲ著ルナリ。皇國ノ禊トハ、心バヘ異ナレドモ、コレニ等シキ禮ナキ故ニ、其ノ沐浴スルコトノ似タルニヨリテ、練沐ノ如シト較ベタルナリ。晉書倭人傳ニ、此ノ以如練沐ノ四字ヲ、「自絜以除不祥」ト改メタルハ、皇國ノ禊ノ意ニ協ヘリ。

其行來渡海云々ハ、皇國ノ古俗トハ聞エズ。持衰ハ、旅行ノ吉善ナランコトヲ神ニ祈ル爲ニ、物忌スルコト、聞ユルニ、皇國ニテハ、神ニ仕フルニハ、身心ノ清潔ヲ務メタレバ、不梳頭、不去蟣虱、衣服垢汚ナドト云ヘルハ、全ク物忌ノ趣意ニ違ヘリ。サレドモ筑紫ノ邊陲ニハ、ソノカミ、カヽル風俗モアリシニヤ。今ハ考フベカラズ。若行者吉善、共顧其生口財物ハ、後漢書ニハ「若在塗吉利、則雇以財物」ト改メタリ。雇ハ、顧ヲ誤リタルニテ、雇以財物ニテハ、文義却テ穩カナラズ。

次ニ「出眞珠青玉、其山有丹、其木有柟杼豫樟楺櫪投橿烏號楓香、其竹篠簳桃支、有薑橘椒蘘荷、不知以爲滋味、有獮猿黑雉。」

眞珠ハ、白虎通ニ「海出明珠」、說文ニ「珠、蚌中陰精也」ナド見エ、蚌類ヨリ出ヅル珠ニシテ、古言ニハしらたまと云へり。其ノ中あこや貝ヨリ出ヅル者、最モ多キガ故ニ、あこやの珠トモ云ヒ、鰒ヨリ出ヅル者ヲバ、鰒珠トモ云フ。允恭紀ニ、赤石ノ海底ノ大鰒ヨリ眞珠ヲ得タルコト見エ、武烈天皇ノ大御歌ニハ、阿波寐之羅陀魔トアリ。後漢書ニ、コノ眞珠ヲ白珠ト改メタルモ、同ジ物ニテ、皇國ノ古言ノ意ニ同ジ。青玉ハ、勾玉管玉ナドノ色青キモノヲ云フ。古ハ、此等ノ玉ヲ緒ニ貫キテ、頭ニモ頸ニモ手足ニモ飾リタルナリ。

丹ハ、和名抄ニ「考聲切韻云、丹砂似朱砂而不鮮明者也、和名邇。」狩谷掖齋ノ箋注ニ「按萬葉集大神ノ朝臣奥守ノ歌、佛造眞朱、穗積ノ朝臣ノ歌、眞朱穿岳、眞朱並訓安加仁、蓋謂此、又諸國有地名丹生、以其地生是物得名也」トアリ。古事記ニ丹塗矢、丹摺袖ナドアル丹ハ、皆此ノ赤土ナリ。

柟ハ、爾雅釋木ニ「梅柟」トアル柟ノ字ニテ、俗ニハ楠ト書ケリ。說文ニモ「柟梅也、」又「梅柟也」トアレドモ、莊子山木篇ニ「柟梓豫章、」司馬相如ガ子虛ノ賦ニ「梗柟豫章、」山海經ニ「櫻柟豫章」トアルナド、常ニ豫章ト並べ稱スレバ、梅ニハアラデ、豫章ノ類ナリ。和名抄ニ「楠、和名本草久須乃岐、橡樟、日本紀讀同上」トアルヲ、掖齋ノ箋注ニ、證類本草、陸機草木疏等ヲ引キテ、柟豫樟二木同ジカラザルコトヲ辨ジタルハ、然ル事ニテ、柟ハ、今山楠ト云フ木ナリ。

杼ハ、和名抄ニ「杼、和名止知、莊子云、狙公賦杼、是也」トアリ。爾雅ニ「栩杼、」詩唐風ノ苞栩ヲ正義ニ「今柞櫟也、徐州人、謂櫟爲杼、或謂之爲栩」ナド見エタルニヨリテ、掖齋ノ箋注ニ「按、栩杼即櫟、今俗呼久奴木者、以充度知、不允」ト云ヘレドモ、コノ文ニ、杼ト櫟トヲ別ニ擧ゲタレバ、杼ハくぬぎニハアラデ、ヤガテとちナルベシ。又新撰字鏡ニ「橡、詳兩反、木實、止知」トアレドモ、橡ハどんぐりニテ、とちニ非ズ。其ハとちノ木理ヲ、古言ニきさト云ヘルニヨリテ、象ノ木ト云フ義ニテ、とちニ假リ用ヒタルナルベシ。

豫樟ハ、今ノくすの木ニテ、日本紀ニ屢見エタリ。古事記ニ石楠船トアルヲ始メトシテ、多ク楠ノ字ヲ書クハ、同ジ類ノ木ナルガ故ニ、假リ用フルナリ。

楺ハ、木ノ名ニハ見エズ。楙ノ譌リカ。楙ハ、爾雅ニ「楙木瓜、」郭注ニ「實如小瓜、酢可食、」和名抄ニ「和名本草、木瓜毛介」トアリテ、今ノぼけと云フ木ナリ。毛介ハ、漢名ノ轉音ナレバ、古名ハ旣ク失ハレテ、漢名モテ呼バレタルニヤ。又ハ木瓜ハ、彼ノ國ヨリ渡レル木ニシテ、楺ハ別ニ他ノ木ヲ云ヘルニヤ。

櫪ハ、櫟ニ同ジ。記紀萬葉ニハ、歷木ト書キテ、くぬぎト訓メリ。說文ニ「梂櫟實、」詩秦風苞櫟ノ疏ニ「櫟

其實梂橡也、」本草圖經ニ「橡實、櫟木子也」ナドアリ。橡實ハ、爾雅ノ疏ニ、皂斗、本草和名ニ、都留波美乃美トアリテ、俗ニどんぐりト云フモノナリ。

投ハ、柀ノ誤寫カ。柀ハ、爾雅ニ「柀、煔、」郭注ニ「煔、似松、生江南、可以爲船及棺材、作柱埋之、不腐、」釋文ニ「煔字、或作杉」トアリ。和名抄ニ「柀、日本紀私記云、末岐、今按又杉、一名也、見爾雅注」トアルヲ、箋注ニ「煔、上文擧訓須岐、源君分柀爲末岐、非是」ト云ヘリ。

橿ハ、和名抄ニ「橿和名加之」トアリ。今モ然云フ。古事記ニハ、橿原ヲ白檮原ト書キ、日本紀ニモ、檮ヲ柯之ト訓メル所アリ。俗ニハ、多ク樫ノ字ヲ用フ。畔田伴存ノ古名錄、加之乃木ノ條ニハ、物理小識ヲ引キテ、櫧ノ字ヲ當テタリ。

烏號ハ、風俗通ニ「烏號弓者、柘桑之林、枝條暢茂、烏登其上、下垂著地、烏適飛去、從後撥殺、取以爲弓、因爲烏號耳、文選吳都賦ノ劉注ニ「烏號、柘名、以爲弓」トアリ。柘ハ、說文ニ「柘桑也」トアルヲ、段玉裁ノ注ニ「當作柘、柘桑也、柘桑、桑之屬、古書並言二者、則曰桑柘、單言一者、則曰桑、曰柘、柘亦曰柘桑、如淮南注烏號云、柘桑其木堅勁、烏峙其上、是也、桑柘相似而別、見胡氏通鑑釋文辨誤、」和名抄ニ「柘、漢語抄云、豆美、」大和本草ニ「柘、俗ニ野桑ト云、」古名錄ニ「豆美、漢名柘、今名ヤマグハ」トアリ。コノ木ハ、出雲風土記ノ神門仁多飯石三郡ノ草木ニ見エ、又柘弓ハ、三代實錄元慶二年五月、「下符、令採備中國柘弓百枝、備後國百枝、」延喜式兵庫寮ノ條「凡踐祚大嘗會云々、其料、梓弓一張、長七尺六寸、槻柘檀准此」ナド見ユ。

楓香ハ、爾雅ニ「楓欇々、」郭璞注ニ「楓樹似白楊、葉圓而岐、有脂而香、今之楓香是也、」埤雅ニ「枝善搖、故字從風、葉作三脊、霜後色丹、謂之丹楓、其材可以爲式」トアリ。皇國書ニハ、古事記國讓ノ段ニ湯津楓、紀ニ湯津杜木ト書キテ、「杜木、此云可豆羅」ト注シ、古事記海ノ宮ノ段ニ、湯津香木ニ「訓香木、云加都良」ト注シ、萬葉七ニ、向岡之若楓木ナド見エ、又和名抄ニ「楓、和名乎加豆良、」「桂、和名女加豆良」トアルニツキテ、記傳十三ノ廿九丁ニ「楓と桂とは、近き類の木には非ず、甚異なるを、和名抄に、同ジ類の如く、牝牡を分て出せるは、元より同ジ類には非れども、名の同くて混はしき故に、中昔に、かりに牝牡と分ち云しなるべし。されど其は、殊に分ヶて云ときのことにこそあれ、常にはたゞ、二ッながら、加都良とのみぞ云けむ。故レ和名抄の外には、牝牡の名見えたることなし」トアリ。サテコヽニ引キタル記紀萬葉ノ加都良ドモハ、楓トモ、香木トモ書キタレバ、謂ハユル乎加豆良ニテ、支那ノ楓香ト同ジ類ナルベシ。然ルニ貝原氏ノ大和本草ニ「楓ハ、ソノ葉マコトニ白楊ニ似テ、兩々相對ス、加茂祭ニ用ルカツラ是ナリ。筑紫ニテモ、カツラギト云。其葉かへてヨリ大キニテ、花ハ、サヽゲノ花ノ如クニテ、三四月ニ開、形狀ハ、カラノ書ニ云ル楓ニ似タレドモ、紅葉セズ、香モ無シ。」記傳ニ「今考ふるに、賀茂祭に、葵と共に用ふる加都良は、信に香もなく紅せず、漢の楓には當らず。」「楓は、香木と云べき物に非ず。」古名錄木部大木類ニ「かつら、枇草紙漢名未詳、一名乎加豆良、」「楓、和產ナシ。今漢種ヲ傳ヘ種。靑楓ハ、葉三尖ニシテ、鋸齒アリ、不紅葉。丹楓ハ、葉三尖ニシテ、鋸刻ナク、葉薄ク、秋紅葉ス」ト云ヒテ、楓ト乎加豆良トヲ別テリ。香ノ有リ無シト、紅葉スルトセヌトノ違ヒハアリトシテモ、葉ノ白楊ニ似タルコトハ同ジキ由ナレバ、魏人ノ楓香ト見タルハ、乎加豆良ナリケンコト、疑ヒナシ。サテ以上ノ木ドモハ、皆皇國ニ多クアル物ナリ。

篠ハ、爾雅ニ「篠箭、」說文ニ筱ト書キテ、「箭屬、小竹也、」神功紀小竹ノ宮ノ註ニ「小竹、此、言之努、」又□□紀篠□□ノ註ニ「篠小竹也、此言斯奴、」又天武紀ニ、さゝなみヲ篠浪ト書キ、古事記萬葉集ニ、小竹ヲしぬトモ、さゝトモ讀ミ、和名抄ニ「蔣魴ノ切韻云、篠細々竹也、和名之乃、一云佐佐、俗用小竹二字、謂之佐佐」ト

アリ。簳ハ、張衡ガ南都ノ賦ニ「其竹則篠簳箛箠、」李善註ニ「簳小竹也、」和名抄ニ「唐韻云、篦、箭竹名也、和名乃、」塵添壒囊抄ニ「簳ハ、ヤガラ也、箭ニハク竹也、」大和本草ニ「矢箆竹ハ、節ヒキク直シ。肉厚ク、葉大ナリ。篠竹ノ類ナリ、」古名錄ニ「乃、漢名箭竹、（竹譜）今名ヤノダケ」トアリテ、「乃（箭竹）ハ、太キヲ云、之乃ハ細キヲ云」ト云ヘリ。コレラヲ合セ考フルニ、篠ハ、今云フしのたけニテ、簳ハ即箭竹ナリ。桃支ハ、蔓草類ノ省籐ニテ、今たうト云フ物ナリ。本草彙ニ「桃支、竹皮滑而黃、可以爲席」トアリ。蔓草ナレドモ禾本科ニ屬スル植物ナレバ、竹ノ類トスルモ、惡シカラズ。支那嶺南ノ產ニシテ、中土ニハ育タザル物ナレバ皇國ニモ產セズ。皇國ニハ、古ヨリ大竹ノ種類モアリテ、神代紀ニ筍ヲ抜キ噉ムコト、又五百箇竹林ナド見エ、和名抄ニ「辨色立成云、苦竹、加波多介、漢語抄云、淡竹、於保太介」ナド見エタルニ、小竹ノミヲ擧ゲ、殊ニ皇國ニ產セザル籐ヲ加ヘタルハ、疎謬ナリ。

薑ハ、今ノ生薑ナリ。和名抄ニ「生薑、和名久禮乃波之加美、俗云阿奈波之加美、」字鏡ニ「干薑、久禮乃波自加彌」トアリテ、吳ノ國ヨリ渡レル者ノ如ク聞ユレドモ、既ク神武天皇ノ大御歌ニ「加岐母登爾宇惠志波士加美久知比比久」トアレバ、上代ヨリ有リシ者ニテ、且食料トシテ種エ作リケン事著シ。狩谷氏ノ箋註ニ「按椒、古單呼波之加美、蓋波之加美良之省、波之者、謂䕲花也、今俗轉呼波勢留、如煞稻粟令米䕲花、名曰波勢、是也、加美良者、韮之古名、韮條辨之、椒子熟、則罅坼䕲花而核出、其皮味辛辣、與韮比、故名波之加美良、省云波之加美也、神武天皇御歌所云、波士加美、即謂椒也、又鯢魚、訓波之加美宇乎者、以是魚有椒氣也、是可以證單言波之加美者之爲椒也、本居氏、以神武天皇御歌波士加美爲薑者、未考皇國古無是菜也」ト辨ゼラレタレドモ、垣下ニ種エシト云ヘルハ、蔬菜ノ類ト聞ユレバ、薑ノ一種ハ、本ヨリ皇國ニアリシヲ、後ニ吳ノ薑ノ渡リキテ、其ノ種類ノ專ラ用ヒラレタルニゾアルベキ。又古名錄ニハ、菜部香蔬類ニ「波自加彌、（日本書紀）漢名薑、（本草）今名シヤウガ、」草部香草類ニ「久禮乃波之加美、（本草和名）漢名山薑、（本草）今名、伊豆縮砂、ヤマシヤウガ」トアリテ、タヾ波之加美ト云ヘルヲ、菜部ノ薑トシ、吳ノ波之加美ハ、異ナル部類ニ收メタリ。

橘ハ、和名抄ニ「兼名苑云、橘一名太知波奈」トアリ。第二十二章ニ委シク云ヘリ。

椒ハ、說文ニ「茮菉也、」本草和名ニ「秦椒、和名加波波之加美、」和名抄ニ「蜀椒、奈留波之加美、一云不佐波之加美、」古名錄ニ、木部香木類ニ「加波波之加美、（本草和名）漢名秦椒、（本草）今名サンセウ、」「奈留波之加美、（倭名類聚鈔）漢名、蜀椒（本草）今名、アサクラサンセウ」トアリ。

蘘荷ハ、和名抄ニ米加ト訓メリ。今ノめうがナリ。以上ノ四品ハ、滋味アル者トモ云ヒ難ケレバ、以爲滋味ト云ヘルハ、滋味ヲ助クルノ意ナルベシ。

獮ハ、獮猴ニシテ、皇國ノさるナリ。狩谷氏云「按說文、无獮字、樂記釋文、獮本作彌、則知古作彌猴、或作沐猴、見史記、或作母猴、見說文、皆一聲之轉、而彌連下字、從犬旁、作獮、後或省、作獮、遂與秋獮之獮字混」。

猿ハ、和名抄ニ「猨字、亦作猿、和名佐流」トアレドモ、箋注ニ、爾雅以下ノ諸書ヲ引キテ、「是猨、可訓手長猴、皇國不產」ト云ヘリ。

黑雉ハ、爾雅釋鳥ニ「秩秩海雉、」郭注ニ「如雉而黑、在海中山上、」正義ニ「此雉之色黑者、因其所在、以名之」トアレドモ、皇國ニ此ノ鳥アルコトヲ聞カザレバ、黑ノ字ハ、烏又ハ熊ナドノ誤寫ナルベシ。サルニテモ、皇國ニ古ヨリアリシ鳥獸ノ種類モ、多キコトナルニ、此等ノ二三種ノミヲ擧ゲタルハ、委シトハ云ヒ難シ。

次ニ「其俗擧事行來、有所云爲、輙灼骨而卜、以占吉凶、先告所卜、其辭如令龜法、視火坼占兆、其會同坐起、父子男女無別、人性嗜酒」。

卜ノ事ハ、記傳（四ノ四十一丁）ニ「中ごろよりは、卜は、たゞ神事にのみ用ることになれゝど、上ッ代には、萬の政にも、己がさかしらを用ひず、定めがたきことをば、皆卜て、神の御教を受て行ひ賜ひしこと、記中書紀其ノ外にも多く見えたり。」又天ノ石屋戸ノ段「召天兒屋命布刀玉命而、内抜天香山之眞男鹿之肩抜而、取天ノ香山之天ノ波波迦而、令占合麻迦那波而」トアル傳（八ノ三十丁ヨリ）ニ「肩を抜とは、其骨を抜取を云なり。」又「和名抄に、朱櫻波々加、一云邇波佐久良、又木具部に、樺木ノ皮ノ名、可以爲炬者也、和名加波、又云加仁波、今櫻ノ皮有之と見え、萬葉集六（十八丁）に、櫻皮纒作流舟とよみ、古今集物ノ名に、迦爾婆櫻あり。（源氏物語などに、加婆櫻といふも、これなり。）これらを合せて思ッに、此ノ木の本ノ名は、波々迦にて、迦爾婆は、皮ノ名なり。（加婆は、加爾婆の約りたるなり。）さて皮を専ら用るから、迦爾婆櫻と、木の名にもなれるなり。かゝれば和名抄に、邇波佐久良とあるは、今ノ本、加ノ字の脱たること著し。さて此に、此ノ木を取ルは、皮を燃して、彼ノ鹿の肩骨を灼む料なり。後世まで、此レを用ると見えて、臨時祭式に、凡年中御卜ノ料ノ波婆加ノ木ノ皮者、仰大和ノ國ノ有封社、令採進之とあり。」又「上ッ代の卜は、凡て右の如く、鹿の肩骨を用られたり。龜を用るは、漢のを學べる後のことなり。書紀崇神ノ巻に命神龜云々などあるは、たゞ文章に書るのみにて、實は是も鹿を用たるべし。卜部氏、もと壹岐ノ國より出づれば、彼ノ氏人ぞ、韓國より龜ノ卜は傳へけむ。欽明天皇十四年、百濟に仰て、卜書歷本などを献らしめたまひしこと、書紀に見ゆ。このころよりや、漢さまの卜を用ひられけむ。然るに書紀の釋に、龜兆傳と云書を引て、龜卜の神代よりある事の起を、こと〴〵しく云へれど、彼ノ書は、古へより傳はれる鹿の卜を廢て、龜卜をあまねく世に用ひしめむために作れる虛言にて、古書に非ること著し。さて遂に、鹿は廢て、もはら龜をのみ用らるゝことになれるは、いとも哀きわざなりかし。式などにも、卜ノ料には、龜甲のみ見えて、鹿骨は凡て見えず。そのかみ既く絶けるなるべし。さて龜になりても、波々迦をば、昔の如く用しと見ゆ。萬葉十四（七丁）に武藏野爾宇良敝可多也伎云々、（彼國豐島ノ郡に、占方と云郷ノ名も、和名抄に見ゆ。）かゝれば鄙には、やゝ後までも、鹿ッ卜の殘れるにや。又十五（二十五丁）に、由吉能安末能保都手乃宇良敝乎可多夜伎弖云々。さて此段の卜合は、思金ノ神の謀て思ひ得たる、種々の事の可否を、先卜問て後に、定メ行ハむとなるべし。凡て上ッ代は、萬ッの事みな然有き」トアリ。魏志ノ文ハ、此ノ趣ニ善ク合ヘリ。

父子男女無別ト云ヘルハ、イカヾ。彼ノ國ノ教ニ「父子有親、夫婦有別」ト云フハ、宜シキコトナレドモ、父子ノ分ハ、嚴ナルコト君臣ノ如クニシテ、殆ド其ノ親ヲ失ヒ、夫婦ノ別モ、人情ニ違ヘルマデ、極端ニ走リタレバ、皇國ノ父子夫婦親睦シテ、家室宗族ノ間ニ暌離ノ事ナキヲ見テ、無別トハ思ヘルニヤ。酒ノ事ハ、神代紀ニモ見エ、吉事ニアレ、凶事ニマレ、折ニフレテ、酒ヲ用ヒシ事ハ、上代ヨリノ風俗ナレバ、酒ヲ嗜マズトニハアラネドモ、支那人ト比較シテ、特ニ人性嗜酒ト云ヘルハ、イカガアラン。

此ノ條ノ下ニ、裴松之註ニ魏略ヲ引キテ、「其俗不知正歳四節、但記春耕秋收爲年紀」トアリ。其ハ年ノ始メモ、四季ノ始メモ、キハヤカニハアラデ、唯耕耘收藏ノ時節ニヨリテ、大ラカニ四季ニ分チテ、之ヲ一年トシタルヲ云フ。春耕秋收ハ、夏耘冬藏ヲ略キタルナリ。晉書倭人傳ニ「計秋收之時、以爲年紀」ト書キタルハ、秋ヲ以テ年ノ終リトシタル如ク聞エテ、違ヘリ。眞歷考ニ「あらたまの年の來經ゆき、かへらひめぐらふありさまは、はじめ終のきはゝなけれども、大穴牟遲少名毘古那の神代より、天のけしきもほのかに霞の立きらひて、和けさのきざしそめ、柳などももえはじめ、鶯などもなきそめて、くさ〴〵の物の新まりはじまる比をなむ、はじめとはさだめたりける云々。春のはじめは、すなはち年の始なれば、上にいへるごと

くにて、夏秋冬のはじめなかばすゑも、又そのをり〳〵の物のうへを見聞て知れりしこと、春のはじめと同じくて、天のけしき、日の出入かた、月の光の清さにぶさなどに考へ、あるは木草のうへを見て、此木の花さくは、その季のそのころ、その木の實なるは、そのときのそのほど、この草の生出るは、いつのいつごろ、その草の枯るゝは、いつのいつほどとしり、あるは、田なつ物畠つものにつきても、稻のかりどきになるはそのほど、麥の穗のあからむは、そのころといふごとくこゝろえ、あるは、鳥のとこよにゆきかへるを見、蟲の穴にかくれ出るをうかゞひなど、すべて天地のうらに、をり〳〵にしたがひて、うつりかはる物によりてなむ、某季のいつほどとはさだめたりける。さてしか一季の來經をば、たゞ三つに分いへるのみにて、そのほどの日次までを、いくかの日、いくかの日と、さだめいふことはなかりき。されば年のはじめ、季のはじめなども、きはやかに、某日よりとはなく、その日數、はたかならず、幾十日と、さだかにはあらずて、みな大らかになむ有ける」ト云ヘリ。魏略ノ文ハ、即コノ有樣ヲ簡略ニ云ヘルナリ。

次ニ「見大人所敬、但搏手以當跪拜、其人壽考、或百年、或八九十年、其俗、國大人皆四五婦、下戶或二三婦、婦人不淫、不妬忌、不盜竊、少諍訟、其犯法、輕者沒其妻子、重者滅其門戶、及宗族尊卑、各有差序、足相臣服、收租賦、有邸閣、國々有市、交易有無、使大倭監之、自女王國以北、特置一大率檢察、諸國畏憚之、常治伊都國、於國中有如刺史、王遣使、詣京都帶方郡諸韓國、及郡使倭國、皆臨津搜露、傳送文書賜遺之物、詣女王、不得差錯、下戶與大人、相逢道路、逡巡入草、傳辭說事、或蹲或跪、兩手據地、爲之恭敬、對應聲曰噫、皆如然諾。」

搏手以當跪拜ハ、古事記雄略天皇ノ條「一言主ノ大神手打受其捧物」ノ傳（四十二ノ十二丁ヨリ）ニ「手打は、物を得賜ふを歡喜賜ふ態なり云々。又物を受ヶ取るとて、拍ことあり云々」トテ、樂シク歡ブ心ヨリ拍ツト、歡ブニハ非ズ、タヾ物ヲ受取ルトテ拍ツト、二樣ノ例ドモヲ許多擧ゲ、サテ、「又貞觀儀式大原野ノ祭ノ儀に、次神馬四疋、走馬八疋、牽列神殿前、又神主就祝詞座、兩段再拜、大臣以下、共拜、讀祝詞了、兩段再拜拍手、平野祭儀に云々、皇太子以下、亦兩段再拜、拍手四段、江家次第、公卿勅使ノ儀に、次使以下、奉拜四度、了拍手、次四拜、又拍手などは、拜て拍なり」トアリ。又周禮春官大宗伯ニ「大祝辯九𢫬云々、四曰振動、」鄭玄註ニ「鄭大夫云、動讀爲董、書亦或爲董、振董以兩手相擊也」トアルヲ、陸德明釋文ニ「今倭人、拜以兩手相擊、如鄭大夫之說、蓋古之遺法」ト云ヘリ。此等ノ拍手ハ、多クハ神ヲ拜ム時ノ事ナレドモ、持統紀ニ「四年春正月戊寅朔日云々、皇后即天皇位、公卿百寮、羅列匝拜而拍手焉」ト見エテ、古ハ君ヲ拜ムニモ、手ヲ拍ツコトアリキ。日本後紀（第八）桓武天皇延曆十八年ノ條ニ「春正月丙午朔、皇帝御大極殿、受朝、文武官九品以上蕃客等、各陪位、減四拜爲再拜、不拍手、以有渤海國使也」トアルハ、渤海人ノ爲ニ、拍手ノ古禮ヲ停メタルナリ。此ノ古禮ハ、魏志ノ文ニ依レバ、神ト君トヲ拜ムニモ限ラズ、凡テ大人ヲ敬スルニモ用ヒタルナリ。

「其人壽考」ハ、皇國ノ風土ノ、他ニ優レテ和美ナルガ爲ナリ。今モ長壽者ノ多キコトハ、明治二十七年三月九日、大婚滿二十五年ノ祝典ニ、全國ノ耆老ニ金ヲ賜ハリタル時、八十以上九十未滿ノ者男八萬五千三百五十七人女十三萬三千四百二十八人合セテ二十一萬八千七百八十五人九十以上百歲未滿ノ者男二千六百〇二人女五千二百七十四人合セテ七千八百七十六人百歲以上ノ者男三十九人女百一人合セテ百四十人アリキ。二十六年ノ統計年鑑ニ見エタル全國ノ人口四千一百三十八萬八千三百十三人ニ比較スルニ、八十以上ノ人ハ百八十二人中ニ一人ヅヽアル割合ナリ。サレバ古代ノ風俗淳朴ナル頃ニハ、百年又ハ八九十年ニ至リシ者、今ノ割合ヨリモ多カリシナラン。サレドモ後漢書ニ（闕）

「大人皆四五婦、下戸或二三婦」ハ、大方然ル事ナリケン。婦人不淫不妬忌ハ、誠ニ皇國ノ美俗ニシテ、其例證ドモハ、古書ニ多ク見エタリ。彼ノ神語ト云ヒ傳ヘタル須世理毘賣ノ命ノ御歌ニ「八千矛の神の命や、吾が大國主こそは、男にいませば、打見る島の崎崎、搔見る磯の崎おちず、若草の妻持たせらめ。吾はもよ、女にしあれば、汝をきて、夫は無し。汝をきて、配偶はなし」トアルヲ見レバ、婦人ノ貞信ナルベキコトハ、上代ヨリ世ノ教トモナレリシナリ。

「不盜竊、少諍訟」。コレモ然アリシナリ。其犯法、輕者沒其妻子、重者滅其門戸トハ、罪輕キ者ハ、其ノ罰トシテ妻子ヲ取上ゲテ、奴婢トスレドモ、其ノ家名ヲバ絶タズ。罪重キ者ハ、其家名ヲ絶チテ、承ケ襲グコトヲ許サヾルナリ。人ヲ奴婢ニスル法ハ、上代ヨリ行ハレタル事ナルベケレドモ、魏志ノ時代ニ當レル御世ノ事ハ、古史ニモ委シカラザレバ、稍後ノ御世ノ事ヲ以テ證トセンニ、應神紀ニ、甘美内ノ宿禰、兄武内ノ宿禰ヲ讒シテ負ケタル時「天皇勅之、令釋、仍賜紀伊ノ直等之祖也」トアルハ、甘美内ノ宿禰ヲ奴ニシタルナリ。雄略紀十年水間ノ君、養鳥人ヲ獻リテ、己ガ罪ヲ贖ハンコトヲ請ヒ、同十一年「鳥ノ官之禽、爲菟田人ノ狗所嚙死、天皇黥面而爲鳥養部」、又信濃ノ國ノ直丁ト武藏ノ國ノ直丁ト罪アリテ、「仍詔爲鳥養部」ナドアル鳥養部モ、官奴ノ類ナルベシ。同十四年根ノ使主ノ大罪ヲ責メ給ヒシ詔ニ、「根ノ使主、自今以後、子子孫孫八十聯綿、莫預羣臣之例」ト宣ヒテ、遂ニ誅シ給ヒ、「命有司、二分子孫、一分爲大草香部民、以封皇后、一分賜茅渟縣主、爲負囊者」、顯宗紀元年「狹狹城山ノ君韓帒宿禰、事連謀殺皇子押盤、臨誅、叩頭、言詞極哀、天皇不忍加戮、充陵戸、兼守山、削除籍帳、隷山部ノ連」ナドアルハ、犯人ノ一族ヲ奴婢ニシタルナリ。

「宗族尊卑、各有差序、足相臣服」ハ、氏族志ニ「天祖立皇孫瓊瓊杵尊、爲葦原中國之主、詔天兒屋命天太玉命天鈿女命天明玉命石凝姥命、陪從侍衛焉、謂之五部神、又使天押日命天津久米命統領部兵、以飾戎備、各帥部屬、以修其職、天兒屋爲中臣連祖、天太玉忌部首祖、天鈿目、猿女君祖、天明玉、玉作連祖、石凝姥、鏡作連祖、而天押日之後、爲大伴連、天津久米之後、爲久米直、品部官姓之源、始見于此、（参取日本書紀古事記古語拾遺姓氏錄）太祖既定天下、大封功臣、始有國造縣主之號、及垂仁朝、又有縣造、是時物部石作部、賜姓曰連、土師部曰臣、鳥取部曰造、氏姓之法、自是而定矣、（参取日本書紀古事記舊事本紀姓氏錄及序縣造據太神宮儀式帳倭姫世紀。）若其品部、歷朝建置甚衆、號爲百八十部、諸部之長、命以造姓、謂之伴造、故當時擧内外臣僚、概稱曰臣連伴造國造、姓有尊卑、以定品秩、凡大小諸氏、各以其族相聯屬、分領部曲、世敍世族、以事朝廷、（参取日本書紀古事記舊事本紀姓氏錄大意）」。トアル有樣ヲ云ヘルナリ。

「收租賦、有邸閣」ハ、稻穀ノ貢物ヲ集メテ、邸閣ヲ立テ、貯ヘ置クナリ。邸閣ハ、邸ハ邸舍、閣ハ集韻ニ「庋藏之所」トアリ。屯田ヲ屯家トモ、屯倉トモ書ケルハ、屯田ノ地ニ家モ倉モアルカラノ事ニシテ、ソノ家倉ハ、即邸閣ナリ。三國志蜀後主傳ニ「十一年冬、（諸葛）亮使諸軍運米、集於斜谷口、治斜谷邸閣」、呉孫權傳ニ「呉遣衞將軍全琮、略淮南、決芍陂、燒安城邸閣、收其人民」、又「別遣從弟孫奐、治安陸城、修立邸閣、輦賫運粮、以爲軍儲」、魏延傳ノ注ニ魏略ヲ引キテ「橫門邸閣、與散民之穀、足周食也」、（魏ノ太和二年ノ事ナリ。）新唐書劉建鋒傳ニ「民得自摘山收茗算、募高戸、置邸閣、居茗、號八牀主人」、水經注ニ「洧水又東入汶倉城內、俗以是水爲汶水、故有汶倉之名、蓋洧水之邸閣耳」ナド見エ、何レモ穀物ヲ貯フル倉ノ義ナリ。又坻閣ト云フモアリ。周禮秋官野廬氏ノ條「凡道路之舟車轚互者、叙而行之」ノ鄭註ニ「舟車轚互者、謂於迫隘處也、車有轘轅坻閣、舟有砥柱之屬、其過之者、使以次叙之」、賈疏ニ「坻閣、道路之名也」トアリテ、坻閣ハ、山谷ノ險阻ナル所ニ設ケタル棧道ヲ云フ名ナリ。佩文韻府ニハ「坻同邸」トアレドモ、陸氏釋文ニ、「坻、徐之爾反」トアルニヨリ、校勘記ニ「段玉裁云、坻字、徐之爾反、則字作坻」ト云ヘレバ、棧道ノ坻閣ハ、正シクハ坻閣ニテ、邸閣トハ自ラ別言ナリ、混フベカラズ。

「國國有市交易有無」(闕)

大倭ハ、倭人中ノ大人ト云フコトニテ、倭ハ國名ニ非ズ、人種ノ名トシテ用ヒタルナリ。日韓古史斷ニ、コノ大倭ヲ皇朝ノ事ト見タルハ、筑紫ノ女王國ヲ、倭國ト云フニ對ヘテ、皇都ヲ大倭國ト云ヘリト思ヘルニテ、倭ヲ國名ト思ヒタルヨリ出デタル誤リナリ。

一大率ハ、女王ヨリ命ゼラレタル總督ナリ。治伊都國ハ、ソコニ駐劄スル事ニテ、ソコヲ治ムルニハ非ズ。ソコヲ治ムルニハ、伊都國王アルナリ。於國中有如刺史トハ、諸國ノ君長ノ上ニ、大率アル有様ハ、漢魏ノ世、諸郡守國相ノ上ニ、州ノ刺史アリテ、督察スルニ似タルヲ云フナリ。中外經緯傳ニ、刺史ノ下ノ王ノ字ヲ、上ニ附ケテ、有如刺史王ト讀ミ、日韓古史斷ニ、有如刺史王ト讀ミタルハ、漢文ニ慣レザル讀方ト謂フベシ。又或人ノ說ニ、女王卑彌呼ヲバ、筑紫ノ僞王ト認メナガラ、コノ一大率ヲバ、皇朝ノ宰ト見テ、後世ノ太宰帥ノ起原ナリト云ヘルハ、前後ノ文ヲ通觀セザル勝手ナル解釋ナリ。サテ王遣使云々ノ王ハ、伊都國王邪馬臺國王ハ、下文ニ女王トアレバ、コノ王トハ別ナリ。臨津搜露、傳送文書賜遣之物ハ、王遣使云々ト、ナリ。郡使倭國トノ兩方ニ係リテ聞ユレドモ、詣女王不得差錯ハ、郡使倭國ノミニ係リテ、王遣使云々ニハ係ラズ。コノ處、文勢稍穩カナラズ。恐ラクハ誤脫アラン。前文ニ、郡使往來ノ時、常ニ伊都國ニ駐リシ由見エタルハ、此ノ大率ガ、臨津搜露云々ノ事アルガ爲ト聞ユレバ、女王ノ勢力ハ更ニモ云ハズ、大率ノ權威ノ程モ思ヒヤラル、ナリ。

「下戸與大人云々」ハ、恭敬ノ狀ヲ形容シタルナリ。古事記安康天皇ノ段ニ大日下王四拜トアル所ノ傳（四十ノ三四丁）ニ云「拜と云は、書紀推古ノ卷ノ歌に、烏呂餓彌弖菟伽陪摩都羅武とある、私記に、謂拜爲乎加無言乎禮加々無也といへり 呂を省ける言にて、身を屈めて匍伏よしなり。萬葉三十三丁に、四時自物伊波比拜 四時は鹿、伊は發語なり とあると、同二三十五丁に、鹿自物伊波比伏管、三三十七丁に、十六自物膝折伏などあとを合せて、其狀を知ルべし。吾徒長瀨ノ眞幸が云ク、上ツ代の拜禮の儀は、今世俗人の禮を爲ると云爲狀の如く、俯て頭を下げて、兩手を衝て拜みしなるべし。神代紀一書に、彥火火出見尊海宮にして云々、於中床則據其ノ兩手と見え、推古紀十二年の詔に、凡出入宮門、以兩手押地、兩脚跪之越梱則立行と見え、漢ふみ魏志の皇國ノ傳にも、傳辭說事、或蹲或跪、兩手據地、爲之恭敬と云り。此等を見るに、手を據を敬ヒとしたりしこと知られたり。然るに續紀に、文武天皇慶雲元年正月、始停百官跪伏之禮とある、是よりぞ、朝廷の拜は、漢風になれりけむ。然れども同四年十二月の詔に、往年有詔、停跪伏之禮、今聞內外廳前、皆不嚴肅、進退無禮、陳答失度云々、宜自今以後、嚴加糺彈、革其弊俗、使靡淳風とあるを見れば、上代よりならひ來し禮の止がたかりしなり。官人等すら然れば、況て民間の拜は制もなくて、今に至るまで、上代のまゝに兩手據地跪伏す拜の傳はり來ぬるにて、かの笏を持て起居して拜むは、中々に後に漢風をまねび賜へるものなり。今の民俗の拜ミぞ上古の拜ミにはありけると云り。まことに然ることゝおぼゆ」。

「對應聲曰噫」ハ(闕)

次ニ「其國本亦以男子爲王、住七八十年、倭國亂相攻伐、歷年、乃共立一女子爲王、名曰卑彌呼、事鬼道、能惑衆、年已長大、無夫壻、有男弟、佐治國、自爲王以來、少有見者、以婢千人自侍、唯有男子一人、給飲食、傳辭出入、居處宮室、樓觀城柵、嚴設、常有人持兵守衞、女王國東、渡海千餘里、復有國、皆倭種云々、參問倭地、絕在海中洲島之上、或絕或連、周旋可五千餘里」。

「倭國亂」ハ、皇國全體ヲ指セルニ非ズ、筑紫ノ地方ニ爭亂アリシナリ。此ノ亂ハ、魏ノ景初中ヨリ幾年ホド前ナルカハ、魏志ノ文ニテハ見エズ。後漢書ニハ「桓靈間、倭國大亂云々」トシタレドモ、桓帝ノ末、靈帝

ノ初ノ頃ハ、卑彌呼ノ死シタル魏ノ正始八年ヨリ八十年バカリ前ニ當リテ、年代餘リニ隔タレルニ似タリ。サテ卑彌呼ノ起リシハイツノ頃ニモアレ、景初正始ノ間、魏ニ朝献シタルハ、首卷ノ考ニ據リテ推セバ、崇神天皇ノ御世ニ當レリ。

卑彌呼ハ、熊曾ノ女酋ノ名ナリ。馭戎慨言ニ「一女子云々とは、まさしく息長帶姫ノ尊の御事を、三韓などよりひがことまじりに傳へ聞奉りてかけるものゝ。卑彌呼は、姫兒と申す事にて、神代ノ卷に火之戸幡姫兒千々姫命、また萬幡姫兒玉依姫命などある姫兒に同じ。姫を比彌といへる例も、古きふみに見えたり。さればこそたふとみて、御國人のつねにかく申せしを、韓人などの聞て傳へしを、御名と心得しなるべし」。中外經緯傳モ、コノ説ニ從ヒ、「姫と卑彌と通はし云へるも、古言なり。釋日本紀に引れたる上宮紀に、皇女たちの中に、某比賣と申せる中に、大中比彌、田宮中比彌、阿那爾比彌、布利比彌ノ命、また上宮聖德法王帝説の中に載たる古文に、吉多斯比彌乃彌已等、加斯支移比彌乃彌已等など、なほあり。神名式阿波國に、波爾移麻比彌神社とも見えたり。かくて按るに、當時皇后、よろづまつりごちておはしましけれど、實にはおのづから應神天皇の御世なれば、しかすがに皇后の御事を、須賣良美古登と申すべきにあらず、故レ別に崇めて、比味呼と申奉れるを、女子の天皇にておはす御名と心得て、然は記せるものなりけり」トアリ。サレドモ古史徵第三十七段ニ「記傳に、神代紀の一書どもを引キて、栲幡千々姫兒、萬幡姫命、火之戸幡姫兒、千々姫ノ命など有ルを、姫兒と訓をつゞけて、一ツノ名とせられ、また高皇產靈ノ尊ノ兒、萬幡姫兒、玉依姫命と書連けたるを、萬幡姫兒玉依姫命と訓て、豐秋津師比賣命の亦ノ名とせられ、馭戎慨言にも云々と云れしは、違へり」ト云ヘルハ、實ニ然ル事ニテ、姫兒ト云フ稱ハ、物ニ見エタルコト無ケレバ、卑彌呼ヲ皇后ノ尊稱トスルハ、據ナキ説ナリ。

宮室ハ、前文ニ室屋トアルヨリハ廣大ナル家ヲ云ヘルナリ。皇國言ニハ、宮トモ殿トモ御舍トモ云ヒテ、記紀ニハ、神代ヨリ見エタリ。樓觀ハ、高殿ヲ云ヘルニテ、應神紀ニ「天皇登高臺而遠望」、仁德紀ノ詔ニ「朕登高臺而以遠望之」、古事記仁德天皇ノ段ニ「天皇坐高臺、望瞻其黑日賣之船出浮海」ナドアル高臺ハ、即樓觀ナリ。雄略紀ニ「天皇命木工鬪雞御田、始起樓閣」トアレドモ、コハイト高キ高殿ヲ作リ給ヘルニテ、高殿ハコノ時ニ始マレルニハ非ズ。城柵ハ、城ハ古言ニきト云ヒ、柵ハ垣ノ類ヲ云ヘルナリ。神武天皇ノ御歌ニ「宇陀能多加紀爾云々」トアルヲ、記傳十九ノ十四丁ニ「多加紀爾は、契冲、高城になりと云る、然なり。紀とは必しも後ノ世の城の如、したゝかならねども、かりそめに垣ゆひ廻らし構へたる處などをもいふなり」トアリ、記傳三十九ノ二十四丁ニ「白檮原ノ宮段ノ大御歌、高津ノ宮ノ段ノ大御歌、書紀顯宗ノ卷に云々などある高城は、皆山を云るなり。白檮原ノ宮の大御歌の處に、前に注したる説はわろかりき彼レをもたゞ山と見べし」トテ、前説ヲ取消シタレドモ、余ハナホ前説ヲ穩カナリトス。サテ卑彌呼ハ、一方ニ雄據シテ、宮室樓觀ナドハ、倭ノ京ニモ劣ラヌバカリニ作リ設ケ、又能ク漢國ニ交通シテ、彼ノ國ノ工藝ヲ傳ヘタルベケレバ、城柵ノ如キハ、上國ニモ有ラザルシタヽカナル者ヲ設ケタリ。古事記小碓命西征ノ條ニ「到于熊曾建之家見者、於其家邊、軍圍三重、作室以居」トアルニ思ヒ合スベシ。

「女王國東、渡海千餘里、復有國、皆倭種」トハ、大倭豐秋津島伊豫ノ二名ノ島淡路島ナドヲ總ベテ云ヘルナリ。渡海千餘里ハ、筑紫ヨリ難波津ナドニ至ル海路ヲ云ヘルニヤ。又ハ伊豫ノ島ニ至ル海路ヲ、例ノ大キク云ヘルニモアルベシ。周旋可五千餘里、本居氏ノ云ヘル如ク、筑紫ノ島ノ周圍ヲ云ヘルナリ。

次ニ「景初二年六月、倭女王遣大夫難升米等詣郡、求詣天子朝献、太守劉夏、遣吏將送詣京都、其年十二月、詔書報倭女王曰、制詔親魏倭王卑彌呼、帶方太守劉夏、遣使送汝大夫難升米次使都市牛利、奉汝所献男生口四人女生口六人斑布二匹二丈以到、汝所在踰遠、乃遣使貢献、是汝之忠孝、我甚哀汝、今以汝爲親魏倭王、假金印紫綬、裝封付帶方太守假授、汝其綏撫種人、勉爲孝順、汝來使難升米牛利涉遠、道路勤勞、今以

難升米、爲率善中郎將、牛利爲率善校尉、假銀印青綬、引見勞賜遣還、今以絳地交龍錦五匹絳地縐粟罽十張蒨絳五十匹紺青五十匹、答汝所献貢直、又特賜汝紺地句文錦三匹細班華罽五張白絹五十匹金八兩五尺刀二口銅鏡百枚眞珠鉛丹各五十斤、皆裝封付難升米牛利、還到錄受、悉可以示汝國中人使知國家哀汝、故鄭重賜汝好物也、正始元年、太守弓遵遣建中校尉梯儁等、奉詔書印綬、詣倭國、拜假倭王、并齎詔、賜金帛錦罽刀鏡采物、倭王因使上表答謝恩詔、其四年、倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪狗等八人、上献生口倭錦絳青縑緜衣帛布丹木弣短弓矢、掖邪狗等拜率善中郎將印綬、其六年、詔賜倭難升米黃幢、付郡假授、其八年、太守王頎到官、倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和、遣倭載斯烏越等詣郡、說相攻擊狀、遣塞曹掾史張政等、因齎詔書黃幢、拜假難升米、爲檄告喩之、卑彌呼以死、大作冢、徑百餘步、殉葬者奴婢百餘人、更立男王、國中不服、更相誅殺、當時殺千餘人、復立卑彌呼宗女壹與、年十三爲王、國中遂定、政等以檄告喩壹與、壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人、送政等還、因詣臺献上男女生口三十人、貢白珠五千孔青大句珠二枚異文雜錦二十匹」。

景初二年ハ、魏ノ明帝即位十二年、我ガ紀元八百九十八年ニシテ、仲哀天皇ノ崩リマセル壬戌ノ年ヨリ百廿四年前、崇神天皇ノ崩リマセル戊寅年ヨリ二十年前ナリ。正始元年ハ、魏帝曹芳ノ年號ニテ、景初二年ノ翌翌年ナリ。魏京洛陽ト帶方郡トノ間ハ行程甚遠キガ故ニ、難升米等洛陽ニ詣リテ帶方ニ還ルニ、一年餘ヲ費シタリト見エテ、是ノ年ニ至リテ、太守ヨリ吏ヲ發シ、景初ノ詔書印綬賜物等ヲ齎シ、使者ヲ送リテ熊曾ニ到レルナリ。

熊曾ヨリ魏ニ遣リタル信物ノ中ニ、班布倭錦絳青縑緜衣帛布異文雜錦ナドアルヲ見レバ、コレラノ種々ナル織物ハ、皇國ニテ、上代ヨリ産シタルコト著シクシテ、呉織漢織ドモノ渡リ來シ前ヨリ、既ニ錦織ナド云ヘル精好ノ品モ有リシナリ。丹木弣短弓矢ハ、赤キ木ヲ以テ弣ヲ飾レル短弓ト、ソレニ副ヒタル矢トナリ。但皇國ハ、古ヨリ大弓ヲ以テ名高キニ、短弓ヲ遣リタルハ、イカヾ。白珠ハ即眞珠、孔青大句珠ハ孔(アナ)ノ青キ大ナル勾玉ナリ。孔ノミ青キニハアラネドモ、薄青キ玉ハ、其ノ孔ノ殊ニ青ク見ユル故ニ、カク名ヅケタルニヤ。

狗奴國ハ、前文ニ女王國ノ南トアレドモ、南ハ東ノ誤リナルベキコト、菅氏ノ說ヲ引キテ言ヘリ。

「大作冢云々」トアル事ニツキテ、襲國僞僭考ニハ「從來高城郡水引鄕五臺村中山の巓にある陵冢を、瓊々杵ノ尊可愛ノ山陵と云へど、疑あり。可愛は、頴娃郡ならざるべからず。高城郡は、相遠かりて、地境續かず。恐らくは、是れぞ卑彌呼の冢にやあらん。其の廣大なるさま、又左右にも冢あるは、彼の殉死の合葬せしものなるも知るべからず」。日韓古史斷ニハ「噌唹城には、古陵墓あること、鹿兒島外史麑島名勝志に見ゆ。是れにやあらん」ト云ヘレドモ、何レモ確證ナシ。

晉書九十七四夷傳倭人ノ條ニ云、「宣帝之平公孫氏也、其女王遣使、至帶方朝見、其後貢聘不絕、及文帝作相、又數至、泰始初、遣使、重譯入貢」。宣帝ハ魏ノ大臣司馬懿ノ追號、文帝ハ懿ノ子司馬昭ノ追號ナリ。司馬懿ノ遼東ノ公孫淵ヲ滅シタルハ、景初二年秋八月ノ事ナレバ、其女王遣使トアルハ、卑彌呼ヨリ難升米ヲ遣セルヲ云フ。其後貢聘不絕ハ、正始中三回ノ遣使(二回ハ卑彌呼ノ使、一回ハ壹與ノ使)ヲ指セルナリ。司馬昭ノ魏ノ相トナレルハ、曹髦元帝ノ世、泰始ハ昭ノ子ナル晉ノ武帝ノ年號ナリ。「數至」マタ「重譯入貢」ト云ヘルハ、壹與ノ使ナルベシ。同書武帝紀ニハ、泰始二年ノ處ニ「冬十一月已卯、倭人來献方物」トアリ。泰始二年ハ、紀元九百二十六年ニシテ、崇神天皇崩御ノ年ヨリ八年後ニ當レリ。コレヨリ後百四十餘年ノ間ハ、皇國ニ關スル事支那ノ史ニ見エタルコトナシ。

サテ卑彌呼ハ、熊曾ニ雄據シテ、擅ニ筑紫ノ全島ヲ役屬シタル有樣ナリシニ、當時皇朝ノ御稜威ハ、未ダ西陲マデハ及バザリシカバ、西陲ノ形勢ハ、上國ニ達セズシテ、國史ニモ更ニ記載ナカリキ。景行天皇ノ御世ニ至リテハ、熊曾ノ勢力モ稍減ジテ、僅カニ島ノ南面ナル大隅薩摩ノ地ニ跋扈スルノミニシテ、北部ノ諸國ハ、既ニ熊曾ニ從ハズナリシコトハ、景行紀ニヨリテ知ルベシ。又熊曾ハ、女王國ト名ニサヘ負ヒタレドモ、女王ノ君臨モ長クハ續カズシテ、景行天皇ノ時ニハ、男酋ノ國トナリシト見エテ、景行紀ニ「襲國有厚鹿文迮鹿文者、是兩人熊襲之渠帥者也」又「熊襲有魁帥者、名取石鹿文、亦曰川上梟帥、」古事記ニ「熊襲建兄弟二人」トアルナド、何レモ男子ノミナリキ。然レドモ筑紫ノ島ニハ、女酋ヲ尊ブ習俗ノ有リシト見エテ、景行紀ニ云「到周芳沙磨時、天皇南望之、詔羣卿曰、於南方煙氣多起、必賊將在、則留之、先遣多臣祖武諸木、國前臣祖菟名手、物部君祖夏花、令察其狀、爰有女人曰神夏磯媛、其徒衆甚多、一國之魁帥也、聆天皇之使者至、則拔磯津山賢木、以上枝挂八握劍、中枝挂八咫鏡、下枝挂八尺瓊、亦素幡樹于船舳、參向而啓之曰、願無下兵我之屬類、必不有違者、今將歸德矣云々」、周芳ノ娑磨ハ、今ノ周防ノ國佐波ノ郡ナリ。一國之魁帥也トハ、筑紫ノ國ノ中ニテ、一地ノ酋長タルヲ云フ。磯津山ハ、河田羆氏ノ西征地理考ニ、「今企救郡貫山、一名シハツ山是也」トアリ。「又到速見邑、有女人、曰速津媛、一處之長、其聞天皇車駕、而自奉迎之云々」速見ノ邑ハ、今ノ豐後ノ國速見ノ郡ナリ。速津媛ノ事ハ、豐後ノ國風土記速見ノ郡ノ條ニモ「昔者纏向日代宮御宇天皇、欲誅玖磨贈、幸於筑紫、從周防國佐婆津發船而渡、泊於海部郡宮浦時、於此村有女人、曰速津媛、爲其處之長、即聞天皇行幸、親自奉迎云々、因斯名曰速津媛國、後人改曰速見郡」ドアリ。景行紀ニ又「天皇將向京、以巡狩筑紫國、始到夷守、是時於石瀨河邊、人衆聚集、於是天皇遙望之、詔左右、曰其集者何人也、若賊乎、乃遣兄夷守弟夷守二人令覩、乃弟夷守還來而諮之曰、諸縣君泉媛、依献大御食而其族會之」夷守ハ、今ノ日向國西諸縣郡小林郷ナリ。「到八女縣、則越藤山、以南望粟岬、詔之曰、其山峯岫重疊、且美麗之甚、若神有其山乎、時水沼縣主猨大海奏言、有女神、名曰八女津媛、常居山中、故八女國之名、由此而起也」八女ノ縣ハ、今ノ筑後國上妻下妻二郡ナリ。藤山ハ、今御前嶽ト云ヒテ、御井郡ト下妻郡トノ界ニアリ、水沼ノ縣ハ、今ノ筑後ノ國三潴ノ郡ナリ。豐後風土記日田ノ郡ノ條ニ「昔者纏向日代宮御宇大足彦天皇、征伐球磨贈於凱旋之時、發筑後國生葉行宮、幸於此郡、有神名曰津媛、化而爲人、參迎辨申國消息、因斯曰久津媛之郡、今謂日田郡者訛也」上ノ津媛ノ上ニ、久ノ字落チタルカ、生葉ハ、景行紀ニ的邑トアリ、今ノ生葉ノ郡ナリ。日田ノ郡、今モ然云フ。肥前國風土記松浦郡賀周ノ里ノ條ニ「昔者此里、有土蜘蛛、名曰海松橿媛、纏向日代宮御宇天皇巡國之時、遣陪從大屋田子、誅滅云々」、杵島ノ郡孃子山ノ條ニ「同天皇行幸之時、土蜘蛛八十女、又有此山頂、常捍皇命、甚無禮、即誅之、因曰浮穴郷」、神功紀ニ「轉至山門縣、則誅田油津媛、時田油津媛兄夏羽、興軍而迎來、然聞其妹被誅而逃之」山門ノ縣ハ、今ノ筑後ノ國山門郡ナリ。ナド見エ、又豐後風土記日田郡五馬山ニ、土蜘蛛五馬媛、肥前風土記佐嘉ノ郡ニ、土蜘蛛大山田女、狹山田女ナドモアリ。此等ノ傳説ニハ、信ケ難キコト多ケレドモ、當時ノ風俗ニ、女酋ヲ重ンジタル事實アリシニ由リテ、カヽル傳説モ起リタルナリ。此ノ風俗ハイカナル原因ヨリ生ジタルカハ知ルベカラザレドモ、卑彌呼壹與等ガ、國人ニ畏服セラレタルハ、其ノ英略アルガ爲ノミニハアラデ、此ノ風俗アリシニモ由レルナルベシ。然ラズバ、又卑彌呼ノ英略ヲ以テ、國人ヲ服セシヨリシテ、人民自ラ女酋ヲ重ンズル心ヲ生ジ、遂ニ筑紫ノ各地ニ、女酋ノ興起スルニ至リシヤモ知ルベカラズ。

コノ卑彌呼ハ、古代ノ女豪傑ト聞ユルガ上ニ、日本紀ノ神功皇后攝政ノ御世ハ、恰モ卑彌呼ノ時代ニ當レルガ故ニ、卑彌呼ヲ指シテ即我ガ姫尊ナリト云ヘル人多シ。既ニ日本紀ノ舊本ニハ、神功紀ノ注ニ、魏志倭人傳ト晉ノ起居注トヲ引キテ、卑彌呼等ガ魏ニ朝貢シタル事ドモヲ記シタルハ、卑彌呼ヲコノ皇后ト思ヘルガ故ナリ。其ハ「三十九年、是年也、大歲己未」ノ注ニ「魏志云、明帝景初三年六月、倭女王遣大夫難斗米等、詣郡、求詣天子朝獻、太守鄧夏、遣吏將送詣京都也」斗ハ、魏志ニ升ト書キ、鄧ハ劉ト書ケリ。四十年ノ注ニ「魏志云、正始元年、

遺建忠校尉梯携等、奉詔書印綬、詣倭國也」（魏志ニ、忠ハ中ト書キ、携ハ儁ト書ケリ、）四十三年ノ注ニ「魏志云、正始四年、倭王復遣使大夫伊聲者掖耶約等八人上献」（魏志ニ、者ハ耆ト書キ、約ハ狗ト書ケリ。）六十六年ノ注ニ「是年、晋武帝泰初二年、晋起居注云、武帝泰初二年十月、倭女王遣重譯貢献」トアリ。（泰初ノ初ハ、皆始ノ誤リナリ。）晋ノ起居注ハ、舊唐書經籍志ニ「晋太始起居注二十卷、李軌撰」ト見エ、新唐書通志ナドニモ見エタル書ナリ。馭戎慨言ニ、コノ事ヲ論ジテ「後の人の魏志をよみて、その語をかたはらへかきいれおきしを、又後にうつす人の、あやまちて、正しく本文のごとかきなしたる物にて、さらにもとよりの文にはあらざること、そのかきざまをもてもさとるべし。すべて書紀には、小書にあだし國のふみを引て、本文のかはり（異）をことわりなどせる例こそあれども、たゞ某年とのみいひて、からふみを引〃ことは、例もことわりも、さらになきことなり。又かの三十九年の所に、是年也大歳巳未とあるも、もとよりの文にあらざるしるしなり。すべて大歳云々とは、御代〳〵のはじめの年の所にのみこそしるせる例なれ、かゝるところには、さらに例なき物をや。さて四十三年のかたはらに、清本一向无之とかけるは、三十九年云々をもあはせて、すべてなしとにや。又四十三年のみをいへるにや。いづれにまれ、なきが正しき本なることはさら之」ト云ヘリ。此等ノ文ハ、紀ノモトヨリノ物ニハ非ズシテ、後人ノ攙入ナルベキ事ハ、サルコトナガラ、其ノ攙入ハ、イト古キ事トゾ思ハルヽ。其ノ故ハ、晋ノ泰始中ノ事ヲ記スニ、唐ノ太宗御撰ノ晋書ヲ引カズシテ、今ノ世ニ傳ハラザル晋ノ起居注ノ文ヲ引キタレバナリ。

「神功皇后ノ御世ハ、首卷ニ云ヘル如ク、東晋ノ世ニ當リタレバ、卑彌呼ノ皇后ニ非ザルハ論ナキコトナレドモ、既ニ紀注ノ説アリテ、之ニ附加スル人モ多ケレバ、猶一辨ヲ費サヾルベカラズ。本居氏モ、卑彌呼ヲ皇后ノ尊稱ト見タル故ニ、「かの筑紫なりしものゝ、おのれ姫尊之といつはりて、魏王が使をも受つるなり」ト云フ説ヲ立テ、猶其ノ説ヲ確メンガ為ニ、彼ノ「自爲王以來、少有見者云々」ト云ヘルヲ引キテ、「これも、かのつくしにていつはりしものゝ、おのれまことには男にて、女王にあらざるが故に、かの魏の使に、ただにはえあはで（不背面見）、帳などたれて、物ごしにぞあへりけむ（隔相見）。其時にいつはりて、女王はをさ〳〵人に見え給ふことなし、此國人にあひ給ふも、常にかくのみこそあれなどいはせしそらごとを、其使は誠と思ひて、國にかへりても、しか語りし之」ト、芝居メキタル解説ヲ下シタリ。サレドモ此ノ時、若神功皇后ノ御代ナリセバ、新羅高麗ハ皆屯家ノ國トナリテ、貢調ノ船ハ、舵檝乾サズ、皇朝ノ稜威諸韓ニ被リタレバ、韓土ニ密接シテ、倭韓ノ接應ヲ掌レル帶方ノ官吏ハ、韓人ノ言ヲ聞キテモ、皇國ノ事情ニ少シハ通ズベシ。然ルヲ其ノ官吏等、幾度トナク、筑紫ノ酋長ニ欺カレテ、之ヲ倭女王ト誤リ、又使ニ充テラレタル梯儁張政等モ、皆僞女王ノ國ニ至リテ、之ヲ大和ノ京ト誤リタランコトハ、時ノ事情ニ於テ有ルマジキコトナリ。

又魏志ノ文ニ「到伊都國云々」ノ下ニ、「世有王、皆統屬女王國、郡使往來常所駐」ト云ヒ、又「自女王國以北、特置一大率檢察、諸國畏憚之、常治伊都國云々」トアレバ、伊都ハ、女王國ノ北境ノ大鎭ニシテ、女王ノ勢力ノ大ナルコトハ、大和ノ皇室ト殆ト二君ノ如シ。神功皇后ノ御代ニ、カヽル割據ノ大酋ノアルベキ理ナシ。仲哀天皇ハ、筑紫ノ香椎ノ宮ニ天下治シ、岡ノ縣主ノ祖熊鰐、伊覩ノ縣主ノ祖五十迹手等ハ、皆車駕ヲ奉迎シ、熊曾ノ國モ、幾程モナク服從シ、皇后ハ、層增岐野ニテ、羽白熊鷲ヲ滅シ給ヒ、山門ノ縣ニテ、土蜘蛛田油津媛ヲ誅シ給ヒ、末羅縣ニテハ、年魚ヲ釣リ給ヒ、ソノ外種々ノ事跡アリテ、遂ニ筑紫ノ宇美ニテ、應神天皇ヲ生ミ給ヒテ、然ル後ニ京ニ還リ給ヒシトナレバ、今ノ筑前肥前ノ國國ハ、悉ク德化ニ從ヒテ、畿甸ニモ同ジキ有樣ナルヲ、筑紫ノ叛酋ニ交通スル帶方ノ使者ノ、公然トシテ、末羅伊覩ニ往來駐息スベクモアラズ。又其ノ叛酋ノ部下ナル大率ト云ヘル者モ、イカデカ其ノ地ヲ占メテ、諸國ヲ檢察スル由アルベキ。若又此ノ大率ヲ、後世ノ太宰ノ帥ノ如キ皇朝ノ宰ナリト假定セバ、叛酋ノ爲ニ、異朝ノ文書賜遺ノ物ヲ傳送スル

ノ理アルベカラズ。

卑彌呼ノ事跡ヲ考フルニ、「倭國亂相攻伐、歴年、乃共立一女子云々、年已長大、無夫壻」ト云ヘバ、西邊ノ爭亂ニ乘ジテ、處女ヨリ崛起シタル者ニシテ、神功皇后ガ胎中天皇ヲ擁祐シテ、暫ク大政ヲ聞シ召サレシトハ、似モ附カザル事ナリ。此ノ事ヲ、後漢書ニハ「桓靈間、倭國大亂、更相代云々」ト書ケリ。桓靈間ハ紀ノ年紀ニ據レバ、成務天皇ノ時ニ當レドモ、成務ノ朝ニハ、斯ル大亂ナカリシコト、明カナリ。又羅紀ニモ「阿達羅尼師今二十年夏五月、倭女王卑彌呼遣使來聘」トアリ。阿達羅ノ二十年ハ、漢ノ靈帝熹平二年、紀ノ成務天皇四十三年ナレバ、卑彌呼ノ時代ハ、神功紀トモ精密ニ合ヘルニハ非ズ。「有男弟佐治國」ト云ヘルモ、「少有見者」ト云ヘルモ、「唯有男子一人云々」ナド云ヘルモ、皆神功皇后ノ御事トシテハ、協ハズ。魏ニ貢獻シテ、親魏倭王ニ封ゼラレ、金帛錦罽刀鏡采物等ノ賜物ヲ受ケタルガ如キハ、皇朝ニ有ルマジキコト、云フモ更ナリ。難升米都市牛利伊聲耆掖邪狗載斯烏越ノ屬モ、皇后ノ御時、屢韓地ニ往來シタル諸臣ノ名ニ似タル者ナシ。新井白石ハ、「倭女王卑彌呼、與狗奴國男王卑彌弓呼、素不和云々」ヲ、忍熊王ノ亂ニ附會シ、素不和ノ素ヲ、男王ノ名ニ連ネテ、「卑彌弓呼素、猶此云皇子忍熊也（卑彌弓猶此云日御子之語、呼素猶此云忍之詰也）」ト解シタリ。サレドモ忍熊王ノ亂ハ、應神天皇ノ生誕ニ引キ續キテ起リシ事變ニシテ、皇后攝政ノ初年ニアリシ事ナルニ、卑彌弓呼等ノ攻擊ハ、卑彌呼朝聘ノ後ニアリキ。且ソノ下文ニ「卑彌呼以死」トアリテ、卑彌呼ハ、此ノ亂ノ爲ニ死シタリト見ユレバ、忍熊王ノ亂ニ非ザルコト、論ナシ。次ニ「大作冢、徑百餘步、殉葬者、奴婢百餘人」トアリ。皇朝ニテ殉死ヲ停メ給ヒシハ、垂仁天皇ノ御時ニアレバ、神功皇后ノ陵ニハ、カヽル殉葬アルベカラズ。次ニ「更立男王、國中不服云々、復立卑彌呼宗女壹與、年十三爲王、國中遂定云々」ト云ヘルガ如キハ、皇朝ニハ形モナキ事ナリ。且此ノ事ハ、魏帝曹芳ノ正始八年、即紀ノ神功皇后攝政四十七年ニ、帶方ヨリ遣サレタル張政ガ滯在ノ間ニ起レリト見ユレバ、紀ノ神功皇后崩御ノ年ヨリハ二十年計リ前ニアリ。晉書四夷傳倭人ノ條ニ「及文帝作相、又數至、泰始初、遣使重譯入貢」トアルハ、魏帝曹髦元帝及晉ノ武帝ノ世ニシテ、紀ニ據レバ、皇后攝政ノ間ナレドモ、卑彌呼ハ既ニ死シタレバ、「數至」、又「重譯入貢」ト云ヘルハ、皆卑彌呼ノ使ニハ非ザルナリ。サレバ卑彌呼ノ時代、神功紀ニ合ヘリト云フモ、唯景初正始ノ年號ハ、偶紀ノ神功皇后ノ御世ノ中程ニ當レルノミニシテ、攝政ノ初ハ、卑彌呼ノ自立ニ後ルヽコト三十餘年、崩御ノ年ハ、卑彌呼ノ死ニ後ルヽコト二十年計リナレバ、善ク合ヘリトハ云ヒ難シ。

英人あすとん氏ハ、應神天皇ノ御世ハ、百濟ノ近肖古王以後ニ當レリトハ考ヘナガラ、神功皇后ト卑彌呼ト異ナル人物トスルハ、甚事實ラシカラザル想像ナリトシ、兩朝ノ間ニ、一百餘年ノ離隔ヲ生ジ、且卑彌呼ノ死後、男王女王ノ繼承マデヲ、皇后崩後ノ事實ト信ジタリト見エ、「卑彌呼ノ死ヲ、西曆二百四十七年（即魏ノ正始八年）トセルト、其ノ後嗣ノ事トハ、日本紀ニ合ハズ。然レドモ、同時代ナル支那記者ハ、全ク無根ナル事ヲ、カクマデニ誤リ記スコトノアルベクモアラズ。且日本紀ニ、神功皇后ノ治世ヲ非常ニ長クセルヲ見レバ、（必皇室ノ世系ニ）誤脫ナドノアルナラン」ト云ヒ、又「神功皇后ト應神天皇トノ間ノ記錄ニ於テ、大ナル離隔アルガ爲ニ、神功皇后ノ治世ヲ、二百四十七年ヨリ二百六十九年（即紀ノ神功攝政六十九年）ニ延バシ、猶其ノ足ラザル所ヲ理メシ爲、應神仁德二帝ノ御宇ヲ、上ニ引キ延バシタルナラン」ト云ヘリ。サレドモ神功皇后ト應神天皇ト御母子ナルコトハ、申スマデモナク、應神天皇ハ、仲哀天皇ノ遺腹ノ皇子ニシテ、生レナガラニ冢嫡ニ備ハリ玉ヒ、胎中天皇トサヘ申シ奉ル程ナレバ、二代ノ間ニ離隔ノアルベキ筈ナク、又神功皇后ノ崩後、男王女王ナド云ヘル、色々ノ嗣君ノアルベキ樣ナシ。同時代ナル支那記者ハ、全ク無根ナル事ヲ、カクマデニ誤リ記スコトモアルマジケレバ、彼ノ女酋ノ國ニハ、カヽル事モアリツラン。皇朝ニハ少シモ關係ナキ事ナリ。

故ニ魏志ノ記載ノ、我ガ史ニ合ハザルハ、魏志ノ誤リニハ非ズ。神功皇后ト卑彌呼ト全ク異人ナル徴證ナリ。卑彌呼若神功皇后ニテマシマセバ、其ノ御功業ハ第一トシテ、何ヲ差置キテモ、記シ奉ルベキ事ハ、征韓ノ役ナルニ、魏志ハ一語モ此ノ事ヲ言ハズ。征韓ノ役ハ、紀ニ據レバ、漢獻帝建安六年ニ當レリ。此ノ時、支那亂レタリト雖、武帝以來領有セシ韓地ノ郡縣ハ、未ダ失ハズ。公孫康幽州ノ牧ヲ以テ、玄菟樂浪諸郡ヲ統ベ、諸韓國皆羈屬シタリシニ、征韓ノ役、若此ノ頃ニ在ラバ、漢人イカデカ之ヲ聞知セザルノ理アラン。百濟ノ近肖古王ノ頃ニ至リテハ、支那內亂相繼ギ、外國ヲ顧ミルニ暇ナク、玄菟樂浪帶方三郡ハ、既ニ悉ク高句麗ニ併セラレテ、韓地ニ支那ノ所領ナク、倭韓ノ交涉ニツキテハ、支那ハ痛癢ヲモ感ゼズナリシカバ、晉書東夷傳ニ、征韓ノ役ヲ記サヾルハ、怪ムニ足ラズ。漢魏ノ際ハ、ソノ頃トハ事情同ジカラズ、西邊ノ民、彼ノ地ニ通交セシ者、三十餘國ニモ及ビタレバ、皇國ノ事ヲバ、支那人モ頗ル能ク聞知セシナリ。然ルニ、一語モ征韓ノ事ヲ言ハザルハ、卑彌呼ノ神功皇后ニ非ザル一證ナリ。

又皇朝ニテ、女帝ノ立チ給ヒシハ、推古天皇ヨリ始マリテ、其ノ前ニハ、カヽル例モアラザリシカバ、一時母后ノ攝政シ給ヘル事アリトモ、支那人ノ之ヲ見テ、女王國ト名ヅクベクモアラズ。紀ハ神功一紀ヲ立テ、攝政六十九年崩御ニ至ルマデ變ゼズ、儼然トシテ一女主ノ如ク記シタレドモ、其ノ實ハ、支那ノ臨朝稱制ノ例ニ同ジク、嗣帝ノ幼弱ノ間、暫ク大政聞コシメサレシニテ、其ノ間ハ、長クトモ二十年ニハ過ギザリキ。第三十一章ヲ見ヨ。此ノ臨朝稱制ノ例ハ、前漢ニハ高祖呂后孝元王后、後漢ニハ章德和熹安思順烈桓思靈思ノ諸太后アリテ、支那人ノ耳目ニ慣レタル事ナレバ、彼ノ魏ノ使者等ガ謁シタルハ、若臨朝稱制ノ母后ニマシマサバ、此ヲ處女ヨリ崛起シタル女王ト認誤シテ、此ノ男帝國ヲ、女王國ト誤稱スル理アランヤ。然ルニ彼ノ女王國ハ、卑彌呼ガ女酋ナルノミナラズ、其ノ死後マデモ、男王之ニ代レバ國人服セズ、女王立テバ幼弱ナルニモ拘ラズ、其ノ國遂ニ定マリタレバ、女王國ノ名ヲ以テ、支那三韓ニ聞コエタルモ、理（コトハリ）ナルコトニテ、此ノ名ハ、彼ノ使者等ガ目擊シタル事實ニ基キテ、稱ヘ始メタル者ナルベシ。

サテ女王壹與ノ後ハ、其國又男酋ヲ戴キテ、厚鹿文迮鹿文取石鹿文ナド云ヘル梟帥ドモ、世ニ聞エシヲ、景行天皇日本武ノ尊ノ誅鋤ヲ加ヘ給ヒテ、其ノ地一時ハ平ギタリシガ、仲哀天皇ノ時、復叛キ奉リシニ依テ、天皇皇后ノ西征トナリ、遂ニ皇后ノ歸神（カムガカリ）ノ事アリテ、神功紀ニ「時得神ノ語、隨敎而祭、然後遣吉備ノ臣ノ祖鴨別、令擊熊襲ノ國、未經浹辰而自服焉」ト見エタリ。之ヨリ熊襲ノ叛ト云ヘル事ハ、史ニ見エザレ共、其種人ハ、西南ノ强族ニシテ、風俗ノ獷悍ナル事、三百餘年ヲ經テモ變ゼザリキ。今筆ノ序ニ、其事跡ヲ摘記セン。國造本紀ニ「大隅ノ國ノ造、纏向ノ日代ノ朝ノ御世、治平隼人ノ同祖初小、仁德帝ノ代者、伏布爲日佐賜國造」、「薩摩ノ國ノ造、纏向ノ日代ノ朝、伐薩摩ノ隼人等鎭之、仁德ノ朝ノ代、日佐改爲直」トアリ。此二條ノ文ハ、意義分明ナラザレ共、景行ノ御世ニ熊襲ヲ平ゲ給ヒシニ由リ、仁德ノ御世ニ、其ノ遺裔ナル渠帥ヲ、國造又ハ直トシテ、其國ヲ綏撫シ給ヒシナリ。玆ニ薩摩ノ國大隅ノ國ト云ヘルハ、日向ノ曾ノ國ノ中ニテ、今ノ大隅ノ郡阿多國ノ中ニテ、今ノ薩摩郡トナレル所ナリ。墨ノ江ノ中ツ王ノ亂ニ、近ク仕奉レル隼人名ハ曾婆加里、水齒別ノ命ニ欺カレテ、己ガ王ヲ刺シ殺シマツリシ事、古事記ニ見エ、履仲紀ニモ、同ジ事ヲ記シテ、近習隼人ノ名ヲ、刺領巾ト書ケリ。姓氏錄神別天孫額田部ノ湯坐ノ連ノ條ニ「允恭天皇ノ御世、被遣薩摩國、平隼人云云」トアリ。遣サレタル人ノ名ハ漏レタリ。コレナル薩摩ノ國ハ、即阿多ノ國ニテ、後ノ名ヲ以テ追記シタルナリ。同書山城ノ國諸蕃秦ノ忌寸ノ條ニ、雄略天皇ノ時、小子部ノ雷ヲ遣シテ、分散セル秦民ヲ聚メシメ給ヘル處ニ、「率大隅阿多ノ隼人等、搜括鳩集云々」トアリ。淸寧紀元年「葬大泊瀨ノ天皇于丹比ノ高鷲原ノ陵、于時隼人、晝夜哀號陵側、與食不喫、七日而死、有司造墓陵北、以禮葬之」、同四年蝦夷隼人並內附」、欽明紀元年「三月蝦夷隼人、並率衆內附、」齊明

紀元年「蝦夷隼人率衆內屬、詣闕朝獻」。此等ノ內附內屬ハ、記傳十七ノ五十九丁ニ「こは、畿內に移。住しことなどを內附と記されたるか」ト云ヘルガ如クニテ、漢史ニ、外蕃ノ服屬シタル事ヲ內附ト云フトハ趣異ナルニ似タリ。

天武紀十一年「七月壬申朔甲午、隼人多來貢方物、是日大隅隼人、與阿多ノ隼人相撲於朝廷、大隅ノ隼人勝之」、「戊午、饗隼人等於飛鳥寺西、發種々樂、仍賜祿、各有差、道俗悉見之」、同十四年六月「大隅ノ直、賜姓曰忌寸」、朱鳥元年九月、天皇崩御ノ條ニ「次大隅阿多ノ隼人、及倭河內ノ馬飼部ノ造、各誄之」。

持統紀元年五月「皇太子率公卿百寮人等、適殯宮而慟哭焉、於是、隼人大隅阿多ノ魁帥、各領已衆、互進誄焉」、七月「賞賜隼人大隅阿多ノ魁帥等三百三十七人、各々有差」、三年正月「筑紫ノ大宰粟田眞人朝臣等、獻隼人一百七十四人」、六年閏五月「詔筑紫大宰ノ率河內ノ王等曰、宜遣沙門於大隅與阿多、可傳佛敎」、九年「五月丁未朔巳未、饗隼人大隅、丁卯觀隼人於西槻下」。

續紀文武天皇四年六月「薩末比賣久賣波豆、衣ノ評ノ督衣ノ君縣、助督衣ノ君氏自美、又肝衝難波從肥人等、持兵剽却覓國使刑部眞木等、於是勅竺志總領、准犯決罰」、同書村尾元融ノ考證ニ「衣、和名抄郡名薩摩ノ國頴娃江、是也、評督蓋郡ノ大領、下助督乃少領也云々、評督亦見神護景雲元年三月ノ紀、及下野ノ國那須國造碑、皇太神宮儀式帳、又案儀式帳云、難波朝廷、天下立評時云々、新家ノ連阿久良督領、礒ノ連牟良助督仕奉、督領助督、亦謂大領少領也」、氏族志阿多氏ノ條ニ「衣ノ君疑亦(與阿多氏)同族也」トアリ。次ニ大寶二年八月「薩摩多褹隔化逆命、於是發兵征討、遂校戸置吏焉」、同年十月「先是、征薩摩隼人時、禱祈太宰所部神九處、實賴神威、遂平荒域、爰奉幣帛、以賽其禱焉、唱更國司等(今ノ薩摩國也)言、於國內要害之地、建柵置戍守之、許焉」。唱更國ハ、隼人ノ國ニテ、拾芥抄改名所々ノ部ニ「薩摩ノ國、元唱更」トアリ。唱更ト書キタル理由ハ、考證ニ谷川士淸氏ノ說ヲ引キテ、「令義解云、隼人分番上下、按史記吳王濞傳、卒踐更輒與平賈、正義曰、踐更若今唱更行更者也、古謂隼人、爲唱更、義取諸此」ト云ヘルガ如シ。今ノ薩摩ノ國也トハ、續紀撰バレシ頃ノ名ヲ以テ注シタルナリ。記傳十六ノ四十二丁ニ「其(熊曾ノ國)を隼人ノ國と云へるは、續紀に、大寶二年、先是、征薩摩隼人時云々とある唱更、これ隼人なり……。萬葉三十五丁に、隼人乃薩摩乃迫門、六二十丁に隼人乃湍門など云るも、國ノ名なり。書紀孝德ノ卷に、薩麻之曲、右に引る續紀に、薩摩ノ隼人、萬葉に薩摩乃迫門などある薩摩は、國ノ名には非ず、隼人ノ國の中の地ノ名なり。後まで薩摩ノ郡あれば、其あたりの名にぞありけむ。其(隼人ノ國)を薩摩ノ國とは、後に改められたるなり。さて隼人とは、今の大隅薩摩二國の人を云る中にも、隼人ノ國と云しは、今の薩摩ノ國の域なるべし。大隅は、和銅六年に、日向より分れたる國なればなり。但し上古には薩摩までかけて日向ノ國とも云しかば、其中に、薩摩より大隅かけてを、殊に隼人ノ國と云しにもあるべし。さて國ノ名の薩摩と改まりしは、大寶より靈龜までの間なるべし。其故は、右に引る大寶二年の紀には、唱更ノ國とありて、養老元年の紀に、始めて大隅薩摩二國ノ隼人とある、此ノ薩摩は、既に國ノ名なればなり」。今按フルニ、薩摩大隅ノ二國ト云フ事ハ、既ニ靈龜二年太宰府ノ上言ニモ見エタリ。

和銅二年十月「薩摩隼人郡司已下一百八十八人入朝」、三年正月「壬子朔、天皇御大極殿受朝、隼人蝦夷等、亦在列、在將軍正五位上大伴宿禰旅人、副將軍從五位下穗積朝臣老、右將軍正五位下佐伯宿禰石湯、副將軍從五位下小野朝臣馬養等、於皇城門外朱雀路東西、分頭陳列騎兵、引隼人蝦夷等而進」、「丁卯、天皇御重閣門、賜宴文武百官、幷隼人蝦夷、奏諸方樂、五位已上、賜衣一襲、隼人蝦夷等、亦授位賜祿、各有差、戊寅……、日向國貢采女、薩摩國貢舍人、庚辰、日向ノ隼人曾ノ君細麻呂、敎喩荒俗、馴服聖化、詔授外從五位下」、六年四月「割日向國肝坏贈於大隅始䄙四郡、始置大隅國」、七月「詔曰、授以勳級、本據有功、若不優異、何以勸奬、今討隼賊將軍幷士卒等、戰陣有功者一千二百八十餘人、並宜隨勞授勳焉」、考證ニ云「討隼人、

前不載、疑史逸之」、七年閏二月「隼人昏荒野心、未習憲法、因移豐前國民二百戸、令相勸導也」。

靈龜二年五月「太宰府言、豐後伊豫二國之界、從來置戍、不許往還、但高下尊卑、不須無別、宜五位以上差使往還不在禁限、又薩摩大隅二國、貢隼人、已經八歲、道路遙隔、去來不便、或父母老疾、或妻子單貧、請限六年相替、並許之」。

養老元年四月「甲午、天皇御西朝、大隅薩摩二國隼人等、奏風俗歌儛、授位賜祿、各有差」、四年二月「太宰府奏言、隼人反、殺大隅國守陽侯ノ史麻呂」、三月「以中納言正四位下大伴ノ宿禰旅人、爲征隼人持節大將軍、授刀ノ助從五位下笠ノ朝臣御室、民部ノ少輔從五位下巨勢ノ朝臣眞人、爲副將軍」、考證ニ云「旅人、萬葉集往々書大將軍大伴ノ卿、蓋以此、案扶桑略記云、是歲九月有征夷ノ事、大隅日向兩國逆亂、公家祈請於宇佐宮、其禰宜辛島勝代豆米、相率神軍、行征彼國、打平其敵、大神託宣曰、合戰之間、多致煞生、宜修放生會者、諸國放生會、始自此時矣、亦見政事要略水鏡、史不載、附此備考」、六月「詔曰、蠻夷爲害、自古有之、漢命五將、驕胡臣服、周勞再駕、荒俗來王、今西隅等賊、怙亂逆化、屢害良民、因遣持節將軍正四位下中納言兼中務卿大伴宿禰旅人、誅罰其罪、盡彼巢居、治兵率衆、剪掃兇徒、酋帥面縛、請命下吏、寇黨叩頭、爭靡淳風、然將軍暴露原野、久延旬月、時屬盛熱、豈無艱苦、使使慰問、宜念忠勤」、七月「賜征西將軍已下至于杪士物、各有差」、八月「勅征隼人持節將軍大伴宿禰旅人、宜且入京、但副將軍已下者、隼人未平、宜留而屯焉」、五年七月「征隼人副將軍從五位下笠朝臣御室、從五位下巨勢朝臣眞人等還歸、斬首獲虜、合千四百餘人」、十二月「薩摩國人希、多隨便幷合」、考證ニ云、「多ノ上、疑有脫文」、六年四月「征討陸奧ノ蝦夷大隅薩摩ノ隼人等將軍已下及有功蝦夷幷譯語人、授勳位、各有差、始制太宰管內大隅薩摩多褹壹岐對馬等司有闕、選府官人權補之」、七年四月「太宰府言、日向大隅薩摩三國ノ士卒、征討隼賊、頻遭軍役、兼年穀不登、交迫飢寒、謹案故事、兵役以後、時有飢疫、望降天恩、給復三年、許之」、五月「辛巳、大隅薩摩二國隼人等六百二十四人、朝貢、甲申、賜饗於隼人、各奏其風俗歌舞、酋帥三十四人、叙位賜祿、各有差」、六月「隼人歸鄉」。

天平元年六月「庚辰、薩摩隼人等、貢調物、癸未、天皇御大極殿閤門、隼人等奏風俗歌舞、甲申、隼人等授位賜祿、有差」、七月「已酉、大隅隼人等、貢調物、辛亥、大隅隼人姶羅郡少領外從七位下勳七等加志君和多利、外從七位上佐須君夜麻登久々賣、並授外從五位下、自餘叙位賜祿、亦各有差」、考證ニ云「案、和名抄薩摩國鄉名、高城郡合志、與加志音近」、二年三月「太宰府言、大隅薩摩兩國百姓、建國以來、未曾班田、其所有田、悉是墾田、相承爲佃、不願改動、若從班授、恐多喧訴、於是、隨舊不動、各令自佃焉」、七年七月「大隅薩摩二國隼人二百九十六人、入朝貢調物」、「八月辛卯、天皇御大極殿、大隅薩摩二國隼人等、奏方樂、壬辰、賜二國隼人三百八十二人爵幷祿、各有差」、十二年、太宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反シテ、隼人ヲ率ヰテ、官軍ヲ板櫃河ニ拒ギシ時、隼人ドモ、多ク官軍ニ降リシ中ニモ、贈唹君多理志佐、廣嗣ノ謀ヲ告ゲタルニ由リテ、其ノ亂速カニ平ギヌ。十三年閏三月「授外正六位上曾乃君多理志佐、外從五位下」、十五年七月「庚子、天皇御石原宮、賜饗於隼人等、授……外從五位下曾乃君多利志佐外正五位上、外正六位上前君乎佐外從五位下、外從五位上佐須岐君夜麻等久々賣外正五位下」、氏族志阿多氏ノ條ニ「聖武帝時、有薩摩主帳曾縣主麻多、東大寺正倉院文書同時、有隼人國君麻呂同姓首麻呂。東大寺古文書」。

天平勝寶元年八月「壬午、大隅薩摩兩國隼人等、貢御調、幷奏風俗歌儛、癸未、詔授外正五位上曾乃君多利志佐從四位下、外從五位下前君乎佐外從五位上、外正六位上曾縣主岐直志自羽志加禰保佐々並外從五位下」、岐直以下、人名ナルベケレドモ、二人ナルカ、三人ナルカ、讀ミ得ズ。七年五月「大隅國菱苅村浮浪九百三十餘人言、欲建郡家、許之」。

天平寶字八年正月「大隅薩摩隼人相替、授外從五位上前公乎佐外正五位下、外正六位上薩摩公鷹白薩摩公宇志並外從五位下」、神護景雲元年九月「隼人司隼人百十六人、不論有位無位、賜爵一級、其正六位上者叙上正六位上」、三年十一月「庚寅、天皇臨軒、大隅薩摩隼人、奏俗伎、外從五位下薩摩公鷹白加志公島麻呂、並授外從五位上、正六位上甑島隼人麻比古、外正六位上薩摩公久奈都、曾公足麻呂、大住直倭、上正六位上大住忌寸三行、幷外從五位下、自餘隼人等、賜物有差」。寶龜六年四月「外從五位下大隅忌寸三行、爲隼人正」、七年二月「丙寅、御南門、大隅薩摩隼人、奏俗伎、戊辰、外從五位下大住忌寸三行大住直倭、並授外從五位上、外正六位下薩摩公豐繼外從五位下、自餘八人、各有差」。

延暦四年正月「丁酉朔、天皇御大極殿受朝……始停兵衞叫閤之儀」、類聚國史風俗部ニ延暦十二年二月「大隅曾於郡大領曾乃公牛養、授外從五位下」、二十年六月「停太宰府進隼人」、大同三年十二月「勅、定額隼人、若有闕者、宜以京畿隼人隨闕便補之云々、其女者、不在補限」。

姓氏錄右京神別ニ、「阿多御手養、火闌降命六世孫薩摩若相樂後也」、山城ノ國神別ニ「阿多隼人、富乃須佐(ホノスサ)利乃命之後也」、大和ノ國神別ニ「二見首、富須洸利(ホスセリ)命之後也」、「大角隼人、出自火闌降命之後也」、攝津ノ國神別ニ「日下部、阿多御手犬養同祖火闌降命之後也」、和泉ノ國神別ニ「坂合部、火闌降命七世孫夜麻等古命之後也」、續後紀承和三年六月「山城國人右大衣阿多隼人逆足、賜姓阿多忌寸」、記傳云「これらは、隼人の國より上(ノボ)りて、皇朝に仕奉れるが、子孫の京畿に遺(ノコ)り住るなり」。

右ニ見エタル諸姓ノ中、薩摩ノ國ノ造、衣ノ君、（又前ノ公）國ノ君、（又國ノ公）薩摩ノ公、阿多ノ御手犬養、阿多ノ隼人、阿多ノ忌寸、日下部等ハ、蓋古ノ阿多ノ小椅ノ君等ガ裔ニテ、其ノ總名ハ本ハ阿多ノ隼人、後ニハ薩摩ノ隼人ト云ヘル者ナリ。大隅ノ國ノ造、大隅ノ直、（又大住ノ直）大隅ノ忌寸、（又大住ノ忌寸）大角ノ隼人、曾ノ君、（又贈唹ノ君、曾乃君、曾ノ公、曾乃公、）加志ノ君、（又加志ノ公）佐須岐ノ君等ハ、蓋熊曾建等ガ裔ニテ、總名ハ大隅ノ隼人ト呼バレシ者ナリ。

隼人等ガ皇朝ニ仕奉ル業ハ、宿衞ト俳優トノ二ツニテ、神代ノ故事ヨリ出デタリト言傳ブル者ナリ。其ハ古事記ニ火遠理(ホヲリ)ノ命鹽盈珠鹽乾珠(シホミツタマシホヒルタマ)ヲ以テ火照(ホデリ)ノ命ヲ惚苦(タシナ)メ給ヘル時ニ、火照ノ命「稽首白、僕者自今以後、爲汝命之晝夜守護人而仕奉。故至今其溺時之種々之態不絶仕奉也」、日本紀ニ「兄火闌降ノ命、既被危困、乃自伏罪曰、從今以後、吾將爲汝俳優之民、請賜恩活、於是隨其所乞、遂赦之」、一書ニ、「乃伏罪曰、吾已過矣、從今以往、吾子孫八十連屬、恒當爲汝俳人、（一云狗人）請哀之、弟還出潮涸瓊、則潮自息、於是兄知弟有神德、遂以伏事其弟、是以火酢芹ノ命ノ苗裔諸ノ隼人等、至今不離天皇宮牆之傍、代吠狗而奉事者也」、代吠狗ト云ヘルハ、即記ノ守護人ナリ。不離宮牆之傍トアルハ、記ノ晝夜ト云ヘルニ當レリ。又一書ニ、「兄著犢鼻、以赭塗掌塗面、告其弟曰、吾汚身如此、永爲汝俳優者、乃擧足蹈行、學其溺苦之狀、初潮漬足時、則爲足占、至膝時、則擧足、至股時、則走廻、至腰時、則捫腰、至腋時、則置手於胸、至頸時、則擧手飄掌、自爾及今、曾無廢絶」トアルハ、溺レシ時ノ種々ノ態ヲ詳カニ云ヘル傳ヘナリ。職員令ニ「衞門府、管司一、督一人、掌諸門禁衞出入禮儀、以時巡檢、及隼人門籍門牓ノ事云々、隼人司、正一人、掌檢校隼人、及名帳、教習歌儛、造作竹笠事、佐一人、令史一人、使部十人、直丁一人、隼人」、隼人司式ニ、「凡元日即位及蕃客入朝等儀、官人三人、史生二人、率大衣二人、番上隼人二十人、今來隼人二十人、白丁隼人一百三十二人、分陳應天門外之左右、（蕃客ノ入朝、不在吠限、）群官初入、自胡床起、今來隼人發吠聲三節、凡大衣者、擇譜第內、置左右各一人、大隅爲左、阿多爲右、教道隼人、催造雜物、候時令吠云々、大衣及番上隼人云々、自餘隼人、皆云々、執楯槍、並坐胡床」、又「凡踐祚大嘗日、分陳應天門內左右、其群官初入、發吠、悠紀入、官人並彈琴吹笛、擊百子、拍子、

歌儛人等、彈琴二人、吹笛一人、擊百子四人、拍手二人、歌二人、儛二人、從興化門參入御在所屛外、北向立、奏風俗ノ歌儛、主基ノ入、亦准此」、又「凡遠從駕行者、官人二人、史生二人、率大衣一人、番上隼人四人、及今來隼人十人供奉、其駕經國界及山川道路之曲、今來隼人爲吠」、又「行幸經宿者、隼人發吠、但近幸不吠」、又「凡今來ノ隼人、令大衣習吠、左發本聲、右發末聲、總大聲十遍、小聲一遍、訖一人、更發細聲二遍」、又「凡威儀所須、橫刀一百九十口、楯一百八十枚、云々以赤白土ノ墨畫鉤ノ形木槍一百八十竿、胡床一百八十脚云々」、大嘗祭式ニモ「云々、進於楯ノ前、拍手歌儛」ナド、隼人ノ事、猶委シク見エタリ。貞觀儀式ナドニ、元日又踐祚ノ大嘗ナドノ時ノ隼人ノ儀見エタルモ、右ニ引ケル式ノ文ノ如シ。記傳十七ノ五十八丁ニ云「隼人は、大隅薩摩ノ國人なること、上に云ふが如し。さて朝廷に召れて仕奉れるが、永く留りて、京近き國の人になれるも、子孫まで、なほ隼人と稱て、其職に仕奉れりしなり。隼人式に、五畿内及近江丹波紀伊等ノ國ノ隼人とある、是なり。又諸國ノ隼人とあるも、右の國々のを云なり。和名抄に、山城ノ國綴喜ノ郡に大住ノ郷あるも、大隅ノ國の隼人の留リ住しよりの名なり云々。大衣と云は、右の近き國々の隼人の中にて、二人を擇びて補たるものなり。隼人式に、大隅爲左、阿多爲右とある大隅阿多とは、其の國の人を云には非ず、先祖の出たる地を以て、近き國なるをも、大隅ノ隼人阿多ノ隼人と別ち云なり云々。威儀に、隼人の執る楯に鉤ノ形を畫ヶとあるは、失ヶたる鉤を徵りし故事を、後ノ世まで示さむためなるべし」。

番上ノ隼人ハ、記傳ニ「本國よりかはる〳〵上りて仕奉る者なり」トアレドモ、サニ非ズ。延喜ノ頃ニハ、近國ノ隼人ヲ用ヒラレシナリ。天武紀十一年、持統紀三年、同九年、續紀和銅二年ナドニ、隼人來朝ノ事、又ハ隼人ニ饗ヲ賜ヘル事ノ見エタルハ、本國ヨリ參レル隼人ノ交替ノ際ナルベシ。サテ續紀靈龜二年ニ、六年ヲ限トシテ相替ル事ニ定メラレテ、其ノ後ハ、養老七年、天平元年、同七年、同十五年、天平勝寶元年、(コノ間一回記シ漏サレタルカ)天平寶字八年、神護景雲三年、寶龜七年、延曆二年ナドニ隼人ノ事見エタルハ、大抵六年バカリニ爲レルゴトニ交替シタル趣ナリ。然ルニ延曆二十年ニ「停太宰府進隼人」トアリテ、後ハコノ六年交替ノ事、物ニ見エズ。職員令隼人司ノ義解ニ「隼人者、分番上下、一年爲限、其下番在家者、差科課役、及簡點兵士、一如凡人」トアルハ、延曆以後ノ制ヲ以テ注シタルニテ、近國ニ住メル隼人ヲ用ヒラレシ故ニ、交替ノ期モ短ク、家ニ在リテハ、良民ト同ジク課役ニモ服シタルナリ。令撰ラレシ時ハ、隼人司ノ隼人ハ、即番上ノ隼人ニシテ、其ノ數モ定メラレザリキ。持統紀元年ニ三百三十七人、同三年ニ一百七十四人、續紀和銅二年ニ一百八十八人、養老七年ニ六百二十四人、天平七年ニ二百九十六人ナド見エタルハ、入朝シタル隼人ノ總員ニテ、其ノ中ヨリ留リテ朝廷ニ仕奉レル數ハ、神護景雲元年ノ紀ニ、隼人司ノ隼人百十六人トアルニテ、其ノ大概ヲ知ルベシ。カクテ番上ノ隼人ハ、本夥シキ數ナリシヲ、後ニハ其ノ數ヲ二十人ト定メテ、畿內近國ノ隼人ノ幹了ナル者ヲ取リ、別ニ今來ノ隼人白丁ノ隼人ヲ置ク事トナレリ。

今來ノ隼人ハ、本國ヨリ京畿ニ遷リテ、程經ザル者ニテ、新參ノ隼人ナリ。番上ノ隼人ハ、皆故參ノ人ノミナル故ニ、ソレニ對ヘテ、今來ト云ヘルナリ。カク番上今來ト別レテヨリ後ハ、諸ノ儀ニ吠聲ヲ發スル事ハ、專ラ今來ノ隼人ノ職トナリテ、其ヲ敎ヘ導クハ、左右大衣ノ任ナリキ。記傳ニ「此は妻子をも率ヰて上る故に、女もあり。式に見ゆ。凡今來ノ隼人、給時服及鹽云々、また今來ノ隼人、身亡者、擇取畿內ノ隼人充之、二十人爲限云々など、式に見えたれば、此も中昔には、人數定まり有て召シ上せられしと見えたり」トアリ。猶考フベシ。類聚國史大同三年ノ勅ニ「定額ノ隼人、若有闕者云々」トアルハ、番上今來二種ノ隼人ヲ云ヘルナルベシ。

白丁ノ隼人ハ、式ニ「凡太儀者、預前申官、喚集諸國ノ隼人、令供其事」トアレバ、臨時ニ集メタル隼人ナ

リ。番上ノ隼人ノ數、古ノ制ヨリ大ニ減ジタルニ由リテ、其ヲ補ヘルナリ。式ニ一百三十二人トアルモ、續紀ニ隼人司ノ隼人トシテ擧ゲタル數ニ近シ。

第二十九章　新羅古記ノ倭人

神功皇后征韓以前ノ世ニ當リテ、皇國ニ關係セル事跡ノ韓史ニ見エタル者、二十餘條アリ。其ノ事大抵虛誕ニシテ、信ヲ考フルニ足ラザレドモ、一概ニ擯棄シ難キ所モアレバ、參考ノ爲ニ左ニ列擧ス。

羅紀赫居世居西干八年、紀元六百十一年、漢ノ宣帝甘露四年、「倭人行兵欲犯邊、聞始祖有神德、乃還」。

同三十八年紀元六百四十一年、漢成帝鴻嘉元年、「遣瓠公於馬韓……、瓠公者、未詳其族姓、本倭人、初以瓠繫腰、渡海而來、故稱瓠公」。

南解次次雄十一年、紀元六百七十四年、新ノ王莽天鳳元年、「倭人遣兵船百餘艘、掠海邊民戶、發六部勁兵、以禦之」。

脫解尼師今即位ノ條「脫解、本多婆那國所生也、其國在倭國東北一千里、初其國王娶女國王女爲妻、有娠七年、乃生大卵、王曰、人而生卵、不祥也、宜棄之、其女不忍、以帛裹卵幷寶物、置於櫝中、浮於海、任其所往、初金官國海邊、金官人怪之不取、又至辰韓阿珍浦口、是赫居世在位三十九年也、時海邊老母、以繩引繫海岸、開櫝見之、有一小兒在焉、其母取養之」、脫解ニツキテノ考ヘハ、第十三章新羅考ニ云ヘリ。落合直澄氏ノ紀年私按ニハ「女國ハ大倭國ノ名、即天皇所在ノ地、娶女國ハ、皇女ヲ娶レルナリ」ナド云ヘレドモ、女王國ノ稱ハ、魏志ノ倭女王卑彌呼ノ時ヨリ始マリタルモノニシテ、漢代ニ、皇國ヲ女國ト云ヘルコト、物ニ見エザレバ、脫解ノ談ハ、皇國ノ事ニ附會スベキニ非ズ。

同三年、紀元七百十九年、漢ノ明帝永平二年、「與倭國結好交聘」。

同十七年、「倭人侵木出島、王遣角干羽烏禦之、不克、羽烏死之」。

祇摩尼師今十年、紀元七百八十一年、漢ノ安帝建光元年、「倭人侵東邊」。

同十一年、漢ノ安帝延光元年、「大風東來、折木飛瓦、至夕而止、都人訛言、倭兵大來、爭遁山谷、王命伊湌翌宗等諭止之」。コノ年ハ、壬戌ノ年ニシテ、古事記ノ仲哀天皇ノ崩年ト干支同ジキニヨリ、落合直澄氏ノ私按ニハ、コレヲ以テ神功皇后ノ親征ノ訛傳ト爲シタレドモ、コノ壬戌ノ年ハ、日本紀ノ征韓ノ年ヨリ七十八年前ニ當リ、第六章ニ推定シタル仲哀天皇ノ崩年ヨリハ、四周甲即二百四十年前ニ當レバ、干支ノ偶同ジキニヨリテ附會スベキニ非ズ。

同十二年、「與倭國講和」。

阿達羅尼師今五年、紀元八百十八年漢ノ桓帝延熹元年「倭人來聘」。

同二十年、漢ノ靈帝熹平二年「倭女王卑彌乎、遣使來聘」。卑彌呼ノ魏ニ朝聘シタルハ、景初正始ノ間ニシテ、漢ノ熹平二年ヨリハ七十餘年ノ後ナレバ、熹平ノ頃ハ、卑彌呼ノ未ダ起ラザリシ時ナルベシ。羅紀ノ撰者ハ、蓋後漢書ニ桓靈間倭國大亂云々ノ語アルニ由リテ、卑彌呼ノ自立ヲ靈帝ノ世トシテ、此ノ一句ヲ添加セシナリ。

伐休尼師今十年、紀元八百五十三年、漢獻帝初平四年。「倭人大饑、來求食者千餘人」。

奈解尼師今十三年、紀元八百六十八年、獻帝建安十三年、「倭人犯境、遣伊伐湌利音、將兵拒之」。

助賁尼師今三年、紀元八百九十二年、魏ノ明帝太和六年、「倭人猝至圍金城、王親出戰、賊潰走、遣輕騎追擊之、殺獲甚衆」。金城ハ新羅ノ王城ナリ。

同四年、魏ノ明帝青龍元年、「夏五月、倭兵寇東邊、秋七月、伊湌于老與倭人戰沙道、乘風縱火焚舟、賊赴水死盡」。

沾解尼師今三年、紀元九百九年、魏帝曹芳嘉平元年、「夏四月、倭人殺舒弗邯于老」。此ノ于老ノ事跡ハ、同書列傳ニ甚詳カナレバ

其ノ全文ヲ左ニ引カン。

「昔于老、奈解尼師今之子、（或云角干水老之子也、）助賁王二年七月、以伊湌爲大將軍、出討甘文國破之、以其地爲郡縣、四年七月、倭人來侵、于老逆戰於沙道、乘風縱火、焚賊戰艦、賊溺死且盡、十五年正月、進爲舒弗邯、兼知兵馬事、十六年、高句麗侵北邊、出擊之、不克、退保馬頭柵、至夜士卒寒苦、于老躬行勞問、手燒薪蘇、暖熱之、羣心感喜、如夾纊、沾解王在位、沙梁伐國舊屬我、忽背而歸百濟、于老將兵往討滅之、七年癸酉、倭國使臣葛耶古在館、于老主之、與客戲言、早晩以汝王爲鹽奴、王妃爲爨婢、倭王聞之怒、遣將軍于道朱君討我、大王出居于柚村、于老曰、今茲之患、由吾言之不愼、我其當之、遂抵倭軍、謂曰、前日之言戲之耳、豈意興師至於此耶、倭人不答、執之、積柴置其上、燒殺之、乃去、于老子幼弱不能步、人抱以騎而歸、後爲訖解尼師今、未鄒王時、倭國大臣來聘、于老妻請於國王、私饗倭使臣、及其泥醉、使壯士曳下庭焚之、以報前怨、倭人忿、來攻金城、不克、引歸」。

于老ノ殺サレタルハ、羅紀ハ沾解王三年己巳、即魏帝曹芳ノ嘉平元年トシ、列傳ハ、同七年癸酉、即嘉平五年トシ、孰カ是ナルヲ知ラズ。未鄒王ノ時、于老ノ妻、倭ノ使臣ヲ焚キ殺シタルハ、其ノ年ハサダカナラネドモ、魏ノ元帝景元三年ヨリ晉武帝太康五年マデノ間ナリ。魏帝曹芳ノ世ハ、皇朝ニテハ、崇神天皇ノ御世ニ當リ、魏ノ元帝晉ノ武帝ノ世ハ、垂仁天皇ノ御世ニ當リテ、當時皇朝ニハ、未ダ征韓ノ擧アラザレバ、此等ノ文中ニ倭王ト云ヘルハ、皆筑紫ノ島ニ雄據セル渠帥ヲ云ヘルナリ。魏志ノ所謂倭女王卑彌呼ハ、曹芳ノ正始年中ニ死シテ、其ノ宗女壹與位ヲ嗣ギタレバ、嘉平年中ハ、蓋壹與ノ世ニシテ、使臣葛那古將軍于道朱君ナド云ヘルモ、皆壹與ノ黨類ナルベシ。

サレバ此等ノ事ハ、皇朝ニハ毫モ關係ナキ事ナレドモ、神功紀ノ原注ニ、此ノ于老夫妻ノ事ニ稍似タル一

說アリ。其ノ文ニ云「一云禽獲新羅王、詣于海邊、拔王ノ臏肋、令匍匐石上、俄而斬之埋沙中、則留一人爲新羅宰而還之、然後新羅王妻、不知埋夫ノ屍之地、獨有誘宰之情、乃誂宰曰、汝當令識埋王屍之處必篤報之、且吾爲汝妻、於是宰信誘言、密告埋屍之處、則王妻與國人共議之殺宰、更出王屍、葬於佗處、時取宰屍、埋于王ノ墓ノ土底、以擧王ノ櫬、定其上曰、尊卑次第、固當如此、於是天皇聞之、重發震忿、大起軍衆、欲頓滅新羅、是以軍船滿海而詣之、是時新羅國人悉懼、不知所如則相集共議之、殺王妻以謝罪」。

コヽニ新羅王ト云ヘルハ、實ハ王ニ非ズ、王子于老ナリ。于老ハ、奈解王ノ太子ニシテ、訖解王ノ父ナル上ニ、當時舒弗邯トナリテ、國政ニ當リシ故ニ、後世誤リテ王ト傳ヘタルナリ。神功紀ニ又他ノ一說アリテ新羅王宇流助富利智干ト云ヘリ。新羅ノ前後ノ王ニ、此ノ名ニ似タル者ナケレバ、此モ、宇流ハ即于老、助富利智干ハ舒弗邯ノ轉訛ナルベシ。韓史ニハ「倭人忿、來攻金城、不克、引歸」トアルヲ、神功紀ニハ「天皇聞之、重發震忿云云」トテ、皇朝ノ征伐ノ如ク記シタレドモ、此モ、筑紫ノ渠帥ノ報復ノ師ナルベシ。蓋神功皇后征韓以前ノ世ニ當リテ、筑紫ト新羅トハ、屢和戰ノ交涉アリテ、彼ノ書ニ之ヲ記載シタル者ノアリケル中ニ、此ノ于老ノ事ノ如キハ、關係甚重キガ故ニ、國史ヲ編輯スル者、之ヲ皇朝ノ事ト誤認シテ、神功紀ノ原注ニ加ヘタルナリ。

然ルニ吉田東伍氏ノ日韓古史斷ハ、仲哀天皇ノ崩リマセル壬戌ノ年ヲ、晉ノ惠帝太安元年、新羅ノ基臨尼師今五年トシ、彼ノ沾解王ノ時ニ于老ノ殺サレタル事モ、未鄒王ノ時ニ于老ノ妻倭ノ使者ヲ殺シタル事モ、皆基臨王ノ時ニシテ、神功皇后征韓ノ後、數年ノ間ノ事トシ、新羅ノ無禮ヲ討ジタル將軍于道朱君ハ、內ノ宿禰ト讀ミテ、「欽明紀にも有至ノ臣又內ノ臣ありて、姓氏錄に因りて、其の武內の裔なること知られたり。すなはち此處なるも同じくして、武內ノ宿禰に紛れなし」ト云ヘリ。サテハ于老ハ、長壽ニ過ギタル疑ヒ起ル故ニ、同

氏ハ又「韓史を通讀するに、于老は二人あり。三國史記列傳混じて一人と爲たるは、誤れり。一は沾解王ノ時の人にして、訖解王の父なり。一は某臨王ノ時の人にして、奈解王の子なり。二王（奈解訖解カ）相距る一百年、其間一于老にして豈生存し得んや」ト云ヘリ。コノ論、巧ナルコトハ巧ナレドモ、從ヒ難キ所アリ。于老ノ長壽ヲ疑フハ、其ノ死ヲ某臨王ノ時トスルカラノ事ニシテ、韓史ニヨレバ、于老ノ名ノ見エタルハ、奈解王十四年（紀元八百六十九年）伊伐湌利音ト共ニ、浦上八國ノ兵ヲ敗リタルニ始マリテ、沾解王七年（紀元九百十三年）倭人ニ殺サレタルマデ、四十餘年ニ過ギザレバ、別人トスル程ノ事ニ非ズ。羅紀ニ「訖解尼師今立、奈解王孫也、父于老角干云々」トアルハ、奈解王ノ子于老ハ、即訖解王ノ父于老ニシテ、別人トスベキ理由ナシ。但訖解ノ即位ハ、于老ノ沒後五十七年ニ當レルヲ、羅紀ニ「某臨薨、無子、羣臣議曰、訖解幼有老成之德、乃奉立之」トアリテ、訖解ハ、當時猶幼キ趣ニ聞ユルハ、イカニモ疑ハシ。其ハ味鄒儒禮某臨三世ノ在位ハ、極メテ短クシテ、合セテ數年ニ過ギザルヲ、羅紀ノ年紀ハ、誤リテ數十年ニ延長シタルニヤ。又ハ于老ノ死モ、其ノ妻ノ復讐モ、實ニ某臨王ノ時ノ事ナルヲ、羅紀ノ年紀ハ、奈解ヨリ訖解マデ七世ノ間、一般ニ延長シタルガ爲、于老ノ死ハ、唯其ノ干支ニヨリテ、奈解ヨリ甚遠カラザル時代ニ記シタルニヤ。又按フニ、儒禮ハ奈解ノ子（一説ニ外孫）ナル利音伊伐湌ノ外孫ニシテ、某臨ハ、又儒禮ノ弟（一説ニ姪）乞淑伊湌ノ子ナレバ、某臨ハ、少クトモ奈解ヨリ四世ノ孫ナルニ、某臨ニ嗣ギタル訖解ハ、直ニ奈解ノ孫ニテハ、昭穆甚違ヘリ。然ラバ訖解ハ、實ハ于老ノ孫、又ハ曾孫ナルヲ、韓史ハ全ク誤レルニヤ。サテ此等ノ誤リハ、何レニモアレ、于老ノ死モ、其ノ妻ノ復讐モ、訖解即位ノ前ニアリテ、百濟ノ近肖古王ノ世ヨリ四五十年前ニ當レバ、征韓ノ後數年ノ間ニアリトハ信ゼラレザルナリ。

次ニ羅紀儒禮尼師今四年、（紀元九百四十七年、晉ノ武帝太康八年）「倭人襲一禮部、從火焚之、虜人一千而去」。

同六年、「聞倭兵至、理舟楫、繕甲兵」。

同九年、（晉ノ惠帝元康二年、）「倭兵攻陷沙道城、命一吉湌大谷、領兵救完之」。

同十一年、「倭兵來攻長峯城、不克」。

同十二年「王謂臣下曰、倭人屢犯我城邑、百姓不得安居、吾欲與百濟謀、一時浮海、入擊其國、如何、舒弗邯弘權對曰、吾人不習水戰、冒險遠征、恐有不測之危、況百濟多詐、常有呑噬我國之心、亦恐難與同謀、王曰善」。

某臨尼師今三年、（紀元九百六十年、晉ノ惠帝永康元年、）「與倭國交聘」。

訖解尼師今三年、（紀元九百七十二年、晉ノ懷帝永嘉六年）「倭國王遣使、爲子求婚、以阿湌急利女送之」。日韓古史斷ニ、此ノ年ヲ以テ應神天皇十年トシテ、「蓋以て帝の後宮に進めしなり」ト云ヘレドモ、實ハ景行天皇ノ御世ニシテ、コノ倭國王モ、西國ノ或ル渠帥ナルベシ。

同三十五年、（紀元千四年、晉ノ康帝建元二年）「倭國遣使請婚辭、以女既出嫁」。

同三十六年、（晉ノ穆帝永和元年、）「倭王移書絶交」。

同三十七年、「倭兵猝至風島、抄掠邊戶、又進圍金城、急攻、王欲出兵相戰、伊伐湌康世曰、賊遠至、其鋒不可當、不苦緩之、待其師老、王然之、閉門不出、賊食盡將退、命康世、率勁騎、追擊走之」。

以上ノ記事ハ、皆筑紫人ニ關スル者ニシテ、皇朝ノ史ト對照スベキ由ナシ。此ノ後十六年、奈勿尼師今七年（紀元千二十二年晉ノ哀帝隆和二年）ニ至リテ、神功皇后ノ親征アリ。此ヨリ兩國交涉ノ局面大ニ變ジタリ。其ハ次卷ヨリシテ委シク述ブベシ。

外交繹史卷之四

三韓朝貢志

第三十章　神功皇后ノ新羅征伐

.古事記仲哀天皇ノ段ニ云、「帶中日子天皇、坐穴門之豐浦宮及筑紫訶志比ノ宮、治天下也。此天皇、娶大江王之女大中津比賣命、生御子香坂王、忍熊王、又娶息長帶比賣命、是大后生御子、品夜和氣ノ命、次大鞆和氣命、亦名品陀和氣命此太子之御名、所以負大鞆和氣ノ命者、初所生時、如鞆宍生御腹、故、著其御名是以知坐腹中定國也」。

帶中ツ日子ノ天皇ハ、仲哀天皇ノ御名ナリ。穴門ハ今ノ長門ノ國ナリ。記傳三十ニ云、「此ノ國の名、書紀崇神ノ卷欽明ノ卷などにも、皆穴門とあり。孝德ノ卷にしも、然あるは、其頃までは、長門とは云ざりしにこそ。（長門とは、何御代に改められしにか、詳ならず。かの穴戸の間長き故に、長門と名られしなるべし。）彼ノ御卷に、詔に今我親神祖之所知穴戸ノ國中云々とあるは、即チ此ノ仲哀天皇の坐々しことなり」。豐浦ハ、今ノ豐浦ノ郡ナリ。記傳ニ云、「宮の地は、帝王編年記に、長門ノ豐浦ノ郡北樹林是也と云り。（此ノ字の上、或は下に、字脫たるなるべし。）源ノ貞世が道行ぶりに云ク、長門ノ國府になりぬ。北濱とて、東南に向て家居あり。此ノ里一むら過て、神功皇后の御社の前に出たり。御社は、南に向たり云々。此ノ御社は、穴門ノ豐浦ノ郡の大内の跡にて侍るとかや。（國府は、和名抄に在豐浦郡と見ゆ。今ノ世に長府と云處なり。此ノ地、豐浦ノ宮の跡なりと今も云ふなり。）」訶志比ノ宮ハ、記傳ニ「和名抄に筑前ノ國糟屋ノ郡香椎ノ（加須比）郷、此ノ地なり。（志を須と云るは、後の訛リなるべし。凡て椎と書き又書紀にも橿日と書れたり。加志比なること決し。）書紀神功ノ卷に橿日ノ浦ともあり。萬葉六（二十二丁）に香椎滷の哥三首あり。香椎廟、今も香椎村にあり」。仲哀紀ニ「二年春二月、幸角鹿、即興行宮而居之、是謂笥飯宮。三月、天皇巡狩南ノ國云々、至紀伊國、而居于德勒津ノ宮、是ノ時熊襲叛之不朝貢、天皇於是將討熊襲ノ國、則自德勒津發之、浮海而幸穴門云々。夏六月、天皇泊于豐浦ノ津、且皇后從角鹿發而行之云々。秋七月、皇后泊豐浦ノ津。九月興宮室于穴門而居之、是謂穴門ノ豐浦ノ宮」トアリテ、八年マデ此ノ宮ニマシマシタル趣ナリ。サテ「八年春正月、幸筑紫云々、到儺ノ縣、因以居橿日ノ宮」トアリテ、九年春二月、天皇、コノ橿日宮ニテ崩リマシケレバ、皇后「竊收天皇之屍付武內ノ宿禰、以從海路遷穴門、而殯于豐浦ノ宮」、又神功紀ニ「爰伐新羅之明年春二月、皇后領群卿及百寮、移于穴門ノ豐浦ノ宮、即收天皇之喪、從海路以向京」トアリ。記傳ニ云、「抑此ノ天皇、書紀に依るに、二年二月、越ノ國紀ノ國と幸してより、倭ノ國には還坐ず、遂に西ノ國に崩坐ぬる故に、豐浦ノ宮又訶志比ノ宮に天ノ下治しとは申せるなり」。

息長帶比賣ノ命ハ、神功皇后ノ御名ナリ。コノ皇后ハ、開化天皇ノ皇子日子坐王ノ玄孫ニシテ、古事記開化天皇ノ條ニ依ルニ、日子坐ノ王ノ御子山代之大筒木ノ眞若ノ王、其ノ御子迦邇米雷王、其ノ御子息長ノ宿禰ノ王、此ノ王娶葛城之高額比賣生子、息長帶比賣ノ命、次虛空津比賣ノ命、次息長日子ノ王トアリ。息長ハ、何レモ地ノ名ニ依レル名ナリ。日子坐ノ王ノ御妻ニ息長ノ水依比賣ト云ヘルモアリテ、記傳廿二ノ六（十二丁）ニ、息長ハ、近江ノ國坂田ノ郡ノ地ノ名ナル由、諸書ヲ引キテ證シタリ。息長帶比賣ノ命ノ御名ニツキテハ、記傳廿二ノ七（十五丁）ニ「息長は、御父の名に同じ。彼地にして生立坐しにやあらむ。書紀ノ此ノ姬命ノ御卷に、六十九年崩云々、是ノ日追尊皇太后曰息長足姬尊と、此ノ御名を後謚の如く記されたれども、然らず。御弟をも息長日子と申しゝかば、此も、生時よりの御名なりしこと著し。彼ノ息長日子の例を以テ思へば、此ノ姬尊も、本は息長日女ノ命と申せしを、崩坐て後に足日女とは加ヘ稱へ申せるやあらむ。帶は、（字は借字にて、）足の意なり」ト云ヒ、又（傳卅一ノ五十五丁）ニ「是日追尊云

云は、いと心得ず。此は、漢國にて葬ッて謚を著る例に倣て書キなされたる、例のしわざなるべし」ト云ヘリ。英國人ちやんばれいん氏ハ、「古代天皇ノ御名ニ後人ノ作爲セル者アルベシ」トテ、其ノ例トシテ「息長足姬ノ尊ト申スハ、此ノ皇后ノ長壽ノ故ヲ以テ上リタル謚號ナルコト明カナリ」ト云ヘルハ、當ラヌ說ナリ。息長ト云ヘル名ハ、神功皇后ニ始マレルナラバ、追號ナラント想像スルモ、理ナキニ非ザレドモ、御高祖ノ御妻ニモ息長ノ水依比賣アリ、御父モ息長ノ宿禰ノ王ト申セバ、皇后及御弟息長日子ノ王ノ御名ハ、唯古代ノ習俗ニ從ヒ、御父ノ名ヲ襲ギタルマデニシテ、何ノ意味モアルニ非ズ。且古代ノ人名ノ十ニ八九ハ、地名ヲ取リテ用ヒタレバ、息長ノ宿禰ノ王モ、其ノ住ミマセル地ノ名ニ依リケンコト、何ノ疑ヒカアラン」。

大后ハ、即皇后ニシテ、後ノ世ニ皇太后ト申ストハ異ナリ。記傳白檮原ノ宮ノ段二十ノ十丁ヨリ十三丁マデニ「字の任に意富岐佐伎と訓べし。後ノ世の皇后なり。古ヘは、天皇の大御妻等を后と申て、其中の最上なる一柱を殊に尊みて、大后とは申せしこと、上卷八千矛ノ神ノ段傳十一三十葉のに云るが如し。されど猶疑ヒあらむ人の爲に、其證どもを擧て、なほ委に云む」トテ、「先ッ古ヘに后とは、一柱に限らす、後に妃夫人などと申す班までを幾柱にても申せり。倭建ノ命ノ段に、弟橘比賣ノ命を其后とありて、又次に坐倭后等云々とあるは、橘比賣をも坐倭をも共に后と申せるなり。倭建ノ命は、萬ッを天皇に准へて申せる例なり。又等と云るを以ても、一柱に限らざることを知べし。されば、書紀反正ノ卷九丁に皇夫人また夫人、敏達ノ卷四丁にも夫人、これらを伎佐伎と訓るは、古ヘにかなへる訓なり。字鏡にも、㛐ハ妃也支佐支とあり。さて其ノ后等の中の第一なるを大后と申せし證は、此處を始メとして、玉垣ノ宮ノ段ニ、其ノ大后比婆須比賣ノ命と見エ、訶志比ノ宮ノ段に、息長帶比賣ノ命を大后と申し、高津ノ宮ノ段に、大后石之比賣ノ命と見エ、又遠ッ飛鳥ノ宮ノ段、朝倉ノ宮ノ段などにも、同く大后と申せり。又書紀天智ノ卷、に天皇御病甚重くならせ給へる時に、天武天皇の儲君に坐けるが、後事を辭申給へる御言に、請奉供業付屬大后云々とある

大后も、皇后倭姬ノ王を申ッたまへるなり。凡て書紀の例は、上代の事を記されたるも、後世の如く漢國の定めに隨ひて、當代の大后をば皇后と書き、御母后をこそ皇太后とは書れたるに、此は、其例に違ひて、たまく當時の實の稱のまゝに、當代のを大后とは書れたるなり。此ノ餘にも、かくとりはづしては、凡ての漢様の例に違ひて、古ヘの稱のまゝに書れたることも、まゝ見えたり。御子をば皇子皇女と書るが凡ての例なるに、をりをりは王とも書れたる類ヒなり。又萬葉二に、近江ノ大津ノ宮ニ御宇天皇聖躬不豫之時、大后奉御歌、また天皇大殯之時大后ノ御歌、また明日香ノ清御原ノ宮御宇天皇崩之時、大后御作歌など見エ、又伊豫ノ國ノ風土記に、天皇等於湯幸行降坐五度也。以大帶日子ノ天皇與大后八坂入姬命二軀爲一度也。以帶中日子ノ天皇與大后息長帶姬ノ命二軀爲一度也云々とある、是レらなり。さて上ノ件の如く、古ヘに大后と申せしは、當御代の第一なる御妻なり。然るを萬ッの御制、漢國のにならひ賜ふ御代となりては、正しき文書などには、當代のをば、皇后、先代のを皇太后と書るゝことゝなれり。されど口に言ッ語、又うちとけたる文などには、奈良のころまでも、なほ古ヘの隨に、當代のを大后、先ノ御代のをば大御祖と申せるを、されば書紀などに、皇太后、皇太妃、皇太夫人などゝあるをば、皆意富美意夜と訓べし。古ヘの稱は、然なり。まことに大御母に坐スを、伎佐伎美賣などゝは申すまじき理なり。然るを書紀諸寧ノ卷に、皇太夫人を意富伊伎佐伎と訓るは、古ヘに叶はず。皇極ノ卷に、天皇の御母吉備姬王を吉備嶋ノ皇祖母命とある、此レぞ、古ヘの稱なる。又續紀九に、藤原夫人を宜文則皇太夫人語大御祖との詔のあるを思ふべし。皇后にまれ、夫人にまれ、太ノ字を加へて、御母の事とするは、漢國の定めにこそあれ、皇國の古ヘには、さることなし。故レ文には漢様を用ひながら、語にはなほ古ヘのまゝに申されしなり。未だ漢籍を取用ひられざりし前の御代には、太妃太夫人など三品の差別にあらざりしかば、大后にまれ、凡の后たちにまれ、御母となり坐ジては凡て大御祖とぞ申せし。孝德紀に、皇極天皇を皇祖母尊と御號奉らるゝこと見えたる、こは、天皇に坐スすら、猶如此申せるを以て、后も夫人も大御祖と申すに、差別はなかりしこと、さとるべし。さて皇極は、孝德の大御姉に坐セシども、大御母に准へて、此御號奉り給へりしなり。さて又こそ、御母と申すことゝなるに、祖母と書れたるは如何と疑ふ人あり。凡て古ヘは、母を多く美意夜と申して、古書どもに御祖と書れば、其例のまゝに祖ノ字を書き、又皇祖尊と書きては、先代天皇にまぎるゝ故に、御母なることを知しめむために、母ノ字をも添へられたる物なり。其後遂に常の語にも、當代の嫡后をばたゞ后と申し、大御母を太后と申すことにはなれるぞかし」。又記傳一之卷書紀の論ひニ「綏靖天皇元年春正月壬申朔己卯云々、尊皇太后とあるたぐひ、此レより次の御代々々もみな此例に記されたり。上ッ代のさまにはあらず。いかにといふに、まづ上ッ代には、大后とは當代の嫡后を申し、大御母命をば大御祖と申せればなり。さて皇后を、其ノ御子の御世に至ッて、際やかに皇太后と御號づけ奉り賜はむことも、上ッ代のさまには非ず。大御母ノ命は、元より大御親に坐ばなり。凡てかゝる御號をさはやかに改めらるゝなどは、もと漢

國の事なり。且某年月日と月日まで記されたるは、ましてa漢なり」トアリ。

品陀和氣ノ命ハ、應神天皇ノ御名ナリ。神功紀ニ譽田別ノ尊ト書ケリ。記傳ニ云、「品陀は、地ノ名にて、今河內ノ國古市ノ郡に譽田村あり。是なり。即此ノ村に此ノ御陵あり。さて此ノ地名、古書には、見えざれども、古き名なるべし、今ノ世にはこんだと呼べども、其は、後の訛リなり。譽ノ字を書クにて本牟陀たること決し。古へは志紀ノ郡に屬けり。御若かりしほど、其地に居住しなるべし、此ノ品陀ノ天皇、品陀眞若王の御女を娶たること、彼ノ御卷に見えたるも、此ノ地に居住しに由あり。さて崩リ坐て、此地に葬奉りしも、初メ居住りし由縁にやありけむ」。

太子ハ、日嗣ノ御子ナリ。古事記上卷天津日繼ノ傳十四ノ三十七丁ニ云、「此は、天津日ノ大御神の大御任を受傳坐て、其ノ大御業を嗣々に知看す由の御稱なり。天武紀に、皇祖等之騰極とある處に、古ニ云フ日嗣也と註せられたり。書紀などには、漢國にて天子と云者の位のうへに用る字を書るをぞ、凡てみなアマツヒツギとよめり。さて此御位を嗣たまふべき儲の皇子を日嗣ノ御子と申し奉るなり。皇太子の字を當つ」。又景行天皇ノ段「若帶日子ノ命與倭建ノ命亦五百木之入日子ノ命此三王負太子之名」トアル傳二十六ノ二十七丁ニ「上ツ御代々々に、日嗣御子と申せるは、皇子たちの中に、取分て尊崇めて、殊なるさまに定め賜へる物にて、其は必しも一柱には限らず、或は二柱三柱も坐シしこともなり。まづは皇后の御腹の御兄、さては殊なる由ある皇子たちなり。かくて御位は、必ズ其ノ日嗣ノ御子の中なるぞ、繼坐ける。然るに漢國にて、王の位を嗣ぐべく定めたる子を皇太子と云故に、其ノ字を取て日嗣ノ御子に用ひたるなり。さるは、遂に御位を嗣ギ坐スが其ノ御子等の中にて、元來は然定メ置キ賜へる物なれば、彼ノ皇太子、よく當りたれ共、彼レは元より一人に限りて定めたる稱、此は、一柱には限らざる御稱なるは、同じからず、異なることあり。されば、ひたぶるに太子ノ字には泥むべからず、上代のさまをよく考ふべきなり。いて其ノ證を具に云むには、先ヅ葺不合の御子たち四柱の中に、五瀨ノ命と若御毛沼ノ命神武天皇と二柱、太子に坐けむこと、又神武天皇の太子は、神八井耳ノ命と神沼河耳ノ命綏靖天皇と二柱にて坐シしこと、共に彼ノ御段傳十八の四五六葉、廿の四十八葉に委く辨へたるが如し。次に書紀崇神ノ卷に、四十八年、豐城ノ命と活目ノ命垂仁天皇と二柱の内を、御夢に因テて嗣に定メ賜へるも、元來此ノ二柱、太子に坐るが故なり。次に垂仁ノ卷に、卅年、天皇詔五十瓊敷ノ命大足彥ノ尊曰汝等云々とある、此レも、此ノ二柱、太子に坐シしが故なり。若シ然らずば、いかでか此ノ二柱に限りて、此ノ詔あらむ。五十瓊敷ノ命の御墓諸陵式に載リて後まで祭リ賜ふをも思ふべし。次に應神ノ卷に、四十年、天皇召大山守ノ命大鷦鷯ノ尊問之曰云々とある、是、又此ノ二柱も、宇遲稚郎子と共に三柱、元より太子に坐スが故なり。故レ其より前廿八年の處にも、太子菟道ノ稚郎子と記され、仁德ノ卷には、初天皇生日、木菟入于產殿云々、則取鷦鷯名以名太子曰大鷦鷯ノ皇子と見え、此ノ記明ノ宮ノ段にも、太子大雀ノ命、姓氏錄雀部ノ朝臣ノ條にも、應神ノ御世、皇太子大鷦鷯ノ尊とあり。此ら皆上代よりの傳ヘ言の隨に記せる文なり。又宇遲ノ若郎子の帝位を固く大雀ノ命に讓避賜ひしも、大雀ノ命は、御兄にて、共に太子に坐スが故なるをや。然るに書紀は、何事も漢國のふりをまねばれたるほどに、皇太子を立ツ賜ふ事なども、上代より全ラ漢國の例の如くに文を造りて記されたるによりて、古ヘの實の趣は、隱れて見えざるが如し。かの天皇の大御母を皇太后と記されたるによりて、當代の嫡后を太后と云し古ヘの趣は、隱れて、人得知らず、また〳〵古書に然あるをも返リて疑ふことになりぬるなど、同じことぞ。然れども又漢ざまなるなべての例に違ひて、古傳のまゝに記されたる事も、をり〳〵見えたる、かの大雀ノ命を太子と記されたるなども、そのたぐひなり。其は心せずふと取リはづして物せられつる物ぞ。されば書紀も、漢めきたる飾のなき處に心をつけ、又此ノ記と比べて、事のさまをよく考へ見れば、隱れたる上代の實のありかたも、いとよく知らるゝことぞかし。然るを延佳が、按三王負太子之名者非爲皇太子、只不同封國諸王之列耳、以日本紀、可併考、凡此ノ記不拘文字、以妃稱后、以薨稱崩、此類固多と云るは、たゞ全ラ漢國にならひ賜へる後の御制、書紀の文とに泥みて、上代の趣を深く考へざるからのひが說なり。凡て後の御制、書紀の文などを執へて、上代の事を論ふは、延佳のみにもあらず、大方世の物知リ人皆同じことにて、此病の直れる人は、未ダ見ず。故今彼ノ言を引出て辨ふるなり。さて今若帶日子ノ命と五百木ノ入日子ノ命とは、大后の御腹の御兄に座シ、倭建ノ命は、初メの大后の御子に坐スが故にぞ、此ノ三柱殊に太子には坐シけむ」トアリ。此ノ日嗣ノ御子ノ論ヒハ、コヽノ品陀和氣ノ命ニハ關ラ

ヌ事ナレドモ、古史ヲ讀ムニハ、必ズ心得置クベキ事ナレバ、此處ニ引出デツ。

如鞆宍生御腕ハ、記傳ニ云、「御胎中より既く此ノ御肉の有て、生坐るなり。知座腹中定國也とあるにて、知べし。生坐たる時に出來たりと云にはあらず。故レ生ノ字は、阿理斯と訓べきなり……。書紀應神ノ卷に、初メ天皇在孕而天神地祇授三韓、既産之宍生腕上、其形如鞆、是肖皇太后爲雄裝之負鞆、故稱其名謂譽田天皇とあり。此は、謂大鞆別尊と云ッべきを、亦ノ御名と紛らかして、謂譽田ノ天皇と誤りたる傳へなり。又右の文の次に、細書に、上古ノ時、俗號鞆謂褒武多焉とあるは、かの譽田ノ天皇は、傳へのまぎれにて、大鞆別なることを辨へずして、推當に注せられたるひがことなり。いと上代より、鞆は登母とのみこそ云へれ、さらに褒武多と云しことは無きをや」。

知坐腹中定國也ハ、記傳ニ云、「國ノ字の上なる定ノ字は、諸ノ本に無きを、己レ今補へつ。然る故は、まづ此に字の脱たること決し。本のまゝにては義理通えがたく、如何とも訓べき由なし。かくて其は、何の字とも今知りがたけれど、舊印本にミクニサダメ玉ハムコトと訓るを思ふに、若シ定ノ字無からむには、サダメ玉ハムとは思ひ寄て訓ムべくもあらざれば、古本に此ノ字ありて、然訓りしが、其ノ字は脱て、訓の殘れりしなるべし。さて定とありて、義理も、よく當れり。故レ此に依て補へつるなり……。國とは、何の國となく、泛く云る言にて、措處は、三韓國なり。皇國を云には非ず。よくせずば、紛ひぬべし。抑外ツ國をしも、たゞに國と云むは、いかゞと疑ふ人もあるべけれど、此は、措ヌところは、三韓なれども、言は、たゞ何れの國とは無くて云なれば、たとへば、國あり、國なしなど云む類の國なれば、外ツ國にても、などか然云へざらむ。其ノ證は、書紀應神ノ卷ノ初に、初天皇在孕而、天神地祇授三韓。既産云々、此に、かの鞆如る御肉の事を云むとての端に授三韓としもあるを思ふべし。仲哀ノ卷に、神託の言に、汝不得其ノ國。唯今皇后始之有胎其子有獲焉。汝とは、仲哀天皇を詔ふなり。其ノ國は、三韓なり。上文にて知らる。また神功ノ卷に、汝王必不得其ノ國。唯今皇后ノ懷姙之子蓋有獲歟、また繼體ノ卷に、夫住吉ノ大神、初以海表金銀之國高麗百濟新羅任那等授記胎中譽田ノ天皇、また自胎中之帝營官家之國、官家之國は、三韓を云。また夫海表諸蕃、自胎中天皇ノ置內官家云々、宣化ノ卷ノ詔に、海表之國云云、自胎中帝、洎于朕身云々などある、皆三韓國を得賜ひし事を神功皇后には係ずして、此ノ胎中之天皇に關て申し、又其ノ胎中天皇と申す御稱は、韓國御向言の事に局りて申す御稱なり。韓國の事に非ずして、たゞ天ノ下所知看ことに、此ノ御稱を申せる例なきを以ても、此に國と云は、皇國には非ることを知るべし。又鞆如る御肉も、もはら御征伐に因れる表なり。鞆は何となく平日に負る物には非ず、又軍には凡人も負る物なれば、國所知看し表には由緣なし。大かた、これらを以て、國は、三韓を指して云ることを知ルべし。定とは、下文に、故是以新羅國者、定御馬甘、百濟ノ國者、定渡ノ屯家などある定にて、征伐服從へて、蕃國とし賜へるを云なり。書紀にも、新羅王云々、高麗百濟二國王云々、永稱西蕃、不絕朝貢故因以定內官家などあり。知は、彼ノ御肉のありしに因て、此ノ御子の御腹ノ中に坐々ながら韓國を征伐定賜ひしことの、生坐る時に知られたるなり」。

次に「其大后息長帶日賣命者、當時歸神。故天皇、坐筑紫之訶志比ノ宮、將擊熊曾ノ國之時、天皇控御琴而、建內宿禰大臣、居於沙庭請神之命、於是大后歸神、言教覺詔者、西方有國、金銀爲本、目之炎耀種種ノ珍寶、多在其國、吾今歸賜其國、爾天皇答白、登高地見西方者、不見國土、唯有大海、謂爲詐神而、押退御琴、不控、默坐、爾其神大忿、詔凡茲天下者、汝非應知國、汝者向一道。於是建內ノ宿禰ノ大臣白、恐我天皇猶阿蘇婆勢其大御琴、爾稍取依其御琴而、那麻那摩邇控坐故、未幾久而不聞御琴之音。即擧火見者、既崩訖」。

當時歸神ハ、記傳ニ云、「大后に神の託著坐るなり……。さて下にも大后歸神とあるを、此處にもかく同じことの有りて重れるは、此なるは、徒なる如く聞ゆめれど、然らず、此ノ大后に神の託て坐々る事は、下文に大后歸神云々とある時のみには局らず、大凡其ノ前後の常の事なりし故に、此は、其ノ前後の平常を先ヅ言セおくなり。當時と云るも、此ノ故ぞかし」。

天皇控御琴ハ、記傳に云、「不服國を言向給はむとして、加此御琴を彈して云々し賜ふことは、凡て上代には、何事を爲賜ふにも、先ッ神の御心を問して、其ノ命を擧行ひ賜へることなれば、此も、此ノ御伐の吉けむ凶

けむを神に問し給ふとなり。此ノ所、書紀はいさゝか異にして、此方より請問給へるには非ずして、神の皇后に託して、御諭のありし趣なり。然れども此ノ記の趣は、控御琴云々とあること、此方より請ヒ給へるさまなり。さて其は熊曾を伐賜はむことを問賜ふとせざれば然神の命を請給ふこと、何の所以ともなし。さて然神の命を請ふには、必ズ琴を彈こどにて、其ノ琴ノ上に其神の降來坐て、人に託りて、命をは詔ふなり」。建内ノ宿禰ノ大臣ハ、記ニヨレバ、孝元天皇ノ皇子比古布都押之信命ノ子ナレドモ、孝元紀ニ「彥太忍ノ信ノ命、是武內ノ宿禰之祖父也」、景行紀ニ「屋主忍雄武雄心ノ命生武內ノ宿禰」トアレバ、子ニハ非ズシテ、孫ナルベシ。武內ノ宿禰ト同日ニ生レマセリト云ヘル成務天皇ハ、孝元天皇ノ五世孫ニマシマセルニ、武內ノ宿禰ハ三世ノ孫ナルハイカヾトモ思ハルレドモ、長子ヲ以テ相繼ギタル五世ノ孫ト幼子ノ裔ナル三世ノ孫ト世ヲ同ジクスルコトハ、世ニ例ナキ事ニ非ザレバ、コノ宿禰ノ世系モ、疑フベキニハ非ズ。宿禰ノ長壽ノ事ニツキテハ、既ニ第一章ニ云ヘリ。沙庭ハ、記傳ニ云、「神を降し請せ奉て、其ノ御命を請ふ場にて、齋清めたる由にて、清場の切りたるなり。書紀神功ノ巻に、爲審神者とあるは、清庭に候ふ人を云るなり」。

大后歸神ハ、記傳ニ云、「上なるは、其ノころの平常を先ヅ云ヒたけるにて、此は、其内にも正しく今數覺給ふ事あるを、分て云るにて、俗に託宣ありてと云が如し」。西方有國ハ、記傳ニ云、「書紀に、即此ノ御諭命に新羅ノ國と見え、此ノ記にも下に御船之波押騰新羅之國云々とあれば、新羅を主として、三韓に渉るべし」。金銀ヲ爲本云々ハ、記傳ニ云、「古ヘには、皇國には金銀を出ざりし故に、書紀神代ノ巻に採天ノ香山之金とあるは、高天ノ原にての事なれば、云べくあらざれども、是レも黄金を云るには非ず。たゞ加泥にて、其品は鐵なり。今其ノ多に有ル國を附屬賜はむとなり。三韓のことを、書紀神功ノ巻、繼體ノ巻に、金銀之國、顯宗ノ巻に、金銀ノ蕃國、武烈ノ巻に、銀郷などあり。かくて其國服歸ひてより、代々調物に必ズ金銀あり。推古紀に、高麗國大興王、聞日本國天皇造佛像、貢上黄金三百兩、皇極紀に、高麗國所貢金銀等云々、天武紀に、新羅調物金銀云々、また新羅貢調金銀云々、別献天皇皇后太子金銀云々、また新羅進調云々、金銀云々、持統紀に、新羅調賦金銀云々など見えたり。大かた用ふるかぎりの金銀、皆韓國より渡せるなり。然るに續紀二に、文武天皇ノ五年三月、遣凡海宿禰麁鎌于陸奥冶金、同月、對馬島貢金、建元爲大寶元年、八月先是遣大倭國忍海郡人三田首五瀨對馬島、冶成黄金云とある、此らぞ、皇國に金の出たる始メなる。さて同十七に、天平二十一年二月、陸奥國始貢黄金、奉幣以造畿內七道諸社と見え、大寶元年のは、いまだ黄金成ざりしにや、貢りしこと見えざるを、此に至て始メて貢りしなるべし。又彼ノ年既に對馬より金を貢ルとあるを此に始メテ貢ルとあるは、陸奥より貢りし始メと云ことか。はた彼ノ對馬より貢りしは、たゞ金とありて、八月云々の處に冶成黄金とあるを思へば、未ダ熟く黄金に成リとゝのはざる金なりし故に、此なる陸奥のを始メとするか。此ノ時の詔に、此ノ大倭ノ國者、天地開闢以來爾、黄金波、人國用理獻言有登毛、斯地者、無物止念部流仁、聞看食國中能東ノ方、陸奥ノ國ノ守從五位上百濟王敬福伊、部內小田ノ郡仁黄金在奏弖獻云々と見え、萬葉十八に、賀陸奥ノ國出金詔書と云長哥あり。右の詔書の事なり。稱德紀にも、天平年中云々、陸奥ノ國馳驛貢小田ノ郡所出黄金九百兩、我が國家ノ黄金、從此始出焉とあり。銀は、天武紀に、三年三月、對馬ノ國ノ司守忍海ノ造大國、言銀始出于當國、即貢上。由是大國授小錦下ノ位。凡銀有倭ノ國、初出于此ノ時。故悉奉諸ノ神祇、亦固賜小錦以上ノ大夫等と見えたり。持統紀に、五年秋七月、伊豫ノ國司田中ノ朝臣法麻呂等、獻宇和ノ郡ノ御馬山ノ白銀三斤八兩鉚一籠、續紀に、紀伊ノ國云々、但阿提飯高牟漏三郡獻銀也などあり。次々に處々より出けるなり。顯宗紀に、銀錢のこと見えたれども、疑はし。たとひそのかみ銀錢を用ひし事ありとも、其は、韓國より渡せる銀なるべし。種種ノ珍寶、多在其國ハ、記傳ニ云、「書紀に即寶國とあり。神功ノ巻にも財寶國、財國、財土など見え、又百濟ノ肖古王開寶藏以示諸珍異曰、「吾國多有是珍寶。欲貢貴國、不知道路、また新羅貢物者、珍異甚多など見え、欽明ノ巻に、大將軍大伴ノ連狹手彥伐于高麗、盡得珍寶貺賂七織帳鐵屋還來なども見えたり」。

茲天ノ下云々ハ、記傳ニ云、「彼ノ寶ノ國を得賜ふことあたはざるのみならず、大かた此ノ御國をも得所知看さじとなり」。向一道ハ、記傳ニ云、「黄泉國に罷坐せとの謂なり。其は天ノ下は、諸道あり、黄泉國は、たゞ一道なりと師の云れたる如く、此ノ食國天ノ下は、四方八方を統て周編きに對へては、何處にまれ、一國は、一方に片偏て編からざる故に、如此詔へるなり……。黄泉國は、根之堅洲國と云て、殊に片隅なる國なれば、一片なることとさらなり」。

此ノ段ノ事、仲哀紀ニ「八年春正月……、到儺ノ縣因以居橿日ノ宮。秋九月、詔羣臣以議討熊襲、時有神託皇后而誨曰、天皇何憂熊襲之不服、是膂之空國也。豈足擧兵伐乎、愈茲國、而有寶ノ國、譬如美女之睩有向津國、眼炎之金銀彩色多其國、是謂栲衾新羅國焉。若能祭吾者、則曾不血刃、其國必自服矣、復熊襲爲服、其祭之、以天皇之御船及穴門ノ直踐立所獻之水田名大田、是等物爲幣也、天皇聞神言、有疑之情、便登高岳遙望之、大海曠遠而不見國、於是天皇對神曰、朕周望之、有海無國、豈於大虛有國乎、誰神徒誘朕、復我皇祖ノ諸天皇等盡祭神祇、豈有遺神耶、時神亦託皇后曰如天津水影押伏而我所見國、何謂無國以誹謗我言、其汝王之如此言而遂不信者、汝不得其國、唯今皇后始之有胎其子有獲焉、然天皇猶不信以强擊熊襲、不得勝而還之。九年春二月、天皇忽有痛身而明日崩、（時年五十二、即知不用神言而早崩、一云、天皇親伐熊襲中賊矢而崩也」）トアリ、又神功紀ノ細書ニ「一云、足仲ツ彦ノ天皇居筑紫ノ橿日ノ宮、是有神託沙麽ノ縣主ノ祖內避高國避高松屋種、以誨天皇曰御孫尊也、若欲得寶ノ國耶、將現授之、便復曰琴將來以進于皇后、則隨神ノ言而皇后撫琴、於是神託皇后以誨之、曰今御孫尊ノ所望之國、譬如鹿角以無實國也、其今御孫ノ尊ノ所御之船、及穴戸ノ直踐立所貢之水田名大田、爲幣能祭我者、則如美女之睩而、金銀多之眼炎國以授御孫ノ尊、時天皇對神曰、其雖神、何謾語耶。何處將有國、且朕所乘船即奉於神、朕乘曷船、然未知誰神、願欲知其名……。於是神謂天皇、曰汝王如是不信、必不得其國、唯今皇后ノ懷姙之子蓋有獲歟、是夜天皇忽病發以崩之」トアリ。記ノ傳ヘトハ異ナル所アレドモ、皇后ニ神ノ憑リマシテ、目ノ耀ク寶ノ國ヲ授ケント宣ヒシコト、天皇、其ノ神ノ御言ヲ信ケ賜ハズシテ、カヽル國ナキヲ神ノ詐レリト宣ヒシコト、其ノ神ノ怒リ給ヘルニヨリテ、天皇ノ忽ニ崩リマシヽコトハ、皆同ジ趣ナリ。但仲哀紀ニ、天皇ノ神託ヲ信ケ給ハザリシコトヲ、八年九月ノ處ニ記シ、九年二月ニ至リテ、「天皇忽有痛身而明日崩」トアルハ、其ノ間、五月モ隔タリテ、「不用神言而早崩」ト云フ意ニ叶ハザル記シ樣ナリ。凡テ紀ノ上代ノ年月ハ、拘ルマジキ者ナルコト、前ニ屢云ヘルガ如シ。又細書ノ一說ハ、古クヨリカヽル異ナル傳ヘノアリシニヤ。又ハ神ノ御怒ニヨリテ崩リマセリト云フ古傳ノ訝シキニツキテ、賊ノ痛手負ヒ給ヒケント推量リタル說ナルベシ。

次ニ「爾驚懼而、坐殯宮更、取國之大奴佐而、種種求生剝逆剝阿離溝埋屎戸上通下通婚馬婚牛婚鷄婚犬婚之罪類、爲國之大祓而、亦建內ノ宿禰居於沙庭、請神之命、於是敎覺之狀、具如先日、凡此國者、坐汝命御腹之御子所知國者也、爾建內ノ宿禰、白恐我大神、坐其神腹之御子、何子歟、答詔男子也。爾具請之、今如此言敎之大神者、欲知其御名、即答詔、是天照大神之御心者。亦底筒男、中筒男、上筒男、三柱大神者也。今寔思求其國者、於天神地祇亦山神及河海之諸神、悉奉幣帛、我之御魂坐于船上而、眞木灰納瓠亦箸及比羅傳多作、皆皆散浮大海以可度」。

坐殯宮ハ、仲哀紀ニ「於是皇后及大臣武內ノ宿禰匿天皇之喪、不令知天ノ下。則皇后詔大臣及中臣ノ烏賊津連、大三輪ノ大友主ノ君、物ノ部ノ膽咋連、大伴ノ武以連曰、今天ノ下未知天皇之崩。若百姓知之、有懈怠乎。則命四大夫領百寮、令守宮ノ中、竊收天皇之屍、付武內ノ宿禰、以從海路遷穴門、而殯于豐浦宮、爲无火殯斂。甲子、大臣武內ノ宿禰自穴門還之、復奏於皇后。是年由新羅ノ役以不得葬天皇也」トアリテ、イト委シ。御腹ニ坐ス御子ノ事ハ、紀ニハ先ノ度ノ神託ノ命ニアリテ、上ニ引ケルガ如シ。何子歟ト云ヘル問答ハ、紀ニハ無シ。坐其神腹ハ、記傳ニ云、「其ノ字は坐ノ字の上にある意に見べし。（坐ス神ノ腹其御子と云意なり。其ノ神と云にはあらず。）さて神ノ御腹とも申せる故は、此ノ大后は、今神の著らせれば、其ノ御身は、即チ神の御身に坐ばなり」。

底筒ノ男、中筒ノ男、上筒ノ男、三柱ノ大神ハ、伊邪那岐ノ大神御禊ノ時ニ生リマセリト云ヒ傳ヘタル神ニシテ、記ニ「三柱ノ神者、墨江之三前大神也」、記傳（六ノ七十一丁）ニ「墨江は、津ノ國の住吉をいへるなり。（住吉を須美與志と唱るは、後世のことにて、那良のころまでは須美能延とのみ云り。まづ此記には、墨江とかき、書紀萬葉には、住吉と書ても須美乃延とよみ、又萬葉に、墨之江、須美乃延など有て、須美與志と云ることは一ツもなし。）……。和名抄、攝津國住吉（須三與之）

郡、神名帳此郡、住吉坐神ノ社四座（並名神大、月次、相嘗、新嘗。）とあり。四座は、私記に、稱四座者、神功皇后坐別殿歟と云り」トアリ。此ノ神社ハ、本同國兎原ノ郡ナル住吉村ノ地ニアリシヲ、後ニ今ノ地ニ移サレタルコト、下ニ云フガ如シ。ソノ外、長門ノ國豐浦ノ郡、筑前ノ國那珂ノ郡、壹岐ノ島壹岐ノ郡、對馬ノ下縣ノ郡ニモ、住吉ノ神社アリテ、皆名神大社ナリ。

眞木灰納瓠云々ハ、記傳ニ云、「此ノ物どもを加此爲ることは、如何なる故、何のためと云こと、知リがたし。さるは、當時にはよく知れたる事なりしか、又は神の御はからひなれば、本より其ノ所以は知リがたきことなりしか。此も又知リがたし。（眞木ノ灰云々を、師は、船中の占かと云れつれど、此レは、神の然せよと教へ給ふなれば、占は由なし。若シくは灰も瓢も、輕くてよく水に浮む物なれば、御船の沈むことなくて、輕く速く行べき意の祝事にもあらむ。比羅傳は、師は魚の食を盛るかと云れつれど、いかゞ。箸と比羅傳とは、海ノ神に御食を手向るにやあらむ。比羅傳をいへば、物盛ことは云はでもしるし」。）

此ノ段ノ事、神功紀ニ「九年春二月、足仲彦ノ天皇崩於筑紫ノ橿日ノ宮。時皇后傷天皇不從神教而早崩、以爲知所祟之神、欲求財寶國。是以命群臣及百寮、以解罪改過、更造齋宮於小山田ノ邑、三月、皇后選吉日、入齋宮、親爲神主、則命武内ノ宿禰令撫琴、喚中臣ノ烏賊津使主爲審神者、因以千繒高繒置琴頭尾而請曰、先日敎天皇者、誰神也。願欲知其名。逮于七日七夜乃答曰、神風伊勢國之百傳度會縣之拆鈴五十鈴ノ宮所居神、名撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命焉。亦問之、除是神有神乎、答曰、幡荻穗出吾也、於尾田吾田節之淡郡所居之有也。問亦有耶、答曰有無之不知焉。於是審神者曰、今不答而、更後有言乎、則答曰、於日向國ノ橘小門之水底所居而、水葉稚之出居神、名表筒ノ男、中筒ノ男、底筒ノ男神有之也。問亦有耶、答曰、有無之不知焉、遂不言且有神矣。時得神ノ語、隨教而祭。然後遣吉備ノ臣ノ祖鴨別令擊熊襲ノ國、未經浹辰而自服焉云々」トアリ。親爲神主ハ、記傳ニ云、「こゝのさまを以て思フに、神主と云稱は、もと此ノ段の如く、神の命を請奉る時に、其神の託て命のりあるべき人を初メより定め設くる、其ノ人を云フ稱にぞありけむ。かくてまた神に奉仕る人を云稱となれるも、神託のために設くる人よりうつれるなるべし」。「以千繒高繒云々」ハ、記傳ニ云、「かく琴頭琴尾に繒を置クは、神の命を請奉る時の常の禮なるべし。波とは布にまれ、絹の類にまれ、凡て織たる物を云名なり。志豆波多と云も、倭文布のことなるにても知べし。されば繒を訓るも、當れり。機具を波多と云は、波多を織る具なるから云にて、末なり」。マタ記傳ニ「撞賢木は、齋賢木にて、伊豆の枕詞なり。神祭る賢木は忌淸むる物なる故に、つゞく。伊豆は、上卷御禊ノ段に云る如く淸淨き意なり。天照大御神は、伊邪那岐ノ大神の御禊し給ひて淸まり座る時に生出坐る故に、伊豆之御靈なり。天疎向津媛と申すは、此ノ國土より天日を仰瞻奉る意の御名なり。幡荻穗出吾也は、心得がたし。吾ノ字、寫シ誤リには非るか。尾田云々も何レノ國の地ノ名ならむ。未ダ思ヒ得ず。さて所居の下、之有の上に、神ノ名脫たり。前後の例もて知べし。其脫たる神ノ名は下文に天照大神の荒魂は、廣田ノ國に、事代主ノ尊は、長田ノ國に、表筒ノ男等三神の和魂は、大津ノ渟中倉之長峽に祭れとある處と相照して思ふに、彼處には、天照大神の次、事代主ノ尊の上に、稚日女ノ尊誨之曰、吾欲居活田ノ長峽ノ國とあるを、此には其神無ければ、稚日女ノ尊なり。橘ノ小門は、伊邪那岐ノ大神の御禊したまひて、彼ノ三柱ノ神の出生坐る地なり」トアリ。サテ又「此ノ記に、右の神たちの中に、於尾田云々所居とある神（稚日女ノ尊なるべし。）と事代主ノ神とは無きは、略ける傳へなり。書紀ノ細書にも、未知誰神、願欲知其名時、神稱其名曰、表筒ノ雄、中筒ノ雄、底筒ノ雄。如是稱三神名、且重曰、吾名向匱男聞襲大歷五御魂速狹騰尊也。時天皇謂皇后曰、聞惡事之言坐婦人乎。何言速狹騰也とありて、（速狹騰ノ尊は、天照大神にて、伊邪那岐ノ大神、天ノ御柱以て天上に登上奉給ひて天上に騰坐る由の御名なり。萬葉にも指上日女之命とあるが如し、さて是レを聞惡事と詔ふは、早く騰ると云ことを忌てなり。貴人の死坐を阿賀理坐と云故ぞ。）彼ノ二神の御名告は見えず。抑天照大御神は、殊に坐せば、申すも更なり。此レをおき奉リては、住吉ノ大神ぞ、此ノ度の事は專行ひつれば、此ノ記には、下文にも其ノ荒御魂を祭リ賜へる事のみ、殊に見えたり。書紀繼體ノ卷に、大住ノ吉ノ大神、初以海表金銀之國、授記胎中譽田ノ天皇とあるも、

此事を專ラ此ノ大神に係て云り。式遣唐使ノ時、奉幣祝詞に、皇御孫ノ尊乃御命以弖、住吉爾辭竟奉留皇神等乃前爾申賜久、大唐爾使遣佐牟止爲爾、依船居無弖、播磨ノ國與理船乘止爲弖、使者遣佐牟止所念行間爾、皇神命以弖、船居波、吾作牟止教悟給比支。教悟給比那我良、船居作給部禮波、悅巳備嘉志美、禮代乃幣帛乎、官位姓名爾令捧賫弖、進奉久止申、臨時祭式に、開遣唐ノ舶居祭（住吉社）云々、右神祇官差使向社祭之、萬葉十九（三十六丁）贈遣唐使歌に、墨吉乃吾大御神、舶乃倍爾宇之波伎座、船騰毛爾御立座而、佐之與良牟礒乃崎々、許藝波底牟泊々爾、荒風浪爾安波世受、平久率而可歛理麻世、毛等能國家爾などあり。凡て異國に關れる事は主と此ノ大神の所知看すなり。又さらでも、なべて海ッ路の平安をも、主と此ノ大神に祈れり。萬葉廿に須美乃延能、安我須賣可未爾、奴佐麻都利、伊能里麻乎之弖、奈爾波津爾船乎宇氣須惠云々など見ゆ。今ノ世にも海路の守ッ神と齋祭ること同じ」ト云ヘリ。

次ニ「故備如教覺、整軍雙船度幸之時、海原之魚、不問大小、悉負御船而渡。爾順風大起、御船從浪。故其御船之波瀾、押騰新羅之國、既到半國。於是其國主畏惶奏言、自今以後隨天皇命ノ而爲御馬甘、每年雙船、不乾船腹、不乾柂楫、共與天地無退仕奉、故是以新羅ノ國者、定御馬甘、百濟ノ國者、定渡屯家。爾以其御杖衝立新羅ノ國主之門、即以墨江大神之荒御魂爲國守神而祭鎭還渡也」。

國主ハ、記傳ニ云、「許爾伎志とも許伎志とも訓へし。からぶみ北史、又杜佑ガ通典などに、百濟ノ王號於羅瑕、百姓呼爲韃吉支、夏言並王也と云り。今書紀を考るに、コニキシ又コキシと訓を附たるは、百濟ノ王のみにして、新羅高麗などの王には、訓を附ケず。然れば此は、百濟ノ王に局れる稱にぞありけむ。さて朝鮮國の三國史記と云物に、新羅の世々の王を記したるを見るに、始メのほどのは、皆某尼師今とあれば、新羅王の號は、尼師今と云しなるべし。然れども此ノ號は、書紀の私記、又釋又今ノ本の訓などにも、見えたる事なければ、今たやすく用ふべきに非ず。故レ姑ク百濟王の號を取て訓るなり。垂仁ノ卷に、任那ノ王、新羅ノ王子など訓る例もなきには非ればなり」。渡ノ屯家ハ、記傳（三十六ノ三十八丁）に「美夜氣は、意富夜氣と云と同じ意ばへなる名にて、もと官所のことなり。其ノ中に、分て此ノ名を負て、諸國處々にありて、屯家と云物は、古ヘは、國々處々に朝廷の御田ありて、田部と云者を役ひて佃らしめて、其ノ御田に成れる稻穀を藏む御倉及其官舍をも合せて、美夜氣と云ひ、又其ノ御田をも包合せて、常に美夜氣と云り」、又此ノ段ノ傳ニ「渡とは、海を渡りゆく彼方に在るを以て云なり。（凡て海を和多と云も渡る意なり。）書紀欽明ノ卷に、海表ノ彌移居、海北ノ彌移家などあり。（此ノ海表海北などをもワタノと訓べし。表ノ字北ノ字などは、意を以テ添へたる物なり。）抑外國なる百濟をしも如此定められたるは、皇國ノ內なる屯家に准へ賜へるなり」トアリ。國守ノ神ハ、記傳ニ云、「韓國を鎭めて、背くことあらせず、遠永に皇朝に服ひ朝貢るべく護賜ふ神なり」。祭鎭ハ、記傳ニ云、「今までは、御船ノ上に令坐奉しを、社を建て、其處に鎭坐しめ給ふなり。鎭まるは、止まる意なり」。

此ノ段ノ事、神功紀ニハ、神ノ御言ヲ受ケ給ヒシ後、吉備ノ臣ノ祖鴨別ヲ遣シテ、熊襲ノ國ヲ言向ケシメ給ヒ、皇后親ラ松峽宮（今ノ筑前ノ國夜須ノ郡栗田村）ニ遷リマシテ、荷持田村（今ノ夜須ノ郡野鳥村）ナル羽白熊鷲ヲ擊チ滅ボシ給ヒ、山門ノ縣ニ幸シテ、土蜘蛛田油津媛ヲ誅シ給ヒ、夏四月、火ノ前ノ國ノ松浦縣ニ幸シテ細鱗魚ヲ鉤リ給ヒ、儺ノ縣ニ還リマシテ儺ノ河ノ水ヲ引シテ、神田ヲ潤シ給ヒシ事ドモヲ記シ、サテ「皇后還詣橿日ノ浦、解髮臨海曰吾被神祇之教、賴皇祖之靈、浮涉滄海、躬欲西征。是以今頭滌海水。若有驗者、髮自分爲兩、即入海洗之、髮自分也。皇后便結分髮而爲髻、因以謂群臣曰……、吾婦女之加以不肖然、然暫假男ノ貌、强起雄略、上蒙神祇之靈、下籍群臣之助、振兵甲而度嶮浪、整艫船以求財土……。秋九月、令諸國集船舶練兵甲。時軍卒難集。皇后曰必神心焉、則立大三輪ノ社、以奉刀矛矣、軍衆自聚。於是使吾瓮海人烏摩呂出於西ノ海、令察有國耶、還曰國不

見也、又遣磯鹿海人名草而令觀、數日還之曰西北有山、帶雲橫絚、蓋有國乎、爰卜吉日、而臨發有日、時皇后親執斧鉞令三軍曰……、既而神有誨曰、和魂服王身而守壽命、荒魂爲先鋒而導師船、即得神ノ教而拜禮之、因以依網吾彥男垂見爲祭神主、于時也、適當皇后之開胎、皇后則取石挿腰而祈之、曰事竟還日產於玆土、其石今在于伊覩ノ縣道邊、既而搖荒魂爲軍ノ先鋒、請和魂爲王船ノ鎭、冬十月、從和珥ノ津發之時、飛廉起風、陽侯擧浪、海中ノ大魚悉浮挾船、則大風順吹、帆舶隨波、不勞櫓楫、便到新羅、時隨船潮浪遠逮國中、即知天神地祇悉助歟、新羅ノ王於是戰戰栗栗、厝身無所、則集諸人曰、新羅之建國以來、未嘗聞海水淩國、若天運盡、國爲海乎、是言未訖之間、船師滿海旌旗耀日、鼓吹起聲、山川悉振、新羅王遙望以爲非常之兵、將滅己國、讋焉失志、乃今醒之曰、吾聞東有神國謂日本、亦有聖王謂天皇、必其國之神兵也、豈可擧兵以距乎、即素旆而自服、素組以面縛、封圖籍、降於王船之前、因以叩頭之曰、從今以後長與乾坤伏爲飼部、其不乾船柁而、春秋獻馬梳及馬鞭、復不煩海遠、以每年貢男女之調、則重誓之曰、非東日更出西、且除阿利那禮河返以之逆流、及河石昇爲星辰而、殊闕春秋之朝、怠廢梳鞭之貢、天神地祇共討焉、時或曰欲誅新羅ノ王、於是皇后曰、初承神教、將授金銀之國、又號令三軍曰勿殺自服、今既獲財國、亦人自降服、殺之不祥、乃解其縛爲飼部、遂入其國中、封重寶府庫、收圖籍文書、即以皇后所杖矛樹於新羅王門、爲後葉之印、故其矛今猶樹于新羅王之門也、爰新羅ノ王波沙寐錦即以微叱己知波珍干岐爲質、仍賚金銀彩色及綾羅縑絹、載于八十艘船、令從官軍、是以新羅ノ王常以八十船之調貢于日本國、其是之緣也、於是高麗百濟二國王、聞新羅收圖籍降於日本國、密令伺其軍勢、則知不可勝、自來于營外、叩頭而歎曰、從今以後永稱西蕃不絕朝貢、故因以定內宮家。是所謂三韓也、皇后從新羅還之、十二月、生譽田ノ天皇於筑紫、故時人号其產處曰宇瀰也」トアリ。

吾瓮ハ、仲哀紀八年ニ見エタル阿閉島ニテ、筑前ノ國糟屋ノ郡ニアリ。今ハ相島ト云フ。磯鹿モ、糟屋ノ郡ニアル島ナリ。今モ志賀島ト云ヒテ、那珂郡ニ屬ス。カノ委奴國王ノ印ノ出デタル所ナリ。姓氏錄攝津ノ國ノ皇別ニ「韓矢田部ノ造、上毛野ノ朝臣同祖、豐城入彥ノ命之後也、三世ノ孫彌母呂別ノ命ノ孫現古ノ君、氣長足比賣、（諡神功）筑紫ノ糟氷ノ宮御宇之時、海中有物、差現古ノ君遣見、復奏之曰、率韓蘇ノ使主等參來、因玆賜韓矢田部ノ造姓、日本紀漏」トアリ。現古ノ君ヲ遣ハサレタルハ、吾瓮海人烏摩呂ヲ遣サレタルト同ジ時ノ事ナルカ。韓蘇ノ使主ハ、韓人ノ名ト聞ユレバ、コノ征伐ニ先ダチテ、彼ノ國ヨリ來朝シタルヲ、現古ノ君率キ參リテ、鄉導ナドニ用ヒラレシカ。但コノ事ハ、記ニモ紀ニモ見エザレバ、覺束ナキ事ナリ。現古ト云フ名モ、何ト讀ムベキカ、知ラズ。コノ氏ノ氏人ハ、氏族志ニ「聖武帝時、有播摩揖寶郡人辛矢田部造米麻呂、後爲僧、曰德道、（長谷寺緣起。）同時又有攝津島上郡人辛矢田部君弓張、（東大寺奴婢籍帳。）君姓、或亦同族也」トアリ。和珥ノ津ハ、集解ニ「考曰、和珥ノ津在對馬島上縣ノ郡豐崎鄉ノ北」トアレドモ、恐ラクハ伊覩若クハ松浦ニアル津ノ名ナルベシ。今考ヘ得ズ。

阿利那禮河ハ、漢書ノ馬訾水、隋書以下ノ鴨綠江ナリ。異稱日本傳ニ「阿鴨也、利綠也、二字略音、那禮三韓ノ河之俗語、見日本紀、即江也、再謂河者、猶佛書梵漢並擧例矣」ト云ヘルガ如シ。但二字略音トハ、鴨綠ヲ略シテ阿利ト云ヘリトノ意ナレドモ、阿利ハ、本ヨリ其ノ地ノ方言ナルヲ、鴨綠ノ二字ニ音譯シタルニテ、鴨綠ノ音ヲ略シタルニハ非ズ。通典ニ「水色似鴨頭、故俗名之」ト云ヘルハ、譯字ニ泥ミタル附會ノ說ナリ。

サテ此ノ御親征ノアリシハ、仲哀天皇ノ崩リマセル年ニシテ、紀ノ年立ニ據レバ紀元八百六十年、漢ノ獻帝建安五年ニ當レドモ、古事記ニ「壬戌六月十一日崩也」トアリテ、其ノ壬戌ノ年ハ、第六章ニ考證シタル如ク、紀元千二十二年、晉ノ穆帝隆和元年ニシテ、三韓ニテハ、新羅ノ奈勿尼師今七年、百濟ノ近肖古王十七年、高

句麗ノ故國原王斯由三十二年ニ當レリ。韓史ニハ、此ノ御親征ノ事、少シモ見エザレドモ、此ヨリ二年後レテ、新羅ノ奈勿ガ九年ニ當リテ、羅紀ニ「倭兵大至、王聞之、恐不可敵、造草偶人數千、衣衣持兵、列立吐含山下、伏勇士一千於斧峴東原、倭人恃衆直進、伏發擊其不意、倭人大敗走、追擊殺之幾盡」トアルハ、此ノ年ノ事ヲ誤リ傳ヘタルニヤ。其ノ事實モ、大ニ違ヒテ、全ク成敗ヲ顚倒セリ。若クハ降服ト云ヘル事ヲ諱ミテ、殊更ニ改メタルニモアルベシ。吐含山ハ、新羅ノ國都ノ東ニアル山ニテ、東覽慶州府ノ山川ニ「在東三十里」トアリ。

波沙寐錦ハ、釋ノ祕訓ニハサムキムトアリ。コノ名ハ、記ニハ見エズ、又韓史ノ王ノ名トモ合ハズ。且新羅ノ王降服ノ處ニハ王ノ名ヲ記サズシテ、微叱己知波珍干岐ヲ質トスル處ニ至リテ、忽チ波沙寐錦ト書キタルヲ見レバ、波沙寐錦ハ、降服シタル時ノ王トハ別人ナルベシ。微叱己知ハ紀ノ訓ニミシコチトアリ。韓史ニハ未斯欣ト書キテ、奈勿尼師今ノ子ナリ。未斯欣ノ來朝シタルハ、奈忽ノ次ナル實聖尼師今ノ時ニシテ、韓史ニ委シク見エタレバ、波沙寐ハ、即實聖ニシテ、其ノ別名ニモアランカ。サテ實聖ノ、未斯欣ヲ送リタルハ、此ノ御親征ヨリ四十年後ノ事ナルヲ、紀ハ、事ノ序ニ誤リテコヽニ記シタルナリ。委シクハ、後ノ第三十六章ニ言フベシ。錦ハ、干ノ轉音カ、又ハ尼師今ノ上略ナルベシ。新井白石ノ史論ニ「錦當讀云尼師今、舊讀錦如字音者訛」ト云ヘレドモ、廣開土王碑ニ「新羅安錦」トモアレバ、和訓ニ依リテ尼師金ト讀ムベキニハ非ズ。

「賚金銀彩色及綾羅縑絹、載于八十艘船、令從官軍」トアルモ、イカヾナリ。記ノ趣ニテハ、コノ時ハ、タヾ新羅ノ國主ノ降服ヲ受ケテ、其ノ朝貢ノ事ヲ約束シ給ヒ、國守ノ神ヲ鎭メ祭リテ還リ給ヘルノミニシテ、其ノ調使ノ始メテ參リシハ、紀ニ據ルニ、コレヨリ五年ノ後丁卯ノ年ナルコト、次章ニ述ブルガ如シ。八十艘船ハ八十ハ、八十神、八十氏人、八十伴ノ緒ノ如ク、數多キヲ云フ常言ニシテ、其ノ貢船ノ多キヲ云ヘルナリ。八十ト云フ數ハ、拘ルベキニアラズ。

又コノ紀ノ文ニハ、漢樣ノ文飾ト見エル所多ケレバ、右ニ引キタルニモ、其ノ文飾ノ著シキ所ハ、省キテ書カヌモアリ。サレドモ、猶彼ノ「時或曰欲誅新羅王」ヨリ「收圖籍文書」マデノ如キハ、漢書高祖紀ニ「諸將或言誅秦王、沛公曰、始懷王遣我、固以能寬容、且人已服降、殺之不祥、乃以屬吏、遂西入咸陽、欲止宮休舍、樊噲張良諫、乃封秦重寶財物府庫、還軍霸上、蕭何盡收秦丞相府圖籍文書」トアルニ依リテ記シタルニテ、古傳ノ趣トハ聞エザレバ、其ノ心ニテ見ルベシ。

又「高麗百濟二國ノ王云々、自來于營外、叩頭而歎曰云々」トアル事ニ就キテ、記傳ニ「然れば此ノ記にも高麗百濟二國王云々の事をも記すべきに、高麗の事は、凡て見えず。百濟も、其王云々と云ことも無くて、只ふと定渡屯家とのみあるは、卒にして由なく聞え、又屯家と定メ賜ふも、書紀の趣は、三國にわたりて聞ゆるを、（繼體ノ卷に、夫住吉ノ大神、初以海表ノ金銀之國高麗百濟新羅任那等、授記胎中譽田ノ天皇。故大后息長足姫ノ尊、與大臣武內ノ宿禰、毎國初置官家、爲海表之蕃屏、其來尚矣、また夫海表ノ諸ノ蕃、自胎中天皇置內官家云々。欽明ノ卷に、奏海表ノ諸ノ彌移居之事。敏達ノ卷に、新羅滅內官家ノ國。これ任那を云り。推古ノ卷に、任那是元我內官家云々などある、皆百濟に、局らず、官家と云り。萬葉、十五に、新羅ノ國に往ことを、須賣呂伎能等保能朝廷等、可良國爾和多流和我世波云々ともあり。）たゞ百濟に局りて云るなど、一わたりは、如何なる如く聞ゆれども、此は、書紀を熟考るに、此ノ御卷四十六年の下に云々、四十七年云々。（通世云、此ノ二條ノ文ハ、次章ニ悉ク引ク故ニ、今ハ略キヌ。）かゝれば、百濟ノ國の朝貢初しは、同ジ御世ながら、遙に後の事にして、新羅ノ國を言向賜へる同ジ時よりの事には非ず。されば此ノ記に定渡ノ屯家とあるも、後の事なるを、新羅を定御馬甘と云る因に、此ノ段に、一ツに連ては語リ傳へたるなり。其ノ王云云と云ことの無きも、此ノ故ぞかし。又高麗ノ國の朝貢しことは、百濟に准へて思ふに、書紀應神ノ卷に、七年秋九月、高麗人百濟人任那人新羅人並來朝とある、是レや、初メならむ。假令此、初メには非ずとも、應神天皇の御世に至ての事なりけむ。されば此ノ

大后の御世の事に非るが故に、此ノ記には、此に其國の事は云ハざるなるべし。大かた百濟高麗などの朝貢初し事は、右の如くなるぞ正しき傳ヘなるべきを、書紀に、此ノ段に二國王云々とあるは、例の撰者の私シに加へられたることゝこそ聞ゆれ。若シ然らずは、彼ノ四十六年の趣と、同ジ御世の中にして、忽チ前後相違へるは、如何ぞや。かの四十六年の文は、甚委曲にして、實に古記の趣と聞えたり。況や高麗ノ國は、百濟より千餘里北ノ方なりと見えて、皇國の今の路程百餘里距て、新羅へはまして遠ければ、此ノ大后の新羅を征賜ふ事を傳へ聞て、さて人を遣て伺はせて、其人の還りて後、其王、新羅の御營まで參らむには、速くとも六七十日を經べし。然るに大后は、十月三日に津島より御船開し給ひて、十二月十四日には、既に筑紫に還リ坐て、御子生坐セりとあれば、新羅ノ國に止り坐シし間は、いくばくもあらじを、其ノ間に、彼ノ王は、いかてかは御營に得參らむ。此レらを以ても、かの段の高麗百濟二國王云々は、撰者の加語なるほどをさとるべし。さて又屯家と定賜へることを、百濟に局りて云る故は、三韓ノ諸國の中にも、彼ノ國は、後まで殊に忠信に親く奉仕リしかば、屯家ノ國とも取分てぞ云けむかし」ト云へり。

三韓ハ、本西漢魏晉ノ世ニ馬韓辰韓弁辰ト云フ三ツノ地方ヲ云ヘル名ニシテ、北方ナル高句麗ハ、三韓ノ外ニアリキ。カレ其ノ三韓ノ地ヨリ興レル新羅百濟ノ二國ト高句麗トヲ併セテ云フ時ハ、韓史ニハ常ニ三國ト云ヒ、新唐書東夷傳ニモ海東三國ト云ヘリ。コノ三國ノ皇國ニ朝貢シタル頃ニハ、馬韓辰韓ノ諸國ハ、大抵百濟新羅ニ併セラレ、弁辰ノ諸國ハ、任那又ハ加耶トノミ云ヒテ、三韓ノ名ハ世ニ聞エズナリツル上ニ、皇國ニテ加羅ト云フ名ハ、任那ノ大加羅ヨリ出デヽ、遂ニ西蕃ノ大名トナリタレバ、コノ三國ヲ三ツノ加羅トモ云ヒテ、三韓ノ字ヲ充ツルコトニナレルナリ。彼ノ國ニテモ、新羅ノ崔致遠ガ說ニ馬韓卞韓辰韓ヲ高麗百濟新羅ニ當テタルヨリシテ、三國ヲ三韓ト云ヒタル事モ、稀ニハ見ユレドモ、皇國ニテ三韓ノ字ヲ用ヒタル

ヨリハ後ノ事ナリ。

サテ又紀ノ細書ニ引キタル一說ニ云「天皇忽病發以崩之、然後皇后隨神敎而祭、則皇后爲男束裝、征新羅。時神導之、由是隨船浪之遠及于新羅ノ國中、於是新羅ノ王宇流助富利智干參迎跪之取王船、即叩頭曰、臣自今以後、於日本ノ國所居神ノ御子、爲內官家、無絕朝貢」トアリ。又一說ニ、新羅ノ王ヲ殺シ給ヒテ、一人ヲ留メテ新羅ノ宰ト爲シテ還リマセルヲ、後ニ王ノ妻、其ノ宰ヲ殺セリト云フ傳ヘアレドモ、其ハ、此ヨリ百餘年前ニ當リテ、筑紫ノ渠帥ヨリ遣シタル將軍ノ、新羅ノ王子于老舒弗邯ヲ殺シタル後、于老ノ妻、又筑紫ノ使臣ヲ誘ヒ殺シタルコトヲ誤リ傳ヘシニテ、既ニ前章ニ引キタレバ、此處ニハ略キヌ。

宇流助富利智干ハ、紀ノ訓ニウルソホリチカトアリテ、カハ于ニ附ケタルウノ誤リト見ユレドモ、ソノ于ハ、モト干ノ誤リニシテ、スベテハ于老舒弗邯ノ轉訛ト聞ユレバ、此ハ、モト次ノ一說ナル皇國人ニ殺サレタル王ノ名ト傳ヘタリシヲ、又誤リテ此ノ一說ニ書キ入レタルナルベシ。

姓氏錄右京皇別ニ「眞野ノ臣、天足彥國押人ノ命ノ三世ノ孫彥國葺ノ命之後也。男大口納ノ命、男難波ノ宿禰、男大矢田ノ宿禰ノ後□從氣長足姬ノ皇尊、(諡神功)征伐新羅、凱旋之日、便留爲鎭守將軍。于時娶彼ノ國王猶楊之女、生二男……。兄佐久ノ命。次武義ノ命。佐久ノ命ノ九世ノ孫知珥部ノ臣鳥、務大肆忍勝等、居住近江ノ國志賀ノ郡眞野ノ村、庚寅ノ年、負眞野ノ臣ノ姓也」トアリ。橋本稻彥ノ校刊本ニ「後ノ字ノ下脫人ノ名。後孫之誤」ト云ヘリ。此ノ說ニ依レバ、鎭守將軍トナレル人ハ、大矢田ノ宿禰ノ子孫ニシテ、其ノ名ハ、佚シタルナリ。新井白石ハ、此ノ鎭將ヲ以テ直ニ大矢田ノ宿禰トシテ、「史注所云留爲新羅宰者、即謂大矢田宿禰也」ト云ヒ、大日本史本紀ニハ、此ノ事ヲ載セザレドモ、彥國葺ノ傳ニ之ヲ附記セリ。然レドモ彼ノ新羅ノ宰ノ事ハ、筑紫ニツキテノ傳說ニシテ、此ノ御征伐ニハ關係ナク、又鎭守將軍ノ事モ、眞野氏ノ家傳ニ局レル者ト見エテ、記紀共ニ記サレ

ザレバ、憶ナル者トハ云ヒ難シ。若シ眞野氏ノ遠祖ニ、實ニ新羅ノ宰トナリシ人アリトセバ、其ハ、彼ノ鰐乘津彥ノ任那ヲ鎭メ守リタリト云フ傳ヘノ如ク、加羅安羅等ノ諸國ヲ悉ク定メ給ヒシ後ノ事ナルヲ、後ヲ前ニ廻ラシテ、皇后凱旋ノ時ト言傳ヘタルモノナルベシ。猶楊ト云ヘル新羅王ノ名モ、韓史ニ見エズ。サテコノ眞野ノ臣ノ裔ハ、三代實錄貞觀五年九月「右京人主計少允眞野ノ臣永德、及同姓道緒等、並賜宿禰」、「大和山邊郡人上野權少掾民首廣門、同姓右京人太宰醫師方永、無位方永等、改賜眞野臣」トアリ。

墨ノ江ノ大神ノ事ハ、記ニハ、其ノ荒御魂ヲ國守ノ神トシテ、新羅ノ國ニ鎭メ祭リ給ヒシ事ノミ記サレテ、長門ノ國津ノ國ナドニ鎭リマセル事ハ見エズ。其ノ事ハ紀ニ、皇后、新羅ヨリ還リマシテ、譽田ノ天皇ヲ生ミ給ヘル後ニ、「於是從軍神、表筒ノ男中筒ノ男底筒ノ男三神、誨皇后曰、我荒魂令祭於穴門ノ山田ノ邑也。時穴門ノ直之祖踐立、津守ノ連之祖田裳見ノ宿禰、啓於皇后曰神ノ欲居之地、必宜奉定、則以踐立爲祭荒魂之主、仍祠立於穴門ノ山田ノ邑、爰伐新羅之明年春二月、皇后領群卿及百寮、移于穴門ノ豐浦ノ宮、即收天皇之喪、從海路以向京……、皇后之船直指難波、于時皇后之船廻於海中以不得進、更還務古水門而卜之、於是天照大神誨之曰、我之荒魂不可近皇居、當居御心廣田國、即以山背根子之女葉山媛令祭、亦稚日女ノ尊誨之曰、吾欲居活田長峽ノ國、因以海上五十狹茅令祭、亦事代主ノ尊誨之曰、祠吾于御心長田ノ國、則以葉山媛之弟長媛令祭、亦表筒ノ男中筒ノ男底筒ノ男三神誨之曰、吾和魂宜居大津ノ渟中倉之長峽、便因看往來船、於是隨神教以鎭坐焉、則平得度海」、又攝津ノ國ノ風土記ニモ「所以稱住吉者、昔息長足比賣ノ天皇ノ世、住吉大神現出而、巡行天ノ下覓可住國時、到於沼名椋之長岡之前、（前者、今ノ神ノ宮ノ南ノ邊是其ノ地。）乃謂斯實可住之國、遂讚稱之云眞住ノ吉ノ國、乃是定神社、今ノ俗略之直稱須美乃叡」トアリ。山田ノ邑ニ祭リ給ヘル神社ハ、神名式ニ「長門ノ國豐浦ノ郡住吉坐荒御魂ノ神社三座（並名神大）」トアリテ、今モ豐浦ノ郡山田村ニアリ。廣田ハ、式ニ「攝津ノ國武庫ノ郡廣田ノ神社（名神大、月次相嘗、新嘗）」トアリテ、世ニ云フ西ノ宮ナリ。活田ハ、「同國八部ノ郡生田ノ神社（名神大、月次相嘗新嘗）」トアリテ、即生田ノ社ナリ。長田ハ「同郡長田ノ神社（名神大、月次相嘗新嘗）」トアリ。大津ノ渟中倉之長峽ハ、記傳ニ云、「和名抄に攝津ノ國兎原ノ郡住吉ノ郷ある、其處にて、今も住吉村と云、本住吉とて、神社もあるなり。住吉村、古ヘ名ぬなくらの里と云しとぞ。此ノ地は、武庫山の支別の、南ノ方へ長く引延たる尾崎にて、まことに長峽と云つべき地なり。今海邊へは、村より七八町あり。さて今の住吉ノ郡なる住吉は、後に移されたるところにて、此ノ渟中倉之長峽とある地には非ず」。

此ノ御親征ノ傳說ニハ、神異不測ノ事ノミ多キニヨリ、儒者タチノ、兎ニ角ニ論ヒテ、種々ナル附會ノ說ヲ立ツル者アリ。新井君美ノ史論ノ如キハ、仲哀天皇ノ崩御ハ疑ハシトテ、オフケナクモ神功皇后ノ弑シ奉リ給ヒシガ如ク臆推シ、「曰、武內宿禰謂帝、以夜召神、及帝俄崩、左右皆無侍者、果其然、則大臣亦與其事乎、曰、吾何知其必不然也、雖然公時年百餘、元老四世、而其輔翼幼主、亦猶有似陳相安漢、狄公復唐者、魏志曰、女王事鬼道、能惑衆、以予觀之、惟其非有神託后、而后能託之神也、安知非后即託斯人而取信於天下哉、不啻一時取信於天下也、雖曰百世、能使天下之人盡信之矣、異哉」ナド、放言セリ。賴襄ノ日本政記ニ此ノ說ヲ駁シテ、「前志記仲哀崩之際、多曖昧者、後世讀者、不免容疑於神功皇后云、賴襄曰、是不容疑者、吾深會其前後事跡、斷知其不容疑也、夫熊襲久雄長西偏、以景行與日本武、前後討伐、而其蟠根餘孽、終不可拔者、蓋倚新羅爲後援也、當時、諸大臣更事如武內者、必有建舍近擊遠之策者、皇后以有籌略、從軍與議、亦右其策、而仲哀銳意誅鋤、不聽而親戰、敗衄病創、創劇終崩、皇后恐諸軍沮喪、賊來乘之、大事去矣、是以與腹心密謀、秘喪不發、留大連守行宮、如天子在狀、深溝高壘、相持不戰、而潛兵急發、以遂行前策、直擣巢窟、奪其倚據、然後熊襲果不攻而下矣、特以蹈海波赴未知之地、衆情所疑懼、故多方託之神明、曰、神告我以寶玉之國、帝不從、故暴殞、當相與勉往取之、皆鼓舞從兵之語耳、史氏從而實其事、皇張誇大、而後人不察、所

以致紛紜也、胎中天皇之稱、已見民望所屬、雖有庶兄之乘變圖自立、未幾就誅夷、攝政數十年、中外無異議可知其事之暴白、當時厭人心、而何必容疑於千載之下」ト云ヘリ。此ノ說ハ、新井氏ノ狂論ニハ遙ニ勝レドモ、熊襲蓋倚新羅爲後援也ト云ヘルハ、少モ憑據ナキ想像ナリ。深溝高壘、相持不戰ト云ヘルモ、事實ニ遠ヘリ。紀ニ「遣吉備ノ臣ノ祖鴨別、令擊熊襲國、未經浹辰而自服焉」トアリテ、直ニ巣窟ヲ擣キテ、其ノ倚據ヲ奪ヒ給ヘルニ由リテ、熊襲ノ下リタルニハ非ズ。多方託之神明ト云フニ至リテハ、新井氏ガ、后能託之神ト云ヘルヲ蹈襲シ、今人ノ心ヲ以テ古人ニ押當テヽ、古傳ヲ强解セントシタルニテ、敬神ノ古俗ヲ知ラザル說ナリ。近藤芳樹ノ征韓紀原（防長國郡志豐浦郡忌宮神社條附錄）ニ云、「熊襲の僞倭王と韓國の王と、互に或は背き或は親みて、年序をへしに、祇摩尼師今が十二年に講和してより、いとむづましくなれるからに、新羅の援けを得て、勢を振ひ、かしこくも朝廷に叛き奉れるを、仲哀天皇、いたく憤りまして、征伐（コトムケ）給はんとせしかど、異國の援兵さへ加はりし熊襲が軍の勢に得勝たまはで、終に崩りましにけり。於是神功皇后、天皇崩御は、神教に戻り給へるゆゑなる事をかしこみおぼしめし、まだ熊襲がかばかり猛かるは、はたして韓國の援あるべしと察らめ給ひ、まづかの國を討滅ぼし、かつは神代の故事を再興し、かつは襲人の羽翼をくじかんとはかりごちて、吉備ノ臣ノ祖鴨別を熊襲が押とのこしおき給ひて、三韓には押渡り給ひたるなりけり」。此ノ說ハ、多方託之神明ト云ヘルヲバ取ラザレドモ、其ノ他ハ大抵賴氏ノ論ニ從ヒタルナリ。

抑新羅國ハ、本辰韓十二國ノ一ニシテ、東韓ノ小部落ナリシガ、昔氏諸王ノ時ヨリ以來、隣近ノ諸小國ヲ幷セテ、版圖漸ク廣マリタレドモ、未ダ慶尙一道ノ半ヲ領スルニ過ギザレバ、其ノ國力ハ、僅ニ加羅百濟ニ抗スルニ足レルノミニシテ、大海ヲ踰エテ、外征ヲ務ムルガ如キ餘力アルコトナシ。又其ノ國ハ東海ノ濱ニハアレドモ、建國以來、海上ノ侵掠又ハ貿易ナド爲セルコト無ケレバ、航海ノ術ハ、其ノ所長ニ非ズ。故ニ羅紀ニ屢倭寇ノ事ヲ記シタルニ、海上ニテ戰ヒタルコトハ、見エズ。儒禮王ガ「倭人屢犯我城邑、百姓不得安居、吾欲與百濟、一時浮海、入擊其國、如何」ト問ヒタル時、舒弗邯弘權ノ對ヘケラク、「吾人不習水戰、冒險遠征、恐有不測之危」ト云ヒ、實聖王ガ「倭人於對馬島置營、貯以兵革資糧、以謀襲我」ト聞キ、「先其未發、揀精兵擊破兵儲」ト謀リシ時、舒弗邯未斯品ノ曰ク、「涉巨浸以伐人、萬一失利、則悔不可追、不若依嶮設關、來則禦之、使不得侵猾、便則出而禽之」ト云ヘルモ、航海ニ長ゼザルガ故ナリ。然ルヲ海ヲ踰エテ熊襲ヲ援ケント云フハ、新羅ノ狀勢ニ通ゼサルカラノ想像ナリ。又近藤氏ガ「祇摩尼師今が十二年に、熊襲の僞倭王と講和してより、いとむづましくなれり」ト云ヘルハ、紀ノ年立ニ依リテ考ヘタル說ナレドモ、此ノ御親征ヲ奈忽王ノ七年ト見レバ、祇摩ノ講和ノ後、奈解助賁沾解儒禮諸王ノ時、屢倭寇アリ、基臨ノ時、復交聘シタレドモ、訖解三十六年、「倭王移書絕交」トアリテ、明年劇シキ攻戰ノ事見エ、訖解ノ次ハ、即奈勿ニシテ、其ノ間ニ講和ノ事見エザレバ、奈勿ノ時ハ、熊襲ト睦シカリシコトアルベカラズ。サレバ援兵ノ說ハ、何レノ點ヨリ考ヘテモ、更ニ憑據ナキ事ナリ。

又異稱日本傳ニ、垂仁天皇ノ時、任那王ニ賜ハリタル赤絹ヲ新羅人ノ奪ヘルニヨリ、二國ノ怨ノ始マリシ事ヲ引キテ、「新羅得罪于我朝、起於此際矣、終至神功皇后得征之、蓋爲任那征之也」、又「任那來貢、我厚賜還之、新羅遮道奪之、自招仇餉之過、我數代先王不征之、神功皇后、靈聖聰明、周行天下、劬勞群庶、愛育萬民、奉天神地祇命、一戎衣問新羅罪……」ト云ヒ、谷川士淸ノ通證ニモ、垂仁紀ナル二國之怨ニ注シテ、「神功皇后討新羅、則實非於此矣」ト云ヘルハ、一應ハサモ聞ユレドモ、仲哀神功紀ニ、任那ノ爲ニ討チ給フ趣ノ少シモ見エザレバ、此ノ說モ、ウケバリテハ云ヒ難シ。

記傳ニ云、「此ノ大后の韓國を征伐（コトムケ）賜へりし事を、儒者どもなどの論（アゲツラ）ひて、新羅、そのかみ皇國に寇（アダ）せしこ

とも聞えず、何てふ罪も無かりしに、故なく征給ふは、唯寶貨を貪賜へるにて、不義の擧無名の軍ぞなど申すなるは、たゞ己が私の心小き智を以て物の義理を定むる例の漢國意にして、眞の道を知ざるものなり。抑此御征伐は、皇神の御心より起りて、悉に神の御所爲なれば、必如此あるべき義理あることにて、其義理は、甚も微妙なる物なれば、さらに人の能測識べき限りに非るを、左右言論ふは、いとも可畏く負氣なき非なり。又垂仁紀に見えたる事に因て、任那の爲に征給ふなりなど云も、漢意にへつらひて、かの無名不義と云難を强てのがれしめむとする私論にて、神の御誨なることをば忘れたるものなり」。カク神託ヲ固信シテ、其ノ是非ヲ議スルコトヲ禁ムルハ、純正神道ノ本旨ナルベケレドモ、史學者ハ、サテ已ムベキニモアラザレバ、當時ノ事情ヲ追究シテ、神託ノ起レル理由ノ考ヘラルヽ限ハ考フベキ事ナリ。

抑上代ニ外國人ノ皇國ニ參來シ事ノ、史ニ見エタルハ、新羅ノ王子天之日矛ニ始マリテ、次ニ加羅ノ王子都奴我阿羅斯等來朝シ、日矛ノ裔淸日子多遲摩毛理ハ、垂仁天皇ニ仕奉リ、多遲摩毛理ハ、天皇ノ命蒙リテ、常世ノ國ニ使シタル事モアレバ、海外ニ國アルコトハ、已ニ世ニ聞エタル事ナルベシ。特ニ神功皇后ハ、多遲摩毛理ノ弟多遲摩比多訶ノ女ヨリ生レサセ給ヒ、又日矛ノ苗裔ニテ、皇后ノ外戚ナル伊覩ノ縣主ノ祖五十迹手ハ筑紫ニ幸セル時參迎ヘテ船ヲ献レル事ナドアリキ。然ルヲ彼ノ神託ノ時ニ、天皇ノ「朕周望之、有海無國」ト宣ヘリト云ヘル傳說ハ、實ラシカラヌ事ナリ。ヨシヤ天皇ハ、外國ノ事ヲ信ジ給ハデオハシツト見ルトモ皇后ハ、必新羅ノ國アル事ヲモ、其ハ、珍寶ノ國ナル事ヲモ、委シク知食シヽナルベシ。今度ノ西幸ノ目的ハ熊襲ノ征伐ニアレドモ、本是西略ノ大業ニシテ、熊襲ノミニ限レル事ニアラザレバ、皇后ノ御意ニ、膂之空國ヨリハ珍寶ノ國ヲコソト熱心ニ思召シタルヨリ、彼ノ神託ノ起リシニゾアリケン。凡テ神託ハ、敬神ノ心篤キ人ノ誠意熱心ヨリ生ズル顯象ニシテ、自ラモ何ヲ言ヒタルカヲ知ラザル程ナレバ、マシテ聞ク人ハ決シテ其ノ人ノ言トハ思ハズ、實ニ神ノ命ナリト信ズルナリ。サレバ天皇ノ卒ニ崩リマセルハ、如何ナル御痛身ニ依レルカハ、知ル由ナケレドモ、當時ノ人情ニテ、神ノ命ヲ用ヒ給ハヌ故ト思フハ、然ルベキ事ニシテ、皇后ノ外征ニ御心決メ給ヒシモ、偏ニ神ノ命ヲ畏ミ給ヘルガ故ナルベシ。

サテ此ノ御征伐ノ是非ヲ議スルハ、誠ニ負氣ナキ事ナカラ、若シ無名ノ軍ナラバ、イカニ神ノ命ト信ジ給ヘリトモ、決シテ義擧トハ申サレマジ。サレドモ皇國ノ版圖ハ、初メヨリ大八島ト定レルニ非ズ、東西ノ疆界モ明カナラザリシヲ、太祖以來列聖ノ經略ニ依リテ、漸次ニ擴張シタルニテ、兩吉備津彥ノ命ノ吉備ノ國ヲ言向給ヒシモ、景行天皇ノ筑紫ノ島ヲ平ゲ給ヒシモ、此ノ皇后ノ新羅ノ國ヲ懷ケ給ヒシモ、同ジク西略ノ雄圖ニシテ、其ノ間ニ大ナル差別アルニアラズ。御稜威ノ及バン限リ、皇化ヲ施シテ、仁澤ニ霑ハシムルハ、列聖ノ繼述シ給ヘル盛德大業ニシテ、イカデカ之ヲ不義ノ擧トハ申スベケン。小ノ大ニ事リ、大ノ小ヲ字ムハ自然ノ道ナリ。當時諸韓ノ地ハ、新羅百濟ヲ始メテ、アマタノ小國分立シテ相爭ヒ、統一スル所ナク、大國ノ鎭撫ヲ假ルニ非ズバ、其ノ民一日モ寧處スルコト能ザル有樣ナリシカバ、此ノ御征伐ノ結果ハ、畢竟韓民ノ幸福ヲ進メタル者ナリ。其ノ貢賦ヲ課シ給ヘルハ、蕃國ノ常職ヲ致サシメ給ヘルニテ、珍寶ヲ貪リ給ヘリト申スベキニハ非ズカシ。日韓古史斷ニモ、コノ事ヲ論ジテ、「司馬晉すでに三國の分裂を合併し、太康元康の際大陸小康を得たりと稱す。而鮮卑諸胡環視して塞を伺ひ、蕭牆の內、禍すでに伏せり。故に數年ならずして、晉室紛亂し、中原を擧げて、五胡の割裂呑噬に供するに至れり。此の大陸の劇變、豈半島を震動せずしてやまんや。高麗百濟（夫餘ノ誤リ）は、實に慕容部の兵を被り、國勢一頓、たま〳〵新羅をして隣邦の弊に乘じて、自己の强大を致さしめたり……。皇后謀を定め、急に新羅を襲ひ……、百濟尋いて來り服し、高麗亦命を奉じ、半島諸國、天朝の威力を仰がざるなく、其の民因て各其の主を戴き、其の地に安ぜり。若

し之なくんば、北人强暴、南侵底止する所なく、諸國の定まらざるは、支那南北の亂離よりも甚しからん。是豈獨本朝三百年の隆運を啓けるのみならんや、亦半島の幸慶なり」ト云ヘリ。

サレバ此ノ御軍ハ、小國ヲ綏撫シ給フ義擧ニシテ、ソヲ窘メ辱ムル御爲ニハアルマジキニ、記ニ新羅ノ國者定御馬甘トアルハ、イカヽ。記傳ニ「かく定メ賜ふことは、彼ノ王が祈白せし語の中にあれば、此は、本彼方より申シ出たる事か。但シ其ノ上ノ文に隨天皇ノ命ノとあれば、此方より仰せ賜へるを諾奉リて申せるかとも聞えたれど、命の隨とは、凡てに係りて、服從ふべき由を申せるにて、御馬甘とならむとは、なほ彼方よりぞ申シ出ヅつらむ。抑あるが中にも殊に卑き此ノ職をしも仕奉ラむと申せる故は、ひたぶるに深く厚く服從ふ由なり」ト云ヘレドモ、假令彼方ヨリ申シ出デタリトモ、一國ノ王ニカクマデ卑シキ職ヲ仰セ給フベキ筈ナシ。紀ニ「長與乾坤、伏爲飼部、其不乾船柁、而春秋献馬梳及馬鞭」トアリテ、馬梳馬鞭ヲ献ルハ、飼部タル印ト見ユルニ、此ノ後ノ御世々々ニ新羅屢朝貢シテ、貢物ノ名モ時々記サレタレドモ、馬梳馬鞭ノ事ハ見エズ。又繼體紀欽明紀等ニ據レバ、新羅モ、百濟任那ト共ニ彌移居トコソアレ、飼部ト云ヘルコトハ、紀中ニ見エザレバ、定御馬甘ト云ヘル傳ヘハ、恐ラクハ事實ニアラジ。後世新羅ノ離叛ヲ惡ミ、且皇后ノ御稜威ヲ欽慕スル餘リニ、新羅屈服ノ狀ヲ誇說セル後人ノ加語ナルベシ。大日本史新羅傳ノ註ニ「按八幡愚童訓、太平記曰、皇后以弓弰畫石上曰、新羅王、日本犬、按皇后征新羅、非問罪之師、止降服朝貢耳、不應辱國王如此甚、二書所載、未知何據」ト云ヘリ。此ノ愚童訓ノ說ナドモ、外國ノ王ヲ戮辱スルコトヲ、ヒタスラニ武キ御所爲ト心得タルニテ、御馬甘ノ傳ヘヨリモ一層甚シキ誣說ナリ。

第三十一章　百濟ノ服屬

神功皇后ノ新羅ヲ征ケ給ヒシ後、新羅百濟ノ朝貢シタル趣ハ、神功紀ニ委シク見エタレバ、次々ニ其ノ文ヲ擧グ。先ヅ攝政五年ノ處ニ、新羅ノ質子微叱許智ノ逃レ歸レル記事アレドモ、ソハ、應神天皇ノ御世ノ末年ノ事ノ紛レト見ユレバ、第三十六章ニ至リテ言フベシ。

次ニ、「四十六年春三月乙亥朔、遣斯摩宿禰于卓淳ノ國、斯摩ノ宿禰者、不知何姓人也。於是卓淳ノ王末錦旱岐告斯摩ノ宿禰曰、甲子ノ年七月中、百濟ノ人久氐、彌州流、莫古三人、到於我土曰、百濟ノ王聞東ノ方有日本貴國、而遣臣等、令朝其貴國、故求道路、以至于斯ノ土、若能敎臣等、令通道路、則我王必深德君王。時謂久氐等曰、本聞東有貴國、然未曾有通、不知其ノ道、唯海遠浪嶮、則乘大船、僅可得通、若雖有路津、何以得達耶、於是久氐等曰、然、即當今不得通也、不若更還之備船舶而後通矣、仍曰若有貴國ノ使人來、必應告吾國、如此乃還、爰斯摩ノ宿禰、即以傔人爾波移與卓淳ノ人過古二人、遣于百濟ノ國、慰勞其王、時百濟ノ肖古王、深之歡喜而厚遇焉、仍以五色ノ綵絹各一匹、及角ノ弓箭幷鐵鋌四十枚幣爾波移、便復開寶ノ藏、以示諸珍異、曰吾國多有是珍寶、欲貢貴國、不知道路、有志無從、然猶今付使者、尋貢獻耳、於是爾波移奉事而還、告斯摩ノ宿禰、便自卓淳還之也」。

神功紀ノ攝政四十六年ト云ヘル年ハ、丙寅ノ年ナリ。コレヨリ以下、百濟ニ關スル數條ノ記事ハ、何レモ百濟記ノ干支紀年ニ據リテ、彼ノ攝政元年ノ後ニテ、其ノ干支ニ當レル年ヲ求メ、幾年ト數ヘテ記シタル者ナレバ、其ノ幾年ト云ヘルハ、泥ムベカラザルコトナレドモ、其ノ干支ハ、大抵正シキ者ナリ。コノ丙寅ノ年ハ、紀ノ年紀ニテハ、紀元九百六年ナレドモ、其ノ實ハ、ソレヨリ百二十年ノ後ナル紀元千二十六年ト云フ丙寅ノ年ニシテ、仲哀天皇ノ崩年壬戌ヨリ四年ノ後、即應神天皇御年五歲ノ時ナリ。卓淳王ノ語ニ甲子ノ年ト云ヘルハ、丙寅ノ年ヨリ二年前ニシテ、征韓ノ役ノ翌々年ナリ。征韓ノ條ニ高麗百濟二國王ノ降服ヲ記シタ

ルハ撰者ノ加語ナルコト、前章ニ記傳ヲ引キテ言ヘルガ如シ。サテ百濟王ノ朝貢ヲ思ヒ立チシハ、新羅ノ降服ヲ傳ヘ聞ケルニ由リシ事ニシテ、紀ノ年紀ノ如ク、四十餘年ヲ隔ツベキ事ニ非ザレバ、壬戌ノ年ニ彼ノ役アリテ、甲子ノ年ニ使ヲ出シタルハ、事情ニ於テ然ルベキコトナリ。背古王ハ、背ハ、肖ノ誤リニテ、濟紀ノ第十二代近肖古王ナリ。韓史ニテハ常ニ近ノ字ヲ冠スルハ、第五代ノ肖古ニ別タンガ爲ナリ。津ノ連眞道等ノ上表ニ「降及近肯古王、遙慕聖化、始聘貴國、是則神功皇后攝政之年也」ト云ヘルハ、即コノ時ノ事ニシテ、甲子ノ年ハ、近肖古ノ十九年、丙寅ノ年ハ、近肖古ノ二十一年、使者ノ愈來朝シタルハ、次ノ條ニ見ユル如ク、丙寅ノ翌年丁卯ナリ。

卓淳ハ、釋ニ「任那ノ國之別種也」トアリテ、祕訓ニトクシユト訓メリ。其ノ國ハ、百濟ヨリ皇國ニ至ル要路ニ當レリト見ユレバ、今ノ泗川縣昆陽郡ノ邊ニヤト思ヘドモ、未ダ其ノ證ヲ得ズ。

彌州流ノ州ハ、釋ノ祕訓ニ音都トアリ。爾波移ノ移ハ、釋ニ「私記云、音野」トアリ。

鐵鋌ハ、紀ノ訓ニネリカネ、和名抄ニ「銕、和名久路加禰、一訓禰利」、本草類編ニ「生鐵、和名禰利加禰」トアリ。說文ニ「鋌銅鐵樸也」トアレバ、鐵鋌ハ、生鐵ノ義ナラン。韓地ニ鐵ヲ產スルコトハ、魏志東夷傳弁辰ノ條ニ「國產鐵、韓濊倭從取之」トモアリ、下文ニモ百濟ノ谷那鐵山見エタリ。

次ニ「四十七年夏四月、百濟ノ王使久氐彌州流莫古令朝貢、時新羅ノ國ノ調ノ使與久氐共詣、於是皇太后、太子譽田別ノ尊大歡喜之曰、先王ノ所望國人、今來朝之、痛哉不逮于天皇矣、群臣皆莫不流涕、仍檢校二國之貢物、於是新羅ノ貢物者、珍異甚多、百濟ノ貢物者、少賤不良、便問久氐等曰、百濟ノ貢物、不及新羅、奈之何、對曰、臣等失道至沙比新羅、則新羅人捕臣等、禁囹圄、經三月而欲殺、時久氐等向天而呪詛之、新羅人怖其呪詛而不殺、則奪我貢物、因以爲己國之貢物、以新羅ノ賤物相易、爲臣國之貢物、謂臣等曰、若誤此辭者、及于還日、當殺汝等、故久氐等恐怖而從耳、是以僅得達于天朝、時皇太后、譽田別ノ尊、責新羅ノ使者、因以祈天神曰、當遣誰人於百濟、將檢事之虛實、當遣誰人於新羅、將推問其罪、便天神誨之曰、令武內ノ宿禰行議、因以千熊長彥爲使者、當如所願、（千熊長彥者、分明不知其姓人、一云武藏國ノ人、今是額田部槻本ノ首等之始祖也、百濟記云職麻那那加比跪者、蓋是歟也、）於是遣千熊ノ長彥于新羅、責以濫百濟之貢物」。

四十七年ハ、丁卯ノ年ヲカク數ヘタルニテ、丁卯ノ年ハ、紀元千二十七年、百濟ノ近肖古王二十二年、新羅ノ奈勿尼師今十二年ナリ。新羅ハ、壬戌ノ役ニ朝貢ノ國トナリ、百濟王ハ、甲子ノ年ニ朝貢ヲ思ヒ立チシガ、此ノ年ニ至リテ、二國ノ調使、共ニ始メテ來朝シタルナリ。皇太后ノ大ク歡バシテ、「先王所望國人、今來朝之」ト宣ヘルハ、正シク二國ノ朝貢ヲ始メテ受ケ給ヘル趣ナリ。先王ハ、仲哀天皇ヲ申シ奉レルナリ。仲哀天皇ノ、神ノ敎ヲ信ケ給ハズシテ、西ノ方ニ國ハ見エズト宣ヘリト云ヘル傳說ハ、コヽノ傳說ト全ク矛盾セリ。カノ傳說ハ、天皇ノ忽ニ崩リマセルニ由リテ、神ノ命ヲ用ヒ給ハヌ故ト推量シ奉レルヨリ出デタル者ニシテ、西國ノ朝貢ハ、天皇モ固ヨリ望ミ給ヒシヲ、得果サズシテ崩リマシヽナリ。

佐比新羅ト云フハ、イカナル義カ。モシ佐比ハ地名ナラバ、新羅ノ佐比トアルベキニ似タリ。天智紀二年ニ新羅ノ沙鼻城トアルハ、之ト同ジキカ異ナルカ。書紀集解ニ、新羅ノ二字ヲ刪リテ、「上文所謂鉏〇比ノ下原有新羅ノ二字衍」ト註シタルハ、武斷ナリ。

此等ノ記事ハ、大抵百濟記ニ據リテ、少シク修飾シタル者ニシテ、千熊長彥ナドモ、原書ニハ職摩那那加比跪ナドアリシヲ、皇國語ニ改メタルナルベシ。原註ニ「千熊長彥者云々」トアルハ、後人ノ加筆ナリ。サレドモ此ノ加筆ノ文モ、イト古キ物ニシテ、百濟記ノ未ダ世ニ存セシ頃ニナレルナレバ、紀ノ編者ノ材料ニ用ヒタル原書ノ樣ヲ知ルニハ甚必要ナル者ナリ。職麻那那加比跪ハ、釋ノ祕訓ニシマナナカヒクトアレド

モ、職麻那ハ、シクマナニテチクマノノ訛リ、那加比跪ハ、ナカヒコニテ、ナガヒコノ訛リナルベシ。額田部ハ、神代紀天ノ石窟ノ段第三ノ一書ニ「天津彥根ノ命、此茨城ノ國ノ造、額田部ノ連等遠祖也」、古事記ニ「天津日子根ノ命者、凡川內ノ國ノ造、額田部ノ湯坐ノ連……等之祖也」、姓氏錄神別天孫ノ部ニ、額田部ノ湯坐ノ連、額田部、額田部ノ河田ノ連ナドアリテ、何レモ天津彥根ノ命ノ後トアリ。又神別天神ノ部ニモ額田部ノ宿禰、額田部ノ聰玉、額田部ナド云フ氏アリテ、明日名門ノ命ノ後ト云ヘリ。榎本ノ首ト云フ氏ハ、見エズ。氏族志蕃別漢土大友氏ノ條ニ、榎本ノ村主、榎本ノ連、大友ノ榎本ノ連ナド見エタレドモ、ソレラハ、漢ノ献帝ノ裔ト稱スル大友ノ村主ノ族ト見ユレバ、首姓ナルトハ別族ナリ。氏族志ニハ、額田部ノ榎本ノ首ヲ一ツノ氏トシテ、出自不明者ト云フ部ニ收メタリ。

サテ日本紀ニ後人ノ加筆アルコトハ、伴信友氏ノ比古婆衣ニ云「欽明天皇紀二年の處御子たちの御名を記されたる分註に、一書云云々と有りて、其ノ下文に、帝王本紀多有古字、撰集之人、屢經遷易、後人習讀、以意刊改、傳寫既多、遂致舛雜、前後失次、兄弟參差、今則考覈古今、歸其眞正、一往難識者、且依一撰、而注詳其異、他皆效此と注ルされたるに依りて案ふに、此文、この紀の凡例として見ルべし……。巻の初メつかたに有ルべきを此處にしも有ルは有ルが中に、こゝなる一書の文は、殊に多きによりて、前後をかれて、因に凡ての例を記されたりと聞えたり。註に、一書曰、一書云、一云 又云ともあり。又その一書の中に亦云、一云といへる文もあり。など有は、依一撰而注詳其異と記されたる異傳にて、神代ノ紀にも、其例にて、三様に書れたり。三様に記されつる事は、只何となき筆すさびに非ずて、決めて裏に心しらひして、其ノ差別を書分られつる物なるべし。但し天武紀二年の下に一ニ云ク云々とある一處のみはいかゞ。此は、必ズ一本ニ云とあるべき處なり。本ノ字の脫たるものなるべし。此餘に、某者云々也、是謂云々、亦ノ名云々、此云云々などある訓註は、原よりの紀の文にて、其ノ餘は、多くは、後ノ人の加筆なるべし。舊本云、一本云、或本云、或云、別本云などもあるは、本ツ書にしか記さるべきに非ず。極めて後ノ人の、異本を校合て書キ入レたりと見ゆ。中には、和銅上奏の本もあるべし。又加筆の本文に攙入たりと見ゆる處もあり。神代紀なるは、山陰に論はれたり。其論ひざまによりて、全部を辨ッべし。さて神代紀には、書名を顯はして引たる文なきを、神功紀より以下は、引キ書の名を出シたる處あり。其引書には、日本舊記、伊吉ノ連博德ノ書、譜第、百濟記、百濟本記、百濟新撰、高麗ノ沙門道顯ガ日本世紀など見えたる、これなり。すべて書ノ名を顯はして注さるゝ例に非ざれば、これも後人の加筆なること決し。神功紀の文中に、漢籍魏志を引たるのみにて、年紀をしたる處あるは、後ノ人のわざなること論ふまでもなく、また傍書に、從新羅至社稷、淸本爲疏、猶可見他本と書たる類の處も、これかれありて、いはゆる疏か本文に攙たりとおもはるゝ處もあり」。

次ニ「四十九年春三月、以荒田別鹿我別爲將軍、則與久氐等共勒兵而度之、至卓淳、因將襲新羅、時或曰、兵衆少之、不可破新羅、更復奉上沙白蓋盧、請增軍士、即命木羅斤資沙沙奴跪是二人、不知其姓人也、但木羅斤資者、百濟將也、領精兵、與沙白蓋盧共遣之、俱集于卓淳、擊新羅而破之、因以平定比自㶱、南加羅、㖨國、安羅、多羅、卓淳、加羅七國、仍移兵西廻、至古奚津、屠南蠻、忱彌多禮、以賜百濟、於是其王肖古及王子貴須、領軍來會、時比利、辟中、布彌支、半古四邑、自然降服、是以百濟ノ王父子、及荒田別、木羅斤資等、共會意流ノ村、今云州流須祇相見欣感、厚禮送遣之、唯千熊ノ長彥與百濟ノ王、至于百濟ノ國、登辟支ノ山盟之、復登古沙ノ山、共居盤石ノ上、時百濟ノ王盟之曰、若敷草爲坐、恐見火燒、且取木爲坐、恐爲水流、故居盤石而盟者、示長遠之不朽者也、是以自今以後、千秋萬歲、無絕無窮、常稱西蕃、春秋朝貢、則將千熊長彥至都下、厚加禮遇、亦副久氐等而送之」。

四十九年ハ、己巳ノ年ヲ云ヘルニテ、紀元千二十九年、百濟ノ近肖古王二十四年、新羅ノ奈勿尼師今十二年、應神天皇御年八歲ノ時ナリ。

荒田別ハ、崇神天皇ノ皇子豐城入彥ノ命ノ胤ニシテ、應神紀十五年ニ、上ッ毛野ノ君ノ祖荒田別、姓氏錄皇別ニ豐城入彥ノ命ノ四世ノ孫大荒田別ノ命トアリテ、上ッ毛野ノ朝臣、佳吉ノ朝臣、池原ノ朝臣、桑原ノ公、川合ノ公、

商長ノ首、大野ノ朝臣、田邊ノ史、佐自努ノ公、廣來津ノ公、止美ノ連、韓木、伊氣ナド、皆コノ人ノ裔ナリ。鹿我別ハ、荒田別ノ命ノ弟ニモアランカ。國造本紀ニ「浮田ノ國ノ造。志賀ノ高穴穗ノ朝、瑞籬ノ朝ノ五世ノ孫賀我別ノ王定賜國ノ造」トアリ。高穴穗ノ朝ハ、成務天皇ノ御世、瑞籬ノ朝ハ、崇神天皇ヲ申シタルナリ。成務天皇ノ御世ヨリコノ年マデハ、十餘年ニ過ギズト覺ユレバ、賀我別ノ王ハ、即此ノ鹿我別ナリ。崇神天皇ノ五世ノ孫ト云ヘル世數モ、合ヘリ。

沙白蓋盧、木羅斤資、沙沙奴跪ノ三人ハ、其ノ名ノサマヲ見レバ、韓人ノ如クナレドモ、ヨク思ヘバ、皆皇國人ナリ。沙白蓋盧ハ、荒田別ノ命ノ命ヲ受ケテ、歸朝シテ軍士ヲ増サンコトヲ請ヒ奉レル重要ノ使者、木羅斤資沙沙奴跪ハ、勅命ヲ受ケテ、精兵ヲ率キテ應援ニ赴キタル將帥ナリ。カヽル重大ノ事ニ韓人ヲ用ヒラルベキ筈ナシ。木羅斤資ノ子ヲ、應神紀ニ大倭ノ木滿致ト記シタレバ、皇國人ナルコト、論ナシ。註ニ「木羅斤資者百濟ノ將也」トアルハ、名ノ韓メカシキニヨリテ、後人ノサカシラニ書入レタルナリ。コレラノ名ハ、皆百濟記ノ原文ニ依リタルニテ、上ノ職麻那那加比跪、下ニ見ユル沙至比跪ノ類ナルヲ、皇國風ノ眞ノ唱ヘノ知レザル故ニ、原文ノ儘ニ書キタルナリ。沙沙奴跪ハ、釋ノ祕訓ニササトクトアレドモ、奴跪ハナコニテササノコナド云ヘル名ノ訛リニヤアラン。

比自炑ハ、釋ニヒシホト訓メリ。三國史記羅紀ニ見エタル比只國ハ、同書地理志ノ比自火郡ニテ、今ノ昌寧縣ナリ。コノ國ハ、羅紀ニヨレバ、婆娑尼師今ノ時、一旦新羅ニ併セラレタリシガ、今ハ皇軍ニ服從シテ、コレヨリ任那諸國ノ一トナレリ。

南加羅ハ、私記ニ阿利比志ト訓メリ。カノ地ノ方言ナルベシ。其ノ國ハ、名ニヨリテ思ヘバ、大加羅國若クハ加羅諸國ノ南ニ當リテ、今ノ巨濟島或ハ南海島ヲ云ヘルカ。東覽巨濟府ノ山川ニ加羅山云々トアリ。

喙ノ國ハ、釋ハトクノクニト訓メリ。日韓古史斷ニ押督國ナラント云ヘレドモ、押督ハ、今ノ慶山縣ニシテ、慶尚道ノ中程ニアリテ、任那ノ域內ニ入リシ處トハ思ハレネバ、ソレヨリ南ニヨレル處ナルベシ。但ソノ地ハ、未ダ考ヘ得ズ。

安羅ハ、廣開土王碑ニモ安羅ト見エ、三國史記勿稽子傳ニ阿羅、東國通鑑ニ阿羅伽耶トアル所ニテ、今ノ咸安郡ナリ。

多羅ハ、三國史記地理志ニ「江陽郡、本大良（一作耶）州郡、景德王改名、今陝州」トアル所ニテ、今ノ陝川郡ナリ。

加羅ハ、大加羅ニシテ、今ノ金海府ナリ。

古奚津ハ、集解ニ「按懲毖錄、全羅道有古阜郡古阜縣」トアレドモ、古阜縣ノ舊名ハ、東覽

南蠻ハ、釋ニアリヒシノカラクニト訓ミ、集解ニ百濟國ノ南邊トアリ。忱彌多禮ハ、釋ニトムタレト訓メリ。南蠻ノ二國又ハ一國ノ名ニシテ、全羅道ノ南境ト覺シケレドモ、其ノ地ハ、未ダ考ヘ得ズ。古史斷ニ云「多禮は、天智紀の氏禮城ならん」。

以賜百濟ハ、忱彌多禮ヲ賜ヘル事ナレドモ、明年ノ條ニ「海ノ西ノ諸ノ韓、既賜汝國」トアルニヨレバ、コノ時忱彌多禮ノミナラズ、比自炑以下ノ七國ヲモ賜ヘルナリ。但忱彌多禮ハ、百濟ノ領地ニ加ヘ給ヒ、七國ハ、只其ノ管理ノ任ヲ命ゼラレタルノミナルベシ。

比利、辟中、布彌支、半古ノ四邑ハ、皆全羅道ノ中ナルベケレドモ、詳カナラズ。コノ四邑モ、百濟ノ領地ニ加ヘ給ヒシナルベシ。

意流村ハ、釋ニオルノスキ、州流須祇ハ、ツルスキ、辟支山ハ、ヘキノムレト訓メリ。通證ニ「無例蓋韓語、八雲御抄云、牟禮山ノ名、今ノ朝鮮語云毛惠」トアリ。

辟支ノ山ハ、古史斷ニ天智紀ナル避城ノ地トシ、「唐平定之後、置古泗州避城縣、本碧骨、今金堤、古稱辟支山」ト云ヘリ。古沙ノ山ハ、百濟ノ古沙夫里郡、今ノ古阜郡ニアル山ナリ。夫里ハ、東考ニ「方言謂嘴爲夫里、指山之嘴也」トアレバ、古沙夫里ハ、即古沙ノ山ノ嘴ニ當レル所ナリ。

三國史記ニハ、濟紀近肖古王二十一年丙寅（即斯摩ノ宿禰ノ卓淳ヘ使ニ行キシ年）ニ「遣使聘新羅」、同二十三年戊辰（即新羅百濟始メテ朝貢シタル年ノ翌年）ニ「遣使新羅、送良馬二匹」トアリテ、兩國ニ關係シタルヲ、羅紀ニモ濟紀ニモ少シモ、見エザルハ、疎漏ナリ。

次ニ「五十年春二月、荒田別等還之、夏五月、千熊ノ長彥久底等至自百濟、於是皇太后歡之、問久氐曰、海西諸韓、既賜汝國、今何事以頻復來也、久氐等奏曰、天朝鴻澤遠及弊邑、吾王歡喜踊躍、不任于心、故因還使、以致至誠、雖逮萬世、何年非朝、皇太后勅云、善哉汝言、是朕懷也、增賜多沙城、爲往還路驛」。

五十年ハ、庚午ノ年ヲ云ヘルニテ、紀元千三十年、百濟ノ近肖古王二十五年ナリ。

「海西諸韓、既賜汝國」トハ、南蠻忱彌多禮等ノ地ヲ百濟ノ邑トシテ賜ヘルノミナラズ、比自㶱以下ノ七國ヲモ百濟ニ與ヘテ、其ノ管治ヲ命ゼラレタルヲ云ヘルナリ。

多沙ノ城、城ハサシト訓メリ。蓋韓語ナリ。コノ地ハ、加羅諸國ノ疆域ノ西南隅ニアリ。三國史記地理志ニ「河東郡、本韓多沙郡、景德王改名、今因之領縣三……。嶽陽縣、本小多沙縣……」トアリ。河東郡ハ、朝鮮ノ太宗ノ時、河東縣ト改メ、嶽陽縣ハ、高麗ノ顯宗ノ時ヨリ晉州ノ屬縣トナレリ。所謂多沙城ハ、コノ二縣ノ中ニシテ、繼體紀ニ加羅ノ多沙津トアルハ、其ノ海港ナルベシ。嶽陽縣ハ、晉州ノ西百二十一里ニアリテ、東南ハ河東縣ニ接シ、西ハ蟾津ヲ隔テヽ、全羅道ニ接セリ。蟾津ハ、高麗ノ時、背流三大江ノ一ト云ヘル河ニシテ、全羅道ノ大河ナレバ、河東ト云フ名ハ、コノ河ノ東ニアルヲ云ヘルナリ。又全羅道光陽縣（東至晉州界五十八里）ノ古跡ニモ「多沙川所在縣東五十五里」トアレバ、蟾津ノ西岸ニモ多沙ト云ヘル所アルナリ。サテ多沙ハ、加羅諸國ノ中ナレバ、既ニ百濟王ノ管内ニ屬シタルヲ、更ニ增シ賜ヘトシモ云ヘルハ、忱彌多禮ナド、同ジク直轄ノ地トシテ賜ハリタルナリ。

次ニ「五十一年春三月、百濟ノ王亦遣久氐朝貢、於是皇太后語太子及武內ノ宿禰曰、朕所交親百濟國者、是天所致、非由人故、玩好珍物、先所未有、不闕歲時、常來貢獻、朕省此款、每用喜焉、如朕存時、敦加恩惠、即年以千熊ノ長彥副久氐等、遣百濟國、因以垂大恩曰、朕從神所驗、始開道路、平定海西、以賜百濟、今復厚結好、永寵賞之、是時百濟ノ王父子並顙致地、啓曰、貴國鴻恩、重於天地、何日何時、敢有忘哉、聖王在上、明如日月、今臣在下、固如山岳、永爲西蕃、終無貳心」。

五十一年ハ、辛未ノ年ヲ云ヘルナリ。

次ニ「五十二年秋九月丁卯朔丙子、久氐等從千熊ノ長彥詣之、則獻七枝ノ刀一口、七子ノ鏡一面及種種ノ重寶、仍啓曰、臣國ノ以西有水、源出自谷那ノ鐵山、其邈七日行之不及、當飲是水、便取是山鐵、以永奉聖朝、乃謂孫枕流王曰、今我所通海東貴國、是天所啓、是以垂天恩、割海西而賜我、由是國甚永固、汝當善脩和好、聚斂土物、奉貢不絕、雖死何恨、自是後、每年相續朝貢焉」。

五十二年ハ、壬申ノ年ヲ云ヘルナリ。

七枝刀ハ、舊訓ニなゝつさやのたちトアリ。萬葉集四大伴ノ坂ノ上ノ郎女ノ歌ニ「人事繁哉君乎二鞘乃家乎隔……」トアルヲ、契沖阿闍梨ノ代匠記ニ「二鞘ハ、刀二ツヲ刺ス鞘歟。神功皇后紀ナル七枝刀ハ、本ハ一ツ

ニテ、末ノ七ツニ分レタル刀ナルヲ、七ツノ鞘ニ收ムル故ニ、ナヽツサヤノタチト云カ。又七枝ハ、履中紀ニ兩枝船ヲフタマタフネトヨメル如ク、ナヽマタノタチトヨムベキヲ、義ヲモテナヽツサヤト訓セリ」ト云ヒ、（摘要）。又萬葉集ニ、高市ノ皇子ノ尊城ノ上ノ殯宮之時、柿本ノ朝臣人麻呂ノ作ル歌ニ「狛劔和射見我原乃云々」トアルヲ、釋仙覺ノ註釋ニ「高麗國のつるぎは、ほこさきにえだありて、わさ〳〵しげなれば、こまつるぎわさみとつゞけたるなるべし」ト云ヘリ。星野博士ノ七枝刀考（史學雜誌第參拾七號）ニ云、「石上神宮社務所ヨリ鈴木眞年氏ニ贈レル同宮神寶ノ摸圖ヲ見シニ、中ニ六叉鋒ト稱スル者アリ。鐵質ニシテ、左右各三枝アリ、中鋒ト共ニ七箇ニシテ、七枝ノ稱ト相合ス。疑ハクハ或ハコノ七枝刀ナラン歟。中鋒ノ表裏ニ各隷書一行ヲ彫刻ス。文字磨泐多クシテ、讀ムベカラザレドモ、裏面泰ノ字ノ下ニ、左邊イヲ留メ、其下ニ四ノ字アリ。又二字磨泐シテ、其下ニ月十一日丙午正□造ノ字アリ。當時皇國及ビ韓土ニハ未年號アラズ。泰字ノ年號ヲ漢土ニ求ムルニ漢武帝ノ時ニ泰初泰始ノ二號アリ、魏文帝ノ世ニ泰初アリ、晉武帝ノ代ニ泰始アリ。イハ、初ニ近クシテ始ニ遠ケレバ、疑ハクハ初ノ字ノ殘畫ナラン。漢武ノ泰初ト魏文ノ泰初トハ、相去ルコト三百三十四年ナリ。時代ヲ以テ推考スルニ、コノ泰初ハ、漢代ノ泰初ニ非ズシテ、魏代ノ號ナラシ……。漢土ニテハ、古代ヨリ戈戟ノ類多クアレド、何レモ獨枝雙枝ニ止マリテ、數枝アル兵器ハ、未ダ見聞セズ。然ルニ萬葉ニ狛劔和射見我原乃云々ト詠ジ、仙覺ノ註釋ニ「高麗國のつるぎは、ほこさきえだありて云々」トアレバ、當時韓劔ノ枝アルモノ多ク傳ハリテ、人ノ耳目ニ觸レタルコト知ルベシ。然ラバ此鋒モ、必ズ韓國ノ製造ニシテ、即チ百濟ヨリ貢獻セシ七枝刀ナランカ。百濟ハ、當時魏ニ服屬シテ、其年號ヲ奉ジタレバ、因テ之ヲ鋒身ニ彫刻セシナルベシ」ト云ヒ、次ニ矛ト刀トノ別ヲ論ジ、矛ハ、皆袋穗ノ制ナルニ、コノ桙ハ、鋒刄ハ矛ノ如クナレドモ、其ノ莖ノ狀ハ、刀劔ノ莖ニ同ジクシテ、袋穗ノ制ニ非ザレバ、矢張刀劔ノ類ナラント云ヘリ。委シクハ、史學雜誌ヲ見ルベシ。但同氏ハ、「魏ノ文帝ノ世ニ泰初アリ」ト云ヘレドモ、文帝ノ年號ハ、黃初ノミニテ、泰初ナシ。和漢年契ニ魏ノ明帝ノ年號太和ヲ太初ト誤リタレバ、同氏ハ、之ヲ見テ、又文帝ノ年號ト誤レルニヤ。サレバ彼ノ刀銘ノ年號ハ、魏ノ太和若クハ晉ノ泰始ナルベシ。

七子鏡ハ、舊訓ニなゝつこのかゞみトアリ。藝文類聚天部ニ「梁簡文帝望月詩曰、形同七子鏡影類九秋霜」ト見エ、芙蓉鏡菱花鏡ナド云フ類ナルベシ。記傳（卅三ノ廿五丁）ニモ「こは、周に七ツの子ありて、俗に九曜ノ紋と云物の如き狀したる鏡にやあらむ」ト云ヘリ。記（應神天皇ノ段）ニ「百濟ノ國王照古王……、貢上横刀及大鏡」トアリテ、傳（卅三ノ廿五丁）ニ「横刀も鏡も、皇國に有ル物なるに、貢れるは、必ズ尋常ならず、めづらしきさましたる物なるべし。鏡は、大とあれば、殊に大キにて、めづらしきなるべし」トアリ。七枝ノ刀ハ、實ニカノ六叉桙ナラバ、横刀トハ書クマジキナレドモ、記ノ書キ方ハ、凡テ文字ニ拘ラヌガ常ナレバ、横ノ字ニハ別ニ意義ナキナリ。鏡ハ殊ニ大キクシテ、周ニ七ツノ子アル故ニ、大鏡トモ七子ノ鏡トモ云ヘルナリ。

谷那ノ鐵山ハ、考ヘ得ズ。百濟ノ國都ノ西ニハ、鐵山ナク、大水ノ源モナケレバ、以西ハ以南ノ誤リカ。百濟ノ境內ハ、東覽ニ據ルニ、鐵ヲ產スル所頗多シ。俗離山ハ、忠淸慶尙二道ヲ界スル高山ニテ、三大水コレヨリ出ヅ。一ハ東ニ流レテ洛東江トナリ、一ハ西ニ流レテ錦江トナリ、一ハ、北ニ流レテ達川トナリテ漢江ニ入ル。コノ山ヨリ鐵ヲ產スルコトハ見エザレドモ、山ノ西麓ナル報恩縣、懷仁縣、沃川郡、懷德縣ナド皆鐵ヲ產ス。又全羅道ノ無等山ハ、鐵ヲ產スル山ニテ、ソノ麓ナル光州、昌平縣、和順縣、同福縣、皆コレヨリ鐵ヲ取ル。又谷城縣ハ、本百濟ノ欲乃縣トアリテ、谷那ト音近ケレドモ、鐵山ナシ。咸平縣ハ、本百濟ノ屈乃縣ニテ、三國史記ニ引キタル唐ノ總章二年李勣ノ奏ニ軍那縣、本屈郡トモアリ、東覽ニハ其ノ鎭山ニ君尼山ト云ヘルモアリテ、縣ノ古名モ山ノ名モ、谷那ニ似タレドモ、大水ノ源ニアラズ。鐵ハ縣ノ西ノ海岸ヨリ產

シテ、山ヨリニハ非ズ。

次ニ「五十五年、百濟ノ肖古王薨、」又「五十六年、百濟ノ王子貴須立爲王」トアリ。

貴須ハ、濟紀ニ「近仇首王、一云近貴須、近肖古王之子」トアリ。近ノ字ヲ冠スルハ、第六代ノ仇首ニ別タンガ爲ナリ。五十五年ハ、乙亥ノ年ヲ云ヘルニテ、紀元千三十五年、近肖古王ノ三十年、應神天皇御年十四歳ノ時ナリ。濟紀ニハ、近肖古王三十年ノ條ニ「冬十一月、王薨」トアリテ、年表ニ、コノ年ヲ以テ近仇首王ノ元年トセリ。肖古ノ薨年ハ、國史ト合ヒタレドモ、仇首ノ即位ハ、一年ノ遲速アリ。按ヅニ此ノ時高句麗ト連ニ爭戰アリ、肖古又年末ニ近ヅキテ薨ジタレバ、仇首ノ即位ハ、翌年丙子ニ至リテ定レルヲ、韓史ハ、ソレラノ事情ニ拘ハラズ、通例ノ場合ノ如ク、前王ノ薨年ヲ以テ後王ノ元年トシタルナリ。

次ニ「六十二年、新羅不朝、即年遣襲津彥擊新羅」トアリテ、其ノ原註ニ云、「百濟記云、壬午ノ年新羅不奉貴國、貴國遣沙至比跪令討之、新羅人莊餝美女二人、迎誘於津、沙至比跪受其美女、反伐加羅ノ國、加羅ノ國王己本旱岐、及百久至、阿首至、國沙利、伊羅麻酒、爾汶至等、將其人民、來奔百濟、百濟厚遇之、加羅ノ國王妹既殿至向大倭啓云、天皇遣沙至比跪、以討新羅、而納新羅ノ美女、捨而不討、反滅我國、兄弟人民、皆爲流沈不任憂思、故以來啓、天皇大怒、即遣木羅斤資、領兵衆來集加羅、復其社稷、一云、沙至比跪知天皇怒、不敢公還、乃自竄伏、其妹有幸於皇宮者、比跪密遣使人、問天皇怒解不、妹乃託夢言、今夜夢見沙至比跪、天皇大怒云、比跪何敢來、以皇言報之、比跪知不免、入石穴死也」。

六十二年ハ、壬午ノ年ヲ云ヘルニテ、紀元千四十二年、百濟ノ近仇首王八年、新羅ノ奈勿尼師今二十八年、應神天皇御年二十一歳ノ時ナリ。

襲津彥ハ、建內ノ宿禰ノ大臣ノ第六男ニシテ、古事記ニ「葛城ノ長江ノ曾都毘古者、玉手ノ臣、的ノ臣、生江ノ臣、阿藝那ノ臣等之祖也」トアリ。國造本紀ニ「穗ノ國ノ造、泊瀨朝倉ノ朝、以生江ノ臣ノ祖葛城襲津彥ノ命ノ四世ノ孫菟上足尼定賜國造」、姓氏錄ニ襲津彥ノ命ノ裔ノ見エタルハ、玉手ノ朝臣、的ノ臣、生江ノ臣、阿支奈ノ臣、阿祇奈君ノ外ニ、葛城ノ朝臣、鹽屋ノ連、小屋ノ連、原井ノ連、與等ノ連、布師ノ首、布忍ノ首、布師ノ臣、下神ナドアリ。續紀四十二、忍ノ海ノ原ノ連魚養等ニ朝野ノ宿禰ノ姓ヲ賜ヘルコト見エ、續後紀四ニ、忍ノ海ノ原ノ連島依等ニ朝野ノ宿禰ヲ賜ヒ、十二ニ、朝野ノ宿禰鹿取等、宿禰ヲ改メテ朝臣ニ賜フナド見ユ。

百濟記ナル沙至比跪ハ、即曾都毘古ノ訛レルナリ。國沙利ノ國ハ、釋ニ閾ト書キテヲ又ヲクト訓メリ。閾ハ、閾ヲ書キ誤レルニヤ。百濟記ノ趣ニテハ、襲津彥ノ命ハ新羅ヲ擊チニ遣サレナガラ、却テ新羅ニ附キテ、皇朝ノ藩屛トアル加羅ノ國ヲ伐チタルハ、叛逆ノ所爲ニシテ、又一説ニヨレバ、遂ニ罪ヲ得テ自殺シタルナリ。サレドモ襲津彥ハ、コノ後癸卯ノ年ニ加羅ニ遣サレ、又仁德紀ニモ百濟ノ王ノ孫酒ノ君ヲ率テ參リシコト見エタレバ、コノ叛逆ノ事ハ、必傳ヘノ誤レルナリ。或ハ沙至比跪ト云ヘルハ、全ク別人ニシテ、襲津彥ニハ非ザルニヤ。若サモアラバ、紀ノ編者ハ、其ノ音ノ似タルニ由リテ、襲津彥トハシタレドモ、ソノ事實ノ疑ハシキニ由リテ、叛逆ノ事ヲバ略キテ、タヾ擊新羅ト記シタルナルベシ。

次ニ「六十四年、百濟ノ國貴須王薨、王子枕流王立爲王」、又「六十五年、百濟ノ枕流王薨、王子阿花年少、叔父辰斯奪立爲王」。

六十四年ハ、甲申ノ年ニシテ、百濟ノ近仇首王十年ナリ。濟紀近仇首王十年ノ條ニ「夏四月、王薨」トアリテ、次ニ「枕流王、近仇首之元子、母曰阿亦夫人、繼父即位」トアリ。六十五年ハ、乙酉ノ年ニシテ、枕流王二年ナリ。濟紀枕流王二年ノ條ニ「冬十一月、王薨」トアリテ、次ニ「辰斯王、近仇首王之仲子、枕流之弟、爲人强勇、聰慧多智略、枕流之薨也、元子少、故叔父辰斯即位」トアリ。簒奪トハ云ハザレドモ、元子少云

云トアレバ、嫡統ヲ犯セルコト明カナリ。阿花ノ事ハ、後ニ言フベシ。

古事記ハ、仲哀天皇ノ段ノ次ハ、直ニ應神天皇ノ段ニシテ、其ノ間ニ神功皇后ノ御世ヲバ立テズ、コノ皇后ノ御事業ハ、仲哀天皇ノ段ノ中ニ記シタリ。サルハ、コノ皇后ノ武功ノ大ナルコトハ、申スマデモナク、應神天皇ノ幼クマシ〳〵シ間ハ、天ノ下ノ政聞シメシタレドモ、固ヨリ天皇ニハマシマサヾレバ、其ノ御世ヲ立ツベキ理ナケレバナリ。然ルニ日本紀ニハ、コノ皇后ノ爲ニ一紀ヲ設ケ、仲哀天皇ノ崩リ坐シヽ明年ヲ以テ皇太后攝政元年トシ、其ノ三年ノ條ニ「春正月丙戌朔戊子、立譽田別尊爲皇太子、因以都於磐余」ト云ヒ、カクテ「六十九年夏四月辛酉朔丁丑、皇太后崩於稚櫻宮……。」トアルマデヲ攝政ノ世トシテ、其ノ明年ヲ應神天皇元年トハセラレタリ。

古事記傳廿一ノ十丁ニ、應神天皇ヲ日嗣ノ御子ト申シタル事ヲ論ジテ、「此ノ御子は、大后の御腹に坐々しほどに、既く大御父天皇は、崩り坐ぬれば、實には御胎ノ内よりして、天皇に坐々て、胎中天皇とさへ申せれば、況て生坐ては、固天皇にぞ坐々ける。然はあれども、大御母ノ命、世に坐々て、天ノ下の政所聞看し、且神武天皇より以來幼く坐々す天皇の御例も、いまだ坐まさゞりしかば、此ノほどは、猶姑く日嗣御子とぞ申奉りけむ。さて長り坐々て後も、大御母ノ命の世に坐々しほどは、なほ初メより申しならへるまゝに日嗣ノ御子と申シ奉りしか、はた長り坐々ては、天皇と申シ奉りしか。そは今知りがたし。此ノ次々にもなほ御子とあるは、建内ノ宿禰ノ命率とある文に依ルに、なほ幼ク坐まししゝほど聞えたり。そのうへ大御父天皇の御段の内なれば、此ノ段には、天皇とは記し奉るまじきことわりなり。大かた此等の御事どもは、後の御代御代の御定メをも、漢國の例をも忘れて、皇朝の上ツ代のさまを熟らにさとり得たる人ならずば、疑ひつべきものなり。なほ末に悉論ふべし。書紀に、三年春正月丙戌朔戊子、立譽田別ノ皇子爲皇太子などあるは、例の漢めかしく記されたるものにこそあれ、皇朝の古へのさまに非ず。其由は、上にも既に論へるが如し」ト云ヒ、又廿一ノ五十六丁ヨリ記紀ノ書法ノ異ヲ論ジテ、「此ノ記の趣は、當昔の實のありかたの傳へのまゝに記せるもの、書紀は、漢國の例、後ノ世の意を以てきはやかに定められたるものなり。さるは、古書にも其趣に記しなせるが有しに依られたるか、はた撰者の意か。其はしらず。然云故は、凡て上代のさまは、天皇崩坐ぬれば、即其太子の御代にて、太子又即天皇に坐り。然るを某ノ年某ノ月某ノ日即位など、きはやかに界を立て定め申すは、もと漢國にならへる、後の事にこそあれ、上代には凡て然る事はなかりき。されば仲哀天皇既に崩坐ては、品陀別ノ命、御腹ノ内よりおのづから天皇に坐々て、其ノ御代にぞありける。胎中天皇と申す御稱のありしなども、此ノ故なり。又忍熊ノ王と戰ヒの處に大后ノ御方とは云ずして、太子ノ御方と云るなども、此ノ太子の御世なるが故なり。但し天皇と申さずして、なほ太子と申せる由は、次に云べし。又太子と申す御稱も、某ノ年月日立爲皇太子など云きはやかなる事は、上代にはあらざりき。然れども、未ダ生坐さず、御腹ノ内に坐々しほどは、臣連八十伴緒、こと〳〵に大后に仕へ奉り、其間に、新羅ノ國の事など大業あり。生坐ても幼坐しゝほどは、さらにも申さず、成長坐て後も、大后の世に坐々ける限りは、大御親に坐ませば、敬ひ仕へ奉り賜ひて、よろづ其御心に隨ヒ賜ひつべければ、御子は、おのづからなほ太子の如くに坐々て、大后ぞ、おのづから天皇の如くには坐々ける。故レ津國ノ風土記などには、此ノ大后を天皇としも記せることもあるぞかし。然れども又眞に其ノ御代と申すべきにはた非ず。又攝政など云稱も、そのかみは無かりしことなり。然るを世の物知リ人ども、ひたぶるにきはやかなる、漢國の例、後ノ世の定めにのみ泥みて、かにかくにこの是非を論ひ、儒者など、或は大后御位を貪り惜みてぞ、太子に讓り賜はざりけむなども申すなるは、あなかしこ、上代のありかたの、よろづ然きはやかなることは無かりしことを思ひはからざる漢意のひがことなり。實はもとより御子の御世など云ことは、後ノ世より定めたるものぞと云ことをわきまへなば、凡てかゝる論ひはあらじをや。然れども又實には本より此ノ御子ぞ、天皇には、坐々て、大后の御世と申すには非るが故に、此ノ記には、其ノ御世をば立テざるなり。然れども大后の、世に坐々けるかぎりは、おのづから其ノ御世の如くにして、御子は、なほ太子の如くに坐々ける故に、其ノ間の事をば、越ノ國の角鹿に幸行し事などをも、大后の御事のつゞきに記して、天皇とは申さず、なほ太子と記せるなど、かくの如くきはやかならざるぞ、當時の實のありかたのまゝにはありける。然るを、書紀に、此ノ大后の御卷を立テて、攝政の御世とし、其紀年を以て記されたることは、彼ノ紀を、凡て上つ御代々々をも、漢國の例、後ノ世の定メの如くに記しなされたる書なれば、此ノ間をも必ズきはやかにせざることあたはず。是レ彼ノ紀のおのづからの勢ヒなり。さるは、なほ義を以て正さむとならば、大后の御世をば立テずして、近ヶ世に水戸中納言光圀卿の撰ばれたる史など然り。かの攝政ノ元ノ年とせられたる年を、直に應神天皇ノ元ノ年とせむも可かるべけれど、其も彼も共にみな後ノ世より强て定むるにこそあれ、固の事には非ればば、何れにてもあるべき中に、彼ノ書紀の定めも、天皇とは書さずして、なほ皇太后と書し、攝政とせられた

るなど、うけばりたる其ノ御代には非るけぢめ著き記しざまにて、皆理あり、實のありかたにはた甚く背かず。攝政と云稱、又其ノ間の紀年を殊に立られたるなどは、そのかみのありかたにはあらざれども、うけばりて天皇には坐シまさゞる差をあらはさんとするには、攝政など云稱をも立ッさることをえず。又既に一御世と立るうへは、その年をも紀ずはあるべからず。若シかの攝政ノ元ノ年を、たゞに應神天皇ノ元ノ年とするときは、返りてまたまことのありかたにたがふかたもあれば、此ノ間の記しざまは、書紀の趣も、みな謂れたることなりかし。」ト云ヘリ。

攝政ト云フ名ハ、後世ヨリ定メタルモノナルコト、又攝政ノ御世終リテ後ニ即位アリシニ非ザルコトハ、誠ニ本居氏ノ論ノ如シ。サルニテモコノ皇后ノ大政聞シメサレシ年數ノ長サ短サハ、イカニ。紀ノ年紀ハ、據ルニ足ラザレバ、皇后ノ崩御ノ年ハ、固ヨリ知ル由ナシ。又假令其ノ崩御ノ年ハ、應神天皇ノ生レマシヽヨリ數十年ノ後ニアリトモ、所謂攝政ナル者ハ、崩御ノ年マデトハ限ルベカラズ。皇后ノ攝政ハ、嗣君ノ幼弱ナルガ爲ナルベケレバ、嗣君成長シ給ヒシ後ハ、攝政モ罷ムベキコトナリ。津ノ連眞道ノ上表次章ニ引ケルヲ見ヨニ據レバ、百濟ノ近肖古王ノ朝聘シタルハ、神功皇后攝政ノ年ニシテ、貴須王ノ賢人ヲ貢シタルハ、應神天皇親政ノ世ナリ。ソノ貴須王ノ薨ジタル甲申ノ年ハ、天皇御年二十三歳ノ時ナリ。又前ニ引ケル百濟記ニ壬午ノ年云云トアルハ、天皇御年二十一歳ノ時ニシテ、其ノ文ニ天皇大怒云々トアルモ、天皇親政ノ趣ニ聞ユレバ、彼ノ攝政ノ間ハ、長クトモ二十年許ニハ過ギザリシナリ。

續日本紀卅六天應元年七月ノ條ニ云、「癸酉、右京人正六位上柴原ノ勝子公言、子公等之先祖伊賀都臣、是中臣ノ遠ッ祖天ノ御中主ノ命二十世之孫意美佐夜麻之子也、伊賀都臣、神功皇后ノ御世使於百濟、便娶彼土女、生二男、名日本大臣、大臣遙尋本系、歸於聖朝、時賜美濃ノ國不破ノ郡柴原ノ地以居焉、厥後因居命氏、遂負柴原ノ勝姓、伏乞蒙賜中臣ノ栗原ノ連、於是子公等男女十八人、依請改賜」。柴原ノ柴ハ、栗ノ誤リナリ。栗原ハ、和名抄美濃ノ國不破ノ郡ノ郷名ニ見ユ。續紀卅一寶龜元年十一月ノ條ニ「無位栗原ノ勝乙女授外從五位下」トアルハ、即子公等ノ族ナリ。同卷寶龜二年五月ノ條ニ「外從五位下柴原ノ勝乙妹女、勳十等柴原ノ勝淨足、賜姓宿禰、並止其身」トアル柴原モ、栗原ノ誤リニテ、乙妹女ノ妹ハ、恐ラクハ衍ナリ。氏族志ニモ、柴ヲ栗ト改メテ、註ニ「栗一作柴、今據本書一本及和名鈔訂之」ト云ヘリ。勝ハ、蕃別ニ賜ハル姓ナルヲ、栗原氏ハ、神別ナレドモ、百濟ノ國ヨリ參リシ故ニ、コノ姓ヲ負ヒタリシナリ。コノ姓ノ事ハ、第　章ニ委シク云フベシ。伊賀都臣ハ、仲哀紀ニ中臣ノ烏賊津ノ連、神功紀ニ中臣ノ烏賊津使主、姓氏錄ニ天兒屋根ノ命ノ十一世ノ孫雷大臣トアリ。允恭紀ニ一舍人中臣ノ烏賊津使主ト見エタルハ、時代隔タリタレバ、別人ナルベシ。意美佐夜麻ハ、姓氏錄ニ臣峽山ノ命ト書キテ、天ノ兒屋根ノ命十世ノ孫トモ津速魂ノ命ノ十三世ノ孫トモアリ。天ノ兒屋根ノ命ハ、津速魂ノ命ノ三世ノ孫ナリ。津速魂ノ命ハ、天ノ御中主ノ命ノ二十世之孫トアルハ、世數違ヘリ。サテ伊賀津臣ノ百濟ニ使シタルコトモ、伊賀津臣ノ子孫ノ百濟ヨリ參レルコトモ、日本紀ニ見エズ。經國集ニ桓武天皇ノ御世ニ文章生中臣栗原連年足ト云フ人見エタルハ、コノ子公等ノ族ナリ。姓氏錄ニハ未定雜姓右京ノ部ニ「中臣ノ栗原ノ連、天ノ兒屋根ノ命十一世ノ孫雷大臣之後者、不見」トアルハ、固ヨリ未定雜姓ノ事ナレバ、慥ナルコトハ知レザレドモ、三間名ノ公ト云ヘルニ依レバ、カノ日本大臣ノ子孫ナドノ任那ノ國ニ住ミタルガ、皇國ニ歸リ參リシニモアルベシ。氏族志三間名氏ノ條ニ云「一條帝時、有博士美麻那宿禰直節、類聚符宣鈔或是族也」。又續紀文武天皇慶雲四年ニ對馬ノ連堅石、元明天皇和銅元年ニ「津島ノ朝臣堅石授外從五位下」、攝津ノ國神別ニ「津島ノ朝臣、大中臣ノ朝臣同祖、津速魂ノ命三世ノ孫天ノ兒屋根ノ命之後也」トアルハ、未定雜姓攝津ノ國ニ「津島ノ直、天ノ兒屋根ノ命十一世ノ孫雷大臣ノ命之後者、不見」トアルト同族ナルベシ。又雷大臣ノ後ニ、壹伎ノ直、壹伎ノ縣主、伊伎ノ宿禰、卜部宿禰ナドアリ。卜部氏ハ、延喜式ニ「其族世居伊豆壹岐對馬等國、供龜卜事」トアリ。神名式ニ對馬島下縣ノ郡雷ノ命ノ神社モ見ユ。カクノ如ク壹岐對馬二島ニ伊賀都臣ノ子孫多キモ、百濟ニ往來シタル事ニ由アリゲニ見ユルナリ。

第三十二章　阿直岐王仁等來朝

古事記應神天皇ノ段ニ云、「百濟國主照古王、以牡馬壹疋牝馬壹疋付阿知吉師以貢上。此阿知吉師者、阿直史等之祖。亦貢上横刀及大鏡。又科賜百濟國、若有賢人者貢上。故受命以貢上人、名和邇吉師。即論語十卷千字文一卷并一卷付是人即貢進。此和邇吉師者文ノ首等祖。又貢上手人韓鍛名卓素、亦呉服西素二人也」。

照古王ハ、濟紀ノ近肖古王ナリ。記傳廿三ノ廿二丁ニ神功紀ト津連眞道等ノ表トヲ引キテ、「これらに依れば、此王は、大后ノ攝政の御世にて、此ノ御世應神には及ばざりが如くなれども、大后の御世と云るほども、此ノ記にては即チ此ノ天皇應神の御世なれば、違ふことなし。されば馬を貢り、阿知吉師を貢りしなどは、大后ノ御世と云へるほどにて、かの五十五年肖古王薨とあるより前の事にぞ有リけむ。然るを書紀には、十五年應神の處に、百濟王遣阿直岐貢良馬二匹云々とあるは、此ノ時、彼國阿花王と云が世なれば、傳の異なるなり」、又「馬は、御國に神代よりある物にて、書紀欽明ノ卷に、百濟の使人の國に還る時、良馬七十疋を彼ノ國に賜ひし事さへ見えたるに、今返リて彼より貢りしは、殊なる良馬にぞありけむ」。

阿知吉師ハ、記傳ニ云、「此ノ名、書紀に阿直岐とあり。又子孫ノ姓を阿直ノ史と云などに依ルに正しくは阿知伎吉師なるを、同音の重なる故に、一ツ省きて云ならへるなるべし。吉師は、伎志と讀べし。次の和邇吉師も同じ。書紀に、吉士某、また某ノ吉士某など云る名多し。そを、まれに吉師とも書り。是なり。此は、もと新羅ノ國の官十七等の中の第十四を吉士と云よし、漢籍北史に見えたれば、皇國にても、其を取て、蕃人の品に用ひられたりと見えて、繼體ノ卷に、吉士老、敏達ノ卷に、吉士金子、吉士木蓮子、吉士譯語彥、また安康ノ卷に、難波ノ吉士日香蚊、雄略ノ卷に、日鷹ノ吉士堅磐固安錢、難波ノ吉士赤目子など、なほ卷々に多く見えたり。其ノ居地を以て、某ノ吉士と云るなり。さて後には、やがて姓となれりと見ゆるもあり。さて此ノ吉士と云者の事を記せるを考るに、或は韓國に遣ハす使、或は韓人の朝れるを接待ふ事など、凡て蕃國の事に仕奉れり。是を以て思フに、もと韓國より歸化居る者を此ノ品になし賜ひて、子孫も其職を繼りと見ゆ。此ノ阿知吉師、和邇吉師も、其類なり。但し此ノ人々、書紀には吉士とは見えざるを思ふに、此ノ御世にはいまだ吉師と云稱は無かりけむを、やゝ後に、かの吉士と云ものにならひて、此ノ人々をもたれして、吉師と語り傳へたるにやあらむ。此ノ時は、いまだ新羅の官名を取用ひらるゝことなどあるまじければなり。されど此は、いかゞありけむ。今決めがたし」。

阿直ノ史ハ、記傳ニ「阿知伎能布美毘登と讀べし。直ノ字を書れば、濁音にてもあらむか。今は阿知吉師の名に依て、知を淸音とはせるなり。阿直は、姓なり。祖ノ名に依れるなるべし。史は書人の意にて、尸なり。此ノ外にも、船ノ史、壹伎ノ史、楊候ノ史など、なほ姓氏錄ノ諸蕃に、史の尸の氏々多し」。細井貞雄氏ノ姓序考ニ「史は、布美毘登と訓て、書人の義なるを、美を省きて、布毘登と云ふ。淡海公の名史なるを不比等と書るにて知るべし。史は、舊職號なりしが、姓になれるなり。史とは、其道々の書籍をみて、事どもを思ひ明らめ、其才によりて、其業どもを任しめられし者を云へるにて、後に諸道に史生を置るゝも、古への布毘登の遺風とやいはまし。履中天皇の四年八月戊戌、始於諸國置國史、記言事、達四方志と見えたるは、各國に史を置れて、其國の言事を記さしめられし也。凡文筆にかゝれる事は、漢土人のいとよく心得たる業にあれば、姓氏錄諸蕃の氏々に、此姓いと多し。神別氏には、さらになく、皇別に、垂水ノ史、田邊ノ史、御立ノ史三史あるのみなり」。サテ阿直氏ノ事ハ、應神紀ニモ「阿直岐者、阿直岐ノ史之始祖也」トアリ。天武紀十二年十月、三宅ノ吉士等十四氏ニ連ノ姓ヲ賜ヘル中ニ阿直ノ史見エ、續紀和銅五年ニ伊賀ノ國司阿直ノ敬、東大寺正倉院文書ニ、淳仁天皇ノ御世ニ安勅ノ島足ト云フ佛工見エ、姓氏錄右京諸蕃ニ「安勅連、百濟ノ國ノ魯王之後也」、續後紀三承和元年九月ノ條ニ「勘解由ノ主典阿直ノ史福吉、散位

同姓核公等三人、賜姓淸根ノ宿禰、核公之先、百濟ノ國ノ人也」トアリ。魯王ト云フ名ハ、濟紀ニ見エズ。多婁己婁盞婁近盞婁ナド云フ王アリテ、近盞婁ハ、盞鹵トモ書キタレバ、魯ノ上ニ何カ一字脫チタルナルベシ。

亦貢上橫刀及大鏡ハ、記傳ニ「こは、阿知吉師に附てには非ず、異時の事なり。亦と云る、其ノ意なり」トアリ。コハ、紀ニ據レバ、壬申ノ年ニシテ、近肖古王二十七年ノ事ナリ。橫刀大鏡ノ事ハ、前章ニ云ヘリ。

和邇吉師ハ、應神紀ニ王仁ト書ケリ。記傳ニ云、「王仁は、續紀に、其ノ祖父を王狗とあれば、王は、姓なるべし。然れども此ノ記に和邇とあるに照して、わにとこそ讀べけれ。字音のまゝにわうにんと讀習へるは、いかゞなり」。

千字文ノ事ハ、同文通考ニ「按ズルニ齊ノ蕭子雲、千字文一卷ヲ撰ミ、其後梁ノ周興嗣、次韻千字文一卷ヲ撰ミキ。我朝ノ應神天皇ノ十五六年ハ、晉ノ武帝太康年中ニヤ當リヌラン。其後晉南渡シテ宋ニ亡ボサレ、宋又亡ビテ齊ノ代トナレルコトハ、百九十年ガホトヲ經タリシ。サラバ後ノ世ニ出來シツル書ノ、百九十餘年ノサキニマヅ我國ニ傳ルベキヤウアラジ。彼王仁カ獻リシ一卷トキコエシハ、凡將篇、太甲篇、急就章等ノ小學ノ書ヲ奉リシヲ、カク傳ヘテアヤマリシニヤ。古事記ヲ撰マレシコトハ、千字文ツタハリシノチノ代ノ事ニテ有シカバ、彼王仁ガ來リシトキ、論語幷ニ小學ノ書一卷ヲ奉リシト聞エシヲ、今世ニ行ハル、所ニヨリテ、其獻リシ小學ノ書ハ、スナハチ今ノ千字文ノ事ナリト心得アヤマリテ、斯クハ記セルナルベシ」ト云ヘルハ、大方サル事ナリ。然ルニ日本書紀通證、應神天皇十六年乙巳ノ條ニ云、「今按、此歲當晉ノ武帝太康六年、則疑論語是何晏集解、千字文是魏ノ鍾繇原本也」ト云ヒテ、坊間ニ行ハル、集註千字文ノ序、「鍾繇千字文ノ書、故代寶之、傳以爲訓、藏諸祕府、逮永嘉失據、遷徙丹陽、晉末宋元皇帝恐其絕滅、遂使王右軍羲之繕寫、用爲敎授、但文勢不次、音韻不屬、至梁武帝受命、令員外散騎侍郎周興嗣推其理爲之次韻」トアルヲ引キテ證トシ、又記傳ニハ「論語は、さることなれども、千字文を此時に貢りしと云ことは、心得ず。此御代のころ、未此書世間に傳はるべき由なければなり。其故は、集註千字文ノ序云、晉ノ武帝承魏之後、始在路州城、大夫鍾繇、造得此文、上天子、帝愛不離其手、晉被宋文帝逐、移向丹陽避難、其千字文在車中、路逢雨、車漏濕千字文、行至丹陽、藏書篋中、晉治天下、得十五帝共一百五十年、宋文皇帝劉裕承位治天下、開晉帝書庫、中見此千字文、雨亂損失其次第、使右將軍王羲之次韻、不得、宋帝治天下、凡六十年、齊承位治丹陽、亦無人次得、齊七帝、治三十年、梁ノ武帝承位、乃命周興嗣次韻得千字文と云り。此ノ集註は、梁の李暹と云人の作れるなり。抑かの晉ノ武帝と云は、應神天皇と同時にあたれば、此ノ時既に千字文成きはしつれども、いまだ世には弘まらず、其後次第亂れ損ひて、讀がたかりしを、遙の後梁ノ武帝が時に至リてぞ、韻を次て、全くはなりぬれば、世に廣まりて、百濟あたりまでも傳はりけむは、又其後のことなるをや。梁ノ武帝は、武烈天皇より欽明天皇の御世までに當れり。……されば。此は、實には遙に後に渡參來たりけめども、其書重く用ひられて、殊に世間に普く習誦む書なりしからに、世には應神天皇の御世に、和邇吉師が持參來つるよしに語リ傳へたりしなるべし」ト云ヘリ。本居氏ガ集註千字文ノ序ト云ヘルハ、序ニハアラデ、卷末ノ註文ナリ。此ノ集註千字文ト云ヘル書ハ、誠ニ取ルニ足ラザル書ニシテ、其ノ序跋ノ文ヲ觀ルニ、「晉末、宋元皇帝云々」ト云ヒ、「晉被宋文帝逐」ト云ヒ、鍾繇ヲ晉ノ武帝ノ時ノ人トシ、王羲之ヲ宋初ノ人トシ、劉裕ヲ宋ノ文皇帝ト云ヘルガ如キ、事實モ年代モ違ヘル事ノミ多シ。然ルニ谷川本居ノ二氏、皆此ノ書ニ據リテ說ヲ立テ、又近頃木村正辭氏モ、此書ニ據リテ、百濟貢獻ノ千字文ハ鍾繇ノ原本ナルコトヲ論ジテ、日本文學第四ニ（千字文貢上辨ト題シテ）載セタリ。（其ノ後學士會院雜誌第十六編之七ニモ「百濟貢獻の千字文」ト題シテ、之ヲ載セタリ）其ノ文中ニ此ノ書ノ著者ノ事ヲ論ジテ「李暹は、李暹の誤なり。佐世の見在書目錄には千字文一卷李暹注とあり。李暹は、新唐書藝文志三道家部に李暹訓註

文子十二卷と見え、宋の晁公武が郡齋讀書志卷三上道家類に、文子十二篇李暹註、李暹師事僧般若流支、蓋元魏人也と見えたる、此人なり。般若流支は、梁の譯經圖記に載せたる三藏法師なり。さて又喜多村節信の瓦礫雜考に序に寂雖不敏、曾在學門といへる語あり。然らば寂といふ人の作にて、李暹にはあらず。この寂といふ人、何人にかあらん。尋ぬべしといへり。正辭按ずるに、李暹は、上に見えたる如く、僞佛の徒なるから、自稱して寂などいへるなるべし。猶凡人の不佞などいふに同じ意なり。これを別人なりとおもへるは笑ふべし」トアリ。

余嘗テ千字文ノ起源ヲ島田文學博士ニ問ヒタルニ、博士即チ百濟所獻千文考ト云ヘル精密ナル考證ヲ著シテ示サレタリ。（全文ハ、東京學士會院雜誌第十六編之八ニ載錄セリ。）其ノ文ニ曰ク「千字文は、梁の周興嗣に始まりて、其前絕て聞かず。（蕭子範の千字文、梁ノ武帝の千字詩、何れも梁代の作なり。）然るに古事記應神天皇の段に百濟より千字文を、貢進すとあるは周興嗣に先つこと殆ど二百年、年代合はず。後人之を疑ひ、其時貢進せしは、鍾繇の作れる千文にて、周興嗣の本には非ざるべしと云說起れり。鍾繇の千文と云ふことは、漢土にも此說あれども、全く無稽の臆說にて、更に徵据する所なし。今試に衆說を擧て、之を辨拆し、次に管見を述て採擇に備へんとす。

先づ梁書周興嗣傳に「是時高祖以三橋宅爲光宅寺、勅興嗣與陸倕、各製寺碑、及成俱奏、高祖用興嗣所製者、自銅表銘、柵塘碣、北伐檄、次韻王羲之書千字、並使興嗣爲文、每奏高祖輒稱善、加賜金帛」とあり。南史周興嗣傳も同じ。是千字文の起源なり。王羲之書千字とあれば、羲之の墨蹟を集めたるものにて、編次して韻を押したるは、周興嗣なり。次は、編次の次にて、詩句次韻の義に非ず。（詩句の次韻は、唐の元稹が白樂天の詩を次するに始まる。）

次に唐の韋絢が、劉公嘉話錄に「千字文、梁周興嗣編次、而有王右軍書者、皆不曉其始、梁武敎諸王書、令殷鐵石、於大王書中、搨一千字不重者、每字一片紙、雜碎無敍、武帝召周興嗣謂曰、卿有才思、爲我韻之、興嗣一夕編次進上、鬢髮皆白、而賞賜甚厚」とあり。此書の載する所、尤明瞭にして、千文の集字たるを證すべし。淸の趙翼が陔餘叢考にも、「皆當時集字成之也」と云へり。

又宋史李至傳に「千字文、乃梁武帝得鍾繇破碑千餘字、命周興嗣、次韻而成」、宋の釋文瑩が玉壺淸話に「梁武帝得鍾繇破碑、愛其書、命周興嗣次韻」とあり。此書の大意も、梁書と異なることなし。破碑とは、斷裂の碑字と云こと故、鍾繇の自作せし文には非ず。梁書等は、王羲之と云ひ、宋史等は鍾繇に作る。二說同じからず。閻若璩が潛邱劄記に「梁書以爲羲之、宋史以爲鍾繇、梁書近得其眞」と云ひ、陔餘叢考にも「所謂鍾繇者、宋人記傳之誤」とあり。又宋の董逌の廣川書跋に云「千字、其初本得右軍遺書、梁武帝嘗命殷鐵石搨一千字、每字一紙、雜碎無序、因命周興嗣、次爲韻語、其成時一夕鬢髮盡白、當世甚重、詔令蕭子雲寫進、而後世以書名者、率作千字、以謂體制盡備、可以見筆力」、又云「智永書梁所搨集千字、至八百本」。此書に搨集とあり。益〻鄙說の誣ざるを見るべし。是にて千字文の來歷は分明なれば、是より百濟貢進本の事に及ぶべし。

千文のことは、本邦諸家の說あれども、今尤著れたるものを擧ぐ。本居宣長の古事記傳に云々と云へり。此說は、餘り武斷に過ぎて從ひ難し。又梁の李暹の集註千字文序を引て、晉ノ世既に千文あり。其後雜亂せるを周興嗣が次韻せしならんとあり。鍾繇の千文と云もの無きは勿論、又梁の李暹とは、いかなる者なるか、甚だ疑ふべきことにて、其序文中に千文の來歷を述べて云云。永嘉は、西晉ノ懷帝の年號にして、羲之は、東晉ノ穆帝の時の人なり。又鍾繇と晉の武帝とは、年代遙に懸隔せり。斯く極めて見易きことさへも辨へぬ程の者なれば、固より齒牙に掛るに足らず。且言ふ所支離滅裂、絕て文理を成さず、五尺の童子も、一

見して其陋妄を笑ふべきに、本居翁の學識を以て、此等の説を信ぜしは、眞に解すべからざる事と云べし。又栗原信充の柳菴隨筆にも、此説あり。其大要を擧れば、前に南史周興嗣傳を引き、其下に「千字文、周興嗣が作る所に非ず。其亂れたる本有し事必知べし云々。推考するに、漢魏の間千字文世に行はれし事見ゆれば、鍾太尉の本、僞作とも云難たし」とありて、鬱岡齋法帖に載する鍾繇の千字文を、擧て證となし。百濟より獻じたる者は、即ち是なるべしと云へる。是亦大なる謬なり。鬱岡齋法帖は、明の王肯堂の摹揭する所にて、十帖あり。其中に鍾繇の賀捷表は、載せたれども、千字文を收錄せず。別に鬱岡齋墨妙と稱する帖あり。鍾繇の千字文を收め、魏太尉、鍾繇千文、右軍將軍王羲之奉勅書とあり。之を見れば、鍾繇の古千文は、正しく古より傳來せし如くなれども、其實は後世の僞作にて、決して信憑すべきものに非ず。王世貞の四部稿に閣帖の章草を論ぜし末に「王著既謬稱章帝、遂有謂千文不創自興嗣者、得無愈失之耶」とあり。王世貞の博識を以て、其言ふ所此の如し。古千文の僞作たる知べし。又王肯堂同時の人なる張萱の疑曜の中にも「今世有鍾繇千文、與興嗣所韻者不同、乃後人僞撰也」とあり。此言に依れば、明人の手に出でしこと疑なし。王肯堂は、損庵と號し、頗る才學あり。鬱岡帖も、摹刻精工にて、王澍の閣帖考正附錄に「蒼深不及停雲、而秀潤過之」と云たり。されども此千文の僞帖たるを知らず、其後に跋して、「觀此帖者、必有宋板明律之疑、不知閣帖首已有章草千文、雖未必是章帝書、亦可證千文不始於梁人矣、米元章書家申韓、豈妄許可者、亦稱此帖筆力圓熟、定爲右軍書、臨池之工、得不矜重奉爲模範耶」とあり。米芾の説は、寶章待訪錄に見えたり。羲之の千文を唐人書跡中に收載し、虞世南歐陽詢の次に編入せり。されば米芾の載する所は、唐世羲之の書を集字せしものにて、即ち周興嗣本なり。此僞帖とは、全く同じからず。損庵混じて之を一にす。謬の甚しきなり。今其千文を見るに、大抵周興嗣の語を用ひ、只其前後を變換せし迄にて、痕迹昭然掩ふ可からず、且其文辭拙劣にて、周興嗣に下ること數等、絕て魏晉の作に似ず。其贋鼎たる、固より論を待たず。米庵墨談にも、此帖の疑ふべきことを論ぜり。然るに淸の盛百二、梁玉繩は、此帖を以て眞とせしこと、庭立記聞に見えたり。二子は博雅の士なるに、其の見る所米庵に及ばざるは何ぞや。況して魏晉以來千有餘年、鍾繇の古千文と云ふは、誰れ一人聞見せしもの無きに、明世に至り、忽然突出し、而も全文完備して、一字の闕損無きは、眞に奇怪の至りに非ずや。然れども羲之の遺蹟を集字せしものなれば、其文は僞にして、其書は眞なり。高士奇の江村銷夏錄に、此帖の原本を載せたり。されども只王損庵の跋文を引たるまゝにて、一字の品評を下さず。蓋し士奇は、其書を取りて、其文の眞僞を論ずるに遑あらざるなり。又因宜堂法帖にも、此千文を收む。蓋し鬱岡帖より轉刻せしならん。因宜帖法帖のことは、淸の錢泳の履園叢話に「嘉慶初年、有旌德姚東樵者、目不識丁、而開淸華齋法帖店、輙摘取舊碑帖、假作宋元明人題跋、牛石半木、彙集而成、其名曰因宜堂法帖、八卷、僞造年月姓名、充舊法帖、遍行海內、且有行日本琉球者、尤可嗤鄙」とあり。以て其大概を見るべし。さりながら獨り此諸帖のみならず、總て古法帖には贋作多く、極めて信じ難きものなり。淳化閣帖は、法書中の第一と稱すれども、米芾の法帖題跋には、第一卷の漢章帝より梁の簡文帝までの七帖は、並に一人手寫の僞帖と云ひ、黃伯思の法帖刊誤には、第三卷の庾翼以下十四人の書は、庾翼杜預前一帖の外は、盡く一手の僞書と云へり。其他張旭を張芝に誤り、智永を羲之と題せる類、枚擧に遑あらず。閣帖猶此の如し。其他は推して知るべし。明帖にては、文徵明の停雲館帖、董其昌の戲鴻堂帖を佳本とす。然れども停雲帖の王定國、錢穆文、陳簡齋等は、北宋人なるに、南宋人の中に混じ、戲鴻帖の歐陽詢の千文は、集字本を眞蹟に誤るの類、王弇州、玉虛舟等、委しく之を辨ぜり。文董二氏の學識と云ひ、兼て賞鑑に邃きを以てすら、猶此失あり。況して損菴に於て、其完善遺憾なきを求むべけんや。信充後世の僞帖に据りて、千歲未了の案を決せんとす。思ざるの甚しきなり。畢竟古事記を過信せしより、漢土人の妄說に欺かれ、遂に斯る謬論をなせるなり。古書を篤信するは、固より然るべきことなれども、古說を回護せんとして、强て實事を枉ぐるは、學者の尤も戒むべきことなり。本居翁の千字文の說は姑く置き、其貢獻の年代は、常に信奉する古事記と雖ども、斷じて取らず。其心を立つる公平、深く感

服すべきことなり。

さて漢土人の妄說は、何に原因せしやと云ふに、一つは千文の集字なることを知らざると、一つは官帖の章草を誤解するとに因りたるなり。千文集字のことは、既に上文に論ぜり。是より章草の事を述ぶべし。淳化閣帖に章草を載せ、題して漢の章帝の書と稱せり。其中に河淡海鹹等の字ある故、さて漢世既に千文あり、周興嗣はそれに基きたるならんと臆測して此誤りを致せるなり。歐陽修の集古錄跋尾の中に「梁書、武帝得王羲之所書千字、命周興嗣、以韻次之、今法帖有漢章帝書百餘字、其言有海鹹河淡之類、蓋前世學書者、多有此語、不獨始於羲之也」と云へり。（劉克莊の說も同じ。）歐公には似合ぬ謬論にて、後人往々之を辨駁せり。黃伯思の法帖刊誤に「凡草書分波磔者名章草、非此者但謂之草、猶隸之生今正書、故章草當在草書先、然本無章名、因漢建初中、杜操伯度善是書、章帝稱之、故後世目焉、今此卷首帖、偶章草、便以爲章帝書誤、然此書亦前代作、但錄書者、集成千字中語耳」、（董逌が廣川書跋にも此說あり。）宋濂が潛溪集に「王著於淳化中、摹勒諸帖上石、見帖中所書海鹹河淡等字、又謂爲章草之宗、遂誤指爲漢章帝所作、著固不足責、後村劉克莊、乃宏博之士、何爲承著之謬、而謂千文實始於漢耶、克莊姑置之、歐陽文忠公、名世大儒、其撰金石錄跋尾、亦謂法帖有漢章帝所書百餘字、其言有海鹹河淡之類、蓋前世學書者、多爲此語、不獨創於羲之、抑又何耶、非米南宮黃長睿力詆之、新學小生、未必不爲其所惑、余久憤於中、因題智永所書千文、特表而出之」、王觀國が學林に「法帖中所書千文百餘字、皆作章草體、當時敘次碑帖者、誤題以爲漢章帝書、其實周興嗣所次之文也」とあり。此等の說、辨析し得て、復餘蘊なし。さすれば閣帖の章草は、章帝に非ず、後人周興嗣の文中の字を塡補せしものにて、漢世は勿論、梁より以前に千文の絕て無きこと瞭然たり。明の郎瑛の七修類藁に、詹仲和の言を擧て「在蘇常某家、見唐刻千字文一帙、儼然鍾繇筆法」と云ひ、又「以淳化帖上千文、亦類鍾繇」とあり。此說は、遽に之を見れば、鍾繇の千文の有りたることを述べたる如く見ゆれども、其實然らず。前に千文は鍾繇の破碑を集めしことを云ひ、其下に唐刻云々の事を擧て、千文は鍾繇の遺書を集字せしにて、王羲之に非ざるを論ぜしなり。鍾繇の作りたる證にはなりがたし。

抑千文は、斷じて梁世に始まりしものにて、其前絕て有こと無しとせば、百濟獻ずる所は、いかなる本にてありしや。此事は、世の相距る千有餘年、今より懸斷すべからざれども、新井白石の同文通考に云々。愚は、此說を以て頗る其眞を得たるものとせり。只恨むらくは考證未だ備はらず。信を世人に取るに足らず。今愚が平生見聞の及ぶ所に就て、其闕略を補ひ、以て其說を暢發せんとす。

漢土古より日常用ふる文字を集め、兒童に授けて誦習せしむ。周に史籀篇あり、秦に李斯の蒼頡篇、趙高の爰歷篇胡毋敬の博學篇あり。漢に及び、以上の三篇を合して、蒼頡篇五十五章となし。武帝の時には、司馬相如凡將篇を作り、元帝の時には、史游急就篇を作り、其後李長は元尙篇を作れり。皆幼學の爲に複字無き樣字數を限りて製せしものにて、漢書藝文志に詳なり。（凡將及び班固の太甲篇は、隋唐志に載せ、又藝文類聚、文選蜀都賦註に引たれば、唐世迄は傳來せしが、唐末五代の亂にて亡びたるならん。）凡將元尙等は、亡佚して傳はらず。獨り急就篇のみ今日に儼存し、秘書中にあり、近くは天保中、澁江全善、諸本を參考して上木せり。（魏書以下、急就章に作る。）急就は、姓名諸物五官等の字を雜記し幼學には極めて便利なるものにて、後世の上大人百家姓などの如く、幼學の習字帖とせし故、古來名人此篇を書寫せし者多く、隨て後世に永存せしなり。夏侯湛の抵疑に「鄉曲之徒、一介之士、曾誦急就、習甲子」と云ひ、魏書崔浩傳に「書家亦多寫急就」と云ひ、又「浩既工書、人多託寫急就章、從少至老不憚勞、所書蓋以百數」とあり。又儒林劉蘭傳にも「蘭始入小學、書急就、家人覺其聰敏」と見え、又北齊書李繪傳にも見えたり。顏師古の急就章註の序に「舊得皇象鍾繇衛夫人王羲之所書篇本、備加詳覈」とあり。吳の皇象晉

の索靖の書たる急就は、宣和書譜石林集等に見え、東觀餘論にも「凡將以上、不可復見、特急就存焉者、以昔賢喜書之者故也」と云へり。諸書の載する所に因て考ふるに、魏晉より南北朝の頃は、急就章盛に世に行はれ、鍾繇皇象なども皆書寫せし故、自然百濟邊へも流傳せしこと疑なし。（百濟より魏晉へ遣使を通ぜしことは魏晉外國傳及び朝鮮史に詳なり。）故悉は、百濟より献ずる所は、此急就章にてありしならんと思考せり。讃岐の善通寺に、急就殘篇を藏す。相傳へて空海の手寫と云へる由、經籍訪古志に見えたり。是は定て唐本を臨摹せしものなるべけれども、急就の本朝に傳はること久しきを證すべし。白石の説は、一時臆に憑りて推測せしなれども、夙く此に心付きしは、眞に千古の卓見にて、慧眼炬の如しと云べし。急就を千文と云たるは、白石の説の如く、古事記の作者、周興嗣本によりて斯く云たるなるべし。

急就章は、久しく世に行はれたれども、文意艱奧にして、遽に通曉すべからず。周興嗣の作出るに及び、平坦にして解し易きを以て、遂に急就は廢れて、千文のみ盛に行はるゝことゝはなれり。智永の八百本を臨摹せしにても想見すべし。（智永は、羲之七代の孫にて、深く其書法にも通ぜし人故、若し羲之親筆の鍾繇の千文有ることならば、何の故に終身刻苦して周興嗣の集字本を臨摹すべき。此一事を以ても、梁代以上千字文の無きことを知るべし。）其後唐に至り、趙模の晉人の書を摹集せし本あり、呉匏庵、宋潛溪等の集に見えたり。其他諸名蹟を集字せしもの、僂指に勝へず。後人鍾王集字本を見て、眞筆なりと思ひ、種々の謬説紛出するに至れり。

以上論ずる如く、百濟献ずる所は、即ち急就章にて、千文の名は、周興嗣より起りしこと疑なし。然るに和漢とも鍾繇の古千文ありしと云ふは、前に述たる數種の原因を混合して生ぜしものにて、全く後人讀書に疎く、只管新奇を喜ぶ故、後世虛妄の説に惑ひ、斯る謬論をなすに至れり。此一事に付ても、讀書は成べく源頭に溯り、漸次順を趁て下流に及ぼす樣有りたき事なり」。

此ノ論、考據精確詳明ニシテ、復餘蘊ナシ。然ルニ木村正辭氏ハ、猶服セザル所アリト見エテ、再タビ學士會院雜誌（第十六編之九）ニ一文ヲ載セタル中ニ、博士ガ「智永は、羲之七代の孫にて、深く其書法にも通ぜし人故、若し羲之親筆の鍾繇の千文あることならば、何の故に終身刻苦して周興嗣の集字本を臨摹すべき」ト云ヘルヲ駁シテ「已に周興嗣次韻の千字文出來たる後は、世間おしなべて之を用ゐたる事なるに、何とて世の需用に違ひて、殊更に鍾繇の古千字文を臨摹すべき事のあるべき」ト云ヒ、又「梁代以上千字文無しといへれど、東大寺献物帳に載せたる王羲之書眞草千字文二百三行とあるをばいかゞすべき」ト云ヘリ。博士又（同雜誌第十六編之十）對ヘテ「鍾繇は曹魏の功臣、王羲之は典午の名士、文章と云ひ、書法は尤も古今に冠絶せり。其本果して世に存せば、周興嗣の次韻を待たず。且假令周本出たりとも、其爲め流行を妨ぐべき筈なし。若雜亂せる故次韻せしと云はゞ、梁世に雜亂せしものゝ後世に至りて整理せしは、いかゞなることにや」、「東大寺献物帳に搨羲之書、小注に眞草千字文二百三行とあり。是予が前に云たる寶章待訪錄の王羲之千字文と同種にて、唐世摹搨の周興嗣本なり。唐以後此種の本頗多し。且眞草二體に書分けしは、陳隋間より行はれしことにて、智永の千文、即ち其證なり。此體魏晉頃には所見なし」、又「見在書目に據りて、李遻は李暹の誤ならんと云はれたるは、理り有るに似たり。但今の李遻本は、果して佐世の所謂李暹注なりや。喜多村節信は、僞作ならんと云へり。いかにも其文の餘り拙劣なるを見れば、さもあるべし。又君が寂は李氏の自稱にて、猶不佞と云が如き謙辭なりと云れたれども、寂の字を自稱に用ひたること、未だ聞かず。又郡齋讀書志を引て、千文注は北魏の李暹ならんとあり。併し南北分立の際は、學術書法とも各々同じからず。北朝の經義は、馬鄭を用て、魏晉六朝の説を取らず。（王肅は稍〻行はれたり。）書法も、漢碑を學て、鍾王娬媚の體を好まず。假令鍾王の千文有るにもせよ、北朝には行はるまじ。況して之が注解を下すをや。故に隋志に千文注は多く有れども、皆南朝人にて、北朝人は一人もなし。又李暹は佛を學びし者ならば、文子を注するは尤なれど、千字文は似合し

からず」ト云ヘリ。

論語ハ、谷川士清栗原信充ノ徒、皆何晏ノ集解ナルベシト云ヒタリシガ、島田博士ハ、深ク此ノ事ヲ考究シ、「古論齊論魯論ノ三種ハ、皆經文ノミニシテ、古ヘハ之ヲ幾篇ト計ヘテ、幾卷ト云ハズ。漢書藝文志ニ古論語二十一篇、齊論語二十二篇、魯論語二十篇トアル是ナリ。古事記ニ十卷トアルハ、此三論ニ非ズ。阮孝緒ノ七錄、隋書經籍志ニ鄭玄王肅虞翻譙周何晏註皆十卷ト載セタレバ、必ズ此等ノ内ナルベシ。サレドモ鄭何ノ外ハサマデ當時ニ行ハレシトモ聞ザレバ、百濟邊マデ流行シタルハ、定メテ鄭玄何晏ノ兩種ナルベシ」トテ、ソレヨリ鄭玄ニ學ノ來歷ト其ノ流行ノ優劣ト晉百濟ノ地勢ノ關係トヲ詳論シテ、終ニ百濟ヨリ貢進セル論語ハ鄭注ナルベシト斷ゼリ。委シクハ史學雜誌第六編第一號百濟所獻論語考ヲ見ヨ。

首ハ、古事記須賀ノ宮ノ段「我宮之首」ノ傳（九ノ四十七丁）ニ「首は、意毘登と訓べし。姓尸に某ノ首と云をも然訓べし。私記にも、忌部ノ首讀於比止とあり。書紀に、三輪ノ君子首、忌部ノ首、子首など云名を子人とも書るは、子の詞に意を含める故に、おのづから古毘登と唱へらるゝなり。元明紀に、大津ノ連意毘登と云人ノ名を、元正紀聖武紀には首と書れたり。さてこは、本ト尊稱にて、大人の意なるべし。尊ミて云るは、書紀允恭ノ卷に、首也余不忘矣。これ、對人を指シて云り。さて首長の意に云るは、景行ノ卷に、村之無長、邑之勿首、顯宗ノ卷に、縮見屯倉首、孝德ノ卷に、村ノ首（首ハ長也）などあり。さて此の首は、後ノ世の宮々（三后宮春宮等）の長官の如くなるを云なり」、又天降ノ段忌部ノ首ノ傳（十五ノ六十二丁）ニ「首は、大人の意にて、姓の下に附ゲるは、加婆泥にて、其ノ部の長を云フ。續紀寶龜元年九月の（皇太子ノ）令旨に、以去天平寶字九歲、改首史姓、並爲毘登、彼此難分、氏族混雜、於事不穩、宜從本字とあるは、首を毘登とせられしことも、暫ありしなり」トアリ。コノ首史ノ姓ヲ改メテ毘登トセラレシ事ハ、政事要略六十二ニ天平勝寶九歲五月ノ勅ヲ載セテ「頃者百姓之間、曾不知禮、以御宇天皇及皇后等御名、有著姓名者、自今以後不得更然、所司不糾、依法科罪」、孝謙紀天平寶字二年桑原ノ史年足等ノ上言ニ「伏奉去天平勝寶九歲五月二十六日勅書、稱內大臣太政大臣之名不得稱者云々、望請依勅、一改史姓」トアリ。內大臣ハ、大織冠鎌足公ヲ云ヒ、太政大臣ハ、贈太政大臣淡海公ヲ云ヘルナリ。光仁紀ニ天平寶字トアル寶字ハ、勝寶ノ誤リニテ、天平勝寶九歲ハ、天平寶字ト改マレル年ナリ。氏族志ニ云「按毗登、又作人、凡諸氏有人姓者、原亦皆首史二姓、避聖武帝及藤原不比等也、據皇胤紹運錄、皇年代略記、如是院年代記等書、帝諱首、其說與政事要略合、本紀考證、偶不及此、故闕而不書、今據上諸書、則帝諱爲首無疑、因註于此」。

サテ文ノ首ハ、應神紀ニ「所謂王仁者、是書ノ首等之始祖也」、古語拾遺ニ「百濟王貢博士王仁、是河內ノ文ノ首ノ始祖也」ナドアリテ、ソノ氏人ハ、雄略紀ニ河內ノ國古市ノ郡ノ人書ノ首加龍、齊明紀ニ河內ノ書ノ首、（闕名）天武紀ニ書ノ首根麻呂ナド見エ、同紀十二年九月、倭ノ直等三十八氏ニ連ノ姓ヲ賜ハリシ中ニ文ノ首アリ、又十四年六月、大倭ノ連等十一氏ニ忌寸ノ姓ヲ賜ハリシ中ニ書ノ連アリ。カクテ文ノ首ハ、暫ク連ニナリテ、又忌寸ニナレルナリ。續紀慶雲四年十月「文ノ忌寸禰麻呂卒」トアルハ、即天武紀ナル書ノ首根麻呂ナリ。續紀延曆十年、文ノ忌寸最弟、武生ノ連眞象等ガ上表ニ「文ノ忌寸等、元有二家、東文稱直、西文號首、相比行事、其來遠矣、今東ノ文擧家、既登宿禰、西ノ文漏恩、猶沈忌寸……」トアリテ、其ノ下ニ「最弟及眞象等八人、賜姓宿禰」トアリ。全文ハ、下ニ引クベシ。姓氏錄左京諸蕃ニ「文ノ宿禰、出漢ノ高皇帝之後鸞王也」、「文ノ忌寸、文ノ宿禰同祖、宇爾古ノ首之後也」、「武生ノ宿禰、文ノ宿禰同祖、阿浪古ノ首之後也」、「櫻野ノ首、同上」、右京諸蕃ニ栗栖ノ首、河內和泉二國ノ諸蕃ニ古志ノ連アリテ、何レモ「文ノ宿禰同祖、王仁之後也」トアリ。宇爾古ノ首、阿浪古ノ首ハ、王仁ガ子孫ノ名ナルベシ。

武生ノ宿禰ノ先ハ、續紀天平神護元年十二月、「右京人外從五位下馬毘登國人、河内國古市郡人正六位上馬毘登益人等四十四人、賜姓武生ノ連」トアリ。馬ノ毘登ハ、馬ノ史ヲ省キタルニテ、萬葉集二十ニ散位寮散位馬史國人トアルハ、コノ國人ト同人ナルベシ。元正聖武ノ御世ニ馬ノ史伊麻呂、馬ノ史比奈麻呂、馬史弟麻呂ナド見エタリ。天平神護元年九月「河内國古市郡人正七位下馬毘登夷人、右京人正八位下馬ノ毘登中成等、賜姓厚見ノ連」、氏族志武生氏ノ條ニ「按本書（續日本紀）、桓武帝時、百濟人之後美濃厚見郡人羿鹵濱倉、賜姓羹見造、厚羹訓同、豈以其與馬氏同祖、賜此姓歟、姑附于此、又諸本鹵作西、羹作美、恐誤」、續後紀承和三年三月「能登ノ史生馬ノ史眞主、近衞同姓貞主等、賜姓春澤ノ史、其先百濟ノ國人也、」同年五月「美濃ノ國人主殿寮少屬ノ羹見ノ造貞繼、改本居、貫附左京六條二坊、其先百濟ノ國人也」。

栗栖ノ首ハ、氏族志ニ「聖武帝時、有外從五位下栗栖史多禰女、（續日本紀）孝謙帝時、有美濃少目栗栖ノ史大成、（東大寺古文書）蓋是族也」。

古志ノ連モ、舊ハ史ノ姓ナリ。氏族志ニ「聖武帝時、有僧行基、姓越史、越後頸城郡人、（日本靈異記）即是族也」。續紀天平神護二年十二月「和泉國人外從五位下高志ノ毗登若子麻呂等五十三人、賜姓高志ノ連」。

又文ノ忌寸ノ後ニ淨野ノ宿禰アリ。續後紀承和元年五月「左京人正七位下文忌寸歳主、無位同姓三雄等、賜姓淨野ノ宿禰、河内ノ國ノ人正六位上文ノ忌寸繼立、改忌寸賜宿禰焉、歳主三雄繼立等之先、並百濟國ノ人也」、氏族志淨野氏ノ條ニ「本書（續日本後紀）以歳主繼立等爲百濟人之後、蓋以王仁自百濟來也、又日本後紀、桓武帝時、有淨野宿禰最弟、類聚國史、嵯峨帝時、有淨野宿禰夏嗣、卽此姓非是時始賜者、蓋桓武帝時最弟賜文宿禰、後改賜此姓、而後紀殘闕、無所徵耳」、マタ「又有朝臣姓、光孝帝時、淨野朝臣宮雄、爲大學助教、（三代實錄）按朝臣、蓋亦同族、唯其賜姓、史無所見」トアリ。

記傳（三十三ノ卅丁）ニ云「此ノ氏（文ノ首）に、まぎらはしきことども多し。其はまづ此ノ氏の外に、別に文ノ直と云氏あり。其は、和邇が後には非ず、漢直より別れたる氏にて、尸も直にて、姓氏錄に、文ノ忌寸、坂上ノ大宿禰同祖、都賀直之後也とあり。書紀に、其ノ人も、これかれ見えたり。首と直との尸を以て辨ふべし。さて其氏人は、世々倭ノ國に居りし故に、倭ノ文ノ直と云ヒ、此ノ和邇が後なるをば、河内ノ文ノ首と云り。續紀などに、東ノ文とあるは、倭ノ文ノ直なり。西ノ文とあるは、河内ノ文ノ首にて、東西を即チやまとかふちと訓ムことなり。學令に、東西史部とある義解に、居在皇城ノ左右、故曰東西也とあり。但し此ノ註は、まぎらはし。皇城ノ左右には拘らず、河内は西、倭は東なる故に、東西と云なり。たとひ皇城の右に居ても、倭ノ國なるをば東と云るをや。さて天武天皇の御世に至リて、文ノ首も、共に連になり、又忌寸になれるより、兩氏いよゝ紛はしければ、たゞ東西を以て辨ふるなり。續後紀三に、左京ノ人文ノ忌寸歳主、同姓三雄等、賜姓淨野ノ宿禰、河内ノ國ノ人文ノ忌寸繼立、改忌寸賜宿禰焉……とある。繼立は、河内ノ人とあれば、西ノ文なるべく、歳主等も、一ツに擧たれば、西ノ文なるべし。神祇令に、六月十二日晦日ノ大祓、東西文部、上祓ノ刀、讀祓ノ詞、義解に、東漢文直、西漢文首、祝詞式大祓ノ詞ノ終に、東ノ文ノ忌寸部獻横刀、時ノ呪、西文部准之。此文部の刀を奉り、祓ノ詞を讀ム儀は、四時祭式に見えたり。その祓ノ詞と云は、式の大祓ノ詞の末に載たる謹請皇天云々の文にて、義解に謂文部漢音可讀者とあり。さて此ノ氏人が如此刀を獻り、詞を讀ムことは、其ノ本ツ國の傳ヘ事なるべきを、何れの御代よりか雜へ用ヒ始め賜ひけむ。さて此ノ文部とあるをフヒトへと訓ムは非なり。フヒトべと訓べきは、史部にて、別なり。其は、學令に東西史部とありて、義解に、前代以來、奕世繼業、或爲史官、或爲博士、因以賜姓、總謂之史也とありて、此レは、某ノ史と云尸の氏々の、倭河内に居者を云り。文ノ首文ノ直の事には非ず。思ヒ混ふべからず。さて又右の神祇令の義解に、東漢ノ文ノ直、西漢ノ文ノ首とある漢は、共に

漢ノ國人の末の氏なる故に云り。凡て漢國より來たるを漢ノ某と云り。然るに又別に漢ノ直と云氏もありて、混ひやすし。心得おくべし。但皇極紀に、倭ノ漢ノ書ノ直縣、孝德紀に、倭ノ漢ノ書ノ直麻呂など云人見えたる、これらは、倭ノ文ノ直は、漢ノ直より別れたる氏なるを以て、漢と云るなり。義解に云る意と異なり。さて又文ノ字阿夜とも訓ム故に、かの漢ノ直と紛ひて、文ノ首文ノ直の文をアヤと訓ることもあり。非なり。凡て此ノ文ノ首氏のことは、右の如く、種々混亂やすきことども多し。よくせずば、誤るべし」。

手人ハ、雄略紀ニ漢ノ手人部衣縫部宍人部、マタ百濟ヨリ所獻手末才伎、マタ西漢才伎、マタ百濟ヨリ所獻今來才伎、仁賢紀ニ「遣日鷹ノ吉士使高麗、召巧手者、」マタ「日鷹ノ吉士還自高麗、獻工匠須流枳奴流枳等、今倭國山邊郡額田村ノ熟皮高麗、是其後也」ナド見ユ。記傳ニ云、「職員令內藏ノ寮ノ下に、典履二人、掌縫作靴履鞍具及檢校百濟ノ手部、百濟ノ手部十人、掌雜縫作ノ事、大藏ノ省ノ下にもかく見えたる、（共に事ノ字は、革の誤か、又事ノ上に革ノ字脱たるか。）手部も、弖毘登と訓べし。手人は諸々の物作る工を云稱なり。（今俗に職人と云物なり。）內藏寮式に、雜ノ作手、造御𢭐手二人、夾纈手二人、﨟纈手二人、暈繝手二人、造油絁手二人、織席手一人、また染手五人などある手も、みな手人の意なり。さて此は、韓鍛冶と吳服とを指ていへり」。

韓鍛ハ、記傳（卅三ノ卅二丁）ニ「鍛は加奴知と訓べし。今加遲と云は、加奴知を訛れるなり。さて韓國の鍛冶の渡參來てより、皇國に元よりあるをば、倭鍛と云て分てり。倭鍛部、書紀綏靖ノ卷に見えたるは、後より云る稱なり。さて皇國のと韓國のとは、鍛の法異なることあるにや。又彼ノ國には、諸ノ器物など、殊に巧に造れるを以て召たるにや。いかにも後まで倭韓と分れたるは、異なる事ありしなるべし。今ノ世の鍛冶は、何れの流レにかあらむ。刀鍛などの法は、もとより倭鍛の流レにぞあるべき」トアリ。續紀九養老六年三月ニ「近江國韓鍛冶百嶋……、丹波國韓冶ノ首法麻呂……、播磨國韓鍛冶百依、紀伊國韓鍛冶杭田……等、合七十一戶、雖姓涉雜工、而尋要本源、元來不預雜戶之邑、因除其號、並從公戶」、同書廿九神護景雲二年二月、「讃岐國寒川郡人外正八位下韓鐵師毘登毛人、韓鐵師部ノ牛養等一百廿七人、賜姓坂本ノ臣、」同書四十延曆八年十二月、「播磨ノ國美嚢ノ郡ノ大領正六位下韓鍛ノ首廣富、……、敍外從五位下」ナド見ユ。コレラハ、皆韓鍛卓素ノ苗裔ナルニヤ。又ハコノ後ニモ、韓鍛冶ドモノ參渡リ來ツルコトアリテ、ソレラノ苗裔ナルニモアルベシ。氏族志ニハ、韓鍛冶氏ヲ、出自不詳者ト云フ類ニ收メテ、其ノ註ニ「按續日本後紀、承和中、讃岐人坂本臣鷹野等朝臣、改貫和泉、紀角宿禰之後、見上（皇別坂本氏ノ條。）本氏（韓鐵師ヨリナレル坂本ノ臣）疑與之同族、然未得明證、且養老中、韓鍛冶等從公戶者、七十一戶、中有飽海漢人忍海漢人等族、似俱是蕃別、又日本書紀、皇極帝時、有坂本吉士長兄、豈是族歟、併附于此、以待後考」ト云ヘリ。

吳服ノ事ハ、次章ニ云フベシ。

サテ阿知吉師和邇吉師ノ來朝ヲ、應神紀ニハ百濟ノ阿花王ノ時ノ事トシテ、「十五年秋八月壬戌朔丁卯、百濟王遣阿直岐、貢良馬二匹、即養於輕坂上厩、因以阿直岐令掌飼、故號其養馬之處曰厩坂也、阿直岐亦能讀經典、即太子菟道稚郎子師焉、於是天皇問阿直岐曰如勝汝博士亦有耶、對曰有王仁者、是秀也、時遣上毛野ノ君ノ祖荒田別巫別於百濟、仍徵王仁也、其阿直岐者、阿直岐史之始祖也。十六年春二月、王仁來之、則太子菟道ノ稚郎子師之、習諸ノ典籍於王仁、莫不通達、故所謂王仁者、是書首等之始祖也」トアリ。

輕ハ、記傳（廿一ノ十七丁）「大和ノ國高市ノ郡にあり。神名帳に、此ノ郡に輕ノ樹村坐神ノ社あり。（此は、輕の內の樹村てふ地名か、又輕樹てふ地名か。大和志に、此ノ社、厩の屬邑輕子と云にありと云り。いかならむ。）今も輕村あり。大哥留とも云。そは、中昔に大小二村有リしが、其ノ小哥留の方は、今絕けるにやあらむ。」輕ノ坂ハ、同段（十八丁）ニ「此ノ宮（境岡ノ宮）は、今彼ノ哥留村より西ノ方三瀨と云處へ行間、小高く廣き岡越の道にて、坂あり。其あたりにぞありけむ」ト云ヘル坂ナルベシ。

巫別ハ、荒田別ノ命ノ弟カ。上ッ毛野ノ君ノ祖ト云ヒテ、下ニ二人ヲ連ケテ記シタレバ、異族ニハアルマジ。サレバコノ巫別ハ、神功紀ニ見エタル鹿我別ト同人ニハ非ズヤ。十五年ハ、甲辰ノ年ヲ云ヒ、十六年ハ、乙巳ノ年ヲ云ヘルナレバ、紀元千六十四年五年、百濟ノ阿花王卽濟紀ノ阿莘王ノ十三年十四年、應神天皇御年四十三四歳ノ時ニシテ、記ニ照古王ト云ヘルヨリハ三十年餘後ニ當レリ。

此ノ文中ニ書籍ヲ貢リシ事ノ見エザルハ、傳ヘノ漏レタルニヤ、又ハ本居氏ノ云ヘル如ク殊更ニ略カレタルニヤ。ソハ何レニモアレ、後ニ引ケル津ノ連眞道ノ表ニモ見ユル如ク、「始傳書籍、大闡儒風、文敎之興、誠在於此」ト云ヘルハ、當時ノ事實ナルベシ。記傳ニ云、「皇朝に漢籍の渡り參來て文字あるは、此ノ時ぞ始メなりける」其ノ由、傳ノ首ノ卷にも云るが如し。日本紀竟宴ノ哥に、王仁を橘ノ直幹、和多津見野千倍野四羅奈身古江天沽曾、八島乃國爾布箕波都太不禮。此ノ時の事、書紀には、只太子習諸典籍於王仁」とのみありて、書籍を貢りし事の見えざるは、彼ノ紀は、凡て甚く漢ぶりを飾りて撰ばれたるほどに、文字書籍は、神武天皇の御世にも旣くより有しふりに記されたれば、上代に文籍なかりしと云 ことをあかずおぼして、此ノ御代に始て渡來し事をば忌隱されたる物とぞ思はるゝ」ト云ヘリ。

續紀四十延曆十年四月ノ條ニ云、「左大史正六位上文ノ忌寸最弟、播磨ノ少目正八位上武生連眞象等言、文ノ忌寸等、元有二家、東文稱直、西文號首、相比行事、其來遠焉、今東文擧家、旣登宿禰、西ノ文漏恩、猶沉忌寸、最弟等幸逢明時、不蒙曲察、歷代之後、申理無由、伏望同賜榮號、永貽孫謀、有勅責其本系、最弟等言、漢高帝之後曰鸞、鸞之後王狗、轉至百濟、百濟ノ久素王時、聖朝遣使徵召文人、久素王即以狗孫王仁貢焉、是文武生等之祖也、於是最弟及眞象等八人、賜姓宿禰」トアリ。久素王ハ、即神功紀ノ貴須王、濟紀ノ近仇首王ニシテ、阿花王ノ祖父ナリ。此ノ說ニ據レバ、皇朝ニテ文人ヲ召シ給ヒシハ、應神紀ニ記セルヨリハ三十年餘リ前ノ事ナリ。

又同書延曆九年七月ノ條ニ云、「左中辨正五位上兼木工頭百濟王仁貞、治部少輔從五位下百濟王元信、中衛少將從五位下百濟王忠信、圖書頭從五位上兼東宮學士左兵衛伊豫守津連眞道等上表言、眞道等本系、出自百濟國貴須王、貴須王者、百濟始興第十六世王也、夫百濟太祖都慕大王者、日神降靈、奄扶餘而開國、天帝授籙、總諸韓而稱王、降及近肖古王、遙慕聖化、始聘貴國、是則神功皇后攝政之年也、其後輕島豐明朝御宇應神天皇、命上毛野氏遠祖荒田別、使於百濟、搜聘有識者、國主貴須王、恭奉使旨、擇採宗族、遣其孫辰孫王、一名智宗王、隨使入朝、天皇嘉焉、特加寵命、以爲皇太子之師矣、於是始傳書籍、大闡儒風、文敎之興、誠在於此、難波高津朝御宇仁德天皇、以辰孫王長子太阿郎王爲近侍、太阿郎王子亥陽君、亥陽君子午定君、午定君生三男、長子味沙、仲子辰爾、季子麻呂、從此而別、始爲三姓、各因所職、以命氏焉、葛井船津連等、即是也……。伏惟、皇朝則天布化、稽古垂風、弘澤浹乎羣方、叡政覃於品彙、故能修廢繼絕、萬姓仰而賴慶、正名辨物、四海歸而得宜、凡有懷生、莫不抃躍、眞道等先祖、委質聖朝、年代深遠、家傳文雅之業、族掌西庠之職、眞道生逢昌運、預沐天恩、伏望改換連姓、蒙賜朝臣、於是勅因居賜姓菅野朝臣」トアリ。

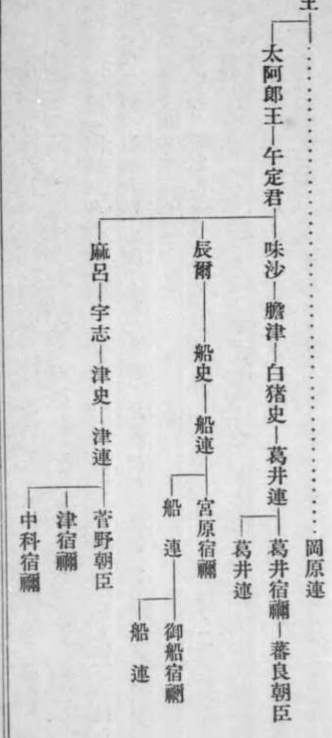
サテコノ博士等ノ來朝ノ事、古事記ニハ照古王云々ト云ヒ、右ノ二ツノ表ニハ、貴須王ノ時トシ、應神紀ニハ、阿花王ノ時トシ、時代各違ヒ、又其ノ博士ノ名モ、記紀ト文忌寸等ノ表トニハ王仁ト云ヘルヲ津ノ連等ノ表ニ辰孫王トアリテ、合ハザルガ如クナレドモ、善ク思ヘバ、記ノ趣ト二ツノ表トハ、牴牾シタルニ非ズ。マヅ阿知吉師ニツケテ馬ヲ獻リタルハ、記ニ照古王トアレバ、即近肖古王ノ時、彼ノ久氏等ガ屢朝貢シタル

頃ニシテ、神功皇后攝政ノ御世ナルベシ。又横刀大鏡ヲ獻リタルコトハ、神功紀壬申ノ年ニ見エタレバ、コレモ近肖古王ノ時ナリ。「又科賜若有賢人者貢上」トアルハ、何王ノ時トハ云ハザレドモ、又科セ賜ツト端ヲ改メテ記シタレバ、馬ヲ獻リ、刀鏡ヲ獻リタルトハ異時ナルコト著シ。コハ文ノ忌寸等ガ表ニ「聖朝遣使徵召文人」、津ノ連等ガ表ニ「命荒田別、搜聘有識者」トアルト、全ク同事ニテ、二ツノ表ニ皆貴須王ノ時トシタレバ、和邇吉師ノ來朝ハ、貴須王ノ薨ジタル甲申ノ年ヨリ前ノ事ニシテ、應神天皇御年二十歳許ノ頃ニゾアリケン。津ノ連ノ表ニ輕島ノ豐明ノ朝ト云ヘルハ、後ノ攝政ノ御世ヲ磐余ノ稚櫻ノ朝ト申スニ別チタル名ナレバ、和邇吉師等ヲ召サセ給ヒシ頃ハ、應神天皇御自ラ大政聞召サレシナリ。辰孫王ノ事ハ、記傳ニ「これ、和邇吉師が事と同くて、別なるは、辰孫王も、和邇と同時に同ジ列に參來つるが、此ノ記書紀などに、其ノ傳へは漏たるべし」ト云ヘルガ如シ。紀ニハ「遣荒田別巫別仍徵王仁」トアレドモ、「有賢人者貢上、」又「徵召文人、」又「搜聘有識者」ナド云ヘルヲ合ハセ考フルニ、初ヨリ王仁一人ヲ名ザシタルニハアラデ、誰ニモアレ、賢人ヲ搜シ求メテ召サシメ給ヒシナリ。モシ初ヨリ王仁ト定マリタランニハ、大荒田別ノ命ノ如キ重臣ヲ態々遣サル、ニモ及ブマジキ事ナルヲヤ。文ノ忌寸、津ノ連ノ兩族ハ、韓國ヨリ歸化シタル諸族ノ中ニテモ、殊ニ文事ヲ以テ、世々仕奉リタル家柄ニテ、三韓ニ關スル古キ記錄ナドモ、多クハ此等ノ氏人ノ手ニ成レリト覺シク、又殊ニ眞道ノ朝臣ハ、後ニ桓武天皇ノ勅ヲ奉ジテ、續日本紀ヲ撰シタル名高キ史家ナレバ、己等ノ家系ヲ述ブルニモ、疎謬ノ事アルベキニ非ズ。紀ニ阿花王ノ時トアルニモ拘ラズ。二族ノ表ニ貴須王ノ時トシタルハ、必據所アルコトナルベシ。然ラバ阿知吉師ノ來朝ハ、近肖古王ノ時、和邇吉師等ノ來朝ハ、近貴須王ノ時ニシテ、異時ノ事ナルヲ、紀ハ二ツナガラ阿花王ノ時トシテ、十五年十六年ニ續ケテ記シタルハ、傳ヘノ誤レルナリ。日本逸史ニ引ケル賦役令集解ナル延暦十六年ノ勅ニ「百濟王等、遠慕皇化、航海梯山、輸欵久矣、神功攝政之世、則肖古王遣使貢其方物、輕島御宇之年、則貴須王獻其才士……」トアルモ、紀ノ説ニハ從ハズシテ、右ノ二表ノ説ニ依リ給ヘル文ナリ。又菟道ノ稚郎子ノ太子ノ、阿直岐王仁ヲ師トシ給ヘルコトハ、紀ハヤガテ其ノ年ニ記シタレドモ、コハ後ノ事ヲ終言シタルナリ。王仁辰孫王ノ來朝ハ、應神天皇御年二十歳許ノ時ニシテ、少子トアル稚郎子ノ太子ノ未ダ生レマサザル頃ナレバ、コノ太子ノ典籍ヲ學ビ給ヒシハ、此ノ御世ノ末頃ノ事ナルベシ。

又古語拾遺ニ云、「至於輕島ノ豐明ノ朝、百濟ノ王貢博士王仁……、至於後ノ磐余ノ稚櫻ノ朝、三韓貢獻、奕世無絕、齋藏之傍、更建內藏、分收官物、仍令阿知使主與百濟、博士王仁、記其出納、始更定藏部。」後ノ磐余ノ稚櫻ノ朝トハ、履中天皇ノ御世ヲ云ヘルナリ。神功皇后モ、磐余ノ稚櫻ノ宮ニ坐シタルニ對ヘテ、後ノト添ヘタルナリ。此ハ、履中紀六年正月ノ條ニ「辛卯、始建藏ノ職、因定藏部」トアル時ノ事ナリ。記傳卅三ノ卅七丁ニ「應神天皇ノ十六年より、稚櫻ノ朝ノ元年までは、百十餘年を經つれば、王仁、其ノ御世まで存つらむは、甚く長壽くやありけむ。疑はし。若シくは王仁が子孫と云を傳へ誤れるにや」ト云ヘレドモ、王仁ヲ貢リタル貴須王ノ薨レルハ、甲申ノ年紀元千四十四年、履中天皇ノ崩リマセルハ、記ニ據レバ、壬申ノ年紀元千九十二年ニシテ、其ノ間五十年ニ足ラザレバ、王仁ノ其ノ御世マデ存リツランハ、疑フベキ事ニ非ズ。

サテ辰孫王ハ、一名智宗王トアレバ、姓氏錄河內ノ國諸蕃ニ「岡原連、百濟國辰斯王子知宗之後也」トアル知宗ハ、即コノ人ナリ。辰斯王ハ、貴須王ノ子ナレバ、貴須王其ノ孫ヲ遣スト云ヘルニモ合ヘリ。辰孫王ノ曾孫午定君ハ、姓氏錄ニ鹽君ニ作リ、午定君ノ三子味沙、辰爾、麻呂ハ、姓氏錄ニ味散、知仁、番倡ト書ケリ。欽明紀十四年七月、「蘇我ノ大臣稻目ノ宿禰奉勅、遣王辰爾、數錄船賦、即以王辰爾爲船長、因賜姓爲船史、今船連之先也」、同紀十六年「吉備五郡、置白猪屯家、」三十年正月、「詔曰、量置田部、其來尙矣、年甫十餘、脫籍免課者衆、宜遣膽津膽津者、王辰爾之甥也檢定白猪ノ田部丁籍、夏四月、膽津檢閱白猪田部丁籍、依詔定籍、

果成田戸、天皇嘉膽津定籍之功、賜姓爲白猪ノ史」。膽津ハ、蓋味散ノ子ナリ。敏達紀三年十月、「詔船史王辰爾弟牛、賜姓爲津史」。牛ハ、コヽニ辰爾ノ弟トアレドモ、姓氏錄ニ「鹽君ノ孫宇志」トアレバ、蓋麻呂ノ子ニシテ、辰爾ノ姪ナリ。船氏墓誌ニ「惟船氏故王後首者、是船氏中祖王智仁首兒那沛故首之子也、生於乎娑陀宮治天下天皇之世、奉仕於等由羅宮治天下天皇之朝、至於阿須迦宮治天下天皇之朝、天皇照見知其才異、仕有功勳、勅賜官位大仁、品爲第三云々」。乎娑陀宮ハ、譯語田幸玉宮ニテ敏達天皇、等由羅宮ハ豐浦宮ニテ、推古天皇、阿須迦宮ハ、飛鳥ノ岡本ノ宮ニテ舒明天皇ナリ。王後ノ首ハ推古紀ニ王平ト書ケリ。皇極紀四年「蘇我ノ臣蝦夷等臨誅、悉燒天皇記國記珍寶、船史惠尺即疾取所燒國記、而奉中ノ大兄」、天武紀十二年十月「船史賜姓曰連」。名高キ道昭和尙ハ、河內國丹比郡ノ人ニテ、少錦下船連惠釋ノ子ナル由、文武紀四年ニ見ユ。惠釋ハ即惠尺ナリ。同年六月、白猪ノ史骨、律令ノ撰定ニ預リ、養老四年五月、「改白猪ノ史ノ氏、賜葛井連姓」、「大外記白猪ノ史廣成、改賜葛井連」、天平寶字二年八月「外從五位下津ノ史秋主等卅餘人言、船葛井津、本是一祖、別爲三氏、其二氏者蒙連姓訖、唯秋主等未霑改姓、請改史字、於是賜姓津連」、延曆九年七月、「津ノ連眞道等云々、勅因居賜姓菅野ノ朝臣」、同十年正月、「春宮亮正五位下葛井連道依、主稅ノ大屬從六位下船ノ連今道等言、葛井船津ノ連等、本出一祖別爲三氏、而今津連等幸遇昌運、先賜朝臣、而道依今道等猶滯連姓、方今聖主照臨、在幽盡燭、至化潛運、稟氣歸仁、伏望同沐天恩、共蒙改姓、詔許之、道依等八人、賜姓宿禰、今道等八人　因居賜宮原宿禰、又對馬ノ守正六位上津ノ連吉道等十人、賜宿禰、少外記津ノ連巨都雄等兄弟姉妹七人、因居賜中科宿禰」、姓氏錄右京諸蕃ニ「菅野ノ朝臣、百濟國都慕王十世孫貴首王之後也」、以下五氏、皆菅野ノ朝臣同祖トアルヲ略キテ引ク。「中科宿禰、鹽君孫宇志之後也」、「津ノ宿禰、菅野ノ朝臣同祖、鹽君男番侶君之後也」、「宮原ノ宿禰、鹽君男知仁君之後也」、「葛井ノ宿禰、鹽君男味散君之後也」、「船ノ連太阿郎王三世孫知仁君之後也、」攝津ノ國諸蕃ニ「船ノ連、太阿郎王之後也」、續後紀、承和元年十月、「右京人陰陽寮允正六位上葛井ノ宿禰石雄、兵部省少錄正六位上同姓鮎川、賜姓蕃良ノ朝臣」、同十二月「諸陵少允正六位上中科ノ宿禰直門、左少史從七位下同姓繼門等、賜姓菅野ノ朝臣、津連之別姓也」、三代實錄貞觀五年八月「右京人從五位下行皇太后宮大進御船ノ宿禰彥主……、散位從七位上船ノ連助道等男女六人賜姓菅野ノ朝臣、河內國丹比郡人左兵衞ノ權大志正七位上船ノ連貞直、賜姓御船ノ宿禰、彥主等之先、出自百濟ノ國貴須王也」、貞觀六年八月「右京人河內守蕃良朝臣豐村、兵部少錄葛井ノ連居都成等賜菅野朝臣」、元慶元年十二月「右京ノ人從五位下行山城權介船ノ連副使麻呂、內藏權少允正七位上津ノ連宿禰輔主、主殿允大初位下葛井ノ連直臣等三人、賜姓菅野ノ朝臣、其先百濟國人也」ナド見ユ。菅野氏宮位顯達シタルニ由リテ、中科ノ宿禰、御船ノ宿禰、船ノ連、津ノ宿禰、葛井ノ連ナドモ、多クハ菅野ノ朝臣トナリタルナリ。



第三十三章　應神天皇ノ御世

應神紀ニハ、三韓ニ關係シタル記事頗多シ。マヅ(第一)三年ノ條ニ云、「是歳、百濟ノ辰斯王失禮於貴國天皇、故遣紀ノ角ノ宿禰、羽田矢代ノ宿禰、石川ノ宿禰、木菟ノ宿禰、嘖讓其無禮狀、由是百濟ノ國殺辰斯王以謝之、紀ノ角ノ宿禰等、便立阿花爲王而歸」。

貴國天皇ノ四字ハ、國史ノ書法ニ似ザレバ、集解ニハ、コノ四字ヲ天朝ノ二字ニ改メテ、「據古本改」ト斷リタレドモ、ソノ古本ハ、人ノ見タルコトナキ書ナレバ、疑ハシ。又貴國ノ二字ハ、紀註ニ引ケル百濟記ノ文ニ屢見エテ、通常ノ禮辭ニ云フトハ、異ニテ、叙事ノ中ニ直ニ皇國ヲ崇メテ稱セルニ由リテ思ヘバ、コノ條ノ文ハ、百濟記ニ據リタルニテ、偶刪正ヲ闕キテ、原文ノ儘ニカクハ記シタルナリ。

紀ノ角ノ宿禰等四人ハ、皆建內ノ宿禰ノ大臣ノ子ニシテ、古事記ニ「波多ノ八代ノ宿禰者、波多ノ臣、波美ノ臣、星川ノ臣、淡海臣、長谷部ノ君之祖也。次云々。次蘇賀石河宿禰者、蘇我臣、川邊臣、田中臣、高向ノ臣、小治田ノ臣、櫻井臣、岸田ノ臣等之祖也。次平羣都久宿禰者、平羣臣、佐和良臣、馬御樴連等祖也。次木ノ角ノ宿禰者、木ノ臣、都奴ノ臣、坂本ノ臣之祖」トアリ。

阿花ハ、濟紀ノ阿莘王ナリ。集解ニ「按莘華字體相似、轉寫遂爲花耳」ト云ヒ、記傳（卅三ノ廿二丁）ニハ「阿花の花ノ字は、華なるべく、莘は、華を誤れるものなるべし」トアリ。濟記マタ三國遺事ニ、阿莘王ノ註ニ「或云阿芳」トアリテ、芳（ファン）ト花（ファ）ト、音モ近ク、義モ近ケレバ、花マタ華ハ、本ニテ、莘ハ、華ヲ寫シ誤レルナリ。

應神紀ニ三年トアルハ、壬辰ノ年ヲ云ヘルニテ、ソノ壬辰ノ年ハ、紀元千五十二年、應神天皇御年三十一歳ノ時ニシテ、三國史記ノ年表ニテハ、辰斯王八年、阿莘王元年、新羅ノ奈勿尼師今三十七年ト云フ年ナリ。濟紀ニ辰斯王八年「冬十月、王田於狗原、經旬不還、十一月、薨於狗原行宮」、「阿莘王、（或云阿芳）枕流王之元子云々、叔父辰斯繼位、八年薨、即位」トアルハ、應神紀ト年ノ干支合ヘリ。辰斯ノ紀ヲ、濟紀ニ善終ノ如ク記シタルハ、疎略カ又ハ隱諱カ。二ツノ内ナルベシ。サテ四將ノ問罪ハ、藩國ヲ慰撫スル平時ノ勅使トハ事カハリテ、國王ノ廢立ニ關スル重事ナレバ、必征討ノ軍ヲ率キテ、武威ヲ以テ臨マレタラント思ハルヽニ、廣開土王ノ碑ニ、コノ前年ナル辛卯ノ年ニ、皇軍ノ百濟新羅ヲ撃チ破リタルコト見エタルハ、干支ハ、一年違ヘドモ、決メテ四將ノ征討ニコソアルベケレ。委シクハ第三十五章ニ云フベシ。

又任那諸國ハ、神功皇后ノ御世ニ、近肖古王ノ忠順ヲ嘉シ給ヒテ、其ノ管理ヲ命ゼラレタリシニ、コノ後皇朝ノ宰ニテ治ムルコトヽナレルハ、コノ時辰斯ノ叛キマツレルニ由リテ、百濟ニ管治セシムル事ヲ罷メ給ヒシナルベシ。コノ事ハ、第三十九章ニ至リテ猶云フベシ。

又コノ時皇軍ノ新羅ヲ撃チタルコトハ、國史ニハ見エザレドモ、羅紀奈勿尼師今三十八年ノ條ニ「夏五月、倭人來圍金城、五日不解、將士皆請出戰、王曰、今賊棄船深入、在於死地、鋒不可當、乃閉城門、賊無功而退、王先遣勇騎二百、遮其歸路、又遣歩卒一千、追於獨山、夾撃大敗之、殺獲甚衆」トアリ。コハ、癸巳ノ年ニシテ、壬辰ノ翌年ナレドモ、ヤガテ四將ノ征討ヲ誤リ記シタルモノナルベシ。勝敗ヲ轉倒シタルハ、羅紀ニハ珍シカラヌ事ナリ。

(第二)「七年秋九月、高麗人、百濟人、任那人、新羅人、並來朝、時命武內宿禰、領諸韓人等作池、因以名池、號韓人池」。

七年ハ、丙申ノ年ヲ云ヘルニテ、紀元千五十六年、（麗紀ニテハ廣開土王五年、碑ニテハ永樂六年、百濟阿莘王五年、新羅奈勿尼師今四十一年。）應神天皇御年三十五歳ノ時ナリ。高句麗人ノ來朝ノ事ノ、明カニ記サレタルハ、コノ年ゾ始メナリケル。任那人ノ事モ、蘇那曷

吒知ノ朝貢ノ後ハ、久シク見エザリシガ、コノ年ニ始メテ來朝シタルナリ。

此ノ事、古事記ニハ「新羅人參渡來是以建内宿禰命引率爲役之堤池而、作百濟池」トアリテ、記傳卅三ノ十七丁ニ「百濟ノ池は、此の外には、古書に見えたることなし。百濟は、たゞ池の名か、又其地ノ名か。此ノ事下に論あり。百濟てふ地は、和名抄に、攝津ノ國百濟ノ久太良郡あり、又河内ノ國錦部ノ郡百濟ノ郷あり。書紀敏達ノ卷に宮于百濟ノ大井、皇極ノ卷に、百濟ノ大井ノ家などあるは、此なり。同卷に石川ノ百濟ノ村とあるは、一ッか別なるか。錦部郡と石川ノ郡とは、並べり。又舒明ノ卷に、以百濟川側爲宮處云々、徙於百濟宮とあるは、三代實錄卅八に、大和國十市郡百濟川云々とある處にして、川は、廣瀨ノ郡との堺なり。今も、廣瀨ノ郡に百濟村あり。此ノ川に近し。古へに百濟ノ大寺と云ありしも、此なり。舒明紀三代實錄を考合すべし。天武紀に、繕兵百濟ノ家とあるも、こゝなるべし。萬葉二三十五丁に百濟之原とよめるも、此なり。八十六丁に百濟野とあるも同じかるべし。大和志に、廣瀨ノ郡に百濟池を擧て、百濟村ノ西、廣サ四百畝と記せり。此ノ池にやあらむ」。又應神紀七年ノ文ヲ引キテ、「是レにつきて、又論あり。まづ此ノ記に百濟ノ池とあるは、若シ其ノ地ノ名にはあらで、たゞ池ノ名ならば、新羅人を役て作れゝば、新羅ノ池とこそ號くべきを、百濟ノ池としも云る故は、書紀に韓人ノ池とあるに合せて思ふに、百濟ノ國は、殊に親く仕へ奉リし國なるが故にや、諸の韓國の中にも、取リ分て彼ノ國を韓人と云ることあり。書紀欽明ノ卷十七年の處に、韓人ノ大身狹ノ屯倉、高麗人ノ小身狹ノ屯倉とありて、言韓人者、百濟也と註し、また一本云、云々韓人高麗人云々。これ高麗に對へて、百濟を韓人と云り。然れば、韓人と云と、百濟と云と同意なる故に、もとは韓人ノ池なるを、百濟ノ池とも云るか。若シ然らば、初メに名けたる意は、書紀の如く、諸の韓人にても、此ノ記の如く、新羅人にても、韓人とは云べければ、同じことなるを、其ノ名を後に百濟のことに取て、百濟ノ池とも云るにや、又は韓人を役て作れるに因て、本の名は韓人ノ池なるを、百濟の地に在ルを以て、百濟ノ池とも云るにや、何れにもあれ、右の考への如くなるときは、此ノ記に書紀との異、たゞ新羅人とあると、諸韓人とあるとのみにして、池は、一ッなり。大和志に、韓人ノ池をば、城下ノ郡唐古村に在て、今は柳田ノ池と云よし記したれど、唐古てふ村ノ名につきてのおしあてにはあらざるか。例のおぼつかなし」ト云ヘリ。

廣開土王ノ碑ニ、コノ丙申ノ年、廣開土王、躬ヅカラ水軍ヲ率キテ、百濟ヲ擊チテ、五十餘城ヲ攻取リ、百濟王ノ降服シタルニ由リテ、王弟並大臣十人ヲ質トシテ、師ヲ班シタルコト見ユ、然レバ、コノ諸國ノ來朝ハ、同ジ年ナガラモ句麗ト百濟ト和議ノ整ヒタル後ニシテ、句麗王ハ、皇國ノ强盛ナル有樣ヲ百濟人ヨリ聞キタル故ニ、朝貢ノ使者ヲ差立テタルニヤアラン。菅政友氏ガ彼ノ碑ノ考史學會雜誌第貳拾參號ニ、此ノ記紀ノ文ヲ引キテ、「來朝トハ、王ノ命モテ來レルモノヽ稱ナルヲ、ソレニ池ヲ作ラシメシモ似合シカラズ、又新羅人ヲ役タセテ作レルモノニ、百濟ノ稱ヲオホセシモ、其ノ實ニソムケリト思ハルレバ、此ハ、二書共ニ誤レルニテ、實ハ、今年ノ戰ニ、俘虜(句麗人ノ俘ハレタル者)ナドモ多ク、又新羅ヲ始メトシテ(皇朝ニ)叛キシモノモ夥シカリツランニ、ソレ等ヲ引率シトイヘルモ、故アリシ事ナルベシ」ト云ヘリ。コレモ、然ルベキ一ツノ考ヘナリ。

(第三)「八年春三月、百濟人來朝」、其ノ註ニ「百濟記云、阿花王立、無禮於貴國、故奪我枕彌多禮及峴南支侵谷那東韓之地、是以遣王子直支于天朝、以脩先王之好也」。

八年ハ、丁酉ノ年ヲ云ヘルニテ、紀元千五十七年、百濟阿莘王六年ナリ。濟紀ニ、此ノ丁酉ノ年ニ「六年夏五月、王與倭國結好、以太子腆支爲質」トアルハ、年紀モ事實モ、皆合ヘリ。但「王與倭國結好」ト云ヘルハ、イカヾ。百濟ノ朝貢ハ、近肖古王以來ノ事ナレバ、此ノ年ニ結好ト云フベキニハ非ズ。サレドモ阿花王ノ無禮ニヨリテ、皇朝ヨリ嚴シキ譴責ヲ蒙リタルヲ、質子ヲ送リテ謝シ奉リタレバ、百濟紀ニハ「脩先王之好」ト云ヘリ。濟紀ハ、近肖古近仇首ノ朝貢ノ事ヲ記シ漏セルニヨリテ、質子ノ事ノ、誠ニ突然ナルガ故ニ、

結好トハ書キ添ヘタルナリ。

支侵ハ、魏志東夷傳馬韓列國ノ中ニモ支侵國アリ、三國史記地理志ニ引キタル唐總章二年李勣ノ奏ニ支潯州支潯縣ト云ヘル地ハ、コノ支侵ノ故地ナランカ。支潯州ハ、九縣アリテ、「巳汶縣、本今勿、支潯縣、本只彡村、馬津縣、本孤山、子來縣、本夫首、只解禮縣、本皆利伊、古魯縣、本古麻只、平夷縣、本知留、珊瑚縣、本沙好薩、隆化縣、本居斯勿」トアリ。巳汶縣ハ、百濟ノ今勿縣、新羅ノ今武縣、高麗ノ德豐縣ニシテ、今ノ德山縣ナリ。馬津縣ハ百濟ノ烏山縣、新羅ノ孤山縣、高麗ノ禮山縣ナリ。子來縣ハ、百濟ノ拔首只縣、一名夫只郡ニシテ新羅以後唐津縣ト云フ。隆化縣ハ、百濟ノ居斯勿縣、新羅ノ青雄縣、高麗ノ巨寧縣ニシテ、故址ハ南原府ノ東北五十里ニ在リト云フ。隆化ノ外諸縣ハ、皆忠清道ノ西北ニ在レバ、支潯縣モ恐ラクハ其邊ナルベシ。

任那諸國ハ、辛卯ノ年ヨリ皇朝ノ宰ニテ管治スル事トナリタレドモ、猶其ノ西部ナル峴南支侵谷那東韓ノ地ハ、百濟ノ所管トシテ殘シ置カレシヲ、コノ年又阿花王ノ無禮ニ由リテ、枕彌多禮ト共ニ取リアゲ給ヒシナリ。

直支ハ、後ニ百濟王ニナレル人ニシテ、濟紀ニモ三國遺事ノ年表ニモ、「腆支王或云直支」ト云ヒ、姓氏錄河內國諸蕃ニ「林ノ連、百濟ノ國腆支王之後也」トアレバ、ソノカミ彼ノ國ニテモ皇國ニテモ、共ニ二樣ニ書キタルナリ。

（第四）「九年夏四月、遣武內宿禰於筑紫、以監察百姓、時武內宿禰弟甘美內宿禰欲廢兄、即讒言于天皇、武內宿禰、常有望天下之情、今聞在筑紫而密謀之曰、獨裂筑紫、招三韓、令朝於己、遂將有天下、於是天皇則遣使以令殺武內宿禰、時武內宿禰歎之曰、吾無貳心、以忠事君、今何禍矣、無罪而死耶、於是有壹伎直祖眞根子者、其爲人、能似武內宿禰之形、獨惜武內宿禰無罪而空死、便語武內宿禰曰、今大臣以忠事君、既無黑心、天下共知、願密避之、參赴于朝、親辨無罪、而後死、不晩也、且時人每云、僕形似大臣、故今我代大臣而死之、以明大臣之丹心、則伏劒自死焉、時武內宿禰、獨大悲之、竊避筑紫浮海、以從南海廻之、泊於紀水門、僅得逮朝、乃辨無罪、天皇則推問武內宿禰與甘美內宿禰、於是二人各堅執而爭之、是非難決、天皇勅之、令請神祇探湯、是以武內宿禰與甘美內宿禰、共出于磯城川濱、爲探湯、武內宿禰勝之、便執橫刀、以毆仆甘美內宿禰、遂欲殺矣、天皇勅之令釋、仍賜紀伊ノ直等之祖也」。

九年ハ、戊戌ノ年ヲ云ヘルニテ、紀元千五十八年ナリ。武內ノ宿禰ノ命ノ「裂筑紫、招三韓、令朝於己云々」ト讒セラレタル緣由トコノ頃ノ三韓ノ事情トニツキテ、菅政友氏ノ巧ニ考ヘ出サレタル說アリ。ソハ第三十五章ニ引クベシ。壹伎ノ直ハ、姓氏錄右京神別ニ「壹伎ノ直、天ノ兒屋根ノ命十一世孫、雷大臣之後也」トアリテ、卜部ノ宿禰ト同族ナリ。

サテ戊戌ノ翌年己亥ノ年ハ、新羅ノ奈勿尼師今ノ四十四年、廣開土王ノ碑ノ永樂九年ナリ。彼ノ碑ニ據レバ、コノ年新羅ノ使者、句麗ニ至リテ、倭人其ノ國ノ境內ニ滿チテ、城池ヲ破リ、人民ヲ收メタルコトヲ訴ヘテ、句麗ノ王ノ救援ヲ求メタルニ、句麗ノ王、其ノ忠ヲ褒メテ、其ノ請ヲ許セリ。カクテ明年庚子ノ年、句麗ノ王步騎五萬ヲ遣シテ新羅ヲ救ヒ任那新羅ノ間ニテ、皇軍ト烈シキ戰アリキ。其翌々年壬寅ノ年（百濟ノ阿花王十一年、新羅ノ實聖尼師今元年、）羅紀ニ「三月與倭國通好、以奈勿王子未斯欣爲質」トアリ。句麗ノ援軍既ニ新羅ノ地ヲ去リタレバ、新羅ノ尼師今、遂ニ皇朝ヲ畏ル、心ヲ生ジテ、質子ヲ送リテ、皇朝ノ御怒ヲ慰メントシタルナリ。又其ノ同ジ年ニ濟紀ニ「五月、遣使倭國求大珠」ト云ヘルコトモアリ。大珠ハ大キナル眞珠ナルベシ。

（第五）「十四年春二月、百濟王貢縫衣工女曰眞毛津、是今來目衣縫之始祖也」。

十四年ハ、癸卯ノ年ヲ云ヘルニテ、紀元千六十三年、（百濟ノ阿花王十二年、新羅ノ實聖尼師今二年、麗紀ノ廣開土王十二年、碑ノ永樂十三年、）應神天皇御年四十二歳ノ時ナリ。來目ハ、來目部ノ住ミタル所ニテ、神武紀ニ「使大久目居于畝傍山以西川邊之地、今號來目邑、此其緣也」トアル來目ノ邑ナリ。記傳（十九ノ八丁）ニ云、「來目ノ邑は、和名抄に大和ノ國高市ノ郡久米ノ郷あり、是なり。式に久米ノ御縣神社もあり。今も久米村久米寺などあり。川ノ邊とあるは、雄略紀に來目川とある、是なるべし。此村、白檮原ノ京にいと近し。」眞毛津ノ裔モ、コノ來目ノ邑ニ住メル故ニ、來目ノ衣縫ト云フナリ。眞毛津ハ、女子ナルヲ、衣縫ノ始祖ト云ヘルハ、人ニ嫁キテ生ミタル子ノ裔、又ソノ縫衣ノ技ヲ傳ハリタル者ノ裔ハ、皆眞毛津ヲ始祖ト仰ギタルナリ。姓氏錄和泉ノ國諸蕃ニ「衣縫百濟ノ國神靈ノ命之後也」トアルハ、來目ノ衣縫ト關係アリヤ、ナシヤ。古事記ニ吳服西素ヲ貢ルトアルハ、コレト異ナル傳ヘナリ。又コノ年、濟紀ニ「春二月、倭國使者至、王迎勞之特厚」トアリ。百濟ノ恭順ノサマヲ見レバ、特厚ト云フコトハ、サモアルベシ。

（第六）同シ十四年ニ「是歳、弓月君自百濟來歸、因以奏之、曰臣領己國之人夫百二十縣而歸化、然因新羅人之拒、皆留加羅國、爰遣葛城ノ襲津彥、而召弓月之人夫於加羅、然經三年而襲津彥不來焉」。弓月ノ君ハ、姓氏錄ニ融通王トモ弓月王トモアリテ、韓地ニ住ミタル大部落ノ君長ナリキ。弓月ト融通トハ、一ツ言ノ轉レルナリ。自百濟來歸トアレバ、其ノ國ハ、百濟ノ邊ニアリテ、百濟ノ地ヲ經テ參レルナラン。魏志東夷傳ニ「其耆老傳世自言、古之亡人避秦役、來適韓國、馬韓割其東界地與之」トアルハ、辰韓ノ事ナレドモ、コノ弓月ノ君ノ祖モ、ソレラノ類ニテ、古クヨリ馬韓ノ地又ハ樂浪帶方ノ南疆ニ住ミタルナリ。コノ時馬韓辰韓ノ地ハ、大抵百濟新羅ニ併セラレタレドモ、未ダ擊チ漏サレテ、其ノ獨立ヲ保テル國モ、少シハ有リシ故ニ、宋書南齊書ノ倭國傳ニモ、百濟新羅ノ外ニ、秦韓（即辰韓）慕韓（即馬韓）ノ名見ユ。コノ弓月君ハ、即馬韓ノ一小國ノ君ナルベシ。百二十縣ハ、古語拾遺ニモ、「秦公祖弓月、率百廿縣民而歸化矣」トアリ。姓氏錄ニハ百二十七縣ノ秦氏ナドアリ。イヅレニテモ縣ノ數、餘リニ多シ。三國史記ノ雜志ニ見エタル百濟全國ノ郡縣ヲ悉ク擧ゲテモ、百四十餘ニハ過ギズ。コノ縣ハ、イト小キ部落ヲ云ヘルニテ、新羅百濟ノ縣トイヘル物トハ異ナルナリ。サテソノ部落ハ、イカニ小クトモ、百二十部ヲ領スル君長ノ、國ヲ擧ゲテ他國ニ歸化セントスルハ、極メテ已ミ難キ事情ニ迫ラレタルナリ。廣開土王碑ニ據レバ、此ノ時句麗ノ勢、益〻盛ニシテ七年前ナル永樂六年丙申ニ、百濟ノ北疆ハ、悉ク殘破セラレテ、麗濟二國ノ間ハ、戰亂ノ場トナリタレバ、二國ニ挾マリタル諸小國ハ、其ノ獨立ヲ失ヒテ、隣國ニ服屬スルカ、然ラザレバ、國ヲ擧ゲテ遷徙スルニ至リシナリ。後ニ見ユル、阿知ノ使主ノ、黨類十七縣ヲ率ヰテ歸化セルモ、之ニ同ジ。弓月之人夫トアル弓月ノ下ハ、君ノ字脫チタルカ。伴信友ノ校本ニハ、之ヲ補ヘリ。コノ人夫等ノ來著ハ明後年ニアリ。

サテ癸卯ノ翌年ナル永樂十四年甲辰ニハ、皇軍、北ニ進ミテ、句麗ノ南疆ナル帶方界ニ擊チ入リタレバ、句麗王自ラ出デ、之ヲ禦ギテ、又烈シキ戰ヒアリキ。又ソノ甲辰ノ年ト次ノ乙巳ノ年トニハ、應神紀ニ阿直岐王仁ノ來朝ノ事ヲ記サレタレドモ、既ニ前章ニ云ヒタレバ、略キヌ。

（第七）十六年ノ條ニ「是歳、百濟ノ阿花王薨、天皇召直支王謂之曰、汝返於國以嗣位、仍且賜東韓之地而遣之」。原註ニ「東韓者、甘羅城、高難城、爾林城是也」。十六年ハ、乙巳ノ年ヲ云ヘルニテ、紀元千六十五年、應神天皇御年四十四歳、濟紀ノ阿莘王十四年、腆支王元年ト云ヘル年ナリ。コノ直支王歸國ノ事ハ、濟紀ニ稍委シク記サレタリ。先ヅ阿莘王ノ十四年ノ條ニ「秋九月、王薨」トアリテ、次ニ「腆支王、（或云直支）梁書名映、阿莘之元子、阿莘在位第三年、立爲太子、六年、出質於倭國、十四年、王薨、王仲弟訓解攝政、以待太子還國、季弟碟禮殺訓解、自立爲王、腆支在倭、聞訃哭泣請

歸倭王以兵百人衞送、旣至國界、漢城人解忠來告曰、大王棄國、王弟碟禮殺兄自王、願太子無輕入、腆支留倭人自衞、依海島以待之、國人殺碟禮、迎腆支即位、妃八須夫人、生子久爾辛」ト見ユ。東鑑ニハ、王仲弟訓解トアル王ヲ太子ト改メ、王弟碟禮トアル王弟ヲ季子ト改メテ、太子ノ叔父ヲ皆太子ノ弟トシタルハ、何ニ依リタルニヤ、覺束ナシ。サテ廣開土王碑ニヨリテ當時ノ百濟ノ國勢ヲ察スルニ、阿莘王五年ナル丙申ノ年ニハ、句麗ニ攻メラレテ、漢江以北ナル五十餘城ヲ失ヒ、其ノ明年丁酉ノ年、太子直支ヲ皇朝ニ入侍セシメテヨリ、皇朝ヨリハ益、百濟ヲ助ケテ、新羅ヲ討伐シ給ヒシカバ、阿莘王八年己亥ノ年武內ノ宿禰ノ命ノ讒言ニ遭ヒタル翌年、新羅ノ使者句麗ニ至リテ、皇軍ノ強盛ヲ告ゲテ、句麗王ノ救援ヲ請ヘリ。明年庚子ノ年、句麗ノ援兵步騎五萬人、任那新羅ノ地ニテ皇軍ト烈シキ戰アリ、ソレヨリ四年ノ後、阿莘王十三年甲辰ノ年、葛城襲津彥ノ命ヲ加羅ニ遣サレタル翌年、皇軍、帶方界ニ入リタルヲ、句麗王自ラ出デ、之ヲ禦キテ、又烈シキ戰アリキ。コノ任那新羅ノ戰モ帶方界ノ戰モ、皇軍ノ目的ハ、百濟ヲ助ケンガ爲ナルベシ。カクテ翌年乙巳ノ年ニ、阿莘王薨ジタルニ、王弟碟禮ノ簒奪アリテ、太子直支ノ位置甚危クナリキ。外ニハ句麗新羅ノ強敵アリテ、內ハ叔父ニ王位ヲ竊マレタレバ、太子ノ歸國ハ、殆ド望ムベカラザルコトナリシヲ、皇朝ヨリ兵ヲ以テ衞送シ、又前ニ取上ゲ給ヒシ東韓ノ地ヲ二タビ賜ヒテ其ノ國力ヲ增サシメ、且皇軍ノ彼ノ地ニ留マレル者、外ヨリ聲援ヲ爲シタレバ、太子コレニ力ヲ得テ、海島ニ依リテ、機會ヲ待ツコトニナリ。國人モ、碟禮ヲ戴クコトヲ欲セザルニ至レリ。然レバ、直支王ノ王業ヲ保ツコトヲ得タルハ、全ク皇朝ノ庇蔭ニ依レルモノニシテ、實ニ再造ノ恩ト謂フベシ。百濟ノ國ノ皇朝ニ忠順ニシテ、朝貢ヲ怠ラザリシハ、其ノ故ナキコトニ非ズカシ。

（第八）同ジ十六年ニ「八月、遣平群木菟宿禰、的戶田宿禰於加羅、仍授精兵、詔之曰、襲津彥久之不還、必由新羅人拒而滯之、汝等急往之擊新羅、披其道路、於是木菟宿禰等進精兵、莅于新羅之境、新羅王愕之服其罪、乃率弓月之人夫、與襲津彥共來焉」。

平群ノ木菟ノ宿禰ハ、襲津彥ノ命ノ兄ナリ。的ノ戶田ノ宿禰ハ、襲津彥ノ命ノ子ナルベシ。古事記ニ「葛城ノ長江ノ曾都毘古者、的ノ臣等之祖也」トアリテ、コノ戶田ノ宿禰モ、仁德紀十二年ニ「的ノ臣祖也」トアレバナリ。因ニ云フ、仁賢紀ニ韓ノ白水郞ノ暵ト云フ人アリ。姓氏錄未定雜姓攝津ノ國ノ部ニ「韓海部首、武內宿禰男平群木菟宿禰之後者、不見」トアルハ、コノ暵ノ裔ナルベシ。氏ヲ韓海部ト負ヘル故ハ知ラネドモ、木菟ノ宿禰ノ屢韓國ニ往來シタルニ由アル事ナルベシ。

加羅ハ、大加羅ナリ。大加羅ヨリ皇國ニ渡ルニ、新羅ノ地ヲ通ルコトナケレバ前々年ノ處ニ「因新羅人之拒、皆留加羅國、」又コヽニ「擊新羅、披其道路」ナドアルハ、聞エ難シ。加羅ヲ大加羅ノ西ナル諸小國ト見テモ、皇國ニ渡ルニハ、直チニ南ノ海ニ出ヅル故ニ、新羅人ニ拒ガルヽ由ナシ。カレ思フニ、新羅ハ、皇朝ノ武威ヲ畏レテ、質子マデモ送リタレドモ、猶句麗ノ聲援ヲ恃ミテ、竊ニ加羅ヲ脅シテ、其ノ南疆ナル海岸ヲ占領シ、皇國ニ渡ラント欲ストモ、大船ヲ出スベキ所ナカラシメタルナラン。コノ年ハ新羅ノ實聖尼師今四年ニシテ、羅紀ニ「四年夏四月、倭兵來攻明活城、不克而歸、王率騎兵、要之獨山之南、再戰破之、殺獲三百餘級」トアルハ、木菟ノ宿禰等ノ征討ニシテ、例ノ勝敗ヲ顚倒シタルナリ。

コノ事、古事記ニハ、タヾ「秦造之祖、漢直之祖、及知釀酒人名仁番亦名須須許理等、參渡來也」トアリテ、記傳ニ「秦は、波陀と訓ム。此ノ祖は、弓月ノ君なり」ト云ヘリ。漢ノ直之祖ト仁番トノ事ハ、後ニ云フ。

又弓月ノ君ノ後裔ノ事ハ、次章ニ云フベシ。

平群ノ木菟ノ宿禰等ノ征討ノ後二年、新羅ノ實聖尼師今六年ト云ヘル丁未ノ年ニ、羅紀ニ「春三月、倭人侵東邊、夏六月、又侵南邊、奪掠一百人」トアリ。又廣開土王ノ碑ニモ、永樂十七年丁未ニ、平壤ノ邊ニテ大戰アリシ

由見エ、菅政友氏ハ、コノ時ノ敵モ、前年甲辰ノ年ノ皇軍ナラント云ヘリ。然ラバ木菟ノ宿禰等ハ、コノ年マデ猶韓地ニ留マリテ、處々ニテ征戰アリシナリ。又其ノ翌年戊辰ノ年ニハ、羅紀ニ「七年春二月、王聞倭人於對馬島置營、貯以兵革資粮、以謀襲我、我欲先其未發、揀精兵、擊破兵儲、舒弗邯來斯品曰、臣聞兵凶器、戰危事、況涉巨浸以伐人、萬一失利、則悔不可追、不若依險設關、來則禦之、使不得侵猾、便則出而禽之、此所謂致人而不致於人、策之上也、王從之」トアリ。此ノ文ニ依レバ、コノ頃ノ征討ハ、尋常ナラザル大擧ニシテ、弓月ノ君ノ人夫ヲ召スノミノ事ニハアラズ。牙營ヲ對馬ニ置キテ、一面ハ、新羅ヲ攻メ、一面ハ、任那百濟ヲ經テ句麗ヲ攻メタルカ、又ハ新羅句麗ノ戰ノハカ〴〵シカラザルニ由リテ、對馬ニ據リテ、持久ノ計ヲナセルニモアルベシ。第三十五章ニ引ケル菅氏ノ說ヲ參考セヨ。

(第九)「二十年秋九月、倭漢直祖阿知使主、其子都加使主、並率已之黨類十七縣而來歸焉。」

二十年ハ、己酉ノ年ヲ云ヘルニテ、紀元千六十九年、應神天皇御年四十八歲ノ時ナリ。倭ノ漢ノ直ノ祖ハ、古事記ニ漢ノ直之祖トアリ。漢ハ、通證ニ「阿夜ハ文也、猶言文物之國也」、記傳ニ「漢を阿夜と云こと、いかなる由にか、詳ならず。漢織を書紀に穴織ともあるを以て思へば、阿那と云と同く、此レも阿夜と歎く聲より出たるか」ト云ヘリ。紀ニ倭ト添ヘタルハ、河內ノ漢ノ直モアル故ニ、ソレニ分ケテナリ。阿知ノ使主ハ古事記履中天皇ノ段ニ阿知ノ直トアリ。雄略天皇ノ時ニ、其ノ子孫ニ賜ハリタル尸ヲ以テ追稱シタルナリ。姓氏錄ニハ多ク阿智王ト書ケリ。使主ハ、記傳四十ノ十七丁ニ、戎人ノ號ニテ、尸ノ臣トハ異ナルヲ、書紀ニ混ヒテモ書カレタルコトヲ論ヒテ、サテ「使主と云號は、書紀應神ノ卷に、阿知ノ使主、都加ノ使主と云人あり。此記高津ノ宮ノ段に見えたる奴理能美も、姓氏錄に努理ノ使主とあり。書紀雄略ノ卷に、漢ノ使主等、賜姓曰直とあるは、かの阿知ノ使主の子孫にて、漢人なり。又姓氏錄に使主の尸の姓これかれ見えたるも、皆諸蕃なり。されば此レは、もと韓國などより出たる號か。はた皇朝にて蕃人の料に制られたるか。何れにまれ、蕃人の號なり。さて此を意美と云ことは、書紀顯宗ノ卷に、日下部ノ連使主と云人ノ名ありて、使主此云於瀰と訓註せり。そも〳〵於瀰は、韓語とも聞えざれば、此は、皇國にて臣の稱を此使主の訓にも兼用ひられたるにやあらむ。さて臣と口語は同じけれども、戎人のは、使主と書る文字を以て分別られたるなるべし。こは、なほよく考ふべし」ト云ヘリ。阿知ノ使主ノ家系マタ其ノ族類ノ事ハ、次章ニ云フベシ。

コノ己酉ノ年ハ、百濟ノ直支王五年ニシテ、濟紀ニ「倭國遣使送夜明珠、王優禮待之」トアリ。コノ後三年ヲ經テ、壬子ノ年新羅ノ實聖尼師今十一年、廣開土王碑ノ永樂二十二年。ニ、羅紀ニ「以奈勿王子卜好質於高句麗」トアリ。新羅ハ、既ニ皇國ニ質子ヲ送リタレドモ、其ノ反覆ノ罪逃レ難キコトヲ自ラ知リテ、深ク句麗ニ結バンガ爲ニ、又質子ヲ送リタルナリ。廣開土王碑ニ、昔新羅ノ安錦ハ未ダ朝貢シタルコト無カリシニ、此ノ王ノ時ニ至リ朝貢シタリトアルニテモ、其ノ反覆ノ情見ユルナリ。

(第十)「二十五年、百濟直支王薨、即子久爾辛立爲王、王年幼、大倭木滿致執國政、與王母相婬、多行無禮、天皇聞而召之」、其ノ註ニ「百濟記云、木滿致者、是木羅斤資討新羅時、娶其國婦而所生也、以其父功專於任那、來入我國、往還貴國、權重當世、然天皇聞其暴召之」。

二十五年ハ、甲寅ノ年ヲ云ヘルニテ、紀元千七十四年、百濟ノ直支王十年、應神天皇御年五十三歲ノ時ナリ。濟紀ニハ、直支王ノ在位ヲ十六年トシ、「十六年春三月、王薨、」「久爾辛王、腆支王長子、腆支王薨、即位」トアリテ、應神紀ノ干支ヨリ六年ノ後ナル庚申ノ年ニ當レリ。神功應神紀ニ見エタル百濟王ノ薨年ノ干支ノ、濟紀ト違ヘルハ、コレノミナリ。腆支ノ名ハ、宋書ニ餘映ト云ヒテ、晉ノ安帝義熙十二年丙辰紀元千七十六年、腆支王十二年ト宋ノ武帝永初元年庚申紀元千八十年、腆支王十六年トニ見エタレバ、紀ニ其ノ薨ヲ甲寅ノ年ニ記シタルハ、誤リナリ。應神

天皇ノ崩年ハ、下ニ述ブルガ如ク戊午ノ年（紀元千七十八年、腆支王十四年、）ト思ハルレバ直支王ノ薨ジタルハ、仁德天皇ノ二年ニシテ、天皇聞而召之トアル天皇ハ、即仁德天皇ナルベシ。

大倭ハ、木滿致ノ姓ニモ非ズ、倭河內ノ倭ニモ非ズ、皇國ト云フ義ニシテ、百濟記ノ文ニ依リテ記セルナリ。木滿致ト云フ名モ、百濟記ニ記セルマヽニ記シタルニテ、皇國風ナル眞ノ稱ヘハ、何ト云ケン。木羅斤資沙沙奴跪等ト同ジク、考フベキ由ナシ。濟紀蓋鹵王ノ末年ニ見エタル木劦滿致ト云ヘル人ハ、木滿致トヨク似タル名ナレドモ、時代ハ五十餘年隔タリタレバ、別人ナルベシ。專於任那ハ、コノ時任那ハ皇朝ノ宰ニテ管治スル事トナリタレバ、木滿致ハ、父ノ武功ニ因リテ、任那ノ宰トナレルカ、又ハ宰ヲ輔クル官トナリテ、權威ヲ振ヒシナリ。

甲寅ノ翌年乙卯ノ年、（紀元千七十五年、實聖尼師今十四年、）新羅ノ羅紀ニ「八月、與倭人戰於風島克之」トアリ。

（第十一）「二十八年秋九月、高麗王遣使朝貢、因以上表、其表曰、高麗王敎日本國也、時太子菟道稚郎子讀其表怒之、責高麗之使、以表狀無禮、則破其表」。

二十八年ハ、丁巳ノ年ヲ云ヘルニテ、紀元千七十七年、句麗ノ長壽王五年ナリ。句麗人ハ、廣開土王ノ時、新羅ニ親ミテ、百濟ヲ敵トシ、屢皇軍ト戰ヒテ、自ラ勝利ヲ誇リシガ、其ノ子長壽王巨連ニ至リテ、國力益强ク、麗紀ニ「體貌魁傑、志氣豪邁」ナドアリテ、此ノ王モ頗ル英主ナリシカバ、其ノ傲慢ノ心ヨリシテ、カヽル無禮ヲ爲シタルナリ。但コノ表ノ文ハ當時ノ眞ノ物ニハアラズ。イカニト云フニ、高句麗國ヲ中略シテ高麗ト云フハ、齊梁以後ノ習慣ニシテ、晉宋ノ世ニハ未ダアラザリシ事、第十五章ニ云ヘルガ如シ。又日本ノ號ハ、孝德天皇ノ時ニ始マリテ、古ハ倭ノ字ヲ用ヒタリ。ソハ、第（闕）章ニ云フベシ。實ニ句麗ヨリカヽル無禮ノ表ヲ送リタランニハ、其ノ文ハ、必「高句麗王敎倭國」トアリケンヲ、紀ノ撰者ハ、後世ノ稱ヲ以テ追改シタルナリ。

丁巳ノ翌年戊午ノ年ハ、紀元千七十八年、（百濟ノ腆支王十四年、）新羅ノ訥祇麻立干二年ニシテ、應神天皇御年五十七歲ナリ。コノ年、濟紀ニ「夏、遣使倭國、送白綿十匹」トアリ。又羅紀ニ「秋、王弟未斯欣自倭國逃還」トアリテ、列傳ニ朴堤上ノ皇朝ヲ紿キ奉リタル傳說アリ。ソハ、第三十六章ニ云フ。サテ古事記應神天皇ノ段ニ「甲午年九月九日崩」トアル甲午ノ年ハ、紀元千五十四年（百濟ノ阿花王三年、麗碑ノ廣開土王四年、）ニシテ、モシ實ニ此ノ年ニ崩リマシセバ、應神紀ニテ即位五年ト云ヘル年ヨリ後ノ事實ハ、皆仁德天皇ノ御世ニ移リテ、古事記ニ、此ノ御世ニ百濟ノ池ヲ作リ、又秦ノ造ノ祖漢ノ直ノ祖參渡リ來ツトアルナドモ、此ノ御世ニハアラヌ事トナリテ、總テ合ハザル節ノミ多ケレバ、カノ甲午ノ年ハ、第六章ニ云ヘル如ク、戊午ノ年ノ誤リニテ、紀元千七十八年ナル戊午ノ年ハ、コノ天皇ノ終ノ年ニゾアルベキ。然ルニ此ノ戊午ノ年ヨリ後ニ、應神紀ニ韓國ニ關レル記事猶三條アリ。其ハ、

（第十二）「三十一年秋八月、詔羣卿曰、官船名枯野者、伊豆國所貢之船也、是朽之不堪用、然久爲官用、功不可忘、何其船名勿絕而得傳後葉焉、羣卿便被詔、以令有司取其船材爲薪而燒鹽、於是得五百籠鹽、則施之周賜諸國、因令造船、是以諸國一時貢上五百船、悉集於武庫水門、當是時新羅調使共宿武庫、爰於新羅停忽失火、即引之及于聚船、而多船見焚、由是責新羅人、新羅王聞之、讋然大驚、乃貢能匠者、是猪名部等之始祖也」。

三十一年ハ、戊午ノ年ヨリ二年ノ後ナル庚申ノ年ニ當リテ、仁德天皇ノ御世カトモ思ハルレドモ、コレハ百濟記ニヨリテ記セル者トモ見エザレバ、干支ヲ正シタルニモアルマジ。唯應神天皇ノ御世ノ事ト傳ヘタリシヲ、程ヨキ所ニ記シタルニ、コノ御世ノ年紀ノ延ビタルニツレテ、戊午ノ年ヨリ後ノ事トナレルナルベシ。

猪名部ハ、雄略紀十二年、「天皇命木工鬪鷄御田、始起樓閣」ノ註ニ「一本云、猪名部御田」、又十三年ニ「木工猪名部眞根、以石爲質揮斧斲材、終日斲之、不誤傷刄」、又十八年ニ「奪(物部)菟代宿禰所有猪名部、賜物部目連」、姓氏錄攝津國諸蕃ニ「爲奈部ノ首、百濟國人中津波手之後也」トアリ。猪名ハ、地ノ名ニヨレルナリ。和名抄攝津ノ國河邊ノ郡ニ爲奈ノ鄕アリ。紀ニ新羅ヨリ貢ルトアルヲ、姓氏錄ニ百濟ノ人トシタルハ、傳ヘノ異ナルニヤ、又ハ木工ハ、新羅ヨリモ百濟ヨリモ來テ、何レモ猪名部ト云ヘルニヤ。

(第十三)「三十七年春二月戊午朔、遣阿知使主都加使主於呉、令求縫工女、爰阿知使主等渡高麗國、欲達于呉、則至高麗、更不知道路、乞知道者於高麗、高麗王乃副久禮波久禮志二人爲導者、由是得通呉、呉王於是與工女兄媛弟媛呉織穴織四婦女」。

三十七年ハ、カノ戊午ノ年ヨリ八年ノ後ナル丙寅ノ年ニ當レドモ、後ニ引ケルコノ天皇崩御ノ條ニ、阿知ノ使主等ガ歸リ來シ時、天皇既ニ崩リマセルコトヲ記セルニヨリテ思ヘバ、呉國ニ至リシハ、決メテ戊午ノ年ヨリ以前ノ事ナルベシ。晉書ニハ、武帝紀泰始二年ニ「倭人來獻方物」トアリテヨリ後ハ、倭國ノ事ハ、更ニ見エザリシガ、安帝紀義熙九年ニ至リテ、「是歲、高句麗倭國及西南夷銅頭大師、並獻方物」ト見エタリ。義熙九年ハ戊午ノ年ヨリ五年前ニ當レル癸丑ノ年ニシテ、阿知ノ使主等ガ歸化シタル己酉ノ年ヨリ四年ノ後ナリ。高句麗倭國ト連ケテ書キタルハ、句麗人ヲ導者トシタルニモ合ヘレバ、コハ阿知ノ使主等ヲ指シタルコト、疑ヒナシ。

呉ハ、支那ノ江南地方ヲ云フ大名ナリ。周ノ世ノ呉ノ國ハ、今ノ江蘇省ノ南部ニシテ、秦ノ時、其ノ地ヲ會稽郡ト名ヅケタレドモ、其ノ郡治ヲバ呉縣ト云ヘリシガ、東漢ノ世、其ノ郡ヲモ呉郡ト云ヒシヨリ、呉郡呉縣ノ名ハ、南朝ノ世マデ易ハリシコトナシ。サテ呉王孫權江南ヲ領シテヨリ、呉ハ、又郡縣ノ名ノ外ニ江南ノ大名トナリタルヲ、東晉南朝ハ、其ノ故地ニ據リタル故ニ、北朝ニテハ、ソレラヲ指シテ呉トモ呼ビタレバ、句麗人ナドモ然云ヒシナリ。皇國ニテ呉ヲくれト云フコトハ、記傳ニ「かの久禮波久禮志が導せし國なる故か、又呉國の導せしを以て、彼二人の名は負へるか、本末知りがたし」、藝苑日涉ニ「呉此譯苦列、萃字譯語、蓋猶言日沒處」ナドアリ。高麗王ハ、句麗ノ長壽王巨連、呉王ハ、晉安帝ヲ云ヘルナリ。

阿知ノ使主等ガ晉國ニ赴クニ、マヅ句麗ノ地ニ至リタルハ、甚シキ迂路ナレドモ、古ハ大海ヲ直ニ横ギルコトハ、難儀ナル業ニシテ、彼ノ卑彌呼等ガ使者ノ魏ニ往キシニモ、必ズ帶方郡ニ渡リテ、ソレヨリ陸路ヲ行キタルナレバ、コノ度ノ使者モ、サル考ヘニテ句麗國ニハ渡リタルナリ。然ルニコノ頃ハ、支那ノ遼西ノ地ハ、北燕王馮跋ニ屬シ、所謂中原ノ地ハ、後魏ノ拓跋氏ニ屬シテ、陸路ハ通ズベカラサレドモ、遼東ハ、既ニ句麗ニ屬シ、青州(今ノ山東省)ノ地ハ、南燕滅ビテ、晉ノ領地トナリタレバ、久禮波久禮志等ハ、其ノ國都ナル國内城ヨリ鴨綠江口ノ西ニ出デヽ、ソレヨリ青州ニ渡リテ、南ニ進ミタルナルベシ。工女ドモノ事ハ、後ニ云フ。

(第十四)「三十九年春二月、百濟直支王、遣其妹新齊都媛以令仕、爰新齊都媛率七婦女而來歸焉」。

三十九年ハ戊午ノ年ヨリ十年ノ後ナル戊辰ノ年ニ當レドモ、直支王ノ薨リタルハ、コレヨリ八年前ナル庚申ノ年ニアレバ、直支王ノ在位ノ間ナル戊申ノ年ナドニ記スベキヲ、年紀ヲ誤リタルナリ。直支王ハ、質子トナリテ、久シク皇朝ニ留マリ居タルヲ、應神天皇ノ擁護ニヨリテ、百濟王ノ位ヲ嗣ギタレバ、其ノ大恩ノ忘レ難クテ、親妹ヲ送リテ、己レニ代リテ入侍セシメタルナリ。サレバ新齊都媛ノ來朝ハ、直支ノ歸國ノ後、幾年モ經ザル頃ノ事ナルベシ。

(第十五)「四十一年春二月甲午朔戊申、天皇崩于明宮、是月、阿知使主等自呉至筑紫、時胸形大神有乞工女

等、故以兄媛奉於胸形大神、是則今在筑紫國御使ノ君之祖也、旣而率其三婦女以至津國、及于武庫、而天皇崩之不及、即獻于大鷦鷯尊、是女人等之後、今呉衣縫、蚊屋衣縫是也」。

四十一年ハ、戊午ノ年ヨリ十二年ノ後ナル庚午ノ年ニ當レドモ、天皇ノ崩年ヲ戊午ノ年トスレバ、阿知ノ使主等ノ還リシモ、其ノ年ニテ、晋書安帝紀ニ倭國獻方物トアル義熈九年ヨリ五年ノ後ナリ。呉國ヨリ歸ルサニ、ヤガテ句麗百濟ナドニ立寄リテ、ソコニ年月ヲ經タルニモアルベシ。

御使ノ君ハ

呉ノ衣縫ノ呉ハ、雄略紀ニ「安置呉人於檜隈野、因名呉原」トアル所ニテ、大和國高市郡ニアル地名ナリ。コノ名ハ、雄略天皇ノ御世ニ始マリタレバ、コノ工女等ニヨレルハアラズ。工女等ノ裔ナル衣縫ハ、旣クヨリ其ノ地（檜ノ隈野）ニ住ミタリシニ、呉人ヲ置キ給ヒシヨリ呉原ト名ヅケラレタレバ、ヤガテソノ衣縫ヲモ呉ノ衣縫ト云フコトニナレルナリ。

蚊屋ハ、舒明紀ニ吉備ノ國蚊屋、和名抄ニ備中ノ國賀夜ノ郡トアル、コレナリ。三婦女ハ、工女弟媛ト呉織穴織トアルニ、其ノ後裔ハ、衣縫トノミアルハ、衣縫ニテ、服織ノ事ヲモ兼ネタリト見ユレバ、和名抄備前ノ國邑久ノ郡又コノ賀夜ノ郡ニ服部ノ郷アリ、又備後ノ國品治ノ郡ニ服織ノ郷アルハ、コノ工女等ノ住ミタルニヨレル名ナラン。若然ラバ、應神紀二十二年、妃兄媛（吉備ノ臣ノ祖御友別ノ命ノ妹）ノ兄弟姪タチニ、吉備ノ國ヲ分ケテ賜ヘル所ニ「以織部縣賜兄媛」トアル織部ノ縣ハ、呉織穴織ノ住ミタル後ニ附ケタル地名ヲ前ニ及ボシテ書ケルモノナルベシ。

此ノ工女等ノ事古事記ニハ無クテ、唯百濟ノ國ヨリ呉服西素ヲ貢リシ事ノミヲ記セル故ニ、本居氏ハ、雄略天皇ノ御世ノ事ノ混ヒタルモノナリトテ、記傳ニ「書紀雄略ノ卷に、十二年夏四月、身狹村主青與檜隈民使博德、出使于呉、十四年春正月、身狹村主青等共呉國使、將呉所獻手末才伎漢織呉織及衣縫兄媛弟媛等、泊於住吉津云々、以衣縫兄媛奉大三輪神、以弟媛爲漢衣縫部也、漢織衣縫、是飛鳥衣縫部、伊勢衣縫之先也とあると、事のさま痛く似たるを思ふべし。將來つる四人の名稱全同じく、兄媛を神に奉れる事も同じきをや。されば呉ノ國に行て、此ノ手人等を將來つるは、右の雄略天皇の御世の事なりしを、此ノ應神天皇の御世に百濟より貢りし服部の事に傳へ誤りたるなり。さればかの久禮波久禮志が導せしとあるも、雄略の御世の時のことなるべし。凡て呉ノ國と通ひ初しは、彼ノ御世とこそおぼゆれ。仁德天皇の五十八年に、呉ノ國朝貢とあるも、おぼつかなし。さて又書紀に呉織漢織とて、此を二人にせられたるも誤なり。實は一人にて、漢織といふも、即チ呉織の事なり。其故は、まづ漢と呉と分て云ときは、漢とは、彼ノ三國の時、魏の有てりし地を云ヒ、呉とは、江南の地を云り。然れども皇國などにて、呉をも合せて一ツに漢と云ること多し。書紀に、呉ノ國ノ人の後をも漢某と云ヒ、姓氏錄ノ諸蕃にも、漢の内に呉をばこめたり。されば呉織を或は漢織とも云しを、二ツと心得て、別に擧げられたるなり。かの雄略ノ卷に、以弟媛爲漢衣縫部とあるにても心得べし。サテ又「此弟媛は呉より來つるを、漢ノと云り。かゝれば是レも、此ノ記に漢服と云は無きぞ正しかりける」。サテ又「此處は、此ノ記に百濟より貢れりとあるぞ、正き傳へなりける。然るを呉服とも云ることは、後に雄略の御世に、始メて呉ノ國より參れる服織の、めづらしくてもてはやされつるまゝに、其名高くなりて遂に異國の服織をば、凡て呉服織と云ヒならはせるから、此ノ御世に百濟より貢りしをも、後の稱を以て呉服とは語リ傳へたるなり。今ノ世まで呉服と云稱のあるも、此ノ稱の殘れるなり。又呉藍と云へば、必しも呉國のには限らず、紅ノ色の名となれるも同じことにて、からくれなゐと云へばとて、漢より來つる呉ノ國の藍には非るをも准へ思ふべし。さて書紀に、此ノ呉服を、呉ノ國より來つる如く記されたるも、呉と云稱に因て、かの雄略の御世のと亂ひつるなるべし。又書紀に四婦女とあれども、呉服は、此記に名ノ西素とあるは、男の名とこそ聞えたれ。その

うへ穴織は、即漢織にて、其は、即呉織のことなれば、四人とせられたるも違へり」ト云ヘリ。

右ノ論ハ、本居氏ノ、强チニ古事記ノミヲ正シキ者ニセントシタル强說ナリ。將來ツル四人ノ名稱同ジク、兄媛ヲ神ニ奉レル事モ同ジキハ、サル事ナガラ、ソハ、應神紀ニ雄略ノ御世ノ事ノ紛レタルニヤ、又ハ雄略紀ニ應神ノ御世ノ事ノ紛レタルニヤ、何レトモ定メ難シ。タトヒ應神紀ノヲ誤リトシテモ、カノ四人ノ名稱ト兄媛ヲ神ニ奉レル事トニハ紛レタルモアルベケレドモ、工女等ヲ將來ツル事ヲ皆ガラ無シトハ云フベカラズ。其ノ後裔ナル呉ノ衣縫、蚊屋ノ衣縫ハ、雄略紀ナル飛鳥ノ衣縫部、伊勢ノ衣縫トハ、己ヅカラ別部ナルヲヤ。又漢ハ、呉ト分ケテモ云ヒ、又呉ヲ合セテモ云フコトハ、云ハレタル如クナレドモ、（但姓氏錄ニ漢ノ内ニ呉ヲコメタリト云フ漢ハ、もろこしト讀ミテ、カノ國ノ總名ニノミ用ヒテ、呉ニ對ヘテ云フコトナケレバ、あやトハ聊異ナリ。）呉織漢織ト並ベテ擧ゲタルヲ、實ハ一人ニテ、漢織ハ即呉織ナリト云フハ、最モ辨解ヲ費スベキ說ナリ。彼ノ工女等ハ、皆呉ノ國ヨリハ渡リ來ツレドモ、其ノ中ニテ、北方ヨリ呉ノ地ニ徙リタリシ人、又ハ北方ノ技藝ヲ傳ヘタリシ人ヲバ、呉織呉ノ衣縫ニ對ヘテ、漢織漢ノ衣縫部トハ云ヘルナリ。東晉南朝ノ頃ニハ、北人ノ侵暴ヲ避ケテ、漢ノ民ノ呉ノ地ニ流寓セシ者甚多ケレバ、呉ノ地ヨリ漢織ノ來ツルコトモ、何カハ疑フベキ。百濟ヨリ呉服西素ヲ貢レリトアルハ、阿知ノ使主等ガ將來ツル者トハ別人ニテ、紀ニ縫衣工女眞毛津ヲ貢ルトアル時ノ事ナルベシ。コレモ、西素ト眞毛津ト、孰レカ正シカラン。又ハ西素モ眞毛津モ共ニ參來ツルニモアルベシ。又百濟ヨリ來ツル呉服モ、呉ノ國ヨリ徙リタリシ人、又ハ呉ノ國ノ技藝ヲ傳ヘタリシ人ト見レバ、後ノ稱ヲ以テ語リ傳ヘタリトテ、呉監ト同例トスルニモ及ブマジ。姓氏錄河內ノ國諸蕃ニ「呉服ノ造、百濟國人阿漏史之後也」トアル阿漏史モ、イツ參來ツル人ナルカ知ラズ。カヽル類ノ工人ハ、度々來朝シタルコトナレバ、呉服西素ノ外ハ皆疑ハシト思フハ、狹キ量見ナリ。

古事記ニ、秦ノ造之祖漢ノ直之祖ト並ベテ、「知釀酒人名仁番亦名須須許理等、參渡來也」トアルハ、弓月ノ君又ハ阿智ノ使主ト同時ニ來ツルニヤ、又ハ別ニ來ツルニヤ知ラズ。知釀酒ハ、記傳ニ云、「世に勝れて善釀を云るにて、知は、巧手なるよしなり」。コノ文ノ續キニ「故是須須許理釀大御酒以獻。於是天皇宇羅宜是所獻之大御酒而、御歌曰、須須許理賀迦美斯美岐邇、和禮惠比邇祁理。許登那具志、惠具志爾、和禮惠比邇祁理云々」。記傳ニ云、「宇羅宜は、すゞろに心おもしろく浮立を云と聞ゆ。許登那具志は、事和酒なり。和は、慰むを云。此ノ御句は、諸の憂事哀事の和さむ酒と云意なれば、許登那具志なるを、具久と同音の重なれるを、一は省けるなり。惠具志爾は、咲酒になり。飲ば心おもしろく、咲榮る酒と云意なり。咲を惠と云ること、常多し」。久志ヲ酒トスルコトハ、仲哀天皇ノ段ナル大后ノ御歌ニ少名毘古那ノ神ヲ久志能加美トヨマセ給ヘル所ノ傳（卅一ノ卅九丁）ニ、横井ノ千秋ノ說ヲ引キテ「久志は酒の本ノ名にて、應神天皇の大御歌に云々とある二の具志、これなり。（こは、上より連ける言なる故に、具と濁れり）御酒白酒黑酒など云伎は、此ノ久志の約まれる名なり」トアリ。

此ノ人ノ事、日本紀ニハ見エズ。姓氏錄右京諸蕃ニ「道祖史、百濟國主孫許理公之後也」トアル主孫許里ハ、即須須許里ナルベシ。孝德紀ニ鯽魚戸ノ直トアルハ、道祖ノ史ノ族カ。三代實錄貞觀七年五月「右京人中宮少屬道祖史豐富、左京人造酒令史道祖史永主等、改賜惟道宿禰」。又右京皇別ニ「酒部公、同皇子（垂仁天皇ノ皇子神櫛別ノ命）三世孫足彥大兄ノ王之後也、大鷦鷯ノ天皇ノ御代、從韓國參來人兄曾曾保利、弟曾曾保利二人、天皇勅有何才、白有造酒之才、令造御酒、於是賜麻呂號酒看都子、賜山鹿比咩號酒看都女、因以酒看都爲氏」トアリテ、記傳（廿六ノ廿四丁）ニ云、「賜麻呂と云より下の文、まぎらはしき記しざまなり。考るに、麻呂又山鹿比咩と云人は、足彥大兄ノ王の末にて、此氏人なりけむを、酒看都古酒看都女と云名賜ひて、曾々保利が造りたる御酒を所聞看す事に供奉らしめ給へるなるべし。看ノ字、メシとも訓べし。御酒を所聞看事に供奉る由の稱なり。ミと訓ても、意は同じ」。コノ曾々保利モ須々許理ト同ジ人ノ如ク聞ユルヲ、仁德天皇ノ御世ト云

ヘルハ、傳ヘノ異ナルナリ。

又コノ御世ニ、百濟ノ國ヨリ努理使主ト云ヘル人モ、歸化セリ。姓氏錄左京諸蕃ニ「調連、水海連同祖、百濟國努理使主之後也、譽田天皇諡應神御世歸化、孫阿久太男彌和、次賀夜、次麻利。彌和、億計天皇諡顯宗御世、蠶織獻絁絹之樣、仍賜調首姓」トアリ。古事記仁德天皇ノ段ニ、筒木韓人、名奴理能美ト書キテ、大后石之比賣命、山代ノ筒木ニ幸シテ、暫コノ奴理能美ノ家ニ入リマセル時、奴理能美ガ養ヘル蟲、一度ハ匐蟲ニ爲リ、一度ハ殼ニナリ、一度ハ飛鳥ニナリテ、三色ニ變ル奇蟲ヲ獻リキト云フ奇談アリ。奴理能美ハ、記傳卅六ノ二十四丁ニ云、「美は、使主なり。上の能に淤の韻ある故に、美と云へり。今大后の其ノ家に入坐るを以思へば、此ノ人、もと百濟ノ國の貴族にて、皇國にしても宜きさまにてぞ在經けむ。さてこそ子孫の氏々もあまたありけるならめ」。努理ノ使主ノ裔ハ、調ノ連ノ外ニ、右京ニ民ノ首、山城ノ國ニ民ノ首、伊部ノ造、河内ノ國ニ水海ノ連、調ノ日佐ナド、姓氏錄ニ見エテ、何レモ「百濟ノ國人努理ノ使主之後也」トアリ。努ハ、乃トモ書キ、理ハ利トモ書ケリ。欽明紀ニ調ノ吉士伊企儺トアルモ、調ノ首ト同族ナルベシ。天武紀元年ニ調ノ首淡海アリテ、續紀和銅六年ニ調ノ連淡海ト見ユレバ、連姓ヲ賜ヘルハ、コノ間ニアリシナリ。氏族志調氏ノ條ニ云「聖武帝時、有大炊允調連牛養東大寺正倉院文書嵯峨帝時、有近江愛智郡人調首富麻呂、弘仁九年券文、近衛帝時、有雜掌調果安、康治大嘗會紀、或是族也」。民ノ首ハ、正倉院文書ニ聖武天皇ノ時、中宮少進河内民首安古麻呂アリ、續後紀承和二年十月「勅左京人從六位下民首氏主、賜姓長岑宿禰焉」トアリ。氏族志長岑氏ノ條ニ云、「同時（仁明帝時）從五位下長岑宿禰高名爲遣唐判官、續日本後紀、後歷諸國守、有政蹟、稱爲良吏、文德實錄、醍醐帝時、有對馬通事長岑望通、扶桑略記、村上帝時、有肥前掾長岑宿禰忠親除目大成抄一條帝時、長岑忠義有罪、流于佐渡、日本紀略、小右記、扶桑略記、」又續後紀前文ノ下ニ「氏主等與白鳥村主同祖、出自魯公伯禽云」トアルニヨリテ、氏族志ニハ努理使主ヲ伯禽ノ後トシテ、長岑調等ノ諸氏ヲ漢土部ニ列ネ、其ノ註ニ「按姓氏錄民首條云百濟人努理使主之後、不言伯禽之後、努理使主以應神朝歸化、蓋以其經住百濟、故謂百濟人也、姓氏錄此類頗多、故今併其族、皆序於下、以待後考」トアレドモ、姓氏錄ニハ、調連等六氏皆百濟ノ部ニアリ、古事記ニモ韓人名、奴理能美トアレバ、伯禽之後ト云ヘルハ、中々ニ疑ハシキ說ナリ。水海ノ連ハ、續紀天平神護二年ニ「命婦外從五位下水海毗登淸成等五人、賜姓水海連」トアレバ、本ハ水海ノ首ト云ヒシナルベシ。白鳥ノ村主ハ、姓氏錄ニ見エズ。正倉院文書ニ聖武天皇ノ時、筥陶令史白鳥史老人トアルハ、コノ族ナランカ。續紀神護景雲三年「右京人正八位下白鳥村主馬人、白鳥椋人廣等廿三人、賜姓白原連」トモ見ユ。

又姓氏錄左京皇別ニ「御使朝臣、出自諡景行皇子氣入彥命之後也、譽田天皇御世、御室雜使大王生等、逋逃不仕、天皇遣使尋求、並不復命、於是氣入彥奉詔旨、追於參河國、捕獲參來、天皇嘉、令使者賜姓御使連也、續日本紀合」ト見エタルヲ、中外經緯傳ニ「名の異さまなるを、姓氏錄諸蕃高麗部に王氏あるに准へおもふに、大王生は韓人なりけむを、御室の雜使に召遣したりけるが、逋逃て仕奉らざるを、天皇の怒り給ひて、氣入彥ノ命にきびしく詔ひつけて捕らせ給ひたるにて、殊に御稜威を示し給ひたりしにもやあらむ」ト云ヘリ。氣入彥ハ、氏族志ニ五百城入彥ト改メテ、「本書（姓氏錄）作氣入彥、訓讀相近、蓋同人也、今據舊事本紀、定爲五百城入彥」トアリ。續日本紀合トハ、續紀神護景雲二年九月「左京人正七位上御使連淸足、御使連淸成、御使連田公等十八人、賜姓朝臣」トアルヲ云ヘルナリ。大王生ノ事ハ、記紀ニモ見エザレドモ、コノ御世ニ韓國ヨリ歸化シタル人ト覺シキニ由リテ、此ニ附記シテ後ノ考ヘヲ待ツ。

第三十四章　秦ノ造漢ノ直ノ二族

秦ノ造ノ祖漢ノ直ノ祖ノ歸化シタルハ、皇國ノ開化ニ少カラザル稗益ヲ爲シタル事ナレバ、其ノ氏人ノ皇朝ニ仕奉レルサマト其ノ族類ノ繁衍シタルサマトヲ述ベ置カン。先ヅ弓月ノ君ハ民衆ハ、百二十縣トモ百二十七縣トモ云ヒテ、非常ニ夥シキ數ナリシヲ、歸化ノ後ハ、諸國ニ分散シテ、臣連等ニ使役セラレテ居タリシカバ、雄略天皇ノ御世ニ此等ノ秦民ヲ悉ク弓月ノ君ノ孫秦ノ酒ノ公ニ賜ヒテ、統率セシメ給ヒキ。ソハ、雄略紀ニ「十五年、秦民分散、臣連等各隨欲駈使、勿委秦造、由是秦造酒甚以爲憂、而仕於天皇、天皇愛寵之、詔聚秦民、賜於秦酒公、公仍領率百八十種勝部、奉獻庸調絹縑、充積朝庭、因賜姓曰禹豆麻佐。（一云、禹豆母利麻佐、皆盈積之貌也」）トアリ。秦ノ造酒ノ下ニ公ノ字脱チタルカ。然シテ秦ノ酒ノ公ノ下ニアル公ノ字ハ、恐ラクハ衍ナリ。甚以爲憂、而仕於天皇ハ、文勢續カズ。而ノ字ノ上又ハ下ニ、文脱チタルカ。古語拾遺ニモ「至於長谷朝倉朝、秦氏分散、寄隷他族、秦酒公進仕蒙寵、詔聚秦氏、賜於酒公、仍率領百八十種勝部、蠶織貢調、充積庭中、因賜姓宇豆麻佐、（言隨積埋益也、所貢絹綿、軟於肌膚、故訓秦字、謂之波陀、仍以秦氏所貢絹、纏祭神劔ノ首、今俗猶然、所謂秦機織之緣也矣」）トアリ。記傳（卅三ノ卅六丁）ニ此ノ雄略紀ノ文ヲ引キテ、「秦ノ民とは、弓月ノ君が率て來つる百廿七縣の民なり。禹豆麻佐は、姓には非ず。此ノ後も、姓はなほ秦なるをや。さて此ノ號の意、禹豆は、今ノ言にも物を多く積たる貌などを宇豆高しと云に合へり。萬葉十五に、名爾於布奈流門能宇頭之保爾と云るも、高き瀾ときこゆ。母利と云るも、盛又森などの意と同く通ひて聞ゆ。麻佐は、即チ百八十種ノ勝部とある勝なるべし。姓氏錄諸蕃に、勝と云姓もあり。又上ノ勝、不破ノ勝、茨田ノ勝など、尸にもありて、即チ秦ノ勝と云もあり。是らみな加知と訓ムは誤にて、麻佐と訓べきなり。其は、韓國にて一種の號にぞありけむ。其に此方にて勝ノ字を用ふるは、麻佐流と云訓を取たる借字なるべし。さて禹豆麻佐に太秦の字を書ケは、何時よりのことならむ」ト云ヘリ。又コノ「詔聚秦民云々」トアル年ノ翌年、雄略紀ニ「散遷秦民、使獻庸調」トアルハ、諸國ニ住所ヲ定メテ、猶酒ノ公ノ領キタルナルベシ。

姓氏錄左京諸蕃ニ云「太秦公宿禰、秦始皇帝三世孫孝武王之後也、男功滿王、足仲彥天皇（諡仲哀）八年來朝、男融通王（一曰弓月王）譽田ノ天皇（諡應神）十四年來朝、率二十七縣百姓歸化、獻金銀玉帛等物、大鷦鷯天皇（諡仁德）御世、以百二十七縣秦氏、分置諸郡、即使養蠶絹貢之、天皇詔曰秦王所獻絲綿絹帛、朕服用、柔軟溫煖肌膚、賜姓波多公、秦公酒、大泊瀨幼武天皇（諡雄略）御世、絲綿絹帛、委積如山、天皇嘉之、賜號曰禹都萬佐。」コレニ秦ノ始皇帝ノ三世ノ孫孝武王ト云ヒテ、弓月ヲ其ノ孫トシタルニツキテ、記傳ニ「然るときは、弓月は、始皇が五世ノ孫なり。此ノ外の氏の條にも、五世ノ孫と云るあり。然るに秦ノ始皇の終ノの年は、孝元天皇ノ五年にあたりて、應神天皇ノ元年まで四百八十年なれば、時代合ハず。若シは孝武王は、十三世ノ孫なるを、十ノ字の脱たるにて、弓月は、十五世ノ孫か」ト云ヘリ。サレドモ紀ノ年紀ヲ捨テ、、弓月ノ來歸ヲ百濟ノ阿花王十二年ナル癸卯ノ年（紀元千六十三年）ト見ル時ハ、弓月ノ世ハ、始皇ノ世（紀元四百十五年ヨリ四百五十一年マデ）ヨリ六百年餘リ後ナレバ、十五世孫ニテモ、時代合ハズ。字ノ脱チタリトスレバ、十ノ字ニハアラデ廿五世ノ孫ナルヲ、廿ノ字ノ脱チタルカ。但三韓ノ地ヲ經テ皇國ニ歸化シタル支那人等ノ、某帝之後、某帝ノ何世ノ孫ナド云ヘルハ、他ニ證據モナキ事ニテ疑シキコトモ多ケレドモ、ソヲ考ヘ訂サンコトハ、ナシ難キ業ナレバ、ソレラノ世系ニハ餘リ拘ルマジキ事ナリ。又記傳ニ「功滿王、仲哀天皇ノ御世ニ來朝とあるも、傳への誤なるべし」ト云ヘルハ、然ル事ナリ。スベテ秦漢人ノ歸化ハ、一ツニハ神功皇后ノ征韓ノ餘威ニヨリ、一ツニハ廣開土王ノ侵掠ヲ避ケタルナレバ、仲哀天皇ノ御世ニ來朝スベキ由ナシ。二十七縣ハ、二ノ上ニ百ノ字脫チタルニテ、稻彥ノ校刊本ニハ、之ヲ補ヘリ。秦ノ氏ノ字ハ民ノ誤リナリ。秦王ハ、融通王ノ詔ヘルガ如ク聞ユレドモ、下ニ引ケル秦ノ忌寸ノ條ニ據レバ、波陀ノ姓ヲ賜ハリシハ、弓月王ノ男普洞王ナリ。柔軟溫煖肌膚云々ハ、記傳ニ云、「若シこれらの義なら

ば、温或は軟の言を取てこそ名くべけれ、肌と云言を取べき由なし。新井氏も、此ノ說を信ずて、波陀は韓國の語なりと云り」。

同書山城ノ國諸蕃ニ云、「秦ノ忌寸、太秦ノ公ノ宿禰同祖、秦ノ始皇帝之後也、物智王弓月王、譽田ノ天皇（諡應神）十四年來朝、上表更歸國、率百二十七縣貊姓歸化、並獻金銀玉帛寶物等、天皇嘉之、賜大和ノ朝津間掖上地居焉、男眞德王、次普洞王、（古記曰浦東君）大鷦鷯ノ天皇（諡仁德）御世、賜姓曰波陀、今秦字之訓也、次雲師王、次武良王、普洞王男秦ノ公酒、大泊瀨稚武ノ天皇（諡雄略）御世、稱普洞王、時秦氏總被刧略、今見在者、十不存一、請遣勅使撿括招集、天皇遣使小子部ノ雷率大隅阿多ノ隼人等搜括鳩集、得秦氏九十二部一萬八千六百七十人、遂賜於酒、爰率秦ノ氏、養蠶織絹盛箧詣闕貢進、如丘如山、積畜朝廷、天皇嘉之、特降寵命、賜號曰禹都萬佐、是盈積有利益之義、役諸秦ノ氏、搆八丈大藏於宮側、納其貢物、故名其地曰長谷ノ朝倉ノ宮、是ノ時始置大藏ノ官員、以酒爲長官、秦ノ氏等一祖子孫、或就居住、或依行事、別爲數腹、天平二十年、在京畿者、咸改賜伊美吉ノ姓也」。記傳ニ云、「物智王は、功萬王を寫誤れるには非るか。貊ノ字は、百を誤れるなるべし。此レに秦氏とあるも、みな秦ノ民の誤なるべし。又禹豆麻佐の義を云るに、有利益之義とは、麻佐を益ルの意に見たるひがことなり。大藏の事、古語拾遺にも見えたり。此レといさゝか異なり。又欽明紀に、秦ノ大津父と云人を拜大藏ノ省と見え、召集秦人漢人等諸蕃投化者、安置國郡、編貫戶籍、秦人ノ戶數、總七千五十三戶、以大藏ノ掾爲秦ノ伴ノ造とあり。此ノ大藏ノ掾は、秦ノ大津父なるべし。伴ノ造は、其ノ部の長なり」、サテ又「なほ秦氏、これかれ見えたり。書紀推古ノ卷に、秦ノ造河勝云々、因以造蜂岡寺、（此ノ寺、同卷に葛野ノ秦寺ともあり。山城國葛野ノ郡太秦村にあり。太秦又河勝が事、種々の說あれども、佛徒の云ヒ出たる例の妄說なり。）皇極ノ卷に、葛野ノ秦ノ造河勝などありて、山城ノ國葛野ノ郡本居なり。同卷ノ哥に、此河勝がことを禹都麻佐波云々とよめり。續後紀五に、山城ノ國ノ人秦ノ宿禰氏繼、改本居貫附四條三坊、天武ノ卷、十二年九月、秦造賜姓曰連、十四年六月、秦連賜姓曰忌寸、持統ノ卷、十年五月、秦造綱手賜姓爲忌寸、續紀八に、秦朝元賜忌寸ノ姓、（印本に、朝ノ字ノ下に臣ノ字あるは、衍なり、秦ノ朝元、十一ノ卷又懷風藻にも見ゆ。）十四に、詔授造宮錄正八位下秦下島麻呂從四位下、賜太秦公之名、並云々、以築大宮垣也。（宇豆麻佐をば、此レにも名と云、姓氏錄にも號とあるを以て、姓には非ることを知ルべし。然るに姓氏錄に太秦ノ公ノ宿禰と標られたるは、何レの御代に姓には賜ひけむ。さて秦下とある下は、忌寸の誤か。」）トアリ。天平二十年、在京畿者、咸改賜伊美吉姓也ト云ヘルコトハ、續紀十七同ジ年ノ條ニ「右大史正六位上秦老等一千二百餘烟、賜伊美吉姓」トアリ。太秦ノ公ノ宿禰ト云フ姓ハ、本ハ太秦ノ公忌寸ト云ヘルナリ。續紀天平十四年八月、秦ノ忌寸島麻呂ニ太秦ノ公之名ヲ賜ヘルハ、ヤガテ秦ト云フ代リニ太秦ノ公ト云フ名ヲ氏ニ用ヒシメ給ヒシナリ。延曆四年八月「授正七位上太秦公忌寸宅守從五位下、以築太政官院垣也、」同十年正月「太秦公忌寸濱刀自女、賜姓賀美能宿禰、賀美能親王（嵯峨天皇）之乳母也」ナドアリ。後紀延曆廿三年正月「從五位下太秦公宿禰宅守、爲因幡介」トアル宅守ハ、續紀ナル太秦ノ公ノ忌寸ト同人ナレバ、延曆四年ト廿三年トノ間ニ宿禰ノ姓ヲ賜ハレルナリ。後紀弘仁五年十月「興福寺傳燈大法師位常襟卒、俗姓秦公忌寸、山城國葛野郡人也」。秦ノ公ノ上ニ、恐ラクハ太ノ字脫チタリ。又文德實錄天安元年九月ニ「山城國人中宮少属正七位上秦忌寸永岑、賜姓太秦公宿禰、改貫右京」、氏族志ニ「朱雀帝時、有豐後大目大秦公宿禰相益、太秦公行康。（東寺文書）」。

秦氏ノ諸姓、姓氏錄ニ見エタルハ、左京ニ太秦ノ公ノ宿禰、秦ノ長藏ノ連、秦ノ忌寸二、秦ノ造、右京ニ秦ノ忌寸四、秦ノ人、山城ノ國ニ秦ノ忌寸三、秦ノ冠、大和ノ國ニ秦ノ忌寸、攝津ノ國ニ秦ノ忌寸、秦ノ人、河內ノ國ニ秦ノ宿禰、秦ノ忌寸、高尾ノ忌寸、秦ノ人、秦ノ公、秦姓、和泉ノ國ニ秦ノ忌寸、秦ノ勝アリ。又左京ノ第二ノ秦ノ忌寸ノ譜ニ「同王（融通王）四世孫大藏秦公志勝之後也」トアレバ、大藏ノ秦ノ公ト云フ姓モアリシナリ。廣隆寺來由記ニ、推古天皇ノ時、秦ノ長倉ノ多牟部郡、皇極紀ニ葛野ノ秦ノ造河勝、齊明紀ニ秦ノ大藏ノ造萬里、天智紀

ニ朴市ノ秦造田來津、續紀文武天皇二年「侏儒備前ノ國ノ人秦ノ大兄、賜姓香登臣」、天平中ニ秦ノ井手ノ乙麻呂ト云フ人見エ、天平神護二年「大和ノ國ノ人正八位下秦ノ勝古麻呂等四人、賜姓秦ノ忌寸」、神護景雲三年「攝津ノ國豐島郡人正七位上井出ノ小足等十五人、賜姓秦ノ井手ノ忌寸、西成ノ郡ノ人外從八位下秦ノ神島、正六位上秦人廣立等九人秦ノ忌寸」讚岐ノ國香川ノ郡ノ人秦ノ勝倉下等五十二人、賜姓秦ノ原ノ公、彈正ノ史生從八位下秦長田三山、造宮長上正七位下秦ノ倉人呰主、造東大寺ノ工手從七位下秦姓綱麻呂、賜姓秦ノ忌寸」。秦ノ倉人ト云フ姓ハ、東大寺古文書ニモ秦ノ倉人弟君ト見エタリ。又續紀寶龜七年十二月「左京ノ人從六位下秦ノ忌寸長野等二十二人、賜姓奈良ノ忌寸、山背ノ國葛野郡ノ人秦ノ忌寸箕造等九十七人朝原ノ忌寸、」寶龜十一年五月「河內ノ國高安郡ノ人大初位下寺ノ淨麻呂、賜姓高尾ノ忌寸、」後紀弘仁二年七月「右京人正六位上朝原ノ忌寸諸坂、山城ノ國人大初位下朝原ノ忌寸三上等賜姓宿禰、」續後紀承和元年二月「山城國葛野郡人從八位上物集ノ廣永、同姓豐守等、賜姓秦ノ忌寸」、物集(モヅメ)ト云フ姓ハ、姓氏錄未定雜姓ノ部、左京ニ物集ノ連、山城ノ國ニ物集トアリテ、何レモ「始皇帝九世孫竺達王後者、不見」トアリ承和二年十一月「賜讚岐國人從六位上秦部ノ福依、弟福益等三烟秦ノ公姓、」同三年五月「右京ノ少屬秦ノ忌寸安麻呂、造檀林寺使ノ主典同姓家繼等、賜姓朝原宿禰」、同四年八月「攝津ノ國ノ人右衞門醫師秦ノ直身武、散位同姓仲主等三烟、改本姓賜秦ノ勝」、同九年十二月「讚岐ノ國香河ノ郡ノ人戸主從六位上秦人部ノ永職、戸主秦人部春世等十人、賜姓酒部」、同十五年三月「河內ノ國河內郡人大初位下秦ノ宿禰世智雄、賜姓朝原ノ宿禰」、三代實錄「讚岐國多度郡人美作掾秦子上成等賜姓秦忌寸」、貞觀五年九月「山城國葛野郡人圖書大允從六位下秦ノ忌寸春風、但馬少目正八位上秦ノ忌寸諸長等三人、賜姓時原ノ宿禰、其先秦ノ始皇之後也」、貞觀六年八月「右京人內敎坊頭秦忌寸善子、賜姓伊統ノ朝臣、弟安雄等伊統ノ宿禰」、元慶七年十二月「左京人從五位下行下野權介秦宿禰永原、從五位下守大判事兼行明法博士秦公直宗、山城國葛野郡人外從五位下行音、博士秦忌寸永宗、右京人主計大允正六位上秦忌寸越雄左京人右衞門少志秦公直本等男女十九人、賜姓惟宗朝臣、永原等自言、秦始皇十二世孫功滿王子融通王之苗裔也、功滿占星之意、深向聖朝、化風之志、遠企日域、而新羅邀路、隔彼來王、遂使偃風之草、空無仰陽之心、屬天誅伐罪、官軍拂塵、通率百二十七縣人民、是焉內屬也」、仁和三年七月「左京人從五位下行采女正時原宿禰春風、賜朝臣姓、春風自言、先祖出自秦始皇十一世孫功滿王也、帶仲彥天皇四年歸化入朝、奉獻珍寶蠶種等」ナド見ユ。

此等ノ諸姓ノ外ニ、氏族志秦ノ條ニハ、秦ノ公ノ次ニ「其派有秦中家忌寸、其祖秦公伊侶俱、元明帝時、建稻荷神社於山城紀伊郡、(年中行事秘鈔、諸神記)其後裔世爲社司、有松本、大西、祓川、羽倉、毛利諸族、(和漢三才圖繪、)」又秦ノ大藏造ノ次ニ「又有連姓、聖武帝時、秦大藏連道成、爲玄蕃少屬、(東大寺正倉院文書○東大寺古文書、天平中有秦倉人弟君、疑同族也」)又「醍醐帝時、有右大臣忠平少書吏依智秦友頼(東寺文書)朱雀帝時、有主計少屬依智秦良範、(外記日記)村上帝時、有近江權大掾依智秦公廣範(朝野群載)一條帝時、有伊賀掾依智秦宿禰正頼、(除目大成鈔、)後鳥羽帝時、有近江掾依智氏盛淸、(吉記)蓋皆朴市秦造之裔也、(○朴市依智音訓相通、)」又「秦姓云々、聖武帝時、正七位下廣幡牛養賜秦姓、(○東大寺古文書、聖武帝時、有秦人廣幡石足等、據此秦人廣幡亦一姓也、)秦前失所系、天平中有大藏少錄秦前廣橋(東大寺正倉院文書、)三河守秦前忌寸大魚、(續日本紀、忌寸據東大寺正倉院文書)凡秦氏之胤、支別頗衆、聖武帝時、有山背愛宕郡人秦川邊古刀自賣、大炊助秦河邊忌寸信麻呂、同郡人秦高椅悅女、高椅忌寸足牀、及駿河史生秦達布連廣島、右京人秦小宅牧牀、掃部佑秦常忌寸養德麻呂、同姓右京人少初位上秋庭等、蓋皆同族也、(東大寺正倉院文書、)其本宗世居山城丹波間、至後世有爲衞府官者、爲伶官者、皆能世職、久之不絕、(日本書紀、續日本紀、外記日記、樂家譜、)河勝之後居丹波者、以河勝爲氏、土佐長曾我部氏、亦自言河勝之裔也、(寛永系圖、長曾我部系圖。)」

又同書惟宗氏ノ條ニ云「直宗通法律、任明法博士、子孫世職、玄孫允亮尤知名、一條帝時、奏請改姓令宗

朝臣、政事要略、本朝文粹、江談鈔、續往生傳、後冷泉帝時、有豐前守令宗朝臣臣業任、白河帝時、有宇佐地頭惟宗高安、稱宗八大夫、同族吉高、宗六大夫、宇佐大鏡鳥羽帝時、以式部省奏、復藤原朝臣章貞本姓惟宗、任少錄、朝野羣載惟宗氏族、後世分爲島津、原、宗、神保諸氏、東鑑、太平記、應仁記、上野辛科神社神鏡銘、而島津氏最著、系出日向守惟宗基言子廣言、作者部類○島津家譜曰、民部大輔廣言、宗掾部孝言之孫也、廣言在京師、與丹後内侍通、生忠久、吉見系圖、○按島津家傳、以忠久爲源頼朝庶子、然其說與東鑑、三長記、除目大成鈔諸書牴牾、故不取、說見賴朝傳註。近衛帝時、任播摩少掾、除目大成鈔後仕近衛家、爲其邑島津莊地頭、因氏焉、島津文書、島津系圖、忠久外祖母比企禪尼、嘗爲源頼朝乳母、吉見系圖、以故其興、忠久往歸焉、島津文書賴朝授之日向大隅薩摩守護、任豐後守、島津系圖、尋坐事奪守護、東鑑後復爲薩摩守護、島津文書忠久弟忠季、元久初爲若狹守、是爲若狹島津氏、其子忠經殉承久之難、若狹守護職次第諸家系圖、忠久生忠義、忠綱、忠綱周防守、爲越前島津氏祖、忠義大隅守、嘗私改氏藤原、嘗以下、島津文書、生忠繼、久經、久時、忠繼稱山田氏、久時阿蘇谷氏、其派有給黎、町田、伊集院等氏、久經生忠宗、忠長、忠長稱伊佐氏、忠宗稱惟宗下野守、生貞久、島津系圖、稱惟宗據續千載和歌集、中興初、應足利尊氏、攻北條英時有功、勅補日向大隅薩摩守護、島津文書及尊氏叛、貞久與其子師久氏久等屬之、足利氏經略九國者、其力居多、島津文書、阿蘇文書、諸家系圖、師久檢非違使、管領薩摩、氏久越前守、管領大隅、世稱之兩守護、氏久生元久、日向大隅守護、日向以下、島津文書、其子久豐併管薩摩、子孫世爲西國豪族、其支屬有新納、樺山、北鄉、末弘、石坂、河上等氏、島津系圖」又朝原氏ノ條ニ「醍醐帝時、有諸陵權少允朝原宿禰有生、除目大成鈔、村上帝時、有佐渡守朝原宿禰世常、類聚符宣鈔、朱雀帝時、有因幡掾朝原世秀、右京人正六位上朝原宿禰有岑、外記日記、有岑據東寺文書拾芥鈔有朝原朝臣、蓋是族也。」時原氏ノ條ニ「醍醐帝時、大學少屬時原有平、村上帝時、有大學助教時原朝臣長列、類聚符宣鈔」ナドアリ。

阿知ノ使主等ガ先祖、マタ其ノ歸化シタル理由ハ、續紀延曆四年坂ノ上ノ大忌寸苅田麻呂等ノ上表ニ「臣等、本是後漢靈帝之曾孫阿智王之後也、漢祚遷魏、阿智王因神牛敎、出行帶方、忽得寶帶瑞、其像似宮城、爰建國邑、育其人庶、後召父兄告曰、吾聞東國有聖主、何不歸從乎、若久居此處、恐取覆滅、即携母弟迁興德及七姓民、歸化東朝、是則譽田天皇治天下之御世也、於是阿智王奏請曰、臣舊居在於帶方、人民男女、皆有才藝、近者寓百濟高麗之間心懷猶豫、未知去就、伏願天恩遣使追召之、乃勅遣臣八腹氏、分頭發遣、其人男女擧落、隨使盡來、永爲公民、積年累代、以至于今、今在諸國漢人、亦是其後也……」。姓氏錄左京諸蕃ニ「木津忌寸、後漢靈帝三世孫阿智使主之後也」、右京諸蕃ニ「坂上大宿禰、後漢靈帝男延王之後也」、河内和泉二國諸蕃ニ「火撫直、後漢靈帝四世孫阿智王之後也」ナドアリ。後漢靈帝ノ後ト云ヘルコト疑ハシ。靈帝ハ、皇子只二人アリテ、長子ハ、弘農王辨ト云ヒ、次子ハ、獻帝ニシテ、延王ト云ヘル人ナシ。獻帝ノ後ト云ハズシテ、靈帝ノ後ト云ヘバ、弘農王ノ子孫ヨリ外ニハ無ケレドモ、弘農王ハ、十五歲ニナレル正月ニ董卓ニ殺サレテ、未ダ子ハ無カリキ。又阿智王ノ來朝ハ、靈帝ノ崩ジタルヨリ二百二十年ノ後ナレバ三世ノ孫ニテモ四世ノ孫ニテモ、時代合ハズ。「漢祚遷魏、阿智王因神牛敎云々」ト云ヘルハ、阿智王ニハ非ズシテ、阿智王ノ數世ノ祖ナルベシ。帶方ハ、魏晉ノ帶方郡ニシテ、大同江ト漢江トノ間ニアリ。其ノ大半ハ、句麗美川王ノ時ヨリ以來、句麗ノ地トナリ、南部ノ諸城ハ、百濟ニ屬シタリシガ、廣開土王碑ニ見エタル永樂六年丙辰ノ役ニ、其ノ諸城モ、句麗ニ併セラレキ。阿智王ハ二國ノ間ニ介マリ居テ、句麗ノ侵掠ニ遭ヒ、其ノ人民ハ、暫ク句麗ニ附キタルモノモアルベク、遁ゲテ百濟ニ入リタルモノモアルベシ。「近者寓於百濟高麗之間、心懷猶豫、未知去就」トハ、コノ有樣ヲ云ヘルナリ。カヽル折シモ、永樂十四年甲辰、皇軍帶方界ニ入リテ、戰爭數年ニ涉リタレバ、其ノ時阿智王等ハ、皇軍ノ恩威ニヤ感ジタリケン。遂ニ其黨類十七縣ヲ擧ゲテ歸化スルコトヽハナリヌ。

サテ阿知ノ使主等、晉ノ國ニ使シテ歸リタル後ノ事ハ、古事記履中天皇ノ段ノ初ニ、天皇難波ノ宮ニマシテ、

豐ノ明ノ大御酒ニウラゲテ、大御寢マシヽ時、ソノ御弟黒ノ江ノ中ツ王、天皇ヲ取リマツラントシテ、大殿ニ火ヲ著ケタリシニ「倭漢直之祖阿知直、盜出而乘御馬令幸於倭。故到于多遲比野而寤、詔此間者何處。爾阿知直白、墨江中王、火著大殿。故率逃於倭……」、「以阿知直始任藏官、亦給粮地」、履仲紀ノ初ニモ、漢ノ直ノ祖阿知ノ使主ノ、平羣ノ木莵ノ宿禰、物部ノ大前ノ宿禰ト三人ニテ、太子ヲ扶ケテ馬ニ乘セマツリテ逃ゲタルコト見エ、又六年ノ條ニ「始建藏職、因定藏部」、古語拾遺ニ「至於後磐余稚櫻朝、三韓貢獻無絶、齋藏之傍、更建内藏、分收官物、仍令阿知使主與百濟博士王仁、記其出納、始更定藏部、至於長谷朝倉朝、秦氏云々、自此而後、諸國貢調、年年盈溢、更立大藏、令蘇我麻智宿禰撿挍三藏、(齋藏、内藏、大藏)秦氏出納其物、東西文氏勘錄其簿、是以漢氏賜姓爲内藏大藏、令秦漢二氏爲内藏大藏主鑰、藏部之縁也」。コノ文ノ趣ニテハ、雄略天皇ノ時ニ内藏大藏ナド云フ姓ヲ賜ヒシガ如クナレドモ、姓氏錄左京諸蕃ニ「内藏宿禰、坂上大宿禰同祖、都賀直四世孫東人直之後也」トアレバ、コノ御世ニハ、只秦漢二氏ニ藏ノ事ヲ掌ラシメ給ヒシノミニシテ、内ノ藏大藏ノ姓トナリタルハ、東ノ漢ノ秦人等、數世其ノ職ヲ襲ギタル後ノ事ナルベシ。又雄略紀七年ニ、東ノ漢ノ直掬ニ命セテ、百濟ヨリ獻レル手末ノ才伎ドモガ住所ヲ定メシメ給ヒシコト見エ、同十六年ニ「冬十月、詔聚漢部、定其伴造者、賜姓曰直、一本云、賜漢使主等、賜姓曰直」。記傳ニ云「賜字二ツあるは、衍には非ず。上なる賜は、漢部を賜ふなり」。二十三年八月天皇崩御ノ條ニ「遺詔於大伴室屋大連與東漢掬直曰云々」、清寧紀ノ初ニ「星川皇子云々、遂取大藏官、鏁閉外門、式備乎難、權勢自由、費用官物、於是大伴室屋大連言於東漢掬直曰、大泊瀬天皇之遺詔、今將至矣、宜從遺詔、奉皇太子、乃發軍士、圍繞大藏、自外拒閉、縱火燔殺」テド見ユ。掬ノ直ハ、即都加ノ使主ナリ。記傳ニ「應神天皇ノ廿年より履中天皇の初までは、百十餘年を經つれば、阿知ノ使主甚く長壽かりしにや。又此ノ二十年より清寧天皇ノ御世までは、百九十餘年なれば、都加ノ使主存在べきに非ず。故思に、此ノ父子が來歸しは、仁德天皇ノ御世の末の事なりけむが、(其時都加ノ使主は、いと幼かりけむ。)紛ひて、此レらも、應神ノ御世と誤傳へたるにぞあらむ」ト云ヘルハ、紀ノ年紀ニ依リテノ說ナレドモ、實ニハ阿智王ノ參リシ己酉ノ年ヨリ履中天皇ノ御世マデハ、唯二十年許ナレバ、言フニ及バズ。清寧天皇ノ御世ノ初マデニテモ、七十年許ナレバ、掬ノ直ノ參リシ時イト幼クテ、壽稍長カランニハ世ニ在ルベカラザルニ非ズ。

サテ其ノ氏人ハ、欽明紀ニ、東ノ漢ノ氏直糠兒、(氏ノ字ハ衍カ。)崇峻紀ニ、東ノ漢ノ直駒、東ノ漢ノ直福因、東ノ漢ノ直縣、天武紀十一年五月、「倭漢直等、賜姓曰連」、十四年六月、「倭漢連、賜姓曰忌寸」。コノ時倭ノ漢氏ノ族ニシテ直ノ姓ナリシ者ハ、皆同時ニ連ニナリ、忌寸ニナレルナリ。漢ノ直ト云フ名ハ、其ノ本宗ノミナラデ、族類ヲ統ベテモ云フ稱ニシテ、紀中ニモ往々然用ヒタル所アリ。カクテ本宗ナル倭ノ漢ノ忌寸ハ、コノ後ハ多ク世ニ著レザレドモ、其ノ族類ノ夥シキ事ハ、實ニ秦氏ニモ愈レリ。サレバソノカミ其ノ衆盛ヲ負ミテ、驕横ナル擧動ヲ爲シタル事ヤアリケン。天武紀六年ニ「詔東漢直等曰、汝等黨族之自本犯七不可也、是以從小墾田御世、至于近江朝、常以謀汝等爲事、今當朕世、將責汝等不可之狀、以隨犯應罪、然頓不欲絶漢直之氏、故降大恩以原之、從今以後、若有犯者、必入不赦之例」トアリ。

其ノ諸族ノ姓氏錄ニ見エタルハ、左京ニ、木津ノ忌寸、右京ニ、坂ノ上ノ大宿禰、檜原ノ宿禰、内ノ藏ノ宿禰、山口ノ宿禰、平田ノ宿禰、佐太ノ宿禰、谷ノ宿禰、畝火ノ宿禰、櫻井ノ宿禰、路ノ宿禰、文ノ忌寸、攝津ノ國ニ、石占ノ忌寸、檜ノ前ノ忌寸、藏ノ人、葦屋ノ漢人、河内ノ國ニ、火撫ノ直、和泉ノ國ニ、池邊ノ直、火撫ノ直、栗栖ノ直アリ。坂上系圖ニ引キタル姓氏錄ノ文ニ據レバ、都賀ノ使主ニ三子アリ、長ヲ山本ノ直ト云ヒ、次ヲ志努ノ直ト云ヒ、季ヲ爾波伎ノ直ト云ヒテ、三人ノ子孫分レテ數十氏トナレリ。氏族志ニ云「按系圖引姓氏錄文、皆今本

所無、其說頗詳、蓋古本也、故今取之」。サテ山本ノ直ノ後ハ、今ノ姓氏錄ナル檜原ノ宿禰、平田ノ宿禰、路ノ宿禰、檜ノ前ノ忌寸ノ外ニ、坂上系圖ニハ、文部ノ谷ノ忌寸、民ノ忌寸、平田ノ忌寸、國覓ノ忌寸小谷ノ忌寸、長尾ノ忌寸、高田ノ忌寸、夏身ノ忌寸、蓼原忌寸等アリ。志努ノ直ノ後ハ、姓氏錄ナル坂上ノ大宿禰、佐太ノ宿禰、谷ノ宿禰、畝火ノ宿禰、石占ノ忌寸ノ外ニ、系圖ニハ、藏垣ノ忌寸、蚊屋ノ宿禰、蚊屋ノ忌寸、田部ノ忌寸、井上ノ忌寸、吳原ノ忌寸、石村ノ忌寸、林ノ忌寸、忍坂ノ忌寸、酒人ノ忌寸、荒田ノ忌寸等アリ。爾波伎ノ直ノ後ハ、姓氏錄ナル山口ノ宿禰、文ノ忌寸ノ外ニ、系圖ニハ、山口ノ忌寸、調ノ忌寸等アリ。姓氏錄ナル內藏ノ宿禰、櫻井ノ宿禰ハ、「都賀直四世孫東人直之後也」ト云ヒ、木津ノ忌寸、藏ノ人、葦屋ノ漢人、池邊ノ直、火撫ノ直、栗栖ノ首ハ、阿智ノ後ナリトノミアリテ、彼ノ三子ノ裔ナリヤ、又ハ三子ノ外ヨリ別レタル姓ナリヤ、詳ナラズ。

檜原ノ宿禰。後紀延暦廿三年八月、「外從五位下檜原宿禰鑺作爲造西寺次官」、氏族志ニ云、「朱雀帝時、有小舍人檜原是茂、外記日記。」

平田ノ宿禰、平田ノ忌寸。延暦四年六月、平田ノ忌寸等ノ諸忌寸、坂上ノ忌寸ト同時ニ宿禰ニナレル者アリ。下ノ坂上氏ノ所ニ見ユ。又同六年ニモ「正六位上平田忌寸杖麻呂、路忌寸泉麻呂、從七位下蚊屋忌寸淨足、從八位上於忌寸弟麻呂等四人、並改忌寸、賜宿禰姓」ト續紀ニ見エタリ。路ノ宿禰、蚊屋ノ宿禰ハ、後ニ見ユ。於ノ宿禰ハ、氏族志ニ、平田氏ノ條ニ附記シテ、「於讀爲上、一本有保字、恐衍」、「於忌寸、姓氏錄不載、今莫所考、然(與三氏)同時並賜同姓、必非別族」、又「聖武帝時、有右京人下野藥師寺造司工於伊美吉子首、東大寺正倉院文書、稱德帝時、有外從五位下上忌寸生羽、續日本紀、蓋弟麻呂之先也、〇日本書紀、天武帝時、有吉野人宇閉直弓、宇閉於音訓相通蓋亦是族也。」トアリ。續紀延暦十年三月、「授無位於宿禰乙女、從五位下」トモ見ユ。文德實錄天安元年正月、「內藏忌寸、平田忌寸、山田忌寸、文忌寸、大藏忌寸、檜前忌寸、民忌寸、谷忌寸、倶改爲伊美吉」。三代實錄貞觀四年五月、「右京人左辨官史生於公浦雄等、改賜姓滋世宿禰」トアル於ノ公モ、於ノ宿禰ノ族ニヤ。

路ノ宿禰。延暦六年路ノ忌寸泉麻呂ニ賜ハレル姓ナリ。天武紀ニ路ノ直益人ト見エタルハ、路ノ忌寸ノ舊姓ナリ。續紀養老四年、漆部司ノ史文部ノ路ノ忌寸石勝、贓罪ヲ犯シタルヲ、三子祖父麻呂、安頭麻呂、乙麻呂、官奴トナリテ、父ノ罪ヲ贖ハント請ヒ奉レルコトアリ。又天平寶字中ニ文部ノ忌寸竝倉ト云フ人アリ。コノ姓モ、路ノ忌寸ノ族ナルベシ。

檜ノ前ノ忌寸。續紀寶龜三年四月、「正四位下近衞員外中將兼安藝守勳二等坂上忌寸苅田麻呂等言、以檜前忌寸任大和國高市郡司元由者、先祖阿智使主、輕島豐明宮馭宇天皇御世、率十七縣人夫歸化、詔賜高市郡檜前村而居焉、凡高市郡內者、檜前忌寸、及十七縣人夫、滿地而居、他姓者十而一二焉、是以天平元年十一月十五日、從五位上民忌寸表志比等、申其所由、天平三年、以內藏少屬從八位上藏垣忌寸家麻呂任少領、天平十一年、家麻呂轉大領、以從八位下蚊屋忌寸子蟲任少領、神護元年、以外正七位上文山口忌寸公麻呂任大領、今此人等被任郡司、不必傳子孫、而三腹遞仕、四世于今、奉勅宜莫勘譜第、聽任郡司」。氏族志檜前氏ノ註ニ云、「按坂上系圖引姓氏錄云、都賀三子、長山木爲兄腹祖、次志努爲中腹祖、次爾波伎爲弟腹祖、而檜前直、出自山木、藏垣忌寸、蚊屋忌寸、出自志努、文山口忌寸、出自爾波伎、所謂三腹、蓋是之謂也」。コノ姓ハ、後ニ宿禰ニ改マレリト見エテ、類聚符宣鈔ニ、朱雀天皇ノ御世ニ右大史檜ノ前ノ宿禰忠明ト云フ人見エタリ。

文部ノ谷ノ忌寸。コノ忌寸モ坂上ノ忌寸ト同時ニ宿禰ニナレリ。續紀天平九年ニ文部ノ直刀自ト云フ人見エ、三代實錄貞觀六年八月、「山城國乙訓郡人內膳典膳文部直平麻呂等改貫右京」トアルハ、コノ氏ノ族ナルベシ。仁和三年七月、「左京人右大史文部谷直忠直、弟式部少錄永世等、改賜春淵朝臣、忠直自言、孝元天皇之後、

與安部朝臣同祖也」。孝元天皇ノ皇胤ニコノ姓アルコトハ、記紀ニモ姓氏錄ニモ見エザレバ、忠直ノ言、蓋誤レリ。又續紀養老三年五月、「無位文部此人等二人、賜文忌寸姓」、同四年六月、「文部黒麻呂等十一人、賜文忌寸姓」トアルハ、東ノ文氏ノ族ナリヤ、西ノ文氏ノ族ナリヤ、知ラズ。但西ノ文氏ノ族ニハ、文部ヲ以テ姓トシタル者見エザレバ、文部ノ谷氏又ハ文路ノ路氏ナドノ族ナルベシ。

民ノ忌寸。天武紀ニ民ノ直大火、民ノ直小鮪、續紀和銅四年ニ民ノ忌寸表志火アリ。神護景雲元年、「伊勢國飯高郡人漢人部乙野等三人、賜姓民忌寸」、延暦四年、宿禰ニナレル者アリ。文徳實錄齊衡三年十一月、「內匠少属正七位下民忌寸國成、賜姓內藏朝臣」、除目大成鈔ニ、一條天皇ノ時、能登ノ介民ノ宿禰豐鄉アリ。

國覔ノ忌寸。氏族志ニ云、「按東大寺正倉院文書、載天平五年右京八條國覔忌寸弟麻呂戸籍、即是族也」、又「聖武帝時、有國覔忌寸勝麻呂、續日本紀 醍醐帝時、有陽成院判官代國覔伊美吉々宗、東寺文書 華山帝時、有古史生國覔仲賴、外記日記」。

小谷ノ忌寸。稱德紀ニ、甲斐ノ國八代ノ郡ノ人小谷ノ直五百依ト云ヘル人アリ。コノ族ナルベシ。

長尾ノ忌寸。天武紀ニ長尾ノ直眞アリ。コノ忌寸ノ舊姓ナリ。氏族志ニ云、「光仁帝時、有伊賀守長尾忌寸金村、續日本紀 朱雀帝時、有小舍人長尾元生、外記日記」。

高田ノ忌寸。氏族志ニ云「仁明帝時、有越後介高田宿禰家守、舊姓忌寸、類聚國史、續日本後紀。」。

夏身ノ忌寸。氏族志ニ云「聖武帝時、有伊賀主帳夏身金村、東大寺正倉院文書、○本書郡名闕。又拾芥鈔朝臣有夏身、是族歟。」

蓼原ノ忌寸。氏族志ニ云「又有連姓、拾芥鈔 蓋是族也、醍醐帝時、有豐前少目蓼原連房繼、除目大成鈔」。

坂上ノ大宿禰。欽明紀ニ東ノ漢ノ坂ノ上ノ直子麻呂、推古紀ニ東ノ漢ノ坂ノ上ノ直、天武紀ニ坂ノ上ノ直國麻呂、坂ノ上ノ直熊毛、坂ノ上ノ直老ナド見エ、天武天皇十一年十四年ニ、東ノ漢ノ直ト同時ニ、連ニナリ、忌寸ニナレリ。國麻呂、熊毛、老、皆壬申ノ役ニ天武天皇ニ從ヒ奉リテ功アリ。老ノ孫犬養、勇武ヲ以テ稱セラル。其ノ子ヲ苅田麻呂ト云フ。天平寶字九年九月「坂上忌寸苅田麻呂、賜姓坂上大忌寸」、延暦四年六月、「右衞士督從三位兼下總守坂上大忌寸苅田麻呂等、上表言、臣等、本是後漢靈帝之曾孫阿智王之後云々、臣苅田麻呂等、失先祖之王族、蒙下人之卑姓、望請改忌寸、蒙賜宿禰姓……。詔許之、坂上、內藏、平田、大藏、文調、文部谷、民、佐太、山口等忌寸十姓、一十六人、賜姓宿禰」。コノ十姓ノ忌寸ノ中、苅田麻呂ハ、大忌寸ナリシ故ニ、今宿禰ニナレルヨリ、コノ流ヲバ大宿禰ト云ヘリ。大忌寸ノ大ヲヤガテ宿禰ヘウツシテ賜ヘルナルベシ。平田、文部ノ谷、民ノ三氏ハ、前ニ見エ、餘ハ、後ニ見エ。又平田、文、山口ノ三氏ハ、姓氏錄ニモ坂上系圖ニモ見エ、內藏、佐太ノ二氏ハ、姓氏錄ニ見エ、調、文部ノ谷、民ノ三氏ハ、系圖ニ見エ、大藏氏ハ姓氏錄ニモ系圖ニモ見エズ。續後紀承和五年十一月「右京人散位從七位上勳九等坂上忌寸豐雄改忌寸賜宿禰」、三代實錄清和天皇ノ時「左京人外從五位下坂上忌寸能文及藏人貞野等、並賜坂上宿禰」ナドモ見ユ。氏族志坂上氏ノ條ニ「苅田麻呂子大宿禰田村麻呂、生于陸奥田村莊、生以下據坂上系圖鎌倉大草紙 爲延暦功臣、官至大納言 日本後紀 ……、田村麻呂既平蝦夷、威名著聞、子孫多爲陸奥出羽守介、鎭守將軍、日本後紀、坂上系圖 田村麻呂第三子淨野、爲陸奥出羽按察使、生內野、居陸奥、其孫古哲稱田村氏、世爲田村莊司、古哲十六世孫右京大夫輝定、南北間屬源顯家勤王、田村家譜、鎌倉大草紙。 淨野八世孫範政冒中原氏、冒中原氏、據朝野羣載、中原系圖。 爲明法博士、子孫世職、曾孫明基、高倉帝時、爲少判事、亦冒中原氏、高倉以下、磯部信貞訴狀 淨野弟治部大輔正野五世孫正任、居攝津豐島郡吳庭、其後有莊屋、村治等氏、正野弟滋野、居陸奥安達郡、世爲豪族、號坂上黨、滋野弟右近衞將監廣雄、其後裔居紀伊、有生地、相賀等族、元弘建武間、有生地尹澄、與其子安澄、並屬楠木正成、屢有戰功、元弘以下紀伊名所圖繪 其他上總有武射氏、下總有匝瑳氏、越後有沼垂氏、皆坂上氏之族也、坂上系圖。」

佐太ノ宿禰。舊忌寸姓ナリ。文武紀ニ從五位下佐太ノ忌寸老アリ。延暦四年ニ、宿禰ニナレリ。氏族志ニ云「一條帝時、有左兵衞志佐太能近、外記日記」。

谷ノ宿禰。天武紀ニ谷ノ直根麻呂アリ。直ヨリ連ニナリ、忌寸ニナリテ、遂ニ宿禰ニナレルナリ。姓氏錄山城ノ國諸蕃ニ「谷直、漢師建王之後也」トアルハ、谷ノ宿禰ト親疏如何ヲ知ラズ。師建王ハ、阿智王ノ族カ後裔カ。未定雜姓山城ノ國ノ部ニ「村主、漢師建王之後者、不見」トモアリ。

畝火ノ宿禰。續紀延暦　年ニ從五位下畝火ノ宿禰清永アリ。

石占ノ忌寸。類聚國史天長　年ニ外從五位上石占ノ忌寸水直アリ。

藏垣ノ忌寸。天武紀ニ倉牆ノ直麻呂アリ。續紀慶雲四年「主稅寮助從六位上椋垣直子人、賜連姓」。尋デ忌寸トナレリ、和銅二年ニハ正六位上椋垣ノ忌寸子人、和銅六年ニハ正五位下倉垣ノ忌寸子首トアリ。天平寶字中、椋垣ノ忌寸吉麻呂アリ。氏族志ニ云「朱雀帝時、有右近衞將監藏垣秋實、外記日記、後三條帝時、有伊豆掾藏垣宿禰長清、除目大成鈔、蓋皆是族也」。

蚊屋ノ宿禰、蚊屋ノ忌寸。持統紀ニ蚊屋ノ忌寸木間アリ。宿禰姓ハ、延暦六年ニ從七位下蚊屋ノ忌寸淨足ニ賜ハリタルナリ。

田部ノ忌寸。稱德紀ニ壹岐島守田部ノ直息麻呂アルハ、コノ族ナルベシ。

井ノ上ノ忌寸。聖武紀ニ、井上ノ忌寸麻呂、稱德紀ニ、井上ノ忌寸蜂麻呂、三代實錄元慶中、右京ノ人井上ノ伊美吉直繼アリ。續紀延暦三年、「外從五位下井上直牛養、爲主計助」トアルモ、此ノ族ナルベシ。拾芥鈔ニ井上ノ宿禰アルハ、後ニ宿禰ニナレルニヤ。

呉原ノ忌寸。正倉院文書ニ薩摩ノ目呉原ノ忌寸百足アリ。

石村(イハレ)忌寸。萬葉集ニ正七位上磐余ノ伊美吉諸君アリ。續紀天平神護元年「左京人外衞將監從五位下石村村主石楯等三人、參河國碧海郡人從八位上石村村主押繩等九人、賜姓坂上忌寸」。村主モ、忌寸ノ族ナルベシ。

酒人ノ忌寸。光仁紀ニ酒人ノ忌寸刀自古アリ。

荒田井ノ忌寸。孝德紀ニ倭ノ漢ノ直荒田井ノ比羅夫、天智紀ニ同ジ人ヲ荒田井ノ直比羅夫トアリ。直ハ後ニ忌寸ト爲レリ。正倉院文書ニ荒田井鳥甘アリ。

山口ノ宿禰、山口ノ忌寸、文ノ山口ノ忌寸。孝德紀ニ漢ノ山口ノ直大口アリ。法隆寺二天ノ像ノ光背ノ記ニ山口ノ大口ノ費ト書ケリ。續紀文武天皇四年、山口ノ伊美伎大麻呂、律令ノ撰定ニ與レリ。延暦四年、坂上ノ忌寸ト同時ニ宿禰ヲ賜ヘル中ニ山口ノ忌寸アリ。後紀弘仁三年六月、「右京人正六位上山口ノ忌寸諸足賜姓宿禰」、續後紀承和十四年閏三月「右京人右少史山口忌寸豐道、薩摩目山口忌寸奥道等、賜姓朝臣」。

文ノ忌寸。舊倭ノ漢ノ書ノ直ト云ヘル姓ニテ、西(カフチ)ノ文ノ忌寸最弟等ノ上表ニ「東文稱直」、神祇令及祝詞式ニ東(ヤマト)ノ文部(フミベ)、神祇令ノ義解ニ「東(ヤマト)ノ漢(アヤ)ノ文(フミ)ノ直(アタヒ)」ナドアル、是ナリ。皇極紀ニ倭ノ漢ノ書ノ直縣、孝德紀ニ倭ノ漢ノ書ノ直麻呂、天武紀ニ書ノ直智德、書ノ直藥、同紀十年「書ノ直智德、賜姓曰連」、元正紀靈龜二年ノ詔ニ、壬申年功臣贈大錦下文ノ直成覺ナド見エタリ。天武紀十四年六月、大倭ノ連等十一氏ニ忌寸ノ姓ヲ賜ハリタル中ニアル書ノ連ハ書ノ首ヨリナレル連ト書ノ直ヨリナレル連トヲ兼ネテ云ヘルニテ、持統紀元正紀ニ文ノ忌寸知德トアルハ、即天武紀ノ書ノ直智德ナリ。續紀神龜三年「太政官處分、東文忌寸等、自今以後、令仕辨官人上大祓刀」。コノ忌寸ハ、延暦四年、坂上ノ忌寸等ト同時ニ宿禰ニナリタル者ナレドモ、姓氏錄ニ其ノ宿禰ハ見エズ。

調ノ忌寸。持統紀ニ調ノ宿寸老人アリ、文武紀四年、律令ノ撰定ニ與レリ。コノ氏、延暦四年ニ宿禰ニナレ

リ。

内藏ノ宿禰、大藏ノ忌寸。大藏氏ハ、内藏氏ト同ジク東ノ漢ノ直ヨリ出デタルコトハ、上ニ引ケル古語拾遺ノ文ニ見エタリ。天武紀ニ大藏ノ直廣隅、元正紀ニ大藏ノ忌寸伎國足、聖武光仁ノ御世ノ間、大藏ノ忌寸廣足、同姓麻呂、内藏ノ忌寸黒人、同姓家主、同姓全成ナド見ユ。延暦四年、内藏大貳二氏ニモ宿禰ノ姓ヲ賜ヘリ。内藏ノ忌寸全成ハ、コノ後内藏ノ宿禰ト見エタリ。後紀弘仁三年六月、河内ノ國人林ノ忌寸眞永、右京ノ人山口ノ忌寸諸足ト同時ニ「内藏忌寸帶足等、賜姓宿禰」、續後紀承和六年七月「右京人散位從四位下内藏宿禰影子、右衛門大尉正六位上内藏宿禰雄繼、大藏忌寸繼長、從八位下檜原宿禰聽通等男女十二人、賜姓内藏宿禰」、氏族志ニ云「高守等既爲宿禰、不應再賜、下文書内藏朝臣高守、豈高守當時特賜朝臣、本書誤爲宿禰乎」。按フニ高守ノ下ニ、賜姓朝臣ナド云フ句ヲ寫シ脱シタル者ナルベシ。三代實錄貞觀四年三月「大藏伊美吉廣勝、賜姓宿禰」氏族志ニ云「朱雀帝時、有淡路守内藏朝臣惟範、（外記日記）一條帝時、有主殿首内藏有孝、三條帝時、有番長内藏千武（小右記）、堀河帝時、有長門少目内藏宿禰倉武（除目大成鈔）」又「淸和帝時、大藏伊美吉善行、以文學著、改賜朝臣、（雜言奉和）朱雀帝時、對馬守大藏朝臣春實、討藤原純友有功、孫種材任太宰太監、女眞之亂有戰功、子孫世爲府官、（大藏系圖）後冷泉帝時、有豐前日田郡大領大藏千員、散位大藏朝臣永明、（宇佐大鏡）種材曾孫種直、（○種一作成）壽永中、食筑前夜須郡秋月莊、子孫爲秋月氏、（寛永系圖）其族有原田田尻等氏、（大藏系圖）」。

櫻井ノ宿禰。氏族志ニ云「村上帝時、有明法得業生櫻井宿禰守明、（類聚符宣鈔）鳥羽帝時、有備後大目從七位上櫻井宿禰松枝、（除目大成鈔）」。

木津ノ忌寸。續紀延暦元年十一月「式部史生正八位下倭漢忌寸木津吉人等八人言、吉人等、是阿智使主之後也、是以蒙賜忌寸之姓、可注倭漢木津忌寸、而誤記倭漢忌寸木津、且姓字繁多、唱導不穩、望請去倭漢二字、爲水津忌寸、許之」トアリ。氏族志ニ云「村上帝時、有僧良源、木津氏、近江淺井郡人（天臺座主記）蓋是族也」。

藏ノ人。内藏大藏二氏ト同宗ナルベシ。人ハ、首ヲ省キタルナリ。孝謙紀ニ倉ノ首於須美アリ。廢帝紀ニハ藏ノ毘登於須美トアリ。右京諸蕃ニ「椋人、阿祖使主男武勢之後也」トアルモ、同姓ニテ、阿祖ハ、阿知ノ誤リナリ。又史ノ姓ナルモノアリ。三代實錄貞觀五年九月ニ「河内國古市郡人木工大屬藏史朝臣繼、移貫右京職」、元慶中、大學助教藏ノ史宮雄アリ。コレモ藏ノ首ト同族ナルベシ。

池邊ノ直。敏達紀ニ池邊ノ直水田アリ。

葦屋ノ漢人、火撫ノ直、栗栖ノ首。

右ノ諸姓ノ外ニ、丹波氏ハ、姓氏錄左京諸蕃ニ「丹波史、後漢靈帝八世孫孝日王之後也」トアレドモ、丹波系圖ニハ、都賀ノ使主ノ後トセリ。氏族志丹波氏ノ條ニ云、「醍醐帝時、有左大史丹波宿禰峯行、（西宮記）圓融帝時、丹波天羽郡人丹波康頼、以喜醫爲醫針博士、賜宿禰、孫忠明又喜醫、爲典藥頭、改賜朝臣、子孫傳業、世有聞人（丹波系圖）」、又右京諸蕃ニ「若江造、後漢靈帝苗裔奈率張安力之後也」トアリ。東ノ漢氏ト親疎何如ヲ知ラズ。齊明紀ニ引キタル伊吉ノ連博德ノ書ニ東ノ漢ノ長ノ直阿利麻、東ノ漢ノ草ノ直足島トアルハ、皆東ノ漢ノ氏ノ族ナルベシ。

又右京諸蕃ニ「高向村主、魏武帝太子文帝之後也」、「郡首、高向村主同祖、政姓夫公（一名富等）之後也」、山城ノ國諸蕃ニ「民使首、高向村主同祖寶德公之後也」、河内ノ國諸蕃ニ「刑部造、吳國人李牟意彌之後也」トアレドモ、坂上系圖ニ據レバ、コノ四氏モ、皆漢人ノ裔ナリ。氏族志ニ云「高向氏、史姓、漢人之族也、推古帝時、高向漢人玄理爲遣隋學生、孝德帝時、任博士、爲史姓、（日本書紀）淳和帝時、有高向史公守、（類聚國史）初漢人從阿

智歸化者、凡七姓、曰般姓、一曰員姓爲高向史、及高向村主、高向調使、評首、民使主首等祖、曰李姓、爲刑部史祖、曰皁郭姓、爲坂合部首、佐太首等祖、曰朱姓、爲小市佐柰宜等祖、曰多姓、爲檜前調使等祖、曰皁姓、爲大和宇太郡佐波多村主、長幡部等祖、曰高姓、爲檜前村主祖、坂上系圖引姓氏錄」其ノ註ニ「按今本姓氏錄以蕃別高向村主、評首、民使主首等爲曹操之後、與之不合、又有刑部造、同出李氏、而不謂漢人之後、竝可疑也、豈諸氏實非別族、而今姓氏錄係鈔本、其本末不可詳乎、附以待後考」ト云ヘリ。コノ七姓ハ、即苅田麻呂等ノ上表ニ「携七姓民歸化來朝」ト云ヘル者ナリ。評ノ首ハ、即姓氏錄ノ郡ノ首、姓氏錄ノ政姓ハ、般姓ノ誤リナリ。民使主首ノ主ハ、衍字ナリ。用明紀ニ押坂部史毛屎、孝謙紀天平勝寶二年ニ高向ノ村主老、稱德紀寶龜元年ニ民使ノ毗登日理、扶桑略記ニ「桓武帝時、有僧行表、姓檜前調使氏、大和葛城郡人、安麻呂子也」ナド見ユ。又右京諸蕃ニ雲梯ノ連アリテ、其ノ譜ハ、民使ノ首ニ同ジク「高向村主同祖、寶德公之後也」トアリ。廢帝紀天平寶字五年ニ「漢人伯德廣足等賜姓雲梯連、伯德諸足等雲梯造」トアリニ依レバ、寶德ハ、即伯德ニシテ、雲梯ノ連、民使ノ首等ノ舊姓ナルベシ。未定雜姓右京ノ部ニ「高向村主、吳國人小君王之後也」山城ノ國ノ部ニ「穴太村主、曹氏寶德公之後者不見」トアルハ、何レモ訛傳ナリ。穴太ノ村主ノ事ハ第卅九章錦部ノ處ニ云フベシ。

坂上系圖ニ引キタル姓氏錄ニハ、鞍作ノ村主ヲモ東ノ漢氏ノ族類トセリ。コノ氏ハ、敏達紀ニ鞍作ノ村主司馬達等、元明紀和銅六年ノ詔ニ「正七位上鞍作磨心、能工異才、獨越衆侶、織成錦綾、實稱妙麗、宜磨心子孫免雜戶、賜姓栢原村主」トアリ。又氏族志黎原氏ノ條ノ末ニ云「其他阿智之後、有栗村忌寸、輕忌寸、新家忌寸、田井忌寸、文部岡忌寸、黑丸直、倉門忌寸、斯佐直、郡忌寸、榎井忌寸、河原忌寸、與努忌寸、白石忌寸、文池邊忌寸等族、又有西波多、平方、飽波、危寸、俾加、茅沼、山、高宮、飛鳥、長田、田村、忍海、佐味、甲賀、播磨、漢人、今來、石寸、金作、○續日本紀、元正帝時、伊賀金作部東人、伊勢金作部牟良等、除雜戶號、並從公民、蓋是族也。尾張次角諸村主、竝漢人之裔、其祖皆從阿智歸化者也坂上系圖引姓氏錄。」

又姓氏錄未定雜姓河內ノ國ノ部ニ「高安忌寸、阿智之後者、不見」トアリ。續紀稱德天皇ノ時、高安ノ忌寸伊可麻呂アリ。

第三十五章　高句麗古碑考

高句麗國廣開土王碑文ノ石摺原本ハ、宮內省圖書寮ノ所藏ニシテ、其ノ謄本ハ現ニ帝國博物館ニ陳列セリ。其ヲ寫眞石版ニテ縮寫セル者ハ、亞細亞協會ノ雜誌ナル會餘錄第五集明治二十二年六月三日出版ニ載錄セリ。明治十七年、陸軍砲兵大尉酒勾某、遊歷ノ命ヲ奉ジテ、朝鮮支那旅行ノ序ニ鴨綠江ヲ溯リ、碑ノアル地ニ到リ、搨本ヲ得テ携ヘ歸レリ。其ノ由來ハ、同集ナル橫井忠直氏ノ高句麗碑出土記ニ詳カナレバ、其ノ全文ヲ左ニ引用ス。

「碑在淸國盛京省懷仁縣、其地曰洞溝、在鴨綠江之北、距其上流九連城、八百餘里、淸國里法、以下倣之、地勢平坦、廣三四里、長十二三里、中央有舊土城、周圍五里餘、內置懷仁縣分縣、即古之令安城也、距此城東約四里許、離江邊三里餘、山下有一小溪、則碑所在也、據土人云、此碑舊埋沒土中、三百餘年前、始漸々顯出、前年有人、由天津雇工人四名來此、掘出洗刷、費二年之工、稍至可讀、然久爲溪流所激、缺損處甚多、初掘至四尺許、閱其文、始知其爲高句麗碑、於是四面搭架、令工氈搨、然碑面凸凹不平、不能用大幅一時施工、不得已用尺餘之紙、次第搨取、故工費多、而成功少、至今僅得二幅云、日本人某適遊此地、因求得其一齎還、碑已掘出者、其高一丈八尺、前後廣五尺六七寸、兩側四尺四五寸、埋沒土中者、尙不知有幾尺、面南而背北、四面皆刻有字、南十一行、西十行、北十三行、東九行、通計四十三行、每行四十一字、大略一千七百五十九字、字長短

不齊、長者五寸、短或三寸、刻深至五六寸、其殘缺者、凡一百九十七字、碑之傍有一大墳、宛然丘陵、而其形傾欹、勢如被壓、蓋高句麗盛時、葬永樂太王之處、某聞其中有古磚、懸金募購、得數枚而還、今藏其家、令安城一江之隔、與朝鮮高山城滿浦城對峙、四面有古墳數百、星羅棊布、皆立柱地下、用石疊造、詢之士人、均稱高麗墳、碑之東、又有一大墳、俗呼爲將軍墳、極廣大、其墳突出地上者、一丈七尺、上有兩層、地下更不知有幾層、入上層石門之內、方廣二丈、其高一丈四尺、全用大石砌成、梁柱長一丈四尺、見方三尺二寸、其下舖大石、就有隙處、投以小石、久之始隱々聞響、昔有山賊群集、欲掘此墳、而覺不能得手、其堅固可知、蓋此地方、當是昔時一都會、陵谷變遷、其興廢之由、今不可得而詳也」。コノ碑ノ現レタル洞溝ノ地ハ、高句麗ノ舊都ナル國內城ノ近郊ナルベキ事ハ第十章高句麗考ニ委シク考證セリ。

文中ニ古磚數枚ヲ得タリトアル其ノ中ニ、一箇ノ奇形ナル者アリテ、今博物館ニ陳列セリ。竪八寸、幅四五寸許ニシテ、側面左右ニ「願大王之墓、安如山、固如丘」ノ十一字ヲ記シタリ。

碑文、三大段ニ分ル。第一段ハ、始祖ノ創業ヨリ說キ起シ、廣開土王ノ功德ヲ頌シテ、碑ヲ立ツル理由ヲ記ス。第二段ハ、廣開土王ノ武功ヲ歷敍ス。第三段ハ、守墓人ノ烟戶ヲ規定シ、廣開土王ノ遺訓ヲ揭ゲテ、法ヲ後世ニ示セリ。文中讀ミ難キ文字、又意義ヲ取リ難キ辭句、往々アリ。コレ一ツハ、文字ノ古體ナルニ由リ、一ツハ、自國慣用ノ熟語アルト、自國ノ語法ニ引カレテ、漢文法ニ違ヘル辭句ノ雜レルトニ由レリ。此ノ碑ノ成レルハ、彼ノ小獸林王二年「立大學敎育子弟」ト云ヘル年ヨリ僅ニ四十二年ノ後ニシテ、猶高句麗文學ノ幼稚ノ時ナレバ、此ノ後六十年許ノ頃ニ、百濟王餘慶ガ魏ニ上レル表、及倭王武ガ宋ニ上レリト云ヘル表ノ文辭典雅ナルニ較ブレバ、甚徑庭アリ。サレドモ此ノ碑ハ三韓最古ノ遺文トシテ、珍重スベキノミナラズ、歷史上ノ考證ノ爲ニ大ニ價値アル物ナリ。

第一段ニ曰ク、「惟昔始祖鄒牟王之創基也、出自北扶餘、天帝之子、母河伯女郎、剖卵降出生子、有聖德□□□□命駕巡車南下、路由扶餘奄利大水、王臨津言曰、我是皇天之子、母河伯女郎、鄒牟王、爲木連葭浮龜、應聲即爲連葭浮龜、然後造渡、於沸流谷忽本西城山上、而建都焉、永樂世位、因遣黃龍來下迎王、王於忽本東岡、黃龍負昇天、顧命世子儒留王、以道興治、大朱留王紹承基業、四□至十七世孫國岡上廣開土境平安好太王、二九登祚、號爲永樂太王、恩澤□于皇天、威武柳被四海、掃除□□、庶寧其業、國富民殷、五穀豐熟、昊天不弔、卅有九晏駕棄國、以甲寅年九月廿九日乙酉、遷就山陵、於是立碑、銘記勳績、以永後世焉」。

鄒牟王ハ、論衡ノ東明、魏書ノ朱蒙ニシテ、麗紀ニ「始祖東明聖王、姓高氏、諱朱蒙、一云鄒牟、一云象牟、」ト云ヒ、續紀ニハ、都慕王ト云ヒ、姓氏錄ニハ都慕王トモ鄒牟王トモ云ヘルコト濟紀ニモ「鄒牟、或云朱蒙」ト云ヘルガ如シ。第十章ニ云ヘルガ如シ。

北扶餘ハ漢史ニハ單ニ夫餘ト云ヒ、魏志後漢書晉書ニ、皆傳アリ。其ノ地ハ、今ノ盛京奉天府ノ東北境ニシテ、疆土甚廣ク、魏志ニ「方可二千里」トアリ。鄒牟王ノ國ヲ建テタル卒本ノ地モ、扶餘ノ域內ニシテ、卒本扶餘ト云ヘルガ故ニ麗人ハ、其ノ本國ナル扶餘ニハ、北ノ字ヲ加ヘテ區別セリ。第九章貊人考扶餘ノ條ヲ見ヨ。

天帝之子、母河伯女郎ト云ヘルニテ、天帝ハ、日神ヲ指セルナリ。續紀ノ「日神降靈」及「河伯之女感日精而所生」ノ傳說ヲ云ヘルニテ、天帝ハ、日神ヲ指セルナリ。下文ニ皇天之子トアルモ、同ジ。論衡ニ「王疑以爲天子」トアリ。又魏書ニ「朱蒙告水曰、我是日子、河伯外孫」トアルヲ、麗紀ニ「我是天帝子」ト書ケルモ、日ヲ天帝トシタルナリ。郎ハ、本男子ノ稱ニシテ、婦ヨリ夫ヲ謂ヒ、僕ヨリ主ヲ指ス辭ナリ。コヽニ女子ヲ女郎ト云ヘルハ、彼ノ國ニテ女子ヲ敬稱セル俗語ナルベシ。雄略紀二年秋七月ノ條ニ百濟新撰ヲ引キテ「己

巳年、蓋鹵王立、天皇遣阿禮奴跪來索女郎、百濟莊飾慕尼夫人女曰適稽女郎、即貢進於天皇」ト云ヘルモ、コレト同例ナリ。有聖□ハ、有聖德ノ缺損カ。南下ハ、論衡ニ「南至掩淲水」、魏書ニ「東南走」トアリ。奄利大水ハ、論衡後漢書ノ掩淲水、魏略ノ施掩水、梁書ノ淹滯水、麗紀ノ淹淲水ナリ。魏略ノ施掩ハ、蓋倒置ナリ。掩淹ハ、奄ト通ジ、淲施滯ハ、大ノ音ニ近ケレバ、諸書ハ皆奄利大ノ利ノ音ヲ略ケルナリ。爲木以下十四字ハ、魚鼈成橋ノ傳說ヲ記セリト見ユレドモ、詳ナラズ。木連葭ハ、橋梁或ハ舟筏等ノ俗言カ。爲木連葭マデヲ鄒牟ノ語トスレバ、末ノ浮龜ハ、衍字ニ似タリ。沸流谷ハ、即麗紀ノ沸流水上、忽本ハ、即卒本ナリ。魏書ノ紇升骨城モ、忽本ノ轉訛ナルベシ。沸流水ハ、鴨綠江ノ北ニアルコトハ、第十章ニ云ヘリ。山上ハ、只山ノ上ト云フ義カ。或ハ麗紀山上王ノ處ニ「王薨、葬於山上陵、號爲山上王」ト云ヘルコトアレバ、一ツノ地名ナリシカ。

永樂世位ハ、菅政友氏ノ說ニ「樂ハ、論語朱熹ノ註ニ「樂、喜好也」トアリテ、ネガフノ義ナリ。永ク子孫ノ王位ニアランコトヲネガヘルナリ」トテ、永樂レ世レ位ト讀マレタリ。コノ世ノ字ハ、コヽニハ用言ニ用ヒテ、禮記文王世子ノ註ニ「謂二之世子一、以三其得二世一國故也」トアル世ノ字ト同ジ意ナリ。因遣黃龍ハ、上ニ上帝ナド云ヘル體言アリトシテ解スベシ。黃龍負天ノ傳說ハ、麗紀ニ見エザレドモ、始祖十九年「秋九月、王升遐、時年四十歲、葬龍山」トアルハ、カヽル傳說アリシニ由リテ、其ノ舊跡ナル忽本東岡ヲ龍山ト名ヅケタルニハ非ズヤ。東覽平壤府ノ古跡ニ「麒麟窟、在九梯宮內浮碧樓下、東明王養麒麟馬于此、後人立石在石上」、中和郡（北至平壤府界六里）ノ陵墓ニ「東明王墓、在龍山、俗號眞珠墓、世傳高句麗始祖、常乘麒麟馬、奏事天上、年至四十、遂昇天不返、太子以所遺玉鞭、葬於龍山、號東明聖王」トアリ。サレバ鄒牟昇天ノ說ハ、麗人ノ古傳ニシテ、後世ニ至リテ黃龍ヲ麒麟馬ニ易ヘタルナリ。鄒牟ノ國ハ、鴨綠江ノ北ニアレバ、平壤近傍ナル麗祖ノ古跡ハ、皆後人ノ造設ナルコト論ナシ。

世子儒留王ハ、魏書ノ閭達ニシテ、麗紀ニ「瑠璃明王立、諱類利、或云孺留、朱蒙元子」ト云ヒ、濟紀ノ一說ニモ「及朱蒙在扶餘所生禮氏子孺留來、立之爲太子、以至嗣位焉」トアリ。儒ト孺ト、音通ズ。以道興治ハ、道ヲ以テ政治ノ興ト爲スコトニテ、興スルハ、行フト云フガ如シ。大朱留王ハ、魏書ノ如栗ニシテ、麗紀ニ「大武神王立、（或云大解朱留王）諱無恤、琉璃王第三子」トアル、是ナリ。

至ノ上ノ泐ケタル字ハ、考ヘ得ズ。傳ナド云フベキ所ナリ。十七世孫ト云ヘルコトハ、麗紀ト合ハズ。麗紀ニ據レバ、廣開土王ハ、大武神王ノ裔ニ非ズ、武神王ノ弟再思ノ後ニシテ、瑠璃王ヨリトスレバ、十一世ノ孫、東明王ヨリトスレバ、十二世ノ孫ナリ。サレバ此ハ、直系ノ世數ニ依ラズシテ、諸王ノ代數ヲ擧ゲタルナルベシ。武神ノ後ハ、麗紀ニ據レバ、廣開土マデ十六代アレドモ、第十章ノ推定ニ從ヒ、慕本王ト太祖王ノ間ニ二王ノ脫落アリト見テ、太祖王ヲ慕本王ノ曾孫トスレバ、十八代アルコト、ナル。閔中王ハ、武神王ノ弟ニシテ、子孫ニ非ザレバ、之ヲ除キテ、武神王ノ子孫ノミヲ數フレバ、廣開土マデ十七代ニシテ、碑文ノ數ト合ヘリ。サレドモ凡テ何世孫ト云ヘルハ、直系ニ從ヒテ數フル者ナルヲ、今唯代數ヲ指セルハ、訝シ。高句麗ノ國俗ニテカヽル用法アリシニヤ。猶考フベシ。

國岡土廣開土境平安好太王ハ、廣開土王ノ全備セル追號ニシテ、廣開土ハ、其ノ略稱ナリ。國岡土ハ、下文ニ兩所共ニ國岡上トアレバ、土ハ本上ノ字ナルヲ、石面少シク缺ケテ、土ノ如クナレルナリ。麗王ノ追號ハ、大抵陵墓ノ地名ヲ用ヒタレバ、國岡上ハ、廣開土ノ陵墓ノ地ナラン。故國原ニ葬レル故國原王ヲ麗紀ニ「一云國岡上王」トアレバ、故國原ノ別名ヲ國岡上ト云ヘルナリ。麗紀ニ陽原王ノ一名ヲ陽崗上好王、平原王ノ一名ヲ平崗上好王ト云ヘル例ニ依リテ推スニ、崗上ハ蓋原ノ方言ニシテ、國岡上ハ、即國原ト云フニ同

ジ。姓氏錄右京諸蕃ノ處ニ「狛首、高麗國人安岡上王之後也」トアル安岡上モ、安原王寶延ノ別號ナリ。廣開土ノ祖父ナル故國原王、既ニ國岡上王ノ別號アルガ故ニ、廣開土略稱ニハ、陵名ヲ用ヒズシテ、其ノ功業ヲ讃揚セル廣開土境ノ美號ヲ用ヒタリ。境ノ字ヲ略キタルハ、字數ヲ三字ニ減ゼンガ爲ナリ。韓史ナル麗王ノ追號ハ、皆二字又三字ニシテ、四字ナル者ナシ。麗紀ニハ、廣ノ字ヲ略キテ、單ニ開土王トモ云ヘリ。平安ノ二字ハ、下文ニ三所共ニ略ケルヲ見レバ、追號ニ必要ナラザル字面ナリ。此ノ王ノ名ハ、麗紀ニ談德トアルヲ、梁書晉書等ニハ安ト云ヘリ。斯由（故國原王）ヲ釗ト云ヒ、巨連（長壽王）ヲ璉ト云ヒ、羅雲（文咨明王）ヲ雲ト云ヒ、興安（安藏王）ヲ安ト云ヘル類、孰レモ方言ノ名ヲ約メ又ハ省キテ漢名ト爲シタルニ、談德ト安トハ、全ク別音ニシテ、他ノ例ト異ナリ。此ニ依リテ考フレバ、平安ハ、開土王ノ本名ニシテ、支那ト交通スル時ハ、平ノ字ヲ省キテ單名ト爲シタルニテ、談德ハ、別名若クハ幼名ナルベシ。平安ヲ本名トスレバ、本名ハ、一タビ掲ゲタル上ハ反覆スルコトヲ要セザルガ故ニ、下文ニハ皆省キタリト見ユ。好太王ノ好ハ、麗王ニ多ク見ユル美稱ニシテ、麗紀ニ美川王ノ一名美壤好王、文咨明王ノ一名明治好王、及陽崗上好王、平崗上好王ナドアリ。太モ美稱ニシテ、下文ノ永樂太王ノ太ニ同ジ。太祖大王次大王新大王ノ大モ、皆同ジ意ナラン。三國史記ニハ、太ト大ト混用セルコト、甚多シ。サレバ好太王ハ、王號ニ美稱ヲ加ヘタルノミニシテ、特稱體言トハ聞エザレドモ、此ノ外ニ好太王ノ美稱ヲ負ヘル王モ見エザレバ、姓氏錄右京諸蕃ニ「難波連、高麗國好太王之後也」トアル好太王ハ、此ノ王ヲ指セルナリ。又左京諸蕃ニ「高麗朝臣、高句麗王好台七世孫延興王之後也」トアル好台モ、好太ノ誤寫ナルベシ。

二九登祚ハ、十八歲ニテ位ニ即キタルニテ、永樂太王ハ、年號ヲ冠シタル生時ノ尊號ナリ。恩澤ノ下ハ、倂ノ字ナドアルベキニ似タレドモ、右ノ下ニ口ノ如キ形見ユレバ、格ノ字ニテモアランカ。柳被ハ、垂柳ノ如ク覆ヒ被ルノ義カトモ、思ヒシカドモ重野博士ノ桄ノ字ナリト云ヘル說ニ從フベシ。其ハ說文ニ「桄、充也、從木、光聲」トアリ、又淸ノ江聲ガ尙書集注音疏ニ、堯典ナル光被三表ヲ僞孔傳ニ「光、充也」トアルニツキテ「釋言云、桄、充也、陸德明謂、孫炎本、桄作光、則光之爲充、古訓也」ト云ヒ、淸ノ段玉裁ガ說文解字註ニ「按堯典光被四表、某氏傳曰、光、充也、用爾雅爲訓也、桄讀古曠切、所以充拓之折坼也、必外有桄、而後內可充拓之令滿、故曰、桄、充也、不言所以者、仍爾雅文也、桄之字、古多假橫爲之、且部曰、從几足有二橫、橫即桄字、今文尙書曰、橫被四表、孔子閒居曰、以橫於天下、鄭曰、橫、充也、樂記曰、號以立橫、橫以立武、鄭曰、橫、充也、皆即釋言之桄充也、今文尙書作橫被、故漢書王莽傳、王褒傳、後漢書馮異傳、崔駰傳、班固傳、魏都賦、注所引東京賦、皆作橫被、古文尙書作光被、與孫叔然爾雅合、某氏傳光充也、不誤、鄭注釋以光耀、蓋非」ト云ヘルニ據レルナリ、然ラバコノ䊢ノ字ハ、䊢又穔ノ異體ナルベシ。掃除ノ下ハ、庶ハ衆庶、檠ハ穀ノ譌字ナリ。十八歲ニテ即位シ、卅九歲ニテ晏駕スレバ、在位二十二年ニシテ、麗紀ノ在位年數ト符合ス。甲寅ノ年ハ、紀元千七十四年、晉ノ安帝義熙十年、北燕王馮跋ノ太平六年ニシテ、下文ノ干支ニ據リテ推スニ、晏駕ノ後二年、麗紀ニ據レバ、長壽王巨連ノ即位二年ナリ。以上鄒牟王ノ基ヲ創メシヨリ、開土王ノ業ヲ繼ギシ事、晏駕ノ後葬リテ碑ヲ立ツル事マデヲ叙ス。

第二段ハ大略八節ニ分ル。其ノ第一節ニ曰ク、「其詞曰、□□永樂五年歲在乙未、王以碑麗不息□、又躬率住討叵富山負碑、至鹽水、破其丘部洛六七百、當用馬牛羊、不可稱數、於是旋駕、因過襄平道東來□城力城北豐五備獵、遊觀土境、田獵而還」。

詞ハ、詞ノ字ノ泐ケシナルベシ。永樂ハ、開土王ノ年號ナリ。永樂五年乙未ハ、紀元千五十五年（晉ノ孝武帝太元二十年、燕帝慕容垂建興十一年）ニ當レリ。此ヨリ元年ニ溯レバ、開土王ノ即位ハ、紀元千五十一年（晉ノ太元十六年、燕ノ建興七年）、辛卯ナルヲ、麗紀ハ

此ノ年ヲ以テ故國壤王伊連ノ八年トシ、其翌年壬辰ノ處ニ、故國壤王薨ジテ開土王ノ嗣ギタル事ヲ記セリ。又此ノ元年ヨリ二十二年數ヘ降セバ、開土王ノ薨年ハ、紀元千七十二年（晉ノ安帝義熙八年、北燕王馮跋太平四年）壬子ナルヲ、麗紀ハ、其ノ翌年癸丑トセリ。故ニ麗紀ノ在位年數ハ碑文ニ符合スレドモ年紀ハ、全ク一年ノ差謬ヲ爲セリ。

碑麗ハ、遼東ノ地名、遼史地理志東京道ニ「集州懷衆軍、下刺史、古陴離郡地、漢屬險瀆縣、高麗爲霜巖縣、渤海置州、統縣一、奉集縣、渤海置」トアリ。此ノ奉集ノ故城ハ、今ノ盛京奉天府承德縣ノ東南ニ在リ。通典邊防高句麗ノ處ニ「（貞觀）二十一年、李勣復大破高麗於南蘇、班師至頗利城、渡白狼黃嵓二水……、問契丹遼源所在、云、此二水更行數里、合而南流、即稱遼水」トアリ。此ノ文ニヨリテ考フレバ、頗利城ハ、南蘇ト小遼水トノ間ニアリテ、盛京ノ東南ニ當レリ。又新唐書高麗傳高宗乾封元年高麗ヲ伐ツ所ニ「以李勣爲遼東道行軍大總管云々、詔獨孤卿雲由鴨淥道、郭待封積利道、劉仁願畢列道、金待問海谷道、並爲行軍總管、受勣節度」、資治通鑑總章元年「八月辛酉、卑列道行軍總管右威衞將軍劉仁願坐征高麗逗留、流姚州」トアリ。陴離頗利畢列ハ、蓋皆同音ノ異譯ニテ、即本文ノ碑麗ナリ。下文ニ烟戶ヲ列記シタル所ニ碑利城トアルモ、此ナルベシ。三國志東夷傳ノ卑離國ハ、馬韓ノ中ニ在リ、晉書東夷傳ニ見エタル稗離國ハ肅愼ノ西北ニ在リ、皆コレト同音ナレドモ、全ク別所ナリ。

躬率ハ、自ラ軍ヲ率キルナリ、住ハ往ノ省畫カ。下文ニモ「住救新羅」トアリ。叵富山負碑ハ、地名ナルベケレドモ、詳ナラズ。鹽水ハ、漢書地理志玄菟郡ノ屬縣ナル西蓋馬ノ原註ニ見エタル鹽難水ノ略稱ニシテ今ノ佟佳江ナリ。丘部洛、洛ハ落ノ省字ニテ、丘陵間ノ部落ナルベシ。馬羊ハ、掠取シタル物ナリ。過駕ハ駕過ノ義ナランカ。力城ハ、晉書地理志平州遼東國八縣ノ中最末ニ力城アリ。蓋遼東東部ノ地ナリ。北豐ハ、魏志齊王本紀正始元年春二月「丙戌以遼東汶北豐縣民流徙渡海、規齊郡之西臨安蕃昌國縣界、爲新汶南豐縣、以居流民」ト見ユ。此ノ縣ハ、晉書地理志ニハ見エザレドモ、宋書夷蠻傳ニ「（元嘉）十五年、（馮弘）復爲索虜所攻、弘敗奔高驪北豐城」、魏書馮跋傳ニ「文通至遼東云々、高麗乃處之於平郭、尋徙北豐」ト見エタリ。二城共ニ、晉ノ初ニハ平州ノ地ナリシガ此ノ時ハ既ニ高句麗ノ地トナリシナリ。方輿紀要簡覽盛京奉天府承德縣ノ處ニ「北豐城在縣西北」トアリ。平道ハ詳ナラザレドモ、遼東ニハ襄平望平ナド平ノ字ノ附キタル地名多ケレバ、其等ノ名ト關係アリゲニ聞ユ。東來、□鄖城、五備猎、孰レモ地名ナルベケレドモ、考ヘ得ズ。田獵ノ獵ハ、古字若クハ高句麗ノ俗字ニテ、田獵ノ義ナルベシ。麗紀小獸林王八年（紀元千三十八年、晉ノ孝武帝太元三年、）「秋九月、契丹犯北邊、陷北部落」、其ノ後十四年、廣開土王元年（紀元千五十二年、晉ノ太元十七年、）「九月、北伐契丹、虜男女五百口、又招諭本國陷沒民口一萬而歸」。麗紀ノ元年ハ、碑文ノ二年壬辰ニシテ、五年乙未ヨリ三年前ニ當リ、年ハ合ハザレドモ、契丹ノ征伐ハ、即此ノ鹽水ノ役ニシテ、碑麗ハ、此ノ時契丹ノ屬部ナリケン。

第二節ニ曰ク、「百殘新羅、舊是屬民、由來朝貢、而倭以來卯年來渡海、破百殘□□斷羅、以爲臣民、以六年丙申、王躬率水軍、討科殘國、軍□□首攻取壹八城、臼模盧城、若模盧城、幹卷利城、□□城、閣弥城、牟盧城、弥沙城、□舍蔦城、阿旦城、古利城、□利城、雜弥城、奥利城、勾牟城、古須能羅城、夏□國、□□城、分而能羅城、琢城、□□城、□□城、豆奴城、沸八那利城、弥鄒城、也利城、大山韓城、掃加城、敦拔城、□□城、□婁賣城、散那城、□□城、細城、牟婁城、弓婁城、蘇灰城、燕婁城、析支利城、巖門至城、林城、□□城、□□城、□利城、就鄒城、□拔城、古牟婁城、閏奴城、昌奴城、彡穰城、□□城、□□盧城、仇天城、□□□、進至其國城、賊不服氣、敢出交戰、王威赫奴、渡阿被水、遣刾迫城横城、□□城、便國城、百殘王困逼、獻□男女生白一千人細布千匹、歸王自誓、從今以後、永爲奴客、太王恩赦□迷之愆、錄其後順之誠、於是□五十八城村七百、將殘王弟並大臣十人、旋師還都。

百殘ハ、横井忠直氏ノ説ニ「百殘新羅ト並ベ稱スルヲ以テ觀レバ、百濟國タルコト疑ヒナシ。殘濟共ニ、方言ヲ譯シタルモノニテ、別ニ意義ナシ。三國志東夷傳ニ伯濟國トアリ。既ニ伯ノ百タルヲ知ラバ、殘ノ濟タルモ疑フ可キニ非ズ」ト云ヘルニ從フベシ。

百濟新羅ノ句麗ニ朝貢セル事、何書ニモ見エズ。麗濟ハ、本兄弟ノ國ニシテ、互ニ和親シケルガ故ニ、濟王餘慶ノ魏ニ上レル表ニ「臣與高句麗、源出扶餘、先世之時、篤崇舊欵、其祖釗輕廢隣好云々」ト云ヘリ。濟紀責稽王元年、麗王ノ倭寇ヲ慮リ、阿旦城蛇城ヲ修メテ、之ニ備ヘタル事アレドモ、兵ヲ交フルニ至ラズシテ止ミシガ、麗王釗ノ、自ラ釁ヲ開キテ敗死シテヨリ、二國屢兵ヲ交ヘタリ。濟紀近肖古王三十年、（句麗ノ小獸林王五年、晋ノ孝武帝寧康三年、）「高句麗來攻北鄙水谷城陷之、王遣將拒之、不克、王又將大擧兵報之、以年荒不果」。水谷城ハ、一名買旦忽、今ノ黄海道新溪縣ノ南三十里ニ在リ。近仇首王二年、（句麗ノ六年、晋ノ孝武帝太元々年、）「高句麗來侵北鄙」、明年「冬十月王將兵三萬侵高句麗平壤城」、十一月、「高句麗來侵」、辰斯王二年、（句麗ノ故國壤王三年晋ノ太元十一年、）「高句麗來侵」、五年、（句麗ノ六年、晋ノ太元十四年、）「王遣兵侵掠高句麗南鄙」、明年「王命達率眞嘉謨伐高句麗、拔都坤城、虜得二百人」ナドアリテ、百濟ハ、昔ハ高句麗ト兄弟ノ國ナリシガ、今ハ已ニ抗敵ノ國トナレリ。爭デカ屬民トハ云フベケン。新羅ハ、本ヨリ小國ニシテ、麗ノ敵ニハ非ズ。サレドモ土地懸隔セルガ故ニ、二國交通ノ事ハ、麗紀ニモ羅紀ニモ見エザリシガ、奈忽尼師今三十七年（句麗ノ故國壤王九年、碑ノ廣開土王二年、晋ノ太元十七年、）「春正月、高句麗遣使來聘、王以高句麗强盛、送伊湌大西知子實聖爲質」トアルニ至リテハ、羅人ノ麗ヲ畏レタルコト、甚明カナリ。サルニテモ、コレハタ小ヲ以テ大ニ事ヘタルノミニテ、舊是屬民ナド云フベキニハ非ズ。然ラバ此ノ二句ハ、蓋史官僭內ノ筆法ニシテ、事實トハ見ルベカラズ。

来卯年ノ来ハ、辛ノ古體ノ字ノ泐ケテ變ジタルナリ。來ニテハ義通ゼズ。又乙丁己癸ノ四字ハ、何レモ来字ト似ザレバ、必辛ノ字ナルベシ。辛卯年ハ、前ノ永樂五年乙未ヨリ逆推スレバ、永樂元年ニ當レリ。韓人ハ、前王ノ末年ヲ以テ新王ノ元年ト立ツル習慣ナリケレバ、此ノ元年ハ、即故國壤土ノ末年ナリ。今永樂元年ト云ハズシテ、干支ノミヲ記シタルハ、其ノ事、開土王即位改元ノ前ニアリシ故ナルベシ。又菅氏ハ、「王ノ親シクアヅカレル事ナラネバ、年號ニ係ケズシテ、干支モテ大方ニ記シヽナリ」ト云ヘリ。百殘ノ下ノ二字ハ、任那又ハ加羅ナド云ヘル國名カ。羅ノ上ノ斤ハ決ク缺ケタルナリ。菅氏ハ、「羅字ノ上ナル二字ハ、擊新ナドアリシナラン」ト云ヘリ。

永樂元年辛卯ハ、紀元千五十一年（晋ノ孝武帝太元十六年、新羅ノ奈勿尼師今三十六年、百濟ノ辰斯王七年、）ニシテ、應神天皇御年三十歲ノ時ナリ。コノ辛卯ノ翌年ナル壬辰ノ年ニ、（第卅三章ニ云ヘル如ク、）紀ノ角ノ宿禰等、百濟ノ辰斯王ノ無禮ヲ責メシニ、百濟人、辰斯ヲ殺シテ、罪ヲ謝シタレバ、便チ阿花ヲ立テヽ、王トシタリ。コノ問罪ノ擧ハ、即征討ニシテ、碑文ノ辛卯ノ役ト同事ナルベシ。今碑文ニ據リテ考フレバ、開土王ノ即位モ、皇軍ノ討伐モ、（隨テ辰斯王ノ死モ阿花王ノ即位モ、）皆辛卯ノ年ナルヲ、麗紀濟紀ニ翌年壬辰ト爲シタルハ、三國ノ古記ニ既クヨリ年紀ヲ一年誤リタルナリ。日本紀ハ百濟記ニ依リテ、干支ヲ定メタルガ故ニ、又其ノ誤リヲ承ケテ、四將ノ征討ヲ壬辰ノ年ニ記シタリ。菅氏ハ、此ノ時ノ事情ヲ推測シテ、「失禮トハ、其義ヲ詳ニセザレドモ、或ハ朝貢ヲ闕キ、或ハ叛逆ヲ謀リシナドノ類ヲイヘルナラン。若コノ失禮ノ、タヾカリソメノ事ナラマシカバ、天朝ニテ四人ノ宿禰ニ仰セテ、其无禮ヲ嘖讓シメ給ヒ、其國ニデモ、亦、其ヲ恐レテ殺王謝之トマデニ深キ罪ノアルベキヤハ。故ニ紀ニ記サレタル事ドモニ、コノ「破百殘□□斤羅、以爲臣民」ト云ヘルヲ合ハセテ、ツラ〳〵當時ノアリサマヲ想像ルニ、辰斯王ハ、モト簒奪ノ主ニテ、天朝ノ御覺エモヨカラザリシニヤ、王モ亦、年頃心安カラズ、竊ニ新羅ト謀ヲ協ハセテ叛キタリシニヨリ、紀ノ角ノ宿禰等ヲ兩國ニ遣ハサレテ、トモニ其罪ヲ問セ給ヒシナルベシ。サルヲ紀ニハ百濟ノ事

ノミ記サレテ、一語ダモ新羅ノ事ニハ及バレズ。其ハ、ヒトリ此ノミナラズ、新羅ニアリテハ、必ズシモサルベキ事ヲモ、紀ニハ大抵略カレタリ。タマ／＼コノ辛卯ノ事ノ如キハ、他ノ關係アルニヨリ、推シテ考ヘラルヽナリ。蓋紀ヲ修メラレシ時、新羅ニハ材料トスベキ書ノ乏シカリシ故ナラン」ト云ヘリ。

六年丙申ハ、紀元千五十六年晉ノ太元二十一年、新羅ノ奈忽尼師今四十一年、百濟ノ阿莘王五年、應神天皇御年三十五歳ノ時ナリ。王親率水軍ハ、蓋鴨綠江ヲ下リテ漢江ニ溯レルナリ。百濟ノ國都ハ、近肖古ノ時南漢山ヨリ北漢山ニ徙レリ。北漢山ハ、即今ノ京城ノ地ニシテ、南ハ漢江ニ臨ミ、水路ノ便アリ。討科ハ、討ジテ利アリト云ヘル義カ。菅氏ハ、「科ハ、科ノ省畫ニテ、討科ハ其國ニテ討罰ノ義ニ用キシ一種ノ語ナラン」ト云ヘレドモ、前後ノ文ヲ見ルニ、立刀ハ皆刂ト書キタレバ、科ハ、即利ノ字ニシテ、科ニハ非ズ。殘國ハ、百殘國ノ略ニシテ、下文ニ百殘王ヲ殘王ト云ヘルモ、同ジ例ナリ。壹八城以下攻メ取リタル城名ヲ列記シタルニ、往々泐字アリテ、其數詳ナラザレドモ、大凡五十四城ナラン。其ノ中閣弥城ハ、麗紀濟紀ニ關彌城ト記シタル所ニシテ、關ハ、閣ヲ寫シ誤レル者ナルベシ。牟盧城ハ、魏志ニ見エタル馬韓ノ莫盧國ノ故地ニヤ。阿旦城ハ、濟紀責稽王元年「高句麗伐帶方、帶方請救於我云々、遂出師救之、高句麗怨、王慮其侵寇修阿旦城蛇城備之」トアレバ、漢江近傍ノ地ナルベシ。古利城ハ、馬韓ノ古離國ノ故地カ。爨弥城ハ、東覽ノ逃彌忽カ。坡州牧ノ沿革ニ「瑞原郡、本高句麗逃爾忽縣、爾一作彌新羅改峯城、爲交河郡領縣云々」ト見エタル所ニテ、今ハ坡平縣ト合シテ、坡州ト爲レリ。彌鄒城ハ、濟紀ニ彌鄒忽ト云ヒ、始祖溫祚ノ兄沸流ガ居リシ處ニシテ、今ノ仁川府ナリ。東覽仁川都護府ノ沿革ニ「本高句麗買召忽縣一云彌趨忽」其ノ郡名ニ「彌趨忽趨一作鄒」トアリ。忽ハ、句麗ニテ地名ニ附クル語尾ナリ。濟紀ニハ、省キテ彌鄒トモ云ヘリ。□婁賣城ハ、東覽ノ內爾米ニ似タリ。揚州牧ノ古跡ニ「沙川廢縣在州北三十里、本高句麗內乙買、一云內爾米、新羅改沙川、爲堅城郡領縣、高麗顯宗九年屬揚州本朝因之」ト見エタリ。其ノ他ノ諸城ハ、物ニ見當ラズ。當時麗濟ノ形勢ニ由リテ推測スルニ、諸城ノ位置ハ、大抵今ノ京畿ノ西北境ナルベシ。

其國城ハ、百濟ノ國都漢城ナリ。其ノ上ノ泐ケタル所ニハ、進至ナド云ヘル文字アリシナラン。不服氣ハ勢不屈ノ義カ。赫奴ノ奴ハ、怒ノ省筆ナリ。阿被水ハ、詳ナラザレドモ、地理ヨリ云ヘバ、今ノ龍山江ニヤ。水軍陸ニ上リテ、西北ヨリ進ミテ、此ノ江ヲ渡リタルナリ。刻ハ剌ノ古字ナリ。遣刺迫城ハ兵ヲ遣シテ其ノ城ヲ攻撃スルノ義ナラン。男女生白ノ白ハ口ノ字ノ泐ケテ白ノ如クナレルナルベシ。帀ハ、市ノ俗字ナル匝ノ省畫ニテ、卷ナドノ義ニ用ヒタリト見ユ。奴客ハ、當時ノ俗語ニテ、臣隷ノ義ナルベシ。麗紀長壽王五十九年「民奴各等奔降於魏、各賜田宅」トアル奴各ハ、之ト同義ニヤ。迷ノ上ノ泐字ハ、昏狂ナド云ヘル字ナルベシ。於是ノ下ハ、收ノ字若クハ定ノ字カ。五十八城ハ、前ニ列記シタル數ト合ハズ。城名ニ省略セル者アルカ、又ハ前ノ諸城ノ外ニ百濟王ヨリ數城ヲ獻ジタルニヤ。村七百ハ、五十八城ノ管內ノ村數ナルベシ。

コノ丙申ノ戰ハ、韓史ニ見エズ。コレヨリ四年前ナル壬辰ノ年百濟ノ辰斯王八年、晉ノ太元十七年、ニ、濟紀ニ「秋七月、高句麗王談德帥兵四萬、來攻北鄙、陷石峴等十餘城、王聞談德能用兵、不敢出拒、漢水北諸部落多沒焉、冬十月、攻陷百濟關彌城、其城四面峭絶、海水環繞、王分軍七道攻擊、二十日乃拔」トアリ。其ノ翌年癸巳、百濟ノ阿莘王二年、麗紀ニ「秋八月、百濟侵南邊、命將拒之」、濟紀ニ「拜眞武爲左將、委以兵馬事、武王之親舅、沈毅有大略、時人眼之、秋八月、王謂武曰、關彌城者、我北鄙之襟要也、今爲高句麗所有、此寡人之所痛惜、而卿之所宜用心而雪恥也、遂謀將兵一萬、伐高句麗南鄙、武身先士卒、以冒矢石、意復石峴等五城、先圍關彌城、麗人嬰城固守、武以糧道不繼、引而歸」。又翌年甲午、濟紀ニ「秋七月、與高句麗戰於水谷城下、敗績」、麗紀ニ「秋七月、百濟來侵、王率精騎五千逆擊敗之、餘寇夜走、八月、築國南七城、以備百濟之寇」トアリ。又其ノ翌年乙未、即丙申ノ前年、濟紀ニ「秋八月、王命左將眞武等、伐高句麗、麗王談德親帥兵七千、陣於浿水之上拒戰、

我軍大敗、死者八千人、冬十一月、王欲報涓水之役、親帥漢山城勞軍士」トアリ。コノ涓水ハ、平山府ノ猪灘、青木嶺ハ、今ノ松岳ニシテ、開城府ノ北五里ニ在リ。丙申ノ後二年戊戌ノ年（晉ノ安帝隆安二年、百濟ノ阿莘王七年）ニハ、濟紀ニ「王將伐高句麗、出師至漢山北柵、其夜大星落營中有聲、王深惡之、乃止」トアリテ、戰爭トハナラザリキ。此等ノ文ニ據レバ、開土王ノ百濟ニ戰ヘルハ、前後四年ニ渉レル事ナルヲ、碑ニハ、丙申一回ノ役ノ如ク記シタルハ、終末ノ年ヲ擧ゲテ總叙シタルナリ。唯其ノ終末ノ年ハ、丙申ノ年ナルヲ、三國史記ニ乙未ノ年ト爲シタルハ、一年ヲ違ヘリ。又麗軍ノ濟都ニ迫レル事、濟王ノ麗ニ降リテ臣ト稱セシ事ノ、少モ見エザルハ、全ク三國史記ノ疎略ナル所ナリ。サレドモ碑文ハ、其ノ國ノ臣子ノ、先王ノ功業ヲ稱揚セル者ニシテ、幾分カ誇張ノ言アルベケレバ、斟酌シテ見ルベシ。

第三節ニ曰ク、「八年戊戌、敎遣偏師觀帛愼土谷、因便抄得莫□羅城加太羅谷男女三百餘人、自此以來、朝貢論事」。

八年戊戌ハ、紀元千五十八年、（晉ノ安帝隆安二年、新羅ノ奈忽尼師今四十三年、百濟ノ阿莘王七年、）應神天皇御年三十七歳ノ時ナリ。敎ハ、命令ナリ。藩國ノ王、其ノ命令ヲ敎ト稱スルハ、天子ニ詔敕ト稱スルガ如シ。帛愼土谷、莫□羅城、加太羅谷、今皆考フベカラズ。横井忠直氏ハ、「帛愼ハ息愼ニテ、即肅愼ナルベシ」ト云ヒ、菅氏ハ、韓國ノ地名ニハ、加羅安羅多羅等ノ如ク、羅ヲ附クルモノ多シ。此ニ莫□羅加太羅トアルニヨレバ或ハ、任那ナドノ北境ニテモアランカ」ト云ヘリ。論事ハ、事ヲ奏スルノ義ナルベシ。

第四節ニ曰ク、「九年己亥、百殘違誓、合倭和通、王巡下平穰、而新羅遣使白王云、倭人滿其國境、潰破城池、以奴客爲民、歸王請命、太王□後稱其忠□、時遣使還告以□訊」。

九年己亥ハ、紀元千五十九年ナリ。百殘違誓ハ、上ノ歸王自誓トアルニ違ヘルナリ。合倭和通ハ、應神紀「八年春三月、百濟人來朝」ノ註ニ「百濟記云、阿花王立、無禮於貴國、故奪我枕彌多禮及峴南支侵谷那東韓之地、是以遣王子直支于天朝、以修先王之好也」、濟紀阿莘王ノ處ニ「六年夏五月、王與倭國結好、以太子腆支爲質」トアル事ヲ云ヘルナリ。コノ二句ハ、己亥ノ年ヨリ以前ニシテ、開土王ノ七年丁酉ノ事ニ係レリ。王巡下平穰ハ、此ノ年偶國都國内城ヨリ巡行シテ、平壤ニ至レルナリ。穰ハ、壤ト相通ズ。以奴客爲民ハ、新羅ノ臣隷ヲ收メテ、倭ノ屬民ト爲セルヲ云ヘルナリ。太王以下ハ、渺字アリテ、考ヘ難シ。

第五節ニ曰ク、「十年庚子、敎遣歩騎五萬往救新羅、從男居城、至新羅城、倭滿其中、官兵方至、倭賊退□□□□□□□來背息、追至任那加羅、從拔城城即歸服、安羅人戍兵、拔新羅城甖城、倭滿□□□□□□□□□□□□□□□□□九盡臣有尖、安羅人戍兵□□□□□□□□倭潰城大赤□□□安羅人戍兵、昔新羅安錦、未有身來朝貢、□國岡上廣開土境好太王□□□至□□□□潰□□□□朝貢」。

十年庚子ハ、紀元千六十年、應神天皇御年三十九歳ノ時ナリ。住ハ、往ノ省畫ナルコト、前ニモ云ヘリ。男居城ハ、百濟ノ城名ナルベシ。新羅城ハ、新羅ノ國都ナル金城ヲ云ヘルニヤ。倭滿其中ハ、皇軍ノ新羅國境ニ滿チタルナリ。倭賊退ノ下、來背息マデ字闕ケテ考フベカラズ。追至任那加羅ハ、句麗ノ軍、皇軍ノ一隊ヲ追撃シタルナラン。從拔城ハ、何城ナルカ。考ヘ得ズ。新羅城カトモ聞ユレドモ、下文ニ更ニ新羅城トアレバ、サニ非ザルガ如シ。任那加羅安羅ノ事ハ第十四章加羅考ニ云ヘルガ如シ。安羅人戍兵ハ、菅氏ノ考ニ「皇國ヨリ任那ノ鎭メトシテ安羅國ニ置レタル將士ナラン」ト云ヘリ。皇國ノ鎭將ノ安羅ニ駐リケンコトハ、サル事ナガラ、皇國人ヲ安羅人ト云フベキ筈ナケレバ、コハ、安羅人ガ、皇國ノ將帥ノ命ヲ受ケテ、新羅ノ諸城ニ屯戍セル者ナルベシ。皇軍ノ一隊ハ、麗兵ニ追ヒ退ケラレタレドモ、安羅人ハ、屈セズシテ、新羅ノ都城ヲ攻メ取レリ。甖ノ字ハ、詳ナラネドモ、城ノ名ナルベシ。倭滿以下五十六字ハ、當時皇

軍征戰ノ實況ヲ見ルベキ肝要ノ所ナルニ、闕字多クシテ、讀ミ得ザルハ、惜ムベシ。安錦ハ、即羅紀ノ尼師今ノ轉ナリ。尼師今ハ、新羅ノ方言ニシテ、第三代儒理尼師今以來、世々稱ヘ來レル王號ナリ。麗人、之ヲ聞キヒガメテ、にしきんノしヲ略キテ、にきんトシ、又あヲ加ヘテ、安錦（アニキン）ト云ヘルナルベシ。好太王ノ下、字闕ケテ、其ノ義詳ナラザレドモ、文勢ニヨリテ推スニ、昔新羅ノ安錦ハ、身來リテ朝貢シタルコト無カリシニ、國岡上廣開土境好太王ニ至リ、新羅ヲ救ヒテ、倭人潰エ去レルニ由リ、安錦自ラ來リテ朝貢シタリトノ趣ナラン。

第六節ニ曰ク、「十四年甲辰、而倭不軌、侵入帶方界、□□□□□石城□連船□□□□□僕勾□□□□相遇、王憧要截盪剌、倭寇潰敗、斬煞無數」。

十四年甲辰ハ、紀元千六十四年、（晋ノ安帝元興三年、新羅ノ實聖尼師今三年、百濟ノ阿華王十三年、）應神天皇御年四十三歲ノ御時ナリ。帶方界ハ、魏晉ノ帶方故郡ノ界內、即大同江ト漢江トノ間ニ在リ。其ノ大半ハ、美川王以來、句麗ノ地トナリ、南部ノ諸城ハ、百濟ニ屬セシガ丙申ノ役ニ、コレモ、句麗ニ併セラレタリ。皇軍ハ、帶方界ノ何レノ地ニ入リシカ、詳ナラザレドモ、下文ノ石城平穰ノ字ニ依レバ、其ノ北境マデ進ミタルガ如シ。石城ハ、東覽平安道ノ古跡ニ、所々ニ見エ、何レトモ定メ難シ。連船ノ語アルヲ見レバ、皇軍ハ、舟師ヲ用ヒラレタリト見ユ。菅氏ハ、「浿水ノ口ヨリ入リテ、平穰ニ向ヘルナルベシ」ト云ヘリ。王憧ノ憧ノ字、詳カナラズ。菅氏ハ、「憧ハ、幢字ニテ、纛ト音通ヘバ、王ノ軍船ヲ指ス」ト云ヘリ。盪ハ、字典ニ「推盪也、亦動也、亦盪突也」ナドアリ、剌ハ、刺ノ古字ナリ。要截盪刺ハ、跡ヲ斷チ切リテ突キ破ルノ義ナリ。

右ノ九年己亥、十年庚子、十四年甲辰ノ諸役ハ、韓史ニモ國史ニモ更ニ見エズ。菅氏ハ、此ノ時ノ事情ヲ推測シテ、「彼ノ倭人滿其國境トシルシタル倭人ハ、武內宿禰命ノ子葛城襲津彥ナラント思ハルヽ由アリ。此人ハ、父ノ命ト共ニ筑紫ニ下リテ、其ヨリ韓國ニハ趣カレタリケン。サルヲ紀ニハ、五年ノ後ニ記サレシカバ、宿禰ノ命ノ讒言ニアヘル緣故モ、コノ碑文ニ載セタル事ドモ、共ニ明ナラズナリユキタルナリ」トテ、甘美內ノ宿禰ガ讒言ノ事ヲ引キ、「此時ハ、襲津彥ガハヤク兵士ヲ率キテ、韓國ニ渡レル後ナラン。サレバコソ、「裂筑紫、招三韓、令朝於己」ナドイヘル讒言モ、其力ヲ得タルナレ。モシ其形ナカランニハ、讒者ノ何如ニ巧ニイヒタレバトテ、「二人各堅執而爭之、是非難決」トマデ、深キ疑ヒノアルベキヤハ。故ニ襲津彥ハ、父ト共ニ筑紫ニ下レリトハ云ヘルナリ……。サテ紀ニハ、「遣武內宿禰於筑紫、以監察百姓」、又ハ「遣葛城襲津彥、而召弓月之人夫」ト事モナゲニハ記サレタレド、此ノ碑銘ニ「倭人滿其國境」、或ハ「倭不軌、侵入帶方界」ナドアルニ合ハセテ、前後ノ有樣ヲ考フレバ、サル尋常ノ事ニハアラズ。新羅ハ、サキニ百濟ノ辰斯王ト共ニ皇國ニ叛キ、又高麗ハ、我ガ官家ノ國ナル百濟ヲ犯シタル其罪ハ、固ヨリノ事ナガラ、是モ、亦新羅ノ勸メナランナドノ疑ヒ無キニシモアラネバ、新羅高麗ヲ征ケマシテ、永ク禍ノ根ヲ絕チテンナド、內々議ラセ給フ事ノオハシマシタレド、其ハ、タヤスキ事ナラネバ、遂ニ宿禰ノ命ヲバ筑紫ニ下サレテ、其諸政ヲ統ベ掌ラシメ、襲津彥ニハ、衆多ノ將士ヲ副ヘテ、新羅ニ遣サレシコト、コノ後ナガラ宣化天皇ノ朝ニ、大伴ノ狹手彥ノ連ヲ任那ニ遣シテ、其ノ國ヲ鎭メラレシ時、其ノ兄ノ磐ノ連ハ、筑紫ニ留リテ、其ノ政ヲ執ラレシ姿ニゾ似タリケン」ト云ヒ、又應神紀平羣ノ木菟宿禰等ノ精兵ヲ率キテ、新羅ヲ擊チタルハ、十六年ノ役ハ即乙巳ノ年ニシテ、碑文ノ十四年甲辰ノ戰ノ翌年ニ當レルガ故ニ、菅氏ハ、「此ノ十六年ハ、雄略紀ノ例ト同ジク、一年ヲ誤レルモノニテ、實ハ十五年（甲辰）ノ事ナルベシ。襲津彥ハ、高麗ノ、新羅ヲ援ケタルニヨリテ、戰ヒ心ノマヽナラズ、今年マデモ、猶加羅ニ留リタリシカバ、サテコソ、木菟戸田ノ兩宿禰ヲ加羅ニ遣サレシナラメ、サレド兩宿禰ハ、新羅ノ叛ケルハ、モト高麗ノ援ケニヨレリ、高麗ヲ討チテ、其ノ本源ヲ懲シ、並セテ百濟ヲモ救ハヾ、襲

津彦ハ、援ケズトモ、自還ルコトヲ得ンナド、私ニ相議リテ、遙ニ遠キ北方ナル帶方ニハ、打入リタリケン。是モ、其父宿禰ノ命ノ恩ヒガネナリシモ知ルベカラズ。「率弓月之人夫、與襲津彦共來焉」トハ、其後ノ事ナルヲ、合セテコヽニ記シタルモノニテ、是年歸リシト云ヘルニハアルベカラズ」ト云ヘリ。コノ碑文ハ、當時ノ實錄ト見ユルニ、應神紀ノ之ト合ハザルハ、必傳ヘノ誤レルニ由リシコトナルベケレバ、眞ノ事情ハ、コノ推測ノ如クナリシヤモ知ルベカラズ。

第七節ニ曰ク、「十七年丁未、敎遣步騎五萬□□□□□□□□□平壤□□合戰、斬煞湯盡、所穫鎧鉀一萬餘領、軍資器械不可勝數、還破沙溝城婁城還□□□□□□□□□師□城」。

十七年丁未ハ、紀元千六十七年、晋ノ安帝義熙三年、新羅ノ實聖尼師今六年、百濟ノ腆支王三年 應神天皇御年四十六歲ノ時ナリ。菅氏ノ考ニ、「前ニ新羅ヲ救ヘル時モ、步騎五萬トアリ。平穰ハ、本ヨリ己ガ領地ナルニ、亦同數ノ兵ヲ用ヒシハ、此ノ戰モ、タヤスキ敵ナラヌヲ想像ルベシ。平穰ノ上ニ泐字アリテ、敵ハ誰ナルカ、又戰ハ何故ナルカ、共ニ知ルニ由ナケレドモ、前年ヨリノ事ヲ推シテ考フレバ、我ガ御軍ノ他ノ地方ニ退キタルモノ、再タビ機ヲ得テ、平穰ニ攻メ入リ、其城ヲ陷シテ、ソレニ據リタルナラン」ト云ヘリ。平穰ニ據リタルカ、又ハ平穰ノ近傍ニテ戰ヒアリシカハ、今考フルニ由ナケレドモ、此ノ時ノ敵ハ、前年帶方ニ入リタル皇軍ノ外ニハアルマジ。湯ハ、字典ニ「與蘯通」トモ「又與盪同」トモアリ。蘯盪ハ、同字ニテ、盪滌ノ義ナリ。穫ハ、獲ノ省畫ナルベシ。鉀ハ、甲ト同ジ。沙溝城婁城ハ考ヘ得ズ。

第八節ニ曰ク、「廿年庚戌、東夫餘、舊是鄒牟王屬民、中叛不貢、王躬率往諸軍、到餘城、而餘擧國駭□□□□□□□那[旦]□王恩普處、於是旋還、又其慕化隨官來者、味仇婁鴨盧、卑斯麻鴨盧、𢼸立婁鴨盧、肅斯舍[鴨][盧]□□□[鴨]盧、凡所攻破城六十四、村一千四百」

廿年庚戌ハ、紀元千七十年、紀ノ應神天皇御年四十九歲ノ時ナリ。東夫餘ハ、扶餘ノ別部ニシテ、鴨綠江ノ水源ノ邊ニ住ミタル部落ナリ。鄒牟王ノ生國ナル扶餘ハ、即北扶餘ニシテ、扶餘王解夫婁ノ、東海ノ濱ニ遷レリト云ヘル傳說ノ誤非ナル事ハ第九章貊人考ニ述ベタル如クナレバ、コノ東扶餘ハ、解夫婁金蛙ノ國トハ異ナリ。金蛙ノ國ナル北扶餘ハ、後漢書魏志晋書ニ皆傳アリ。晋ノ穆帝永和中、燕王慕容皝ニ滅サレテヨリ後ハ、種民衰散シテ、復國ヲ爲スコト能ハザリキ。然ルニ其ノ後百五十餘年、文咨王三年仁賢天皇六年、齊ノ武帝永明十一年、魏ノ孝文帝太和十七年ニ至リ、麗紀ニ「扶餘王及妻拏以國來降」トアルハ、東扶餘ナルベシ。住ハ、往ナリ。率往諸軍ハ、漢文ノ法ニ協ハザレドモ、其ノ國ノ俗習ニテ、率諸軍往ノ義ニ用ヒシナラン。餘ハ、夫餘ノ略ニシテ、百濟王ノ姓ヲ餘ト云フモ同ジ。擧國ノ下ハ、駢首降服ナドアリケン。王恩普處ハ、横井忠直氏ノ說ニ「恩意ヲ以テ普ク處分スルヲ謂フカ」ト云ヘリ。隋ハ、隨ノ省畫、隨官來ハ、綏撫ノ官ニ隨ヒテ歸降セルナリ。味仇婁以下五鴨盧ハ、城名ナリ。魏志ニ「今胡猶名此城爲幘溝漊、溝漊者、句麗名城也」、又「北沃沮一名置溝婁」トアル溝婁ハ、鴨盧ト音近シ。凡ノ字以下ハ、王ノ攻メ破レル城村ノ數ヲ擧ゲテ、第二段ヲ結ヘルナリ。城六十四ハ、丙申ノ役ノ五十八城ニ夫餘城ト五鴨盧トヲ加ヘタル數ニ正シク合ヘレドモ、村數ハ、丙申ノ役ノ二倍トナリテ、多キニ過ギタルガ如シ。其ノ故ヲ知ラズ。菅氏ノ考ニ、「唐ノ總章元年天智天皇七年此ノ國ノ亡ビシ時ニ、五部百七十六城六十九萬戶アリシ由、通鑑ニ見エタリ。時世ニツレテ、聊ノ沿革增減ハアルニモセヨ、其ノ領地三分ノ一ハ、好太王ノ力ニナリシモノナリ。廣開土境ノ稱、其ノ實ニカナヘリト云フベシ」ト云ヘリ。

第三段ニ曰ク、「守墓人烟戶、賣勾余民、國烟二、看烟三、東海賈、國烟三、看烟五、殷城□、四家盡爲看烟、亐城、一家爲看烟、碑利城、二家爲國烟、平穰城民、國烟一、看烟十、訾連、二家爲看烟、住婁人、國烟一、看烟卌三、梁谷、二家爲看烟、梁城、二家爲看烟、安失連、廿二家爲看烟、改谷、三家爲看烟、新城、

三家爲看烟、南蘇城、一家爲國烟」。

守墓人ノ烟戸ヲ分チテ、國烟看烟ト爲シタルハ、其ノ制詳ナラザレドモ、國烟ハ、主ト爲リテ、看烟ハ、補助セル者ニ似タリ。賣勾余東海賈亐城等皆考フベカラズ。㲉城ハ、三國史記ニ引キタル唐ノ李勣ノ奏文ニ鴨淥水以北未降十一城ヲ擧ゲタル内ニ「新城州本仇次忽或云敦城」トアル所カ。サレドモ、下文ニ「新城三家爲看烟」トアレバ、新城ト敦城トハ、自ラ別所ニテ、李勣ノ奏ニ、敦城ヲ新城ノ一名トシタルハ、誤リカ。碑利城ハ、前文ノ碑麗ナルベシ。平穰城ヲ他ノ諸城ト等シナミニ列記シタルヲ見レバ、當時未ダ東南ノ大鎭トモ爲ラザリシガ如シ。梁谷ハ、魏志毌丘儉傳正始中東征ノ條ニ「勾驪王宮將歩騎二萬人、進軍沸流水上、大戰梁口」トアル梁口ニシテ、麗紀ニハ、梁貊之谷ト云ヘリ。麗紀前後ノ文中ニモ、梁貊ノ名、屢見エタリ。盛京奉天府遼陽州ナル大梁水州ノ北十五里ニ在リテ今太子河ト名ヅクル者ノ上流ニシテ、貊人ノ住メル所ナル故ニ、シカ名ヅケラレタリ。新梁城モ、其ノ水上ノ地ナルベシ。改谷ハ、麗紀西川王十九年「海谷太守獻鯨魚目夜有光」トアル海谷カ。新城南蘇城ハ、晉書前燕後燕載記及麗紀ニ屢見エタル地名ニシテ、新城ハ、今ノ興京ノ北ニ在リ、南蘇城ハ、新城ノ東ニ在リキ。此ノ條ハ、下文ニ「復取舊民一百十家」ト云ヘルモノニテ、國烟十、看烟一百合セテ百十家トナリ、其數合ヘリ、サレバ㲉城ノ下ノ泐字ハ、數字ニ非ズシテ民ナド云ヘル字ナルベシ。

次ニ「新來韓穢、沙水城、國烟一、看烟一、牟婁城、二家、爲看烟、巳比鴨本韓、五家爲看烟、勾牟客頭、二家爲看烟、永底韓一家爲看烟、舍蔦城韓穢、國烟三、看烟廿一、古𡇇能羅城、一家爲看烟、炅古城、國烟一、看烟三、客賢韓、一家爲看烟、阿旦城、雜珍城、合十家爲看烟、巴奴城韓、九家爲看烟、若模盧城、四家爲看烟、若模盧城、二家爲看烟、牟水城、三家爲看烟、幹弖利城、國烟二、看烟二、弥鄒城、國烟七、□利城、三家爲看烟、豆奴城、國烟一、看烟二、奥利城、國烟二、看烟八、須鄒城、國烟二、看烟五、百殘南居韓、國烟一、看烟五、大山韓城、六家爲看烟、農賣城、國烟一、看烟一、閏奴城、國烟二、都烟廿二、古牟婁城、國烟二、看烟八、瑑城、國烟一、看烟八、味城、六家爲看烟、就咨城、五家爲看烟、彡穰城、廿四家爲看烟、散那城、一家爲國烟、那旦城、一家爲看烟、勾牟城、一家爲看烟、於利城、八家爲烟、比利城、三家爲看烟、細城、三家爲看烟」。

新來韓穢ハ、句麗ノ舊民ニ對ヘテ、開土王ノ攻メ取リタル人民ヲ云ヘルナリ。韓ハ、三韓ノ總稱ナレドモ、コヽニテハ、專ラ馬韓ノ故地ナル百濟ノ民ヲ云ヘリ。穢ハ、漢史ニ多ク濊ト書キタレドモ、時トシテ穢トモ書ケリ。此ノ種族ノ事ハ、漢書地理志ニ「玄菟樂浪、武帝時置、皆朝鮮濊貉句驪蠻夷」トアルヲ始メトシテ魏志後漢書ノ東夷傳ニ委シク見エタリ。始メハ漢ノ樂浪郡ノ全土ニ蔓衍シタル種族ト覺シキニ、漢末ヨリコノカタ追々ニ句麗ニ併セラレテ、遂ニハ樂浪ノ東南隅ニテ僅ニ其ノ遺種ヲ認ムル有樣トナリタレバ、韓史ニハ、江原道江陵府ノミヲ以テ濊ノ故地トシ、東覧東考、皆異辭ナシ。サレドモ此ノ碑文ニヨリテ思フニ、開土王ノ百濟ト戰ヒタルハ、帶方ノ南境ナルニ、其ノ捕ヘタル人民ヲ韓穢ト云ヘレバ、開土王ノ頃マデハ、帶方ノ地ニ濊人ノ多ク住ミタリシコト著シ。コヽニ擧ゲタル韓穢ノ地名、總テ三十六アリ。其ノ中ニテ、牟婁城、阿旦城、若模盧城、幹弖利城、豆奴城、奥利城、大山韓城、閏奴城、古牟婁城、彡穰城、勾牟城、細城ノ十二城ハ、皆前ノ丙申ノ役ニ見エ、舍蔦城ハ、前ノ舍蔦城、古□能羅城ハ、古須能羅城、雜珎城ハ、雜弥城、若模盧城ノ重出セル其ノ一ハ、臼模盧城ノ誤リ、弥鄒城ハ、弥鄒城、□利城ハ、古利城、又ハ也利城、須鄒城ハ、就鄒城、瑑城ハ、陽城、散那城ハ、散□城、於利城、比利城ハ、二箇ノ□利城ニシテ、孰レモ丙申ノ役ニ取リタル地ナリ。又勾牟客頭ハ、勾牟城ノ客戸ノ義ニ非ズヤ。其ノ他ノ十餘城ハ、大抵丙申ノ役ノ諸城中、泐ケテ讀メズナリタル者ナルベシ。又牟水城ハ、魏志ナル馬韓ノ牟水國ノ故地、比利城ハ、馬韓ノ卑

離國ノ故地ナラン。南居ハ、南ト男ト音通ヘバ、前文ノ男居城ナルベシ。百殘ノ二字ヲ冠シタルハ、他ノ諸城ハ、句麗ニ入リタレドモ、此ノ城ハ、百濟ノ手ニ殘リテ、唯其ノ民六家ヲ掠メタルノミナルガ故ニテモアランカ。菅氏ハ、「百殘南居韓トハ、蓋シ王城ヨリ南ニ住メル韓人ナルヲ、殊更ニシカ斷リタルモノト思ハル」ト解釋シタレドモ、王城ヨリノ方位ノミヲ言ヒテ、地名ヲ擧ゲズトスルモ、イカヾアラン。閏奴城國烟二ノ下ニ、都烟廿二トアル都ハ、看ノ誤寫カ。前後ノ文ニ依ルニ、國烟看烟ノ外ニ、都烟ト云ヘル者アリトモ思ハレズ。サテ新來韓穢ノ烟戸ノ數ヲ算フルニ、國烟二十七家、看烟百九十三家、合セテ二百二十家ニシテ、下文ノ「取韓穢二百廿家」ト云ヘル數ニ合ヘリ。又舊民百十家ト韓穢二百二十家トヲ合スレバ、三百三十家ニシテ、下文ノ「都合三百卅家」トアルニ合ヘリ。

次ニ「國岡上廣開土境好太王存時教言、祖王先王、但教取遠近舊民、守墓洒掃、吾慮舊民轉當羸省、若吾萬年之後、安守墓者、但取吾躬率所略來韓穢、令備洒掃、言教如此、是以如教令、取韓穢二百廿家、慮其不如法、則復取舊民一百十家、合新舊、守墓石、國煙卅、看煙三百、都合三百卅家、自上祖先王以來、墓上不安石碑、致使守墓人烟戸差錯、惟國岡上廣開土境好太王、盡爲祖先王、墓上立碑、銘其烟戸、不令差錯、又制、守墓之人、自今以後、不得更相轉賣、唯富足之者、亦不得擅買、其有違令、賣者刑之、買人制令守墓」。

此ノ條、文意甚明カナリ。唯「國煙卅、看烟三百」ハ上文ノ烟戸ヲ算フルニ、國煙ハ、舊民十家、韓穢二十七家、合セテ三十七家、看烟ハ、舊民百家、韓穢百九十三家、合セテ二百九十三家ナルヲ、七ナル端數ヲ加除シテ、成數ト爲シタルニテ、實用ニハ不都合ノ事ナレドモ、漢文ニハヨク有ル書方ナリ。自上祖先王以來云々ノ文ニ依レバ、句麗ノ先生ノ墓ニハ、石碑モ無カリシヲ、開土王ニ至リテ、アマタノ碑ヲ立テ、且烟戸ノ制ヲ嚴シク定メタルナリ。麗紀故國壤王九年「三月、下教崇信佛法求福、命有司立國社、修宗廟」トアルヲ、此ノ文ニ合セテ考フルニ、修宗廟ハ即陵墓ヲ修繕シテ、碑ヲ立テタル事ヲ云ヘルニテ、實ハ開土王ノ事ナルヲ、誤リテ故國壤王ノ所ニ記シタルナリ。サテカク陵墓ニ心ヲ用ヒタルハ、佛敎ヲ崇重セル影響ニシテ佛敎ノ行ハレザル以前ハ、陵墓ノ制モ極メテ簡朴ナル者ト見ユレバ、麗紀ニ屢見エタル扶餘ナル太后廟、卒本ナル始祖廟モ、漢制ニ倣ヘル宏壯ナル宗廟ニハ非ザルベシ。

第三十六章　新羅ノ質子

神功紀征韓ノ條下ニ云、「爰新羅王波沙寐錦、即以微叱己智波珍干岐爲質云々」、其ノ攝政五年ノ條ニ云、「春三月癸卯朔己酉、新羅王遣汙禮斯伐、毛麻利叱知、富羅母智等朝貢、仍有返先質微叱許智伐旱之情、是以誂許智伐旱而紿之曰、使者汙禮斯伐、毛麻利叱智等、告臣曰、我王以坐臣久不還、而悉沒妻子爲孥、冀暫還本土、知虛實而請焉、皇太后則聽之、因以副葛城襲津彥而遣之、共到對馬、宿于鉏海水門、時新羅使者毛麻利叱智等、竊分船及水手、載微叱旱岐、令逃於新羅、仍造蒭靈、置微叱智之床、詳爲病者、告襲津彥曰、微叱智忽病之將死、襲津彥使人令看病、即知欺而捉新羅使者三人、納檻中、以火焚而殺、乃詣新羅、次于蹈鞴津、抜草羅城還之、是時俘人等、今桑原、左糜、高宮、忍海、凡四邑漢人等之始祖也」。

微叱己智（ミシコチ）ハ、新羅王子ノ名ナリ。波珍干岐ハ、新羅ノ第四等ノ爵ニシテ、隋書ノ破珍干、韓史ノ波珍湌ニ同ジキコト、第十五章ニ云ヘルガ如シ。紀ノ訓ニハトリカムキトアレドモ、字ノマヽニハチンカンキト訓ムベキニ似タリ、人ノ名ノ下ニ官爵ヲ連ネテ呼ブコトハ、新羅ノ舊俗ニシテ、三國史記ノ列傳ニ多ク見エタリ。皇國ニテ、山蔭ノ中納言、融ノ左大臣ナド云フト同ジサマナリ。宇禮斯伐ハ、釋ノ祕訓ニウレシホツト訓メリ。伐旱ハ、釋ニ「私記曰伐音勃、是上干岐也」トアリ。隋書新羅傳ニ「伊罰干、貴如相國」、韓史ニ伊伐湌、舒

弗邯、又ハ角干ナド云ヘル者ニシテ、第一等ノ爵ナリ。初メ來朝ノ時ハ、波珍湌ナリシガ、後ニ伊伐湌ニ進ミタルナリ。許智伐旱ハ、微叱ヲ略キ、下ノ微叱旱岐ハ許智ヲ略キ、二ツノ微叱智ハ、許ヲ脱シタルナリ。詭許智伐旱而給之ハ、行文穩カナラザレドモ、微叱許智ニ教ヘテ、朝廷ヲ紿カシメタルナリ。大日本史新羅傳ニハ「私微叱許智、而令伴奏曰云々」ト改メテ書ケリ。

鉏（サヒ）ノ海ノ水門ハ、通證ニ「同四十七年曰、至沙比新羅、即此」ト云ヘレドモ、沙比新羅ハ、新羅ノ地名ト聞ユルニ、コヽナルハ、對馬ノ海港ナレバ、己ヅカラ別所ナルベシ。又佐比ハ、新羅ト對馬トノ間ナル海ノ名ニシテ、佐比新羅ハ、新羅ノ南疆ノ鉏ノ海ニ向ヘル所ヲ云ヒ、鉏ノ海ノ水門ハ、對馬ヨリソノ海ニ出ヅル港ト云フ義ニヤトモ思ヘドモ、覺束ナシ。太宰管内志ニハ「鉏可訓佐比、或曰須基、對馬國上縣郡佐渡郷水門村有主基祠」トアリ。蒭靈ハ、通證ニ「私記曰、久散比度加太、字出禮檀弓」トアリ。蹈鞴ノ津ハ、繼體紀ニ多多羅ノ原トアル所ニテ、新井君美ノ史論ニ「今朝鮮東萊縣多大浦也」ト云ヘル、從フベシ。草羅ノ城ハ、釋ノ祕訓ニサワラノサシト訓メリ。雄略紀ニ匝羅之表トアルモ、コノ地ヲ云ヘルニテ、今ノ慶尙道梁山郡ナリ。東覽梁山郡ノ建置沿革ニ「新羅文武王割上州下州之地、置歃良州」トアレドモ、下ニ引ケル三國史記列傳ニ「朴堤上仕爲歃良州干」ト云ヘルハ、實聖尼師今ノ時ノ事ナリ。又羅紀慈悲麻立干ノ六年ニモ「倭人侵歃良城」トアレバ、歃良ハ、古キ名ニシテ、法興王、上州（今ノ尙州）ヲ置キ、眞興王、下州（今ノ昌寧縣）ヲ置キシ前ヨリアリシナリ。城ヲサシト訓ミタルハ、韓國ノ古言ナルベシ。但梁書新羅傳ニ「其俗呼城曰健牟羅」トアルトハ合ハズ。

桑原高宮ハ、和名抄大和ノ國葛ノ上ノ郡ノ郷ノ名ニ見エ、忍海ハ、後ニ大和ノ國ノ郡ノ名トナリ。佐糜ハ、新井氏云「後改佐備、屬河內石川郡」、通證ニハ「葛上郡佐味村」、集解ニ「大和志曰、葛上郡神戶、今曰佐味莊、按徙於新羅沙比所俘之人、故有此名」ト云ヘリ。新羅ニテ俘ヘ來ツル人ドモヲ漢人トシモ云ヘルハ、韓ノ地ニハ住ミタリシカドモ、其ノ祖先ハ、漢人ナリシガ故ナリ。韓ノ地ニハ漢人多ク雜居シタレバ、皇國ニ歸化セシ秦漢ノ裔ト云ヘル氏々モ、大抵韓地ヨリ渡リ來ツルナリ。

姓氏錄左京諸蕃ナル桑原ノ宿禰、大和ノ國諸蕃ナル桑原ノ直ハ、皆「漢高祖七世孫萬德使主之後也」ト見エ、攝津ノ國ナル桑原ノ史ハ、高麗ノ部ニ列ナリタレドモ、「桑原村主同祖、萬德使主之後也」トアレバ、宿禰直ト同祖ニテ、漢人ナリ、山城ノ國ナル桑原ノ史ハ「貊ノ國人漢胷之後也」トアレドモ、漢胷ハ、漢ノ高祖ナドノ誤レルニテ、攝津ナルト同族ナリ。此等ハ、皆桑原ノ邑ニ住ミタル漢人ノ子孫ナルベシ。天武紀朱鳥元年「侍醫桑原村主訶都、授直廣肆、因以授姓曰連」、又續紀文武天皇三年ニモ「詔授內藥官桑原加都直廣肆、賜姓連、賞勤公也」トアルハ、天武紀ト重ナレリ。孰レカ一ツハ誤リナリ。天平寶字二年「大和國葛上郡人從八位上桑原史年足等男女九十四人、近江國神崎郡人正八位下桑原史人勝等男女一千一百五十五人、同言曰、伏奉去天平勝寶九歲五月二十六日勅書、稱內太臣太政大臣之名不得稱者、今年足人勝等先祖、後漢苗裔劉言興幷帝利等、於難波高津宮御宇天皇之世、轉自高麗、歸化聖境、本是同祖、今分數姓、望請依勅一改史字、因蒙同姓、於是桑原史、大友桑原史、大友史、大友部史、桑原史戶、史戶六氏、同賜桑原直姓」。コノ上言ニ、難波高津ノ宮（仁德天皇）ノ御世ト云ヘルハ、時代違ヘルニ非ズ。ソノ由ハ、後ニ云フベシ。轉自高麗歸化聖境ト云ヘルハ、イカヾ。新羅ヨリトコソ有ルベキナレ。劉言興等ハ、サキニ句麗ヨリ新羅ニ徙リテ、ソコニテ皇軍ニ俘ヘラレタルニヤ。又ハ桑原ノ邑ノ漢人ハ、句麗ヨリ直ニ歸化シタルニテ、草羅城ノ俘人トハ別ナルヲ、其ノ來朝ノ時代ノ近キニヨリテ、桑原ノ邑ノ漢人モ、俘人ノ後ナリト傳ヘタルニヤ。又ハ句麗ヨリ直ニ參リタル桑原氏ト俘人ノ後ナル漢人ト二族アリテ、共ニ桑原ノ邑ニ住ミタルニヤ。孰レトモ定メ難シ。續紀天平神護二年「左京人從八位下桑原連眞島、右京人外從五位下桑原村主足牀、大和國人少初位上桑原村

主岡麻呂等四十人、賜姓桑原公」、神護景雲二年「近江國淺井郡人從七位下桑原直新麻呂、外大初位下桑原直訓志必登等、賜姓桑原公」ナド見エ。又桑原ノ直ニナレル六氏ノ中ナル大友ノ史ハ、續紀天平十五年「免宮奴斐太從良、賜大友史姓、斐太、始以大坂沙治玉石之人也」ナドモ見エタリ。史戸氏ハ、姓氏錄ニモ見エテ、攝津ノ諸蕃ニ「史戸、漢城人韓氏劉德之後也」トアリ。漢城ハ、百濟ノ北漢山城ニテ、後ニハ句麗ニ取ラレタレドモ、應神仁德ノ御世ノ頃ハ、百濟ノ都城ナリケレバ、史戸氏ノ先ハ、百濟ヨリ參リタルガ如シ。コレモ、山城國ノ桑原ノ史ニ同ジク、字ノ誤レルニヤ。續紀神龜元年「史部蟲麻呂、獻私穀於陸奥國鎭所、授外從五位下」トアル史部ハ、コレニ同ジヤ異ナリヤ。民族志ニ云「聖武帝時、有備中都宇郡人史部置島等東大寺正倉院文書醍醐帝時、有兵部少錄史戸忠則、類聚符宣鈔、」

又續紀延曆三年七月「右少史正六位上高宮村主田使、及同眞木山等、賜姓春原連」トアル高宮氏ハ、高宮邑ニ住ミタル漢人ノ裔ナルベシ。同四年三月、「正六位上春原連田使、從七位下眞木山等、改春原連爲高村忌寸」、後紀弘仁二年「右京人高村忌寸田使等、賜姓宿禰」、姓氏錄右京諸蕃ニ「高村宿禰、魯恭王之後靑州刺史劉琮王之後也」トアリ。魯ノ恭王ハ、漢高祖ノ

忍海ノ邑ニ住ミタル漢人ノ裔ハ、肥前ノ國風土記ニ「三根郡漢部鄕、昔者來目皇子爲征伐新羅、勅忍海漢人將來居此村、令造兵器、因曰漢部鄕」、續紀養老六年ニ、伊勢ノ國人忍海ノ漢人安得、近江ノ國人忍海部ノ太須、播磨ノ國人忍海ノ漢人麻呂等、雜戸ノ號ヲ除キテ公民ニナレルコト見エタル、コレナルベシ。又養老三年「忍海手人廣道、賜久米直姓、除雜戸號」、神龜元年「忍海手人大海等兄弟六人、除手人名、從外祖父從五位上津守連通姓」、氏族志忍海漢人氏ノ條ニ「聖武帝時、有忍海漢部眞麻呂、備中人、東大寺正倉院文書」ナドアルモ、其ノ漢人ノ族ナルベシ。坂上系圖ニ引ケル姓氏錄ニ、高宮ノ村主、忍海ノ村主、佐味村主アリテ、三邑ノ漢人ハ、東ノ漢氏ノ族ナルガ如シ。サレドモ此等ノ漢人ハ、東ノ漢ト別族ナルコト、紀ニ明文アレバ、系圖ニ見エタル三氏ハ、疑ハシ。東漢氏ノ衆盛ナルヨリシテ、他ノ漢人モ自ラ其ノ族ナリト云ヘルカ、然ラズバ、其ノ衆盛ヲ誇ランガ爲ニ、他ノ漢人マデモ己ガ族ニ加ヘタルナルベシ。

サテ新羅ノ質子ノ逃ゲ歸リシコトハ、三國史記ニ委シク見エタレバ、ソノ文ヲコヽニ引カン、列傳第五ニ云「朴堤上、或云毛末 始祖赫居世之後、婆娑尼師今五世孫、祖阿道葛文王、父勿品波珍湌、堤上仕爲歃良州干、先是實聖王元年壬寅、與倭國講和、倭王請以奈勿王之子未斯欣爲質、王嘗恨奈勿王使己質於高句麗、思有以釋憾於其子、故不拒而遣之、又十一年壬子、高句麗亦欲得未斯欣之兄卜好爲質、大王又遣之、及訥祇王即位、思得辨士往迎之、聞水酒村干伐寶靺、一利村干仇里、廼利伊村干波三人有賢智、召問曰、吾弟二人、質於倭麗二國、多年不還、兄弟之故、思念不能自止、願使生還、若之何而可、三人同對曰、臣等聞歃良州干堤上剛勇而有謀、可得以解殿下之憂、於是徵堤上使前、告三人之言而請行、堤上對曰、臣雖愚不肖、敢不唯命祇承、遂以聘禮入高句麗、語王曰、臣聞交隣國之道、誠信而已、若交質子、則不及五霸、誠末世之事也、今寡君之愛弟在此、殆將十年、寡君以鶺鴒在原之意、永懷不已、若大王惠然歸之、則若九牛之落一毛、無所損也、而寡君之德大壬也、不可量也、王其念之、王曰諾、許與同歸、及歸國、大王喜慰曰、我念二弟如左右臂、今只得一臂、奈何、堤上報曰、臣雖奴才、既以身許國、終不辱命、然高句麗大國、王亦賢君、是故臣得以一言悟之、若倭人不可以口舌諭、當以詐謀、可使王子歸來、臣適彼、則請以背國論、使彼聞之、乃以死自誓、不見妻子、抵栗浦、汎舟向倭、其妻聞之、奔至浦口、望舟大哭曰、好歸來、堤上回顧曰、我將命入敵國、爾莫作再見期、遂徑入倭國、若叛來者、倭王疑之、百濟人前入倭讒言、新羅與高句麗謀侵王國、倭遂遣兵邏戍新羅境外、會高句麗來侵、並擒殺倭邏人、倭人乃以百濟人言爲質、又聞新羅王囚未斯欣堤上之家人、謂堤上實叛者、於是出

師將襲新羅、兼差堤上與未斯欣爲將、兼使之鄕導、行至海中山島、倭諸將密議、滅新羅後、執堤上未斯欣妻孥以還、堤上知之、與未斯欣乘舟遊、若捉魚鴨者、倭人見之、以謂無心、喜焉、於是堤上勸未斯欣、潛歸本國、未斯欣曰、僕奉將軍如父、豈可獨歸、堤上曰、若二人共發、則恐謀不成、未斯欣抱堤上項、泣辭而歸、堤上獨眠室內、晏起、欲使未斯欣遠行、諸人問、將軍何起之晚、答曰、前日行舟勞困、不得夙興、及出、知未斯欣之逃、遂縛堤上、行船追之、適煙霧晦冥、望不及焉、歸堤上於王所、則流於木島、未幾使人以薪火燒爛支體、然後斬之、大王聞之哀慟、追贈大阿飡、厚賜其家、使未斯欣娶堤上之第二女爲妻、以報之、初未斯欣之來也、命六部遠近迎之、及見、握手相泣、會兄弟極娛、王自作歌舞、以宣其意、今鄕樂憂息曲、是也」。

未斯欣ハ、神功紀ノ微叱許智ナリ。攝政五年ノ條ニ微叱許智伐旱トアルニ據レバ、滯在ノ間ニ伐旱ニ進ミタリシガ如ク聞ユレドモ、羅紀ニハ訥祇麻立干十七年（紀元千九十三年）「未斯欣卒、贈舒弗邯」トアリテ、舒弗邯ハ死後ニ贈ラレタルナリ。韓史ノ文ニテハ、朴堤上ハ、叛亡者ト詐レル趣ナレドモ、國史ニハ朝貢ノ使者トセリ。孰レカ是ナルヲ知ラズ。韓史ニハ堤上一人ノミヲ記シタルニ、國史ニハ三人ノ名ヲ擧ゲタルハ、記載ノ委シキナルベシ。三人ノ中ニハ、朴堤上ト云ヘル者アルベケレドモ、名稱轉訛シテ、明瞭ナラズ。毛麻利叱智等竊分紅云々ノ文ハ、首謀者ノ名ヲ擧ゲタルニ似タレバ、是即堤上歟。又按フニ水酒村ノ干伐寶袜ノ名ハ、毛麻利叱知ノ毛麻ニ近ク、一利村ノ干仇里ノ名ハ、汙禮斯伐ノ汙禮ニ近ク、硒利伊村ノ干波老ノ名ハ、富羅母智ノ富羅ニ近ク聞ユレバ、三干ハ、實ハ堤上ト共ニ來朝シタルヲ、國史ニハ三干ノ名ノミヲ記シ、韓史ニハ堤上ノミ海ヲ渡レリト傳ヘタルニヤアラン。栗浦ハ、東覽ニ見エズ。東覽慶州府ノ山川ニ「鵄述嶺、在府南三十六里」、其ノ祠廟ニ「神母祠、在鵄述嶺上、神母、即朴堤上妻也、堤上死於倭國、其妻不勝其慕、登鵄述嶺、望日本、痛哭而終、遂爲鵄述嶺神母、其村人至今祀之」トアルハ、松浦ノ佐用媛ノ談ト稍似タル事ナリ。韓史ニ行至海中山島トアルハ、國史ニ據レバ、對馬ナル鉏ノ海ノ水門ナリ。襲津彥ノ命ハ、毛麻利比智等ニ誑カレタルヲ知リテ、直ニ之ヲ捉ヘテ、檻中ニ納レテ焚キ殺シタルヲ、韓史ニ「歸堤上於王所、則流於木島云々」トアルハ、傳聞ノ訛リナリ。襲津彥ノ命ノ新羅ニ上陸シタル時、南境ノ諸城ノ中ニテ歃良城ヲシモ攻メタルハ、堤上ノ治メ居タル所ナリシ故ナルベシ。韓史ハ、初ニ「於是出師、將襲新羅云々」トマデ記シナガラ、皇軍ノ攻撃ヲ言ハザルハ、疎漏ナリ。此等ノ差異アルハ、古史ノ常ナレドモ、記事ノ大體ニ於テハ、能ク符合スレバ、同ジ事跡ヲ記シタル者ナルコト、疑ヒナシ。然ルニ國史ハ、神功皇后攝政五年ニ記シ、羅紀ハ、訥祇麻立干二年戊午ノ事トシテ、年代ニ二百十三年ノ差アルハ、韓史ノ誤リト見ルベキカ、國史ノ誤リト見ルベキカ。

新井白石ハ、韓史ヲ誤レリトシ、其ノ史論ニ「初新羅以微叱己智爲質子、是歲癸亥魏正始四年也、訥祇以丁巳立、實是晉義熙十三年也、世之相後百七十五年、是其訛一也、東史以朴堤上爲婆娑王五世孫（輿地勝覽亦同）即據東史、婆娑王以漢建初五年庚辰立、在位三十三年、以永初六年壬子死、自漢永初、至晉義熙、凡三百餘年、夫父子相繼、三十年爲一世、常理也、果使其爲婆娑王五世孫、豈有得爲訥祇時人也耶、是其訛二也、據國史、及訥祇立、稱藩大國、（北史云、新羅百濟、以倭爲大國、並仰之、是也、）四十二年、（訥祇當國、據舊事記日本紀、直允恭安康雄略之間、若據古事記、則歷仁德履中反正允恭安康雄略之六朝矣）歸誠效順、奉職無間、我安有聲罪致討之事哉、是其訛三也、凡此三者、其事昭晰不待深辨」ト云ヘリ。白石ハ、古事記ニ見エタル仲哀天皇ノ崩リマセル壬戌ノ年ヲ魏ノ正始三年（紀元九百二年）ト推定セシガ故ニ、其ノ翌年癸亥ヲ以テ微叱己智來朝ノ歲トナシテ、訥祇ノ即位ニ至ルマデ百七十五年ト算セリ。サレドモコノ壬戌ノ年ハ、前ニ屢云ヘル如ク、紀元千二十二年（晉ノ哀帝隆和元年）ナレバ、羅紀實聖尼師今元年、（紀元千六十二年、晉ノ安帝元興元年）「與倭國通好、以奈勿王子未斯欣爲質」トアルマデ、其ノ差ハ、僅ニ四十年ナリ、何レニシテモ、差ハ差ナレドモ、直ニ之ヲ以テ韓史ノ訛リト爲スベキ理ナシ。又五世ノ孫ハ、三百餘年ノ後ニ生存スベカラザルハ、サル事ナガラ、第五章ニ述ベタルガ

如ク、新羅ノ朴氏昔氏ノ世ニハ、羅紀ノ年紀ニ著シキ延長アリト覺シクテ、婆娑王ノ時代モ、必三百餘年前ニ在リトハ信ジ難ケレバ、朴堤上ハ、婆娑王ノ五世ノ孫ナリトモ、訥祇ノ時ノ人タルコトヲ得ズトハ定ムベカラズ。及訥祇立、四十二年、奉職無間ト云ヘルモ然ラズ。羅紀ニ據レバ、訥祇麻立干十五年（紀ノ允恭天皇二十年、記ノ履中天皇四年）、「倭兵來侵東邊、圍明活城」、同二十四年、（紀ノ允恭天皇二十九年、記ノ同天皇三年）、「倭人侵南邊」、「又侵東邊」、同二十八年、（紀ノ允恭天皇三十三年、記ノ同天皇七年）、「倭兵圍金城十日」ナドアリ。又仁德紀ニモ、新羅朝貢セザルニ由リテ、的ノ戸田ノ宿禰ヲ遣シテ責問シタルコトアリ。田道ノ公ヲ遣シテ討伐シ、四邑ノ人民ヲ虜ニシテ歸リシコトアリ。此ノ二役ハ、紀ノ年代ニテハ、新羅ノ訖解王奈忽王ノ時ニ當レドモ、記ノ崩年干支ニ據リテ、眞ノ年紀ヲ求ムレバ、皆訥祇ノ時ニ當レルナリ。訥祇ノ皇朝ニ仕奉ルコト、新羅ノ他王ニ比ブレバ、稍恭順ナレドモ、百濟ノ奉職無間ガ如キニ非ズ。何ゾ聲罪致討之事ナシト云フベケン。然ラバ白石ノ其事昭晰ト云ヘル者ハ、一モ韓史ノ訛リヲ證スベキコトナシ。未斯欣ハ、奈勿王ノ子ニシテ、訥祇王ノ親弟ナリ。其ノ女ハ、訥祇王ノ子慈悲王ノ妃ト爲リテ、炤智王ヲ生ミタレバ、慈悲王ニハ、叔父ニシテ、且舅ナリ。炤智王ニハ外祖父ナリ。カク系統ノ顯著ナルガ上ニ、奈勿以後諸王ノ年紀ノ疑ヒナキコト、第十三章新羅考ニ言ヘル如クナレバ、未斯欣ノ來朝ハ、實聖王ノ時ニシテ、其ノ逃歸ハ、訥祇王ノ時ナルコト、韓史ニ記セル所ヲ以テ正シトスベシ。

神功紀ニ微叱己智ヲ遣セル新羅王ノ名ヲ波沙寐錦（ハサムキン）ト書キタルニツキ、錦ヲにしきト訓讀シテ、婆娑尼師今ノ轉ナルベシト云フ説アレドモ、時代大ニ違ヘリ。白石ハ「波沙寐當讀如伐湌、錦當讀云尼師今……、初伐休尼師今太子骨正先死、及伐休死、太孫助賁尙幼、次子伊買之子奈解稍長、國人立之、奈解以女妻助賁、奈解將死、遺言以其壻助賁爲嗣、其俗呼王族爲伊伐湌、助賁以王族爲君、時稱曰伐湌尼師今也」ト云ヘレド、强解ニ近シ。未斯欣ヲ遣ハセル者ハ、助賁ナラバ、未斯欣ト好ハ、奈解ノ子カ。奈解ハ、助賁ニ恩德コソアレ助賁ニ怨ヲ抱カル、理ナシ。助賁ニ嗣ギタル者ハ、其ノ弟沾解ニシテ、奈解ノ子ニ非ザレバ、「我念二弟、如左右臂」等ノ語、皆通ゼズ。且王族ヨリ君トナレル者ヲ伐湌尼師今ト稱スベクバ、實聖王ガ、奈勿王ノ從弟ニテ其ノ位ヲ繼ギタルヲ稱セリトモ解セラルベシ。畢竟波沙寐錦ノ名ハ、傳聞ノ訛謬ニ出デ、穩當ノ解ヲ得難シ。唯時代ニ由リテ推測スレバ、神功皇后ニ降服シタルハ、奈勿王ニシテ、質子ヲ送リタルハ、實聖王ナルヲ、紀ハ、之ヲモ征韓ノ條下ニ記シタルハ、編者ノ錯誤ナリ。蓋紀ノ編者ハ、質子ノ事跡ヲ得タレドモ、其ノ干支ヲ失ヒタルニ由リテ、已ムコトヲ得ズシテ、事ノ序ニ征韓ノ條下ニ記シタルナラン。

蓋新羅ハ、桀黠ニシテ制シ難ク、神功皇后ノ撻伐ヲ蒙リタレドモ、未ダ不臣ノ跡アリシガ、廣開土王ノ碑ニ見ユル如ク、永樂元年辛卯（應神天皇御年三十歲、晉ノ孝武帝太元十六年、新羅ノ奈勿王三十六年）ニ至リテ、皇朝ノ武威、益諸韓ニ振ヒ、永樂十年庚子（應神天皇御年三十九歲、晉ノ安帝隆安四年、新羅ノ奈勿王四十五年）ニハ「安羅人拔戍兵新羅城」トアリ。コヽニ新羅全ク懾服シテ、其ノ翌々年ナル實聖王ノ元年壬寅ニハ、遂ニ質子マデモ送レルナリ。紀ニ據レバ實聖王元年壬寅ヨリ訥祇王ノ二年戊午マデ十七年ノ間ナリ。應神天皇ノ崩御ハ、第三十三章ニ云ヘル如ク、戊午ノ年ト覺シケレバ、質子ノ逃レ歸リシハ、即其ノ年ニシテ、其ノ留侍ノ間ハ、全ク應神天皇ノ末年ナルヲ、紀ニハ、其ノ初年、即神功皇后攝政ノ時ニ記セリ。然ラバ紀ノ誤リハ、實ハ只同ジ御世ノ末年ノ事ヲ其ノ初年ニ移セルノミノ事ナリ。サテ桑原ノ史年足等ガ表ニ「劉言興等幷帝利、仁德天皇ノ御世ニ歸化セリ」ト云ヘルハ、時代違ヘルガ如クナレドモ、襲津彥ノ命ノ、漢人ヲ俘ニシテ還リ渡リ來ツルハ、應神天皇ノ崩リマセル後ナルベク、劉言興ガ始メテ仕奉レルハ、仁德天皇ナルベケレバ、其ノ御世ニ歸化セリト傳ヘタルハ、時代違ヘルニ非ズ。

第三十七章　仁德天皇ノ御世

仁德天皇ノ初ノ段ニ、額田ノ大中彥ノ皇子、倭ノ屯田ノ司出雲ノ臣之祖淤宇ノ宿禰ト其ノ屯田ヲ爭ヒシトキ、大鷦鷯ノ尊、倭ノ直祖麻呂ニ其ノ屯田ノ所屬ヲ問ヒ給ヒシカガ「對言、臣之不知、唯臣弟吾子籠知也、當是時子吾籠遣於韓國而未還、爰大鷦鷯尊謂淤宇曰、爾躬往於韓國、以喚吾子籠、其兼日夜而急往、乃差淡路之海人八十爲水手、爰淤宇往于韓國、即率吾子籠而來之……」トアリ。吾子籠ノ韓國ニ遣サレタルハ、應神天皇ノ御世ノ末ナルベシ、但其ノ韓國ハ、韓ノ何國ナルカ、又イカナル勅命ヲ受ケテ往キタルカ、スベテ知ルベカラズ。倭ノ直ハ、太祖ノ功臣椎根津彥ノ命ノ裔ナリ。

次ニ「十一年冬十月、掘宮北之郊原、引南水以入西海、因以號其水曰掘江、又將防北河之澇、以築茨田堤……是歲、新羅人朝貢、則勞於是役」。

十一年ハ、何ノ干支ノ年ニ當レルカ、考フベカラズ。仁德天皇ノ御世ハ、應神天皇ノ崩リマセル戊午ノ年ノ翌年ヨリ數ヘテ、古事記コノ天皇ノ段ニ「丁卯年八月十五日崩也」トアルマデハ、僅ニ九年ノ間ナルヲ、紀ハ、在位八十七年ニ引キ延バシテ、其ノ御世ニアリシ事ドモヲ程ヨク其ノ間ニ割リ附ケタルナレバ、コノ十一年ノ事ドモヲ程ヨク其ノ間ニ割リ附ケタルナレバ、コノ十一年ノ事、又次々ニ引ケル事ドモハ、何モ唯紀元千七十九年（晉ノ恭帝元熙元年、新羅ノ訥祇麻立干三年、百濟ノ腆支王十五年、句麗ノ長壽王七年）ヨリ千八十七年（宋ノ文帝元嘉四年、新羅ノ訥祇麻立干十一年、百濟ノ久爾辛王八年、毘有王元年、長壽王十五年）マデノ間ニアリト考ヘ置クベキナリ。

コノ十一年ノ事ハ、古事記ニ、ハ「役秦人、作茨田堤……、又掘難波之堀江而通海」トアリテ、新羅人ヲ役フトハナシ。秦人トハ、秦ノ造ノ祖弓月ノ君ガ率テ參リタル民ドモヲ云フナリ。外國朝貢ノ使トモアル者ドモヲ、イカニ蕃國ナレバトテ、土掘人足ニ用ヒラル丶ハ、第三十三章ニ菅政友氏ノ說ヲ引キタル如ク、誠ニ似合シカラザル事ナレバ、記ニ、「秦人ヲ役テ、」トアル方、實ナルベシ。新羅人ヲコノ役ニ用フト云ヘルハ、應神天皇ノ御世ノ事ト混ジタルナリ。

次ニ「十二年秋七月辛未朔癸酉、高麗國貢鐵盾鐵的、八月庚子朔己酉、饗高麗客於朝、是日集羣臣及百寮、令射高麗所獻之鐵盾的、諸人不得通的、唯的臣祖盾人宿禰鐵的通焉、時高麗、客等見之畏其射之勝巧、共起拜朝、明日美盾人宿禰而賜名曰的戸田宿禰」。

的ハ、いくはト訓メリ。記傳（二十二ノ三十六丁）ニ云「伊久波に的ノ字を書ことは、書紀に射を伊久布とも伊久比須とも訓るは、射は、的を射るわざを云なれば、被射の意にて、的をも伊久波と云にや。又伊久波は、本より的の古名にて、射は、的射と云言にもあるべし」。盾人ノ宿禰ハ、記傳（同三十七丁）ニ云「今按に、此ノ人初メよりの名、盾人にて、此ノ時に戸田と賜へる如くあるは、誤ならむか。初ノ名戸田にて、此ノ時に盾人とは賜へるなるべし。射鐵ノ的とのみはあれども、かの鐵ノ盾をも共に射通せるに因て賜へる名とこそ聞えたれ。さて應神紀十六年の處に既に的ノ戸田ノ宿禰とある的は、後に賜へる姓を前にも及ぼして記せるにて、戸田は、當時の名なりけむ」。

帝國大學人類學教室ニ石上神宮鐵楯ノ圖アリ。句麗ノ奉レル者モ、コノ類ナルベシ。今其ノ圖ヲ模シテ左ニ示ス。原圖ノ十分一ナリ。

次ニ「十七年、秋九月、遣的祇田宿禰、小泊瀬造祖賢遺臣而問闕貢之事、於是新羅人懼之、乃貢獻調絹一千四百六十匹及種々雜物並八十艘」。

小泊瀬ノ造ハ、太祖ノ皇子神八井耳ノ命之裔ナリ。

次ニ「四十一年春三月、遣紀角宿禰於百濟、始分國郡疆場、具錄鄕土所出、是時百濟王之孫酒君無禮、由是紀角宿禰訶責百濟王、百濟王懼之、以鐵鎖縛酒君、附襲津彥而進上、爰酒君來、則逃匿于石川錦織首許呂斯之家、則欺之曰、天皇既赦臣罪、故寄汝而活焉、久之天皇遂赦其罪」。

始分國郡疆場ハ、百濟ノ郡縣ノ界ヲ皇朝ヨリ定メ給ヒシニハ非ズ、後ノ國ノ貢物ノ善惡ヲ取調べ給ハン料ニトテ、彼ノ地ノ物產ヲ郡縣ニ分ケテ錄サシメ給ヒシナルベシ。百濟ノ王ハ、久爾辛王ナリ。酒ノ君ノ事ハ、次ノ條ニ云フ。附襲津彥ハ、上ニ紀ノ角ノ宿禰トノミアルニ合ハズ。按フニ、コノ時襲津彥モ、兄ノ宿禰ニ伴ハレテ彼ノ地ニ渡リツルニヤ。又ハ宿禰ヨリ前ニ彼ノ地ニ往キテ留マリ居タルニヤ。

石川ノ錦織ノ首ハ、石川モ錦部モ、河內ノ國ノ南ノ端ノ郡ノ名ナリ。石川ハ、ソノカミ今ノ錦部郡マデヲ兼ネタル大名ニテ、韓國ヨリ參レル錦部ドモノ住メル地ハ、ソノ石川ノ中ニアリシ故ニ、錦部ノ長トナレル錦織首ノ上ニ石川ヲ冠ラセタルナリ。欽明紀ニ錦部首大石、推古紀ニ錦織首久僧、舒明紀ニ錦織首赤猪ナド見ユ。サテ錦部首ニ二族アリ。其ノ一ハ、姓氏錄山城國神別ニ「錦部首同神（神饒速日命）十二世孫物部目大連之後也」トアリ。物部目大連ハ、物部連ノ宗家ニシテ、雄略天皇ノ御世ノ人ナレバ、コヽナル錦織首ハ、ソノ子孫ニハアラズ。其ノ一ハ、續紀稱德天皇天平神護元年十二月「河內國錦部郡人錦部毗登石次、同姓大島等、並賜姓連」ト見エタル者ニテ、石川錦織首ノ裔ナリ。毗登ハ、意毗登ノ上略ニシテ、續紀寶龜元年九月皇太子（光仁天皇）ノ令旨ニ「以去天平寶字九歲、改首史姓、爲毘登、彼此雜分、氏族混雜、於事不穩、宜從本字」トアリ。ソハ、聖武天皇ノ御名首ト太政大臣淡海公ノ名不比等トヲ避ケタルナリ。サテコノ錦部氏ハ、姓氏錄河內國諸蕃ニ「錦部連、三善宿禰同祖、百濟國速古大王之後也」トアリテ、蕃別ナレドモ、其ノ歸化シタルコトハ、史ニ漏レタリ。天武紀十年、「錦織造小分、賜姓曰連」、同十二年「錦織造賜姓曰連」トアルモ、コノ錦部氏ノ族ナルベシ。三代實錄貞觀九年「主稅少允錦部連三宗麻呂、同姓木工少允安宗等、改賜惟良宿禰」、東寺文書ニ、醍醐天皇ノ御世ニ從五位下惟良宿禰淑子アリ。錦部連、後ニ宿禰ニナレリト見エテ、類聚符宣抄ニ、同ジ御世ニ左大史錦部宿禰春蔭、圓融天皇ノ御世ニ主稅助錦宿禰茂明アリ。又「左少史錦宿禰時佐、請改姓三善朝臣、許之、時佐自言、其先出自漢東海王之後波能志、與三善朝臣同宗」トモアリ。氏族志三善氏ノ條ニ云「按姓氏錄（諸蕃）、錦部有二、一則連姓、出百濟速古大王、與三善氏同族、一則村主姓、列之漢士部、而爲韓人波努志之後、其說頗可疑、然考續日本後紀、即波努志、蓋後漢獻帝之後、而非百濟之族、今時佐云云、亦似可證、而忽言與三善氏同宗、其言自爲矛盾、不可信也」。

次ニ「四十三年秋九月庚子朔、依網屯倉阿弭古、捕異鳥、獻於天皇曰、臣每張網捕鳥、未曾得是鳥之類、故奇而獻之、天皇召酒君示鳥曰、是何鳥矣、酒君對言、此鳥多在百濟、得馴而能從人、亦捷飛之、掠諸鳥、百濟俗號此鳥曰倶知、（是今時ノ鷹也）乃授酒君令養馴、未幾時而得馴、酒君則以韋緡著其足、以小鈴著其尾、居腕上、獻于天皇、是日幸百舌野而遊獵、時雌雉多起、乃放鷹令捕、忽獲數十雉、是月、甫定鷹甘部、故時人號其養鷹之處、曰鷹甘邑也」。

依網ハ、和名抄攝津國住吉郡ニ大羅鄕、神名帳ニ同郡大依羅神社四座アリ。又和名抄河內國丹比郡ニ依羅鄕アリ、古事記崇神天皇ノ段ニ「作依網池」トアルハ、即河內國ニテ、推古紀ニモ「河內國作依網池」トアリ。記傳（二十二 八十丁）ニ云「如此河內と津國と二ヶの依網あれども、丹比郡と住吉郡とは、相接て、大依羅社も依網

池も、殊に此二郡界によりて、相近き地なるを以ッ見れば、本は一ッなりしが、二國に分屬たるものなり」。依網屯倉ハ、皇極紀ニモ見エテ、河内國トアリ。阿弭古ハ、尸ニテ、姓氏錄皇別ニ輕ノ我孫、景行紀ニ山部阿弭古祖小左、桓武紀ニ播磨國明石郡大領葛江我孫馬養、光孝實錄ニ從五位下葛江我孫良津、及同姓伊豫介良佇ナドアリ。依網氏ノ事ハ、古事記開化天皇ノ皇子ノ系ニ「建豐波豆羅和氣王者、……依網之阿毘古等之祖也」、神功紀ニ「以依網吾彥男垂見爲祭神主」、續紀十八天平勝寶二年八月ニ「攝津國住吉郡人外從五位下依羅我孫忍廣呂等五人賜依羅宿禰姓、神奴意支奈祝長日等五十三人依羅物忌姓」ナド見ユ。サテ依網屯倉阿弭古ハ、依網吾彥ト同ジ氏ニテ、名ハ漏レタルナリ。コヽノ阿弭古ハ、男垂見ノ子又ハ族ナルベシ。姓氏錄攝津國皇別ニ「依羅宿禰、日下部宿禰同祖、彥坐命之後也」トアル彥坐命ハ、建豐波豆羅和氣王ノ御兄ナレバ、古事記トハ御兄弟ノ間ニテ傳ヘノ異ナルナリ。又屯倉ハ、土倉ト書ケル本モアリシト見エテ、西宮記臨時部竟宴ニ「各分史得土倉阿弭公、前三河守菅野高松、土倉能網尼駕鴐令流鷹狎野繫絆乎無解由」、竟宴和歌集ニモ、「延喜六年竟宴得土倉阿弭古、紀朝臣有世、網張例流阿弭古爾逢旦、阿知伎奈久四年乃間解流由無之」ナドアレドモ、集解ハ、之ニ依リテ、直ニ土倉ト改メタルハ、イカヾアラン。

百舌野ハ、古事記コノ天皇ノ段ニ「御陵在毛受之耳原也」、コノ紀六十七年ノ條ニ「幸河內石津原、以定陵地、丁酉、始築陵、是日有鹿、忽起野中、走之入役民之中而仆死、時異其忽死、以探其痍、即百舌鳥自耳出之飛去、因視耳中、悉咋割剝、故號曰、百舌鳥耳原者、其是之緣也」トアル所ニテ、記傳（卅七ノ四十六丁）ニ「是（仁德紀）に依れば此ノ處（毛受之耳原）も、石津ノ原の內なり。和名抄に和泉ノ國大鳥ノ郡石津ノ鄉、以之都、神名式に同郡石津太神社もあり。今も上石津村下石津村と云あり。此御陵近き地なり。又今毛受ノ莊と云は、九村ありて此御陵、堺の東南ノ地なり。御陵の地は、毛受ノ莊の內には非ず」、又「此ノ御陵、堺の東南ノ方舳ノ松村の地に在て、俗に大仙陵と云、是なり」ト云ヘリ。鷹甘ノ邑ハ、今鷹合村ト云ヒテ、攝津國住吉ノ郡南百濟村ノ大字ト爲レリ。通證ニ云「攝津志曰、住吉郡鷹飼部第宅古蹟、在鷹合村、又有鷹甘部墓、今稱平塚」。

酒ノ君ノ裔ハ、姓氏錄右京諸蕃ニ、刑部、和泉ノ國諸蕃ニ、百濟ノ公、六人部ノ連アリテ、何レモ「百濟國酒王之後也」トアリ。又左京諸蕃ニ「百濟公、同王（都慕王）二十四世、孫汶淵王之後也」トアル汶淵王ハ、雄略紀ニ見エタル汶洲王ノ誤リニテ、濟紀ニ「文周王、（或作汶洲）蓋鹵王之子也」トアル人ナリ。コノ人ハ、雄略紀ノ註ニ蓋鹵王ノ母弟トアレバ、毘有王ノ子ナルヲ、濟紀ニ蓋鹵王ノ子トシタルハ、蓋鹵ノ後ヲ繼ギタル故ニ其ノ子ト誤リタルナリ。酒ノ王モ汶洲王モ、同ジク久爾辛王ノ孫ニシテ、其ノ子孫ハ、同ジク百濟ノ公ナレバ、酒ノ王ハ即汶洲王ノ一名ニハ非ザルカ。若然ラバ、酒ノ王ハ、初ニ皇國ニ參リ居タルガ、後ニ其ノ國ニ歸リテ、王トハ爲レルナルベシ。又右京諸蕃ニ「百濟公、因鬼神感和之義、命氏謂鬼室、廢帝天平寶字五年、改賜百濟公姓」トアルハ、同ジ姓ナガラ、鬼室氏ノ後ト見エレバ、酒ノ王ノ裔トハ別ナリ。

次ニ「五十三年、新羅不朝貢、夏五月、遣上毛野君祖竹葉瀨、令問其闕貢、是道路之間獲白鹿、乃還之獻于天皇、更改日而行、俄且重遣竹葉瀨之弟田道、則詔之曰、若新羅距者、擧兵擊之、仍授精兵、新羅起兵而距之、爰新羅人日日挑戰、田道固塞而不出、時新羅軍卒一人、有放于營外、則掠俘之、因問消息、對曰有强力者曰百衝、輕捷猛幹、每爲軍右先鋒、故伺之擊左則敗也、時新羅空左備右、於是田道連精騎擊其左、新羅軍潰之、因縱兵乘之、殺數百人、即虜四邑之人以歸焉」。

竹葉瀨ハ、豐城入彥ノ命ノ胤ニシテ、姓氏錄ニ多奇波世ノ君トアリ。應神紀ニ見エタル、荒田別モ、コノ竹葉瀨モ、皆上毛野ノ君ノ祖トアリテ、姓氏錄ニ大荒田別ノ命ハ、豐城入彥命ノ四世ノ孫、多奇波世ノ君ハ、豐城入彥命ノ五世ノ孫ト云ヒ、又次ニ引ケル止美連ノ條ニ「荒田別命男田道公」トアレバ、コノ竹葉瀨君モ、荒田別命ノ子ナ

ルコト明カナリ。コノ人ノ裔ハ、姓氏錄ニ上ツ毛野ノ朝臣、住吉ノ朝臣、池原ノ朝臣、桑原ノ公、川合ノ公、商長ノ首ナドアリ。又都ノ朝臣ハ、桑原ノ公ヨリ出デタリ。上ツ毛野ノ朝臣ハ、左京ト右京トニアリ。右京ナル上ツ毛野ノ朝臣ノ譜ニハ、唯「崇神天皇皇子豐城入彥命之後也、日本紀合」トノミアリテ、氏姓ノ沿革ハ記サレネドモ、舊姓ハ、上ツ毛野ノ君ニテ、天武紀十三年十一月、大三輪ノ君等五十二氏ニ朝臣姓ヲ賜ヘル中ニ上ツ毛野ノ君見エタリ。左京ナル上ツ毛野ノ朝臣ハ、同族ナガラモ、舊姓ハ田邊ノ史ニテ上ツ毛野ノ君トハ別派ナリ。其ノ譜ニ云「上毛野朝臣、下毛野朝臣同祖、豐城入彥命五孫多奇波世君之後也、大泊瀨幼武天皇諡雄略御世、努賀君男百尊、爲聞女產兒、往賀聟家、犯夜而歸、於應神天皇御陵邊、逢騎馬人、相共語話、換馬而別、明日看所換馬、是土馬也、因負姓陵邊君、百尊男德尊孫斯羅、謚皇極御世、賜河內山下田、以解文書爲田邊史、寶字稱德孝謙皇帝天平勝寶二年、改賜上毛野公、今上弘仁元年、改賜朝臣姓、續日本紀合」。馬ヲ換ヘタル傳說ハ、雄略紀九年七月「河內國言飛鳥戶郡人田邊史伯孫女者、古市郡人書首加龍之妻也、伯孫聞女產兒、往賀聟家、而月夜還於蓬蔂丘譽田陵下、逢騎赤駿者、其馬時濩略而龍翥、歘聳擢而鴻驚、異體峯生、殊相逸發、伯孫就視而心欲之、乃鞭所乘驄馬、齊頭並轡、爾乃赤駿超攄絕於埃塵、驅騖迅於滅沒、於是驄馬後而怠足、不可復追、其乘駿者、知伯孫所欲、仍停換馬、相辭取別、伯孫得駿甚歡、驟而入廐、解鞍秣馬眠之、其明旦赤駿變爲土馬、伯孫心異之、還覓譽田陵、乃見驄馬在於土馬之間、取而代置所換土馬」トアルニ同ジ事ナリ。改賜上毛野公ハ、續紀天平勝寶二年三月「賜中衞員外少將從五位下田邊史難波上毛野公姓」トアリ。朝臣姓ヲ賜ヘルコトハ、後紀闕ケテ見エズ。

田道ノ裔ハ、姓氏錄河內國皇別ニ「止美(トミ)連、尋來津(ヒロキツ)公同祖、豐城入彥命之後也、四世孫荒田別命男田道公、被遣百濟國娶止美邑吳女生男持君、三世孫熊次、新羅等、欽明天皇御世參來、新羅男吉雄依居賜姓止美連也、日本紀漏」トアリ。田道公ハ、新羅ヲ擊破リテ後ニ、百濟ニ往キテ暫ク留レルコトアリシニヤアラン。依居賜姓止美ノ連トアレバ、止美ハ、吉雄ノ住メル地ノ名ト聞ユルニ、娶止美邑吳女ト云ヘルハ、イカヾ。若クハ吉雄等ノ祖ハ、止美ノ邑ニテ生レタルニ由リテ、其ノ居地ヲモ止美ト名ツケタリシニヤ。

次ニ五十八年ノ條ニ「冬十月、吳國高麗國朝貢」。

吳ノ國ハ、支那南朝ノ宋國ナリ。宋書ニハ倭國貢獻ト云ヘルコト屢見エタレドモ、コノ御世ノ間ニ皇朝ヘ使ヲ遣シタル由ハ見エザレバ、宋人ノ句麗ニ留レル者ナドノ、句麗ノ使ニ伴ハレテ參リシヲ、吳國朝貢トハ云ヘルナラン。又思フニ、コヽニ五十八年ト云ヘル年ハ、庚午ノ年ニシテ、應神天皇四十一年、阿智ノ使主、吳ノ國ノ工女ヲ携ヘテ歸レル年ト、干支同ジケレバ、コレトカレトハ、本一事ナルヲ、カノ事ヲ庚午ノ年吳國朝貢ト傳ヘタルニ由リ、誤リテ別事トシテ、コヽニモ記シタルカ。然ラバ阿智ノ使主ノ丙寅ノ年ニ吳ノ國ニ往キ、庚午ノ年ニ還レルハ、其ノ應神天皇ノ何年トアルハ違ヘリトモ、丙寅庚午ト云フ干支ハ、古キ記錄ニヨレル者ナルベシ。然ルニ應神天皇ノ末年ニハ丙寅庚午ナク、丙寅ハ仁德天皇崩御ノ前年、庚午ハ、履中天皇三年ナレバ、彼ノ事ハ、仁德履中ノ御世ノ事ナルヲ、年紀ノ錯亂ノ爲ニ誤リテ、應神紀ニ記シテ、ヤガテ其ノ干支ヲバ合セタルニヤ。右ノ如クニ見ル時ハ、阿智ノ使主ノ吳ノ國ニ往キタル丙寅ノ年ハ、宋ノ元嘉三年ニテ、宋書倭國傳ニ「太祖元嘉二年、讚又遣司馬曹達奉表獻方物」トアルトハ、僅ニ一年違ヘルノミナレバ、司馬曹達ハ阿智ヲ云ヘルニ似タリ。但阿智ノ使主ハ、履中天皇即位ノ前、墨ノ江ノ中ツ王ノ亂アリシ時、天皇ヲ佐ケマツリシ事、古事記ニモ日本紀ニモ見エタレバ、仁德履中ノ御世ノ間ニ吳ニ到レリト云フ說ハ、ウケバリテハ言ヒ難シ。然ラバ丙寅庚午ノ干支ニハ拘ラズシテ、應神天皇ノ末年ト見ルベキニヤ。

コノ御世ニハ、三國史記ニ皇國ニ關レル記事ナシ。三韓ノ間ノ關係ハ、羅紀訥祇麻立干八年紀元千八十四年、宋ノ文帝元嘉元年、句麗ノ

（長壽王十二年）春二月、「遣使高句麗修聘」、麗紀ニモ同ジ年月ニ「新羅遣使修聘、王勞慰之特厚」トアリ。又句麗ニテ國都ヲ平壤ニ移シタルハ、長壽王ノ十五年（仁德天皇ノ崩リマセル年）ノ事ナリ。句麗ハ、廣開土王ノ時百濟ヲ擊破リテヨリ帶方ノ故地ハ皆其ノ所領ト爲リタレバ、故國原王ノ時ヨリ住ミ來ツル國內城ハ、北境ニ片寄リテ、全國ヲ統ブルニ便ヨカラヌ故ニ、中央ノ地ヲ擇ビテ、平壤ニ遷リタルナリ。

姓氏錄河內ノ國諸蕃ニ云「茨田勝、吳國主孫皓之後意富加牟枳君之後也、大鷦鷯天皇（諡仁德）御世、賜居地於茨田邑、因爲茨田勝」。孫皓ハ、吳ノ大皇帝孫權ノ孫ニテ、吳ノ末帝ナリ。意富加牟枳ハ、漢名トハ聞エズ、韓語ノ早岐ニ皇國言ノ大ヲ加ヘタルニ似タリ。任那新羅ノ地ニテ早岐ナリシ人ノ歸化シタルニヤ。氏人ハ續後紀ニ仁明天皇ノ時、河內ノ國、讃良ノ郡ノ大領茨田ノ勝男泉アリ。

第三十八章　履中反正允恭安康ノ四御世

履中天皇ノ御世ハ、仁德天皇ノ崩リマセル丁卯ノ年ノ翌年ヨリ、古事記コノ天皇ノ段ニ「壬申年正月三日崩」トアルマデニテ、即紀元千八十八年（宋ノ文帝元嘉五年、新羅ノ訥祇麻立干十二年、百濟ノ毘有王二年、句麗ノ長壽王十六年）ヨリ千九十二年（宋ノ元嘉九年、新羅ノ訥祇麻立干十六年、百濟ノ毘有王六年、句麗ノ長壽王二十年）マデ五年ノ間ナリ。コノ御世ニハ外國ニ關レル事、記紀ニ見エズ。

濟紀毘有王二年（記ノ履中天皇元年）ノ條ニ「倭國使至、從者五十人」、羅紀訥祇麻立干十五年（記ノ履中天皇四年）「夏四月、倭兵來侵東邊、圍明活城、無功而退」ト見ユレドモ、國史ニヨリテ考フベキ由ナシ。

反正天皇ノ御世ハ、履中天皇ノ崩リマセル壬申ノ年ノ翌年、即紀元千九十三年（宋ノ元嘉十年、新羅ノ訥祇麻立干十七年、百濟ノ毘有王七年、句麗ノ長壽王二十一年）ヨリ古事記コノ天皇ノ段ニ「丁丑七月崩」トアル千九十七年（宋ノ元嘉十四年、新羅ノ訥祇麻立干二十一年、百濟ノ毘有王十一年、句麗ノ長壽王二十五年）マデ五年ノ間ナリ。コノ御世ニモ、記紀ニ外國ニ關レル事見エズ。

新羅百濟ノ間ノ關係ハ、羅紀訥祇麻立干十七年（記ノ反正天皇元年）「秋七月、百濟遣使請和、從之」、明年、「春二月、百濟王送良馬二匹、秋九月、又送白鷹冬十月、王以黃金明珠報聘百濟」トアリテ、濟紀ニモ同ジ事ヲ記セリ。奈勿尼師今ノ時句麗ト連和シテヨリ、百濟トハ常ニ敵國トナレリシガ、コヽニ至リテ和睦シタル趣ナリ。

允恭天皇ノ御世ハ、反正天皇ノ崩リマセル丁丑ノ年ノ翌年、即紀元千九十八年（宋ノ元嘉十五年新羅ノ訥祇麻立干二十二年、百濟ノ毘有王十二年、句麗ノ長壽王二十六年）ヨリ、古事記コノ天皇ノ段ニ「甲午年正月十五日崩」トアル千百十四年（宋ノ孝武帝孝建元年、新羅ノ訥祇麻立干二十八年、百濟ノ毘有王二十八年、句麗ノ長壽王四十二年）マデ十七年ノ間ナリ。

古事記コノ天皇ノ段ニ云「天皇初爲將所知天津日繼之時、天皇辭而、詔之我者有一長病、不得所知日繼然大后始而、諸卿等因堅奏而、乃治天下。此時新良國主貢進御調八十一艘、爾御調之大使、名云金波鎭漢紀武、此人深知藥方、故治差帝皇之御病」。

新良ノ國主ハ、訥祇麻立干ナリ。八十一艘ノ一ハ、衍ナルベシ。紀ニハ神功ノ卷仁德ノ卷又コノ御世ノ卷ニモ八十艘トノミアリ。金波鎭漢紀武ノ金ハ、姓ナリ。コノ時ノ麻立干ハ、金氏ナレバ、コノ大使ハ、王族ナルベシ。波鎭漢紀ハ、第三十五章ニ見エタル波珍干岐ニ同ジク、隋書ノ破珍干、韓史ノ波珍湌ナリ。武ハ名ナリ。姓名ノ間ニ官爵ヲ挿メルハ、皇國ニテモ支那ニテモ常ニ云フコトナリ。記傳（卅九ノ九丁）ニハ「波鎭は、爵なり。漢紀は、王族の號なり」ト云ヘレドモ、波珍湌ヲ波珍トノミ云ヘル例ナケレバ、猶波鎭漢紀ヲ連ネテ、爵ノ名ト見ルベシ。大日本史新羅傳ノ註ニハ「按漢祇部人、姓金、位波珍湌、名某人也」トアレドモ、部ノ名ヲ姓爵ノ下ニ附タルハ、例ナキ事ナレバ、コレモ從ヒ難シ。

允恭紀ニハ、コノ醫者ノ事ヲ「三年春正月辛酉朔、遣使求良醫於新羅、秋八月、醫至自新羅、則令治天皇病、未經幾時、病已差也、天皇歡之、厚賞醫以歸于國」トテ、態々召シ給ヒシ趣ニ記シ、又御調獻レルコト

ハ、コノ御世ノ末ニ別ニ記セリ。何レカ正シカラン。

其ノ御調ノ事ハ、「四十二年春正月乙亥朔戊子、天皇崩、時年若干、於是新羅王聞天皇既崩、驚愁之、貢上調船八十艘及種種樂人八十、是泊對馬而大哭、到筑紫亦大哭、泊于難波津、則皆素服之、悉捧御調、且張種々樂器、自難波至于京、或哭泣或歌儛、遂參會於殯宮也、冬十一月、新羅弔使等、喪禮既闋而還之、爰新羅人恒愛京城傍耳成山畝傍山、則到琴引坂顧之曰、宇泥咩巴椰、彌彌巴椰、是未習風俗之言語、故訛畝傍山謂宇泥咩、訛耳成山謂瀰瀰耳、時倭飼部從新羅人、聞是辭、而疑之、以爲新羅人通采女耳、乃返之啓于大泊瀨皇子、皇子則悉禁固新羅使者而推問、時新羅使者啓之曰、無犯采女、唯愛京傍之兩山而言耳、則知虛言皆原、於是新羅人大恨、更減貢上之物色及船數」。トアリ。

張種種ノ樂器、マタ或歌儛ナドアルハ、喪ノ時ニ歌舞スルコトハ、皇國ノ古俗ナル故ニ、新羅ハ外國ナガラ、蕃國ナレバ、上國ノ禮ヲ行ヘルナルベシ。耳成山ハ、大和ノ國十市ノ郡ニアリ、畝傍山ハ、同國高市ノ郡ニアリ、琴引坂ハ、同國葛ノ上ノ郡ニアリ。

羅紀ニハ、訥祇麻立干二十四年（記ノ允恭天皇三年、）「倭人侵南邊、掠取生口而去、夏六月、又侵東邊」、又二十八年（記ノ允恭天皇七年）「夏四月、倭兵圍金城十日、糧盡乃歸、王欲出兵追之、左右曰、兵家之說曰、窮寇勿追、王其舍之、不聽、率數千餘騎、追及於獨山之東、合戰、爲賊所敗、將士死者過半、王蒼黃棄馬上山、賊圍之數重、忽昏霧、不辨咫尺、賊謂有陰助、收兵、退歸」ナドアレドモ、國史ニハ見エズ。コレラノ戰ハ、皇軍ノ征討ノミニハアラズ、後ノ世ニ倭寇ト云ヘル者ノ類ニテ、西國ノ姦民ナドノ、私ニ彼ノ地ニ渡リテ侵掠シタルモアルベシ。又三韓ノ間ノ關係ハ、濟紀ニ毘有王二十一年（記ノ允恭天皇十年、新羅ノ訥祇麻立干三十一年）「秋七月、旱穀不熟、民饑、流入新羅者多」、羅紀訥祇麻立干三十四年（記ノ允恭天皇十三年、句麗ノ長壽王三十八年、）「秋七月、高句麗邊將獵於悉直之原、何瑟羅城主三直出兵掩殺之　麗王聞之怒、使來告曰、孤與大王修好、至歡也、今出兵殺我邊將、是何義耶、乃興師侵我西邊、王卑辭謝之、乃歸」、三十八年（記ノ允恭天皇ノ末年、句麗ノ長壽王四十二年）「八月、高句麗侵北邊」トアリテ、句麗トノ和親破レタリ。何瑟羅ハ、今ノ江原道三涉都護府ナリ。

安康天皇ノ御世ハ、紀ニ據レバ、紀元千百十四年甲午ノ年ヨリ千百十六年丙申ノ年マデ三年ノ間ナリ。其ノ甲午ノ年ハ、記ニテハ、允恭天皇ノ崩リマセル年ナレバ、安康天皇ノ御世ハ、其ノ翌年乙未ノ年（宋ノ孝建二年、新羅ノ訥祇麻立干三十九年、百濟ノ毘有王二十九年、蓋鹵王元年、句麗ノ長壽王四十三年、）ヨリ數フベキナリ。カクテ此ノ天皇ノ崩年ハ、記ニ漏レタル故ニ、紀ニ從ヒテ丙申ノ年トスレバ、其ノ在位ハ二年ナリ。コノ御世ニハ、外國ニ關レル事見エズ。羅紀ニ訥祇麻立干三十九年、（記ノ安康天皇元年）「冬十月、高句麗侵百濟、王遣兵救之」トアリ。訥祇既ニ百濟ト和睦シテ、又句麗ノ和ヲ失ヒタル故ニ、百濟ヲ救ヒテ、句麗ニ敵シタルナリ。

第三十九章　雄略天皇ノ御世

雄略天皇ノ御世ハ、國史ト韓史ト年紀ノ始メテ合ヘル時ニシテ、外交ノ事實モ、コレヨリ後ハ益詳ニ知ラル丶ナリ。（第一）雄略紀ニ「二年秋七月、百濟池津媛違天皇將幸、婬於石川楯（舊本云石川ノ股合ノ首祖楯）天皇大怒、詔大伴室屋大連、使來目部張夫婦四支於木置假㡳上以火燒死」。註ニ云「百濟新撰云、己巳年、蓋鹵王立、天皇遣阿禮奴跪、來索女郎、百濟莊飾慕尼夫人女曰適稽女郎、貢進於天皇」。

二年ハ、紀元千百十八年戊戌ニシテ、百濟ノ蓋鹵王四年ナリ。池津媛ト云フ名ハ、適稽女郎ニ賜ハレル皇國風ノ名ナリ。石川ノ楯ハ、蘇我ノ石河ノ宿禰ノ裔ナルベシ、蓋鹵王ハ濟紀ニ「蓋鹵王（或云近蓋婁）諱慶司、毗有王之長子、毗有在位二十九年薨、嗣位」トアリ。蓋鹵（カフロ）ト蓋婁（カフロ）ト音同ジ。蓋婁ハ百濟ノ第四代ノ王ノ名ト同ジキ故

ニ近ノ字ヲ冠ラセテ區別スレドモ、蓋鹵ト書ク時ハ、字異ナル故ニ、近ノ字ヲ冠ラセザルナリ。己巳ノ年ハ、コノ年ヨリ二十九年ノ前ニアリテ、天皇索女郎ナドアル趣ニ合ハズ。蓋鹵王ノ即位ハ、韓史ニテハ乙未ノ年ナレバ、己巳ハ乙未ノ誤寫ナルベシ。阿禮奴跪ハ皇國人ノ名ノ訛リタルニテ、眞ノ唱ヘハ知レズ。慕尼夫人ハ蓋鹵王ノ妻ナリ。

コノ明年新羅ノ慈悲麻立干二年、羅紀ニ「夏四月、倭人以兵船百餘艘、襲東邊、進圍月城、四面矢石如雨、王城守、賊將退、出兵擊敗之、追北至海口、賊溺死者過半」トアリ。

（第二）五年（百濟ノ蓋鹵王七年）「夏四月、百濟加須利君（蓋鹵王也）飛聞池津媛之所燔殺（適稽女郎也）而籌議曰、昔貢女人爲采女、而既無禮、失我國名、自今以後、不合貢女、乃告其弟軍君（崐支君也）曰、汝宜往日本以事天皇、軍君對曰、上君命不可奉違、願賜君婦而後奉遣、加須利君則以孕婦、既嫁與軍君曰、我之孕婦、既當產月、若於路產、冀載一船隨至何處、速令送國、遂與辭訣、奉遣於朝、六月丙戌朔、孕婦果如加須利君言、於筑紫各羅島產兒、仍名此兒曰島君、於是、軍君即以一船送島君於國、是爲武寧王、百濟人呼此島、曰主島也、秋七月、軍君入京、既而有五子」、註ニ云「百濟新撰云、辛丑年、蓋鹵王遣王弟琨支君、向大倭侍天皇、以脩先王之好也」。

加須利ハ蓋鹵ノ轉ナリ。加須ハ蓋ニ近ク、利ハ鹵ニ近シ。又按フニ、加須利ハ慶司ニモ似タリ。加ト慶トハ父音同ジク、司ハ須利ノ約マレルナリ。コノ考ヘニヨル時ハ、蓋鹵ト慶司トハ一ツノ名ニテ、譯字ノ異ナルノミナルヲ、濟紀ニ蓋鹵王諱慶司ト書キテ、一ツハ號、一ツハ名ノ如ク云ヘルハ、非ナリ。

軍君ハ、コヽニ崐支又琨支君トアル外ニ、下文ニハ昆支王、武烈紀ニハ混支王子トモアル、何レモ同ジ人ニテ、濟紀ニハ昆支トアリ。宋書百濟傳ニ餘昆トアルハ、昆支ノ支ヲ略キテ、姓ヲ加ヘタルナレバ、單名ニハ昆ト云ヘルヲ、コヽニハ音通ニテ、軍ト書キタルナリ。濟紀ニ文周王弟昆支トアルハ惡カラザレドモ、ソノ文周王ハ、コノ紀ノ下文ニ汶洲王トアリテ、又蓋鹵ノ弟ナルヲ、濟紀ハ蓋鹵ノ子トシタルガ故ニ、其ノ弟昆支モ、蓋鹵ノ子ト爲レリ。願賜君婦云々ノ談ハ、タトヒ古代ノ陋俗ナリトモ、父子ノ間ニハアルベカラザル事ナレバ、弟ト云ヘル方實ナルベシ。軍君ノ古訓ニコムセシトアルハ、コント云フ單名ニ、王子ヲ云フ語ノセシムヲ添ヘタルガ、ムノ脫チタルナリ。又同ジ軍君ヲコムキシトモ、コニキシトモ訓ミ、又琨支君ヲモコムキシト訓ミタルハ、王ノ號ト紛レタルニテ、正シカラズ。下ノ昆支王混支王ハ、何レモコムキワウト訓ミタレバ、名ハコンキニシテ、コレニワウ又ハセシムヲ附ケテ呼ベルナリ。

各羅島ハ、和名抄ニ筑前國志摩ノ郡韓良志摩トアル、是ナリ。島君ハ、釋ノ訓ニセマキミトアリ。武寧王ノ名ハ、武烈紀ニ斯麻王、濟紀ニ斯摩トアレバ、島ハしまト訓ムベキニ似タレドモ、彼ノ國ノ語ニ、島ヲせまト云フ由ナレバ、斯モ彼ノ國ノ音セナルニヤ。人類學會雜誌ニ今ノ朝鮮語ノ皇國語ニ似タルモノヲ擧ゲタル中ニ、島ヲ셤ト云フ由見エタリ。古言せまヨリあノ母音ノ減リタルモノナルベシ。武寧王ノ事ハ、第四十一章ニ至リテ猶言フベシ。主島ハ、武烈紀ニニリムセマト訓メリ。百濟ノ方言ナルベシ。辛丑年ハ、即コノ五年ナリ。本文ノ年紀ハ蓋百濟新撰ニヨリテ正シタルナリ。

（第三）六年（宋ノ孝武帝大明六年新羅ノ慈悲麻立干五年）「夏四月、呉國遣使貢獻」。

呉ノ國ハ宋ナリ。宋書倭國傳ニ、コノ年倭王ニ爵號ヲ授クル詔ヲ載セタレドモ、皇朝ヘ使ヲ奉リタル事ハ見エズ。コレラノ事ハ次章ニ委シク云ハン。

コノ年羅紀ニ「夏五月、倭人襲破活開城、虜人一千而去」トアリ。

（第四）七年（新羅ノ慈悲麻立干六年）「是歲、吉備上道臣田狹、侍於殿側、盛稱稚媛於朋友曰、天下麗人、莫如吾婦、茂矣綽矣、諸好備矣、曄矣溫矣、種相足矣、鉛花弗御、蘭澤無加、曠世罕儔、當時獨秀者也、天皇傾耳遙聽、而

心悅焉、便欲自求稚媛爲女御、拜田狹爲任那國、同俄而天皇幸稚媛、田狹臣娶稚媛、而生兄君弟君也、別本云、田狹臣婦、名毛媛者、葛城襲津彦子玉田宿禰之女也。天皇聞體貌閑麗、殺夫自幸焉。田狹既之任所、聞天皇之幸其婦、思欲求援、而入新羅、于時新羅不事中國、天皇詔田狹臣子弟君與吉備海部直赤尾曰、汝宜往罰新羅、於是西漢才伎歡因知利在側、乃進而奏曰、巧於奴者、多在韓國、可召而使、天皇詔羣臣曰、然則宜以歡因知利副、弟君等、取道於百濟、並下勅書、令獻巧者、於是弟君御命率衆、行到百濟、而入其國、國神化爲老女、忽然逢路、弟君就訪國之遠近、老女報言、復行一日而後可到、弟君自思路遠、不伐而還、集聚百濟貢今來才伎於大島中、託稱候風、淹留數月、任那國司田狹臣、乃嘉弟君不伐而還、密使人於百濟、戒弟君曰、汝之領項有何牢錮而伐人乎、傳聞天皇幸吾婦、遂有兒息兒息已見上文今恐禍及於身、可蹻足待、吾兒汝者跨據百濟、勿使通於日本、吾者據有任那、亦勿通於日本、弟君之婦樟媛、國家情深、君臣義切、忠踰白日、節冠青松、惡斯謀叛、盜殺其夫、隱埋室內、乃與海部直赤尾將百濟所獻手末才伎、在大島、天皇聞弟君不在、遣日鷹吉士堅磐固安錢堅磐此云柯陀之波使共復命、遂即安置於倭國吾礪廣津邑、廣津、此云比盧岐頭而病死者衆、由是、天皇詔大伴大連室屋、命東漢直掬、以新漢陶部高貴鞍部堅貴畫部因斯羅我錦部定安那錦譯語卯安那等、遷居于上桃原下桃原眞神原三所。或本云、吉備臣弟君、還自百濟、獻漢手人部衣縫部宍人部。

吉備ノ上ッ道ノ臣ハ、孝靈天皇ノ皇子稚武彦ノ命ノ裔ナリ。姓氏錄左京皇別下ッ道ノ朝臣右京皇別廬原ノ公ノ條ニ「稚武彦命之孫、吉備武彦命」右京皇別眞髮部ノ條ニ、「同ジ（稚武彦）命ノ男吉備武彦ノ命」トアルハ、非ナリ。三代實錄元慶三年十月、印南ノ野ノ臣宗雄ノ上言ニ「吉備武彦命第二男御友別命」姓氏錄右京皇別、吉備ノ臣ノ條ニ「稚武彦命孫御友命」トアルハ、非ナリ。應神紀二十二年、吉備ノ臣ノ祖御友別ノ兄弟諸子ニ吉備國ヲ分ケテ賜ヘル處ニ「以上道縣、封仲彦、是上道臣、香屋臣之始祖也」トアリ。田狹ハ、國造本紀ニ「上道國造輕島豐明宮御世、元封中彦命、兒多沙臣始國造」トアル多沙ノ臣ニテ、御友別ノ命ノ孫ナリ紀ノ年立ニテハ、應神天皇二十二年ヨリ雄略天皇七年マデハ、百七十餘年モアレバ、田狹ハ多沙ノ臣ヨリ後ノ人ナルガ如ク見ユル故ニ、集解ニ「田狹蓋多沙臣之子、若孫、或曾孫、世襲其名者也」トアレドモ、カノ二十二年ト云ヘル辛亥ノ年ハ、實ニハソレヨリ百二十年ノ後ニアリテ、コノ年マデハ、唯五十餘年ナレバ、田狹ヲ御友別命ノ孫トシテ、時代合ヘリ。仲ッ彦ノ封ゼラレタルハ、應神天皇ノ御世ナレドモ、田狹ノ國造ニナレルハ、ソレヨリ後ノ御世ノ事ナルベシ。國造本紀ニ上ッ道ノ國ノ造ト云ヘルヲ、紀ニ上ッ道ノ臣トアルハ、コノ氏ノ外ニモ例アルコトニテ、即仲ッ彦ノ兄稻速別ハ、國造本紀ニ兄彦ノ命亦ノ名稻建別トアリテ、應神天皇ノ御世ニ、下ッ道國造ニ定メ賜フトアレドモ、應神紀ニハ「分川島縣、封長子稻速別、是下道臣之始祖也」トアリ。

任那國司ハ、任那ノ國ノ御言持ト訓ムベシ。古事記淸寧天皇ノ段「山部連小楯任針間國之宰」ノ傳四十三ノ七丁ニ云、「宰は美許登母知と訓り。御命持にて、天皇ノ大命を承賜はり、持て往て、其國の政を執行ふよしの名なり。萬葉二十四丁に君之御言乎持而加欲波久これは宰のことにはあらねど、言は同じ。五三十一丁に勅旨戴持弖唐能遠境爾都加播佐禮これは、遣唐使の事なり。十七四十二丁に須賣呂伎能乎須久爾奈禮婆美許登母知多知和哥禮奈婆これは宰の事なるを、みこともちを用言に云へり。又同卷に於保伎美乃美許等可之古美乎須久爾能許等登里毛知豆、これは御命を持てと云には非れども、事は同じ。などあるが如し。さて宰の始メは、詳ならず。上代より有しものなるべし」。サテ宰ハ、皇國ノ內ニモ、蕃國ニモ、置カレテ、應神紀三年ニ「處々海人訕哤之、不從命、則遣阿曇連祖大濱宿禰、平其訕哤、因爲海人之宰」、仁德紀六十二年ニ「遠江國司表上言云々」、淸寧紀二年ニ「播磨國司山部連光祖伊與來目部小楯」、推古紀十二年憲法十七條ノ十二ニ「國司國造勿斂百姓」、同十七年ニ筑紫ノ大宰ナドアルハ、皇國ノ內ノ宰ナリ。蕃國ニ遣サレタル宰ノ事、古書ニ見エタルハ、姓氏錄皇別吉田ノ連ノ條ニ「任那國奏曰云々、天皇令鹽垂津彦遣、奉勅而鎮守、彼俗稱宰爲吉」トアル任那ノ宰ト、神功紀細書ノ一說ニ見エタル新羅ノ宰トヲ除キテハ、コヽナル任那ノ國ノ司ヨリ始マレリ。サレバ任那ノ國ノ司ハ、雄略天皇ノ始メテ置カセ給ヒシガ如クナレドモ、蕃國ヲ統ベ治ムル重キ職ヲ始メテ定メ給ハンニハ、其ノ職ニ協ヘル良吏ヲ擇バルベキ

ニ、コヽノ文ノ様ヲ見ルニ、稚媛ヲ幸シ給ハンガ爲ニ、其ノ夫ヲ逐ヒヤリ給ヒシニテ、其ノ職ニ協ヘル人ヲ擇バレキトハ見エザレバ、コノ官ハ、前ノ御世ヨリ打續キテ設ケラレタル者ナルヲ、著シキ事故ナキニ由リテ、古記ニ漏レタリシナルベシ。カレ熟按フニ、神功皇后攝政ノ御世ニ、任那ノ七國ヲ定メ給ヒテ、其ノ管領ノ任ヲ百濟ノ近肖古王ニ負セ給ヒシハ、百濟ノ爲ニハ大ナル榮譽ニテ、近肖古父子深ク其ノ大恩ニ感ジタリシガ、應神天皇親政ノ御世ニ至リテ、辰斯王父祖ノ遺意ニ違ヒ、皇朝ニ叛キ奉リテ、紀ノ角ノ宿禰等ガ征討ニ遇ヒ、遂ニ國人ノ爲ニ殺サレタレバ、任那ノ管理ヲ百濟ニ委ネラルヽコトヲ罷メテ、始メテ宰ヲ置キ給ヒシハ、ソノ頃ノ事ナルベシ。姓氏錄ニ、鹽垂津彥ノ任那ヲ鎭メ守リシ事ヲ崇神天皇ノ御世トシタレドモ、實ハ應神天皇ノ後ノ事ナルヲ、誤リ傳ヘタル者ナルベシ。宋書倭國傳ニ、倭國ノ官爵ト云ヘル中ニ、使持節都督倭新羅任那加羅秦韓六國諸軍事ナドアルニヨレバ、仁德天皇ヨリ雄略天皇マデノ間、任那ノ宰ノ三韓ノ諸國ニ及ボセル權力ノ大ナル事ハ推料ラルヽナリ。猶委シクハ次章ニ云フベシ。

稚媛ハ元年ノ條ニ「吉備上道臣女稚媛」トアリテ、註ニ「一本云吉備窪屋臣女」トアリ。

別本ナル毛媛ノ事ハ、大日本史葛城長江襲津彥ノ傳ニ「毛媛爲田狹妻、與雄略紀本文不合、故今不取、詳註於雄略后妃傳」。葛城ノ圓大臣ノ女韓媛ヲ妃トシ給ヘル事ノ混レタルナリ。

玉田ノ宿禰ハ、允恭紀五年ニ、葛城襲津彥之孫トアリ。圓大臣ハ、公卿補任ニ、玉田ノ宿禰ノ子トセリ。

吉備ノ海部ノ直ハ、舊事本紀ニ、孝靈天皇ノ皇子ヲ擧ゲタルニ「彥狹島命、海直等祖」、古事記仁德天皇ノ段ニ「吉備海部直之女、名黑日賣」、敏達紀ニ吉備ノ海部ノ直難波、又吉備ノ海部ノ直羽島ナドアリ。氏族志皇別海氏ノ條ノ註ニ云「按吉備海部直、實不詳所系、據其稱吉備、疑出自稚武彥、然考諸書、稚武彥之後、無海部氏者、唯舊事本紀彥狹島之後、有海直、豈以兄弟之故、彼此相錯、猶下文角鹿國造本紀係稚武彥之後、而古事記以角鹿海直爲日子刺肩別之後歟」。

西漢才伎歡因知利ハ、イツノ頃渡リ來ツル人ナルカ、知ラズ。西漢ハ、河內ニ住メル漢人ノ義ニテ、姓ニハアラザレドモ、其ノ子孫ハ、東ノ漢ノ直ニ對ヘテ、西ノ漢ノ直ト云フ姓ヲ賜リシニヤ。推古紀ニ河內ノ漢ノ直贄、天武紀十二年九月「川內漢直賜姓曰連」、同十四年六月「河內漢連賜姓曰忌寸」トアリ。氏族志ニハ、姓氏錄ニ見エタル河內ノ忌寸ヲ、コノ河內ノ漢氏ノ後トセリ。河內ノ忌寸ハ、同族頗多シ。左京諸蕃ニ「山代忌寸、出自魯國白龍王也」、右京諸蕃ニ「臺忌寸、河內忌寸同祖漢孝獻帝男白龍王之後也」、攝津ノ諸蕃ニ「臺直、臺忌寸同祖、漢釋吉王之後也」、河內諸蕃ニ「河內忌寸、山代忌寸同祖、魯國白龍王之後也」、和泉諸蕃ニ「凡人中家、山代忌寸同祖、白龍王之後也」、コレラノ氏人ハ、孝德紀ニ臺直須彌、持統紀ニ川內ノ忌寸連ノ臺ノ忌寸八島、續紀養老元年ニ「從五位上臺忌寸少麻呂言、因居命氏、從來恒例、是以河內忌寸、因邑被氏、其類不一、請少麻呂率諸子弟、改換臺氏、蒙賜岡本姓、許之」、天平十九年七月「山代直大山等賜姓忌寸」天平勝寶八歲七月「河內國石川郡人漢人廣橋漢人刀自賣等十三人賜山背忌寸姓」續後紀嘉祥二年八月「右京人右衞門少志臺忌寸善氏賜姓淸江宿禰」又氏族志河內氏ノ條ニ「聖武帝時有宮內少錄河內忌寸友足（東大寺正倉院文書三代實錄淸和帝時有近江高島郡節婦河內史能子是亦同族歟、附之。）姑村上帝時有伊勢少目河內忌寸良兼（政事要略）臺氏ノ條ニ醍醐帝時有右大臣藤原忠平知家事臺基具（東寺文書）」ナドアリ、姓氏錄未定雜姓攝津國ノ部ニ「川內漢人火明命九世孫否井命之後者、不見」トアルハ、蕃人ノ裔ニテ、神裔ト假冒シタルナリ。

弟君銜命率衆行到百濟而入其國ハ、百濟ニ到リテ技工ヲ獻ラシメテ、サテ新羅國ニ入ラントシタルナリ。大日本史吉備田狹傳ニ「弟君等既到百濟、事竣而入新羅」ト書ケリ。復一日ノ日ハ、月ノ誤リカ。大日本史ニハ月ト改メタリ。

今來ハ、新參ト云フニ同ジ。下文ニ新漢（イマキノアヤ）又紀ニ新ノ漢人トアリテ、いまきニハ、多ク新ノ字ヲ當テタリ。

大島ハ百濟ノ內ノ島ナリ。

遂有兒息ノ註ニ「兒息已見上文」トアルハ、蛇足ナリ。上文ノ二子ハ、田狹ノ臣ノ子、コノ兒息ハ皇子ヲ云ヘルニテ、磐城ノ皇子星川ノ稚宮ノ皇子ナリ。通證ニ云「田狹拜任那之後、既歷數年、可以觀矣、此紀因事而併記者多」、本書ノ前後ノ文ヲ通觀スルニ、田狹ノ任那ニ往キシハ、數年ノ前ニアリテ、弟君等ノ往キタルハ、コノ年ノ事ナルベシ。

日鷹ノ吉士ハ、九年ノ條ニ難波ノ日鷹ノ吉士トモアリ。吉士ハ、第三十二章ニ記傳ヲ引ケル如ク、或ハ韓國ニ遣サレ、或ハ韓人ノ參レルヲ接待スルナド、凡テ外交ノ事ニ仕奉ル人ニ賜ヘリシ品ナリ。其ノ稱ノ始メテ見エタルハ、古事記ニ難波ノ吉師部之祖伊佐比ノ宿禰、又阿知吉師和邇吉師、神功紀ニハ伊佐比ノ宿禰ヲ吉師ノ祖五十狹茅ノ宿禰ト書キ、又葛野城首ノ祖熊之凝ノ註ニ「一云、多呉吉師之遠祖也」ト見エ、次ニ安康紀ニ難波ノ吉師日香蚊、雄略紀ニハ日鷹ノ吉士ノ外ニ、難波ノ吉士赤目子、繼體紀ニ吉士老（オユ）調ノ吉士、敏達紀ニ吉士金子（カネコ）吉子譯語（ヲサ）彥（ヒコ）小黑ノ吉士難波ノ吉士木蓮子（イダビ）、皇極紀ニ國勝ノ吉士水雞坂本ノ吉士長兄、天智紀ニ岐彌ノ吉士針間、天武紀ニ三宅ノ吉士入石草香部ノ吉志大形ナドアリ。此等ノ吉士ハ、多クハ韓國ヨリ參リシ人ノ裔ナレドモ、難波ノ吉士三宅ノ吉士ハ、皇別ニテ、吉士トナレルナリ。コノ二氏ノ事ハ、猶八年ノ條ニ云フベシ。堅磐ハ、日鷹吉士ノ名、固安錢ハ、別ニ一人ノ韓人ナリ。

吾礪ハ、用明紀ニ阿都ト書ケリ。和名抄河內ノ國澁川郡ノ鄕名ニ跡部〇〇〇トアリ集解ニ云「河內志曰、跡部已廢、名存龜井村」、廣津（ヒロキツ）邑ハ、姓氏錄河內ノ國皇別ニ「廣來津公上毛野朝臣同祖、豐城入彥命之後也、三世孫赤麻呂、依家地名負尋來津君者」トアレバ、吾礪モ廣津モ、河內ノ地名ナルコト著シキヲ、コヽニ倭ノ國トアルハ、イカヾ。集解ニ「按此時大和國屬邑、後割隸河內國」ト云ヘレドモ、澁川ノ郡ハ、河內ノ西邊ニシテ、大和トハ地續キニモアラザレバ、屬邑トナルベキ由ナシ。

東ノ漢ノ直掬ハ、應神紀ナル都加ノ使主ナリ。

陶部（スヱツクリ）高貴ノ裔ノ事ハ、物ニ見エズ。

鞍部。河內ノ國澁川ノ郡ニ鞍作村アルハ、コノ堅貴等ノ住ミタリシ所カ。敏達紀ニ見エタル鞍部ノ村主司馬達等ハ、堅貴ノ裔ニヤ。又坂上系圖ニ引キタル姓氏錄ニ、鞍作ノ村主ヲ東ノ漢ノ氏ノ族類トシタレバ、鞍作ノ村主ハ、コノ鞍部トハ別族ナランカ。

畫部因斯羅我。姓氏錄左京諸蕃ニ「大崗忌寸、出自魏文帝之後安貴公、大泊瀨幼武天皇（諡雄略）御世、率四部衆歸化、男龍（一名辰貴）美繪工、小泊瀨稚鷦鷯天皇（諡武烈）美其能、賜姓首、五世孫勤大壹惠尊、亦工繪才、天命開別天皇（諡天智）御世、賜姓畫師、亦高野天皇神護景雲三年、依居地、改賜大崗忌寸姓也」、「幡文造、大岡忌寸同祖安貴公之後也」、コノ譜ニ、始メテ歸化シタル人ノ名脫チタリ。即紀ノ因斯羅我ナルベシ。續紀靈龜元年「從六位下畫師忍勝姓、改爲倭畫師」、神護景雲三年五月「左京人正六位上倭畫師種麻呂等十八人、賜姓大崗忌寸」。大崗ハ、大和ノ地名ニシテ、添上郡ニアリ。種麻呂ノ先祖ノ住ミタル所ナルベシ。氏族志大崗氏ノ條ニ云「類聚國史、桓武帝ノ時、攝津西成郡人僧景國、歸俗、復姓名大國忌寸木主、三代實錄、清和帝時、有大國忌寸禰雄、然大國忌寸、姓氏錄無所見、恐大岡之訛、附待後考」、マタ「又有宿禰姓、仁明帝時、有木工助大岡宿禰豐繼（續日本後紀）」幡文氏ハ、續紀文武天皇ノ時「幡文通賜姓造」トアリ、又姓氏錄河內ノ國諸蕃ニ「河內畫師上村主、同祖陳思王植之後也」トアルハ、因斯羅我ニ從ヒテ參リタル畫部ノ裔ニモアランカ。コノ畫師ノ同族ニハ、御枝ノ連、河原ノ掠人、河原ノ史、河原ノ連、上ノ村主、上ノ連、廣階ノ連、廣階ノ宿禰、平松ノ連、筑紫ノ史、

野上ノ連等アリ。委シク第○○○章ニ云フベシ

錦部安那。河內ノ國ニ錦部ノ郡アリ、近江ノ國東淺井郡ニ錦織ノ鄉アリ。皆錦部等ノ住ミタルニ由レル地名ナリ。姓氏錄諸蕃ニ、錦部氏二族アリ。一ハ漢人ノ裔ニシテ、一ハ百濟人ノ裔ナリ。漢人ノ裔ナルハ、右京諸蕃漢ノ部ニ「錦織村主、韓國人波努志之後也」、山城ノ國諸蕃漢ノ部ニ「錦部村主、錦織村主同祖、波能志之後也」トアリテ、氏族志錦部氏ノ條ニ「按本書（姓氏錄）以波努志爲韓人、然列諸漢土部、卽其爲漢人明矣、日本書紀雄略紀、以百濟所獻新漢錦部定安那錦譯語卯安那等、遷居上桃原等地、據此、錦部蓋其後也、本書及續日本後紀、以志賀春良等姓、爲漢獻帝後、而錦曰佐錦村主族、亦賜此姓、則其爲同族可知、波努志、蓋亦獻帝裔也」ト云ヘリ。コノ考ヘハ大カタ然ル事ナレドモ、定安那錦ノ錦ノ字ヲ下ニ附ケテ、錦ノ譯語トシタルハ、非ナリ。錦ノ曰佐ハ、錦部ノ族ヨリ譯官ニ仕奉レル者ノ姓ニシテ、後世ニ出デタルモノナルニ、コヽハ錦部譯語ナド云フ職業ヲ擧ゲタルノミニテ、姓トシタルニ非ザレバ、錦ノ譯語ト云フ由ナシ。定安那錦ト云フ名モ、穩カナラズ聞ユレバ、集解定安那ノ註ニ「原有錦字、衍、蓋以有錦部錦誤耳」ト云ヘルニ從フベシ。

サテ錦部ノ村主ノ同族ハ、錦ノ曰佐錦ノ村主ノ外ニ、大友ノ村主、槻本ノ村主、穴太ノ村主、永野ノ忌寸ナドアリテ、何レモ近江ノ國ニ住ミタリ。錦村主ハ、即錦部ノ村主ニシテ、錦ヲにしこりト訓ムナリ。三代實錄ニ、貞觀年中、近江ノ國淺井郡ノ節婦錦ノ村主清常刀自アリ。大友ノ村主ハ、推古紀ニ大友ノ村主高聰、稱德紀ニ近江ノ國人大友ノ村主人主、三代實錄貞觀年中施藥院使大友ノ村主家主アリ。氏族志ニ「淸和帝時、有近江滋賀郡擬大領大友村主黑主、及擬少領夜須良麻呂、天臺座主記○按皇胤紹運錄、以黑主爲帝大友之後、誤。村上帝時、有大友兼平、朝野羣載一條帝時、有大膳少屬大友忠節、類聚符宣鈔又有大友但波史大友槻本連等姓、蓋同族也、三代實錄、東大寺正倉院文書、聖武帝時、有近江人大友但波史吉備麻呂、其族皆貫于滋賀郡古市鄉、滋賀郡、據和名抄同時、有大田史多久米、大田史亦同宗也、東大寺正倉院文書○本書、又有大友漢人氏、疑亦同族也。淸和帝時、大友槻本連眞吉、爲伊勢少目、三代實錄」槻本ノ村主ハ、天武紀朱鳥元年「槻本村主勝麻呂、賜姓曰連」、氏族志ニ「聖武帝時、有志我采女槻本連若子、東大寺正倉院文書醍醐朱雀間、有僧延昌、加賀江沼郡人、槻本氏、天臺座主記、蓋是族也、一條帝時、有左兵衞府生槻本勝枝、外記日記鳥羽帝時、有若狹權目槻本村主正忠、除目大成鈔、後小松帝時、有槻本連國友、薩戒記」穴太村主ハ、姓氏錄未定雜姓右京ニ「志賀穴太村主、後漢孝獻帝男美波夜王之後者、不見」、山城ノ國ニ「穴太村主、曹氏、寶德公之後者、不見」トアリ。美波夜王モ、寶德公モ、甚怪シキ名ナルガ中ニ、寶德公ハ、右京諸蕃ナル高向ノ村主雲梯ノ連ノ譜ニ、魏王曹操ノ後ト見ユレバ後ニ引ケル志賀ノ忌寸ノ譜、マタ續後紀ニ、後漢ノ獻帝ノ後ト云ヘルニ合ハズ。志賀ノ穴太ノ村主ノ譜ハ、稍之ニ勝レリ。氏族志ニ云「聖武帝時、有近江坂田郡主帳穴太村主麻呂、東大寺古文書、醍醐帝時、有左京七條令穴太村主春眞、東寺文書一條帝時、有正六位上穴太村主道忠、類聚符宣鈔、又有穴太史老、孝謙帝時、爲近江甲賀郡員外少目東寺文書有穴太宿禰愛親、一條帝時、爲豐後守、朝野羣載並不詳其族也」。サテ此等ノ諸氏ノ同族ナルコトハ、次々ノ文ヲ見テ知ルベシ。續紀延曆六年七月「右京人正六位上大友村主廣道、近江國野洲郡人正六位上大友民曰佐龍人、淺井郡人從六位上錦曰佐周興、蒲生郡人從八位上錦曰佐名吉、坂田郡人穴太村主眞廣等、並改本姓賜志賀忌寸」、後紀延曆十八年三月、近江國淺井郡人從七位下穴太村主眞枝、賜姓志賀忌寸」、姓氏錄攝津國諸蕃ニ「志賀忌寸、後漢孝獻帝之後也」、續後紀承和四年二月「近江國人散位永野忌寸石友、散位同姓賀古麻呂等、改本居、貫附左京五條三坊、石友之先、後漢獻帝苗裔也」、同年三月「右京人遣唐知乘船事槻本連良棟、民部少錄同姓豐額等、賜姓安墀宿禰、其先出自後漢獻帝後也」、同年十二月「近江國人左兵衞權少志志賀史常繼、左衞門少志錦村主藥麻呂、越中少目錦部忌寸人勝、太政官史生大友村主弟繼等、賜姓春良宿禰、常繼之先、後漢獻帝苗裔也」、三代實錄貞觀六年八月「近江國犬上郡人左近衞府生春良宿禰諸世、改本居、貫附山城

國愛宕郡」、氏族志永野氏ノ條ニ「仁明帝時、近江野洲郡人永野忌寸石友賀古麻呂等、貫附左京、（續日本後紀、野洲郡據三代實錄）陽成帝時、石友子孫一百五十餘人、以穴太曰佐浦吉訴、還附原籍、後復隷左京、（三代實錄）穴太曰佐、蓋同族也、又有三津首、桓武帝時、有僧最澄、近江志賀郡人、三津首氏子、其先出自漢主協（獻帝）裔孫登萬貴王云、（傳敎行業記、僧綱補任、）」。

百濟人ノ裔ナル錦部氏ハ、河內國諸蕃ニ「錦部連三善宿禰、同祖百濟國速古大王之後也」、和泉ノ國諸蕃ニ「錦部連三善宿禰同祖」トアリ。舊姓ハ、錦織造ニテ、天武紀十年「錦織造小分、賜姓曰連」、十二年「錦織造、賜姓曰連」、又其ノ族ニ錦部史ト云ヒシモノアリト見エテ、續紀天平神護元年「河內國錦部郡人從八位上錦部毘登石次、正八位下錦部毘登大島、大初位下錦部毘登眞公、錦部毘登高麻呂等二十六人、賜姓錦部連」トアリ。其ノ後宿禰ニ改マレリト見エテ、類聚符宣鈔ニ、醍醐天皇ノ時ニ、左大史錦部宿禰春蔭、圓融天皇ノ時ニ、主稅ノ助錦ノ宿禰茂明、左少史錦ノ宿禰時佐ナドアリ。三善ノ宿禰ハ、右京ノ諸蕃ニ見エテ「百濟國速古大王之後也」トアリ。氏族志ニ云、醍醐帝時、有三善宿禰淸行、以文學顯達、改賜朝臣、所謂善相公者也、（本朝文粹、雜言奉和、公卿補任）圓融帝時、左少史錦宿禰時佐、請改姓三善朝臣、許之、（類聚符宣鈔○本書、時佐自言、其先出自漢東海王之後波能志、與三善朝臣同宗、按姓氏錄、錦部有二、一則連姓、出自百濟速古大王、與三善氏同族、一則村主姓、列之漢土部、而爲韓人波努志之後、其說頗可疑、然考續日本後紀、即波努志、蓋後漢獻帝之後、而非百濟之族、今時佐云々、亦似可證、而忽言與三善氏同宗、其言自爲矛盾、不可信也、故不取其說、附俟後考。）淸行後裔有三善康信、從源賴朝、贊決軍政、爲問註所執事、子孫世襲樞要、貴顯於鎌倉矣、（東鑑、關東評定傳）其族有町野矢野太田飯尾一宮布施等氏、（作者部類、三善系圖、太平記○布施系圖云、靑行子僧淨藏、生二子、一爲布施氏祖、一爲飯尾氏祖、按帝王編年記、淨藏亂行、有子二人、一人爲僧、一人幼少、昇殿寵幸者、爲式部大輔大江朝臣子、據此、淨藏子一人、借蔭出身仕朝、而布施飯尾蓋出自此、系圖謂二子分爲二氏祖者、恐妄、故不取。）」。

サテコノタビ參來ツル錦部ノ裔ハ、河內ナル錦部ノ連ナルカ、近江ナル錦部ノ村主ナルカ。鞍部ハ、河內ノ地名ニ殘リ、譯語ノ裔ハ、河內ニ存シ、畫部ノ裔ハ、大和河內ニ見エタレバ、コノ錦部ノ裔モ、河內ナル錦部連ナラントモ思ハルレドモ、錦部ノ連ハ、百濟人ノ裔ニシテ、新ノ漢ト云ヘルニ合ハザレバ、漢ノ獻帝ノ苗裔ト稱スル錦ノ部ノ村主ヲ以テ、錦部定安那等ガ後ト見ルベシ。

譯語ハ、をさト訓ム。推古紀ニ通事ト書キタルト同ジ意ナリ。記傳（四十四ノ四十九丁）ニ云「袁佐と云は、或人韓語なり云、然もあるべし。欽明紀姓氏錄和名抄筑前ノ鄕ノ名などは、曰佐とあるは、假字なり。但シ此レも韓國より書る字なるべし」。コノ時參レル譯語卯安那ノ裔ハ、姓氏錄河內ノ國諸蕃ニ「下曰佐、漢高祖男齊悼惠王肥之後也」トアル、コレナルベシ。外ニ木ノ曰佐、調ノ曰佐、上ノ曰佐ナドアレドモ、皆百濟人ノ裔、又錦ノ曰佐ハ、錦部氏ノ派ナレバ、別族ナリ。持統紀ニ進廣參下ノ譯語諸因アリ。續紀養老三年「少初位下河內手人大足、賜下譯姓、除雜戶號」ト見ユ、又下ノ田佐ノ同族ハ、右京諸蕃ニ「檜前村主、漢高祖男齊王肥之後也」、コノ下田佐ノ條ノ次ニ「高道連、同上」、後紀弘仁二年正月「河內國人玉作鯛釣、賜姓高道連」續後紀天長十年「高道連鯛釣改姓宿禰叙從五位下」拾芥鈔ニ高道ノ朝臣アリ後ニ朝臣ニナレルニヤ。

上桃原下桃原ハ、推古紀ニ桃原ノ墓アリ。集解ニ云「聖德太子傳略備謙曰、河內國石川東條、太子御廟東南、即此、據是、則河內國石川郡」、眞神原ハ、集解ニ云、「大和志曰、高市郡神名備山、在飛鳥村上方、有三諸山神丘等支別、其野曰眞神原、又淺小竹原」。

漢ノ手人部ハ、即新ノ漢ノ才伎ニテ、陶部鞍部畫部錦部等ヲ云ヘルナリ。

衣縫部ノ事ハ、後ノ十四年ノ所ニ云フベシ。

宍人部ハ、姓氏錄未定雜姓山城ノ國ニ「國背宍人、秦始皇帝之後者不見」、トアリ。

コノ年、羅紀ニ「春二月、倭人侵歃良城、不克而去、王命伐智德智、領兵伏候於路、要擊大敗之、王以倭人屢侵疆場、緣邊築二城」トアリ。紀ニ「弟君不伐而還」トアルニ合ハズ。

（第五）八年 宋ノ大明八年「春二月、遣身狹村主青檜隈民使博德、使於吳國」。

コノ二人ノ事ハ、二年ノ條ニ「天皇以心爲師誤殺人衆、唯所愛寵史部身狹村主青檜隈民使博德等也」トアリテ、天皇ノ嬖臣ナリキ。史部ハ、史ハ書人ノ義ナルコト、第三十二章ニ云ヘル如ク。部ハ羣又伴ト云フコトニテ、言ノ原ハ、記傳七ノ八十丁ニ「牟禮を約たるに通はしたる言なり。上達部と書てカムダチメと訓ム類をも思ふべし」トアリ、書人ニ仕奉レル人數多アリケル故ニ、其ノ徒輩ヲ、總ベテ史部ト云ヘルナリ。史ハ、後ニ蕃人ノ始トナリタレバ、史部モ、ソノ姓ナル人ドモヲ總ベタル名トナリタレドモ、本ハ、其ノ姓ナラデモ蕃人ニテ文書ク業ヲ知レルモノヲバ、皆史部ト云ヒシナリ。

身狹ノ村主。身狹ハ、地ノ名ヲ以テ氏トシタルナリ。欽明紀ニ「遣蘇我大臣稻目宿禰等於倭國高市郡、置韓人大身狹屯倉」、天武紀ニ、牟狹社、神名帳ニ大和ノ國高市ノ郡牟佐坐神社ナドアリテ、記傳四十四ノ三十二丁ニ「今世に三瀨と云處なり。三瀨は、即チ牟佐を訛れるなるべし。牟佐坐神社も、今三瀨にある境原ノ天神と云社なりと云り。古へは、此御陵（宣化天皇身狹桃花島坂下陵）のあたりまでも、身狹の内なりけむ」ト云ヘリ。村主ハ、すぐりト訓メリ。和名抄ノ鄕名ニ、伊勢ノ國安濃ノ郡村主須久利トアルハ、其ノ證ナリ。姓序考ニ「成務紀四年の詔に、國郡立長、縣邑置首と見えし時、置れし職號なるが、姓になれるなり。村主の名の正しくみえしは、孝德紀大化二年の詔に、別臣連伴造國造村首とあるぞ始なりける。村主を此に村首と書くにて、成務紀の縣邑置首は、縣主村主の二つを云る事、又村主を村首とあるを以て、主首相通へる事著し。姓氏錄に、縣使主を縣使首とかけるにて知べし」トアレドモ、孝德紀ナル村首ハ、村ノ首ニシテ須久利トハ讀ムベカラズ。姓氏錄ナル縣ノ使ノ首モ、縣ノ使ハ氏、首ハ尸ニテ、縣ノ使主ニハ非ズ。民使ノ首 姓氏錄 民使ノ毗登 續紀寶龜元年 檜ノ前ノ民使ノ首 正倉院文書 田使ノ首 三代實錄仁和二年 ナド云フ姓アルニテ知ルベシ。栗田寬氏ノ氏族考モ、姓序考ノ說ヲ採リテ「村主は、諸國の邑里の長として、其地を治る職なりしが、後に姓となれるなるべし。名義は、俊秀の義なるを、文字は、其村中の主首となる俊秀人を撰て、村の主とする由にて、村主とは書るなり」ト云ヘレドモ、猶其ノ自註ニ「一說に、須久理は、韓語にて、韓國の官名なりしが、こなたにうつりしを、やがて姓にせられしから、此姓諸蕃にのみ多しと云るに因て、又按ふに、天智紀二年に、白村江あり、新羅の地名なるが、村をスキと訓み、又欽明紀二年、皇極紀元年、ともに、主をニリムとも訓り。然らば、村主はスキニリムの合語なるを、キニをキに約め、キをクに轉じて、スクリとなれるにはあらじか、なほよく考ふべし」トアリ。神功紀ニ「意流村、今云州流須祇」トアリテ、須祇ハ、村ノ韓語ナルコト明カナレバ、須久利ハ、須祇ニ、或ル詞ノ附キタル韓語ヨリ出デタル尸ナルベシ。コノ尸ハ、姓氏錄諸蕃ニ十餘氏見エタレドモ、皇別神別ニハ、一氏モ見エズ。サテ身狹村主ハ、姓氏錄左京諸蕃ニ「牟佐村主、吳孫權男高之後也」、續紀和銅三年ニ、正八位下牟佐村主相摸アリ、又姓氏錄未定雜姓ノ部ニ「牟佐吳公、吳國王子青王之後者、不見」トアル青王ハ、即コノ青ニシテ、吳王孫權ノ裔ナルヲ、吳王ノ子ト誤リタルナリ。

檜ノ隈ノ民使。檜ノ隈モ、地ノ名ヲ以テ氏トシタルナリ。下文ニ檜ノ隈野、欽明紀ニ檜ノ隈ノ邑、天武紀ニ檜隈寺、和名抄ニ大和ノ國高市ノ郡檜ノ前 比乃久末 諸陵式ニ「檜隈諸陵、並在高市郡」ナド見エテ、今モ檜ノ隈村アリ。民使ハ、尸ノ如ク聞ユレドモ、外ニハ然ル尸モ見エズ。姓氏錄山城ノ國諸蕃ニ「民使首、高向村主、同祖寶德公之後也」、續紀寶龜元年「以西市員外令史正八位下民毗登日理、權任會賀市司」、正倉院文書ニ、山背ノ國愛宕郡ノ人檜ノ前ノ民使ノ首志豆米賣ナドアルニ依レバ、檜ノ隈ノ民使ハ、氏ニテ、尸ハ無カリシヲ、後ニ首ニナレルナルベシ。又姓氏錄攝津ノ國諸蕃ニ「檜前忌寸、石占忌寸同祖、阿智王之後也」氏族志檜前氏ノ條ニ、檜ノ隈ノ民使ハ、是ノ族ナラント云ヘリ。續紀寶龜三年、坂上ノ大忌寸苅田麻呂等ノ上言ニ「凡高市郡內者、檜前忌寸及十

七縣人夫、滿地而居、他姓者、十而一二焉」トアレバ、檜ノ隈ノ民使氏モ、コレラノ黨類ヨリ別レタル氏ナルベシ。民使ノ首ハ、姓氏錄ニ高向ノ村主同祖トアリテ、高向ノ村主ノ譜ニハ「魏武帝太子文帝之後也」トアレドモ、坂上系圖ニ引ケル姓氏錄ニ、阿智王ニ從ヒテ歸化シタル漢人七姓ノ中ナル段姓ヲ以テ、民使ノ首等ガ祖トセリ。又同書ニ、多姓ハ檜ノ前ノ調ノ使等ガ祖トナリ、高姓ハ檜ノ前ノ使主ガ祖トナレリトモアレバ、檜ノ前ノ調ノ使、檜ノ前ノ使主ナド云ヘルモ、檜ノ前ノ民使ト同ジ黨類ナルベシ。姓氏錄右京諸蕃ナル檜ノ前ノ村主ハ、上ニ云ヘル如ク、下ノ曰佐氏ト同族ニテ、七年ニ歸化シタル譯語卯安那ノ裔ト見ユレバ、檜ノ隈ノ民使トハ別族ナリ。

吳ノ國

（第六）同ジ年（新羅ノ慈悲麻立干七年、高句麗ノ長壽王五十二年、）ニ「自天皇即位、至于是歲、新羅國背誕、苞苴不入、於今八年、而大懼中國之心、脩好於高麗、由是高麗王遣精兵一百人、守新羅、有頃、高麗軍士一人、取假歸國、時以新羅人爲典馬、（典馬此云于麻柯毗）而顧謂之曰、汝國爲吾國所破、非久矣、（一本云、汝國果成吾土、非久矣、）其典馬聞之、陽患其腹、退而在後、遂逃入國、說其所語、於是新羅王乃知高麗僞守、遣使馳告國人曰、人殺家內所養雞之雄者、國人知意、盡殺國內所有高麗人、惟有遺高麗一人、乘間得脫、逃入其國、皆具爲說之、高麗王即發軍兵、屯聚筑足流城、（或本云、都久斯岐城、）遂歌舞興樂、於是新羅王夜聞高麗軍四面歌舞、知賊盡入新羅地、乃使人於任那王曰、高麗王征伐我國、當此之時、若綴旒然、國之危殆、過於累卵、命之脩短、亦所不計、伏請救日本府行軍元帥等、由是任那王勸膳臣斑鳩（斑鳩、此云伊柯屢餓、）吉備臣小梨、難波吉士赤目子、往救新羅、膳臣等未至營止、高麗諸將未與膳臣等相戰皆怖、膳臣等乃自力勞軍、令軍中促爲攻具、急進攻之、與高麗相守十餘日、乃夜鑿險爲地道、悉過輜車、設奇兵、會明、高麗謂膳臣等爲遁也、悉軍來追、乃縱奇兵、步騎夾攻、大破之、二國之怨、自此而生、（言二國者、高麗新羅也、）膳臣等謂新羅曰、汝以至弱當至强、官軍不救、必爲所乘將成人地、殆於此役、自今以後、豈背天朝也」。

雞之雄者ハ、大日本史新羅傳ニ「考舊唐書、高麗人頭著折風、形如弁、士人插二鳥羽、新羅諷告、蓋指此乎」。

筑足流城

任那王ハ大加羅國王ナリ。日本府ハやまとのみやけニシテ、皇國ノ宰ノ居ル所ナリ。行軍元帥ハ將軍ト云フニ同ジ。いくさぎみと訓ムベシ。

膳ノ臣ハ、孝元天皇ノ皇子大彥ノ命ノ孫磐鹿六雁（イハガムツカリ）ノ命ノ後ナリ。吉備ノ臣ハ、孝靈天皇ノ皇子稚武彥ノ命ノ曾孫御友別ノ命ノ裔ナリ。

難波ノ吉士ハ、大彥ノ命ノ裔ニシテ、古事記仲哀天皇ノ段ニ、難波ノ吉師部之祖、伊佐比ノ宿禰、神功紀ニモ同ジ人ヲ吉師ノ祖五十狹茅ノ宿禰トアルハ、コノ吉士ノ祖ナリ。今モ攝津國島下ノ郡ニ吉志部村アリ、コレ此ノ氏ノ鄉里ナルベシ。ソノ氏ハ、安康紀ニ、難波ノ吉師日香蚊、其ノ二子ト共ニ、大草香ノ皇子ノ難ニ殉シ、雄略紀十四年「求難波吉士日香蚊子孫、賜姓爲大草香部吉士」、安閑紀ニ「詔難波吉師等、主掌屯倉之稅」、敏達紀ニ、難波ノ吉士木蓮子（イダコ）、天武紀元年ニ難波ノ吉士三綱、同四年「小綿下三宅吉士入石、爲副使、遣于新羅」、同十年正月「草香部吉志大形、賜姓曰難波連」、同十二年十月「三宅吉士草壁吉士、賜姓曰連」、同十三年十二

月「草壁連三宅連、賜姓曰宿禰」、同十四年六月「難波連、賜姓曰忌寸」、續紀慶雲三年十月「從八位上難波忌寸濱足、從七位下三宅忌寸大目、各進位一階」、姓氏錄河內ノ國皇別ニ「日下連阿閉朝臣同祖、大彥命男紐結之後也、日本紀漏」、「大戶首阿閉朝臣同祖、大彥命男比毛由比命之後也、謚安閑御世、河內國日下大戶村造立御宅、爲首仕奉行、仍賜大戶首姓、日本紀漏」、「難波忌寸、大彥命之後也」、「難波、難波忌寸同祖、大彥命之後也」、攝津ノ國皇別ニ「三宅人、大彥命男波多武日子命之後也、日本後紀弘仁四年二月攝津國人正六位上日下部忌寸阿良多加、河內國人從八位上難波忌寸氏主、同姓攝津人正六位上船人、並賜宿禰」ナドアリ。又單ニ吉志ト云フ氏アリ。姓氏錄攝津國皇別ニ吉志、難波忌寸同祖、大彥命之後也」、氏族志吉志氏ノ條ニ「朱雀帝時、有筑後守吉志宿禰公忠、（外記日記）村上帝時、有右大史吉志宿禰公胤、（類聚符宣鈔）或亦是裔也、自註ニ按拾芥鈔、有吉志宿禰、蓋本氏、後賜宿禰、然其本末、不可考也」トアリ。又續紀神龜三年正月「授正六位上多胡吉師手外從五位下」トアリ。コノ氏ハ、姓氏錄ニモ見エザレドモ、其遠祖熊之凝ハ、五十狹茅宿禰ト共ニ神功紀ノ初ニ見エタレバ、コレモ蕃別ニ非ズシテ、吉士ニ仕奉レル氏ナルベシ。

二國之怨自此而生ハ、羅紀ヲ考フルニ、

此ノ條、漢文ノ虛飾ト見ユル所多シ。「新羅王夜聞云々」ハ、漢書高帝紀ノ「羽夜聞漢軍四面皆楚歌、知盡得楚地」ヲ取リ、「當此之時、若綴旒然」ハ、文選冊魏公九錫文、「國之危殆過於累卵」ハ、魏志（同上）カ「吾之危殆、過於累卵」、「命之脩短、太所不計」ハ、世說ノ「天命脩短、故非所計」ヲ採リ、「乃夜鑿險云々」ハ、魏志武帝紀ノ「乃夜鑿險爲地道、悉過輜車、設奇兵、會明賊謂公爲遁也、悉軍來追、乃縱奇兵、步騎夾攻大破之」トアル賊ヲ高麗ト改メ、公ヲ膳臣等ト改メタルノミナリ。「汝以至弱云々」ハ、魏志武帝紀荀彧ノ語ニ「公以至弱當至彊、若不能制、必爲所乘」トアルヲ採レルナリ。

（第七）九年（新羅ノ慈悲麻立干十八年、百濟ノ蓋鹵王二十一年）「春二月甲子朔、遣凡河內直香賜與采女、祠胸方神、三月、天皇欲親伐新羅、神戒天皇曰、勿往也、天皇由是不果行、勅紀小弓宿禰、蘇我韓子宿禰、大伴談連、（談此云箇陀利）小鹿火宿禰等曰、新羅自居西土、累世稱臣、朝聘無違、貢職允濟、逮乎朕之王天下、投身對馬之外、竄跡匝羅之表、阻高麗之貢、呑百濟之城、況復朝聘既闕、貢職莫脩、狼子野心、飽飛飢附、以汝四卿、拜爲大將、宜以王師薄伐、天罰龔行、於是紀小弓宿禰、使大伴室屋大連憂陳於天皇曰、臣雖拙弱、敬奉勅矣、但今臣婦命過之際、莫能視養臣者、公冀將此事、具奏天皇、於是大伴室屋大連具爲陳之、天皇聞悲頽歎、以吉備上道采女大海、賜於紀小弓宿禰、爲隨身視養、遂推轂以遣焉、紀小弓宿禰等行屠傍郡、（行屠、並行、並擊）新羅王夜聞官軍四面鼓聲、知盡得喙地、與數百騎亂走、是以大敗、小弓宿禰追斬敵將陣中、喙地悉定、遺衆不下、小弓宿禰亦收兵、與大伴談連等會、兵復大振、與遺衆戰、是夕、大伴談連及紀崗前來目連、皆力鬪而死、談連從人同姓津麻呂、後入軍中、尋覓其主、從軍覓出問曰、吾主大伴公何處在也、人告之曰、汝主等果爲敵乎所殺、指示屍處、津麻呂聞之、踏叱曰、主既已陷、何用獨全、因復赴敵、同時殞命、有頃遺衆自退、官軍亦隨而却」。

凡河內（オフシカフチ）ノ直ハ、天津彥根ノ命ノ後ナリト云ヘリ。胸方ノ神ハ、古事記宇氣比（ウケヒ）ノ段ニ「天照大御神、先乞度建速須佐之男命所佩十拳劒、打折三段而、奴那登母母由良爾、振滌天之眞名井而、佐賀美爾迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、多紀理毘賣命、亦御名謂奧津島比賣命、次市寸島比賣命、亦御名謂狹依毘賣命、次多岐都比賣命。……故其先所生之神、多紀理毘賣命者、坐胸形之奧津宮、次市寸島比賣命者、坐胸形之中津宮、

次田寸津比賣命者、坐胷形之邊津宮、此三柱神者、胷形君等之以伊都久三前大神者也」。多紀理毘賣ノ命ハ、神代紀ニ田心姫ト書キ、市寸島比賣ノ命ハ、市杵島姫、多岐津比賣ノ命ハ、湍津姫ト書ケリ。又第二ノ一書ニハ、市杵島姫ノ命ハ、遠瀛ニ坐シ、田心姫ノ命ハ、中瀛ニ坐シ、湍津姫ノ命ハ、海濱ニ坐スト云ヒ、第三ノ一書ニハ、瀛津島姫ノ命亦名ハ市杵島ノ命、次ニ湍津姫ノ命、次ニ田霧姫ノ命ト叙デ、「即次日神所生三女神者、使降居于葦原中國之宇佐島矣、今在海北道中、號曰道主貴、此築紫水沼君等祭神是也」ト云ヘリ。胷形ハ、今ノ筑前ノ國宗像ノ郡ナリ。奥津宮ハ、記傳ニ云フ「此ノ處は、今奥島と云フ島にて、大島の西北四十八里なりとぞ、又恩賀島ともいふと云り」。中津宮ハ記傳ニ云「此處は、今大島と云、又中ノ島ともいふとも云り。島にて、神湊と云處より三里北の海中に在とぞ。又田島より北三里とも云り」。邊津宮ハ、記傳ニ云「此處は、今田島と云とぞ。或人ノ云、今の宗像ノ宮は、田島とは一里半ばかり隔れり。或は此ノ御社、古へは神ノ湊と云海濱に坐しを、後に今ノ地に移シ奉れりとも云り。信に然らば、古への邊津宮は、神ノ湊にて、名も由シ有てきこゆ。今の田島の地には非るなりけり。猶よく尋ぬべし」。三前ノ大神ハ、神名帳ニ「筑前國宗像郡 宗像神社 三座並名神大」トアリ。コノ神ノ事、應神紀ニモ見エ、履中紀ニモ於筑紫所居三神トアリ。三代實錄貞觀十二年宗像ノ大神ニ幣帛ヲ奉ル告文ニ「我皇太神波、掛毛畏伎大帶日姬乃彼新羅乎降伏賜時爾、相共加力倍賜天、我朝乎救賜比崇賜奈利」。

紀ノ小弓ノ宿禰ハ、紀ノ角ノ宿禰ノ後ナリ。蘇我ノ韓子ノ宿禰ハ、蘇賀ノ石川ノ宿禰ノ孫ニシテ、蘇賀ノ滿智ノ宿禰ノ子ナリ。韓子ハ、繼體紀二十四年ノ註ニ「大日本人娶蕃女所生爲韓子也」トアレバ、蕃女ノ生メル子ナルベシ。大伴ノ談ノ連ハ、太祖ノ功臣道ノ臣ノ命ノ裔ニシテ、大伴ノ室屋ノ大連ノ子ナリ。小鹿火ノ宿禰ハ、記傳二十二ノ三十二丁ニ小弓ノ宿禰ノ子トシテ、「小鹿火宿禰は、紀氏と云ふことも、小弓宿禰の子と云ことも、紀文にあらはには見えざれども、必ズ然るべく聞ゆるなり」トアリ。コハ、下文ノ趣ニヨリテ云ヘルナリ。匝羅ハ、神功紀ノ草羅城、羅紀ノ歃良城ニシテ、今ノ梁山郡ナリ。喙地ハ、神功紀ノ喙ノ國ナリ。紀ノ崗前ノ來目ノ連ハ、

前條ノ續キニ「大將軍紀小弓宿禰値病而薨、夏五月、紀大磐宿禰聞父既薨、乃向新羅、執小鹿火宿禰所掌兵馬船官及諸小官、專用威命、於是小鹿火宿禰深怨乎大磐宿禰、乃詐告於韓子宿禰曰、大磐宿禰謂僕曰、我當執韓子宿禰所掌之官不久也、願固守之、由是韓子宿禰與大磐宿禰有隙、於是百濟王聞日本諸將緣小事有隙、乃使人於韓子宿禰等曰、欲觀國界、請垂降臨、是以韓子宿禰等並轡而往、及至於河、大磐宿禰飮馬於河、是時韓子宿禰從後而射大磐宿禰鞍瓦後橋、大磐宿禰愕然反視、射墮韓子宿禰於中流而死、是三臣由前相競行亂於道、不及百濟王宮而却還矣、於是采女大海、從小弓宿禰喪、到來日本、遂憂諮於大伴室屋大連曰、妾不知葬所、願占良地、大連即爲奏之、天皇勅大連曰、大將軍紀小弓宿禰、龍驤虎視、旁眺八維、掩討逆節、折衝四海、然則身勞萬里、命墜三韓、宜致哀矜、充視喪者、又汝大伴卿與紀卿同國近隣之人、由來尙矣、於是大連奉勅、使土師連小島作冢墓於田身輪邑而葬之後也、由是大海欣悅、不能自默、以韓奴室兄麿弟麿御倉小倉針六口送大連、吉備上道蚊島田邑家人部是也、別小鹿火宿禰、從紀小弓宿禰喪來時、獨留角國、使倭子連連、未詳何姓人、奉八咫鏡於大伴大連而祈請曰、僕不堪共紀卿奉事天朝、故請留住角國、是以大連爲奏於天皇、使留居于角國、是角臣等、初居角國而名角臣、自此始也」。

鞍瓦後橋ハ、クラホネノシヅクラホネト訓メリ。和名抄ニ「鞍橋久良保禰、一云鞍瓦」、萬葉集ニ「阿迦胡

麻爾志都久良宇知意伎」通證ニ「荒井氏曰、鞍瓦、今云居木也、後橋、今云後輪也、古名志都和、左傳昭公射之、中楯瓦、註瓦楯、脊字典器之有横梁者曰橋、延暦年間禁桑棗鞍橋、見日本紀略」。

龍驤以下四句ハ、三國志冊魏公九錫文ヲ取ラレタルニテ、當時ノ詔ノサマトハ聞エズ。

（第八）十年、（宋ノ明帝泰始二年）「秋九月乙酉朔戊子、身狹村主青、將吳所獻二鵝、到於筑紫、是鵝爲水間君犬囓死、（別本云、是鵝爲筑紫嶺縣主泥麻呂犬所囓死、）由是水間君恐怖憂愁、不能自默、獻鴻十侯與養鳥人、請以贖罪、天皇許焉……」。

（第九）十一年、（百濟ノ蓋鹵王十三年）「秋七月、有從百濟國逃化來者、自稱名曰貴信、又稱貴信、吳國人也、磐余吳琴彈壃手屋形麻呂等、是其後也」。

コノ年、（新羅ノ慈悲麻立干十年）羅紀ニ「春、命有司、修理戰艦」。

（第十）十二年、（宋ノ泰始四年）「夏四月丙子朔己卯、身狹村主青、與檜隈民使博德、出使于吳」。

コノ年（新羅ノ慈悲麻立干十一年、句麗ノ長壽王五十六年）、麗紀ニ「春二月、王以靺鞨兵一萬、攻取新羅悉直州城」、羅紀ニハ「春、高句麗與靺鞨、襲北邊悉直城、秋九月、徵何瑟羅人年十五以上、築城於泥河（泥河一名泥川）」。

明年、（百濟ノ蓋鹵王十五年）濟紀ニ「秋八月、遣將侵高句麗南鄙、冬十月、築雙峴城、設大柵於青木嶺、分北漢山城士卒戍之」。

（第十一）十四年、（宋泰始六年）「春正月丙申朔戊寅、身狹村主青等、共吳國使、將吳所獻手末才伎漢織吳織及衣縫兄媛弟媛等、泊於住吉津、是月爲吳客道、通磯齒津路、名吳坂、三月、命臣連迎吳使、即安置吳人於檜隈野、因名吳原、以衣縫兄媛奉大三輪神、以弟媛爲漢衣縫部也、漢織吳織衣縫、是飛鳥衣縫部伊勢衣縫之先也、夏四月甲午朔、天皇欲設吳人、歷問羣臣曰、其共食者誰好乎、羣臣僉曰、根使主可、天皇即命根使主爲共食者、遂於石上高拔原饗吳人……」。

第四十一章　宋齊梁書ノ倭國傳

宋書夷蠻傳ニ「倭國在高驪東南大海中、世修貢職、高祖（武帝）永初二年、詔曰、倭讚、萬里修貢、遠誠宜甄、可賜除授、太祖（文帝）元嘉二年、讚又遣司馬曹達奉表獻方物、讚死、弟珍立、遣使貢獻、自稱使持節都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭國王、表求除正、詔除安東將軍倭國王、珍又求除正倭隋等十三人平西征虜冠軍輔國將軍號、詔並聽」、同書文帝紀元嘉七年正月ノ條ニ「是月、倭國王遣使獻方物」、同十五年ノ條ニ「夏四月己巳、以倭國王珍爲安東將軍」、又「是歲、倭國遣使獻方物」、次ニ夷蠻傳ノ續キニ「二十年、倭國王濟遣使奉獻、復以爲安東將軍倭國王、（文帝紀ニモ、此ノ年ニ「是歲倭國遣使獻方物」）二十八年、加使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事、安東將軍如故、并除所上二十三人軍郡、（文帝紀ニハ、コノ年「秋七月甲辰、安東將軍倭王倭濟進號安東大將軍」）、濟死、世子興遣使貢獻」、孝武紀大明四年ノ條ニ「倭國遣使獻方物」、又傳ノ續キニ「世祖（孝武帝）大明六年詔曰、倭王世子興奕世載忠、作藩外海、稟化寧境、恭修貢職、新嗣邊業、宜授爵號、可安東將軍倭國王、興死、弟武立、自稱使持節都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事安東大將軍倭國王、順帝昇明二年、遣使上表曰、封國偏遠、作藩于外、自昔祖禰、躬擐甲冑、跋涉山川、不遑寧處、東征毛人五十五國、西服衆夷六十六國、渡平海北九十五國、王道融泰、廓土遐畿、累葉朝宗、不愆於歲、臣雖下愚、忝胤先緒、驅率所統、歸崇天極、道逕百濟、裝治船舫、而句驪無道、圖欲見吞、掠抄邊隸、虔劉不已、每致稽滯、以失良風、雖曰進路、或通或不、臣亡考濟、實忿寇讎壅塞天路、控弦百萬、義聲感激、方欲大擧、奄喪父兄、使垂成之功不獲一簣、居在諒闇、不動兵甲、是以偃息未捷、至今欲練甲治兵、申父兄之志、義士虎賁、文武效功、白刃交前、亦所不顧、若以帝德覆載、摧此彊敵、克靖方難、無替前功、竊自假開府儀同三司、其餘悉假授、以勸忠節、詔除使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭王」、（順帝紀ニモ、コノ年「五月戊午、倭國王武遣使獻方物、以武爲安東大將軍」）南齊書東南夷傳ニ「建元元年（齊高帝即位元年）、進新除使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭王武號鎭東大將軍」トアリ。梁書諸夷傳ニハ、讃ヲ賛ニ作リ、珍ヲ彌ニ作リ、又倭王武ノ除授ノ事ヲ叙シテ、最後ニ「高祖（梁武帝）即位、進武號征東大將軍」トアリ。

コレラノ貢獻除授等ノ事ハ、國史ニ聊カモ見エザルノミナラズ、畏クモ我ガ天皇タチノ、支那附近ノ諸小蕃ト等シナミニ、都督將軍ナド云ヘル官爵ヲ受ケ給フベクモアラザレバ、倭王ノ使ト云ヘルモ、皇朝ノ御使ニハ非ザリシコト、論ナシ。サレバ大日本史外國傳ノ序ニ「自隋以前、秦漢之裔、雖有歸化者、而未聞有通使者、而彼史紀我風土物俗、虛實相半、至如載朝貢封爵等之事、則古今所無、蓋當時贋府於任那、分帥臣鎭制

之、時高麗雖稱臣朝貢、而亦世奉彼正朔、受彼封爵、意爲任那帥臣者、亦從而受其封號乎、抑鎭西奸民、以商貨往來者、假名朝使、稱貢調、受封爵、以爲射利之資、而彼史從而錄之乎、要皆不足以取信」ト云ヒ、馭戎慨言ニモ「遠ッ飛鳥宮より穴穗宮までの御代〳〵に、もろこしへ御使つかはして、むつび玉ひしといふこと、さらに皇朝にはしろしめさゞりし事共にて、かの國のつかさなどうけ玉ひしよしなどしるせるは、ましてかたじけなく、かけてもあるまじきわざなり。すべてこれらは、そのかみ韓のから國へまかりゐて、其國々の政とりける日本府の卿などのわたくしのしわざになんありし。さるは、そのころほひ、韓の國々みだれて、皇朝にそむき奉りしものなども有しかば、かの卿たち、わたくしに天皇の御使といひなして、もろこしの王とことかよはし、物などおくりて、かりにそのつかさを受ヶなどもして、隣の大きなる國のいきほひをかりて、さる者共をまつろへしづめんとてのはかりことなどにてありけんもしりがたし」ト云ヘリ。但大日本史ニハ「自隋以前、未聞有通使者」ト云ヘレドモ、應神天皇ハ、阿知ノ使主等ヲ晉ノ國ニ遣シテ縫工女ヲ求メシメ給ヒ、晉帝ヨリ工女四人ヲ與ヘラレ、仁德天皇ノ御世ニハ、宋ノ國朝貢シ、雄略天皇ノ六年ニモ宋人朝貢シ、八年ニハ身狹ノ村主靑ト檜ノ隈ノ民使博德トヲ宋ノ國ニ遣サレ、同十年ニ還リ、又十二年ニ、此ノ二人ヲ再タビ遣サレ、十四年宋ノ使ト共ニ還リタルコトアレバ、此ノ頃皇國ト支那トノ間ニ交通アリシコトハ、疑フベカラズ。彼ノ倭使貢獻ノ事ノ如キハ、倭漢ノ交通既ニ開ケタルニヨリ、任那ノ鎭將等ノ、大國ノ寵命ヲ假リテ、諸韓ヲ鎭撫セントノ卑怯ナル心ヨリ、畏クモ天皇ノ御名義ヲ假リテ、私ニ使ヲ遣シヽナルベシ。

倭王武ノ、宋ノ順帝昇明二年（雄略天皇八年）ニ上レリト云ヘル表文ノ大意ハ、宋朝ノ威靈ヲ假リテ、强敵高句麗ヲ摧カンコトヲ請ヘルナリ。此ノ頃ハ、句麗ノ長壽王巨璉ノ正ニ强盛ナル時ニシテ、我ガ與國ナル百濟ハ、痛ク摧破セラレ、蓋鹵王及王妃王子ハ、屠戮ニ遭ヒ、汶洲、文斤、皆振ハザルニ由リテ、雄略天皇ノ大ニ憤リ給ヒシ折柄ナレバ、前ノ表文ハ、縱令天皇ノ思召ヨリ出デザルニモセヨ、任那ノ鎭將ナドヨリ宋朝ニ差出サンコト、此ノ時ノ情勢ニ於テ、有ルベカラザルコトトハ見エズ。カクテ、此ノ上表ノアリシ翌年（雄略天皇二十三年齊ノ高帝建元元年）ニハ、天皇御自ラ末多ヲ慰諭シ、軍士ヲ遣シテ護送シ、其ノ國ニ歸リテ王タラシメ給ヒ、又別ニ舟師ヲ遣シテ句麗ヲ擊タシメ給ヒケレドモ、勝利モアラデ、是ノ歲ニ天皇崩リマシキ。然ルヲ馭戎慨言ニハ「朝倉宮の御世の七年に、吉備上道臣田狹を任那の國のみこともちとしてつかはしけるに、よしありて、此田狹、新羅とひとつになりて、皇朝にそむき奉りし事あり……。かの昇明二年遣使上表といひてのせたる詞を見るに、さらにそのころの御國人のかけるふみことばのさまにあらず。韓國にてあひはかりて、その國人にかゝせし物之。句麗無道云々といひて、高麗をいたくあしさまにいへるを思へば、かの新羅とひとつになれりし田狹かしわざにや有けん。此時に高麗の皇朝にゐやなかりしことは、見えず。新羅ぞ、かにかくにゐやなかりしかば、天皇御みづからうちにいでまさんとさへおもほしたりき。然るに、かの宋書にのせたる書のおもむきは、これとかへさまなるにても、かの書の皇朝の大御心にあらざりしことは、いちじるき物をや」トテ、カノ昇明二年ノ上表ヲ、其ノ十五年モ前ナル田狹ノ謀叛ノ時ニ置カントスルハ、附會ノ說ニ近シ。

サテ彼ノ表ヲ書カセタル人ハ、誰ニモアレ、宋書南齊書ニ、倭王武ト云ヘルハ、雄略天皇ノ御事ヲ申シタルナリ。又宋書ニ、武ヲ倭王興ノ弟トシタルヲ見レバ、興ハ雄略天皇ノ御兄安康天皇ヲ申シ、又興ヲ倭王濟ノ子トシタルヲ見レバ、濟ハ安康天皇ノ御父允恭天皇ヲ申シタルナリ。珍ト濟トハ、父子トモ、兄弟トモ記サヾレドモ、珍ハ濟ノスグ前ニ在レバ、允恭天皇ノ御兄反正天皇ヲ申シタルナリ。又珍ハ、讃ノ弟トアレバ、讃ハ反正天皇ノ御兄履仲天皇ヲ申シタルニ似タリ。

松下見林ノ異稱日本傳ニハ「讃、略履中諱去來穗別訓、珍、反正諱瑞齒別、瑞珍字形似、故訛曰珍、濟、允恭諱雄朝津間稚子、濟津字形似、故訛稱之、興、安康諱穴穗、訛稱興、武雄略諱大泊瀬幼武、略之也」ト云ヘリ。讃又ハ賛ノ音ハ、いざほわけノざニ近ク、興ノ古音ハ、ひよん又ハひんナレバ、あなほノほニ近キコトハ、サルコトナガラ、此ノ天皇達ノ御名ノ、みづ、つ、たけ等ニ瑞津武等ノ漢字ヲ當テ欽メタルハ、後世ノ事ニシテ、和銅五年ニ奏上セル古事記ニスラ、みづニ水ノ字ヲ用ヒ、たけニ建ノ字ヲ用ヒタル程ナレバ、此等ノ漢字ノ異同ヲ穿鑿スルハ、無用ノ事ナリ。唯珍ハ、珍瑞ト連ナル字ナレバ、みづノ義ヲ表ハシ、濟ハわたりニテ、つノ義ヲ表ハシ、武ハたけノ義ヲ表ハセリト云ハヾ、較穩カナラン。又珍ハ、梁書ニ彌ニ作レバ、みづはわけノ頭ナルみノ音ヲ取リシカトモ思ハル。此等ノ事ハ、愈然リヤ否ヤ、慥ニハ言ヒ難ケレドモ、支那交通ノ爲ニ、此ノ天皇達ニ漢メキタル御名ヲ負ハセ奉ルニ、眞ノ御名ノ義カ音カニ依リケンコトハ、强チ無シトハ謂フ可カラズ。

右ノ五王ヲ雄略以上五帝ト假定シテ、其ノ時代ヲ古事記ノ年紀ニ對照スレバ、大抵ハ善ク合ヘリ。唯宋書ニ倭讃ト見エタルハ、履仲天皇ニハ非ズシテ、仁德天皇ニ當レリ。仁德天皇ノ御名ハ大さゞきナレバ、さゞノ音ニ由リテ、讃ト申シタルナリ。後ノ世ノ事ナガラ、持統天皇ノ御名ヲ鸕野讃良皇女ト申シテ、さゝノ音ニ讃ノ字ヲ用ヒタルモ、コレト同例ナリ。履中天皇ハ、在位モ短ケレバ、宋書ニハ、此ノ一代ヲ脱シ、其ノ御弟ナル反正天皇即珍ヲ以テ、直ニ讃ニ接シ、且誤リテ讃ノ弟トナセルナリ。珍濟ノ時代ハ、反正允恭二帝ノ御世ニ善ク合ヘリ。晉書安帝紀義熙九年ノ處ニ「高句麗倭國並獻方物」トアルハ、應神天皇ノ御世、其ノ御使ハ、阿知ノ使主ナルベキコトハ、第三十四章ニ云ヘルガ如シ。宋書倭國傳ニ「詔曰、倭讃、萬里修貢云々」トアルハ、宋ノ初ニ入貢シタルヲ云ヘルニテ、義熙九年ノ貢獻トハ、別事ナリ。然ルヲ、南史七十九夷貊傳ニ「晉安帝時、有倭王讃、遣使朝貢」ト記シタルハ、宋書ナル倭讃ノ修貢ヲ、晉書ナル義熙九年ノ事ニ推當テタル誤リニシテ、其ノ實ハ、晉ノ安帝ノ時ハ、未ダ仁德天皇ノ御世トハナラザリシナリ。又宋書ニ「世祖大明六年、詔曰、倭世子興云々」トアル興ハ、安康天皇ヲ申シヽナレドモ、大明六年ハ、雄略天皇ノ六年ニ當レリ。興ト云フ名カ、大明六年ト云フ年號カノ中、一ツノ誤リアルベシ。古事記ノ年紀ト漢史ノ倭國五王ノ時代ト大抵合ヘルコトハ、左ノ表ヲ見レバ、甚明カナリ。

干支	神武紀元	日本紀ノ年紀	古事記ノ年紀	漢史ノ年紀	漢史ノ倭國
癸丑	一〇七三	允恭天皇二年	應神天皇御歲五十一歲	晉安帝義熙九年	晉書本紀、倭國獻方物。南史列傳、晉安帝時、有倭王讃、遣使朝貢。
戊午	一〇七八	允恭天皇七年	甲午年、應神天皇崩、甲午蓋戊午之誤。	晉安帝義熙十四年	
辛酉	一〇八一	允恭天皇十年	仁德天皇三年	宋武帝永初二年	宋書列傳、詔曰、倭讃萬里修貢、遠誠宜甄、可賜除授。
乙丑	一〇八五	允恭天皇十四年	仁德天皇七年	宋文帝元嘉二年	宋書列傳、讃又遣司馬曹達、奉表獻方物。
丁卯	一〇八七	允恭天皇十六年	仁德天皇崩	宋文帝元嘉四年	
庚午	一〇九〇	允恭天皇十九年	履仲天皇三年	宋文帝元嘉七年	宋書本紀、倭國王遣使獻方物。
壬申	一〇九二	允恭天皇二十一年	履仲天皇崩	宋文帝元嘉九年	宋書列傳、讃死、弟珍立、遣使貢獻云々、詔除安東東將軍倭國王云々。
丁丑	一〇九七	允恭天皇二十六年	反正天皇崩	宋文帝元嘉十四年	
戊寅	一〇九八	允恭天皇二十七年	允恭天皇元年	宋文帝元嘉十五年	宋書本紀、夏四月己巳、以倭國王珍爲安東將軍。又云、是歲、倭國遣使獻方物。
癸未	一一〇三	允恭天皇三十二年	允恭天皇六年	宋文帝元嘉二十年	宋書列傳、倭國王濟遣使奉獻、復以爲安東將軍倭國王。

辛卯	一一一一	允恭天皇四十年	允恭天皇十四年	宋文帝元嘉廿八年	宋書本紀、秋七月甲辰、安東將軍倭王倭濟進號安東大將軍。宋書列傳、加使持節都督六國諸軍事、安東將軍如故。
癸巳	一一一三	允恭天皇崩	允恭天皇十六年	宋文帝元嘉三十年	
甲午	一一一四	安康天皇元年	允恭天皇崩	宋孝武帝孝建元年	宋書列傳、濟死、世子興遣使貢獻。
丙申	一一一六	安康天皇崩	安康天皇二年	宋孝武帝孝建三年	宋書本紀、一倭國遣使獻方物。
庚子	一一二〇	雄略天皇四年		宋孝武帝大明四年	宋書列傳、詔曰、倭世子興云々、新嗣邊業、宜授爵號、可安東將軍倭國王。
壬寅	一一二二	雄略天皇六年		宋孝武帝大明六年	宋書列傳、興死、弟武立云々。
戊午	一一三八	雄略天皇二十二年		宋順帝昇明二年	宋書本紀、五月戊午、倭國王武遣使獻方物。宋書列傳、遣使上表云々、詔除使持節都督六國諸軍事安東大將軍倭王。
己未	一一三九	雄略天皇崩	己巳年、雄略天皇崩、己巳蓋己未之誤。	齊高帝建元元年	南齊書列傳、進新除使持節都督六國諸軍事安東大將軍倭王武號鎭東大將軍

彼ノ倭國王ノ官爵ナド云ヘル者ハ、本ヨリ皇朝ニハ知シメザルコトナレドモ、其ノ官爵ヲ當時高句麗百濟ノ王タチノ、宋濟ノ朝ヨリ受ケタル官爵ニ比ベテ見ルニ、任那ノ鎭將ノ諸韓ニ及ボセル勢威ノ程、推料ラルヽナリ。其ハ、

（以下闕）

校正増注元親征録

校正增注元親征録

校正增注元親征録

明治卅三年五月淸國兩湖書院の助教、陳毅氏前約を履んて遙に先生に贈るに何李沈三氏合校の元親征錄を以てす。旣にして史學會に同書飜刻の議起る、先生乃ち自ら進んて更に增注して以て完璧と爲し、同會叢書の一として之を上梓せんと欲し、爾來拮据約そ二年、略ぼ其の業を畢られたり。本書卽ち是なり。然るに是より先き、內藤湖南氏新に淸儒文廷式より蒙文元朝祕史の寄贈を受け、特に先生の爲めに一部を影寫せしめて東京高等師範學校に贈らる、時に卅四年十二月なり。先生乃ち之を讀み、從來行はれたる明譯祕史の誤脫少からざるを知り、決然自ら之が全譯に從ひ、絕倫の精力を傾注して遂に完成せられしもの、卽ち、かの有名なる成吉思汗實錄なり。先生生前親しく編者に語りて曰く、祕史の新譯今將に成らんとす、予が增注元親征錄引く所の祕史の文は、悉く此新譯に據りて改められざるべからずと、乃ち深く筐底に藏して之が大成を他日に期せられき。史學會飜刻の事遂に止みしは蓋し之に由れるなり。然るに新譯祕史成れるの後、幾もなくして先生簀を易へ本書改訂の業を果されざりしは、實に學界の大恨事といふべし。想ふに、吾人は成吉思汗實錄卷頭の序文によりて先生の精深なる學風を窺ひ、巧妙なる譯文によりて稀有の文才と絕倫の精力とを知るを得たるも、未だ以て先生の蒙古史に關する硏究の細目に就いて聽くを得ざるの恨ありき。今、本書の增注を見るに、博引旁搜能く諸家の長を取り短を捨て、論證明晰所謂快刀亂痲を斷つの槪あり。成吉思汗の偉業は殆んど此一書に盡き、先生の高論卓說は槪ね本書に收められたりといふも不可なきに似たり。乃ち本書は先生の未定稿なりしに拘はらず、敢て斯學の爲めに之を公にす。若し本書の讀者にして、常に成吉思汗實錄を參照するの用意を缺くことなくんば、先生亦深く吾人の此擧を尤め給はざるべし。印刷成るに及んて

一言本書上梓の趣旨を辯じ、併せて本書作成の由來を考ふと云爾。

編者識

附言

本書の稿本は、已に淨書を經、直に印刷に附するを得べきまでに整へられたり。然るに本文中、當に接續すべくして而も行を異にしたるもの往々にして之あり、今その何の故たるを知る能はず。乃ち原形を存し、敢て私意を以て之を改めず。

原文皆句讀の外に訓點を施し、人名には右旁に單線、地名には左旁に單線、部族名には左旁に複線を施す。然れども印刷の簡便を計りて訓點を省き、又悉く旁線を削り、たゞ名詞の連續するものに在りては、其間に黑圈點を附し、以て一名なるか、數名なるかを明にす。句讀點の如きは固より一に原本に從ふ。

編者又識

欽定四庫全書提要。

皇元聖武親征錄一卷。兩淮鹽政採進本。

不著撰人名氏。首載元太祖初起、及太宗時事。自金章宗泰和三年壬戌、始紀甲子、迄於辛丑、四十年。史記元世祖中統四年、參知政事修國史王鶚、請延訪太祖事蹟、付史館。此卷、疑卽當時人所撰上者。其書、序述無法、詞頗蹇拙。又譯語譌異、往往失眞、遂有不可盡解者。然以元史較之、所紀元初諸事實、大概本此書也。史言太祖滅國四十、而其名不具。是書、亦不能悉載。知太祖時事、世祖時已不能詳、非盡宋濂王褘之掛漏矣。

校正元聖武親征錄序。

元聖武親征錄、予始見於徐星伯太守處。相傳爲錢竹汀宮詹藏本、輾轉鈔得者。繼又借得翁正三侍郎家藏本。予乃鈔存徐本、而以翁本校之、點勘一過。其書

久無讀者、收藏家付之鈔胥、聽其譌謬。如行荆棘中、時時牽衣絓肘。又如捫蘚讀斷碑、上下文義相綴屬者、可一二數。以屬友人觀之、不終簡、輒棄去不顧。願船獨爲其難、取而詳校之。嘗自言「一字一句有疑、十日思之不置。每隔旬餘、輒以校本見示、加箋證數十條。越數旬又如之。其始就原本題記、行間眉上、字如蠅頭。蓋十得其五六。繼復黏綴稾草、鉛黃錯雜。乃十得其七八。近則補正益多、手自迻謄。一再讀之、令人開豁。較之原本、廓淸之功、比於武事矣。昔太史公纂述、藏之名山、極鄭重也。而所望於後世者、惟好學深思、心知其意之人。蓋天下文人多、學人少。不得學人、則著述之事、幾乎息矣。如願船之所爲、豈非史公之所願見而不可得者哉。固非徒是書資其攷證也。平定張穆。

自序

自漢以來、二千餘年、一統之天下、惟元最大。然讀史至元代、輒令人廢書而

歎、則以紀載之草略、敍述之譌舛、惟元史最甚。就元史之中、又以紀太祖開國事爲尤甚。嘗訝金華義烏諸公、以文雄執史筆、何決裂疏脫若此、求其故而不得也。歲丁未、張丈石州、見示鈔本聖武親征錄一帙、謂予曰「此書、傳自竹汀覃谿諸先生、輾轉鈔藏、而未遑讐校。余讀一過、知其中謬誤甚多、幾不可句讀。子能是正之否」。余受而讀之、淮別盧虎之文、塞於目、侏離蔓衍之詞、窒於口。取元史紀傳表志、及諸子史文集互證之、則方隅之顚倒、名氏之踳舛、年月日之參錯、觸處皆是。屢校而屢置之、旋復取讀、如剔碣蘚、如磨劍鏽。久之而稍得其端倪。又久之而洞見其癥結。蓋此錄、作於祕史之後、而流傳在於祕史之前。舛牾之故、厥有數端。一則繙譯之初先誤。本蒙古之語、而用畏兀之文。更程邈之隸、音殊於緩言急言、字胘於二合三合。如折里麥、卽元史之朮魯台、（曾植案、折里麥、是者勒蔑、非朮魯台也。先生誤釋。）董哀、卽祕史之董合、猶云二書各譯、兩不相謀。至於一案彈也、或稱按壇、或稱按灘、一者別也、或稱遮別、或稱哲別、斡亦剌之卽猥剌、蔑里乞之卽滅力乞、亦年可汗之卽亦難赤可汗、一簡之中、

前後岐互。以有定之音、譯無定之字、遂使有徵之事、溷於無徵之文。旣已作法於涼、安怪傳言失指。其難讀一也。一則傳寫之際易譌。徑術榛蕪、奪誤厖起。聶坤變爲捏羣、以音近也。捏羣旋變爲捏辟、則字譌矣。太子變爲太石、以音轉也。太石俄變爲太后、則義失矣。等橐杲柘杲之屢易、疑后輔右輔之難分。甚至拔都悉譌拔相、孛徒復改字徒、岐又生岐、變本加厲。其難讀二也。一則年月之牴牾多端。至元中統以前、未有年號。脫必赤顏之帙、但紀鼠牛。積雪驚沙、創業本無記注。氈廬毳幕、橐筆甯有史官。迨客魯漣河之繕書、正斡歌歹汗之御宇。錄名取聖武之謚、編成必至元以來。或差本紀數年、或與列傳殊異。加之人名錯雜、重譯未通。官號改更、巧秝不算。遂使本一事而前後複出、同一言而彼此乖違。其難讀三也。一則輿地之荒渺過甚。斡難土剌之川、水經詎載。答蘭忽眞之隘、地志未聞。攷和林、則據圭齋一言。詢魚濼、則摭德輝片牘。以嶺北興王之地、漠南駐蹕之庭、尙無可徵、矧於異域。而乃討吐厖、則北窮冰海、征算端、則西極申河。蠶思沃壤、莫傳撒罕之書。蟾河遠行、

孰訪尋竄之境。且也拙赤元子、封域難稽。阿母行省、疆畛中絕。篤實訪河源、而止及火敦。思本繪寰宇、而尙遺欽察。雖今開西域、地已隸於版圖、而夷攷前徵、事靡傳於父老。較之漢討郅支、唐征大食、更爲汗漫、孰辨淆譌。其難讀四也。兼此四難、爰滋累惑。宋王諸公、別白未能、汗靑太迫。於祕史、則熟視無覩。於茲帙、則依樣葫蘆。累牘連篇、沿譌襲謬。貽誤後學、職此之由。吾故曰、以此錄視祕史、猶書家之臨摹也。以此錄視元史、猶畫家之粉本也。至景濂子充、摭此錄、以作本紀、擅其名、則如鈔胥之迻謄、而覈其實、則是謬種之流傳也。然則校覆此編、足以攷訂羣籍。不揣固陋、耑力擘尋。因爲箋注姓名、移置甲乙、疏論異同、排比先後。雖不敢謂毫髮無憾、而較之舊本、則面目迥殊。引證則甯詳無略、辨析則存是去非。彼此互參、事理胥得。寒暑屢易、繕錄乃成。夫以明初修史、耳目較近、尙未能詳審攷正。今之視昔、年逾五百、校訂之難、不啻倍蓰。加以學淺識陋、無所取材。非敢自居是正、聊以存諸篋衍。從此質彼通人、誨我不逮、其於元初掌故、藉可管窺、庶幾憤悱啓發

之誼云爾。道光己酉夏六月下澣、光澤何秋濤自序。

校正元親征錄序。

何君願船、余畏友也。相晤於符離軍營、出元聖武親征錄見示。蓋其所手鈔而校之者。丹黃爛然。俾斷爛古籍、復彰於世。其爲功於昔人甚厚。宋景濂元史、舛誤最甚。校正此錄、足證其得失。其爲功於正史尤不細。蓋嘗論之、史學以遼金元爲一家。自明代三百年、無能知者。國朝以來、錢詹事、程廷尉、獨擅其勝、專門名家。余所及見、則有若徐星伯、龔定菴、沈子敦、張石州諸君子。今願船紹絕緒、而振興之。他人讀一字一句、舌撟不下、而願船歷歷言之、如燭照數計。且曰「玆事猶測厤步算然、貴在精思。其始如邢邵之思誤書、亦是一適。久之則如文王嗜昌歜、屈到嗜芰、覺卷帙之中、有味外味。吾不能以語他人、他人亦不能我同也」。於戲、其苦心孤詣、於今世豈易覯哉。抑又聞之、前事不忘、後事之師。國朝拓西北地二萬餘里、皆元代故壤、明時未入版圖者。然則元之遺事、所宜詳攷。願船留意於此、亦其講求經濟之一端。豈僅研精史學已哉。癸丑四月二十七日、旌德呂賢基、序於宿州行館。

校正增注元親征錄

清　光澤何秋濤願船校正

清　順德李文田仲約校注

清　嘉興沈曾植子培校注

日本　盛岡那珂通世增注

皇元聖武親征錄。文田案、元史察罕傳云「又命譯脫必赤顏、名曰聖武開天記、及太宗平金始末等書」。據史文、則此書初以蒙古國書寫之、名曰脫必赤顏。察罕奉命譯之、始命聖武開天記。然則記名、乃察罕以漢語改定之也。然則此卽聖武開天記。其又名爲皇元聖武親征錄、當由傳寫改變耳。以元代官書攷之、多有皇元二字、如皇元經世大典、皇元一統志之類。然則聖武開天記之上、亦當有皇元二字也。此與祕史、均藏之內府、漢人不得窺見。是以虞集傳稱「修經世大典、欲請脫卜赤顏。當時大臣謂「事關祕禁非可令外人傳寫」。是此錄、在元代、凡漢人均不得見也。至明代脩史時、始從元宮殿中得之耳。

烈祖神元皇帝、諱也速該秋濤案、亦作也速該可汗、亦作葉速該拔都。元祕史作也速該把阿禿兒。把阿禿兒卽拔都也。通世案、把阿禿兒、蒙古之美號也。多遜作巴哈都兒、以勇解之。元朝祕史或譯爲勇士。洪文卿曰「今奧國之馬加部、實是東方族類、卽元史之馬札兒。其人稱巴圖爾、音如把阿禿兒。足見祕史譯字、必非率爾操觚」。又案、蒙古源流作伊蘇凱巴圖爾。稱也速該爲可汗、本書一見。祕史卷二亦有也速該罕。蓋皆追王之義。初征塔塔兒部、獲其部長帖木眞斡怯·忽魯不花輩、斡原作幹。秋濤案、帖、元史作鐵。祕史云「與塔塔兒廝殺時、也速該把阿禿兒、將他帖木眞兀格·豁里不花等擄來。太祖生時、因擄將帖木眞兀格來時生、故就名帖木眞」。攷祕史所云、是帖木眞兀格爲一人名、卽此帖木眞斡怯。幹當作斡、與兀音近。豁里不花爲一人、

卽此忽魯不花也。然此錄下文云「獲帖木眞」、乃以帖木眞爲一人。元史亦云「獲其部長鐵木眞」。未詳孰是。通世案、斡爲斡之譌無疑。今改。伯哷津譯喇施特額丁蒙古史、亦以帖木眞兀格爲一人、庫魯不花爲一人。下文唯云帖木眞、省文也。蒙古源流作特穆津。還駐軍跌里溫盤陀山秋濤案、祕史作迭里溫孛勒荅里山。朱一新案、據祕史、里當作黑。通世案、蒙古源流作德里衮布勒塔干地方。額兒忒曼曰「今名第倫博爾達克。喬爾泌斯克人裕琳斯奇、訪查其地、在敖嫩河右岸額克阿拉爾河洲之上七露里」。冬桑蒙古史云「布爾都克、蒙古語、山也」。洪氏譯伯哷津書、作迭溫布兒荅克之地、曰「祕史音是。西人譯黑字音、每重讀成克。華書謂山名、西域史謂地名。或此處以山名爲地名也」。時我太祖聖武皇帝生、右手握凝血、長而神異。以獲帖木眞、故命爲上名。

初族人泰赤烏部長別林、秋濤案、泰赤烏、祕史作泰亦赤兀惕。通世案、泰赤烏、元史同、而宗室世系表、又作大丑兀禿。畏荅兒傳作大疇。蒙古源流作岱齊果特。又案、別林、蓋祕史之俺巴孩也。爲海都第二子察剌孩領忽之孫。元史作咸補海罕、源流作阿木拜。別林二字、當有奪誤。舊無怨於我。後因其主阿丹可汗曾植案、祕史一俺巴孩之後、爲泰亦赤兀惕氏。俺巴孩爲金人所虜、寄語其十子中之合荅安太子、令其復仇。通世案、伯哷津書、哈丹大石之外、有阿達爾汗、爲泰赤烏部長塔兒忽台哈拉兒禿克之父。卽此阿丹可汗也。似與合荅安太子不同。二子塔兒不台秋濤案、祕史作塔兒忽台。通世案、不當作兀。下文作塔兒忽台希憐禿。忽鄰拔都忽原作忍。通世案、忍爲忽之譌無疑。今改。伯哷津書、以塔兒忽台哈拉兒禿克爲一人名。別有忽力兒巴哈都兒、爲塔兒忽台從父兄弟。卽此忽隣拔都也。額兒忒曼以乞哩兒禿克爲特兒忽台之號、釋爲毒心、以忽魯兒巴哈都兒、爲特兒忽台從子。祕史之塔兒忽台乞鄰勒禿黑、依下文納牙阿放去條考之、亦似卽一人也。有憾遂絕。烈祖早世時、上沖幼、部衆多歸泰赤烏。通世案、泰赤烏有憾遂絕、在烈祖歿後。祕史云「也速該携帖木眞、到翁吉剌氏德薛禪家、約取其女孛兒帖爲帖木眞妻、還過塔塔兒部、被毒殺。其年、俺巴孩合罕二夫人斡兒伯・莎合台祭祀時、訶額侖後至、胙肉不分。訶額侖言其侮已。二夫人怒。翌日、塔兒忽台・乞鄰禿黑・脫朶延・吉兒帖等、遂棄訶額侖母子而去」。此書不載烈祖毒死及祭時起釁事、當是國史諱言。又案、元之先世譜系、史多闕略。據祕史、也速該之祖父合不勒、始自稱合罕。卽史所稱葛不律寒也。喇施特蒙古史云「合不勒汗、威望甚盛、統轄蒙古全部。是時始有汗號」。是也。合不勒捨其七子、而使再從弟俺巴孩代領其衆。是爲泰赤烏氏。俺巴孩爲塔塔兒人所執、以獻於金、被殺。遺言其子合荅安及合不勒子忽圖剌、盡力報讎。諸部因立忽圖剌爲合罕、與合荅安太子、數攻塔塔兒。喇施特極稱忽圖剌有勇力。蓋大金國志所謂熬羅自稱祖元皇帝者也。忽圖剌歿後、汗位久不定。蓋兒把兒壇、先於忽圖剌卽位而歿、俺巴孩・忽圖剌、皆有衆子、諸部莫知所適從。把兒壇子也速該善戰。觀其嘗定客列亦惕之難、使王汗復國、約爲安荅、則其爲乞顏之豪可知。然未嘗陟汗位、未嘗統蒙古全部也。今元史於俺巴孩・忽圖剌之事、無一語及之、而唯曰「葛不律寒歿、子八哩丹嗣。八哩丹歿、子也速該嗣。國勢愈盛大」。如也速該承蒙古之正統、而太祖生居冢嫡者。此與祕史不合、其誤顯然。至於喇施特曰「也速該轄尼倫、各族咸畏服之」、元史類編曰「也速該並吞諸部、勢愈盛也、是爲元之始祖」、則均係史之飾筆、益非事實。故備辨之。喇施特蒙古史、後唯云西史。上聞近侍脫端・火兒眞秋濤案、祕史有脫朶延・吉兒帖、疑卽此也。文田案、吉當作古。通世案、喇施特以二人爲帖木眞族人最年長者。脫端、蓋元史之掇端斡赤斤、祕史之脫朶延斡惕赤斤、太祖祖父把兒壇把阿禿兒之季弟也。火兒眞無考。額兒忒曼譯拉施特史、作喀呼兒濟。亦將叛、自泣留之。脫端曰「今淸潭已涸、堅石已碎。留復何爲」。遂去。上母月倫太后、秋濤案、太后爲斡勒忽訥氏。元史太祖紀、稱宣懿太后。月倫者、名也。祕史作訶額侖。致烈祖歿後、賴太后賢能、太祖兄弟、皆足以成立。乃元史不爲立傳、亦疏略也。文田案、元史不爲月倫太后立傳者、也速該本虜而得之。若敍所從來、則蔑里乞部之婦也。元人自諱之。明人撰元史、益草率矣。通世案、蒙古源流作烏格楞哈屯鄂勒郭諾特氏。伯哷津作謂倫額格、爲翁吉剌分族斡勒忽訥特氏。麾旗通世案、是語誤。祕史蒙文作禿黑、西史作禿克。卽所謂纛也。昔時蒙古無旗幟、但以旄牛尾若白馬尾繫於竿頭、謂之旄纛。祕史譯爲英槍、亦誤。將兵、躬自追叛者、大半還。部將察剌海秋濤案、祕史作察剌合。中鎗、創甚。上親視勞

慰。察剌海曰「自先君登遐、原作「自居登避」四字、未詳。秋濤案、當作「自先君登遐」。蓋君譌爲居、遐譌爲避、皆爲形似。先字又因傳寫脫落也。部人多叛。臣不勝忿、遠追原作迎。張石州據翁本改也。苦戰、以致然也」。上感泣而出。通世案、此間、猶有大事可叙者數條、詳見祕史。一、叛者半還、尋皆離去、歸泰亦赤兀。二、訶額侖艱難、長育諸子。三、太祖與合撒兒共殺異母弟別克帖兒。四、泰亦赤兀惕襲擒太祖、賴鎖兒罕失剌救得免。五、太祖逐賊、孛斡兒出援之。六、德薛禪以女配太祖。七、孛斡兒出來屬。八、太祖往謁父友王罕、尊爲父。九、者勒篾來屬。十、篾兒乞人來襲、掠別勒古台母及太祖妻孛兒台而去。十一、太祖乞師於王罕及札木合、擊破篾兒乞。孛兒台逃歸。別勒古台尋其母不得。軍中收幼兒曲出。十二、太祖與札木合、再爲安荅、同營而居。旣而離去。諸部多棄札木合而歸太祖、遂立太祖爲成吉思汗。此十二條、皆在烈祖歿後二十許年之間、於叙太祖創業之艱難、決不可闕者矣。而本書脫之、直以十三翼之戰、接太祖幼時事、疏略殊甚。喇施特蒙古史、亦與之同。可見國史脫必赤顏、與喇施特所用金冊同本。皆不及祕史原本之眞率而曲詳也。

時上麾下搠只塔兒馬剌、秋濤案、邵遠平元史類編、引此錄、無塔兒馬剌四字。文田案、元史本紀作「搠只別居薩里河」。故邵據以節去四字。祕史作拙赤荅兒馬剌。通世案、伯哷津書作札剌亦兒人拙赤塔兒蔑勒。注云「札剌亦兒人、卽被海都俘爲奴僕者」。別居薩里河。秋濤案、元史類編、引作薩里川。通世案、祕史作撒阿里地面、又作撒阿里客額兒。客額兒、蒙古語謂曠野。多遜作薩里奇哈兒、釋爲黃野。據祕史客魯漣河源不兒吉岸、本書作薩里河不魯告崖、則薩里之野、當在克魯倫河之上游。元史類編朔漠圖、置撒里怯兒于斡難河之南、附記「元初起此」四字。札荅蘭氏通世案、祕史作札荅剌氏、又作札荅闌氏。其祖札只剌歹、孛端察兒子巴阿里歹之異父兄也。而札木合爲札只剌歹四世孫。考太祖幼與札木合爲親友。太祖、孛端察兒十世孫、而札木合僅五世。世系恐有誤。西史作札只剌特氏、爲托邁乃第七子烏都兒伯顏之裔。元史孛秃傳作札赤剌歹。札木合部人秃台察兒、通世案、祕史作札木合弟給察兒、伯哷津作紿古察兒。居玉律哥泉、通世案、祕史作札剌麻山前斡列該不剌合地面。多遜作烏拉該布拉克、釋爲赤泉、且曰「此今烏楞該河也。發源敖嫩河北山、流入音果達河」。然赤泉與黃野接壤、故有牧人爭鬭之事、不當在敖嫩河之北。是說未足據也。今大肎特山西、有集隆山、或作卽龍、音近札剌麻。斡列該泉、當在集隆山南麓、則與薩里之野相接也。擧原缺擧字。秋濤據元史類編增。衆來薩里河、掠搠只牧馬。搠只麾左右匿羣馬中、射殺之。秋濤案、謂射殺秃台察兒。札木合以是爲隙。遂與泰赤烏・亦乞剌思通世案、祕史作亦乞列思、輟耕錄蒙古氏族、作永吉列思。額兒忒曼作音乞剌思、與輟耕錄音近。兀魯吾秋濤案、兀舊作元、今改。通世案、此卽元史之兀魯兀秃、祕史之兀魯兀惕、納臣長子兀魯兀歹之裔也。那也勤原作郡也勒、通世校改。案、祕史、合臣子那牙吉歹、爲那牙勤氏。版本、勤誤作勒。祕史卷五、或作那牙乞。伯哷津書、托邁乃長子札克蘇、有子曰那牙勤、其後爲那牙勤氏。洪鈞氏譯文、亦誤作那牙勒氏。八魯剌思・霸鄰諸部合謀、以衆三萬來戰。秋濤案、霸鄰部、當卽八鄰部也。文田案、祕史有巴魯剌思氏、出自巴魯剌台。又有巴阿鄰氏、出自巴阿里歹。又案、輟耕錄蒙古七十二種氏族、有八魯剌忽、又有八鄰。均卽此二部也。通世案、八魯剌思、喇施特作火魯剌思。八疑是火之譌。見下火魯剌注。祕史云「札木合領著他一種幷十三部、共三萬人云云」。蓋札木合率十三部而來、故太祖亦分十三翼應戰也。上時駐軍荅蘭秋濤案、元史本紀作闌。版朱思之野。通世案、祕史作荅闌巴勒主惕地面、卷九引此役、作巴勒渚納地面。額兒忒曼作荅闌巴勒朱思、解荅闌爲平地、巴勒朱思、爲屬巴勒朱那。和渥兒特查栗特兒地圖、曰巴勒朱那、小湖也。圖剌河自此流出、入於音果達河。敖嫩音果達之分水嶺、曰阿拉沙那山。湖在此山之東」。洪氏曰「巴勒渚納、是渟瀦名、此乃地名、且多荅闌二字、必非一地。或祕史卷九、主惕誤作渚納也」。案敖嫩河自小肎特山東流千餘里、至東經百十一度半、有巴爾集河自西北來會。又東北流數百里、有他拉巴爾濟河自西北來會。荅闌巴勒朱思、當是巴爾集河邊之平野、否則他拉巴爾濟河邊之地。巴勒渚納、本書作班朱尼河、見後。亦乞原作迄石州校改。剌部人秋濤案、亦乞剌部、卽上亦乞剌思部。元史孛秃傳、云亦乞列思氏。列與剌皆譯語偶異。凡居某部者、卽以其部爲氏。故傳言氏、卽與此記言部同也。文田案、亦乞剌部、出自駙馬昌王阿失之祖孛秃。卽此記之孛徒也。詳元文類駙馬昌王碑。揑群原作辟。秋濤案、當作群。注見下。之子孛徒、

原作字徒。秋濤案、當作孛徒。先在麾下。至是自原脫至字、是自二字倒置。秋濤依元史類編補正。說見下。曲鄰居山、山原作小。秋濤校改。通世案、祕史作古列勒古地
面、又作古連勒古地面。伯哷津作古魯之地。曲鄰居與古魯、皆古列勒古之變音。遣卜欒台欒、原作奕。通世依元史祕史改。見下。慕哥二人、遙阿剌烏·秃剌烏二
山曾植案、卽祕史之阿剌兀惕·土兒合兀嶺。通世案、伯哷津書、作阿剌烏特·秃剌烏特二山。來告變。秋濤案、元史類編引此、荅蘭作塔蘭、捏辟作揑羣、字徒作孛徒。「自是曲鄰居小」句作「至是自曲鄰居山、
遣卜奕台慕哥三人、遙阿剌秃剌烏干山告變」。案、類編所引、多是未諳時本、宜從之。惟卜奕台慕哥、史作波欒歹、磨里秃秃、人名迥異。波卜聲同、奕欒形似。俗書欒字上䜌作亦也。未知孰是。又案、今本山名、與類
編所引亦殊。案下文有「札木合敗走、彼軍初越二山」之語、則作二山者、是也。蓋類編、阿剌下脫去烏字。干則二之譌耳。又案、元史本紀云「札木合以爲怨、遂與泰赤烏諸部、以衆三萬來戰」。帝時駐軍荅蘭版朱思之
野、聞變、大集諸部兵、分十有三翼以俟」。不載何人告變。今據類編所引聖武記、校知此字徒爲孛徒之譌。因攷得元史卷一百十八、有孛秃傳、卽此孛徒也。其傳載孛秃亦乞列思氏、太祖以皇妹妻之、與此「先在麾下」之
說稍異。又云「旣而札赤剌歹札朮合脫也、以兵三萬入寇。孛秃聞之、遣波欒歹·磨里秃秃·來告云云」。卽此事也。攷札赤剌歹、卽泰赤烏、札朮哈、卽札木合。朮者、木之譌也。以一事分載紀傳、姓名各殊、孰能辨之。
元史之疎、於此可見。故歷來修續通鑑綱目等書者、於是事全不登載。賴此書尙存、細心鉤攷、得以覈其原委耳。又案、戊寅年、木華黎奉亦乞剌部孛徒駙馬二千騎、卽此孛徒也。史稱「太祖先以皇妹帖木倫妻孛秃。皇
妹薨、復妻以皇女火臣別吉」。是孛徒凡兩尙主、故後稱駙馬。惟史載妻以皇妹事、在告變前。觀此及伐汪可汗時、孛徒皆不稱駙馬、至戊寅年、始有是稱、則孛徒正以告變功尙主。史所載未爲確也。曾植案、札赤剌歹、
卽札木合部名、非泰赤烏。又案、孛秃、祕史作不圖。其壻於太祖家、及後告變事、均載卷四書中。非以告變得尙主也。又案、卜欒歹、祕史作孛羅勒歹。慕哥、祕史作木勒客脫塔黑。通世案、祕史云「時成吉思在古連
勒古之地。有亦乞列思種人木勒客脫塔黑·孛羅勒歹二人來報」。伯哷津則云「揑坤在泰赤烏特部下、而其子孛徒從成吉思汗。故其父亦歸心焉。時兵在古魯之地。有巴魯剌思人木勒客脫塔克等二人、先以事來、今將歸。
揑坤乘其便、遣來告變」。案、此戰以前、太祖事蹟、史錄西書皆闕而不載。據祕史、太祖少時免泰赤兀惕之難、乃始居古連勒古。卷二所謂「不兒罕山前、有古連勒古山、山裏有桑沽兒河、河邊有合剌只魯格小山、有

青海子。帖木眞下營其間」、是也。尋娶孛兒帖兀眞、遷于客魯漣河源不兒吉岸。後被篾兒乞襲掠、乞師於王汗·札木合、以報其讎、遂從札木合、居豁兒豁納黑主不兒之地。及與札木合分離、衆奉爲可汗、復居于古列勒古地
內桑沽兒河邊合剌主魯格地之闊闊納浯兒海子處。闊闊納浯兒、卽青海子也。其後葢十餘年、至辛酉年、未嘗撤古列勒古本營。今遇札木合來侵、乃進戰于荅闌巴勒主惕之地、安得敵先在古列勒古耶。然則本書西史、以
古列勒古爲敵兵所在者、恐不允。然至西史敘事悉情節、則較東書爲詳。又案、元史之磨里秃秃、卽木勒客脫塔黑之譌、此慕哥、亦木勒客之譌也。類編引作三人、三、二之誤。西史無孛羅勒歹、以木勒客脫塔克爲二人、
亦非。上集諸部、戒嚴、凡有十三翼秋濤案、當作兵凡十有三翼。通世案、翼字、祕史蒙文作古列額惕、譯爲圈子。喇施特作古闌、解爲環、卽圈子也。洪氏曰「庫倫義爲
圈子。古闌實卽庫倫。各處方言有異音耳」。月倫太后曁上諸昆弟爲三翼。秋濤案、類編引此作「凡十有二翼。月倫太后曁上諸昆弟爲一翼」。豈邵戒山所見聖武紀、本偶
誤一字邪。通世案、伯哷津書、以謌倫額格、並其族斡勒忽訥人、爲第一翼、以成吉思汗及其子弟、與其從人、並各族之子弟、爲第二翼。此已有三翼、恐誤。哈初來之子奔搭出拔都
原作板相。秋濤案、當作拔都。曾植案、哈初來、卽祕史之哈出剌、世系表之合產、蔑年土敦之子。與太祖長八世、不容其子至此尙在。又哈出剌之子孫、爲小巴魯剌思、而阿荅兒斤、乃合出剌弟合赤溫後。世系表與祕
史竝同。此與不合。蓋此節舛誤極多、不能一一詳攷矣。通世案、自哈初來至火魯剌諸部、伯哷津爲第三翼。哈初來之子奔搭出板相、伯哷津作撒搿哈準之後人布拉柱巴哈都兒。板相爲拔都之譌、無疑。今改。撒搿哈準
者、卽元史之葛赤渾、祕史之合赤溫也、元史以爲敦必乃第五子、西史以爲托邁乃第四子、而祕史則以爲篾年、土敦第五子、與二史異。然其爲阿荅兒斤氏祖、則一也。哈初來之來、疑當作永。急讀乃爲哈準。奔搭出拔都
與祕史之不勒帖出把阿秃兒音近。不勒帖出、祕史爲合不勒汗弟撏薛赤列之子。然撏薛赤列之名、諸本不見、則不勒帖出、疑卽與布拉柱同人、祕史系或有誤。布拉柱、據西史、爲哈準之玄孫、太祖三從兄之子也。子當
爲裔之誤。秃不哥逸敦、通世案、是句、伯哷津作「又有客拉亦特之分族人」。洪氏曰、「客亦特與哥逸敦音近。恐是西域史誤以人名爲族名」。木兒忽·好闌等、統阿
荅兒斤·察忽蘭·火魯剌火原作大、秋濤校改。通世案、火魯剌卽火魯剌思、葢一部中或從札木合、或從太祖也。祕史卷一云「豁里秃馬敦部落的官人豁里剌兒台篾兒干、聽得不兒罕山野物

廣有、全家起來、投奔不兒罕山的主人、名哂赤巴顏、因此就做了豁里剌兒姓」。豁里剌兒台篾兒干、孛端察兒母阿闌豁阿之父也。西史云「阿闌郭幹、火魯拉思氏」。洪氏曰「豁里剌兒氏、祕史僅一見。殆卽火魯拉思」。然則火魯剌思氏、豁里禿馬敦之分族、而南徙於不兒罕山者。

諸部、通世案、木兒忽以下、伯哷津作「又阿荅兒斤人、將曰木忽兒忽闌。又火魯剌思人、將曰察魯哈」。洪氏曰「木忽兒•忽闌、錄作木兒忽•好闌、誤將忽兒二字倒置。察魯哈當卽察忽闌。錄爲部名。統考東西著述、無此部名。或誤以人名爲部名也。木忽兒•忽闌、與布拉柱、皆阿荅兒斤人。細玩親征錄文義、以合貝勒津書、當是「奔塔出•哥逸敦•與木忽兒、統阿荅兒斤部、察忽闌統火魯剌部。則說皆圓矣」。又案、孛徒傳云「乃與哈剌里•札剌兀塔兒哈泥等、討脫也等」。哈剌里卽火魯剌之訛。兀塔兒哈泥卽阿荅兒斤之訛。札剌卽㳄翼札剌亦兒之略。脫也無考。

及鮮明昆那顏秋濤案、那顏原作邪顏、誤。今改。之子迭良統火力台不答合輩爲一翼。曾植案、不答合、卽不答安惕部、合闌歹後。通世案、鮮明昆以下、伯哷津爲第四翼、作「蘇兒嘎圖諾顏之子得林赤、並其弟火力台、及博歹阿特人」。鮮明昆、與蘇兒嘎圖、字音難合。明恐是兒之譌。迭良、卽得林赤。火力台、據伯哷津書、爲合不勒汗兒博歹阿庫兒格之曾孫。父曰塔兒古台、卽蘇兒噶圖之異文。博歹阿特、卽元史之博歹阿替氏、祕史之不荅安惕氏。其祖博歹阿庫兒格、元史作哈剌喇歹、爲敦必乃第四子、西史以爲托邁乃第五子。祕史作合闌歹、與元史音協。而謂爲篾年土敦第六子、與二史異。不答合之合、當爲台之譌。

札剌兒及阿哈部爲一翼。通世案、此翼、伯哷津以爲第五第六翼、作「莎兒哈禿月兒乞之子薛徹別乞、並其從兄弟泰出、及札剌亦兒人、莎兒哈禿人」。莎兒哈禿月兒乞、卽祕史之莎兒、合禿主兒乞、合不勒汗長子斡勤巴兒合黑之子、稱主兒乞氏、或云主兒斤氏。元史作岳里斤、本書下文作月兒斤。莎兒禿哈、當卽月兒斤氏之異稱。本書作阿哈、疑有奪誤。又案、此間、伯哷津書、有第七翼、爲渥禿助•忽都•朵端乞及其麾下。人名不詳。注云「乞要特人」。又有第八翼、云「蒙格禿乞顏之子程克索特及其兄弟、皆爲成吉思汗從兄弟。又巴牙兀特人。將曰翁古兒」。蒙格禿乞顏者、元史之蒙奇睹黑顏、也速該之長兄也。翁古兒、祕史爲忙格禿之子。

答里台里原作聖。曾植案、當是里字之誤。通世依西史改。見下。火察兒二人及忽都蘭•捏古思•火魯罕•撒合弟直部秋濤案、後汪可汗與太祖相攻時、有撒合弟部、則撒合弟自爲一部。直字疑誤衍。或云、當是諸字。曾植案、捏古思、亦稱捏兀歹、見祕史第四卷。輟耕錄作捏古歹。後文王汗敗後、「答力台•斡真•八隣•撒合夷•嫩眞諸部、稽顙來歸」、則直上脫嫩字也。撒合弟、當依後文作撒合夷。祕史之撒合亦惕、卽此部也。爲一翼。通世案、此爲伯哷津第九翼、作「答里台斡赤斤、及捏坤大石子火察兒、族人達魯、幷都黑剌特•努古思•火兒罕•撒哈夷特•委神諸部」。洪氏曰「此惟增達魯人名、委神部名。忽都闌、當卽都黑剌、而誤倒都忽二字。捏古思、卽努古思。火魯罕、卽火兒罕。撒哈弟直、卽撒哈夷特。委神、卽元史之許兀愼。輟耕錄蒙古七十二種有忽神、卽委神也」。案、答里台者、也速該之弟。捏坤者、也速該之兄。都黑剌特、據西史、合不勒汗弟布端察兒朵黑闌之裔也。祕史作脫忽剌兀惕、爲納臣第四子朵豁剌歹之裔。撒哈夷直、後文無直字。直卽眞之譌、而其上脫一字也。

忽都徒怭納兒、秋濤案、忽相當作拔都。此卽後伐汪可汗時所云「吾麾下怭納兒拔都」也。曾植案、忽相徒怭納兒、卽祕史忽禿黑禿蒙古兒、史表作忽都魯咩聶兒。合不勒罕之子。祕史忽禿黑禿蒙古兒之子、爲不里孛闊。卽此書後文之播里。不知與蒙哥怯只兒哥爲一爲二也。之子蒙哥怯•只兒哥爲一翼。通世案、此翼、西史不載。西史第七翼渥禿助忽都、似忽禿黑禿之譌。此蒙哥怯又似西史第八翼蒙格禿之譌。恐兩書皆有誤。

忽蘭脫可汗之子搠只可汗曾植案、忽蘭脫可汗、卽祕史忽圖剌合罕、史表作忽魯剌罕。亦合不勒罕子。搠只卽祕史抽赤。爲一翼。通世案、此爲伯哷津第十翼、作「忽都剌汗之子抽赤汗及其從人蘭脫二字誤倒。

按爲一翼。此句原脫。石州據翁氏本校增、云「抜似當作垓」。秋濤案、按抜、與後案彈•案攤、當是一人。文田案、抜卽壇字之破體也。村俗人往往作此等字。翁以爲抜字、誤矣。曾植案、按抜、卽阿勒壇。通世案、此爲伯哷津第十一翼、作「阿勒壇、亦忽都剌子」。

忽蘭脫端爲一翼。秋濤案、脫端事見後。通世案、忽闌、祕史爲合不勒汗第五子。元史以爲庶子、列於諸子之後。脫端、合不勒汗之季子、見前。此條、伯哷津爲第十二翼、作「答忽巴哈都兒、及晃火攸特人」、速客特人」。與本書不合。

赱相赤紬秋濤案、紬當作納。玉烈二郎曾植案、郞當作部。爲一翼。秋濤案。所載止十一翼。疑有脫誤。通世案、此爲伯哷津第十三翼、作「更都赤那、烏魯克勤赤那之後努古思人」。赱相者、建都之譌、卽更都也。玉烈者、烏魯克勤之訛略也。此誤以人名爲部名、疑當有奪文。兩赤那者、據拉施特、爲扯勒黑領昆之子。其後爲赤尼思氏、亦曰努古思。然則赤那思、卽赤尼思、又卽努古思也。扯勒黑領昆、卽祕史之察剌孩領忽、史表之察剌哈寧昆也。其長子想昆必勒格、則俺巴孩之父、而泰赤烏氏之祖。伯哷津作莎兒郭勒魯赤那。史表之大丑兀禿、卽泰赤烏特、直拏斯、卽莎兒郭

勒魯赤那之上略也。而輟耕錄誤以爲察剌哈兒拜姓忽兒之次子。蓋錄表寫名、偶誤偏於右傍也。軍大戰於答蘭版朱思之野。札木合敗走。彼軍初越二山、半途爲七十二竈、烹狼爲食。秋濤案、此下疑有脫文。曾植案、此事與祕史絕異。不解其改此之由。及讀首卷孛端察兒無食一條內狼字、蒙文竝作赤那因、乃知赤那因是蒙語呼狼、而彼之地面、又適名赤那思、譯人莽鹵、改有此誤。益知作此書人、見蒙文祕史、未見譯文祕史也。又案、此戰、太祖之兵大敗、後得兀魯兀惕忙忽惕兩部、而後復振。此云「札木合敗走」、非實錄也。祕史云「札木合將赤那思地面有的大王每、敎七十鍋都煮了」、卽此七十二竈事。通世案、沈說是也。蒙古語、赤那謂狼、思複數之辭也。更都赤那、雄狼也。烏魯克勤赤那、母狼也。赤那思地面、兩赤那子孫所居之地也。祕史又云「札木合又斫斷捏兀歹・察合安的頭、馬尾上施著去了」。赤那思氏、又云努古思。捏兀歹、卽努古思也。察合安、赤那思大王每之一也。赤那思一族、罹此慘禍、故後裔不顯。乃西史云「成吉思軍雖寡、而大勝敵衆、令以七十鑊烹俘虜」。此不嘗以太祖之敗爲勝、併以札木合之烹俘虜、爲太祖事也。蓋脫必赤顏原文已諱敗爲勝。然敍赤那思氏之慘禍、則從祕史舊文。而本書誤譯爲野獸矣。西史則疑七十鑊烹人、非敗者所能辨、乃以爲太祖事、遂刪赤那思之名、唯云俘虜也。比較三書、可以悟史傳生誤之由矣。

是時泰赤烏部、地廣民衆、而內無統紀。其族照烈部通世案、祕史作沼兀列亦惕氏、巴阿里歹異母弟沼兀列歹之裔也。伯哷津書作朱里耶特氏、爲札只剌特氏之異稱、係誤。與我近、常獵幹幹札剌馬思之野。通世案、伯哷津書作烏者兒哲兒們山。卽祕史上文札剌麻山。札剌馬思之野、當卽札剌麻山麓之地。上野亦獵圍、陳隅相屬、旣而合。上曰「可同宿於此乎」。彼曰「獵騎四百、糗糧不具、已遣半還」。上曰、通世案、曰字疑衍。否則曰下恐有奪文。命給助同宿者。越明日、再合圍。上賓之、

使驅獸近彼陳、讓多獲、以厭其心。彼衆咸相告曰「泰赤烏雖我兄弟、常攘我車馬、奪我飲食。憂恤我者其此人乎」。大稱美而歸。上因遣告之曰「可來結盟、否」。照烈原作造律。石州依翁氏本校改。文田案、照烈與造律皆對音。據祕史、有沼列亦歹其人。此部乃其後也。之長玉律拔都、原作拔相。秋濤案、通校前後文、拔相、皆拔都之譌。通世案、伯哷津作烏魯克巴哈都兒。此略克音。祕史札剌麻山前斡列該泉、本書作玉律哥泉、與烏魯克音近。此人蓋以地名爲名也。謀於族長馬兒牙答納。通世案、伯哷津作馬喝亦巴答納。對曰「泰赤烏何惡於我。彼亦爲兄弟。何遽降之」。不從。玉律拔都原作拔相。秋濤校改。遂與塔海答魯、通世案、伯哷津作圖該・烏魯、分爲二人。領所部來歸。謂上曰「如我屬、將有無夫之婦無牧之馬、而來。以泰赤烏長母之子討殺我也。我擔當棄、從義而拈之」。秋濤案、此句疑有脫誤。通世案、擔、疑是誓之譌。棄、棄泰赤烏也。上曰「我方熟寐。捽髮而悟之。兀坐掀髯而起、曰「汝之言、我素心也。汝兵車所至、余悉力而助也」。通世案、額兒忒曼譯喇施特史、曰「烏魯克謂「我等之來、如無夫之婦、無主之馬、無牧之牛羊。所以然者、由我舊主長母之子虐害我也。故棄而來從」。成吉思曰「我似熟寐、汝捽我髮以覺我、又托我頦以起我。我當悉力以助汝矣」。較本書、文義稍明。文卿曰「托我頦以起我、卽「兀坐掀髯而起」一語之異譯」。既盟後、二人食言、叛歸。少秋濤案、少字有誤。文田案、少下當有時字。族人忽數・忽兒章、秋濤案、當卽後之忽敦忽而章。說見後。怨塔海答魯反側、遂殺之。秋濤案、元史作「爲泰赤烏部人所殺」。與此不同。通世案、洪氏曰「祕史卷五蒙文、泰亦赤兀族內、有豁敦斡兒長之人。是爲泰亦赤兀人無疑。」照烈部已亾矣。泰赤烏部衆、苦其長非

法、相告曰「太子原注「謂太祖也」。衣人以己衣、乘人以己馬。安民定國、必此人也」。因悉來歸。赤老溫原作老赤溫。文田案、當作赤老溫。通世因改。案、源流作齊拉袞。伯哷津作赤老根。拔都原作拔相、秋濤校改。父梭魯罕失剌密釋之。秋濤案、此句上下有脫文。蓋謂太祖蒙難事也。文田案、此卽四傑之赤老溫也。而元史無傳。蓋戰功失傳、無家狀銘志之故、但知為梭魯罕失剌之子耳。祕史作鎖兒罕失剌。又案、脫文在赤老溫拔都之上。蓋述族人泰赤烏部虜太祖、以板枷枷之之事也。見祕史。通世案、源流亦載蘇勒德遜托爾干沙喇援太祖免難之事。是時歸我。哲別之原作子、秋濤校改。來、實以力窮故也。通世案、伯哷津書云「速兒都思人鎖兒干失剌、曾脫成吉思於難」。其子赤老根、與赤速特人哲別、本在泰赤烏特部長哈丹大石之子布答麾下。至是赤老根來附。哲別則因泰赤烏特既敗、遁山林中無所得食、力乏、亦降」。布答、祕史作脫朵格又脫迭干、哲別作者別。祕史載鎖兒干失剌及者別來降之事、在辛酉年斡難河戰後。本書西史、皆叙在此、係誤。見後。又案、者別、元史用字、岐互最甚。太祖紀、前作哲別、後作遮別、木華黎、耶律阿海傳作闍別、吾也而傳作哲不那顏、曷思麥里傳作哲伯、速不台傳作只別、巴而朮阿而忒的斤傳作者必那演、布智兒傳作別那顏、郭寶玉傳作柘栢。元史譯文證補、有哲別補傳。失力哥也不干秋濤案、祕史作失兒古額禿。曾植案、祕史蒙文作失兒古額禿額不堅、解曰「額不堅、老人也」。此也不干、卽彼額不堅。然則失力哥也不干、是一非二。通世案、失力哥、卽祕史之失兒古額禿也。元史作述律哥圖、八鄰氏。伯哷津亦作巴鄰部長述兒哥圖。手持阿忽失拔都原作忽阿失拔相。秋濤改相為都。曾植案、忽阿、當作阿忽。阿忽失拔都、卽泰赤赤兀部長阿兀出把阿禿兒也。此文叙事、與祕史小不同。亦不當在此。蓋錯簡也。通世案、伯哷津作泰赤特酋阿忽朱巴哈都兒。因烏乙忽阿。又案、失、卽出之譌字。塔兒忽台通世案、卽上文塔兒兀台。二人、來至忽都渾野、秋濤案、祕史作忽都忽地面。復縱原作從。秋濤案、似當作縱。之去、通世案、祕史載此事、亦在斡難河戰後、情事最詳。失兒古額禿之所執而復縱、唯塔兒忽台乞鄰勒禿黑一人。阿兀出把阿禿兒、則無縱去之事。祕史云「成吉思將阿禿出

等子孫殺盡、將百姓起了」。乃本書西史、俱云「阿忽朱亦被縱」、誤矣。止將己子乃牙阿剌牙原作才。秋濤案、乃才當作乃牙。祕史作納牙阿阿剌、祕史作阿剌黑。通世案、伯哷津亦作納牙阿剌。黑。因改才為牙。二人原此下衍才字、秋濤校刪。來歸。後搠只魯·鈔罕二人率朵郎吉·札原作卽利。秋濤據元史改。剌兒部曾植案、祕史十三晃塔合兒、蒙文姓朵籠吉兒氏。朵籠吉兒、卽朵郎吉也。奧魯赤傳、祖朔魯罕、札剌兒氏。疑鈔字當在魯字上。卽其人也。通世案、伯哷津作「札剌亦兒分族朵郎吉部長、朮只角兒海、率所部」。洪氏曰「本紀「若朵郎吉、若札剌兒」、分為二部、疑未是」。案拉施特云「札剌亦兒分為十部。朵郎吉其一也。又案、搠只鈔魯罕、一人名也。本書為二人、亦非。及荽朵勝和秋濤案、未詳。當是人名。文田案、荽朵勝和、當作妥果勒和。卽祕史多豁勒忽四字之對音。曾植案、荽朵勝和、當作妥果勒和、此說至確。多豁勒忽、正忙忽部人。率忙兀部亦來歸。通世案、忙兀、祕史之忙忽惕氏、納臣次子兀台之裔也。案祕史、是時兀魯兀惕種主兒扯歹、與忙忽種忽余勒答兒、各率其族、離札木合、歸太祖、又晃豁壇種蒙力克、率其七子來。而哲台·多豁勒忽兄弟之來、則在前此太祖與札木合分離時。本書不言主兒扯歹·蒙力克等來歸、而唯載多豁勒忽之事於此、亦似失。又祕史云「太祖喜諸人之來、宴於斡難河邊」。本書唯云「日後云云。」釁宴之故未晰」。

日後、上同月倫太后、暨哈撒兒、通世案、此太祖長弟、祕史拙赤合撒兒。元史食貨志搠只哈撒兒。宗室表作搠只哈兒、脫撒字也。源流作哈薩爾。元史類編有傳。斡眞那顏通世案、斡原作幹、今校改。此太祖幼弟帖木格斡惕赤斤之別稱。宗室表云「鐵木哥斡赤斤、所謂斡眞那顏者也」。元史類編有傳。諸昆弟薛撒、曾植案、當作薛徹。大丑通世案、薛徹、下文作薛徹別吉、祕史作薛扯別乞、又作撒察別乞。大丑、祕史作台出。俱把兒壇兒斡勤巴兒合黑之孫也。元史以薛徹大丑為一人、其下更加薛徹別吉、誤。等、各以旄車載湩酪、大會於斡難河林木間。通世案、斡難河、今名敖嫩河。自肎特山西之特勒爾集嶺西北小肎特山東麓、東流、折東南流、經特勒爾集嶺北麓、又東經集隆

山北麓、又東經大冐特山北麓、又東流稍東南、有齊札婁河自西南來會。又東、有巴爾喀河、自巴爾喀嶺、東北流來會。又東南、有齊母爾喀河自南來會。又東北、有科勒蘇河自南來會。又東北、有巴爾集河自西北來會。又東北、折東流、又折北流、有音果達河東流來會。又東北流、經尼布楚城南、爲失爾喀河、又東北流、折東流、與阿爾渾河會、爲黑龍江。會中太后暨上謂曾植案、謂當作爲。族人薛徹別吉及其母忽兒眞哈敦通世案、祕史作忽兀兒臣娘子。共置酪湩一革囊。其次母野別該通世案、祕史作額別該。前、獨置一革囊。忽兒眞哈敦怒曰「今不尊我、而貴野別該乎」。遂笞主膳者失邱兒。張石州曰「失邱兒、卽帝之主膳者」。通世案、祕史作失乞兀兒、伯哷津作薛徹兒。又案、伯哷津書云「主酒者、旣行酒於忽兒眞、復行酒於那母該。忽兒眞見那母該之酒、不與衆同、故怒、以掌撻主膳者薛徹兒」。祕史云「先爲訶額侖合撒兒撒察別乞等、置一甕馬妳子、又爲額別該置一甕。豁里眞·忽兀兒臣二娘子曰「我前何不先置」。打厨子失乞兀兒」。據本書、則爭酒之多寡、伯哷津則爭酒之善惡、祕史則爭行酒之先後、不知孰是。但本書西史、皆失載豁里眞。是則似祕史爲長。泣曰「蓋以捏群太石、葉速該此下原衍命字。秋濤校刪。拔都原作相、秋濤校改。二君去世、捏群太石、原作捏群太后。秋濤案、此二語有誤。攷元祕史云「將厨子失乞兀兒打了」。失乞兀兒說「也速該把阿都兒捏坤太子死了的上頭、被人這般打」說著、大聲哭了」。案、失乞兀兒、卽此失邱兒。也速該把阿都兒、卽此葉速該拔都、卽太祖之父烈祖也。捏坤太子、卽烈祖之兄也。捏坤、本紀作聶坤。此作捏羣。蓋坤字或寫作群、群誤爲辟。后字、乃石之譌。太后、卽太子也。通世案、西史亦作也速該捏羣大石。因從何意、改辟后二字。我專曾植案、專當作等。爲他人所辱至此」、因大哭。是時別里古台那顏原無那字。張石州曰「當作那顏」。秋濤據增。通世案、祕史作別勒古台、元史本傳作別里古台、太宗紀作孛魯古帶、食貨志作孛羅古解、伯哷津作別勒格台、源流作伯勒格德依。太祖異母弟也。掌上乞列思事、原注「係禁外繫馬所」。文田案、元史本紀注云「乞列思、華言野外牧場也」。親搖上馬。秋濤案、搖字疑誤。文田案、搖當作挖。播里文田案、祕史作不里孛闊、通世案、伯哷津作播魯。祕史、忽禿黑禿蒙古兒之子、太祖之族父也。掌薛徹別吉乞列思事。播里從者、因盜我馬靷、別里古台執之。播里怒斫別里古台、背傷。左右欲鬭。別里古台指之曰「此仇、汝等欲卽報乎。我傷不甚也。姑待之。不可由我致隙」。秋濤案、元史別里古台傳、不著事之始末。本紀具始末、與此同、而不載此數語。均不如此書之詳也。其衆不聽、通世案、祕史作太祖不聽。西史作衆怒不可遏。蓋祕史據實直書、係草創之筆。二書則已經潤色也。各執馬亂撞、斫木枝疾鬭。我衆勝之、乃奪忽兒眞·火里眞通世案、祕史作豁里眞。二哈敦、屈麾下。文田案、屈當作居。於是絕好。後復議和、遣二哈敦歸。行成之際、塔塔兒部長蔑兀眞笑里徒蔑原作篾、張石州校改。秋濤案、祕史作蔑古眞薛兀勒圖。通世案、伯哷津作摩勤蘇里徒。背金約。金主遣丞相完顏相、帥兵逐塔塔兒北走。秋濤案、元史類編、引作「金遣丞相完顏襄、帥兵逐叛者北走」。通世案、喇施特以是役爲帝年四十時事。據其稱「帝生於黑蚩拉曆五百四十九年、七十三歲而歿」、則是役在甲寅年、當宋光宗紹熙五年、金章宗明昌五年也。洪氏曰「案完顏襄北伐、見金史、當卽塔塔兒之役。合紀傳考之、乃是丙辰年事、爲甲寅後二年。元初無史官、太祖本紀、爲後來追憶著錄、年分未可盡憑也」。今依本書癸亥年「上春秋四十二」文推之、則金承安元年丙辰、太祖年三十五歲也。見癸亥年條注。又案、通鑑輯覽云「金自明昌末、北部合底忻與山只昆、恃强擾邊。又有廣吉剌者、尤桀驁、屢脅諸部入塞。而阻轐亦叛、連歲用兵」。詳見金史內族宗浩傳。又內族襄傳云「左丞相夾谷淸臣北禦邊、措畫乖方、屬邊事急、命襄代將云云。乃命支軍出東道、襄由西道。而東軍至龍駒河、爲阻轐所圍、求援甚急。襄疾馳襲破之。衆皆奔斡里札河」。合底忻卽合塔斤。山只昆、卽撒勒只兀惕。廣吉剌、卽翁吉剌惕。阻轐疑是塔塔兒分部之名。但喇施特舉塔塔兒六部名、無似阻轐者。龍駒河、今克魯倫河。斡里札河、卽祕史浯勒札河、今烏爾匝河也。諸部叛金、而太祖王汗爲金協力。後年諸部同盟、與太祖王汗戰、旣發端於此也。又案、完顏襄、祕史作王京丞相。王京蓋完顏之轉也。上聞之、遂起近兵、發至斡難河、迎

討之。秋濤案、斡原作幹。今依類編所引改。又案、祕史云「大金因塔塔兒篾古眞薛兀勒圖等、不從他命、教王京丞相領軍來剿捕」。太祖知了。太祖說「如今趁著這機會、可以夾攻他」。遂使人對脫斡鄰說「如今金國差王京、將塔塔兒篾古眞等、逆著浯勒札河襲將來也。他正是廢了我祖父的讐家。父親可以助我夾攻」。脫斡鄰許了、軍馬整治了三日、親自到來。太祖又使人對主兒乞種的撒察別乞・泰出、將這報讐的意思說將去、要他來助。待了六日不來。太祖遂與脫斡鄰引軍、順浯勒札河、與王京夾攻塔塔兒」。案、太祖是時兵力尚單、故必借脫斡鄰兵力同往。脫斡鄰、卽後稱王罕者也。此書不載脫斡鄰助兵一事、疑有脫文。又案、祕史載太祖之父烈祖、先爲塔塔兒部人所鴆、故太祖志在復仇。此書亦失載其事。故又諭月兒斤來助。張石州曰「案本紀作「仍諭薛徹別吉帥部人來助」。葢月兒斤、卽薛徹別吉部人也」。秋濤案、祕史作主兒斤、又作主兒乞。卽此月兒斤之異文。曾植案、史表、葛不律寒七子、長窠斤八剌哈哈、今岳里斤、其子孫也。月兒斤、卽岳里斤。又案、月兒斤對音、與主兒乞不近。葢一部而異稱。其稱月兒斤者、主兒乞係出斡勒巴兒合黑、史表作窠斤八剌哈哈。斡勒窠斤月兒斤岳兒斤、皆一音之轉、以祖名爲部名也。其稱主兒乞、則祕史具其解。二者不必牽合。通世案、祕史莎兒合禿主兒乞、伯埒津作莎兒哈禿月兒乞。月兒乞、卽主兒乞之轉、則月兒斤、亦卽主兒斤之轉也。稱一人、則云主兒斤、稱數人、則云主兒乞、蒙古語法然也。子培以爲「一部而異稱、月兒斤卽斡勒之轉」者非是。候六日不至。上以麾下兵與戰紬剌禿失圖秋濤案、類編引此書紬作納、是也。忽剌禿失圖秋濤案、類編引、無此五字。之野、秋濤案、祕史作忽速禿失禿延、卽此忽剌禿失圖也。乃塔塔爾立寨處。通世案、速剌二字、必有一誤。盡擄車馬糧餼、殺篾兀眞笑里徒、又獲大珠衾、銀綳車各一。秋濤案、類編引此、衾作金。曾植案、衾字不誤。祕史蒙文、是銀搖車、大珠被。此文其詞耳。據此語、祕史譯文所不載、知作此紀者曾見蒙文原本也。通世案、喇施特作嬰兒銀搖車及車中金繡被、自注「當日蒙古人素所未見、託爲珍異」。金兵回。金主因我滅塔塔兒、拜上爲察兀忽魯。原注「若金移計使也」。秋濤案、類編引此、作「金主授帝爲察兀忽魯」。曾植案、金一制、招討使下、有副使、有判官、有勘事官云云、秩從七品、爲元制斷事官名所自防。太祖受札兀忽魯名分、其西北路招討司之勘事官與。又案、祕史作札兀忽里。祕史蒙文、斷事曰札兒忽。然則札兀忽里者、斷事官也。元百官志、斷事官曰札魯忽赤。布只兒傳作札魯忽。又案、移計者、招討之誤。字形相近、傳寫致譌也。祕史、王京語太祖「歸奏金主、再大的名分招討官、與你做者」。此括其語意。然札兀忽里、非卽招討使也。原注葢微誤。通世案、續綱目作察兀禿魯、祕史蒙文作札兀惕忽里、西史作察兀特忽里。又案、祕史王京、卽完顏之轉、謂完顏襄。

亦冊克烈通世案、祕史作克列亦惕、喇施特作客剌亦特、元史朮赤台傳作怯列亦。部長脫憐爲王。秋濤案、原作「爲主」、誤。今依類編所引改正。又案、脫憐與祕史合。而類編所引此書、前後皆作脫里以聲近、而譯語偶異也。此云「金冊克烈部長脫憐爲王」、下云「克烈部汪罕可汗」。卽此冊爲王之脫里也。攷當時如卜魯欲罕、太陽罕、皆止稱罕。此脫里因金冊爲王、故稱王罕、亦作王可汗、見元史木華黎傳。此作汪可汗、亦譯文之異。史太祖紀云「汪罕名脫里、受金封爵爲王。番言音重、故稱王爲汪罕」。其論甚晰。類編曰「案、元史皆稱王爲罕。其曰汪罕者、是以二字而諧一音。而舊史不察、竟稱汪罕、亡其名與部。今皆書脫里之名、而冠以克烈部、以正因譌之失」。秋濤以爲汗乃北方君長之名、不待冠王號於王。類編此論、尚未攷金冊爲王之事也。通世案、脫憐、祕史作脫斡鄰勒、元史哈剌哈孫傳作脫斡璘、伯哷津作脫忽魯兒。洪氏曰「脫忽魯兒雖微誤、然可證祕史譯音確而且備」。時我衆居哈連徒澤間、爲乃蠻部人所掠。秋濤案、元史太祖紀云「帝之麾下、有爲乃蠻部人所掠者。帝欲討之、復遣六十人、徵兵於薛徹別吉。薛徹別吉、以舊怨之故、殺其十人、去五十人衣而歸之。帝怒曰「薛徹別吉、曩笞我失邱兒、斫傷我別里古台。今又敢乘敵勢以陵我邪」。因帥兵踰沙磧攻之」。祕史則云「太祖落後下的老小營、在合澧泐海子邊、被主兒乞將五十人剝了衣服、十人殺了」。太祖大怒」。案、二說雖有不同、然其載薛徹別吉起釁則同。此書原本、當亦載是事、與本紀同。爲傳寫者脫去耳。所云敵指乃蠻、彼則指薛徹別吉也。曾植案、哈連徒澤、卽祕史合澧泐海子。上怒曰「昔者別里古台、爲彼所傷。我捨釁議和、而不聽。今何乃乘敵勢陵我」。通世案、祕史太祖落後下的老小營、葢太祖敗塔塔兒、置戍而還也。合澧泐海子、以本書較之、當云合澧泐惕。祕史略惕音。其地雖不可知、必在蒙古東、不與乃蠻相接。安得爲其所掠哉。祕史西史、並無乃蠻侵掠之說。西史云「事定、欲與月兒斤人修好、餽以俘獲。月兒斤殺十人、奪五十人之衣騎。成吉思怒曰「昔者傷我別勒格台、與修好而不從。今又與我之敵相合而陵我」」。祕史云「太祖大怒、說「何故被主兒乞如此做云云。今遍爲祖宗上頭、要同他報讎、他又不來、倒

倚著敵人、又做了敵人」。二書所謂敵、皆指塔塔兒也。蓋本書所記哈連徒澤遭侵掠者、本亦被月兒斤殺掠之事、而誤以月兒斤爲乃蠻也。元史知其不通、更加欲討乃蠻而徵兵之說、於是乃蠻之侵掠、與月兒斤之殺掠、分爲二事矣。唯祕史最近實喇施特所。稱修好餽俘、恐亦潤色之辭。

因發兵於大川、至朶欒盤陀山、欒原作奕、脫陀字。通世案、奕爲欒之譌無疑。祕史作朶羅安孛勒荅兀。孛勒荅兀、蒙古語孤山也。本書常作盤陀。今因改補。大掠月兒斤部。薛徹大丑、僅以妻孥數人脫走。秋濤案、自此月兒斤部、爲太祖所併。祕史云「初合不勤皇帝有七子。長名斡勤巴剌合。合不勤、於百姓內、選揀有膽量、有氣力、剛勇能射的人隨從他。但有去處、皆攻破、無人能敵。故名主兒乞」。太祖得此、兵力始强。

上時居塔朶剌之野、有克烈部汪罕可汗通世案、罕字恐衍。下同。弟札阿紺孛來歸。秋濤案、祕史云「成吉思在帖兒速地面、有客列亦種人札合敢不來降」。札合敢不、卽此札阿紺孛也。通世案、下文太祖責王汗語中、有塔剌速野、祕史蒙文作忽兒班帖列速惕、伯哷津作忽兒奔塔剌速特。在克烈部境內。卽此帖兒速地也。朶剌二字、疑倒置、且有譌字。札阿紺孛、朮赤台傳作札哈堅普、伯哷津作札罕不、曰「札罕不本名乞諫。幼時爲唐古特所獲、受封而得是稱。人遂呼以爲名」。洪氏曰「此節、華書所無。札罕不、卽唐書吐蕃傳之贊博二音。較諸史錄祕史諸音、尤爲得眞」。適蔑里乞部、通世案、祕史作篾兒乞惕。居色楞格河邊。與我會戰。上與札阿紺孛迎敵之。其衆敗走。通世案、下文太祖語中云「札阿紺孛居漢塞、聞我招、遠來投歸。我乃登山而望。又爲蔑力乞所逼云云」。則是太祖招札阿紺孛、而蔑里乞妨其來歸、故太祖自至帖兒速地、逐蔑里乞、而救之也。是時有土滿土伯夷・董哀諸部秋濤案、祕史云「客列亦種及那禿別干・董合等姓、亦來降」。董合、卽此董哀也。文田案、夷當作安。字之誤也。祕史作土綿土別干。曾植案、土滿卽土綿。祕史譯文無、蒙文有。又案、土伯夷、卽元史土別燕氏。通世案、土滿非部名、釋義爲萬。祕史蒙文、禿綿斡亦剌、譯文作萬斡亦剌。土綿土別干、猶言衆土別干也。及原作乃。文田案、乃當作及。通世因改。克

烈敗散之衆亦來降。秋濤案、元史本紀、止載札阿紺孛來歸事、而於太祖之敗蔑里乞、及諸部來降之事、皆遺漏未載。當以此書爲正。曾植案、札阿紺孛來降、蓋王罕爲乃蠻亦難察攻敗之故。是時王罕奔西遼、其衆潰散。故董哀諸部亦來歸也。此事、祕史叙在阿雷泉盟後、則辛酉壬戌二年。奔敗在此時、反國在此時、成吉思施德在此時、王罕萠歹心、亦在此時、似非事情。恐當以此書爲正。其事當在明昌四年、承安中也。觀後合蘭只之戰、王罕兵勢甚强、太祖甚危懼、非甫經喪敗、依人以立國者所能然也。通世案、沈說是也。祕史卷五第十節「在後成吉思云云」至「住過冬了」、當在卷首、則次第不亂。疑原本有錯簡。伯哷津書、記朶闌山戰之後、云「成吉思時年四十。是歲、王汗弟札罕不及客剌亦特分族董喀亦特部人來歸」。洪氏曰「此下有「太祖與戰」一語。案錄與祕史、皆謂「太祖與札合敢不迎禦蔑兒乞」。此處原文或有奪誤、故訛爲帝與札罕不戰也。其下更有「後仍以歸汪罕」一語。汪罕既來、舊部必歸舊主、應有之義。祕史等書失載、附識於此」。案太祖年四十、據喇施特紀年、爲甲寅年。然完顏襄北伐、在丙辰年、爲甲寅後二年、則札罕不之來歸、亦當在其年。卽宋寧宗慶元二年、金章宗承安元年也。

汪罕可汗始與也速該可汗和好、秋濤案、也速該可汗、卽烈祖也。相稱安荅。原注「交物之友」。交原作變。秋濤案、今所云諳達、卽案荅之轉音。曾植案、史本紀注、作「交物之友」。通世案、交譌作変、遂爲變。今改。畏荅兒傳云「按達者定交不易之謂也」。所以然者、由初汪可汗之父忽兒札胡思盃祿可汗秋濤案、本書後癸亥年、作忽兒札忽思盃祿可汗。本紀作汪罕之父忽兒札忽思盃祿。祕史作忽兒察忽思不亦魯罕。既卒、汪可汗殺戮昆弟、秋濤案、祕史云「殺其父之昆弟」、與此微異。本紀與此同。通世案、西史云「王汗祖默兒古斯卜欲魯克汗有二子、長忽兒札忽思卜欲魯克汗、次古兒汗。忽兒札忽思生數子、曰脫古魯兒、卽王汗、曰額兒客喀剌、曰札罕不。又有別子數人。王汗於父卒後、殺其弟塔帖木兒大石・布喀帖木兒及同族弟兄數人」。原注「古兒汗是人名、非喀剌乞䚟之古兒汗、不可誤混」。祕史卷七亦曰「你父忽兒察忽思不亦魯黑皇帝、有四十子。內只你最長、所以立

做皇帝。後你殺台帖木兒・不花帖木兒二弟」。據此、則卷五謂「汪罕殺不亦魯罕諸弟」、弟者、子之誤寫也。其叔父菊兒可汗、秋濤案、本書後癸亥年、作菊律可汗。元史本紀作菊兒。祕史作古兒罕。率兵與汪可汗戰。逼汪可汗於合剌溫隘敗之。秋濤案、本紀與此同。祕史作「追至合剌溫山內」。通世案、合剌溫隘、在土拉河上。見後土兀剌河上黑林間注。僅以百餘騎脫走、奔也速該可汗。張石州曰「也速該可汗、當重一句」。親將兵逐菊兒可汗、走西夏。秋濤案、祕史云「也速該將古兒罕趕入合申地面」。合申卽西夏也。亦曰唐兀。復奪部衆歸之。汪可汗感德、遂盟按荅。張石州曰「句不完」。秋濤案、類編云「遂請盟稱按荅」、是也。當從之。後汪可汗弟也力可哈剌者、秋濤案、祕史作額兒客合剌。以其多殺昆弟、秋濤案、本紀云「也力可哈剌怨汪罕多殺之」、語意未晰。以此書爲允。通世案、本紀多殺之下有故字、當屬上爲句、則語意亦晰。叛歸乃蠻部亦難赤可汗原亦難赤上有立字。秋濤案、本紀「亦難赤爲發兵」。此立字誤衍。又案、後甲子年作亦年可汗、祕史作亦難察。亦難赤可汗、發兵伐汪可汗、盡奪克烈部衆、與也力可哈剌。汪可汗脫身歷走三城、曾植案、三城見祕史蒙文。奔赴契丹主菊律可汗。原作菊津可汗。秋濤校改。案、此契丹、後亦稱西契丹、卽西遼也。史云「西遼末主直魯古、改元天禧、立三十四年、乃蠻王屈出律設伏、伺其出獵擒之、而據其位、遂襲遼衣冠、尊直魯古爲太上皇、侍以終身」。西遼自耶律大石至直魯古、有國幾九十年、而屈出律奄有其國、仍號西遼。屈出律、卽此所云菊律可汗也。札木合衆、亦推爲局兒可汗。蓋菊兒局兒、北方美稱、故彼此相同耳。通世案、哈剌亦哈赤北魯傳作西遼主鞠兒可汗、祕史作合剌乞塔種古兒罕。洪氏曰「蒙古語、古兒普也。猶云統轄之汗」。案此古兒罕、卽直魯古也。直魯古失位、在太祖卽位六年、蓋王汗西奔後十五年也。旣而復叛之、涉畏吾兒西夏諸城邑。秋濤案、祕史作「從畏兀唐兀二種經過」。唐兀卽西夏。中道糧絕、遺乳羊五頭。以繩禁羊口、奪其乳爲飲、刺橐駝血、煮

爲食、食困甚、僅至曲薛兀兒澤。秋濤案、祕史作古泄兒海子。通世案、伯哷津書云「龍年、行至庫思古兒諾爾、近成吉思汗居地」。龍年、謂丙辰年。喇施特旣以札罕不歸太祖爲甲寅年事、故謂王汗以丙辰年東歸。然完顏襄北伐、爲丙辰年、則王汗東歸、恐當在丙辰後二年戊午歲。卽宋慶元四年、金承安三年也。庫思古兒諾爾、卽曲薛兀兒澤。洪氏曰「西域史下文云「先時汪罕與也速該、曾同住是地」、又云「汪罕至漳爾、在克魯倫河這邊、帝在河那邊」、則此漳爾、似當在克魯倫河南、或在西。今名無考」。考下文太祖責王汗語中、有曲笑兒澤。也速該嘗偕王汗、追古兒汗至其地。西史所謂「曾同住」、蓋在其時。然則此澤當在克烈部舊境內、似非克魯倫河近地。上聞之、以其初先君按荅之故、乃遣近侍塔海・雪也垓二人往招之來。秋濤案、祕史云「使勇士速客該去迎」。速客該、卽雪也垓。通世案、塔海、祕史作塔孩把阿禿兒、速勒都孫氏。雪也垓、祕史作速客該者溫、朵籠古兒氏。太祖始爲合罕時、嘗遣二人、報之王罕。但此迎王罕之使、祕史唯有速客該、而無塔孩。上自怯綠連河親迎撫勞、安置軍中、大賑給之。通世案、祕史云「成吉思自至客魯連河源頭、迎見王罕、至營、遂使百姓供給」。是年、在忽巴合牙地面、住過冬了」。忽巴合牙之地、蓋在客魯連河上、王罕暫寓於此、後乃歸土剌河上舊庭也。後秋、上同汪可汗、會於土兀剌河上黑林間、結爲父子禮。秋濤案、祕史自賑給汪罕後、汪可汗爲乃蠻人所困、太祖復救之。汪罕遂於土兀剌之黑林行、會成吉思、結爲父子。初王罕與成吉思父契交、所以呼爲父。今次又結爲父子以示親厚也。文田案、怯綠連河、卽克魯倫河。通世案、伯哷津書云「是年秋、會宴於河上喀剌溫乞卜察勒之地、重訂父子之好」。河上下注「河名字已不辨」。多遜謂「是土拉河」。洪氏曰「考諸親征錄與祕史、是也」。喀剌溫、祕史蒙文作哈剌屯、譯爲黑林。(多遜云「喇施特解喀剌溫喀卜札勒爲黑林」。布哷特淑乃德兒曰「蒙古語、喀剌謂黑、鄂因謂林、喀卜札勒謂陜隘」。然則此黑林間、與前文合剌溫隘正同也。蒙古游牧記曰「土喇河東、有東庫倫、其地曰昭莫多。譯言有林木也。蓋卽元祕史所云土兀剌河邊黑林子、爲客列亦惕種姓王罕所卓帳矣」。未知然否。又案、祕史叙是事、在忽剌安忽惕戰後。本書亦唯云後秋、不確指爲在何年。此係王罕去忽巴合牙後事、則當在後年。喇施特定爲是年秋、恐非。

是年冬、上討二字、秋濤酌增。月兒斤部先脫走者薛徹大丑、追至帖列徒之隘通世案、祕史蒙文作迭列禿阿馬撒剌、譯云迭刿禿口子。伯哷津作塔剌因阿馬色剌、恐音訛。滅之。通世案、主兒乞部之滅、祕史直叙於朵剌安山役之後。此書分爲是年事。祕史又叙太祖責撒察・泰出誅之、收主兒乞部衆、得帖列格禿伯顏兒孫、及小兒孛羅兀勒、及主兒乞氏得名之故、次及別勒古台殺不里孛可之事。此書都不載。

次年秋、通世案、西史作蛇年、謂丁巳年也。然王汗東歸、既在戊午年、則其次年、當爲己未年、卽宋慶元五年、金承安四年也。但祕史不載此戰。前此太祖居客魯漣河源不兒吉崖時、三種篾兒乞來襲、孛兒帖夫人被掠。太祖乞師于王罕及札木合、襲破篾兒乞、奪還孛兒帖、走兀都亦惕脫黑脫阿、兀洼思苔亦兒兀孫、擒合阿台苔兒麻剌、縱掠而歸。其事在太祖與札木合開釁之前、國史藎移之是年、而諱孛兒帖被掠之辱、刪王罕・札木合與援、太祖感恩等事、却謂太祖施惠。蓋以擬秦穆輸粟、欲深晉惠閉糴之罪也。上發兵哈剌哈河、通世案、此非流入捕魚兒海子之合泐合河。據祕史、札木合嘗居豁兒豁納黑主不兒之地、一作豁兒豁納川。太祖既得札木合援、破篾兒乞、相携至豁兒豁納川、同住一年有餘。國史藎訛豁兒豁納爲哈剌哈、且誤爲太祖初居之也。伐蔑里乞部主脫脫、秋濤案、祕史作脫黑脫阿。通世案、西史作托克塔。戰於莫那察山、通世案、祕史無此名。額兒忒曼作們哲河、注云「今曼津河、在喀剌思穆楞之地」、和渥兒特曰「案粟特兒地圖、曼査河流入齊科伊河、會于色稜嘎河。案齊科伊河、卽水道提綱之楚庫河。伯哷津又作孟察之地。亦見後文太祖責王汗語中。遂掠兀都夷都原作相。秋濤案、兀相。夷當作兀都夷。後太祖告汪可汗語、作兀都夷。是書、凡都字多譌作相。蔑里乞二部、曾植案、二部語誤。祕史兀都亦惕脫黑脫阿、兀洼思歹亦兒兀孫、合阿台苔兒馬剌、爲三種蔑兒乞。兀都亦惕、卽此兀都夷。脫黑脫阿、卽此脫脫。然則兀都夷、乃蔑里乞一種之名。非兀都夷爲一部、蔑里乞爲一部也。收其衆。上盡以其獲給汪可汗。其後通世案、西史作馬年、卽戊午年也。然喇施特紀年不可信。祕史、此事在狗兒年太祖剿塔塔兒時、卽壬戌年也。衆稍集、不約我軍、自侵蔑里乞部、至兀剌川、秋濤案、蔑里乞後作滅里乞、兀剌川後不剌川、皆譯語偶殊。通世案、祕史、兀都亦惕篾兒乞脫黑脫阿在不兀剌客額兒之地。此兀上疑脫不字。否則兀當作不。不剌川、謂今布拉河邊之野、布拉又作博拉。蒙古游牧記云「土謝圖汗部中左翼末旗牧地、東北至博拉河、接恰克圖軍臺及邊喀界」。異域錄「博拉地方皆草墩、甚泥濘、潦水成澤。其東南林木森密、望之鬱然」。此卽不兀剌客額兒之地也。殺脫脫之子秋濤案、此下、翁本原闕一字。土居思別吉、秋濤案、祕史作脫古思別乞。虜忽都台都原作相。秋濤據後文校改。察勒渾秋濤案、後作察魯渾。二哈敦曾植案、祕史蒙文「要著他兩女忽禿黑台・察阿侖」、譯文無名。通世案、伯哷津作忽禿黑台・察勒渾兩女。一與祕史蒙文合、一與本書合。兩女亦同祕史、哈敦恐誤。及招脫脫次子和都通世案、祕史卷六作忽圖、祕史卷九及西史作忽都。赤剌溫、二人領部衆而來。所奪不以秋毫與我。脫脫奔八兒忽眞之隘。隘、原本作隊。翁覃谿據本紀改。通世案、祕史作巴兒忽眞脫窟木、額兒忒曼作巴兒古眞脫古魯姆。施世杰曰「此乃今俄羅斯境之巴爾古情河上岸也。色楞格河北流入俄羅斯之拜喀爾湖。其湖之東北隅、有一小河西南流入湖者、卽巴爾古情河也。今俄國於河上置一城、曰巴爾古情城」。元史本紀、咩撚篤敦第七子納眞、於八剌忽民家爲贅壻。兒子海都稍長、納眞率八剌忽怯谷諸民、共立爲君、列營帳於八剌合黑河上、跨河爲梁、以便往來。八剌忽、卽巴兒古、八剌合黑河、疑卽巴爾古情河。喇施特呼色楞格河北諸部爲巴兒古特。瑪兒科保羅云「自喀剌科倫北行四十日、至巴兒古之野、居民名蔑斯克里特」。蔑斯克里特、卽蔑兒乞特。巴兒古之野、巴兒古特・蔑兒乞特諸部雜處也。巴兒古巴兒古特之稱、依地名爲部名、與依部名爲地名、未知孰然。

後通世案、西史作羊年、卽己未年也。然祕史叙於狗兒年王罕剿篾兒乞之後、亦當在壬戌年中也。上與汪可汗征盃祿可汗。秋濤案、本紀作不魯欲罕。通世案、祕史作古出

古敎不亦魯黑、額兒忒曼作卜欲魯克。元史魯欲、卽欲魯倒置。伯哷津書乃蠻亦難赤汗先卒、二子曰太陽汗、曰卜欲魯克汗。太陽汗、名太亦布哈。受金封爵爲大王、故曰大王汗。蒙古人訛爲太陽汗。乃蠻有古出魯克卜欲魯克之稱號、故其弟曰卜欲魯克汗。昆弟交惡、分國而治」。洪氏曰「祕史古出古敎、當爲其名」。多遜謂「其弟轄境在北、近阿爾泰山、其兄轄地在南、近沙漠」。案、大王汗說甚鑿、分明此與王汗得名之由相混而誤。然克烈乃蠻諸王系屬、獨喇施特爲詳、史錄祕史皆不及也。

至黑辛八石之野、文田案、黑辛八石、祕史作乞溼泐巴失、係海子名。劉郁西使記、稱爲乞則里八寺。乃龍骨河所瀦之海子。水道提綱所謂「昆隆古河、瀦爲奇薩爾巴思鄂模、周四十里」者也。奇薩爾巴思、卽黑辛八石四字之對音。通世案、西域水道記「噶勒札爾巴什淖爾、又曰赫色勒巴什」。淖爾卽鄂模也。洪氏曰「黑辛八石之野、當是淖爾近地、亦以湖名爲名。俄羅斯地圖、烏隆古河所注之淖爾、其北百餘里、有科則勒塔斯山、亦卽乞濕泐巴失之音」。案、西史作乞濕勒塔什。乞濕勒塔什、山名、赤石也。乞濕勒巴什、湖名、赤頭也。湖有赤頭魚、因以爲名。二名不同、然其地則相接也

盡虜其民。盃祿可汗先遣也的脫孛魯、秋濤案、類編引、孛作不。文田案、祕史作也廸土卜魯黑。領百騎爲前鋒。我軍逼之。走據高山。其馬鞍轉墜、擒之。秋濤案、類編引、鞍作騎。通世案、祕史云「時不亦魯黑在兀魯黑塔黑的地面濱豁黑水行。成吉思與王罕到了。不亦魯黑不能對陳、起過阿勒台山去了。追至忽木升吉兒地面兀瀧古河行、遇著不亦魯黑來哨的官人也廸土卜魯黑。被成吉思出哨的、趕上山去。因馬肚帶斷了、就拏住他。又追至乞溼泐巴失海子行、不亦魯黑遂窮促了」。兀魯黑塔黑之濱豁黑水、本書丙寅年作兀魯塔山莎合水。施世杰曰「濱豁黑水、卽今之索果克河、爲科布多河之上源」。阿勒台山、卽阿爾泰山、此謂阿爾泰東南幹山、在科布多城西南。忽木升吉兒、葢今布拉青吉兒河傍之地、河以地名、又名青吉斯河。兀瀧古河、卽烏隆古河。青吉斯河、出阿爾泰山南麓、南流與東北來之布爾干河合、爲烏隆古河、折西流、瀦爲赫色勒巴什諾爾。地名地形皆合。據此、則擒前鋒、在烏隆古河邊、然後追至赫色勒巴什之地也。本書似叙述未詳。西史全同本書、唯多「卜欲魯克逃於俶俶助特」一語。俶俶助特、卽元史之謙謙州、在唐努山烏梁海境內、詳元史譯文證補西北地附錄釋地。

冬、上與乃蠻部將曲薛吾·撒八剌二人、文田案、祕史作可克薛兀·撒卜剌黑。通世案、祕史西史、皆以爲一人。此作二人、誤。喇施特謂「可克薛古爲瘵病之聲、撒卜剌克爲名」。

遇於拜荅剌邊只兒之野、文田案、祕史作巴亦荅剌黑別勒赤兒。曾植案、拜荅剌、卽今拜達里克河。通世案、蒙古游牧記云「拜塔里克河、亦作拜達里克。源出枯庫嶺南麓、西南流、經庫倫伯勒齊爾之地、瀦爲察罕泊」。則巴亦荅剌黑別勒赤兒、卽拜塔里克河邊庫倫伯勒齊爾之地歟。喇施特曰「昔時乃蠻主娶汪古部女拜荅剌克、結婚於巴勒赤列之地。蒙古遂幷人名地名爲稱。或僅稱拜荅剌克」。說殆附會。又案、伯勒齊爾、蒙古語牧場也。此名、何地無之、不必指庫倫伯勒齊爾也。觀下文王汗等過也迭而案臺河、則東歸之軍、似沿札布干河烏里雅蘇台河而進、不南至拜塔里克河。拜荅剌邊只兒之地、竟不可考。

日暮列陣對宿、期明日戰。是夜汪可汗多燃火於所陣地、使秋濤案、類編作示。人不疑、潛移衆於哈薛秋濤案、類編薛作薩。兀里河上。文田案、西域水道記、「喀喇淖爾周數里、在布拉干河源南十餘里、東南流百里、入布拉干河」。卽此哈薛兀里河也。祕史作合剌泄兀勒河。此處當作哈剌薛兀里。通世案、類編作哈薩兀里河。誥必勒曰「卽今哈綏河」、哈綏河、亦曰哈瑞河、出杭愛山頂之西南幹山、東北流九百里、入色楞格河。祕史云「逆合剌泄兀勒河」、則當是西流之河。與哈綏河不合。

時札木合在幕下、合字原脫、張石州校增。通世案、西史亦云「札木合從成吉思軍」。唯祕史則云「那裏札木合王罕一同起時云云」。考札木合、雖與太祖爲安荅、然自十三翼戰以後、變爲深讎。何有從太祖之事哉。葢是役在壬戌年末。前辛酉年、札木合率羣部、圖太祖及王罕、事敗衆潰、羣部離畔、於是不得已降於王罕、遂寓於其軍也。設使是役在辛酉之前、如本書所述、則札木合固爲鉅姓豪族、不嘗不從太祖、幷當不屬王罕也。

日出、望見汪可汗立旗幟非舊處、馳往問之曰「王知衆否。我昆弟如野鳥依人、終必飛去。餘皆白翎鵲也。棲息幕上、寧肎去乎。我嘗言之矣」。秋濤案、此段語意未晰。祕史云「札木合對王罕說「我是存有的白翎雀兒、帖木眞是散歸的告天雀兒」。元史本紀「札木合言於汪罕曰「我於君是白翎雀、他人是鴻雁耳。白翎雀、寒暑常在北方。鴻雁遇寒則南飛就暖耳」。意謂帝心不可保也」。二書皆與此異。然語較明。通世案、西史曰「札木合附王汗耳語曰「我友無恒心、如鴻雁遇冬則飛去。我如白翎雀、不因寒暑異棲」」。本書之我昆弟、元史之他人、西史之我友、皆指太祖也。餘皆二字、疑是余若之譌。

部

將曲憐拔都聞之歎曰「至愛昆弟之間、何爲此言也。」秋濤案、祕史作古鄰把阿禿兒所言。通世案、祕史云兀卜赤黑台的人、似古鄰部名。西史作兀卜赤兒古鄰巴哈都兒、云「兀卜赤兒、爲一種紅果名、婦女取以𩓐面。古鄰面赤、故以是稱之。成吉思亦甞用此果染面」。和都・赤剌溫、因是亦叛汪可汗、歸其父脫脫所居。通世案、因是二字、似指札木合離間。祕史則叙於乃蠻將襲掠之後、云「因這機會、也連他百姓離了、欲與他父相合、順著薛涼格河去了」。最協事情。上見汪可汗移去、曰「此輩無乃異志乎」。通世案、祕史云「他將我做燒飯般撇了」、西史云「我今在火坑中、而王汗棄我」。卽解陣去駐撒里川。文田案、祕史作撒阿里客額兒。汪可汗至土兀剌河、通世案、祕史無此句。王罕歸途被乃蠻襲掠、未達土兀剌河也。伯哷津作塔塔兒土霍勒之地。雖其地今不可考、然可以證土兀剌河之誤也。其子亦剌合鮮昆、及札阿紺孛、通世案、伯哷津作伊勒喀鮮昆・札罕不。祕史作桑昆、無札合敢不。據祕史、是役在壬戌年、而札合敢不之奔乃蠻、在壬戌之前、其不從王罕軍、明也。自也迭而案臺河文田案、祕史作額垤兒阿勒台的谷子。通世案、西史云「二人同至伊迭兒阿爾泰之地、其地有河多林木」。祕史則謂帝渡此而還。蓋太祖先渡、王罕等後至也。蒙古游牧記云「伊第爾河、舊作厄得勒。源出喀爾喀西界鄂勒伯稽山、東流、齊老圖河自西南來會。又東北流、入色楞格河」。額垤兒阿勒台谷子、蓋謂伊第爾河源之地。來會父軍。曲薛吾・撒八剌、乘其不備、虜其部衆、通世案、祕史云「於王罕的後襲著、將桑昆的妻子百姓擄了」。本書失載妻子。西史有眷屬字、卽妻子也。又掠汪可汗所居邊民牛馬輜重而還、通世案、祕史云「又將王罕在帖列格禿口子行的一半百姓頭口也擄將去了」。較撒察・泰出就擒之地、多一格子。伯哷津作塔剌因阿馬色剌與上同。亦剌合・札阿紺孛僅以身免、奔告汪可汗。汪可汗命亦剌合、將己兵往追之。且遣使來告、曰「乃蠻爲不道、虜我人民。太子有良將四人。能假我雪怨復人民乎」。上釋前憾、遂遣博爾朮那顏、通世案、祕史作孛斡兒出、阿魯剌惕氏。嘗援太祖逐賊、至太祖娶孛兒帖後、遂來屬。西史作孛古兒濟諾顏、源流作阿爾拉特博郭爾濟諾顏。元史有傳。木華黎國王、通世案、祕史作模合里、又木合黎、札剌亦兒氏。初屬主兒乞部、太祖平主兒乞時、從父古溫兀阿來屬。伯哷津作木訶里國王。洪氏曰「木華黎封王在後、而此處已稱國王、可見脫必赤顏原本如是。祕史作木合里。此作訶字音、可見史稱木華黎、音未甚合。元史有傳。博羅渾那顏、通世案、祕史作孛羅兀勒、又孛羅忽勒。元史本傳作博爾忽、許兀愼氏。太祖平主兒乞時、孛羅兀勒猶幼、在主兒乞營內、古溫兀阿弟者卜客得之、以獻訶額侖。西史孛羅古勒諾顏。赤老溫拔都通世案、赤老溫見前、伯哷津作赤老根巴哈都兒。祕史、速勒都孫氏。辛酉年、闊亦田戰後、隨父鎖兒罕失剌來屬。今是役、赤老溫已在麾下、其爲辛酉後年事益明。四將、帥兵往救之。比我軍至、亦剌合先與其將原作將其。張石州曰「二字疑倒」。今改。迪吉火力・亦禿兒干盞塔兀等二人通世案、祕史無此名。額兒忒曼作的斤火里・伊土兒干額德克、伯哷津作的斤火里・亦土兒干約塔黑。追至忽剌河山。通世案、祕史作忽剌安忽惕地面。曲薛吾・撒八剌迎敵擒秋濤案、原文此下有之字、衍文也。擒字當貫下迪吉火力、亦禿兒干盞塔兀二人爲句。迪吉火力・亦禿兒干盞塔兀二原作一。秋濤校改。人。流矢中亦剌合馬胯、幾爲所獲。須臾四將兵亦至、通世案、西史此間有孛古兒濟駛良馬之事。救亦剌合、大敗其衆、盡掠所獲、歸之汪可汗。秋濤案、元史本紀云「汪罕命亦剌合、與卜魯忽䚟共追之」。又云「師未至、亦剌合已追及曲薛吾、與之戰、大敗。卜魯忽䚟成擒。流矢中亦剌合馬胯、幾爲所獲。須臾四將至、擊乃蠻走、盡奪所掠歸汪罕」。卽此事也。而所云亦剌合之將、曰卜魯忽䚟、與此不同。迪吉火力亦禿兒、當卽卜魯。卜魯禿兒聲近。干盞塔兀、當卽忽䚟。亦聲近。當時此書盡用蒙古字。後來譯者、對音用字不同、遂致互異耳。曾植案、不可強合爲一。史當別有所本耳。可汗深感上德、謝曰「曩以困乏、原作用乏。秋濤依類編引改。荷太子加意原作切切。秋濤依類編引改。

存撫。今已亾之國、又奪歸之。不知將何以報也」。原闕不字。秋濤依類編補。通世案、是語純與西史同。祕史則云「在前他的好父親、將我輸了的百姓救與了我。如今他兒子、將我輸了的百姓、又差四傑來救與了我。欲報他的恩、天地護助知也者」。於是王罕憂其子弟無行、遂與太祖會于土兀剌河上之黑林、重訂父子之好。是卽本書叙於王罕東歸之後者也。又案、西史此處有王汗召孛古兒濟餽衣器之事。時閭脫脫復出八兒忽眞隘、原作入忽眞隘。秋濤校改。居統烈澤、上率兵復討之。後上與弟哈撒兒、討乃蠻部、至忽蘭盞側山、曾植案、此山、恐卽邊埃紀行之忽闌赤斤地方、譯改忽闌齊勤者、在塔米爾河西南。大敗之、盡殺諸部衆、取其屍焉、於是申號令還軍。通世案、此條、祕史無。伯哷津書云「是冬、聞托克塔復出巴兒古眞、將謀爲變。成吉思與弟朮赤哈薩兒共議、恐非實信、且料其無能爲、姑置之」。與本書異。末二句、蓋「勢弱不足慮矣」之異譯。是時原作時是。張石州曰「疑倒」。乃蠻勢弱不足慮矣。通世案、祕史成吉思自擊乃蠻還至撒阿里客額兒條下云「也將乃蠻種人的計量、大概料得過了、不把來當數」。是乃此一句所本。

上會汪可汗於薩里河不魯告崖、通世案、祕史、太祖娶孛兒帖後、嘗居客魯漣河源之不兒吉岸、卽此不魯告崖也。蒙古游牧記云「車臣汗部中右後旗牧地、當客魯倫敖嫩二河源。客魯倫河、源出肎特山東南百餘里支峯西南麓、西流又西南流、經肎特山頂之南、又西南、有白勒肎河、西北自土剌色欽之東麓、東南流來會」。白勒肎河、今圖作博爾肎河。不兒吉岸、當卽博爾肎河岸之地、撒阿里客額兒、在客魯倫河之上游、其地頗廣、包不兒吉岸在中、故又稱薩里河不魯告崖。河當作川、告當作吉。發兵征泰赤烏部、與長沆原作流。張石州曰「紀作部長沆忽等。流字疑誤」。忽阿忽出、秋濤案、祕史云「泰赤兀部、有阿兀出把阿禿兒」、卽此。通世案伯哷津書、此作盎庫兀庫楚、上阿忽失作阿忽朱、如二人、而實一人也。祕史、此作阿兀出、而無沆忽阿忽出。忽憐・忽都塔兒通世案、西史作忽里兒、巴哈都兒・忽都達兒。等、大戰於斡難河上敗之。襲帖泥忽都・徒思日哥察兒別吉通世案、蓋是二人名。塔兒忽台希憐禿通世案、卽祕史之塔兒忽台乞鄰勒禿黑。忽都荅兒、至月良禿剌思通世案洪氏譯伯哷津書、云思古特禿剌思、而謂「本名必是烏良兀特禿剌思、譯音皆未全也」。今案、多遜作額連庫特禿剌思。之野擒之。通世案、塔兒忽台希憐禿被擒、卽前文失力哥也不干執之之事。祕史叙之甚詳。今云擒而不云縱、疎。西史云殺之、最誤。阿忽兀忽出、通世案、卽上沆忽阿忽出。忽敦忽兒章秋濤案、當卽前殺塔海荅魯之忽數忽兒章也。彼數字蓋誤。史不載忽敦忽兒章之名。然云「塔海荅魯爲泰赤烏部人所殺」、證知卽此人也。走八兒忽眞隘、原作入兒忽其隘。秋濤校改。通世案、是役泰亦赤兀惕最頑强者、阿兀出把阿禿兒也。祕史云「成吉思追阿兀出。阿兀出至自己部落、將百姓起了、渡過斡難河、整治軍馬、候成吉思來對戰。成吉思既到、連戰數合。日晚、各就戰地處相抗著宿了」。又云「成吉思將阿兀出等子孫殺盡、將百姓起來、至忽巴合牙地面住冬了」。今唯云「走八兒忽眞隘」、亦甚疎。忽憐奔乃蠻部。通世案、是戰、史錄皆不紀年、西史則以爲猴年春事、卽宋慶元六年、金承安五年也。然依祕史考之、辛酉十一部之連兵、泰亦赤兀惕實與焉。闊亦田軍潰、王罕述札木合、太祖追泰亦赤兀惕、於是有是戰、泰亦赤兀惕始滅。然則是戰在辛酉年闊亦田戰之後。史錄叙之阿雷泉會盟之前、誤也。又阿雷之盟、類編云「諸部皆畏太祖威不自安」、則是。元史加「聞乃蠻泰赤烏敗」一句、則非。西史云「哈荅斤撒兒助特二部、本與成吉思不協、附於泰赤烏特」、則然。其云「旣聞泰赤烏特滅亡、益不自安」、則不然。蓋皆欲以接斡難河上之戰、而不知泰赤烏未嘗敗滅也。

後通世案、西史爲猴年事。祕史云「其後雞兒年」、始有紀年。雞兒年、卽辛酉、宋嘉泰元年、金泰和元年也。哈荅斤通世案、祕史作合塔斤、孛端察兒長兒不忽合塔吉之裔也。散只兀通世案、祕史作撒勒只兀惕、孛端察兒仲兒不合禿撒勒只之裔也。朵魯班通世案、祕史作朶兒邊、都蛙鎖豁兒四子之裔也。塔塔兒弘吉剌通世案、祕史作翁吉剌、源流作鴻吉喇特。諸部、會盟於阿雷泉上、通世案、祕史作阿勒灰不剌・阿下阿恐合之譌。額兒忒曼作阿雷布拉克。腰斬白馬爲誓、欲襲我軍及汪

可汗。通世案、祕史云「合塔斤等十一部落、於阿勒灰不剌阿地面、聚會商議、欲立札木合做君。於是衆部落共殺馬設誓訖云云」。是阿勒灰之會、議立札木合也。而遂至犍河成禮。本一時之事也。本書不言欲立札木合、故如與犍河之會異時、各爲一事、非是。於是弘吉剌部長迭夷通世案、卽祕史之德薛禪、太祖妻孛兒帖之父也。但祕史不載此事。元史本傳作特薛禪、又作特因薛禪。源流作岱徹辰、額兒忒曼同之、伯哷津作特因色辰、同元史。遣人來告。上聞之、遂與汪可汗發兵、自虎圖澤、通世案、伯哷津作虎敦諾爾、云「近斡難河」、無考。戰於盃亦烈川、通世案、伯哷津作捕魚兒諾爾。卽今之貝爾諾爾。大敗之。秋濤案、類編引此云「時有哈荅吉部・散只兒部・朶魯班部・塔塔兒部・弘吉剌部、皆畏太祖威不自安、私會於阿雷泉、斬馬爲誓、欲共襲我軍。弘吉剌部長迭彝、恐事不成、潛遣人告變。帝聞之、遂發自虎圖澤、逆戰於盃亦烈川、大敗諸部衆。於是弘吉剌款附」。案、邵氏所引較詳、當是原本。今本疑爲後人刪節、當據以改正。通世案、祕史不載是戰。

冬、汪可汗分兵自曲綠憐河、原脫自字、曲誤作由。由下、何氏補怯字、曰「木紀云「自由綠憐河而行」、則脫誤久矣」。李氏曰「元史太祖紀、亦作「由綠憐河」。由乃曲之爛字。然則此錄誤字、自明初作元史時所見本、已如此矣。曲綠憐、卽克魯漣河也」。通世據元史補自字。怯字不必補。指忽八海牙山曾植案、卽祕史忽巴合牙地面。先發。部衆後成列而進。其弟札阿紺孛、以汪可汗反覆不常、遂謀於渾八力秋濤案、祕史作忽勒巴里。通世案、伯哷津作忽勒巴爾。案敦阿述秋濤案、祕史作阿勒屯阿條黑、通世案、伯哷津作阿勒屯阿速克。燕火脫兒通世案、祕史作額勒忽禿兒、伯哷津作伊勒忽禿兒延晃火兒通世案、祕史無此人。伯哷津作伊兒晃火兒。四人曰「我兄無善處之心、屠絕昆弟、當奔於契丹。原缺丹字。張石州補。通世案、當字、疑是誓之譌。觀其心性若此、終不能存我輩、亦不使國安矣。今何計處之」。通世案、是語、祕史最詳。案敦阿述泄是語於汪可汗。令執燕火脫兒及納憐原作憐納、秋濤校改。通世案、此注本不署名、唯云今改。蓋何氏校本、本皆書今改。及李沈二氏重校、易今字以秋濤名、而此偶未及易也。後又往往有不署名處。今皆改爲秋濤校改、或加秋濤案三字。二人、至帳下、解其縛、謂燕火脫兒曰「吾輩自西夏而來、道路饑困、想誓之語、忩乎。我心非汝也。文田案、想誓之想、當是盟字。唾其面。座上之人、皆起唾之。案敦阿述曰「余亦與此謀。不忍捨王、所以來告也」。汪可汗屢責札阿紺孛、曰「汝常懷其奸者」。札阿紺孛不安、後與燕火脫兒・延晃火兒・納憐太石石原作后。秋濤案、祕史有阿憐太子、疑卽此。后字恐誤。通世案、本書多以太子作太石。此依前捏群太石例改正。等俱奔乃蠻。通世案、西史「皆奔乃蠻」下、有「先遣人告太陽汗曰「阿勒屯阿速克、讒於吾兄王汗、故我等來奔。願盡心力、以事新主」。乃蠻受之」數語、他書未見。又案、是事、西史繫於庚申冬。然祕史叙於辛酉之後、壬戌之前、當是辛酉冬事。

冬、汪可汗居於忽八海牙兒。秋濤案、疑有山字上駐軍於徹徹兒山、曾植案、遼屬國、有察。察里殆卽依徹徹兒山以居者乎。通世案、下文作徹兒、伯哷津作乞鱗界上札哈察兒。詳徹兒注。起兵伐塔塔兒部長阿剌兀都兒通世案、西史作阿剌克烏都兒、爲蔑兒乞特酋。哈太石原作后。張石州校改。通世案、西史作乞兒罕大石、爲泰赤烏特酋。察忽斤通世案、伯哷津作察忽兒、額兒忒曼作札烏忽兒。帖木兒通世案、伯哷津作開兒伯克、額兒忒曼作開兒伯克兒、與此不合。

等、戰於荅蘭捏木哥兒之野、通世案、祕史作荅蘭捏木兒格思地面、額兒忒曼作荅蘭帖木兒斤。此哥兒二字、疑是倒置。其地在合泐合河與兀勒灰河之間、見後。大敗
之。通世案、是戰、西史亦繫於庚申冬。然祕史云「狗兒年秋」、卽下文壬戌伐塔塔兒之役。蓋本書誤以一事爲兩事。
時弘吉剌部亦未附。上弟哈撒兒居別所、從其麾下哲不哥秋濤案、當卽者卜客也、見祕史。通世案、祕史、太祖平主兒乞時、札
剌亦兒種人帖列格禿伯顏三子來降、第三子者卜客、仕太祖弟合撒兒。之計、往掠之。上深切責。於是弘吉剌遂附札木合、通世案、
西史於此處挿雞年字。然十一部同盟作亂、實在辛酉年。阿雷之會、犍河之會、不可分屬兩年也。與亦乞剌思・火原作大。張石州校正。魯剌思・朶魯班・塔塔兒・
哈荅斤・散只兀諸部、會於犍河、通世案、祕史作刊沐漣河洲的地。沐漣、蒙古語河也。洪氏曰「案今俄羅斯地圖、額爾古訥河東有支水曰旱河、在呼倫湖爾東北約三百里。水
道提綱云「克魯倫河、又折正北流、有振河自東南合活輪河等五水、西北流來會」。內府輿地作根河。根也振也旱也犍也刊也、皆譯音之異。祕史云「順額兒古捏河、至於刊沐漣」、必卽此河。札木合舊居額兒古捏河、見祕
史。而諸部皆在額兒古捏之南、北行與合、故曰順也」。共立札木合爲局兒可汗曾植案、祕史蒙文作古兒合、釋云「古兒、普也。合、皇帝也」。然則局兒汗者、蓋諸部之長、如云大
皇帝與。通世案、西遼之古兒汗義同。謀欲侵我。盟於禿律原作津。秋濤據元史本紀作律。別兒河岸、通世案、西史作禿拉沿恐誤。爲誓曰
「凡我同謀、有泄此誓者、如岸之摧、如林之伐」。言畢、同擧足蹋岸、揮刀斫林、驅衆
馳馬、悉赴我軍。有塔海哈者、時在衆中。上麾下照烈氏抄吾兒秋濤案、元史本紀作抄吾兒。列傳作召烈台抄兀兒、

通世案、照烈氏、卽祕史之沼兀列亦惕氏、又云沼列歹氏。故亦作召烈台。傳不誤。與之親。往視之、偶竝驅、實不知有是謀。塔海哈
馬鞭築其肋。抄吾兒顧。塔海哈目之。抄吾兒悟、下馬佯臥。塔海哈因告之河上之盟、
曰「事急矣。汝何往」。抄吾兒驚、卽還、遇火魯剌氏也速該言其事、將赴上告之。也
速該曰「我常婦之子、秋濤案、四字疑有誤。與忽郞不花曾植案、忽郞不花、疑當作忽郞不荅。卽下文之忽蘭八都。蓋豁羅剌思之酋豪。故畏其知之。往
來無旦夕。我左右止有幼子及家人大力台耳」。曾植案、大力台大字誤、當作火。火力台、卽祕史卷五之豁里歹也。此火魯剌氏、祕史作豁羅剌思、
可證。因命與大力台誓而往、乘以蒼驢白馬。屬之曰「汝至彼、惟見上及后兼我壻哈徹
兒、則言之。秋濤案、哈徹兒、疑卽太祖弟哈撒兒也。通世案、何說是也。西史云「忒赤哈薩兒有子曰巴忽兒達爾。其母阿爾壇哈敦、火魯剌思人」。然則也速該、蓋阿爾壇之父也。苟泄
於他人、願斷汝要、裂汝背」。誓訖、乃行。通世案、西史無塔海哈抄吾兒、也速該作麥兒吉台、爲火力台妻舅。火力台聞其謀、以語麥兒吉台。麥兒吉歹
予以剪耳之白馬、使速往告變。祕史亦唯云「被豁羅剌思種的人豁里歹、到古連勒古地面、告與成吉思」。本書叙事獨詳。但諸書不記太祖所在、賴祕史、知猶居古連勒古。蓋自離札木合歸于此地、十有餘年、未嘗他徙。
前文「上會汪可汗於薩里河不魯告崖」、則本年闊亦田戰後事。至是始徙不魯告崖。此卽娶孛兒帖後所暫居之客魯漣河源不兒吉岸也。又前文自擊乃蠻還、駐薩里川、則明年壬戌之事。自是而後、薩里之野、永爲太祖之龍
庭矣。中道遇忽蘭八都。曾植案、張士觀昌王世德碑「諭旨諸部、各遣子弟入侍。火魯剌帶部哈兒八台違旨。命忠武王卽孛圖提兵千人誅之」。哈兒八台、疑卽此忽蘭八都也。通世案、伯哷津云「槐
因人、泰赤烏特部內」。槐因謂樹林。所謂林木中百姓、而屬泰赤烏特者。哈剌蔑力吉台通世案、伯哷津云「是火魯剌思人」、恐誤。當卽蔑兒乞人。軍圍、爲其游兵所

執。以百秋濤案、有闕字。得解。因贈以獺色全馬、謂曰「此馬、遁可脫身、追可及人。可乘而去」。通世案、西史云「哈剌蔑兒乞歹見而執之。然是人亦心附於成吉思、則以己之黑馬云云」。然既又遇氈車白帳之隊、往札木合所者。通世案、西史作別隊載札木合白帳者。隊中人出追抄兀兒。抄兀兒乘馬絕馳而脫、至上前、悉告前謀。上卽兵迎之、通世案、元史、兵上有起字。此恐脫。祕史云「欲攻成吉思與王罕」。又云「成吉思使人告與王罕」。王罕於是收集軍馬、成吉思行來了。王罕與成吉思相合著、順客魯漣河迎著札木合去」。史錄西史、皆不言王罕、似欲沒王罕之功。洪氏邾謂「此役、汪罕不及約會、祕史牽併紀之、種種錯誤」。其於祕史、似未細究。又案、祕史無海剌兒之戰、直接下「上先遣騎」條。戰於海剌兒帖尼火魯罕之野秋濤案、召烈台抄兀兒傳、作海剌兒阿帶亦兒渾。通世案、西史作亦提火兒罕、奪上三字音。華而甫解爲墓地、罕默兒解爲七墳。洪氏曰「地在刊河之南。海剌兒正河名、帖尼支河名、火魯罕、蒙古語謂小河」。案、海拉兒河今作開拉里河。源出諾尼河源山之西麓、自東合諸水西北流、與呼倫湖東北流出之水會。見水道提綱。和渥兒特蒙古圖作凱剌兒。破之。札木合脫走、秋濤案、召烈台抄兀兒傳作「盡誅札木合等」。案、札木合、癸亥年尙在、與汪可汗同來伐蒙古、則傳謬也。弘吉剌部來降。秋濤案、召烈台抄兀兒傳云「時有哈剌赤・散只兒・朵魯班・塔塔兒・弘吉剌・亦乞列思等、居堅河之濱忽蘭也兒吉之地、謀奉札木合爲帝、將不利於太祖。抄兀兒知其謀、馳以告太祖。遂以兵收海剌兒阿帶亦兒渾之地、盡誅札木合等。惟弘吉剌入降。太祖賜以荅剌罕之名」。卽此事也。本紀載諸部、與親征記合。傳則無火魯剌思・哈荅斤二部、而多哈剌赤部。惟此爲異。堅河、卽鞬河也。通世案、祕史無「弘吉剌部來降」句。此謂癸亥合蘭只戰後帖木哥阿蠻歸降之事。史蓋終言之也。抄兀兒傳之哈剌赤、應是火魯剌思之音轉、不則哈荅斤之字譌。

壬戌原注「宋理宗景定三年、金章宗泰和三年」。張石州曰「壬戌、乃宋寧宗嘉泰二年、金章宗泰和二年」。通世案、史錄自此始有紀年、與祕史合。但據祕史、是役卽前文荅蘭捏木兒哥之戰。此誤分爲兩事、而此處失戰地名。發兵於兀魯回失連眞河、曾植案、卽祕史之浯泐灰溼魯格泐只惕名字的水。通世案、沈所引在祕史卷七。卷五敘此戰處、作兀勒灰河失魯格勒只惕地面。伯畇津作兀魯灰失魯楚兒只特河、字數與祕史合。水道提綱云「蘆河、土名烏爾虎河、源出索岳爾濟山、南流隨山麓、曲曲而西南、三百里許、經烏珠穆沁左翼東六十里、折而西流、北合色野爾濟河、南合音札哈河賀爾洪河、入右翼界、至克勒河翊之地涸」。蒙古遊牧記云「烏珠穆沁左翼牧地、當索岳爾濟山西、有鄂爾虎河、繞其游牧、滙於和里圖淖爾」。又云「一統志圖作吳兒灰、方略作吳兒會・烏爾會・烏勒揮・吳爾揮」、文卿曰「考兀魯灰河卽此。色野爾濟、卽索岳爾濟。山名、亦河名。急讀色野爾濟、卽成失連眞」、故史錄皆爲河名。失魯楚兒只、卽索岳爾濟之訛。祕史謂地名、又中有格字音、不能相合。俄羅斯地圖、兀魯灰變音爲烏拉圭、色野爾濟作蘇攸勒奇。兩河會而爲淖爾、與游牧記合、與提綱不合。內府輿圖作烏爾揮河、形與俄圖略同、與提綱所云不盡符合、惟亦無滙入之淖爾。又虞集句容郡王世勳碑「也只里王爲叛王火魯哈孫所攻。王從成宗、移師援之、敗諸兀魯灰、還至哈剌溫山、夜渡貴列河、敗叛王哈丹之軍、盡得遼左諸部」。兀魯灰卽此河、與哈剌溫山相近、與遼東亦近」。案祕史、太祖與塔塔兒四種、戰于荅闌捏木兒格思之地敗之、遂至兀勒灰河、掠四種輿魯。是兀勒灰河、卽四種遊牧之地、而在荅闌捏木兒格思之南也。故祕史卷七、太祖沂浯泐灰水、入荅闌捏木兒格思、又自其地順合泐合河而北歸。今此書云發兵於兀魯回河、如戰地又在其南、誤也。伐案赤塔塔兒・察罕塔塔兒。通世案、祕史作察阿安塔塔兒等四種。喇施特云「塔塔兒共六部」。一曰禿禿克瑠特。二曰阿勒濟、卽案赤也。三曰札干、卽察罕也。餘三部、多桑作庫音・特拉特・別爾奎、額兒忒曼作奎新・訥栽特・貢爾奎。夏、頓兵避暑。先誓衆曰「苟破敵逐北、見棄遺物、愼勿顧。軍事畢、共分之」。通世案、此下、祕史有「若軍馬退動、至原排陳處、再要翻回力戰。若至原排陳處、不翻回者斬」數語。西史亦不載。既戰、屢勝。族人案彈・火察兒・荅力台三人背約。通世案、案彈卽按壇、祕史阿兒壇斡惕赤斤、忽圖剌合罕第三子、爲太祖族父。火察兒、祕史忽察兒別乞、捏坤太子之子、爲太祖從兄。荅力台、祕史荅里台斡惕赤斤、把

兒壇把阿禿兒第四子、太祖季父。皆已見上。爲上令虎必來秋濤案、秘史作忽必來。折別二將、通世案、秘史忽必來、巴魯剌氏、太祖離札木合時來屬。折別、卽哲別、秘史者別、前年辛酉斡難河、戰後、自泰亦赤兀惕軍中來降。而闊亦田役、實在斡難河戰之前、者別嶺目上射。斷太祖馬項骨。今者別已在太祖麾下、可證本書叙闊亦田役在後之誤。盡奪其所獲散軍中。通世案、此下、秘史叙事甚詳。一、太祖遂至兀勒灰河、掠四種塔塔兒輿魯。二、太祖與親族議、盡誅塔塔兒男子大者、餘爲奴婢分之、以報父讎。別勒古台洩其謀、塔塔兒據山寨拒鬬、軍多死傷。太祖自此不許別勒古台·荅里台與軍議。三、太祖納塔塔兒也客扯連女也速干。也速干薦其姊也遂、太祖遂納也遂。四、太祖殺也遂故夫。此四條、史錄西史皆不載。葢脫必赤顏原本已闕之、當或疏脫、或諱言。秘史又云「狗兒年、太祖剿塔塔兒時、王罕去剿篾兒乞、追脫黑脫阿、入巴兒忽眞脫窟木之地、殺其長子脫古思別乞、執二女忽禿黑台·察阿侖及妻子、擒二子及衆民。所獲財物、於太祖一無所遺」。此卽不兀剌川之役、而與兀勒灰河之役同時。本書誤叙莫那察山戰之後。塔塔兒篾兒乞既平、太祖與王罕連兵、征乃蠻不亦魯黑汗。以乃蠻亦與阿勒灰泉之會也。是於有兀瀧古河之擒、乞溼渤巴失之剿、巴亦荅剌黑之對陳、王罕之移營、札木合之構讒。太祖既歸撒阿里、復遣四傑救客列亦部。由是王罕感德、重訂父子之好。此皆壬戌年中之事。葢十一部之亂、跨酉戌兩年、發端於阿勒灰泉、終於乃蠻之役。秘史叙述、本有次第。本書乃於王罕東歸之後、先叙篾兒乞乃蠻之役、在乃蠻開釁之前、而闊亦田役、則却在不亦魯黑汗敗遁之後。傎倒錯誤、不可勝糾。

是秋通世案、闊亦田之役、秘史在辛酉年、葢與刊河之會、相屬、不隔時月。故兩汗東征、非還而復往、諸部連兵、亦非散而復聚。乃蠻盃綠可汗、通世案、盃綠、卽盃祿、秘史不亦魯黑。不亦魯黑與刊河之盟、故兩汗剿塔塔兒篾兒乞之後、連兵窮討、不亦魯黑北遁、乃蠻之勢遂弱。設使乃蠻之役在前、如本書所叙、則不亦魯黑、豈能自來與兩汗抗敵哉。本書次序顚倒、亦以明矣。會蔑力乞部長脫脫別吉、通世案、西史作托克塔別乞。朵魯班·塔塔兒·哈荅斤·散只兀諸部、曁阿忽出拔都·通世案、卽上阿忽失拔都、又沆忽阿忽出、秘史阿兀出把阿禿兒、泰亦赤兀惕部長也。西史爲撒兒助特部長、下文又爲哈荅斤人、並誤。忽都花別吉通世案、西史云「衞剌特部長忽都花別乞、朵兒奔部人也」。本書下文、亦曰猥剌部長。衞剌特部居額尼賽河上流、與朵魯奔部隣接。等、來犯我軍及汪可汗。上先遣騎乘高覘望於捏干貴因都·徹兒·赤忽兒黑諸山。秋濤案、當作赤忽兒黑山。有騎自赤黑山來、告乃蠻漸至、通世案、秘史云「成吉思使阿勒壇等三人作頭哨、王罕使桑昆等三人作頭哨。其頭哨內、又自差人、前去額捏堅歸列禿·撒克撒列·赤忽兒忽三處地面哨望。其阿勒壇等至兀乞惕牙地面。有赤忽兒忽哨望人來報說「敵人將至」」。撒克撒列·赤忽兒忽、秘史卷一作扯克撒兒·赤忽兒古兩山、又作扯克扯兒地面、卷二作扯克徹兒·赤忽兒忽兩山、云「順客魯漣河、到兩山間、尋德薛禪家」。德薛禪、卽迭夷、翁吉剌部長也。卷七又云「合泐合河流入捕魚兒海子處、有帖兒格等翁吉剌」。是翁吉剌部、居兩山間、而近貝爾諸爾、則兩山近貝爾諸爾可知也。徹兒疑有脫字。上與汪可汗自兀魯回失連眞河連原作速。秋濤案、速疑作連。通世依前文、改速爲連。案、兀魯回河、卽四種塔塔兒奧魯所在也。是時塔塔兒未滅、正與羣部連兵、脅兩汗。兩汗安得悠然過其庭耶。秘史無此句。西史則同之、疑脫必赤顏本有誤。移軍入塞。秋濤案、所謂入塞出塞者、當指阿蘭塞也。文田案、塞當作寨。曾植案、阿蘭塞、葢金之邊垣。太祖曾受金官、故事急、輒南引保塞。後與王罕戰後、退軍至荅蘭捏木兒、情事亦復相類。此時猶依大國以自强。故入貢時、於衞紹王相見、而耶律阿海兒弟、皆款附於辛未之前也。其間亦已不免小小盜邊。禿花傳「率衆歸太祖、嚮道入金境、獲牧馬甚衆」、在飲班朮河水以前。是其事也。又案速不台傳「兄忽魯渾以百戶從太祖、與乃蠻部主、戰於長城之南。忽魯渾射卻之。其衆奔闊亦檀山而潰」。卽此戰事。乃蠻部主、卽盃祿、長城、卽移軍所入塞也。通世案、喇施特曰「向汪古部地以行、近哈剌溫赤敦」。洪氏曰「當卽史之阿蘭塞、是山近金東北界」。通世別有案、見後。汪可汗子亦剌合居北邊、後至、據高嶺方下營。盃祿可汗易之曰「彼軍漫散。候其衆聚、吾悉捲之」。時阿原作附。秋濤校改。忽水原作大、秋濤校改。都一部兵、從乃蠻來、與前

鋒合、通世案、喇施特作「遣阿忽出巴哈都兒及托克塔別乞之弟忽都爲前鋒」。自注「托克塔子忽都。弟亦曰忽都」。將戰。遙望亦剌合軍勢不可動、遂
還。亦剌合尋亦入塞、會我軍擬戰、置輜重他所。通世案、此處祕史太簡、唯謂「其阿勒壇等遂前迎去擊消息。行間、遇札木合頭哨阿兀
出把阿禿兒等四人、說話了、見天色已晚、却回來大軍營內宿了」。上與汪可汗、倚阿蘭塞爲壁、大戰於闕奕壇之野。奕原作蠻。秋濤案、
畢氏引史、作圖奕壇、改爲徒伊壇。殿本作闕奕壇、改爲吹丹。未知孰是。文田案、闕奕壇三字、據本紀改正。又據祕史作闕亦出、則知圖闕均誤、蠻字又以減寫奕字上半致譌也。曾植案、據祕史、戰地作闕亦田、則蠻是
奕字誤。闕與闕音本相近、圖亦譌字也。通世案、施特作奎騰之地。洪氏曰「即闕亦田之異文。案元史語解曰「奎騰冷也」。是地本寒、又遇雨雪、故皆僵凍。合祕史觀之、此役敵兵未戰而潰。史錄謂大戰於闕奕壇、恐非
是也。蒙古游牧記「蘇尼特左翼旗東北四十里有奎山、蒙古名奎騰」。似即是地」。彼祭風。通世案、祕史云「至次日、成吉思軍與札木合軍相接、於闕亦田地面對陳。布陣間、札木合軍內不亦魯黑•忽都
合兩人、有術能致風雨云云」。不亦魯黑、即乃蠻汗、忽都合即衞剌特長也。是時部札木合爲古兒汗、故謂諸部連合之兵爲札木合軍也。風忽反、爲雪所迷、軍亂、塡溝
墜壑、塹而還。通世案、祕史云「札木合等共說「天不護祐、所以如此」、軍遂大潰」。時札木合同盃祿可汗、未中道、札木合
引兵回、遇立爲可汗者諸部、悉討虜之。秋濤案、本紀作「道經諸部之立己者、大縱掠而去」。案、二文皆難解、而紀文尤謬。通世案、祕史云「札木合軍
既潰散後、乃蠻等十一種、各回部落。札木合將立他的百姓擄了、順額洏古涅河回去」。三文皆意明、不知顧船何言。西史亦云「札木合見事敗即退、掠諸部之先立己爲汗者」。額兒忒曼曰「即掠哈荅斤等部、乘敗刼奪」。說
亦中情。又案、祕史此下云「於是王罕追札木合、成吉思追泰亦赤兀惕種阿兀出把阿禿兒云云」。蓋十一部中札荅剌泰亦赤兀最强、故兩汗分追之也。於是有斡難河之戰、泰亦赤兀部遂滅。此書誤書於阿雷泉會盟之前、札
木合蓋降王罕、故及兩汗征乃蠻、乃從王罕在軍中。又斡難河之戰、太祖傷頸。者勒篾吮血、又潛入敵營、盜酪飲太祖、太祖深感其忠。翌日敵自潰去、太祖追收其衆、得鎖兒罕失剌女合荅安。祕史叙述頗詳、史錄皆不

載。又翌日、鎖兒罕失剌來屬、述不早降之故。者別亦降、白闕亦田之役射帝馬、而請死。太祖賞其不隱。太祖盡殺阿兀出子孫、收其民。又泰亦赤兀部失兒古額禿與二子阿剌黑•訥牙阿、執其主塔兒忽台將來獻。既而訥
牙阿縱之。太祖亦賞之。數事皆可傳。此書誤書於斡難河上會宴之前、亦極疏略。又案、祕史稱合塔斤等十一部落、又稱乃蠻等十一種、而不列其部名。今合祕史及本書考之、是時連兵者、實有十一部、即札荅剌•泰亦赤
兀•合塔斤•撒勒只兀•亦乞列思•豁魯剌思•塔塔兒•翁吉剌•篾兒乞•朶兒邊•乃蠻也。札荅剌部居額爾古納河濱、泰亦赤兀部居敖嫩河下流、合塔斤以下三部、蓋皆居乞顏泰亦赤兀之西、塔里•呼倫二湖之邊、豁兒剌思部居敖嫩
河之北、塔塔兒部居烏爾孫•烏爾會兩河之間、翁吉剌部居喀爾喀河下流、篾兒乞部居色楞格河下流、朶兒邊部居拜喀爾湖畔、乃蠻部居鄂爾坤河之西、兄弟分國而治、不亦魯黑汗轄其西北境。而乞顏部居敖嫩•克魯倫兩河之源、
客列亦部居土剌河濱。翁吉剌以上八部、皆在乞顏之東、唯篾兒乞以下三部在乞顏之西北。乃蠻赴刊河之會、當順色楞格河之上流而下、與篾兒乞•朶兒邊二部、共經肯特山之北、渡敖嫩河而東進。諸部起事在東、合戰亦於
東。盃亦烈川之戰、海剌兒河之戰、皆在克魯倫河之東。闕亦田之役、亦當去貝爾諸爾不甚遠也。此書叙述多誤。考祕史、阿勒灰泉之會、刊河之會、闕亦田之役、斡難河之戰、皆一時之事、在辛酉年中。史錄所謂弘吉剌
部長迭夷告變者、與豁里歹之事、抄吾兒之事、本皆同事而異聞。擇取其一、可也。史錄分爲兩事、各繫於兩會之下、非是。又諸部之擧兵、乃蠻•泰亦赤兀皆與焉。而元史云「諸部聞乃蠻•泰赤烏敗、皆畏威不自安」、喇施
特云「聞泰赤烏滅亡、益不自安」。此皆本於叙乃蠻役斡難河戰於前之誤、而不知二部之敗滅、實在是後也。蓋太祖王罕之結托、諸部皆畏忌之、故有是謀。若翁吉剌以姻戚附敵、則唯由怨合撒兒侵掠。謂刊河之會由是而
作、則不然。諸部潛師而來、欲襲兩汗、蓋泝額洏古涅河也。兩汗順客魯連河迎札木合、於是有海剌兒河之戰、敵軍自此南徙。兩汗先鋒至額捏堅歸列禿•撒克撒列•赤忽兒忽三地、乘高瞭望。其撒克撒列•赤忽兒忽兩山、
近貝爾諸爾、如前所述。而赤忽兒忽哨兵、能告敵人將至、翌日兩軍遇于闕亦田之地、則闕亦田、亦當去赤忽兒忽不遠也。史錄之阿蘭塞、喇施特之喀剌溫赤敦、其地雖不可知、然必不在大漠之南。祕史、太祖以孛斡兒
出爲右手萬戶、所管西至金山、以木合黎爲左手萬戶、所管東至合剌溫山、在蒙古東邊也。蓋金起東陲、諸尼江諸源之地、亦皆屬上京道。興安嶺之西麓、喀爾喀河源之地、爲金之邊塞、亦不可知。喇施特曰「翁吉剌特
部、居喀剌溫赤敦之地」、又曰「蒙古與乞得之界、有齋阿兒郤山」。此謂興安嶺北幹分蒙古女直、而翁吉剌特居其西麓也。以謂翁吉剌特近漢塞、則誤矣。本書云「上自兀魯回失連眞河移軍入塞」。是時太祖未入兀勒灰河之

地。蓋由誤叙兀勒灰河之役於前、牽連記此地名也。至喇施特云「向汪古部地以行」、云「過山陰至汪古部地」、則恐非金字譜牒原文、編者以意加之也。盃亦烈川之戰、史錄叙在前。然以地勢考之、當在海剌兒河戰之後、闊亦田役之前。且叙事本多複沓、盃亦烈海剌兒、本同事異聞、亦不可知。二戰皆祕史不載、眞僞難明。闊亦田軍潰、諸部散歸、蓋皆向北而走。王罕追札木合降之、太祖追泰亦赤兀剿滅之。乃蠻篾兒乞朶兒邊三部、當是渡斡難河而西遁。泰亦赤兀既平、太祖歸忽巴合牙。札合敢不等叛王罕、正在是時。其謂「自曲綠憐河指忽八海牙山」者、王罕既平札荅剌部、遡克魯倫河而西歸、過太祖冬營之地也。翌年壬戌、太祖剿塔塔兒、王罕剿篾兒乞、皆討刊河會盟之黨也。太祖敗塔塔兒於荅闌捏木兒格思、遂至兀勒灰河、覆其巢窟。於是太祖之兵、始蹂躪漠南矣。其後兩汗連兵征乃蠻、懸軍數千里、遠踰阿爾泰山。以羣部旣平、無後顧之患也。然則是役當必在最後也。祕史所叙本確然無疑。何意脫必赤顏擾其次第、使太祖經略之蹟、錯亂不明。甚可惜也。故詳辨之。

冬、上出塞駐於阿不禮闕惑哥兒之山。文田案、祕史作忽巴合牙。曾植案阿不禮、當作阿不札。通世案、卽祕史卷八之阿不只阿闊迭格兒地面。蓋本書本作阿不札闊忒哥兒、札譌禮、闊忒譌闕惑。祕史後文通阿卜只合闊帖兒格。兒格二字倒置。云「太祖自闊鐵處還至此地」、則亦蒙古之地也。西史訛作阿兒郃宏古兒之地。據祕史、此係明年癸亥冬營之地。而本書西史皆誤書於是年。喇施特云「本爲翁吉剌特冬營之地。冬無水、以雪爲水。其後呼必賚可汗敗阿里不哥於色木兒台湖、亦距阿兒郃宏古兒不遠」。色木兒台湖、卽元史世祖紀之昔木土腦兒也。洪氏因引俄羅斯地圖、獨石口東北四百里、多倫淖爾正北二百里、有沙博爾台淖爾、蒙古游牧記蘇尼特右旗翼南六十里、有泥濼、蒙古名西巴爾台、云「皆似卽昔木土之轉音」。昔木土腦兒在蘇尼特界內、或當然。但阿不只阿闊迭格兒在漠北、不與蘇尼特地相接。喇施特恐誤。

汪可汗居於原作族。曾植案、族當作於。通世因改。別里怯沙陀中。曾植案、祕史「札木合知太祖落後的意思、與阿勒壇等商議、到者者額兒溫都兒山陰的別兒客額列地面桑昆處云云」。此別里怯沙陀、卽彼文別兒客額列。蒙語、沙磧曰額列惕。通世案、是時兩汗自擊乃蠻還、太祖居撒阿里客額兒、王汗居土兀剌河黑林。別里怯沙陀、卽桑昆所居也。謂王汗居之、誤。

是時上與太子朮赤通世案、祕史作拙赤、太祖長子、非皇太子也。蒙古諸皇子、皆稱太子、故謂朮赤太子則可。若謂太子朮赤、則嫌於儲君。元史有傳、譯文證補有補傳。求聘汪可汗女抄兒伯姬。通世案、祕史作察兀兒別乞。汪可汗下脫女字。汪可汗之孫張石州曰「紀作子」。通世案、祕史作桑昆子禿撒哈、則王汗之孫也。紀誤。禿撒合、亦求上公主火阿眞伯姬。通世案、祕史作豁眞、西史作庫眞必吉。元史作火臣別吉。元史類編有傳。俱不諧。通世案、據祕史、娶察兀兒、嫁豁眞、皆出太祖意、而桑昆侮太祖、不肯許親。與此稍異。自是稍疏。札木合聞之、通世案、祕史以往說桑昆爲癸亥年春間事。往說亦剌合曰「吾案答原注「謂太祖也」。舊本此注誤入正文。張石州改正。常遣使通信於乃蠻太陽可汗。時將不利於君。今若能加兵、我從旁協助」。協原誤作脇、秋濤校改。時亦剌合居別所、通世案、伯哷津作阿拉忒之地、卽別兒客額列惕之下三字音。來會父汪可汗。上族人答力台斡眞斤・通世案、眞當作直。案彈・火察兒・答海忽剌、通世案、下文作塔海忽剌海、西史作忙忽特人圖該忽兒海。此剌下脫一海字。答兒斤木忽兒哈檀・通世案、西史作阿荅兒斤人木忽兒忽闌。卽前十三翼中之木忽兒好闌。此答上脫阿字。哈檀與忽闌、形音並異。或與木忽兒二人歟。札木哈等背我、迨且秋濤案、二字有誤。說亦剌合、說之曰「吾等願爲效力佐若、討月倫太后諸子」。曾植案、案壇・火察兒等、往來於太祖・札木合・汪罕之間、倏忽彼此、構成舋隙。眞反側子也。詳祕史。札木合寄語二人、與太祖與汪罕戰後、寄語二人、詞意相同。而汪罕始終無不稱於太祖之心。亦剌合異心、亦由諸人倡導。此書叙此情事、較詳於祕史。本紀據此爲本、而盡刪此類情節、戀於買櫝而還珠已。亦剌合信之、車帳相間爲兵共謀。遣塞罕脫脫干曾植案、祕史作撒亦罕脫迭額。通世案、伯哷津作撒而罕禿荅。言之於汪可汗。汪可汗曰「札木合、巧言寡信人也、

不足信」。亦剌合曰「彼言者有口有舌、何爲不信」。屢遣人言之。汪可汗曰「我禁汝、汝輩不從。吾身存立、實賴於彼。垂老遺骸、莫得安寢。今喋喋不已。汝當自能爲之。母遺我憂」。既而異志、悉燒我牧地。通世案、西史作「鮮昆陰遣人燒我牧地之草。」

癸亥春、秋濤案、宋嘉泰三年、金泰和三年。曾植案、史耶律阿海傳、癸亥歲冬、有進攻西夏事。汪可汗爲詐計、通世案、祕史西史皆云「桑昆與衆人謀」。曰彼前者嘗求婚於我、不從。今宜許之。俟其來宴定約、必擒之」。遂遣不花台・乞察文田案、祕史作不合台・乞剌台。但錄以爲來請之人、祕史以爲代赴婚筵之人耳。通世案、伯呼律作烏黑台・昆察特。洪氏曰「哀忒蠻譯作海察特、與乞察略近。惟贅增二人、不可從」。來請。上率麾下十騎、往赴之、宿於蔑里哥秋濤案、祕史作蒙力克。帳中。越明日、有蔑力也赤可謀、也原作池。秋濤案、此句恐有誤。祕史所載、蒙力克爲太祖謀也。文田案、祕史「宿蒙力克家。蒙力克說「索時不肎與。如今怎生特地請喫許婚筵席。不若只推稱春間馬瘦、且養馬、不去」」。是其事也。又蔑里哥、元史伯八傳、作明里也赤哥此處上下兩句、一作蔑里哥、一作蔑里也赤可、則翻譯之謬甚多。也字傳寫、又加水旁作池。曾植案、也赤可謀、此句不誤。祕史蒙文作額赤格、解曰「父也」。據後文、九十五功臣、蒙力克爲之首。而祕史蒙文、通前後皆稱蒙力克額赤格、雖本與言亦然。然則蒙力克額赤格者、如齊桓之仲父矣。池字卽當作也。也赤可、卽額赤格。又案、氏族表作明里也赤哥。通世案、有字疑當作用。祕史、蒙力克、晃豁壇氏、抄眞斡兒帖該第二子晃豁壇之裔、察剌合老人之子。使回汪可汗語曰「我牧羣羸弱、方從思之。文田案、思當作喂。合命一人赴彼宴、足矣」。既遣使、

上卽還。時汪可汗近侍也可察合蘭者、秋濤案、祕史作也客扯連。通世案、西史作也格札闌、又作也客扯闌。祕史卷六云阿勒壇弟。然卷一明云忽闌把阿禿兒子、則弟者、從弟之誤也。聞圖上謀、歸語其妻、因曰「人若有言泄此於上、賞我何哉」。其子亦剌罕通世案、祕史作其妻阿剌黑亦惕、伯呼律作其妻阿剌克因特。洪氏曰「錄誤」。止之曰「此無據言之、恐他人以爲實」。也可察合蘭牧馬者乞力失秋濤案、祕史作乞失里黑。文田案、乞力失當作乞失力。然此二字、蓋明初傳寫已誤倒、故元史本紀、亦沿此誤也。此可以他書證之。祕史卷一、作乞失黎黑。其證一也。又六卷、作乞失里黑。其證二也。邱處機西遊記、作吉息利。其證三也。元史、哈剌哈孫、卽此人之曾孫、而哈剌哈孫傳、及元文類之順德忠獻王碑、及輟耕錄、皆作啓昔禮。凡此皆乞失力三字之對音。其證四也。此不得但以本紀之沿誤爲據者。以本紀之誤、卽誤於此錄之誤文故也。月通世案、是日之譌。供馬湩、適至、微有所聞。問其弟把帶秋濤案、元史木華黎傳作拔台、祕史作巴歹。通世案、是乞失力先聞、而告把帶、西史同之。祕史則巴歹先聞、而告乞失力黑。祕史西史、皆言伴侶、不言弟。曰「適所議者、何事。該知否」。把帶曰「不知」。察合蘭秋濤案、上云也可察合蘭、此云察合蘭、該省文。次子納憐、秋濤案、祕史作納鄰客延。坐帳外方礪鏃、聞之、罵曰「割舌者、適我不言乎。今事已然、當禁誰口也。文田案、割舌者、謂漏洩則當拔舌也。祕史云「恰纔咱說的話、這當取舌的」、是也。把帶謂乞力失曰「我今知矣。可同赴上言之。同原作因。秋濤案、祕史云「見拴的兩馬、每人騎了一匹、那夜到帖木眞帳房後都說了」、則此宜爲同字。遂入己帳話行。止有一羔、殺之、拆臥榻煮熟、夜馳見上告其謀、曰「汪可汗將圖太子、其計定矣」。通世案、祕史卷一、兩人爲荅剌兒罕官人。西史云「今有貨勒自彌荅剌罕土蠻荅剌罕・薩塔克荅剌罕、皆此二人之後裔」。上聞之、止

軍於阿蘭塞、忽移輜重於失連眞河上、通世案、伯哷津作失魯楚兒只特山。洪氏曰「上文作河名、此爲山名、則仍是色野爾濟之訛」。又諸本此處無阿蘭塞。阿蘭塞、非色野爾濟河近地、見前。案、太祖求婚於王汗、在土拉河尋盟之後、兩汗皆居舊庭。桑昆所居別兒客之野、亦似距土拉河不遠。今釁隙一開、合戰忽起於東方。不詳其故。祕史云「成吉思聽了巴歹乞失里說、就那夜、對附近可倚附的伴當每說知、將家內物件棄了、遂往躱於卯溫都兒山陰」、西史亦云「帝亟移營向失魯楚兒只特山路以去」。似太祖是時已在塔塔兒之地。顧是時王汗大兵强。太祖聞桑昆謀、慮其力不敵、匆遽奔竄、避難於東邊、而王汗父子追蹤之歟。記載簡略。其間情節、今不可考。嚕卜嚕奎書中有云「翁汗聚軍侵軼摩阿勒之地、討成吉思。成思吉遁於塔塔兒之地、潛匿焉云云」。此或得其實、亦不可知。急遣折里麥爲前鋒。曾植案、此戰、主兒扯歹、特爲軍鋒之冠、祕史叙述甚明。而元史歸之畏荅兒。此又以先鋒爲折里麥。折里麥、祕史之者勒蔑、速不台之兄、亦太祖開國元勳也。傳聞異詞、蓋難强合。又案、祕史、者勒麥爲後啃。自莫運都兒山之陰行。通世案、祕史蒙文作卯危溫都兒。卯危謂不好、溫都兒謂高。譯文作卯溫都兒山。所在不詳。洪氏引蒙古游牧記、克什克騰旗西南四十三里、有漢海恩都爾山、云「漢海合音如卯」。然似其地偏於南、與此不同。汪可汗亦領兵、自莫運都兒山陽、由忽剌河卜魯哈二山而來。秋濤案、俟攷。曾植案。既曰二山、不得言河。祕史作忽剌安不剌合惕地面、則河字、蓋阿字誤也。通世案、額兒忒曼作枯倫別兒喀特、云枯倫湖近地。伯哷津作紅柳林中、蒙古稱烏闌不兒罕。洪氏曰「當如祕史作忽剌安不剌合惕。明茅元儀武備志、韃靼方言、紅曰伏剌案、柳曰補兒哈、可證。錄音近、惟稱二山、係誤」。又案、祕史不剌合惕、下文作不兒合惕。近侍有太出・也迭兒二人者、曾植案、姚燧徐國公神道碑「燕只吉臺氏之祖太赤、初將突騎百夫宿衞、後從太宗定中夏」。太赤、疑卽太出。又案、祕史蒙文、來報者爲赤吉歹・牙的阿二人、牙的阿、卽也迭兒。通世案、祕史譯文作阿勒赤歹放馬的赤吉歹等、阿勒赤歹、太祖弟合赤溫之子、卽史表之濟南王按只吉歹。伯哷津作伊兒吉歹之從者泰出欽黑歹・牙都兒。洪鈞曰「伊阿二音互誤、蒙回文同。祕史作赤吉歹、錄作泰出。以此較之、則祕史奪泰字音、錄奪吉歹音」。案、泰赤之裔、稱燕只吉台氏、亦作晏只吉䚟氏。蓋以其主之名爲姓也。因牧馬、見汪可汗軍至、亟來告。上時移軍合蘭只之野、曾植案、合蘭只、卽祕史作合剌合勒只惕。通世案、下文作合蘭眞沙陀、祕史作合剌合勒只惕額列惕地面、額兒忒曼作合蘭沁阿勒特。阿勒特、卽額列惕之轉、謂曠野、或爲沙陀。合剌合勒四字合音爲合蘭、只惕轉爲眞、或省惕音。喇施特曰「其地在女直界上」、又曰「距鄂兒奎河不遠」。元史畏答兒傳作哈剌眞之地。德邁拉曰「哈剌眞在土剌・斡嫩兩河之間」。蓋指喀剌郭勒也。多遜謂「哈剌眞當卽喀爾喀河南源之哈爾渾河」。施世杰又云「合剌合勒只惕、卽喀爾喀河」。並未得的證。西史云「忙兀特將忽亦兒荅兒請先進、出敵之背、樹我纛於奎騰之山」。據此、則此戰與前闕亦因役近地也。未及爲備、日銜山、通世案、西史作「日出時、倉卒備戰事」。卽整兵出戰。先敗朱力斤部衆。秋濤案、祕史作只兒斤。次敗董哀衆、秋濤案、紀作董哀部、作祕史董合亦惕。又敗火力失烈門大石衆。張石州曰「紀作火力失烈門部、無大石二字」。秋濤案、祕史作豁里失列門太子。大石二字、卽太子譯音之異。以此知前後所云太后、卽大石譌也。文田案、火力失烈門大石、卽火力失烈門台吉。上五字其名、台吉、今蒙古尚有此官也。通世案、西史云「此役爲成吉思汗一生有名戰事、蒙古人至今稱道之」。祕史叙述極詳明。王罕命札木合整治軍馬。札木合知王罕非太祖敵、竊通意於太祖。太祖以兀魯兀惕部長主兒扯歹・忙忽惕部長忽亦勒荅兒爲先鋒、先敗王罕先鋒只兒斤勇士合荅黑、次敗土綿土別干姓阿赤黑失侖。忽亦勒荅兒傷落馬。斡欒董合亦惕衝來、主兒扯歹勝之。斡欒董合亦惕勇士豁里失列門太子、領一千護衞軍衝來、主兒扯歹又勝之。史有朮赤台畏荅兒傳、可以相證。本書草略甚。馳來衝陣。我軍射之中頽。其勢大挫、歛兵而退。通世案、祕史云「成吉思旣勝、見日已晚、收軍而退、夜起離戰地宿」。據本書「日銜山」語、則是決勝於瞬息也、據西史「日出時」語、則是終日戰也。觀畏荅兒傳云「至晡時猶追逐不已」、終日戰者、爲近事情。祕史又云「次日點視軍馬、少斡闊台・孛羅忽勒・孛斡兒出三人。其夜、成吉思恐敵來追襲、整治軍馬、準備厮殺。天明、三人逃歸、告敵已去。於是成吉思遡浯泐灰溼魯格泐只惕水、入荅闌捏木兒格思之地」。西史又云「王汗軍勢仍盛、成吉思見不敵、亟引退」。然則太祖雖勝、敵勢未大挫也。又據太祖遡浯泐灰河、則似戰地在四種塔塔兒舊壤、當考。上亦將兵至斡兒弩兀遺惑哥山岡。斡原作幹。文田案、卽祕史之斡兒訥屼山、當在今喀爾喀河南岸。曾植案、祕史卷七「忽亦勒荅兒卒、

葬之於合兒合水的斡峏訥舤山」。斡峏訥舤、卽此斡兒篤兀也。斡字誤。軍凡四千六百騎、秋濤案、祕史作「點視軍馬、有二千六百」。沿哈勒合河秋濤案、祕史作合泐合河。文田案、卽今蒙古之喀爾喀河。順進、分爲兩隊、上親將二千三百騎、行河南岸。兀魯吾秋濤案、祕史作兀魯兀惕。忙兀兀原作兒。秋濤案、祕史作忙忽惕。曾植案、兒當作兀。二部、將二千三百騎、行河北岸、秋濤案、祕史「成吉思領三千三百、依著河西邊起了」。兀魯兀惕忙忽惕領一千三百、河東邊起了」。其兵數方位、皆與此異。通世案、喀爾喀河、出自摩克托里山西北流入貝爾諾爾。此南岸、卽祕史之西邊、北岸卽東邊。方位未必異。西史兵數與本書同。唯順河、誤作溯河。上以弘吉剌部先爲婚親、遣使謂其長帖木哥阿蠻部、秋濤案、祕史作帖兒格。曾植案、祕史蒙文云「捕魚兒海子有帖兒格阿蔑勒等翁吉剌」。阿蔑勒卽阿蠻。又案、祕史蒙文、十一部共立札木合者、翁吉剌敦種迭兒格克・額蔑惕・阿勒灰等爲頭。迭兒格克卽帖木哥・額蔑惕卽阿蠻也。曰「汝若來順、則女子而容秋濤案、四字未詳、外甥資質俱在。文田案、而當作面。言汝若降、則女兒顏面、與外甥之體面、俱好看。蓋訶額侖爲太祖之母、孛兒帖爲太祖之妻、皆宏吉剌氏。太祖爲宏吉剌之外甥也。祕史云「想著在前姻親呵、投降來者。若不冒呵、便廝殺者」。卽此數語意。曾植案、祕史蒙文、有「外甥容貌、女子顏色」之誤、此所本也。祕史譯文無。不然則加兵於汝矣」。通世案、祕史此下云「翁吉剌都投降了。成吉思因他投降了、諸般不曾動著他的」。此句亦不可少。遂行至董哥澤秋濤案、祕史作統格黎小河。脫兒合火兒合之地曾植案、此地名、祕史無。通世案、祕史蒙文作統格豁羅罕、西史云「成吉思駐於董嘎諾爾之傍、脫魯合豁兒罕之地。是地有湖有河、水草茂美。因以休息士馬」。火兒合豁羅罕、皆豁兒罕之譌、蒙古謂小河。董哥與脫兒合音近、蓋湖河同名。祕史舉河名、而略湖名。其地不詳。華而甫曰「是達賴諾爾」。霍渥兒特曰「因果達河之支河、有唐嘎河、近巴兒渃納湖」。駐軍。上遣阿里海、秋濤案、祕史作阿兒孩合撒兒・雪格該者溫二人。通世案、阿里海卽阿兒孩合撒兒、札剌亦兒部人。雪格該又作速客該。朵籠吉兒氏、者該晃荅豁兒之子。並太祖離札木合時來屬。

致責於汪可汗、曰「我合大軍、駐董哥澤間、艸盛馬肥。與汪可汗言之、昔汝叔父菊律可汗、秋濤案、前作菊兒可汗。嘗謂「汝、我兄忽兒札忽思盃祿可汗之位、秋濤案、前作忽兒札胡思盃祿可汗。不我與、自奪之」。汝又殺諸昆弟、詐言「太帖木兒、及不花帖木兒輩、不知所存」。是故菊律可汗、逼汝哈剌溫之隘。汝窮迫無計、通世案、此一句、祕史作「儞那時將女子忽札兀兒兀眞獻與蔑兒乞的脫黑脫阿」。僅以百騎來歸。我先君率兵偕汝、以雪前恥。而泰赤兀都兒吾難・八哈只曾植案、祕史蒙文作忽難・巴合只。二人、助兵幾許不可知。通世案、伯哷津作「泰赤烏特之兀都兒諾延・巴合只二人、則率兵無多」。兀都兒諾延、卽兀都兒吾難。額兒忒曼作都兒富延、祕史作忽難、俱人名未全。此書泰赤下、恐脫烏字。其時道經哈剌不花出谷之上、又出阿不札不花哥兀之山、又躋禿烈壇・禿零古・通世案、伯哷津作土拉壇・禿郞古特。盞速壇零古闕羣隘・通世案、伯哷津作喀卜察兒、卽隘之蒙語、而無隘名。曲笑兒澤、通世案、伯哷津作古蘇兒諾爾。上曲薛兀兒澤、伯哷津作庫思古兒諾爾、祕史作古泄兒海子、音甚近。蓋同地也。跋涉重險、便至其境。便原作使。通世校改。適値彼凶年、得窮其國。枝秋濤案、疑有誤。菊律可汗時聞之、避我於塔剌速野。通世案、祕史蒙文作忽兒班帖列速惕、伯哷津作忽兒奔塔剌速特。與上文塔朵剌之野、祕史作帖兒速地面者同。我又逼之。僅以數十騎遁、走河西之國、不復反矣。張石州曰「此段較本紀語加詳、然多譌字」。我先君盡以土地人民歸於汝。由是結爲案答。我遂尊汝爲父。此我有造於汝、一也」。又曰「父

汪可汗。汝其時如埋雲中、如沒日底。通世案、西史之「汝避居於日入之地、隱沒於中、」洪氏曰「西遼在西、故云。」元史作「君爲乃蠻所攻、西奔日沒處」。汝弟札阿紺孛居漢塞之間。通世案、伯哷津作察富古特之地、云「是乞紇地」。元史作金境。我發聲轟之、以手舉帽、隱隱而招之。彼其聞我呼、見我招、遠來投歸。我乃登山而望、倚店而待其至。又爲三部蔑力乞所逼。通世案、卽祕史所謂三種篾兒乞、兀都亦惕・兀洼・合阿惕也。札阿紺孛來降時、蔑兒乞欲與太祖戰。太祖與札阿紺孛迎擊敗之。卽此事也。我以其遠來、冐令死之也。所以吾殺兄誅弟。此謂誰。薛徹別乞我兄、大丑魯爲弟。吾原作告、兄原作弟、乞字原誤入丑下。秋濤案、原文舛誤不可知。元史本紀載此段云「君爲乃蠻所攻、西奔日沒處。君弟札阿紺孛在金境。我亟遣人召還。比至又爲蔑里乞部人所逼。我請我兄薛徹別及及我弟大丑往殺之。此大有功於君、二也。」案、本紀取親征記、加以潤色、而所叙次、究與情事不合。所當闕疑。祕史亦不載此語。曾植案、告字、蓋吾字之誤。此事、祕史叙在札阿紺孛來歸之前。通世案、伯哷津作「我令我兄弟自蔑兒乞中救之、始得從察富古特之地以來。乃救彼之人、旋爲被殺之人、則我又以汝故而殺我兄弟二人。此爲誰。薛徹別乞我兄、泰出勒我弟」。洪氏曰「多桑哀忒譯、謂「薛徹泰出往救」、與元史同。伯哷津所譯、有費解語、而二人往救之之意、渾含言中。又後數語、則爲親征錄獨得之證。用知史錄立言各異、而有本則同。泰出之名、此處獨增尾音、尤爲錄中魯字確證。合三人譯本、以史錄疏通之、或無大謬。然上文記事、與帝此言、不能處處吻合也」。考主兒乞氏之滅、由其不從太祖攻塔塔兒、而却乘敵勢陵我也。今云爲札阿紺孛殺之、蓋紿言二人由附蔑兒乞而被滅也。吾字兄字乞字、據元史西史校正。是我有造於汝、一也」。又曰「父汪可汗。汝旣出雲中、顯日底、來歸於我。使汝原作日。秋濤校改。饑不過日午、羸不過月望。通世案、西史作「不及半日、而使汝得食、不及一月、而使汝得衣」。意全同。所以然者、何哉。我昔與兀都夷部、戰於哈丁黑山通世案、元史作哈丁里。之西、木奴叉力之野、曾植案、卽前莫那察山。通世案、祕史蒙文作木魯徹薛兀勒、額兒忒曼作木里察克速兒。多獲孳畜輜重、悉以與汝。饑不過日午、日字原闕、秋濤校增。羸不過月望者、實此之由也。是我有造於汝、三也」。又曰「父汪可汗。曩汝征滅里乞、陣於不剌川。遣使覘候其部長脫脫。候原作侯。通世案、西史「遣使」上有我字。侯當作候、候其虛實也。今改。不待陣而先戰、通世案、西史作「汝知有機可乘、不告於我、而自進兵」。元史亦云「君不告我」。獲忽都台・察魯渾二哈敦、因招其二子火都・赤剌溫、合部叛歸。通世案、西史此下有「而無絲毫遺我」句、元史亦有之。汝又爲曲薛兀撒八剌追襲於汝人民、使來告我。我遣四將、領兵戰敗之、盡歸所掠於汝。是我有造於汝、四也」。秋濤案、滅里乞、前作蔑里乞、不剌川、前作兀剌川、忽都台前作忽相台、察魯渾、前作察勒渾、曲薛兀、前作曲薛吾、火都前作和都。又曰「昔我出哈兒哈山谷馬君忽剌河班荅兀卓兒完忽奴之山曾植案、祕史作勺兒合勒崑山的忽剌阿訥屼山行。此疑有譌字。通世案、伯哷津作「哈剌河濱、與忽剌安必兒荅禿兀特相近之卓兒格兒痕山」。哈兒哈山谷、卽哈剌河濱。馬君不可考。忽剌河、卽祕史之忽剌阿訥屼惕、西史之忽剌安。班荅兀、卽孛勒荅兀惕、蒙古語孤山之複稱也。西史譌爲必兒荅禿兀特。卓兒完忽奴、卽祕史之勺兒合勒崑、又卽西史之卓兒格兒痕。祕史忽剌安忽惕戰後、王罕於土屼剌的黑林、會成吉思、結爲父子、相謂曰「若有人離間呵、休要聽信。親自對面說話了、方可信」。今太祖追述其事也。因考得忽剌阿訥屼惕、卽忽剌安忽惕。阿訥合晉爲安、忽剌河班荅兀、亦前作忽剌河山。其爲同地甚明。蓋王罕感太祖救復之恩、於忽剌安忽惕發此言、遂歸土兀剌河上、重訂父子之交也。又案、哈兒哈、非東方之喀爾喀河、當卽土剌河南之喀魯哈河。蒙古游牧記云「喀魯哈河、源出翁金河北、土剌・鄂爾坤二河間平地、西北流百里許、轉東北流三百餘里、入土剌河」。相見時、於時不已言乎。「譬如毒牙之蛇所

傷、勿以動念。吾二人脣齒相見、始可間離」。汝今以蛇傷而間我乎。脣齒相見而離我乎。父汪可汗。我時又如青雞海鶻、自赤兒黑山、飛（原作揮、秋濤校改。）越於盃而之澤、（通世案、伯哷津作赤兒古山・捕魚兒諸爾。二書赤下皆脫忽音。洪氏曰「赤忽兒忽山、近捕魚兒淖爾、常卽此山。祕史卷一、亦作赤忽兒古。是知譯忽譯古、皆無不可、皆非定音」。）搦班腳鶻以歸。（通世案、西史作藍色足灰色翼之鶻。以西史較之、此下脫「若此謂誰。朶魯班塔塔兒諸部是也。我又如藍色之鷹、越古闌諸爾、擒藍色足之鶻、以致於汝」數句。洪氏曰「藍色之鷹、恐是海東青之誤譯。古闌、必是枯倫之誤」。錄作鶻、此言鶴。案正字通「鴿、大如鶴、青蒼色、亦有灰色者、長頸高腳、項無丹而頰紅」、又正韻「鴿、水鳥也」。以其如鶴、故西書譯爲鶴。以其爲水鳥、故於此二湖擒之。亦可見此數部皆在此兩淖爾左近」。又案、元史亦擧五部名。明初所用本、未有脫文也。但易鶻爲餓雁、用筆甚放。）若此謂誰。哈荅斤・散只兀・弘吉剌諸部是也。（諸原作譜。張石州曰「疑諸之誤」。）汝豈非假彼諸部之力（原作立、秋濤校改。）而驚畏我耶。是有造於汝五也」。又曰「父汪可汗。汝何（原作可、秋濤校改。）嘗有造於我。我造汝者凡若此。與其驚畏我、何不使我累煬爨而息、安榻而臥、使我癡子癡婦得寧寢乎。（通世案、是祕史「如何這般怪責、將俺家業破壞了」之意也。）我猶汝子、勢雖寡弱、不使汝有慕於他（張石州曰「他下疑脫一字」。通世曰、所脫蓋衆字。）我雖愚、不使汝有慕於他賢也。（通世案、祕史云「我所有雖少、未嘗使求多、雖惡、未嘗使求好」。言無所貪也。西史亦云「我未嘗言所得過少、我欲其多。所得是惡、我欲其美」。與祕史意同。本書似誤譯。）譬如雙輪去一、不能行也、徒使牛汗、（或曰「徒使字疑誤」。秋濤案、此不誤。蓋以駕車牛爲譬也。庚熙以爲與下「徒使跳躍」意同。）縱之恐盜、係之實餓。又如雙輪偶斷其一、牛

憤破領、徒使跳躍、不能前也。以我方車、獨非一輪乎」。（通世案、祕史亦有此譬諭。今删其俚語。云「且我與汝、如車之兩轅一轅折、則牛不能拽。又如兩輪。一輪壞、則車不能行。我豈不比一轅一輪乎」。語甚簡明。本書兩轅、亦誤作雙輪、複沓繁冗可厭。西史亦然。）凡此諭汪可汗也。（通世案、此一句、西史亦有之。洪氏曰「如出一手」。右諭王汗辭凡六段。祕史無其第二段、四段前節、五段後節。三段意同而辭不類。其他皆語質而近實。蓋脫必赤顏作者、據祕史原本、而加潤色、故本書西史、皆多飾筆也。又案、祕史此下、有「王罕歎息、剌指出血、以與使者事、及太祖告札木合」語。本書西史不載。）時上族人火察兒・案彈在汪可汗部中。上因使謂之曰「汝二人欲殺我。將棄之乎、瘞之乎。（通世案、西史作「汝二人疾惡我。將仍留我地上乎、抑埋我地下乎」。）吾常謂上輩八兒合拔都（秋濤案、本紀作八剌哈。曾植案、祕史一、忽禿黑禿主兒乞生二子。一名薛扯別乞、一名台出、爲主兒乞。祕史四、又稱「主兒乞種人莎兒合禿主兒乞 帶他兒子撒察別乞・泰出來歸」。撒察卽薛扯、泰出卽台出。莎兒合禿、蓋卽忽禿黑禿、而對音不合、不得卒通。此八兒合拔都、卽史表窠斤八剌哈哈、祕史之斡勒巴兒合黑也。通世案、莎兒合禿主兒乞、祕史卷一作忽禿黑禿主兒乞、蓋因叔父有忽禿黑禿蒙古兒、而偶誤書也。）二人（通世案、人當作孫。祕史西史作把兒壇之子、誤。西史其下有及字。洪氏曰「及字斷不可少。把兒壇子荅力台尙在。蓋隱指之」。然指叔父云祖父之子、恐無此稱呼。元史亦云「以薛徹・大丑二人、實我伯祖八剌哈之裔、欲立之」。削此八兒合字不誤。）薛徹・大丑、（秋濤案、此句上當有薛徹別吉四字、以上言二子也。通世案、何氏亦爲元史所誤。）「詎可使斡難河之地無主」。累讓爲君、而不聽也。又謂火察兒曰「以汝揑群太石之子、（群原作辟。秋濤案、揑辟太石、卽揑坤太子、已見前。本紀云「乃以汝火察兒爲伯父聶坤之子」、又欲立之。汝又固辭」。據此則火察兒、乃太祖從父兄也。文田案、辟卽群之誤字。當改羣、而證以揑坤。不可徑改坤字。通世依前例、改辟爲群。）吾族中當立」。汝又不聽。又謂案彈曰「汝爲忽都剌可汗之子」。以而父嘗謂可汗推位。汝亦不聽。吾悉

會讓、汝等不我聽。我之立、實汝等推也。通世案、忽圖剌合罕歿後、蒙古久無主。及太祖自札木合所遁歸、諸部多來屬。阿勒壇・忽察兒・撒察別乞等、共議立太祖爲合罕、號成吉思。今云「諸人皆辭位、太祖被推」、卽其時之事也。史錄不載諸人立太祖之事、此語初無所承、使人殆不能解。又案、薛徹・大丑、合不勒合罕長子之孫也。故云上輩、祕史亦云在上輩。火察兒、也速該之兄之長子也。案彈、則其父已爲合罕。皆分當立者也。而太祖獨被推者、由其德足以服衆。非蒙父祖之故業也。吾所以不辭者、㓜不欲使蒿萊生久居之地、生原作止。張石州曰「當是生字」。斷木阻通車之途、吾夙心也。假汝等爲君、吾當前鋒、俘獲輜重、亦歸汝也。使我從諸君畋、我亦將遮獸迫崖、使汝得從便射也」。通世案、「假汝等爲君」以下、西史作「我既爲汝衆人之主、常思惠賚我臣屬、俘掠營帳畜產男女丁口、悉以與汝、曠原之獸、爲汝合圍之、山籔之獸、驅迫之以向汝」。考祕史、阿勒壇等立太祖時、誓曰「倆若做皇帝呵、多敵行；俺做前哨、但擄得美女婦人並好馬、都將來與倆。野獸行打圍呵、俺首先出去圍將野獸來與倆」。太祖此言、恰與之符合。蓋述當時誓言之意、以責諸人叛盟也。西史稍加檃括、却失原意。又謂案彈・火察兒曰「三河之源、我祖實與。毋令他人居之。」通世案、三河之源、謂斡難・客魯連・土兀剌三大河所出、卽不兒罕山麓之地。張穆曰「元祕史「太祖自桑古兒河遷起了、到客魯連河源頭不兒吉名字的地岸根前、做下營盤住了」、則在肯特山陽、車臣汗部中前旗游牧境、西瀨土拉、北倚斡難。所謂三河源者是也。斯爲蒙古發祥之權輿矣」。案張說是也。但三河之源、所包稍廣、不必指不兒吉崖。西史云「朶奔巴延、居敖嫩克噜倫土拉三河發源之地」、則遠祖以來、世世游牧其地。亦非太祖始居之也。又案、祕史云「倆那三河源頭守得好著、休教別人做營盤」。據此語考之、似三河之源、已屬二人。蓋太祖懼王汗父子侵襲、遽棄祖宗舊壤遠去、故二人代據之也。又謂脫憐、秋濤案、此別一脫憐、非汪罕也。祕史作脫斡鄰。吾弟。我以汝是高祖家奴高原譌作馬、秋濤校改。曾祖閤僕、故尊汝爲弟也。通世案、高祖謂屯必乃薛禪、曾祖謂合不勒合罕。汝祖塔塔、秋濤案、祕史作斡黑荅。通世案、伯哷津作禿克禿圖。乃吾祖察剌合令忽・秋濤案、祕史作察剌孩領忽。通世案、察剌孩領忽、屯必乃之叔父。統必乃秋濤案、祕史作屯必乃二君所虜。塔塔生雪也哥、秋濤案、祕史作速別該。通世案、伯哷津作賽克布兒。雪也哥生闊闊出黑兒思安秋濤案、祕史作闊闊出乞兒撒安。通世案、伯哷津作闊闊出希兒思、奪安字。思安生折該晃脫合兒、該原作談。秋濤案、祕史作也該晃脫合兒。通世案、談當作該。祕史卷四、又作者該晃塔豁兒、亦卽此人。伯哷津作哀克宏脫合兒。合兒生汝。汝世爲奴虜、誰之國土、汝可取之。縱得我國、案彈・火察兒必不與也。昔我等居汪可汗所、早起、我得飲王青鍾馬乳。汝輩起、知我先飲而妬之邪。我今去矣汝輩恣飲之。吾弟脫憐、量汝能費幾何也」。通世案、祕史載太祖告札木合語、曰「皇帝父親行、將我嫉惡著、教分離了。在前時、每日誰早起呵、將父親的馬乳、用青鍾飲有來。爲我常早起的上頭、嫉妬了。如今將皇帝父親的青鍾滿飲呵、待費得多少」。考太祖九歲喪父、十一歲在斡難河上、與札木合爲安荅。二人同居王汗所、蓋在其時。若脫斡鄰、則乞顏氏奴僕。安能與太祖爭王汗青鍾耶。本書誤以此語爲告脫憐、遂全失告札木合語。洪氏却謂「祕史恐誤」、不解其故。又謂案彈・火察兒曰「汝若事吾父汪可汗、勿使疑汝爲察兀忽魯忽原作勿。原注「太祖自稱也」。前有注」。通世依前文、改勿爲忽。之族而累汝。通世案、祕史云「您如今卻離了我、在王罕處。您好生做伴、休要有始無終、教人議論「你每全倚仗著帖木眞、無帖木眞呵、便不中用了」」。西史作「汝二人今從我父王汗、毋有始無終、使人議汝向日所爲、皆札兀特忽里之力也」。亦其意也。本書似誤譯。卽汪可汗交人。易厭。汪原作正、易原作馬。並秋濤校改。於我尙爾、況汝輩乎。縱然今夏、通世案、當有不及二字。西史作「縱今歲不及汝等」。豈能到來冬矣。又爲我父汪可汗曰「可遣案敦阿速・渾八力二人來報。渾原作運。秋濤案、前作案敦阿述・渾八力。通世案、

伯哷津作阿勒屯阿速黑・忽勒巴爾。運當作渾。否則遣一人。日者原誤作暑字、秋濤校改。吾麾下忙納兒拔都、曾植案、祕史九十五功臣名內、有馬
剌勒其人、疑卽忙納兒拔都也。通世案、伯哷津作木訶里巴哈都兒。失彼銀鞍黑馬在王所。請持來。請原作龍、通世校改。鮮昆案塔。昆原作晁。原
注「卽王子亦剌合也」。秋濤案、鮮晁案答、卽下文鮮昆、蓋汪可汗之子也。太祖父事汪可汗、故與子爲案答。下「王子鮮昆云「彼何嘗實意待我爲案答」」。可證太祖與之結爲案塔、故卽以案塔稱之。塔答字異音同。惟晁
與昆字形相似、而音聲迴殊、必有一誤。攷前文云「汪可汗至土兀剌河、其子亦剌合鮮昆云云」、則作昆是也。汝亦遣必力哥別吉・脫端二人來。秋濤案、必力哥、
卽下別力哥、蓋亦剌合之屬人。否則遣一人。札木合案答、暨阿赤失蘭・阿剌不花・帶亦否・曾植案、阿赤失蘭、祕
史作阿赤黑失侖。阿剌不花帶、恐卽史不忽木傳中之海蘭伯也。通世案、喇施特之王汗部族考中、有阿剌不花、有帶兒。帶亦否、卽帶兒。否當作兒。火察兒・案攤、各遣二人
來。如我東向、可與納兒脫憐呼陳輻兀之源來會。通世案、西史作捕魚兒諾爾、恐誤。如西向、可出哈八
剌漢答兒哈之山、通世案、伯哷津作哈瀸哈兒哈苔兒罕之路。順忽魯班不花諸思河來也」。汪可汗聞上前語、曰
「惟我子裁之」。王子鮮昆謂其父曰「彼何嘗實意待我爲案答。特以玩物視我耳。通世案、祕史述桑
昆語、曰「他幾曾說是安苔來。只說脫克脫阿師翁續著羊回尾子行」。伯哷津唯云「彼稱我爲諳達、而又常詈我」。注云「下有托忽布特一語。疑是蔑兒乞之托克塔。語意難解」。洪氏曰「此見祕史。雖有譯注、而仍難解。無惑
乎西人不能譯也。錄云「以玩物視我」、亦是不得已而渾括之詞」。何嘗稱君爲父。特以老奴視我耳。通世案、祕史云「他幾曾說是皇帝父親來。只說好殺人的老子」。
西史意同。此唯云老奴、意未足。又何嘗遣辯士。馳御馬以及我。通世案、西史作「今日使不能遣、惟有一戰」。及我、當作及彼。彼能勝我、聽

取吾國。若我勝彼、亦取其國也」。因戒其部將別力哥秋濤案、卽前必力哥。別吉・脫端、曾植案、祕史「桑
昆令必勒格別乞・脫朵延、將旗纛豎起、準備厮殺」。必勒格別乞、卽必力哥別吉、脫朵延卽脫端也。曰「備而釜、建而旗、通世案、西史亦作旗。唯祕史作旄纛、仍存蒙古本色。
秣而馬、以需進也」。上既遣使於汪可汗、遂進兵、掠虜弘吉剌別部溺兒斤以行、至班
朱泥河、通世案、祕史作巴泐渚納海子。朮赤台傳作班眞海子。洪氏曰「考之俄圖、斡難河北、俄羅斯界內、有巴兒渚納泊。俄音似巴勒赤諾。泊北有河曰圖拉、入音果達河。就俄圖觀之、河泊不相連屬。或
水漲時、通入於河。或近地尙有小河、而圖未載。故史錄以爲河名。俄人游歷至此、謂「其地多林木、宜駐夏、可避兵。蒙古人尙指是地爲成吉思汗避難處也」。巴兒渚納爲淖爾名、祕史獨是。飲水誓衆。
秋濤案、元史札八兒傳、「太祖與克烈汪罕有隙。一夕、汪罕潛兵來。倉卒不爲備、衆軍大潰。太祖遽引去、從行者僅十九人、札八兒與焉。至班朱泥河、餱糧俱盡、荒遠無所得食。會一野馬北來、諸王哈札兒射之殪。遂
刳艸爲釜、出火於石、汲河水、煮而啖之。太祖擧手仰天而誓曰「使我克定大業、當與諸人同甘苦。苟渝此言、有如河水」。將士莫不感泣」。據史所記、與此書情事稍異。通世案、史太祖紀云「河水方渾。帝飲之以誓衆。時
汪罕形勢盛强、帝微弱、勝敗未可知、衆頗危懼。凡與飮河水者、謂之飮渾水、言其曾同艱難也」。據西史、太祖至巴兒渚納者二。合闌眞戰後一至、遣使後再至。飮渾水、在戰後至時。曰「王汗軍勢仍盛、成吉思見不敵、
亟引退。退後部衆渙散。乃避往巴兒渚納。是地有數小河、而是時水涸流濁、僅可飮渾水。成吉思慷慨酌水、與從者誓。當日從者無多、稱之曰巴兒渚特、延賞及後世焉」。洪氏曰「覩札八兒傳、似戰後卽至此矣」。然太祖
戰後、溯涪泐灰河、順合泐合河、過捕魚兒湖、至統格黎小河東邊、然後遣使。遣使前、未嘗至巴兒渚納」。西史恐誤。時有亦乞列部人孛徒者、秋濤案、前泰赤烏部戰時、有亦
乞剌部人捏辟之子孛徒遣人告變、卽此孛徒也。此書及元史、皆或作亦乞剌部、或作亦乞剌思部、或作亦乞列部。史有孛禿傳、卽其人也。云亦乞列思氏。續宏簡錄、作亦乞烈氏。其實竝同。爲火魯剌部
所逼敗之、因遇上同盟。通世案、此事、祕史不載。却有豁魯剌思人槲斡思察罕等不戰而降事。又有回回阿三自汪古惕部來遇太祖事。是時上通世案、脫弟字。

哈撒兒、別居哈剌渾只敦山、通世案、祕史作合剌溫山、元史作哈剌渾山、西史作合剌溫赤敦山。此與前合剌溫隘、西史作喀剌溫喀卜札勒、祕史譯爲黑林間者異。前阿蘭塞、西史亦作合剌溫赤敦。不知與此同異。妻子爲汪可汗所虜、挾幼子脫虎走、曾植案、宗室世系表、脫忽大王、即此脫虎。糧絕、探鳥卵爲食、通世案、西史云「以走獸爲食」、與祕史「喫生牛皮筋」、語意相類。此恐誤譯。來會於河濱。通世案、祕史、合撒兒棄其妻及三子也古・也松格・禿忽於王罕處、聲身領數人走、尋成吉思於合剌溫山、不見。糧盡、喫生牛皮筋、行至巴泐渚納海子、遇成吉思。據此則合剌溫山、非合撒兒所居、其所尋太祖也。故不近王罕處、却近太祖所駐矣。當考。上與汪可汗、戰於合蘭眞沙陀之地通世案、此即謂前役也。西史作「王汗自合蘭眞戰後」、最明瞭。元史誤謂哈蘭眞大戰實在此時、乃加「汪罕兵至」字於上、加「汪罕大敗」字於下、而前後、則削「移軍合蘭只之野」一語。不知合蘭眞即合蘭只、而遣使後無合蘭眞之戰也。汪可汗居於只感忽盧之地。通世案、伯哷津作起特忽魯哈特額列特。洪氏曰「只感忽盧、即起特忽魯。或原作只忒、而訛爲只感」。時上麾下答力台斡眞、斡原作幹、通世校改。下同。案彈折溫、曾植案、祕史有速客該者溫。彼者溫、即此折溫也。調其音呼、與今語呼章京爲札顏者、極相近。史兵志「應札魯花赤及札也種地人等、每二十人出軍一名」。彼札也、語解譯爲章京。此折溫、當亦作札也解也火察兒別吉・札木合・秋濤案、此諸部、皆太祖舊部、在汪可汗之麾下。故太祖先遣人諭之、而諸部遂共謀汪可汗、以應太祖。通世案、以札木合列於麾下、沂誣。八憐稜哥台・曾植案、元史伯顏傳「蒙古八隣部人。曾祖述律哥圖事太祖、爲八隣部左千戶」。述律哥圖、即此八隣稜哥台也。通世案、述律哥圖、本書作失力哥也不干、泰赤烏部滅時、父子來屬。恐不叛附王汗。伯哷津作渾八鄰・蘇克該。渾八鄰、疑即前渾八力。此奪渾字。本非部名。蘇克該、即祕史速客該者溫、者該晃答豁兒之子、而與脫斡鄰兄弟也。與阿兒孩合撒兒、使於王罕・桑昆。阿兒孩歸。速客該妻子在脫斡鄰處、因留不還。至是與脫斡鄰等共圖王汗也。稜哥台、即速客該。然與速客該音不類、却近述兒哥圖。或應譯者誤爲八鄰部人述兒哥圖也。脫憐・通世案、即祕史之脫斡鄰弟。此下原衍海字、今刪。塔海・忽剌海等、又忽都花部衆、通世案、舊本花作答。蓋洪氏校改。西史部族考作忽都呼特。洪氏曰「答即特之變音」。在汪可汗所、相與謀害汪可汗、曰「此不可依也」、將叛去。汪可汗覺其事、迎討之。原作討迎、誤。張石州校改。是時答力台斡眞、八隣秋濤案、前作憐。通世案、元史作把憐部、額兒忒曼亦爲部名。伯哷津作渾八鄰、爲人名。考祕史、蔑年巴阿鄰氏、太祖離札木合時已來屬、不當至今始降。疑是本人名、譯者誤爲部名、而元史因之。撒合夷・嫩眞通世案、伯哷津作宏廓攸特。祕史卷八「太祖以客列亦惕汪豁眞姓的人與巴歹乞失里黑」、又卷四蒙文「溫眞・撒合亦惕兩種人」。洪氏曰「汪豁眞與溫眞甚叶、而溫眞與嫩眞益叶。恐同族而異文。部族考作呼眞、又即豁眞變音也」。案汪豁眞、不當略汪。宏廓攸特、溫眞、嫩眞、皆汪豁眞之異文。呼眞、則輟耕錄之忽眞、元史之許兀愼又旭申、源流之烏古新、而與汪豁眞別爲一姓也。諸部、稽顙來歸。案彈折溫・火察兒別吉・忽都花・都原作相。秋濤案相當作都。札木合等、奔乃蠻王泰陽可汗。通世案、祕史脫此條。次條首、西史有「是年秋、成吉思自巴爾渚納起師、將自斡難河以攻王汗」句。

上遣使哈柳答兒・抄兒寒二人、寒原作塞。秋濤案、祕史作合里兀荅兒・察兀兒罕。曾植案、塞、當作寒。通世案、西史音同祕史、因改塞爲寒。下同。往汪可汗所、假爲上弟哈撒兒語、謂之曰「瞻望我兄、遙遙忽遠。犍涉徑、秋濤案、句有誤字。不知所從。近聞我妻子在父所。我今蔽木枕塊藉壤仰星而臥。我實賴王父、故强有請。請原作諸。秋濤案、下疑有脫文。通世案、諸當作請。王苟從之、吾終歸王父也」。秋濤案、祕史云「成吉思商量著、差合里兀荅兒・察兀兒罕二人、做合撒兒的使臣、去對王罕

說「我兒的形影、望不著。踏著道路、也尋不見。吽他呵、他又不聽得。夜間看星枕土著睡。我的妻子、見在父親皇帝處有。若差一箇可倚仗的人來呵、我往父親行去」。其語較明晰。通世案、洪氏譯伯哷津書、使者言曰「吾兒離我、今不知所在。我妻子皆在王所、我何歸哉。我今以木葉爲帳、土石爲枕、望星而臥。我思從父。如王念我前勞、許我自效、卽束手來歸矣」。祕史又云「成吉思又對使臣說「您去、俺便起身。您回來時、只於客魯連河的阿兒合勒苟吉地面行來約會著」。隨卽敎主兒扯歹・阿兒孩兩箇做頭哨、去客魯連河的阿兒合勒苟吉地面下了」。可以考太祖進兵路次。汪可汗因遣使亦秃兒干、秋濤案、祕史作亦秃兒堅我煮潦器盛血、秋濤校本我卜增使字。通世案、使字不必增。我字、卽以字之譌。西史作「盛血於牛角」。元史作「以皮囊盛血」。與之盟。哈柳荅兒抄兒寒二使、將亦秃兒干來。秋濤案、祕史云「亦秃兒堅望見下營甚多、便回走了。察忽兒罕自後箭射、將亦秃兒堅馬臀尖射坐了。那裏將亦秃兒堅拏住、將至太祖處」。是二使執亦秃兒干來、非偕來也。上不與語、卽送於哈兒抄兒所。秋濤案、祕史云「送於合撒兒敎殺」、與此不同。當從祕史。通世案、兒抄二字、卽撒字之譌。西史云「合里兀荅兒望見己營、恐其見而返轡、馬良行駃、不能追也。乃下騎、僞言「馬蹄下有細石、將扶去之」、而浼其下騎。既下遂被執、獻於成吉思。成吉思以付朮赤合薩兒」。與祕史情節微異。祕史有「合里兀荅兒馬快、悍上不敢拏、前面橫當著」語。西史乃以馬良行駃爲亦秃兒干事。上因以二使爲鄉導、二原作三、導原作尊、秋濤校改。領兵夜馳、通世案、祕史云「合里兀荅兒等對太祖說「王罕不隄防、見今起著金撒帳、做宴會。俺好日夜兼行、去掩襲他」。太祖說「是」。遂教主兒扯歹阿兒孩兩箇做頭哨、日夜兼行」。最悉事情。至徹徹兒運都山、張石州曰「紀作折折運都山」。秋濤案、祕史作者折額兒溫都兒山。通世案、祕史山名下有地名、曰折兒合不赤孩地面的口子。者折額兒、前作者者額兒。與東方之徹徹兒山不同。諳畢勒・多遜皆曰「在克魯倫・土拉兩河之間」。大佐祐勒曰「近今烏爾噶」。烏爾噶、卽庫倫也。出其不意、破汪可汗軍、盡降克烈部衆。通世案、據祕史、此戰亦烈、太祖圍攻三晝夜、纔能克之。以合荅黑把阿秃兒使王罕逸去、留而力戰也。又案、祕史此下有太祖愛合荅黑之勇、赦不殺、使率其衆、隸忽亦勒荅兒妻子。以孫勒都歹稱人塔孩把阿秃兒有恩、與只兒斤百人。太祖自娶札合敢不長女亦巴合、以次女莎兒合黑塔泥與拖雷。賞巴歹乞失里黑之功、與王罕金撒帳金器皿等、使領汪豁眞姓宿衞、加種種恩典。是冬駐阿不只阿闊迭格兒之地等事。本書西史皆不載、蓋脫必赤顏原本已略之也。汪可汗僅以子及數騎脫走。顧其左右、顧原作賴。秋濤案、當作顧。謂其子亦刺合曰「我父子相親、其可絕而絕之乎。今由此綏頹、竟絕矣」。此字下、秋濤補輩字。竟原作兒、秋濤校改。通世案、輩字不要補。父子謂己與太祖、綏頹謂謬從亦剌合等姦謀。西史云「不應與離之人、人亦不我離、而我自離之。今遭此厄、皆一人之罪也」。亦其意也。至揑群烏孫河群原作辟、孫原作柳。秋濤案、祕史作涅坤水。是此辟字、亦當作坤。文田案、此亦作揑羣。通世案、祕史作的的克撒合勒地面涅坤水處。西史作乃蠻界之揑坤爲烏孫。烏孫卽水也。柳當作孫。爲乃蠻部主太陽秋濤案、祕史作塔陽。可汗之將火里速八赤秋濤案、甲子年作火力速八赤。通世案、祕史作豁里速別赤。帖迪沙通世案、伯哷津作騰喀沙兒。二人所殺。通世案、西史云「送其首於太陽汗。太陽汗責其擅殺」。祕史云「王罕被執、自言其名。豁里速別赤不信殺之。桑昆逃去、從者闊闊出不聽妻諫、棄桑昆歸太祖。太祖誅之、賞其妻。乃蠻塔陽母古兒別速遣人取王罕頭來、奏樂祭之。時其頭笑。塔陽以爲不祥、踏而碎之」。又有可克薛兀撒卜剌黑歎乃蠻將亡語。蓋脫必赤顏以其不經刪之。西史又載太陽以王汗頭爲飲器事。是匈奴故事耳。今頭已碎。難以爲器。亦刺合走西夏、西過亦卽納城、秋濤案、亦卽納、當卽亦集乃路。通世案、卽今額濟納舊土爾扈特蒙古游牧所在。至波黎吐蕃部、曾植案、元史案竺邇傳、子國寶從皇子闊端西征、有招撫吐蕃呵里禪・波黎揭諸部酋長事。波黎揭、卽此波黎吐蕃也。又案、波黎蓋今布隆吉爾地。通世案、伯哷津作波魯土伯特。剌薩唐碑、漢文稱吐蕃、吐蕃文作土伯特。吐蕃、蓋土伯特之轉也。遼史興宗紀重熙十六年云々、鐵不得國遣使來乞師伐夏。鐵不得、語解改作圖伯特。道宗紀清寧六年以公主嫁土伯德王之子。語解誤脫土字、改作伯特。祕史卷十三晃孩等三人諫太祖語中、有「將俺如西番狗般使去」句。西番字、蒙文作土伯特。馬兒科波羅紀行、亦有迭伯特猛狗語。阿剌伯人夙知土伯特之名。唐末、瑣烈曼、伊本庫兒達特畢、五代時、馬蘇第、皆言體伯特。自是西人稱西藏爲體伯特。而國人今不知此名、自稱爲博特、語出於印度。洪氏曰「波黎吐蕃、疑卽布隆吉爾、故西人譯波魯也」。卽討掠、且欲居

之。吐蕃收集部衆逐之。散走西域原作城誤。白先居徹兒哥思蠻之地、爲黑鄰赤哈剌者殺之。秋濤案、元史云「至龜兹國。龜兹國主以兵討殺之」。曾植案、白先當作曲先。卽龜兹音轉也。耶律希亮傳作苦先、耶律文正西游錄作苦盞。今書作庫車。通世案、伯哷津云「逃至和闐・喀什噶爾近地、曰苦先古察兒喀思每、爲哈剌赤部主克力赤哈剌獲而殺之」。苦先、卽曲先、非龜兹之轉。明史西域傳云「曲先衞、東接安定、在肅州西南。古西戎、漢西羌、唐吐蕃。元設曲先答林元帥府」。其安定衞距甘州西南一千五百里、廣袤千里。然則曲先西北接和闐、所謂和闐近地。然耶律希亮傳之苦先、似指庫車。西游錄之苦盞、則明云「塔剌思西南四百餘里」。是霍闡城也。古察兒、卽居徹兒。塞哩甫額丁戰勝史云「帖木兒東征第五役、前軍敗喀馬哷丁於布干阿錫嶨勒。帖木兒繼進、追至庫察兒」。蓋喀什噶爾近地。哥思蠻未考、哈剌赤、蓋龜兹之轉。抄兀兒傳、亦有哈剌赤、與之異。伯哷津又云「人謂、此部主又獲其妻子、獻於成吉思而來附」。上旣滅汪可汗、是冬、大獵於帖麥該川。秋濤案、當卽甲子年之帖木垓川。曾植案、祕史作帖蔑延客額兒。通世案、西史地名同祕史。宣布號令、振旅歸龍庭。通世案、龍庭、文飾之辭也、非地名。西史云「歸駐舊居」。此指撒阿里客額兒之地耶、或指忽巴合牙駐冬之地乎。祕史云「自闊獵處回來、從阿卜只合闊帖兒格地面起去、至合勒合河斡兒訥兀地的客勒帖該合荅地行下了」。此斡兒訥兀、非前合兒合水的斡峏訥屼山、合闌眞戰後所過之地。據本書下文、卽西方喀魯哈河濱之地。太祖征乃蠻、乃至其地。見後。祕史謂自獵地歸、直駐其地、誤矣。當從本書。宣布號令、西史作宣布札薩、以令於衆。札薩卽號令也。祕史載太祖料軍馬、立千百戶牌子頭、設六等扯兒必官、選宿衞、散班、護衞、廚子、把門人、管馬人等、定其職制事、是卽所謂札薩也。上春秋四十二。通世案、據此逆推、太祖以宋高宗紹興三十二年、金世宗大定二年、壬午生。蒙古源流所謂「佛涅槃後三千二百九十五年歲次壬午年生」者卽是也。祕史云「帖木眞九歲時、也速該被殺」。則也速該以宋孝宗乾道六年金大定十年庚寅卒。元史太祖紀云「二十二年丁亥崩、壽六十六」、亦與本書合。乃喇施特蒙古史及西域諸書、皆謂「帝生於猪年、崩於猪年、十三歲喪父、壽七十三」、或云「稱成吉思汗、亦在猪年」。則應生於宋紹興二十五年乙亥、喪父在宋乾道三年丁亥、而其稱汗在本紀元年丙寅前三年、宋寧宗嘉泰三年癸亥。其說蓋謬。夫生死及繼父家陞帝位、皆人生之大事也。今太祖四大事、皆在亥年、雖曰偶然、甚可奇也。罕默

兒曰「波斯人深惡成吉思汗、故謂其生死卽位、皆在猪年」。蓋讀罕默特敎徒、以猪爲汚穢、故罕默兒云然。然洪氏有考異、謂「元史等書、未可盡信、而殊方異論、未可盡疑矣」、附見太祖本紀譯證後。

時乃蠻太陽可汗遣使月忽難曾植案、據祕史蒙文、乃蠻所遣之使、名脫兒必塔失、汪古遣於太祖之使、名月忽難。祕史譯文、不出月忽難名。此則誤以汪古使名爲乃蠻使名也。通世案、額兒忒蠻作卓忽難、誤與此同。謀於王孤原作狐、張石州校改。部主阿剌忽思的乞火力原注「今愛不花駙馬丞相白達達是也」。張石州曰「紀作白達達部阿剌忽思、則注中速速字誤也」。秋濤案、此事見元史阿剌兀思剔吉忽里傳。傳云「阿剌兀思剔吉忽里、汪古部人系出沙陀雁門之後。遠祖卜國、世爲部長。時西北有國曰乃蠻、其主曰太陽可汗、遣使來約。阿剌兀思剔吉忽里弗從、乃執其使、奉酒六尊、具以其謀來告太祖」。卽此事也。汪古、卽此王孤、阿剌兀思剔吉忽里、卽此阿剌忽思的乞火力、皆譯語偶異。而注中白達達字、復譌爲白速速。惟邵遠平元史類編太祖女阿剌海別吉公主傳云「適孛要合、汪古部人。父阿剌兀思剔吉忽里、本白達達部主。乃蠻太陽可汗遣使約白達達部、欲同據朔方。阿剌兀思不可」。始與本紀相合。蓋邵所據本、白達達字、固未誤也。又案、蒙古他部無一部而二名者。此王孤、乃部落名。白達達、則其種類名、當卽白韃靼也。阿剌兀思子孛要合。孛要合子君不花、尙定宗女葉里迷失公主。愛不花尙世祖季女月烈公主。此注憂不花駙馬、憂當作愛、字形相近而誤。愛不花史不言其歷官。此云丞相、亦補史闕。通世案、祕史作汪古惕種的主阿剌忽失的吉惕忽里。吉惕、西史作斤。曰「近聞東方有稱王者。日月在天、了然見之。世豈有二王哉。君能益吾右翼、奪其弧矢」。阿剌忽思、卽遣使朶兒必塔失、以是謀先告於上、後擧族來歸。我之與王孤部親好者、由此也。曾植案、閻復高唐忠獻王碑、帶陽使曰卓忽難、汪古使曰禿里必塔思、與此同。又案、朶兒必塔失、卽祕史脫兒必塔失也。又誤以乃蠻使名爲汪古使名、竝當依祕史正。通世案、此條、祕史稍詳。其略曰「塔陽晢碎王罕頭、可克薛兀撒卜剌黑謂「塔陽皇帝柔弱、乃蠻有亡徵」。塔陽曰「東邊有達

達、逐老王罕走死。彼非欲爲皇帝乎。天只有一日月、地豈有兩主耶。我今往取彼達達矣」。其母克兒別速曰「達達民歹氣息、衣服黑暗。執來何用、不如遠之。若有美女、則可執來使沐浴擠牛羊乳耳」。塔陽曰「此何難。我將往奪彼弓箭」。撒卜剌黑歎息、戒勿大言。塔陽不遂聽、遣脫兒必塔失告汪古惕種云云。阿剌忽失的吉惕忽里遣月忽難、告太祖曰「乃蠻塔陽請我爲右手、我不肯從。汝不隄防、恐來奪汝弓箭」。汪古部使來、在太祖歸舊庭前、獵帖蔑延時、故就獵地議伐乃蠻。本書先記歸自獵地、明年又云會於帖木垓川、誤矣。

甲子 原注「宋景定五年、金泰和四年」。張石州曰「當作宋嘉泰四年」。 春、大會於帖木垓川、秋濤案、當卽癸亥年之帖麥該川。通世案 西史前作帖蔑延客額兒、此作帖木該必丁禿勒庫珠特。祕史蒙文帖蔑延客額兒下、有禿勒勤扯兀的地名。較西史、少必丁音。 議伐乃蠻。百官諫曰「今畜牧疾疫。待秋高馬肥、而後可進」。上弟斡赤斤那顏 通世案、卽也速該第四子帖木格斡惕赤斤、史表之鐵木哥斡赤斤。斡原作幹、今改。 曰「毋慮馬瘦、我騎尚壯。今勢已如此、其可緩乎。以吾料敵、必敗之。苟戰勝、他日指此地嘗擒太陽可汗、當圖此名。然勝負在天、必當進矣」。上弟別里古台那顏亦曰「乃蠻欲奪王弧矢。若果爲奪、則身將安之。彼國大馬繁、恣爲誇語。今我卒然入之、國雖大、必逃散於山林。馬雖繁、必遺棄於原野。掩其不虞、奪其弓矢、豈難哉」。衆稱善。望日祭纛、詰朝進兵伐乃蠻。通世案、西史作望日起師。額兒忒曼謂「西域曆六月十五日起師。歐羅巴曆、則在二月十九日」。洪氏曰「中西曆相差、至多四十餘日、至少十餘日、則當爲中曆正月望日」。祕史云「四月十六日、成吉思祭了旗纛、去征乃蠻」。四月既望、蓋蒙古大祭之日也。祕史卷二、帖木眞被泰亦赤兀惕擒時、「正當四月十六日、泰亦赤兀惕每、於斡難河岸上做筵會」。卷三、帖木眞・札木合、同住一年半、「一日自那營盤裏起時、正是四月十六日、一同車前頭行云云」。太祖舉大事、用四月既望、蓋由此也。正月望日之說、恐未足據。 秋、再會哈勒合河建忒垓山、忒孩原作或檀、張石州據翁本改。通世案、伯哷津云「行至乃蠻境外客勒忒該哈荅、濱哈剌河。駐軍多日、而敵不至、不得戰。秋又會將士、議進兵」。哈剌河、卽此哈勒合河。太祖責王汗語中、亦有哈剌河濱、本書作哈兒哈山谷。皆今喀魯哈河也。客勒忒該哈荅、哈荅謂山、卽此建忒該山。祕史之合勒合河斡兒訥兀地的客勒帖該合荅地、亦卽此地、而誤書於出征之前。 先遣麾下虎必來哲別二人爲先鋒。太陽可汗至自案臺、通世案卽阿爾泰山、亦曰阿勒坦。胡語阿勒坦謂金。卽古金山也。其頂在科布多城西北烏普薩池西、爲西北諸山之祖。支峯蔓衍、分爲四枝。其東北繞特思河之北千里、東爲唐努山一枝、又東南接杭愛山之陰。其頂南百餘里向東一枝、爲烏蘭郭馬山、繞奇勒稽思泊之北、又東南爲白勒克那克科克依山、又東接杭愛山之陽。白勒克那克科克依山南麓、今有烏里雅蘇台城。塔陽汗蓋居其近地。 營於杭海山 通世案、祕史作康孩、今作杭愛山、在鄂爾坤河之西。山脈自阿爾泰東北支唐努嶺來、南南趨。其頂爲色楞格河北源所出之山、其尾爲塔米爾河南源、鄂爾坤南源所出之山。 之哈只兒兀孫河、曾植案、卽祕史之合池兒水也。蒙語謂水爲兀孫、今書作烏蘇者是。旣稱兀孫、又稱河、於文重複、與後辛目連河同。 引兵迎敵。我軍至斡兒寒河。寒原作塞。曾植案、塞當作寒。文田案、斡兒寒河、卽今鄂勒昆河。通世案、祕史前作斡兒洹河、斡兒罕河、後作斡兒豁水、今作鄂爾坤河。源出杭愛山尾、東南流、而東、而東北、折西北流、塔米爾河自西南來會、又北流、折東北、土剌河自南來會、又東北、折流、入色楞格河。又案、西史無此句。引兵迎敵、作遣兵爲先鋒。據祕史、蒙古軍似不至鄂爾坤河。渡河者、則塔陽汗、而戰地納忽崖、乃在河東。我軍二字、恐誤衍。或當作先鋒。 太陽可汗、同蔑里乞部長脫脫 秋濤案、祕史作脫黑脫阿。又案、元史巴而朮阿而忒的斤傳、誤以脫脫爲太陽可汗之子。 克烈部長札阿紺孛、阿憐太石、秋濤案、札阿紺孛、卽克烈部汪可汗之弟、前奔乃蠻者。蓋汪可汗亡後、部衆歸之、故稱克烈部

長也。阿隣太石、疑卽前與札阿紺孛同奔乃蠻之納隣太后、蓋人名。彼文阿謁爲納、石謁爲后也。通世案、西史前作納鄰、今作阿鄰、與此同。惟無札罕不。猥剌部長忽都花別吉、秋濤案、忽都花別吉、己見前盃祿可汗來犯我軍條中、又見後戊辰年、云「斡亦剌部長忽都花別吉、遇我前鋒、不戰而降」。斡當作斡。斡亦剌部、卽猥剌部、音同、譯字偶異也。及札木合通世案西史作札只剌部長札木合。本書似以札木合爲部名。本書元史往往有此誤。禿魯班・塔塔兒・哈荅斤・散只兀諸部相合。時我隊中一白馬帶敝鞍、通世案、西史作「以鞍翻墜於腹」俱與祕史異。見後。驚走突乃蠻軍。太陽可汗與衆謀曰「彼軍馬羸、可尾而進。然待馬稍軟、健與之戰也」。通世案、意不全。西史云「蒙古之馬尙瘦。我若退軍、彼必尾追、則馬力益少。我再與戰、可操必勝」。饒將火力速八赤秋濤案、前作火里速八赤。曰「昔君父亦年可汗、秋濤案、前作亦難赤可汗、祕史作亦難察必勒格、乃太陽可汗之父也。勇戰不回。士背馬後、未嘗使人見也。今何怯邪。果懼之、何不令菊兒八速來」。原注「太陽可汗妻也」。秋濤案、祕史作古兒別速、乃太陽之母、非妻也。文田案、錄云太陽妻、祕史云塔陽母。此錄是而祕史非者。塔陽能與太祖逐鹿。其母當亦中壽之人。而祕史云「太祖戰勝塔陽、納之後宮」。則天下多美、何必老婦乎。錄云其妻、此言允矣。太陽可汗因率衆來敵。通世案、祕史不載與乃蠻連兵諸部名。然叙事甚詳。云「成吉思征乃蠻。逆客魯連河、使者別・忽必來爲頭哨、至撒阿里客額兒地、遇乃蠻哨兵在康合兒合山、往來相逐。隊中騎敝鞍白馬者、被乃蠻人獲。皆曰「達達馬瘦」。大軍踵至。朶歹扯兒必曰「我兵寡遠來。宜牧馬於此多設疑兵、布滿撒阿里之野、夜令人各燒火五處、彼兵雖衆、其主軟弱、必驚疑矣。如此則我馬已飽、然後追彼哨兵、直抵大營、擊其不備、必勝矣」。成吉思從之。乃蠻哨兵驚曰「聞達達兵寡。如何燒火如星」。以報塔陽。塔陽方在康孩之地合池兒水邊、使告其子古出魯克曰「達達燒火如星、其兵必衆。人常言「達達剌眼不轉睛、剌腮不躲避」。今若與彼構兵、後必難解。聞達達馬瘦。我率衆而退、誘彼至金山、則彼馬力益乏。然後還與之戰、可以勝乎」。古出魯克聞之、罵其父、比之婦人。豁里速別赤歎曰「汝父亦難赤必勒格臨敵、士背馬後、未嘗使人見也。今汝何怯邪。早知汝如此、則汝母古兒別速、雖婦人、足以管軍矣。可惜可克薛兀撒卜剌黑老子、我軍法度頽慢。此非達達得天運乎」。跨馬叩箭筒而去。塔陽聞之、怒而奮進、遂順塔米兒河、渡斡兒豁水、至納忽山崖東察乞兒馬兀惕之地」。云「逆客魯連河」、恐誤。似可云順土兀剌河。撒阿里客額兒、非龍庭之地。漠北多名撒阿里處。此撒阿里之野、當在喀魯哈河之西。康合兒合山、亦似因河名得名。塔米兒河、今作塔米爾河。源出枯庫嶺東麓、東流、瀦爲台魯勒倭黑池、又東北流、入鄂爾坤河。塔陽渡鄂爾坤河、戰于納忽山。納忽山、亦當在鄂爾坤・喀魯哈兩河之間、庫庫赤老圖山以南連山中。上以弟哈撒兒主軍、躬自指揮行陣。通世案、祕史云「成吉思整軍排陳、自爲頭哨、令弟合撒兒主中軍、斡赤斤管從馬」。時札木合從太陽可汗、望見上軍容嚴整、因謂左右曰「汝等見案荅舉止英異乎。乃蠻語嘗有言「雖駁革去皮、猶貪不捨」。豈能當之」。通世案、語頗蹇拙。祕史云「您曾說「若見達達時、如小羖攊羔兒、蹄皮也不留」。儞如今試看」。洪氏譯伯哷津書云「乃蠻向來臨敵、謂「如宰小牛羊、自足至項、併皮韋亦不在留」。今試視能否」。辭明暢。元史亦云「乃蠻初擧兵、視蒙古軍、若羖攊羔兒。意謂、蹄皮亦不留」。語甚似祕史。編者或見祕史邪。抑祕史譯者却用元史字邪。遂提本部兵走。通世案、祕史此條、叙塔陽・札木合問荅。如讀傳奇小說。札木合雖與太祖爲敵、心固服太祖之英武、對塔陽誇達達勇猛無敵。其情略似我齊藤實盛在平氏軍中、誇坂東武士之勇。札木合既荅塔陽、遂遣使以其語告太祖、曰「塔陽聞之、驚懼昬眩、遽退上山、咸無戰志。我已棄彼去矣。安荅勗哉」。末一節生出札木合被擒後許多問荅。史錄都省此等語、可惜。是日、上與之大戰至晡、擒殺太陽可汗。乃蠻衆潰、夜走絕險、墜納忽崖者、不可勝計。明日、餘衆悉降。通世案、祕史云「太祖見日色晚、圍納忽山宿了。其夜乃蠻欲遯云云。明日、拏住塔陽。其子古出魯克、因不在一處、得脫身、領些人每走出、見軍追及、就依塔米兒河要劄營不定、又走了。襲至阿勒台山前、勢愈窮促、遂將他百姓盡收捕了」。西史又叙太陽重傷不起、火力速八赤等勵之、不應。諸將遂皆下山力戰而死、成吉思奬其勇等事。此亦祕史本書所均不載也。於是禿魯班・塔塔兒・哈荅斤・散只兀諸部亦

來降、通世案、祕史作「與札木合一同有的達達、札荅闌・合塔斤等種、也都來投降了」。札荅闌字不可少。

冬再征脫脫、通世案、祕史云「秋、太祖與蔑兒乞脫黑脫阿、戰於合剌荅勒忽札兀剌之地敗之、追至撒阿里客額兒之地、虜其衆。脫黑脫阿同二子忽都赤剌溫、領從者數人走去」。至迭兒惡河源不剌納矮胡之地。通世案、伯哷津作塔兒河。兀花思蔑兒乞部長帶兒兀孫、兒兀原倒置。秋濤案、祕史作豁阿思蔑兒乞種的人荅亦兒兀孫。據此、應作帶兒兀孫。曾植案、此三種蔑兒乞之一、卽祕史卷三之兀洼思歹亦兒兀孫也。通世案、下文作帶兒兀孫、因乙兀兒。獻女忽蘭哈敦於上、秋濤案、忽蘭、祕史作忽闌。哈敦原作哈勅、秋濤校改。率衆來降。爲彼力弱、散置諸翼中、室壩之。秋濤案、此句未詳、疑有脫文。據祕史、獻女之荅亦兒兀孫、未嘗復叛。叛者、乃蔑里乞之他部也。與之迴異。通世案、西史云「帶兒兀孫謂『部衆無馬、不能從征』。成吉思令散其衆於輜重後營、每營百人以分其勢」。其人頗不安、復同叛、畚復輜重。秋濤案、畚字、字書所無、疑有缺誤。曾植案、此畚字當是略字。我兵與戰復奪之。通世案、祕史云「先投降的蔑兒乞在老營內反了、被在營內家人戰勝。成吉思說『教他在一處、他又反』。就教各人盡數分了」。據本書西史、則先分而後反也、據祕史則先反而後分也。不知孰是。上進兵圍蔑兒乞於泰安寨、寨原作塞。秋濤案、元史本紀、作泰寒寨。通世案、祕史蒙文作台合勒豁兒合、譯文作台合勒山寨、西史作台合勒忽兒罕。塞當作寨。盡降麥古丹・脫里孛斤・蔑兒乞諸部而還。通世案、伯哷津作「盡取麥端・脫塔哈林・哈俺諸衆、皆蔑兒乞部人」。洪氏曰「麥端卽麥古丹、脫塔哈林當卽脫里孛斤之訛。哈俺無考。多遜作支恒。案元史牙忽都傳、娶察渾滅里乞氏。察渾支恒音近、或卽此族」。部長脫脫挾其下闕一字。通世案、西史有子字、當補。奔盃祿可汗盃原作盈、秋濤校改。案、本紀「已而復征蔑兒乞部。其長脫脫奔太陽罕之兄卜魯欲罕」。卜魯欲罕、卽盃祿可汗也。帶兒兀孫既叛、率餘衆至薛良葛河祕史有薛涼格河、卽此。秋濤案、當卽今之色楞格河。洽剌溫隘通世案、伯哷津作色楞格河濱呼魯哈卜察。洪氏曰「卽錄之洽剌溫。哈卜察、義謂隘也。呼魯與洽剌音異、疑洽爲哈之訛」。案此哈剌溫隘、與土兀剌河濱之黑林異。築室以居。通世案、據西史、室當作寨。上遣孛羅歡那顏及赤老溫拔都弟闊拜二人、都原作相、秋濤校改。案、闊拜、祕史作沈白、又作沈伯。通世案、孛羅歡那顏、卽前博羅渾那顏。西史作孛兒忽勒諸顏。祕史不載。領右軍、討平之。通世案、據祕史、則沈白領右手軍攻破者、台合勒寨、而無帶兒兀孫據哈剌溫隘之事。與本書稍異。又云「成吉思自去追襲脫黑脫阿、到金山、住過冬。明年春、踰阿來嶺去」。此事、本書不載。又云「適乃蠻古出魯克與脫黑脫阿相合了、於額兒的失不黑都兒麻地面根源行、整治軍馬」。是本書丙寅年事也。又云「成吉思至其地、與他廝殺。脫黑脫阿中亂箭死了云云」。是本書戊辰年事也。祕史之文、似終言後事矣。

校正增注元親征錄

乙丑、秋濤案、宋開禧元年、金泰和五年。通世案、祕史、牛兒年、太祖造一鐵車賜速別額台、命窮追脫黑脫阿子忽都等、期必勦誅之、且誡勅行軍之道。考東西諸史、此事在太祖十二年丁丑歲。蓋蒙古用年支、不用年干、故紀年易誤、遂以丁丑爲乙丑也。次敍札木合被執、從容就死事、詳載太祖札木合問答。蓋二人幼爲親友、長爲仇敵。雖數相見於干戈之間、然互稱安荅、終身不渝。不似張耳陳餘、怨隙一開、變爲路人。而札木合自知其罪、重恥安命、亦有足多者。如太祖誅札木合叛奴、則與前褒納牙阿、刑賞兩中、誠協君道、可比漢高赦季布、而誅丁公。至太祖所以遇札木合、則寬仁大度、由義遵禮、最愈漢高待田橫。是等美談、史錄不載、可惜。征西夏、攻破力吉里寨・經落思城、通世案、伯哷津作乞鄰古撒城、音不近。然經卽乞鄰之合音。舊讀以爲虛字、恐誤。據西史、二城皆攻而下之、不可言經。大掠人民、多獲橐駝以還。曾植案、力吉里寨、當作也吉里寨。卽曷思麥里傳之也吉里海牙、河源附錄之應吉里州也。力是也之壞字。此時克而未守、丙戌再

取之。

丙寅、秋濤案、是年爲元太祖稱帝之元年。今逐年甲子下增注之、以便稽攷。時宋寧宗開禧二年。本紀云「是歲、實金泰和之六年也」。大會諸王百官於斡難河之源、建九斿之白旗、通世案、祕史作九腳白旄纛。蓋纛竿九腳、各繫一白旄、非九斿、亦非白旗也。蒙古源流有九烏爾魯克之稱、謂親軍九隊之帥也。西人據源流蒙文、舉九帥之名、曰博郭爾濟、博羅郭勒、托爾干沙剌、摩和賚、者別、蘇伯格特依、濟勒墨、錫吉呼圖克、哈剌乞拉果。霍渥兒特因謂「建一大纛、以九白旄重繫之、以表九烏爾魯克」。考九烏爾魯克之稱、他書無所見。然白旄之必用九、當有其由、而他無解義。故姑附記、以備參考。共上尊號曰成吉思皇帝。通世案、祕史、阿勒壇•忽察兒•撒察別乞等相議、立太祖爲皇帝、號成吉思、在十三翼戰之前。至是又云「成吉思既將衆部落百姓收捕了。虎兒年、於斡難河源頭、建九腳白旄纛、做皇帝」。說者疑其再即位。然創業開國之君、再舉騰極之典、古今屢見其例。晉末羣雄、多初稱天王後稱皇帝者。後魏道武帝初稱魏王、建元登國、後稱皇帝。遼太祖初嗣契丹可汗之位、後稱天皇王、建元神冊。淸太祖稱滿洲國可汗、建元天命。太宗繼之、改元天聰、後稱大淸皇帝、改元崇德。是皆初爲小國之主、後爲大國之主也。錢竹亭曰「紀但云「丙寅歲、羣臣上尊號、曰成吉思皇帝」、不知成吉思之號、蓋已久矣。先稱合罕者、一部之主。後稱皇帝、乃爲群部之主。豈可略稱罕一節而不書乎」。此說得之。又案、蒙古源流云「戊戌年、特穆津年十七歲、布爾德哈屯甫十三歲、遂爾匹配。特穆津年至二十八、歲次己酉、于克魯倫河北郊即汗位、稱索多博克達靑吉斯汗」。據此、則太祖以金世宗大定十八年娶元妃、以大定廿九年即汗位。是時太祖居客魯漣河源不見吉崖、故云即位于克魯倫河北郊。非謂斡難河源之大會也。源流叙事、固多荒誕、紀年亦概不足據。然此二事則無所乖忤、足以補祕史之闕矣。洪氏乃謂「源流固爲囈語、祕史亦屬妄談」、非篤論也。其後「歲次戊辰、年四十七歲、以九烏爾魯克以下、俱爲國效力、著有勳勞、編次美號顯爵重賞厚祿、以施行賞」、則祕史九十五功臣受賞之事、而其年則差二年。至己酉以來二十年間事蹟、則皆與祕史史錄多不合。又案、志費尼之書云「嘗遇蒙古人知掌故者、告我「昔時有闊闊出、其人似有前知。冬令極寒時、裸體而行、大呼於途、謂「開天語、將畀帖木眞以天下」」。

喇施特云「蒙力克額赤格之子闊闊出、好言休咎、形如狂。衆稱之曰帖卜騰格理。揚言於衆、曰「今已勝許多古兒汗。古兒汗名卑不足稱。皇天賜以成吉思汗之號」。衆從之。成爲堅强之義、吉思爲衆數。世或訛傳「平王汗後、即稱成吉思汗」。然蒙古國史、實載於平乃蠻後虎年即位時也」。源流云「前三日每朝、室前方石上、有五色鳥、鳴云靑吉斯靑吉斯。遂叶其祥、號稱索多博克達靑吉斯汗。其石忽然開裂、內有一玉寶印、方廣俱五寸許。背爲龜鈕盤龍條、鐫有篆字云云」。考成吉思之號、亦不過猶稱古兒汗而已、非有深義。太祖僅襲蒙古合罕之位、已用其號。至丙寅之大會、則所重不在名號、而在論功行賞、制定法度也。祕史謂「太祖命孛斡兒出•木合黎•納牙爲右手左手中軍萬戶、功臣九十五人、皆爲千戶、增設宿衛護衛將士、定揀選給養之法、明其職掌、嚴其賞罰」。其奬慰誡飭羣臣、尤極親切篤摯。是在蒙古史中、可比典謨者、而元之基業、於是始定矣。後來定此年爲太祖紀元者、蓋以此也。今史錄失載此建國之大事、而唯記尊號一節。疎漏之甚。復發兵征乃蠻。盃祿可汗飛獵於兀魯塔山莎合水上、擒之。張石州曰「紀作「帝既即位、復征乃蠻。時卜魯欲罕獵於兀魯塔山、擒之」。蓋卜魯欲罕、即盃祿可汗、而「水上擒之」一語、又此書之加詳也」。通世案、伯哷津作「卜欲魯克獵飛鳥於兀魯黑塔克山下莎酌河上。兵至殺之」。洪氏曰「飛獵二字、得此始解」。祕史卷六、有兀魯黑塔黑地面澮豁黑水、見前征盃祿可汗條注、即此兀魯塔山莎合水也。霍渥兒特曰「兀魯黑塔克、猶言大山、謂阿爾泰山也」。又案、祕史不載不亦魯黑被擒之事。乞溼渤巴失戰後、不亦魯黑之名不復見。志費尼述古出魯克•托克塔西走之事、亦不言奔卜欲魯克汗。是時太陽可汗子屈出律可汗、秋濤案、後俱作曲出律、本紀作屈出律罕。與脫脫遁走、奔也兒的石河。秋濤案、祕史作額兒的失河。通世案、祕史云「成吉思自去追襲脫黑脫阿、到金山、住過冬、明年春、踰阿來嶺去。適乃蠻古出魯克與脫黑脫河相合了、於額兒的失不黑都兒麻地面根源行、整治軍馬。明年謂前年乙丑歲也。洪氏曰「也兒的石河、即額爾齊斯河。案額爾齊斯上游、有華額爾齊斯、喀剌額爾齊斯。華言黃、喀剌言黑。黃黑二水合流、則爲額爾齊斯河。光緒九年、中俄科布多界約、有黑伊爾特什河、即喀剌額爾齊斯河。伊爾特什與也兒的石音合。據此以觀、則額爾齊斯河、亦必稱爲也兒的石。今西國圖、即作伊爾帖石。

丁卯 二年、宋開禧三年、金泰和七年。夏、頓。此下有脫字、秋濤校補「兵避暑」三字。通世案、何氏蓋依壬戌夏之例也。秋、再征西夏。冬、克斡羅孩城。斡原作幹。通世據元史改。西史云「兔年秋、以合申不納貢、不奉約束、再征之、攻下各城」。合申卽河西之轉、謂西夏也。先 通世案、元史作是歲、西史作是役之先。遣案彈不兀剌二人 曾植案、不兀剌、祕史作不合、卽九十五功臣中之不合駙馬也。通世案、伯哷津作阿勒壇布喇二人。布喇奉使、與不合引路異。不合、本書作不花、見戊寅大太子北征條。使乞力吉思部。其長斡羅思亦難及阿忒里剌二人、偕我使來、獻白海青名鷹也。秋濤案、本紀云「是歲、遣案彈不兀剌二人使乞力吉思。既而野牒亦納里部、阿里替也兒部、皆遣使來獻名鷹」。是獻鷹者、他部之人、非乞力吉思部長也。二說互異、未詳孰是。曾植案、本紀野牒亦納里•卽祕史萬乞兒吉思種之官人也迪亦納勒也。此之亦難、蓋卽其人。阿忒里剌、疑當作阿里忒剌、卽阿里替也兒、皆人名、非部名。又案、祕史蒙文、禿綿乞兒吉速那顏歸附者凡四人、曰也迪、曰亦納勒、曰阿勒迪額兒、曰斡列別克的斤。也迪、卽本紀野牒、亦納勒、卽本紀亦納里、此之亦難。阿勒迪額兒、卽本紀阿里替也兒、此阿里忒剌也。忒里二字應乙無疑。通世案、祕史云「兔兒年、成吉思命拙赤、領右手軍、去征槐因亦而堅、令不合引路。斡亦剌種的忽都合別乞比土綿斡亦剌、先來歸附、就引拙赤去征土綿斡亦剌、入至失黑失惕地面。斡亦剌•不里牙特•巴兒渾•兀兒速特•哈卜哈納思•康哈思諸種、都投降了。至土綿乞兒吉速勒種處。其那顏也迪亦納勒•阿勒迪額兒•斡列別克的斤等、也歸降了、將白海青白騸馬黑貂鼠、來拜見拙赤。失必兒•客思的音•巴亦特禿哈思•田列克•脫額列思•塔思巴只吉等槐因亦而堅、拙赤都收捕了。遂領著乞兒吉思萬戶千戶、幷槐因亦而堅的那顏、將著海青騸馬貂鼠等物、同來拜見成吉思。成吉思以斡亦剌種的忽禿哈別乞先來歸附、將扯扯亦堅名的女子、與了他的子亦納勒赤、將拙赤的女豁兒哈與了亦納勒赤的兄」。槐因亦而堅、譯作林木中百姓。蒙古語、槐因謂林、亦而堅又作亦而干亦而根、皆謂百姓。土綿、萬也、謂其衆盛。乞兒吉速勒、卽乞兒吉思、又卽本書乞力吉思。多遜曰「此部居地甚廣、在安噶剌河之西、阿爾泰山之北偏東、乃蠻在其東南、肯河•肯肯叻克、在其境內。俗雖游牧、亦有城郭」。

也迪亦納勒、阿勒迪額兒、皆人名。本紀誤爲部名。多遜引喇施特云「乞兒吉思人、稱其酋長曰伊納勒」。卽祕史之亦納勒、本書之亦難。又云「乞兒吉思分數部。一部名哲寧俺別提。其酋長名、則原書字跡、模糊不辨。一部名別提烏倫、或作別提阿福隆。其酋長名烏洛斯伊納勒」。別提烏倫、伯哷津作也迪鄂倫。烏洛斯伊納勒、卽本書之斡羅思亦難。然則祕史所謂也迪亦納勒、卽也迪部酋長、而烏洛斯其名也。西史人名不辨者、蓋祕史之阿勒迪額兒也。伯哷津云「二部酋盛禮欵接、遣二使臣阿里克帖木兒•阿特黑剌黑偕來獻獵鳥色白」。阿里克帖木兒、額兒忒曼作阿里伯克帖木兒、卽祕史之斡列伯克的斤。據一使名阿特黑剌黑、則本書阿忒里剌、里當作黑。祕史有委吾種使臣阿惕乞剌黑。此誤以委吾使爲乞兒吉思使。此役、是朮赤北征、先降斡亦剌諸部、遂定乞兒吉思及林木中諸族。與太祖西征脫黑脫阿之役、全不相關。本書乃以忽都合歸降之事、書於戊辰再征脫脫條下、誤也。洪氏曰「本紀、斡亦剌之降在三年、而乞力吉思之附在二年。考之西圖、應從祕史、先定斡亦剌、由東而西、軍程乃合」。

戊辰 三年、宋嘉定元年、金泰和八年。春班師至自西夏。夏 原闕此字、秋濤依本紀補。避暑於龍庭。鳳鑣案、耶律鑄雙溪集凱樂歌詞、有下龍庭詩、注曰「東漢書燕然銘『淩高闕、下雞鹿、經磧鹵、絕大漠、踰涿邪、跨安侯、乘燕然』、至龍庭」。以前後諸傳事迹攷之、又以出塞三千餘里校之、龍庭和林西北地也」。文田案、元史太祖本紀、三年夏、避暑龍庭。是時王罕乃蠻俱滅、故可至和林西北也。則避暑蓋在太陽罕故宮。通世案、西史云「龍年自合申班師、歸舊居避暑」。洪氏曰「可見龍庭並非地名、爲譯者文飾之詞」。

冬、再征脫脫及曲出律可汗。時斡亦剌部長忽都花別吉等、斡原作幹。秋濤案、斡當作斡。通世依元史改。遇我前鋒、不戰而降。曾植案、祕史征禿綿乞兒吉思、忽都合別乞兒引路、則此先降乞力吉思、後降忽都花、蓋誤。通世案、忽都花降於北征之師。與此西征之役、本不相關、見前注。因用爲鄉導、至也兒的石河、盡討蔑里乞部。脫脫中流矢而死。曲出律可汗、僅以數人

脫走、奔契丹主菊而可汗。秋濤案、此所謂契丹、卽西遼也。亦稱西契丹。曾植案、遼史天祚本紀、大石卽位、稱葛兒汗。葛兒、卽菊而、亦作古兒局兒。其子孫蓋世稱之。史布魯海牙傳、又稱居里可汗。通世案、祕史云「成吉思至額兒的失不黑都兒麻地、與脫黑脫阿中亂箭死了。其尸不能將去、其子只割將他頭去。人馬敗走、渡額兒的失水、溺死者過半。餘亦皆散亡。於是乃蠻古出魯克過委兀•合兒魯種去、至回回地面垂河行、與合剌乞塔種的人古兒罕相合了」。垂河、卽古碎葉河、西遼都城虎思斡耳朶所在也。俄圖云珠河、淸圖云吹河。多遜譯志費尼書云「一二〇八年、乃蠻大陽汗之子古出魯克、與蔑兒乞特汗托克塔合、聚銳兵於伊兒的失河上。成吉思軍擊敗于哲姆河邊、獲托克塔。古出魯克遁去、奔別失八里克、奔庫札、一二〇八年、遂達于喀剌乞解古兒汗之境」。西曆一二〇八年、卽此戊辰年也。古出魯克與托克塔合、祕史在乙丑年、本書在丙寅年。志費尼以爲一二〇八年、疑係數字之誤。哲姆河、卽下文嶄河也。志費尼以也兒的失之役與嶄河之戰、誤混爲一。唯古出魯克達于西遼之年、則與本書合。祕史繫之於乙丑年、蓋終言之也。別失八里克、畏吾兒都城、卽今新疆迪化府屬之濟木薩也。庫札、多遜曰「卽今庫車」。然伯哷津作庫爾車。洪氏曰「此殆非今之•庫車、當是伊犁屬城、華文曰固爾札」。祕史云「過委兀合兒魯種」。委兀卽畏吾兒、固爾札、蓋合兒魯部之境、則洪氏說可從。又案、長春眞人西遊記、鎭海述白骨甸、曰「古之戰場。凡疲兵至此、十無一還。死地也。頃者乃滿大勢、亦敗于是」。考記之行程、白骨甸在不爾干河之前。蓋古出魯克等敗於伊兒的失河上、南欲奔畏兀兒、至白骨甸、爲蒙古所追剿、兵復多殪也。

己巳 四年、宋嘉定二年、金衞紹王大安元年。春、畏吾兒國主亦都護 秋濤案、亦都護、乃國主之稱、非人名也。其人名則爲巴而朮阿而忒的斤。元史有傳。所載事迹、不及此書之詳。通世案、祕史作委吾種的主亦都兀惕。西史作伊第庫特、義爲福主。聞上威名、遂殺契丹主所置監國少監 秋濤案、此西遼所置官。通世案、一本作沙監。伯哷津作「哈剌乞解所遣監國大臣曰沙均」。洪氏曰「卽錄之沙監」。岳璘帖穆爾傳云「其兄仳理伽普華年十六襲國相。時西契丹方強、威制畏兀、命太師僧少監來臨其國、驕恣用權、奢淫自奉。畏兀王患之謀於

仳理伽普華曰「計將安出」。對曰「能殺少監、挈吾衆、歸大蒙古國、彼必震駭矣」。遂率衆圍少監斬之」。欲求議和。上先遣案力也奴奴•答拜二人使其國。曾植案、案力也卽祕史阿惕乞剌黑、奴奴荅拜、卽祕史蒙文之荅兒伯也。祕史稱亦都護使臣、不言太祖所使。通世案、伯哷津作阿勒潑魚土克、迭兒拜。據下文作安魯不安也女•答兒斑、則似力當作不、答下脫兒字。亦都護大喜、待我禮甚厚。卽遣其官別吉思•阿鄰帖木兒二人、曾植案、卽哈剌亦哈赤北魯傳之阿憐帖木兒都督。通世案、伯哷津作博古思阿世阿忽赤•阿闌帖木兒。洪氏曰「上一人名、錄未全。別吉思似古字之誤」。案知服齋本、吉作古。祕史作阿惕乞剌黑荅兒伯。本書西史、並以上一人爲乞兒吉思使、下一人爲太祖使。多遜作喀塔勒迷施喀塔•鄂穆兒烏古勒•塔塔哩三人。入奏曰「臣國聞皇帝威名、故棄契丹舊好、方將遣使來通誠意、躬自效順、豈料遠辱天使、降臨下國。譬雲開見日、冰泮得水。喜不勝矣。而今而後、盡率部衆、爲僕爲子、竭犬馬之勞也」通世案、西史語意同之。祕史云「俺聽得皇帝的聲名、如雲淨見日、冰消見水一般、好生喜歡了。若得恩賜呵、願做第五子、出氣力者」。布哷特淑乃德兒曰「西史之文、似依元朝祕史遂字譯出。若此類甚多。可以證祕史與喇施特史所本者同」。蓋本書西史皆本於脫必赤顏、而脫必赤顏多以祕史原本爲底本也。當是時蔑里乞脫脫中流矢死。脫脫之子四人、以不能歸全屍、遂取其頭、涉也兒的石河、「脫脫之子四人以」七子原闕、秋濤據元史補。曾植案、史巴而朮傳「脫脫之子火都•赤剌溫•馬札兒•禿薛干四人、以不能歸全屍、取其頭、涉也兒的石河」。攷異云「焉 爲馬」。通世案、元史類編、引親征記、有脫脫四子名、與巴而朮傳同。洪氏譯伯哷津書、作忽都•赤剌溫•赤攸克•呼圖罕蔑兒根、曰「忽都謂是托克塔弟、則西域史之臆說」。然布哷特淑乃德兒、引伯哷津書、列托克塔六子、曰忽都、赤剌溫、禿撒、呼勒圖罕蔑兒根、禿球思、赤攸克。禿球思、卽祕史脫古思別乞、爲王汗所殺者。伯哷津前文、爲托克塔長子。禿撒、額兒忒曼作禿薛、卽禿薛干。祕史卷九、有忽都合之名。洪氏曰「似卽呼圖罕而非忽都。無從考異、祗可存疑」。馬札兒與赤攸克、音大

異、不知其人同異。將奔畏吾兒國。將原作特、秋濤據元史改。脫脫先遣別干者通世案、伯哷津作哀不干。先遣使之上、無脫脫之名。則發使者、脫脫四子、而非脫脫也。使亦都護。亦都護殺之。四人至、與畏吾兒大戰於嶄河。秋濤案、元史巴而朮阿而忒的斤傳、襜河、一作蟾河。又案、元本此下衍殺字、今刪。通世案、作蟾河者、速不台傳也。西史作哲姆河。今昌吉河也。昌吉城、元時稱彰八里、又作昌八里。八里城也。城臨昌河、故名。巴而朮阿而忒的斤傳云「帝征大陽罕、射其子脫脫殺之。脫脫之子四人、以不能歸全屍、遂取其頭、涉也兒的失河、將奔亦都護、先遣使往。亦都護殺之。四人者至。與大戰於襜河。亦都護遣其國相來報」。以脫脫爲大陽之子、偶與曲出律相混也。餘皆與本書合。蓋本於本書也。據此、則脫脫死於也兒的失河上、四子大戰於嶄河、而與四子戰者、則畏吾兒人、非蒙古人也。伯哷津所譯、亦同本書。案本書西史、太祖十二年丁丑、再有嶄河之戰、與此役異。此役、四子與畏吾兒戰、本書及巴而朮傳、皆不言其勝敗。伯哷津云「戰於哲姆河、逐其衆」、則是四子敗走也。丁丑之役、則速不台戰於嶄河、勦滅蔑兒乞。速不台傳所載、是也。似與此嶄河異地。見後。亦都護先遣其官阿思蘭・乾乞・孛羅的斤・亦難海牙倉赤四人、通世案、伯哷津作阿兒思蘭兀喀・察魯忽兀喀・孛拉的斤・亦納兒乞牙松赤。來告蔑力乞事。通世案、西史此間、有「既而二使偕成吉思使亦至」句。洪氏曰「錄云先遣四人來告。以西域史語意合之、似四使行在先、二使行在後也」。上曰「亦都護果誠心戮力於我、以其已有來獻」。通世案、此句疑有誤脫。西史無此句、而下文作「復遣二使往徵貢獻」。尋遣安魯不也女・答兒班二人、通世案、安魯不也女、即前案力也奴奴、西史阿勒潑魚土克。答兒班、即前答拜、西史迭兒拜。班蓋拜之譌。復使其國。亦都護遣使奉珍寶方物爲貢。

庚午五年、宋嘉定三年、金大安二年。夏、上避暑龍庭。張石州據翁本改避爲遣。秋濤案、仍當作避。通世案、西史作「馬年夏、復遣使於畏兀兒、時帝在軍中」。與本書徵異。秋、復征西夏、入孛王廟。其主失都兒忽出降、都原作相。通世案、相當作都。夏襄宗李安全、國語名失都兒忽、見陳桱通鑑續編。獻女爲好。秋濤案、本紀載「四年己巳春、畏吾兒國來歸。帝入河西。夏主李安全、遣其世子率師來戰。敗之、獲其副元帥高令公。克兀刺海城、俘其太傅西璧氏。進至克夷門、復敗夏師、獲其將嵬名令公。薄中興府、引河水灌之。堤決、水外潰。遂徹圍還、遣太傅訛荅入中興、招諭夏主。夏主納女請和」。凡此諸事、皆載於己巳年、而此書載於庚午年。未詳孰是。又本紀載「五年庚午春、金謀來伐、築烏沙堡。帝命遮別襲殺其衆、遂略地而東。初帝貢歲幣於金。金主使衞王允濟受貢於靜州。帝見允濟不爲禮。會金主殂、允濟嗣位、有詔至國、傳言「當拜受命」。問「新君爲誰」。金使曰「衞王也」。帝遽南面唾曰「我謂中原皇帝、是天上人做。此等庸懦亦爲之邪。何以拜爲」。即乘馬北去。金使還言。允濟益怒、欲俟帝再入貢就進場害之。帝知之、遂與金絕、益嚴兵爲備」。案以上、本紀於庚午年、詳紀太祖與金人開釁之事。而親征記及祕史皆不載、殊不可解。攷耶律楚材湛然居士集、有進庚午元厤表、略云「歲在庚午、天啓宸衷、決志南伐。辛未之春、天兵南渡、不五年、而天下略定。此天授也、非人力所能及也云云」。是太祖之有意伐金、實始於庚午年。親征記未載、亦疏漏也。通世案、本紀兀刺海城、西史作兀刺孩城、即丁卯年所克斡羅孩城。孛王廟、蓋在其城中。丁卯克而不守、至是復入之也。又案、兩朝綱目備要云「允濟遣衆分屯山後、欲襲殺鐵木眞、然後引兵深入。會金之乣軍、有詣蒙告其事者。蒙古遣人伺之得實、遂遷延不進」。此即元史「金謀來伐」之事也。金史衞紹王紀云「大安二年九月丙午、京師戒嚴、上日出巡撫。百官請視朝、不允。是歲禁百姓、不得傳說邊事」。續綱目云「金納哈買住守北鄙、知蒙古將侵邊、奔告于金主云云。金主以其擅生邊隙囚之」。又云「蒙古數侵掠金西北之境、其勢漸盛。金人皇皇、遂禁百姓傳說邊事」。畢氏通鑑云「金承平日久、驟聞蒙古用兵、人情恇懼、流言四起。九月丙午、中都戒嚴云云。既而知蒙古未嘗大舉、始解嚴、旋禁百姓不得傳說邊事。參考諸書、蒙古之南伐、實始於庚午年。但烏沙堡之役、金史獨吉思忠・完顏承裕傳、皆以爲辛未年事、與本書合。元史重叙於庚午辛未兩年、恐非。

辛未六年、宋嘉定四年、金大安三年。春、上居怯綠連河。時西域哈剌魯部主阿昔蘭可汗來歸、因忽必

來那顏見上。忽必來原闕來字。秋濤案、必下脫來字。祕史云「太祖命忽必來征合兒兀惕種。其主阿兒思闌即投降了、來拜見太祖。太祖以女子賜他」。即此事也。合兒魯兀惕、即哈剌魯。阿兒思闌、本紀作阿昔蘭罕、即此阿昔蘭可汗。忽必來、亦太祖所任驍將。曾植案、公主、適阿兒思蘭子也先不花駙馬。通世案、哈剌魯、即唐書葛邏祿、元史地理志作柯耳魯。經世大典圖、其地在阿力麻里西北。多遜譯志費尼書云「突兒克喀兒魯克之酋喀押立克之君阿兒思闌汗、與阿勒廝里克之君鄂匝兒、舊屬喀剌乞䚟之古兒汗。一二一一年、來降成吉思。成吉思以宗女妻阿兒思闌」。喀押立克、元史憲宗紀作海押立。大佐褡勒曰「故地近今闊怕勒地」。柯耳魯哈押立、並詳元史譯文證補。沈氏以爲合剌魯、即阿兒廝蘭回鶻、其說誤。遼史阿薩蘭回鶻、即宋史西州回鶻、國號高昌。後又遷龜茲、或稱龜茲回鶻。後又遷別失八里、元人謂之畏吾兒、又作委兀兒。回鶻別部、有建國碎葉河濱者、回回敎人謂之東突兒克。宋初、國勢甚盛。其王往往亦稱阿兒斯闌汗。後爲西遼所逐、遷於河間之地、元太祖八年、爲貨勒自彌所滅。此二國皆有阿兒斯闌汗。然皆是回鶻、與海押立之柯耳魯種不同、不可牽混。亦都護兒秋濤案、即前亦都護也。「以太祖命爲第五子、故稱爲亦都護兒、猶石晉之稱兒皇帝矣。亦來朝、奏曰「陛下若恩賜臣、使遠者悉聞、近者悉見、輟衮衣之餘縷、摘金帶之星裝、誠願在陛下四子之亞、竭其力也」。上說其言、使尚公主、仍序弟五。秋濤案、此語未晰。攷祕史云「委吾種的主亦都兀惕、差使臣阿惕乞剌黑等、來成吉思處、說「俺聽得皇帝的聲名、如雲淨見日、冰消見水一般、好生喜歡了。若得恩賜、我願做第五子、出氣力者」。成吉思說「儞來、女子也與儞、第五子也敎儞做」。於是亦都兀惕、將金銀珠子緞疋等物、來拜見成吉思。遂將阿勒阿勒屯名的女子與了」。所載較詳、故備錄以資攷證。通世案、衮衣、國君之服。洪氏譯伯哷津書云「帝若賜我得在僕役之列、使遠近皆知我依托陛下襟帶之間」。注云「語意甚難譯」。蓋伯哷津譯文或有誤解也。遣將脫忽察兒率騎二千原作二十。秋濤校改三千。通世案、何氏依下文「脫忽察兒三千騎」語、改爲三千。然西史云二千人。本書十字、明是千之譌。二字不必改。出哨西邊戎秋濤案、此即後所云征西前鋒脫忽察兒也。在丁丑年。通世案、西史云「是年春、下令伐金、先令脫嚕察兒率二千人防後路」。原注「所謂後路、蓋防客剌亦・乃蠻等降衆、乘大軍出而謀變也」。案二部皆在蒙古西、故此云西邊戎。

秋、上始誓衆南征、秋濤案、本紀「二月、帝自將南伐、敗金將定薛於野狐嶺、取大水濼・豐利等縣。金復築烏沙堡。七月、命遮別攻烏沙堡及烏月營拔之」。是太祖誓衆南征、在春而非秋。與親征記異。湛然居士集亦云「辛未之春、天兵南渡」。當以紀爲正。克大水濼、又拔烏沙堡及昌桓撫等州通世案、水濱提綱、蘇尼特部載諸湖、最大者曰呼爾泊、在左翼東南六十五里。沈子敦曰「呼爾泊、疑即大水濼」。烏沙堡、在今山西大同府北塞外。三州、皆屬金西京路。昌州在撫州西北、今蘇尼特右翼西南。桓州、今庫爾圖巴爾哈孫、在獨石口外上駟院牧廠北。撫州、在今張家口外、鑲黃等四旗牧廠西南二十里。又案、續綱目云「蒙古侵擾雲中・九原、連歲不休。嘉定四年、遂破大水濼以進。金主始恐、四月釋買住、而遣西北路招討使粘合合打求和。蒙古主不許。金主命平章政事獨吉千家奴・參知政事完顏胡沙、行省事于撫州、西京留守紇石烈胡沙虎、行樞密院事。以禦蒙古。秋千家奴・胡沙。至烏沙堡、未及設備、蒙古兵奄至、拔烏沙堡及烏月營。八月、蒙古主乘勝破白登城、遂攻西京、凡七日。胡沙虎懼、以麾下棄城突圍遁去。蒙古主以精騎三千馳之。金兵大敗。追至翠屏口。遂取西京及桓・撫州」。金史衞紹王紀、大安三年四月始書太祖來征、未允。蓋太祖親征在春、金主求和及備邊在夏、而西京諸州之陷、則在秋也。本書云秋始南征、非是。又元史既書「取豐利等縣」於七月前、而明年壬申春、復云「帝破昌桓撫等州」。年月誤、而叙事複沓。速不台傳云「歲壬申、攻金桓州、先登拔其城」。石抹明安傳亦云「歲壬申、太祖率師、攻破金之撫州」。皆沿本紀之誤也。大太子朮赤、二太子察合台、三太子窩闊台、原注「太宗也」。通世案、原注三字、原入正文、今校改。又案、三子名、祕史作拙赤察阿歹斡歌歹、源流作珠齊察干岱諤格德依。破雲內・東勝・武・宣寧・豐・靖等州。金人懼棄西京。秋濤案、金之西京、即今大同府。通世案、諸州皆屬金西京路。雲內州、今山西朔平府右玉縣。東勝州、在今歸化城西南百四十五里。武州、在今山西寧武府神池縣東北。金無宣州。宣寧、縣名、金屬大同府、今朔平府左雲縣。元史改宣寧作朔。朔州金

屬西京路今屬朔平府。豐州、今歸化城土默特牧地。金無靖州、疑當作淨。金西京路有淨州、在今四子部落西北、與喀爾喀接界。元史往往誤淨爲靜、又誤爲靖。太祖紀四年、有「衞王允濟受貢於靜州」語。金史馬慶祥傳徙家淨州天山」。元史月乃合傳作靜州、馬祖常傳作靖州。

又遣哲別率衆取東京。哲別知其中堅以衆墮城、通世案、以上疑脫難字。卽引退五百里。金人謂我軍已還、不復設備。哲別戒軍中、一騎牽一馬、一晝夜馳還急攻、急原作忽、秋濤校改。大掠之以歸。秋濤案、金之東京、卽今遼陽州也。玆是年者別方攻中京、未能遽及東京。疑紀載有誤。本紀于辛未年載「九月、居庸關守將遁去。遮別遂入關抵中都」。而壬申年、載「十二月甲申、遮別攻東京、不拔、卽引去、夜馳還、襲克之」、與此書年月不合。祕史則云「者別將居庸關取了。成吉思入關下了營、遣軍馬攻取北平等郡。教者別攻取東昌、不克回了、六宿郤翻回去、每人牽從馬一匹、晝夜兼行、使金人不意中間、將東昌取了。者別取了東昌、回來與成吉思相合」。是祕史又與此書所言、本係一事、而祕史以爲取東昌。玆東昌。在金時爲博州地、與中京隔遠。辛未年、元兵尙未及博州。惟癸酉年、太祖度居庸關、分兵三道、始破博・濟・濱・棣等州。是者別之襲取東昌、當係癸酉年事無疑。又案、祕史蓋係明朝初年所譯、故稱燕京曰北平、博州曰東昌。斯亦錢竹汀徐星伯諸先生所未論及也。因附識之。通世案、何說是也。哲別取東京、亦見西史、而事情不合。睢吾也而傳云「太祖五年、吾也而與折不那演克金東京有功」。折不那演、卽哲別諸顏也。似哲別有克東京之事。然云太祖五年、與本書及太祖紀皆不合。耶律阿海傳云「太祖卽大位、敕左帥闍別略地漠南、以阿海爲先鋒、破烏沙堡、戰宣平、大捷澮河、遂出居庸、耀兵燕北、拔宣德・德興諸郡、乘勝次北口攻下紫荊關」。是阿海常爲者別先鋒、而者別常從大軍轉戰也。者別雖捷知鷙鳥、何暇能踰北京路、徑東京攻耶。又耶律留哥傳載「歲壬申太祖命按陳那衍、行軍至遼東。留哥率所部降之、共破金軍。帝召按陳還、而以可特哥副留哥屯其地。癸酉春、衆推留哥爲遼王云云」。是經略遼東者、按陳・可特哥、而者別不與焉。又櫱直腷魯華傳載其從木華黎、歲辛未、破遼東西諸州、遂克東京。辛未、卽此年也。然木華黎定遼東西、在乙亥丙子之際。是紀年之誤、非誤哲別爲木華黎也。石抹也先傳又載也先從木華黎、用奇計、取東京。益知定東京者、木華黎而非哲別也。但祕史之北平、蒙文作中都、而譯文作北平、故知爲明人譯改。至東昌、則蒙文亦曰東昌、而不曰博州。此非明人譯改爲東昌也。元史地理志「唐博州、金隸大名府、

元初隸東平路、至元四年、析爲博州路、十三年改東昌路」。是東昌之名、自世祖時始。元初史臣、安得知之」考、是歲元軍所破諸州、本書西史、皆有東勝、爲大同府西北境。哲別建奇功、當在此地。蓋祕史原本、本作東勝、而明人音譯、誤作東昌、不知元初無東昌也。修正祕史、又誤作東京、本書西史沿之、而不知東京非哲別所取也。

上之將發撫州也、金人以招討九斤監軍爲奴等九斤、元史作紇石烈九斤、續綱目作完顏九斤。爲奴、續綱目作完顏萬奴、伯時津作斡奴。洪氏曰「卽爲奴」。秋濤案、爲奴二字疑誤。文田案、爲奴當作萬奴。卽元史太祖紀蒲鮮萬奴也。太祖紀金宣撫蒲鮮萬奴、塔思傳作金咸平宣撫完顏萬奴。考證云「蒲鮮爲金之庶姓、完顏爲金之國姓。無一人兩姓之理、紀傳必有一誤。或當時賜姓則未可知」。劉祁歸潛志梁詢誼條云「宣宗南渡、宗室萬奴叛據上京」。東平王世家云「完顏萬奴、金內族也」。則亦似非賜姓。然金史宣宗紀、元史王珣傳、及高麗史、皆作蒲鮮、不知其故。領大軍、設備於野狐嶺、通世案、在直隸宣化府萬全縣北三十里、張家口外。祕史蒙文作忽捏堅荅巴。忽捏堅謂狐、荅巴謂嶺。又以參政胡沙通世案、卽完顏承裕、金史有傳。率軍爲後繼。契丹軍帥、通世案、伯時津作金將巴古失・桑臣二人。謀謂九斤曰「聞彼新破撫州、以所獲物分賜軍中、馬牧於野。出不虞之際、宜速騎以掩之也」。九斤曰「此危道也。不若馬步俱進、爲計萬全」。上聞金馬至、進拒貛兒嘴。通世案、在野狐嶺北。西史云「帝聞警、軍中方餐、棄飯而起、以二軍拒於貛兒嘴」。九斤命麾下明安通世案、元史作石抹明安、有傳。曰「汝嘗使北方、素識太祖皇帝。秋濤案、九斤之言、不當稱太祖、又生時不當稱謚。此元代史臣之辭、猶左傳石碏言「陳桓公有寵於王」也。通世案、西史作成吉思汗、元史明安傳作蒙古國王。其往臨陣、其原作共。通世依元史明安傳改。問以擧兵之由、

金國何怨於君而有此舉。若不然、卽詬之」。明安來如所教、俄策馬來降。上命麾下縛之、俟吾戰畢問之也。遂與九斤戰、大敗之。其人馬蹂躪死者、不可勝計。通世案、西史云「乞鶻•哈剌乞鶻•主兒只諸軍大敗、伏尸徧野」。謂漢契丹女直軍也。祕史云「者別將金國陸續來的軍馬殺敗。成吉思中軍隨後到來、將金國的契丹女眞等緊要的軍馬都勝了」。亦詳。因勝彼、復破胡沙軍於會合堡。通世案、金史衞紹王紀云「大安三年八月、千家奴•胡沙自撫州退軍、駐宣平。九月、敗績于會河堡。」完顏承裕傳云「八月、大元大兵至野狐嶺。承裕喪氣、不敢拒戰、退至宣平云云。其夜承裕率兵南行。大元兵躡擊之。明日、至會河川。承裕兵大潰。承裕僅脫身走入宣德」。殿本改川爲堡。宣平、金西京路宣德州屬縣、故城在今直隸宣化府懷安縣東北。會河堡、在今宣化府萬全縣西。元史本紀云「六年八月、帝及金師戰於宣平之會河川敗之」、蓋蘐承裕傳也。又案、元史辛未二月書「敗金將定薛於野狐嶺」、壬申春又叙貛兒嘴之戰、不知兩戰本一事也。且辛未二月、北軍未破撫州。安得有野狐嶺之戰耶。定薛之名、僅見於察罕傳、亦疑非大帥。貛兒嘴之戰、似據本書。然年月皆誤。金人精銳、盡沒於此。上歸語明安曰「我與汝無隙、何對衆相辱」。對曰「臣素有歸志、恐其難見、故因如所教。不爾何由瞻望天顏。」上善其言、命釋之。

壬申七年、宋嘉定五年、金衞紹王崇慶元年。通世案、西史失書猴年、故宣德•德興之役、皆爲辛未年事。破宣德府、至德興府秋濤案、金宣德府、今直隸宣化府是。德興府、今直隸保安州是。通世案、金宣德州、未稱府。元升爲宣寧府、後改宣德府。祕史元史皆作府、獨西史作州。失利引卻。四太子也可那顏•赤渠駙馬率兵、盡克德興境內諸堡而還。後金人復收之。曾植案、史祭祀志、太廟金主、太祖主、題曰成吉思皇帝、睿宗主、題曰太上皇也可那顏。此四太子也可那顏、與彼太上皇也可那顏文同、謂拖雷也。又案、赤渠、史太祖本紀作赤駒、公主表作赤窟。通世案、祕史作出古。伯哼津書云「攻德興府。其地有園亭果木、釀酒甚多。金守以精兵。不能下而退。令圖里汗•赤古古兒干率兵再往、登城毀其敵樓、破之而歸。歸後此城復叛屬金」。圖里汗、卽四太子也可那顏也。洪氏曰「也可大也。義爲大那顏。拖雷有是稱、見西域史下文。西域史稱之爲汗。蓋西域王、皆拖雷後、亦追王之意。又西域史不曰拖雷、曰圖里、謂稱名之義爲鏡。案元史語解「圖里鏡也」。似元史之作拖雷爲誤」。又曰「古兒干、卽駙馬」。綱目云「壬申春、蒙古克金宣德府、遂攻德興府、抉墉而登。金人禦之。蒙古兵不利。蒙古主第四子拖雷與赤駒駙馬、復擁楯先登而射之。金兵引卻。蒙古遂盡拔德興境內諸城堡而去。金人復守之」。與本書合。元史本紀、於辛未年、旣書「九月、拔德興府」、至癸酉年、復書「秋七月、克宣德府、遂攻德興府。皇子拖雷駙馬赤駒先登拔之」。皆非。辛未之文、蓋依金國志而誤。然據金史衞紹王紀、紇石烈執中傳、「大安三年十一月、執中自請步騎二萬屯宣德州、詔與三千人屯嬀川」。則辛未年、宣德德興未嘗陷也。癸酉之文、似本於本書、而以壬申之役爲癸酉秋事、省「金人復收之」「上復破之」二事、亦係誤。

癸酉、八年、宋嘉定六年、金衞紹王至甯元年、九月以後、宣宗貞祐元年。通世案西史作次年。洪氏曰「此次年應是癸酉。上文遺脫猴年、遂爲壬申」。秋、上復破之、遂進軍至懷來通世案、懷來、遼舊縣、金改嬀川、屬西京路德興府。今直隸宣化府懷來縣。金帥高琪金字原闕、秋濤校補、通世案、元史本紀、作金行省完顏綱•元帥高琪。金史完顏綱、徒單鎰、朮虎高琪傳、皆云「至寧元年、綱行省事於縉山、大敗」。然西史亦不載綱名、則脫必赤顏原本、本脫之也。帥上疑原有金元二字。又案、朮虎高琪、金史有傳。是時爲鎭州防禦使、權元帥右都監。蒙古人謂之元帥、傳聞之誤也。將兵與戰。我軍勝、追至古北口、通世案、在順天府密雲縣東北百二十里。然觀下文怯台薄察等頓軍拒守、哲別破居庸南口、進至北口、與二將合、則此非古北口、卽居庸北口也。札八兒傳云「金人恃居庸之塞、冶鐵錮關門、布鐵蒺藜百餘里、守以精銳」、亦卽下文「金人塹山築壁、悉力爲備」之事也。元史本紀、舊本無古字。殿本乃有古字、後人贅增也。耶律阿

海傳亦云「乘勝次北口」、無古字。畢秋帆續通鑑、從元史舊本、而據札八兒傳、叙居庸之備、亦以北口爲居庸北口也。西史作哈卜察勒、義爲口隘、不載口名。然自懷來追至口隘、爲居庸可知。然則此北字誤衍無疑。

大敗之。死者不可勝計。時金人塹山築帥、秋濤校改塞字。通世案、當是壁字之譌。悉力爲備。上留怯台・薄察等曾植案、趙柔傳「癸酉、太祖遣兵破紫荆關。柔以衆降。行省八札奏聞、以柔爲涿易二州長官」。八札卽薄察。又案、朮赤台之子名怯台、而祕史九十五功臣名、又有客台客帖二人、竝與怯台聲近。不知此怯台當爲誰也。又案、無名氏皇氏墓志、國朝初、皇全以兵屬木華黎國王、宗王克忒、署千戶。克忒卽怯台、本紀作可忒。主兒扯歹、與太祖同爲孛端察兒之後。稱爲宗王、則克忒是主兒扯歹之子怯台、無疑也。通世案、元史本紀作可忒・薄刹。郝和尙拔都傳「在郡王迄忒麾下」、考異云「疑卽朮赤台之子怯台也」。伯哷津作翁吉剌特二將哈台・布札。頓軍拒守、遂將別衆西行、由紫荆口出。將字由字原闕。張石州據翁本增。通世案、紫荆關在直隸易州西八十里紫荆嶺上。金主聞之、遣大將奥敦張石州曰「本紀作屯」。通世案、金史章宗衞紹王二紀及李英傳、有烏古孫兀屯、蓋卽此人也。將兵拒隘、勿使及平地。比其至、我衆度關矣。乃命哲別、率衆攻居庸南口、通世案、居庸關、在順天府昌平州境。州西北二十四里、爲居庸南口。自南口而上十五里爲關城。又八里爲上關。又十七里、卽宣化府延慶州之八達嶺。嶺上有城、元人以此爲居庸北口。出其不備破之、進兵至北口、與怯台・薄察軍合。通世案、本紀云「契丹訛魯不兒等獻北口、遮別遂取居庸、與可忒・薄刹會」。殿本作古北口、誤與前同。洪氏曰「古北紫荆居庸、皆長城隘口。此古之長城、在金內地者也。金築長城、則更在邊外。所謂「塹山爲界、汪古部一軍守其衝要」也。汪古導蒙古進兵、而外險失、昌桓撫等州皆不保矣。至是而三關亦盡失、中都危矣。親征錄叙述詳明。合西域史觀之、可得太祖用兵之道。元史札八兒傳、叙破居庸之事、全屬渺茫」。既而又遣諸部精兵五千騎、合怯台・哈台二將。圍中都。圍原作固、秋濤校改。曾植案、哈台、蓋卽九十五功臣中之合歹駙馬。通世案、西史作「令喀台率五千騎、守中都往來大路」。喀台、卽怯台、而無哈台。上自率

兵攻涿・易二州、通世案、二州、金屬中都路。涿州、今屬順天府。易州、今屬直隸。卽日拔之。通世案、金史宣宗紀、貞祐元年十月、載大元兵下涿州。似非入關之月直拔之。西史作「自引兵攻涿州、二十日破之」、少易州。元史木華黎傳、亦唯云拔涿州、與金史合。又案、庚午癸西之間、元史叙事多複。蓋由採諸書錯綜成文、而不審究事情。庚午春、遮別襲烏沙堡殺其衆。辛未秋、遮別復拔烏沙堡。是前非而後是也。辛未取豐利等縣、豐利、撫州屬縣也。而壬申春、帝破昌桓撫等州。是前是而後非也。昌桓撫等州之破、皆在前年。辛未二月、帝敗金將定薛於野狐嶺。壬申春、復與金將紇石烈九斤等、戰于獾兒嘴、大敗之。獾兒嘴之戰、卽野狐嶺之戰也、此戰實在辛未八月、而前文叙在取大水濼拔烏沙堡之前、月次不合。金將之名亦可疑。後文似據本書、而年月皆誤。辛未九月、拔德興府。壬申九月、察罕克奉聖州。奉聖州、卽德興府舊名。明昌以後升爲府、元復改奉聖州。而癸酉七月、皇子拖雷等、復拔德興府。辛未之役、蓋依金史而誤。察罕之事、別採他書。拖雷等之事、則據本書。而本書有壬申癸酉兩役。本紀取其壬申役、書於癸酉、亦與原文異。縉山之大敗、居庸之失守、在癸酉之秋、金史完顏綱・朮虎高琪諸傳可證。而本紀辛未九月、旣云「居庸關守將遁去、遮別遂入關、抵中都」、是沿金史衞紹王紀之誤也。衞紹王身弑國蹙、記注亡失、王鶚既不能詳述、見紀贊。故叙事率略最甚。大安三年、會河堡敗後、直云「居庸關失守、大元前軍至中都」、「東過平灤、南至淸滄、由臨潢過遼河、西南至忻代、皆歸大元」、是皆至寧癸酉以後之事也。故癸酉秋、不復叙居庸失守。設令居庸失守在辛未、則癸酉之役、北軍何須由紫荆出耶。元史既依金史、於辛未秋、書遮別入關、至癸酉秋、復依本書、叙懷來居庸之戰、故致重複如此」。乃分軍爲三道。大太子二太子三太子爲右軍、循太行而南、破保州・中山・邢・洺・原作洛、秋濤校改。磁・相・輝・衞・懷・孟等州、棄其定・威州境、秋濤校本刪棄其二字。通世案、不必刪。中軍亦有「棄東平大名」語。抵黃河、河字、秋濤校補。大掠而還。秋濤案、本紀云「是秋、分兵三道、命皇子朮赤・察合台・窩闊台爲右軍、循太行而南、取保・遂・安肅・安定・邢・洺・磁・相・衞・輝・懷・孟、掠澤・潞・遼・沁・平陽・太原・吉・隰、拔汾・石・嵐・忻・代・武等州而還。計本紀有而此書闕者、爲遂州安肅州安州澤州潞州遼州沁州吉州隰州汾州石州嵐州忻州代州武州及太原・平陽二府。其定州、卽中山府也。通世案、保州、金屬中都路、今直隸保定府淸苑縣。中山・邢・洺・磁・相、皆金屬河北西路、今屬直隸。中

山府、今定州。邢州、今順德府、洺州今廣平府。磁州、今廣平府磁州。相州、唐宋舊名、金改彰德府、今仍之。輝州舊衞州蘇門縣、貞祐四年九月壬申、升爲州、屬河北西路。元改輝縣、屬衞輝路。今河南衞輝府輝縣。衞州、金屬河北西路、元改置衞輝路。今河南衞輝府。此二字、元史作衞輝。續綱目諸州名、不據元史、而據本書、亦作衞輝、則輝衞疑是倒置。懷孟、金屬河東南路。懷州今河南懷慶府。孟州、今懷慶府孟縣。定州、卽中山府、明昌以復升爲府、明復曰定州。蓋既取而復棄也。威州、金屬河北西路〔今直隸正定府井陘縣。

哈撒兒及斡津那顏・原作斡律。文田案律當作津。通世案、元史作斡陳那顏、斡亦當作斡。今因改二字。西史亦作斡陳諾延、原注「翁吉剌人」。此特薛禪之孫、而按陳那顏之子也。元史附見特薛禪傳。拙赤鮮・通世案、伯哷津作主兒赤歹、原注「成吉思汗幼子」。陳桱通鑑續編、太祖六子、其庶子曰朮兒徹歹者是也。伯哷津又云「乃蠻女失其名、從成吉思汗生子朮兒徹」。洪氏曰「朮兒徹、必卽主兒赤、而奪歹字音」。引蒙韃備錄、考證頗詳。薄刹曾植案、薄刹前作薄察。攻燕爲大將、與拙赤鮮等竝、而史無其傳、他處名亦不見。蓋不可解。竊疑此卽塔察兒也。塔察兒、一名倴盞、對音與薄察通近。傳稱其從太祖平燕、情事亦合。爲左軍、沿東海、破洙・沂等城而還。秋濤案、金無洙州、疑灤字之譌。本紀云「皇弟哈撒兒及斡陳那顏・拙赤鮮・薄刹、爲左軍、遵海而東、取蘇州平灤遼西諸郡而還」。據本紀、是左軍東抵平灤、而未嘗南涉淄沂也。沂州、本紀列於中道軍所取之內、未詳孰是。通世案、灤州、金屬中都路、今屬直隸永平府。沂當是薊之壞字。薊州、金屬中都路、今屬順天府。續綱目亦作破灤薊。上與四太子、馭諸部軍、由中道、遂破灤・秋濤案、當作深。蓋上灤字既譌作洙、後人因妄改此字爲灤也。漢・秋濤案、河北山東無漢州、字當作莫。蓋莫譌漢、而漢又譌漢也。河間・開・通世案、何氏以開非其次、移之於益都下。然若從元史之次、則深開、皆當移於景獻下。開在益都下、未必爲得其次。今姑仍舊。清・滄・景・獻・濟南・濱・棣・益都原作益相、秋濤校改。等城。秋濤案、本紀云「帝與皇子拖雷爲中軍、取雄・霸・莫・安・河間・滄・景・獻・深・祁・蠡・冀・恩・濮・開・滑・博・濟・泰安・濟南・濱・棣・益都・淄・濰・登・萊・沂等郡」計本紀有而此書缺者、爲雄州霸州祁州蠡州冀州恩州濮州滑州博州濟州泰安州淄州濰州登州萊州沂州、凡十六州。其安州、與右軍所取複出。未詳其說。又本紀云「是歲、河北郡縣盡拔、惟中都・通・順・眞定・清・沃・大名・東平・德・邳・海州十一城不下」。是淸州未陷、而此

書云中軍破清・滄、與史文不合。通世案、深・莫・河間・清・滄・景・獻皆金屬河北東路、今屬直隸。深州故城、在今深州南二十五里。莫州故城、在今河間府任邱縣北三十五里。河間府、今仍之。清州、今天津府青縣。滄州故城、在今天津府滄州東南四十里。景州、大安間更爲觀州。今河間府東光縣。獻州、今河間府獻縣。開州、金屬大名府路、今屬直隸大名府。濟南・濱・棣・益都、皆金山東東路、今山東。濟南府、今仍之。濱州、今屬武定府。棣州、今武定府。益都府、今青州府。續綱目作雄・漠・清・滄・景・獻・河間・濱・棣・濟南等郡、亦似據本書。莫譌作漠、何氏說是。然則灤亦應是雄之譌、而開則衍字耶。雄州、金屬中都路、今直隸保定府雄縣。又案、金史宣宗紀、貞祐元年十一月、大元兵徇觀州。觀州、卽景州也。又徇河間府滄州。二年正月辛未、徇彰德府、卽相州也。又徇益都府。乙未徇懷州。二月壬辰、下嵐州。時山東河北諸郡失守、惟眞定・清・沃・大名・東平・徐・邳・海數城僅存而已。河東州縣亦多殘燬。可見三道之侵掠、始於癸酉十一月、終於甲戌二月也。又案、李英傳、貞祐三年三月、英自清州督糧運、救中都。宣宗紀、其年七月、詔河間孤城、移其軍民、就粟清州。是淸州未殘破也。金元二史皆云清州不下、可從。棄東平・大名不攻、秋濤案、承平日久、民不知兵。故元兵所至、望風披靡。昔安祿山舉兵、而河北二十四郡皆破、亦此類也。東平・大名二郡、金人有鎭帥守之。蓋其人尙能守禦、故避而不攻。通世案、東平府、金屬山東西路、今山東泰安府東平州。大名府、金大名府路治、故城在今直隸大名府元城縣東。餘皆望風而拔。下令北還。又遣木華黎、回攻密州拔之。通世案、密州、金屬山東東路、今山東青州府諸城縣。上至中都、亦來合。

甲戌九年、宋嘉定七年、金貞祐二年。通世案、西史誤作雞年。上駐營於中都北壬甸。秋濤案、本紀云「駐蹕中都北郊」。金丞相高琪通世案、高琪傳、是時爲平章政事。與其主謀曰「聞彼人馬瘦病。乘此決戰、可乎」。丞相完顏福興通世案、承暉、本名福興、金史有傳。是時爲平章政事兼都元帥、尋進右丞相。曰「不可。我軍、身在都城、家屬多居諸路。諸原作都、秋濤校改。其心向背未可知。戰敗必散。苟勝、亦思妻子而去。祖宗社稷安危、在此舉矣。當熟思之。今

莫若遣使議和。待彼主還軍、主原作吉、秋濤校改。更爲之計、如何」。金主然之、遣使求和、因獻衞紹王公主、通世案、金史宣宗紀所謂公主皇后。令福興來送上、至野廝池而還。通世案、祕史云「王京親送至莫州撫州山觜行辭回了。軍人將金銀等物、用熟絹拴定、儘力馱去了」。王京卽完顏之轉、謂完顏福興。莫州、疑衍。

夏四月、張石州曰「紀作五月」。通世案、西史云「是年已四閏月」。洪氏曰「則五月矣。本紀合、錄不合」。金史宣宗紀云「五月壬午、車駕發中都、七月至南京」。金主南遷汴梁、還原作遷、秋濤校改。通世案、卽金南京、今河南開封府。留其太子、守中都、以丞相完顏福興左相秦忠爲輔。秋濤案、史作參政抹撚盡忠。通世案、抹撚盡忠、本名彖多、金史有傳。是時爲尚書左丞、非左相、亦非參知政事。尋爲平章政事兼左副元帥。金主行距涿。契丹軍在後、至良鄉。通世案、縣名、金屬中都大興府、今屬順天府、在府西南七十里。金主疑之、欲奪其原給鎧馬還營。通世案、營當作官。續綱目云「命扈衞乣軍、元給鎧馬、悉復還官」。契丹衆驚、遂殺主師素溫通世案、伯哷津作鮮袞、通鑑輯覽作索袞、注云「舊作搜溫」。而叛去、推斫荅斫原作聽、秋濤據本紀改。翁本作砍。比涉兒・札剌兒爲帥、通世案、伯哷津作志荅・比涉兒・阿剌兒。通鑑輯覽作卓達・必什哷勒・札拉喇、注云「舊作札達・筆什爾・查剌兒」。而還中都。福興聞變、軍阻盧溝、通世案、在順天府西南四十里、良鄉縣東三十里。使勿得渡。斫荅遣裨將塔塔兒、率輕騎千人、潛渡水、腹背擊守橋衆、腹原作服、通世校改。大破之、盡奪衣甲器械牧馬之近橋者。通世案、西史云「盡奪軍裝馬匹、掠中都一帶牧羣」、

驅逐守吏」。元史所載「辛未十月、襲金羣牧監、驅其馬而還」。或卽本此事而誤傳也。由是契丹軍勢漸振。先是耶律留哥以中國多故、據有東京・咸平等郡通世案、金咸平路咸平府、在今盛京奉天府鐵嶺縣東北四十里。自稱遼王。斫荅・比失兒等、遣使詣上行營納款、又求好遼王。時遼王亦來降。上命爲元帥元原作瓦、秋濤校改。令居廣寧府。通世案、金屬北京路、今盛京錦州府廣寧縣。太祖紀、木華黎降廣寧府、及留哥來覲、在乙亥年。留哥傳、與按陳那顏盟、在壬申年、入覲在乙亥年、招撫廣寧、在丙子年、皆與此異。續綱目云「丙子夏四月、遼王留哥降蒙古。蒙古主以爲元帥、令居廣寧府」。金主之南遷也、以招討也奴曾植案、當作乜奴、卽萬奴也。爲咸平等路宣撫、復移治於忽必阿蘭。至是亦以衆來降、仍遣子鐵哥入質。既而復叛、自稱東夏王。通世案、西史此下、有「所以然者、由帝攻取金地已多、金主復嚴刻、故衆皆離心、各據地自立」數語。洪氏曰「此數語、必是拉施特增入。歸潛志云「宣宗喜刑法、政尚威嚴」。此語誠非無據」。

五月、秋濤案、紀作七月。通世案、西史作「是年已五閏月」、則六月矣。與史錄皆不同。金史宣宗紀云「八月庚子皇太子至自中都」。蓋七月金帝召太子、踰月至南京也。金太子、原脫此字、秋濤補。留福興・秦忠等、守中都、亦走汴梁。上以契丹衆將來歸、遂命散只兀兒木合拔都曾植案、紀作三摸合。通世案、石抹明安傳、作三合拔都。西史作撒兒助特人撒木哈。撒兒助特、史錄作散只兀。史抄兀兒傳、誤作散只兒。類編皇后傳引錄、亦作散只兒、今此文亦衍兒字。而木上脫撒音字。或兒字應卽撒若三之譌。契丹先鋒將明安太保通世案、元史作石抹明安。石抹氏、契丹著姓也。明安傳「中都既下、加太傅」。考異云「和林廣記、稱太保明安。此云太傅、恐誤」。本書稱太

保、與和林廣記合。兄弟等爲鄕導、引我軍合之。至則與斫荅等併力圍中都。通世案、中都之陷、金史元史、皆作乙亥年事。此間脫乙亥二字。西史亦不載年分。金主以點檢二字原倒置、通世校改。說見下。慶壽・元帥李英、原作季英。秋濤案、金史歸潛志作李英。通世案、金史宣宗紀、作元帥左都監烏古論慶壽、御史中丞李英。二人皆有傳。慶壽傳、宣宗遷汴、改右副點檢、閔月改左副點檢。三年、中都危急、改元帥左都監云云。運糧分道、還救中都。原作東都、秋濤校改。齎糧人八斗。英自負以勵衆。慶壽至涿州旋風寨通世案、石抹明安傳作宜封寨。李英至霸州靑戈、通世案、霸州、金屬中都路、今屬順天府、在府南二百十里。皆爲我軍所獲。通世案、李英之敗、金元二史、皆繫乙亥年五月。旣絕其糧、中都人自相食。福興自毒死、秦忠亦委城走。明安太保入據之、遣使獻捷。通世案、中都之陷、金元二史、皆繫乙亥年五月。

上時駐桓州、原作桓丹、秋濤據本紀改。遂命忽都忽那顏・曾植案、祕史作失吉忽都忽、訶額侖太后養子也。通世案、蒙古源流作錫吉呼圖克、伊遜烏爾魯克之一也。祕史卷四、太祖助金軍破塔塔兒時、於營中拾得小兒、以與母訶額侖、使養之、命名失乞忽都忽、喚做第六兒子。多遜則云「失吉庫圖庫係成吉思汗征塔塔兒時所掠童子。其時孛兒台夫人尙未生子、使育之、遂視如子」。乃是孛兒台養子、與祕史異。與雍古兒寶兒赤・原作寶光赤。曾植案寶光赤、祕史蒙語作保兀兒赤、解曰廚子。然則光是兀字或兒字之譌。通世案、祕史卷四「汪古兒管了飲膳」、卷十「蒙格禿乞顏的子汪古兒廚子」。元史語解「博囉赤、廚官也。」卷十作博兒赤、卷十八作博而赤、卷九十九作博爾赤、卷一百三十四作寶兒赤」。此光當作兒無疑。今改。阿兒海哈撒兒三人、檢視中都帑藏。時金留守哈答國和等、通世案、祕史作金臣合答。奉金幣、爲拜見之禮。雍古兒・哈撒兒受之。秋濤案、雍古兒下、疑脫阿兒海三字。獨忽都忽拒不受、將哈答其物北來哈答下、秋濤補及字。上問忽都忽曰「哈答等嘗與你物乎」。對曰「有之。未敢受之」。上問其故。對曰「臣嘗與哈答言「未陷城時、寸帛尺縷、皆金主之物。今旣城陷、悉我君物矣。汝又安得竊我君物爲私惠乎」」。私惠、原作和意、秋濤校改。上正佳之、秋濤改佳爲嘉。以爲知大體。而重責雍古兒・阿兒海哈撒兒等、秋濤案、自「金主以檢點」至此、舊本皆在甲戌年圍中都之下。今案、中都之陷、大事也。金史元史、皆作乙亥年事。此錄則兩載於甲乙二年。此云「中都人自相食、福興自毒死、秦忠亦委城走、明安太保入據之」。乙亥年云「完顏福興仰藥死、抹撚盡忠棄城走、明安入守之」。案上文載「左相秦忠爲輔」、及「太子命秦忠守中都」。皆作秦忠、與此條合。而紀事亦此條較詳。蓋此條、乃錄之原文、錯簡入甲戌年。後人因其與史不合、復於乙亥年內、臆增三語、故致一事而復見兩年耳。今定此條入乙亥年、其複出之三語、則删去不錄云。通世案、何氏校本、以「金主以點檢」以下二百四十六字、移於乙亥年「戰於霸州敗之」之下。然李英事重複、而文理更不接續。且西史亦以金主云云承「圍中都」句、與本書同。蓋脫必赤顏原文次第本如此、非此本之錯簡。故今猶仍舊次、而年月之誤、則別論之。至所謂後人臆增、則乙亥全文皆然、不止何氏所删三語。見於後。不珍也。通世案、此語難解。不賞之義乎。或有誤脫。西史則全無此語。哈答因見其孫榮山而還。通世案、見其二字原倒置、今校正。西史云「哈荅挈其孫尼克賽、見帝而返。洪氏曰「尼克賽、卽榮山之轉音也」。時金通州元帥七斤率衆來降。原作也斤。秋濤案、也斤仍當作七斤。通世案、通州、金屬中都路、今屬順天府、在府東四十里。七斤、姓蒲察氏。金元二史、七斤之降、在乙亥正月。惟張復・張鑊柄・衆哥・也思元帥、據守信安不下。曾植案、張復、卽高陽公張甫。衆哥卽河間公移剌重嘉努、亦作重格、舊作衆家奴。兩人皆在九公之列。其守信安事、具金史。張鑊柄、疑卽張進。後金人封爲滄海公、與甫同守信安者。獨也思無攷耳。張鑊柄之稱、正如郭蝦蟆葛鐵槍、當時軍中有此習。通世案、張復之張、原作帳。今從沈氏說校改。伯畤律作張忽・張忽斤・衆格・阿失林。信安縣名、金屬中都路霸州。故城在今順天府霸州東五十里。又案、金史紀傳、張甫初降蒙古、涿州刺史李擄驢招

之。興定元年正月、甫與張進俱來降。二年八月、河北行省侯摯以李禰驢權中都路經略使、甫爲副使。三年閏三月、禰驢爲中都東路經略使、自雄霸以東皆隷之。禰驢降蒙古、甫代之、張進爲中都南路經略使。移剌衆家奴積戰功、累官河間路招撫使。四年二月、衆家奴封河間公、統河間獻蠡安深州、甫封高陽公、統雄霸州靜海寶坻武淸安次縣。元光元年、衆家奴所部州縣皆失守、移屯信安、乃甫境內。甫奏改信安爲鎭安府、二人合兵、復取河間府及安蠡獻三州。二年、同保鎭安、各當一面。傳贊有滄海公張進易水公張進、蓋進亦後爲郡公也。據史文、則三人守信安、在興定以後。然大金國志貞祐三年條云「燕南雄霸數州、乃三關舊地、塘濼深阻、兵不能入。朝中遣將張甫張進二人、屯信安軍以守之。北距燕山百八十里」。是張甫未降蒙古之前、既有守信安之事、而金史略之也。

上駐軍魚兒濼 通世案、通鑑輯覽云「在今鑲黃旗牧廠、故興和城西。金史地理志、柔遠縣有大魚濼、卽此」。魚兒濼見於西遊記。長春過蓋里泊、北行越沙陀、半月而至。亦見張德輝紀行、曰魚兒泊。德輝自昌州北廢城、行十一驛而至。泊之東涯、有公主離宮。沈子敦曰「此公主不知何人所尙。蓋離宮、本是帝所居、後以賜公主耳。魚兒濼直昌撫等州沙漠之北。地志家以興和城之濼當之、殊誤。太祖不避暑于撫州竟也」。西史此句上、有「犬年」字。紀年全誤。

命三合拔都、 命原作合、秋濤校改。通世案、本紀作撒里知兀䚟三摸合拔都魯。卽上文散只兀兒木合拔都、續綱目作三哥拔都、又作撒沒喝。大金國志、引宋通鑑、作撒沒曷。 帥蒙古軍萬騎、由西夏、 西夏原作夏西。通世案、二字誤倒。元史續綱目、皆作西夏。今因改。 抵京兆、出潼關、破嵩汝等郡、直趨汴梁、至杏花營、大掠河南、回至陝州。 通世案、京兆府、今陝西西安府、潼關、在今陝西同州府華陰縣東四十里河南陝州閿鄉縣西六十里。嵩汝陝三州、金屬南京路。嵩州、今河南河南府嵩縣。汝陝皆今河南直隷州。杏花營、在金南京西二十里。 適河冰合、 冰原作兵、張石州校改。 遂渡而北。 秋濤案、元人於乙亥丙子兩年、俱遣將由西夏、入關中、攻潼關。乙亥則攻潼關不下、由嵩山小路趨汴京、卽此年事。丙子則攻破潼關、金人旋復取之。乙亥年事、金宣宗紀、元太祖紀、俱不載、而見於諸列傳中。丙子年事、則二紀咸載之。此書復無丙子年事。蓋互有詳略。惟乙亥年事、元人尙未得潼關、而此云「出潼關」、蓋由嵩山小路、繞潼關之外、故云然也。通世案、潼關兩役、實一役也。合考金史宣宗紀、胥鼎、完顏仲元、必蘭阿魯帶、尼龐古蒲魯虎諸傳、貞祐四年八月、元兵攻延安。九月、以

簽樞密院事永錫爲御史大夫、領兵赴陝西、便宜從事。十月、招射生獵戶、練習武藝、知山徑者、分屯陝虢要地。命遙授知歸德府事完顏仲元、率山東花帽軍、徒軍盧氏、改商州經略使。元兵攻潼關、戍兵皆潰。西安軍節度使尼龐古蒲魯虎禦戰、兵敗死焉。戊辰、元兵徇汝州。仲元軍趨商虢、復至嵩汝、皆弗及。河東行省胥鼎、聞元兵已越關、庚午、遣潞州元帥左監軍必蘭阿魯帶、領軍一萬、孟州經略使徒單百家、領軍五千、由便道濟河、赴關陝、自將平陽精兵、赴援京師。十一月壬午、胥鼎入京師、拜尙書左丞、兼樞密副使。乙酉、元兵至澠池。右副元帥蒲察阿里不孫軍潰而逃、阿魯帶亦被創。元兵過陝州、由三門集津北渡而去。戊戌、華州元帥府復潼關。十二月癸亥、元兵攻平陽、鼎遣兵拒戰。元兵不利、乃去。仲元上書有曰「近日敵兵由禁坑出、遂失潼關」。禁坑一名禁谷、在今潼關廳南。是元兵由間道遶出、以破潼關也。元史本紀云「丙子秋、撒里知兀䚟三摸合拔都魯率師、由西夏、趨關中、遂越潼關、獲金西安軍節度使尼龐古蒲魯虎、拔汝州等郡、抵汴京而還」。蓋三合拔都、以丙子八月入陝西、十月越潼關、十二月北還、金史紀傳可證也。本書敍事、皆與兩史合、而年月不詳。觀其接七斤來降云云之文、似誤爲乙亥年事。大金國志云「貞祐三年八月、大軍自河東渡河、攻潼關、不能下。乃由嵩山小路、趨汝州。遇山澗、輒以鐵鎗相鎖、連接爲橋以渡。于是潼關失守。金主急召花帽軍于山東。十月、大軍至杏花營、距汴京二十里。花帽軍擊敗之。大軍復取潼關、自三門析津、乘河氷合、布灰引兵而渡。自是不復出」。所謂大軍、皆言蒙古兵也。其云「不能下」、則與金元二史微異。然下又云「于是潼關失守」。則亦非潼關終不下也。云「由嵩山小路」、則非遶潼關之間道、乃越潼關後趨汝州之徑路也。云「召花帽軍于山東」、則命完顏仲元入援之事也。其與丙子之役爲一事、無可疑者。而誤爲乙亥年事、與本書同。續綱目乃於乙亥年、併取本書金志、敍三合拔都南侵之事、而省「潼關失守」「自是不復出」二句。又於丙子年、依金元二史、云「冬十月、蒙古兵克金潼關、次嵩汝間云云」。則依金志紀年之誤、遂以一事分爲兩事。是沿譌而更誤也。畢氏續通鑑、亦襲續綱目之誤。

金元帥那答忽監軍斜烈、以北京來降。 秋濤案、北京字恐有誤。會植案、那答忽卽寅荅虎、斜烈卽完顏昔烈、今譯改錫琳者也。那答忽、原文蓋作耶答忽。耶寅音近。此書耶那二字往往互訛。通世案、續綱目甲戌九月條云「木華黎攻金北京。北京裨將完顏昔烈高德玉等、殺守將銀靑、推寅答虎爲帥、遂舉城降」。與此條合。然伯哷津書云「撒木哈渡黃河、趨西京。金二將守西京、曰寅荅爾、曰罕撒兒撒烈、出城迎降。撒木哈受降而回」。洪氏曰「卽那塔忽斜烈二人。錄作北京、係誤」。然則寅答虎昔烈、或以爲北京將、或以爲西京將、本是傳聞異辭。而淺

人唯據元史、妄改西京爲北京也。又案、金史奧屯襄傳云「貞祐三年正月、襄爲北京宣差提控完顏習烈所害」。習烈卽昔烈。所謂銀青、卽奧屯襄也。元史木華黎傳、亦作銀青。錢氏考異云「銀青、葢擧其官名、謂銀青光祿大夫、非人姓名也」。寅答虎之降、元史紀傳皆以爲乙亥年事。續綱目繫於甲戌年、葢因蘇天爵名臣事略而誤也。

上遣脫脫欒闍兒必、帥蒙古契丹漢軍南征、通世案、元史木華黎傳「詔木華黎、以張鯨總北京十提控兵、從擬忽闌、南征未附州郡」。石抹也先傳「命也先、副脫忽闌闍里必、監張鯨等軍、征燕南未下州郡」。石抹孛迭兒傳「從奪忽闌闍里必、徇地山東大名」。脫脫欒、下脫當作忽。續綱目作奪忽蘭撒里必。撒當作撤。撤里必、闍里必、卽闍兒必、又卽祕史之扯兒必、護衞散班之長也。伯畤律作蒙格力克之子脫侖扯兒必、脫侖扯兒必見祕史。

降眞定破大名、至東平、阻水不克、大掠而還。金人復取之。通世案、自太祖十年乙亥至十四年己卯、無降眞定、破大名、掠東平之事。合考金元二史本紀諸傳、乙亥十二月、史天倪圍大名破其城、丙子十二月、元兵徇大名府、然其前後不載眞定東平之事。丁丑秋、木華黎將蒙古乣漢諸軍南征、拔遂城蠡州、冬徇中山府、下磁州、克大名府、遂東定益都・淄・沂・登・萊・濰・密等州。是癸酉以來大征伐也。然亦有大名、而無眞定東平。唯十五年庚辰、木華黎徇地至滿城、金恆山公武仙擧眞定來降。六月、遣楊在攻下大名。七月、東平嚴實籍彰德・大名・磁・洺・恩・博・滑・濬等州戶三十萬來降。十一月、進攻東平、不克、留嚴實及梭魯忽禿守之、撤闍趨洺州、分兵徇河北諸郡。大抵似與本書所記合。然率軍者木華黎、而非脫侖扯兒必。又在脫侖受命後五年。疑本書此文有奪誤。又案、自「不珍也」以下至此、百五十二字、舊本誤入辛巳年「攻玉龍傑赤」之下、而辛巳年「之城云云」以下八十四字、則亦誤入於此。今依西史次第、各復其原。何氏校本、始正此錯簡、李沈二君皆從之。然「不珍也云云」十三字、何氏葢苦其解、遂誤以不珍也哈答爲西域城名、存置玉龍傑赤下、而删「因其見孫禁山而還」八字、以「時金通州」以下、接「哈撒兒等」句。今從洪氏說校正。又何氏割「金元帥那答忽」以下五十四字、入於「取城邑、凡八百六十有二」之下、云「據諸史年月考正」。然那答忽斜烈之來降、降三合拔都也。語句緊接、不便割裂。當從舊次。

乙亥、十年、宋嘉定八年、金貞祐三年。通世案、自乙亥以下一百一字、與元史太祖紀乙亥文中語全同、此非本書原文、後人取元史攙入之也。葢本書前文、誤脫乙亥字、故後人疑乙亥事蹟逸失、自擬補輯、而不知七斤寅答虎之降、中都之陷、皆與前文複也、本當删去。但因何・沈諸君、已有注文、不欲删、今姑存併之。

金右副元帥七斤以通州降。原作道州、張石州據本紀改。曾植案、蒙韃備錄云「首相脫合太師者、乃兔花太師之兄。原女眞人、極狡猾。其次韃人宰相、乃率垺奪合。又有女眞七金宰相。餘者未知名。率皆女眞亡臣」。案此則七斤後爲相。可補三公宰相二表之遺。史特薛禪傳「唆兒火都者、亦案陳之子。以從征功、在太祖朝、遙授左丞相、爲千戶、仍賜塗金銀章云云」。備錄之率垺奪合、卽唆兒火都也。奪合當作合奪、葢傳寫誤倒。備錄無善本、無由校也。傳文前作唆兒火都、後作唆魯火都。通世案、本紀乙亥下、有春正月三字、七斤上有蒲察二字。

木華黎攻北京。秋濤案、金北京大定府、今承德府建昌縣地也。是時尙爲金守。可見金人自熱河以東至遼陽、尙有地數千里。乃甲戌年、遽以一敗之故、南遷於汴、金之失計甚矣。通世案、本紀木華黎上、有二月二字。

金元帥寅答虎等以城降。寅答虎、原作寅花麾。秋濤案、本紀作烏古論寅答虎。曾植案、花卽荅字之誤。通世案、花麾二字誤寫無疑、今改。又案、元史舊本作寅答虎烏古倫、殿本改爲烏庫哩伊勒都呼。考證云「考烏庫哩爲金之著姓。若是兩人、不當一稱名而一擧姓」。此事、金宣宗本紀未載。蘇天爵名臣事略載「木華黎攻北京。金守將銀青嬰城自守。其將高德玉等殺銀青、推烏古論寅答虎爲帥、未幾以城降」。畢之續通鑑亦同。爲太祖九年事。年月雖不符、而姓名則合。且以下文寅答虎烏留守文義考之、其爲名氏顚倒無疑。今據改」。畢氏續通鑑考異云「疑載筆者未知烏古論爲姓、寅答虎爲名、文有顚倒耳」。錢氏諸史拾遺亦云「東平王世家作烏古倫寅答虎。烏古倫者、寅答虎之氏、非兩人也。史臣不辨姓名、傎倒其文、遂若別有一人矣」。然史天祥傳、「乙亥、與大帥烏野兒、降其北京留守銀答忽同知烏古倫」。烏野兒、卽吾也而。銀答忽、卽寅答虎。烏古倫、卽烏古論。烏古論爲寅答虎僚屬、史佚其名、而本紀又脫其官名、故使人疑其爲一人耳。明初史臣、雖昧於史事、豈不知烏古論爲姓耶。

金御史中丞李英、帥師援中都。戰於覇州敗之。通世案、本紀金上有三月二字、李英下有等字。

完顏福興仰藥死、抹撚盡忠棄城走、明安入守之。通世案、本紀完顏上、有「五月庚申、金中都留守」九字。

詔史

天倪南征、取平州。通世案、本紀取平州上、有八月天倪四字。平州、金屬中都路、今直隸永平府。木華黎遣史進道等、史原作大。張石州曰「本紀作賜進道」。繆案、大進道爲史進道之誤。進道、秉直之弟、天倪之從父。從木華黎攻廣寧府。均見進道神碑。通世案、殿本作史進道。錢氏考異云「監本、史或作賜者誤也」。今因改。攻廣寧府降之。

是秋取城邑凡八百六十有二。通世案、以上後人攙入之文。

丙子 十一年、宋嘉定九年、金貞祐四年。通世案、西史作鼠年。紀年復合。本紀云「春、還臚朐河行宮」。西史則云「牛年、帝旋師」。洪氏曰「應是子年旋師」。今考前文「上駐軍魚兒濼、命三合拔都云云」、是丙子年事也。史天祥傳亦云「丙子春、覲太祖於魚兒濼」。則丙子春夏、太祖猶駐魚兒濼。西史所記、蓋得其實。錦州帥張鯨以錦·廣寧等郡來降。俄而復叛、自號遼西王、改元大漢。上命木華黎以左軍討平之。秋濤案、張鯨之誅、紀作乙亥年、與此異。史載木華黎此年所討、乃張鯨之弟張致也。通世案、錦州、金屬北京路、今盛京錦州府。本紀云「九年甲戌冬、錦州張鯨、殺其節度使、自立爲臨海王、遣使來降。十年乙亥四月、詔張鯨、總北京十提控兵從南征。鯨謀叛伏誅。鯨弟致、遂據錦州、僭號漢興皇帝改元興龍。八月、木華黎遣也進道等、攻廣寧府降之。十一年丙子春、張致陷興中府、木華黎討平之」。錢氏考異云「按史進道神道碑「丙子、錦州渠帥張致叛。丁丑、從王提大軍攻拔之、張致伏誅」。此紀書張致叛於乙亥、討平於丙子、皆差一年。蓋沿元明善所撰木華黎世家之誤。當以碑爲據。史樞傳「父天安、丁丑從討叛人張致平之」、正與碑合。何實·王珣傳、俱以致叛繫之丙子歲。惟珣傳稱誅致卽在是年、稍有不合耳」。又云「據進道碑「丁丑、張致伏誅、王又令公招集廣寧府、兵及城下、開門迎降」。此亦丁丑年事。廣寧與錦州接壤、故因平張致、而并降之也。紀所書年月、多未可信」。然則張致之誅在丁丑、而此年所討、當卽張鯨。本書所記未可以其不合紀非之也。

丁丑 十二年、宋嘉定十年、金宣宗興定元年。上遣大將速不台拔都扳原作援、秋濤校改。以鐵裹車輪、征蔑兒乞部、通世案西史云「牛年、帝旋師。以聞蔑兒乞人逃至乃蠻西界外、集聚圖再擧、其地山高路險、乃命速不台巴哈都兒率軍、以鐵釘密布於車輪、庶行山路不易壞」。祕史云「牛兒年、成吉思造與速別額台一箇鐵車、教襲脫黑脫阿的子忽都等去、對說「他與咱廝殺敗著、走出去了。如帶套竿的野馬、中箭的鹿一般。有翅飛上天呵、你做海青拏下來。如鼠鑽入地呵、你做鐵鍬掘出來。如魚走入海呵、你做網撈出來」。又說「你越高山、涉大河、可趁軍每的馬匹未瘦、行糧未盡時、先要愛惜。路間不可輕易圍獵。若要因獵做行糧呵、也要斟酌著。馬的鞦幷閘環、不許套上。如此則軍每不敢走馬。若有違號令者、我認得的、便拏將來。不認得的、就那裏典刑了。可謹慎者。若天護助、將脫黑脫阿子每拏住呵、就那裏殺了者」。再說「當初我小時、被三種蔑兒乞拏、我將不兒罕山繞了三遭。這般有讎的百姓、如今又發言語去了。我欲教你追到極處、所以造與你鐵車。你雖離得我遠、如在近一般。行呵、天必護助你」。與先遣征西前鋒脫忽察兒三千騎合、通世案、西史作二千騎。三當作二。辛未年、脫忽察兒出哨西邊戍。亦作二。至嶄河、遇其長大戰、盡滅蔑兒乞還。秋濤案、速不台傳、載征蔑兒乞事、在丙子年、及己卯冬、盡降其衆。此書蓋終言之。通世案、伯哷津紀是戰、亦爲牛年事。多遜云「一二一六年、速不台攻篾兒乞特於阿爾泰山、軍至哲姆河、盡滅其衆。托克塔弟庫都與托克塔二子皆陣亡。一子庫圖堪善射、有默兒根之稱。速不台生擒之、檻致於朮赤。朮赤命以射。首矢中的、次矢劈前矢之簳、而亦中的。朮赤大喜、馳使告太祖、乞貸其死。太祖曰「蔑兒乞特吾深仇。留善射仇人、將爲後患」。仍令殺之」。西曆一二一六年、卽太祖十一年丙子。速不台傳云「滅里吉强盛不附。丙子、帝會諸將於禿兀剌河之黑林、問「誰能爲我征滅里吉者」。速不台請行。帝壯而許之。乃選裨將阿里出、領百人先行、覘其虛實。速不台繼進云云。己卯、大軍至蟾河、與滅里吉遇、一戰而獲其二將、盡降其衆。其部主霍都奔欽察。速不台追之、與欽察戰于玉峪敗之」。合考諸書、蓋丙子年命將、丁丑年戰于嶄河、至己卯年、而餘孽悉平也。哲姆河蟾河、皆卽嶄河。與本書己巳年之嶄河、巴而朮傳之襜河、河名全同、而其地則異。祕史卷十一云「太祖命速別額台、追脫黑脫阿子忽

禿赤老溫等、追至垂河、將忽禿等窮絕了回來」。垂河、即今吹河。洪氏因改哲姆河爲吹河、曰「蟾河鄭河、皆卽吹河之轉訛」。但華而甫書云「乃蠻古出魯克、旣竄喀剌乞鯛之國、襲阿而麻里克、殺其王鄂匝兒、略喀什噶爾、平和闐、遂侵軼畏兀兒地、遣托克塔之二子誘蔑兒乞特・乞兒吉思、遣托克塔之弟於闊闊諸爾、誘禿馬特作亂。成吉思遣哲別諸顏、征古出魯克、速不台巴哈都兒剿蔑兒乞特。速不台大戰于闊索郭勒湖上、殺托克塔三子、生獲第四子云云」。餘與多遜・伯哷津同。據此、則蔑兒乞之然餘燼、及下文吐麻部乞兒吉思部之叛亂。皆由古出魯克煽之也。闊闊諸爾不詳。闊索郭勒、淸圖或作庫蘇古爾、在烏魯克姆河源之東。霍渥兒特曰「華而甫所謂「蔑兒乞特人至蒙古北境、煽起諸部」、不知其所據。參考諸書、成吉思還自伐金、先平禿馬特、次使哲別征古出魯克、速不台及朮赤征蔑兒乞特、敗之哲姆河上。此戰不在蒙古北境、而在突兒基斯單東境。華而甫應是讀哲姆爲克姆」。今案、華而甫所述、未可悉廢。蔑兒乞人煽起諸部、蓋據阿布勒噶錫書。其說切當時勢、無可疑者。速不台征蔑兒乞、朮赤同往、而本書下文載戊寅年朮赤追乞兒吉思、順謙河而下、招降北境諸部。然則丁丑嶄河之戰者、似當在謙河之上游。記俟後考。又案、霍都奔欽察、亦見土土哈傳、云「太祖征蔑里乞、其主火都奔欽察。欽察國主亦納思納之。太祖遣使諭之云云亦納思答曰云云。太祖乃命將討之」。祕史亦云「蔑兒乞的忽都合勒赤老溫、過康里欽察種去了」。此事、西域諸史、絕無所見。喇施特云「忽都欲奔奇卜察克、蒙古軍獲而殺之」。見伯哷津史卷一第七十三頁。又多遜史卷一第百八頁、載「蔑兒乞特酋禿克托干爲蒙古所逐、率聚走氈的之北、爲其下所殺。蒙古敗其聚於海哩・哈迷池兩河間、殲滅之」。據此、則速不台此役、未嘗遠至欽察。而蔑兒乞餘聚入康里境、則諸書有徵。嶄河盡滅蔑兒乞之說、亦未必然。額兒忒曼云「呼勒圖罕奔奇卜察克而被擒、朮赤命殺之」。是採東西史書之說、强牽合之也。霍渥兒特又曰「禿克托干、卽喇施特之呼勒圖罕」。然呼勒圖罕、就擒而後被殺、禿克托干、爲其下所殺。此亦非可牽合。

是歲、吐麻部主 秋濤案、紀云「是歲、禿滿部叛」。蓋禿滿卽吐麻也。此吐麻部主下、語有譌脫。原文此下、卽接征西域事。案太祖之征西域、始於己卯、至乙酉春歸國、自出師凡七年。此年不得有征西事。又此條旣言是歲、則當繫於歲末、不當以有時月之事、反繫於後。其爲錯簡甚明。今攷本紀、取此下「避暑八魯灣川」、及「候八剌那顏」等事、移於癸未年。其癸未年所載「都剌莎合兒、旣附而叛云云」、則又此年之文、誤入於彼者。今俱攷正。又案、祕史云「命孛羅忽勒征豁里禿馬惕種」。禿馬卽吐麻也。其官人歹都禿勒、卽禿剌也。此謂之都剌莎合兒者、北方語或繁或略、譯語偶異也。通世案、祕史卷一云「闊勒巴兒忽眞地面的主人巴兒忽歹篾兒干有一箇女兒、名巴兒忽眞豁阿、嫁與豁里禿馬敦部落的官人名豁里剌兒台蔑兒干、爲妻、生了這阿闌豁阿名字的女兒」。豁里禿馬敦、卽豁里禿馬惕、亦卽此吐麻部也。喇施特以禿馬特爲巴兒古特中之一部落、且云「禿馬特部、居巴兒古眞脫古魯姆之地」。巴兒古特及巴兒古眞脫古魯姆、見前八兒忽眞之隘注

都剌莎合兒、旣附而叛。 秋濤案、都剌莎合兒、當是吐麻部主之名。說詳上。曾植案、都剌莎合兒、卽祕史豁里禿馬惕官人歹都忽勒莎豁也。蒙文如此。譯文止作歹都禿勒。通世案、華而甫書作塔禿剌克速喀兒。洪氏譯伯哷津書、幷取祕史本書之字、作歹都禿勒莎合兒。本書都上、疑有脫字。

上命博羅渾那顏・都魯伯二將討平之。博羅渾那顏卒於彼。 秋濤案、自都剌至此、舊本誤入癸未年「循河而南」之下。今攷正。又案、博羅渾那顏、卽卷首所稱良將四人之一、與都魯伯爲二人。元史博羅渾作博爾忽。傳云「博爾忽、許兀慎氏。事太祖爲第一千戶、歿於敵」。史文記其事如此、略之甚也。畢秋帆謂「博羅渾官止千戶、無他戰功」。蓋僅據元史、而不知攷於他書者。今攷征禿滿部、元史作「命鉢魯完・朵魯伯討平之」。鉢魯完、卽博羅渾。因譯語稍異、宋王諸公不能辨、遂與博爾忽誤分爲二。朵魯伯、卽都魯伯也。諸書或改作布琳都爾伯、則合二人爲一人。是誤而又誤矣。攷得此條、數書皆可是正。爲之忻快者累日。通世案、此條、西史稍詳。云「禿馬特先已降附、聞帝南征、遂復叛。此部兵聚素強。帝遣巴鄰人納牙諾延及朵兒伯諾延往討。納牙以病不行。帝躊躇久之、乃改命孛兒忽勒。孛兒忽勒問使者曰「此聚人所舉乎。抑上意乎」。使者曰「上意也」。孛兒忽勒曰「旣如是、我必往。以我之軀易人之血。妻子、惟主上憐之」。旣平禿馬特、孛兒忽勒亦陣沒。帝知其言、又聞其死、甚痛悼之、以是厚撫其子、告其家人「勿過悲哀、我必優卹」」。祕史則最悉情節、雖與二書稍異、蓋得其實。今備錄以供參考。「豁里禿馬惕種官人歹都禿勒已死、其妻孛脫灰塔兒渾管著百姓。太祖嘗許豁兒赤官人娶三十箇妻。豁兒赤知禿馬惕女子生得美、要娶三十箇、致那百姓反了、將他拏住。太祖得知、因忽都合別乞知林木中百姓動靜、所以使他去。也被他拏了、在孛脫灰塔兒渾處。太祖命孛羅忽勒征他。孛羅忽勒到時、令三人於大軍前行。至日晚、入深林徑路間、不覺他哨望的人自後至、將路截了、殺了孛羅忽勒。太祖聞知大怒、欲親征、孛斡兒出・木合里諫止。別命朵兒伯朵黑申再去征。朵兒伯朵黑申、嚴整軍馬、於先行的把截處、虛張聲勢、卻從忽剌安不合獸行的小徑行去。又恐軍人畏懼不行、令人各背條子十根、若不行的、用此懲戒。每人又各將帶鑄斧鋸鑿等器、將當路樹木除去。行至山頂、下視禿馬惕地面百姓、如天窗上看下面一般、大軍直進、彼中不想卒倒、就筵席間擒了。旣收捕了禿

馬愓後、賞與了孛羅兀勒一百禿馬愓的百姓、與了豁兒赤三十箇禿馬愓的女子、忽都合別乞處、與了孛脫灰荅兒渾」。塔兒渾、勇婦之美稱也。元史莫拏倫、西史云「稱莫奴倫塔兒袞、義謂有力」。

戊寅十三年、宋嘉定十一年、金興定二年。封木華黎爲國王、通世案、太祖紀云「以木華黎爲太師、封國王」。本傳云「詔封太師國王、都行省、承制行事、賜誓券黃金印、曰「子孫傳國、世世不絕」」。西史云「當木訶里在金境時、金人稱之爲國王。帝曰「此佳兆也」、至是遂封爲國王」。總率王孤部萬騎、孤原作狐、秋濤校改。火朱勒部千騎、通世案、伯哷津脫此部名。華而甫蒙古史作庫施庫勒。兀魯部四千騎、秋濤案、兀魯、史作兀魯兀。忙兀部將木哥漢札千騎曾植案、木哥、即元史忙哥、畏荅兒子、附傳尾。太宗本紀作蒙古寒札、次國王查剌溫茶合帶鍛眞之下、案陳那顏兄弟之上。又案、木哥其名、寒札其稱號。猶案陳那顏之那顏也。蒙古源流、濟典子孫、有明愛音札、有布延台音音札、蓋貴人稱號。即蒙古貴人、有歡津稱號、漢札對音字矣。通世案、西史作木勒格哈兒札、原注「忽亦兒荅兒之子」。弘吉剌部安赤那顏三千騎、通世案、西史作阿勒赤諾延、即按陳那顏也。亦乞剌部孛徒駙馬二千騎、秋濤案、孛徒即孛禿、史有傳、說見前。札剌兒部及帶孫等二千騎通世案、木華黎傳、帶孫郡王、孔溫窟哇第三子、木華黎之弟也。同北京諸部烏葉兒元帥秋濤案、烏原作鳥、今改。烏葉兒、即吾也兒、元史有傳。禿花元帥所將漢兵及北剌兒所將契丹兵通世案、西史云「契丹女眞之兵、烏葉兒元帥、禿花元帥統之」。無北剌兒名。原注「此二部人皆新附」。以二將能得此衆、故令其統率」。禿花、耶律阿海之弟、元史有傳。北、疑比之誤、當即上文比失兒。南伐金國秋濤案、封木華黎爲國王、紀及本傳、俱在丁丑年八月。此係於戊寅。或因戊寅年大擧南伐、故總記於此歟。姑因之、以備攷。又案、本傳稱弘吉剌・亦乞剌思・兀魯兀・忙兀等十軍、及吾也兒・契丹・蕃漢等軍。攷此錄載弘吉剌等止七軍、則本傳十、乃七之誤。通世案、本傳云「且諭曰「太行之北、朕自經略。太行以南、卿其勉之」。賜大駕所建九斿大旗、乃建行省於燕雲、以圖中原」。西史

原注「是時帝以金事付木訶里、而自謀西方之事」。此條、西史繫於虎年、與本書同。洪氏曰「覩下西域之役、似非丑年起衅。當以親征錄之寅年爲合」。然考金史宣宗紀、大元兵下益都・淄・沂・密等州、在丁丑之冬。是卽木華黎之南征、而與元史紀傳合。則其受命、必在丁丑年、本書西史俱誤。別遣大將哲別攻曲出律可汗、至撒里桓地克之。通世案、祕史云「命者別追古出魯克、追至撒里黑崑地面、將古出魯克窮絕了回來」、與本書合、惟祕史叙之虎兒年太祖卽位之次、蓋誤戊寅爲丙寅也。此條、西史甚詳。伯哷津譯本云「古出魯克、於龍年、自別失八里克、至庫爾車、歸於喀剌乞觪古兒汗。古兒汗收撫之爲義子、妻以其女。突而吉斯丹與麻費闌那喝拉、先皆古兒汗屬地。謨罕默德貨勒自姆沙、奉父遺命、亦歲貢三萬的那於古兒汗。既而吞併近境、國益强大、遂不納貢、又攻取布哈爾、命各城勿從古兒汗。乃有撒馬爾干酋諤斯滿亦來合。復通好於古出魯克、使者往遇諸途。先是古出魯克知古兒汗無能爲、東方屬部皆叛從蒙古、西域亦叛、又聞其父敗殘舊部、尙所在藏匿、思得其衆、以奪國土、言於古兒汗、曰「我離舊地已久。今蒙古往征乞觪。乘今之時、我往葉密里・哈押立克・別失八里克、招集潰卒、衆必來從。可藉其力、以衞本國」。古兒汗信之。既東行、乃蠻舊衆果來附、遂肆刦掠。復遇貨勒自姆沙之使、欲共謀古兒汗、卽約「東西夾攻。西勝、則西軍拓地、至阿力麻里克・和闐・喀什噶爾。東勝、則東軍拓地、至費那克特河」。議既定、古出魯克、卽進攻八剌沙袞。古兒汗與戰敗之。古出魯克退而集衆。而貨勒自姆與撒馬爾干之兵、已至塔剌思、擒古兒汗之將曰塔尼古。古出魯克乘機再進、獲古兒汗、陽爲尊崇、實則篡國自立。越二歲、古兒汗以憂恚卒」。洪氏曰「此與遼史「乘直魯古出獵襲執之」略異、而「尊爲太上皇、朝夕問起居」、則語意相類」。「古出魯克既得位、復娶一妃。勸以從佛教。由是諭令民間奉佛、不得奉謨罕默德。暴斂橫徵、每一鄉長家、以一卒監涖之。自至和闐。諭民改敎、出示招集謨罕默德教人、辯論教理。衆皆至、其爲首者、曰阿拉哀丁、與古出魯克、往復申辯、詞不屈。古出魯克慚沮惱怒、詈而縛之、釘其手足於門。衆情咸忿、而無如何、惟望帝軍之至。帝亦聞之、是年、遣哲別往征。哲別示諭民間、各守舊敎、從其先世所奉、勿庸更易。於是各鄉長皆殺監涖之卒爲應。古出魯克在喀什噶爾、軍未至、先遁。沿路居民、皆不容納。將入巴達克山、而哲別追及於撒里黑庫爾山徑窄隘處殺之、乃殲餘孽悉靖」。撒里黑庫爾、卽祕史撒里黑崑、本書撒里桓。西域水道記作色勒庫勒、云「在葉爾羌城西八百里、爲外蕃總會之區」。洪氏曰「案此節、必是拉施特增入、非國史所載。哀忒蠻譯述、則云「古出魯克至西遼、將謁古兒汗、慮有變、令從者僞爲己入謁、自爲從官、立門外。適古兒汗長妃之子格兒

八速自外至、心異其人、入而詢得其故、乃延入。格兒八速以女晃忽嫁之、三日卽成婚。晃忽時年十五、勸其夫勿信基督教、改從佛教。並以古兒汗年老好諛、告其夫以趨承之道」。餘云云同。「古出魯克、旣於葉密爾三處收集舊衆、卽至鄂斯懇、奪西遼之庫藏、攻八拉莎袞、爲西遼所敗。其時西域軍已至塔剌思、擒塔尼古。八拉莎袞之民、聞警城守、不令鄂思懇潰卒入城。潰卒之帥謨罕默德大石、率衆圍攻十日、以象毀門而入、大掠三日。繼而部下復叛其帥。古出魯克聞亂亟進、獲古兒汗。時天方歷六百八年、西歷一千二百十一二年。直魯古遜讓位。古出魯克尊爲父、仍稱爲帝、而自執國事。直魯古憂悶成疾、越二歲卒。在位三十五年。古出魯克又娶西遼宰相之女、甚美」。餘皆同。謂「是志費尼書中所云」。又「撒里庫爾道上、地名韋拉特尼、山谷幽僻、可入不可出。古出魯克匿於中。哲別遇牧羊人、詢知蹤跡、令獵者導路、獲而殺之、葉爾羌等處悉定。爲帝虎年之事」。案、遼史、直魯古在位三十四年、此多一年。其云西歷一千二百十一年、爲太祖六年辛未。錢詹事大昕諸史拾遺、謂「西遼之亡、當在辛未。諸家編年、皆係以辛酉、係誤」。得此、可爲確證。拉施特謂「古兒汗以女嫁古出魯克」。他書有謂孫女者。此乃外孫女。恐哀忒鑾誤譯、或是長妃格兒八速、而誤謂長妃之女也」。又案、元史曷思麥里傳云「曷思麥里、西域谷則斡兒朶人。初爲西遼闊兒罕近侍、後爲谷則斡兒朶所屬可散八思哈長官。太祖西征、曷思麥里率可散等城酋長迎降。大將哲伯以聞。帝命曷思麥里、從哲伯爲先鋒、攻乃蠻克之、斬其主曲出律。哲伯令曷思麥里、持曲出律首、往徇其地。若可失哈兒・押兒牽・斡端諸城、皆望風降附」。谷則斡兒朶、卽遼史本紀虎思斡耳朶、金史粘割韓奴傳、作骨斯訛魯朶、耶律楚材西游錄、作虎司窩魯朶、西遼都城也。在垂河之濱。西史謂之八剌莎袞。可散、西游錄作可伞。經世大典圖作柯散、在察赤東南。察赤、卽今塔什干。俄羅斯地圖、塔什干東南、今仍有喀散城。是時太祖未親征、曷思麥里葢降哲別、傳稍誤。洪氏曰「西書謂「獻其首於太祖」、則必行經葉爾羌・和闐等地、與史傳「持其首以徇地」之說、互相發明。西域書敍述此役亦非甚詳。但云「哲別敗古出魯克於昆都雅河」。卽今之裕勒都斯河、在天山南。又云「西域殺商奪貨之時、古出魯克僅有和闐・葉爾羌數城」。以意揣之、當是先平天山西北西遼故都之地、又追逐至天山以南、而蒇事於葱嶺之西」。

先吐麻部叛、上遣徵兵乞兒乞兒部、不從、亦叛去。通世案、下兒字當作思、卽乞兒吉思也、多遜亦作乞兒吉思。遂先命大太子往討之、命大二字原倒置。繆滅去大字。曾植案、大字當在命字之下。通世因校正。以不花爲前鋒、秋濤案、祕史「兔兒年、成吉思命拙赤、引右手軍、去征林木中百姓、令不合引路」。不合卽不花也。惟祕史稱兔兒年、與此戊寅年不合。通世案、丁卯年、乞力吉思降附、是年因叛討之。祕史誤併兩事爲一時事。洪氏曰「元史親征錄西書、載征禿馬、皆在丁丑、而祕史誤繫於朮赤收附斡亦剌・乞兒吉思等部之後、伐金之前細審其由、葢因朮赤兩至乞兒吉思、第二次師由禿馬而起、而祕史只志一役、是以致誤」。又案、不花、木華黎之弟也。太祖滅主兒乞時、從父古溫兀阿降附。見祕史。

追乞兒思、至亦馬兒河而還。通世案、思上又脫吉字。亦馬兒河不詳。大太子領兵涉謙河水順下、通世案、謙河、今云克姆河。烏魯克姆・貝克姆・克姆池克三河合而北流、入俄羅斯境、爲葉尼賽河。詳見元史譯文證補謙河考。朮赤補傳、作「還至謙河、涉冰北行」。自注曰「亦馬兒河無考、或卽葉密爾河。葉密爾河濱、有葉密爾城、見耶律希亮傳、劉郁西使記作業滿。是知葉密・亦馬、音近易訛。若然則是遠追至西南、還軍東北、涉西流之謙河。旣渡河後、仍循河之北流以行。故曰「涉謙河水順下」。以此註親征錄、字字皆有下落、當不謬也。履冰過謙河、見西書」。

招降不困克兒爲思・秋濤案、不困二字葢誤衍、令刪。通世案、六字不可考。何氏以克兒爲思謂「卽乞兒吉思」故刪不困二字。然對音不協。當存六字以竢後考。憾哈思・帖良兀・克失的迷・火因亦而干諸部。秋濤案、此事、元史不載。大太子、卽朮赤也。史不言其戰功、得此可補其闕。克兒爲思、當卽乞兒吉思部。曾植案、火因亦兒干、卽祕史所謂林木中百姓也。蒙語、林曰槐因、百姓曰亦兒干、亦曰亦兒格。見祕史蒙文。通世案、元史類編朮赤傳注「大方通鑑云「朮赤伐烏思・憾哈納思・帖良兀・克失的迷・火因亦兒干等部、皆降之」。時太祖十二年歲丁丑事」。大方通鑑之文、葢本於本書。無不困克兒、以爲思爲烏思。元史西北地附錄注有烏斯、當卽此烏思。若然則不困克兒、亦當是一部之名。憾哈納思、西北地附錄作撼合納、劉哈剌拔都魯傳作憨哈納思、祕史作哈卜哈納思。此憾哈思、哈下脫納字。喇施特云「謙河之源有八河。衞拉特居於左。近其東有烏拉速特・帖連郭特・克斯的迷三族、居拜喀勒湖西、與衞拉特・乞兒吉思爲隣。以住於林木間、號爲林民」。烏拉速特、祕史作兀兒速特。帖連郭特、祕史卷七作帖良古、卷十二作田列克、卽此帖良兀。克斯的迷、祕史作客思的音卽此克失的迷。火因亦而干、則諸部之統稱、非部名也。乞兒吉思撼合納之事、詳西北地附錄釋地。

己卯　十四年、宋嘉定十二年、金興定三年。上總兵征西域。秋濤案、祕史、太祖征回回、爲其殺使臣兀忽納等百人。本紀云「己卯夏六月、西域殺使者。帝帥師親征」。通世案、西

域謂貨勒自彌之國。其地在鹹海南、裏海西。卽唐書西域傳之貨利習彌、元史地理志之花剌子模。西人譯爲闊
喇自姆、或云闊斡哼自姆。洪氏詢之波斯使臣、審定字音、爲貨勒自彌、始知唐書譯音、尤勝元史。貨勒自彌
沙阿拉哀丁謨罕默德、幷吞諸部、其疆域東北至錫爾河、東南至印度河、北至鹹海・裏海、西北至阿特耳拜占、
西隣巴格達特、南至印度海、國勢洸洋、奄有唐波斯昭武九姓吐火羅等故土。本其始起部落、稱貨勒自彌之朝。
元史本紀、蓋據本書、謂之西域。洪氏用其稱作補傳、曰「循漢書之名、名曰西域」。又曰「揣度本紀命名之意、
實有苦心。列傳改稱回回國、則甚謬」。案、回回者、回紇之轉也。唐之回紇、卽元之畏兀兒、與貨勒自彌之國
夐異。然長春西游記、併畏兀兒與貨勒自彌國人、皆云回紇。元史列傳、亦往往稱回紇、多是指貨勒自彌國而
言。祕史蒙文、稱其民爲撒兒塔兀勒、譯云回回。皆名實不相稱。貨勒自彌朝之興起、與太祖西征之役、志費
尼・喇施特之史甚詳。今依洪氏所譯多遜書、具錄其要、以備參考。北宋時、塞而柱克王瑪里克沙、有僕曰奴世
的斤、執刀衞左右、甚見寵任、除僕籍、爲貨勒自彌部酋、職視閫帥。其子庫脫拔丁謨罕默德、乘塞而柱克朝
之衰、諸酋裂土自王、亦僭稱貨勒自彌沙。金既滅遼、耶律大石西來、敗塞而柱克之兵、復遣將征貨勒自彌。
時庫脫拔丁已卒、其子阿切斯、戰敗被擒、誓臣服、歲貢金。乃與盟釋歸。阿切斯子伊兒・阿斯蘭、亦服屬西遼、
而呑併東南近境。伊兒阿斯蘭子塔喀施、於宋光宗紹熙五年、滅塞而柱克朝、殺其王托克洛耳、受巴格達特哈
利發那昔爾之封。是爲貨勒自彌之朝。宋寧宗慶元六年、塔喀施子阿拉哀丁謨罕默德嗣位、復併巴而黑・海拉脫・
馬三德蘭・起兒漫各部之地、戰敗奇卜察克、自以地廣兵雄、恥納貢於異敎之國。其時撒馬爾干酋謌斯滿、亦不
甘臣西遼、而願從西域王。西遼使者、至貨勒自彌。舊例使者坐王側。王斥辱之。使者忿爭。卽分斫其軀。元
太祖四年、王擧兵向西遼。兵敗併其將被獲。王乃僞爲將之僕。其將令回國取貲贖主、得逸歸。而貨勒自彌之
地、已徧傳王隕於軍。王弟阿立希耳、與其伯叔、將分國自立。王歸、乃定。次年、復與謌斯滿合兵、敗西遼
凱旋、以女妻謌斯滿、逐西遼監治撒馬爾干官、遣使代涖。未幾謌斯滿與使者不相能、殺之。太祖八年、西域
王輕兵掩襲、乘未備、破其城、謌斯滿頸繫刃、首羃布、以乞降。王女以謌斯滿先娶西遼皇女、怨其夫寵禮不相
等、唆父殺之。於是撒馬爾干・布哈爾、悉入版籍。建新都於撒馬爾干、稱貨勒自彌之烏爾鞬赤城爲舊都焉。乃
蠻酋古出魯克、竊西遼之國、攘直魯古之位、西域王實犄角之。故突耳基斯單之地、向屬西遼者、亦被割據。

國之東南境、有郭耳國。其王希哈潑哀丁、攻西域王而敗、旋病歿。姪馬赫模特嗣位、貢於西域王。在位七年
被害。或謂「卽王主使」。阿立希耳、前以訛傳兄歿、分國自立之嫌、避於郭耳非洛斯固都城。至是請於兄、欲
得馬赫模特之位。王遣使錫冠服、乘其迎受、突前殺之。於是郭耳地亦併入。後得其屬地曰嘎自尼、檢舊藏文
卷、得哈里發那昔爾與郭耳王書、告以「貨勒自彌人、志在囊括席捲、須愼防之。唯謀於西遼、南北合攻、庶
可得志」。從前希哈潑哀丁之構兵、蓋哈里發啓之也。王見書大怒、遣使巴格達特、欲如塞而柱克朝故事、遣官
涖治、專以敎事屬哈里發、祈禱文增己名、並封己爲蘇爾灘。那昔爾不允。王乃傳集各敎士、數那昔爾不能廣
闡敎化之罪、曰「巴格達特之阿拔斯朝、實奪忽辛之位。今宜廢那昔爾、別立阿里後裔爲哈里發」。衆敎士應曰
「然」。遂發檄起師、先平義拉克阿鄰之亂、敗法而斯兵、擒其部主沙特阿塔畢。割地輸賦、乃釋之。阿特耳拜
占部主鄂思伯克敗遁、旋亦來請成。太祖十三年戊寅、遂往巴格達特。中途大雨雪、士馬僵斃。前鋒在庫兒忒
山中、爲土人所攻、一軍幾盡沒。乃引退、至義拉克阿鄰、畀羅克訥丁、以起兒漫克
赤・梅克藍、畀吉亞代丁、畀札拉勒丁忙果必而體以嘎自尼・八迷俺・波斯忒・郭耳之地。鄂斯拉克沙爲王母土而堪
哈敦所鍾愛、欲其子傳位、畀以貨勒自彌・呼拉商・馬三德蘭三部。西域之民、竊議其私祿位於子。王有兵四十萬、
皆康里人突克蠻人、與民不洽。土而堪哈敦、爲康里巴牙烏脫部主勤克石之女。康里人多從至西域、入伍籍、
勇於戰陳。王倚其力、戰勝攻取。以是康里將多跋扈橫索。土而堪之權、亦以是埒於其子。國雖大、本未固也。
先是太祖伐金、傾國遠出。乃蠻・蔑兒乞、得以其暇復然餘燼、煽結遠近。太祖十一年丙子、自引大軍北還、次
第命將定遼東之亂、討蔑兒乞、平禿馬特、自將征西夏克之。命哲別征古出魯克、戰勝逐北、逃至喀什噶爾。
民銜舊恨、殺其部卒。復西奔、僅三人從。哲別追至撒里庫爾、捕之於韋拉特尼谷中、斬其首、以徇各地。西
遼境內悉定。於是東惟蒙古、西惟貨勒自彌、兩大國壤錯界接、而西征之役起。當西域王自巴格達特東歸、旣
定諸子封地、遂至布哈爾。其時天山西北西遼之地、已入蒙古、萑苻悉靖、行旅無阻。有西域商三人自東來、
賚太祖所饋白駱駝毛裘麝香銀器玉器、述太祖語、若謂「予知貴國爲極大之國、君治國才能、遠邁於衆。予慕
悅君、等於愛子。君亦應知予已平女直、盡撫有諸部族、予國之兵如武庫、予國之財如金穴。予亦何必再攘他
人地耶。願與君締交、通商賈、保疆界」。卽夕王召其中一人曰馬黑摩特入見、曰「汝爲我民、當以實告。聞彼
征服塔姆嘎自、然否」。塔姆嘎自、西人呼漢土之稱也。因啓盒、取珍珠與之。馬黑摩特對以實然。王又曰「蒙
古汗、何等人、乃敢視我如子。彼兵數幾何」。馬黑摩特見王有怒意、乃曰「彼兵雖衆、然與蘇爾灘相衡、猶燈

餘之與日光也」。王意釋、令徃報如約。未幾又有西域商自東還。太祖命親王諾延各出貲、遣人隨以西行、購其土物。有聚四百數十、皆畏兀兒人。行至訛脫剌兒城。城酋伊那兒柱克嘎伊兒汗悉拘之、以蒙古遣細作告於王、王令盡殺之、惟一人得逸歸報。訥薩斐云「其中四人爲所遣、餘皆商侶。以其詢訪各地出產、盛言蒙古之强、跡近窺探、故殺之。然亦伊那兒柱克之意、非王命也」。耶律楚材西游錄云「訛打剌城渠酋、嘗殺命吏數人、商賈百數、盡掠其財貨。西伐之舉由此也」。與西書符合。當巴格達特之被兵也、哈里發蓄忿思報復、而環顧列邦、無可謀者。聞蒙古盛强、乃遣使潛來、導以西伐。然太祖方修隣好、無用兵意。既聞逸者歸報、驚怒而慟、免冠解帶、跪禱於天、誓必雪恨。洪氏曰「哈里發遣使、多桑未載、哀忒蠻載之。其後札剌勒丁、自印度西還建國、首攻報達、謂「蒙古之兵、由哈里發招致」。多桑又載之。則其始起事、必有因、故據以增入。哀忒蠻云「薙使人之髮、書字於頂、迨蓄髮稍長、乃潛蹤東行。既謁太祖、具言來意。詢以訂據、則請薙髮譯其頂上字。若云「請汝來攻貨勒自彌國」。然太祖重信約、以方修好、不欲用兵云云」。據此以觀、實是西域自取滅亡、而太祖兵以義動矣」、其時古出魯克餘孽猶未靖。乃先遣西域人巴格拉爲使、偕蒙古官二人徃詰責、謂「先允互市交好、何背約。如訛脫剌兒所爲非王意、請以酋爲償、返所奪貨。不則以兵相見」。王箠死巴格拉、薙蒙古官鬚、釋歸以辱之、自聚兵於撒馬爾干。忽錫爾河北警至、蔑兒乞部人自康里境來。王亟由布哈爾、至氈的城。至則聞古出魯克已死、蔑兒乞逐。王北行、抵海哩·哈迷池兩河間、見蔑兒人被殺者、相屬於道。一人傷未死。詢之則云「蒙古軍夜追及、戕我等而東去。計行程當未遠也」。進軍追之、越日追及。蒙古將遣使來告「我所仇者、蔑兒乞特、與他國無釁。出師時奉主命「若遇貨勒自彌人、當以友誼相待」。今請分所掠以犒師」。王輕其兵少、乃曰「汝雖不仇我、上帝命我仇汝蒙古」。遂戰。蒙古兵敗其左翼、攻至中軍。札剌勒丁以右翼敗蒙古兵、來援中軍。至夕始罷戰、勝負略相當。蒙古兵多然燈火於營、乘夜疾馳去。王亦引歸。洪氏曰「拉施特未言蒙古將何人。訥薩斐謂「係朮赤」、阿卜而嘎錫未言蔑兒乞、但云「朮赤逐古出魯克已散之餘黨、戕之於喀白里·喀立蚩兩河間而去。西域兵追及、朮赤欲戰。諸將以「衆寡不敵。出師時、惟奉命平乃蠻餘孽、未奉命與他國搆兵。我退而彼復進、若僅偏師、乃可以戰」。朮赤怒謂「見敵而逃、何以歸見我父及諸弟」。遂戰。朮赤十盪十決、幾攻至中軍旗下者數矣。札剌勒丁敗蒙古旁翼、來援中軍。朮赤不得逞。夕罷戰、多爇火以疑敵、未曉即馳去、歸告太祖、大見嘉獎」。與此微異。案元史耶律留哥傳「子薛闍從征西域。帝曰「回回圍太子於合迷城。薛闍引千軍救出之、身中槊」」。此言哈迷池河、疑河旁有合迷城、或即此役。又案、速不台傳「己卯、追蔑兒乞部主霍

都、至欽察、戰於玉峪敗之」。蔑兒乞之滅、錄云嶄河、祕史云垂河、蓋即吹河。考今俄圖、塔什干北偏西約五百里、有喀迷池克河、必即此哈迷池河。東至吹河僅四百餘里。西流盡處、距錫爾河咫尺。速不台此役、未必遠至欽察、史傳之言、不盡可憑。而與貨勒自彌之軍相遇、則地里極合。至康里居地、徧考西書、當以鹹海之東爲合。他西域人、亦有謂速不台之師者」。西域王既歸撒馬爾干。知蒙古爲大敵、心怯戰、集諸將議計、以爲野戰不利、不如深溝高壘、任其飽掠颺去。議既定、乃以其軍分守錫爾河阿母河各城。伯哷津曰「兔年、帝集諸子各將帥、會議伐西域、定軍中章程」。兔年既太祖十四年己卯、而未言出師。祕史云「兔兒年、太祖去征回回、命弟斡惕赤斤居守、以夫人忽闌從行」。西游錄云「戊寅、出雲中、達行在所。明年、大舉西伐」。耶律楚材傳亦謂「己卯夏六月、帝西討回回國」。本紀云「己卯夏六月、西域殺使者、帝率師親征」。西域殺使者、即戊寅年事、而親征乃在己卯也。洪氏曰「帝駐也兒的石河、應是己卯夏。而西域史「辰年方至也兒的石河」、與親征錄同。由此而見脫必赤顏之叙西伐、誤始龍年。元史既本之、而又考知他書始於己卯、據以增入。於是攻取蒲華·薛迷思干兩城、一事兩記。譯西域史、乃知其病在此」。長春西遊記、己卯年五月、劉仲祿在乃滿國兀里朵得旨。此在太祖親發之前一月。兀里朵、即下文窩里朵、長春辛巳六月所駐車、所謂「窩里朵、漢語行宮也。其車與亭帳、望之儼然。古之大單于、未有若此之盛也」者。西游錄所謂「戊寅達行在所」、蓋亦至此窩里朵也。多遜云「一二一八年之末、成吉思發鄂爾多、留弟斡赤斤、委以國政」。西曆一二一八年、即戊寅年也。與諸書不合。考后妃表、太祖有四斡耳朵。戊寅之末所發者、克魯倫河源之大斡耳朵、而己卯之夏、發乃蠻之舊庭耶。竢後考。

庚辰、十五年、宋嘉定十三年、金興定四年。上至也兒的石河、住夏。通世案、此己卯夏事也。本書自庚辰至甲申、皆誤後一年。伯哷津云「龍年、成吉思在伊兒的失河駐夏、以復殺商之仇、遣使徃告謨罕默德貨勒自彌沙。秋進兵」。與本書同。二書皆沿脫必赤顏之誤、如洪氏所說。本紀於庚辰夏、書駐蹕也石的石河、亦本本書也。上石字當作兒。多遜云「一二一九年、大軍至伊兒的失河上駐夏、以養馬力、補足騎兵」。西曆一二一九年、即己卯年也。西遊記、庚辰二月、長春入燕京、聞行宮漸西、謂己卯秋進兵事也。可知駐夏在己卯、不在庚辰。又案、太祖自乃蠻鄂爾多、至額爾齊斯河、諸史皆不載其

行路。長春所跋涉、蓋大軍經過之蹤也。西游記、辛巳六月二十八日、泊窩里朶之東。皇后請師渡河、入營駐車。玻塔寧曰「此鄂爾多當在色棱嘎河一源額特爾河之傍」。七月九日、西南行五六日、又三二日歷一山、高峯
如削、松杉鬱茂、而有海子。南出大峽、則一水西流。玻塔寧以爲「高峯、謂杭愛之一峯鄂特昆嗒伊爾堪山、山麓有一湖、爲博古鼎河之源。一水西流者、烏里雅蘇台河也」。北有故城曰曷剌肖。布哷特淑乃德爾曰「此名
稍似烏里雅蘇台」。西南過沙場又五六日、踰嶺而南。二十六日、阿不罕山北、鎮海來謁。八月八日、傍大山西行、又西南行三日、復東南過大山、經大峽。中秋日、抵金山東北少駐、復南行。其山高大、深谷長坂、車不
可行。三太子出軍、始闢其路。約行四程、連度五嶺、南出山前、臨河止泊、因水草便數日乃行、渡河而南。布哷特淑乃德爾曰「觀長春所過之山路、係大軍西進時所闢、則知其行程與大軍同。又據「水草便」及「渡河」
二語、蓋長春等踰烏蘭達班、至布爾干河也」。自此而後、長春等南涉沙陀、向畏兀兒地。大軍則爲養馬力、西至額爾齊斯河上矣。克闌河及額爾齊斯上游之溪谷、至今以畜牧便地著稱。秋進兵、所過

城皆克、通世案、多遜云「畏兀兒王巴而朮克、柯耳魯克王阿而斯蘭、阿而麻里克王雪格那克的斤、皆以兵來會。秋進軍、衆號六十萬。貨勒自姆偵者歸報「蒙古兵不可勝紀。飢餐羊馬之血、渴不得水、則飲
其血、行不賫糧、戰不反旆、萬衆一心、有進無退」。謨罕默德惶懼、計無所出。太祖軍至錫爾河、無禦者」。洪氏曰「原書評謂「西域王漫無布置、坐守致斃、不類其向日所爲」。或謂「觀象者告王「凶星守舍、戰必不利。
惟當堅守待時」」。或謂「王旣併各地、志滿氣驕、將怨其王、王疑其將、故使分守各城、以防內亂」。訥薩斐則謂一有西域人貝鐸哀丁、全家受刑、怨其王、知國之隱情、投入蒙古獻策、僞爲康里將與成吉思汗書、曰「我等
所以盡力、輔王成大業者、爲土而堪哈敦故也。今王乃不孝其母。大軍如來、我等當內應」。故遣其書使王見之。王果大疑、遂不敢在軍中、而爲分地自守之計」。揣度不一。觀速不台傳「其主委國而去」、則未嘗力禦、固可知矣」。
案、雪格那克的斤、鄂匝爾之子也。鄂匝爾爲古出魯克所殺、太祖命嗣其位。又案、大軍自額爾齊斯河上至錫爾河、有西遊錄西遊記、可以考其行程。錄云「道過金山。金山而西、水皆西流入海」。謂烏隆古河入赫色勒巴
什湖、額爾齊斯河入齋桑湖之類也。又云「其南有回鶻城、名別石把。城西二百里、有輪臺縣」。記云「南出金山前、渡河而南、度白骨甸、涉大沙陀、至回紇小城北、沿川西行、歷二小城、至鼈思馬大城」。此大唐時北庭
端府。其西三百餘里、有縣曰輪臺。又歷二城、至昌八剌城」。鼈思馬、卽別石把、元史之別失八里、畏兀兒都城也。克剌普羅特曰「別失八里克、今烏魯穆齊」。而洪氏從之。然據此說、則無可以處輪臺。徐松曰「唐北庭

大都護府治、在今濟木薩之北。端卽都護字之合音。輪臺縣治、約在阜康縣西五六十里」。昌八剌、地理志作彰八里、耶律希亮傳作昌八里。程同文曰「中統元年、阿里不哥反。希亮踰天山、至北庭都護府、二年、至昌八
里城、夏、踰馬納思河、則昌八里、在今瑪納斯河之東也」。錄云「瀚海去別石把城數百里。過瀚千餘里、有不剌城。不剌南有陰山、山頂有池。出陰山、有阿里馬城」。記云「並陰山而西、約十程、又度沙場五日、宿陰山
北。詰朝南行、長坂七八十里。又西南行約二十里、忽有大池。沿池正南下、左右峰巒峭拔。衆流入峽、奔騰洶湧、曲折彎環、可六七十里。二太子扈從西征、始鑿石理道、刊木爲四十八橋、橋可並車。
出峽入東西大川、次至阿里馬城」。錄之瀚海、卽記之沙場。徐松曰「晶河城東、至托多克、積沙成山。東距阜康縣、一千一百里、故云十餘程」。不剌、地理志作普剌、耶律希亮傳作布拉、西史曰普剌特。洪氏曰「今城已
廢。當在博羅塔拉河左近、南臨賽剌木淖爾」。徐松曰「自托多克過晶河、山行五百五十里、至賽剌木淖爾東岸、所謂天池。並淖爾南行五十里、入塔勒奇山峽、諺曰果子溝。溝水南流、勢甚湍急。架木橋、以度車馬。峽長
六十里、爲四十二橋、卽四十八橋遺址」。東西大川、謂伊犂河之谷。阿里馬、地理志作阿力麻里、喇施特作阿勒麻里克。洪氏曰「在今伊犂西、遺址無徵、要非甚遠」。錄云「又西有大河曰亦列」、記則云「又西行四日、至荅
剌速沒輦、乘舟以濟」。亦列河、卽今伊犂河。徐松曰「荅剌速沒輦、卽伊犂河」。吹列爾曰「記者偶誤寫」。布哷特淑乃德兒曰「蓋錯簡」。案長春歸路、自吹沒輦、東行十日、濟大河、又三日許至阿里馬城。大河、卽伊犂河
也。錄曰「其西有城、曰虎司窩魯朶、卽西遼之都」。記云「南下至一大山、又西行五日、又西行七日、度西南一山、至回紇小城。西南過板橋渡河、至南山下、卽大石林牙。其國王遼後也云云」。所渡之河、卽吹沒輦也。
錄云「又西數百里、有塔剌思城」。記云「沿山而西、七八日山忽南去。一石城當途、石色盡赤。有駐軍古跡。西有大塚、若斗星相聯。又渡石橋、並西南山、行五程、至塞藍城」。記者以伊犂河、誤作荅剌速沒輦、故此處
不言塔剌思河。然渡石橋、蓋塔剌思河橋也。布哷特淑乃德爾曰「長春蓋濟伊犂河之後、並阿拉套山西行、遵舊驛路度、喀斯特克嶺、於今托克馬克渡珠河、達亞歷山德爾山脈之麓、遵今驛路西行、至塔剌思河、於今澳流
阿塔邊渡其河。塞藍城在沁肯特東十三英里、今猶存。自澳流阿塔至塔什干驛路、過賽藍傍」。錄云「又西南四百餘里、有苦盞城」。苦盞西北五百里、有訛打剌城云云」。記云「西南行復三日、至一城。明日又歷一城。復行
二日、有河、是爲霍闡沒輦、由浮橋渡」。布哷特淑乃德爾曰「二城之一、當是塔什干城。霍闡沒輦、阿剌伯地理家之賽渾河、卽今錫爾河也。郭寶玉傳作忽章河、明史西域傳作火站河。赫爾洲羅特曰「阿剌伯人呼賽渾河

爲那哈兒闊展特、卽闊展特河」。長春蓋於齊那斯渡之」。長春行程、與大軍不同之處、蓋在賽藍以西。

至斡脫羅兒城。斡原作幹。秋濤案、本紀作斡。通世因改。上留二太子三太子攻守、尋克之。文田案、斡脫羅兒者、西北地附錄之兀提剌耳也。耶律楚材西遊錄云「苦盞西北五百里、有訛打剌城、附庸城十數。此城渠酋、殺命吏數人。西伐之擧由此也。訛打剌西千餘里、曰尋斯干云云」。所謂訛打剌、卽本紀重出之訛荅剌、亦卽此斡脫羅兒矣。通世案、祕史作兀都剌兒、小阿兒昧尼亞王海屯紀程書、作鄂特拉兒。城已久廢。列兒出曰「故趾在錫爾河之東支阿里斯河口之北、北緯四十三度之地」。多遜云「己卯秋、薄訛脫剌兒城」。洪氏曰「當日軍行之路、有邱長春西游記、行程可考。計師行迅速亦須兩月餘。故他西書謂「西十月至城下」。合之中歷、則九月間也」。「分軍爲四、察合台・窩闊台一軍、留攻城。朮赤一軍、西北行攻鄭忒城。阿剌黑・速格圖・托海一軍、東南行攻白訥克特城。皆循錫爾河。太祖自與拖雷將大軍、逕渡錫爾河、趨布哈爾、以斷其援兵」。洪氏曰「是時西域王駐撒馬爾干在東、布哈爾在西、其舊都烏爾鞬赤更在西北。搗其中、則新舊都呼應不靈、所以斷其援也。先西破布哈爾、返而東攻撒馬爾干 太祖兵法如是」。「察合台・窩闊台之攻訛脫剌兒也・伊那兒只克嘎伊兒汗部兵數萬、繕守完備。蘇爾灘謨罕默德分軍萬人、令將哈拉札率往助守。攻五月、不下。哈拉札以力困議降。伊那兒只克自知無生理、誓死守。哈拉札夜率親軍、潰圍遁、被獲、乞降。因詢得城內虛實、數其不忠之罪而誅之、遂克其城。伊那兒只克退守內堡、一月始下。檻致撒馬爾干大軍、鎔銀液、灌其口耳、以報殺商奪貨之仇、夷其城、殲其衆」。伯哷津云「哈伊兒汗率親兵三萬、守城內堡塞、屢出戰。相持一月、死亡已盡、僅餘二卒、猶自登屋、揭瓦擲人。既被獲、殺之於庫克薩萊」。庫克薩萊、太祖圍撒馬爾干時御營所在也。本紀云「己卯夏六月、帝率師親征、取訛荅剌城、擒其酋哈只兒只蘭禿」。哈只兒只蘭禿、哈伊兒及哈拉札之譌歟。本紀蓋依他書、紀訛荅剌之戰。其年合、其月未合。又云「庚辰秋、攻斡脫羅兒城克之」。此依本書也。誤後一年、與伯哷津同。多遜・伯哷津又云「阿剌黑諾延・速格圖・托海、將五千人、攻白訥克特。守將伊勒格圖蔑里克、率康里兵、大戰三日。至第四日、城民請降。分兵民工匠於三處、而盡殺康里兵、取工匠隨軍、驅民間壯丁、以往忽氊。守將帖木兒蔑里克、分精兵千人、守賽渾河中洲、矢石不能及、與城守爲犄角。阿剌黑三將、以兵力不足、請濟師、於忽氊・訛脫剌兒四鄉、擄民五萬、運石於山、塡河築堤、以達於洲。帖木兒造舟十二艘、形如穹屋、裹以濕氊、塗泥潑醋、以禦火箭、每晨分兩隊迎敵。然河堤漸成、砲石紛集。帖木兒見事急、以舟七十二艘、載軍士輜重、以往白訥克特。蒙古

軍先以鐵索鎖河。斫斷之、始通。而兩岸皆追兵、前路亦多阻。捨舟登陸、且戰且行、兵死傷殆盡、僅三人從。射追者中目、乃得脫。遂至烏爾鞬赤、取其兵、以往養吉干、殺朮赤所置守吏、復回烏爾鞬赤、其後從札剌勒丁。

辛巳、十六年、宋嘉定十四年、金興定五年。上與四太子、追攻卜哈兒・薛迷思干等城、皆克之。秋濤案、迷原作迹、今據元史本紀改。是時耶律文正公楚材從征。湛然居士集、有庚辰西域清明詩、又有進庚午元厤表、云「庚辰、聖駕西征、駐蹕尋思干城。是歲五月望、以太陰當虧三分、食甚子正、時在宵中、是歲候之、未盡初更、月已食矣」。攷邱長春西游記云「辛巳十一月十八日、過大河、至邪米斯干大城之北。大師移剌國公、及蒙古・回紇帥皆來迎」因駐車焉、俟來春朝見」。由東北門入。其城因溝岸爲之。秋夏常無雨。國人疏二河入城、分繞巷陌、比屋得用。方筭端氏之未敗也、城中常十萬餘戶。國破以來、存者四之一。其衆大率多回紇人。城中有岡、高十餘丈。筭端之新宮據焉。又見孔雀大象、皆東南數千里印度國物」。程廷尉同文曰「邪米思干、亦曰尋思干。尋卽邪米之合音。耶律晉卿又謂之尋窟虔。譯曰「尋窟、肥也。虔、城也」。今謂之賽瑪爾罕。自北廷至此、大率西行。過此則大率南行。最爲西征扼要之地。故於此宿兵、而以耶律晉卿駐焉」。通世案、卜哈兒、祕史作不合兒、元史察罕傳作孛哈里、地理志作不花剌。經世大典圖、在撒麻耳干西偏南。洪氏曰「案西國輿地、布哈爾都城稱布哈拉、與此(地理志)正同。元史人名不花者、皆應作布哈、義謂牡牛也。西域人云「最古之城」。唐中宗時、屬於阿剌比、唐昭宗後、西域之薩蠻朝、建都於此」。案唐書西域傳「安者、一曰布豁、又曰捕喝、西瀕烏滸河」。布豁・捕喝、皆布哈之異譯。布哈爾、在唐時其名已見、謂非最古城哉」。薛迷思干、中古西人呼撒馬爾干之名也。祕史蒙文作薛米思堅、亦作薛未思加。西游記、前作尋思干、後作邪米斯干。尋思干之名、早見遼史天祚紀。皆一音之轉也。薛迷思干音最協。突厥語、薛迷思謂肥、晉卿譯甚當。西遊錄云「訛打剌西千餘里有大城、曰尋思干。尋思干者、西人云「肥也」。以地土肥饒、故以名。甚富庶。用金銅錢、無孔郭。環城數十里、皆園林。飛渠走泉、方池圓沼、花木連延、誠爲勝槩。瓜大者如馬首。穀無黍糯大豆。盛夏無雨。以蒲萄釀酒。有桑不

能䖆、皆服屈眴。以白衣爲吉、以青衣爲喪服、故皆衣白、尋思干西六七百里、有蒲華城。土產更饒、城邑稍多。尋思干、乃謀速魯蠻種落梭里檀所都。蒲華・苦盞・訛打剌城皆隸焉」。謀速魯蠻、卽木速兒蠻、謂謨罕默德教徒。梭里檀、卽蘇爾灘。蒲華卽布哈拉。苦盞卽闊展特。訛打剌卽訛脫剌兒也。元代史志、唯地理志及經世大典圖、作撒麻耳干。明史謂「元太祖蕩平西域、易前代國名以蒙古語、始有撒馬兒罕之名」洪氏曰「西人云「薛迷思干、爲隣部之所稱。若其本境自稱、則實是撒馬兒罕」。唐書西域傳「康者、一曰薩末鞬、亦曰颯末建」。唐玄奘西域記亦云「颯末建國、唐言康國也」。撒馬兒罕、與薩末鞬・颯末建、同條共貫、著於唐書、曷嘗是蒙古語」。伯哷津云「帝既分遣諸軍、復自與拖雷汗也可那顏、馳襲賽兒奴克城、晨壓城下。居民咸入城拒守。遣丹尼世們招降。城人將困辱之。丹尼世們謂「我爲成吉思汗親近之人。我亦木速兒蠻人、特來救一城生命。若抗拒、則滿城流血矣。降則身家皆得保全」。城遂降、餽糧。惟頭目不至。帝怒。始至。下令勿殺掠、簽壯丁爲兵、名其城曰庫特魯特八力克」。募熟悉路逕之突克蠻人爲導、從沙漠僻路行。前鋒將塔亦兒巴哈都兒、至奴爾城、亦招下之、餽軍糧。令速不台收撫其城、擇六十人、送城酋伊里火者。至塔布瑟之地。帝至城問「每歲納稅若干」。衆謂一千五百的那。帝令如數完納」。多遜云「一二二〇年三月、師至布哈爾、晝夜不絕攻」。西曆一二二〇年、卽太祖十五年庚辰也。洪氏曰「西三月、則爲中歷正二月」。伯哷津以爲蛇年事。蛇年既辛巳也。伯哷津云「布哈爾城守兵二萬。守將曰庫克汗、部將曰哈米特・巴兒塔牙達庫・匈赤汗・克什克里汗、夜半率衆突圍、遁至賽渾河濱」。多遜作阿母河。洪氏曰「應云質渾。作賽渾誤」。「帝兵追及、盡潰散。城中伊瑪姆暨文士等出降。帝入城見教堂、疑是王宮。駐馬問。民以教堂對。帝下馬入堂、諭「馬飢、速飼馬」、因取經箱爲馬槽、令教士守馬。又以酒囊置堂中、傳集謳者歌舞。蒙古兵亦歌呼爲樂。帝逾時復出城、登教士講臺、傳集民庶、告以蘇爾灘背理獲罪之事、曰「爾等須知爾皆得罪於天、爾主爲尤重。天生我爲執鞭之牧人、用以籖撻羣類。非汝等得罪上帝、天何生我」。令譯者述其語、俾衆周知。又令蒙古人彈壓大軍、勿使擾害、籍富民、令出窖藏財物、以二百八十人搜括之。餘民則出丁賦以贍軍。其時內堡猶未下。遂焚城內民居、驅民塡濠、悉成平地、矢砲環攻。十二日堡破、守者悉死、凡三萬人、婦稚得免。夷其堡、驅民於野、取丁壯從軍、或徙於撒馬爾干、或徙於搭布瑟。春末、遂征撒馬爾干。謨罕默德貨勒自姆沙、先以突而屈人六萬、塔赤克人五萬、大象二十、守撒馬爾干、浚濠蓄水。帝在訛脫剌兒、卽聞撒馬爾干、垣堞高峻、守兵充足、非一載不能破、故先分兵取各處、而自取布哈兒、然後進師。軍鋒所至、無抗命者。惟色里普勒・搭布瑟兩城寨不降。留兵攻下之」。多遜云「師循賽拉甫散河、至撒馬爾干、凡五日程。分軍下河濱寨堡。謨罕默德先駐撒馬爾干、督民修城浚池、聞蒙古師衆、懼而謂「敵軍投鞭、足以斷流。我不可以居此」。卽先去、經那黑沙不南走」。「帝至撒馬爾干、朮赤等三路師亦至。御營駐庫克薩萊、諸軍分駐城四面。帝周巡城外、相視形勢者兩日。聞蘇爾灘已徃駐夏之地、卽令哲別・速不台率二萬騎徃追、又令阿剌黑諾延・畢速爾、向斡克石・塔力堪二處進兵。第三日晨、城闉遂合。守將阿勒巴爾汗・匈赤汗・巴朗汗等出戰。兩軍傷亡甚衆。夜始罷戰。第四日攻城、城民忷懼。第五日又攻。乃有敎士喀特・社喝烏里斯拉姆、暨伊瑪姆等、出城納款。越日、開那馬斯喀喝門。大軍入城、卽隳其城、分城民男女百人爲一隊、遣兵押赴城外曠地。喀特與社喝烏里斯拉姆、率五百人、入守內城。帝下令「民間有藏匿兵丁者、殺無赦」。其後搜獲、伏誅甚衆。城中豢象、盡放之於曠野、多餓死」。西游記云「又見孔雀大象、皆東南數千里印度國物」。其詩云「秋日在郊猶放象」。可以證也。多遜云「士兵出戰、客兵不爲援、中伏盡殲。康里兵自以與蒙古同類、事亟而降、不至殘害、故無鬭志。帝誘其降、許先以妻孥出城。民不得已亦降」。與伯哷津稍異。「是夜大軍仍出城。內城人懼不得免、阿兒潑汗（洪氏曰、疑卽上文阿勒巴爾汗之異譯）。夜率千人、潛出突營而遁。次晨、大軍攻內城、毀其牆堞、塞城河之源、至夜城破。有千人入禮拜堂拒守。射以火箭、焚以火油、悉成灰燼。驅守兵出城、分兵民於二處、令康里兵三萬、薙髮結辮、如蒙古人、示將入軍籍、夜乃盡殺之。其將曰巴力世瑪思汗・托海汗・薩兒賽特汗・烏拉克汗、更有二十餘裨將、皆死。取工商三萬、分置各營、民丁三萬、入攻城隊。餘民許復舊居、輸二十萬的那以贖命。令降官巴克曷勒蔑里克・哀密兒阿米特、主收賦事、兼轄降民。其後復屢調發、故城民益寥落」。西游記所謂「存者四之一」、卽是也。本紀云「十五年庚辰、春三月、帝克蒲華城、夏五月、克尋思汗城」。年分與多遜合。又云「十六年辛巳春、帝攻卜哈兒・薛迷思干等城下之」。此襲本書之誤也。

大太子攻克養吉干・八兒眞等城。

眞字原闕、秋濤據本紀補。通世案、二城在鹹海東。西史作養吉墈忒・巴兒喀力賔忒、潑剌諾喀兒批尼作養欽特・巴兒沁。皆已久湮廢。養吉干遺趾、在喀咱林斯克堡西南、距錫爾河左岸二英里許、距河口約一日程。西曆一八六七年、俄人列爾出於沙磧中掘得城址、考卽此城。見其所著突而基斯單考古旅行記。八兒眞見海屯紀程書、作帕兒沁。地理志作巴耳赤邘。列爾出曰「古錢有記巴爾沁名者、當是此城所鑄」。遺址未詳。多遜・伯哷津云「朮赤一軍、先至撒格納克、遣畏兀兒人忽遜哈赤諭降、被殺。下令晝夜更番迭攻。七日城破。大俘馘以忽遜哈赤之子守之。復下奧斯戀・巴兒喀力戀、攻遏失那斯。城中兵衆、且由盜賊入伍、皆能戰。然大半陳沒。警至鄭忒、守將庫特魯

克汗夜遁、過錫爾河、經沙漠、以徃貨勒自姆。朮赤令成帖木兒諭降鄭忒。是時城中無主、衆皆拔刄相向。成帖木兒以撒格納克殺使致禍之事爲告、且許不令兵入城、乃得免、歸告朮赤、卽督兵至城下、樹雲梯以登、驅民出城、以未抗拒得不殺。惟數人嘗詈帝、究獲殺之。募士兵萬人、以布哈爾人阿里火者守其地、卽西域商三人中之一也。西距鹹海二日程、有養吉堪忒城、亦下之。使台納爾統之。行至中途、不服約束、擅殺伍長。台納爾已前行、聞信馳返、殺戮大半。餘者逃渡阿母河」。朮赤是役、與察合台等攻訛脫剌兒、阿剌黑等攻日納克特、同時之事、蓋在己卯之末庚辰之初。三路之軍、皆已奏捷、然後會於大軍、圍撒馬爾干。本書叙事次序微違。

是夏、上駐軍於西域速里壇原注「西域可汗之稱也」。里原作望。稱原作林。秋濤案、壬午年作速里壇。通世案、望卽里之譌、林卽稱之譌。今改。速里壇、卽蘇爾灘、貨勒自彌沙之僭號也。**避暑之地、**通世案、伯哷津云「是年夏秋、帝駐撒馬爾干境內」。是年、謂十六年辛巳、誤與本書同。多遜云「太祖旣定撒馬爾干、一二二〇年夏、駐軍於此城與那黑沙不之間避暑」。那黑沙不、卽今喀而什。祕史云「太祖得了兀都剌兒等城、於回回王過夏的阿勒壇豁兒桓山嶺處過夏了」。蘇爾灘避暑之地、蓋在撒馬爾干南山中、距鐵門關不遠。故本紀云「夏四月、駐蹕鐵門關」。是年哲別・速不台受命追貨勒自彌沙。本書不載。今據多遜・伯哷津補叙。伯哷津云「軍中屢獲貨勒自姆沙麾下人、皆言「其主驚惶無措、惟謀逃遁。其子札剌勒丁請於父、欲集各路之兵、決一血戰、而父不允」。帝先遣哲別・速不台、各率萬人徃追、復遣脫格察兒巴哈都兒、率萬人繼進。戒三將曰「窮追勿捨。如彼勢衆敢抗、而汝等力薄、卽不前進、飛報我大軍。屢聞人言、彼畏怯殊甚、諒必不敢抗也。如彼勢蹙而遁、雖入山穴、亦必窮其所往。所過之地、降者安撫之、爲置官吏。有阻遏我軍者、必摧破之。以三歲爲期、由戴世特奇卜察克、回至摩古里斯單、與我相見。然後全軍東返。汝等之後、我復令拖雷剿撫呼拉商・蔑而甫・海拉脫・你沙不兒・賽兒黑思等處。我又令朮赤・察合台・窩闊台、攻取貨勒自姆都城。賴天之祐、必盡畢此事、乃可凱旋」。帝既遣三將行、復令三子整軍、往貨勒自姆、自與拖雷汗暫息於撒馬爾干」。多遜云「蘇爾灘謨罕默德之去撒馬爾干也、蒙古兵甫渡錫爾河。智謀之將、勸王「速徵貨勒自姆等處之兵、結一大軍備戰、號召部民、同心禦侮、力扼阿母河。錫爾河外險雖失、猶有內險可守」。或勸王「徃嘎自尼。如敵深入、則赴印度。其地暑熱山多、敵不敢進」。王以其計萬全從之。使人至烏爾鞬赤、告其母妻、往馬三德蘭山堡避兵。王渡阿母河、行抵巴而黑。其子羅克訥丁、自義拉克遣使至、迎父西行、云「有兵有餉、可以共守」。王又改計從之。札拉勒丁時從父、願假統帥之職、守阿母河。王斥其少不更事、不之許。

旋、聞布哈爾陷、繼聞撒馬爾干亦陷、王亟往義拉克。從兵皆康里人、陰謀叛。王有戒心、宿輒易處。一夕已他徙、而空帳爲叢箭攢射幾滿。西曆四月十八日至你沙不兒。聞蒙古兵已渡阿母河、西曆五月十三日、僞言出獵、逃赴義拉克」。哲別・速不台抵烹綽布、欲渡阿母河、而無舟。伐木、編枝條爲箱篋、置輜重器械於內、裹牛羊皮於外、繫馬尾、驅以泅水、得不沈沒。將士攀援以隨、全軍遂渡。旣渡河、分道行。哲別入呼拉商。呼拉商、富庶之地也、分爲四部、曰馬魯・海拉脫・你沙不兒・巴而黑」。伯哷津云「哲別・速不台先至巴而黑。城人餽軍裝糧糗迎降。爲置守史、募導者以行。太石巴哈都兒爲前鋒、抵咱窪城、欲如前收降。城人閉門不應。軍去、城人爲怯、鳴鼓辱詈。軍回攻三日、樹梯入城、遇人卽戮、焚毀之而行。將至你沙不兒。蘇爾灘先欲赴伊斯法楞圖獵、聞警卽逃可斯費音、遣其妻、往喀兒魯克地、守將曰塔赤哀丁苔勒罕。自與羣下謀避兵。衆議上希闌山。旣至、以爲未可、謂羅耳之蔑里克海沙富多智謀、延至議計。羅耳酋謂「羅耳・法而斯兩界上有高山、曰帖克帖庫。壤地寬大、人跡罕到、可以避兵。羅耳・法而斯・舒勒・沙班喀雷四處之兵、可集十萬、力足禦敵」。蘇爾灘不之信、仍駐是地募兵。哲別至你沙不兒、遣告呼拉商部內各守將、曰蔑執兒哀里蔑里克嘎非、曰法喝兒哀里蔑里克拉希、曰斐里特哀令、曰吉牙哀里蔑里克佐贊、傳帝之諭招降、並獻軍裝糧糗。你沙不兒以三人來迎降、餽糧。哲別勸以「見機保身家。蒙古兵如水火之不可狎玩。勿恃有城有衆」。復予以帝之示諭、用畏兀兒文、若謂「諭哀密兒及衆民知悉。自東至西、上天皆以付我。降者并其家屬保護之。不降則罪及親族、咸殺不宥」。旣予以示而行。哲別自是順者溫之路、向徒思。速不台順大路、向札姆。中途降者皆不犯、不降則力攻。徒思之東各寨堡皆降。而徒思拒命、殺傷甚衆。由徒思往拉得康。其地花木甚多。速不台喜其地未擾、留官主守、自往喀部珊。城人慢不加禮。重誅之。凡呼拉商境內堅城、多過而不攻、沿途皆不久駐、惟取衣服糧食牛羊馬匹而行、晝夜不休。速不台向伊斯法楞。哲別向馬三德蘭。誅夷最甚者、阿模爾・阿士特拉拔特。速不台至塔沒罕城。民避入山、土匪踞城以守。盡殺之。又往西模曩、攻敗其民。至耳來夷城、亦如之」。考多遜書、二將行路、與伯哷津稍異。哲別降巴爾黑、破薩伯城、西曆六月五日、略你沙不兒、而不經徒思。速不台經徒思・枯姆・喀部珊・伊斯法楞・達蔑干・西模曩等地、欲西赴義拉克。哲別自馬三德蘭、踰山而南、兩軍遇於合而拉耳城、軍復合。薩伯卽咱窪。枯姆卽札姆。達蔑干卽塔沒罕。西模曩卽地理志之西模娘。合而拉耳卽耳來夷。伯哷津又云「蘇爾灘正與阿塔畢奴思拉特哀丁・海沙勒沙富議計、而耳來夷警至。海沙勒沙富懼、卽回羅耳、他酋亦遁。蘇爾灘往喀隆堡。蒙古軍知而亟追、中途相遇、射傷其馬。居堡中一日、卽潛往八格達特。追兵始謂其在堡也攻之。

既知其已行、復逐於後。蘇爾灘改道、入雖哲塞堡、又奔甚蘭。其地之哀密兒迎以入。駐一日、又往伊西塔耳地、從者盡失。又往阿模爾屬之低押乃。馬三德蘭之哀密兒、亦殷勤款接。然蒙古兵踵蹤而至、不能休息。詢於馬三德蘭教士、勸以入嘎斯比海內小島。蘇爾灘從之。居未幾又易他島、以掩蹤跡。哲別之軍、不能覓獲、遂回軍。盡得其輜重珍寶、迻致撒馬爾干。蘇爾灘以土地財賄盡失、又聞妻女皆被虜、幼子皆飲刃、恚悸成病、目亦昏、終日啼哭、旋死。埋於島內」。洪氏曰「他西書考得王卒爲西一千二百二十一年正月十一日。合之中歷爲太祖十五年十二月間。耶律楚材傳「庚辰冬、大雷。楚材曰『回回國主當死於野』」。時序正合。速不台傳「蔑里逃入海、不月餘病死」、亦合。惟速不台傳、繫之於壬午、係誤」。案傳稱回回國主爲蔑里、布哷特淑乃德兒曰「此與帖木兒蔑里克相混也」。然觀巴而朮傳又稱罕勉力鑽潭、則似與汗蔑里克相混。汗蔑里克見後。多遜云「王謀入裏海、艤舟以待。馬三德蘭、舊有部酋、爲王所殺、地亦被幷。其子思復仇、白王所在。兵跡至。王亟登舟。有三騎入水追之、溺而斃。射以矢、亦不及。舟至東南隅小島。王胸膈中塞、憂悸成病。島民供粗糲、乏醫藥。病革、召其子札剌勒丁・鄂斯拉克沙阿克沙、命札剌勒丁嗣位、以佩劍繫其腰。越數日卒。無殮具、埋尸土中。羅克訥丁遁起兒漫。居半載餘、率眾回至合而拉耳。蒙古將台馬司・台納爾來攻。遁入蘇呑阿盆脫堡。攻半載、堡破、被殺」。多遜又云「蘇爾灘母土而堪哈敦、居烏爾鞬赤。帝自撒馬爾干、遣使者丹尼世們、往謂「哈敦之子、不孝於母、開罪於我。我欲得而甘心焉。哈敦所主地、我不相犯。速遣親信人來。我與面議」。土而堪置不答、而自避去。先時兼幷諸部落故酋、皆居京都。恐爲變、悉投之阿母河。忒耳迷酋、八迷俺酋、斡克石酋、巴爾黑酋父子、塞而柱克王托克洛耳二子、郭耳王馬赫模特二子、雪格納克酋二子皆死。惟倭馬爾故酋未殺、使導行、仍害之途中。入馬三德蘭伊拉耳堡、據商山、甚險峻。哲別・速不台追蘇爾灘、經其堡、知王母在內、留軍圍攻、絕其汲道。踰月不雨、堡民渴欲死。引軍入、夕卽雨。以王母妻迻致太祖塔里寒軍中、殺其幼孫。土而堪後隨大軍而東、至一二三二年、沒於喀剌闊倫。王女四人。以一與丹尼世們、以二女與察合台。察合台自留其一、一與其將。其先嫁鄂斯蒲之女、爲葉密爾一商人所得」。伯哷津云「當蘇爾灘在日、先欲立其子鄂斯拉克沙爲嗣。居海島時、改立札剌勒丁。及其死後、札剌勒丁、聞呼拉商・義蘭境內、已無蒙古兵、乃由芒格世拉克登陸、覓馬往貨勒自姆。其弟鄂斯克拉沙亦從往。其時朮赤等軍猶未至貨勒自姆。其守將曰徒智貝克里瀰、曰哈勒烏思拉克、曰火者的斤、曰阿忽沙希巴、曰帖木兒蔑里克、守兵九萬。札剌勒丁既至、兄弟不和、各樹黨羽。衆畏札剌勒丁之勇、不願奉以爲主、思害之」。多遜云「自土而堪去後、烏爾鞬赤城無主、守兵六萬、多康里人。聞札剌勒丁嗣位、皆不服、欲謀害、事覺。一二二一年二月十日、札剌勒丁與帖木兒蔑里克、以三百騎出奔」。洪氏曰「爲太祖十五年底、十六年初」。伯哷津云「札剌勒丁由訥薩之路、往沙特巴黑(原注「卽你沙不兒」)。行及阿思特舉失賽克之地、遇蒙古兵、戰半時許、先自軍中逸去」。多遜云「南踰沙漠、入呼拉商、遇蒙古游兵七百人於訥薩城敗之」。伯哷津云「至沙特巴黑、收集士馬。居三日、將往嘎自尼、而蒙古兵至。(此是拖雷之軍。見下)。札剌勒丁留其將蔑里克伊勒的力克、在城外禦敵、而自往嘎自尼。迨行遠、伊勒的力克、亦由他道行、蒙古兵追之不及。札剌勒丁七日至嘎自尼、其地兵民多奉之」。多遜云「札剌勒丁出奔後三日、朮赤等軍近烏爾鞬赤。鄂斯拉克沙・阿克沙、不敢居守、亦出奔、循兄後以行。近訥薩、遇游兵、避入喀侖特耳堡。兵來攻。堡人出禦、令其乘間逃逸。蒙古兵見之、不戰而追行、抵小村落、曰勿世特。又有游兵自他道至、殺之。惟札剌勒丁得脫、由海拉脫、東南遁入嘎自尼。」

命忽都忽那顏爲前鋒。 都原作相、下忽字原脫。文田案、此相字、據此錄通例、亦應改都。通世案、布哷特淑乃德爾引此、作忽都忽那顏。卽祕史失乞忽禿忽。今因改補。西史不載此事。然明年討札勒剌丁時、失乞忽都忽實爲前鋒、則此時或豫受前鋒之命也。

秋、分遣大太子三太子、 通世案、大太子與三太子之間、疑脫二太子三字。

率左軍攻玉龍傑赤 玉原作王、誤。秋濤據本紀改。文田案、西遊錄作五里鞬城。曾植案、據內府圖今阿母河東北、鹹海之旁、有烏爾根齊城、與玉龍傑赤對音至近。疑玉龍傑赤、卽是烏爾根齊城。通世案、玉龍傑赤、卽烏爾鞬赤之轉、貨勒自彌國舊都也。西遊錄云「蒲華之西有大河、西入於海。其西有五里鞬城、梭里檀母后所居、富庶又盛於蒲華」大河謂阿母河。昔時阿母河、自布哈爾西北、折而西、又折而西南入裏海。故曰「西入於海」。五里鞬卽烏爾鞬赤、音最協、惟略赤音。梭里檀母后、卽土而堪哈敦。據亦本浩喀勒地誌、阿剌伯人呼烏爾鞬赤爲卓兒札尼赤。額忒哩錫地誌亦云「卓兒札尼亞、貨勒自姆國都、跨質渾河兩岸」。多遜云「烏爾鞬赤、係蒙古人之所稱」。淸一統志、有烏爾根齊城、在賽瑪爾堪城西、洪氏曰「烏爾鞬赤有新舊。舊烏爾鞬赤、當阿母河之西流、跨河爲城、直機窪城西北二百餘里、鹹海南偏西二百里明中葉後、阿母河爲沙磧塡壅、不折而西、遷北入鹹海。城亦久廢、惟存遺址。俄圖稱其地曰枯尼牙烏爾鞬赤。枯尼牙譯義謂舊城。此元之烏爾鞬赤也。布哈爾西北阿母河城西濱、直鹹海南偏東約五百里、亦有烏爾鞬赤城、爲後來重建、在機窪正北數十里。再北數十里、則爲柯提城、見元史西北地附錄、亦稱喀忒。重建烏爾鞬赤時不可考、當在元後。此一統志之烏爾鞬赤也。俄地圖、音如烏爾坑赤。詢之波斯人、則爲烏爾鞬赤。赤字爲西域

語尾字、韃之義爲城國。譯根譯坑、皆韃之變音。讀韃字須著力、故或譯爲根、或譯爲坑」。又案、以上辛巳年原文。之城以下八十四字、舊本誤入於甲戌年末「阿兒海哈撒兒等」下、何氏校正。之城。秋濤案、當與上攻玉龍傑赤之文合爲一句。以軍集奏聞。軍原作君、秋濤校改。上有旨曰「軍既集、可聽三太子節制也」。秋濤案、祕史云「太祖自回回地面歸、命拙赤·察阿歹·斡歌歹三子、領右手軍、過阿梅河、至兀籠格赤下營。命拖雷往赤魯等城下營。拙赤等至兀籠格赤下營了、差人來說「如今俺三人內、聽誰調遣」。太祖教聽斡歌歹調遣」。即此事也。斡歌歹稱三太子、即太宗也。太祖此時已定以太宗爲嗣、故令大太子二太子、皆聽其節制。此錄語意未斷、類祕史言之較詳耳。通世案、伯哷津云「朮赤·察合台·窩闊台奉帝命、伐貨勒自姆。即今之庫爾坑赤、蒙古人稱爲烏爾坑赤。於是年秋、率右翼以行。前鋒將莽克來、蒙古人稱之曰莽來。札剌勒丁昆弟之出奔也、將領多從以行。乃有忽馬爾·木忽兒·布喀、又有統兵將蔑兒斤人阿里、併紳民共守。以無首領、公舉忽馬兒爲帥、由其爲王母族也。一日有游騎至城下、掠牛馬。城人欺其寡、出城逐之。追至一花園、伏兵在內、突出圍攻追兵、死者甚聚。敗卒入城、蒙古兵亦從而入海蘭門。因日已沈西、仍退。次日攻城、城將斐里敦古里率五百人、於城下拒之。朮赤昆弟既至、周視城形勢、招降不下。多遜云「朮赤下令軍中「我父將以此地封我。毋許焚掠」。遣人招降。當蘇爾灘居海島時、使諭城民「力不能禦蒙古、出民降敵紓禍」。而守將兵士不願、遂堅守」。二書又云「近城無石、伐大木爲衝車。垣堞堅厚、猝不可破。城跨阿母河、爲橋以通往來。遣兵斷其橋。三千人往、爲城兵圍攻、盡死。自是守者益膽壯。朮赤·察合台素有違言、師不和、亦無律。城兵以是屢敗蒙古兵、七閱月之久城不下。時帝已在塔里堪。三子遣人以軍事往告。帝廉得其實、怒而命窩闊台總諸軍」。於是上進兵過鐵門關。秋濤案、此書言「上駐軍於速望壇避暑之地」、而紀言「夏駐蹕鐵門關」。蓋作史者、見下文有「進兵過鐵門關」語、故櫽括其詞、而不知非一地也。西遊記云「壬午三月上旬、阿里鮮至自行宮、傳旨云「眞人來自日出之地、跋陟山川、勤勞至矣。今朕已回、亟欲聞道。無倦迎我」。仍敕萬戶播魯只、以甲士千人衞過鐵門。三月十有五日啓行。四日、過碣石城、過鐵門、東南渡山。山勢高大、亂石縱橫。聚軍挽車、兩日方至前山、沿流南行。軍即北入大山破賊。五日、至小河、亦船渡。七日、舟濟大河、即阿母沒輦也」。程宗亟同文曰「碣石、明史外國傳作渴石、云「南有大山屹立。出峽口有石門、色如鐵」。即記所謂鐵門也。新唐書、吐火羅有鐵門山。大唐西域記曰「出鐵門、至覩貨邏國。其地、東扼葱嶺、西接波剌斯、南抵

大雪山、北據鐵門。過雪山、爲濫波國。即在北印度境」。於時追算端、南踰雪山、故謂之印度。太祖旋師後、復遣將追至忻都、窮及申河、算端死乃還、則在印度國中矣。阿里鮮所言「正月十三日、自邪迷思干初發、三日東南過鐵門、又五日過大河、二月初吉、東南過大雪山、南行三日至行宮」。蓋阿里鮮先赴行在、正太祖追算端至印度時。故踰雪山後又三日乃達。長春於四月五日達行在、則已回至雪山避暑。故長春過鐵門後、行十二日、抵雪山而止。所渡之阿母河、元史見他處者亦作暗木河、亦作阿木河、元祕史作阿梅河。即佛書之縛芻河也。其水、今西北流、入騰吉思海」。秋濤案、程春廬先生、攷鐵門所在、至爲詳核。惟祕史之阿梅河、鄙見與徼外之阿母河異地。別有攷辨、茲不具錄。通世案、何氏以阿梅河爲和闐之阿里木河、以玉龍傑赤爲玉隴哈什地、說見上玉龍傑赤條下。今以其謬顯然、刪而不存。碣石之名、夙見伊本浩喀勒書。北史西域傳云「伽色尼國都伽色尼城、在悉萬斤南。唐書西域傳云「史、或曰佉沙、曰羯霜那。西百五十里、距那色波」。西域記云「從颯秣建國西南行三百餘里、至羯霜那國、唐言史國。土宜風俗、同颯秣建國」。元世、巴兒剌思氏、世有此地、駙馬帖木兒生於此。俗謂之舍勒色卜自、猶言綠城也。今俄圖或單云舍勒。城傍有河、名喀舒喀達里雅、蓋古名碣石之遺也。那色波、即魏書之那識波國。唐書曰「那色波、亦曰小史」。蓋爲史所役屬。地理志作那黑沙不。察合台五世孫克珀克汗、嘗於其地建立宮殿。蒙古稱宮殿曰喀而什、故後世稱其地、亦爲喀而什。音近碣石、然固別地也。鐵門關、在碣石南五十五英里。西域記云「從羯霜那國西南行二百餘里入山。山路崎嶇、谿徑危險、既絕人里、又少水草。東南山行三百餘里入鐵門。鐵門者、左右帶山、山極峭峻、雖有狹徑、加之險阻。兩傍石壁、其色如鐵。既設門扉又以鐵鋼。多有鐵鈴、懸諸戶扇。因其險固、遂以爲名」。阿剌伯人雅庫畢記鐵門之事、用波斯語、名達兒伊阿罕、以爲城名。伊本浩喀勒自那黑沙不至特兒默特紀程書中、亦有鐵門。額忒里錫記鐵門旁有一小邑。舍哩甫額丁紀明洪武三十一年春、駙馬帖木兒自印度班師行程、既渡阿母河、駐特兒默特兩日、然後向碣石。第三日過闊魯噶、即鐵門也。其夜宿巴里克河上。第八日入碣石。蘇爾灘巴伯兒亦稱鐵門爲闊魯噶。歐邏巴人記鐵門之事、蓋自克剌費卓始。明永樂二年、克剌費卓奉喀斯提勒王顯理第三之命、使於帖木兒。西曆八月二十二日、發特兒默特、二十五日、至高山下。有一峽通路、名曰鐵門。兩傍石壁、如人工削成。其路平而甚深。峽中有一村、村後山甚峻。鐵門之外、山無徑路、故爲撒馬爾干之要害。商賈自印度來者、皆過此輸稅。帖木兒伯克因獲大利。土人曰「昔時峽中有大門、以鐵裹之」。二十八日、至碣石大城。明史云「渴石西三百里、大山屹立、中有石峽。行二三里、出峽口、有石門、色如鐵、番人號爲鐵門關」。蓋明時鐵

門、旣無眞門。克剌費卓之後、歐人不過此地者、四百七十一年。光緒元年、俄人馬葉甫欲探希撒爾山地及阿母河上游之北源諸水、自喀而什向拜遜。旣過察克察河之廣溪、忽至鐵門之峽。土人謂之布自果剌喀那、譯義爲山羊舍。近峽之北口、沙勒撒爾卜自之路、與喀而什之路合。光緒四年、俄將斯托玗托甫率兵赴阿富汗國、亦過此地。軍醫雅佛勒斯奇紀其行程、頗述峽路之狀。據俄人所製突而奇斯單詳圖、峽路長一英里有半、自西北向東南、橫斷分水嶺。懸崖挾路、路廣三十步、或僅五步。察克察河西北流、出北口、折而北流。南口外有舒剌卜小河、南流入施剌巴特河。路出南口、分爲二。大路折而東、五英里抵德而邊特、又東至拜遜及希撒爾。小路分而向南、至施剌巴特、至阿母河。伯哷津云「帝於蛇年秋、自撒馬爾干起行、偕拖雷汗往那黑沙不、一路游牧、過帖木爲嘎哈兒哈」。帖木兒義爲鐵。嘎哈兒哈、同上關隘。義爲關門。

四太子攻也里·泥沙兀兒等處城。文田案、也里見太祖本紀。泥沙兀兒、卽西北地附錄之乃沙不耳。曷思麥里傳作你沙不兒。曾植案、泥沙兀兒、本紀作匿察兀兒。又案、祕史蒙文作亦薛不兒、凡兩見。通世案、也里同下野里、泥沙兀兒同下匿察兀兒、並見後。伯哷津云「遣拖雷汗、往定呼拉商」。多遜云「命拖雷將兵往呼拉商、爲哲別·速不台後援、平其未定之地」。也里·泥兀沙兒等皆呼拉商州中之名邑也。

上親克迭兒密城、文田案、迭兒密、卽西北地之忒耳迷也。薛塔剌海傳、作帖里麻。曾植案、迭兒密、卽大典地圖之忒耳迷。西迷地附錄同。通世案、迭兒密、漢書西域傳之都密、唐書西域傳之呾密也。西域記覩貨邏國條云「順縛芻河北、下流至呾密國」。大典圖、忒耳迷在巴里黑北。俄羅斯地圖迭兒迷斯故址、阿母河之北岸、蘇兒喀卜河口西北十一英里、直巴勒黑東北。迭兒迷特之名、見費兒都錫詩史。據伊斯塔克里地誌、自卜哈拉·撒馬兒干至巴勒黑之路、經迭兒迷特。帖木兒自撒馬爾干至巴勒黑、常於迭兒迷斯渡河。今河津移在其西。綱目作帖力迷、伯哷津云「帝自將至迭兒迷斯。城濱河」。多遜云「呼城開門納降、不應」。伯哷津云「攻十日破之、驅民出城、分於各軍。一老婦藏大珠。索之、不肯獻、而呑於口。剖其腹出珠。自是死者腹多被剖。至達格兒特薩蠻、亦殺掠。分軍收巴達克山。半藉兵力、半藉招撫、皆平定、無梗命者。質渾河北悉平、遂渡質渾河。時已冬末」。質渾者、阿母河之舊名也。古時謂之瓦克疏河。瓦克疏、今爲阿母河北源大河之名。希臘人之鄂克蘇斯、漢書之嬀水、西域記之縛芻、皆瓦克疏之轉也。阿剌伯人謂之質渾河、突厥克人謂之阿母達哩雅。河濱有阿母勒城、今名察兒錐。阿母之名蓋本於此。洪氏曰「此役當在十五年冬。元史張榮傳「從太祖、征西域諸國。庚辰八月、至莫蘭河、不能涉。太祖召問濟河之策。榮請造舟、以一月爲期。乃督工匠、造船百艘、遂濟河」。案一月之期太促。或者史書故神其說。然亦必在十五年冬。阿母河、又曰阿母耳河。莫蘭似是母耳之訛。惟蒙古謂河曰沐漣、亦疑爲河之重言」。

又破班勒紇城通世案、班勒紇、大典圖作巴里黑。俄圖稱巴勒黑、他國地圖或稱巴勒克、西域最古之名城也。希臘史家謂之巴克特拉、其州曰巴克特里雅那。漢書之撲挑、後漢書之濮達、魏書之薄羅·薄提、蓋皆巴克特拉之訛略也。周書之拔底延、唐書之縛底野、蓋巴克特里亞那之訛略也。西域記云「縛喝國、北臨縛芻河。國大都城、周二十餘里、人皆謂之小王舍城也」。縛喝、卽巴勒黑。伯哷津云「蛇年春、至巴勒黑。紳民餽禮物。查閱戶口、令民出城、分於各軍。旣而盡殺之、平毀民居」。多遜云「巴勒黑城迎降。帝以將南行、留其城、恐爲後路患、令民悉出、焚城」。洪氏改蛇年爲馬年、曰「殆是譯誤」。蓋前已有蛇年夏秋至冬末、不得再有蛇年。本書西史、敍西征之役、皆誤移下一年、故以辛巳年爲壬午年。但巴勒黑之役、本書爲辛巳秋、西史爲壬午春、二書亦不相合。又案、西游記云「中秋抵河上、其勢若黃河、流西北。乘舟以濟、宿其南岸。泝河東南行、三十里乃無水、卽夜行過班里城、甚大。其衆新叛去、尙聞犬吠」。河勢若黃河、謂阿母河。泝河東南行、蓋其支河。班里卽巴勒黑、西遊錄又作班城。俱缺黑字音。元史卷百三十七「察罕、西域板勒紇城人也。父伯德那、歲庚辰、國兵下西域、擧族來歸」。蓋巴勒黑之役在庚辰年也。明史坤城傳後、亦有把力黑部。布哷淑乃德兒曰「速不台傳作必里罕城、曷麥里傳作阿剌黑城」。

圍守塔里寒寨。塔原作哈、寒字原缺。秋濤依本紀增寨字。文田案、哈里寒當作塔里寒。曾植案、哈當依本紀作塔。文廷式案、此當西北地附錄之塔里干。通世案、大典圖、塔里干在巴里黑之西北、麻里兀之東。西域記云「從縛喝大城西南入雪山阿、至銳秣陀國、銳秣陀國、西南至胡寔健國。胡寔健國、西北至呾剌健國。呾剌健國、西接波剌斯國界」。呾剌健、卽塔里干也。伊斯塔克哩地誌、托喀哩斯單都城、曰泰堪、在巴勒克之東、近巴達克山。斯普連格兒引阿剌伯人地誌、托喀哩斯單一城、名塔亦堪、默兒甫阿而嚕德之屬城、名塔里堪。又引畢嚕尼地圖、塔里堪在巴勒克與默兒甫阿而嚕德之間、塔亦堪在巴勒克之東。據額忒哩錫、塔里堪有二。一在托喀哩斯丹、直巴勒克之東。一在科喇散、直巴勒克之西。阿布勒佛達以在東者爲泰堪、在西者爲塔列堪。蓋塔列堪有二。其在西者、卽西域記之呾剌健、元史地理志塔里干也。其在東者、記志皆不載。然馬兒科保羅、自巴勒克東行十二日、至泰堪寨。此邑今猶存、稱塔列堪、在昆都斯之東。道光十八年、英人烏德至其地、一貧邑也。伯哷津云「帝至塔力堪、攻其寨取之。又圍諸司雷脫柯寨。極堅固、守者皆敢死士。七月末下」。多遜云「帝入塔列堪山中、攻諸司雷脫柯寨。先

遣將往。以山峻、攻六月未下。大軍至猛攻云云」。據伯哷津、則塔力堪寨之外、別有一堅寨。據多遜、則諾司雷脫柯、卽塔列堪山寨也。史錄皆唯云塔里寒寨」、伯哷津恐誤。西史不言塔列堪所在。多遜作地圖、以在昆都斯之東者當之。觀其在山中、帝避暑於此、似多遜說可從。

冬、四太子又克馬魯察葉可・馬盧・秋濤案、監本元史本紀、作馬魯。昔剌思等城、通世案、馬嚕察葉可、多遜作馬嚕察克、默兒甫屬邑也。馬盧、卽默兒甫、大典圖作麻里兀、在巴里黑西偏北。阿剌伯人地誌、默兒甫作馬嚕、或作默嚩、或作馬兒甫。有二城、一名默嚩沙希展、一名默嚕阿勒嚕德。皆在默嚕魯德河濱。默嚕嚕德河、卽今穆兒噶卜河。馬嚕之名、見祆教古經。洪氏曰「後漢書「安息東界木鹿城、號爲小安息、去洛陽二萬里」。木鹿卽馬魯。疆界道里、皆不甚差謬。新唐書大食傳「呼羅珊木鹿人」。馬嚕爲呼拉商部內四大城之一。傳當云呼羅珊之木鹿人、文義乃明」。考諸書唯云馬嚕、皆謂默兒沙希展而馬嚕察克、卽默嚩阿而嚕德。其邑猶存、在默兒甫東南百十英里。昔剌思、多遜作塞喇克斯、又云薩喇克斯。故城在默兒甫西南、赫哩嚕德河東岸、今屬俄羅斯。西岸又有一堡、名新薩喇克斯、屬波斯國。地理志有撒剌哈歹、在乃沙不兒・巴瓦兒的之間。布哷特淑乃德兒改歹爲西、云「卽是撒喇黑斯」。伯哷津云「拖雷汗先自帖木兒嘎哈兒哈進征。自統中軍、他將率左右翼、順蔑魯察克之路、經巴哈黑速兒、皆取之、取蔑而甫、至你沙不兒、又取塞剌黑思・阿陛攸兒特・揑速云云」。揑速卽訥薩。多遜云「拖雷一軍、以脫噶察兒爲前鋒、渡阿母河、至訥薩、擄民運石樹礮。攻半月、城圯。兵自缺口入、大屠戮。駐三日、往喀命特耳堡。以險峻不易下、令獻衣裘萬襲以免。一二二〇年十一月（太祖十五年冬）、至你沙不兒、不知其已降、肆殺掠。城兵射死脫噶察兒、別將代統其衆。以兵少不攻城。分二軍。一軍至薩伯・窪城、自三日破之。一軍至徒思、下其屬堡。馬魯者、塞而柱克朝之故都也。哲別軍至馬魯察克、馬魯守將巴哈夷倭兒先遁、馬魯民遣人降附。舊時守將木直而倭兒從蘇爾灘西奔。蘇爾灘卒、回至馬魯、議守禦。民之不欲降者、奉爲城主、士卒亦歸之。其欲降者、懼禍及、告信於塞拉克斯蒙古軍中。巴哈夷倭兒已降蒙古、請往收其地、助以兵而行。至則蟲爲所害。一二二一年二月二十五日（太祖十六年正月）、拖雷下安狄枯城、遂討馬魯。先逐城外突兒克人、奮力攻城。木直而倭兒知不支、乃乞降佯允之。軍入城、併親族悉誅。城民惟工匠婦女童稺得免。發塞而柱克故王散者耳之墓」。案、克三城次第伯哷津同本書。據多遜、討馬魯之前、塞拉斯克已有蒙古軍。塞拉克斯先下、而馬魯後平也。又訥薩之戰、多遜在諸城之前。伯哷津列之塞拉克斯之後。訥薩在塞拉克斯西北、以地勢考之多遜似誤。又脫噶察兒爲拖雷前

鋒、死於你沙不兒。據伯哷津、則從哲別・速不台、死於古兒只之地、與多遜異。見後。

復進兵、秋濤案、自「之城」至此、舊本皆在甲戌年末。今案甲戌年、無征西域事。攷元史本紀「辛巳夏、駐蹕鐵門關。秋、帝攻班勒紇等城。冬皇子拖雷克馬魯察葉可・馬魯・昔剌思等城」。悉與此合。則此爲辛巳年事、錯簡在前、無疑。今攷正移於此。

壬午、十七年、宋嘉定十五年、金宣宗元光元年。通世案、多遜及西游記、此爲太祖十六年辛巳。據多遜、太祖圍塔列堪寨、拖雷克馬魯城、皆爲辛巳年事。本書元史及伯哷津、皆誤移下一年。春、又克徒思・匿察兀兒等城。秋濤案、「又克」云者、四太子克之也。紀云「皇子拖雷克徒思・匿察兀兒等城」。正與今所移改脗合。通世案、徒思、西域古時名城也。相傳爲神世札姆旃特王創建。唐憲宗元和四年、哈里發哈倫阿勒喇施特崩於此地、就葬焉。詩人費兒都錫嚕人那斯哷丁、皆生於此。南宋時爲哷拉商首府。蒙古之來、累遭慘禍。前年既爲速不台所攻、今又遇拖雷、城亦被毀。元太宗十一年、蒙古官庫兒古司重建城。其後城市衰廢。道光三年、英人弗喇塞兒訪徒思遺址、在默舍特西北十七英里。大典圖作途思、在巴達哈傷之北、屬篤來帖木兒。位置大誤。匿察兀兒在徒思西、呼拉商西四大城之一也。地理志作乃沙不耳、曷思麥里傳作你沙不兒。巴而朮傳作你沙卜里。你沙卜里・你沙不兒音最協。然阿布勒費達曰「波斯人呼爲你沙兀兒」、則作兀亦不悪。你沙不兒、波斯古城也。希臘羅馬古書云你色阿、祆教古經云你賽阿、皆此城也。然阿剌伯・波斯史家或謂「薩散朝沙玻兒王建之、取王名爲名」。伯哷津云「拖雷汗取塞剌黑思・阿陛攸兒特・揑速・徒思・札只闌・朱溫・八吉克・哈甫・賽罕・魯達巴特、亦取你沙不兒。皆在是年春」。多遜云「拖雷自馬魯西討你沙不兒。城有礮軍三千、礮五百具。拖雷亦以礮軍三千人、自他處運石至、輔以雲梯火箭、百計環攻。四月九日（東曆三月中）、城破。托噶察兒之婦、率萬人入城、遇人畜悉殺、以報夫仇。拖雷聞人伏匿積尸中、令悉斷其首、分男女髑髏、堆成阜、夷其城。惟工匠四百未死。徒思先降於速不台、迨兵去、留守者被殺。拖雷遣部將先下其城。既而分軍躪之、毀城外哈倫阿勒喇施特墓。」

上以暑氣方隆、遣使招四太子速還。通世案、伯哷津云「是年春、帝自塔里堪、召拖雷汗、於大暑之前回營」。本書云「暑氣方隆」、氣節稍異。祕史云「差人去對拖雷說「天氣暑熱、可來與我相合」」。與本書意同。因

經木剌夷國大掠之。 通世案、木剌夷、太祖紀同本書、太宗紀作木羅夷、憲宗紀作沒里奚、郭侃傳作木乃兮、劉郁西使記作木乃奚。多遜作木剌希達、非國名也、係伊斯埒姆教中異派種落名。釋義爲舍正路入迷途。蓋其同教之人詈之如此。喇施特稱云伊斯馬額勒教徒。伊斯馬額勒、其徒於宗祖也。北宋時、教人相率、至波斯之地、居於第楞、奪阿剌穆特堡、占嚕忒巴兒堡、分遣同黨、於裏海西南山內險隘處、築堡以居。裏海東南苦希斯單之地亦如之。其教規「凡徒黨、必應奉教殺仇人、陰謀行刺、必致死乃已」。蕃刺客甚盛、四隣畏之。太祖西征、大軍渡阿母河、木剌希達會長哲剌勒丁哈散遣使輸款。元史譯文證補、有木剌夷補傳詳述其興滅。多遜·伯哷津皆謂「拖雷過苦希斯單」。苦希斯單卽木剌希達東部諸堡所在、在你沙不兒之南、默兒甫之西、羣山中。

渡溯攔蘭河 文田案、上溯字、元史亦作攔。通世案、貨特哷迷兒遮沙囉克事「沙囉克至卓克卓闌河、見父帖木兒」。卽此攔攔蘭河。據毛剌那舍哩佛丁戰勝史、卓克卓闌河、在自你沙不兒至安忒奎之路、穆兒噶卜河之西。疑是指赫哩嚕德河。伯哷津云「拖雷汗自苦希斯單、過枯姆折闌河、取赫喇特城」。枯姆折闌、卽卓克卓闌之轉。祕史蒙文云「拖雷已取亦魯等城、渡攔攔闌河、攻出黑扯連城。城破後回軍、與太祖相合」。出黑扯連與卓闌卓克音近。殆是取城名爲河名。

克野里等城。 秋濤案、元史作也里。通世案、祕史作亦魯、今赫喇特城也。古時謂之阿哩牙、中世曰赫哩、或曰哈哩、爲呼剌商四大城之一。大佐祐勒所引喀塔闌地圖作額哩、與本書音合。明史西域傳云「哈烈、一名黑魯、在撒馬兒罕西南三千里、去嘉峪關一萬二千里、西域大國也。元駙馬帖木兒旣君撒馬兒罕、又遣其子沙哈魯據哈烈」。卽是地也。今屬阿富汗國。洪氏曰「俄羅斯欲窺印度、此爲要衝。英國助阿富汗、築礮臺、備守禦。海拉脫之東、爲印度固斯大山、橫截南北、不便行軍。故海拉特爲阿富汗門戶、亦卽西北印度門戶。英人所以越境助守也。你沙不兒東南五日程」。多遜云「拖雷自苦希斯單、至赫喇特、力攻八日、兩軍死傷甚衆、守將亦殞。民乃請降。惟誅守兵萬二千人、旋奉太祖命、東往塔列堪會師」。

上方攻塔里寒寨。 塔原作哈、寒字原闕。秋濤據元史補寒字。通世據元史改哈爲塔。

朝覲畢、幷兵攻之。 通世案、伯哷津云「拖雷汗取赫喇特城、乃歸見帝、合兵攻塔力堪堅寨、始下之」。多遜云「大軍至、猛攻、牆堞多毀、守兵潰遁。惟騎兵得脫、步卒盡死。凡七月始下、屠而隳之」。

三太子克玉龍傑赤城。 玉原作王、秋濤校改。通世案、伯哷津云「窩闊台至兩兒處、極力和解。軍復振、力攻下之。城內節節爲守、巷戰七晝夜。驅民至野、約十萬人。以婦稚工匠從軍、壯丁則用以臨前敵。凡蒙古兵一人、分得二十四人。計民之充兵者、數逾五萬」。洪氏曰「若是則蒙古兵不過二千餘矣。未免太少。或他族之兵、不能分民、故得此數」。多遜云「盡分民於軍、一兵得二十四人。旣而悉戮之、惟工匠婦女幼稺得免。決河水淹其城」。與伯哷津稍異。伯哷津又云「城中焚毀殆盡。城有教士曰提直哀丁克兒費、聞望素著。帝先聞之、使人告以速出城、且許以百人從行。提直哀丁謂「親族甚衆、皆在城、當與衆共生死」。迨城破亦死」。

大太子還營所。寨破後、二太子三太子、始歸朝覲。 始字原闕。張石州據翁本增姑字。秋濤案、姑當作始。朝原譌作相、秋濤校改。通世案、伯哷津云「塔里堪寨旣下、察合台·窩闊台自貨勒自姆來謁。朮赤、則自貨勒自姆、挈行李以行」。洪氏曰「蓋移軍別處、錄所謂還營所也」。多遜亦云「朮赤仍駐鹹海·裏海間」。元史·祕史並云「三皇子同來」、恐誤。洪氏朮赤補傳云「時太祖將命哲別·速不台、北征奇卜察克、循裏海之西以往、而大軍皆在東南、不相應。乃命朮赤仍東駐鹹海·裏海間、以遙爲聲援」。自注「西書亦未見及此意、但云朮赤未來耳。觀地圖、則裏海東、萬不可無此一軍。非惟固南軍後路、且爲西師援兵。哲別補傳、有濟師於朮赤一事、此其確證」。

是夏、避暑於塔里河寨高原。 通世案、本紀河作寨。伯哷津云馬年夏、誤同本書。多遜云一二二一年夏、卽太祖十六年辛巳、與西游記合。金使烏古孫仲端謁太祖、蓋在是時。十六年十月中旬、長春入西遼故地、逢東夏使回、卽仲端也。禮師於帳前。因問「來自何時」。使者曰「自七月十二日辭朝。帝將兵追算端汗、至印度」。金史宣宗紀「興定四年七月、以烏古孫仲端等使大元」。五年十二月丁巳、禮部侍郎烏古孫仲端翰林待制安庭珍使北還、各進一階」。忠義傳云「仲端奉使、乞和於大元云云」。至西域、進見太祖皇帝、致其使事、乃還。自興定四年七月啓行、明年十二月還至」。金興定四五年、卽元之十五十六年。劉祁所撰北使記云「至五年十月復命」。十下脫二字。十月中旬、仲端過西遼故地、安能以其月達于汴京耶。據北使記、四年十二月初、出北界、五年四月上旬、至西遼。然則自西遼行三月、以七月初朝行宮、辭歸又三月、以十月中旬過西遼、又二月而復命也。元史本紀十六年辛巳「金主遣烏古孫仲端、奉國書請和、稱帝爲兄、不允」。十七年壬午又云「秋、金復遣烏古孫仲端來請和、見帝于回鶻國。帝謂曰「我向欲汝主授我河朔地、令汝主爲河南王、彼此罷兵、汝主不從。今木華黎已盡取之、乃始來請耶」。仲端請哀。帝曰「念汝遠來。河朔旣爲我有、關西數城未下者、其割付我、令汝主爲河南王。勿復違也」。仲端歸」。以一事重叙於兩年、亦同訛答剌·蒲華·尋思干之例。

時西域速里壇札蘭丁遁去。 秋濤案、丁後作木、當以丁爲正。

史文作丁、改作鼎。祕史作回回王札剌勒丁。卽箄端也。札闌丁與箄端、音亦相近。通世案、何氏末一句屬此足。札蘭丁卽札剌勒丁、人名也。箄端卽蘇爾灘、西域王號也。此作卽多遜・伯哷津所述札剌勒丁自烏爾韃赤逋入嘎自尼之事也。詳見前注。多遜云「帝以札剌勒丁居嘎自尼未下、議率三子親征。秋自塔里堪南行、經凱而徒俺城、一月下之。踰興都固斯大山、至八米俺、以其城當衝留攻之」。伯哷津云「此時察合台子謨阿圖堪、傷於矢而卒。帝最愛此孫、下令力攻。城下、遇生物悉殺、名其地曰卯庫兒干。(蒙古語、卯、不好也。庫兒干、豁兒合之訛、義謂寨)。至今斯地無人煙。帝不令察合台知謨阿圖堪之死。一日諸子侍食、帝佯發怒。察合台惶恐跪地、謂「如不從父命則死」。帝問「斯言誠否」。力矢非謊。帝乃告以「謨阿圖堪陣沒。我令軍中勿悲。汝當遵我命」。察合台聞言昏暈、忍淚侍食如故。餌而出至野外痛哭、始返」。多遜所述略同。但是役據多遜、在塔里堪駐夏之後。而伯哷津先敘是役、然後云「是夏、帝駐塔力堪」。是八米俺已平、復還塔力堪、後再踰興都固斯山也。不知孰是。史錄皆不載八米俺之戰、因附記於斯。

遂命哲別爲前鋒追之秋濤案、哲別、傳作只別。再遣速不台拔都爲繼、又遣脫忽察兒殿其後。秋濤案、原本脫下衍兒字。今刪。哲別至蔑里河汗城、不犯而過。速不台拔都亦如之。脫忽察兒至、與其外軍戰。蔑里可汗懼、棄城走。

通世案、三將追蘇爾灘謨罕默特、事在前年、詳見前注。西史將敘汗蔑兒克之叛服、因追記三將追擊之事。本書以爲追札蘭丁、蓋誤譯也。伯哷津云「當哲別・速不台之追蘇爾灘也、脫噶察兒繼進。蔑而甫脅汗蔑里克、自以國勢敗壞、蔑而甫之地、不可久居、乃率兵往古耳之古兒只境內、遣人納降於帝。帝卽令哲別・速不台等、如經汗蔑里克之地、不得肆擾。二將如命不犯而去。脫噶察兒後至、縱軍劫掠徵求、一如曩日情狀。其地山居之人與戰、脫噶察兒陣沒。汗蔑里克、遣人告帝曰「我勸我主謨罕默德貨勒自姆沙降附、而我主不從、乃其自取滅亡。我則壹意歸順。哲別諸延過我境、未擾而去。速不台亦如之。乃脫噶察兒獨不如是。山居之人、告以降服、而彼不聽、依然劫奪、將八剌克勤之人及山居之人驅逐、以致交戰隕命。若此大事、豈可以此等人將兵也」。仍以衣服餽帝爲謝。然汗蔑里克究恐懼不自安。又聞札剌勒丁奔至嘎自尼、聚集勢盛、復遣人往附」。多遜云「脫噶察兒爲拖雷前鋒、至你沙不兒城、不知其已降、肆殺掠、被城兵射死」。已見前注。與此異。多遜蓋本於志費尼之書、與喇施特往往不合。洪氏曰「汗蔑里克、並非國主。或其封爵、或卽其名。元史作蔑里可汗、旣嫌倒置、亦混君稱。祕史蒙文是矣。然以汗爲一句、以蔑里克爲一句、仍誤以爲國主也。脫忽察兒之死、諸書所無。貝勒津譯拉施特之書、復引西域人邁哈溫忒之說、云「脫忽察兒、或謂死於海拉特、或謂死於你沙不兒」。今觀此書、則以海拉脫爲近似」。祕史云「命者別做頭哨、速別額台做者別後援、脫忽察兒做速別額台後援。令三人自回回住的城外遶去、不許動他百姓、待太祖到時夾攻。者別如命、從篾力克王城邊經過、不曾動他百姓。至第三次、脫忽察兒經過、搶了百姓的田禾。篾力克王走出云云」。亦述此事、而意誤。至云「以脫忽察兒違令、欲廢了、後不曾、只重責罰、不許管軍」、而不言戰死、則尤與西史異。

忽都忽那顏聞之、率兵進襲。率原作素、秋濤校改。時蔑里可汗與札蘭丁合。就戰不利、遂遣使以聞。

通世案、祕史云「篾力克王走出、與回回王札剌勒丁相合、領軍迎太祖厮殺。太祖命失吉忽禿忽做頭哨、與札剌勒丁對陣、敗了。將追及太祖處云云」。伯哷津云「札剌勒丁在嘎自尼、蔑而甫脅汗蔑里克、以兵四萬來從。又有突兒克蠻人賽甫哀丁阿格拉黑、亦以四萬人從、古耳之地哀密兒皆從之。時帝已嚴守古耳只斯丹・札布勒・喀不爾之地、皆要隘。令失吉庫圖庫率兵南征。部將曰謨哲、曰謨兒哈爾、曰烏克兒古兒札、曰古都斯古兒札、共兵三萬。取以上所言之地、而防札剌勒丁。汗蔑里克所駐地、距失吉庫圖庫軍不遠。蒙古軍中、但知其已降、不知其又歸附札剌勒丁、陰告以「君駐配爾彎、不必移軍。我當來合」。迨汗蔑里克潛引己衆弁康里人而去、失吉庫圖庫、始知其有異心、亟追之、夜半追及。失吉庫圖庫、以昏夜不敢浪戰、令待次曉。汗蔑里克卽乘夜疾引去。天曉時、已與札剌勒丁軍合。康里人亦至、勢益盛。先數日、謨喀哲・謨兒哈爾、壁他將困斡里淹城、已將下。札剌勒丁忽自配爾彎馳至、突攻、傷千餘人。二將以衆寡不敵、退而渡河、駐營以守。纔復退、與失吉庫圖庫相合、仍前進。敵亦前進。相遇。札剌勒丁自率中軍、命汗蔑里克率右翼、賽甫哀丁阿格拉黑率左翼、戰一日、無勝負。失吉庫圖庫、令軍中縛氈象人、置士卒身後、連夜製成、以助勢疑敵。次日又戰、敵軍果疑援至。札剌勒丁呼曰「我衆甚盛、不必畏也。可分兩翼以繞之」。於是衆奮、圖亦漸合。失吉庫圖庫令軍士視旗所向、衝突敵陳。然已四面受敵、力不能支、遂奔。敵騎多良、馳而追殺、死者無算。帝聞敗信、憂而不形於色、謂「失吉庫圖庫素能戰。狃於常勝、未經挫折。今有此敗、當益精細、增閱歷矣」。札剌勒丁旣得勝、分所虜獲。汗蔑里克與賽甫哀丁阿格拉黑爭一駿騎。汗蔑里克以策檛其面。札剌勒丁以其爲王母族人也、不之禁。賽甫哀丁阿格拉黑怒、夜率所部、往起兒漫沙克蘭庫特之山而去。札剌勒丁軍勢頓弱。又聞帝軍至、益恐、卽退至嘎

自尼、謀渡信地河」。汗蔑里克、多遜作阿敏蔑里克、與帖木兒蔑里克異。多遜云「帝在八米俺、命將失吉庫圖庫、東南往喀不爾山中、阻札剌勒丁旁抄之兵。當札剌勒丁之奔嘎自尼也、其地數有內亂、守將迭被殺。札剌勒丁至、衆情推戴。復有王母之弟阿敏蔑里克、本守他城、避兵出走、東南入嘎自尼。庫拉起人賽甫哀丁阿格拉克、本居阿母河北、亦避難來此。皆率衆相助。喀不爾土人亦起兵應之、有衆六七萬。聞大軍南來、襲之巴魯安。遇蒙古兵攻堡者、敗之、殺千人。越八日、失吉庫圖庫至戰竟日、互有勝負。次日再戰、以阿格拉克所部最勇鬭、併力攻之、仍不能勝。札剌勒丁先令兵下騎以待、見戰酣、乃齊上馬衝突。失吉庫圖庫大敗而退云云」。

上自塔里寒寨、率精銳親擊之、追及辛自速河。秋濤案、辛自速河、祕史曰申河、即印度河。發源後藏之阿里、西行繞雪山之北、印度之西北界、轉而南行、北印度諸水會之、轉至信地入海。文田案、辛自速河、祕史只作申河、不得稱辛自速河。自速、乃目連二字之譌文。丘處機西遊記云「沒輦、河也」。又西使記、以坤河爲昏木輦。此稱辛目連、即辛河、又即申河也。目漣與河不嫌重複。猶今西遼河、蒙古稱西喇木倫、而漢人又稱西喇木倫河也。曾植案、目連、即沒輦、今語木倫也。祕史蒙文、此河前後屢見、竝稱爲申沐漣。譯文前後竝稱申河。此既稱目連、又稱河、於文重複。提要所謂蹇拙者也。通世案、布呼特淑乃德兒曰「辛自、即信度也。速者、蒙古語謂水、亦謂河」。然竟不如李沈說當。獲蔑里可汗、屠其衆。札蘭丁脫身入河、泳水而遁。丁原作木、秋濤校改。通世案、伯哷津云「失吉庫圖庫敗歸見帝、訴「烏克兒古札‧古都斯古兒札、不識戰陣機宜。平日言兵事、極似有才。迨臨陣、乃毫無布置、以致敗衂」。帝卽自將起師、全軍離塔力堪、行速、不及炊飯。至前戰處、詢庫圖庫「烏克兒二將、列陣何處、敵列何處」、責其不善擇地。二將同受訓斥。至嘎自尼、知札剌勒丁、前十五日已行、令八罷牙里委赤轄城事、引軍亟追。時札剌勒丁已備船、將於明日東渡。帝夜疾行、及曉追及圍之。欲生獲札剌勒丁、令軍中不發矢。復令烏克兒古兒札‧古都斯古兒札、阻遏敵兵、不令近河岸。既而敵兵漸退至河。二將猛攻其右翼。汗蔑里克不能支、欲遁費薩倭兒。而帝軍已截守道路、殺汗蔑里克、右翼全敗。札剌勒丁率中軍、自晨戰至日中。左右翼皆覆沒、中軍僅七百人、左右衝突。諸軍以奉令不發矢、札剌勒丁突圍而出、棄胄負盾執旗纛、縱馬入印度河、(多遜云、策其馬、自數丈之高崖投入)泳水而遁。帝見之、以口咬指、謂諸子曰「凡爲子者、皆應如此」。諸軍亦欲追入水、帝阻止之。獲札剌勒丁之妻、其子被殺。其輜重先已投印度河、令善泅者撈取」。多遜云「時一二二一年冬也」。祕史云「者別等三人、自札剌勒丁後至、將札剌勒丁勝了。欲入不合兒城、不得。直追至申河、軍馬溺死者殆盡。獨札剌勒丁與蔑力克、逆申河走去」。敘事全誤。凡西征之役、本書甚疎略、祕史最多錯謬。遂遣八剌那顏將兵急追之、不獲、因大擄忻都人民之半而還。忻都原作折相、秋濤校改。通世案、祕史卷四、太祖離札木合時、札剌亦兒人巴剌來屬、卽此八剌那顏也。忻都、卽印度。祕史蒙文作欣都思惕、譯文作欣都思、憲宗紀亦作欣都思、續綱目作欽都。波斯語欣都斯單之略也。伯哷津云「帝遣札剌亦兒人巴剌諾顏、率兵追入印度、復遣朵兒伯同往。既入印度、而不得蹤跡、取壁遏城、又往木而灘。其地無石、伐木爲筏以運石。攻具既備、而暑氣甚熾、遂捨去、蹀拉火耳‧壁薩烏爾‧蔑里克甫爾諸城、大掠而回」。祕史云「太祖命巴剌追札剌勒丁等。復以欣都思惕種與巴黑塔惕種之間有阿魯‧馬魯‧馬塔剌撒等種、命案兒伯朵黑申往征」。又云「初命巴剌追回回王札剌勒丁幷汗蔑力克、追過申河、直至欣都思惕種地面、根尋不見。回來、卻將欣都思惕邊城百姓的駝羊都擄了」。朵兒伯朵黑申、似非與巴剌同往、與西史異。多遜作土兒台、音訛。洪氏曰「祕史卷十蒙文、謂朵兒伯之姓爲朵兒伯台、則當是朵兒邊人」。

癸未、十八年、宋嘉定十六年、金元光二年。通世案、喇施特云羊年、誤同本書。多遜云一二二二年、卽太祖十七年壬午也。春、上兵遁辛自速河而北。北原作止。秋濤案、當是北字之譌。通世案、伯哷津云「帝歸至印度河上游」。多遜云「帝自循印度河西岸北行、捕札剌勒丁餘黨。時阿格拉克與他族相仇殺、先死。蒙古騎兵、與波斯步兵至、或殺或逐、醜類悉平」。祕史云「太祖遂申河、攻取巴惕客薛城」。巴惕客薛未考。又案、西游記、辛巳十一月十八日、長春至邪米思干、以土寇壞阿母河舟梁、入城住冬。宣使泊曷剌等偵前路。閏十二月、二太子發軍整舟梁、土寇已滅。曷剌等詣營。太子云「上駐蹕大雪山之東南云云」。是時太祖正在印度河邊也。壬午正月十三日、阿里鮮發邪米思干、馳三日過鐵門、又五日過大河、二月初吉、過大雪山、南行三日至行宮。是阿里鮮正月二十日、過阿母河、十餘日而至行宮。則二月上旬、行宮漸北、距大雪山三日程、已至壁沙烏兒‧喀不勒之間矣。太祖之行留年月、唯西游記可以證之。命三太子循河而秋濤案、舊本此下、有「都剌莎合兒」等語、今攷定、移入丁丑

年。其丁丑年、有「上避暑八魯灣川」及「候八剌那顏」之語。攷之本紀、正在此年。是錯簡互譌。今改正如左。通世案何氏校本、而下補南字。此不要補。下帶字、卽南字之譌也。帶。秋濤案、上下當有闕文。通世案、此卽南字、而上下無闕文。伯哷津云「帝令窩闊台往定印度河下游諸地。遂大掠嘎自尼、虜其人以行、城亦毀」。多遜云「帝以札剌勒丁未獲、軍退後、嘎自尼民、必復叛附、命窩闊台往、僞爲查閱戶口、令民出城俘戮之、取工匠從軍。巴魯安之敗、海拉脫城亦叛。命伊兒知吉歹往攻、六月餘始下。屠城、殺一百六十萬人。時一二二二年六月十四日也。軍旋、恐有遺孽、復遣兵突往、再殺二千人。惟十六人以居鄉得免」。伊兒知吉歹、卽祕史之阿勒赤歹、太祖弟合赤溫之子、史表之濟南王按只吉歹。洪氏曰「嘗聞波斯人云「蒙古當日殺戮之慘、數百年休養生息、猶未復原」。西書則云「蒙古誠好殺。然亦其人反覆有以致之」。觀太祖賜邱長春詔曰「來從去背、實力率之故然」、是可知已」。至不昔思丹城、曾植案、祕史蒙語作昔思囝。又案、卽大典圖之不思忒。通世案。西史作昔裴斯單、在嘎自尼西南。又云昔斯單、卽祕史之昔思田。其都城曰博斯特、在希勒們德河濱、卽西北地附錄之不思忒。布哷特淑乃德兒曰「不昔思丹、似博斯特·昔斯單合爲一名。觀俄圖、多哩河入希勒們德河處、有地名喀剌畢斯特。蓋古博斯特也」。欲攻之、遣使來稟命。上曰「隆暑將及、宜別遣將攻之」。通世案、伯哷津云「窩闊台遣人稟命於父、欲往攻昔義斯單。帝曰「天已暑、宜卽回。當遣別將往攻」」。遂由該勒姆西兒之路而回」。祕史云「拖雷取昔思田城」、係誤。夏上避暑於八魯彎川、曾植案、祕史作巴魯安客額兒。通世案、巴魯安又云珀魯安。前年失吉庫圖庫敗績之地也。喀不勒城與安德喇卜川之間、與都固斯山中、今猶有帕兒彎峽。峽中有河有小邑、亦名帕兒彎。伊本固兒達特伯以珀魯安爲巴米俺屬邑。蘇勒灘巴別兒云「帕兒彎峽路甚險、其峽與南大谷之間、有七小峽」。又云「喀不勒夏風、名帕魯彎風」。候八剌那顏、因討近敵、悉平之。通世案、伯哷津云「是夏、帝避暑於配爾彎、以待八剌諸顏、悉掠配爾彎近處」。西遊記、壬午三月十五日長春自邪米思干啓行、二十九日濟阿母沒輦、四月五日得達行在。則自阿母河至行在、不過六日。是帝北歸、四月已在配爾彎也。又云「時適炎熱、從車駕廬於雪山避暑。上約四月十四日問道。將及期、有報回紇山賊指斥者、上欲親征、因改卜十月吉。師乞還舊館。上曰「再來不亦勞乎」。師曰「兩旬可矣」。又三日、命楊阿狗以千餘騎從行、由佗路回云云」。所謂上親征山賊者、卽本書之討近敵也。八剌那顏軍

至、遂行至可溫寨。三太子亦至。時上既定西域、置達魯花赤於各城、監治之。秋濤案、自帶字至此、舊本誤入丁丑年吐麻部主之下。今攷本紀載避暑八魯彎川及置達魯花赤事、均在此年、爰據移正。通世案、伯哷津云「八剌朶兒伯至、帝遂往古腦溫庫兒干。窩闊台亦至、在配克部爾過冬。其地之酋曰薩拉爾阿黑默特、自縛來降、並餽軍糧。以地熱士卒多病、令民每戶舂黍米百斤、供士卒三人之食。其時哲別速不台、收定阿而俺·阿特耳佩占·義拉克·失兒灣等處、分設官吏」。多遜云「是夏、避暑於巴魯安。巴拉等自印度旋軍來會。六月、以西域大定、設達魯花赤監治其地。秋、起師。窩闊台來會於古腦溫庫兒干。至布雅闕沃兒、駐冬。其地在山中、近信度河之上游」。祕史云「太祖至額揭斡羅罕·格溫斡羅罕、巴魯安客額兒地面下了營」。古腦溫庫爾干、卽祕史之格溫斡羅罕、本書之可溫寨也。洪氏曰「錄爲寨名而祕史釋爲河名。案蒙文寨曰豁兒合、小河曰豁羅罕。有時亦作豁羅合、二音易混。或是寨名。或寨在河濱、以河爲名」。布哷特淑乃德兒曰「可溫、疑是蘇勒灘巴伯兒所記克沃克嶺、在興都固斯連山中」。布雅闕沃兒、卽配克部爾之異譯、其地不詳。西遊記、壬午八月八日、長春再發邪米思干、十二日過碣石、十五日濟阿母河、二十二日至行宮。行宮距阿母河、不過七日程。則古腦溫庫兒干·布雅闕沃兒、亦去八魯彎不遠。多遜謂近信度河上游、殆非」。』甲申十九年、宋嘉定十七年、金哀宗正大元年。旋師通世案、伯哷津云「帝欲由欣都斯丹、至唐古特之路而回、行未數程、聞唐古特又叛、一路山荒林密、道途險巇、水土惡劣、行旅易病、乃回至費薩倭兒、仍循來時之路而返」。洪氏曰「此卽元史「帝至東印度國」一語所由來也。當是脫必赤顏原有斯語。特欲往未果。譯者不察、遂謂已至東印度。然西游記並無是事。豈帝遣別隊探路、長春未之知耶」。「猴年、順八米俺山路行。南征時、留輜重於八格闌。至是取以行、渡質渾河。冬至撒馬爾干、令蘇爾灘母妻、在輜重前先行、俾其辭別故土而哭。諸軍在後、不使聞其哭也。帝至費那克河、除朮赤外諸子至。會議既畢、徐行回軍」。多遜云「帝在信度河上游駐冬、一二二三年春欲從印度入體伯特、以征西夏、率軍而東。而山高林深、險巇難進。乃回珀沙倭兒、踰八米俺山路、至八喀闌過夏。秋、過巴勒克、屠民集城據者。渡質渾河、入布哈爾、召熟悉天方教之教士曷世哀甫等二人來見、詳述教規。帝謂「所言亦是。惟赴麥哈禮拜、我不謂然。上帝降鑒、無在不燭。何爲拘拘一地哉」。令此後祈禱文用己名、免教士賦役。召朮赤來會、並令驅獸向東南、備畋獵、經撒馬爾干、渡錫爾河、令蘇爾灘母妻及其親族、辭別故土、向國而哭。察合台·窩闊台、獵於布哈爾、來獻所獲。朮赤自以與弟不睦、

己所封地遠在異域、怏鞅鞅不樂。帝屢召之、稱疾不至、惟驅獸至塔什干、供上行圍」。案西曆一二二三年、卽太祖十八年癸未也。本書自庚辰以來各年紀事、皆誤後一年、則此甲申固當作癸未。然太祖旋師、實在壬午、不在癸未、多遜亦誤。而帝在信度河上游駐冬、本無其事。況率軍東行乎。長春西游記、可以證也。西游記云「壬午八月二十七日、車駕北回。九月朔、渡航橋而北。（渡阿母河也）。十五日、十九日、二十三日、在途設幄論道。自爾扈從而東、時敷奏道化。又數日至邪米思干。十月、上駐蹕于城之東二十里。六日見上、請不從車駕、或在先、或在後、任意而行。上從之。十一月二十六日卽行、十二月二十六日、東過霍闡沒輦、至行在。聞其航橋中夜斷散、蓋二十八日也。癸未正月十一日、馬首遂東。二十一日、東遷一程、至一大川、東北去賽藍約三程。水草豐茂、可飽牛馬、因盤桓焉。二月七日入見、請先行。上曰「少俟。三五日太子來云云」。八日諫獵。二十四日再辭朝。三月七日又辭。十日辭朝行、三日至賽藍、望日致奠於趙道堅之墓、明日遂行」。所謂一大川、蓋齊兒齊克河也。過塔什干城南、西流入錫爾河。伯哷津所謂「除朮赤外諸子至」、多遜所謂「二子來獻所獲」、卽癸未二月會於此地也。太祖以癸未之春已至塔什干邊、閱二年始歸國、在途歲月過多、不詳其故。洪氏曰「此時、正哲別·速不台入欽察、敗俄羅斯之時。豈因二將暴師於遠、故遲行以俟軍信耶」。

佳冬、避暑、冬原作各、秋濤校改。且止且行。通世案、據西游記、壬午秋旋師、冬駐于撒馬爾干近郊。癸未春、駐于齊兒齊克河上。多遜云「察合台·窩闊台來會後、駐營喀闌塔什之地、以圍獵過夏」。喀闌塔什、當卽塔什干。癸未二月、長春諫獵、自後兩月不出獵。長春去後、乃復大獵、是癸未之夏也。其冬駐營之地不可考。祕史云「太祖遂回、至額兒的石地而過夏」。是甲申之夏也。伯哷津云「猴年在路駐夏過冬、行及己境。皇孫呼必賚（卽世祖）·忽拉護（卽旭烈兀）來迎。時呼必賚十一歲、忽拉護九歲。在乃蠻界上阿拉馬克委之地、呼必賚射一兎、忽拉護射一山羊以獻。行至布哈蘇赤忽、支金帳、設宴、大犒三軍」。多遜云「二孫迎於葉密爾河」。布哈蘇赤忽、多遜作布喀蘇起庫、其地不詳。此皆甲申年中事也」。』

乙酉二十年、宋理宗寶慶元年、金正大二年。春、上歸國。自出師此下秋濤增西域二字。至此凡七年。至此二字原闕。秋濤依類編所引增。案、祕史云「雞兒年秋、回到禿剌河黑林的舊營內」。通世案、伯哷津云「雞年春至老營。」多遜云「一二二五年二月、至蒙古之鄂爾多」。西曆一二二五年二月、卽乙酉正月。乙酉歸國、東西諸史皆同。惟祕史云秋、與諸書異。多遜又云「帝東歸、定四子分地、以和林舊業分拖雷、以葉密爾河濱之地封窩闊台、以錫爾河東之地封察合台、以鹹海西南貨勒自彌之地幷鹹海

裏海之北封長子朮赤。朮赤令其將成帖木兒駐烏爾鞭赤」。蒙古源流云「令長子察干岱于俄羅斯地方卽汗位、次子珠齊于托克瑪克地方卽汗位、三子謌格德依留守汗位、其幼子圖類守產」。長子次子名互誤。是時俄羅斯地、尙未平定。且朮赤後王、雖已服俄羅斯、而都城在奇卜察克境內、云「于俄羅斯地方卽汗位」、非也。西書云「察合台夏至伊犁近處之山避暑」、則東界應至伊犁。托克瑪克在伊犁西、說當不謬。圖類守產者、謂守蒙古舊業也。又案、哲別·速不台入欽察敗斡羅思、本書不載一語。元史有速不台·曷思麥里等傳、僅叙及其事、亦甚疎略。西書多述之者、而多遜博引衆書、所紀最詳。今據洪氏譯文、補叙於此、以資考究。伯哷津云「札剌勒丁自你沙不兒遁嘎自尼時、哲別·速不台遣人請命於帝、謂「蘇爾灘已死、札剌勒丁已遁。我等應往何處」。待命而行。惟望於一二年間、仰賴天祐得遵主上所立期限、繞奇卜察克之地、以往摩古里斯單」。其後又屢遣人奏事。時西域之地多亂、每次奏事、皆以三四百人護送。軍入義拉克、取哈耳城（卽大典圖之胡瓦耳）·西模爨城、至立亞城掠之、至枯姆城大殺掠、西往哈馬丹。其酋賽特密哲哀丁阿拉曷都勒餽衣騎。遣官入守。聞別隊至薩哈斯、（洪氏曰合以下文、當是贊章）。爲其酋塔勒沙拉赤庫赤布克汗所敗、遂往贊章、大屠戮。又往可斯費音、以民守城辱詈、力攻下之。民猶力戰、兩軍共亡五萬人。義拉克境內。多罹兵鋒。是年冬、寒最甚。兵在立亞境內、帝在忒耳迷斯·那黑沙不之地。（然則是庚辰年冬矣）。既而兵入阿特耳佩占（貨勒自彌國之隣部）、所過殺掠。將及其都城台白利司。部主阿塔畢鄂思伯克、匿不敢出、遣人迎降、餽牛羊馬及衣服。二將卽入阿而俺駐冬」。阿而俺、多遜作莫干、在裏海西、庫耳河南。多遜云「二將以其部內莫干之地、饒水草、便游牧、遂駐冬。西北有角兒只國、（卽曷思麥里傳之谷兒只、在裏海·黑海間、高喀斯山南。）聞大敵近境、亟謀設備。不知阿特耳佩占已降附、無圖志、遣使約鄂思伯克、明春合力夾攻蒙古。而是冬、二將卽往角兒只、鄂思伯克之將阿庫世、反爲先鋒、突兒克蠻人庫兒忒人皆從征、鈔掠其境」。洪氏曰「曷思麥里傳「招諭曲兒忒失兒灣沙等城悉降」。曲兒忒卽庫兒忒、在阿特耳佩占西南山中。族類之名、非城名。此時當已降附、故來從軍」。「未及其都城帖弗利司、角兒只人來禦。阿庫世戰不利。蒙古繼進敗之」。時一二二一年（太祖十六年）二月也」。伯哷津云「谷魯斤部萬人來禦、臨陳痛詈。戰敗其衆。以其境內路險林密、退往梅拉喀。（在台白利司南、近倭而米雅湖東南隅。）路經台白利司、部主復遣官曰薩木斯哀丁土格雷、出餽軍實。進攻梅拉喀。城主爲婦人、不習戰事。城民乃自募丁壯爲守。蒙古人驅俘獲之衆爬城、退縮者斬。數日城破、大殺掠」。多遜云「三月三十日、破梅拉噶城、大殺掠。欲從梅拉噶往哀而陛耳、（小國、在梅拉噶西南。）以山路狹險、改而南行、意趨巴格達特。哈里發那昔爾聞警、徵哀而陛

耳·毛夕耳·美索卜塔米牙各部主、發兵助守。僅哀而陛耳·毛夕耳兵至。(毛夕耳、卽地理志之毛夕里、在哀而陛耳西北、隔體格力斯河。)蒙古軍聞有備、亦未往。回至哈馬丹、徵民貢獻。民以去年已輸納、不堪一再需索、遂殺留守官。攻城兩日、蒙古兵多夷傷。而守將遁去、民無固志、城遂破。縱兵大掠」。伯哷津云「哈馬丹城、有貨勒自姆沙舊將只馬哀丁阿比亞、糾聚作亂、殺所置守吏、並擒阿拉曷都勒、下於獄。二將復回哈馬丹、破其城。只馬哀丁阿比亞求降。仍戮之、平毀哈馬丹。往那希拉彎、破其城。城酋乞降、允之」。那希拉彎未詳。多遜作愛而達必爾、台白利司東南鄰近之城。多遜云「復北行破愛而達必爾城、復西至台白利司。鄂思伯克捜而避去、留將居守、納幣得免。復北下賽拉白城、遣使招下阿而俺之貝列堪城。使人被害。攻下之、無男婦悉誅。(西曆一二二一年十月、爲太祖十六年九月)。甘札城(阿而俺州城)迎饋輸款、得不被兵。西北入角兒只、復敗其衆」。伯哷津云「谷魯斤兵來禦。哲別以五千人設伏。速不台迎戰佯敗。敵追而伏起、殺其衆三萬」。多遜云「角兒只南境大擾、國都驛騷。時哲別·速不台、已奉太祖命、北征奇卜察克。以角兒只境內、山逕峻險、溪澗縈繞、戎馬艱阻、不欲假道、退而東行、渡庫耳河、破失兒灣之沙馬起城、(洪氏曰、「失兒灣國名、沙馬起都城名、裏海西濱部落。曷思麥里傳云失兒灣沙城」。豈彼土省文之稱耶」。今案、失兒灣沙城、猶言失兒灣王城也。而史臣誤以失兒灣沙爲城名)。又破得耳奔特(卽地理志之打耳班)。失兒灣部主拉施忒、守山堡未下。二將令以鄉導人來、卽罷攻。拉施忒遣十人至。殺一人以徇、九人不善導者視此」。軍遂踰高喀斯山而北」。土土哈傳云「太祖征蔑里乞。其主火都奔欽察。欽察國主亦納思納之。太祖遣使諭之曰「汝奚匿吾負箭之麋。亟以相還。不然禍且及汝」。亦納思答曰「逃鸇之雀、叢薄猶能生之。吾顧不如草木耶」。太祖乃命將討之」。洪氏曰「奇卜察克、嘗納逃人、索之不與。土土哈傳之外、各書皆無佐證。惟觀太祖討平諸國、雖未必兵以義動、亦大都師出有名。裏海北濱、素無往來。何至窮兵絕域。土土哈傳、語必有因。惟親征錄·祕史垂河之役、已言速不台盡滅蔑兒乞、則又不合矣」。又曰「曷思麥里傳云「帝遣使趣哲伯疾馳以討欽察」。今觀多桑所紀師程、則自哈馬丹北行後、不再向南。是時爲太祖十六年辛巳、正親將追札剌勒丁之時、西域指日底定。乃令移得勝之師、北征欽察。遣使授策、必在是年。速不台傳、於庚辰年追西域王之役、誤繫之於壬午。又誤云「明年請討欽察」。本紀於北征之師、又一字未及。元史疏舛闕略、於斯爲甚。細考西書、則印度河之戰、哲·速二將、並未在列。此又祕史之誤」。伯哷津云「軍入阿蘭部(西北地之阿蘭·阿思)、阿蘭人糾合奇卜察克人來戰、無勝負。二將遣告奇卜察克人「我等皆一類、阿蘭爲異類。我等當立約議和、不相侵犯。若欲財物、皆可致餽」。因厚餽之。奇卜察克人引去。

由是戰勝阿蘭、大殺掠。奇卜察克人散歸、不爲備。二將出不意、攻入其部、盡返所遺物。敗衆多逃入斡羅斯」。阿蘭青目、欽察非青目、洪氏有考證。多遜云「軍入高喀斯山。奇卜察克·阿速(卽阿蘭)·扯而開斯(卽西北地之撒耳柯思)等部、集衆來禦、衆寡不敵、復迫於險。乃以甘言誘奇卜察克云云。奇卜察克引退。軍既出險、敗阿速等兵、追奇卜察克、出不意、突至奮擊、殺其部酋庫灘之弟玉兒格及子塔伊兒」。速不台傳云「速不台上奏請討欽察、許之。遂引兵繞寬定吉思海展轉至太和嶺、鑿石開道、出其不意。至則遇其酋長玉里吉及塔塔哈兒方聚於不租河、縱兵奮擊。其衆潰走、矢及玉里吉之子、逃於林間。其奴來告、而執之。餘衆悉降、遂收其境」。寬定吉思海、又作寬田吉思海。洪氏曰「寬田吉思海、卽裏海。太和嶺、卽高喀斯山。鑿石開道、則軍迫於險可知。奇卜察克已退、而爲蒙古所乘、故曰出其不意。玉兒格卽玉里吉也。塔阿兒、卽塔塔哈兒也。西文原作塔伊兒。阿剌比文阿伊二音、西人每每誤譯。證之元史、必是塔阿兒。土土哈傳謂欽察國主亦納思。西域書及馬加國史、皆謂奇卜察克王名庫灘。華文霍忽等字音、西人每譯成庫、猶之蒙古源流每譯豁忽等音爲郭。則庫灘必是霍灘。曷思麥里傳「與其主霍脫思罕戰、遂平欽察」。據此二語、則欽察國主、當是霍灘。霍脫·霍灘音叶。思字或是恩字之誤。西北種族、國非一部、部各有長。意者亦納思爲欽察東部之酋、霍灘爲西部之酋、未可知也」。多遜云「軍東北至浮而嘎河、告捷於朮赤太子、請濟師。時朮赤已下烏爾鞬赤、駐軍於裏海東部、衆多暇、分兵大半往助。一二二二年(太祖十七年)冬、新兵既至、浮而嘎河冰合、遂下阿斯塔拉干、焚掠其城、遇奇卜察克、又敗之」。洪氏曰「浮而嘎河入裏海處、地名阿斯塔拉干、商賈大埠也。曷思麥里傳「尋征康里、至孛子八里城、與其主霍脫思罕戰、又敗其軍、遂平欽察」。西人考得「阿斯塔拉干、先時波斯商人貿易所萃。回紇語謂城曰八里。孛子當卽波斯之誤、猶言波斯城」。揣擬有情。惟康里在鹹海東、決不在烏拉嶺以西、裏海之北。以此爲康里、不合。傳又云「與其主霍脫思罕戰、又敗其軍、遂平欽察」、則仍是欽察、而非康里。霍脫當是欽察國主、說見前。觀速不台傳、卽與曷思麥里傳、軍行次第不同。明人修元史、絕不知康里·欽察與阿速等部、孰東孰西、以致紀述各異、不足據也」「軍分爲二、復引而西。一軍追敗兵、過端河。一軍至阿索富海之東南、平撒耳柯思·阿速等部。遂自阿索富海、履冰以至黑海、入克勒姆之地、大掠而北。克勒姆、卽元史西北地之撒吉剌。喇施特作速達克城。速達克、卽嚕卜嚕克·馬兒科玻羅之索勒岱雅、克勒姆東南岸之大埠頭也)。兩軍復合。庫灘遁入俄羅斯境、乞援於其壻哈力赤侯穆斯提斯拉甫。俄羅斯者、西北之大國也。西曆八六二年(唐懿宗咸通三年)、始立國於北海之南。其後拓地益廣、南鄰黑海。至第十一世紀之半(宋仁宗時)、俄行封建

之制、諸侯自以其地分畀子孫、國分七十、同族日事爭奪。哈力赤爲南俄列邦。其君穆斯提斯拉甫能兵、屢戰勝同族、視蒙古蔑如也、允其妻父之請、遣告計掖甫侯穆斯提斯拉甫羅慕諾委翅、集列邦之君議兵事。於是扯耳尼哥甫侯穆斯提斯拉甫司瓦托司拉勒委翅、與南俄諸侯、皆至計掖甫。羣議、出境迎擊、勿待其至、並告俄首邦物拉的迷爾太公攸利第二、出兵爲援。分運軍糧、自帖尼博爾河·特尼斯特河、以至黑海東北。哲別·速不台聞俄羅斯起師、遣使十人、往告「蒙古所討者、奇卜察克。夙與俄羅斯無釁、必不相犯。蒙古惟敬天、與俄教相若。奇卜察克、素與俄有兵怨、盍助我以攻仇人」。諸侯謂「先以此言餌奇卜察克。今復餌我、不可信」。殺其使。二將復遣人至、謂「殺我行人、其曲在汝。天奪汝魄自取滅亡。今以兵來、請決勝負」。庫灘又欲殺之。俄人釋歸約戰」。洪氏曰「俄史謂「蒙古又遣人來告「前言非誑、我已誓於天矣。決不相犯、請勿用兵」。以此觀之、實俄自取兵禍」。「哈力赤侯先以萬騎東渡帖尼博爾河、敗蒙古前鋒、獲裨將哈馬貝殺之。諸侯皆隨而東。蒙古軍退。追九日至喀勒吉河(或稱喀勒喀河、或稱喀剌克河。喀喇姆津曰「卽今喀玙子河、合喀勒迷斯河入阿索富海」。喇施特云「追十二日」。)遇二將大軍。時俄兵八萬二千、分屯南北。南軍爲計掖甫·扯耳尼哥甫等部之兵、北軍爲哈力赤等部及奇卜察克兵。哈力赤侯輕敵貪功、不謀於南軍、獨率軍北渡河、戰於孩耳桑之地。勝負猶未決、而奇卜察克兵、怯敵先退、陳亂。蒙古軍乘之、俄兵大敗。哈力赤等侯得脫、渡河而西、卽沈其舟。後至者不得渡、悉被殺。俄之南軍、不知北軍之戰、亦不知其敗。而蒙古軍猝至、困其營、三日不下。誘令納賄行成、俟其出疾攻之、殲馘無算。(喇施特云「劇戰七日、盡敗敵衆」。)獲計掖甫·扯耳尼哥甫等部之君、縛置於地、覆板爲坐具。蒙古將領高坐其上、飲酒歡會、多壓斃者」。是役、據西域書、爲癸未年事。俄史或云一二二四年六月十六日、或云同年五月三十一日。然謂一二二三年者多、乃合西域書之說、蓋在太祖十八年夏。速不台傳云「又至阿里吉河、與斡羅思部大小密赤思老遇、一戰降之」。阿里吉河、卽喀勒吉河。密赤思老、卽穆斯提斯拉甫之訛略。哈力赤·計掖甫·扯耳尼哥甫三侯、皆名穆斯提斯拉甫。洪氏曰「計掖甫君年長、故爲大。扯耳尼哥甫君年幼、故爲小」。曷思麥里傳云「進擊斡羅思於鐵兒山克之、獲其國主密只思臘。哲伯命曷思麥里、獻諸朮赤太子誅之」。鐵兒山、卽孩耳桑之訛、乃地名、非山名。密只思臘、卽大小密赤思老。「是役也、俄亡六侯七十將、兵士十死其九。太公攸利第二、乞得請兵信、令其姪遏羅斯托侯瓦西耳克康斯但丁諸委翅率衆往助。(遏羅斯托城、今曰遏羅斯托弗哀)。行至扯耳尼哥甫、聞軍敗、亟引退。是時俄列城皆無備禦、不能爲戰守計、惟俟兵至、乞降免死、擧國大震。乃蒙古軍、西至帖尼博爾河、北至扯耳尼哥甫·諸拂郭羅特·夕尼斯克城而止。是冬踰河·浮而嘎

河冰合、全軍涉冰東行。捷書至太祖行在。命以馬十萬犒師、封朮赤於奇卜察克、以轄西北之地。一二二四年(太祖十九年甲申)、朮赤遂自錫爾河北儻塔之地、西踰烏拉嶺、至奇卜察克東境、轄治所部、命哲別·速不台班師。二將歸朮赤部兵、自率所部東返。中道哲別卒」。喇施特云「遵帝所命之路而還」。曷思麥里傳云「軍還、哲伯卒」、與西書同。洪氏哲別補傳云「平康里而東返」。自注「蒙古之滅康里、不知在何年。西書亦失考、但似在戰勝俄羅斯之後而已。元史阿沙不花傳「阿沙不花、康里國王族也。初太祖拔康里時、其祖母苦滅古麻里氏新寡、有二子皆幼。國亂家破、無所依。一夕有數駝皆重負、突入營中、驅之不去。發視其裝、皆西域重寶。遂驅馳至京師。時太祖已崩、太宗立、盡獻其所有」。據此、則康里之滅、當在太祖季年西域還師之後、故距崩期不遠。奇卜察克在西、康里在東、繫於哲·速二將東還之下、庶爲近似」。多遜又云「太祖東行、召朮赤、朮赤未至。繼又命其西平布而嘎爾(卽西北地之不里阿耳)·奇卜察克·扯而開斯等部未定之地。而朮赤稱疾不行。太祖滋不悅。一二二五年、太祖旣還行宮、有蒙古人自西來、詢以朮赤之疾、則云「但見出獵、未聞有疾」。太祖大怒、命察合台·窩闊台率兵往逮問。無何薨。信至、太祖大慟、欲治其人妄言之罪、而已逸去。遂命斡赤斤大王往視其喪、定嗣子位」。

是夏、避暑（通世案、西史云夏在舊居駐夏」。）秋復總兵征西夏。

通世案、伯哷津云「聞唐古特又叛、雞年秋、整軍攻合申、令察合台以本部兵守老營後路。其時朮赤卒、窩闊台從帝軍。拖雷汗因婦西兒忽克屯別姬出痘、緩行數日」。西兒忽克屯、元史憲宗紀作唆魯禾帖尼、后妃表作唆魯和帖尼、后妃傳作唆魯帖尼。祕史作莎兒合黑塔泥、王汗弟札合敢不之次女也。本紀云「二十一年春正月、帝以西夏納仇人赤臘喝翔昆及不遣質子、自將伐之」。赤當作亦、赤臘喝翔昆、卽本紀上文之亦剌合、本書之亦剌合鮮昆、王汗之子也。癸亥年、王汗滅、亦剌合奔西夏。太祖責西夏納仇、蓋乙丑始征西夏時之事。至今年之役、則不必以此爲口實也。西夏書事云「亦臘喝翔昆、乃蠻部屈律罕子」、大誤。又本書西史、皆云乙酉秋出師、本紀則以爲明年正月、祕史則以爲明年秋。祕史云「成吉思旣往過冬、欲征唐兀、從新整點軍馬。至狗兒年(戌)秋、去征唐兀、以夫人也遂從行。冬間於阿兒不合地面圍獵。成吉思騎一匹紅沙馬、爲野馬所驚。成吉思墜馬跌傷、就于搠斡兒合惕地面下營。次日、也遂夫人對大王并衆官人說「皇帝今夜好生發熱。您可商量」。於是大王并衆官人聚會。其中有脫侖議說「唐兀是有城池的百姓、不能移動。如今且回去、待皇帝安了時再來攻取」。衆官人皆以爲是、奏知成吉思。成吉思說「唐兀百姓見咱回去、必以我爲怯。且這裏養病、先差人去唐兀處、看他回甚麽話」。遂差人對唐兀主不兒罕說「你曾說「要與咱做右手」。及我征回回、你不從、

又將言譏諷我。如今已取了回回、我與你折證前言」。不兒罕說「譏諷的言語、我不曾說」。有阿沙敢不說「是我說來。要與我廝殺時、你到賀蘭山來戰。要金銀緞疋時、汝往西涼來取」。使臣回、將前言說與成吉思。成吉思說「他說如此大話、咱如何可回。雖死呵、也去問他。長生天知者」。遂到賀蘭山云云」。』

丙戌 二十一年、宋寶慶二年、金正大三年。春至西夏、一歲間盡克其城。時上年六十五矣。原闕五字。秋濤案、癸亥年、稱上春秋四十二。紀云丁亥崩、壽六十六。則此「上年六十」句內、必脫五字也。今增矣。通世案、祕史云「遂到賀蘭山、將阿沙敢不敗了、走上山寨。咱軍將他能廝殺的男子并駝駝等物盡殺擄了、其餘百姓、縱各人所得來自要。成吉思在雪山住夏、調軍去、將阿沙敢不同上山的百姓盡絕擄了。賞孛斡兒出·木合黎財物、聽其儘力所取云云」。上文已有狗年秋冬、此住夏、似謂猪年之夏、與本紀異。祕史年月多誤。又木合黎已以十八年癸未薨、此文亦誤。本紀云「二月、取黑水等城。夏、避暑於渾垂山」。渾垂山、在肅州北、蓋祕史之雪山。祕史又云「成吉思自雪山起程、過兀剌孩城、郤來攻打靈州城」。靈州、蒙文作朵兒蔑該。伯哷津云「軍至唐古特、取甘州·肅州、又取兀剌孩城、圍滴兒雪開城。合申主失都兒忽、土人稱曰李王、由其伊兒開都城、率五十營兵來援。帝移軍往迎。地多河、皆從黃河出、已冰合。兵皆從冰上行。令衆射矢、無許虛發。此戰、殺人無算。蒙古兵死十之一、合申兵死者增兩倍。失都兒忽逃回都城」。洪氏曰「史錄皆謂丙戌入西夏。其取甘·肅等州、本紀繫之於夏。下文之狗年、當移於此乃合。祕史蒙文朵兒蔑該、蓋卽滴兒雪該。伊兒開都城、原注「土語伊兒開、蒙古語則云額兒起牙」。蓋卽本紀所謂夏王城。祕史蒙文稱甯夏曰額里合牙是也」。本紀云「取甘·肅等州、秋、取西涼府·搠羅·河羅等縣、遂踰沙陀、至黃河九渡、取應里等縣。冬十一月庚申、帝攻靈州。夏遣嵬名令公來援。丙寅、帝渡河擊夏師敗之。丁丑、五星聚見於西南。駐蹕鹽州川。是歲、皇子窩闊台及察罕之師、圍金南京。遣唐慶責歲幣于金」。金史哀宗紀云「正大三年十一月、大元兵征西夏、平中興府」。』

丁亥 二十二年、宋寶慶三年、金正大四年。滅其國以還。秋濤案、此句下有脫文。通世案、金史哀宗紀「正大四年三月大元兵平德順府、節度使愛申、攝府判馬肩龍死之。五月丁丑、議乞和于大元。大元兵平臨洮府、總管陀滿·胡土門死之」。元史太祖紀云「二十二年丁亥春、帝留兵攻夏王城、自率師渡河、攻積石州。二月破臨洮府。三月、破洮河·西寧二州。夏四月、帝次龍德、拔德順等州。德順節度使愛申、進士馬肩龍死焉。五月、遣唐慶使金。閏月、避暑六盤山」。伯哷津云「帝曰「彼經此敗、力不能復振矣」、不甚措意、越其都城、往取他城。既攻下各城、後卽入乞嚇境」。洪氏曰「此

皆猪年事、原書失次。豈國史未詳、故親征錄概不言及、而元史及此書、皆采諸他處歟」。「狗年春初至盐昏塔朗呼圖克之地、身不甚健、得夢知死期將屆」。洪氏曰「地名無考。果有此夢、必是猪年而非狗年」。「是時諸子在側者、惟亦孫哥阿克。（注云、朮赤哈薩兒之子）。因問「窩闊台·拖雷、今何在、相離遠否」。亦孫哥阿克謂「僅離二三里」。卽遣人召至。次晨、帝告諸將及從官「今有事與諸子商、汝等暫避」。迨衆退、乃曰「我殆至壽終時矣。我爲汝等刱此基業、無論東西南北、自此首往彼首、皆有一歲程期。我遺命無他。汝等欲能禦敵、多得民人、必須合衆心爲一心、方可享受永遠國祚。我死後、汝等奉窩闊台爲主」。又曰「汝等可各歸理事。我享此大名、死無所憾。我願歸於故土。察合台雖不在側、當不至背我遺命生亂」。言畢、卽麾諸子出、自率兵往南紀牙斯。所至之地皆迎降。行至六盤山、爲主兒只·南紀牙斯·合申三處交界之地」。洪氏曰「南紀牙斯、必係指南宋、而名稱不得其解。久乃悟爲南朝二字變音、斯字爲尾文」。金史哀宗紀云「六月戊申朔、遣前御史大夫完顏合周爲議和使」。太祖紀云「六月、金遣完顏合周·奧屯阿虎來請和。帝謂羣臣曰「朕自去冬五星聚時、已嘗許不殺掠。遽忘下詔耶。今可布告中外、令彼行人亦知朕意」」。伯哷津云「主兒只聞其至、遣使納賄行成、一大珠盛於盤、圍小珠無數。帝問「何人之耳穿眼、可來領珠」、盡散於衆。有續至求珠者、擲珠滿地、俟其自取」。祕史云「唐兀惕主不兒罕、將著金佛幷金銀器皿及男女馬駝等物、皆以九九爲數來獻。成吉思止令門外行禮。行禮間、成吉思惡心了。至第三日、將不兒罕改名失都兒忽、命脫侖殺了。對脫侖說「初征唐兀時、我因圍獵墜馬。你曾愛惜我的身體來、提說要回。因敵人言語不遜、所以來征。蒙天祐助、將他取了。今有不兒罕將來的行宮並器皿、你將去者」。成吉思既虜了唐兀惕百姓、殺其主不兒罕、滅其父母子孫、敎但凡進飲食時、須要提說唐兀惕盡絕了。至猪兒年成吉思崩後、將唐兀惕百姓、多分與了也遂夫人」。本紀云「是月（六月）、夏主李晛降。帝次清水縣西江。秋七月壬午不豫、己丑崩于薩里川哈老徒之行宮。臨崩、謂左右曰「金精兵在潼關、南據連山、北限大河、難以遽破。若假道于宋、宋金世讎、必能許我。則下兵唐·鄧、直擣大梁。金急、必徵兵潼關。然以數萬之衆、千里赴援、人馬疲弊、雖至弗能戰。破之必矣」。言訖而崩、壽六十六。葬起輦谷」。伯哷津云「失都兒忽自念「屢叛屢敗。今已全境被擾、不能復振。惟有乞降」。因遣使來立誓歸誠、謂「不敢望收之爲子」。帝允其請、又以備貢物、遷民戶、須展限一月、乃得自來朝謁。帝亦允之。告以今我尙病、且無來、令脫侖扯兒必、前往安撫失都兒忽。帝自此病日漸。臨崩之前、告其大臣「我死、且不發喪、勿令敵知、待合申主來、卽盡殺之」。猪年八月十五日帝崩。諸將遵遺命、不發喪、俟合申主來謁殺之、而後發喪、奉柩歸老營。四鄂爾多同日

舉哀。遠處得信、亦皆奔喪、三月而後畢集。據云、先時帝至一處、見孤樹愛之、盤桓樹下良久、謂左右曰「我死、卽葬於此」。其後有人述前命、遂卜葬樹下。墓在克魯倫河、葬後樹皆叢生、後成密林、不辨墓在何樹之下。雖當日送葬者、亦莫能識。拖雷汗·蒙哥汗·呼必賚汗·阿里布哈、皆附葬於此、他子孫則別葬。守墓者爲烏梁海人」。案太祖紀「戊子年、皇子拖雷監國」。太宗紀「太祖崩、自霍博之地來會喪、元年己丑夏、至忽魯班雪不只之地、皇弟拖雷來見」。是太祖崩時、太宗蓋在數千里之外也。西史謂窩闊台在側、恐非。閏五月、避暑六盤山。山在甘肅平涼府固原州西南三十里。六月、帝次淸水縣西江、爲今甘肅秦州境、在六盤山南三百餘里。七月己丑、崩于薩里川哈老徒之行宮。薩里川、卽克魯倫河上游撒阿里客額兒之地。哈老徒、今作噶老台、有噶老台嶺·噶老台河·噶老台泊。此行宮、卽克魯河邊之大鄂爾多、太祖所久住。故西史云老營。續綱目云「鐵木眞死於六盤山」、與西史合。蓋太祖崩於六盤山若秦州境、奉柩歸蒙古、然後發喪。所謂「壬午不豫、己丑崩于薩里川」、皆發喪所稱之辭、而本紀依之也。洪氏以哈老徒爲鄂爾多斯之哈柳圖河、非是。至其崩期、本紀以爲七月、西史爲八月十五日。西史蓋依西曆言之。西曆八月、卽東曆七月。西史又云「金棺至老營、在當年某月十五日」。伯哷津注「原文某月字不能辨」。然則所謂八月十五日者、金棺至老營之日、而崩期實在其前也。徐霆黑韃事略「霆見忒沒眞墓、在瀘溝河之側、山水環繞」。瀘溝河、卽克魯倫河。與西史合。本紀云起輦谷、起輦亦怯綠連之轉也。本紀云「至元三年冬十月、追諡聖武皇帝。至大二年冬十一月庚辰、加諡法天啓運聖武皇帝、廟號太祖」。帝深沈有大略、用兵如神、故能滅國四十、遂平西夏。其奇勳偉跡甚衆。惜乎當時史官不備、或多失於紀載云」。

太祖聖武皇帝昇遐之後、太宗皇帝卽大位以前、太上皇帝時爲太子。錢辛楣先生曰「此書載烈祖神元皇帝、太祖聖武皇帝諡。攷元史、烈祖太祖諡、皆在世祖至元三年、則是錄至元以後所撰。故於睿宗有太上皇之稱。然記太宗事而加太上之稱於其弟、所謂名不正而言不順矣」。秋濤案、太祖以丁亥崩、至己丑、太宗始登極。太祖紀云「戊子年、皇子拖雷監國」、太宗紀云「太祖崩、自霍博之地來會喪。元年己丑夏、至忽魯班雪不只之地、皇弟拖雷來見。秋八月己未、諸王百官大會於怯綠連河曲雕阿蘭之地、以太祖遺詔、卽皇帝位」。睿宗傳云「諱拖雷、太祖第四子。方太祖崩時、太宗留霍博之地、國事無所屬、拖雷實身任之云云」。合紀傳所載觀之、則此條當云「太祖昇遐之後、太宗卽大位以前、皇子拖雷監國」、則事理明顯。今乃云「太上皇帝時爲太子」、實爲不解其意、蓋以監國爲太子之事。然豈可竟指爲太子乎。厥後武宗立弟仁宗爲太子、明宗立弟武宗爲太子、名不正而言不順。皆此等紀載、有以啓之也。以辛楣先生未論及此、故詳言之。彭云、明宗和世㻋、武宗長子、在位半年、傳文宗圖帖木耳。文宗、武宗次子也。若指此、則立弟武宗、殆字誤耶。通世案、阿卜勒噶錫云「蒙古俗、諸子長大者、皆居他處、而幼子得父遺產。故斡赤斤之名、惟幼子得稱之、義爲竈主」。蓋游牧之民、一帳之內、不能與群兒同居、故大兒以次出牧於外、留者幼子而已。及太祖分封四子、與三子以遠地、而拖雷受蒙古舊業、亦依舊俗也。伯哷津云「雞年征合申時、帝在途間、窩闊台之子庫延·古由克歸。二孫求賞賚。帝曰、『所有之物、已盡歸拖雷、彼係家主』。其後拖雷汗以衣物分餽之」。洪氏曰「拖雷以幼子從父、儼如家主。其後帝崩、遂監國。親征錄謂『太上皇帝時爲太子』、皆卽斯義。未可斥其誣妄」。然承家產、與襲汗位不同。蒙古俗有大事、畢部會議決之、謂庫哩勒台。選汗出師皆然。家產必歸於幼子、而汗位則決於庫哩勒台、故不必父子相繼。太祖遺命欲立窩闊台、然不敢立爲皇太子、必也俟庫哩勒台議決、而後位定。定宗·憲宗之登極亦皆然。及世祖從漢臣勸自立、此制始變矣。然則拖雷固非太子、窩闊台亦非太子。史臣不達於蒙古之俗、故載筆易誤也」。

戊子、宋理宗紹定元年、金正大五年。避暑於輪思罕。秋濤案、此所言避暑、不知何指。或云「謂睿宗也」。湛然居士集云「戊子、馳傳來京、人問異域事、慮煩應對、遂著西遊錄」。案耶律晉卿西遊錄今不傳、可惜也。文田案、輪思罕、當作斡里罕、卽鄂勒昆河也。太宗本紀「二年春、與拖雷獵于斡兒寒河。夏、避暑塔密兒河」。蓋合兩事爲一耳。又案、耶律楚材西遊錄、大半採入元人盛如梓庶齋老學叢談中。又國朝兪浩西域攷古錄所引西遊錄、有出於盛引之外者甚多。余採而注之。此書爲唐後元前外域輿地沿革之圭臬、不可以不覩也。通世案、輪思當作斡兒。睿宗避暑於斡兒寒河也。胡俗每年冬夏異居。丙子避暑、自與戊寅避暑不同、李氏欲强合之、非也。金主遣使來朝。太宗皇帝與太上皇共議擲力鑾復征西域。秋、太宗皇帝自虎八秋濤案、史作霍博。會於先太祖皇帝之太宮。曾植案、太當爲大。大宮、大斡耳朶也」。』

己丑太宗元年、宋紹定二年、金正大六年。八月二十四日、諸王駙馬百官、大會怯綠連河曲雕阿蘭、共冊太宗皇帝登極。太宗遂議征收金國、收原作牧。文田案、牧當爲服、或是收字。曾植案、作收是。助貧乏、置倉戍、覨驛站。覨原作瓶、張石州校改。命河北先附漢民賦

調、命兀都撒罕主之。都原作相、秋濤案、此書相皆譌作都。兀都撒罕、卽耶律文正楚材賜名也。元史作吾圖撒合里。此作都、則與圖音近。相則遠矣。錢竹汀先生、尙未悟此字之誤也。西域賦調、命牙魯瓦赤主之。秋濤案、本紀云「廝合沒的滑剌西迷主之」。是年、西域伊思八剌納城主遣使來降。又西域之西忻都原作折相、秋濤校改。及不剌夷國主躬來朝會。秋濤案、本紀云「印度國主木剌夷國主來朝」。印度卽忻都也。不剌夷當從本紀作木剌夷爲是。此書載壬午年四太子征西域、道經木剌夷國、大掠而還、亦作木剌夷、可證也」。』

庚寅二年、宋紹定三年、金正大七年。春、遣將攻守京兆。金主以步騎五萬來援、敗還。其城尋拔。秋七月、上與太上皇親征金國。發自闕郡隰過川、由宮山・鐵門關・平陽南下、渡河攻鳳翔。秋濤案、疑有脫誤。文田案、此鐵門關、似雁門關之誤。山西無此地名。蓋緣上文西域鐵門關而妄改之耳。曾植案、宮山疑當作官山。金史地理志、西京大同府宣德縣有官山。睿宗列傳、辛卯太宗還官山、大會諸侯王」。』

辛卯三年、宋紹定四年、金正大八年。春二月、遂克鳳翔、又克洛陽・河中數處城邑而還。避暑於宮山。秋濤案、宮山當作官山。紀作九十九泉、當是一地。攷元一統志、官山在豐州東北一百五十里、上有九十九泉、流爲黑河、卽其地也。在今歸化城境內。北魏太祖紀、天賜三年八月丙辰、西登武要北原、觀九十九泉、卽此。然水經注、又謂「沮陽城東八十里、有牧牛山、下有九十九泉、山上有道武皇帝廟」。沮陽故城、在今宣化府懷來縣南、卽水經注所稱、乃嬀水上源也。疑北魏有兩九十九泉。北俗入山避暑、皆選名勝、不嫌兩地泉源、皆登臨之地。若元祖所幸、則爲歸化城之黑河無疑。文田案、元史西雷傳、出北口、住夏于官山。特薛禪傳、葬官人山。大率元人以居庸關外、今張家口之北、皆稱艸地、亦名官山也。金史地理志、西京路大同宣甯、遼宣德縣、有官山。宋徐霆黑韃事略、居庸關北、如官山・金蓮川等處、六月亦雪。大淸一統志云「官山在毛明安旗西南七十里。崑都倫河、經官山、入吳喇忒界」。曾植案、山西通志、黑河發源大靑山九十九泉、經歸化城南、西流至脫脫城、伏流入於黃河。案大靑山、蒙古稱翕袞山、亦作翕觀、譯言神也。官山上有九十九泉。則卽是大靑山翕觀山。官觀對音字耳。

會諸王百官、分三道、征收金國、期於來年正月、畢集南京。是年秋八月十四日、至西京。秋濤案、西京仍金舊名。本紀云幸雲中、是也。執事之人、各執名位。兀都撒罕中書令、都原作相、秋濤校改。黏合重山右丞相、鎭海左丞相。張石州曰「紀作以耶律楚材爲中書令、黏合重山爲左丞相、鎭海爲右丞相」。秋濤案、鎭海傳亦作右丞相。文田案、徐霆黑韃事略云「其相四人、曰案只䚟、黑韃人、曰移剌楚材、曰粘合重山、曰鎭海」。是當時實有四人、皆稱曰必徹徹、無相稱也。其云宰相者、後來翻譯而文其詞耳。宜乎左右無定也。必徹徹、卽畢且齊、或作必闍赤也。自此遣使撒哈塔秋濤案、紀作撒禮塔。曾植案、征高麗者、祕史爲札剌赤兒歹豁兒赤。與此撒哈塔火兒赤、蓋一人也。史塔出傳、「蒙古札剌兒氏。父札剌台、歷事太祖憲宗。火兒赤、征收高麗、克四十餘城還。冬十月初三日、上攻河中府、十二月初八日克之。時有西夏人速哥者、來告黃河有白坡可渡。從其言。曾植案、火兒赤、祕史蒙語作豁里赤、撒哈台之官也。速上讀。又案、史一百廿四速哥傳、卽此速哥也。彼云蒙古怯烈氏」。

壬辰四年、宋紹定五年、金正大九年。春正月初六日、大兵畢渡、及獲漢船七百餘艘。太上皇遣將貴由、來報集軍兵等、已渡漢江。上亦遣使於太上皇、曰「汝等與敵戰日久。秋濤案、翁本敵下有速字。今不取。可來合戰」。上於正月十三日至鄭州。守城馬提控者以城降。秋濤案、本紀作馬伯堅。太上皇既渡漢水、有金大將哈荅秋濤案、金史元史、俱作合達。麾下欽察者逃來、告哈荅伏兵於鄧西隘截等候。太上皇是夜會兵明燭而進。哈荅移剌闍知、入鄧以避其鋒。太上皇正月十五日至鈞州、雪作。

上遣大王口溫不花國王荅思、將軍兵至。十六日、雪又大作。是日與哈荅移剌合戰於三峰山、大敗之、遂擒移剌。十七日、上行視戰所嘉之。原作佳、秋濤校改。二十一日、克鈞州。哈荅匿於地穴、亦擒之。又克昌州潞州嵩州曹州陝州洛陽濬州武州易州鄧州應州壽州遂州禁州等來降。秋濤案、本紀云「遂下商・虢・嵩・汝・陝・洛・許・鄭・陳・亳・潁・壽・睢・永等州縣」、與此多異。攷金時、河南無昌・潞・易・應・遂・禁等州。疑昌潞卽商虢之音譌、應卽潁之音譌、遂卽睢之音譌、禁卽永之音譌、餘未詳也。上月、上至南京、令忽都忽攻之、上與太上皇北渡河、避暑於官山。秋濤案、紀云「夏四月、出居庸關、避暑官山」。速不歹拔都・都原作相、秋濤校改。惑水歹火兒赤・貴由拔都・塔曾植案、塔下有脫字、當是塔察兒火兒赤也。等、適遇金遣荊王守仁之子曹王入質我軍、遂退、留速不台拔都、以兵三萬鎭守河南。秋七月、上遣唐慶使金促降、因被殺。八月、金之參政完顏忠烈張石州曰「紀作思列」。曾植案、惑水當作忒木。食貨志有忒木台駙馬、又有忒木台行省。不知忒木歹火兒赤是何人也。又案、行省之忒木台在憲宗時。此自當此公主表之闕名公主適忒木歹駙馬者也。又案、經世大典馬政篇（在永樂大典中）太宗十年戊戌、驗天下戶科、定馬匹、東平府路、詔可曹王撥訖新戶一十戶、火查剌溫火兒赤回回大師之下、則曹王、金亾之後、猶得保其爵祿也。元初撥給民戶、惟宗親勳舊有之。詔可無功於時、而王封不改。豈其後得尙主與。恆山公武仙、將兵二十萬、會於南京、至鄭州西合戰。是年、高麗王復叛。再命撒兒荅火兒赤原作大兒赤、秋濤校改。征收。九月、南京城中倉廩俱竭。金主帥兵六萬、北渡河、欲復東平・新衞二城。我軍逐北。潰散存千餘人、逐北原作遂北。張石州疑有脫誤。秋濤案、當作逐北。通世案、姚士達刊本、存作尙。原本蓋有尙存二字、姚本脫存字、此本脫尙字也復渡河北」。

癸巳五年。宋紹定六年、金正大十年。春正月二十三日、金主出南京、入歸德。金人崔立、遂殺南京留守參政二人、開門詣速不台拔都降。四月、速不台拔都至青城。崔立又將金主母后太子二人暨諸族人來獻。遂入南京。六月、金主出歸德府、入蔡州。原作八察、無州字、秋濤校改。塔察兒火兒赤統大軍圍守。是月十日、遣人入城催降、勿應。四面築城攻之。八月、別遣案脫等、抄籍漢民七十三萬有奇。十一月、南宋遣太尉孟珙等、領兵五萬、運糧三十萬石、至蔡來助、分兵南面攻之。金人擧沂・萊・海・維原闕此字。張石州據翁本增。秋濤案、本紀當作濰。文田案、孟珙有蒙韃備錄、撰於此時也。曾植案、案脫、元史太宗紀作阿同葛。又案、案脫、元史前與不兀剌同使乞里吉思之案彈、史公主表之阿昔倫公主適阿脫駙馬、是也。又案、中堂事紀、火赤達剌罕大名府民戶五百餘、斷事官案脫定下與民一體當差、卽案脫抄籍漢民事也。等州來降」』。

甲午六年、宋理宗端平元年。是歲金亾。春正月十日、正字原闕、秋濤據本紀增。塔察兒火兒赤攻蔡城危逼。金主傳位於族人承麟、遂縊焚而死。我軍入蔡、獲承麟殺之。金主遣體、南人爭取而逃。平金之事如此。是年五月、於荅蘭荅八思始建行宮、大會諸王百官、宣布憲章。是年、羣臣奏曰「南宋雖稱和好、反殺我使、原作疌、注曰「音使」。秋濤案、疌當作使。「音使」二字、後人

安加。此明明錯誤、而後人不能是正。亦足證前後牴牾處多由傳寫譌謬也。文田案、殺使謂搠不罕也。辛卯、元太宗遣使宋。宋泗州統制張宣殺之。見耶律鑄雙溪醉隱集。侵犯我邊。奉揚天命、往征其辜」。』又遣忽都原作相、秋濤校改、卽忽都虎也。忽、主治漢民、別遣塔海紺孛征蜀」。』乙未七年、宋端平二年。建和林城宮殿。秋濤案、本紀云「春、城和林、作萬安宮」。湛然居士集、有和林城建行宮上梁文、繫於乙未年三月祭姪女文之後也。鳳鑣案、耶律鑄雙溪集凱樂歌詞曲、有取和林詩、注曰「和林城苾伽可汗之故地也。歲乙未、聖朝太宗皇帝城此、起萬安宮。城西北七十里、有苾伽可汗宮城遺址。城東北七十里、有唐明皇開元壬申御製御書闕特勤碑。案唐史突厥傳、闕特勤、骨咄祿可汗之子、苾伽可汗之弟也。名闕。可汗之子弟、謂之特勤。開元十九年、闕特勤卒。詔金吾將軍張去逸、都官郎中呂向、齎璽書、使北弔祭、幷爲立碑、上自爲文。別立祠廟、刻石爲像。其像迄今存焉。其碑額及碑文、特勤皆是殷勤之勤字。唐新舊史、凡書特勤、皆作銜勒之勒字、誤也。諸突厥部之遺俗、猶呼其可汗之子弟爲特勤特謹字也。則與碑文符矣。碑云「特勤、苾伽可汗之令弟也。可汗猶朕之子也」。唐新舊史、竝作毗伽可汗。勤苾二字、當以碑文爲正」。案雙溪此注、辨論頗詳。故備錄之、以資攷證。夏、遣曲出忽相都籍到漢民一百二十萬有奇。遂分賜諸王城邑、各有差。秋濤案、忽相都據耶律楚材傳、當作忽都虎。本紀、乙未遣皇子曲出胡土虎伐宋、不言籍漢民事。丙申夏六月、復括中州戶口、得續戶一百一十餘萬。秋七月、詔以眞定民戶、奉太后湯沐、中原諸州民戶、分賜諸王貴戚、當卽此事、而本紀屬之次年也」。』丙申八年、宋端平三年。入慶和林城宮。秋濤案、本紀、丙申春正月、諸王各治具來會、宴萬安宮落成。冬十二月、赤曲秋濤案、疑亦人名。文田案、赤曲者、卽祕史之曲出。曾植案、赤曲、卽太宗紀之曲出、黑韃事略作屈朮。□說誤。此赤駒駙馬也。闊端原作闊端、秋濤據本紀改。等克西川。丁酉九年、宋理宗嘉熙元年。夏四月、築掃鄰城。秋濤案、本紀「夏四月、築掃鄰城、作迦堅察寒殿」。元史類編云「在和林北七十餘里」。文田案、輟耕錄、掃鄰者、宮門外院官會集處也。曾植案、山居新話云「內八府宰相寄位於翰林院官掃鄰」。注云「卽宮門會集處也」。秋八月、仿漢儒選擢、除本貫職位。秋濤案、

本紀八月命木虎乃劉中式諸路儒士中選者、除本貫議事官、得四千三十人。此書於他政務不盡載。獨記此者、記太宗崇儒、所以肇世祖之興也」。』戊戌夏、築禿思兒城十年、宋嘉熙二年。秋濤案、本紀云「作圖蘇湖城、築迎駕殿」。圖蘇湖、疑卽禿思兒也。元史類編云「去和林三十餘里」。文田案、禿思兒、卽溯漠圖之禿忽思城也。禿忽思、卽圖蘇湖三字之對音、華言涼也。耶律鑄與太宗后有連。后以姪女嫁鑄、生耶律希亮於涼樓中。故名曰涼。涼亮音轉、故改希亮。蒙古語名曰禿忽思。義見希亮傳中也。曾植案廣輿記溯漠圖、有禿思忽嶺、有禿思忽涼樓、均在哈喇和林河之南、卽圖蘇湖城也。今皇輿圖、朱爾馬台河之、南、有達爾湖喀喇巴爾哈孫、疑卽是其遺址。喀喇巴爾哈孫者、蒙古語黑城之謂。凡蒙人於廢城故址、大都以黑城名之。達爾湖與圖蘇湖、則舊語流傳、音詞微變。獨可據其地望準之。對音譯義、不必皆能密合矣又。案、祕史蒙文語解、圖思正主也」。』己亥。十一年、宋嘉熙三年。』庚子十二年、宋嘉熙四年。春正月、命暗都剌蠻張石州曰「元史太宗紀、作奧都剌合蠻」。主漢民財賦。秋濤案、先是漢民財賦、皆耶律楚材晉卿主之。今以命暗都剌蠻者、蓋太宗晚年惑於言利之臣、晉卿漸見疏外故也。元史類編云「初楚材定課額、歲止五十萬兩。及河南降、戶口滋息、增至一百餘萬。至是回鶻人奧都剌合蠻請以二百二十萬兩撲買之。楚材極諫、至聲色俱厲、言與涕俱。帝曰「汝欲搏鬬耶。又欲爲百姓哭耶。姑試行之」。楚材不能奪、歎曰「民之窮困、將自此始矣」。」』辛丑十三年、宋理宗淳祐元年。春、高麗王遣子弟入貢。冬十月、命牙老瓦赤主管漢民公事。秋濤案、主管原作王營、不可解。元史太宗紀作羊管。今案、當作主管。其漢民下、原脫公事二字。今依本紀補之。己丑年云「河北先附漢民賦調、命兀都撒罕主之、西域賦調、命牙魯瓦赤主之」、當卽此牙老瓦赤也。一作牙剌瓦赤。以其工於治財賦、故命之、兼掌漢民公事云爾。又案、姚樞傳云「歲辛丑、牙老瓦赤行省事於燕京、主管漢民公事、以樞爲行省郎中。牙老瓦赤惟事貨賂、以樞爲幕長分致之。樞拒絕、因辭職去、攜家之輝州蘇門山、讀書鳴琴、若將終身。世祖爲太弟時、遣趙璧召之至、待以客禮」。邵戒山曰「姚牧菴集載姚樞神道碑云「上遣趙璧、驛至彰德。璧恐樞避去、獨至輝、以過客見、審其爲樞、始致見徵意。樞恐使者謬徵、不敢應。璧曰「君非棄牙老瓦赤隱此者乎」。曰「然。」乃偕往彰德受命」」。十一月初七日、秋濤案、此下有脫文。地名月惑哥忽聞、秋濤案、聞當作闌。元史云「帝大獵五日、還至鈋鐵鐸胡蘭山」。今改作烏特古呼蘭、

卽此地也。方輿紀要云「地在和林東北」。文田案、惑當作忒。病、次日崩。秋濤案、元史太宗紀云「庚寅、奧都剌合蠻進酒、歡飲極夜乃罷。辛卯、遲明崩於行殿」詳繹史記進酒一尊、蓋以太宗疏耶律晉卿、而專信西域言利之臣、如奧都剌合蠻、於庚寅進酒、而辛卯帝卽暴崩、深有可疑、故詳著之。惜此書闕脫。無可證其端末也。元史類編、但云進酒歡飲、而删奧都剌合蠻之名、則失史氏別嫌明微之意矣。以此書與本紀月日相證、知初七日爲庚寅、是月朔當爲甲申、而錢氏侗四史朔閏攷未載、可補其闕。壽五十六、原本壽下衍至字。秋濤校删。在位一十三年。原作一十二年。秋濤依本紀校改。

校正增注元親征錄　終

錢辛楣先生十駕齋養新錄一條。

皇元聖武親征錄一卷、紀太祖太宗事、不著撰人姓名。其書載烈祖神元皇帝太祖聖武皇帝謚。攷元史、烈祖太祖謚、皆在世祖至元三年、則至元以後人所撰。故於睿宗有太上皇之稱。然紀太宗事、而加太上之稱於其弟、所謂名不正而言不順者矣。所紀多開國時事、而於平金取夏頗略。元史察罕傳、仁宗命譯脫必赤顏、名曰聖武開元記。其書今不傳、未識與此錄有異同否。雖不如祕史之完善、而元初事迹、亦可藉以攷證。其譯語之異者、如王孤部、卽汪古也。博羅渾那顏、卽博而忽也。闊拜、卽沈白也。暗都剌蠻、卽奧魯剌合蠻也。兀相撒兀、卽吾圖撒合里耶律楚材賜名。也。

秋濤案、今殿本攷證、改博羅渾爲博羅罕、且無博爾忽之名。

校正元聖武親征錄跋後。

右光澤何願船先生校正元聖武親征錄一卷。熙弱冠隨嚴君仕京都、習知先生與

張石州先生、皆以攷據著稱、其校證乃於一字一音之末、心竊慕之、而無以自通也。歲己未、得親炙先生於邵武館。先生時方輯朔方備乘。未數月、書成進御、熙未獲覩。越二年、而先生古矣。同治甲子、偶於張叔平比部齋中、得先生所校元聖武親征錄。蓋元親征錄世無刊本、而先生之攷正、又校勘家所不易覯。遂手錄之。熙夙聞先生言、元代史之舛謬、不可備擧、而史所紀太祖開國、譌雜尤多。卽先生此書自序亦言之。錄此帙、以資讀史攷證、亦以識私淑之意云爾。原本。有平定張穆·旌德呂賢基兩序、今所存惟張序。張卽石州先生。呂序無當於校正之義、殆可刪也。同治甲子二月、後學陽湖莊庚熙跋

光緒丁亥、始得此書鈔之、欲細校一過、殊無暇晷、隨手改正三數處。蓋亦有足以補石州·願船兩先生之罅漏者。然總以攷證不易、忽忽置之。頃同邑龍伯鸞主事、來都應京兆試、欲乞沈子培刑曹校本刊之。沈校精納、迥出張·何之上、此書當遍行人間矣。一知半解、斷不及沈校之精確、或亦有各明一義者。姑幷寄伯鸞、以俟釆擇耳。光緒癸巳九月朔日、漫記於後。李文田記。

成吉思汗實録續編

成吉思汗實錄續編

明治四十年發行の成吉思汗實錄は、實に先生晩年の大著にして、先生の精力を傾注せられたる著述の尤なるものにして、其史學に功あるや既に人皆知る所なり。本書は即ち其續編にして、實錄及び校正增注元親征錄とゝもに、元史研究者に缺く可からざる良著なり。其目次大略左の如し。たゞ其不完本なるを惜むのみ。

壹。太祖の功臣。

貳。太祖卽位の後に見えたる諸臣。

參。祕史に見えざる名臣。

附載。遠西の異種異教及び之に屬する人々。

成吉思汗實錄續編。

壹　太祖の功臣。

弌。元史に傳ある者。

太祖即位の時に名ざしたる八十八の功臣の内にて、元史に傳を立てられたるは、次の十人のみなり。

一。亦乞咧思の不秃駙馬。

列傳卷五(元史一一八)、「孛秃、亦乞列思氏」は、功臣の第八十七なる亦乞咧思の不秃古咧堅なり。太祖の妹帖木倫を娶り、帖木倫薨じて太祖の女火臣別吉(豁真別乞)を娶り、太祖即位の後「從太師國王木華黎、略地遼東西、以功封冠懿二州、從征西夏、病薨。」その子鎖兒哈は、「事太宗、與木華黎取嘉州、降其民」とあるを、錢大昕の廿二史考異に「木華黎卒於太祖朝、亦無取嘉州事。嘉州、恐是葭州之譌。太宗當爲太祖」と云へり。また「鎖兒哈娶皇子斡赤(闊出)女安秃公主、生女、是爲憲宗皇后」とあるを、考異に「后妃傳、憲宗皇后無亦乞列氏、恐誤」と云へれども、后妃表に出卑三皇后明里忽都魯皇后ありて、何氏とも云はざれば、その内の一人は、鎖兒哈の女なるべし。その外、孛秃の子孫にて公主に尙したるものは、錢大昕の元史氏族表に據れば、十一人あり。

二。汪古惕の阿剌忽失的吉惕忽哩駙馬。

列傳卷五、「阿剌兀思剔吉忽里、汪古部人」は、功臣の第八十八なる汪古惕の阿剌忽失的吉惕忽哩古咧堅なり。太祖の女阿剌海別吉（阿剌合別乞）は、初に阿剌忽失に配し、次にその姪鎭國に配し、後に幼子孛要合に配したる事は、實錄卷八、三二九、三三〇頁の注に云へり。鎭國の子聶古台は、睿宗の女獨木干公主に尙し、孛要合の子孫にて公主に尙したるもの十人あり。

三。札剌亦兒の木合黎國王。

列傳卷六（元史一一九）、「木華黎、札剌兒氏」は、功臣の第三なる札剌亦兒の木合黎國王なり。あまたの功臣の中にて實に第一の元勳にして、太祖卽位の時は、阿嚕剌惕の孛斡兒出と竝びて左右の萬戶となり、「丁丑（太祖十二年）八月、詔封太師國王、都行省、承制行事。賜誓劵黃金印、曰「子孫傳國、世世不絕」。分弘吉剌・亦乞烈思・兀魯兀・忙兀等十軍及吾也而・契丹蕃漢等軍、竝屬麾下、且諭曰「太行之北、朕自經略。太行以南、卿其勉之」。賜大駕所建九斿大旗、仍諭諸將曰「木華黎建此旗、以出號令、如朕親臨也」。乃建行省于雲燕、以圖中原」。麾下に屬する諸軍の事は、親征錄に委しく、「戊寅（十三年）、封木華黎爲國王、總率王孤部萬騎、火朱勒部千騎、兀魯部四千騎、忙兀部木哥・漢札千騎、弘吉剌部・安赤・那顏三千騎、亦乞剌部、孛徒駙馬二千騎、札剌兒部及帶孫等二千騎、同北京諸部烏葉兒元帥禿花元帥所將漢兵、及北剌兒所將契丹兵、南伐金國」とあり。戊寅と云へるは誤れり。金史宣宗紀にある、丁丑の冬、大元の兵益都・淄・沂・密等の州を下したるは、卽木合黎の南征にして、太祖紀にも木華黎の傳にも合へれば、その南征の命を受けたるは、必丁丑の年にありけん。何秋濤曰く「此錄載弘吉剌等止七軍、則本傳（十軍の）十、乃七之誤」。王孤部は、汪古惕なり。火朱勒部は、倭勒甫の史に庫失庫勒とあれば、朱は失の誤にて、その下に一字脫ちたるならん。但庫失庫勒と云ふ部の名は知らず。兀魯部は、兀嚕兀惕なり。忙兀部木哥・漢札は、忙忽惕の蒙可・哈勒札、列傳畏荅兒の子忙哥、太宗紀の蒙古・漢札なり。別咧津の木勒哥・哈勒札と讀めるに據れば、木哥の間に勒の字脫ちたるに似たり。弘吉剌部安赤・那顏は、翁吉喇惕の阿勒赤・那顏、亦乞剌部孛徒駙馬は、亦乞咧思の不禿古咧堅、札剌兒部帶孫は、札剌亦兒の木合黎の弟帶孫郡王なり。烏葉兒元帥は、列傳卷七の吾也而、卽撒勒只兀惕の兀也兒、禿花元帥は、列傳卷三十六なる契丹の耶律禿花なり。北剌兒は、親征錄の前文、甲戌四月金主南遷の條に「契丹衆殺主帥素溫而叛去、推斫荅比涉兒札剌兒爲帥、而還中都、遣使詣上行營納款」とあれば、札剌兒の札を北に誤れるか。又比涉兒札剌兒の中三字を脫して、比を北に誤れるならん。

木華黎は、太祖十八年三月、年五十四歲にて薨じ、その子孛魯、國王の爵を襲げり。孛魯は、睿宗監國戊子の年に薨じ、長子塔思又の名は查剌溫襲ぎ、太宗二年、萬戶因只吉台（祕史の額勒只吉歹）と共に叛將武仙を敗り、潞州を復し、三年、太宗に從ひて、河中を定め、四年、諸王按赤台（合赤溫の子阿勒赤歹）等と三峯山の戰に與り、五年、皇子貴由に從ひ、蒲鮮萬奴を平げ、七年、皇子曲出に從ひ、宋を伐ち、十一年薨じ、弟速渾察爵を襲げり。塔思の第二子霸都魯は、木華黎の傳に孛魯の第三子としたれども、錢大昕の考異氏族表は、元明善の撰れる安童（霸都魯の子）の碑に據り、孛魯の孫、塔思の子なりと云へり。霸都魯の長子安童は、至元中、中書右丞相。列傳卷十三に委しき傳あり。安童の孫拜住は、英宗の時中書右丞相、逆臣鐵失に殺されき。列傳卷二十三に傳あり。速渾察の子四人、忽林赤・乃燕・相威・撒蠻。忽林赤は、國王の爵を襲ぎ、乃燕は、世祖より薛禪の號を賜はれり。乃燕の曾孫朶兒直班は、順帝の朝の名臣、列傳卷二十六に傳あり。相威は、至元二十年、江淮行省の左丞相、列傳卷十五に傳あり。撒蠻の孫朶兒只は、順帝の時、中書右丞相にて國王を嗣ぎ、列傳卷二十六に傳あり、子俺木哥失里國王を襲げり。塔思の末弟阿里乞失の子國王

忽速忽爾。忽速忽爾の子國王朶羅台は、泰定の朝に仕へ、天暦二年、文宗に殺されき。朶羅台の弟乃蠻台は、列傳卷二十六に傳あり。天暦中、陝西行臺の御史大夫となりし時、「奉命送太宗皇帝舊鑄皇兄之寶於其後嗣燕只哥䚟」。考異に云く「按、朮赤・察合台、皆太宗之兄。燕只哥䚟、必其後也。而宗室世系表不著其名。泰定紀、泰定四年、諸王燕只吉台襲位、遣使來朝、蓋卽其人」。多遜の世系表に據るに、察合台の五世の孫亦先不喀薨じ、弟格別克嗣ぎ、格別克薨じ、子亦勒赤喀歹嗣ぎたり。亦先不喀は、仁宗紀皇慶元年に見えたる諸王也先不花、格別克は、泰定三年九月に見えたる諸王怯別にして、亦勒赤喀歹は、卽泰定四年七月の燕只吉台、卽この燕只哥䚟なり。乃蠻台は、順帝至元三年國王を襲ぎ、至正二年遼陽行省の左丞相。木華黎の弟帶孫郡王の後なる塔塔兒台は、世祖の時、東平の達魯花赤となり、二子五孫皆次第にその職を襲げり。

四。阿嚕剌惕の孛斡兒出。

列傳卷六、「博爾朮、阿兒剌氏」は、功臣の第二なる阿嚕剌惕の孛斡兒出なり。太祖卽位の時、「從容謂博爾朮及木華黎曰「今國內平定、多汝等之力。我之與汝、猶車之有轅、身之有臂。汝等宜體此勿・替」。遂以博爾朮及木華黎爲左右萬戶、各以其屬翊衞、位在諸將上」とあるは、實錄卷八太祖の勅に「孛斡兒出・木合黎二人は、我が善き事を引き進め、善からぬ事を引き止めて、この位に到らせたり。今衆の上に位して、九度の罪にな罪なひそ。孛斡兒出は、右手の阿勒台山に倚れる萬戶を知れ。木合黎國王は、左手の合喇溫・只敦に倚れる萬戶を知れ」と云へる趣旨と、閻復の撰れる廣平の貞憲王（玉昔帖木兒）の碑に、祖父武忠王博爾朮の功を叙べて「左右萬夫長、位諸將之上首。以武忠居右、東平忠武王居左、翊衞辰極、猶車之有軸、身之有臂」と云へる字句とを取り鎔鑄して作れるなり。その後の事蹟は、傳に漏れたれども、太祖の西征に從へることは、祕史の文と西游記に萬戶播魯只と見えたるとにて明かなり。傳に皇子察哈歹西域に封ぜられたる時博爾朮より教を受けたりとあれば、西征より還りても健全なりしと見ゆれども、「未幾、賜廣平路戶一萬七千三百有奇爲分地、以老病薨、太祖痛悼之」とあれば、太祖より前に薨じたるなり。併四傑の內にては最後まで殘れり。

博爾朮の子孛欒台は、萬戶の職を襲げり。孛欒台は、正しくは孛囉勒歹なるべし。十三翼の戰にまづ變を告げたる亦乞咧思の孛囉勒歹も、親征錄に卜欒台、孛禿の傳に波欒歹と書けり。孛欒台の子玉昔帖木兒は、「世祖時、嘗寵以不名、賜號月呂魯那演、猶華言能官也。弱冠襲爵、統按台部衆」。按台は、卽阿勒台にして、その部衆は博爾朮の舊統べたる部衆なり。至元十二年、御史大夫。二十四年、叛王乃顏を討じて大功あり、二十六年、太傅となり、出でて杭海を鎭め、成宗位に卽き、太師に進み、元貞元年薨じき。玉昔帖木兒の孫阿魯圖は、順帝至正四年、中書右丞相、十一年太傅。列傳卷二十六に傳あり。博爾朮の四世の孫紐的該は、至正十七年、中書添設左丞相。列傳卷二十六に傳あり。

五。許兀愼の孛囉忽勒。

列傳卷六、「博爾忽、許兀愼氏。事太祖、爲第一千戶、歿於敵」とあるは、功臣の第十五なる孛囉忽勒なり。四傑の一人にして、その傳は只これのみなるは、甚あつけなし。却てその從孫塔察兒の處に「伯祖父博爾忽、從太祖、起朔方、直宿衞、爲火兒赤。火兒赤者、佩橐鞬侍左右者也。由是子孫世其職。博爾忽從太祖平諸國、宣力爲多。當時與木華黎等、俱以功號四傑」とあるにつきて、錢大昕は「詳略可謂失當矣」と譏れり。博爾忽の子脫歡は、千戶の職を襲ぎ、「從憲宗、四征不庭、有拓地功」とあるは、功臣の第六十なる脫歡なるべし。耶律楚材の傳に、太宗の時「侍臣脫歡奏簡天下室女」とあるも、その人ならん。脫歡の孫月赤察兒

は、至元十七年怯薛の長、明年宣徽使、成宗の時和林行省の右丞相太師淇陽王。考異には、姚燧の撰れる姚文獻公の神道碑に太師淇陽王之兄故丞相木土各兒とあるを引き、「木土各兒、亦作土木各兒。其爲丞相、蓋在中統初、而本紀表傳俱失之」と云へり。又考異氏族表に據れば、月赤察兒の子七人、長子塔剌海は中書右丞相太保、第三子佤頭は太師錄軍國重事淇陽王、第五子也先鐵木兒は中書右丞相淇陽王、第二子馬剌の子完者鐵木兒は御史大夫太傳淇陽王などあり。塔察兒の事は、後に云ふべし。

六。兀嚕兀惕の主兒扯歹。

列傳卷七(元史一二〇)、「朮赤台、兀魯兀台氏」は、功臣の第六なる兀魯兀惕の主兒扯歹なり。朮赤台の子怯台は、功臣の第五十七なる客台なり。傳に曰く「子怯台、材武過人。自太宗及世祖、歷事四朝、以勞封德清郡王、賜金印。丙申、賜德州戶二萬爲食邑。至元十八年、增食邑二萬一千戶、鑿慶路連州德州泊屬邑俱隷焉」と云ひ、親征錄には、太祖癸酉居庸關の戰に「上留怯台・薄察等、頓軍拒守、遂將別聚西行、由紫荊口出。云云。乃命哲別攻居庸南口、出其不備破之、進兵至北口、與怯台・薄察軍合。既而又遣諸部精兵五千騎、合怯台・哈台二將圍中都」とあり。太祖紀にはこの怯台を可忒と書き、郝和尙拔都の傳には「在郡王迄忒麾下」と云ひ、黑韃事略に十七頭項を列記して紇忒郡王黑韃人と云へり。怯台の子端眞拔都兒は、「襲爵爲郡王。太宗時、與亦剌哈台戰勝、帝卽以亦剌哈妻賜之」。太宗の時の敵將に亦剌哈台と云へる人あるを聞かず。蓋祕史卷十一の亦列合苔に同じく、金の二將移剌蒲阿・完顏合達を指せるに似たり。もし然らば、亦剌哈妻は、亦剌の妻か哈台の妻か定め難し。亦剌哈にては、王罕の子亦剌合を想ひ起さしむ。太宗紀八年丙申、中原諸州の民戶を諸王貴戚に分け賜へる處に鍛眞蒙古寒札とあるは、この端眞と忙忽惕の蒙可哈勒札となり。端眞の弟哈荅、哈荅の三子三孫、皆郡王に封ぜられき。

七。兀哴罕の速別額台。

列傳卷八(元史一二一)、「速不台、蒙古兀良合人」、列傳第九(元史一二二)、「雪不台、蒙古部兀良罕氏」は、二つながら功臣の第五十一なる兀哴罕の速別額台なり。速不台は、功勞甚多く、本傳も頗委しけれども、誤謬又少からず。その西征を叙べたる所は、西國の諸史に據りて訂正すべし。速不台の子兀良合台は、「歲乙巳、領兵從定宗征女眞國、破萬奴於遼東。繼從諸王拔都、征欽察・兀魯思・阿孛烈兒諸部。丙午、又從拔都、討孛烈兒乃捏迷思部平之。己酉、定宗崩云云」。これらの紀年皆誤れり。乙巳は、癸巳(太宗五年)の誤、丙午は、辛丑(太宗十三年)の誤、己酉は、戊申(定宗三年)の誤なり。欽察等の征伐は、萬奴の征伐に關係なく、三年後(太宗八年丙申)の出師なれば、紀年を略きて「繼」と書きたるも非なり。阿孛烈兒は、次の孛烈兒とは異なり。祕史卷十一の孛剌兒、卷十二の不剌兒、卽佛勒噶河の東に居りし孛勒噶兒を元史地理志に不里阿耳と書けるに由りて思へば、これは孛烈阿兒の阿の字を上に飛ばしたるなり。孛烈兒乃捏迷思は、玻勒卽玻闌篤人と獨逸人とにして、乃は及の誤なり。卜吶惕旃乃迭兒曰く「獨逸人を、嚕西亞の史には尼額姆次(單稱尼額篾慈と云ひ、孛赫米亞人は夙くより捏姆次と云ひ、必贊靑の古史には捏篾次また捏米次と云ひ、ある抹哈篾惕教徒は捏篾只と云ひ、今も突兒克人は尼額篾昔と云ひ、洪噶兒人は捏篾惕と云ふ」。兀良合台の功勞最大なるは、憲宗の時、皇弟忽必烈に從ひ、雲南に入り、白蠻・烏蠻・鬼蠻等の諸國を平げ、大元帥となりて大理を鎭め、遂に交趾を降して還れる事なり。その子阿朮は、中統三年、征南都元帥。至元五年、宋の襄陽を圍み、十年樊城を破り、襄陽を降し、十一年、丞相伯顏に從ひ宋を

伐ち、十二年七月、張世傑の舟師を焦山の下に敗り、その月中書左丞相。列傳卷十五に傳あり。氏族表に據れば、阿朮の子不憐吉歹は、河南行省の左丞河南王。

八。忙忽惕の忽亦兒荅兒。

列傳卷八、「畏荅兒、忙兀人」は、功臣の第二十一なる忙忽惕の忽亦兒荅兒なり。その子忙哥は、功臣の第五十二なる蒙可哈勒札なり。太宗、畏荅兒の功を思ひ、「復以北方萬戶、封其子忙哥爲郡王。歲丙申、忽都忽大料漢民、分城邑、以封功臣、授忙哥泰安州民萬戶。帝訝其少。忽都忽對曰「臣今差次、惟視舊數多寡。忙哥舊纔八百戶」。帝曰「不然。畏荅兒封戶雖少、戰功則多。其增封爲二萬戶、與十功臣同爲諸侯者、封戶皆異其籍」。兀魯爭曰「忙哥舊兵、不及臣之半、今封顧多於臣」。帝曰「汝忘而先橫鞭馬鬣時耶」。兀魯遂不敢言」。兀魯は、兀嚕兀惕の主兒扯歹の子怯台郡王なり。この傳は、全く姚燧の撰れる平章忙兀公（博羅歡）の碑に據りたるが、事實に誤あり。丙申の年、怯台は、德州の二萬戶を賜はり、忙哥と同額なれば、「今封顧多於臣」と云ふべき筈なし。橫鞭馬鬣の一事に至りては、有無も知るべからず。たとひ有りとも、既に命を受けて、王罕の大軍を敗り、太祖一生の大戰なる合剌合勒只惕の役は、主兒扯歹の力に依りて勝を決したれば、太祖深くその功を賞し。主兒扯歹を高山の遮護に譬へ、元史の撰者も、その語を採りて傳に入れたる程なるに、太宗何ぞその微過を摘みて大勳を傷くるの理あるべけんや。これは、蓋兩家の子孫、その祖の功を述ぶるに競ひて、遂にかゝる中傷の談をも造れるにて、二大功臣の同功一體の素志にも違ひ、太祖太宗の功臣を優遇する盛意にも悖れり。朮赤台の傳にも誤は多けれども、この傳の誤は殊に誣罔に似たるが故に、聊辨じ置くなり。忙哥の孫只里瓦䚟・乞荅䚟曾孫忽都忽・兀乃・忽里・哈赤、皆郡王を襲げり。朮赤台の傳に、阿里不哥の亂の時、怯台の少子哈荅と忽都忽と自ら請ひて軍に從ひ、石木溫都の地に戰へりとあるは、この忽都忽なり。忙哥の從孫博羅歡は、至元中、宋を擊ち、叛王乃顏を討じ、皆功あり、大德中、江浙行省の平章政事。その子孫に顯人多し。第三子埜先帖木兒は、河南行省の左丞相。

九。客咧亦惕の哈散納。

列傳卷九、「哈散納、怯烈亦氏」は、功臣の第二十なる許孫なるべし。哈散納は、巴勒主惕の一人にて、後には「管領阿兒渾軍、從太祖征西域、下薛迷則干・不花剌等城」。太宗の時、平陽太原兩路の達魯花赤。

十。塔塔兒の不只兒。

列傳卷十（元史一二三）、「布智兒、蒙古脫脫里台氏」は、功臣の第三十八なる不只兒なり。父紐兒傑「嘗道逢太祖。前驅騎士別那顏邀與俱見、云云」とある別那顏は、者別那顏なるべし。布智兒は、軍に從ひ、回回・斡羅思等の國を征して、屢力戰し、その後「憲宗以布智兒爲大都行天下諸路也可札魯忽赤、印造寶鈔」。也可札魯忽赤は、大斷事官なり。憲宗紀元年即位の條に「以牙剌瓦赤・不只兒・斡魯不・覩荅兒等、充燕京等處行尙書省事」とあるは、官名を漢語に飾りたるにて、その實は即札魯忽赤なり。大都行天下諸路と云へるも、蒙古語を後に譯したるにて、憲宗の時は、未大都の名あらざりしなり。昔里鈐部の傳に「遷斷事官云云。憲宗以卜只兒來涖行臺、命鈐部同署」とある行臺は、即燕京の行省なり。布魯海牙も、夙くより斷事官となりて、卜只兒と共に順天等路を按察したる人なるが、その傳に曰く「時斷事官得專生殺、多倚勢作威。而布魯海牙、小心謹密、愼於用刑、云云」。布智兒は、布魯海牙の如くにはあらざりけん。本傳には何とも云はざれ

ども、世祖紀に「壬子（憲宗二年）、帝駐桓撫間。憲宗令斷事官牙魯瓦赤、與不只兒等、總天下財賦于燕。視事、一日殺二十八人。其一人盜馬者、杖而釋之矣。偶有獻環刀者、遂追還所杖者、手試刀斬之。帝責之曰「凡死罪、必詳讞而後行刑。今一日殺二十八人、必多非辜。旣杖復斬、此何刑也。」不只兒錯愕不能對」とあり。布智兒の長子好禮は、丞相伯顏に從ひ、水軍を督して宋を擊ち、水軍翼萬戶府の達魯花赤。第四子不蘭奚は、水軍翼萬戶招討使。

貳。元史に附傳ある者。

功臣の子孫（又は父）の傳にその功臣の名見えたるもの、十六人あり。

一。翁吉喇惕の阿勒赤駙馬。

列傳卷五特薛禪の傳なるその子按陳那顏は、功臣の第八十六なる翁吉喇惕の阿勒赤古咧堅なり。その傳に曰く「特薛禪、姓孛思忽兒弘吉剌氏、世居朔漠。本名特、因從太祖起兵有功、賜名薛禪、故兼稱曰特薛禪。女曰孛兒台、太祖光獻翼聖皇后」。本の名特を、乾隆の史臣は、下の因の字を附けて特因と讀み、殿本に托音と改め、特薛禪をも托音色辰と改め、語解に「托音、僧也」と注せり。又太祖紀に見えたる弘吉剌部長迭夷は、卽特薛禪なることを知らずして、殿本に岱音と改め、語解に「敵也」と注せり。迭夷卽特薛禪は、祕史の德薛禪、蒙古源流の岱徹辰なり。何ぞ曾て因の音を附けたるものあらんや。錢大昕は、明初の史臣の鹵莽を譏りて、「若乃句讀之不通、而妄加黜竄、欲以備石室金匱之藏、與三史竝列、毋乃不知量之甚乎」と云ひしが、その言は、移して乾隆の史臣を評すべし。これは、たゞ殿本の誤りだらけなる一例を筆の序に云ふなり。

「子曰按陳、從太祖征伐、凡三十二戰。平西夏、斷潼關道、取回紇・尋斯干城、皆與有功。歲丁亥（太祖二十二年）、賜號國舅按陳那顏。壬辰（太宗四年）、賜銀印、封河西王、以統其國族。丁酉（九年）、賜錢二十萬緡。有旨、弘吉剌氏生女、世以爲后、生男、世尙公主、每歲四時孟月、聽讀所賜旨、世世不絕。又賜所俘獲軍民五千二百、仍授萬戶以領之」。

翁吉喇惕の女子の皇后となれるは、孛兒台卽孛兒帖兀眞より始まり、公主に尙したるは、按陳卽阿勒赤古咧堅より始まれり。祕史に古咧堅と云ひ、喇失惕額丁の集史にも古兒干と云へば、按陳の公主に尙したるは確なるべけれども、元史にはその事を漏せり。按陳の女察必は、世祖の昭睿順聖皇后。按陳の子斡陳の配は、睿宗の女也速不花公主。斡陳の弟納陳の配は、太祖の孫女薛只干公主（公主表）。納陳の子斡羅陳の配は、完澤公主。繼配は、世祖の女囊加眞公主。斡羅陳の弟帖木皃（賜名按荅兒禿那顏）の配も、囊加眞公主（公主表）。その弟蠻子台の配も、囊加眞公主。繼配は、裕宗の女喃哥不剌公主。斡羅陳の女實憐荅里は、成宗の貞慈靜懿皇后。帖木兒の子琱阿不剌の配は、順宗の女祥哥剌吉公主。その弟桑哥不剌の配は、普納公主。琱阿不剌の女不荅失里は、文宗の皇后。琱阿不剌の子阿里嘉室利の配は、朶兒只班公主。納陳の孫仙童の女喃必は、世祖の皇后。按陳の次子必哥の孫丑漢の配は、台忽魯都公主。按陳の季子唆兒火都の子に、阿哈駙馬あり。按陳の孫納合の配は、太宗の女唆兒哈罕公主。按陳の孫渾都帖木兒の女荅吉は、順宗の昭獻元聖皇后。按陳の孫斡留察兒の女八不罕は、泰定帝の皇后。按陳の孫（曾孫か）脫憐拔都兒の女塔剌海は、世祖の皇后。脫憐の子迸不剌の女眞哥は、武宗の宣慈惠聖皇后。迸不剌の子買住罕の配は、拜荅沙公主。買住罕の女必罕・速哥荅里二人は、皆泰定帝の皇后。買住罕の弟孛羅帖木兒の女伯顏忽都は、順帝の皇后（后妃傳）。按陳の弟火忽の孫不只兒の配は、斡可眞公主。特薛禪の諸孫脫羅禾の配は、不魯罕公主。繼配は、闊闊倫公主。特薛禪の孫（公主

表）忙哥陳の女忽台は、憲宗の貞節皇后。その妹也速兒も、憲宗の皇后。特薛禪の曾孫（按陳の從孫）哈兒只の女速哥失里は、武宗の皇后。その外裕宗の徽仁裕聖皇后伯藍也怯赤又の名闊闊眞、顯宗の宣懿淑聖皇后普顏怯里迷失、仁宗の莊懿慈聖皇后阿納失失里、寧宗の荅里也忒迷失皇后も、皆弘吉剌氏なり（后妃傳）。蒙古に翁吉喇惕あるは、恰も遼に蕭氏あり、我が朝に藤原氏あるが如くなりき。

二。許兀愼の脫歡、兀嚕兀惕の客台、忙忽惕の蒙可哈勒札。

列傳卷六博爾忽の傳なるその子脫歡は、功臣の第六十なる脫歡なるべきこと、列傳卷七朮赤台の傳なるその子怯台は、功臣の第五十七なる客台なること、列傳卷八畏荅兒の傳なるその子忙哥は、功臣の第五十二なる蒙可哈勒札なることは、已に前に云へり。

三。儞出古惕巴阿噒の阿剌黑。

列傳卷十四（元史一二七）、伯顏の傳なる祖父阿剌は、功臣の第二十六なる儞出古惕巴阿噒の阿剌黑なり。その傳に曰く「伯顏、蒙古八隣部人。曾祖述律哥圖、事太祖、爲八隣部左千戶。祖阿剌、襲父職、兼斷事官、平忽禪有功、得食其地」。述律哥圖は、太祖紀の失力哥也不干、實錄卷五の初の失兒古額禿額不堅、卷九、三六六頁の失兒歌禿額不堅なり。忽禪は、失兒荅哩牙の大曲の南岸にある闊氈篤なり。喇失惕に據るに、太祖西征の役、斡惕喇兒にて全軍を四に分け、阿剌黑那顏は、速客禿脫該と共に、昔渾河（失兒荅哩牙）に泝り、別納客惕闊氈篤を攻め落せり。

阿剌の子を曉古台と云ふ。伯顏の傳に「父曉古台、世其官、從宗王旭烈兀、開西域。伯顏長於西域。至元初、旭烈兀遣入奏事。世祖見其貌偉、聽其言厲、曰「非諸侯王臣也。其留事朕」。與謀國事、恆出廷臣右。世祖益賢之。勅以中書右丞相安童女弟妻之、若曰「爲伯顏婦不慚爾氏矣」。二年七月、拜光祿大夫中書左丞[相]。諸曹白事、有難決者、徐以一二語決之。衆服曰「眞宰輔也」」。喇失惕に據れば、巴噒の伯顏は、もと旭剌庫（即旭烈兀）に仕へたりしが、庫卜賚汗の使者撒兒塔克等、一二六五年（至元二年）に珀兒沙より東に歸る時、旭剌庫は伯顏をそれらに伴なひて大汗の處に使せしめき（額兒篤曼の「帖木眞」二一四）。馬兒科保羅の紀行（裕勒譯註）第三第四章に、尼闊剌思保羅・馬弗斡保羅兄弟、孛合喇の城に至り、進退窮まりて三年留まりし時、東の君（珀兒沙の亦兒罕）阿剌兀（旭剌罕）より世界のあらゆる塔兒塔兒の主なる大合罕の朝廷に赴く使者至り、二人を見て、かゝる處にて剌甸の人に遇へるを喜び、大合罕の朝廷に伴なひ往かんことを勸め、二人はその使者に從ひ、庫卜賚汗の朝廷に牽れることを載せたり。これは、恰も一二六五年、撒兒塔克等の歸れると同じ年なれば、保羅兄弟の伴なひしは、撒兒塔克・伯顏等の一行なりけん。

伯顏の功業は、本傳に甚委し。至元十一年、中書左丞相となり、中書省を荆湖に行ひ、江を渡り、鄂州を降し、十二年春、賈似道の大軍を江上に破り、江淮の州軍を降し、六月上都に至り、世祖に見え、七月右丞相に進み、八月南に還り、「九月戊寅、會師淮之城下、遣新附官孫嗣武叩城大呼、又射書城中、諭守將使降。皆不應」。伯顏は、その南城の堡を拔き、寶應・高郵を過ぎ、十月兵を留めて揚州を圍み、江を渡りて鎭江に至り、十一月軍を分けて水陸より竝び進み、「壬午、伯顏軍至常州。先是常州守王宗洙遁、通判王虎臣以城降。（世祖紀「三月、宋常州安撫戴之泰・通判王虎臣以城降」、續綱目「三月、知常州趙與鑑遁、州人王良臣以城降元」。）其都統制劉師勇、與張彥王安節等復拒之（世祖紀「五月、宋都統制劉師勇・殿帥張彥據常州」、推姚訔爲守、固守數月不下。伯顏遣人至城下、射書城中、招諭「勿以已降復叛爲疑、勿以拒敵我師爲懼」。皆不應。乃

親督帳前軍、臨南城、又多建火砲、張弓弩、晝夜攻之。淛西制置文天祥遣尹玉・麻士龍來援、皆戰死。（續綱目には「十月、常州告急。知平江府文天祥、使尹玉・麻士龍・張仝・朱華、將兵赴援。士龍・玉戰死、仝・華不戰而遁」とあり）。甲辰、伯顏叱帳前軍先登、竪赤旗城上。諸軍見而大呼曰「丞相登矣」。師畢登、宋兵大潰。拔之、屠其城。姚訔及通判陳炤等死之。生獲王安節斬之。劉師勇變服單騎奔平江。諸將請追之。伯顏曰「勿追。師勇所過城、守者膽落矣」。この戰につきて馬兒科保羅の聞きたる奇談あり。その紀行の第七十四章に曰く「鎭江府の城を去り、繁華なる都邑の連なる所を通り、東南に三日旅すれば、盛大なる成斤傀（常州の訛）の城に至る。……伯顏將となり、蠻子の大州を征する時、克哩思惕教徒なる阿闌人の一隊をこの城を取りに遣りき。取りてそこに入りたる時、阿闌人は、ある好き酒を見附け、飮みて皆醉ひ、豚の如く橫だはり睡りき。かくて日暮れたる時、城の民は、彼等の醉ひて死人の如きを見て、跳びかゝりて悉く殺し、一人も逃れざりき。城の民のかく欺きてその兵を殺ぜるを聞きて、伯顏は、他の將を大軍と共に送り、城を攻めて、住民皆を劍に掛け、一人も死を免れざりき、かくて城の民は根絕やしせられき」。本傳には「屠其城」とあるのみなれども、この寬仁なる名將も、常州の役には例外に殘忍なりしと見え、續綱目には「伯顏至常州、會兵闉城。姚訔・陳炤・劉師勇・王安節力戰固守。伯顏遣人招之、譬喩百端、終不聽。伯顏怒、命降人王良臣、役城外居民、運土爲壘。土至、併人以築之。且殺民煎膏、取油以作砲、焚其牌杈、日夜攻不息。城中甚急、而訔等守志益堅。伯顏乃叱帳前諸軍、奮勇爭先、四面竝進。城遂破、訔死之、炤與安節猶巷戰。或謂炤曰「城東北門未合、可走」。炤曰「去此一步、非死所矣」。日中兵至、死焉。伯顏命屠其民。執安節至軍前、不屈、亦死。師勇以八騎突圍、走平江」とあり。「取油以作砲」と云へることにつき、裕勒は曰く「この殘忍なる製油の用ひ方に誤解あるならん。喀兒闢尼の話に、塔兒塔兒は、砲火を消えずに燃えさせんが爲に、砲火を城に投ぐる時、それと共に人の油を發射すと云へる故に」と云へり。

この年十二月、伯顏の軍平江府に入り、十三年正月嘉興を降せり。「甲辰、次皐亭山。宋主遣知臨安府賈餘慶、同宗室保康軍承宣使尹甫、和州防禦使吉甫、奉傳國璽及降表、詣軍前（續綱目には「太皇太后遣監察御史楊應奎、上傳國璽以降」とあり）。乙酉、進軍至臨安北十五里。宋宰臣陳宜中、與張世傑・蘇義（世祖紀に蘇劉義）劉師勇等、挾益王・廣王、下淛江、航海而南。惟謝太后及幼主在宮中」。謝太后は、太皇太后（理宗の皇后）謝氏なり。「丁亥、伯顏遣程鵬飛・洪雙壽等、入宮慰諭謝后」。考異に曰く「洪雙壽、卽洪雙叔也」。世祖紀に洪君祥とあり。君祥は、洪福源の子にして、小字を雙叔と云へり。「己丑、駐軍臨安城北之湖州市。庚寅、伯顏建大將旗鼓、率左右翼萬戶、巡臨安城、觀潮於淛江、暮還湖州市。辛卯、萬戶張弘範・郎中孟祺、以宋主謝后諭未附州郡手詔至軍前。二月辛丑（世祖紀に庚子）、宋主率文武百僚、望闕拜、發降表。伯顏承制、以臨安爲兩淛大都督府、忙古歹・范文虎入治府事。（世祖紀に辛丑）、復命張惠・阿剌罕・董文炳・呂文煥等、入城籍其軍民錢穀之數、閱實倉庫、收百官誥命符印圖籍、悉罷宋官府、取宋主、居之別室。分遣新附官、招諭南北兩廣四川未下州郡。癸卯、伯顏拜表稱賀（誰の筆に成りたるか、その文甚偉麗なり）。庚申、命囊加歹、傳旨召伯顏、偕宋君臣入朝。三月丁卯、伯顏入臨安、俾郎中孟祺、籍其禮樂祭器冊寶儀仗圖書。乙亥、伯顏發臨安。丁丑、阿塔海等宣詔、趣宋主母后入覲」。母后は、皇太后（度宗の皇后）全氏なり。「聽詔畢、卽日俱出宮。惟謝后以疾獨留。隆國夫人黃氏、宮人從行者百餘人、福王與芮、沂王乃猷、謝堂、楊鎭而下、官屬從行者數千人、三學之士數百人。五月乙未、伯顏以宋主至上都。世祖御大安閣受朝、降授宋主開府儀同三司檢校大司徒、封瀛國公、宋平」。

馬兒科保羅の紀行第六十五章に、蠻子卽宋の國を伯顏の平げたることを述べて、まづ「蠻子の大國に、發

克富兒と稱へらるゝ王主君ありて、その富の大なることと臣民の數と領地の廣さとは、大合罕を除きては、全世界にそれより大なるもの稀なるほど、盛大なる君なりき」。發克富兒また巴固不兒は、珀兒沙・阿喇必亞の古き記錄に支那の帝を呼べる稱號なり。「天の子」なる天子の稱號を珀兒沙の古言にて巴固普兒「神の子」と譯したるなりと諾依曼云へり。「然れどもその地の民は、軍人よりはむしろ外のものなりき。彼等の樂みは、女にありて、女の外には樂みなかりき。誰よりも王みづからは、その通りにて、貧民を惠むことを除きては、女の外何事をも考へざりき」。この好色の王は、伯顏の南征の年に崩じたる宋の度宗を云へるなり。續綱目に「帝爲太子時、以好內聞。旣立、耽于酒色。故事、嬪妾進御、晨詣閤門謝恩、主者書其月日。及帝之初、一日謝恩者三十餘人」とあり。「克哩思惕降生の一二六八年、今位に居る大合罕は、伯顏丞相と云ふ大名を彼の地に遣しき。伯顏丞相は、伯顏百眼と云ふが如し」。この紀年誤れり。一二六八年は、至元五年、宋の度宗咸淳四年にして、その年襄陽に攻めかゝりたるは、阿朮・劉整なり。伯顏の南征は、至元十一年、の咸淳十年、卽一二七四年より始まれり。「蠻子の王は、百眼ある人の爲にの外、その國を失ふことなけんと星命家の云へるを聞きたりき。かくて百眼ある人の世にあるべしとは信ぜられざる故に、みづからその位を安全なりと思ひき。然れどもこれは伯顏の名を知らざるが爲に誤れるなりき」。伯顏を百眼と云へるは、百眼の音は伯顏に近きが故に、伯顏丞相を百眼丞相と誰かのしやれたるなり。然るを馬兒科は、百眼丞相と云はずして、伯顏百眼と云へるは、丞相を百眼と解したるが如く聞ゆる故に、裕勒は「もし然らば、馬兒科の支那語を知らざるの證據、これより確なるは無し」と云へり。これに善く似たるしやれは、輟耕錄にもあり。卷一に「江南謠」と題して、「汲郡王公玉堂嘉話云、宋未下時江南謠云、「江南若破、百鴈來過」。當時莫喻其意。及宋亡。蓋知指丞相伯顏也」とあり顏と鴈との違は、顏は平聲、鴈は去聲なるのみなり。「この伯顏は、大合罕より騎兵步兵の大軍を與へられ、それを率ゐて蠻子に入りき。又必要なる時に騎兵步兵を運ばんが爲に、夥しき舟を持ちけり。伯顏その衆を率ゐて蠻子の地に入り、匯干主（淮安州卽淮安府）の城に至れる時、その民に大合罕に降れと諭したれども、從はざりき。そこに伯顏は、他の城に往きて、同じ結果に遇ひしかども、大合罕の、他の大軍を遣して續かしむることを知りたる故に、猶進み往きけり。かくて五つの城に引續きて進みたれども、それらの攻擊にかゝることを欲せず、又それらはみづから降らざる故に、それらの一つをも取らざりき。されども第六の城に至れる時、襲ひてそれを取り、第二第三第四をも然して、遂に引續き十二の城を取りき。それらの城を皆取りたる時に、直ちに王王后の宮所なる王國の都城勤賽に進みき。王は、伯顏の衆を率ゐて來ぬるを見し時に、かゝる景況を見慣れざれば、大に懼れて、人民の大衆を伴なひ、千の船に乘りて、大洋の海の島に遁れたるに、王后は、城に殘りて、力の及ぶ限勇婦の如く城の防禦を計りき。今王后は、敵將の名を問ひて、伯顏百眼と名づけらるゝことを告げられたる時、百眼の人は王國を奪ひ取るべきことを星命家の豫言したりしことを想ひ起しければ、みづから伯顏に降り、全き王國あらゆる城ども寨どもを渡して、少しも抵抗せざりき」。王王后は、宋帝の夫妻に非ず。この時の宋帝は、度宗の幼子㬎、六歲の幼主にて、皇后は無く、皇太后全氏と太皇太后謝氏とありき。勤賽は、裕勒の注に「卽京師にて、一一二七年より宋の都となりし臨安卽今の杭州を云へるなり。この名は、固有名詞の如くなりて、永く杭州に附き居たりと見えて、一五九五年旅行者喀兒列提の支那地圖に、猶この名にて記され、喀兒列提は坎薛と寫せり。坎薛は、第十四世紀に馬哩固諾里の用ひたる坎賽と形甚近し」と云へり。されども宋は杭州を臨安府と改めたれども、假の皇居なるが故に、京師と云はずして、行在と云へり。世祖紀至元十四年十一月の處に「命中書省、檄諭中外、江南旣平、宋宜曰亡宋、行在宜曰杭州」とあり。勤賽、又は勸賽、看在、馬哩固諾里の坎賽は、

みな行在又は行在の訛なり。王の海島に遁れたるは、益王・廣王の遁れたるを誤り聞けるなり。殘りて伯顏に降れる后は、太皇太后なり。王國城寨を渡せりとは、州郡に諭す手詔を下せるを云ふ。

伯顏は、宋を平げて還り、同知樞密院となり、至元十四年、叛王昔里吉を討じ、斡魯歡河にて撃破り、十八年、燕王（皇太子眞金）に從ひ、北邊を鎭し、二十二年、宗王阿只吉の律を失へる時、代りてその軍を統べ、二十四年、宗王乃顏の反ける時、世祖の親征に從ひ、二十六年、知樞密院事を以て和林を鎭し、三十一年正月、世祖崩じ、伯顏百官を總べて、成宗（皇太子眞金の子帖木兒）を擁立し、五月太傅となり、軍國の重事を錄し、十二月薨じき。

四。速勒都思の塔孩。

列傳卷十六（元史一二九）、阿塔海の傳に「阿塔海、遜都思人。祖塔海拔都兒驍勇善戰、嘗從太祖、同飮黑河水、以功爲千戶」とある塔海拔都兒は、功臣の第二十四なる速勒都思の塔孩なり。塔海の子卜花、卜花の子阿塔海、皆千戶の職を襲ぎけり。阿塔海は、憲宗の時、大帥兀良合歹（卽速不台の子兀良合台）に從ひ、雲南を征し、至元九年、襄陽の城攻に與り、十二年、丞相伯顏の軍に會して、池州に克ち、阿朮と共に、張世傑の舟師を焦山の下に敗り、又伯顏の中軍に屬し、常州に克ち、平江を降し、十三年宋主母后を以て入覲せり。「二十年、遷征東行省丞相、征日本、遇風舟壞、喪師十七八」とあるは、紀年誤れり。世祖紀日本傳に據るに、日本を侵して失敗したるは、至元十八年（我が弘安四年）八月なり。行省丞相の事は、日本傳にも「二十年、命阿塔海、爲日本省丞相」とあれども、世祖紀二十年正月の處に「以阿塔海依舊爲征東行中書省相」とあれば、十八年六月、日本行中書省の右丞相（本傳誤りて左丞相）阿剌罕卒して、阿塔海代れる時、嘗て丞相となりしならん。右か左か確ならず。二十四年、世祖に從ひて乃顏を征し、二十六年に卒しき。その子阿里麻は、江南諸道行御史臺の御史大夫。

五。札剌亦兒の余魯罕。

列傳卷十八（元史一三一）、奧魯赤の傳なるその祖朔魯罕は、功臣の第四十五なる余魯罕なり。「奧魯赤、札剌台人。曾祖豁火察、驍果善騎射。太祖出征、每提精兵前驅。祖朔魯罕、有膽力。嘗被讒、不許入見。一日俟駕出、趨前曰「臣無罪。若果有罪、速殺臣、臣將從先帝於地下。不然赦臣、願得自効」。帝笑而復用之。辛未（太祖六年）、與金人戰于野狐嶺、中流矢、戰愈力、克之。旣還、拔矢、血出昬眩。帝親撫視、傅以藥、覺不起。帝悲悼曰「朔魯罕、朕之一臂。今亡矣」。賜其家馬四百匹、錦綺萬段」。朔魯罕の子にして奧魯赤の父なる忒木台も、太祖太宗に仕へたり。その事は、下の第一〇〇頁に云ふべし。

六。失魯孩。

列傳卷十九（元史一三二）、麥里の傳なるその祖雪里堅那顏は、功臣の第二十二なる失魯孩なるべし。「麥里、徹兀臺氏。祖雪里堅那顏、從太祖、與王罕戰、同飮班眞河水、以功授千戶、領徹里臺部、征討諸國、卒于河西」。徹兀臺・徹里臺、いづれか一つの誤あらん。徹兀臺の兀は、兒の誤か。又は兀は誤らずして、里は黑の誤か。祕史にはこれに似たる姓見えず。「父麥吉襲職、從太宗、定中原、以疾卒。麥里襲職、從定宗、略定欽察・阿速・斡魯思諸國。從憲宗、伐宋有功。世祖卽位、諸王霍忽叛、掠河西諸城。麥里以爲「帝初卽位、而王爲首亂、此不可長」。與其弟桑忽荅兒、率所部擊之、一月八戰、奪其所掠札剌亦兒・脫脫憐諸部民以還。已

而桑忽荅兒爲霍忽所殺。帝聞而憐之、遣使者、以銀鈔羊馬迎致麥里、賜號曰荅剌罕、尋卒」。麥里は、蔑里克の略なり。從定宗は、太宗八年の西征、從憲宗は、憲宗八年の南伐なり。諸王霍忽は、世系表定宗の第三子禾忽大王、昔班の傳の火和大王、李庭の傳の叛臣霍虎なり。至元中諸王海都の叛ける時、火和大王もその黨なることは、昔班の傳に見え、李庭の傳には「庭至哈剌和林・晃兀兒之地、越嶺北、與撒里蠻諸軍大戰敗之、移軍河西、擊走叛臣霍虎、追至大磧而還」と見えたれども、世祖即位の初に叛きたることは、本紀諸傳に見えず。世祖紀中統元年阿里不哥の亂に「九月、阿藍荅兒率兵至西涼府、與渾都海軍合。詔諸王合丹合必赤、與總帥汪良臣等、率師討之。丙戌、大敗其軍于姑臧、斬阿藍荅兒及渾都海、西土悉平」とあり。霍忽王は、果して中統の初に叛きしならば、阿里不哥に黨して、阿藍荅兒等に應じたるならん。

七。翁吉喇惕の忙哥。

列傳卷二十（元史一三三）、孛蘭奚の傳なるその祖忙哥は、實錄四一〇頁に見えたる察阿歹の傳蒙客にて、功臣の第三十七なる木格なるべし。畏荅兒の傳なる忙哥、太宗紀の蒙古漢札、祕史の蒙可哈勒札は、別吶津の史に木勒格哈勒札とあれば、親征錄の木哥漢札は、勒の音を略きたるなり。又祕史卷四なる木勒客脫塔黑、孛禿の傳の磨里禿禿を、親征錄に慕哥とあるも、勒の音を略きたるなり。然らばこゝの忙哥・蒙客も、正しくは木勒格・木勒客にして、祕史には勒の字を略きたる例なければ、功臣の木格は、木の下勒の字を脫したるならん。その傳に曰く「孛蘭奚、雍吉烈氏、世居應昌。祖忙哥、以后族備太祖宿衞」とあれば、忙哥は、翁吉喇惕の一人にて、德薛禪の族なり。「父律實、狀貌魁偉、有謀、善騎射。太宗嘗問以軍旅之事、應對稱旨、即命爲千戶」。律實始めて千戶となれるが如く聞ゆれども、忙哥は果して功臣の木格ならば、太祖の時已に千戶となり、律實はその職を襲ぎたるならん。「尋以爲齊王府司馬。後從睿宗伐金有功、詔還宿衞、以疾卒」。齊王とは、拙赤合撒兒の子也松格を云へるなり。世系表に移相哥大王の子勢都兒王、勢都兒の子齊王八不沙ありて、諸王表齊王の下に「八不沙、大德十一年封」とあり。八不沙齊王に封ぜられたるに由り、その父祖までも泝りて齊王と云へり。「孛蘭奚、英邁有父風、……從軍有功、襲父官爲齊王司馬。世祖親征乃顏、以齊王兵從。兵始交、孛蘭奚躍馬陷陣、斬其旗、所向披靡、云云」。この時の齊王は、年代より考ふれば、勢都兒王なるに似たり　然るにこの勢都兒王は、世祖紀至元二十四年四月諸王乃顏の反ける時、「六月、諸王失都兒所部鐵哥、率其黨、取咸平府、渡遼、欲劫取豪懿州」、「七月、乃顏黨失都兒犯咸平」、と見え、土土哈の傳に「世祖親征乃顏、遣使命土土哈、收其餘黨。沿河而下、遇叛王鐵哥軍萬騎、擊走之」とある鐵哥も、失都兒の所部なれば、失都兒即勢都兒は、乃顏の黨にして、世祖の親征に從へるに非ず。然らば孛蘭奚のみ、その主より離れて世祖に從ひたるにや。又この勢都兒は、喇失惕の史に、額篾根の子、也生哥（移相哥）の孫とし、世系表と異なれば、世系表は誤れるにて、移相哥の嗣子、齊王八不沙の父は、別に有りて、勢都兒の叛に與せざりしにや。又多遜に據れば、至元二十五年に平げられたる乃顏の餘黨の內には勢都兒もありて、勢都兒は遂に殺されたりと云へれども、本紀諸傳には合丹禿魯干等のみありて、勢都兒なく、至元二十九年正月「賜諸王失都兒金千兩」と本紀に見ゆれば、蓋二十四年敗北の後罪を悔いて歸順したるならん。

八。客咧亦惕の失喇忽勒、脫不合兄弟。

列傳卷二十一（元史一三四）、也先不花の傳なるその祖失剌斡忽勒、伯祖脫不花は、功臣の第六十七なる失喇忽勒、第七十四なる脫不合なり。「也先不花、蒙古怯烈氏。祖曰昔剌斡忽勒、兄弟四人、長曰脫不花、次曰

怯烈哥、季曰哈剌阿忽剌。方太祖微時、怯烈哥已深自結納。後兄弟四人、皆率部屬來歸。太祖以舊好遇之、特異他族、命爲必闍赤長、朝會燕饗、使居上列」。功臣の中に怯烈哥の名見えざるは、太祖即位の頃には已に歿したるなるべし。「昔剌斡忽勒早世、其子孛魯歡、幼事睿宗入宿衞。憲宗即位、與蒙哥撒兒、密贊謀議、拜中書右丞相、遂專國政。賜眞定之束鹿、爲其食邑。至元元年、以黨附阿里不哥、論罪伏誅。子四人、長曰也先不花云云。也先不花、初世其職、爲必闍赤長」、又燕王眞金の傅となりき。孛魯歡は、憲宗紀元年即位の條に「以孛魯合掌宣發號令、朝覲貢獻、及内外聞奏諸事」とある人なり。喇失惕は、孛勒該と呼び、その官は大必提克赤にて、財政と内政とを掌ると云へり。必提克赤は、即元史の必闍赤にて、兵志一に「爲天子主文史者、曰必闍赤」と云ひ、百官志一中書省の掾屬に蒙古必闍赤二十二人、六部の蒙古必闍赤は、吏部に三人、戸部に七人、禮部兵部に各二人、刑部に四人、工部に六人あり。元史語解は、筆且齊即必齊頁齊と改めて、寫字人なりと注せり。今の淸の官制にては、この寫字人を筆帖式と云ふ。後には寫字人となりたれども、初は尙書の如き大官にして、黑韃事略徐霆の疏證に「移剌（楚材）及鎭海、自號爲中書相公、總理國事。韃人無相之稱、只稱之曰必徹徹。必徹徹者、漢語令史也。使之主行文書爾」とあり。太宗三年八月、一時は中書令中書左右丞相の官を設けたれども、その名は漢人の間に用ひられたるのみにして、蒙古人は舊の如く必闍赤又は也客必闍赤と云ひ居たるなり。憲宗紀二年の末に「以孛魯合掌必闍赤、寫發宣詔及諸色目官職」とあるは、元年の文と重複（例の重複）したるにて、即傳の右丞相となれることなり。也先不花の「世其職」とあるも、祖父昔剌斡忽勒の職のみならず、父孛魯歡の職をも襲ぎたるなり。孛魯歡伏誅の事は、世祖紀至元元年八月「阿里不哥、自昔木土之敗、不復能軍、至是與諸王玉龍荅失・阿速帶・昔里給、其所謀臣不魯花・忽察・禿滿阿里・察脫忽思等來歸。詔「諸王、皆太祖之裔」、竝釋不問、其謀臣不魯花等皆伏誅」とあり。不魯花は、即孛魯歡なり。也先不花は、至元二十三年、雲南諸路行中書省の平章政事。大德二年湖廣行省に遷り、九年湖廣行省の左丞相。長子亦憐眞は、湖南行省の左丞相。次子禿魯は、中書右丞相。

九。孛堅。

列傳卷二十二（元史一三五）、忽都の傳なるその父孛罕は、功臣の第四十一なる孛堅なり。忽都、蒙古兀羅帶氏。父孛罕、事太祖、備宿衞。至太宗時、爲鎭西行省、領蒙古漢軍、從攻河中潼關河南、與拜只思・札忽歹・阿思蘭、攻秦鞏及仁和諸堡、又與拜只思守京兆。歲乙未（太宗七年）、授左手萬戶。從都元帥荅海紺卜出征、卒軍中。憲宗命忽都將其軍云云」。兀羅帶は、輟耕錄蒙古七十二種の中なる兀羅歹なり。祕史には、この姓見えず忽都は、憲宗世祖に事へ、屢軍功を立て、その弟忽都荅立、子札忽帶、その職を襲ぎけり。

十。不魯罕。

同卷忽林失の傳なるその曾祖不魯罕罕劄は、功臣の第二十八なる不魯罕なり。「忽林失、八魯剌䚟氏。曾祖不魯罕罕劄、事太祖、從平諸國、充八魯剌思千戶、以其軍與太赤溫等戰、重傷墜馬。帝親勒兵救之。以功陞萬戶、賜黃金五十兩、白金五百兩、俾直宿衞」。八魯剌䚟氏は、即巴嚕剌思姓、罕劄は、即哈勒札にて一種の稱號、太赤溫等は、即泰赤兀惕なり。不魯罕の子許兒台は、太宗の時、定宗に從ひ、欽察を征し、憲宗の時、世祖に從ひ宋を伐ち、亳州に戰ひ、孫瓮吉剌帶は、世祖に從ひ、阿里不哥を征し、曾孫忽林失は、從ひて叛王乃顏を征し、皇孫帖木兒に從ひ、叛王海都・都瓦等と戰ひ、成宗の時、叛王斡羅思・察八兒等と戰ひ、忽林失の子燕不倫は、致和元年文宗を迎ふる謀に與り、天曆元年、屢王禪の兵と戰ひ、知樞密院事となりき。

十一。斡囉納兒の乞失里克。

列傳卷二十三（元史一三六）、哈剌哈孫の傳なるその曾祖啓昔禮は、功臣の第五十六なる斡囉納兒の乞失里黑なり。「哈剌哈孫、斡剌納兒氏。曾祖啓昔禮、始事王可汗•脫斡璘。王可汗與太祖約爲兄弟。及太祖得衆、陰忌之、謀害太祖。啓昔禮潛以其謀來告。太祖乃與二十餘人一夕遁去。諸部聞者多歸之、還攻滅王可汗、幷其衆、擢啓昔禮爲千戸、賜號荅剌罕。從平河西西域諸國」。王可汗•脫斡璘は、卽王罕脫•斡哩勒、兄弟は父子の誤なり。「祖博理察、太宗時、從太弟睿宗、攻河南、取汴蔡、滅金、賜順德以爲分邑。父囊加台、從憲宗伐蜀、卒于軍」。考異に劉敏中の撰れる順德の忠獻王（哈剌哈孫）の碑を引きて、「博理察•囊加台、皆襲荅剌罕之號」とあり。「哈剌哈孫、威重不妄言笑、善騎射、工國書、又雅重儒術。至元九年、世祖錄勳臣後、命掌宿衞、襲號荅剌罕。自是人稱荅剌罕而不名」。哈剌哈孫は、成宗の朝の名相にして、至元二十二年大宗正、二十八年湖廣行省の平章政事、大德二年中書左丞相、七年右丞相、十一年武帝卽位の後太傅右丞相にて和林省の事を行ひその年薨じき。子脫歡は、荅剌罕の號を襲ぎ、江浙行省の左丞相。

十二。晃豁壇の蒙里克•額赤格、脫侖•扯兒必。

列傳卷八十忠義一（元史一六八）、伯八の傳に「伯八、兒合丹氏。祖明里•也赤哥、嘗隸太祖帳下。初怯列•王可罕、與太祖爲鄰國、誓相親好。旣而敗盟、與其子先髠潛謀、欲襲太祖。因遣使通問、許以女妻太祖弟合撒兒至期、太祖欲往。明里也赤哥疑其詐、諫止之。王可罕知謀泄、遂謀入寇。後爲太祖所滅。父脫倫•闍里必、屢從太祖、征西域、累立奇功」とあり。兒合丹氏の兒は、晃の誤寫にて、卽晃豁壇氏なり。明里•也赤哥は、功臣の第一なる晃豁壇の蒙里克•額赤格、脫倫•闍里必は、功臣の第十二なる脫欒卽脫侖•扯兒必なり。怯列の王可罕は、太祖紀の克烈部長汪罕、祕史の客咧亦惕の王罕なり。先髠は、太祖紀の亦剌合、祕史の僩勒合•桑昆なり。太祖弟合撒兒は、太祖紀と祕史とに據るに、長子朮赤の誤なり。脫倫の子伯八は、世祖の時、萬戸となり、諸部の軍馬を領ゐて欠欠州（客姆客姆主克）を守りしが、至元十二年、親王昔列吉•脫鐵木兒叛ける時襲はれて死し、その子八剌は、讎を報いんとして成らず、弟不蘭奚と共に脫鐵木兒に執へ殺されき。世系表に據るに、昔列吉は、憲宗の子河平王昔里吉、脫鐵木兒は、鐵木哥斡赤斤の曾孫脫帖木兒大王ならん。

十三。脫撒合。

その外列傳卷十七（元史一三〇）に「完澤、土別燕氏。祖土薛、從太祖、起朔方、平諸部。太宗伐金、命太弟睿宗、由陝西進師、以擊其不備、土薛爲先鋒。遂去武休關、越漢江、略方城而北、破金兵于陽翟。金亡、從攻興元閬利諸州、拜都元帥。取宋成都、斬其將陳隆之、賜食邑六百戸」。食貨志歲賜の篇に「禿薛官人、丁巳年分撥興元等處種田六百戸」とある土薛卽禿薛は、功臣の第七十二なる脫撒合ならんと思へども、確ならず。土薛の子線眞は、中統四年中書右丞相。線眞の子完澤は、至元二十八年中書右丞相。大德七年薨じき。

又列傳卷十九（元史一三二）に「步魯合荅、蒙古弘吉剌氏。祖按主奴、太宗時、率蒙古軍千人、從諸王察合台、征河西、至山丹、攻下定會階文諸州、以功爲元帥、佩金符。駐軍漢陽禮店、戍守西和階文南界、及西蕃邊境、換金虎符、眞除元帥」とあり。河西は、卽西夏にして太祖の末年に亡びたれば、太宗の時とあるは太祖の時の誤なるべし。この按主奴は、功臣の第七十五なる阿只乃ならんかと思はる。按主奴の子車里、孫步魯合荅は、みな武功を以て顯れき。

貳。元史の紀傳に散見せる者。

その他の功臣にして元史の本紀列傳にその名散見したるもの十六七人あり。

一。者別。

太祖紀に哲別又は遮別と書き、諸傳に色色なる文字にて書かれたるは、功臣の第四十七なる別速惕の者別なり。洪鈞の元史譯文證補十八の哲別補傳は、面白く出來たり。

二。巴歹。

太祖紀に把帶、木華黎の傳に拔台、食貨志歳賜の篇に八荅子とあるは、功臣の第五十五なる巴歹なり。

三。兀陨罕の者勒篾。

太祖紀に折里麥、列傳第八なる忙哥撒兒の傳に兀良罕哲里馬とあるは、功臣の第九なる兀陨罕の者勒篾なり。

四。札刺亦兒の阿兒孩合撒兒。

太祖紀の阿里海は、札刺亦兒の阿兒孩合撒兒なるが、功臣の第五なる亦魯該も、恐らくはその人ならん。

五。巴嚕剌思の忽必來。

太祖紀乃蠻最後の役に「先遣虎必來・哲別二人爲前鋒」とある虎必來は、功臣の第八なる巴嚕剌思の忽必來なり。

六。兀洼思篾兒乞惕の荅亦兒兀孫。

篾里乞部を平げたる時「其屬帶兒兀孫獻女迎降」とあるは、兀洼思篾兒乞惕の荅亦兒兀孫なるが、功臣の第三十六なる荅亦兒は、その人なるか疑はし。

七。翁吉喇惕の赤古古咧堅。

德興府の戰に「皇子拖雷、駙馬赤駒先登拔之」太宗紀八年に駙馬赤苦、公主表に「禿滿倫公主適赤窟駙馬」とあるは、功臣の第八十五なる翁吉喇惕の赤古古咧堅なり。

八。塔塔兒の失吉忽禿忽。

太祖十年五月「遣忽都忽等、籍中都帑藏」、十七年夏、西域主札闌丁を追へる時「忽都忽與戰不利、」太宗六年七月「以胡土虎那顏爲中州斷事官、」七年春「皇子曲出及胡土虎代宋、」その外諸傳に屢見えたる胡都虎、忽都虎は、功臣の第十六なる塔塔兒の失吉忽禿忽なり。

九。札剌亦兒の巴剌扯兒必。

太祖十七年夏「札闌丁遁去、遣八剌追之、不獲」、十八年夏「八剌之兵來會」とあるは、功臣の第四十九なる札剌亦兒の巴剌扯兒必なり。憲宗卽位の前、阿剌脫忽剌兀の會議に定宗の皇后海迷失の遣せる使者八剌は忙哥撒兒の傳に畏兀の八剌とあれば、札剌亦兒の巴剌とも、功臣の第三十五なる巴剌斡囉納兒台とも異なり。

憲宗紀元年卽位の續に「葉孫脫按只𩨆暢吉・爪難・合荅・曲憐・阿里出及剛疙疸・阿散忽都魯等、務持兩端、坐誘諸王爲亂、竝伏誅」とあり。葉孫脫は、實錄卷九、三七三頁と卷十二、六四八頁とに見えたる者勒篾の子也孫脫額にして、箭筒士千人の長となりし人なり。按只𩨆は、卷九、三七四頁に見えたる亦魯該の親族阿勒赤歹にして、一千の侍衞の長となりし人なり。暢吉は卷十二、六三八頁に見えたる官人掌吉にはあらずや。爪難は、卷十二、六四六頁に見えたる察納兒にして、太宗の時に阿馬勒と共に宿衞の第二班の長となりし人なり。

十　合歹古咧堅

合荅は、功臣の第八十四なる合歹古咧堅にして、實錄卷十二には、太宗の時に豁哩合察兒と共に宿衞の第三班の長となり、公主表には延安公主位の處に「火魯公主、適哈荅駙馬」とあり。喇失惕に據れば、定宗の朝より斡古勒該米失攝政の時まで、鎭海・喀荅克二人政を執りしが、憲宗二年に殺されき。この喀荅克は、卽合荅なり。

十一。忽哩勒。

曲憐は、功臣の第八十二なる忽哩勒なるべし。

十二。阿勒赤。

阿里出は、功臣の第七十一なる阿勒赤にして、速不台の傳に、滅里吉征伐の命を受けたる時、「乃選裨將阿里出、領百人先行、覘其虛實、速不台繼進。速不台戒阿里出曰「汝止宿、必載嬰兒具以行、去則遺之、使若挈家而逃者」。滅里吉見之果以爲逃者、遂不爲備」とあり。剛疙疸は、晃豁壇にして、阿散忽都魯の姓なるべし。その人は外に見えず。

十三。豁囉剌思の薛潮兀兒。

列傳第七なる曷思麥里の傳に「命與薛徹兀兒爲必闍赤」とある薛徹兀兒は、功臣の第七十七なる豁囉剌思の薛潮兀兒なり。

十四。豁兒豁孫。

又功臣の第十九なる豁兒豁孫は、實錄卷十、四一〇頁に豁兒合孫と書きて、古出・闊闊出・種賽と四人、太祖の末弟斡惕赤斤に傳けられたりとあり。列傳卷二十一に「撒吉思、回鶻人、其國阿大都督多和思之次子也。初爲太祖弟斡眞必闍赤、領王傅。斡眞薨、長子只不干蚤世、適孫塔察兒幼。庶兄脫迭狂恣、欲廢適自立。撒吉思與火魯和孫、馳白皇后（攝政斡兀立海迷失合屯）乃授塔察兒以皇太弟寶、襲爵爲王。撒吉思以功與火魯和孫分治、黑山以南、撒吉思理之、其北火魯和孫理之」とある火魯和孫は、卽豁兒合孫なり。

十五。別速惕の闊闊出。

列傳卷三十六（元史一四九）なる郭寶玉の傳に、その子德海は、太祖昇遐の翌年「戊子春、從元帥闊闊出、游騎入關中」とあるは、功臣の第十八なる別速惕の闊闊出なり。

食貨志歲賜の篇に迭哥官人とあるは、功臣の第十一なる別速惕の迭該ならんか。

十六。十功臣。

太祖の功臣數多き中にも、忽必來者勒篾、者別、速格台の朶兒邊那合思（四狗）、孛斡兒出、木合黎、孛囉忽勒、赤剌溫の朶兒邊曲魯兀惕（四駿）、主兒扯歹忽、亦勒荅兒の兩前鋒は、太祖の殊に倚信せる股肱の臣なりき。木華黎の傳に、木華黎薨じて子孛魯嗣ぎたる後、「丙戌（太祖二十一年）夏、詔封功臣戶口爲食邑、曰十投下、孛魯居其首」と云ひ、畏荅兒の傳に、太宗、畏荅兒の子忙哥の封戶少きを訝り、「其增封爲二萬戶、與十功臣同爲諸侯」と命じ、又忙哥の從孫博羅歡の傳にも「時諸侯王及十功臣、各有斷事官。博羅歡年十六、爲本部（忙兀部）斷事官」とあり。又列傳卷三十九（元史一五二）なる齊榮顯の傳に「授東平路總管府參議、兼領博州防禦使。時十投下議各分所屬、不隸東平。榮顯力辨於朝、遂止」とあるを見れば、十投下の功を負みて我儘なりしを知るべし。この十投下十功臣は、即四狗四駿兩前鋒の十臣又はその子孫を云へるなり。十功臣の中にて忽必來・者勒篾・者別・赤剌溫の四人は、元史に傳なし。赤剌溫は、功臣の第二十七なる速勒都思の鎖兒罕失喇の子にして、父子共に勳勞ありしに、父は功臣に列して、子は列せざるは、赤剌溫早く死して、父のみ猶存したるが爲なるべし。元史には父子俱に傳なく、鎖兒罕失喇は、その名も見えざれども、赤老溫の名は、博爾朮・木華黎・博羅渾（また博爾忽）と列なりて、太祖紀の外、木華黎の傳、兵志宿衞の篇に見え、「號掇里班曲律、猶言四傑也」と云へり。

十七。六扯兒賓。

太祖即位の二年前、乃蠻を伐たんとする時、忙忽惕の朶歹・朶豁勒忽兄弟、阿噜剌惕の孛斡兒出の弟斡格列、晃豁壇の蒙里克額赤格の子脫侖、姓の知れざる不察蘭、晃豁壇の雪亦客禿の六人を扯兒賓とし、六扯兒賓と號し、親近の職を授けたり。この六人の內、朶歹扯兒必即者台は、功臣の第二十三、脫侖扯兒必即脫欒は、功臣の第十二、雪亦客禿扯兒必即速亦客禿は、功臣の第三十一に列せり。元史にその名見えたるは、太宗紀二年の夏「朶忽魯及金兵戰、敗績、命速不台援之」とあるは、朶豁兒忽扯兒必なるべし。食貨志歲賜の篇に斡闊烈闍里必とあるは、斡格列扯兒必なり。列傳卷四十王檝の傳に「帝（太祖）命闍里畢與皇太弟國王、分撥諸侯王城邑」とあるを、錢大昕の考異に「按博爾朮之弟、曰斡闊烈闍里必、疑卽傳之闍里畢也。皇太弟國王者、斡赤斤也」と云へり。

十八。晃豁壇の脫侖扯兒必。

脫侖扯兒必は、前に引ける伯八の傳に見えたる外に、木華黎の傳に、太祖十年北京興中府を降したる後、「錦州張鯨聚衆十餘萬、殺節度使、稱臨海郡王、至是來降。詔木華黎、以鯨總北京十提控兵、從掇忽闌、南征未附州郡」。列傳卷三十七（元史一五〇）なる石抹也先の傳に「又命也先、副脫忽闌闍里必、監張鯨等軍、征燕南未下州郡」。列傳卷三十八（元史一五一）なる石抹孛迭兒の傳に「又從奪忽闌闍里必、徇地山東大名」とあ

り。又列傳卷十なる哈八兒禿の傳に「憲宗時、從攻釣魚山有功、云云。從千戶脫倫伐宋、沒于陣」とあるは脫倫扯兒必の時代と合はざるに似たり。

十九。塔塔兒の失吉忽禿忽の續。

功臣の第十五十六十七十八なる許兀愼の孛囉忽勒、塔塔兒の失吉忽禿忽、篾兒乞惕の古出、別速惕の闊闊出四人は、宣懿太后の育て擧げたる拾ひ兒にして、太祖は弟の如く思ひて、親信他人と異なりしが、四傑に加はりたる孛囉忽勒卽博爾忽の外は、元史に傳なし。たゞ失吉忽禿忽の事は、前に引ける太祖紀太宗紀の文の外に、列傳卷二なる睿宗の傳に、太宗三年辛卯の十二月禹山の戰の後、「壬辰(四年)春、合達等知拖雷已北、合步騎十五萬、躡其後。拖雷接兵、遣其將忽都忽等誘之。日且暮、令軍中曰「毋令彼得休息、宜夜鼓譟以擾之」。云云」とありて、遂に三峯山の大捷を得たることを載せ、親征錄に三峯山の戰の後、「上至南京、令忽都忽攻之」、木華黎の傳に附記せるその孫塔思の傳に「三月、帝北還、詔塔思、與忽都虎統兵略定河南諸郡」、列傳卷八なる抄思の傳に三峯山の戰に功を立てたる後、「制受萬戶、與內侍胡都虎留、乞僉起西京等處軍人征行、及鎭守隨州」とあり。又親征錄に、太宗六年甲午金を滅ぼしたる後、「遣忽都忽主治漢民」とあるは、太宗紀の「秋七月、以胡土虎那顏爲中州斷事官」を云へるにて、耶律楚材の傳に「甲午、議籍中原民。大臣忽都虎等、議以丁爲戶。楚材曰「不可。丁逃、則賦無所出、當以戶定之」。爭之再三、卒以戶定」とあり。錢大昕の考異に本紀の胡土虎を石抹明安の次子なる忽篤華ならんと疑ひたるは、失吉忽禿忽の斷事官は太祖の命に本づきて蒙古より中州に遷りたることに心附かざりし爲ならん。列傳卷二十二なる鐵哥朮の傳にも、鐵哥朮の父野里朮は、「兼長四環衞之必闍赤、壬辰從國兵討金、以戰功最多、賞賚優渥。甲午、副忽都虎、籍漢戶口、籌其賦役、分諸功臣以地。人服其斂」とあり。但功臣に地を分てるは、六年甲午にあらずして、下に引けるが如く八年丙申にあり。又列傳卷三十六なる郭寶玉の傳に附記せるその子德海の傳に「太宗詔大臣忽都虎等、試天下僧尼道士、選精通經文者千人、有能工藝者、則命小通事合住等領之、餘皆爲民、……從德海之請也」とあるは、この頃の事なり。憲宗の時、劉秉忠の世祖に上れる書に「自忽都那演斷事之後、差徭甚大」と云へるを見れば、その政の何如を窺ふべし。七年乙未の春、皇子曲出と共に宋を伐ちたることは、列傳卷七の察罕の傳に「皇子闊出忽都禿伐宋、命察罕爲斥候、」列傳卷二十なる脫歡の傳に「父脫端爲萬戶、從皇子闊出忽都禿南征、」列傳卷十六なる阿剌罕の傳に「父也柳干、歲乙未、從皇子闊出忽都禿、略汴宋睢宿等州」とあるは、いづれも虎を禿と誤りたるなり。列傳卷九なる鐵邁赤の傳に「從皇子闊出、忽都、行省鐵木荅兒、定河南、累有戰功」とあるは、忽都の下虎の字を脫したるなり。又列傳卷九なる槊直腯魯華の傳に「金亡、命大臣忽都虎、料民分封功臣」、親征錄に、乙未の夏「遣曲出忽都忽、籍到漢民一百二十萬有奇、遂分賜諸王城邑各有差」とあり。この事は、太宗紀にはこの年に載せざれども、八年丙申の六月「復括中州戶口、得續戶一百一十餘萬」、その七月「詔以眞定民戶奉太后湯沐、中原諸州民戶、分賜諸王貴戚」とあるは、卽その事にして、皆忽都忽斷事官の取扱なり。畏荅兒の傳に「歲丙申、忽都忽大料漢民、分城邑、以封功臣」。耶律楚材の傳に、丙申の七月「忽都虎以民籍至、帝議裂州縣、賜親王功臣。楚材曰「裂土分民、易生嫌隙、不如多以金帛與之」。帝曰「己許、奈何」。楚材曰「若朝廷置吏、收其貢賦、歲終頒之、使毋擅科徵、可也」。帝然其計、遂定天下賦稅」、とあり。楚材の傳と劉秉忠の上書の文とに依れば、忽都忽の政は人意に滿たざる所ありしが如くなれども、世祖嘗て兵を典り民に宰たる者の害を爲すを憂へて、張德輝に問へる時、德輝對へて「莫如更遣族人之賢如口溫不花者、使掌兵權、勳舊則如忽都虎者、使主民政。若此、則天下均受賜矣」と云へる

を見れば、忽都忽も、たゞに武斷を專にしたる人に非ざるに似たり。又列傳卷十なる月里麻思の傳に「歲丁丑、太宗命與斷事官忽都那同署」とあれども、太宗の世に丁丑の年なければ、丁丑は、太宗九年なる丁酉の誤にて、忽都那の那も、忽の誤なり。食貨志歲賜の篇に「忽都虎官人、五戶絲、壬子年查認過廣平等處四千戶」とあるも、失吉忽禿忽なり。

貳。太祖卽位の後に見えたる諸臣。

弌。實錄卷九に見えたる分。

一。也客捏兀鄰。

太祖卽位の時(實錄卷九三七三頁)に、千の宿衞の長となれる也客捏兀鄰の名は、外には見當らざれども、その頃は晃豁壇の勢好き時にして、蒙里克額赤格に子どももあまたありたれば、その子どもの内にてやあらん。

二。兀㖶罕の也孫帖額、札剌亦兒の不吉歹、豁兒忽荅黑、剌卜剌合。

同じ時に箭筒士の第一班の長にして千の箭筒士の總長を兼ねたる、兀㖶罕の者勒篾の子、也孫帖額、箭筒士の第二班の長にして總長の相談役となれる、札剌亦兒の禿格卽統格の子、不吉歹、箭筒士の第三班の長となれる豁兒忽荅黑、箭筒士の第四班の長となれる剌卜剌合の四人は、太宗の時もその職を保てること、實錄六四八頁に見え、也孫帖額は也孫脫額、不吉歹は不乞歹、剌卜剌合は剌巴勒合とあり。その也孫脫額は、憲宗元年に按只䚟等と共に誅せられたる葉孫脫なり。他の三人は、外に見當らず。

三。札剌亦兒の不合。

八千の侍衞の一千づゝの長八人の內、第二の一千の長にして第一班の宿老を兼ねたる木合里の弟不合は、功臣の第八十一なる不合古呵堅にして、木華黎の傳にはその名見えざれども、蒙韃備錄に抹歌と書き、太師國王沒黑肋の弟、帶孫郡王の兄として、「見在成吉思處爲護衞」と云へり。

四。阿勒赤歹那顏。

第三の一千の長にして第二班の宿老を兼ねたる亦魯該の親族阿勒赤歹は、太宗の時、晃豁兒塔孩と共に第一班の宿老となり、太宗の古余克を怒りたる時(實錄六三八頁)、諸王忙格官人晃豁兒台章吉と共に建議したることありき。この阿勒赤歹も太祖の姪なる諸王阿勒赤歹も、元史には按赤台又は按只帶などありて、阿勒の音を按にて表はせり。列傳卷三十七なる張榮の傳に、榮はもと山東の地に竊據して居たりしが、丙戌の年(太祖二十一年)に「遂擧其兵與地、納款於按赤台那衍」とあるは、この阿勒赤歹なり。又憲宗元年に葉孫脫等と共に誅せられたる按只䚟も、この阿勒赤歹にして、忙哥撒兒の傳に按赤台の亂を作さんとしたることを載せたり。後の額勒只吉歹の處に引くべし。

五。兀嚕兀惕の察乃。

第六の一千の侍衛の長なる兀嚕兀惕の主兒扯歹親族察乃の名は、朮赤台の傳にもなし。

六。翁吉喇惕の阿忽台。

第七の一千の侍衛の長なる翁吉喇惕の阿勒赤古咧堅の親族阿忽台は、特薛禪の傳なる按陳那顏の弟火忽にてもあらんか。火忽の事蹟は、何も無し。只甲戌の年（太祖九年）、太祖迭篾可兒（帖篾延客額兒、駱駝が原）に在せる時、按陳兄弟に農土（嫩禿黑、營盤の地）を分け賜ひて、火忽には「哈老溫迤東、塗河潢河之間、火兒赤納慶州之地、與亦乞列思爲隣、汝則居之」と諭しき。

七。札剌亦兒の阿兒孩合撒兒。

第八の一千の侍衛の長なる札剌亦兒の阿兒孩合撒兒は、太祖紀の阿里海なることは論なけれども、亦魯該もその人ならんと云ひたることは疑はし。阿兒孩合撒兒は、金の中都陷ちたる時（實錄四五二頁）、汪古兒、失吉忽禿忽と三人にて、中都の帑藏を調べに遣されき。

八。額勒只吉歹。

宿衛を犯して拏へられたる額勒只吉歹（實錄三八一頁六四四頁）は、姓も知れざる人なれども、多遜の史には亦勒赤喀歹那顏とありて、太祖西征の役に赫喇惕の叛民を殲滅したることを載せられ、太宗の時に至りては（實錄六四九頁）、衆の官人どもは、額勒只吉歹を長として、その命に從へと敕ありき。衆官の長は卽宰相にして、元史には、この人の宰相となれること見えざれども、黑韃事略には「其相四人。曰按只䚟（原注。黑韃人、有謀而能斷）。曰移剌楚材（原注。字晉卿、契丹人、或稱中書侍郎）。曰粘合重山（原注。女眞人或稱將軍）。共理漢事。曰鎭海（原注。回回人）。專理回回國事」とあり。按只䚟は、阿勒赤歹を云へるが如く聞ゆれども、阿勒赤歹は、番直の宿老に過ぎざる人にして、四相の首に列すべき筈なければ、この按只䚟は、按只吉䚟の略稱なるべし。額勒只吉歹を按只吉歹とも云へることは、列傳卷九なる按札兒の傳にも見え、又列傳卷十七なる徹里の傳に燕只吉台氏、列傳卷二十七なる別兒怯不花の傳に燕只吉䚟氏とありて、錢大昕の元史氏族表に「燕只吉台氏、亦作晏只吉䚟氏、蒙古世族也」とあり。これは姓なれども、その呼方は名と全く同じ。燕只吉䚟は額勒只吉歹、晏只吉䚟は阿勒只吉歹にして、額と阿とは、蒙古話にては善く通ふ音なれば額勒只吉歹を阿勒只吉歹とも云へることうつなし。移剌楚材以下三相の事は、太宗紀に「三年辛卯秋八月、幸雲中、始立中書省、改侍從官名、以耶律楚材爲中書令、粘合重山爲左丞相、鎭海爲右丞相」とありて、額勒只吉歹の名も無けれども、黑韃事略は、太宗三年に官命を定めたる前の事を記せるなれば、中書令左右丞相の名も無く、たゞ「其相四人」と云へるなり。この額勒只吉歹は、後に謀叛を以て誅せられたる人なれば、元史には傳をも立てず、その首相となれることまで本紀にも載せられざるなり。

木華黎の孫塔思の傳に、庚寅（太宗二年）九月、武仙に潞洲を取られたる時、「冬十月、帝親征、遣萬戶因只吉台、與塔思復取潞州、仙夜遁」とある因只吉台も、額勒只吉歹なり。「燕」又は「按」の代りに「因」と云へるは、多遜の亦勒赤喀歹に近し。又按札兒の傳には「帝率從弟按只吉歹、口溫不花大王、皇弟四太子、國王孛魯、征潞州鳳翔鈞州三峯山」とあり。この文は、甚混亂なり。太宗の從弟と云へば、諸王按只歹の如くなれども、太宗二年の冬潞州を取りたるは、按只吉歹卽額勒只吉歹と塔思とにして、諸王按只歹・口溫不花等は與らず。皇弟四太子は、拖雷なり。國王孛魯は、木華黎の子、塔思の父にして、二年前に巳に薨じたれ

ば、塔思をふと誤りたるなり。按只歹・口溫不花・塔思等の河を渡りて、拖雷と三峯山に會したるは、太宗四年の春にして、潞州鳳翔の戰の引續きに非ざれば、かく一筆に書き連ぬべきに非ず。又睿宗の傳に、太宗三年十二月禹山の戰の後、鄧州を捨てて北に進む時、「以三千騎命札剌等率之爲殿。明旦大霧迷道、爲金人所襲、殺傷相當。拖雷以札剌失律罷之、而以野里知給歹代焉。未幾敗金軍」。野里知給歹も額勒只吉歹なり。札剌は、太祖十四年哈眞と共に高麗の契丹賊を平げたる元帥札剌なり。黑韃事略「其相四人」の疏證に「甕至草地時、按只䚟已不爲矣。粘合重山、隨屈朮僞太子南侵。次年、屈朮死、按只䚟代之、粘合重山復爲之助」とあり。屈朮は、太宗の第三子闊出また曲出にして、太宗紀に「七年乙未春、遣皇子曲出及胡土虎伐宋。冬十月、曲出圍棗陽拔之、遂徇襄鄧、入郢、虜人民牛馬數萬而還。八年丙申春二月、命應州郭勝、鈞州孛朮魯九住、鄧州趙祥、從曲出、充先鋒伐宋。冬十月、皇子曲出薨」。粘合重山の傳に「太宗七年、從伐宋、詔軍前行中書省事、許以便宜。師入宋境、江淮州邑、望風款附。重山降其民三十餘萬、取定城・天長二邑、不誅一人」とあれども、額勒只吉歹の曲出に代り、重山のそれを助けたる事は、載せられず。

定宗紀に、二年丁未「八月、命野里知吉帶、率搠思蠻部兵征西。是月、詔蒙古人、戶每百以一名充拔都魯」とあり。搠思蠻は、搠兒蠻の誤にて、親征錄太祖昇遐の翌年なる戊子の年に見えたる搠力蠻に同じく、卽祕史の搠兒馬罕なり。搠兒馬罕卽出兒馬昆は、多遜に據るに、一二四〇年（太宗十二年）に歿して、その副帥なる別速惕の拜主それに代りしが、今額勒只吉歹に命じて、搠兒馬罕の征服したる諸部を統べしめたるなり。訶倭兒思曰く「一二四七年（定宗二年）、亦勒赤喀歹に命じて、師を率ゐて珀兒沙に往かしめき。その師を聚めんが爲に、皇族の諸王にその部兵の十人ごとに二人を出さしめ、亦勒赤喀歹にも珀兒沙にて同じ割合に兵を徵すことを命じけり。古兒只嗹姆の二王國抹速勒・的牙兒別克兒・阿剌玻の諸國は、亦勒赤喀歹に徵稅の全權を持ちて專轄せしめ、阿兒昆は珀兒沙の政治を、馬思速惕は突兒其思壇・河間地方のそれを故の如く執り、皆金獅符を賜はりき（含儊兒の亦勒罕一、五八）」。古兒只以下の諸國を專轄してその兵を徵すは、卽搠兒馬罕の部兵を率ゐるなり。諸王の兵十分の二を出すは、多過ぎたり。蒙古人百分の一を拔都魯卽戰士に充つるの誤ならん。たゞ元史は、その事を野里知吉帶の西征に關せざる如く書きたるは非なり。

訶倭兒思又曰く「一二四八年（定宗三年）、庫由克は、亦米勒河の地方に赴かんとして、必失巴里克の西七日路の處（元史橫相乙兒之地）にて遽に崩じ、皇后斡古勒該米失（元史斡兀立海迷失）は、喪を祕して、まづ巴禿と拖雷の寡婦秀兒庫克帖尼（祕史莎兒合黑塔尼）とに告げ、巴禿の同意を得て、君の定まるまで攝政となりき。巴禿は、庫由克に謁せんと阿剌克塔克山（祕史卷五の兀魯黑塔黑か）に至り、訃を聞きて、そこに留り、庫哩勒台を召集しければ、斡果台の子孫だちは抗議して、庫哩勒台は蒙古の舊土にて開くべしと云ひき。されども喀喇科噜木の太守提木兒諾顏（功臣の第六十一帖木兒）を遣して議に預らしめき（多遜二、二三四）。その庫哩勒台にて將軍亦勒赤奇歹（多遜の亦勒赤喀歹）は、斡果台の子孫に一塊の肉殘れる限りは他の皇族を選ばざることを會員の約束したりしことをその會員に想ひ起させたるに、拖雷の子忽必來答へて曰く「斡果台の志望は、既に違背せられたりき。皇族の誰にても、諸王の大會にて審判せらるゝまでは殺すことを禁ぜられたる成吉思汗の法に逆ひて、汝等は、阿勒塔侖（成吉思の愛女）を審問なしに殺さざりしか。また失喇門を相續人に名ざしたりし斡果台の遺言に逆ひて、汝等は、庫由克を合罕の位に陞せざりしか」。將軍曼古撒兒（元史の忙哥撒兒）は、首として議を發し、拖雷の長子曼古の支那西域にての武功を述べて、推戴すべきことを主張し、巴禿その議を贊し、曼古の辭するにも拘らず、議遂に定まり、巴禿は曼古に盞を捧げ、會衆は祝聲を揚げき。それにてこの大會は延期となり、明年更に成吉思汗の創業の地に皇族の諸王を悉

く聚めてこの選擧を確定せんことを議決しけり（含箴兒の亦勒罕一、六一）」。

憲宗推戴の事情は、元史譯文證補の定宗憲宗本紀補異に多遜に本づきて委しく叙べたり。憲宗紀には、額勒只吉歹と忽必來との議論は無くて、攝政皇后の使八剌と木哥（世系表睿宗の第九子末哥）との議論あり。「歲戊申、定宗崩、朝廷久未立君、中外恟恟、咸屬意於帝。而覬覦者衆、議未決。諸王拔都、木哥、阿里不哥（世系表睿宗の第七子）、唆亦哥禿（世系表睿宗の第十子歲都哥か）、塔察兒（世系表鐵木哥斡赤斤の孫）、大將兀良合台（速不台の子）、速𠋫帶（は知らず）、帖木迭兒（祕史太宗の侍衞第二班の宿老）也速不花（食貨志歲賜篇左手千戸九人の一）、咸會于阿剌脫忽剌兀之地、拔都首建議推戴。時定宗皇后海迷失所遣使者八剌在坐、曰「昔太宗命以皇孫失烈門爲嗣、諸王百官皆與聞之。今失烈門故在、而議欲他屬、將寘之何地耶」。木哥曰「太宗有命、誰敢違之。然前議立定宗、由皇后脫忽列乃與汝輩爲之。是則違太宗之命者、汝等也。今尙誰咎耶」。八剌語塞。兀良合台曰「蒙哥、聰明睿知、人咸知之。拔都之議良是」。拔都卽申令於衆、衆悉應之、議遂定」。阿剌脫忽剌兀の剌兀は、蓋阿兀剌の誤にして、阿剌脫忽阿兀剌は、卽多遜の阿剌克塔克山なり。脫忽列乃は、脫列忽乃の誤にして、卽后妃表の脫列哥那六皇后なり。忙哥撒兒の傳は、又憲宗紀とも異なり。「定宗崩、宗王八都罕、大會宗親、議立憲宗。畏兀八剌曰「失烈門、皇孫也、宜立。且先帝嘗言其可以君天下」。諸大臣皆莫敢言。忙哥撒兒獨曰「汝言誠是。然先皇后立定宗時、汝何不言耶。八都罕固亦遵先帝遺言也。有異議者、吾請斬之」。衆乃不敢異。八都罕乃奉憲宗立之。憲宗之幼也、太宗甚重之。一日行幸、天大風、入帳殿。命憲宗坐膝下、撫其首曰「是可以君天下也」。他日用牸按豹。皇孫失烈門尙幼、曰「以牸按豹、則犢將安所養」。太宗以爲有仁心、又曰「是可以君天下」。其後太宗崩、六皇后攝政、覔立定宗。故至是二人各擧以爲言云」。洪鈞曰く「案本紀、卽與忙哥撒兒傳異、西書又異。蓋會議時、人衆語多、各就所聞紀之、故不同如此。惟大致同耳」。

九。憲宗卽位の事情。

憲宗卽位の條は、異說もあり、明ならざる所もあるに由り、今額勒只吉歹の事を述ぶる序に、憲宗紀の文を引きて、その考證を試みん。かくて憲宗紀に「元年辛亥夏六月、西方諸王別兒哥・脫哈帖木兒、東方諸王也古・脫忽・亦孫哥・按只帶・塔察兒・別里古帶、西方諸大將班里赤等、東方諸大將也速不花等、復大會于闊帖兀阿闌之地、共推帝卽皇帝位於斡難河」。卽位の日は、多遜の史に一二五一年（西曆の七月一日とあり。別兒哥・脫哈帖木兒二人は、多遜に據るに、拙赤の子巴兒開脫略提木兒なり。也古・脫忽・亦孫哥三人は、祕史卷六に見えたる拙赤合撒兒の子也古・也孫格・禿忽、世系表搠只哈撒兒の子也苦移相哥脫忽なり。按只帶は、合赤溫の子阿勒赤歹なり。塔察兒は、世系表鐵木哥斡赤斤の孫にして只不干の子なり。別里古帶は、祕史の別勒古台、世系表の別里古台なり。洪鈞曰く「別里古帶、改本作伯勒格台、爲太祖弟。案、伯勒格台、不過少太祖數歲、特以庶母所出故列於末。太祖崩、至是已二十五年。是否尙存、殊不敢必。又別里古台孫滅里吉歹見史表、或卽別里古帶」。班里赤は、錢大昕の考異に「疑卽巴而朮阿而忒也」と云へれども、憲宗紀九年に札剌亦兒部人脫歡に對して、阿兒剌部人八里赤とあれば、畏兀惕の巴而朮には非ずして、阿嚕剌惕の人なり。孛斡兒出の親屬にやあらん。闊帖兀・阿闌は、卽闊迭兀・阿喇勒、太祖創業の地なり。斡難河と云へるは誤れり。闊迭兀・阿喇勒は、客魯漣河の中島なることは、實錄の注に屢云へるが如し。

洪鈞の憲宗本紀補異は、多遜の史を述べて、阿勒克塔克山の大會畢り、「皇后使者歸報。后與二子闊札・納古大不悅、遣使告巴禿「會議非地、宗王未集、議不能從」。巴禿謂「明年再會於東。太祖太宗大業、未可輕

授。君位已定、請屆意相從」。遂命弟巴兒開・脫喀提木兒將大軍、衞曼古而東、自駐於西、以備非常。第二次之會、秀兒庫克帖尼爲主、召集諸王大將。而太宗定宗後王、察合台後王亦速曼古皆不至。巴禿屢使往勸、仍不納。巴兒開等以久待爲憂、請命於巴禿。巴禿乃申令於衆「定立曼古。宗親中梗議者、有國典在」。旣而東方諸王拙赤・合撒兒・合赤溫・帖木古・兀主勤子孫咸集。亦遣使往勸失喇門・闊札・納古。三王允往、猶未至。而擇日已定、不及待、遂奉曼古卽位、時年四十有三。卽位之日、諸王列右、王妃公主列左、曼古七弟列前、武臣以曼古撒兒爲首、文臣以孛勒該爲首。禮成、大宴七日」とあり。音譯字は、洪鈞に依らず、原書の音に從ひて改めたり。以下皆然り。闊札・納古は、世系表定宗の長子忽察、次子腦忽にして、陳桱の通鑑續編に和者・腦忽歹とあり。亦速曼古は、世系表察合台の子也速蒙哥にして、憲宗紀下文に也速忙可とあり。東方諸王の集れるは、合撒兒の子也古・也孫格・禿忽、合赤溫の子阿勒赤歹、斡赤斤の孫塔察兒等なり。曼古の七弟は、世系表の世祖皇帝旭烈兀・阿里不哥・撥綽・末哥・歲都哥・雪別台なり。曼古撒兒・孛勒該の事は、憲宗紀に「以忙哥撒兒爲斷事官、以孛魯合掌宣發號令、朝覲貢獻、及內外聞奏諸事」とあり。忙哥撒兒は、本傳に據るに夙くより睿宗憲宗に事へて、憲宗の斷事官の長となり、藩邸の分民を治め居たりしが、こゝに至り帝國の斷事官となれり。孛魯合は、也先不花の父孛魯歡、卽喇失惕の孛勒該にして、前の七〇〇頁に云へり。

さて憲宗紀卽位の續に「失烈門及諸弟腦忽等、心不能平、有後言。帝遣諸王旭烈與忙可撒兒、帥兵覘之。諸王也速忙可・不里・火者等、後期不至。遣不憐吉䚟、率兵備之」。旭烈は、憲宗世祖の弟旭烈兀なり。不里卽不哩は、祕史に據れば、察合歹の長子と見ゆれば、也速蒙哥の兄なり。火者は、卽闊札、世系表の忽察なり。不憐吉䚟は、憲宗紀七年に元帥卜隣吉䚟とある人なり。列傳卷九十二姦臣鐵木迭兒の傳に、仁宗の時「制贈祖不憐吉帶太尉、謚忠武、追封歸德王」とあるは、卽その人にして、元史氏族志に、世祖の宰相忽魯不花の父「卜隣吉帶大將」とあるも、同じ人なり。これらの諸王は、後言あるのみならず、期に後れたるのみならず、忙哥撒兒の傳に據れば、亂を作さんとしたるなり。「憲宗旣立、察哈台之子及按赤台等謀作亂、列車輹、藏兵其中、以入。輹折、兵見。克薛傑見之、上變。忙哥撒兒卽發兵迎之。按赤台不虞事遽覺、倉卒不能戰、遂悉就擒。憲宗親簡其有罪者、付之鞫治。忙哥撒兒悉誅之」。察哈台之子は、卽不哩・也速忙哥なり。按赤台は、祕史の官人阿勒赤歹なり。後に忙哥撒兒の二子脫歡・脫兒赤に賜はれる憲宗の詔に「察哈台・阿哈之孫、太宗之裔、定宗闊出之子、及其民人、越有他志」と云へるを見れば、定宗の子忽察・腦忽、闊出の子失咧門などもその謀に與れる趣なり。憲宗紀は、次に和林また各地方の文武大官二十九人の補任を載せたる後に、「葉孫脫・按只䚟・暢吉・爪難・合荅・曲憐・阿里出及剛疙疸・阿散忽都魯等、務持兩端、坐誘諸王爲亂、竝伏誅。……冬、以宴只吉帶違命、遣合丹誅之、仍籍其家」とあり。葉孫脫以下八人の事は、旣に前に云へり。宴只吉帶は、卽額勒只吉歹なり。合丹は、功臣の第六十三なる合荅安か。然らずば、世系表太宗の第六子なる合丹大王なるべし。

この騷動の始末は、喇失惕の史に委し（多遜二、二六五―）。憲宗本紀補異「禮成、大宴七日」の續に、「正燕樂時、御者客克薛上變謂「以失騾出覓、道遇車乘甚衆。一車折輹、其御東縛之、誤以爲同伴、呼使助。則見車中藏兵甚多。訝而問之。其御曰「汝車同我車、何問爲」。益訝之。更詢他車、始知失喇門・闊札・納古三王、以朝會爲名、將乘飮宴不爲備作亂、故馳返以告」。曼古乃令撒古撒兒率兵往覘、止其衞士、令各從二十人入謁、具貢物凡九。始至時、猶令與宴。越日拘係曼古自鞫之。皆堅謂無逆謀。刑訊失喇門從官、乃吐其實、而自刎以死。復命曼古撒兒訊諸從官、咸辭伏。曼古以初卽位、不欲多行殺戮。衆以爲未可。正猶豫間、也勒瓦只立於門外。呼以入、問曰「汝老成人、更事已多、何猶無言」。對曰「臣、西域人也。請得言西域事。昔者

吉哩沙王阿歷散迭兒、已滅珀兒沙、欲入印度。而將領中多異議、令出不行。阿歷散迭兒、遣使詢於其傅阿哩思脫帖兒。使者致命。阿哩思脫帖兒無言、惟與使者游園、遇林木之蕺觀眺礙行路者、悉令從人芟伐拔掘、易以新株。使者悟、歸報。阿歷散迭兒、乃誅逐諸不從令將領、更易其位、遂平印度而回」。於是曼古意決、殺三王之黨、煽亂謀逆者、凡七十人。亦勒赤奇歹二子亦同謀。皆以石子塡塞其口而死。亦勒赤奇歹、已往西域。遣人追及於巴篤吉思之地獲之、以付巴禿、置諸死」とあり。額勒只吉歹の二子の內には、巴禿を罵りたりし哈兒合孫もあるべし。

又憲宗紀二年の條に「春正月、幸失灰之地。……皇太后（莎兒合黑塔尼）崩。夏駐蹕和林、分遷諸王於各所、合丹於別石八里地、蔑里於葉兒的石河、海都於海押立地、別兒哥於曲兒只地、脫脫於葉密立地、蒙哥都及太宗皇后乞里吉忽帖尼於擴端所居地之西。仍籍太宗諸后妃家貲分賜親王。定宗后及失烈門母、以厭禳事覺竝賜死。謫失烈門•也速孛里等於沒脫赤之地」。これらの諸王は、世系表に據るに、皆太宗の子孫にして、合丹は第六子なる合丹大王（喇失愓の喀丹斡古勒）、蔑里は第七子滅里大王、（篾里克）海都は第五子合失大王（喀失）の子海都大王（開都）、脫脫は第四子哈剌察兒王（喀喇札兒）の子脫脫大王（禿克塔）、蒙哥都は第二子闊端太子（庫壇）の子蒙哥都大王、擴端は卽第二子闊端太子、失烈門は第三子闊出太子（庫出）の子昔列門太子（失喇門）なり。別兒哥は、巴禿の弟、喇失愓の巴兒開にして、憲宗翼戴の功ある人なれば、こゝに入りたるは誤なり。曲兒只は、卽古兒只にして、巴禿の領地の南境にある地なれば、これは、遷されたるにあらずして、新に封ぜられたるならん。乞里吉忽帖尼は、后妃表に太宗の三皇后とあり。喇失愓は（多遜二、九九）、喀失まで五人は、正后禿喇奇納の子にして、喀丹•斡古勒と篾里克とは、妃妾の子なりと云ひ、后妃表には「業里訖納妃子、滅里之母」とあり。陳桱の通鑑續編に據れば、長子合西歹は二皇后孛灰の子にして、蚤く死し、定宗•闊端•屈出•合剌察兒四人は、六皇后の子、合丹•滅立二人は、七皇后の子なりと云へり。孛灰は、表の昂灰二皇后なり。孛は、安案などの誤ならん。七皇后は、表に無し。業里訖納妃子を云へるならん。定宗の后は、后妃表の斡兀立•海迷失、喇失愓の斡古勒•該米失なり。失烈門の母は、元史に名なし。喇失愓は喀塔庫失と云へり。也速孛里は、太宗の子孫に見えず、諸王の從官なるべし。その分遷の地は、大抵太宗の分地の內又はその近傍に在り。別石八里は卽必失巴里克、葉兒的石河は卽額兒的失河、海押立は卽喀牙里克、葉密立は卽額米勒なり。沒脫赤の地は、考なし。憲宗本紀補異に曰く「二年春、皇太后崩、葬睿宗墓旁。至喀喇闊噜木、究厭禳之獄。以定宗后失喇門母付曼古撒兒、盡法鞫治得實、裹以氈、投諸河。殺定宗后用事大臣（鎮海•喀荅克）。以察合台孫不哩付巴禿。不哩曾於酒後詈巴禿。至是巴禿殺之。以闊札•納古•失喇門三王、皆由其母煽惑、得免死。遷闊札於喀喇闊噜木西速里該之地、謫納古•失喇門爲兵弁。其後忽必來伐宋、請於曼古、使失喇門從軍效力。迨曼古自將南伐、仍投失喇門於水。分遷太宗後王、定其封地。太宗舊部軍、別擇親王將之、以防其擁衆爲亂。惟太宗子合丹•篾里克、太宗孫庫壇之子、翊戴無二心、未奪兵柄、仍得分太宗諸后妃家貲」。速里該の地は、考なし。含篾兒は薛鄰噶と譯したれども、薛鄰噶卽薛連格河は、喀喇闊噜木の北にして、西とは云ふべからず。洪鈞曰く「案本紀、二年分遷諸王、曰別石八里地、曰葉兒的石河、曰海押立、曰葉密立、皆在太宗分地及其附近、竝未遠徙、特爲之分定疆界耳。紀又云擴端所居地之西、西方何地無考、亦非甚荒遠。不叨其地、又泥於元史文義、一若盡投之遠方也者、未爲是也。本紀元年、遣合丹誅宴只吉帶、三年、以哈丹札魯花赤、八年九年、諸王莫哥都攻渠州禮義山、竊疑皆太宗後王。可就西書、以窺測元史」。失唎門の殺されたることは元史に見えざれども、槊直腯魯華の傳に、その子明安荅兒は、「癸丑（憲宗三年）、憲宗遣從昔列門太子南伐」とあるは、失唎門の世祖の軍に從へる時の事を云へるなり。

弍。實錄卷十に見えたる分。

一。合兒魯兀惕の阿兒思蘭罕。

合兒魯兀惕の阿兒思蘭罕（實錄三八九頁）は、降服の後、何事も見えざれとも、公主表脫烈公主位に「脫烈公主適阿爾思蘭子也先不花駙馬、八八公主適也先不花子忽納荅兒駙馬、某公主適忽納荅兒子剌海涯里那駙馬」とありて、阿兒思蘭の公主に尙してより曾孫まで四代、引續き元の駙馬となりしなり。

二。委兀惕の亦都兀惕。

委兀惕の亦都兀惕（實錄三九四頁）は、喇失惕の史に委古兒の亦的庫惕巴兒主克、元史に畏兀兒の亦都護巴而朮阿而忒的斤と云ひ、列傳卷五に子孫數世に渉れる委しき傳あり。但亦都護の軍功を叙べたる後、「旣卒、而次子玉古倫赤的斤嗣」と云ひ、その相續の間に何事も叙べざるが、喇失惕に據れば、玉古倫赤即斡肯只に兒二人ありて、そこに元史に漏れたる逸事あり。卜咧惕施乃迭兒曰く「喇失惕に據れば(別咧津一、一二八)、成吉思汗は、巴兒主克の勳功を賞して、その女阿勒禿姆必吉を妻せんことを約したりしが、成吉思の死したるが爲に婚期延びけり。この公主は、遂に婚禮を行ふ前に死したれば、斡果台汗は、委古兒の君に阿剌只必吉と云へる公主を與へき。されども巴兒主克死して、その子奇施馬因父に繼ぎて、委古兒の亦的庫惕となりたれば、その公主を奇施馬因に與へき。奇施馬因死したる後、その弟撒連的嗣ぎけり」。阿勒禿姆必吉は、實錄卷十の阿勒阿勒屯、巴而朮阿兒忒の傳の也立・安敦なり。公主表に也立・可敦公主とある可は、安の誤なり。卜咧惕施乃迭兒は、「元朝祕史に、この公主の名は、阿勒扯阿勒屯と讀まる」とて、喇失惕の喇剌只必吉に當てたり。然らば帕剌的兀思本には、上の阿勒の下に扯の字ありて、我等の本には脫ちたるならん。阿勒扯は、阿剌只に稍似たれども、阿勒屯は、喇失惕の阿勒禿姆、元史の安敦にして、三書共に太祖の女とすれば、同人なること論なし。阿剌只必吉は、誰の女なるか。公主表に見えず。洪鈞の地理志西北地附錄釋地に（多遜を譯して）曰く「巴兒主克先有子、名奇施馬因、嗣亦的庫惕位、旋卒。攝政皇后（禿喇奇納）命奇施馬因之弟撒連只嗣立。憲宗即位、撒連只來朝。而必失巴里克之地、流言忽起、謂撒連只將盡戮木速勒蠻徒。其僕告變。蒙古官賽甫額丁、監治必失巴里克、要撒連只返、詢無是謀。而其僕堅證之。事聞於朝。付曼古撒兒鞫治。刑訊撒連只、遂誣服。令其弟斡肯只殺之、代其位。木速勒蠻徒則大悅。撒連只崇佛法、民與異敎、故設謀害其主。有二臣同死、一臣流於遠、僕膺賞。其時憲宗與太宗子孫不協、故凡附太宗之人、在委古兒地者、斥逐殆盡」。

本傳に據るに、玉古倫赤的斤（卽斡肯只）の子馬木剌的斤、孫火赤哈兒的斤、皆亦都護の位を嗣ぎしが、火赤哈兒は、叛王海都都哇等に攻められ、遂に戰に死せり。その子紐林的斤は、武宗の時亦都護となり、仁宗の時高昌王に封ぜられき。紐林的斤薨じ、長子帖木兒補化、亦都護高昌王を襲ぎ、天曆二年中書左丞相となり、亦都護高昌王の位を弟籛吉に讓れり。火赤哈兒・紐林・帖木兒補化は、皆公主に尙しき。文宗紀至順三年「高昌王藏吉薨、其弟太平奴襲位。」藏吉は、卽傳の籛吉なり。考異に曰く「考虞集高昌王世勳碑、紐林的斤、止有二子、與本傳合、則太平奴似非紐林之子矣」。又順帝紀至正十三年「亦都護高昌王月魯帖木兒、薨于南陽軍中。命其子桑哥襲亦都護高昌王爵」。月魯帖木兒は、誰の子なるかを知らず。又氏族表には、帖木兒補化の子不荅失里「中書平章政事、嗣亦都護高昌王。薨、子和賞嗣。元亡、降於明、授高昌衞同知指揮使司事。

有子曰太平」とあり。又忠義傳三（元史一九五）に伯顏不花的斤と云へる忠烈の士あり、信州を援ひて、陳友諒の兵と戰ひ、國難に殉せり。その傳の首に「伯顏不花的斤、字蒼崖、畏吾兒氏、駙馬都尉中書丞相封高昌王雪雪的斤之孫、駙馬都尉江浙行省丞相封荊南王朶爾的斤之子也」とあり。亦都護の家にて中書丞相となれるは、帖木兒補化一人のみなれば、雪雪的斤は、帖木兒補化の別名にて、伯顏不花は帖木兒補化の孫なるに似たり。考異に曰く「按、諸王公主二表、及巴而朮阿而忒的斤傳、俱不載雪雪的斤朶兒的斤之名。葉盛水東日記、引高昌王世勛碑曰「帖木兒補化有二子、長不荅失里、嗣亦都護高昌王。次伯顏不花的斤、爲太常鮮于樞甥、官浙東宣慰使」。如碑所言、似朶兒的斤與帖木兒補化、卽是一人。今考元文類、載虞集高昌王世勛碑、不叙帖木兒補化之子。葉文莊所見、豈別一碑邪」。太常鮮于樞の甥は、傳に據れば、太常典簿鮮于樞の外孫なり。浙東宣慰使は、傳には衢州路の達魯花赤より浙東の都元帥に陞り、江東道の廉訪副使に擢てらるとあり。

三。斡亦喇惕の忽都合別乞。

斡亦喇惕の忽都合別乞（實錄三九八頁）は、降服の後、その長子脫咧勒赤は、拙赤の女豁雷罕を娶り、次子亦納勒赤は、太祖の女扯扯亦干を娶りき。公主表延安公主位の初に「火魯公主適哈荅駙馬、闊闊干公主適脫亦列赤駙馬」とある、火魯は豁雷罕の下略、闊闊干は扯扯亦干の訛、脫亦列赤は脫咧勒赤の訛と聞ゆれば、脫亦列赤は火魯の夫にして、哈荅は闊闊干の夫亦納勒赤なるを、互に誤れるに似たり。又哈荅駙馬は、功臣の第八十四なる合歹駙馬に似たれば、合歹は卽斡亦喇惕の亦納勒赤の別名かとも疑はる。この疑は、已に實錄四〇二頁の注に陳べたり。又公主表の續に「脫脫灰公主、世祖孫女、適禿滿荅兒駙馬、某公主適別里迷失駙馬　某公主適沙藍駙馬、延安公主適延安王也不干」。これらの駙馬は、皆忽都合別乞の子孫なるべけれども、その關係は明ならず延安王は、諸王表金印駝紐の中にあり。

四。朶兒別惕の朶兒伯多黑申。

朶兒別惕の朶兒伯多黑申（實錄四〇五頁五二〇頁）は、禿馬惕征伐と阿卜禿征伐と二たび見えたり。

貳。實錄卷十一に見えたる分。

一。古亦古捏克巴阿禿兒。

居庸關の戰に者別と共に先鋒に行きたる古亦古捏克巴阿禿兒（實錄四三二頁）は、列傳卷三十六なる郭寶玉の傳に附記せるその子德海の傳に、（太宗三年か）「德海導大將魁欲那・拔都、假道漢中、歷荊襄而東」。列傳卷二なる睿宗の傳に、太宗三年の冬、「破金兵十餘萬于武當山、趨均州、乘騎浮渡漢水、遣夔曲捏、率千騎馳白太宗。（四年正月）太宗方詣漢水、將分兵應之。會夔曲捏至、卽遣慰諭拖雷、亟合兵焉」とあり。魁欲那も夔曲捏も、古亦克捏克なり。方詣漢水は、方渡河の誤なり。親征錄に「壬辰春正月初六日、大兵畢渡、及獲漢船七百餘艘。太上皇（拖雷）遣將貴由、來報集軍兵等、已渡漢江」とあるは、卽夔曲捏馳白太宗の事なり。又親征錄に、その年の夏「上與太上皇北渡河、避暑於官山。速不歹拔都、忒木歹火兒赤、貴由拔都、塔察兒火兒赤」等、適遇金遣荊王守仁之子曹王、入質我軍、遂退、留速不台拔都、以兵三萬鎭守河南」とあり。列傳卷三十一に「月魯帖木兒、卜領勤多禮伯臺氏。曾祖貴裕事太祖、爲管領怯憐口怯薛官」とありて、事蹟は

何も載せざれども、貴裕は、即親征錄の貴由にして、祕史の古亦克提克なるべし。多禮伯臺は朶兒別惕にして、卜領勤はその分部の名なり。

二。主卜罕。

太祖、金・夏の二國を降して回りたる後、金帝に拘へられたる主卜罕(實錄四四六頁)を、元史太宗紀睿宗の傳は、搠不罕と書き、宋に殺されたりとし、太宗三年の事としたるは、いづれか正しきを知らざる上に、猶この二説のいづれにも合はざる他の一說ありて、列傳卷八十忠義一石珪の傳に「歲戊寅(太祖十三年)、太祖使葛葛不罕與宋議和。庚辰(十五年)宋果渝盟」と見えたり。拘へらるとも殺さるとも云はざれども、葛葛不罕の名は、主卜罕・搠不罕と稍似たれば、これも同事の異聞なるべし。

三。許兀愼の脫忽察兒。

西征の役に者別・速別額台と共に莎勒壇を追ひたる脫忽察兒(實錄四八一頁)は、太宗の時に阿喇淺と共に站を整ふることを命ぜられき(卷十二六五九頁)。この脫忽察兒、即喇失惕の脫噶察兒は、許兀愼の孛囉忽勒の從孫にして、元史には塔察兒と云ひ、列傳卷六なる博爾忽の傳に附記せり。金を滅し、宋を敗り、戰功甚多き人なり。

四。阿荅兒斤の晃孩、朶龍吉兒の晃塔合兒、斡帖格歹の搠兒馬罕。

三皇子の叱られ居たる時太祖をなだめたる三人の箭筒士、阿荅兒斤の晃孩豁兒赤、朶龍吉兒の晃塔合兒豁兒赤、斡帖格歹の搠兒馬罕豁兒赤(實錄五一五頁)三人の內、晃孩・晃塔合兒は外に見當らず。搠兒馬罕は、卷十二、五八九頁に綽兒馬罕とあり。多遜の史には察兒抹昆と云ひて西征の事蹟甚詳かなり。元史には、定宗紀二年に搠兒蠻(誤りて搠思蠻)の部兵、曷思麥里の傳に西域の大帥察罕と見え、親征錄には「太宗皇帝與太上皇、共議搠力蠻復征西域」と見えたるのみにして、事蹟は何も見えず。

五。忽嚕木石の牙剌哇赤馬思忽惕。

忽嚕木石の牙剌哇赤・馬思忽惕父子(實錄五三三頁)は、喇失惕の史に、父を馬呵木惕・也勒縛只と云ひ、子を馬思速惕閉と云へり。二人の太祖の時に任用せられたることは、元史に見えざれども、太宗元年八月即位の時には、親征錄に「西域賦調、命牙魯瓦赤主之」、本紀に「西域人以丁計出賦調、麻合沒的滑剌西迷主之」とあり。西迷は、蓋瓦赤の誤なり。十三年十月には、親征錄に「命牙老瓦赤・生管漢民」、本紀に「命牙老瓦赤、主管漢民公事」とあり。列傳卷四十なる劉敏の傳に「辛丑(太宗十三年)春、授行尙書省。詔曰「卿之所行、有司不得與聞」。俄而牙魯瓦赤自西域回、奏與敏同治漢民。帝允其請。牙魯瓦赤素剛尙氣、恥不得自專、遂俾其屬忙哥兒、誣敏以流言。敏出手詔示之、乃已。帝聞之、命漢察火兒赤中書左丞〔相〕粘合重山奉御李簡詰問、得實、罷牙魯瓦赤、仍令敏獨任」とあるはその時の事にして、牙剌哇赤の罷められたることは、本紀に漏れたり。又列傳卷四十五なる姚樞の傳に「辛丑、賜金符、爲燕京行臺郎中。時牙魯瓦赤行臺、惟事貨賂、以樞幕長分及之。樞一切拒絕、因棄官去」とあるを見れば、牙剌哇赤も、つまらぬ人なるが如し。喇失惕に據れば、馬思速惕閉は、太宗の末年に突兒其思擅河間地方の太守となり、軍にて荒されたる地方の繁榮を回復したりし

が、禿喇奇納皇后の攝政の時、その政治に信服せずして、巴禿罕の處に遁げ去りき。定宗位に卽き、呼び回して舊の職に就かしめけり。普剌諾喀兒闊尼に據れば、定宗卽位の大會に、馬思速惕は已に舊官（西域の牧長）を以て參列せり。憲宗紀元年六月卽位の條に「以牙剌瓦赤・不只兒・斡魯不・覩荅兒等充燕京等處行尙書省事、以訥懷・塔剌海・麻速忽等充別失八里等處行尙書省事」とありて、太宗の末年に罷められたる牙剌哇赤は再任用せられき。麻思忽は、卽馬思忽惕にして、喇失惕の馬思速惕なり。列傳卷四十六なる趙璧の傳に據れば、憲宗卽位の初に「一日斷事官牙老瓦赤、持其印、請于帝曰「此先朝賜臣印也。今陛下登極、將仍用此舊印。抑易以新者耶」。時璧侍旁質之曰「用汝與否、取自聖裁。汝乃敢以印爲請耶」。奪其印、置帝前。帝爲默然久之。既而曰「朕亦不能爲此也」。自是牙老瓦赤不復用」とあり。「不復用」と云へるは、この時直に罷められたるに非ず、明年も不只兒等と我儘を働き居たること世祖紀に見ゆれば、數年の後遂に信用を失ひたることを終言したるならん。世祖紀に「歲壬子（憲宗二年）、帝駐桓・撫間。憲宗令斷事官牙魯瓦赤與不只兒等、總天下財賦于燕、視事一日、殺二十八人。其一人盜馬者、杖而釋之矣。偶有獻環刀者、遂追還所杖者、手試刀斬之。帝責之曰「凡死罪、必詳讞而後行刑。今一日殺二十八人、必多非辜。既杖復斬、此何刑也」。不只兒錯愕不能對」。不只兒は、功臣の第三十八、列傳の不智兒なり。この淫刑につき不只兒のみ叱られたるが如くなれども、牙剌哇赤もその責を分たざるべからず。姚樞の傳に「世祖在潛邸、遣趙璧召樞至、大喜、待以客禮」とありて、姚燧（樞の從子）の牧菴文集に載せたる樞の神道碑には「上遣趙璧驛至彰德。璧恐樞避去、獨至輝、以過客見、審其爲樞、始致見徵意。樞恐使者誤徵、不敢應。璧曰「君非棄牙老瓦赤隱此者乎」。曰「然」。乃偕往彰德受命」と云へり。

四。實錄卷十二に見えたる分。

一。斡豁禿兒斡勒荅合兒。

綽兒馬罕の後援に蒙格禿と共に出征したる斡豁禿兒（實錄五八九頁）、太宗の乞塔惕征伐の時大斡兒朶思に留守したる斡勒荅・合兒豁兒赤（五九五頁）二人は、外に見當らず。

二。札剌亦兒台豁兒赤。

主兒扯惕莎郞合思の處に出征したる札剌亦兒台豁兒赤（實錄二八頁）は、撒兒台豁兒赤の誤寫又は誤譯ならんと（六三四頁に）云ひたれども、猶考ふれば札剌亦兒の木合里國王の長孫塔思にはあらずやとも思はる。木華黎の傳に「塔思、一名査剌溫。……癸巳（太宗五年）秋九月、從定宗于潛邸東征、擒金咸平宣撫完顏萬奴于遼東。萬奴自乙亥歲（太祖十年）、率衆保東海、至是平之」、石抹也先の傳に、也先の子査剌は「癸巳、從國王塔思、征金帥宣撫萬奴於遼東之南京（卽東京）、先登。衆軍乘之而進、遂克之。王解錦衣以賜」。也先の傳と重複せる石抹阿辛の傳に、阿辛の子査剌は「及從國王（塔思）軍征萬奴圍南京、城堅如立鐵。査剌命偏將、先警其東北、親奮長槊、大呼登西南角、摧其飛櫓、手斬陴卒數十人。大軍乘之、遂克南京。詰旦木華黎解錦衣賞之」。木華黎は、塔思の誤なり。石抹孛迭兒の傳に「辛卯（太宗三年）、從國王塔思、征河南、癸巳（五年）、又從討萬奴於遼東平之」。この萬奴征伐は、太宗紀五年に「二月、幸鐵列都之地、詔諸王議伐萬奴、遂命皇子貴由及諸王按赤帶、將左翼軍討之。九月、擒萬奴」とありて、塔思の名を擧げざれども、主帥は皇子諸王にして、軍の掛引は塔思の指圖に依れるなるべし。札剌亦兒台豁兒赤は、札剌亦兒氏の箭筒士と云ふ義にして、塔思は札剌亦兒氏なる故にしか呼べるを、竟に札剌亦兒台は名の如くなりしならん。傳に一名査剌

溫とあるも、札剌亦兒は札剌因と轉じ、札剌因は査剌溫と轉じたらんと思はる。但塔思は、萬奴を征したれども、高麗には向はざりしを、女直高麗に出征したりと云ふことはいかゞあらん。

三。蒙古人の名の附けかた。

因に云はん。蒙古人は、その姓卽部族の名を直ちに名とするもの往往あり。祕史なる朶兒別惕の朶兒別朶黑申を始として、元史列傳には阿兒剌氏（阿嚕剌惕）の博爾朮の玄孫阿魯圖、兀良合氏（兀喉罕）の速不台の子兀良合台（兀喉合台）、召烈台（札兀咧亦惕）の抄兀兒（札兀兒）、札剌兒氏（札剌亦兒）の塔出の父札剌台（札剌亦兒台の略）、怯烈台（客咧亦惕）の也先不花の子怯烈など、みなそれなり。怯烈氏の宵乃台は、錢大昕の考異の拾遺に怯烈台の稱ありと云へり。又元史氏族表には、珊竹氏（撒勒只兀惕）の吾也而の曾孫珊竹歹（撒勒只兀台）、至正の翰林學士承旨默而吉台氏（篾兒乞惕）の脫脫の曾祖默而吉台、延祐五年の狀元捏古䚟氏の忽都達兒の子捏古思などあり。蒙古人は、姓を名の上に附けて呼ばざる故に、姓を名としても重複せざるなり。然るに又己の姓に非ずして人の姓を名とする人も多ければ、その名を見てその姓を推定することは能はず。實錄卷三なる速勒都思の泰赤兀歹は、人の姓なる泰赤兀惕を取りて己の名とし、元史列傳なる汪古惕の阿剌兀思剔吉忽里の孫聶古䚟、斡囉納兒の怯怯里の孫捏古䚟は、皆捏古思の姓を取りて名とし、札剌亦兒の木華黎の玄孫乃蠻台は乃蠻の姓を、木華黎の弟帶孫の裔なる塔塔兒台は塔塔兒の姓を、許兀愼の博爾忽の從曾孫宋都䚟は速勒都思の姓を、客咧亦惕の宵乃台の子兀魯台（兀嚕兀台）は兀嚕兀惕の姓を、塔兒の忙兀台は忙兀惕の姓を、巴嚕剌思の忽林失の父甕吉剌帶は翁吉喇惕の姓を取りて名とし、氏族表には、塔塔兒の忙兀台の兄札剌兒台・雍吉剌台・亦乞里台三人ありて、札剌亦兒・翁吉喇惕・亦乞咧思の三姓を、篾兒乞惕の伯顏の兄雪你台は雪你惕の姓を、弟伯要台（巴牙兀台）は巴牙兀惕の姓を取りて名とせり。又翁吉喇惕の特薛禪の曾孫蠻子台は蠻子（南人）に非ず、兀嚕兀惕の朮赤台（主兒扯歹）は主兒扯惕（女直）人に非ず、客咧亦惕の哈散納の玄孫哈剌章、篾兒乞惕の馬札兒台の孫哈剌章は、皆合喇章（烏蠻）人に非ず、康里の斡羅思は斡囉思（嚕西亞）人に非ず、乞卜察黑の乞台は乞台（支那）人に非ず、篾兒乞惕の馬札兒台は馬札兒（洪噶哩亞）人に非ず、后妃表に見えたる亦乞咧思の孛禿の裔なる瑣郞哈は、瑣郞合（高麗）人に非ず。蒙古の俗は、人の姓にても國の名にても構はず、又は官職の名にても佛の名にても遠慮なく、勝手に取りて名に附けたるなり。

四。憲宗の高麗征伐。

又憲宗四年に高麗を征伐したる札剌兒の札剌台は、正しく云へば札剌亦兒の札剌亦兒台にして、祕史の東征の大將と名同じければ、彼の札剌亦兒台は、この人に非ずやとも思はる。元史列傳卷二十塔出の傳に「父札剌台、歷事太祖憲宗。歲甲寅（憲宗四年）、奉旨伐高麗、命桑吉忽剌出諸王、竝聽節制。其年、破高麗連城、舉國遁入海島。己未（憲宗九年）正月、高麗計窮、遂內附、札剌台之功居多」。札剌台は、高麗史に車羅大とあり。桑吉は、高麗史に散吉大王とあり。世系表に見えず。搠只哈撒兒王の第二子移相哥大王か。忽剌出は、世系表哈赤溫大王の曾孫、濟南王按只吉歹の孫、哈丹大王の子、隴王忽剌出なり。高麗史に見えず、憲宗紀「二年壬子十月、命諸王也古征高麗」。也古は、搠只哈撒兒王の子淄川王也苦なり。高麗史に也窟大王とあり「三年癸丑春、諸王也古以怨襲諸王塔剌兒營。罷也古征高麗兵、以札剌兒帶爲征東元帥」。塔剌兒は、世系表に見えず。鐵木哥斡赤斤の孫塔察兒國王の察を剌と誤れるには非ずや。札剌兒帶は、卽傳の札剌台なり。そ

の年「十二月、命宗王耶虎、與洪福源同領軍、征高麗、攻抜禾山東州春州三角山楊根天龍等城」。耶虎は、即也古なり。既に罷めて、復命ぜられしか。然らずば札剌兒帯を以て也古に代ふるは、明年の事なるを、誤りてこの年に書きたるならん。洪福源の傳に「乙巳(定宗即位の前年)、定宗命阿母罕將兵與福源共抜威州平虜城。辛亥、憲宗即位、改授虎符、仍爲前後歸附高麗軍民長官。癸丑、從諸王耶虎、攻禾山東州春州三角山楊根天龍等城抜之」。阿母罕は、高麗史に阿母侃と書きて、蒙古元帥とも蒙古東京路官人ともあり。乙巳は、丁未(定宗二年)の誤なり。定宗紀にはこの事を載せざれども、多遜の史に「一二四七年に兵を出して高麗を征しき」とあり。又憲宗紀に「四年甲寅夏、遣札剌亦兒部人火兒赤征高麗」とあるは、即札剌亦兒台豁兒赤にして、火兒赤は、人の名に非ず、官の名なり。人の名は、札剌亦兒台にして、即前年の札剌兒帯、明年の劄剌䚟なり。前後に同じ人あるにも心附かずして、異なる人の如く書きたる史臣の譯し方は、なんととんまなる事ならずや。洪福源の傳に「甲寅、與札剌台合兵、攻光州安城忠州玄風珍原甲向玉果等城、又抜之」とあるは、甲寅の後二三年の事までを一筆に書き縮めたるにて、憲宗紀には、五年乙卯の處に「是歳、改命劄剌䚟與洪福源同征高麗。後此連三歳、攻抜其光州安城中州玄風珍原甲向玉果等城」とあり。「改めて命ず」とは面白し。前年の火兒赤と異なりと思へるが故に、この二字を加へたるなり。又紀六年丙辰の處に「是歳、高麗國王細瑳甫來覲」とあるは、何を誤りたるにや考へ得ず。又紀に「八年戊午三月、命洪茶丘、率師從劄剌䚟、同征高麗」。洪福源の傳「戊午、福源遣其子茶丘、從札剌台軍。會高麗族子王綧入質、陰欲併統本國歸順人民、譖福源于帝、遂見殺」。王綧は、太宗十三年に質子となり、それより蒙古に留まり居たるにて、この年往きたるに非ず。福源の殺されたるは、高麗史福源の傳に據れば、綧の客李稠、福源の呪咀したることを覘ひ知りて、憲宗に訴へたるを福源は、綧の訴へしめたることと思ひ、綧を罵りたれば、綧の妻は、蒙古の宗女にして、その語を聞きて大に怒り奏聞しけり。そこに憲宗は使を遣りて福源を蹴殺さしめき。高麗の太子倎の憲宗九年己未四月に蒙古に入りたることは、憲宗紀に漏れたれども、世祖紀中統元年三月即位の條に「陝西宣撫使廉希憲言「高麗國王、嘗遣其世子倎入覲。會憲宗將兵攻宋、倎留三年不遣。今聞其父已死。若立倎遣歸國、彼必懷德於我。是不煩兵而得一國也」。帝是其言、改館倎、以兵衞送之、仍赦其境內。四月己亥、詔諭高麗國王王倎、仍歸所俘民及其逃戶、禁邊將勿擅掠」とあり。高麗傳には、太宗の末年王綧の質子となれることを叙べたる後に、「當定宗憲宗之世、歲貢不入。故自定宗二年至憲宗八年、凡四命將征之、凡拔其城十有四。憲宗末、㬚(高宗)遣其世子倎入朝。世祖中統元年三月、㬚卒。命倎歸國、爲高麗國王、以兵衞送之、仍赦其境內」と云ひて、その赦の制書と四月の諭旨とを載せたり。

四度の征伐の第一は、定宗二年丁未、高麗の高宗三十四年、阿母罕即阿母侃の東征にして、高麗史に「七月、蒙古元帥阿母侃、領兵來屯鹽州。八月、遣起居舍人金守精犒阿母侃。去年冬、蒙古四百人、入北塞諸城、至于遂安縣、托言捕獺、凡山川隱僻、無不覘知。國家以和好、殊不爲意。至是百姓避匿者、竝被驅掠、鮮有脫者」、とあり。太宗の末年以來、高麗の使每年蒙古に朝し、或は年に二たび往き、たゞ定宗元年のみは遣使の事高麗史に見えず、この年以後は又年年絶えざるに、高麗傳に「歲貢不入」と云へるは、疑ふべし。朝貢の使手ぶらにて往きたるにもあるまじ。

第二の征伐は、憲宗三年癸丑、高宗四十年、諸王也古即也窟大王の東征なり。憲宗三度の征伐は、高麗史に甚委しければ、今世家列傳に據りてその概要を摘記せん。高麗の高宗は、太宗四年七月江華島に竄れてより、十年十二月使を遣し表を上りて哀を請ひ、十三年四月族子王綧を人質に送りし後も、高宗の君臣は島より出でざりき。蒙古人は、水戰に甚拙くして、島籠りせるものに向ひてはいかにともすること能はざれば、

「眞意歸順するならば、島籠りを罷めて、舊都に回れ」と幾たびも幾たびも諭し威し責むれども、高麗人は、百方辯疏して命に從はず、益江華の要害を固めたりき。「高宗三十七年庚戌（憲宗卽位の前年）六月、蒙古使多可・無老孫等來、審出陸之狀。到昇天府館、責王出迎江外。王不出、遣新安公佺、迎入江都、宴於壽昌宮。七月、遣使如蒙古。八月、築江都中城。十二月、蒙古使洪高伊等來。王迎于梯浦宮。三十八年辛亥（憲宗元年）正月、宴蒙使于梯浦宮。導入江都。二月、遣同知樞密院事崔璘、上將軍金寶鼎如蒙古。七月、復遣使如蒙古。十月、蒙古使將困、洪高伊等來。王出迎于梯浦。皇帝新卽位、詔國王親朝、及令還舊京。三十九年壬子（憲宗二年）正月、遣樞密院副使李峴、侍郎李之葳如蒙古。五月、始營昇天府城廓。蒙古東京路官人阿母侃、通事洪福原等、詣帝所言「高麗築重城、無出陸歸款意。請發兵伐之」。帝許之。李峴至、帝問「爾國出陸否」。峴承崔沆之旨、答以今年六月乃出。帝乃留峴、遣多可・阿土等來審出陸之狀。密勅曰「汝到彼國、王出迎于陸、雖百姓未出、猶可也。不然、則待汝來、當發兵致討」。七月、多可等至。峴書狀官張鎰、隨多可來、密知之、具白王。王以問崔沆。對曰「大駕不宜輕出江外」。王從之、遣新安公佺出迎之、請蒙使入梯浦館、王乃出見。宴未罷、多可等以王不從帝命、怒而還」。崔沆は、高麗の權臣崔忠獻の孫、崔瑀の子にして、父祖にも劣らざる專橫の臣なり。「四十年癸丑（憲宗三年）四月、原州民被擄蒙古者、還言「帝命皇弟松柱、帥兵一萬、道東眞國、入東界、阿母侃・洪福源、領麾下兵、趣北界、皆屯大伊州」」。憲宗の弟に松柱と似たる名なし。塔出の傳の桑吉、唐兀の察罕の傳（從孫亦力撒合の條）なる算吉、搠只哈撒兒の子移相哥にして、祕史に也松格とある人か。この時蒲鮮萬奴の國は已に亡びたれども、萬奴の舊部なる女眞の民を高麗にては東眞と呼び居たるなり。「五月、蒙古也窟大王遣阿豆等來」。也窟は、憲宗紀の也古また耶虎、阿豆は、前年の阿土なるべし。「七月、北界兵馬使、報蒙兵渡鴨綠江。卽移牒諸道、督民入保山城海島。蒙兵涉大同江下馬灘、指古和州。

永寧公綧在蒙古軍、貽書崔沆曰「去年秋、皇帝怒大駕不渡江迎使、發兵問罪。吾無計沮之云云。今國之安危、在此一擧。若上不出迎、須令太子若安慶公出迎、云云」。李峴降蒙古、導也窟而來、常隨蒙軍、諭降諸城。亦貽書曰「吾二年見留、觀其行事、殊異前聞、實不嗜殺人。去今年賜詔條件、固非難事。何不出迎。云云」。宰樞會議、皆曰「出迎、便」。崔沆不聽。八月、也窟遣人傳詔於王、責以六事。蒙古兵陷西海道椋山城」。元史に禾山とあるは、椋山の誤なり。「王遣崔東植、致書于也窟屯所、請哀。時也窟在土山、使人謂東植曰「帝慮國王稱老病不朝、欲驗眞否。王之來否、限六日更來報」。東植答曰「兵間、主上豈能速來」。蒙兵來屯高和二州之境、候騎至廣州、焚廬舍。蒙兵陷東州山城。九月、遣高悅致書也窟、請哀曰「惟大王矜恤班師、俾我東民安堵、則當明年躬率臣僚、出迎帝命」。蒙兵陷春州城。十月、圍登州、降楊根城天龍山城、陷襄州。王命文武四品以上、議却兵之策。僉曰「莫如太子出降」。王怒、詰之曰「議從誰出」。宦者閔陽宣進曰「崔侍中亦可其議」。王怒稍霽。十一月、遣永安伯僖、僕射金寶鼎、致書于也窟・阿母侃・于越・王萬戸・洪福源等、遺土物」。王萬戸は、元史王珣の傳なる珣の子榮祖なり。傳に曰く「己丑（太宗元年）授北京等路征行萬戸、換金虎符、（三年辛卯）伐高麗、圍其王京。高麗王力屈、遣其兄淮安公奉表納貢。（五年癸巳）進討萬奴擒之。云云。（七年乙未）再從征高麗、破十餘城。（十三年辛丑）高麗遣子綧入質。帝賜錦衣旌其功。（憲宗三年癸丑）又從諸王也忽、略地三韓、降天龍諸堡、皆禁暴掠、民悅服之。破五里山城、請於主將全其民」と云へり。五里山城の戰は、高麗史に見えず。「也窟在忠州得病、留阿母侃洪福源圍守、率精騎一千北還。永安伯僖等、追至舊京保定門外、致國贐禮物、且乞退兵。也窟責云「國王出江外、迎吾使、則兵可退也」。遂遣蒙古大等十人來。王渡江、迎于昇天新闕。蒙古大謂王曰「自大軍入境以來、一日死亡者、幾千萬人。王何惜一身、不顧萬民之命乎。王若早出迎、安有無辜之民、肝腦塗地者乎。自今以往、萬世和好、豈不樂哉」。遂酬飲而去。王還江都。

喬桐別抄伏兵平州城外、夜入虜營、擊殺甚衆。校尉張子邦持短兵、手殺屯長二十餘人。十二月、蒙兵解忠州圍。宰樞請遣安慶公淐乞班師、王不允。參知政事崔璘切諫。王不得已而頷之、遣淐如蒙古、使璘從行。凡進奉及饋遺金銀布帛、不可勝計、府庫皆竭、科斂百官銀布、以充其費。四十一年甲寅（憲宗四年）正月、淐至蒙古屯所、設宴張樂饗士。阿母侃還師。京城解嚴。八月、淐還自蒙古。初至江都、遣人奏曰「臣久染腥膻之臭。經宿乃進」。王曰「自爾去後、祈天禱佛、曷日相見。今幸好還、何宿於外。悉焚爾所著衣裳、更衣卽來」。至夜淐入謁。王及左右皆泣」」。

第三の征伐は、憲宗四年甲寅、卽也窟の軍の引揚げたる年、札剌兒帶卽車羅大の東征なり。高麗史に、高宗四十一年甲寅七月（安慶公淐の還る前）に「安慶府典籤還自蒙古、言帝使車羅大主東國」とあるは、憲宗紀の「以札剌兒帶爲征東元帥」を言へるなり。かくてその月「王聞蒙古使多可等來、移御昇天新闕。蒙使諭曰「國王雖已出陸、侍中崔沆尙書某某等不出、是爲眞降耶」。仍責誅降城官吏。王徵趙邦彥・鄭臣旦、乘傳入京、見於多可、以示不誅」」。二人は、皆天龍城の降將にして、海島に流されたりしものなり。「多可還、附表請罷兵。王還江都。蒙古候騎至西海道。八月、蒙古軍入西北鄙。候騎至廣州。王命大將軍李長、詣蒙兵屯所普賢院、贈車羅大等金銀酒器皮幣。車羅大曰「君臣百姓出陸、則盡剃其髮。否則以國王還。如一不從、兵無回期」。九月、車羅大攻忠州山城、十月、攻尙州山城。遣崔璘如車羅大屯所、請罷兵。車羅大言「崔沆奉王出陸、則兵可罷」。是歲、蒙兵所虜男女、二十萬餘人、殺戮者不可勝計、所經州郡、皆爲煨燼。自有蒙兵之亂、未有甚於此時也。四十二年乙卯（憲宗五年）正月、遣平章事崔璘如蒙古、獻方物、仍乞罷兵。車羅大屯于舊京保定門外、二月、遣阿豆等來。王宴于梯浦館。京城解嚴。三月、諸道郡縣、入保山城海島者、悉令出陸。四月、蒙兵屯義靜州之境、自兄弟山至大府城、彌滿山野。六月、遣金守剛如蒙古、進方物。八月、蒙兵到昇天府、京城戒嚴。九月、崔璘與蒙古使來、奏曰「車羅大永寧公領大兵到西京、候騎已至金郊」。十月、蒙兵踰大院嶺。四十三年丙辰（憲宗六年）三月、遣愼執平等於車羅大屯所。蒙兵到窄梁外。崔沆使都房分守要害。四月、愼執平還、言「車羅大永寧公云「若國王出迎使者、王太子親朝帝所、兵可罷還」」。時車羅大永寧公屯潭陽、洪福源屯海陽。宰樞會議、計無所出。王曰「儻得退兵、何惜一子出迎」。復遣執平、寄車羅大書、曰「大兵回來、惟命是從」。蒙兵入忠州、屠州城。五月、執平還、言「車羅大怒曰「若欲和親、爾國何多殺我兵。死者已矣。擒者可還」」。仍令三十人伴行。六月、車羅大屯海陽無等山、遣兵一千南掠。八月、車羅大永寧公洪福源等、到甲串江外、大張旗幟、牧馬于田、登通津山、望江都、退屯守安縣。金守剛從帝入和林、乞罷兵。帝以不出陸爲辭。守剛奏曰「譬如獵人逐獸入於窟穴、持弓矢當其前。困獸何從而出」。帝嘉之曰「汝誠使乎」。遂遣徐趾來、命班師。九月、守剛等至。車羅大等收軍北還。十月、京城解嚴。自乙卯八月至今、凡十五月而罷兵」。

第四の征伐は、憲宗七年丁巳、高宗四十四年、車羅大等の再征なり。高麗史に曰く「四十四年正月、宰樞議以蒙古連歲加兵、竭力事之無益、停春例進奉。閏四月、中書令崔沆死、子竩承家。五月、遣金守剛如蒙古。蒙古兵入泰州、殺副使崔濟。六月、蒙古候兵入開京。遣李凝犒之。蒙兵入南京。又遣李凝請退兵。甫波大云「去留在車羅大處分」。蒙兵至稷山。遣金軾詣屯所、請客使三人來。軾伴客使、如車羅大屯所。車羅大曰「王若親來、我卽回兵。又令王子入朝、永無後患」。七月、宰樞等請遣王子講和於蒙古、不聽。崔竩金寶鼎等力請、許之。宰樞更奏「先遣宗親觀變、然後可遣也」。乃遣永安公僖、贈車羅大銀瓶一百酒果等物。車羅大曰「太子到日、當退屯鳳州」。八月、宰樞奏請遣太子、以活民命。王猶豫未決。宰樞又遣金軾、告車羅大曰「待大軍回歸、太子親朝帝所」。車羅大許之。復遣軾齎酒果銀幣獺皮等、餞車羅大、以覘其意。時內外蕭然、計無所出、但祈禱佛宇神祠而已。帝方自將伐宋。金守剛見帝於行營、懇乞回軍。帝許之、仍發使、九月、與守剛偕來。

十二月、遣安慶公淐左僕射崔永如蒙古。四十五年戊午（憲宗八年）二月、蒙兵城義州。三月、柳璥等殺崔竩、復政于王。四月、王聞車羅大遣使來覘出陸之狀、出百官于昇天府、移市肆、修宮闕。五月、王涉海、御昇天府闕、引見車羅大使。六月蒙古余愁達・甫波大等、各率一千騎、來屯嘉郭二州。車羅大遣波乎只等來。王幸梯浦館、引見波乎只。傳車羅大之言、曰「皇帝勅云「高麗國如實出降、雖雞犬一無所殺。否則攻破水內」。今國王及太子出降西京、則便可回兵」。王曰「予既老病、不可遠行。乃遣永安公僖、知中樞院事金寶鼎、如車羅大屯所。蒙兵候騎到鹽白等州。余愁達屯兵平州寶山驛。余愁達語金寶鼎曰「皇帝以高麗之事、屬我與車羅大。汝知之乎。吾以爾國降否決去留耳。國王雖不出迎、若遣太子迎降軍前、卽日回軍。否則縱兵入南界」。寶鼎對曰「太子當來見耳」。寶鼎與余愁達所遣客使來。王幸梯浦館引見。七月、復遣寶鼎如余愁達屯所、請以數騎來見太子於白馬山。余愁達曰「我往見太子乎。太子來見我乎」。寶鼎曰「非敢煩大官人見枉、只畏大兵耳」。余愁達曰「太子如欲見我、期猫串江邊」。宰樞以余愁達去昇天府漸遠、而召見太子、恐有不測之變、遣譯語康禧齎酒果往慰、仍覘事變。又遣李祿綏等見余愁達、曰「太子有疾、待疾愈往見」。余愁達曰「已知汝國之詐」。乃縱兵侵掠。又遣使來、曰「國王縱不出迎、太子有來見之約、吾欲回兵。然使者往復數四、而太子不至、是侮我也。今欲知一決、又遣使介。惟國王生死之」。王亦不出迎、遣人辭謝」。余愁達の音、也速迭兒に稍似たり。車羅大は、果して祕史の札剌亦兒台豁兒赤ならば、余愁達は、札剌亦兒台の後援に出征したる也速迭兒豁兒赤ならん。「皇帝以高麗之事、屬我與車羅大」と云へるを見ても、たゞの從征の偏裨に非ざるを知るべし。

「八月、永安公僖還自車羅大屯所。車羅大以兵來屯舊京。遊騎散入昇天府交河峯城守安童城、掠人民、牧羊馬車羅大遣蒙古大等來、曰「太子出、則兵可退矣」。王曰「太子有病、豈能出哉」。蒙兵攻西海道嘉殊窟、陽波穴、皆降之。九月、蒙兵自牢梁來屯甲串江外、籠絡山野。十月、遣金光宰、饗車羅大、請退兵。十二月、蒙古散吉大王普只官人等、領兵來屯古和州地。龍津縣人趙暉、定州人卓青等、以和州迤北附蒙古、蒙古置雙城總管府于和州、以暉爲總管、青爲千戶。遣朴希實・趙文柱・朴天植如蒙古、請達魯花赤曰「本國所以未盡事大之誠、徒以權臣擅政、不樂內屬故爾。今崔竩已死、卽欲出水就陸、以聽上國之命。而天兵厭境、譬之穴鼠、爲猫所守、不敢出耳」。四十六年己未（憲宗九年）正月、遣李凝如西京王萬戶沙居只屯所。王萬戶謂凝曰「汝國王不愛百姓乎。何聽尹椿松山之言、不出降乎。降則秋毫不犯」。時王萬戶率軍十領、修築西京古城、又造戰艦開屯田、爲久留計」。尹椿松山は、憲宗六年、蒙古の軍より逃げて高麗に降れる人なり。王萬戶の屯田の事は、王珣の傳に、「榮祖「遂下甕山城・竹林寨・苦苦數島。帝嘉其功、賜以金幣、官其子興千戶。仍賞其部曲、移鎭高麗平壤。帝遣使諭之曰「彼小國負險自守、釜中之魚、非久自死。緩急可否、卿當熟思」。榮祖乃募民屯戍、闢地千里、悉得諸島嶼城壘。高麗遣其世子倎出降、遂以倎入朝」とあり。「以蒙兵大至、令三品以上、各陳降守之策。衆論紛紜。崔滋金寶鼎曰「江都地廣人稀、難以固守。出降便」。朴希實・趙文柱、先至車羅大屯所、言我國將復舊都、遣太子朝見。車羅大等喜曰「若太子來、則須及四月初吉」。三月、朴天植偕車羅大使者溫陽加大還。溫陽加大問太子入朝之期。王以五月對。溫陽加大怒曰「我兵進退、在太子行李遲速。若待五月、何其晚也」。王不得已、約以四月。溫陽加大又云「欲見太子面約」。太子出宴客使于重房」。溫陽加大は、兀哏合台の異譯なり。溫は兀兒に通じ、兀兒陽は兀哏なり。されどもこの兀哏合台は、何姓の人なるか知らず。速不台の子なる兀良合の兀良合台は、この頃交趾より宋の境に入りて働き居たれば、こゝの兀哏合台とは異なり。「令州縣守令、率避亂民、出陸耕種。四月甲午、遣太子倎奉表如蒙古、李世材・金寶鼎等四十人從之、斂百官銀布、以充其費。國贐、馱馬三百餘匹、以馬不足、抑買路人馬。五月、車羅大卒。六月、蒙古元帥余愁達・松吉大王、遣周者・陶高等來、毀江都城郭」。松吉は、前に見えたる松柱・散吉の異譯にして、祕史の也松

格なるべし「壬寅、高宗薨。以太子未還、太孫諶權監國事。八月、朴希實・趙文柱、偕蒙使戸羅問等來。太孫迎詔于重房。九月、也速達使者加大・只大等來、巡審水内及陸居之狀。十一月、也速達使者於散等、偕李世材來、審出陸之狀。於是發軍三十領、創宮闕於舊京」。也速達は、卽余愁達の異譯にして、祕史の也速迭兒に最近し。也速迭兒は、實に也速荅兒とも稱ふる名にして、高麗にては達をダルと讀めば、この也速達は、蒙古の音を正しく寫したるなり。祕史の札剌亦兒台と也速迭兒とは、果して高麗史の車羅大・也速達ならば、この二人の高麗征伐は、祕史の成りたるより遙に後の事なれば、彼の二句は、後人の攙入と見ざるべからず。綽兒馬罕の巴黑塔惕征伐、速別額台の諸部征伐の事は、皆實錄卷十一にありて、卷十二にはまづ後援の出征を記し、次にその成功を記したるに、女直高麗征伐の事は、前に何とも云はずして、いきなり「先に出征したる云云」とあるは、不都合なる書方なりと思ひしが、攙入の文と見れば、怪むに足らず。

太子倎の國に回り位を嗣ぎたる始末は、元宗世家に詳かなり。「初憲宗皇帝南征、駐蹕釣魚山。王自燕京赴行在、過京兆、至六盤山。（七月）憲宗皇帝晏駕、而阿里孛哥、阻兵朔野、諸侯虞疑、罔知所從。時皇弟忽必烈、觀兵江南。王遂南轅、間關至梁楚之郊。皇弟適在襄陽、（閏十一月）班師北上。王迎謁道左。皇弟驚喜曰「高麗、萬里之國。自唐太宗、親征而不能服。今其世子自來歸我、此天意也」。大加褒奬、與俱（至燕、中統元年）至開平府。本國以高宗薨告。乃命達魯花赤東里大等、護其行歸國」。忽必烈の開平に至れるは、世祖紀に三月戊辰朔とあり、太子倎は二月訃を聞きて、その月に送り還されたれば、開平には至らずして、燕京より東に還れるならん。又この前の文に「二月壬戌、王在京兆府聞訃」とある京兆府は、燕京の誤ならん。「江淮宣撫使趙良弼言於皇弟曰「高麗雖名小國、依阻山海、國家用兵、二十餘年、尙未臣附。前歲太子倎來朝適鑾輿西征、留滯者二年矣。供張疏薄、無以懷輯其心。一旦得歸、將不復來。宜厚其館穀、待以藩王之禮。今聞其父已死。誠能立倎爲王、遣送還國、必感恩戴德、願修臣職。是不勞一卒、而得一國也」。陝西宣撫使廉希憲亦言之。皇弟然之、卽日改館、顧遇有加」。かくて太子倎は、二月の末に西京に至り、八九日留まり、三月十七日「甲申、與東里大入開京、行親營築」。二十日丁亥「王與東里大同舟渡海、自承平門入闕」。二十四日辛卯「忽必烈大王卽皇帝位」。その時發せられたる赦詔は、四月九日丙午に高麗に達し、二十一日戊午「王卽位于康安殿、灌頂受菩薩戒」。二日己亥の詔諭は、二十四日辛酉に高麗に達せり。

五。掌吉。

太宗の古余克に怒れる時、忙哥阿勒赤歹と共に諫めたる晃豁兒台掌吉（實錄六三八頁）は元史は見當らず。憲宗元年に葉孫脫按只䚟と共に誅せられたる暢吉は、掌吉に似たれどもいかゞにや。

六。不者克卽札剌亦兒の撥徹。

太宗の古余克を叱れる言の内に「速別額台・不者克二人の蔭に行き」とある不者克（實錄六四〇頁）を「拖雷の子、蒙格の弟撥綽大王」と注したりしが、猶考ふれば、拖雷の子を擧げんには、撥綽よりも長子蒙格を云ふべきなり。又諸王の名は、速別額台の下に列ねらるべしとも思はれず。然らばこの不者克は、速別額台と共に西征に從へる武臣にして、偶珀兒沙・嚕西亞・汴噶哩亞の人に聞えざりし人なるべし。元史阿剌罕の傳に「祖撥徹、事太祖、爲火而赤、又爲博而赤、攻城掠地、數有戰功。太宗卽位、仍以其職從、征隴北・陝西、身先戰士、死焉」とある札剌亦兒の撥徹は、卽不者克には非ずや。太祖の金に攻め入りたる時、親征錄に薄察、太祖紀に薄刹、趙柔の傳に八札とあるは、必この撥徹なるべし。撥徹の父也柳干は、「幼隷皇子岳里吉、爲衞

土長」。世系表に太宗の七子を列記して、岳里吉の名なし。史臣附記して「按、憲宗紀有云「太宗以子月良不材、故不立爲嗣」。今考經世大典帝系篇及歲賜錄、並不見月良名字次序。故不敢列之世表」とあり。故に考異に「岳里吉、豈卽月良之轉聲乎」と云へり。「歲乙未（太宗七年）、從皇子闊出忽都禿南征、累功授萬戶、云云」。忽都禿の禿は虎の誤にて、卽失乞忽都忽なり。その後「統大軍、攻淮東西諸郡、戊午（憲宗八年）戰死楊州」。その子阿剌罕は、父の職を襲ぎ、諸翼蒙古軍馬都元帥となり、武功甚多かりき。憲宗九年には、世祖に從ひ江を渡り鄂に至り、世祖位に卽き、皇弟阿里不哥の兵を稱げたる時、その黨阿藍帶兒渾都海の兵を昔門禿（昔木兒禿）に擊破り、中統三年、濟南の叛將李壇を平げ、四年、阿朮に從ひ宋を伐ち、五年より十年まで襄陽樊城の攻圍に與り、十一年、丞相伯顏に從ひ宋を伐ち、十三年、宋降り、浙東閩中諸郡を平げ、十四年江東を宣慰し、「十八年、召拜中書左丞相、行中書省事、統蒙古軍四十萬、征日本。行次慶元、卒于軍中」。この時死なざりせば、速勒都思の阿塔海の如き大失敗に陷るべかりしを、誠に運好き人なりけり。

七。失喇罕、不剌合荅兒、阿馬勒、豁哩合察兒、牙勒巴黑、合喇兀荅兒。

晃豁兒台と共に札撒兀の官になれる失喇罕（實錄六四四頁）、宿衞の長八人の内、總長合荅安と共に第一班の長たる不剌合荅兒、第二班の長二人の一なる阿馬勒、第三班の長二人の一なる豁哩合察兒（六四六頁）、第四班の長牙勒巴黑・合喇兀荅兒二人（六四七頁）、この人人は、未外に見當らず。不剌合荅兒は、下文に不勒合荅兒とも孛勒合荅兒ともあり。

八。察納兒、合歹。

第二班の長の一人なる察納兒第三班の長の一人なる合歹は、憲宗元年に葉孫脫按只䚟等と共に誅せられたる爪難合荅なるべし。

九。晃豁兒塔孩。

前に知りたりし阿勒赤歹と共に侍衞の第一班の宿老となれる晃豁兒塔孩（實錄六四八頁）は、前文に官人阿勒赤歹晃豁兒台と竝べ擧げたる晃豁兒台と同じ人ならんか。憲宗紀元年卽位の處に「以晃兀兒留守和林宮闕帑藏」とある晃兀兒は、晃豁兒台の台を略けるにやとも見ゆれども、多遜の史に「拙只合撒兒の子坤庫兒を喀喇科嚕姆の太守とせり」とあるに據れば、祕史に「前に知りたりしものの親族より任ぜり」と云へる侍衞の番直の宿老とは別なる人なり。世系表は、黃兀兒王を搠只哈撒兒王の曾孫、移相哥大王の孫、勢都兒王の第三子とせり。食貨志歲賜の篇に黃兀兒塔海とあるは、卽晃豁兒塔孩なり。

十。帖木迭兒。

侍衞の第二班の宿老の一人なる帖木迭兒（實錄六四八頁）は、鐵邁赤の傳に、太宗の時「從皇子闊出、忽都〔忽〕、行省鐵木荅兒、定河南、累有戰功」と見え、憲宗紀には、定宗崩じて後、阿剌脫忽の山に會せし諸大將の中に帖木迭兒の名あり。行省鐵木荅兒とあるに由りて考ふれば、食貨志歲賜の篇なる忒木台行省、札剌亦兒の奧魯赤の父忒木台は、卽この人ならんと思はる。祕史に「前に知りたりしものの親族」と云へるに

據れば、この忒木台は、札剌亦兒の不合の親族なるべし。奥魯赤の傳に曰く「父忒木台、從太宗、征杭里部、俘部長以獻。復從征西夏有功。特命行省事、領兀魯・忙兀・亦怯烈・弘吉剌・札剌兒五部軍、平河南、以功賜戸二千。嘗駐兵太原・平陽・河南、土人德之、皆爲立祠」。杭里部は卽康里なり。康里西夏を征したるは太祖の時の事なれば、從太宗と云へるは誤れり。省事を行へるは太宗七年の南征の時なり。親征錄太宗四年の條に惑水歹火兒赤とありて、沈曾植の「惑水當作忒木」と云へるも、卽忒木台豁兒赤なり。忒木台は、太宗四年、卽金の正大九年春、史天澤の「略地京東、招降太康柘縣瓦岡睢州、追斬金將完顏慶山奴於陽邑」の役に從ひ、その事は元史に見えざれども、金史内族承立卽慶山奴の傳に「正大九年正月、自徐引兵入援、留睢州。聞大兵且至、懼此州不可守、退保歸德。二月、行次楊驛店、遇小乃鰐（元史列傳の肖乃台）軍、遂潰、慶山奴馬躓被擒。大兵以一馬載慶山奴、擁迫而行。道中見眞定史帥、云云。及見大帥忒木鰐、誘之使招京城、不從、又偃蹇不屈。左右以刀斫其足折、亦不降。卽殺之」。石盞女魯歡の傳に「正大九年二月、以行樞密院事守歸德。乙丑、大元將忒木鰐率眞定信安大名東平益都諸軍來攻。適慶山奴潰軍亦至、城中得之、頗有闘志、云云」。蒲察官奴の傳に「天興元年（卽正大九年）十二月、從哀宗北渡。明年（太宗五年）正月、上至歸德。是時、大元將忒木鰐守歸德。官奴旣總兵柄、請上北渡、再圖恢復、石盞女魯歡沮之。自是有異心矣」。三月、遂に亂を作して女魯歡を殺し、朝官三百餘人を殺して權を擅にせり。「初官奴之母、自河北軍潰、北兵得之。至是上乃命官奴因其母以計請和。故官奴密與忒木鰐議和事、令阿里合往言欲劫上以降。忒木鰐信之、還其母、因定和計。官奴乃日往來講議、或乘舟中流會飲。其遣來使者二十餘輩、皆女直契丹人。上密令官奴以金銀牌與之、勿令還營、因知王家寺大將所在。故官奴畫斫營之策。五月五日祭天、軍中陰備火槍戰具、率忠孝軍四百五十人、自南門登舟、由東而北、夜殺外堤邏卒、遂至王家寺。上御北門、繫舟待之、慮不勝則入徐州而遁。四更接戰、忠孝初小却、再進。官奴以小船分軍伍七十、出柵外、腹背攻之、持火槍突入。北軍不能支、卽大潰、溺水死者、凡三千五百餘人。盡焚其柵而還」。その月官奴は、專橫を以て誅せられき。また續通鑑綱目宋の理宗端平二年（太宗七年）夏六月「蒙古主命忒木鰐及張柔等侵漢」。三年（太宗八年）春正月、蒙古將忒木鰐寇江陵、統制李復明死之。三月、襄陽將王旻等作亂、以城降蒙古。夏四月、蒙古陷隨郢州荆門軍。秋八月、蒙古陷棗陽軍德安府。冬十一月、蒙古將忒木鰐攻江陵。史嵩之遣孟珙救之。珙遣張順先渡、而自以全師繼之、變易旌旗服色、循環往來、夜則列炬照江、數十里相接。珙又遣趙武等與戰、珙親往節度、遂破蒙古二十四砦、還民二萬而歸」などあるは、宋史に據りて書きたるなり。元史には、太宗紀に「七年乙未春、遣皇子曲出及胡土虎伐宋」。冬十月、曲出圍棗陽拔之、遂徇襄鄧入郢、虜人民牛馬數萬而還。八年丙申冬十月、皇子曲出薨。張柔等攻郢州拔之。襄陽府來附」。唐兀惕の察罕の傳に「皇子闊出忽都禿伐宋、命察罕爲斥候。又從親王口溫不花南伐。歲乙未、克棗陽及光化軍。未幾、召口溫不花赴行在、以全軍付察罕」。張柔の傳に「歲乙未、從皇子闊出、拔棗陽、繼從大帥太赤攻徐邳」などあるのみにて、忒木台の名は見えず。大帥太赤は、燕只吉台の徹里の曾祖なり。姚樞の傳に曰く「歲乙未南伐、詔樞從楊惟中、卽軍中、求儒道釋醫卜者。會破棗陽、主將將盡坑之。樞力辨非詔書意、他日何以復命。乃蹙數人、逃入篁竹中脫死。拔德安、得名儒趙復、始得程頤朱熹之書」。趙復の傳にも「德安以嘗逆戰、其民數十萬、俘戮無遺。時楊惟中行中書省軍前、姚樞奉詔、卽軍中求儒道釋醫卜士、凡儒生掛俘籍者、輒脫之以歸。復在其中」、と云へり。この時殺戮を行へる主將は、續綱目に據れば、卽忒木鰐なり。又棗陽の陷ちたるは、元史には太宗七年乙未とすれども、宋史に據れば、太宗八年丙申の八月なり。忒木台の父朔魯罕は、功臣の第四十五余魯罕なることは、前の七〇〇頁に云へり。忒木台の子奥魯赤は、憲宗世祖に事へ、憲宗八年の親征に從ひ、至元六年、蒙古軍四萬戸を領し、十一年、丞相伯顏

に從ひ宋を伐ち、その武功は、札剌亦兒の阿剌罕に似たり。二十三年、鎭南王脫歡を佐けて交趾を征し、大德元年に卒しき。

武木迭兒と共に侍衞の第二班の宿老となれる一人は、者古とあり。者古と云ふ名は耳新し。不者古の不を脫したるにて、速別額台と共に西征に從へる不者克、卽札剌亦兒の撥徹ならん。これも、札剌亦兒の不合の親族なるべし。

十一。忙忽台。

侍衞の第四班の宿老を輔くる忙忽台(實錄六四九頁)は、前に知りたりし忙忽惕の朶豁勒忽徹兒必の親族なるべければ、札剌亦兒の札剌亦兒台、兀喉合の兀喉合台の如く、姓を名としたるならん。高麗史に見えたる憲宗三年十一月也窟大王の命を受けて高麗の朝廷に使したる蒙古大、元史世祖紀に屢見えたる忙古帶は、この忙忽台なるべし。世祖紀一に「中統元年五月、詔燕帖木兒忙古帶、節度黃河以西諸軍。詔平陽京兆兩路宣撫司、僉兵七千人、於延安等處守隘、以萬戶鄭鼎昔剌忙古帶領之。七月、宋兵攻邊城。詔遣太丑・怯烈・忙古帶、率所部合兵擊之。二年八月、初立勸農司、以忙古帶爲涿州勸農使」。世祖紀三に「至元五年八月、命忙古帶、率兵六千人、征西番建都」。世祖紀四に「九年正月、勅皇子西平王奧魯赤等、與四川行省也速帶兒部下並忙古帶等、同征建都」。世祖紀五に「十一年正月、以忙古帶等新舊軍一千五百人戍建都」などあり。世祖紀二に「中統四年正月、陵州達魯花赤蒙哥戰死濟南、以其子忙兀帶襲職。六月、以管民官兼統懷孟等軍俺撒戰歿汴梁、命其子忙兀帶爲萬戶、佩金符」などあるは、太宗の時より仕へたる忙忽台に非ざること論なし。列傳卷十八なる塔塔兒の忙兀台も、「事世祖、爲博州路奧魯總管、至元七年、又爲監戰萬戶、佩金虎符、八年、改鄧州新軍蒙古萬戶、沿水軍于萬山南岸」などありて、世祖紀の忙古帶と別の人なれば、祕史の忙忽台にも非ざるべし。又契丹の耶律阿海の長子も、忙古台と云ひ、「在太祖時、爲御史大夫、佩虎符、監戰左副元帥、官金紫光祿大夫、管領契丹漢軍、守中都招安水泊等處」とあれども、色目の人にて番直の官人となれる例なければ、祕史の忙忽台とは異なり。

十二。委兀兒台、阿剌淺。

兀嚕兀惕の察乃と共に營盤官となれる委兀兒台(實錄六五五頁)、許兀愼の脫忽察兒と共に站を整ふることを命ぜられたる阿剌淺(六五九頁)は、何姓の人なるか知らず。

參。祕史に見えざる名臣。

太祖太宗は、夷狄より出でゝ、沙漠の北に興りたるに、文武の名臣夥しくして、漢唐の創業の時にも愈れるは、驚くべき事なり。それらの名臣にて。元史に傳はりて。祕史に名も見えざる人を數へ擧ぐれば、實に十餘人あり。今その人々を蒙古色目漢人の三綱に分けて。その仕履の概略を述べん。考證の必要ある時は、その詳傳を載することもあるべし。

蒙古色目漢人の別に付きては、すこし說明を要することあり。陶宗儀の輟耕錄に蒙古七十二種、色目三十一種、漢人八種を載せて、蒙古の內には、祕史に見えたる巴塔赤罕の子孫皆屬するのみならず、忽神卽元史の許兀愼、瓮吉剌歹卽祕史の翁吉喇惕、永吉列思(か、亦乞列歹か)卽亦乞咧思、郭兒剌思卽豁嚕剌思、怯烈歹卽客咧亦惕、禿別歹卽元史の土別燕か祕史の禿別干か、脫里別歹卽元史の禿立不帶また多禮伯台、塔塔兒

卽元史の達達兒、滅里吉歹卽祕史の篾兒乞惕、兀羅歹卽元史の兀羅帶、伯岳歹卽元史の伯牙吾祕史の巴牙兀惕、外剌歹卽元史の斡亦剌祕史の斡亦喇惕、塔塔歹卽元史の苔苔帶、塔塔兒歹卽元史の苔苔里帶（この二つは前の塔塔兒に同じきか）、八魯忽歹卽祕史の巴兒忽惕元史の八剌忽䚟などあり。色目には、哈剌魯（また合魯歹匣剌魯）卽合兒魯兀惕、欽察卽乞卜察兀惕、唐兀卽唐兀惕、阿速卽阿速惕、禿八（また禿伯歹）卽禿巴思、康里（また夯力）、畏吾兀（兀は兒の誤）卽委兀惕、回回卽撒兒塔兀兒、乃蠻歹卽乃蠻、阿兒渾卽元史の阿魯渾、撒里哥（また徹兒哥）卽祕史の薛兒客速惕、雍古歹卽汪古惕、哈剌吉苔歹卽合剌乞塔惕、拙兒察歹卽主兒扯惕、甘木魯卽馬兒科保羅の喀木勒今の哈密、乞失迷兒卽祕史の客失米兒元史の迦葉彌兒などあり。貴赤は善走者、禿魯花は質子にて、軍隊の名なり。姓としては知らず。苦里魯・剌乞歹・赤乞歹・密赤思・苦魯丁・禿魯八歹は、考へ得ず。字の誤もあるべし。火里剌二つあり。蒙古の豁嚕剌思の混れ入りたるに似たり。漢人八種は、契丹・高麗・女直・竹因歹・朮里闊歹・竹溫歹・竹赤歹・渤海（原注女直同）とあり。契丹は合喇乞塔惕、高麗は莎郎合思、女直は主兒扯惕なり。合喇乞塔惕は、垂河の濱に徙れる西遼のみならず、支那の北方に居るものをも蒙古語にては合喇を附けずに乞塔惕と云へり。蒙古語にて合喇を附けずに乞塔惕と云ふは、契丹に非ずして、支那人の事なり。合喇乞塔惕主兒扯惕は、色目漢人の兩方に入りたるは、支那に化せざるものを色目とし、支那に化したるものを漢人としたるならん。竹因歹・竹溫歹・竹赤歹の三つは、いづれも祕史の主因鎮海の傳なる只溫の訛にして、誤りて重複したるに似たり。朮里闊歹は、考へ得ず。祕史に金人卽乞塔惕を札忽惕とも云へば、朮里闊歹卽朮兒闊歹は、札兒忽惕の訛れるには非ずや。蒙古人は、金卽中原の支那人を乞塔惕又は札忽惕と云ふに對し、宋卽江南の支那人を蠻子と云ひたるに、こゝに見えざるは、脫ちたるならん。渤海は、粟末靺鞨の遺種にして、注に「女直同」とあるは、女直の如く支那に化したるものを云へるなるべし。

弍。蒙　古。

一。客咧亦惕。

1。鎮　海。

列傳卷七、鎮海、怯烈台氏。許有壬の撰れる神道碑に「系出怯烈氏。或曰、本田姓、至朔方始氏怯烈」。長春の西游記にも田鎮海と云へり。「初以軍伍長從太祖、同飲班朱尼河水」。また「旣破燕、太祖命於城中環射四箭、凡四箭所至、園池邸舍之處、悉以賜之。尋拜中書右丞相。己丑、太宗卽位、扈從至西京、攻河中河南均州」とあれども、太宗紀に「三年辛卯秋八月、幸雲中、始立中書省、改侍從官名、云云」とあれば、右丞相の拜命は、「至西京」の下に書くべきなり。又「定宗卽位、以鎮海爲先朝舊臣、仍拜中書右丞相。薨、年八十四」と事も無げに書きたれども、喇失惕に據れば、太宗の皇后禿喇奇納攝政して、丞相鎮海を罷め、定宗卽位して、鎮海喀答克を丞相とし、定宗疾ありて、政を二人に委ね、定宗の皇后斡古勒該米失攝政の時も、二人は用ひられしが、憲宗卽位の明年誅せられきとあり。

2。肖乃台。

列傳卷七、肖乃台、禿伯怯烈氏。客咧亦惕の分部禿別干か。太祖二十年乙酉の春、史天澤と共に武仙を破りて眞定を取回したる時「將士怒民之反覆、驅萬人出、將屠之。肖乃台曰「金民慕國威信、徯我來蘇。此民爲賊所驅脅、有何罪焉。若不勝一朝之忿、非惟自屈其力、且堅他城不降之心」。乃皆釋之」とありて、一萬の民は、肖乃台の爲に助かりたるが如くなれども、史天澤の傳には「笑乃艀怒、忿民之從賊、驅萬餘人、將殺之。

天澤曰「彼呰吾民、但爲賊所脅耳。殺之何罪」。力爭得釋」とありて、殺さんとしたるは肖乃台なり。肖乃台は蒙古、史天澤は漢人なれば、寬仁の名は、恐らくは肖乃台のものにあらざるべし。

3。按札兒。

列傳卷九、按札兒、拓跋氏。氏族表に「疑卽禿別之轉、借古名譯之」とあれば、肖乃台の同姓なるべし。太祖十四年己卯、木華黎の前鋒總帥。

4。槊直腯魯華。

列傳卷九、槊直腯魯華、蒙古克烈氏。太祖南征の時、木華黎の前鋒。その子撒吉思卜華は、太宗二年庚寅眞定五路萬戶史天澤の監軍。撒吉思卜華の弟明安荅兒は、蒙古漢軍萬戶。

5。速哥。

列傳卷十一、速哥、蒙古怯烈氏、世傳李唐外族。太宗七年乙未、山西の大達魯花赤。

二。撒兒只兀惕

1。吾也而。

列傳卷七、吾也而、珊竹氏。太祖九年甲戌、北京總管都元帥。太宗十三年辛丑、北京東京廣寧蓋州平州泰州開元府七路の征行兵馬都元帥。その子霅禮は、太宗の時、北京等路の達魯花赤。

2。純只海。

列傳卷十、純只海、散朮台氏。太宗九年丁酉、京兆行省の都達魯花赤にて、懷孟に鎭しき。

三。乃蠻。

1。抄思。

列傳卷八、抄思、乃蠻部人、亦號曰荅祿。氏族表に「其國族稱荅祿氏」と云ひて、外にも達魯乃蠻氏の人を引けり。蓋乃蠻の不亦嚕黑罕の族を古出兀惕乃蠻と云ひしが如く、塔陽罕の子孫を荅祿乃蠻と云ひしなり。「其先太陽爲乃蠻部主、祖曲書律(古出魯克)、父敞溫。太祖擧兵討不庭、曲書律失其部落、敞溫奔契丹卒。抄思尙幼、與其母(康里氏)間行、來歸太祖、奉中宮旨侍宮掖」。その後抄思は、屢征伐に從ひ、功を立て、太宗四年壬辰、萬戶となり、隨州を鎭し、後穎州に移り、定宗三年戊申、四十四歲に卒しきとあり。抄思の年に依り逆推するに、生れたるは、太祖卽位の前年、古出魯克の西遼に奔る三年前なり。その時古出魯克に壯年の子あるべしとも思はれざる上に、西遼に奔る前にては康里の婦人を敞溫の娶るべき由なければ、この傳には何か誤りあらん。

2。月里麻思。

列傳卷十、月里麻思、乃馬氏。乃馬も、乃蠻なり。「歲丁丑(太宗九年丁酉)、太宗命與斷事官忽都那(忽都忽)同署。歲戊戌(太宗十年)、又同阿朮魯拔都兒、充達魯花赤、砂南宿州」。阿朮魯拔都兒は、斡囉納兒の阿朮魯なるべけれども、阿朮魯の傳にはこの事を載せず。かくて月里麻思は、太宗十三年辛丑宋に使し、脅されたれども屈せず、長沙の飛虎寨に囚はれ、三十六年にして死せり。

四。巴兒忽惕。

唵木海。

列傳卷九、唵木海、蒙古八剌忽䚟氏。太祖九年甲戌、隨路砲手達魯花赤。憲宗二年壬子、都元帥。

五。札兀剌亦惕。

抄兀兒。

列傳卷十、召烈台抄兀兒。太祖の時答剌罕（答兒罕）。

六。塔塔兒。

闊闊不花。

列傳卷十、闊闊不花、按攤脫脫里氏。阿兒壇塔塔兒にて、塔塔兒の分部ならん。太祖十三年戊寅、探馬赤五部の前鋒都元帥。

七。札剌亦兒。

1。拜延八都魯。

列傳卷十、拜延八都魯、蒙古札剌氏。八都魯卽巴阿禿兒は、太祖より賜はれる號なり。世祖中統二年、蒙古奥魯官。

2。忙哥撒兒。

列傳卷十一、忙哥撒兒、察哈札剌兒氏。察罕札剌亦兒なり。「曾祖赤老溫愷赤、祖搠阿、父那海、竝事烈祖及太祖嗣位、年尚少、所部多叛亡、搠阿獨不去」と云へるは、恐らくは誤あらん。赤剌溫愷赤は、實錄一三七頁に見えたる赤剌溫孩赤にして、太祖の主兒勤を滅せる時、兄古溫兀阿と共に諸子を率ゐて降附したるなれば、搠阿那海の夙く烈祖に事へたる事はあるべからず。部衆の叛ける時搠阿の獨留まれることも祕史に見えず。赤剌溫孩赤の降附する時率ゐたる子は、統格・合失二人にして、搠阿の名見えざれば、搠阿は幼子なるべし。忙哥撒兒は幼時より太宗に事へ、又拖雷に從ひて、鳳翔を攻め、奇功を立てたり。「定宗陞爲斷事官」とは、定宗の時拖雷の後王の斷事官と爲れるにて、皇朝の斷事官には非ず。この時諸王の分地に皆斷事官ありて、忙哥撒兒は、「剛明能舉職。憲宗在藩邸、深知其人、從征斡羅思・阿速・欽察諸部、常身先諸將。及以所俘寶玉頒諸將則退然一無所取。憲宗由是益重之、使治藩邸之分民。閒出游獵、則長其軍士、動如紀律。雖太后及諸嬪御、小有過失、知無不言。以故邸中人咸敬憚之。迺以爲斷事官之長、其位在三公之上、猶漢之大將軍也」。藩邸の斷事官を漢の大將軍に比したるは、不倫なり。「既拜命、出帳殿外、敵橐坐熊席、其僚列坐左右者四十人。忙哥撒兒問曰「主上以我長此官。諸公其爲我言。當以何道守官」。衆皆默然。又問之。有夏人和斡居下坐、進曰「夫札魯忽赤之道、猶宰之刲羊也。解肩者、不使傷其脊。在持平而已」。忙哥撒兒聞之、卽起入帳內。衆不知所爲、皆咎和斡失言。旣入、乃爲帝言和斡之言善。和斡由是知名」。この後憲宗を推戴したる始末は、前の額勒只吉歹の條に引けり。憲宗既に立ち、忙哥撒兒は、帝國の札兒忽赤なり、叛者を捕へてその首謀を悉く誅し、「帝以其奉法不阿、委任益專。有當刑者、輒以法刑之、乃入奏、無不報可。癸丑（憲宗三年冬、病酒而卒」。第四子帖木兒不花の子伯荅沙は、成宗以下六朝に歷事し、延祐二年中書右丞相、至治中太宗正札魯忽赤、泰定中太保、天曆元年太傅。

八。斡囉納兒。

1。阿朮魯。

列傳卷十、阿朮魯は蒙古氏とあれども、阿朮魯の孫懷都の傳(列傳卷十八)に斡魯納台氏とあるに據れば、蒙古氏は、蒙古斡魯納台氏と云ふべきを脫したるなり。「太祖時、命同飲班朱尼河之水」。懷都の傳には「祖父阿朮魯、與太祖同、飲黑河水」とあり。懷都は、世祖の時南征して、屢戰功ありき。

2。怯怯里。

列傳卷十、怯怯里、斡耳那氏。太宗の時、千戶。

九。篾兒乞愓。

紹古兒

列傳卷十、紹古兒麥里吉台氏。「事太祖、命同飲班朱尼河之水」。洺磁等路の都達魯花赤。

十。別速愓。

抄兒。

列傳卷十、抄兒、別速氏。子抄海、孫別帖と、祖孫三代皆陳に歿し、別帖の子阿必察も、至元中疾にて軍中に卒しき。

十一。束呂糺。

塔不己兒。

列傳卷十、塔不己兒、束呂糺氏。太宗の時、招討使、征行萬戶。子脫察剌、孫重喜。重喜は、列傳卷二十に別に傳あり。

十二。忙兀愓。

直脫兒。

列傳卷十、直脫兒、蒙古氏。父阿察兒は、太祖の博兒赤(寶兒赤)。直脫兒は、孫忽剌出の傳(列傳卷二十)に赤脫兒とあり。太宗九年丁酉、涿州路の達魯花赤。

弍。色目。

一。唐兀愓。

1。察罕。

列傳卷七、察罕、唐兀烏密氏。烏密は、於彌とも書き、李恆の傳に「其先、姓於彌氏。唐末賜姓李、世爲西夏國主」とあり。李恆は、西夏國主の子兀納剌城を守りて死したる人の孫なり。恆の子李世安の墓誌を吳澄の撰りたるに「公、西夏賀蘭於彌部人也」とあるに據れば、國亡びたる後住みたる部落の名を姓としたるにて、傳の如く李姓を賜はれる前に稱したるには非ず。故に錢大昕の考異に「西夏之先、本拓跋氏。於彌與拓跋、音不相近。蓋元時國俗之語」と云へり。察罕は、太祖の時、御帳前の首千戶。太宗十年戊戌、馬步軍

都元帥。憲宗の時、以都元帥兼領尙書省事。察罕の兄弟曲也怯祖は、太祖の時、皇子察哈台の札魯火赤（札兒忽赤）。曲也怯祖の孫二人、亦力撒合は、世祖の朝の直臣、立智理威は、成宗の朝の能臣。

2。李　楨。

列傳卷十一、李楨、字幹臣、西夏國族子也。太宗十年戊戌、軍前行中書省の左右司郎中。庚戌（憲宗卽位の前年）襄陽軍馬萬戸。

3。昔里鈐部。

列傳卷九、昔里鈐部、唐兀人、昔里氏。鈐部亦云甘卜、音相近而互用也。太祖の末年西夏征伐に從ひ、太宗の時、定宗・憲宗諸王拔都に從ひ西域を征し、十三年還り、千戸を授かり、尋て斷事官に遷り、定宗元年大名路の達魯花赤に進み、憲宗九年に卒し、子愛魯その職を襲げり。王惲の撰れる大名路宣差李公神道碑に云く「公諱益里山。其先係沙陀貴種、以世故徙酒泉郡之沙州、遂爲沙州人」。李公は、卽昔里鈐部にして、一名を益里山と云へるなり。沙陀の種にして姓は李氏なれば、沙陀の李國昌の一族にてやあらん。中堂事紀に中統二年大名路達魯花赤愛魯を黜けたることを載せて、「愛魯、河西人小李鈐部之子也。小李訛爲昔里」とあり。小李は、卽李氏にして、沙陀の李氏又は唐兀の李氏に別たんが爲に小の字を加へたるならん。

・

4。也蒲甘卜。

列傳卷十、也蒲甘卜、唐兀氏。「歲辛巳（太祖十六年）、率衆歸太祖、隷蒙古軍籍、奉旨同所管河西人、從木華黎出征、以疾卒、子昂吉兒襲領其軍」。列傳卷十九昂吉兒の傳に「昂吉兒、張掖人、姓野蒲氏、世爲西夏將家。歲辛巳、父甘卜率所部歸太祖。以其軍隷蒙古軍籍、仍以甘卜爲千戸主之、云云」とありて、甘卜の傳よりは却て稍委し。昂吉兒は、至元中、淮西の宣慰使、廬州の蒙古漢軍萬戸府の達魯花赤、江浙行省の左丞。

二。汪古惕。

按竺邇。

列傳卷八、按竺邇、雍古氏。「其先居雲中塞外。父黜公爲金羣牧使。歲辛未（太祖六年）、驅所牧馬來歸、太祖命仍其官。按竺邇幼鞠于外祖朮要甲家。訛言爲趙家、因姓趙氏。年十四、隷皇子察合台部。云云。」つぎに「甲戌、太祖西征尋思干阿里麻里等國、以功爲千戸」とある甲戌は、庚辰などの誤なり。「太祖卽位、尊察合台爲皇兄、以按竺邇爲元帥、戊子鎭删丹州」。戊子は、太祖卽位の前年なれば、こゝにも何か誤あらん。金亡びて後、金蘭定會四州を定め、鞏州を招ぎ降したる時、「皇兄嘉其材勇、賞賚甚厚、賜名拔都、拜征行大元帥」。子十人ありて、その中徹理國寶二人最名を知られ、憲宗の末年、按竺邇老を告げ、徹理命ぜられて征行元帥の職を襲げり。徹理の子步魯合荅の傳（列傳卷十九）に「步魯合荅、蒙古弘吉剌氏。祖按主奴云云。父車里云云」とあり。考異に云く「步魯合荅、乃按竺邇之孫、系出雍古氏、非宏吉剌氏。雍古爲色目之一種、非蒙古史誤」。蓋雍吉を雍古と誤り、遂に剌を添へ、蒙古を加へたるなり。按主奴は卽按竺邇、車里は卽徹理なり。又國寶の子趙世延の傳（列傳卷六十七）に「其先雍古族人、居雲中北邊。曾祖黜公爲金羣牧使。太祖得其所牧馬、黜公死之」とあるは、按竺邇の傳に「太祖命仍其官」と云へると異なり。又國寶の名は、步魯合荅の傳に黑子、世延の傳に黑梓とあり。世延の子野峻台は、忠義傳（列傳卷八十二）に載せられたり。

三。委兀惕。

1。塔　本。

列傳卷十一、塔本、伊吾廬人、伊吾廬は、合木兒卽今の哈密の古名にして、委兀惕の地なり。「父宋五設託陀。託陀者、其國主所賜號、猶華言國老也」とあり。その國主は、卽委兀惕の君なり。塔本は、太祖の時、興平行省の都元帥。太宗二年詔して中山平定平原を益して行省に隷せり。

2。哈剌亦哈赤北魯。

列傳卷十一、哈剌亦哈赤北魯、畏兀人也。この傳に八兒出阿兒忒亦都護とあるは、卽列傳卷九の巴而朮阿而忒的斤亦都護、西遼主鞠兒可汗とあるは、祕史の合喇乞塔惕の古兒罕なり。八兒出阿兒忒の父の名月仙帖木兒は、この傳にのみ見ゆ。哈剌亦哈赤北魯の子月朶失野訥は、太祖の時、都督にて獨山城の達魯花赤を兼ね、その子乞赤宋忽兒は、太宗の時、爵を襲ぎ、荅剌罕の號を賜はれり。

3。塔塔統阿。

列傳卷十一、塔塔統阿、畏兀人也。乃蠻の大敭可汗（塔陽罕）に尊用せられ、國亡びて後太祖に事へたることは、序論の初に云へり。太宗の時内府の玉璽金帛を司り、その妻吾和利氏は、皇子哈剌察兒の乳母となれり。

4。岳璘帖穆爾。

列傳卷十一、岳璘帖穆爾、回鶻人、畏兀國相暾欲谷之裔也。其兄仳理伽普華、年十六、襲國相荅剌罕。歐陽玄の高昌偰氏家傳に曰く「偰氏、其先世曰暾欲谷、本突厥部。突厥亡、其地入於回紇、暾欲谷之子孫、世爲其國相。嘗從其主、居偰輦河、因以偰爲氏。數世至克直普爾、襲本國相荅剌罕、錫號阿大都督。遼主授以太師大丞相、總管內外藏事。國人稱之曰藏赤立。死、子岳弼襲。岳弼七子、曰達林、曰亞思弼、云云、曰多和思」。亞思弼の長子仳理伽帖穆爾は、卽傳の仳理伽普華なり。畏兀の亦都護、西遼の監使を殺して蒙古に降れるは、仳理伽普華の計に從へるなり。岳璘帖穆爾は、太祖の時、河南等處軍民の都達魯花赤、太宗の時、大斷事官。その子合剌普華の事は、忠義傳（列傳卷八十）にあり。

5。撒吉思。

列傳卷二十一、撒吉思、回鶻人、其國阿大都督多和思之次子也。卽阿思弼の孫にして、岳璘帖穆爾の從弟なり。太祖の弟斡眞（斡赤斤）の必　赤となり、斡赤斤薨じたるとき、火魯和孫（豁兒豁孫）と共に適孫塔察兒を擁立したることは、前の豁兒豁孫の條に引けり。世祖の時、山東行省の大都督にて益都の達魯花赤を兼ねき。撒吉思の孫荅里麻は、別に（列傳卷三十一に）傳あり、「高昌人、大父撒吉斯」と云へり。高昌は、委兀の地の古名なり。

6。孟速思。

列傳卷十一、孟速思、畏兀人、世居別失八里、古北庭都護之地。別失八里は、委兀惕の都必失巴里克にして、唐の北庭都護府の地なり。孟速思年十五にして本國の書に通じたるを太祖聞きて、召し見て大に悦び「此兒目中有火、他日可大用」と曰へりとあるは、蒙古の諺語なる「目に火あり、面に光あり」を半だけ譯したるなり。世祖の時、斷事官。

7。布魯海牙。

列傳卷十二、布魯海牙、畏吾人也。太宗三年、燕南諸路の廉訪使兼斷事官、世祖の時、順德等路の宣慰使。廉使を命ぜられたる日に子希憲生れしかば、布魯海牙喜びて「吾聞、古以官爲姓。天其以廉爲吾宗之姓乎」と云ひ、子孫皆廉氏となれり。廉希憲は別に傳あり（列傳卷十三）。

四。合兒魯兀惕。

鐵邁赤。

列傳卷九、鐵邁赤、合魯氏。太祖の時、忽蘭皇后の掮馬官。至元七年、蒙古諸萬戸府の奥魯總管。

五。合喇乞塔惕。

曷思麥里。

列傳卷七、曷思麥里、西域谷則斡兒朶人、初爲西遼闊兒罕近侍。谷則斡兒朶は、遼史天祚紀に見えたる耶律大石の都虎思斡耳朶、西遼の闊兒罕は、合喇乞塔惕の古兒罕なり。曷思麥里の者別に從ひ西域諸國に轉戰したることは、實錄卷十一の注に引けり。太祖の末年、必闍赤。太宗四年、懷孟州の達魯花赤。十一年、長子捏只必、懷孟州の達魯花赤を襲ぎ、次子密里吉、必闍赤を襲ぎ、曷思麥里は札魯火赤となり、十二年懷孟河南二十八處の都達魯花赤に進めり。

六。撒兒惕卽回回。

1。札八兒火者。

列傳卷七、札八兒火者、賽夷人。賽夷、西域部之族長也、因以爲氏。火者、其官稱也。火者卽闊札は、抹哈篾惕敎の一派なる賽亦惕派の人の用ふる稱號なり。賽夷人は、卽賽亦惕派の人にして、地の名に非ず。賽亦惕は、族長に非ずして、宗派の長なり。その長は、賽亦惕何某と稱するが故に氏と誤れるなり。この傳には、疑はしきことのみ多し。札八兒は、西域の人なれば、太祖に降れるは、太祖西征の後にあるべきを、克烈の汪罕との戰には班朱尼河の誓に與れりとし、南征の役には居庸關の間道を前導せりとして、者別の南口より襲へる事實と撞着せり。金人汴に遷りて、乘輿北に歸る時、「留札八兒、與諸將守中都」も、本紀諸傳に見えざるのみならず、「授黃河以北鐵門以南天下都達魯花赤」と云へるに至りては、恐らくは誇張の言なるべし。「有丘眞人者、有道之士也、隱居崑崙山中。太祖聞其名、命札八兒往聘之。云云」と云へるも、西游記に「住萊州昊天觀。成吉思皇帝遣侍劉仲祿、縣虎頭金牌、傳旨敦請」とあるに合はず。この時は、大軍正に西に進める時なれば、札八兒は未太祖にも降らず、丘眞人の名をも知らざりけん。卒したるは何年とも云はずして、年は一百一十八なり。長子阿里罕は、憲宗の時天下の質子兵馬都元帥。

2。阿剌兀而思。

列傳卷十、阿剌兀而思、回鶻八瓦耳人。仕其國爲千夫長。太祖征西域、駐蹕八瓦耳之地。阿剌兀而思、率其部曲來降、從帝親征。云云、沒于軍。八瓦耳は、闊喇散の巴兀兒篤なるべし。巴兀兒篤に至れるは、太祖に非ず、他の將なるべし。「子阿剌瓦丁(阿來兀丁)從世祖北征有功」。その子贍思丁に子五人あり。長は烏馬兒(斡馬兒)、次は不別、次は忻都、次は阿合馬(阿呵篾惕)、次は阿散不別。阿散不別の子斡都蠻(斡惕蠻)。

3。賽典赤贍思丁。

列傳卷十二、賽典赤贍思丁、一名烏馬兒、回回人、別菴伯爾之裔。其國言賽典赤、猶華言貴族也。太祖西征贍思丁率千騎、以文豹白鶻迎降。命入宿衛、從征伐、以賽典赤呼之而不名。別菴伯爾の事は、常德の西使記に「報達之西、馬行二十日、有天房、內有天使神胡之祖葬所也。師名癖顏八兒。房中懸鐵絙。以手捫之、心誠可及、不誠者竟不得捫。經文甚多、皆癖顏八兒所作」とあり。別菴伯爾も、癖顏、兒も、珀兒沙語にて豫

言者の義なる陛黜別兒を音譯したるにて、教祖抹哈篾惕を指せるなり。賽典赤は、太宗の時、山西地方の達魯花赤より入りて燕京の斷事官となり、憲宗の初年、燕京路の總管に遷り、採訪使に擢てられ、憲宗蜀を伐てる時、饋餉供億を主れり。世祖位に卽き、燕京路の宣撫使となり。中統二年中書平章政事となり、至元元年陝西五路西蜀四川の行中書省を置きたる時、出てその平章政事となり、七年分れて四川を鎭し、八年興元にて省事を行ひ、十一年雲南行省の平章政事となり、十六年雲南に卒しき。子五人あり。長は納速剌丁（納思兒兀丁卽納思嚕丁）、次は哈散（哈思散）、次は忽辛（許思薛因）、次は苫速丁兀默里、次は馬速忽（馬思許惕）にて、いづれも高官に陞れり。納速剌丁は、雲南路の宣慰使都元帥として、至元十六年金齒・蒲驃・曲蠟・緬國を招撫し、父贍思丁歿したるに由り、明年雲南行省の左丞となり、尋て右丞に陞り、二十一年平章政事に進み、二十二年合剌章蒙古の軍千人を以て皇子脫歡に從ひ、交趾を征して功あり、二十八年陝西行省の平章政事に進み、明年卒しき。子十二人の內、伯顏、烏馬兒（斡馬兒）、答法兒、忽先（許思薛因）、沙的（撒阿的）、阿容、伯顏察兒の七人、皆高官に陞れり。納速剌丁、伯顏は、皆賽典赤の號を襲ぎ、伯顏察兒は、泰定中中書平章政事となり、燕鐵木兒に殺されき。忽辛は、至元中地方の諸官に歷任し、三十年兩淛の鹽運使、大德中雲南行省の右丞、至大元年江西行省の平章政事、二年職を辭し、三年卒しき。子二人あり、伯杭・曲列と云へり。

賽典赤は、不忽木の傳に塞咥旃とも書き、考異に「石刻濟瀆靈異碑作賽天知、中堂事紀作賽典只兒」とあり。これは、疑も無く喇失惕の史（多遜二、四六七）に撒亦惕額者勒卽撒亦迭者勒と云へる人にして、不忽木の傳の塞咥旃は、最音協へり。集史に據れば、撒亦迭者勒は、孛合喇の人にして、曼古の朝に庫必賚の喀喇章（雲南）に入りし時、その地の太守となり、尋て宰相となり、庫必賚の朝の初に財政を掌れりと云へり。これは、至元十一年に雲南行省の平章となれること、中統二年に中書に入りたること、憲宗の朝に饋餉供億を主りたることを、時代を誤りて後前に記したるなり。又「その子納思嚕丁は、喀喇章の太守に任ぜられ、五六年前に死したるまでその職を保ちき」と喇失惕云へり。喇失惕は、一三〇〇年（大德四年）ごろにその文を書きたれば、五六年前は、至元三十一年又は元貞元年にして、元史に至元二十九年卒とあるより二三年違へり。又陝西行省に遷りたることを喇失惕は未聞かざりしなり。納思嚕丁は、馬兒科保羅も記して、捏思克喇丁と呼べり。納思嚕丁の子阿不別克兒一名巴顏芬屬は、喇失惕の書ける時に在屯（剌桐卽泉州）の太守なりき。この人も、撒亦迭者勒なる祖父の號を用ひ、庫必賚の嗣君の朝に財務の卿となりき（多遜二、四七六、五〇七）。この巴顏芬屬は、納速剌丁の長子なる賽典赤伯顏にして、宰相表に據れば、至元三十年より大德七年まで中書平章政事の欄にあり。その間に福建行中書省に派遣せられたることもありしなるべし。

4。回回卽抹哈篾惕教徒の移住。

札八兒・阿剌瓦而思・賽典赤の外に、元史列傳には、定宗以後の朝に事へたる回回人甚多し。卜咧惕施乃迭兒曰く「成吉思とその後嗣との征服は、亞細亞の東と西との間に交通の大道を開き、西方の民は、極東に往くことを、そこに住むことさへ始めき。蒙古の諸帝は、外國人の支那に移住することを保護し、抹哈篾惕教徒につきては、曼古汗の弟旭剌古が西亞細亞を支配してより、珀兒沙より支那に移住する者著しく殖えたりしと見ゆ。今支那本部の全土に散處し、殊に甘肅山西直隸の三省にて大なる社會をなせる抹哈篾惕教徒の大半は、馬兒科保羅の記したるそれらの諸省の撒喇先どもの子孫ならんことは、然るべきことと思はる。喇失惕額丁は、支那の事を記述して（裕勒の「喀勢」二六九）、當時喀喇章（雲南）の住民は皆抹哈篾惕教徒なりきと云へり。又必兒馬にて潘泰と名づくる雲南の抹哈篾惕教徒、一八五七年（咸豐七年）に大理府を陷し

て、一八七三年（同治十二年）までその地を領したりしものどもは、蒙古の諸帝の時まで溯りて跡附けられ得ることは、大抵慥ならんと信ぜらる」。

次に擧ぐる回回人は、太祖太宗の功臣に非ざれども、支那の朝廷に遠西の異教の民の聚れるは、前後に例なき珍しき事なれば、それらの著しき人の名氏と仕履の概略とを列記せん。

5。怯　烈。

列傳卷二十、怯烈、西域人。世居太原。由中書譯史、從平章政事賽典赤、經略川陜。西域はいづことも知れざれども、賽典赤に從へるを見れば、回回の地より來にける人なるべし。世居太原は、怯烈の子孫の事を云へるなり。屢緬國を征し、至元の末、雲南諸路行中書省の左丞。

6。愛　薛。

列傳卷二十一、愛薛、西域弗林人。通西域諸部語、工星暦醫藥。初事定宗、直言敢諫。時世祖在藩邸器之、中統四年、命掌西域星暦醫藥二司事。後改廣惠司、仍命領之。至元中、翰林學士承旨。大德元年、平章政事。仁宗時、封秦國公、卒、追封佛林忠獻王。弗林即拂林は、古の大秦國なるが故に、秦國公に封ぜられたり。然らば愛薛は、東羅馬の地に生れたる人なるべし。されども世祖紀至元十年正月の條に「改回回愛薛所立京師醫藥院、名廣惠司」とあれば、愛薛は、克哩思惕教徒に非ずして、抹哈篾惕教徒なるべし。

7。察　罕。

列傳卷二十四、察罕、西域、板勒紇城人也。父伯德那、歳庚辰（太祖十五年）、國兵下西域、擧族來歸。板勒紇は、巴勒黒なり。「察罕、魁偉穎悟、博覽强記、通諸國字書」。至元中、奧魯赤に從ひ、湖廣江西兩省に出入し、大德の末、河南行省の郎中。至大中、太子の家令。皇慶元年、平章政事、商議中書省事。脫必赤顏を譯して聖武開天記（今の親征錄）を作れるは、この人なり。

8。曲　樞。

列傳卷二十四、曲樞、西土人。曾祖達不台、祖阿達台、父質理花台。曲樞は、本紀宰相表に皆曲出とあり。大德中より仁宗に事へ、至大元年、太子の詹事、平章軍國重事。四年、錄軍國重事、集賢大學士。長子伯德は、至大中、中書右丞。次子伯帖木兒は、至大中、翰林學士承旨、大都の留守。

9。亦赫抵雅爾丁。

列傳卷二十四、亦赫抵雅爾丁、字太初、回回氏。父亦速馬因（亦思馬額勒）、仕至大都南北兩城兵馬都指揮使。亦赫抵雅爾丁、幼穎悟嗜學、所讀書一過目、卽終身不忘、尤工其國字語。至元中、中書右司郎中。大德中、江東建康道の肅政廉訪使。至大中、參議中書省事。

10。徹里帖木兒。

列傳卷二十九、徹里帖木兒、阿魯溫氏。祖父累立戰功、爲西域大族。卜咧惕施乃迭兒曰く「阿魯溫は、蓋奇兒曼沙と巴固荅惕との間なる訶勒飯ならん」。天暦二年、中書平章政事。至元元年、再中書平章政事となり、南安に貶せられき。

11。贍　思。

列傳卷七十七、儒學二、贍思、字得之、其先大食國人。國旣內附、大父魯坤、乃東遷豐州。太宗時、以材授眞定濟南等路監榷課稅使、因家眞定。父斡直、始從儒先生問學。贍思は、順帝の時、臺憲の官に歷任せり。「邃於經、而易學尤深、至於天文地理鐘律算數水利、旁及外國之書、皆究極之」。その著書の內に、西國圖經、西域異人傳などありしが、今傳はらず。

12。納速剌丁。

列傳卷八十一、忠義二、納速剌丁（納思嚕丁）、字士瞻。其父馬合木（馬呵木惕）、從征襄陽、以勞擢濬州達魯花赤、因家大名。納速剌丁は、順帝の時、淮東宣慰使の掾となり、屢賊と戰ひ、その子寶童海嚕丁西山驢と皆節に死せり。傳に何國の人とも云はざれども、その名に依りて、抹哈篾惕教徒なること知らる。

13。迭里彌失。

列傳卷八十三、忠義四、迭里彌失、字子初、回回人。至正中、漳州路の達魯花赤。漳州明の兵に降れる時節に死せり。又回回の人獲獨步丁は、福州の降れる時節に死し、その兄二人、穆魯丁は、建康にて國難に死し、海魯丁は、列傳卷八十二に見えたる浙東の都元帥伯顏不花的斤と共に信州を守りて死を效しき。

14。阿老瓦丁。

列傳卷九十方伎の工藝に「阿老瓦丁（阿來額丁）、回回氏、西域木發里人也」とあるを、卜咧惕施乃迭兒曰く「木發里は、蓋的阿兒別奇兒の北東の塞にて一二六〇年（中統元年）蒙古に取られたる抹阿弗哪ならん」と云へり。多遜三、三五五頁に見えたる馬牙發兒勤（抹阿弗哪）の塞の堪能なる軍匠の事を參考せよ。「至元八年、世祖遣使徵砲匠于宗王阿不哥」。阿不哥は、皇弟旭剌古の子亦兒汗阿巴咯なり。「王以阿老瓦丁・亦思馬因應詔。二人擧家馳驛至京師、給以官舍。首造大砲、竪于五門前。帝命試之、各賜衣段。十一年、國兵渡江平章阿里海牙、遣使求砲手匠。命阿老瓦丁往、破潭州靜江等郡、悉賴其力。十五年、授宣武將軍管軍總管」。潭州の砲擊は、十二年の冬に在り、靜江の破れたるは、十三年十二月にあり、列傳卷十五阿里海牙の傳に見ゆ。「十八年、命屯田於南京」は、世祖紀至元十八年七月の條に「括回回砲手散居他郡者、悉令赴南京屯田」とあり。「二十二年、樞密院奏、改元帥府爲回回砲手軍匠上萬戶府、以阿老瓦丁爲副萬戶。大德四年、告老、子富謀只襲副萬戶。皇慶元年卒、子馬哈馬沙襲」。

15。亦思馬因。

同じ巻に「亦思馬因（亦思馬額勒）、回回氏、西域旭烈人也」。旭烈は、地の名に非ず。旭烈兀の領地の人と云ふべきを誤れるなり。喇失惕に據れば、この人は、荅馬思庫思より至れり。「善造砲、至元八年、與阿老瓦丁至京師。十年、從國兵攻襄陽、未下。亦思馬因相地勢、置砲于城東南隅、重一百五十斤。機發、聲震天地、所擊無不摧陷、入地七尺。宋安撫呂文煥懼、以城降。既而以功賜銀二百五十兩、命爲回回砲手總管、佩虎符。十一年、以疾卒、子布伯襲職。時國兵渡江、宋兵陳于南岸、擁舟師迎戰。布伯於北岸豎砲以擊之、舟悉沉沒。後每戰用之、皆有功」。

國兵渡江とは、十一年十二月、丞相伯顏大軍を統べて漢口に至り、阿里海牙張弘範等に陽羅堡を攻めさせ阿朮をして青山磯より江を渡らしめたる時の事を云へるなり。又十二年二月、池州を發して、賈似道の舟師を敗る時、伯顏の傳に「伯顏命左右翼萬戶、率騎兵夾江而進、砲聲震百里、宋軍陣動」、阿朮の傳に「遣騎兵夾岸而進、兩岸樹砲、擊其中堅、宋軍陣動」とあり。布伯は、「十八年、加鎮國上將軍回回砲手都元帥、明年、改軍匠萬戶府萬戶、遷刑部尙書」。のち浙東道宣慰使。その子哈散（哈思散）は、高郵府同知。布伯の弟亦不剌金（亦卜喇希姆）は、兄の刑部に遷れる時、萬戶となれり。「致和元年八月、樞密院檄亦不剌金所部軍匠至京師、與馬哈馬沙造砲。天曆二年、以疾卒、子亞古襲」。

16。襄陽府の攻圍。

襄陽攻圍の事は、兀良合の阿朮（速不台の孫、兀良合台の子、列傳卷十五）、史天澤（史天倪の弟、列傳卷四十二）、張弘範（張柔の子、列傳卷四十三）、劉整（列傳卷四十八）の傳に、その砲擊の事は、畏吾兒の阿里海

牙の傳(列傳卷十五)に見えたり。劉整は、中統二年、宋より蒙古に降り、至元三年、南京路の宣撫使となり、「四年十一月入朝、進言「宋主弱臣悖、立國一隅。今天啓混一之機。臣願效犬馬勞、先攻襄陽、撤其扞蔽。」廷議沮之。又曰「自古帝王、非四海一家、不爲正統。聖朝有天下、十七八。何置一隅不問、而自棄正統邪」。世祖曰「朕意決矣」。五年七月、遷鎭國上將軍都元帥。九月、偕都元帥阿朮、督諸軍、圍襄陽、城鹿門堡及白河口、爲攻取計、率兵五萬、鈔略沿江諸郡。皆嬰城避其鋭。俘人民八萬」。阿朮の傳「中統三年、拜征南都元帥。至元四年八月、觀兵襄陽、遂入南郡、云云。初阿朮過襄陽、駐馬虎頭山、指漢東白河口、曰「若築壘於此、襄陽糧道可斷也」。五年、遂築鹿門新城等堡、六年七月、大霖雨、漢水溢。宋將夏貴・范文虎相繼率兵來援復分兵出入東岸林谷間。阿朮謂諸將曰「此張虛形、不可與戰。宜整舟師、備新堡」。諸將從之。明日、宋兵果趍新堡。大破之、殺溺生擒五千餘人、獲戰船百餘艘」。史天澤の傳「至元六年、帝以宋未附、議攻襄陽、詔(左丞相)天澤、與駙馬忽剌出、往經畫之。至則相要害、立城堡、以絕其聲援、爲必取之計。七年、以疾還燕」。張弘範の傳「至元六年、括諸道兵、圍宋襄陽、授(弘範)益都淄萊等路行軍萬戶、佩金虎符。戍鹿門堡、以斷宋餉道、且絕郢之救兵。弘範建言曰「國家取襄陽、爲延久之計者、所以重人命、欲其自斃也。曩者夏貴乘江漲、送衣糧入城。我師坐視、無禦之者。而其境、南接江陵歸峽、商販行旅、士卒絡繹不絕。寧有自斃之時乎。宜城萬山、以斷其西、柵灌子灘、以絕其東。則庶幾速斃之道也」。帥府奏用其言、移弘範兵千人、戍萬山、既城、與將士較射、出東門。宋師大至。將佐皆謂「衆寡不敵、宜入城自守」。弘範曰「吾與諸君在此事。敵至將不戰乎。敢言退者死」。卽擐甲上馬、立遣偏將李庭當其前、他將攻其後、親率二百騎爲長陣。令曰「聞吾鼓則進、未鼓勿動」。宋軍步騎相間突陣。弘範軍不動。再進再却。弘範曰「彼氣衰矣」。鼓之、前後奮擊。宋師奔潰」。續綱目は、帥府を史天澤とし、城萬山を七年十一月の事とせり。劉整の傳「七年三月、築實心臺于漢水中流、上置弩砲、下爲石囤五、以拒敵船。且與阿朮計曰「我精兵突騎、所當者破。惟水戰不如宋耳。奪彼所長、造戰艦、習水軍、則事濟矣」。乘驛以聞。制可。既還、造船五千艘、日練水軍、雖雨不能出、亦畫地爲船而習之、得練卒七萬。八月、復築外圍、以遏敵援」。末の句は、阿朮の傳に「築圍城、以逼襄陽」とあり。張弘範の傳「八年、築一字城、逼襄陽」。一字城は、續綱目に「築峴山虎頭山、爲一字城、聯互諸堡」とあり。劉整の傳の外圍、阿朮の圍城も、蓋同じ物なり。阿朮の傳「范文虎復率舟師來救、來興國又以兵百艘侵百丈山。前後邀擊於湍灘、俱敗走之」。傳は、この事を六年七月夏貴范文虎來援の續きに叙べたれども、續綱目は、八年六月の事とせり。劉整の傳「九年、襄陽帥呂文換登城觀敵。整躍馬前曰「君昧於天命、害及生靈、豈仁者之事。而又齷齪不能戰、取羞於勇者。請與君決勝負」。文煥不答、伏弩中整。三月、破樊城外郭、斬首二千級、擒裨將十六人」。阿朮の傳「九年三月、破樊城外郭、增築重圍以逼之。宋裨將張順張・貴裴軍衣百船、自上流入襄陽。阿朮攻之。順死、貴僅得入城。俄乘輪船、順流東走。阿朮與元帥劉整、分泊戰船以待、燃薪照江、兩岸如晝。阿朮追戰至櫃門關、擒貴、餘聚盡死」。張順張貴は、宋の京湖制置大使李庭芝の遣せる勇將なり。この戰は、劉整の傳稍委し。「諜知文煥將遣張貴出城求援、乃分部戰艦、縛草如牛狀、傍漢水綿亙參錯、聚莫測所用。九月、貴果夜出、乘輪船、順流下走。軍士覘知之、傍岸爇草牛如晝。整與阿朮麾戰艦、轉戰五十里、擒貴于櫃門關、餘聚盡殺之」。阿里海牙の傳「至元五年、命與元帥阿朮劉整取襄陽。始帝遣諸將、命勿攻城、但圍之、以俟其自降。乃築長圍、起萬山、包百丈楚山、盡鹿門、以絕之。宋兵入援者、皆敗去。然城中糧儲多、圍之五年終不下。九年三月、破樊城外郛、其將復閉內城守。阿里海牙以爲「襄陽之有樊城、猶齒之有脣也。宜先攻樊城。樊城下則襄陽可不攻而得」。乃入奏、帝始報可。會有西域人亦思馬因、獻新礮法。因以其人來軍中。十年正月、爲礮攻樊破之。先是宋兵爲浮橋、以通襄陽之援。阿里海牙發水軍、焚其

橋。襄援不至、城乃拔。詳具阿朮傳」。阿朮の傳「先是襄樊兩城、漢水出其間、宋兵植木江中、聯以鐵鎖、中造浮梁、以通援兵。樊恃此爲固。至是阿朮以機鋸斷木、以斧斷鎖、焚其橋。襄兵不能援。十二月、遂拔樊城。襄守將呂文煥懼而出降」。十二月は、十年正月の誤なり。張弘範の傳は、「截江道、斷其援兵」を弘範の計とし、劉整の傳は、「斷木沉索、先攻樊城」を整の計とし、諸傳互に頭功を爭ふは奇觀なり。蓋此等の事は、諸將の誰も心附きたる事にして、一人をしてその功を專にせしむべきには非ず。されども本紀は、阿里海牙の功とし、至元九年十一月の處に「參知行省政事阿里海牙言「襄陽受圍久未下。宜先攻樊城、斷其聲援」。從之。回回亦思馬因、創作巨石砲來獻、用力省、而所擊甚遠。命送襄陽軍前用之」とあり。阿里海牙の傳「阿里海牙既破樊、移其攻具、以向襄陽。一礮中其譙樓、聲如雷霆、震城中。城中洶洶、諸將多踰城降者。劉整欲立碎其城、執文煥、以快其意。阿里海牙、獨不欲攻、乃身至城下、與文煥語曰「君以孤軍城守者數年、今飛鳥路絕。主上深嘉汝忠。若降、則尊官厚祿可心得、決不殺汝也」。文煥狐疑未決。又折矢與之誓、如是者數四。文煥感而出降。遂與入朝。帝以文煥爲昭勇大將軍侍衞親軍都指揮使襄漢大都督」。襄陽の降れるは、世祖紀に據るに、至元十年二月の事なり。

襄陽砲擊の事は、喇失惕の史にも漏されざりき。多遜の引けるに據るに、「支那には庫姆嘎と云ふ砲器あらざりし故に、合罕は荅馬思庫思卽巴勒別克より砲匠を送らしめき。その砲匠の三子阿不別克兒・亦卜喇希姆・馬訶篾惕は、その工人と共に七つの巨砲を造れり。その巨砲は、國界の城にて蠻子の要害なる撒顏府の攻擊に用ひられき」。砲匠の名は漏れたれども、方伎傳の亦思馬因なること疑ひなし。その子阿不別克兒は、傳の布伯、亦卜喇希姆は、傳の弟亦不剌金なり。馬訶篾惕は、亦思馬因の傳に見えざれども、阿老瓦丁の孫馬哈馬沙卽馬訶篾惕沙はそれと同じ人なるに似たり。撒顏府は、卽襄陽府の訛なり。

17。馬兒科保羅の砲術。

馬兒科保羅の談は、甚面白し。その紀行第七十章に撒顏府の盛大にして產物に富めることを叙べたる後に「蠻子の國は皆降りたる後に、その城は三年の間、大汗に抗して守禦せり。大汗の軍は、それを取らんと頻に力めたれども、それの周圍に廣き深き水ありて、北なる只一邊よりの外近づくこと能はざりし故に、成功せざりき。大汗の兵は、城の前に三年居て取る能はざりし時に、大にいらちけり。その時尼科羅波羅と馬弗斡と馬兒科とは曰く「我等は、城を速に降すべき方法を示さん」と云へば、軍の人人は、それはいかなるかを知らんと欲することを答へき。この話は、大汗の前にて起りき。この時は、軍中より使至りて、味方の攻むる能はざる側より、敵は食物の供給を絕えず受くるが故に、封鎖にて城を取るべき樣なしと告げ、大汗は答へて「必取れ、何とか方法を見出せ」と云ひ遣りたる時なりき。その時二人の兄弟と子馬兒科とは申さく「大君。我等の從者の中に、城兵の抵抗する能はざるほどに大なる石を拋ぐべき砲器を作り得る人あり。この砲器を以て城を擊たば、城兵は直ちに降らん」。汗は、かかる砲器をなるたけ速に作らんことを熱心に望めり。今尼科羅とその子とは、直ちにその作事に適する材木を要るだけ取寄せき。その從者の二人、獨逸人と捏思脫兒派の克哩思惕敎徒とは、その工事の達人なりしかば、それらに命じて三百磅の石を拋げ得べき砲器二三臺を作らしめき。かくて立派なる砲器、三百磅以上の石を拋げ得る物、三臺成りき。その砲器用ひらるべく成りし時に、汗もその他の人も、見て大に喜び、その前にてあまたの石を拋げさせ、大に驚歎し、大に工事を賞めき。汗は命じて、その器械を撒顏府の行營に居る軍の處に運ばしめき。その器械行營に達し、据附けられたる時、塔兒塔兒人大に感賞せり。その器械据附けられ、働かせられたる時、各より石を城に拋げ、建物の中に效力を著し、大なる聲と震動とを以て何物にても破り碎きけり。城の民は、この奇異なる新客を見

て、驚き怖ぢて、何を爲すべきか言ふべきかを知らざりき。聚りて評議を凝したれども、この事は魔力にて爲さるゝが如く見えて、いかにしてその器械より遁れ得べきかの評議は思ひ附かれざりき。彼等は、降らずば我等は皆死なんと言ひて、許さるゝだけの條件にて降らんと決議せり。そこに彼等は、直ちに軍の大將に使を遣り、他の諸城の爲したると同じ約束にて降りて、大汗の臣民とならんと欲すと云ひ遣り、大將はそれを許しき。かくて城の民は降り、約束を奉じけり。これは、皆尼科羅と馬弗幹と馬兒科との働きより出來たり。それは、小き事件に非ず。この城と州とは、大汗の領する最善き處の一にして、大なる財賦を汗に納むる故に」。

この談の初に、襄陽の攻圍を宋の滅びたる後とせるは、事實に違へるのみならず、馬兒科保羅等の帝都に達したるは、早くとも、一二七四年、卽至元十一年の末にして、襄陽の降れる十年二月より一年半餘の後なれば、襄陽の砲擊を保羅三人の功に歸すべき由なし。馬兒科の紀行は、大體にては眞實の談多けれども、この一事だけは、西人の何も知らざるを恃みて、亦思馬因等の功を竊みて己等のとしたるは、をかしかりき。保提額の一本と喇木糵の本とに馬兒科の名なく、製砲の業を尼科羅兄弟二人の働きとしたるに由り、保提額は、二人の始めて支那に往きたる時、彼の助言助力を爲したるならんと云へり。然れども馬兒科の名を除きても、不都合の度は少しも減ぜられず。二人の始めて支那に往きたるは、蓋至元の初頃にして、一二六九年卽至元六年に吠尼思に歸りたれば、支那を去りたるは、遲くとも至元五年襄陽攻圍の始れる年より後なることを得ず。二人は、いかで襄陽の圍まれて三年抗禦せるを見ることを得んや。

18。支那の砲術。

裕勒曰く「紀行の一本に、この事の前に、蒙古人支那人は、砲器を更に知らざりきと云へり。これは、全く實ならず。力の大なる砲器の、遠東に知られざりし趣に聞ゆるこの談すらも、蒙古の史に記さるゝ他の事實に合ひ難く思はる。塔巴喀惕亦納昔哩と名づくる珀兒沙の史は、成吉思汗の曼札尼奇合思卽工師長愛喀呵諾徵音と一萬の曼札尼奇卽砲手の軍とを記せり。又誥必勒の用ひたる支那の史も、砲兵の事を記せり」とて速不台の汴京攻擊などの事を引けり。

金史强伸の傳に、天興元年(太宗四年)中京(洛陽)を守れる時、三月「北兵圍之、東西北三面、多樹大砲。云云、伸又創遏砲、用不過數人、能發大石於百步外、所擊無不中」。赤盞合喜の傳、天興元年三月、速不䚟に京城(開封)を攻められたる時、「龍德宮造砲石、取宋太湖靈壁假山爲之、小大各有斤重、其圓如燈毬之狀。有不如度者、杖其工人。大兵(蒙古兵)用砲則不然。破大磑或碌碡爲二三、皆用之。攢竹砲、有至十三稍者、餘砲稱是。每城一角、置砲百餘枚、更遞下上、晝夜不息。不數日、石幾與裏城平。而城上樓櫓、皆故宮及芳華玉谿所拆大木爲之。合抱之木、隨擊而碎。以馬糞麥秸布其上、網索旃褥固護之。其懸風板之外、皆以牛皮爲障、遂謂不可近。大兵以火砲擊之、隨卽延爇、不可撲救。故老所傳、周世宗築京城、取虎牢土爲之、堅密如鐵。受砲所擊、唯凹而已。云云。其攻城之具、有火砲名震天雷者。鐵罐盛藥、以火點之。砲起火發、其聲如雷、聞百里外、所爇圍半畝之上。火點著、甲鐵皆透。大兵又爲牛皮洞、直至城下、掘城爲龕、間可容人。則城上不可柰何矣。人有獻策者、以鐵繩懸震天雷者、順城而下、至掘處火發、人與牛皮、皆碎迸無迹。又飛火槍、注藥、以火發之、輒前燒十餘步、人亦不敢近。大兵惟畏此二物云」。又續綱目、端平三年(太宗八年)十一月、蒙古の將察罕眞州を攻めたる時、知州事丘岳は、「爲三伏、設砲石、待之于西城。敵至、伏起砲發、殺其驍將。敵衆大擾」。喇失惕の史に據れば、一二五三年(憲宗三年)皇弟呼剌古(旭烈兀)、珀兒沙を征する時、大汗莽庫は、支那に人を遣り、そこより砲手火砲手弩手千戸を招ぎき。その弩手の用ひたる弩には、二千五

百歩の射程ある者ありきと云へり。末牧帕哩思の書（五七〇頁、一二四四年の條）に、嚕西亞より遁げ來つる大僧正の話せる塔兒塔兒の特徴の一つは、眞直に烈しく發する砲器を多く彼等の有てることなりとあり。裕勒は、汴京の砲戰、眞州の砲戰、呼剌古の砲兵、嚕西亞の大僧正の談を引きたる後、「かるが故に、蒙古人支那人は、攻擊の機器を持ちしには相違なけれども、西人のそれらに屬する或便利を闕きたりけんこと明なり。支那に庫姆嘎砲器なかりきと喇失都丁の云へることは、解釋を闕けり。庫姆嘎は、恐らくは突兒克人・阿喇卜人の大なる砲器の一種に名づけたる喀喇不嘎の誤ならん。これは、又歐囉巴にて喀喇巴噶・喀剌卜喇など云へり。支那の古の砲器は、明に固有の物にして、その見本（第一第二第三圖）は前に示したるが（それらの圖を取れる書には六七の圖解あれども）、支那人の圖解には、分銅にて器械を働かする物一つも無く、皆人綱にて動かすものなり。されば蓋西方より取れる改良は、必分銅附の槓桿なりけん」と論斷せり。

19。札馬魯丁。

天文志一に曰く「世祖至元四年、札馬魯丁造西域儀象。咱禿哈剌吉、漢言混天儀也。咱禿朔八台、漢言測驗周天星曜之器也。魯哈麻亦渺凹只、漢言春秋分晷影堂。魯哈麻亦木思塔餘、漢言冬夏至晷影堂也。苦來亦撒麻、漢言渾天圖也。苦來亦阿兒子、漢言地理志也。兀速都兒剌不定、漢言晝夜時刻之器」。曆志一を按ずるに、元の初は、金の大明曆を用ひたりしが、耶律楚材は、大明曆の天に後れたるを見て、更に推測してその失を正し、新曆を作り、「題其名曰西征庚午元曆、表上之。然不果頒用。至元四年、西域、札馬魯丁、撰進萬年曆。世祖稍頒行之」。その後許衡、王恂、郭守敬は、「與南北日官陳鼎臣、鄧元麟、毛鵬翼、劉巨源、王素、岳鉉、高敬等、參考累代曆法、復測候日月星辰消息運行之變、參別同異、酌取中數、以爲曆本。十七年冬至、曆成。詔賜名曰授時曆、十八年、頒行天下」。その推驗の精しきことは、今古に卓越したりき。萬年曆は、世に傳はらざれども、必郭守敬等の參考に供せられたるならん。百官志六に、「司天監、掌凡曆象之事」とある外に「回回司天監、掌觀象衍曆」とありて、その沿革に「世祖在潛邸時、有旨徵回回爲星學者、札馬剌丁等以其藝進、未有官署。至元八年、始置司天臺、秩從五品。十七年、置行監。皇慶元年、改爲監、秩正四品。延祐元年、陞正三品、置司天監。二年、命祕書卿提調監事。四年、復正四品」とあり。一八七六年（光緒二年、明治九年）北京の蒙古測天器につき淮黎の述べたる面白き論文を見よ。

又氏族表に祕書志を引きて、「贍思丁（一作苦思丁）、亦回回人」と云ひて、贍思丁は集賢大學士、大司徒、行祕書監事、提調回回司天臺事、その子布八は元統二年代父爲祕書卿とあり。

20。奥都剌合蠻。

蒙古の朝廷に西域の人あまた來て仕へたる中には、往往惡人もありき。太宗紀に「十一年十二月、商人奥都剌合蠻買撲中原銀課二萬二千錠、以四萬四千錠爲額。從之。十二年正月、以奥都剌合蠻充提領諸路課稅所官」。耶律楚材の傳に「自庚寅（太宗二年）定課稅格、至甲午（六年）平河南、歲有增羨。至戊戌（十年）、課銀增至一百一十萬兩。譯史安天合者、諂事鎭海、首引奥都剌合蠻、撲買課稅、又增至二百二十萬兩。楚材極力辨諫、至聲色俱厲、言與涕俱。帝曰「爾欲搏鬬耶」。又曰「爾欲爲百姓哭耶。姑令試行之」。楚材力不能止、乃歎息曰「民之困窮、將自此始矣」。云云。歲辛丑（十三年）、帝崩于行在所。皇后乃馬眞氏稱制、崇信姦回、庶政多紊。奥都剌合蠻、以貨得政柄、廷中悉畏附之。楚材面折廷爭、言人所難言、人皆危之。云云。后以御寶空紙、付奥都剌合蠻、使自書塡行之。楚材曰「天下者、先帝之天下。朝廷自有憲章。今欲紊之、臣不敢奉詔」。事遂止。又有旨、凡奥都剌合蠻所建白、令史不爲書者、斷其手。楚材曰「事之典故、先帝悉委老臣、令史何與焉。事若合理、自當奉行。如不可行、死且不避、況截手乎」。后不悅。楚材辨論不已、因大聲曰

「老臣事太祖太宗三十餘年、無負於國。皇后亦豈能無罪殺臣也」。后雖憾之、亦以先朝舊勳、深敬憚焉。甲辰夏五月、薨于位、年五十五。皇后哀悼、賻贈甚厚」。多遜に據れば、皇后禿喇奇納攝政し、丞相鎮海を罷め、抹哈篾惕敎徒の商人阿卜都兒喇呵蠻を信任して、財賦の事を主らしめしが、庫由克汗位に卽き、阿卜都兒喇呵蠻を誅し、鎮海喀荅克を丞相としけりとあり。この回回の誅せられたることは、元史に漏れたり。

21。阿合馬。

列傳第九十二姦臣傳、阿合馬（阿呵篾惕）、回紇人也。不知其所由進。世祖中統三年、始命領中書左右部、兼諸路都轉運使、專以財賦之任委之。委しき事跡は、本傳に讓りて、その仕履は、至元元年八月、中書平章政事となり、三年正月、制國用使の職を兼ね、七年正月、尙書省を立て、制國用使司を罷めたる時、阿合馬は平章尙書省事となれり。「阿合馬爲人多智巧言、以功利成效自負、衆咸稱其能。世祖急於富國、試以行　、頗有成績。又見其與丞相線眞史天澤等爭辨、屢　以詘之。由是奇其才、授以政柄、言無不從。而不　專愎益甚矣」。九年、尙書省を罷め、又中書平章政事となり、十二年、奏して諸路の轉運司を立て、亦必烈金（亦卜喇希姆）、札馬剌丁（　　）、張暠、富珪、蔡德潤、紇石烈亨、阿里和者（阿里闊札）、完顏廸、姜毅、阿老瓦丁（阿來額丁）倒剌沙　等を轉運使とし、十六年、その子忽辛（許思薛因）は中書右丞となれり。宰相表には、至元十九年、中書左丞相の欄に阿合馬の名あり、高觿張九思の傳には丞相阿合馬とあれども、世祖紀と本傳とは丞相となれることを載せず。錢大昕の考異は、宰相表を誤れりとし、「阿合馬未爲丞相。此誤高一格、刊本之譌」と云へり。されども續通鑑綱目には、十八年十二月「以甕吉剌帶爲右丞相」の下に「阿合馬爲左丞相」と記せり。「時阿合馬在位日久、益肆貪橫、援引姧黨郝禎耿仁、驟升同列、陰謀交通、專事蒙蔽、逋賦不蠲、衆庶流移。云云。內通貨賄、外示威刑、廷中相視、無敢論列。有宿衞士秦長卿者、慨然上書發其姦、竟爲阿合馬所害、斃于獄、事見長卿傳。十九年三月、世祖在上都、皇太子從。有益都千戶王著者、素志疾惡、因人心憤怨、密鑄大銅鎚、自誓願擊阿合馬首。會妖僧高和尙、以祕術行軍中、無驗而歸、詐稱死、殺其徒、以尸欺衆逃去、人亦莫知。著乃與合謀、以戊寅日、詐稱皇太子還都作佛事、結八十餘人、夜入京城、旦遣二僧詣中書省、令市齋物。省中疑而訊之、不伏。及午、著又遣崔總管、矯傳令旨、俾樞密副使張易、發兵若干、以是夜會東宮前。易莫察其僞、卽令指揮使顏義領兵俱往。著自馳見阿合馬、詭言太子將至、令省官悉候東宮前。阿合馬遣右司郎中脫歡察兒等數騎出關、北行十餘里、遇其衆。僞太子者、責以無禮、盡殺之、奪其馬、南入健德門。夜二鼓、莫敢何問。至東宮前、其徒皆下馬。獨僞太子者、立馬指揮、呼省官至前、責阿合馬數語。著卽牽去、以所袖銅鎚碎其腦、立斃。繼呼左丞郝禎至、殺之、囚右丞張惠。樞密院御史臺留守司官、皆遙望、莫測其故。尙書張九思、自宮中大呼、以爲詐。留守司達魯花赤博敦、遂持梃前擊立馬者墜地、弓矢亂發。衆奔潰、多就禽。高和尙逃去、著挺身請囚。中丞也先帖木兒馳奏。世祖時方駐蹕察罕腦兒、聞之震怒、卽日至上都、命樞密副使孛羅、司徒和禮霍孫、參政阿里等、馳馹至大都、討爲亂者。庚辰、獲高和尙于高梁河。辛巳、孛羅等至都。壬午、誅王著·高和尙于市、皆醢之、幷殺張易。著臨刑大呼曰「王著爲天下除害。今死矣。異日必有爲我書其事者」。阿合馬死、世祖猶不深知其姦、令中書毋問其妻子。及詢孛羅、乃盡得其罪惡、始大怒曰「王著殺之、誠是也」。乃命發墓剖棺、戮尸于通玄門外、縱犬啗其肉。百官士庶聚觀稱快。子姪皆伏誅、沒入其家屬財產。云云」。この騷動の事は、猶高觿張九思の傳に詳かなり。本紀に依れば、阿合馬の長子忽辛、次子抹速忽（馬　）、三子阿散（哈思散）、四子忻都、姪宰奴丁等皆誅せられ、その黨與にて省部に官する者七百十四人皆黜けられき。又張九思の傳に「賊之入也、矯太子命、徵兵樞密副使張易。易不加審、遽以兵與之。易既坐誅、而刑官復論以知情、將傳首四方。九思啓太子曰「張易應變不審、而授賊

以兵、死復何辭。若坐以與謀、則過矣、請免傳首」。皇太子言於帝、遂從之」とあれば、張易の謀に與らざることは明かなり。

　喇失惕の史（多遜二、四六七）に依れば、阿呵篾惕は、牙克撒兒帖思河に近き弗納客惕（後に沙呵嚕乞亞）の人にして、札梅合屯の入内する前より知られ、入内の後その宮（斡兒朶）に仕へ、遂に庫卜賚の信用を得たり。札梅合屯は、后妃表世祖の第二斡耳朶なる察必皇后、弘吉列氏、魯忠武王按嗔那顏の女にして、中統の初に皇后となり、至元十八年に崩じ、昭睿順聖皇后と謚せられたる人なり。

　馬兒科保羅の第二十三章「拜阿羅黒馬惕の暴虐云云」と題する一章は、阿合馬の事を述べたるなり。その叙事のやゝ違へるは、馬兒科の覺え誤りもあるべく、書取りたる人の書き誤りもあるべし。阿黒馬惕の貪淫なることを述べたる後に、「千戸潺出と云ふ支那人は、母と女と妻とを阿黒馬惕に汙されて深く怨み、萬戸晩出と云ふ支那人と共に丞相を殺さんことを謀りき」。千戸潺出は、樞密副使張易の誤にして、萬戸晩出は、即千戸王著なり。「阿黒馬惕は、宮門に至れる時、京城の衛士一萬二千の長なる科噶台と云ふ塔兒塔兒に遇ひて、問答ありき。この科噶台は、その夜宮中に宿衛せる工部侍部高鑴にて、蒙古人に非ず、渤海の人なり。阿合馬を撃ち殺したるは王著にして、太子と僞れるは他の人なるを、「阿黒馬惕は、晩出を眞金なりと思ひ、その前に拜りたる時、劍をもて待ち構へ居たる潺出は直ちにその頭を斬り落しき」と云へり。「入口に留まり居たる科噶台は、この事を見ると直に「賊なり」と叫びて、急に晩出に箭を放ちて、その坐れる處を射殺し、同時にその衆を呼びて潺出を捕へさせき」とあるは、高鑴の傳に「燭影下、遙見阿合馬及左丞郝禎巳被殺、鑴乃與九思大呼曰「此賊也」、叱衛士急捕之。高和尚等皆潰去、惟王著就擒」と云へる事なり。王著をそこに殺されたりとせるは、誤れり。「科噶台は、直ちに大汗に使者を發し、事の顚末を奏しき」は、高鑴の傳なる黎明、中丞也先帖木兒與鑴等、馳驛往上都、以其事聞」なり。馬兒科は、この章の末に「今あらゆるこの事の起りし時に、馬兒科はそこに居りき」と附け加へたり。迭邁剌は、通鑑綱目を譯して、阿合馬の罪惡を世祖に告げたる樞密副使孛羅を馬兒科らしく保羅と譯したれば、裕勒はそれにだまされて、「馬兒科君のそこに居たることとその折にその正直なる行とは、支那の歴史家に忘れられざりしは、愉快なる事なりき」と嬉しがりたれども、孛羅は、實は馬兒科にあらず。世祖紀に、至元七年十二月「以御史中丞孛羅兼大司農卿」、十二年四月「以大司農御史中丞孛羅爲御史大夫」、十四年二月「以大司農御史大夫孛羅爲樞密副使、兼宣徽使、領侍儀司事」とある人にして、馬兒科保羅の支那に至れるより遙に前より蒙古の顯官となりたる人なりき。

22。烏巴都剌。

　氏族表に「烏巴都剌、亦回回人」と云ひて、曾祖木沙剌福丁、祖札剌魯丁北京路木忽里兀察兒必、父亦福的哈魯丁翰林學士承旨、烏巴都剌中書參知政事を擧げ、又「倒剌沙、亦回回人」と云ひて、兄馬某沙湖南行省左丞、倒剌沙中書左丞相、その子潑皮木八剌沙を擧げたり。烏巴都剌は、本紀には兀伯都剌、宰相表には烏伯都剌と書き、大德十一年武宗卽位の初に中書參知政事（武宗紀に八月と九月と二所に書きたるは重複なり）、至大元年中書左丞、四年中書右丞、仁宗皇慶二年中書平章政事、英宗の時江浙行省に出され、泰定帝の時復中書に入り、倒剌沙の敗れたる時、燕鐵木兒に殺されき。

23。倒剌沙。

　倒剌沙は、泰定帝の重臣にして、帝の晉王として北邊に居りし時より王府の内史となりき。泰定帝は、世祖の曾孫、裕宗（皇太子眞金）の孫、成宗の姪、武宗・仁宗の從兄にして、顯宗（晉王甘麻剌）の長子なり。本紀に「倒剌沙得幸於帝、常偵伺朝廷事機」とあれども、委しき事情は考ふるに由なし、天曆の朝臣の誣罔

に出でたる說なるかも知るべからず。至治三年八月英宗（仁宗の子）、上都より南に還りて南坡に蹕を駐めし時、御史大夫鐵失等逆を謀り、右丞相拜住を殺し、英宗を幄殿に弑し、その黨諸王按梯不花知樞密院事也先鐵木兒、皇帝の璽綬を奉じて帝の迎へに往きたれば、九月癸巳、帝は龍居河にて卽位し、天下に大赦し、明日倒剌沙を中書平章政事となしき。この時の赦書は、蒙古文の俗文譯にて珍しければ、こゝに引かん。「薛禪皇帝可憐見嫡孫裕宗皇帝長子我仁慈甘麻剌爺爺根底、封授晉王、統領成吉思皇帝四个大斡耳朶及軍馬達達國土、都付來、依著薛禪皇帝聖旨、小心謹愼、但凡軍馬人民的不揀甚麽勾當裏、遵守正道行來的上頭、數年之間、百姓得安業。在後完澤篤皇帝、敎我繼承位次、大斡耳朶裏委付了來。委付了的大營盤看守著、扶立了兩箇哥哥曲律皇帝普顏篤皇帝姪碩德八剌皇帝。我累朝皇帝根底、不謀異心、不圖位次、依本分、與國家出氣力行來。諸王哥哥兄弟每衆百姓每也都理會的也者。今我的姪皇帝生天了也麽道、迤（例）諸王大臣、軍上的諸王駙馬臣僚、達達百姓每衆人商量著、「大位次不宜久虛。惟我是薛禪皇帝嫡派、裕宗皇帝長孫、大位次裏合坐地的體例有、其餘爭立的哥哥兄弟也無有。這般晏駕其間、比及整治以來、人心難測、宜安撫百姓、使天下人心得寧、早就這裏卽位」提說上頭、從著衆人的心、九月初四日、於成吉思皇帝的大斡耳朶裏、大位次裏坐了也。交衆百姓每心安的上頭、赦書行有」。かくてその月辛丑、倒剌沙の兄馬某沙を知樞密院事とし、十月逆賊也先鐵木兒等を行在所に誅し、右丞相旭邁傑御史大夫紐澤を遣して逆賊鐵失を大都に誅し、江淛行省の平章政事兀伯都剌を中書平章政事とし、十一月、車駕大都に至り、十二月、諸王按梯不花を海南に流し、倒剌沙を中書左丞相とせり。泰定元年四月、嶺北行省の左丞潑皮を中書左丞とし、二年二月、右丞とし、十一月倒剌沙を錄軍國重事とせり。致和元年七月庚午、帝上都に崩じ、九月、倒剌沙、皇太子阿速吉八を立てて、天順と改元せり。

明宗紀に「泰定皇帝崩于上都。倒剌沙專權自用、踰月不立君、朝野疑懼。時僉樞密院事燕鐵木兒、留守京師、遂謀擧義」と云ひ、燕鐵木兒の傳には「丞相倒剌沙專政、利於立幼」とあり。考異にそれを駁して「泰定踐祚之日、儲位早定、朝野本無異議也」とて倒剌沙の「踰月不立君」を實錄の誣詞とせり。委しくは、下の〇〇〇頁に引けり。かくて八月甲午、燕鐵木兒は、百官を興聖宮に集め、兵を以て脅して、武宗の子を立てんことを誓ひ、手づから平章烏伯都剌伯顏察兒を縛り、武宗の次子懷王圖帖睦爾（文宗）を江陵より迎へんが爲に使を遣しき。九月辛未、烏伯都剌を殺し、伯顏察兒を流して、その家を籍し、壬申、文宗位に卽き天曆と改元せり。この時天順帝已に上都に卽位し、大兵を遣して大都の叛者を征したるに、燕鐵木兒自ら出てて禦ぎ戰ひ、劇戰數回の後、北軍遂に敗れ、十月辛丑、倒剌沙等、皇帝の寶を奉じて出て降り、天順帝はいかになれるか、元史に記せず。已酉、烏伯都剌の家貲を追理し、庚戌、倒剌沙を獄に下し、十一月庚申、倒剌沙・馬某沙・潑皮・木八剌沙等の家貲を追理し、癸未、倒剌沙・馬某沙等を殺しき。

24。氏族表に引ける回回人。

氏族表は、諸書を引きて、これらの外にあまたの回回人を載せたり。元統己酉進士錄に見えたる穆古必立剌馬丹は、皆回回氏、脫穎は木速魯蠻氏にて、いづれもその父祖三代の名を列記せり。木速魯蠻は、卽木速兒蠻にて、抹哈篾惕敎徒と云ふに同じ。又進士錄に、阿都剌は回回昔馬里の人とありと云へり。昔馬里は考へ得ず。祕書志には、至元六年の祕書卿回回人木八剌吉、大德十一年祕書少監となれる木速蠻（木速兒蠻）の節歇兒的あり。歐陽玄の集には大食國の人也黑迭兒あり、茶迭兒局諸色人匠總管府の達魯花赤となり、その子馬合馬沙その職を襲ぎ、馬合馬沙の子四人密兒沙・木八剌沙・忽都魯沙・阿魯渾沙、密兒沙の子烏馬兒、阿魯渾沙の子蔑里沙あり。同じ集に見えたる燕京の大斷事官于闐の人雅老瓦實、朱德潤の集に見えたる于闐の人

にて不花剌氏なる馬合馬、進士錄なる回回于闐の人哈八石、回回阿里馬里の人烏馬兒の如きは、いづれも抹哈篾惕敎徒なれども、葱嶺以東の人なり。危素の集なる耶爾脫忽璘回紇古速魯氏は、いづこの人なるか確ならず。進士錄なる別羅沙は、西域別失八里の人にて、「其母回回氏、妻苔失蠻氏、當亦回回也」。別羅沙の曾祖木八剌、祖別魯沙、父苦思丁、兄默理契沙、皆回回の名に似たり。

七。康里。

1。艾貌拔都。

列傳卷十「艾貌拔都、康里氏。初從雪不台那演、征欽察、攻河西城、收西關、破河南、繼從定宗、略地阿奴、皆有功、又從四太子南伐、命充怯憐口阿荅赤孛可孫」。雪不台那演は、卽速不台那顏なり。阿奴は、人の名にして、地の名に非ず、金の咸平路の宣撫使蒲鮮萬奴にして、太祖十年遼東に據り天王と稱し、十一年蒙古に降りて復叛きたる人なり。親征錄辛未（太祖六年）南征の條に野狐嶺の敵將を招討九斤監軍爲奴と書けるを、續綱目には完顏九斤完顏萬奴とあり。李文田曰く「爲奴、當作萬奴、卽元史太祖紀蒲鮮萬奴也」。喇失惕の史に注奴とあるは、卽萬奴にして、又こゝの阿奴とも音近し。又親征錄甲戌（太祖九年）金主南遷の條に「以招討也奴爲咸平路宣撫」とあるを、沈曾植は「當作也奴、卽萬奴也」と云へり。「從定宗、略地阿奴」は、太宗五年の秋、皇子貴由（定宗）、諸王按赤帶等の、萬奴を征したる時、艾貌も從へるなり。「從四太子南伐」は、太宗三年、皇弟拖雷（四太子）、陝西に入り、金房より漢江を渡り、四年正月禹山三峯山の戰ありし時、愛貌も從へるなり。然らば南伐は前にあり、東征は後にあるを、この傳は次序を顚倒せり。次に「又從兵、渡江攻鄂、以疾卒于軍」と云へるは、憲宗九年皇弟忽必烈南伐の時の事なり。その子也速台兒は、世祖に事へて、屢軍に從ひ、「以功升武略將軍千戶、賜金符。又招手號新軍二千五百餘人、升宣武將軍總管、賜虎符。有旨征日本、也速台兒願效力、賜以弓矢、進懷遠大將軍萬戶、至元二十年、授泰州萬戶府達魯花赤。二十三年、遷昭勇大將軍欽察親軍都指揮使」。

この也速台兒は、列傳卷二十に別に傳ありて、「也速䚟兒、康里人。父愛伯伯牙兀、太祖時率衆來歸」と云へり。愛伯は、卽艾貌、伯牙兀は、愛伯の姓なり。艾貌の傳に康里氏とあるは、正しくは康里の伯牙兀氏と云ふべきなり。卜咧惕施乃迭兒曰く「伯牙兀は、蓋巴牙兀惕なり。巴牙兀惕は、抹哈篾惕敎徒の記者に據れば（多遜一、一九七）、闊喇自姆の沙抹哈篾惕の母突兒罕合屯の屬する康克里の一部族の名なりき。蒙果勒の始めて闊喇自姆を攻めし時、その國に康克里人あまた居たりき」。この巴牙兀惕は、實錄卷一、九頁に見えたる蒙古の巴牙兀歹、輟耕錄蒙古七十二種の內なる伯要歹とは全く異なり。次に「初以五十戶從軍、力戰而死」とあるは、艾貌の傳なる「從兵、渡江攻鄂、以疾卒于軍」を云へるなり。

也速䚟兒は、父の官を襲ぎ、丞相伯顏に從ひ南伐し、「世祖賜金符、加爲千戶、督五路招討、至元十六年、改金虎符管軍總管。江南平、錄功、進懷遠大將軍管軍萬戶、領江淮戰艦數百艘、東征日本、全軍而還。有旨、特賜養老一百戶、衣服弓矢鞍轡有加。二十二年、移鎭泰州。時籍民丁爲兵、得萬人、以也速䚟兒爲欽察親軍指揮使統之」とあり。艾貌の傳なる也速台兒といかに似たるかを見よ。

すべて元史には、敍事の重複夥しき上に、一人の傳を重複して二所に書きたるもの往往有り。顧炎武曰く「元史列傳八卷速不台、九卷雪不台、一人作兩傳。十八卷完者都、十九卷完者拔都、亦是一人作兩傳。蓋其成書不出于一人之手」。錢大昕曰く「雪不台、卽速不台、譯音無定字也」。朱錫鬯云「元史旣有速不台矣、而又別出雪不台。旣有完者都矣、而又別出完者拔都。旣有石抹也先矣、而又別出石抹阿辛。以及阿塔出忽剌出兩人、

既附書于杭忽思直脫兒之傳矣、而又爲立傳。至於作佛事、則本紀必書、游皇城、入之禮樂志、（原注。當云祭祀志、朱誤記。）皆乖謬之甚者」。予按、元史列傳之重複者、如第十卷也蒲甘卜傳、附見其子昂吉兒、而第十九卷、又有昂吉兒傳、第十卷塔不己兒傳、附見其孫重喜、而第二十卷、又有重喜傳、第十卷、已有阿朮魯傳、而第十八卷懷都傳、又附書阿朮魯事、第五十四卷譚資榮傳、附見其子澄、而第七十八卷良吏傳、又有譚澄、皆朱氏所未及糾也」。錢氏は、洵に善く取調べたれども、艾貌拔都の傳に その子也速台兒の事を附記しながら、重ねて也速䚟兒の傳を立てたる事に心附かざりしは、二傳互に詳略あり錯誤ありて、異なる人の如くも見ゆるが爲なるべし。

次に擧ぐる康里人は、國初の功臣に非ざれども、前の回回人の如く、支那の朝廷に例なき遠人の集合を示さんが爲に列記するなり。

2。不忽木。

列傳卷十七「不忽木、一名時用、字用臣、世爲康里部大人。康里、卽漢高車國也」。高車は、康居の誤なり。高車は、魏書に見え、漢の世には聞えず。又高車は、鐵勒の同種にして、康里とは異なり。「祖海藍伯、嘗事克烈王可汗。王可汗滅、卽棄家、從數十騎、望西北馳去。太祖遣使招之。荅曰「昔與帝同事王可汗。今王可汗既亡、不忍改所事」遂去、莫知所之。子十人、皆太祖所虜。燕眞最幼、年方六歲、太祖以賜莊聖皇后（拖雷の妃）。后憐而育之、遣侍世祖於藩邸。長從征伐有功。云云、官止衞率」。その仲子不忽木は、「資稟英特、進止詳雅。世祖奇之、命給事裕宗東宮、師事太子贊善王恂。恂從北征、乃受學於國子祭酒許衡、日記數千言。衡每稱之、以爲有公輔器」。その學成りて官に就くに及びて、純然たる儒生なりき。至元十四年、利用少監、十五年、燕南河北道の提刑按察副使、十九年、提刑按察使、二十一年、參議中書省事、二十三年、刑部尚書

二十七年、翰林學士承旨、二十八年、中書平章政事。三十年「帝大漸、與御史大夫月魯那顏（哈剌哈孫）、太傅伯顏並受遺詔、留禁中」。元貞二年、昭文館大學士平章軍國事、大德四年卒しき。長子回回は、陝西行省の平章政事。その事蹟は、列傳卷三十弟巎巎の傳に附記せり。巎巎も、儒臣にして、至正四年江浙行省の平章政事、五年翰林學士承旨。又海藍伯の裔に太子の司經拜住なる人あり、明の兵京師に入りたる時、井に入りて自殺せり。その事は、列傳卷八十三忠義四閔本の傳に附記せり。

3。禿忽魯。

列傳卷二十一「禿忽魯、字親臣、康里亦納之孫、亞禮達石第九子也」。亦納は、何人なるか、知らず。欽察部主亦納思に似たれども、部の名異なり。禿忽魯は、不忽木と同じく許衡に學び、世祖嘗て康秀才と呼べり。至元の末、湖廣行省の右丞、成宗の時、江浙行省の右丞。

4。斡羅思。

列傳卷二十一「斡羅思、康里氏。曾祖哈失伯要、國初款附、爲莊聖太后宮牧官」。哈失伯要は、名は哈失、姓は巴牙兀にて、愛伯伯牙兀と同姓なり。「祖海都、從憲宗、征釣魚山、歿于陣。父明里帖木兒、世祖時爲必闍赤、後爲太府少監」。斡羅思は、至元二十九年、八番順元等處の宣慰使都元帥、大德六年、羅羅思の宣慰使兼管軍萬戸、武宗の時、四川行省の平章政事。その子慶童は、列傳卷二十九に傳あり、仁宗の時より朝に仕へ、至正十年、江浙行省の平章政事、二十五年、陝西行省の左丞相、二十八年中書左丞相、京城破れたる時殺されき。

5。塔里赤。

列傳卷二十二「塔里赤、康里人。其父也里里白、太祖時、以武功授帳前總校」。塔里赤は、世祖の時、蒙古

軍を率ゐ、南征して功あり、淛東道の宣慰使に終れり。

6。明安。

列傳卷二十二「明安、康里氏。至元十三年、世祖詔、民之蕩析離居、及僧道漏籍、諸色人不當差徭者萬餘人、充貴赤、令明安領之」。貴赤は、走る人なり。語解に、桂齊と改めて、「善跑人也」と注せり。日本語にて足輕組と云ふが如し。「二十年、授定遠大將軍中衞親軍都指揮使。明年、賜佩虎符、領貴赤軍北征。又明年立貴赤親軍都指揮使司、命爲本衞達魯花赤。尋奉旨領蒙古軍八千北征」。二十年の「又明年」は、二十二年なり。然るに元史八六百官志二樞密院の所管に「貴赤衞親軍都指揮使司。至元二十四年立、置都指揮使二員、副都指揮使二員。二十九年、置達魯花赤一員」とあれば、「又明年」は、二十四年の誤なるべし。その年は、未達魯花赤を置かれざれば、本衞達魯花赤は、何かの誤なるべし。明安は、それより海都等諸叛王の軍と屢戰ひ、「二十九年、以功陞定遠大將軍貴赤親軍都指揮使司達魯花赤」とあるは、百官志の語と合へり。その後「大德二年、復將兵北征、與海都戰、七年歿于軍」。その子帖哥台、弟脫迭出、帖哥台の子普顏忽里、皆貴赤親軍都指揮使司の達魯花赤。帖哥台(後に)、帖哥台の弟孛蘭奚孛、蘭奚の子桑兀孫・乞荅海二人、皆中衞親軍都指揮使。

7。阿沙不花。

列傳卷二十三、阿沙不花の傳に曰く「阿沙不花者、康里國王族也。初太祖拔康里時、其祖母苫滅古麻里氏新寡、有二子曰曲律・牙牙、皆幼。而國亂家破、無所依。欲去而歸朝廷、念無以自達。一夕有數駝、皆重負、突入營中、驅之不去。且乃繫駝營外、置所負其旁、夜復納營中、候有求者歸之。如是十餘日、終無求者。乃發視其裝、皆西域重寶。驚曰「殆天欲資我而東耶。不然、此豈吾所宜有」。遂驅駝、載二子、越數國、至京師時太祖已崩、太宗立、盡獻其所有。帝深異之、命有司治邸舍、具廩餼、以居焉」。洪鈞の康里補傳に曰く「太祖十六年辛巳、以西域不日底定、命哲別・速不台、北征奇卜察克。既殘其聚、復敗俄羅斯軍。十九年、東入康里、乘勝席捲、前無堅城、遂躪其部」と云ひて、自注に「西書記征康里、不詳。元史速不台傳「蔑里乞部主霍都奔欽察。速不台追之、與欽察戰於玉峪敗之」。康里在東、欽察在西。如往欽察、必經康里。則當帝征西域之前、已臨其境。然阿沙不花傳云「云云、至京師、時太祖已崩」。據此、則康里之拔、必在太祖季年。其爲哲速二將北征之役、更無疑義。而速不台在太祖朝、僅一至欽察、傳乃誤爲兩役、亦可取以爲證」と云へり。かの寡婦は、「居二年、聞國中已定、謁帝欲歸。帝曰「汝昔何爲而來、今何爲而去」。且問其所欲。對曰「臣妾昔以國亂無主、遠歸陛下。今賴陛下威德、聞國已定、欲歸守墳墓耳。妾惟二子、雖愚無知、願留事陛下」。帝大喜、立召二子入宿衞、而禮遣之。後十三年復來、則二子已從憲宗伐蜀矣。逮至和寧、聞憲宗崩、諸將皆還、而二子獨後、心方以爲憂。過一古廟、因入禱焉。若聞神語、連稱好好、而不知其故。問其國人通漢語者、知爲古語、還至舍、則二子已至矣。遂留居焉。曲律無子。牙牙後〔追〕封康國王、生六子、阿沙不花最賢、年十四入侍世祖云云」。世祖の時、千戶を以て昔寶赤を領し、成宗の時、大宗正札魯火赤、武宗の時、中書平章政事錄軍國重事康國公知樞密院事。子伯嘉訥は、翰林侍讀學士。氏族表に據れば、阿沙不花の兄四人、孛別舍兒和者吉不別斡禿蠻。和者吉の子四人、燕不憐は、遼陽行省の平章政事太保興國公。燕八思提は、大司農別不花は、嶺北行省の平章政事。伯撒里は、太師中書右丞相永平王。伯嘉訥の兄海赤兒は、順寧府の達魯花赤。阿沙不花の弟脫脫は、別に傳あり。

8。脫脫。

列傳卷二十五に曰く、「康里脫脫、父曰牙牙、由康國王封雲中王。阿沙不花之弟也。脫脫姿貌魁梧。少時從

其兄斡禿蠻、獵於燕南、斡禿蠻使歸獻所獲。世祖見其骨氣沈雄、步履莊重、歎曰「後日大用之才、已生於今」。卽命入宿衞」。丞相伯顏も見て驚き、「吾老矣。他日可大用者、未見汝比」と云ひしが、後果して賢相となれり。「大德三年、武宗以皇子撫軍北鄙、脫脫從行。五年、叛王海都犯邊、脫脫從武宗討之。進擊海都、大破其衆。云云。兵之始交也、武宗銳欲出戰。脫脫執輿力諫。武宗怒、揮鞭抶其手、不退、乃止。已而武宗與大將朶兒荅哈語及之。朶兒荅哈曰「太子在軍中、如身有首、如衣有領。脫有不虞、衆安所附。脫脫之諫可謂忠矣」。武宗深然之」。朶兒哈荅は、世祖紀に朶兒朶海、牙忽都の傳に朶兒朶哈、土土哈玉哇失の傳に朶兒朶懷とあり。「身有首、衣有領」は、蒙古の俗語「別耶帖哩兀禿、迭額勒札哈禿」の直譯なり。至大元年、中書左丞相、仁宗の時、江浙行省の左丞相、英宗の時、御史大夫、泰定四年薨じき。「子九人、其最顯者二人、曰鐵木兒塔識、曰達識帖睦邇、各有傳」。(列傳卷二十七)。鐵木兒塔識は、至正元年、中書平章政事、七年左丞相。達識帖睦邇は、至正十五年、中書平章政事、江浙行省の左丞相。

9。哈麻雪雪等。

列傳卷九十二姦臣傳にも、康里の兄弟あり。「哈麻、字士廉、康里人。父禿魯。母爲寧宗乳母。禿魯以故封冀國公、加太尉、階金紫光祿大夫。哈麻與其弟雪雪、早備宿衞、順帝深眷寵之。而哈麻有口才、尤爲帝所褻幸、累遷官爲殿中侍御史。雪雪累官集賢學士」。至正十四年、哈麻は中書平章政事となり、丞相脫脫と脫脫の弟御史大夫也先帖木兒とを讒害し、「十五年四月、雪雪由知樞密院事、拜御史大夫。五月、哈麻遂拜中書左丞相。國家大柄、盡歸其兄弟二人矣」。十六年、哈麻不軌を謀れるを、その妹壻禿魯帖木兒に帝に告げられ、「遂詔哈麻於惠州安置、雪雪於肇州安置、比行俱杖死、仍籍其家財」。

氏族表に曰く「康里人見於史者、又有定柱、至正中中書右丞相。見於祕書志者、有斅化的、至順二年祕書少監、乞荅撒里、元統元年祕書省丞」。

八。欽察卽乞卜察兀惕。

1。苦徹拔都兒。

列傳卷十「苦徹拔都兒、欽察人。初事太宗、掌牧馬、從攻鳳翔、戰潼關皆有功」。その後汴京を攻め、蔡州を攻むるに皆從ひ、定宗憲宗の世を歷て、至元十四年まで、從軍殆ど虛歲なく、滁州路總管府の達魯花赤となれり。子脫歡は、滁州萬戶府の達魯花赤。脫歡の子麻兀は、祖の職を襲ぎ、次子鎖住は、父の職を襲げり。欽察人にて太宗に事へ、元史に傳あるものは、苦徹拔都兒のみなれども、憲宗以後の朝に事へて名を顯せるもの多きことは、康里人に遜らず。

2。土土哈。

列傳卷十五、欽察の土土哈の傳は、虞集の句容郡王世績碑(元文類卷二十六)に依り、やや增損改修したるものなり。碑に曰く「欽察之先、武平北折連川按荅罕山部族也。後還西北、卽玉黎北里之山居焉。土風剛悍、其人勇而善戰。自曲年者、乃號其國人曰欽察、爲之主而統之」。この文に怪むべき所あり。武平は、金志地理志北京路大定府の屬縣、元史地理志遼陽行省大寧路の屬縣にして、今の直隸承德府の境內に在り、文宗紀に至順元年、土土哈の親族なる不花帖木兒を武平郡王に封じたることも見えて、支那の內地なること明かなり。折連川は、兵志三馬政の篇太僕寺の牧地十四處を列記したる第一に東路折連怯呆兒等處と見え、碑に武平の北と云へば、武平より上都に赴く間に在るべし。玉黎北里の山は、兵志牧地の第二に玉你伯牙上都周圍と見え、折連怯呆兒等處の管內にも玉你伯牙斷頭山と見えたれば、玉黎北里の里は野の誤りにて、この山も上都

（今の多倫諾爾）の邊にて、折連川よりさほど遠からざる所にあるべし。泰不花の傳に「世居白野山」とある白野は、玉你を略きたるならん。然らばこの移住は、欽察の祖先の事に非ずして、土土哈の父祖の蒙古に歸してより、武平上都の閒にて移住したるを、かくは誤り書けるならん。元史列傳にも、これに似たる誤りあり。列傳卷十に「抄兒、別速氏、世居汴梁陽武縣、從太祖、收附諸國、有功、」卷二十に「完者拔都、欽察氏、其先彰德人」「怯烈、西域人、世居太原、云云」と云へるが如き、その類なり。土土哈の傳は、曲年を蒙古人の如く曲出と誤り、「後遷」以下の十三字を「自曲出、徙居西北玉里伯里山、因以爲氏」と改めて、土土哈を玉里伯里氏となせり。されども土土哈は、欽察と云ふより外に、姓なきものと見えて、土土哈の孫燕鐵木兒の傳にも燕鐵木兒の女なる順帝の荅納失里皇后の傳にも欽察氏とのみあり、元統二年立后の册文にも「荅爾皇后欽察氏」とあれば、玉里伯里氏の說、信ずべからず。

然れども燕鐵木兒の傳に「立燕鐵木兒女伯牙吾氏爲皇后」、篾兒乞惕の伯顏の傳にも皇后伯牙吾氏、順帝紀立后の所にも幽廢の所にも伯牙吾氏とありて、后妃傳と異なり。先祖代代欽察氏にて、一女のみ他の姓を稱する理なければ、欽察氏は、蓋玉你伯牙山卽白野山に徙りてより、山の名の伯牙卽伯牙を取りて伯牙吾氏となれるなり。傳の「因以爲氏」は、「因以伯牙吾爲氏」と云はざれば、意通ぜず。元の時伯牙吾氏三宗あり。第一は蒙古の巴牙兀惕氏、實錄第九頁に見えたる馬阿里黑伯牙兀歹の子孫、輟耕錄蒙古七十二種の伯要歹にして后妃表成宗の后に「卜魯罕皇后伯岳吾氏、勳臣普化之孫駙馬脫里忽思（后妃傳に脫里思）之女」とあるは、蒙古の巴牙兀惕なり。普化は、卽不合にして、蒙古人に多くある名なり。功臣の第八十一なる不合駙馬（實錄三二五）拙赤の北征に嚮導したる不合（實錄三九八）を、前に木合黎の弟なる札剌亦兒の不合なりと注したれども、この勳臣普化なるかも知れず。

第二の伯牙吾氏は、喇失惕の史に見えたる康里の巴牙兀惕にて、也速解兒の傳の伯牙兀、斡羅思の傳の伯要なり。第三の伯牙吾氏は、卽欽察の土土哈の一族なり。列傳卷二十一に「和尙、玉耳別里伯牙吾台氏。祖哈剌察兒、率所部歸太祖。父忽都思、膂力過人。歲壬辰、從睿宗、破金大將合達軍于鈞州三峯山、以功賜號拔都魯」とあり。玉耳別里も、里は野の誤りにて、卽碑の玉黎北里、兵志の玉你伯牙に住みて、山の名を取りて姓としたる故に、玉你伯牙の伯牙吾台と稱したるなり。列傳卷三十に「泰不花、字兼善、伯牙吾台氏、世居白野山。父塔不台、入直宿衞、云云」とあるも、白野山卽巴牙に居たるが故に巴牙吾台と稱したるなり。この二家は、土土哈の家と同族なるが如くも聞ゆれども、二傳ともに欽察人と云はず、又哈剌察兒忽都思泰不花塔不台など云ふ名は、いづれも蒙古語にして、又傳の事蹟にも色目らしき所見えざれば、蒙古なるか欽察なるか定め難し。然るに氏族表欽察の部に「徙居西北玉里伯里山」の下に「因所居伯牙吾山爲氏、號其國曰欽察」と云ひて、玉里伯里山卽玉耳別里と伯牙吾山卽白野とを別の山とし、二つともに欽察の山とし、又和尙も泰不花も欽察人と定め、成宗の卜魯罕皇后までも欽察人とし、蒙古に巴牙兀惕氏あることを云はざるは、大に誤れり。

碑の「土風」以下十字の代りに、傳は「其國去中國三萬餘里。夏夜極短、日暫沒卽出」と書けり。碑の續きに「曲年生唆末納、唆末納生亦訥思。太祖皇帝征蔑乞思火都、火都奔亦訥思。遣使諭取之、不從」とあり「太祖」以下を傳は「太祖征蔑里乞、其主火都奔欽察、亦納思納之。太祖遣使諭之曰「汝奚匿吾負箭之麋。亟以相還。不然禍且及汝」。亦納思答曰「逃鸇之雀、叢薄猶能生之。吾顧不如草木耶」。太祖乃命將討之」と改め補へり。蔑里乞の火都は、卽祕史の篾兒乞惕の忽禿なり。忽禿は、祕史に據れば、垂河にて速別額台に追ひ窮められ、喇失惕に據れば、乞卜察克に奔らんとして蒙古の軍に捕へ殺されたりと云へば、欽察に奔れり

と云へるは疑ふべし。殊に鶻と雀と叢との譬は、實錄六三頁なる鎖兒罕失喇の二子の語と全く同じくして、卽蒙古の俚諺なれば、亦納思の答と云へるものも、蒙古人の作れる談なるべし。次に「及我師西征、亦訥思老、不能理其國。歲丁酉（太宗九年）、亦訥思之子忽魯速蠻、自歸於太宗。而憲宗受命帥師、已及其國。忽魯速蠻之子班都察、擧族來歸、從討蔑乞思有功」。傳に前の蔑乞思を蔑里乞と改め、こゝの蔑乞思を麥怯斯と改めたるは、甚當れり。麥怯斯は、祕史の蔑客愓にして、蔑兒乞惕とは全く異なるを、碑に同じ文字を用ひたるは非なり。

次に「世祖皇帝、西征大理、南取宋、其種人以强勇見信用、掌芻牧之事、奉馬湩、以供玉食。馬湩・尙黑者。國人謂黑爲哈剌、故別號其人曰哈剌赤、日見親近、妻以哈納郡王之女弟訥論」。黑き馬乳は、蒙古人の殊に重ずるものなりき。黑韃事略に曰く「馬之初乳、日則聽其駒之食、夜則聚之以沛（原注、手捻其乳曰沛）。貯以革器、傾挏數宿、味微酸、始可飮、謂之馬嬭子」。徐霆曰く「霆嘗見其日中沛馬嬭矣。亦嘗問之、初無拘於日與夜。沛之之法、先令駒子啜、敎乳路來、卽趕了駒子、人自用手沛下皮桶中、却又傾入皮袋撞之。尋常人、只數宿便飮。初到金帳、韃主飮以馬嬭。色淸而味甜、與尋常色白而濁、味酸而羶者、大不同、名曰黑馬嬭。蓋淸則似黑。問之則云「此實撞之七八日。撞多則愈淸、淸則氣不羶」。只此一次得飮、他處更不曾見。玉食之奉如此」と云へり。輿服志三儀衞の篇殿上執事の部、酒人凡六十人の內、「二十人主湩、國語曰哈剌赤」。又兵志三馬政の篇に「車駕還京師、太僕卿先期遣使、徵馬五十醞都來京師。醞都者、承乳車之名也。旣至、俾哈赤哈剌赤之在朝爲卿大夫者、親秣飼之、日釀黑馬乳、以奉玉食、謂之細乳。每醞都牝馬四十。自諸王百官而下、亦有馬乳之供。醞都如前之數、而馬減四之一、謂之粗乳」とあり。

「中統初元、討阿里卜哥之亂、班都察與其子土土哈、皆有功。班都察卒、土土哈領其父事、是爲句容郡武毅王。海都之叛、皇子北平王（那木罕）、帥諸王之師、鎭祖宗興龍之故地。至元十四年、叛王脫脫木失列吉入寇、諸部曲見掠、先朝大武帳亡焉。土土哈王憤之、誓請決戰。三月、敗其將朶兒赤延於納蘭不剌、以所掠諸部還」。阿里卜哥は、世系表睿宗の第七子阿里不哥大王、海都は、太宗の第五子合失大王の子海都大王なり。脫脫木は、列傳卷四牙忽都の傳に脫帖木兒、忠義傳伯八の傳に脫鐵木兒、喇失惕は脫克帖木兒と云へり。世系表睿宗の第十子歲都哥大王の孫に荊王脫脫木兒あるに由り、考異に「疑卽其人也」と云へれども、世祖の幼弟の孫に叛を謀る程の壯年あるべしとも思はれざれば、鐵木哥斡赤斤の曾孫脫帖木兒大王にはあらずや。失列吉は、傳に失烈吉、憲宗紀に昔烈吉、世祖紀に昔里給また昔里吉、伯八の傳に昔列吉、喇失惕失列奇、世系表憲宗の第四子河平王昔里吉なり。

「四月、只兒瓦䚟構亂應昌、脫脫木以兵應之、與我軍遇、將決戰。先得其斥候數十。脫脫木懼而引去。遂滅只兒瓦䚟。六月、逐其兵於禿剌河、（傳は「三宿而後返」と補へり）。八月、又敗之斡歡（斡兒歡）河、得所亡大帳、還諸部之衆於北平」。北平に還すとは、北平王の所に還せるを云ふ。「我師北伐、詔率欽察驍騎千人以從。十五年正月、追失列吉、踰金山、擒札忽台以獻。又敗寬赤哥等軍、俘獲甚衆」。末の十字を、傳は「敗寬折哥等、裹瘡力戰、獲羊馬輜重甚衆」と改め補へり。寬赤哥は、伯荅兒の傳に寬赤哥思とあり。

「冬、入朝。召至榻前、親慰勞之、賜以白金百兩、海東白鶻一。國家侍內宴者、每宴必各有衣冠、其制如一謂之只孫。悉以賜之。且有詔曰「祖宗武帳、非人臣所得御。卿能歸之、故以與卿。軍中宴諸帥、則設之」。欽察人爲民戶、及隸諸王者、別籍之、（傳は「以隸土土哈」と補へり）。戶給鈔二千貫、歲給粟帛、擇其材者、備禁衞。十九年、拜昭勇大將軍同知太僕院事。明年、改同知衞尉院事、領羣牧司事、給霸州文安縣田四百頃、命哈剌赤屯田、益以亡宋新附軍八百。二十一年、賜金虎符、（傳は「幷賜金貂裘帽玉帶各一、海東靑鶻一、水磑

壹區、近郊田二千畝」を補へり)。以河南等路（傳は河東諸路）蒙古軍子弟四千六百隷之。二十二年、拜鎭國上將軍樞密副使。二十三年、置欽察衞、遂兼其親軍都指揮使、聽以族人將吏備官屬」。

「六月、海都兵入寇。奉詔與大將朶兒朶懷禦之。二十四年、諸王乃顏叛於東藩、陰遣使來結也不干勝剌哈。王(土土哈)獲諜者、得其情、密以聞諸朝、請召勝剌哈以離之」。乃顏は、喇失惕に據れば、脫噶察兒の孫、額出兒の子なり。脫噶察兒は、世系表鐵木哥斡赤斤の孫塔察兒國王なれば、乃顏は、斡赤斤の玄孫なり。表は額出兒卽阿朮魯大王を塔察兒の從兄として、その子乃顏を載せず。也不干は、牙忽都の傳に也不堅、世系表太祖の第六子闊列堅太子の曾孫也不干大王なり。勝剌哈は、世祖紀に勝納合兒、孛禿の傳(曾孫忽憐の條)に聲剌哈兒、世系表哈赤溫大王の子濟南王按只吉歹の曾孫濟南王勝納哈兒なり。「他日、勝剌哈爲宴會、邀二大將。朶兒朶懷將往。王曰「事不可測」。遂不往。勝剌哈計不得行。未幾、有詔召勝剌哈。王曰「此、東藩之人。由東道、是其欲也。將不可制」。言於北安王（卽北平王）、命之西行。或言也不干將反者、軍吏請奏而圖之。王曰「不可緩也」。身爲先驅、引大兵前、竆晝夜之力、渡禿兀剌河、與也不干戰、大敗之」。「或言」以下を傳は「旣而有言也不干叛者、衆欲先聞於朝、然後發兵。土土哈曰「兵貴神速。若彼果叛、我軍出其不意、可卽圖之。否、則與約而還」。卽日啓行、疾驅七晝夜、渡禿兀剌河、戰孛怯嶺、大敗之、也不干僅以身免」と改め補へり。「世祖方親征、聞之、詔王沿河東行、盡收其餘黨以還。道遇也鐵哥、其衆萬騎、擊走之、大獲乃顏畜牧、俘畔王哈兒魯等獻之。康里欽察之人、先隷諸叛王者、悉來歸。置哈剌魯萬戶府」。「沿河東行」を、傳は「沿河而下」と改めたり。禿剌河は、西に流るゝ河なれば、下るは西に行くことにて、碑と異なり。也鐵哥は、傳に叛王鐵哥とあり。世祖紀至元二十四年六月「諸王失都兒所部鐵哥率其衆、取咸平府、渡遼」とある鐵哥と同じきか異なるか。哈兒魯の名は、世系表にも諸王表にも見えず。竊に思ふに、これは、王の名に非ず、部落の名にして、合兒魯黑の君、卽阿兒思闌罕の後嗣にはあらずや。その君叛きて俘はれたるに由り、その降れる部衆を以て哈剌魯萬戶府を置きたるならん。元史の哈剌魯は、皆合兒魯黑なり。又傳は、萬戶府の下に「欽察之散處安西諸王部下者、悉令統之」の一句を補へり。安西諸王とは、皇子安西王忙哥剌の子安西王阿難荅等を云ふ。

「是歲、王子剏兀兒(傳に牀兀兒)、奉詔從太師月兒律(玉昔帖木兒)、在軍、戰於百搭山有功、拜昭勇大將軍左衞親軍都指揮使、佩金虎符。出則被堅執銳、以率虎羆之士、入則執刀匕、以事割烹、執罍杓、以進湩飮。親幸委任、已見如此」。

「成宗方撫軍、詔以王從。十一月、征乃顏餘黨於哈剌〔溫〕、誅兀塔海(傳に叛王兀塔海)、盡降其衆。二十五年、也只里王爲叛王火魯哈孫所攻甚急。五月、王從成宗、移師援之、敗諸兀魯灰。還至哈剌溫山、夜渡貴列河、敗叛王哈丹之軍、盡得遼左諸部、置東路萬戶府、以鎭之。也只里有女弟塔倫、遂以妻王」。也只里王は、世祖紀に諸王也只烈、世系表濟南王安只吉歹の孫、察忽剌大王の子、濟南王也只里なり。火魯哈孫は、喇失惕に據れば、拙赤合撒兒の長子也古の孫に火兒合孫あり。世系表には無し。哈丹は、卽合丹にして、多遜は哈赤溫の玄孫にして、勝納哈兒の父なりとせり。世系表に哈赤溫の孫、勝納哈兒の祖父とせるは、誤りならん。

「二十六年、海都軍叛金山、抵杭海嶺、皇孫晉王(甘麻剌)師兵禦之。敵先據險、我師不利。王獨以其軍陷陳入戰、翼晉王而出。明日、追騎大至、伏兵殿之」。「伏兵殿之」の四字を、傳は「乃選精銳、設伏以待之。寇不敢過」と改め補へり。「七月、世祖親巡北邊、召見王、慰之曰「昔太祖與其臣之同患難者、飮班朮河之水、以記功。今日之事、何愧昔人。卿其勉之」。海都等戰旣數敗、又知上親征、遂引兵去。車駕還都、大宴。上謂

王曰「朔方人來、聞海都言「戰者人人如土土哈、吾屬何所容身哉」」。論功行賞、先欽察之士」。末の五字を、傳は「帝欲先欽察之士。土土哈言「慶賞之典、蒙古將吏宜先之」。帝曰「爾勿飾讓。蒙古人誠居汝右、力戰豈在汝右耶」。召諸將、頒賞有差」と改め補へり。「以建康廬饒舊籍租戶千爲哈剌赤戶、又以俘獲之戶千七百賜之、官一子以督賦。而創兀兒在宿衞、亦帥其軍扈從、至和林兀卑思之山、拜昭武大將軍欽察親軍都指揮使左衞親軍都指揮使兼太僕少卿」。

「二十八年、王奏「哈剌赤之軍、數已盈萬、足以備用」。詔賜珠帽珠衣玉帶金帶名鷹綵素萬匹」。末の四字は、傳に「復賜其部曲毳衣綵素萬匹」とあり。「帥其人(傳は於是率哈剌赤萬人)、北獵漢塔海。邊寇聞之、不敢動。二十九年、掠地金山、虜海都之戶三千。有詔、進取乞里吉思。明年春、次欠河(今の客姆河)、冰行數日、盡取其衆(傳は其五部之衆)、留兵鎭之。奏功、拜龍虎衞上將軍、賜行樞密院印。海都聞之、領兵至欠河。又敗之、擒其將孛羅察」。

「成宗皇帝卽位、詔之曰「北邊事重、其免會朝」。賜白金五百兩」。末の六字は、傳に「遣使就賜銀五百兩、七寶金壺盤盂各一、鈔萬貫、白氈帳一、獨峯駝五」とあり。「冬、召入朝、有加賜、別賜其軍士鈔一千二百萬。元貞元年春、還守北邊。三年秋、諸王從海都者、皆來降、邊民驚動。王帥兵金山之玉龍海備之、資饋畢給、民用不擾。親導岳木忽等王以朝。上解御衣以賜」。岳木忽は、世系表阿里不哥大王の子威定王玉木忽爾にして多遜は、余不庫兒と云へり。世系表には、威定王玉木忽爾の外に、その姪定王藥木忽爾あれども、威定王と定王とは、その實同じ人なり、諸王表金鍍銀印龜紐定遠王の下に「藥木忽兒、大德二年封」、金印獸紐定王の下に「要木忽爾、大德九年、由定遠王徙封」、金印駝紐威定王の下に「要木忽爾、至大元年、由定遠王進封」とあり、末の要木忽爾は、卽前の藥木忽兒にして、又卽世系表の玉木忽爾なり、この王は、大德九年に定遠王より威定王に進みたれば、至大元年に定王に進みたるは、定遠王よりにはあらずして、威定王よりなり、表は、威定を定遠と誤れり、又世系表を作れる人は、威定王と定王と同じ人なることに心附かず、已に威定王玉木忽爾を阿里不哥の長子として記し、定王を記すべき所なき故に、威定王の弟乃刺忽不花大王の三子の次に書き加へたるならん。「大德元年、拜銀青光祿大夫、上柱國、同知樞密院事、欽察親軍都指揮使如故。還邊。二月、至宣德府薨、年六十一」。

「是歲、有詔創兀兒世其父官、領北征諸軍。後亦封句容郡王。王帥師踰金山、攻八隣之地。八隣之南、有大河曰荅魯忽。其將帖良臺、阻水而軍、伐木柵岸以自庇。士皆下馬跪坐、持弓矢以待我軍。矢不能及、馬不能進。王卽命吹銅角、舉軍大呼、聲振林野。坐士不知所爲、爭起就馬。王麾師畢渡、溺水拍岸、木柵漂散。因奮師馳擊、五十里而後止、盡得其人馬廬帳。還次阿雷河、與孛伯拔都之軍相遇。孛伯拔都者、海都所遣援八隣者也。阿雷之上、有山甚高、孛伯陣焉。山高峻、馬不利於下馳。急麾軍、渡河蹴之。孛伯馬下坂、多顚躓。急擊敗之、追奔三十餘里。孛伯僅以身免。二年、北邊諸王都哇徹徹禿等、潛師急至、襲我火兒哈禿之地。火兒哈禿、亦有山甚高、其師來據之。王選勇而能步者、持挺刀四面上、奮擊、盡覆其軍。敵遁者無幾。都哇は、元史世祖紀に朶瓦、武宗紀に篤娃、忽林失の傳に都瓦とも書き、世系表には無し。多遜に據れば、察合台太子の玄孫、孛喇克(表の八剌大王)の子にして、察合台汗國第十代の君なり。徹徹禿は、世系表憲宗の第三子玉龍荅失大王の孫郯王徹徹禿なり。この王は、後に歸順し、諸王表に「泰定三年封武寧王、至順二年進封郯王」とあり、明宗文宗二紀天曆二年の條に武寧王徹徹禿の名屢見え、至順以後は郯王徹徹禿の名も見えたり。篾兒乞惕の伯顏の傳に、順帝至元五年「構陷郯王徹徹篤奏賜死」とあり。

「三年、入朝。上解衣賜、慰勞優渥、拜鎭國上將軍、僉樞密院事、欽察親軍都指揮使、左衞親軍都指揮使、

太僕少卿、還邊。是時武宗在潛邸、領軍朔方、軍事必諮於王。及戰、王常爲先、付託甚重。四年秋、畔王禿麥斡魯思等犯邊。王迎敵於闊客之地。及其未陣、王以其軍直搏之。敵不能支。逐之踰金山乃還」。禿麥は、武宗紀に禿曲滅、月赤察兒の傳に禿苦滅、多遜の書に帖克篾とあり、海都の子なり。斡魯思は、武宗紀に烏魯斯、忽林失の傳に斡羅思、多遜禿魯思、これも海都の子なり。二人ともに世系表には無し。「五年、海都之兵、又越金山而南、止於鐵堅古山、因高以自保。王以其軍馳當之。既得平原、地便於戰。乃并力攻之、敵又敗績。戰之三日、都哇之兵西至、與我大軍、相持於兀兒禿之地。王又獨以其精鋭、馳入其陣。戈甲戛擊塵血飛濺、轉旋三周、所殺不可勝計。而都哇之兵幾盡。武皇親見之、曰「力戰未有如此者」。事聞、上使御史大夫禿赤、知樞密院事塔剌海、也可扎魯火赤禿忽魯、即赤納思之地、聚諸王軍將、問戰勝功狀。於是親王以下、至於諸軍、咸以爲王功第一、無異辭。於是武皇命王尙雅忽禿楚王公主察吉兒、賞以尙衣貂裘」。雅忽禿楚王は、太宗の第八子撥綽大王の孫楚王牙忽都なり。「使者以功籥奏。上出御衣、遣使臨賜之、詔曰「邊圉事重、少留鎭之」。七年秋、入朝。上親諭之曰「自卿在邊、累建大功、事蹟昭著。周飾卿身以黍金、猶不足以盡朕意」。遂賜御衣一、黃金百兩、白金五百兩、鈔十萬貫、拜驃騎衞上將軍、樞密副使、欽察親軍都指使、左衞親軍都指揮使太僕少卿、賜其親軍萬人鈔四千萬貫」。

「九年、都哇、察八兒、明里帖木兒等諸王、相聚而謀曰「昔太祖、艱難以成帝業、奄有天下。我子孫、乃弗克靖〔恭〕、以安享其成、連年動兵相殘殺。是自傷祖宗之業也。今撫軍鎭邊者、吾世祖之嫡孫也。吾與誰家爭哉、且前與土土哈戰、既累不勝。今與其子創兀兒戰、又無一功。惟天惟祖宗意可見矣。不若遣使請命、罷兵通一家好、吾士民、老者得其養、少者得其長、傷殘疲憊者、得其休息焉。則亦無負太祖之所望於子孫者矣」。使至、上深然之。於是明里帖木兒等、罷兵入朝。特爲置驛、以通往來」。察八兒は、世系表海都大王の子汝寧王察八兒なり。海都は、大德五年鐵堅古山の大戰より回りて後に死し、察八兒その位を嗣ぎたりき。明里帖木兒は、武宗紀に明里鐵木兒、阿沙不花の傳に迷里帖木兒、　の傳に滅里とあり。多遜に據れば、阿里不哥の子に篾里克帖木兒あり。それならん。世系表には無し。

「十年、拜榮祿大夫、同知樞密院事、尋拜光祿大夫、知樞密院事、欽察左衞指揮、太僕少卿、皆如故。從武皇於渾麻出之海上。成宗崩、訃至。入告武皇曰「殿下、親世祖之嫡孫。以先帝之命、居祖宗之故地、以鎭撫朔方、且十餘年矣。海都、約木忽兒(卽前の岳木忽)、明里帖木兒、自世祖時、各爲叛亂、今皆來歸。前後叛亡俘虜、悉復其舊。皆殿下之威靈也。臣先父土土哈、受知世祖、恩深義重。臣之種人、强勇精鋭。臣父子用之、無戰不克。殿下急宜歸定大業、以副天下之望。臣請率其衆、備騶乘之士」。武皇納其說、卽日南邁、五月、達上都。武宗皇帝卽位、賜王尙服七、黃金五百兩、白金五千兩、鈔二十五萬貫、先所御大武帝帳一。秋、拜平章政事、仍兼樞密欽察左衞太僕、還邊。冬、加封榮國公、授銀印、出制辭以命之。至大二年、入朝。封句容郡王、賜金印一、黃金二百五十兩、白金一千五百兩、鈔一萬貫。上曰「世祖征大理時所御武帳、及所服珠寶之衣、今以賜卿其勿辭」。翌日又以世祖所乘安輿賜王。上曰「以卿有足疾、故賜此」。王叩頭泣涕、固辭而言、曰「世祖所御之帳、所服之衣、固非臣所敢當。乘輿而尤非所宜蒙也。貪寵過當、臣實不敢」。上顧左右、曰「他人不知辭此」。別命有司、置馬轎賜之、俾得乘至殿門下。仁宗在東宮、有衣帽金寶之賜。還邊」。

「仁宗皇帝卽位、入朝。特授光祿大夫、平章政事、知樞密院事、欽察親軍都指揮使、左衞親軍都指揮使、太僕少卿。延祐元年、也先不花等諸王、復叛亦忒海迷失之地。王方接戰、有敵將一人以戟入陣刺王者。王擗其戟、揮大斧、碎其首。血髓淋漓、殞於馬首。乘勢奮擊、大破之」。也先不花は、都哇の長子、察合台太子の五世の孫にして、察合台汗國第十三代の君なり。「二年、與也先不花之將也不干忽都帖木兒、戰麥干之地、轉殺

周匝、追出其境鐵門關。秋、又敗其大軍札亦兒之地。上聞之、遣使賜勞有加。四年、上念王之功、而憫其老也、召之、命商議中書省事、知樞密院事」。傳は、こゝに「大理國進象牙金飾轎、卽以賜之」を補へり。「毎見必賜坐、上食必賜食、待之以宗室親王之禮。王常曰「老臣受朝廷之賜厚矣。吾子孫不以死報國、可乎」。至治二年薨、年六十三」。この下忽魯速蠻以下三代の贈謚、夫妻の封爵、土土哈創兀兒の諸子の仕履などあれども、煩はしければ載せず。

土土哈の子八人、皆朝に仕へて大官となれる中にて、第三子牀兀兒最顯れ、牀兀兒の子七人の內、第三子燕帖木兒最顯れ、第四子撒敦は中書左丞相となり、第六子荅里（文宗紀に荅隣荅里）は、父の封を襲ぎ句容郡王となれり。燕帖木兒は、列傳卷二十五に燕鐵木兒と書きて、別に傳あり。この燕鐵木兒は、武宗・仁宗・英宗に歷仕し、致和元年僉書樞密院事に進み、泰定帝上都に崩じて、皇太子阿速吉八（天順帝）位に卽きたる時、兵を以て大都の羣臣を脅し、武宗の二子明宗・文宗を迎へ、遂に文宗を擁立し、上都の官軍を擊ち破りて天順帝は行くへ知れずなれり。燕鐵木兒は、その功に依り、中書右丞相錄軍國重事大都督太師荅剌罕太平王となれり、天曆三年二月「文宗欲昭其勳、詔命禮部尙書馬祖常製文、立石於北郊」。石に刻みたる文は、太師太平王定策元勳之碑と題して、元文類卷二十六に見えたり。燕鐵木兒の傳は、專らその碑文に本づきたるものなるが、その碑は、勅を奉じて權臣を諛頌したるものにて、事實を枉げたる所あれば、こゝに轉載せず。

すべて燕鐵木兒伯顏(蔑兒吉䚟)等の傳、泰定帝明宗文宗本紀などには、往往順逆を顚倒したる誣罔の詞あれば、讀者は、前後の事情を斟酌して取捨せざるべからず。例へば明宗紀に「歲戊辰七月庚午、泰定皇帝崩于上都、倒剌沙專權自用、踰月不立君、朝野疑懼。時僉樞密院事燕鐵木兒、留守京師、遂謀擧義」とあるにつき、考異に「按、泰定以七月庚午崩、至八月甲午擧事、爲時尙未及三旬。元諸帝卽位、皆俟諸王大臣畢會議之、距前君之崩、或兩月、或三月、初無定期。蓋其家法如是。況泰定踐祚之日、儲位早定、朝野本無異議也。燕帖木兒逆謀早萠于泰定未崩之先、豈因踰月不立君、人心疑懼、始謀擧事乎。此皆實錄之誣詞、史臣不能刊正也」と云へり。逆謀早く萠せることは、この年三月、泰定帝の上都に幸する前に、燕鐵木兒等は、もし不諱あらば大事を擧げんと謀りたる（文宗紀の卷首）を見て、知るべし。又御批通鑑輯覽は、燕鐵木兒の「謀擧義」を「謀逆」と改めて、御批に「武宗旣傳于弟、其子卽無統業可承。而泰定帝己成其爲君、儲嗣現存神器自有專屬。乃燕鐵木兒忽進異圖、謬託受武宗恩寵之言以自文、遠迎周（明宗）懷（文宗）二王入繼、于情理爲不順。其意不過欲假援立之功、以遂寵肆志、遂成圖帖睦爾（文宗）簒弑之謀、則燕鐵木兒實爲罪首」とあり。

かくて燕鐵木兒は、專橫を極めたる後、至順三年文宗崩じ、明宗の次子懿璘質班（寧宗）も位を繼ぎてまもなく崩じ、明宗の長子妥懽貼睦爾（惠宗皇帝、明人の謂はゆる順帝）は、廣西より迎へられ、未立たざるに明年三月、燕鐵木兒病死せり。順帝位に卽き、篾兒乞惕の伯顏右丞相となり、燕鐵木兒の弟撒敦左丞相となり、燕鐵木兒の女は皇后となり、撒敦死して、燕鐵木兒の子唐其勢左丞相となりしが、伯顏と權を爭ひ、至元元年、弟塔剌海と共に伯顏を殺さんとして宮闕を犯し、捕へられて誅に伏し、皇后も塔剌海を庇したるが爲に執へられ、伯顏に殺されき。

3。完者都卽完者拔都。

列傳卷十八の完者都と列傳卷二十の完者拔都とは、同じ人にして、完者都は、正しくは斡勒者亦禿、完者拔都は、斡勒者亦禿巴阿禿兒なり。甲傳は委しく、乙傳は簡なり。只初の句だけは、甲傳に「完者都、欽察人」とあるを、乙傳には「完者拔都、欽察氏、其先彰德人」とあり。完者都の父祖蒙古に屬して後に彰德に

住みたる人ありしならん。次に甲傳に「父哈剌火者、從憲宗征討有功。完者都廣顙豐頷、髯長過腹。爲人驍勇、而樂善好施。歲丙辰(憲宗六年)、以材武從軍。己未（九年）、從攻鄂州先登、賞銀五十兩」。「從攻」の六字は、乙傳に「從世祖攻鄂州、登城斬馘」とあり。それよりして世祖一代は、屢戰功を立て、至元二十六年江西等處行樞密院の副使となり、廣東の宣慰使を兼ね、元貞元年、江浙行省の平章政事となり、大德二年卒し、林國公に追封せられき。完者都の父祖嘗て彰德に居たるに由り、彰德路林州の名を取り封號としたるならん。元の林州は、今の直隸彰德府林縣なり。子十四人皆仕へ、孫二十四人も多くは仕へき。

4。伯帖木兒。

列傳卷十八「伯帖木兒、欽察人也。至元中、充哈剌赤、入備宿衞。二十四年、御史大夫玉速帖木兒（玉昔帖木兒）に從ひ、叛王乃顏を征し、二十五年、諸王乃麻歹(乃蠻台)に從ひ、叛王哈丹を征し、又玉速帖木兒に從ひ、哈丹の黨を敗り、二十六年、拜要(　　)の黨伯顏を擒にし、「是年冬、立東路蒙古軍上萬戶府、統欽察・乃蠻・捏古思・那亦勒等四千餘戶、陞懷遠大將軍上萬戶、佩三珠虎符」。那亦勒の勒は、恐らくは勤の誤りにて、卽那牙勤ならん。二十七年哈丹を逐ひ、二十八年鴨綠江に至り、二十九年叛王捏怯烈を逐ひ、女直の地を定めき。

5。昔都兒。

列傳卷二十「昔都兒、欽察氏。父禿孫、隸蒙古軍籍。中統二年、從丞相伯顏、討李壇叛、以功授百戶。至元十年告老、以昔都兒代之」。十一年、昔都兒は、大軍に從ひ南征し、「十四年、從諸王伯木兒、追擊折兒凹台岳不思兒等於黑城哈剌火林之地平之。」伯木兒は、伯帖木兒の帖を脫したるか。但世系表太宗の第二子闊端太子の孫にも汾陽王伯帖木兒あり、睿宗の第九子末哥大王の孫にも伯帖木兒大王あり。いづれなるか知らず。折兒凹台は、土土哈の傳の只兒瓦台、句容郡王世績碑の只兒瓦䚟なり。岳不思兒の思は、忽の誤にて、多遜の余不庫兒、世系表の定王藥木忽兒なり。世系表は、藥木忽兒を阿里不哥の孫としたれども、孫に非ずして子なるべきことは、已に土土哈の傳に云へり。黑城は、合喇巴勒合孫の譯にして、舊城の義、哈剌火林は合喇闊嚕姆な。り合喇闊嚕姆二所あり、斡兒歡河の西なるは回紇の舊城、東なるは蒙古の新城なることは、實錄六一四頁以下に云へり。黑城哈剌火林は、卽回紇の舊き合喇闊嚕姆、今の合喇巴勒嘎孫なり。この戰は、句容郡王世績碑に、至元十四年「遂滅只兒瓦䚟、六月、逐其兵於禿剌河、八月、又敗之斡歡(斡兒歡)河」とある時なり。二十四年、昔都兒は、溪洞左江萬戶府の達魯花赤となり、洞軍を領ゐて、鎭南王（世祖の第九子脫歡）に從ひ交趾を征し、明年その都城に入り、師を全うして還り「二十六年、賜虎符、授廣威將軍砲手軍匠萬戶府達魯花赤。大德二年卒、子也先帖木兒襲」。

6。乞台。

列傳卷二十二「乞台、察台氏」とある察の上欽の字脫ちたるならん。欽察衞の兵を率ゐ、欽察の土土哈創兀兒父子に從ひて働けるを見れば、必欽察人なるべし。「至元二十四年、爲欽察衞百戶、從土土哈、征叛王失烈吉及乃顏有功、賜金符、陞千戶。從征忽剌出、戰于阿里台之地」。忽剌出は、合赤溫の曾孫、按只歹の孫、隴王忽剌出なり。阿里台は、阿勒台卽金山なり。この金山の戰は、土土哈の傳に「二十九年秋、略地金山、獲海都之戶三千餘」とある時ならん。「元貞二年、以疾卒、子哈贊赤襲職。從創兀兒於魁烈兒之地、與哈荅安戰、有功」。創兀兒は、土土哈の牀兀兒、魁烈兒は、貴烈河、哈荅安は、叛王哈丹なり。この戰は、哈贊赤の職を襲ぐ前、金山の戰の前、至元二十五年の事なり。「大德五年、從戰杭海、從武宗親征哈剌阿荅、復從創兀兒、征不別八憐、爲先鋒、以功受賞賚」。「親征哈剌阿荅」は、武宗紀に「海都悉合其衆以來、大戰于合

剌合塔之地」とあり。不別八憐は、句容郡王世績碑に「孛伯拔都者、海都所遣撥八隣者也」とあり。この戰は、碑に據れば、大德元年の事にして、武宗の親征より前にあり。「皇慶二年、授金符、爲千戶。明宗居潛邸延祐四年、命從西征、與禿滿帖木兒、戰于失剌塔兒馬失之地、以功復受厚賞、居其地十五年」。禿滿帖木兒は諸王表に延祐五年封武平王とあり、世系表に見えず。仁宗紀延祐四年十二月と五年正月とに諸王禿滿鐵木兒の所部に金銀鈔帛を賜へることを載せ、その二月「封禿滿鐵木兒爲武平王」とあり。仁宗紀にも明宗紀にもこの戰の事を載せずして、禿滿帖木兒は叛きたる樣子も無ければ、これは全く諸王の私鬪なるべし。「天曆二年、賜金符、授昭勇大將軍同知大都督府事、卒」。

7。脫因納。

列傳卷二十二「脫因納、荅荅叉氏」。荅荅叉と云ふ姓は、蒙古七十二種の中にも見えず。欽察衞を率ゐるを見れば、欽察人ならんと思はる。「世祖時、從征乃顏、以功受上賞。大德七年、授欽察衞親軍千戶所達魯花赤武德將軍、賜金符。十年遷阿兒魯軍萬戶府達魯花赤、易金虎符、進階懷遠大將軍」。阿兒魯は、恐らくは柯兒魯の誤にて、至元二十四年に設けられたる哈剌魯萬戶府ならん。哈剌魯卽合兒魯兀惕を地理志には柯耳魯と書けり。「至大二年、拜甘肅行尚書省參知政事、四年、入爲太僕卿、皇慶元年、授阿兒魯萬戶府襄陽漢軍達魯花赤、延祐三年、拜甘肅行中書省右丞、至治二年、改通政使、致和元年、分院上都、秋八月、爲倒剌沙所殺。有子曰定童只沈哈朗」。只沈哈朗の沈は兒の誤なるべし。定童は、父の職を襲ぎ、阿兒魯萬戶府襄陽萬戶府漢軍の達魯花赤にて金虎符を佩び、只兒哈朗は、初欽察親軍千戶所の達魯花赤、後に通政院使。

氏族表に祕書志を引きて、「有買買字子昭、至正十七年、由中政院同知、遷祕書卿、稱伯要氏、當卽伯牙吾氏也」とて、欽察人の後に附記したれども、欽察人の伯牙吾氏なりや、康里のなりや、蒙古のなりや、知るべからず。

九。阿速卽阿速惕。

これより以下の色目の諸臣は、國初の功臣に非ざれども、皆異種異敎に屬する遼西の人なるが故に載するなり。

1。捏古剌。

列傳卷十「捏古剌、在憲宗朝、與也里牙阿速三十人來歸」。捏古剌は、尼闊來なり。也里牙阿速三十人は、也里牙卽額里阿思と云へる阿速人を首とせる三十人なり。「後從征釣魚山、討李璮、皆有功。子阿塔赤、世祖時、鬪襄陽、下江南、敗失列及（世系表の昔里吉）、征乃顏、皆以功受賞。後事成宗武宗、爲札撒兀孫。仁宗時、歷官至左阿速衞千戶卒」。札撒兀孫は、元史語解に札薩古遜と改めて「掌班序官也」と注せり。阿塔赤の子敎化は、父の職を襲ぎ、天曆中章佩卿。敎化の子者燕不花は、天曆元年溫都赤（兀勒都赤、佩腰刀人）となり、「授兵部郞中、招集阿速軍四百餘人、十月進兵部尚書、授雙珠虎符、領軍六百人」。丞相燕帖木兒に從ひ上都の軍と戰ひ、後大司農の丞に遷りき。

2。阿兒思蘭。

列傳卷十「阿兒思蘭、阿速氏。初憲宗以兵圍阿兒思蘭之城。阿兒思蘭、偕其子阿散眞、迎謁軍門。帝賜手詔、命專領阿速人、且留其軍之半、餘悉還之、俾鎭其境內、以阿散眞置左右。道遇闍兒哥叛軍、阿散眞力戰死之」。闍兒哥は、卽徹兒客思なり。「帝遣使裹屍還葬之。阿兒思蘭言于帝曰「臣長子死、不能爲國効力。今以次子捏古來（尼闊來）獻之陛下、願用之」。捏古來至、帝命從兀良哈台、征哈剌章、有功。兀良哈台賞以白

金名馬。從伐宋、中流矢而死。子忽兒都荅、充管軍百戸。世祖命從不羅那顏、使哈兒馬某之地、以病卒」。卜咧惕施乃迭兒曰く「某は、思の誤ならん。然らば哈兒馬思は、恐らくは訶兒木思をあらはしたるなり」と云へり。「子忽都帖木兒、武宗潛邸時、從征海都、以功賞白金。至大元年、授宣武將軍左衞阿速親軍副都指揮使、四年卒」。

3。杭忽思・阿塔赤父子。

列傳卷十九「杭忽思、阿速氏、主阿速國。太宗兵至其境、杭忽思率衆來降。賜名拔都兒、錫以金符、命領其土民。尋奉旨還阿速軍千人、及其長子阿塔赤、扈駕親征」。末の句誤れり。太宗の親征に非ず、巴禿等の征略なりき。「既還、阿塔赤入直宿衞。杭忽思還國、道遇敵人戰歿。勅其妻外麻思、領兵守其國。外麻思躬擐甲冑、平叛亂、後以次子按法普代之。」阿塔赤從憲宗、征西川、軍于釣魚山、與宋兵戰、有功。帝親飲以酒、賞以白金」。この阿塔赤は、列傳卷二十二にも別に傳ありて、この傳よりは却て簡略なり。杭忽思は、昂和思と書き、阿塔赤は阿荅赤と書き、「阿荅赤、阿速氏。父昂和思、憲宗時、佩虎符、爲萬戸。阿荅赤扈從憲宗南征、與敵兵戰于劍州、以功賞白銀」とあり。猶杭忽思の傳を引かん。「阿里不哥叛、〔阿塔赤〕從也里可征之」。也里可は、阿荅赤の傳に也兒怯とあり。世祖紀の　　　なり。「至寧夏、與阿藍荅兒渾都海戰、率先赴敵、矢中其腹不懼。世祖聞而嘉之、賞以白金、召入宿衞。中統二年、扈駕親征阿里不哥、追至失木里禿（失木兒禿）之地、以功復賞白金。三年、從征李壇平之」。末の六字は、阿荅赤の傳に「從征李壇、身二十餘戰、累功授金符千戸」とあり。「至元五年、奉旨同不荅台、領兵南征、攻破金剛臺」。不荅台は、世祖紀の　　　なり。「六年、從攻安慶府、戰有功。七年、從下五河口。十一年、從下沿江諸郡、戍鎭巢。民不堪命、宋將降洪福、以計乘醉而殺之」。將降は、降將の倒置なるべし。「世祖憫其死、賜其家白金五百兩、鈔三千五百貫、倂鎭巢降民一千五百三十九戸、且命其子伯荅兒、襲千戸、佩金符。時失烈吉叛、詔伯荅兒、領阿速軍一千往征之」。末の十八字は、阿荅赤の傳に「伯荅兒從別急列迷失北征」とあり。別急列迷失は、この傳の下文にある別里吉迷失、世祖紀の　　　にして、急列は、列急の倒置なり。「與甕吉剌只兒瓦台軍戰于押里」。甕吉剌只兒瓦台は、翁吉喇惕の只兒瓦台にして、土土哈の傳には賍昌の部族只兒瓦台とあり。押里は、阿荅赤の傳に牙里伴朶之地とあり。「復與藥木忽兒軍、戰于禿剌及斡魯歡之地。十五年春、至伯牙之地、與赤怜軍合戰」。伯牙は、　　　赤怜は、　　　「五月、駐兵呵剌牙、與外剌台・寬赤哥思等軍合戰」。呵剌牙は、祕史の阿喇亦嶺なるべし。土土哈の傳に「追失烈吉、踰金山」とあれば、乃蠻の故地の西端なること知るべし。外剌台寬赤哥思は、土土哈の傳に寬折哥とあり、斡亦喇惕の寬赤哥思なり。「其大將塔思不花、樹木爲柵、積石爲城、以拒大軍。伯荅兒督勇士、先登拔之。伯荅兒矢中右股。別里吉迷失、以其功聞、賞白金。二十年、授虎符、定遠大將軍、後衞親軍都指揮使、兼領阿速軍、充阿速拔都達魯花赤。二十二年、征別失八里、軍于亦里渾察罕兒之地、與禿呵不早麻軍戰、有功」。禿呵不早麻は、　　　「二十六年、征抗海、敵勢甚盛、大軍乏食。其母乃咬眞、輸己帑及畜牧等、給軍食。世祖聞而嘉之、賜予甚厚」。末の十字は、阿荅赤の傳に「樞密臣以其功聞。賞白金貂裘弓矢鞍轡等、尋復以銀坐椅賜之」とあり。「大德四年、伯荅兒卒。長子斡羅思、由宿衞仕至隆鎭衞都指揮使」。阿荅赤の傳には「子斡羅思、由宿衞陞僉隆鎭衞都指揮使司事、賜一珠虎符。天曆元年、諭降上都軍凡若干數。特賜三珠虎符、陞本衞都指揮使」とあり。「次子福定襲職、官懷遠大將軍、尋改右阿速衞達魯花赤、兼管後衞軍。至大四年、兄都丹充右阿速衞都指揮使。福定復職後衞、陞樞密同僉、云云」。前に長子斡羅思、次子福定とあるに、福定の兄都丹あるは、怪むべし。氏族表は、福定を斡羅思の次子として、都丹を斡羅思の長子としたれども、伯荅兒の子は、只斡羅思

のみを擧げたるならば、只子と云ふべく、長子とは云ふべからず。こゝの文には、何か誤脫あらん。福定は後の至元に至り、知樞密院事に進みき。

4。玉哇失。

列傳卷十九「玉哇失、阿速人。父也烈拔都兒、從其國主來歸。太宗命充宿衞」。也烈拔都兒即額里阿思巴阿禿兒は、捏古剌の傳の也里牙にて、其國主は、杭忽思なるべし。然らば捏古剌の傳に「在憲宗朝」とあるは誤にて、捏古剌も也烈拔都兒も、太宗の朝憲宗の西征せる時、阿速國主杭忽思に從ひて歸降せるなり。「歲戊午(憲宗八年)、後憲宗征蜀、爲游兵前行、至重慶、戰數有功。嘗出獵、遇虎於隘。下馬搏虎。虎張吻、欲噬之。以手探虎口、抉其舌、拔所佩刀、刺而殺之。帝壯其勇、賞黃金五十兩。別立阿速一軍、使領其衆。從世祖、征阿里不哥、又從親王哈必失、征李璮、俱有功、賜金符、授本軍千戶」。哈必失は、親王には見えず。諸王なるべけれども、それも世系表には無し。諸王表銀印龜紐にして「無國邑名者」の中に、合必赤大王あり誰の子とも知れず。「從下襄陽、又從下沿江諸城。宋洪安撫、既降復叛、誘其入城宴、乘醉殺之」。洪安撫は、杭忽思の傳の降將洪福なり。也烈拔都兒は、阿荅赤と同時に殺されたるならん。「長子也速歹兒、代領其軍、從攻揚州、中流矢卒。玉哇失襲父職、爲阿速軍千戶、從丞相伯顏平宋、賜巢縣二千五十二戶。只兒瓦歹叛。率所部兵擊之、至懷魯哈都、擒其將失剌察兒、斬千軍、其衆悉平。諸王和林及失剌等叛」。和林は、諸王の名に非ず。失剌は、土土哈杭忽思の傳の失烈吉なり。この句誤あり。「和林諸王失剌及等叛」又は「諸王失剌及等叛和林」を顚倒せるならん。「從皇子北安王討之」。北安王は、北平王那木罕なり。後に北安王に改め封ぜられき。「至斡耳罕河、無舟。躍馬涉流而渡、俘獲甚衆。時北安王方戰失、利陷敵陣中。玉哇失從諸王藥木忽兒、追至金山。王乃得脫歸。賞白金五十兩鈔二千五百貫、改賜金虎符、進定遠大將軍、前衞親軍都指揮使、藥木忽兒は、杭忽思の傳に據るに、叛王の黨なり。この傳に玉哇失の王師としたるは誤れり。土土哈の傳に岳木忽と書き、元貞二年歸順せり。「諸王乃顏叛、世祖親征、玉哇失爲前鋒。乃顏遣哈丹、領兵萬人來拒。擊敗之、追至不里古都伯塔哈之地、乃顏兵號十萬。玉哇失陷陣力戰、又敗之、追至失列門林、遂擒乃顏。帝嘉其功、賜金帶只孫錢幣甚厚。乃顏餘黨塔不歹金家奴聚兵滅捏該。從大軍、討平之。既而哈丹復叛於曲連江。追擊其軍。渡河而遁」。曲連江は、土土哈の傳の貴烈河、乞台の傳の魁烈兒河なり。「又與海都將八憐帖里哥歹•必里察等、戰於亦必兒失必兒之地、戰屢勝」。八憐帖里哥歹は、土土哈の傳(牀兀兒の條)に八憐の將帖良臺とあり。必里察は、土土哈の傳に孛羅察とあり。亦必兒失必兒之地は、實錄四〇〇頁に見えたる失必兒にて、喇失惕は「乞兒吉思の國は、阿別兒昔必兒の境に流るゝ安噶喇の大河まで廣がれり」と云へり。土土哈の傳にこの戰を述べて、軍は欠河(客姆河)の冰を數日涉りて乞里吉思の境に至れりと云へれば、失必兒の地は、客姆河の下流、乞兒吉思の南境にありしなるべし。「成宗時在潛邸。帝以海都連年犯邊、命出鎭金山。玉哇失率所部在行。從皇子闊闊出丞相朶兒朶懷、擊海都軍、突陣而入、大破之」。闊闊出は、世祖の第八子なり。丞相朶兒朶懷は、土土哈の傳に大將とあり。和林に行中書省を立てたるは、大德十一年の事にして、この時は未丞相の官あらざれば、この丞相は誤れり。「復從諸王藥木忽兒丞相朶兒朶懷、擊海都將八憐。八憐敗」。八憐は、土土哈の傳(牀兀兒の條)に八隣之地とあり。こゝに將の名とせるは誤れり。「海都復以禿苦馬、領精兵三萬人、直趨撒剌思河、欲據險以襲我師。玉哇失率善射者三百人、守其隘、注矢以射、覺全軍而歸。帝嘉之、賜鈔萬五千緡、金織段三十匹」。禿苦馬は、武宗紀の禿曲滅、土土哈の傳(牀兀兒の條)の禿麥　の傳(月赤察兒の條)の禿苦滅、多遜の帖克蔑、海都の子なり。「海都朶哇、以兵來襲。擊走之。武宗鎭北邊。海都復入寇、至兀兒禿。玉哇失敗之、獲其駝馬器仗以獻。時札魯花赤孛羅帖木兒所將兵、爲海都

困於小谷」。帝命玉哇失援出之。帝喜、謂諸將曰「今日大丈夫之事、舍玉哇失、其誰能之。縱以黃金包其身、猶未足以厭朕志」」。この帝は、武宗にして、この戰は、成宗の大德五年、武宗のまだ宗王なりし時なれば、その語を記するに朕の字を用ふべからず。大德七年、成宗の牀兀兒を諭せるにも、全くこれに同じき語あり。「武宗南還、命玉哇失後從。敵懾莫敢近。因留之戍邊、賜以金察剌二、玉束帶渾金段各一、仍賜秫米七十石、使爲酒以犒其軍」。察剌は、語解に察喇と書き「注酒器也」とあり。「後海都子察八兒等、遣人詣闕請和。朝廷許之、遂撤邊備。玉哇失乃還。帝錄其功、賜鈔五萬貫、進鎮國上將軍、仍舊職」。この帝は、成宗なり。「大德十年五月、晝寢于衞舍、不疾而卒。子亦乞里歹襲。亦乞里歹卒、子拜住襲」。

5。拔都兒。

列傳卷十九「拔都兒、阿速氏、世居上都宜興」。勿論歸化して後の事なり。「憲宗在潛邸、與兄兀作不罕及馬塔兒沙、帥衆來歸。馬塔兒沙從憲宗、征麥各思（祕史の篾客禿）城、爲先鋒將。身中二矢、奮戰拔其城。又從征蜀、至釣魚山、歿于軍。拔都兒從征李壇、圍濟南、身二十餘戰。世祖嘉其能、賞納失思段九、命領阿速軍一千、常居左右。尋於阿塔赤內、充怯薛百戶」。阿塔赤は、阿黑塔赤にて、騸馬を掌る人なり。怯薛は、客失克にて番直なり。「後從塔不台南征、與敵軍戰於金剛臺、又以功受賞。師還、言於帝曰『臣願從軍、爲國效死』。世祖留之、仍命充孛可孫、兼領阿速軍、御馬必令鞚引。至元二十三年、授廣威將軍、後衞親軍副都指揮使、賜虎符。明年夏、從征乃顏于亦迷河、擒僉家奴塔不台以歸。賞鈔及衣段、加定遠大將軍。大德元年卒、子別吉連襲」。僉家奴塔不台は、玉哇失の傳の塔不歹金家奴なり。別吉連は、致和元年、燕鐵木兒に黨し、功を以て文宗より三珠虎符を賜はり、尋て疾に由りて辭し、子也連的襲げり。

6。口兒吉。

列傳卷二十二「口兒吉（叫兒吉）、阿速氏。憲宗時、與父福得來賜（賜は、歸の誤りか）、俱直宿衞、領阿速軍二十戶。世祖時、口兒吉以百戶、從元帥阿朮伐宋、有功、賜以白金等物。宋平、命充大宗正府也可札魯花赤、領阿速軍。從征海都、以功受上賞。師還、成宗命宣撫湖廣等處、訪求民瘼、還仍舊職。至大元年、武宗命充左衞阿速親軍都指揮使、進階廣威將軍。四年、卒。子的迷的兒（的迷惕兒）、由玉典赤、改百戶、領阿速軍」。玉典赤は、正しくは額兀迭赤なり。語解は諤德齊と改め、「司門人也」と注せり。「從指揮玉瓜失、征叛王乃顏、却金剛奴軍于鑠寶直之地、降哈丹禿魯干、累以功受賞」。指揮玉瓜失は、前衞親軍都指揮使玉哇失なり。金剛奴は、玉哇失の傳の金家奴なり。鑠寶直は、　　哈丹禿魯干は、

「至大四年、襲父職、授明威將軍阿速親軍都指揮使。天曆元年九月、兵興、從戰宜興、擊殺敵兵七人。自旦至暮、却敵兵凡一十三處。以功賜金帶一、授左阿速衞都指揮使」。

7。失剌拔都兒。

列傳卷二十二「失剌拔都兒、阿速氏。父月魯達某、憲宗時、領阿速十人入覲、充阿塔赤（阿黑塔赤）。從世祖、至哈剌〔章〕之地、戰數勝。兀里羊哈台（兀哏合台）以其功聞、賜所俘人一口以賞之。後以金瘡發卒。失剌拔都兒、至自脫別（禿別惕）之地、帝特賜白金楮幣牛馬等物。至元二十一年、從丞相伯顏南征、有功、仍充阿塔赤。帝嘗命放海青、曰『能獲新者賞之』。失剌拔都兒、卽援弓、射一兎二禽以獻。賞沙魚皮雜帶及貂裘、且命於尙乘寺爲少卿、於阿速爲千戶。二十四年、授武略將軍、管阿速軍千戶、賜金符。乃顏叛、從諸王和元魯往征之、力戰有功」。和元魯は、

「乃顏平、帝賞以金腰帶及銀交牀等。二十五年、進武德將軍尙乘寺少卿、兼阿速千戶。征哈荅安（哈丹）等敗之、獲其駝馬等物。成宗嘉其功、以軍二千益之。討叛王脫脫

擒之、以功受賞」。脫脫は、土土哈の傳の脫脫木か、又は太宗の第四子哈剌察兒王の子脫脫大王なるべし。大德六年卒、子那海產襲其職。至大二年、進宣武將軍、右衞阿速親軍都指揮使、賜三珠虎符。泰定二年、覃加明威將軍」。

8。徹　里。

列傳卷二十二「徹里、阿速氏。父別吉八、在憲宗時、從攻釣魚山、以功受賞。徹里事世祖、充火兒赤。從征海都、奮戈擊其前鋒。官軍二人陷陣、拔而出之。以功受賞。後從征杭海、獲其牛馬畜牧、悉以給軍食。帝嘉之、賞鈔三千五百錠、仍以分賚士卒。成宗時、盜據博落脫兒之地。命將兵討之、獲三千餘人、誅其酋長。還奉命、同客省使拔都兒等、往八兒胡之地、以前所獲人口畜牧、悉給其主。軍還、帝特賜鈔一百錠。武宗在潛邸、亦以銀酒器賞之」。博落脫兒は、成宗紀に　拔都兒は、阿速の拔都兒に非ず、

「至大二年、立左阿速衞、授本衞僉事、賜金符。皇慶二年、從湘寧王（顯宗甘麻剌の第三子迭里哥兒不花）北征、以功賜一珠虎符。子失列門直宿衞」。天曆元年、屢上都の兵と戰ひ、「以功授左衞阿速親軍都指揮使司僉事。」

9。阿速の克哩思惕敎。

阿速は、古くより高喀速山の北の麓に住みたる部族にして、史記漢書の奄蔡、漢書陳湯の傳なる闔蘇、三國志の注に引ける魏略の西戎傳に「奄蔡國、一名阿蘭」とあるは、卽この阿速なり。（實錄五二四阿速惕の注を見よ。）西紀の初頃より吉哩沙囉馬の書に、その後の東囉馬阿喇必亞の書に見えたる阿蘭の名は、魏略の阿蘭に同じく、嚕西亞の舊史に見えたる牙矢は、奄蔡に近し。經世大典の圖に阿蘭阿思とあるは、阿蘭卽阿思と云へる意にて、阿思は卽阿速、亦卽漢書の闔蘇なり。祕史に阿速惕とあるは、蒙語の複稱なり。

馬速的は、第十世紀の初に、阿蘭の事を委しく述べ、その都を馬阿思と呼び、「阿蘭の國と高喀速山との間に、塞と大河に架する橋とあり。塞は大河に架する橋とあり。」と云ひ、又「阿蘭人は、克哩思惕敎徒なりき。されども後に亦思藍敎を奉じき」と云へり。普剌諾喀兒闘尼は、阿剌尼卽阿昔と呼びて、その住處を科馬尼亞（科曼卽欽察の國）の南に記せり。嚕卜嚕克は（一二四六に）、南嚕西亞の曠原を西方より通りたることを記して、「そこに喀魄察惕と呼ばるゝ寬馬尼遊牧せり。獨逸人には、そは縛剌尼と、その領地は縛剌尼亞と呼ばる。亦昔朶嚕思は、塔主（端）河より篯斡提思河苔紐卜河の沼多き野までを阿剌尼亞と呼べり」と云ひ、二五二頁には「彼等（科曼人）は、南に高き山をもつ。その山の麓に、荒野を互りて橫さまに徹兒奇思と阿剌尼卽阿阿思と住めり。それらは、克哩思惕敎徒にて、今（一二五四年、憲宗四年）まで塔兒塔兒人に抗ひて戰へり」と云ひ、又二四三頁には「五十日祭の朝に（一二五三年、憲宗三年。その時この人は、端河に近き或る處に在りき）。或る阿剌尼人、又阿阿思人とも呼ばるゝもの、我等を問ひき。それらは、吉哩沙の禮式に從ふ克哩思惕敎徒にて、吉哩沙の文字と吉哩沙の僧侶とを持てり」とあり。阿不勒弗苔（一二八七）の引ける亦本賽篤（第十三世紀）は、阿蘭と阿思とを二種に分けたれども、阿思は、阿蘭の近所に住み、同じく突兒克種に屬し、同じく克哩思惕敎を奉じたりと云へり。勺撒佛巴兒巴囉（一四三六年、明の正統元年）は、その紀行に「阿剌尼亞なる名は、阿剌尼なる俗名より出でたり。阿剌尼は、その國語にて阿思を稱するなり」と記せり。

馬兒科保囉の紀行にある、克哩思惕敎徒なる阿蘭の兵士の、常州府にて殺されたる談は、前の伯顏の條に引けり。馬哩固諾里（裕勒の「喀勢」三七三）は、第十四世紀の中頃に阿蘭の事を記して「彼等は、今日にては世界の最大なる最貴き國民にして、人の最美しく最强きものとなれり。塔兒塔兒は、彼等の助に依り東の

帝國を得たり。彼等なくば、一度も重要なる勝利を得ざりけん。塔兒塔兒の始の王成吉思汗は、天の命を受けて世界を鞭韃せんが爲に進みし時に、彼等の君長七十二人を手下に用ひたりき」といへり。卜咧惕旋乃迭兒曰く「成吉思汗の下に阿闌の働きたるを云へるは、誤なり。阿闌の國は、斡歌台の世に始めて征服せられき」。又曰く「元史に記せる阿闌人の名の或るもの（克哩思惕教徒に限れる名）に由りて、彼等の克哩思惕教徒なることは推し料らる。この推定は、馬速的・阿不勒弗荅噜・卜噜克・馬兒科保囉の證明にて確めらる」。

10。也里可溫卽克哩思惕教徒。

列傳卷八十四孝友一郭全の傳に附して、「馬押忽、也里可溫氏、素貧。事繼母張氏、庶母呂氏、克盡子職」とあり。その外諸傳に也里可溫の人見えず。氏族表に曰く「也里可溫氏、不知所自出。案祕書志、有失列門、大德十一年祕書監。雅古、字正卿、泰定元年著作佐郎。囊加台、字元道、後至元三年祕書省奏差。皆不得其世系。又有馬世德、字元臣、官淮南廉訪僉事、見青陽集」と云へり。

也里可溫は、克哩思惕教徒を蒙古人の呼びたる名にして、西亞細亞の書史には、阿兒喀溫とも阿兒開溫ともあり。大佐裕勒（馬兒科保羅一、二八〇注に）曰く「蒙果勒時代の史に、東方の克哩思惕教徒又はその僧侶を指して、阿兒開溫なる詞屢見ゆ。聖馬兒庭の引ける思帖返斡兒珀里安の阿兒篾尼亞史に、阿兒開溫又阿兒喀溫なる詞は、この意味にて用ひらる。多遜の據れる塔哩黑只杭庫沙亦（世界征服史）の著者(主吠尼)は、克哩思惕教徒を蒙果勒人は阿兒喀溫と呼びたりと云へり。呼剌庫の巴固荅惕を攻むる時に、法官長老醫師阿兒喀溫どもに書に贈りて、平和に働くものを免さんことを約束せりとあり。又その侵掠の時には、僅の阿兒喀溫と外國人との外は、免れたる家一つもあらざりきとあり。喇失都丁は、北京(大都)の執政大臣の事を記して、平章卽次位の相四人は、塔只克(珀兒沙人)、漢人、委古兒、阿兒喀溫の四種より取られきと云へり。撒巴丁阿兒喀溫は、一二八八年（至元二十五年）に珀兒沙の阿兒昆汗より囉馬教主に遣したる公使の一人の名なりき。徼思迭婁は、支那の文書より奇異なる文を引きて、「世祖の至元二十六年、大吏十九員の一局を設けて、十字架、馬兒哈、昔里克判、也里可溫の宗教の事務を監督せしめき。この局は、仁宗の延祐二年に位置を高められ、その時その監督の下に也里可溫の宗教を管する小さき役所七十二ありき」と云へり。也里可溫は、漢字に寫せる阿兒開溫なること明かなり。而して馬兒哈は阿兒篾尼亞派を、昔里克判は失哩亞卽札科卜派を、也里可溫は捏思脫兒派を、指せるならんと試に推定せん」と云へり。徼思迭婁の引けるは、何書なるか、考へ得ず。也里可溫は、初は捏思脫兒派を指せる名なれども、元史に據れば、一般に克哩思惕教徒を指せるにて、捏思脫兒派のみに限られざるが如し。

世祖紀中統三年三月「括木速蠻畏吾兒也里可溫荅失蠻等戶丁爲兵」。木速蠻は、木速兒蠻、卽抹哈篾惕教徒なり。荅失蠻も、抹哈篾惕教徒にして、別克塔施派とも云ひ、珀兒沙の人別克塔施の唱へたる一派なり。四年十二月「敕、也里可溫荅失蠻僧道、種田入租、貿易輸稅」。至元元年正月「命儒釋道也里可溫達失蠻等戶、舊免租稅、今竝徵之」。十三年六月「勅、西京僧道也里可溫荅失蠻等、有室家者、與民一體輸賦」。十九年四月「勅、也里可溫、依僧例給糧」。九月「招討使楊庭壁、招撫海外南番、皆遣使來貢。寓俱藍國也里可溫主兀咱兒撒里馬、亦遣使奉表、進七寶項牌一、藥物二瓶。又管領木速蠻馬合馬、亦遣使奉表、同日赴闕」。列傳卷九十七（元史末卷）馬八兒等國の傳には、廣東招討司の達魯花赤楊庭璧、俱藍國に至れる時「也里可溫兀咱兒撒里馬、及木速蠻主馬合麻等、亦在其國、聞詔使至、皆相率來告、願納歲幣、遣使入覲」とあり。紀の楊庭堅は、璧を堅と誤れり。撒里馬撒里馬は、孰か是なるを知らず。又紀その年十月「勅、河西僧道也里可溫、有妻室者、同民納稅」。二十九年七月「也里嵬里沙沙、嘗簽僧道儒也里可溫荅赤蠻爲軍、詔令止隸軍籍」。赤は、失

の誤なり。武宗紀大德十一年十二月改元の詔に「僧道也里可溫荅失蠻、竝依舊制納稅」。至大二年六月「中書省臣言「河南江浙省言「宣政院奏免僧道也里可溫荅失蠻租稅」。臣等議、田有租商有稅、乃祖宗成法。今宣政院一體奏免、非制」。有旨、依舊制徵之」。仁宗紀至大四年四月「罷僧道也里可溫荅失蠻頭陀白雲宗諸司」。泰定帝紀泰定元年二月「宣諭也里可溫、各如敎具戒」。十一月「詔免也里可溫荅失蠻差役」。文宗紀天曆元年九月「命高昌僧、作佛事於延春閣、又命也里可溫、於顯懿莊聖皇后（睿宗拖雷里の妃）神御殿作佛事」などあり。外にも猶あるべし。

洪鈞の元世各敎名考に經世大典の馬政篇を引きて、「中統四年、諭中書省、於東平大名河南路宣慰司、不以回回通事斡脫幷僧道荅失蠻也里可溫畏兀兒諸色人戸、每鈔一百兩、通滾和買堪中肥壯馬七匹。（不以猶言不論と洪鈞注せり）。至元二十六年七月十日、兵部承奉尙書省奏、諸衙門官吏僧道荅失蠻也里可溫斡脫、不以是何軍民諸色人戸、所有堪中馬匹、盡數和買。十四日、兵部承奉尙書省箚付、和尙先生也里可溫荅失蠻斡脫等戸但有四歲以上騸馬曳剌馬小馬、盡數赴官中納、當面給付價鈔」。また「至元十二年、樞密院奏、僧道也里可溫荅失蠻、欲馬何用。二十四年、楊總統奏、漢地和尙也里可溫先生荅失蠻有馬者、已行拘刷、江南者未刷。江淮省言、江南和尙也里可溫先生、出皆乘轎、養馬者少」とあり。洪鈞曰く「經世大典之斡脫、也猶太敎。審定字音、當云攸特。首字、今譯爲勝。次字大典譯音爲勝。或稱如德亞、則言其他。如德、亦攸特也」。先生は、錢大昕の考異に「元人稱道士爲先生」と云へり。

又考異に、武宗紀至大二年六月の條に、元典章の一條を引きて、「荅失蠻迭里威失戸、若在回回寺內住坐、並無事產、合行開除外、據有營運事產戸數、依回回戸體例收差」とあり。迭里威失は、正しくは迭兒微施にて、珀兒沙語乞食卽苦行の僧なり。故に迭兒微施は、一派の名にあらず、數派の總名にして、その中に喀的兒派、哩發亦派、嚕米派、沙的里派、巴荅威派、納克施邊篤派、撒篤派、別克塔施派、合勒哇惕派などありき。荅失蠻迭里威失戸は、別克塔施派の迭兒微施の家なり。

又至元辨僞錄に曰く「釋道兩路、各不相妨。今先生言道門最高、秀才人言儒門第一、迭屑人奉彌失訶、言得生天、達失蠻叫空、謝天賜與。細思根本、皆難與佛齊」と云へり。迭屑は、長春の西游記にも、辛巳の九月四日、回紇（委古兒）の都の西なる輪臺の東に宿れる時「迭屑頭目來迎」とあり。卜唎惕施乃迭兒曰く「帖剌的兀思（「支那の克哩思惕敎の古き跡形」嚕西亞の東洋の記錄一二五一―一六三）に據れば、迭屑は、薩散朝の時より克哩思惕敎徒を、時ありては又事火敎徒と馬只とを呼ぶに珀兒沙人の用ひたる帖兒撒なる詞の支那音譯なり。阿兒箴尼亞の海屯は、亞細亞の諸國（第十四世紀の初）の談に、塔兒薛の名を約古兒（委古兒）の國に明かに加へたり。蒙帖科兒徵諾は、同じ時ごろに北京にて書きたる手紙の中に塔兒薛文字と云へる事あるは、明かに委古兒文字を指せり。この詞を委古兒に當てたることは、彼等の中に捏思脫兒派の克哩思惕教の廣く流行せることを示すと、裕勒（「喀勢」二〇五）は考へたり」。彌失訶は、景敎の碑に彌施訶と書けり。卽箴昔亞にして、救世主耶蘇を云へるなり。また顧炎武の山東考古錄に載せたる元の泰定帝の嶽廟の碑に「和尙也里可溫先生達識蠻每、不拘揀甚麽、差發休當者」とあり。佛も耶蘇も道士も回回も、何にても徭役するなと云へるなり。

二。克哩思惕敎の東流。

克哩思惕敎の支那に入りたるは、唐の世にして、太宗の貞觀九年、捏思脫兒派の高僧阿羅本、珀兒沙より長安に詣り、太宗の崇敬を得てより、その敎稍行はれき。失哩亞の古記に據れば、捏思惕哩兀思の放逐せられて後、その說は、却て珀兒沙その外東方の諸國に廣まり、西紀四百十餘年には赫喇惕に、第六世紀の初に

は撒馬兒干篤に敎正の管區を設けたり。支那も、初は敎正の管區なりしが、第八世紀の初（玄宗の開元中）に、赫喇惕・撒馬兒干篤と共に大敎正の管區に陞せられき。敎主提抹世の時（七七八―八二〇）、荅徽篤と云へる支那の大敎正に任じたること見え、又第九世紀の中頃に、支那の大敎正は、他の東方諸國のそれらと共にその地の遠きに由り、敎會の毎四年の集會に參列せざることを許され、その事業の有様の報告を六年毎に送るべきことを命ぜられたること見えたり。阿喇必亞人阿不賽篤の談に據れば、八七八年（僖宗の乾符五年）に、澉浦（卽杭州）の夥しき外國居留民の一部は、克哩思惕敎徒なりと云へり。

景敎の碑は、委しく云へば「大捏思脫兒派の克哩思惕敎の支那に行はれたる景況は、景敎の碑に詳かなり。秦景敎流行中國碑」にして「久しく地に埋もれ居たるを、明の天啓五年（我が寛永二年）にふと掘り出したる物なり。その碑文を飜譯し注釋したる人數多き中に、陽瑪諾（奄馬努額勒）の景敎碑頌正詮などあり。その碑文には阿羅本を大秦國（囉馬卽東囉馬）の大德と云ひ、貞觀九年に長安に至り、十二年に詔ありて京の義寧坊に大秦寺を造るとあれども、實は阿羅本は珀兒沙より詣り、寺の名も波斯寺と云ひしを、後に改めたる名を以て追稱したるなり。冊府元龜に曰く「天寶四載九月、勅、波斯經敎、出自大秦。傳習而來、久行中國。爰初建寺、因以爲名。將以示人、必循其本。其兩京波斯寺、宜改爲大秦寺。天下諸州郡有者、亦宜準此」とあり。杜佑の通典に（姚寛の西溪叢語、馬端臨の文獻通考も同じく）、この勅を引き、九月を七月とし、循を脩と誤れり。波斯寺を大秦寺と改められたる理由は、蓋當時珀兒沙は撒喇先國の領地となり、抹哈襪惕敎の中心となりたる故に、克哩思惕敎を珀兒沙の宗敎の一派と見られんことを嫌ひ、かつ克哩思惕敎の起りたる失哩亞の地は、もと囉馬帝國卽大秦國の領地なりし故に、「波斯經敎、出自大秦」と云へるなり。諸州郡に波斯寺の立てられたる事は、景敎の碑に「高宗大帝、克恭纉祖、潤色眞宗。而于諸州、各置景寺、仍崇阿羅本爲鎭國大法主。法流十道、寺滿百城」とあり。寺の名を改めたることは、固より碑には載せざれども、「天寶三載、大秦國有僧佶和、瞻星向化、望日朝尊。詔僧羅含僧普論等一七人、與大德佶和、於興慶宮修功德。於是天題寺牓、額戴龍書。寶裝璀翠、灼爍丹霞。睿札宏空、騰凌激日。寵賚比南山峻極、沛澤與東海齊深」とあり。この寺牓龍書は、佶和の至れる翌年、寺の名を改めたるに由り勅額を賜はれるならん。失哩亞の古記に第八世紀の初に支那を大敎正の管區に陞せきとあれば、この大德佶和は、蓋初めての大敎正なるべし。天寶三年は、西紀七四四年なり。

又通典に「貞觀二年、置波斯寺」とあるは、二の上に十の字を脱したるなり。西溪叢語には「貞觀五年、有傳法穆護何祿、將祆敎詣闕聞奏。勅令長安崇化坊立祆寺、號大秦寺、又名波斯寺」とあり。五年は、九年の誤なり。穆護は、珀兒沙語の抹古卽馬只にて、祆敎の僧なり。唐の人は、景敎を祆敎と混じ居る故に、景敎の僧をも穆護と云へり。何祿は阿羅本の訛にて、阿を何と誤り、本の字を脱したるなり。阿羅本の來朝は、貞觀九年にして、寺の建立は十二年なるを、建立の年を掲げざるは疎なり。佛祖統紀に「貞觀五年、勅於京師建大秦寺」とあるは、全く西溪叢語に依りて誤れるなり。

景敎の碑は、始めに「大秦寺僧景淨述」、末に「大唐建中二年、歲在作噩、太簇月七日、大耀森文日建立。時僧寧恕知東方之景衆也」とありて、卽西紀七八一年、提抹世の敎主たる間にして、寧恕と云へる大敎正の時に立てられたり。この寧恕は、提抹世の任じたる大敎正荅徽篤の漢名なるか、その前の大敎正なるか、知るべからず。この碑の地に埋められたるは、武宗の佛寺を毀ち、僧尼を還俗せしめたる時の事なるべし。

舊唐書武宗紀會昌五年（西紀八四五年）「四月、勅祠部檢括天下寺及僧尼人數。大凡寺四千六百、蘭若四萬、僧尼二十六萬五百。七月、勅併省天下佛寺。中書門下條疏聞奏「據令式、諸上州、國忌日、官吏行香於寺。

其上州、望各留寺一所。其下州、竝廢。其上都（長安）東都（洛陽）兩街、請留十寺、寺僧十人」。勅曰「上州合留寺、工作精妙者留之、如破落、亦宜廢毀。其合行香日、官吏宜於道觀。其上都下都、毎街留寺兩所、寺留僧三十人」」。四街にて寺八所、僧二百八十人なり。佛祖統紀には「天下州郡、各留一寺、上寺二十人、中寺十人、下寺五人」とあり。本紀と稍異なり。その續きに「中書又奏「天下廢寺銅像鐘磬、委鹽鐵使鑄錢。其鐵像、委本州鑄爲農器。金銀鍮石等像、銷付度支。衣冠士庶之家所有金銀銅鐵之像、敕出後、限一月納官如違、委鹽鐵使、依禁銅法處分。其土木石等像、合留寺內依舊」。又奏「僧尼不合隷祠部、請隷鴻臚寺。其大秦穆護等祠、釋教既已釐革、邪法不可獨存。其人竝勒還俗、遞歸本貫、充稅戶。如外國人、送還本處收管」」。大秦穆護等祠は、大秦景教の寺と穆護の祭れる祅神の祠とを云へるなり。外に摩尼教などある故に、等の字を加へたるなり。かくてその八月には、廢佛勵行の詔を下し、「其天下所拆寺、四千六百餘所。還俗僧尼二十六萬五百人、收充兩稅戶。拆招提蘭若、四萬餘所。收膏腴上田、數千萬頃。收奴婢爲兩稅戶、十五萬人。隷僧尼屬主客、顯明外國之敎。勒大秦穆護祓三千餘人還俗、不襍中華之風」と本紀に云へり。主客は、外客を取扱ふ官司の名なり。穆護の下に祓の字あり。通典卷四十に祅祠の官を載せて、視正五品薩寶、視從七品薩寶府祅正、視流外薩寶府祓祝とあれば、この祓は、卽祓祝ならんか。又西溪叢語には「勅、大秦穆護大祅等六十餘人、竝放還俗」、佛祖統記には「穆護火祅、竝勒還俗、凡二千餘人」とあり。叢語の大祅は、火祅の誤なり。然らば本紀の祓は、祅の字の誤にして、その上に火の字脱ちたるならんか。いづれにしても祅教の徒にして、穆護の同僚又は下僚なり。叢語の六十は、六千の誤ならん。六千は本紀より多く、統紀の二千は本紀より少し。

又佛祖統紀に佛寺を廢する前に「會昌三年、勅天下末尼寺、竝令廢罷、京城女末尼七十人皆死、在回紇者流之諸道、死者大半」とあり。これは、武宗廻鶻を征して烏介可汗を擊破りたる時の處分にして、武宗紀に百官賀を稱へし時の詔を載せたり。その末段に「應在京外宅及東都修功德廻紇、竝勒冠帶、各配諸道收管。其廻紇及摩尼寺莊宅錢物等、竝委功德使、與御史臺及京兆府、各差官點檢收抽、不得容諸色人影占。如犯者竝處極法、錢物納官。摩尼寺僧、委中書門下、條疏聞奏」とあり。中書門下は、摩尼寺の僧の處分をいかに條奏したるかは、本紀に漏れたれども、武宗は既に道士趙歸眞等に迷ひ込みて、他の宗教を排除せんと考へ居たる時なれば。廻鶻を破れる勢に乘じて、必ず嚴酷の處分をなしたるならん。

かくて武宗の道教に凝り固まりたる氣燄は、佛教のみならず、景教祅教摩尼教までも掃蕩したるなり。武宗は、その翌年に崩じ、叔父宣宗立ち、翌年（大中元年）佛教の禁を弛めたれば、景教も同時に蘇息したらんと思はる。されどもこれより衰微して前時の隆盛に復せざるらしく、史書にその景況を記せるもの無し。阿喇必亞人亦撒克の子にて阿不勒發喇只と號する馬訶篾惕（咧腦篤の阿不勒弗荅一四〇二に）曰く「三七七年（西紀九八七年、宋の太宗雍熙四年）に、（巴固荅惕の）克哩思惕敎徒の坊區にある寺の後にて、納只喇の一僧に我遇へり。その僧は、七年前に、阿兒篾尼亞の教長の命にて、五人の僧と共に、支那の克哩思惕教の事務を整理せんが爲に彼の國に遣されたりき。我その旅行の事を問ひたれば、その人曰く「克哩思惕教は支那にて全く滅びたりき。克哩思惕敎徒は、種種なる道（死方）にて死にたりき。彼等の寺は、毀たれて、克哩思惕敎徒只一人その地に殘れり。我が世話して助くべき人を一人も見出さざる故に、往きしより速に歸りたりき」と云へり」。この僧は、支那の都を太兀納又は塔余也と呼びたるに由り、保世は、兆卽兆府の訛ならんと云ひたれども、京兆府の京を略きて、只兆又は兆府と呼びたること無し。裕勒は、太原府ならんと云ひたれども、太原は宋の都にあらず。それらよりは宋の都開封府の古名大梁に稍近き樣なれども、これも確な

らず。

克哩思惕教は、支那にては甚衰へ或は滅びたれども、中亞細亞の諸國にては衰へざりき。既に教主提抹世(七七八—八二〇)の時に、裏海に臨める諸國にて布教盛になり、それに續きて突兒克の一可汗と小き君長數人との改宗せし事あり。裕勒の「喀勢」(一七九)に曰く「克哩思惕教徒の史家固唎果哩阿不勒發喇紏思の談に依れば、一〇〇一年(宋の眞宗咸平四年)と一〇一二年(大中祥符五年)との間に、巴閻苔惕の(揑思脫兒派の)教主は、闊喇散の篾兒兀の大教正より書簡を受取れり。その書簡は、突兒克の國の奧にて遙に北東にある客哩惕の王の不思議なる改宗を述べて、その王は、篾兒兀に使を遣して克哩思惕教の僧を求め、かつその臣民二十萬人は王に傚ひて洗禮を受けんとして居ることを告げこしたり。教主は、命を下して、僧侶教師を派遣せしめき。一部落として客喇亦惕人の克哩思惕教徒なりし事は、抹哈篾惕教徒の史家なる喇失惕額丁も證明せり」。客哩惕の王は、即客哷亦惕の罕なり。阿不勒發喇紏思の談に殊にその年紀に誤り無くば、その罕の改宗は、也速該の死したる一一七〇年(宋の孝宗乾道六年)より百六七十年前なれば。その罕は、也速該の安荅なる客哷亦惕の王罕の五世又は六世の祖なるべし。

元の定宗元年に蒙古の行宮に到りたる佛蘭昔思派の僧普剌諾喀兒闢尼は、成吉思汗の奇台征伐を述べたる後に、奇台の民の風俗を記して、「奇台人は、異教の徒にして、已らの文字を用ふ。されども舊約新約聖書と聖父の列傳と隱居せる法師と會堂として用ひらるゝ建物とあり、その建物にて彼等は、彼等の都合善き時に祈禱す。然して彼等の中にも聖僧ありと彼等は云ふ。彼等は、唯一の神を拜み、主耶蘇克哩思惕を尊び、永久の生活を信ずれども、洗禮は全く無し。彼等は、我等の經典を崇び敬ひ、克哩思惕教徒を善く待遇し、惠施の業を多く爲す。實に彼等は、全く親切にして禮儀ある民なりと見ゆ」と云へり(「喀勢」序論一二四)。普剌諾喀兒闢尼は、只傳聞に依りて書きたれば、誤りあらん。その一神を拜むと云へるは、儒家の上帝を敬ひ、又は道家の玉皇を崇むるを聞きて誤解したるに似たり。

普剌諾喀兒闢尼と同じ時に、小阿兒篾尼亞の王海屯の命を受けて、海屯の弟阿兒篾尼亞の騎將搿帕惕は、定宗即位の大會に參列せんが爲に蒙古に到れり。蒙古より還る途中撒兀唎庫安惕にて、搿帕惕は、奇魄囉思の王と后とその朝廷の人だちとに宛てたる書簡を送れり。撒兀唎庫安惕は、裕勒の考へに、兀は蓋姆の誤りにて、撒馬兒干篤ならんと云へり。その書簡の大意に曰く「今の汗の父(斡闊歹)の死してより五年過ぎたることは、事實なり。されども塔兒塔兒の列侯諸將は、大地の面に分散したりし故に、その汗を戴かんが爲に一所に聚ることは、五年の内には殆どむづかしかりき。或る者は印的亞に、他の者は合塔(支那)の國に、又は喀思合兒唐合惕(唐兀惕)の國に居りき。唐合惕の國は、主耶蘇の生れたるを拜まんと別思列姆に至りし三王の出てたる所なり。克哩思惕の勢力は大なるものにて、その地の民は、克哩思惕教徒なり。又合塔の全土は、その三王を信ず。我嘗て自ら彼等の會堂に入りて、耶蘇克哩思惕の畫と黃金乳香沒藥を供する三王の畫とを見たり。彼等の克哩思惕を信じ、汗もその民も今克哩思惕教徒となりたるは、その三王に由りてなり。彼等は、汗の諸門の前に會堂をもち、そこに鐘を鳴らし、木の片を敲く。……我等は、東方にいづこにも散在するあまたの克哩思惕教徒を見、又高き、古き、善き建築の、美麗なる會堂あまた、突兒克人に壞られたるを見たり。それ故にその他の克哩思惕教徒は、今の汗の祖父の前に來ぬ。彼は、彼等を最も敬ひて、崇拜の自由を與へ、又辭又は行ひを以て迫害し、彼等に陳情の正しき理由を與ふることを禁ずるの命令を出せり。かくて彼等を慢侮して取扱ひたる撒喇先どもも、今は同樣なる取扱をなすに至れり。……又使徒巫脫馬思の教化したる印的亞の國に、克哩惕教を信ずる一王ありて、撒喇先なる諸王の中に孤立して苦みき。諸王は常に

方方より彼を攻めたる末に、塔兒塔兒は、その國に至りたれば、彼はその藩臣となりき。その時彼は、己の軍と塔兒塔兒の軍とを以て撒喇先どもを擊破り、印的亞にて夥しき捕虜を得たれば、印的亞の奴隷は、東方全體に滿ちたり。我この王の捕りて賣りに迭りたる奴隷五萬人以上を見たり」とあり(「喀勢」序論一二七)。この書簡に述べたる事蹟は、殆ど皆根無し言なり。裕勒曰く「この書簡の動機は、蓋その兄海屯が、その怪しき印度の王の如く、塔兒塔兒の藩臣となりたることを言譯せんが爲ならん。搿帕惕は、一二七二年(至元九年)突兒克人との戰にて死にき」。

佛闌西王路易第九は、拔都の子撒兒塔黑の克哩思惕敎徒なるを聞き、塔兒塔兒の國情を探りかつ敎化せんが爲に、佛闌昔思派の僧嚕卜嚕克を東方に派遣せり。嚕卜嚕克は、一二五三年(憲宗三年)五月、公士但丁堡より黑海を渡り、克哩米亞を過ぎ、佛勒噶河の畔に至り、撒兒塔黑に見えしが、撒兒塔黑は聞きしに違ひ、頑なる不信者なりき。科札惕と云へる捏思脫兒敎徒、異敎徒にも劣れりと嚕卜嚕克の誹れる大臣ありて、撒兒塔黑に紹介し、謁見の事を取計ひ、嚕卜嚕克を欺きてその衣服を奪へり。それより佛勒噶河に傍ひて泝り、巴禿汗の營に至り、それより又四箇月の長旅にて、その年の冬、憲宗の行宮に達しき。

憲宗は、捏思脫兒派の僧侶に嚕卜嚕克の使命を問はしめたる上にて、謁見を許し、蒙古に住みて布敎せんとする嚕卜嚕克の願をば却けたれども、家を與へて、寒さの緩むまで二月ほど留まること、望むならば喀喇科嚕姆に往くことを許せり。嚕卜嚕克の觀たるには、曼古とその家族とは、克哩思惕敎木哈篾惕敎佛敎の法事に區別なく加はり、各の宗敎の與へんと云ふ福を慴にせんとせり。克哩思惕敎は、捏思脫兒派のそれにして、その宗派のいかに墮落したるかは、嚕卜嚕克の述べたる畫の如き珍談に由りて察せらる。或る祭の日に曼古の正妻は、その子どもを伴れて、捏思脫兒派の寺に入り、その派の風習に從ひ、聖像の右手に接吻し、

己の右手を與へて接吻せしめき。曼古も居て、その妻と神案の前なる金着せの椅子に坐り、嚕卜嚕克とその隨行者とに歌はしめたれば、二人は吠尼散克帖思闘哩禿思(聖靈來)を唱へき。帝はその後直に去りたれども、皇后は後に留りて、克哩思惕敎徒に賜物を與へ、米酒葡萄酒馬乳酒を取寄せ、自ら盞を取り、跪きて福を求め、后の飮む間僧徒は歌ひ、然る後僧徒は醉ふまで飮みけり。かくてその日を過し、夕に向ひ皇后も同じく醉ひ、輿に乘りて歸るを、僧徒は歌ひつゝ吠えつゝ護送せり。

他の折に嚕卜嚕克は、捏思脫兒派の僧聚阿兒篾尼亞の一僧と列を成して、曼古の宮殿に往きけり。内に入る時、一人の僕、沙曼のトひに用ひたる羊の肩骨の燻したるを持ち出づるを見たり。僧徒は、香爐を持ち往きて、帝の身に香氣を與へ、その盞を祝して然る後に聚皆飮みき。皇族の人人にも、次次に見えき。捏思脫兒派の考へたる克哩思惕敎の禮拜は、高き所に十字架を新しき絹の一片の上に置きて、その前にひれふすなりき。

前に記せる三の宗派は、常に改宗を勸め居りて、彼等の大なる望みは、合罕を引入るゝことなれども、曼古は中立して、いづれをも寛大に扱へり。一日嚕卜嚕克に語りて曰く「我が朝廷の人人は、唯一にして長生なる同じ神を拜むものなれば。各の方式にてそれを崇むることを許されざるべからず。あらゆる宗派の人に我が恩寵を分け與ふるは、いづれも我が意に適ふことを著さんが爲なり」と云ひき。歴史家主吠尼は、曼古はおもに木哈篾惕敎徒をひいきせしことを云へるに、海屯と思帖返斡兒弗里安とは、克哩思惕敎徒最ひいきせられしことを主張せり(訶兒倭思一、一九〇)。

されども克哩思惕・木哈篾惕・佛陀の三敎は、皆朝廷の磬澤に過ぎず。蒙古の國民の實行するは、沙曼敎にして、舊の如く國敎となり居たり。嚕卜嚕克の記載に據れば、沙曼僧徒の長は、皇宮より石の投げらる距離に

住みて、偶像を運ぶ輿を預れり。

沙曼どもは、星占を行ひ、(日月の)蝕を豫言し、吉日凶日を指定し、朝廷の用に供せらるゝ物、合罕に獻れる物を火を以て淨め、誕生の時に星命を說き、病牀に招かれて醫療を行へり。彼等もし人を害せんとすれば、その人未來の禍を起さんことを訴ふるのみにて足れり。彼等は、惡鬼を呼ぶ時、大鼓を擊ちて、感覺を失ふまで己が心を刺激し、その惡鬼より答を得たりと云ひて、その答を神託と宣言せり。

復活祭の日(憲宗四年)に、嚕卜嚕克は、合罕に從ひて、喀喇科嚕姆に至れり。この都の狀を嚕卜嚕克の述べたる談は、實錄六一三頁の注に引けり。又皇宮の中堂の高御座の前に當り、銀の樹ありて、四の銀の獅子の上に立ち、その獅子の口より四の銀の罍に葡萄酒馬乳酒糖蜜酒米酒流れ出づ。樹の頂に銀の天使ありて四の噴泉を供する酒池涸れて注入を要する時に喇叭を吹く。この珍奇なる銀細工は、洪噶哩亞の別勒果囉篤(白城)にて捕はたれる帕哩の銀工吉要姆孛舍の作にして、それを作るに銀三千馬兒克を費しき。この銀工の外に、嚕卜嚕克は、喀喇科嚕姆にてあまたの克哩思惕敎徒・洪噶哩人・阿闌人・嚕思人・古兒只(勺兒只亞)人・阿兒幾尼亞人に遇ひき。蒙古に五箇月留まりたる後、嚕卜嚕克は、歸國の途に上り、路易第九の書簡に答ふる合罕の返書を與へられき。その書は、穩なる辭にて述べたれども、通例の如く、その國の遠きことゝ强きことを恃まずに服從すべきを命じて結べり(訶倭兒思一、一九一)。

又嚕卜嚕克は、支那を喀台と、西遼卽合喇乞台を喀喇喀台と呼びて、その紀行に「此等の(喀喇)喀台人は、我が通りたる或る山中の草地(阿勒魄思)に住みき、其等の山中の或る野に、威力ある羊飼にして、乃蠻と云ふ人民の主君なる捏思脫兒敎徒居りき。その人民は、捏思脫兒派の克哩思惕敎徒なりき、科亦兒汗死にし時に、その捏思脫兒敎徒は、(彼に代り)自ら王となり、捏思脫兒敎徒どもは、その人を王約翰と呼びてその事蹟を眞實より十倍多く語りき。それは、世界のその方より來ぬる捏思脫兒敎徒どもの常にして、最驚くべき物語を烏有の中より引き出すことを好み、撒兒塔黑は克哩思惕敎徒なることを言ひふらしたるも、彼等にて、曼古汗と肯汗とにつきても、同じ事を語れり、事實は、たゞその汗だちは、克哩思惕敎徒を他の民より重く取扱ふのみにて、嘗て少しも克哩思惕敎徒に非ず、かゝる成行にて王約翰につき大なる物語行はれけれども、その遊牧地なりし所を我が過ぎたる時すら、わづかなる捏思脫兒敎徒の外は、誰も約翰につきて何事をも知らざりき。」その遊牧地を今占領したる肯汗の朝廷には、富喇帖兒(敎會の兄弟)安篤咧立寄り、我は歸り路にそこを過ぎけり。この約翰に、一人の兄弟ありて、それも遊牧民の大首領にて、その名は翁克と云ひ、喀喇喀台の阿勒魄思の他(東)の方にて、その兄弟より二十日路ばかり隔たれる所に住み、喀喇科嚕姆と云ふ小き町の主君にして、克哩惕篾兒奇惕と云ふ人民を管きたりき、此等の人民も、捏思脫兒派の克哩思惕敎徒なりき。されどもその主君は、克哩思惕敎を棄てて、偶像敎に歸依し、己の傍に居らしめたる偶像の僧どもは、皆惡鬼の呪ひ託宣を事とするものなり、又その遊牧地より十日又は十五日行きたる所に抹阿勒と云ふ甚貧しき部落の遊牧地ありき。その部落には、酋長も無く、其邊のあらゆる人民の信ずるが如き占ひ呪ひの外に宗敎も無し。抹阿勒の次に、又塔兒塔兒と云ふ他の貧しき部落ありき。時に王約翰は、嗣子を遺さずに死にたれば、翁克入りて自ら汗と稱し、その羊馬の群は、抹阿勒の界までも廣がりき。その時抹阿勒の部落の內に成吉思と云へる鍛冶ありて、機會あるごとに翁克汗の家畜を掠むることを常としたれば、翁克汗の牧人は、大なる苦情をその主に陳べたり。かくて翁克は、軍を聚めて、成吉思の罪を責めて抹阿勒の地に攻め入りたれば、成吉思は、塔塔兒の地に遁げてそこに身を匿せり云云」と云へり(裕勒の「略勢」一七七)。

この紀行の科亦兒汗は、合喇乞台の古兒罕直魯古を、王約翰は、乃蠻の古出魯克罕を云へるなり。克出魯

克を約翰と云へるは、その頃歐囉巴にて、亞細亞の奥に、普啢思必帖兒、約翰と呼ばるゝ克哩思惕教を信ずる國君ありて、抹哈篾惕教徒を擊破れりと云へる傳奇の說行はれ居たるに由り、克哩思惕教徒なりと聞ける乃蠻の罕をその約翰に古事附けたるなり。

成吉思汗實錄續編 終

東洋史學要書目錄

東洋史學要書目錄

東洋史學要書目錄

本書は、先生自から研究に便せんとして、座右に備へられたる書目にして、固より世に公にせんとせられしものにあらず。故に或は書名に疑問を附し、或は著者の姓名を缺き、或は卷數を脫せしもの少からず誤脫の較然著明なるものは之を補正したれども、否らざるものは悉く原形を存し敢て私意を加へず。たゞ東京北京及び上海等の書林に於ける市價を記入したるものゝ如きは之を省けり。先生若し在らば之が公刊を許可せられざるならんも、而も本書の東洋史研究者に便宜を與ふることの大なるを思へば、遂に之を割愛するに忍びず。乃ち敢て遺書の中に收む、罪を在天の靈に得るが如きは、固より編者の甘受する所なり。

東洋史學要書目錄索引

上古	一頁	皇國 附倭寇	二三頁	載籍	五三頁
漢魏	五頁	琉球	二四頁	彙刻書	五四頁
晉南北朝	五頁	臺灣	二五頁	文字	五八頁
唐	六頁	韓	二六頁	書畫篆刻	五九頁
五代	七頁	滿洲	二八頁	金石古器	六〇頁
宋	八頁	朔方	二九頁	財政	六二頁
遼金	一〇頁	西域	三〇頁	兵制	六三頁
、元	一一頁	西羌	三二頁	刑法	六三頁
明	一二頁	地理	三三頁	制度	六四頁
清	一三頁	外紀	三六頁	典禮	六六頁
通史	一四頁	儒學	三七頁	學校選擧	六八頁
苗蠻	一六頁	道教	三八頁	輿服	六九頁
安南	一九頁	佛教	三八頁	工藝	六九頁
南海	二一頁	論說考訂	四八頁	風俗時會	六九頁
印度	二二頁	類書	五一頁	音樂	七〇頁

東洋史學要書目錄

上古部

尚書注疏二十卷、舊題漢孔安國傳唐孔穎達等正義、凡五十八篇、其二十五篇、蓋晉人所僞作、孔安國傳亦依託也。清乾隆四年武英殿刻十三經注疏、同治十年廣州書局覆刻殿本、嘉慶二十年阮元校刻十三經注疏、毎卷各附校勘記。安永六年京都書坊繙刻明北監本。四庫書目書類。

書集傳六卷、宋蔡沈撰。監本五經、頭書書經集註六卷。寛文四年京都書坊刊、享保九年享和元年重刊。書類。

古文尚書考異六卷、明梅鷟撰。平津館叢書己集。書類。

日知錄第二卷、

古文尚書疏證八卷、清閻若璩撰。家刻本、吳氏天津刻本、清經解續編第二十八至第三十六卷。書類。

禹貢錐指二十卷圖一卷、清胡渭撰。原刻本、清經解第二十七卷至第四十七卷。書類。

尚書地理今釋一卷、清蔣廷錫撰。清經解第二百七卷、借月山房彙鈔第一集、指海第五集、昭代叢書。書類。

古文尚書考二卷、清惠棟撰。清經解第三百五十一、二卷。

古文尚書後案三十卷、清王鳴盛撰。原刻單行本、清經解第四百四至三十四卷。

古文尚書撰異三十三卷、清段玉裁撰。道光元年彙刊經韻樓叢書、清經解第五百六十七至九十九卷。

古文尚書馬鄭注十卷、附表及逸文三篇、清孫星衍輯。岱南閣叢書、清經解。

尚書今古文注疏三十卷、清孫星衍撰。平津館叢書壬集、清經解第七百三十五至七十三卷。孫馨於王。

禹貢鄭注釋二卷、清焦循撰。自著雕菰樓叢書、清經解續編第三百五十七、八卷。

禹貢會箋十二卷、清徐文靖撰。徐位山六種。書類。

胡氏禹貢圖考正一卷、清陳澧撰。清經解續編第九百四十四卷、自刊東塾叢書、附漢書地理志水道圖說後。

尚書大傳四卷、附考異、補遺、續補遺、漢伏勝遺說、張生歐陽生等述、鄭玄注、清盧文弨輯補。雅雨堂叢書、崇文書局彙刻書、榕園叢書甲集。書類。

尚書大傳輯校三卷、清陳壽祺校注。清經解續編第三百五十四至六卷。外有尚書大傳定本八卷、亦陳壽祺所校定、廣州刻侯官陳氏所著書。

逸周書、補注二十四卷、晉孔晁注、清陳逢衡校補。江都陳氏所著書。別史類十卷。

逸周書集訓校釋十卷、附逸文一卷、清朱右曾撰。崇文書局彙刻書、清經解續編第一千二十八卷至三十八卷。

毛詩注疏三十卷、附詩譜一卷、 漢毛亨傳、鄭玄箋、唐孔穎達等正義、武英殿刻十三經注疏、廣州書局覆刻殿本。阮元刻本、附校勘記、無詩譜。嘉慶九年木瀆周氏校刻毛鄭詩三十卷、詩譜一卷、音義三卷、附毛詩校字記一、卷。詩類。

毛詩草木鳥獸蟲魚疏二卷、 吳陸璣撰。六藝堂刻丁晏校本、古經解彙函重刻丁本、津逮祕書第一集、學津討原第三集。詩類。

詩集傳八卷、 宋朱熹撰。監本五經、湖北書局刻本、簡端各載小序。頭書詩經集註八卷、寛文四年京都書坊刻、寛政三年重刻。詩類。

詩地理考六卷、 宋王應麟撰。玉海附刻本、津逮祕書第一集、學津討原第二集、玉海元刊本、修版至淸乾隆間。嘉慶十一年興縣康基田刊於江甯藩署後遺亂燬失、光緒十年浙江書局重刊。

日知錄第三卷、

詩義折中二十卷、 淸乾隆二十年敕撰。內府刻本、浙江書局重刻本、詩類、

詩地理徵七卷、 淸朱右曾撰。淸經解續編第一千三十九至四十五卷。

詩氏族考六卷、 淸李超孫撰。別下齋叢書。

韓詩外傳十卷、 漢韓嬰撰。崇文書局彙刻書、淸趙懷玉校本、周廷寀校注本、盱眙吳氏望三益齋刻周趙合校本、漢魏叢書、津逮祕書、學津討原皆遜。

春秋左傳注疏六十卷、 晉杜預集解。唐孔穎達等正義。以下三書武英殿刻十三經注疏、廣州書局覆刻本、阮元刻本、

春秋公羊傳注疏二十八卷、 漢何休解詁。唐徐彥疏。

春秋穀梁傳注疏二十卷、 晉范甯集解、唐楊士勛疏。

詳注左氏東萊博議二十五卷、 宋呂祖謙撰、門人張成招注。同治間永康胡鳳丹編刊退補齋金華叢書、坊行本不完。

左傳杜解補正三卷、 淸顧炎武撰。門人潘耒編刊。亭林遺書、借月山房彙鈔第一集、指海第六集、淸經解第一至第三卷、明和四年京都書坊刊本。

日知錄第四卷、

左傳事緯十二卷、附錄八卷、 淸馬驌撰。自刻本。漢陽朝宗書室活字版本無附錄。

春秋地名考略十四卷、 淸徐善代高士奇撰。高文恪公四部藁甲函。

左傳姓名考四卷、 淸高士奇撰。高文恪公四部藁甲函。

左傳紀事本末五十三卷、 淸高士奇撰。因宋章沖左傳事類始末而廣之、以列國蹟分門件繫、較沖書爲精密。高文恪公四部藁甲函、江西書局高袁陳谷五種合刻本、紀事本末類。

春秋左傳、補注六卷、 淸惠棟撰。墨海金壺經部、守山閣叢書經部、淸經解第三百五十三至八卷。

春秋長歷十卷、 淸陳厚耀撰。淸經解續編第四十七至第五十六卷。

春秋世族譜一卷、 淸陳厚耀撰。道光十九年湯氏刻本、又興李淇春秋世紀編合刻、光緒十二年邵武徐氏叢書初刻。

春秋大事表五十卷、輿圖一卷、附錄一卷、 淸顧棟高撰。原刻本、淸經解續編第六十七至第一百三十卷。

春秋地理考實四卷、 淸江永撰。淸經解第二百五十二至五卷。

春秋識小錄九卷、 淸程廷祚撰。職官考略三卷、春秋地名辨異三卷、左傳人名辨異三卷。緜莊遺書、藝海珠塵金集。

春秋左傳分國土地名二卷、 淸沈淑撰。藝海珠塵石集、後知不足齋叢書第一函。

左傳列國職官一卷、 淸沈淑撰。藝海珠塵石集、後知不足齋叢書第一函、林伯桐春秋左傳風俗二十卷未刊。

春秋繁露十七卷、 漢董仲舒撰。抱經堂彙刻書、古經解彙函、崇文書局彙刻書、凌氏叢書、淸經解續編第八百六十五至八十一卷、有淸凌曙注本。春秋類附錄。

國語二十一卷、附札記一卷、 吳韋昭注、淸顧廣圻校。士禮居黃氏叢書仿宋刻本、武昌書局繙黃刻本。尾張秦鼎定本亦佳。雜史類。

國語韋昭注疏十六卷、 淸洪亮吉撰。旌德呂氏刻本。

晏子春秋七卷音義二卷、 淸孫星衍校注。經訓堂叢書、指海第十七集。

吳越春秋十卷、 漢趙曄撰、元徐天祜注。漢魏叢書別史部、古今逸史、寛延二年京都書坊刻本、皆倂爲六卷。載記類。

越絕書十五卷、 漢袁康撰、其友吳平同定。明仿宋刻本、漢魏叢書別史部、古今逸史。載記類。

春秋別典十五卷、 明薛虞畿撰。淸孫星衍補注出典。墨海金壺史部、守山閣叢書史部、嶺南遺書第一集、別史類。

戰國策高誘注三十三卷、札記三卷、 漢高誘注、宋姚宏補、淸顧廣圻校。士禮居黃氏叢書仿宋刻本、武昌書局繙黃刻本、鮑彪注本多竄改不如此本。雜史類。

戰國策校注十卷、 宋鮑彪注、元吳師道補正。惜陰軒叢書第二第三函、雜史類。

戰國策釋地二卷、 淸張琦撰、道光間陽湖張氏刊宛隣書屋叢書。

國策地名考二十卷、 淸程恩澤撰、狄子奇箋。粤雅堂叢書第十七集。

七國考十四卷、 明董說撰。守山閣叢書史部。政書類通制之屬。

戰國紀年六卷、 淸林春溥撰。前有輿圖後有年表。竹柏山房十五種。

論語、孟子、禮記、大戴禮記、荀子、韓非子、呂氏春秋、皆於考古史極爲切要、須就善本精究。

校正竹書紀年二卷、 淸洪頤煊校。平津館叢書乙集。編年類。

竹書紀年集證五十卷、叙略一卷、 淸陳逢衡撰。江都陳氏所著書。

竹書紀年補證四卷、 淸林春溥撰。竹柏山房十五種。

考訂竹書紀年十四卷、 淸雷學淇撰。家刻本。

世本二卷、附考證、 淸孫馮翼輯、陳其榮補。槐廬叢書初編、又道光間高郵茆泮林輯刊梅瑞軒十種古逸書有世本一卷。

校輯世本二卷、 淸雷學淇輯。家刻本。

世本輯、補十卷、 淸秦嘉謨輯。原刻本。

史記五帝三代秦本紀、三代世表十二諸侯七國年表、

秦以前世家列傳、 史記見漢魏部。

列女傳補注八卷、 漢劉向撰、淸郝懿行妻王照圓注。同治間郝懿行孫郝聯薇彙刊郝蘭皋著述。傳記總錄、

新序十卷、說苑二十卷、漢劉向撰。明繙經廠合刻本、漢魏叢書子餘部、清何良俊合刻本。

古史考一卷、漢譙周撰、清孫星衍輯。平津館叢書乙集。又訓纂堂叢書、有章宗源輯本。

家語王肅注十卷、魏王肅撰并注。常熟毛氏汲古閣刻本、今通行李氏重刻汲古本作四卷。

帝王世紀十卷、續補一卷、考異一卷、晉皇甫謐撰、清宋翔鳳輯。訓纂堂叢書

資治通鑑周紀、秦紀見通史部。

通鑑外紀十卷、目錄五卷、宋劉恕撰、清胡克家注補。蘇州書局彙印通鑑全書、坊行三編本四編本通鑑全書、以宋金履祥通鑑前編十八卷舉要三卷附刻不如劉書。編年類。

路史四十七卷、宋羅泌撰。明嘉靖間錢塘洪楩刻本。別史類。

孔子編年五卷、宋胡孜撰。續溪胡氏家刻本。傳記類聖賢之屬。

先聖生卒年月日考二卷、清孔廣牧撰。清經解第一千四百十四、五卷。

孟子生卒年月考一卷、清閻若璩撰。清經解第二十四卷、檀几叢書二集、傳記類聖賢之屬存目。

四書釋地六卷、清閻若璩撰。通行本、清經解第二十至第二十三卷。

周官辨非一卷、清萬斯大撰。萬氏經學五書、昭代叢書戊集。

周禮通論十卷、清姚際恒撰。

繹史一百六十卷、清馬驌撰。通行本。紀事本末類。

春秋戰國異辭五十四卷、通表二卷、摭遺一卷、清陳厚耀撰。

尙史七十八卷、清李鍇撰。乾隆三十八年刻本。四庫書目別史類作一百七卷。

四書釋地辨證二卷、清宋翔鳳撰。道光間自刊浮溪精舍叢書、清經解第一千三百二十九三十卷。

開闢傳疑二卷、清林春溥撰。竹柏山房十五種。

古史紀年十四卷、同上。同上。

古史考年異同表二卷、同上。同上。

古今人表考九卷、清梁玉繩撰。其子學昌刊淸白士集。

人表考校補一卷、續考補一卷、清蔡雲撰。自刻本。

孔孟年表二卷、清林春溥撰。竹柏山房十五種。

孔子世家補訂一卷、同上。同上。

孟子列傳纂一卷。同上。同上。

考信錄三十六卷、清崔述撰。提要二卷、補上古二卷、唐虞四卷、夏二卷、商二卷、豐鎬八卷、洙泗四卷、豐鎬別錄三卷、洙泗餘錄三卷、孟子事實錄二卷、續說二卷、附錄二卷、東壁全書。明治三十六年史學會覆刻。崔東壁遺書

周禮、逸周書、竹書紀年、孔子家語、或出於後人僞造、或經後人刪改、失古書之眞、然考古史者、亦不可廢。

漢魏部

楚漢春秋一卷、附考證、漢陸賈撰、清茆泮林輯。梅瑞軒十種古逸書。挹廬叢書初編。

史記一百三十卷、漢司馬遷撰、褚少孫補、晉裴駰集解、唐司馬貞索隱、張守節正義。明南北監本二十一史、毛氏汲古閣本十七史、武英殿本二十四史、新會陳氏覆刻殿本、成都書局重刻本、金陵書局繙汲古本、明淩稚隆刻評林本

汲古本無索隱正義、別刻索隱三十卷。正史類。

讀史記十表十卷、清汪越撰、徐克范補。正史類。

史記疑問一卷、清邵泰衢撰。正史類。

史記志疑三十六卷、清梁玉繩撰、原刻本。

漢書一百二十卷、漢班固撰、其妹班昭續成之、唐顏師古注、附宋三劉刊誤宋祁校語。武英殿本、陳本、成都書局本、評林本、汪文盛刻本、明南北監本、汲古閣本、金陵書局本、並無校語、正史類。

班馬異同評三十五卷、宋倪思撰、劉辰翁評。清嘉慶中福建刻本。倪書爲考史漢文辭異同、劉評無謂今倪書無單行本。四庫書目正史類收班馬異同而劉評入存目。

伏侯古今注一卷、漢伏無忌撰、清茆泮林輯。道光間茆氏刊、梅瑞軒十種古逸書。

東觀漢記二十四卷、舊稱漢劉珍撰其實班固以下諸儒相踵撰述也、四庫館輯補、武英殿聚珍版書、福州繙刻本、蘇州席氏埽葉山房繙刻本、桐華館史翼八種、別史類。

漢紀三十卷、漢荀悅撰。明黃省曾繙宋刻本。編年類。

後漢紀三十卷、晉袁宏撰。明黃省曾繙宋刻本。編年類。

兩漢紀六十卷、附字句異同考一卷、清蔣國祥校。康熙間襄平蔣氏英合刻本。

後漢書一百二十卷、本紀列傳、宋范曄撰、唐章懷太子賢注。志三十卷、則晉司馬彪續漢書之文、梁劉昭注之。明南北監本、武英殿本、成都書局本、汲古閣本、金陵書局本、汪文盛刻本。正史類。

補後漢書年表十卷、宋熊方撰。清盧文弨校、揚州鮑氏刻本。桐華館史翼八種。

兩漢刊誤補遺十卷、宋吳仁傑撰。武英殿聚珍版書、知不足齋叢書第一、集榕園叢書乙集。正史類。

兩漢解疑二卷、明唐順之撰。學海類編、借月山房彙鈔。

後漢書補逸二十一卷、清姚之駰撰刻本。別史類。

後漢書補注二十四卷、清惠棟撰、寶山李氏刻本。粵雅堂叢書第十集、馮集梧刻本、

後漢書補表八卷、清錢大昭撰。可廬著述十種、粵雅堂叢書第十集。

兩漢書辨疑四十四卷、清錢大昭撰。可廬著述十種。

三國志六十五卷、晉陳壽撰、宋裴松之注。明南北監本、武英殿本、陳本、成都書局本、汲古閣本、金陵書局本。馮夢禎刻本。正史類。

三國雜事二卷、宋唐庚撰。函海第九函

三國志辨誤一卷、宋人撰。武英殿聚珍版書、福州繙刻本、桐華館史翼八種、墨海金壺史部、守山閣叢書史部。正史類。

三國志補注六卷、清杭世駿撰。粵雅堂叢書續集、單行本附諸史然疑一卷。正史類。

三國志辨疑三卷、清錢大昭撰。可廬著述十種。

三國志考證八卷、清潘眉撰。嘉慶間刻本。

諸葛丞相集四卷、附錄二卷、諸葛故事五卷、清張澍纂。卷首附本傳年譜等。汚縣祠堂刻本。同治元年坊刻本、以火攻心法、奇門遁甲等書附刻、題曰諸葛忠武侯兵法甚無謂。

晉南北朝部

鄴中記一卷、晉陸翽撰。漢魏叢書、武英殿聚珍版書、福州繙刻本、江西繙刻本、浙江繙刻巾箱本、榕園叢書

乙集。載記類。

晉書一百三十卷、唐房喬等奉敕撰。附唐何超音義三卷。明南北監本、武英殿本、陳氏覆刻本、汲古閣本、金陵書局繙汲古本、元祿中荻生茂卿等校本。正史類。

華陽國志十二卷、附錄一卷、晉常璩撰。漢魏叢書、古今逸史、函海第一函、顧廣圻校廖寅刻足本最善。

十六國春秋十六卷、舊題魏崔鴻撰、然此非鴻原書。漢魏叢書別史部、單行大字本。

兩晉解疑一卷、明唐順之撰。學海類編、借月山房彙鈔。

十六國年表一卷、清張愉曾撰。昭代叢書乙集、載記類存目。

晉記六十八卷、清郭倫撰。原刻本。別史類存目。

晉略六十卷、清周濟撰。道光十九年刻本。

宋書一百卷、梁沈約撰。諸本同晉書。正史類。

晉宋書故一卷、清郝懿行撰。郝蘭臯著述。

齊書五十九卷、梁蕭子顯撰。諸本同晉書、以下梁陳魏北齊周書皆同。正史類。

梁書五十六卷、唐姚思廉奉敕撰。正史類。

陳書三十六卷、唐姚思廉奉敕撰。正史類。

魏書一百三十卷、北齊魏收奉敕撰。正史類。

西魏書二十四卷、清謝啓昆撰。乾隆二十四年刻本。

北齊書五十卷、唐李百藥奉敕撰。正史類。

周書五十卷、唐令狐德棻等奉敕撰。正史類。

隋書八十五卷、唐魏徵等奉敕撰。明南北監本、武英殿本、陳氏覆刻本、汲古閣本、淮南書局繙汲古本、每卷各附考異、天保十五年嵩松刊本。正史類。

南史八十卷、唐李延壽撰。明南北監本、武英殿本、陳本、汲古閣本、金陵書局繙汲古本、正史類。

北史一百卷、唐李延壽撰。諸本同南史。正史類。

大業雜記一卷、唐杜寶撰。唐宋叢書別史部、指海第三集。

建康實錄二十卷、唐許嵩撰。清海虞張海鵬刻本。別史類。

南北史表六卷、清周嘉猷撰。嘉慶間刻本。

南史識小錄八卷、北史識小錄八卷、清沈名蓀朱昆田同撰。史鈔類。

唐部

大唐創業起注三卷、唐溫大雅撰。說郛第四十二号、唐宋叢書別史部、津逮祕書第十集、學津討原第六集。四庫書目編年類。

貞觀政要十卷、唐吳兢撰。明經廠本、清朱載寶刻大字本、文政五年紀伊藩學刊本。雜史類。

唐國史補三卷、唐李肇撰。唐宋叢書別史部、津逮祕書第十集、學津討原第八集。小說家類雜事之屬。

大唐新語十三卷、唐劉肅撰。稗海第二函。小說家類雜事之屬。

陸宣公奏議二十二卷、唐陸贄撰宋郎曄注。通行本、皇國刻本、四庫書目別集類、作翰苑集四庫未收書目提要十五卷。

奉天錄四卷、唐趙元一撰。嘉慶二十三年江都秦恩復石研齋刊書八種之一、指海第一集、粵雅堂叢書第二集。

順宗實錄五卷、唐韓愈撰。海山仙館叢書。

次柳氏舊聞一卷、唐李德裕撰。寶顏堂祕笈續集。小說家類雜事之屬。

劉賓客嘉話錄一卷、唐韋絢撰。學海類編記述部、小說家類雜事之屬。

明皇雜錄三卷、唐鄭處誨撰。墨海金壺子部、守山閣叢書子部。小說家類雜事之屬。

尚書故實一卷、唐李德撰。說郛第三十六号、寶顏堂祕笈續集。雜家類雜說之屬。

因話錄六卷、唐趙璘撰。唐宋叢書載籍部、稗海第二函。雜史類。

東觀奏記三卷、唐裴光庭撰。說郛第四十三号、唐宋叢書載籍部、續百川學海、稗海第二函、粵雅堂叢書續集。

舊唐書二百卷、晉劉昫等奉敕撰。殿本、陳氏覆刻本。明聞人詮原刻江都岑建功重校刻本、浙江書局繙岑刻本、皆附逸文十二卷、校勘記六十六卷。正史類。

舊唐書校勘記六十六卷、舊唐書逸文十二卷、校勘記、清羅士琳陳立、劉文淇、劉毓崧同撰。逸文、岑建功輯。岑氏附刻重校聞人本舊唐書後。

唐摭言十五卷、五代王定保撰。雅雨堂叢書、學津討原第十七集。小說家類雜事之屬。

開元天寶遺事四卷、五代王仁裕撰。小說家類雜事之屬。

南部新書十卷、宋錢易撰。學津討原第十七集、粵雅堂叢書第一集。小說家類雜事之屬。

近事會元五卷、宋李上交撰。守山閣叢書子部附校勘記。雜家類雜考之屬。

新唐書一百五十五卷、宋歐陽修宋祁等奉敕撰。明北監本、殿本、陳氏覆刻本、汲古閣本、浙江書局繙汲古本。明南監本附刻宋董衝釋音二十五卷。正史類。

新唐書糾謬二十卷、宋吳縝撰。知不足齋叢書第十五集。正史類。

新舊唐書合鈔二百六十卷、清沈炳震編。海甯查氏刻本、丁小鶴新舊唐書合鈔補正有刻本。

新舊唐書互證二十卷、清趙紹祖撰。原刻本。

唐鑑二十四卷、宋范祖禹撰、呂祖謙注。明刻本、成都書局刻本。金華叢書史部。天保十六年江戶書坊刻、嘉永六年重刻本。史評類。

唐史論斷三卷、宋孫甫撰。函海第四函、藝海珠塵竹集、學津討原第八集、桐華館史翼八種、粵雅堂叢書第三集。史評類。

唐書直筆四卷、宋呂夏卿撰。武英殿聚珍版書、福州繙刻本、桐華館史翼八種。史評類。

唐才子傳十卷、元辛文房撰。佚存叢書第三帙、指海第八集。傳記類總錄之屬。

五代部

鑑戒錄十卷、蜀何光遠撰。學海類編史參部、知不足齋叢書第二十二集、學津討原第十七集、崇文書局彙刻書。四庫書目小說家類雜事之屬。

北夢瑣言二十卷、宋孫光憲撰。雅雨堂叢書、廣州刻本。小說家類雜事之屬。

錦里耆舊傳四卷、宋句延慶撰。讀畫齋叢書乙集。載記類。

舊五代史一百五卷、目錄二卷、宋薛居正等奉敕撰。殿本、陳氏覆刻本、湖北書局重刻殿本、聚珍版書。正史類。

洛陽縉紳舊聞記五卷、宋張齊賢撰。知不足齋叢書第四集。小說家類雜事之屬。

五代史闕文一卷、宋王禹偁撰。雜史類。

五代史補五卷、宋陶岳撰。汲古閣刻本、席氏埽葉山房刻本。雜史類。

五國故事二卷、宋人撰。學海類編史參部、龍威祕書第二集、知不足齋叢書第十一集、函海第九函。載記類。

九國志十二卷、拾遺一卷、宋路振撰、張唐英拾遺。守山閣叢書史部、海山仙館叢書、粵雅堂叢書第十集、龍氏活字版本。四庫未收書目提要。

江南野史十卷、宋龍袞撰。續百川學海、琳琅祕室叢書第五集。記載類。

新五代史記七十四卷、目錄一卷、宋歐陽修撰、徐無黨注。明南北監本、殿本、成都書局重刻殿本、汲古閣本、湖北書局繙汲古本。正史類。

五代史記纂誤三卷、宋吳縝撰。武英殿聚珍版書、福州江西繙刻本、知不足齋叢書第十七集、正史類。

五代史記纂誤補四卷、清吳蘭庭撰。藝海珠塵、知不足齋叢書第二十集、單刻本。

新五代史補注七十四卷、清彭元瑞劉鳳誥同撰。原刻通行本。

馬令南唐書三十卷、宋馬令撰。唐宋叢書別史部、康熙間襄平蔣國祥馬陸二書合刻本、墨海金壺史部、江西繙刻本惡。載記類。

陸游南唐書十八卷、音釋一卷、宋陸游撰、元戚光音釋。毛氏汲古閣校刊本、陸放翁全集、蔣氏馬陸二書合刻本。載記類。

吳越備史四卷、補遺一卷、宋錢儼撰、補遺失撰人名。學津討原第六集、席氏埽葉山房刻本無補遺、卷首附明馬藎臣諸圖考。載記類。

增訂吳越備史五卷、補遺一卷、清錢時鈺增訂。乾隆六十年刻本。

十國春秋一百十四卷、拾遺一卷、備考一卷、清吳任臣撰、拾遺備考周昂撰。周氏乾隆重刻本、原刻無末二卷。載記類。

南漢書十八卷、考異十八卷、叢錄二卷、南漢文字略四卷、清梁廷枏撰、道光九年自刊藤花亭十種。

續唐書七十卷、清陳鱣撰。道光十七年刻本。

宋部

涑水紀聞十六卷、宋司馬光撰。學海類編史參部、武英殿聚珍版書、福州江西繙刻本、學津討原第十七集、文書局彙刻書。四庫書目小家類雜事之屬。

歸田錄二卷、宋歐陽修撰。文忠集、學津討原第十七集。小說家類雜事之屬。

春明退朝錄三卷、宋宋敏求撰。百川學海乙集、唐宋叢書別史部、學海編史參部、學津討原第十四集、榕園叢書乙集。雜家類雜說之屬。

隆平集二十卷、舊題宋曾鞏撰、蓋依託也。清康熙四十年彭期校刻本。別史類。

澠水燕談錄十卷、宋王闢之撰。稗海第五函、知不足齋叢書第二十三集足本、小說家類雜事之屬。

湘山野錄三卷續錄一卷、宋釋文瑩撰。津逮祕書第十五集、學津討原第十七集。小說家類雜事之屬。

玉壺野史十卷、亦名玉壺清話。宋釋文瑩撰。知不足齋叢書第六集、墨海金壺子部、守山閣叢書子部。小說家類雜事之屬。

文昌雜錄七卷、宋龐元英撰。雅雨堂叢書、學津討原第十三集。雜家類雜說之屬。

曲洧舊聞十卷、宋朱弁撰。知不足齋叢書第二十七集、學津討原第十四集。雜家類雜說之屬。

石林燕語考異十卷、宋葉夢得撰、宇文紹奕考異。琳琅祕室別行校足本、稗海第六函有脫誤。雜家類雜說之屬。

郤掃編三卷、宋徐度撰。津逮祕書第九集、汲古閣別行本、學津討原第十四集、榕園叢書丙集。雜家類雜說之屬。

鐵圍山叢談六卷、宋蔡絛撰。學海類編集餘記述部、知不足齋叢書第九集。小說家類雜事之屬。

萍洲可談三卷、宋朱彧撰。述廣州蕃坊市舶事尤詳。墨海金壺子部、守山閣叢書子部、附校勘記。小說家類雜事之屬。

聞見前錄二十卷、宋邵伯溫撰。津逮祕書第十五集、學津討原第十八集。小說家類雜事之屬。

靖康傳信錄三卷、宋李綱撰。函海第六函、海山仙館叢書。慶應元年水口中村鼇巖谷修校刊本。

北狩見聞錄一卷、宋曹勛撰。學海類編史參部、學津討原第六集。雜史類、

建炎筆錄三卷、宋趙鼎撰。函海第六函。四庫未收書目提要。

宣和遺事二卷、宋人撰。士禮居黃氏叢書。

中興小紀四十卷、宋熊克撰。編年類。

續資治通鑑長編五百二十卷、宋李燾撰。照文張氏愛日精廬活字版本、原闕不全、此卷數乃四庫館重定。編年類。

東都事略一百三十卷、宋王偁撰。五松堂繙宋刻本、埽葉山房四朝別史。別史類。

名臣言行錄前集十卷、後十四卷、宋朱熹撰、清顧廣圻校。洪瑩仿宋刻本、同治七年桂氏補刻本、寬文七年京都大阪書坊合刻本。傳記類總錄之屬。

三朝北盟會編二百五十卷、宋徐夢莘撰。光緒四年袁祖安等校刊本。紀事本末類。

建炎以來繫年要錄二百卷、宋李心傳撰。光緒五年仁壽蕭氏刻本。編年類。

建炎以來朝野雜記四十卷、宋李心傳撰。武英殿聚珍版書、福州繙刻本、函海第七第八函。政書類通制之屬。

舊聞證誤四卷、宋李心傳撰。函海第六函、桐華館史翼八種、榕園叢書乙集。史評類。

宋通鑑長編紀事本末一百五十卷、宋楊仲良撰。四庫未收書目提要。

默記三卷、宋王銍撰。學海類編集餘記述部、知不足齋叢書第八集。小說家類雜事之屬。

揮麈前錄四卷、後錄十一卷、第三卷、餘話二卷、宋王明清撰。津逮祕書第十四集、學津討原第十八集。小說家類雜事之屬。

雞肋編三卷、宋莊季裕撰。琳琅祕室叢書。小說家類雜事之屬。

金陀粹編二十八卷、續編三十卷、宋岳珂撰。明嘉靖中刻本。傳記類名人之屬。

桯史十五卷、附錄一卷、宋岳珂撰。津逮祕書第八集、學津討原第十九集、稗海第八函、無附錄、小說家類雜事之屬。

宋九朝編年備要三十卷、宋陳均撰。編年類。

續宋編年資治通鑑十五卷、宋劉時舉撰。學津討原第五集、編年類。

四朝見聞錄五卷、宋葉紹翁撰。唐宋叢書、津逮祕書、知不足齋叢書第四集附保母磚跋尾一卷、學津討原。小說家類雜事之屬。

慶元黨禁一卷、宋人撰。知不足齋叢書第十二集。傳記類總錄之屬。

齊東野語二十卷、宋周密撰。稗海第十函、津逮祕書第十五集、學津討原第十四集。雜家類雜說之屬。

癸辛雜識前集一卷、後集一卷、續集二卷、別集二卷、宋周密撰。稗海第十函、津逮祕書第十四集、學津討原第十九集。小說家類雜事之屬。

京口耆舊傳九卷、宋人撰、守山閣叢書史部、粵雅堂叢書續集。傳記類總錄之屬。

宋季三朝政要五卷附錄一卷、元人撰、附錄陳仲微撰。學津討原第五集、守山閣叢書史部、粵雅堂叢書第十三集。編年類。

東南紀聞三卷、元人撰、墨海金壺子部、守山閣叢書子部。小說家類雜事之屬。

宋史四百九十六卷、元脫々等奉敕撰。明南北監本、殿本、陳氏覆刻殿本、浙江書局重刻殿本。正史類。

宋史新編二百卷、明柯維騏撰。明刻本。別史類存目。

宋史紀事本末二十六卷、明馮琦陳邦瞻撰。明刻本、賓陳谷四種合刻通行本、漢陽朝宗書室活字版本。紀事本末類。

宋史紀事本末論正一百九卷、明張溥論正。清張開升校刊本、江西書局高賓陳谷五種合刻本。皇國翻刻本。

宋史稾二百十九卷、清陳黃中撰。未刻。

西夏書事四十二卷、清吳廣成撰。道光中雲間劉貫九刻本、洪亮吉西夏國志十六卷。未見刻本。

遼金部

新五代史四夷附錄契丹、

大金弔伐錄四卷、金人撰。墨海金壺史部、守山閣叢書史部。四庫書目雜史類。

松漠紀聞一卷、續一卷、宋洪皓撰。學津討原第六集、古今逸史列傳部止一卷。雜史類。

契丹國志二十七卷、宋葉隆禮奉敕撰。埽葉山房四朝別史、古今說海、古今逸史中遼志、即此書摘本。別史類。

大金國志四十卷、舊題宇文懋昭撰、蓋依託也。埽葉山房四朝別史、古今說海古今逸史中金志、即此書摘本。別史類。

汝南遺事四卷、元王鶚撰。借月山房彙鈔第十四集、指海第九集。雜史類、

文獻通考四裔考北狄、

歸潛志十四卷、元劉祁撰。武英殿聚珍版書、福州翻刻本、知不足齋叢書第十二集足本、學海類編集餘記述部作八卷。小說家類雜事之屬。

遼史一百十六卷、元脫々等奉敕撰。明南北監本、乾隆四年武英殿本、陳氏翻刻本。道光十七年武英殿重修本、江蘇書局重刻殿本。依三史語解、竄改國語、失舊史之眞、害於考古。正史類。

金史一百三十五卷、元脫々等奉敕撰。諸本同遼史。正史類。

金史語解十二卷、清乾隆四十六年敕撰。武英殿合刻遼金元三史語解、江蘇書局重刻殿本。正史類、

拾遺補五卷、清厲鶚撰楊復吉補。道光元年錢塘汪氏刻本、江蘇書局遼金元三史附刻本。四庫書目正史類無拾遺補。

補金史一百卷、清杭世駿撰。未刻。

元部

大金國志、見金部。

蒙韃備錄一卷、宋孟珙撰。古今說海說選部。

黑韃事略一卷、宋彭大雅撰、徐霆疏證。清李文田校證。

文獻通考四裔考、

元朝祕史十五卷、元太宗朝蒙古人撰。用畏兀兒字、以作蒙古文、明洪武中敕以漢文譯。連筠簃叢書、光緒二十年上海復古書局石印本、四庫書目政書類通制之屬、收元朝典故編年錄、其第九卷、即此書刪本。四庫未收書目提要。李文田注本、袁氏刻之。

皇元聖武親征錄一卷、元人撰。知服齋叢書有沈子培注本。四庫書目雜史類存目。

東平王世家三卷、元元永貞撰。述木華黎及其子孫事、有元明善序、十駕齋養新錄卷十三有解題。

元朝名臣事略十五卷、元蘇天爵撰。武英殿聚珍版書、福州翻刻本。傳記類總錄之屬。

山居新語四卷、元楊瑀撰。知不足齋叢書第十二集。小說家類雜事之屬。

元典章　卷、

輟耕錄三十卷、明陶宗儀撰。津逮祕書第十集、京都書坊翻刻本、小說家類雜事之屬。

元史二百十卷、明宋濂等奉敕撰。諸本同遼史、正史類。

庚申外史二卷、明權衡撰。寶顏堂祕笈廣集、學海類編史參部、學津討原第六集、海山仙館叢書。雜史類存目。

元史備忘錄一卷、明王光魯撰。借月山房彙鈔第十四集。學海類編史參部、

元史紀事本末四卷、明陳邦瞻撰。明刻本、賓陳谷四種合刻通行本、漢陽朝宗書室活字版本、張溥論正本、江西書局高賓陳谷五種合刻本、作二十七卷。紀事本末類。

元史類編四十二卷、清邵遠平撰。通行本。

元史語解二十四卷、清乾隆四十六年敕撰。武英殿合刻遼金元三史語解、江蘇書局重刻殿本。正史類。

古今圖書集成方輿彙編邊裔典蒙古部、理學彙編經籍典元史部。

蒙古源流見朔方部第三第四卷。

元史氏族表三卷、清錢大昕撰。嘉慶十一年黃鐘校刊、潛研堂全書史部、江蘇書局遼金元三史附刻。

遼金元三史拾遺見通史部。

元史稾一百卷、清錢大昕撰。未刻。

十駕齋養新錄見論說考訂部第九卷

續資治通鑑見通史部宋寧宗以後紀及元紀。

元史本證五十卷、清汪輝祖撰。家刻本。

元朝祕史注十五卷、清李文田撰。袁氏刻、藩屬輿地叢書第五集。

元史譯文證補三十卷、中十卷闕、清洪鈞撰、陸潤庠校刊。東京文求堂重刊、藩屬輿地叢書第六集。

元祕史山川地名考十二卷、清施世杰撰。光緒二十三年自刊。西北地理五種、藩屬輿地叢書第六集。

元祕史李注補正十五卷、清高寶銓撰。光緒二十八年羅振玉刊。

明部

水東日記四十卷、明葉盛撰。清康熙間刻本、明刻本三十八卷、小說家類雜事之屬。

雙槐歲抄十卷、明黃瑜撰。嶺南叢書第一集。小說家類雜事之屬存目。

菽園雜記十五卷、明陸容撰。墨海金壺子部、守山閣叢書子部。小說家類雜事之屬。

殿閣詞林記二十二卷、明廖道南撰。傳記類總錄之屬。

弇山堂別集一百卷、明王世貞撰。明刻本。雜史類。

嘉靖以來首輔傳八卷、明王世貞撰。指海第十四集。借月山房彙鈔第六集、傳記類總錄之屬。

列朝盛事一卷、明王世貞撰。借月山房彙鈔第十四集、指海第三集。

明名臣琬琰錄二十四卷、續錄二十二卷、明徐紘編。傳記類總錄之屬。

今獻備遺四十二卷、明項篤壽撰。傳記類總錄之屬。

世廟識餘錄二十六卷、明徐學謨撰。雜史類存目。

譚襄敏奏議十卷、明譚綸撰。分爲三集日閩稾日蜀稾日蘇遼稾。閩稾中多言倭寇事。詔令奏議類奏議之屬。

革除逸史二卷、明朱睦㮮撰。指海第五卷。雜史類。

先進遺風二卷、明耿定向撰、毛在增補。寶顏堂祕笈彙集、小說家類雜事之屬。

萬曆野獲編三十卷、明沈德符撰、清錢枋重編。康熙三十九年刻本。

兩朝平攘錄五卷、明諸葛元聲撰。萬曆三十四年會稽商濬校刊本、皇國繙刻本、雜史類存目。

明通紀十三卷、明陳建撰。自國初至正德、袁黃續嘉靖朝、卜大有續隆慶朝。明刻本。元祿九年京都書坊刻本太惡。四庫書目編年類存目、明通紀述遺十二卷、明陳建撰 卜世昌屠衡校訂補遺。

明實紀二十七卷、明陳龍可撰。國初至正德、依陳建通紀嘉靖至天啓末、卽龍可所纂修。明刻本。右二書、明代野史也、紀倭寇事頗詳、松下見林異稱日本傳、備引其文、可與皇國部諸書參考。

獻徵錄一百二十卷、明焦竑編。採明代名人事蹟分類集錄。四庫書目提要譏其文泛濫雜揉、今以其中多敘倭寇事收之、詳見異稱日本傳。

經世要略 卷、明黃仁溥撰。明刻本。傳記類總錄之屬。

懸笥瑣探一卷、明劉昌撰。紀錄彙編、得月簃叢書次刻。

明宮史五卷、明呂毖撰。學津討原第八集。政書類典禮之屬。

酌中志二十四卷、明劉若愚撰。海山仙館叢書。

兩朝從信錄三十五卷、明沈國元撰。自萬曆四十八年至天啓七年。明刻本。

明名臣言行錄九十五卷、清徐開任撰。崑山徐氏刻本。

明朝紀事本末八十卷、清谷應泰撰。袁陳谷四種合刻通行本、灌陽朝宗書室活字版本、江西書局高袁陳谷五種合刻本、天保十四年二本松敬學館刻本。紀事本末類。

春明夢餘錄七十卷、清孫承澤撰。乾隆間內府刻古香齋袖珍十種。雜家類雜說之屬。

明季北略二十四卷、南略十八卷、清計六奇撰。通行本。

東林列傳二十四卷、清陳鼎撰。刻本、傳記類總錄之屬。

社事始末一卷、清杜登春撰。藝海珠塵革集、昭代叢書戊集。

綏寇紀略十二卷、補遺三卷、清吳偉業撰。學津討原第六集。紀事本末類。

明季稗史彙編二十七卷、清人編。烈皇小識八卷、聖安皇帝本紀二卷、行在陽秋二卷、嘉定屠城紀略一卷、幸存錄二卷、續幸存錄一卷、求野錄一卷、也是錄一卷、江南聞見錄一卷、粵遊見聞一卷、賜姓始末一卷、兩廣紀略一卷、東明聞見錄一卷、青燐屑二卷、耿尙孔吳四王合傳一卷、揚州十日記一卷、合十六種。揚州十日記、嘉定屠城紀略二書、有紀伊齋藤藝校注、文政十一年刻本。

明史稾二百八卷、清王鴻緒撰。通行本。

明史三百六十卷、清張廷玉等奉敕撰。乾隆四年告成、其中考究未詳者、後又承命刊正。殿本、陳氏覆刻本、湖北書局重刻本、江甯藩庫重刻本。正史類。

勝朝彤史拾遺記六卷、清毛奇齡撰。西河合集、藝海珠塵絲集。

武宗外記一卷、清毛奇齡撰。西河合集、藝海珠塵絲集。雜史類存目。

勝朝殉節諸臣錄十二卷、清乾隆四十一年敕撰。傳記類總錄之屬。

明名臣奏議二十卷、清乾隆四十六年敕編。武英殿聚珍版書、福州繙刻本。詔令奏議類奏議之屬。

南疆繹史 卷、

明事斷略一卷、清人撰。借月山房彙鈔第十集。

清部

開國方略三十二卷、清乾隆三十八年敕撰。編年類。

平定三逆方略六十卷、清康熙二十一年勒德洪等奉敕撰。紀事本末類。

三藩紀事本末四卷、清楊陸榮撰。借月山房彙鈔第四集、指海第十三集。紀事本末類。

華野疏稾五卷、清郭琇撰。家刻本。奏議之屬。

宗室王公功績表傳十二卷、清乾隆四十六年敕撰。傳記類總錄之屬。

蒙古王公功績表傳十二卷、清乾隆四十四年敕撰。傳記類總錄之屬。

滿漢名臣傳八十卷、清人依國史鈔錄、滿人四十八卷、漢人三十二卷。通行本。

武功紀盛四卷、清趙翼撰。自刊甌北全集、四川繙刻本、讀畫齋叢書丁集、藝海珠塵革集。

潛研堂文集第三十七至第五十卷傳碑銘等。

聖武記十四卷、清魏源撰。道光二十四年清京琉璃廠刊本。

經世文編一百二十卷、清賀長齡魏源編、長沙原刻本。繙刻本多焉。

從政觀法錄三十卷、清朱方增撰。道光十年刻本。

樞垣紀略十六卷、清梁章鉅撰。道光十五年刻本。

文獻徵存錄十卷、清錢林撰。咸豐八年王藻刻本。
鶴徵錄八卷、後錄十二卷、前錄、清李集李富孫李遇孫同撰。後錄李富孫撰。嘉慶中刻、同治中補刻本。
靖逆記　卷、記河內滑縣天理教徒叛亂之事。
戡靖教匪述編十二卷、清道光六年石香村居士撰。京都琉璃廠刊巾箱本。記嘉慶中川楚白蓮教叛亂之事。
夷匪犯疆錄　四卷、
平定粵匪紀略二十二卷、清同治四年湖北官撰。同治九年刊巾箱本。
盪平髮逆圖記二十二卷、
楚南被難記　卷、清周志復撰。
粵匪南北滋擾紀略　卷、清姚憲之撰。
金陵圍城記　卷、
盾鼻隨聞錄八卷、
先正事略六十卷、清李元度撰。長沙刻本、同治五年循陔艸堂刊本。
胡文忠公集八十八卷、清胡林翼撰。同治五年重編武昌書局刻本。初刻止十卷。
曾文正公奏議十卷、補編二卷、清曾國藩撰薛氏編。蘇州刻本、又有全集一百五十四卷、合肥李瀚章等編、同治十二年湖北懷忠書局刊。
湘軍紀二十卷、清王定安撰。光緒十五年江南書局刊本。

臣工言行記十二卷、清梁章鉅撰。未刊。
東華全錄四百九十四卷、自國初至雍正、清蔣良驥撰。初爲三十二卷、王先謙增補爲百九十五卷、乾隆嘉慶道光三朝二百三十卷、王先謙撰。咸豐朝六十九卷、潘頤撰。
歷朝聖訓九百二十二卷、太祖四卷、太宗六卷、世祖六卷、聖祖六十卷、世宗三十六卷、高宗三百卷、仁宗一百十卷、宣宗一百三十卷、文宗一百卷、穆宗一百六十卷。殿本。光緒三年總署排印本、京師善成堂書坊刊本。詔令奏議類詔令之屬。國初五朝一百十二卷。
東南紀事十二卷、西南紀事十二卷、清邵廷采撰。邵武徐氏叢書初刻。

通史部

資治通鑑二百九十四卷、宋司馬光撰、元胡三省音注。鄱陽胡克家翻元刻本、蘇州書局通鑑全書繙胡本、皆以考異散附各條下、又附刻胡氏釋文辨誤、天保七年津藩校刊本亦善。四庫書目編年類。
資治通鑑考異三十卷、宋司馬光撰。全文散附胡本通鑑各條下。編年類。
資治通鑑目錄三十卷、宋司馬光撰。體若表譜、以便尋檢通鑑。蘇州書局通鑑全書繙宋刻本。編年類。
稽古錄二十卷、宋司馬光撰。單行本、學津討原第五集、武昌書局刻本。編年類。
通鑑問疑一卷、宋劉羲仲撰。津逮祕書第三集、學津討原第八集。史評類。
通鑑地理通釋十四卷、宋王應麟撰。玉海附刻本、津逮祕書第三集、學津討原第五集。編年類。
資治通鑑釋文辨誤十二卷、元胡三省撰。武昌書局通鑑附刻本、鄱陽胡氏通鑑附刻本、通鑑全書附刻繙胡本。編年類。

通鑑胡注擧正一卷、清陳景雲撰。文道十書、原書十卷。編年類。
通鑑注辨正二卷、清錢大昕撰。潛研堂全書史部。
通鑑注商十八卷、清趙紹祖撰。原刻本。
資治通鑑地理今釋三冊無卷數、清吳熙載撰。光緒八年江蘇書局刊。
資治通鑑補二百九十四卷、附刊誤二卷、清嚴衍撰童和豫刊誤。咸豐元年江夏童氏活字本、印本不多。
通鑑補識誤　卷、通鑑補略　卷、清張敦仁撰、自刻本
通鑑紀事本末四十二卷、宋袁樞撰、明萬曆三十五年黃吉士等刻本、袁陳谷四種合刻通行本、漢陽朝宗書室活字本、明治四年淀藩繙刻本、明張溥論正本、江西書局高袁陳谷五種合刻本作二百三十九卷、王延年補通鑑紀事本末、已經進呈未見傳本。紀事本末類、
資治通鑑綱目五十九卷、宋朱熹門人趙師淵等、依熹所作凡例而修之、尹起莘作發明、劉友益作書法、王幼學作集覽、徐昭文作考證、陳濟作集覽正誤、馮智舒作質實、汪克寬作考異。明弘治中、黃仲昭取諸家之書、散入各條之下。綱目全書通行本、清康熙四十六年御批武英殿本、寬文十一年三宅可參校刊、文化六年阿波增田希哲補刻本。四庫書目類收御批本。
綱目續麟二十卷、校正凡例一卷、附錄一卷、彙覽三卷、明張自勳撰。編年類。
綱目分註補遺四卷、清芮長恤撰。編年類。
綱目訂誤四卷、清陳景雲撰。文道十書。編年類。

通鑑綱目釋地糾謬六卷、釋地補注六卷、清張庚撰。原刻本。編年類存目。
通志二百卷、宋鄭樵撰。明刻本、武英殿三通合刻本、崇仁謝氏繙刻殿本、廣州活字印本。別史類。
弘簡錄唐五代、見通史部。
續通志唐五代紀傳、見後通史部。
通鑑續編二十四卷、明陳桱撰。編年類。
元史續編十六卷、明胡粹中撰。編年類。
續世說二十卷、宋孔平仲撰。小說家類雜事之屬存目。四庫未收書目提要十二卷。
通鑑綱目續編二十七卷、明商輅等奉勅撰。初陳桱作通鑑續編二十四卷、胡粹中作元史續編十六卷、王宗沐取二書、稍加增刪、爲　卷、輅等是編、多依宗沐書。綱目全書通行本、康熙四十六年御批殿本、天保十五年繙刻本。史評類、收御批本。
續資治通鑑二百二十卷、清畢沅撰。明薛應旂作宋元資治通鑑一百五十七卷、大抵依商輅等通鑑綱目編、而稍附益之、疎謬殊甚、清徐乾學參考諸書作資治通鑑後編一百八十四卷、亦未盡善、沅因作此編、採摭博而考據大勝徐書。桐鄉馮集梧家原刻本、蘇州書局彙印通鑑全書。明人續通鑑者甚多、有此皆可廢。
歷代名臣奏議三百五十卷、明永樂十四年黃淮楊士奇等編。明經廠本、通行本不全。奏議之屬、
弘簡錄二百五十四卷、明邵經邦撰。通行本。是書意在續通志、成古今通史、特不能續其二十略、無力購宋遼金三史者、可以此書代之。

續通志五百二十七卷、清乾隆三十二年敕撰。武英殿續三通合刻本、浙江書局重刻本。別史類。

通鑑綱目三編四十卷、清乾隆四十年敕撰。殿本、通行本。編年類。

宋史紀事本末二十六卷、明馮琦陳邦瞻撰、明刻本、袁陳谷四種合刻通行本、漢陽朝宗書室活字版本。紀事本末類。

宋史紀事本末論正一百九卷、明馮琦陳邦瞻撰、張溥論正。清張聞升校刊本、皇國翻刻本、江西書局高袁陳谷五種合刻本。

元史紀事本末四卷、明陳邦瞻撰。明刻本、袁陳谷四種合刻通行本、漢陽朝宗書室活字版本、張溥論正本江西書局高袁陳谷五種合刻本作二十七卷。紀事本末類。

明朝紀事本末八十卷、清谷應泰撰。袁陳谷四種合刻通行本、漢陽朝宗書室活字版本、江西書局五種合刻本、天保十四年二本松敎學館刻本。紀事本末類。

歴代史表五十九卷、清萬斯同撰。原刻足本。四庫書目別史類五十三卷、初印本也。

元明事類鈔四十卷、清姚之駰撰。摘取元明諸書、分門隸載。雜纂。

歴代帝王年表三卷、附廟謚年諱譜一卷、清齊召南撰、阮福續。儀徵阮氏刻文選樓叢書、仁和葉氏重刻本。粤雅堂叢書第十二集。此書最簡括。

二十一史四譜五十四卷、清沈炳震撰。海寧查氏刻本。

諸史拾遺五卷、清錢大昕撰。潛研堂全書史部。

避諱錄五卷、清黃本驥撰。三長物齋叢書。此書倘略、周廣業經史避名彙考四十六卷未刊。

歴代建元考十卷、清鍾淵映撰。墨海金壺史部、守山閣叢書史部。政書類典禮之屬。

明紀六十卷、清陳鶴撰、陳克家續成。原刻本、蘇州書局彙印通鑑全書。

歴代紀元編三卷、清李兆洛撰。江寗官本、粤雅堂叢書第十二集、李申耆五種。此書最僻。

紀元通考十二卷、清葉維庚撰。自刻本。此書最詳。

歴代統紀表十三卷、疆域表三卷、沿革表三卷、清段承基撰。自刻本。

歴代紀事年表一百卷、清康熙五十一年王之樞等奉敕撰。武英殿本。別史類。

通鑑輯覽一百二十卷、清乾隆三十二年敕撰。依明正德中李東陽等所修通鑑纂要、重加編訂、自太古至明末、欄外有高宗批評。殿本。編年類。

九史同姓名略七十二卷、補遺四卷、清汪輝祖撰。家刻本。

遼金元三史同名錄四十卷、清汪輝祖撰。家刻本。

史姓韻編六十四卷、清汪輝祖撰。家刻本、江寧活字版本。

苗蠻部

史記南越傳東越傳西南夷傳。

漢書西南夷傳兩粤傳。

通鑑紀事本末見通史部卷二南粤稱藩、卷三漢通西南夷、武帝平兩越。

後漢書南蠻西夷傳。

宋書夷蠻傳荊雍州蠻豫州蠻。

齊書蠻傳。

南史夷貊傳蠻。

周書異域傳蠻。

北史蠻獠傳。

通典卷百八十八邊防部南蠻。

蠻書十卷、唐樊綽撰。武英殿聚珍版書、福州繙刻本、雲南備徵志、琳瑯祕室叢書第三集。四庫書目載記類。

舊唐書南蠻傳東謝蠻。

新唐書南蠻傳南詔等地理志劍南江南嶺南三道諸蠻州。通鑑紀事本末卷三十五南詔歸附、卷三十六蠻導南詔入寇。

舊五代史外國傳昆明部牂牁蠻。

新五代史四夷附錄南詔蠻等。

溪蠻叢笑一卷、宋朱輔撰。說郛第六十七号、古今說海說選部、學海類編集餘遊覽部、四庫書目地理類外紀之屬。

通志卷四十一都邑略。

諸蕃志、見南海部。

文献通考卷三百三十一四裔考南蠻。

宋史外國傳大理、蠻夷傳。

平猺記一卷、元廣集撰。四庫書目雜史類存目。

皇元征緬錄一卷、元人撰。守山閣叢書史部、藩屬輿地叢書第五集。四庫未收書目提要。

元史見元部

元史紀事本末見元部、卷西南夷用兵。

百夷傳一卷、明錢古訓撰。地理類外紀之屬存目。

南征錄一卷、明張瓊撰。雜史類存目。

海槎餘錄一卷、明顧岕撰。寶顏堂祕笈廣集、紀錄彙編。地理類外紀之屬存目。

南詔事略一卷、明顧應祥撰。載記類存目。

滇程記一卷、明楊愼撰。傳記類雜錄之屬存目。

滇載記一卷、明楊愼撰。古今說海說選部、紀錄彙編、學海類編集餘遊覽部、函海第十七函、藝海珠塵竹集。載記類存目。

炎徼紀聞四卷、明嘉靖中、田汝成撰。紀錄彙編、借月山房彙鈔第四集、指海第一集。紀事本末類。

廣右戰功錄一卷、明唐順之撰。借月山房彙鈔第五集。紀事雜史類存目。

交黎撫勦事略五卷、明方民悅撰。雜史類存目。

赤雅三卷、明鄺露撰。龍威祕書第二集、知不足齋叢書第二集。地理類外紀之屬。

洱海叢談一卷、清釋同揆撰。昭代叢書戊集。地理類外紀之屬存目。

明朝紀事本末、見明部卷三十麓川之役。

滇考二卷、清馮甦撰。嘉慶間臨海宋世犖校刊台州叢書。紀事本末類。

蠻司合志十五卷、清毛奇齡撰。西河合集。地理類邊防之屬。

從征緬甸日記一卷、清周裕撰。借月山房彙鈔第七集、指海第十七集。

師範緬事述略一卷、在經世文編、見清部、

明史湖廣四川雲南貴州廣西土司傳。

續通典邊防部正南盤瓠種、西原蠻、南詔、三濮、驃、緬甸、西南渝州蠻、兩爨、東謝等。

續通志。

續文獻通考。

清通典邊防部緬甸葫蘆國。

清通志。

清文獻通考。

峒谿纖志三卷志餘一卷、清陸次雲撰。陸雲士雜著。說鈴前集、龍威祕書第七集、昭代叢書丙集、皆作一卷。地理類外紀之屬存目。

滇黔土司婚禮記一卷、清陳鼎撰。昭代叢書丙集。

楚南苗志六卷、清段汝霖撰。地理類外紀之屬存目。

苗防備覽二十二卷、清嚴如熤撰。嘉慶中其子正基刻、道光二十三年重刻。

聖武記見清部、卷六乾隆征緬甸記二篇、卷七雍正西南夷改流記二篇、乾隆湖貴征苗記、嘉慶湖貴征苗記、道光湖粵平猺記。

曹春林著書五種四十三卷、清上海曹樹翹撰。滇小紀十二卷、黔小紀四卷、苗蠻合志二卷、滇南雜志二十四卷、續滇考一卷。刊本。

古今圖書集成職方典四川成都府部、羌蠻考、功州瀘州雅州大渡河四部峒蠻考、疊溪守禦所部諸蠻考、天全六番部諸番考、四川諸獠部、湖廣寶慶府部峒蠻考、辰州府部溪峒苗蠻考、廣東肇慶府廉州府二部峒蠻考、高州府部猺獞峒蠻考、廣東黎人岐人部、猺獞蠻獠部、廣西桂林柳州慶遠思恩平樂梧州潯州南寧太平思明鎭安泗城十二府各部猺獞峒蠻考、雲南臨安楚雄廣西永昌五府各部猺獞峒蠻考、順寧府部峒蠻考、大理澂江景東廣南曲靖姚安武定麗江元江蒙化開化永寧鎭沅十三府各部土司考、雲南土司部、貴州貴陽思州思南鎭遠銅仁黎平安順都勻平越九府部峒蠻考、石阡府土司考、邊裔典驃國部蒲甘部緬國部。

滇緬劃界圖說一卷、清薛福成輯。藩屬輿地叢書第五集。

安南部

越裳氏重九譯而朝周、見尙書大傳見上古部卷二劉向說苑卷伏佚古今注卷。

史記南越傳。

漢書兩粵傳、地理志交趾九眞日南三郡及粵地。

後漢書南蠻傳、郡國志交州交趾九眞日南三郡。

交州記二卷、晉劉欣期撰、清曾釗輯。嶺南遺書第五集、說郛第六十一弓所載文甚少。

水經注見地理部卷三十七淹水條有南越王尉佗攻滅安陽王之事、見東西洋考

晉書地理志交州、四夷傳南蠻林邑。

宋書州郡志交州、夷蠻傳南夷林邑。

齊書州郡志交州、南夷傳林邑。

梁書諸夷傳海南林邑。

南史夷貊傳海南林邑。

隋書地理志交趾以下六郡、南蠻傳林邑。

北史林邑傳。

通典卷百八十四州郡部古南越安南等郡、卷百八十八邊防部南蠻。

南越志　卷、唐沈懷遠撰、海山仙館叢書。

舊唐書地理志嶺南道安南都督府武峩等州、南蠻傳林邑。

新唐書地理志嶺南道安南都護府陸峯等州、南蠻傳環王。

舊五代史外國傳占城郡縣志。

新五代史四夷附錄占城、職方考。

通志嶺外代答卷百九十八四夷傳。

諸蕃志見南海部上卷。

文獻通考卷三百二十三、輿地考古南越、卷三百三十一四裔考南蠻交趾占城。

元文類卷四十一雜著安南條、元蘇天爵撰。

宋史外國傳交趾占城。

宋史紀事本末見宋部、卷　交州之變。

安南志略十九卷、元黎崱撰。東京岸田吟香翻刻。四庫書目載記類。

元史外國傳安南占城、地理志安南郡縣附錄。

元史紀事本末見元部、卷　占城安南用兵。
馭交記十二卷、明張鏡心撰。粵雅堂叢書續集。
平定交南錄一卷、明丘濬撰。紀錄彙編、借月山房彙鈔第五集、嶺南遺書第二集、勝朝遺事初編。
明一統志卷九十外夷安南占城。
使交錄十八卷、明錢溥撰。傳記類雜錄之屬存目、
奉使安南水程日記一卷、明黃福撰。紀錄彙編。
越嶠書二十卷、明李文鳳撰。載記類存目。
安南圖說一卷、明鄭若曾撰、鄭開陽雜著之第五種也、見外紀部。地理類外紀之屬存目。
越史略三卷、明初安南人撰。守山閣叢書史部、藩屬輿地叢書第一集。載記類附錄、
圖書編卷五十一南蠻安南東西洋考見南海部卷一交阯、卷二占城、卷十卷十一藝文考、卷十二逸事考。
武備志見兵制部、卷二百二十三安南圖、卷二百三十六海外諸國考占城、卷二百三十八安南考。
明朝紀事本末見明部、卷二十二安南叛服。
明史外國傳安南占城。
安南雜記一卷、清李仙根撰、學海類編集餘遊覽部、說鈴前集、昭代叢書甲集。雜史類存目。
粵述一卷、清閔敘撰。說鈴前集、龍威祕書。
安南紀游一卷、清康熙二十七年潘鼎珪撰。說鈴前集、龍威祕書第七集。地理類外紀之屬存目。

海外紀事六卷、清康熙三十五年釋大汕撰。地理類外紀之屬存目。
大越史記全書二十四卷、外紀五卷、本紀九卷、黎聖宗洪德十年、吳士連纂修。本紀續錄六卷、
本紀續編三卷、黎玄宗景治三年范公著奉敕撰。續編追加一卷、黎熙宗正和十八年黎僖等撰。明治十七年引田利章校刊。
清一統志卷四百二十二安南。
聖武記見清部、卷六乾隆征撫安南記。
海國圖志見清部、卷五越南。
接護越南貢使日記一卷、清賈臻撰。道光間編刊賈氏叢書。
越南勘界記　卷。
中法交涉　卷。
續通典卷百四十八邊部正南安南南掌占城。
續通志卷六百三十八四夷傳占城安南。
續文獻通考卷二百三十九四裔考南夷安南占城。
清通典邊防部安南南掌廣南卷九十八。
清通志。
清文獻通考卷二百九十六四裔考安南南掌廣南。
古今圖書集成邊裔典安南部占城部。
越事備考　卷
安南小志　卷、清姚文棟譯。小方壺齋輿地叢鈔。

越南考略　卷、清龔柴撰。小方壺齋輿地叢鈔。
越南世系沿革略　卷、清徐延旭撰。小方壺齋輿地叢鈔。
越南山川略　卷、清徐延旭撰。小方壺齋輿地叢鈔。
越南道路略　卷、清徐延旭撰。小方壺齋輿地叢鈔。
中外交界各隘卡略　卷、清延徐旭撰。小方壺齋輿地叢鈔。
越南地輿圖說　卷、清盛慶延撰。小方壺齋輿地叢鈔。

南海部

晉書四夷傳南蠻扶南。
宋書夷蠻傳南夷扶南、西南夷訶羅陀等。
齊書南夷傳扶南。
梁書諸夷傳海南諸國扶南等。
南史夷貊傳海南扶南國西南夷訶羅陀等。
隋書南蠻傳赤土等。
北史赤土等傳。
南海寄歸內法傳、見佛教部。
通典卷百八十八邊防部南蠻海南諸國。
通志卷四十一都邑略、卷百九十八四夷傳。

舊唐書南蠻傳婆利等。
新唐書南蠻傳盤々等、地理志廣州通海夷道。
扶南土俗一卷、舊題康泰撰。不詳其時代。說郛第六十号。
諸蕃志二卷、宋趙汝适撰。函海第九函、學津討原第七集。四庫書目地理類外紀之屬。
萍洲可談三卷、宋朱彧撰。中途廣州蕃坊市舶事。武英殿聚珍版書。小說家類雜事之屬、
文獻通考卷三百三十一四裔考海南諸國。
宋史外國傳眞臘等。
眞臘風土記一卷、元周達觀撰。說郛第六十二号、古今說海說選部、古今逸史分志部、地理類外紀之屬。
島夷志略一卷、元汪大淵撰。知服齋叢書。地理類外紀之屬、
元史外國傳。
西洋番國志無卷數、明鞏珍撰。地理類外紀之屬存目。
星槎勝覽四卷、明正統元年費信撰。記錄彙編、學海類編集餘遊覽部、借月山房彙鈔第八集、古今說海說選部
唯一卷。
瀛涯勝覽一卷、明馬歡撰。寶顏堂祕笈彙集、紀錄彙編、勝朝遺事二編。地理類外紀之屬存目。
明一統志見地理部、外夷。
海語三卷、明黃衷撰。寶顏堂祕笈彙集、學津討原第七集、嶺南書第二集。地理類外紀之屬。
西洋朝貢典錄三卷、明嘉靖中黃省曾撰。借月山房彙鈔第八集、指海第三集、別下齋叢書、粵雅堂叢
書第三集。地理類外紀之屬存目。

武備志見兵制部、卷二百三十六七海外諸國考三佛齊眞臘等。

四夷考見外紀部。

東西洋考見外紀部、卷二三四西洋列國考、卷五東洋列國考、卷十一藝文考、卷十二逸事考。

咸賓錄見外紀部。

職方外紀見外紀部。

渤泥入貢記、

明史外國傳呂宋等。

清職貢圖見外紀部、

續通典、續通志、續文獻通考、清通典、清通志、清文獻通考。

古今圖書集成邊裔典南方諸國總部、南方諸國各部。

海國圖志見外紀部。

印度部

身毒國事始見史記大宛傳漢書張騫傳。

漢書西域傳罽賓國。

後漢書西域傳大月氏高附天竺東離國及論贊。

三國志魏書烏桓鮮卑東夷傳末裴松之注所引魏略西戎傳大月氏罽賓高附天竺臨兒車離盤越等國。

佛國記一卷、晉義熙中、釋法顯撰。說郛第六十六号、廣漢魏叢書載籍部、唐宋叢書別史部、祕册彙函、津逮祕書第十集。學津討原第七集。校訂藏經傳記部致帙第六册、明北藏徵帙並作法顯傳。四庫書目地理類外紀之屬。

宋書夷蠻傳西南夷師子國天竺迦毗黎國。

後魏釋宋雲慧生等使西域記、見洛陽伽藍記見佛教部、卷五凝玄寺條。

梁書諸夷傳海南諸國中天竺師子。

南史夷貊傳西南夷中天竺等。

隋書西域傳漕國。

北史西域傳小月氏罽賓南天竺等。

大唐西域記十二卷、唐貞觀中、釋玄奘辯機撰。墨海金壺史部、守山閣叢書史部、黃檗本藏經執帙卷一至十二、校訂藏經傳記部致帙第七册、明北藏執帙作十卷。地理類外紀之屬。

大慈恩寺三藏法師傳見佛教部、卷一至

釋迦方志、見佛教部。

大唐西域求法高僧傳、見佛教部。

通典邊防部。

舊唐書西戎傳天竺罽賓。

新唐書地理志安南通天竺道、西域傳天竺摩揭陀罽賓謝颶箇失蜜。

吳船錄二卷、宋范成大撰。宋乾德二年釋繼業遊印度、開寶年歸國、其紀程之略、見吳船錄上卷七月朔條。通行本石湖三錄、寶顏堂祕笈廣集、知不足齋叢書第十八集、寬政六年京都書坊翻刻本。傳記類雜錄之屬。

諸蕃志見南海部、上卷、

文献通考四裔考。

宋史外國傳天竺。

元史外國傳馬八兒等。

明一統志見地理部、外夷西洋古里國等。

武備志見兵制部、卷二百三十六海外諸國考榜葛剌等。

明史外國傳古里等。

清一統志見地理部。

古今圖書集成邊裔典罽賓部天竺部懸渡部印度諸國各部海國圖志。

皇國部 附倭寇

後漢書東夷傳倭、三國志魏書東夷傳倭人。

晉書四夷傳東夷倭人、宋書夷蠻傳東夷倭國、齊書東夷傳倭國、梁書諸夷傳東夷倭、隋書東夷傳倭國、南史夷貊傳東夷倭、北史倭傳。

通典邊防部東夷倭蝦夷。

舊唐書東夷傳倭國日本、新唐書東夷傳日本。

文献通考四裔考東夷倭蝦夷。

宋史外國傳日本。

元史外國傳日本。本紀列傳、亦多記世祖東使事、見異稱日本傳。

元史紀事本末第一卷日本用兵。

元寇紀略二卷、江戶大橋順撰。嘉永六年家刻本。

明一統志外夷日本國。

海東諸國記　卷、明成化七年朝鮮申叔舟撰。

平倭錄無卷數、明人撰。萬曆中翁憲祥吉人重刊。記嘉靖三十二年任環平倭寇事蹟。雜史錄存目。

日本考略一卷、明嘉靖中、薛俊撰。得月簃叢書次刻。存目外紀。

徐海本末一卷、明茅坤撰。坤嘗入胡宗憲幕府、與共籌兵計、此編記所親見、叙述特詳。焦竑獻徵錄載此文、作胡公宗憲勦徐海本末、袁褧、以此書與汪直傳合刻、入金聲玉振集中、題曰海寇記後編、以列范表海寇議前編之後。借月山房彙鈔第四集、傳記類別錄之屬存目、

汪直傳一卷、撰者不詳、記明嘉靖中汪直之亂及胡宗憲以計誘殺直事、所以歸功於宗憲者甚至、蓋其幕客所爲也。

借月山房彙鈔第六集。

籌海圖編十三卷、明胡宗憲撰。嘉靖中、宗憲督師勦倭寇、其所述多實歷之事、於明代海防、亦云詳備、今揭其目次於左、輿地全圖、沿海沙山圖、王官使倭略、倭國入貢事略、倭寇事略、五省沿海郡縣圖、倭變圖、兵防官考及事宜、倭患總編年表、寇跡分合圖譜、大捷考、遇難殉節考、經略考、〔邊防〕

日本圖纂一卷、明鄭若曾撰。若曾在胡宗憲幕府、以坊行日本考略一書、外謬難據、因從奉化人、購得南澳倭商秘圖、持以詢諸使臣降倭通事火長之屬、彙訂爲編、後其裔孫起泓等、收入鄭開陽雜著內、稍有刪節、不如此本詳審。存目外紀。

胡梅林行實無卷數、明胡奇桂撰。紀其父宗憲行實。傳記名人之屬存目、

譚襄敏奏議闕稾、見明部。

督撫經略疏八卷、明李遂撰。巡撫鳳陽四府時所上奏疏、始嘉靖三十六年、至三十八年、集中多言倭寇事。

平倭四疏三卷、明嘉靖中張愡撰。朱睦㮮爲序而刻之。

倭變事略四卷、明嘉靖三十七年采九德撰、明黃岡樊維城編刊鹽邑志林。勝朝遺事初編作一卷。

嘉靖倭亂備鈔二卷、明人撰。始嘉靖二十三年、終於四十五年、雜史類存目、

日本考五卷、明李言恭郝杰同撰。言恭督京營戎政時、爲右都御史、會倭患方劇、乃共據所聞爲此書、記其地理世次土風、而於字書譯語、臚載尤詳。存目外紀、

兩朝平攘錄第四卷、見明部、

倭患考原二卷、明閩人黃虞卿撰。上卷溯洪武元年終萬曆初廣賊林鳳之亂、下卷恤援朝鮮、則紀宋應昌楊鎬東征事也、卷末附以倭俗考、殊爲疏略。雜史類存目。

馭倭錄九卷、明王士騏撰。採明一代倭寇事蹟、起洪武元年、訖萬曆二十四年、凡當時詔旨章奏、並中外戰守方略案年編紀、本末頗具。雜史類存目。

吳淞甲乙倭變志二卷、明張鼐撰。吳淞倭患、在嘉靖甲寅乙卯間、故記二歲事獨詳、雜史類存目、

沖菴督撫奏議八卷、明顧養謙撰。乃總督薊遼時所上、中有議倭封貢事疏、養謙爲之被劾去職。又有周中丞疏稾十六卷、明周孔教所撰、其西臺稾中一疏極、論趙志皐石星等封日本棄朝鮮之非。兩垣奏議。奏議之屬存目、

海防奏議四卷、明萬世德撰。萬曆二十五年、皇師再征朝鮮時、世德管理天津等處海務、條上一切海防事宜、凡四十八疏。奏議存目。

明朝紀事本末第五十五卷沿海倭亂、第六十二卷援朝鮮。

明史外國傳日本、第二百五卷朱紈張經胡宗憲曹邦輔李遂唐順之傳、第二百十二卷俞大猷戚繼光等傳第二百十九卷趙志皐張位傳、第二百二十二卷譚綸傳、第二百三十八卷李成梁麻貴傳、二百三十九卷董一元傳、第二百四十七卷劉綎傳、第二百五十九卷楊鎬傳、

異稱日本傳三卷、元祿元年京都松下見林撰。上卷引元以前書、分三子卷、中卷引明書、分八子卷、下卷引朝鮮書、分四子卷、合十五子卷。元祿六年大阪書坊刊。

日本外志。

琉球部

明一統志外夷琉球國。

使琉球錄一卷、明陳侃撰。嘉靖十一年、侃奉命册封中山王尚清、因自述其事。紀錄彙編、四庫書目雜史類

存目、

琉球圖說一卷、明鄭若曾撰。末附宋鄭藻紀事一篇、此書乃鄭開陽雜著之第六種也、見外紀部。存目外紀。

使琉球錄二卷、明陳侃撰、郭世霖續。嘉靖三十七年世霖奉命册封中山王尚元、因取侃舊本、綴續成編。

使琉球錄二卷、明蕭崇業謝杰同撰。萬曆七年、二人奉使册封琉球國世子尚永爲中山王、因記其行事儀節及琉球風土、大抵本陳侃郭世霖書、而稍潤益之。雜史類存目。

武備志第二百三十六卷、海外諸國考、琉球。

明史外國傳琉球。

使琉球紀一卷、清張學禮撰。康熙元年、學禮與行人王垓、奉使册封琉球國王尚質時所記也、末爲中山紀略則載其風土。說鈴、龍威祕書第九集、傳記類雜錄之屬存目。

中山沿革志二卷、清汪楫撰。康熙二十三年楫與林麟焻奉使册封中山王尚貞、著使琉球錄、備載册封典禮及山川景物、此編則因琉球世纘圖、參以明代實錄、專紀中山世系、附以考據、琉球之沿革略備。載記類存目。

琉球入太學始末一卷、清王士禎撰。學海類編事功部、昭代叢書乙集、又見士禎帶經堂集中。政書類典禮之屬存目。

中山傳信錄六卷、清徐葆光撰。康熙五十七年、册封琉球國世子尚貞爲國王、葆光爲副使、歸上是書、輪翩列說、紀述頗詳。存目外紀。

琉球志略十六卷、清周煌撰。家刻本、武英殿聚珍版書十五卷。

臺灣部

隋書東夷傳流求、北史流求傳。

通典邊防部東夷流求。

新唐書東夷傳流鬼。

通志　文獻通考四裔考東夷流求。

宋史外國傳流求。

元史外國傳瑠求。

明朝紀事本末第七十六卷鄭芝龍受撫。

明史外國傳雞籠。

臺灣紀略一卷、清林謙光撰。康熙二十三年臺灣始平、規模草創、故此紀所載皆略存梗概、不及新志之詳明、然因新志之椎輪也。說鈴前集、龍威祕書、第七集、地理類存目都會郡縣之屬、

鄭成功傳二卷、清鄭亦鄒撰。鄭氏白麓藏書中遂志錄附刻本。明和八年大坂書坊刊本。

臺灣鄭氏紀事三卷、水戶川口長孺撰。文政十一年刊。

臺灣隨筆一卷、清徐懷祖撰。蓋康熙三十四年紀行之作。昭代叢書。雜記。

臺海使槎錄八卷、清黃叔璥撰。康熙六十一年叔璥以御史巡視臺灣時作、故以使槎爲名、裒輯諸書、參以目見、紀載頗詳。剡本、地理類雜記之屬。

平臺紀略一卷附東征集六卷、清藍鼎元撰。紀康熙六十年平定臺灣叛賊朱一貴始末、起是年四月、迄雍正元年四月、鼎元時在其兄總兵官廷珍軍中、見聞最悉、東征集、皆軍中公牘書檄、亦鼎元代廷珍作也。雍正十年廣州刻本、鹿洲全集、龍威祕書第二集、昭代叢書辛集無東征集。紀事本末類。

臺灣紀略七十卷、清乾隆五十三年敕撰。紀清軍定臺灣叛賊林爽文等始末。紀事本末類。
番社采風圖考一卷、清滿洲六十七撰、藝海珠塵石集、昭代叢書庚集。
東槎紀略五卷、清姚瑩撰。中復堂全集。
臺灣府志十卷、清康熙三十三年成、重修台灣府志二十卷乾隆六年成、續修台灣府志二十五卷乾隆十一年成、新修台灣府志乾隆二十九年成。
臺灣縣志八卷、諸羅縣志十二卷、鳳山縣志十卷、噶瑪蘭廳志十八卷、彰化縣志十二卷。
淡水廳志十六卷、清同治中黎兆棠陳培桂等撰。同治十年刊、苗栗縣志未成 恒春縣志汪金明撰未刊。
臺灣外記三十卷 靖台實錄 台灣志略三卷 台灣雜記 征臺紀事、東瀛紀事 華夷變態 台灣事略 東蕃記 靖海記二卷、山川考略一卷、省軒郊行一卷、赤嵌集四卷、遊臺詩一卷蕃俗雜記、海上紀略一卷、瀛壖百詠一卷、臺灣輿地圖說 臺灣輿圖考一卷、台灣賦一卷、流寓考一卷、平南事實一卷、海外集一卷、番境補遺一卷、赤嵌談四卷、巡臺錄一卷、臺灣風土記一卷、台海采風圖考一卷、使署閒情一卷、福台新詠 蛤仔難紀略一卷、海錄碎事一卷、台灣外史 婆娑洋集二卷、澄臺集一卷、裸人叢笑篇海東札記二卷、鄭成功碑一篇朝川善庵撰、鈔中 澎湖紀略一卷、三水勉亭撰乾隆三十四年頃人也 文開文集一卷、文開詩集二卷、草木雜記一卷、磬州文稿 俗六考三卷、化蕃俚言一卷、海島見聞錄一卷。

韓　部

箕子封於朝鮮、見史記周本紀宋微子世家尙書大傳第二卷。
史記朝鮮傳、漢書朝鮮傳、地理志玄菟郡樂浪郡及燕地
後漢書東夷傳高句驪等郡國志幽州玄菟郡樂浪郡。
三國志魏書東夷傳高句麗等。
晋書四夷傳東夷馬韓等地理志平州。
宋書夷蠻傳東夷高句驪百濟、齊書東夷傳高麗等、梁書諸夷傳東夷高句驪等。
魏書高句麗百濟傳、周書異域傳高麗百濟、隋書東夷傳高麗等。
南史夷貊傳東夷高句麗等、北史高麗等傳。
通鑑紀事本末第二十六卷、隋討高麗。
通典邊防部東夷朝鮮等、州郡部古青州安東府。
舊新唐書東夷傳高麗等、地理志河北道安東都護府、太宗紀、李勣張亮薛萬徹契苾何力黑齒常之泉男生蘇定方薛仁貴劉仁軌等傳。
舊五代史外國傳高麗新羅、五代史四夷附錄高麗新羅。
經國大典六卷、明成化五年朝鮮徐居正等撰。傳鈔本。
宣和奉使高麗圖經四十卷、宋徐兢撰。宣和六年遣路允迪使高麗、兢爲從官、歸撰此書上之。知不足齋叢書第十六集。地理類外紀之屬。

三國史記五十卷、高麗仁宗恭孝王時、金富軾等奉宣撰。傳鈔本。事涉皇國者頗多、見異稱日本傳。
文獻通考四裔東夷朝鮮等。
宋史外國傳高麗定安、遼史外紀高麗、金史外國傳高麗。
元史外國傳高麗耽羅。
朝鮮史略六卷、一名東國史略。朝鮮權近撰。載記類附錄。
高麗史一百四十卷、明正統中、朝鮮鄭麟趾等奉敎撰。景泰二年告成。朝鮮刻本。載記類存目止二卷。
朝鮮紀事一卷、明倪謙撰。景泰元年奉使朝鮮頒詔紀行之作。紀錄彙編。雜史類存目。
明一統志外夷朝鮮國。
經國大典　卷、明　年朝鮮崔恒等奉敎撰。
東國通鑑五十六卷、明成化二十一年朝鮮徐居正等奉敎撰。寬文七年京敎書坊刻本。事涉皇國者甚多、見異稱日本傳。
東國輿地勝覽五十五卷、明成化十七年朝鮮盧思愼等奉敎撰。嘉靖三年李荇等增補朝鮮刻本。
朝鮮賦一卷、明董越撰。弘治元年越奉使至朝鮮、因述所見聞、以作此賦、且自注之。外紀。
朝鮮圖說一卷、明鄭若曾撰。鄭開陽雜著之第四種也、見外紀部。
慕齋集　卷、朝鮮金安國撰。其文集中載遺皇國人書十七篇 皆永正天文間隣交公文也、見異稱日本傳。
東文選一百三十卷、目錄三卷、朝鮮　撰。集中載遺皇國人書三篇、及雜文涉皇國事者數篇、見異稱日本傳。
朝鮮國紀一卷、明黃洪憲撰。萬曆中奉使朝鮮、得覩其國先世實紀、因爲此書、然所錄甚略、不及史傳之詳備也。學海類編遊覽部。載記類存目。
朝鮮志二卷、明時朝鮮人撰。藝海珠塵石集。外紀。
徵毖錄四卷、明萬曆中朝鮮柳成龍撰。元祿八年京都書坊刊本。
西厓文集　卷、朝鮮柳成龍撰。
隱峯野史別錄一卷、朝鮮安邦俊撰。嘉永二年渡邊實校刊本。
武備志第二百三十九卷朝鮮考。
征韓偉略五卷、水戶川口長孺撰。天保二年刊本。
明史外國傳朝鮮、
續通典邊防部、
續文獻通考四裔考、
大典續錄　卷、朝鮮李克增等奉敎撰。
大典後續錄、
清通典邊防部、
清文獻通考四裔考。
通文館志八卷、清乾隆中朝鮮金　撰。有其子慶門序。傳鈔本。
東國文獻備考一百卷、清乾隆三十五年朝鮮金致仁等奉敎撰。

燃藜室記述別集十九卷、傳鈔本。
大東輿地圖十三枚　韓國今帝嗣王位之元年撰。古山子校刊、朝鮮刊本。
中京誌十一卷、朝鮮純祖六年趙秉爨撰。朝鮮刊本。
麗史提綱二十三卷、明崇禎丁未朝鮮兪公棨撰。朝鮮刊本。
彙纂麗史四十七卷、朝鮮木齋洪茉撰。朝鮮刊本。
國朝寶鑑　卷、朝鮮翼宗十四年蔡濟恭趙璞等撰。
大典會通六卷、清同治四年朝鮮趙斗淳李裕元等撰。朝鮮刻本。

滿洲部

肅愼氏貢楛矢石砮、見國語第五卷魯語下。
後漢書東夷傳夫餘、三國志東夷傳夫餘挹婁。
晋書四夷傳東夷夫餘肅愼等、魏書勿吉等傳、隋書東夷傳靺鞨、北史勿吉等傳。
通典邊防部東夷夫餘挹婁等。
舊唐書北狄傳靺鞨等、新唐書北狄傳黑水靺鞨渤海、地理志營州入安東道、登州海行入高麗渤海道。
舊五代史外國傳渤海靺鞨黑水靺鞨、新五代史四夷附錄渤海國黑水靺鞨。
文献通考四裔考東夷餘豆莫婁等、宋史外國傳渤海、遼史地理志東京道、金史地理志上京咸平東京三路。
元史地理志遼陽等處行中書省。
明一統志山東布政司遼東都指揮使司、外夷女直。
遼陽圖記一卷、明人撰。寶顏堂祕笈彙集。
女直考一卷、明人撰。雲間陳繼儒編寶顏堂祕笈彙集、說郛補逸續集。
建州女直考、
武備志第二百二十八卷女直考、
龍沙紀略一卷、清方式濟撰。康熙中式濟因省親至黑龍江、記所見聞、以黑龍江下流爲混同江、自此書始。乾隆間刊桐城方氏述堂詩集。借月山房彙鈔第九集、指海、第十八集、昭代叢書巳集、朔方備乘。地理類雜記之屬。
滿洲源流考二十卷、清乾隆四十二年敕撰。地理類都會郡縣
絕域紀略一卷、清方拱乾撰。說鈴、昭代叢書作寧古塔志。
寧古塔紀略一卷、清吳振臣撰。昭代叢書庚集。

朔方部

史記匈奴傳。
漢書匈奴傳。
通鑑紀事本末第二卷匈奴和親、第三卷武帝伐匈奴、第四卷匈奴歸漢。
後漢書南匈奴傳、烏桓鮮卑傳。
通鑑紀事本末第七卷兩匈奴叛服、鮮卑寇邊。
三國志魏書烏桓鮮卑傳。
晋書四夷傳北狄。
宋書鮮卑傳齊書芮芮虜傳、梁書諸夷傳西北諸戎芮芮。
魏書蠕々等傳。
通鑑紀事本末第二十一卷魏伐柔然。
周書異域傳突厥等、隋書北狄傳。
南史夷貊傳北狄、北史蠕々等傳突厥等傳。
通鑑紀事本末第二十六卷突厥朝隋。
通典邊防部北狄。
新唐書突厥傳廻紇傳及北狄傳鐵勒等。
新唐書突厥傳回鶻傳沙陀傳及北狄傳契丹等、地理志關內河北道羈縻州、夏州塞外通大同雲中道、中受降城入回鶻道。
通鑑紀事本末第二十八卷太宗平突厥、唐平鐵勒、第二十九卷突厥叛唐、平奚契丹、第三十六回鶻叛服。
舊五代史外國傳契丹、新五代史四夷附錄契丹等。
通鑑紀事本末第四十一卷契丹入寇、第四十二卷契丹滅晋。
文献通考四裔考北狄。
遼史部族表屬國表。
元史地理志。
元史紀事本末第一卷北邊諸王之亂。
華夷譯語一卷、明洪武二十二年火源潔奉敕撰、四庫書目小學類字書之屬存目。
北征錄一卷、後北征錄一卷、明金幼孜撰。古今說海、紀錄彙編、勝朝遺事初編、雜史類存目。
北征記一卷、明楊榮撰。古今說海、紀錄彙編、勝朝遺事初編。雜史類存目。
出使錄一卷、明李實撰。叙景泰初使也先事。一名北使錄、紀錄彙編、勝朝遺事初編。雜史類存目、
北征事蹟一卷、明袁彬撰。紀錄彙編。雜史類存目。
正統臨戎錄一卷、明楊銘撰。紀錄彙編。雜史類存目。
明一統志外夷韃靼兀良哈。
夷俗記一卷、明蕭大亨撰。陳繼儒刊寶顏堂祕笈。外紀之屬存目。
武備志第二百二十四至第二百二十七卷北虜考、第二

百二十九卷朶顔三衞考。

明朝紀事本末第二十一卷親征漠北、第三十二卷土木之變、第三十三卷景帝登極守禦、第五十八卷議復河套、第五十九卷庚戌之變、第六十卷俺答封貢 。

明史外國傳韃靼瓦剌朶顔。

蒙古源流八卷、蒙古小徹辰薩囊台吉撰。清乾隆四十二年敕譯。雜史。

塞程別記一卷、清余寀撰。康熙初自京師至喀爾倫紀行。昭代叢書乙集。傳記類雜錄之屬存目。

塞北小鈔一卷、清高士奇撰。紀康熙二十二年從駕北巡之事。高文恪公四部稿乙函、說鈴、昭代叢書乙集。傳記類雜錄之屬存目。

使俄羅斯行程錄一卷、清張鵬翮撰。藝海珠塵竹集。說鈴前集、作奉使俄羅斯日記。

親征朔漠方略四十八卷、清康熙四十七年敕撰。紀事本末類。

異域錄二卷、清圖理琛撰。康熙五十一年奉命出使土爾扈特、由喀爾喀越錫伯里、至其地、五十四年回京復命、因紀其行。借月山房彙鈔第九集、指海第六集。外紀。

藩部要略第一第二卷內蒙古要略、第三至第八卷外蒙古喀爾喀部要略。

蒙古遊牧記十六卷、清張穆撰、何秋濤校補。咸豐九年原刻、光緒二十年上海復古書局重校石印。

朔方備乘　卷。

中俄交涉　卷。

使俄草　卷、清王之春撰。

西域部

史記大宛傳、漢書西域傳張、騫李廣利傳、傳常鄭甘陳段傳。

漢書西域傳補注二卷、清徐松撰。原刻本、張琦刻本、指海第十二集、式訓堂叢書。

通鑑紀事本末第三卷漢通西域。

後漢西域傳班超梁慬傳。

通鑑紀事本末第六卷西域歸附。

三國志魏書烏桓鮮卑東夷傳末裴松之注所引魚豢魏略西戎傳西域諸國。

佛國記、見佛教部。

晉書四夷傳西夷焉耆等、梁書諸夷傳西北諸戎高昌等。

洛陽伽藍記中宋雲慧生等使西域記、見佛教部。

周書異域傳高昌等、隋書西域傳高昌等。

南史夷貊傳西域諸國、北史西域傳。

大唐西域記、見佛教部。

通典邊防部西域。

舊唐書西戎傳高昌焉耆等、突厥傳下西突厥及突騎施。

新唐書西域傳高昌等、突厥傳下西突厥及突騎施、地理志隴右道羈縻州、安西入西域道、侯君集裴矩蕭嗣業阿史那社爾契苾何力郭孝恪蘇定方裴行儉王孝傑郭元振杜暹高仙芝等傳、

通鑑紀事本末第二十八卷唐平西突厥、太宗討龜茲、太宗平高昌、

舊五代史外國傳回鶻于闐、新五代史四夷附錄回鶻于闐。

文獻通考四裔考西域。

宋史外國傳天竺等。

西遊錄失卷數、元耶律楚材撰。世無傳本、其删節之文、見知不足齋叢書第二十三集、元盛如梓庶齋老學叢談中、又見湛然居士集。

長春眞人西遊記二卷、附錄一卷、元李志常撰。指海第十三集、連筠簃叢書、榕園叢書乙集、道藏輯要。四庫未收書目提要、作長春子遊記、

北使記一篇、元劉祁撰。記金烏古孫仲端使西域事。歸潛志第十三卷、

西使記一卷、元劉郁撰。記憲宗九年常德西使皇弟旭烈兀軍中往返道途。古今說海說選部、續百川學海、學海類編遊覽部、學津討原第六集、榕園叢書乙集。

元史地理志西北地附錄、制度部所收元王惲玉堂嘉話亦載此文。傳記雜錄。

使西域記一卷、明陳誠撰。明史作西域行程記、永樂中誠副中使李達使西域諸國紀行之作。學海類編遊覽部、四庫書目傳記類雜錄之屬存目。

明一統志外夷哈密衞等。

興復哈密記一卷、明馬文升撰。馬端肅三記之第三種也、記弘治七年遣許進討平土魯番事。紀錄彙編、學海類編遊覽部。雜史類存目馬端肅三記。

平番始末一卷、明許進撰。紀師師討平土魯番本末。紀錄彙編。雜史類存目。

武備志第二百三十二卷哈密考、第二百三十三卷土魯番考第二百三十五卷西域諸國考。

明朝紀事本末第四十卷興復哈密。

明史西域傳哈密衞等撒馬兒罕等。

西方要紀一卷、清康熙初年西洋人利類思、安文思、南懷仁等撰。學海類編遊覽部、昭代叢書甲集。存目外紀。

皇輿西域圖志五十二卷、清乾隆二十七年敕撰。武英殿本。都會郡縣。

清一統志、

平定準噶爾方略前編五十四卷、正編八十五卷、續編三十三卷、清乾隆三十七年敕撰。紀事本末類。

西域聞見錄八卷、清乾隆四十二年椿園七十一撰。通行本。
西域釋地一卷、清祁韻士撰。原刻本、粵雅堂叢書續集。
西陲要略四卷、清祁韻士撰。原刻本、粵雅堂叢書續集。
藩部要略第九至第十四卷厄魯特要略第十五第十六卷回部要略。
伊犁日記二卷、天山客話二卷、清洪亮吉撰。武昌重刊洪北江全集。
西域水道記四卷、清徐松撰。原刻本、
新疆識略十卷、清徐松代松筠撰。刻本。
漢西域圖考七卷、清李光廷撰。同治九年刻本。
普法戰紀輯要四卷、清李光廷撰。榕園叢書乙集。

西羌部

史記漢書匈奴傳卷首載西戎事、
通鑑紀事本末第四卷趙充國破羌、
後漢書西羌傳三國志注所引魏略西戎傳氐羌等。
通鑑紀事本末第七卷諸羌叛服。
晉書四夷傳西夷吐谷渾、宋書吐谷渾傳氐胡傳、齊書河南氐羌傳、梁書諸夷傳西北諸戎河南宕昌等、周書異域傳宕昌等。
通鑑紀事本末第二十四卷吐谷渾盛衰。
隋書西域傳吐谷渾黨項、南史夷貊傳西戎、北史氐等傳。
通典邊防部西羌。
舊唐書吐蕃傳及西戎傳泥婆羅等、新唐書吐蕃傳及西域傳泥婆羅等、地理志劍南道諸羌州。
通鑑紀事本末第二十八卷太宗平吐谷渾、第二十九卷吐蕃請和、第三十二卷吐蕃入寇、吐蕃叛盟、第三十六卷吐蕃衰亂。
舊五代史外國傳吐蕃黨項、新五代史四夷附錄吐渾黨項吐蕃等。
文獻通考四裔考西戎。
宋史外國傳黨項吐蕃、宋史紀事本末卷熙河之役、
明一統志外夷西番等。
武備志第二百三十四卷西番考。
明史西域傳西番諸衛等烏斯藏等。
金川瑣記六卷、清李心衡撰。藝海珠塵石集。

西藏記二卷、清人撰。龍威祕書第九集。
進藏紀程一卷、清王世睿撰。昭代叢書丙集。
藏行紀程一卷、清杜昌丁撰。昭代叢書辛集。
康輶紀行十六卷、清姚瑩撰。中復堂全集。
衛藏圖志五卷、清盛繩祖撰。刻本。
西招圖略一卷、清松筠撰。自刻本。

地理部

史記河渠書漢書地理志溝洫志。
潛研堂文集第十六卷秦四十郡辨、秦三十六郡考、漢百三郡國考。
楚漢諸侯疆域志三卷、清劉文淇撰。槐廬叢書初編。
漢書地理志稽疑六卷、清全祖望撰。朱文翰刻本、粵雅堂叢書第十七集。
新斠注地理志十六卷、清錢坫撰。原刻本、同治十三年會稽章氏重刻本、附徐松集釋。
漢書地理志補注一百卷、清吳卓信撰。安徽包氏刻本。
漢書地理志圖今釋　卷、漢志水道考一卷、清　撰、廣州刻本。
漢志水道疏證五卷、清洪頤煊撰。馮翼校刊問經堂叢書重訂本、
漢書地理志水道圖說七卷、清陳澧撰。自刊東塾叢書。
後漢書郡國志、
三國疆域志二卷、清洪亮吉撰。洪北江全集、
戴校水經注四十卷、水經作者不詳。後魏酈道元注、清戴震校。武英殿聚珍版書、福州繙刻本、浙江刻巾箱本、乾隆間曲阜孔廣森編刊戴氏遺書。戴校以前、水經注諸本皆遜。
水經注釋四十卷、刊誤十二卷、清趙一清撰。原刻本、地理類河渠之屬。
水經注釋地四十卷、水道直指一卷、補遺一卷、清張匡學撰。嘉慶二年新安張氏刻本。
三輔決錄二卷、漢趙岐撰、晉摯虞注、清張澍輯。二酉堂叢書。又茅泮林輯本在梅瑞軒十種古逸書中。
三輔黃圖一卷、撰人不詳。蓋六朝舊笈、而唐人刪補、清莊炘校。平津館叢書戊集、經訓堂叢書作六卷、附補遺一卷。宮殿疏之屬。
王隱晉書地道記一卷、晉太康三年地記一卷、清畢沅輯、經訓堂叢書。
南方草木狀三卷、晉嵇含撰、說郛、漢魏叢書載籍部、百川學海癸集、龍威祕書第一集、地理類雜記之屬。
闞駰十三州志二卷、晉闞駰撰、清張澍輯。二酉堂叢書、金谿王謨編刊漢晉遺書鈔。
晉書地理志新補正五卷、清畢沅撰。經訓堂叢書、式訓堂叢書。
東晉疆域志四卷、十六國疆域志十六卷、清洪亮吉撰。洪北江全集。
宋書州郡志、齊書州郡志、
補梁疆域志八卷、清洪齮孫撰、道光元年李兆洛與三國職官表合刻、

魏書地形志、隋書地理志、

古地志十種、清張澍輯、一晉摯虞決疑要注、二辛氏三秦記、三唐嘉郊三輔舊事、四無名氏三輔故事、五梁劉昞十三州志、六晉段龜龍涼州記、七無名氏涼州異物志、八西河舊事、九梁喩歸西河記、十段國沙州記、二酉堂叢書。

括地志八卷、唐魏王泰撰、清孫星衍輯、岱南叢書、槐廬叢書初編。

通典州郡部、

元和郡縣志四十卷附拾遺二卷、唐李吉甫撰、清嚴觀拾遺、岱南閣叢書、金陵書局合刻地志四書、又武英殿聚珍版書、福州繙刻本無拾遺、總志、

兩京新記一卷、唐韋述撰。佚存叢書第一帙、粵雅堂叢書第十二集。四庫未收書目提要。

北戶錄三卷、唐段公路撰。懿宗咸通中在廣州所作、載嶺南風土物產、頗爲該備。說郛古今說海學海類編等皆唯一卷、不爲完本。雜記。

嶺表錄異三卷、唐劉恂撰。武英殿聚珍版書、福州江西浙江繙刻本、榕園叢書乙集、百川學海及說郛所載僅々數頁、首尾不完。雜記、

舊唐書地理志、新唐書地理志。

唐兩京城坊考五卷、清徐松撰。連筠簃叢書。

舊五代史郡縣志、新五代史職方考。

太平寰宇記一百九十三卷、宋樂史撰。江西樂氏刻本、金陵書局合刻地志四書、萬廷蘭刻本、附淸一統志表、地理類總志、

長安志二十卷、宋宋敏求撰。經訓堂叢書。古蹟。

元豐九域志十卷、宋王存等奉敕撰。武英殿聚珍版書、福州繙刻本。桐鄉馮集梧校刊本、金陵書局合刻地志四書本、每卷各附考證。總志。

吳郡圖經續記三卷、宋朱長文撰。得月簃叢書次刻、琳琅祕室叢書第二集、學津討原第七集、榕園叢書乙集。地理類都會郡縣之屬。

輿地廣記三十八卷、札記二卷、宋政和中歐陽忞撰。清黃丕烈校、黃氏士禮居叢書、金陵書局合刻地志四書、武英殿聚珍版書、福州繙刻本無札記。地理類總志。

雍錄十卷、宋程大昌撰。通行本、古今逸史。

通志地理略都邑略。

乾道臨安志三卷、宋周淙撰。粵雅堂叢書續集、式訓堂叢書、都會郡縣。

淳熙三山志四十二卷、宋梁克家撰。都會郡縣、

吳郡志五十卷附校勘記、宋淳熙中范成大撰。毛氏汲古閣刻本、墨海金壺史部、守山閣叢書史部。都會郡縣。

桂海虞衡志一卷、宋范成大撰。古今說海、古今逸史、唐宋叢書載籍部、學海類編遊覽部、知不足齋叢書第二十三集、文獻通考四裔考中、引桂海虞衡志、幾盈一卷、皆志蠻之文、而此本悉不載、蓋原書本三卷、此本併爲一卷、已刊削其大半矣。雜記。

嶺外代答十卷、宋周去非撰。自序稱本桂海虞衡志、而益以耳目所見聞、其書條分縷析、視稽含段公路劉恂諸書、敍述爲詳。知不足齋叢書第十七集。雜記。

澉水志八卷、宋紹定三年常棠撰。鹽邑志林作二卷。都會郡縣、

輿地紀要二百卷、宋王象之撰。第三十二卷闕。廣州新刻本。四庫未收書目提要。

景定建康志五十卷、宋周應合撰。陽湖孫氏岱南閣別行本、都會郡縣。

咸淳臨安志九十三卷、札記三卷、宋潛說友撰。清黃士珣校、汪遠孫刻本。都會郡縣。

文獻通考輿地考、

宋史地理志河渠志、

遼史地理志、金史地理志河渠志、

延祐四明志十七卷、元袁桷撰。明刻本、清乾隆間周氏刻本。都會郡縣。

齊乘六卷、元于欽撰。都會郡縣。

河源記一卷、元潘昂霄撰。紀至十七年篤什溯河源事。學海類編集餘事功部。元史河渠志全錄此文。存目河渠。

長安志圖三卷、元李好文撰。經訓堂叢書。古蹟。

元史地理志河渠志。

明一統志九十卷、明天順五年李賢等奉敕撰。明刻本、皇朝正德三年京都書坊刻本。

西湖游覽志二十四卷、志餘二十六卷、明田汝成撰。

三吳水利錄四卷、明歸有光撰。

滇略十卷、明謝肇淛撰、雲南備徵志、都會郡縣。

汴京遺蹟志二十四卷、明李濂撰、淸人校刻本、古蹟。

閩中海錯疏三卷、明屠本畯撰、藝海珠塵竹集、學津討原第七集、

閩書一百五十四卷、明何喬遠撰、明刻本、此非地志善本、以多敘市舶倭寇事、收之異稱日本傳、備引其倭寇事、地理類存目都會郡縣之屬、

明史地理志河渠志、

歷代帝王宅京記二十卷、清顧炎武撰。嘉慶十三年顧氏刻本、槐廬叢書三編。都會郡縣。

日知錄第三十一卷、

天下郡國利病書一百二十卷、清顧炎武撰。活字版本不善。地理類存目總志。

日下舊聞四十二卷、清朱彝尊撰。通行本。

讀史方輿紀要一百三十卷、附錄四卷、清顧祖禹撰。通行刻本。活字版本不善。

宋東京考二十卷、清周城撰。原刻本。地理類存目古蹟。

續通典州郡門、續通志地理都邑略、續文獻通考輿地考。

歷代地理沿革表四十七卷、清陳芳績撰。道光間刻本。

歷代地理志韻編今釋二十卷、清李兆洛撰。江寧官本、李申耆五種。上海蜚英館石印本、附淸輿地圖一卷　淸輿地韻編二卷。此書最便。

歷代地理沿革圖一卷、清六嚴撰。江寧官本、李申耆五種。

崑崙河源考一卷、清萬斯同撰。借月山房彙鈔第九集、指海第四集。河渠、

清通典州郡門、清通志地理略都邑略、清文獻通考輿地考。

清一統志五百卷、 清乾隆二十九年敕續修、武英殿本、乾隆八年本、止三百四十二卷總志、

日下舊聞考一百二十卷、 清乾隆三十九年敕撰、依朱彝尊日下舊聞增纂、武英殿本、都會郡縣、

河源紀略三十六卷、 清乾隆四十七年敕撰、河渠。

各省通志十七部合一千八百九十一卷、 都會郡縣、

盛京一百二十卷、 清乾隆四十四年敕撰、 畿輔一百二十卷、 以下十六志、皆雍正七年、總督巡撫等奉敕監修、其告成在雍正中若乾隆初年

江南二百卷、江西一百六十二卷、浙江二百八十卷、福建七十八卷、湖廣一百二十卷、河南八十卷、山東三十六卷、山西二百三十卷、陝西一百卷、甘肅五十卷、四川四十七卷、廣東六十四卷、廣西一百二十八卷、雲南三十卷、貴州四十六卷、

行水金鑑一百七十五卷、 清傅澤洪撰。通行本。河渠。

水道提綱二十八卷、 清齊召南撰。原刻本。河渠。

十駕齋養新錄第十一卷、

廣陵通典三十卷、 清汪中撰。淮南書局刻本。汪喜孫刊汪容甫所著書。

南越筆記十六卷、 清李調之撰。函海第二十四函。

黔書二卷、 清田雯撰。古懽堂集附刻本、貴陽重刻本、粵雅堂叢書續集、

續黔書八卷、 清張澍撰。自刻本、粵雅堂叢書續集。

蜀典十二卷、 清張澍撰。自刻本。

關中勝蹟圖志三十二卷、 清畢沅撰。自刻本、地理類、古蹟。

澳門紀略二卷、 清乾隆中印光任張汝霖同撰。昭代叢書癸集、都會郡縣。

乾隆府廳州縣圖志五十卷、 清洪亮吉撰。洪北江全集、清一統志浩繁、此即其捺本。

方輿紀要簡覽三十四卷、 清顧祖禹原撰、潘鐸删正。自刻本。此本甚便。

清一統輿圖三十二卷、 清胡林翼等撰。武昌官本。內府本難得、此本極詳。

同治上海縣志三十二卷、圖說一卷、叙錄一卷、 清應寶時等依嘉慶上海縣志重修。同治十一年刊本。

外紀部

鄭開陽雜著十一卷、 明嘉靖中鄭若曾在胡宗憲幕府所撰。清康熙中、其五世孫起泓及子定遠重編刊行。目次如左、萬里海防圖論二卷、江防圖考一卷、日本圖纂一卷、朝鮮圖說一卷、安南圖說一卷、琉球圖說一卷、海防一覽圖一卷、海運全圖一卷、黃河圖議一卷、蘇松浮糧議一卷。家刻本。邊防。

東西洋考十二卷、 明萬曆四十五年張燮撰。惜陰軒叢書第三函。外紀。

咸賓錄八卷、 明萬曆中羅日褧撰。存目外紀。

職方外紀五卷、 明天啓三年西洋人艾儒略撰。初利瑪竇貢進萬國圖志、龐廸我奉命翻譯、儒略更增補、以成此

書。天學初函理編、墨海金壺史部、守山閣叢書史部。外紀。

坤輿圖說二卷、 明崇禎中西洋人南懷仁撰。指海第十二集、石門吳震方編刊說鈴及龍威祕書作坤輿外記一卷、此書刪本也。外紀。

清職貢圖九卷、 清乾隆十六年敕撰。二十二年告成、後又爲續圖。外紀。

地球圖說一卷、 清乾隆中、西洋人蔣友仁譯。何國宗錢大昕奉敕潤色。儀徵阮氏刻文選樓叢書、

藩部要略十八卷表四卷、 清祁韻士撰。張穆校。光緒十年浙江書局校刊。

海國聞見錄二卷、 清陳倫炯撰。乾隆五十八年浙江刻本、藝海珠塵石集、昭代叢書戊集作一卷。外紀。

海錄一卷、 清楊炳南撰。海山仙館叢書。

外國地理備考十卷、 清道光間西洋人瑪吉士譯。海山仙館叢書。

瀛寰志略十卷、 清徐繼畬撰。原刻大字本、重刻小字本。文久元年阿波對嵋閣繙刻本。

海國圖志定本一百卷、 清林則徐譯。魏源重定。咸豐二年廣州重刻本、初刻止六十卷。

新譯海道圖說十五卷附長江圖說三卷、 清　　撰。中西洋人上海製造局刻本。

地理全志十五卷、 上編五卷、下編十卷、英國慕維廉撰。安政五年嚴瀨蠖洲刻本。

通商條約章程成案彙編三十卷、 清光緒十二年編。鐵城廣百宋齋藏本。

儒學部

史記儒林傳。

漢書儒林傳。

西京博士考一卷、 清胡秉虔撰。金山錢熙輔編刊續藝海珠塵。

後漢書儒林傳。

兩漢五經博士考三卷、 清張金吾撰。後知不足齋叢書第三函。

晉梁陳魏北齊周隋書、南北史儒林傳。

舊新唐書儒學傳。

唐學士年表一卷、五代學士年表一卷、 清錢大昕撰。德清徐氏刻本。

伊洛淵源錄十四卷、 宋朱熹撰。明成化九年張□刊本、清康熙間呂氏寶誥堂刊朱子遺書。文政七年繙刻、嘉永四年重刻本。傳記類總錄。

宋史道學傳儒林傳。

金史儒林傳。

宋史紀事本末第　卷、道學崇黜第　卷、北方諸儒之學。

宋中興學士年表一卷、 清錢大昕撰、德清徐氏刻本。

元史儒學傳。

元儒考略四卷、 明馮從吾撰。傳記類總錄。

元史紀事本末第三卷、諸儒出處學問之槩。

授經圖四卷、 明朱睦㮮撰。龔翔麟編。清黃虞稷龔翔麟校補、康熙間錢塘玉玲瓏閣叢刻、惜陰軒叢書、作二十

卷。

宋元學案一百卷、清黃宗羲撰。其子百家纂輯、全祖望修定。道光二十六年何紹基校刊、光緒五年龍汝霖重刊。

明史儒林傳、

明儒學案六十二卷、清黃宗羲撰。康熙三十年鄞縣萬氏刻其三分之一、乾隆四年慈谿鄭性補刻、光緒八年慈谿馮全該重刊。

儒林宗派十六卷、清萬斯同撰。傳記類與錄。

理學宗傳二十六卷、清孫奇逢撰。通行本。

明儒言行錄十卷、續錄二卷、清沈佳撰。傳記類總錄。

尙書經師系表一卷、清江聲撰。清經解。

十三經注疏姓氏一卷、清翁方綱撰。蘇齋叢書。

闕里文献考一百卷、清孔繼汾撰。乾隆二十七年刻本。

傳經表一卷、附通經表一卷、清畢沅撰。式訓堂叢書。

理學正宗　卷、清竇克勤撰。

漢學師承記八卷、附經師經義目錄一卷、清江藩撰。道光九年重修節市老人雜著、粤雅堂叢書第十八集。

宋學淵源記二卷、附記一卷、清江藩撰。節市老人雜著、粤雅堂叢書第十八集。

續理學正宗　卷、清何畊珍撰。

清學案小識　卷、清唐鑑撰。自刻本。

道教部

魏書釋老志。

隋書經籍志道經。

舊唐書經籍志道家。

文献通考經籍考子部神仙家類叙。

宋史紀事本末第二十二卷天書封祀、第五十一卷道敎之崇。

道藏目錄詳注四卷、明白雲霽撰。四庫書目道家類。

筆叢 見論說考訂部 壬部玉壺遐覽四卷。

明朝紀事本末第五十二卷、世宗崇道教。

佛教部第一類

大藏浩瀚、雖可涉獵、今就其中、特擧可以考釋迦行蹟、察佛教流行之狀者、悉收於此。

四十二章經一卷、漢迦葉摩騰共竺法蘭譯。迦葉摩騰、或云竺葉摩騰、亦云攝摩騰、與法蘭皆中印度人、漢明帝遣郎中蔡愔至大月支國、尋訪佛法、請摩騰法蘭、同至洛陽、佛法始入于漢。古今譯經圖記云、此經本是外國經抄撮以大化初傳、人未深信、蘊其妙解、不即多翻、且攝經要、以導時俗。S. Beal 以英文重譯、見 A catena of Buddhist Scriptures from the Chinese 又有 M. L. Feer 法文譯本。律逮祕書第四集釋守遂注本、縮刷藏經印度雜部藏帙第五冊、明藏阿含部璧函。

㮈女祇域因緣經一卷、漢安世高譯。世高名淸、以字行、安息國太子、讓國于叔、出家遊方、以桓帝時至東夏、譯大乘方等要慧經等九十餘部。縮刷藏經小乘經部宿帙第六冊、明藏阿含部尺函。

興起行經二卷、漢康孟詳譯。孟詳、其先康居國人、獻帝時、於洛陽譯舍利弗摩訶目揵連遊四衢經等六部。縮刷藏經小乘經部辰帙第十冊、明藏小乘單譯經部當函。

修行本起經二卷、漢竺大力共康孟詳譯。大力、西域人、獻帝時、於洛陽譯此經。縮刷藏經小乘經部辰帙第十冊、明藏阿含部尺函。

中本起經二卷、漢曇果共康孟詳譯。曇果、西域人、獻帝時、自迦維羅衛國、齎此經梵本、屆于洛陽譯出、康孟詳度語、此經略叙釋迦行跡、文筆古雅。縮刷藏經小乘經部辰帙第十冊、明藏小乘律部受函。

曇無德律雜羯磨一卷、魏康僧鎧譯。僧鎧、印度人、嘉平中、於洛陽白馬寺、譯郁伽長者所問經等三部、此羯磨、四分律摘本也。縮刷藏經小乘律部列帙第七冊、明藏小乘律部受函。

羯磨一卷、出曇無德律部、魏曇無諦譯。諦亦云曇諦、魏云法實、安息國人、曹髦時、屆于洛陽、於白馬寺譯此本。縮刷藏經小乘律部列帙第七冊、明藏小乘律部婦函。

孛經一卷、吳支謙譯。謙字恭明、一名越、月支國優婆塞、祖父法度、以漢靈帝世、率國人數百歸化、時月支沙門支婁迦讖在洛陽、支亮字紀明、從婁迦讖學、謙又受業於亮、漢末大亂、謙奔於吳、孫權拜爲博士、乃收集梵本、譯出大明度無極經等數十部。縮刷藏經小乘經部宿帙第八冊、明藏小乘單譯經部彼函。

梵志阿颰經一卷、吳支謙譯。此經述釋迦種姓世系、與長阿含經第三分阿摩晝經第一同本、縮刷藏經小乘經部辰帙第十冊、明藏阿含部善函。

太子瑞應本起經二卷、吳支謙譯。與過去現在因果經同本。縮刷藏經小乘經部辰帙第十冊、明藏阿含部尺函。

義足經二卷、吳支謙譯。頌述釋迦行跡、凡十六經、各有義足偈、故總名義足經、而譯文甚爲難曉。縮刷藏經小乘經部宿帙第五冊、明藏阿含部璧函。

未生怨經一卷、吳支謙譯。述瓶沙王受害事、與律中大同小異。縮刷藏經小乘經部宿帙第七冊、明藏小乘單譯經部敬函。

菩薩本緣經三卷、印度僧伽斯那撰、吳支謙譯。縮刷藏經印度雜部藏帙第七冊、明藏西土雜藏部聚函。

六度集經八卷、吳康僧會譯。僧會、其先康居國人、世居印度、其父因商賈移于交趾、僧會以吳赤烏十年到建業、始興佛寺、號建初寺、譯六度集經等七部、此經皆述往昔如來行菩薩道時六波羅蜜行。縮刷藏經方等部宙帙第五冊、明藏大乘重譯經部萬函。

當來變經一卷、西晉竺曇摩羅察譯。曇摩羅察、晉言法護、其先月支國人、本姓支氏、世居燉煌、年八歲出家、事外國沙門竺高座爲師、遂以竺爲姓、稱竺法護、後隨師至西域、歷遊諸國、外國異言三十六種、字體音義、無不備曉、遂大齎梵經、至長安洛陽、譯光讚般若經等一百七十五部、方等諸經、始大行于世、今存者九十部。縮刷藏經小乘經部辰帙第十冊、明藏大乘單譯經部景函。

瑠璃王經一卷、西晉竺法護譯。縮刷藏經小乘經部宿帙第七冊、明藏阿含部璧函、

佛般泥洹經二卷　西晉白法祖譯。法祖名遠、以字行、河內人、譯菩薩逝經等十六部、此經與長阿含經第一分遊行經第二同本。縮刷藏經小乘經部昃帙第十冊、明藏阿含部福函。

大樓炭經六卷、西晉釋法立共釋法炬譯。與長阿含經第四分世記經同本、而品稍不同、文亦簡拙。縮刷藏經

小乘經部辰帙第一册、明藏阿含部福函。

異出菩薩本起經一卷、西晉聶道眞譯。道眞父曰承遠、父子皆爲優婆塞、以度語爲業、承竺法護旨執筆、法護沒後、承遠自譯經二部、道眞自譯無垢施菩薩應辯經等二十四部、此經與過去現在因果經同本。縮刷藏經小乘經部辰帙第十册、明藏大乘單譯經部維函。

僧伽羅刹所集佛行經三卷、苻秦僧伽跋澄等譯。跋澄、或云跋橙、秦言衆現、罽賓國人、秦建元末、來入關中。縮刷藏經印度雜部藏帙第七册、明藏西土雜藏部典函。

十二遊經一卷、東晉迦留陀伽譯。迦留陀伽、晉言時水、西域人。縮刷藏經印度雜部藏帙第八册、明藏西土雜藏部英函。

中阿含經六十卷、東晉瞿曇僧伽提婆譯。僧伽提婆、晉言衆天、罽賓國人、苻秦建元末入長安、譯阿毗曇八揵度論、後遊廬山、詣建康、譯五部一百餘卷、此經第五十六卷晡利多品第三羅摩經、有釋迦出家成道之談。縮刷藏經小乘經部昃帙第五册、明藏阿含部作至立六卷。

菩薩從兜率天降神母胎說廣普經七卷、一名菩薩處胎經。姚秦竺佛念譯。佛念、涼州人、洞曉方語、華戎音義、無不兼釋、自安清支讖之後、莫能及者、在苻姚二代、爲譯人之宗、此經三十八品、末尾有起塔出經二品、述分舍利結集法藏事。縮刷藏經涅槃部罔帙第十册、明藏大乘單譯經部悲函。

長阿含經二十二卷、姚秦佛陀耶舍共竺佛念譯。佛陀耶舍、秦言覺名、罽賓國人、遊秦土、譯此經及四分律等、後還罽賓、此經第一分遊行經第二、有釋迦涅槃事第二分四姓經第一、說世界四姓起因、第三分阿摩晝經第一、述釋迦種姓世系、第四分世記經、述世界開闢事。縮刷藏經小乘經部昃帙第九册、明藏阿含部習聽二函。

四分律六十卷、亦云曇無德律。姚秦佛陀耶舍共竺佛念譯。其序述釋迦世系。縮刷藏經小乘律部列帙第三至第六册、明藏小乘律部業至無六函。

佛垂般涅槃略說教誡經一卷、亦名佛遺教經。姚秦鳩摩羅什譯。鳩摩羅什、一名鳩摩羅、耆婆、秦言童壽、天竺人、家世國相、父鳩摩羅炎、棄相位出家、至龜玆、娶王妹生鳩摩羅什、什從母出家、學于罽賓、後還龜玆、呂光破龜玆、從入涼州、姚興迎至長安、待以師禮、譯經論七十四部、三百八十餘卷。縮刷藏經小乘經部辰帙第十册、明藏涅槃部食函。

觀佛三昧海經十卷、東晉佛陀跋陀羅譯。佛陀跋陀羅、晉言覺賢、迦維羅衞國人、嘗遊罽賓、秦僧智嚴至罽賓、要覺賢東遊、後入晉、譯大方廣佛華嚴經等十三部。縮刷藏經方等部黃帙第五册、明藏大乘單譯經部量函。

大般涅槃經三卷、東晉釋法顯譯。與白法祖譯佛般泥洹經及長阿含經第一分遊行經第二同本、稍有詳略。縮刷藏經小乘經部昃帙第十册。明藏涅槃部駒函。

般泥洹經二卷、失譯人名。附東晉錄、與前經同本。縮刷藏經小乘經部昃帙第十册、明藏涅槃部駒函、作方等泥洹經。

佛所行讚五卷、印度馬鳴菩薩撰、北涼曇無讖譯。曇無讖、或云曇摩懺、涼言法豐、中印度人、賫經律至河西傳譯。後爲沮渠蒙遜所殺。縮刷藏經印度雜部、藏帙第七册、明藏西土雜藏部典函。

彌沙塞部和醯五分律三十卷、宋佛陀什共竺道生等譯。佛陀什、宋言覺壽、罽賓國人、廢帝義符時、至建康譯此經、其梵本者、法顯於師子國所得也、序文有釋迦傳記。縮刷藏經小乘律部張帙第一第二册、明藏小乘律部而益詠三函。

佛本行經七卷、宋釋寶雲譯。卷首因緣品稱阿育王時、密跡金剛爲諸天頌佛始末。縮刷藏經印度雜部藏帙第七册、明藏西土雜藏部途函。

過去現在因果經四卷、宋求那跋陀羅譯。求那跋陀羅、宋言功德賢、中印度人、以大乘學、故世號摩訶衍、元嘉十二年至宋都、譯經五十二部、此經與修行本起經、太子瑞應本起經、異出菩薩本起經同本、而此譯尤善。縮刷藏經小乘經部辰帙第十册、明藏阿含部尺函。

迦丁比丘說當來變經一卷、失譯人名。今附宋錄。縮刷藏經小乘藏經部藏帙第八册、明藏西土雜藏部英函。

賢愚經十三卷、亦云賢愚因緣經。後魏釋慧覺譯。慧覺、涼州人、遊于闐國、得此經梵本、還至高昌譯之。縮刷藏經小乘經部宿帙第九册、明藏西土雜藏部左達二函。

釋迦譜五卷、梁釋僧祐撰。縮刷藏經傳記部致帙第一册、明藏此土著述部書函。

佛本行集經六十卷、隋闍那崛多譯。闍那崛多、隋云志德、北賢豆揵陀囉國人、周初屆長安、尋入突厥、開皇中、再還長安、翻經甚多。縮刷藏經小乘經部辰帙第七八九册、明藏小乘單譯經部父至與六函。

起世經十卷、隋闍那崛多等譯。與長阿含經第四分世記經同本、而品次稍異、文義俱暢。縮刷藏經小乘經部辰帙第一册、明藏阿含部惡函。

起世因本經十卷、隋達摩笈多譯。達摩笈多、隋云法密、亦云法藏、南印度羅囉國人、此經亦與前經同本。縮刷藏經小乘經部辰帙第一册、明藏阿含部積函。

佛臨涅槃記法住經一卷、唐釋玄奘譯。縮刷藏經小乘經部辰帙第十册、明藏涅槃部食函。

大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記一卷、唐釋玄奘譯。縮刷藏經印度雜部藏帙第八册、明藏西土雜藏部漆函。

釋迦氏略譜一卷、或無略字。唐釋道宣撰。縮刷藏經傳記部致帙第二册、明藏此土著述部璧函。

根本說一切有部毗柰耶破僧事二十卷、唐釋義淨譯。序有釋迦傳記。縮刷藏經小乘律部寒帙第三册、明藏小乘律部樂殊二函。

衆許摩訶帝經十三卷、宋釋法賢譯。縮刷藏經小乘經部辰帙第十册、明藏宋元入藏諸經部命函。

迦葉結經一卷、漢安世高譯。說佛滅度後、迦葉舉阿難九過、及結集三藏事。縮刷藏經印度雜部藏帙第八册、明藏西土雜藏部棃函。

撰集三藏及雜藏傳一卷、失譯人名。附東晉錄。大意與前經同、而是四言偈述、兼釋三藏與雜藏事。縮刷藏經印度雜部藏帙第八册、明藏西土雜藏部漆函。竺佛念譯菩薩處胎經末尾出經品、述大迦葉等集八億四千衆、同結八藏事與舊傳異。

阿育王傳七卷、西晉安法欽譯。法欽、安息國人。縮刷藏經印度雜部藏帙第十册、明藏西土雜藏部漆函。

阿育王經六卷、梁僧伽婆羅譯。即前本別出、而次第小異、詳略亦各不同、梵本 Aśokâvadâna 現存、蓋此經原本也、見和濟遜梵本目錄。縮刷藏經印度雜部藏帙第十册、明藏西土雜藏部墳函。

阿育王子壞目因緣經一卷、苻秦曇摩難提譯。縮刷藏經印度雜部藏帙第十册、明藏西土雜藏部羣函。

善見律毘婆沙十八卷、或云婆毘沙律、亦直云善見律。齊僧伽跋陀羅譯。僧伽跋陀羅、齊言衆賢、西域人、此書序(?)有摩揭陀國師子國列王世系及律藏傳附事。高楠順次郎氏譯此書、題曰 Pâli Elements in Chinese Buddhism: A Translation of Buddhaghosa's Samanta-pâsâdikâ, found in the Chinese Translation, 見明治二十九年七月英國亞細亞協會雜誌第十章。縮刷藏經小乘律部寒帙第八册、明藏小乘律部禮別二函。

文殊師利問經二卷、梁僧伽婆譯。下卷分別部品、述諸部分別事。縮刷藏經大乘律部列帙第一册、明

藏大乘單譯經部染函。

十八部論一卷、 印度世友菩薩撰。譯人不詳。高麗藏題曰陳眞諦、而其跋曰、詳其文理、多是羅什譯出。縮刷藏經小乘論部藏帙第四冊、明藏小乘論部席函。

部執異論一卷、 印度世友菩薩撰、陳眞諦譯。與前論同本。縮刷藏經小乘論部藏帙第四冊、明藏小乘論部席函。

異部宗輪論一卷、 印度世友菩薩撰、唐釋玄奘譯。以上三書、同本異譯。縮刷藏經小乘論部藏帙第四冊、明藏小乘論部席函。

異部宗輪論述記一卷、 唐釋窺基撰。元祿九年京都書坊刊、文政四年修版。

大智度論一百卷、 印度龍樹菩薩撰、姚秦鳩摩羅什譯。第九十九卷、有上座大衆分部、及大天事。寬文元年京都書坊刊本。

阿毘達磨大毘婆沙論二百卷、 印度迦多衍尼子撰、五百大阿羅漢釋、唐釋玄奘譯。其序說有健駄邏國王結集三藏事。縮刷藏經小乘論部收帙第一至第八冊、明藏小乘論部心至際二十函。

馬鳴菩薩傳一卷、龍樹菩薩傳一卷、提婆菩薩傳一卷、 姚秦鳩摩羅什譯。與付法藏因緣傳中三人事蹟同。縮刷藏經印度雜部藏帙第九冊、明藏西土雜藏部漆函。

付法藏因緣傳六卷、 後魏吉迦夜共釋曇曜譯。吉迦夜、魏云何事、西域人。縮刷藏經印度雜部藏帙第九冊、明藏西土雜藏部集函。

龍樹菩薩爲禪陀迦王說法要偈一卷、 劉宋求那跋摩譯。求那跋摩、宋言功德鎧、本剎種、世王罽賓、祖父呵梨跋陀(師子賢)、以剛直被徙、父僧伽阿難(衆喜)、因隱山澤跋摩至闍婆國弘敎、後應宋聘、遂遊建康。縮刷藏經印度雜部藏帙第八冊、明藏西土雜藏部漆函。

龍樹菩薩勸誡王頌一卷、 唐釋義淨於東印度耽摩立底國譯。與前書同本、前譯七言、此五七言雜。縮刷藏經印度雜部藏帙第八冊、明藏西土雜藏部隸函。

婆藪槃豆傳一卷、 陳釋眞諦譯。縮刷藏經印度雜部藏帙第九冊、明藏西土雜藏部漆函。

佛教部第二類

漢譯三藏、其梵本猶存者數部、可得與譯文對照以審其文意、或梵本雖亡、波斯本行於錫崙、亦足以參較、至西番譯本與漢譯同原者、部帙頗多、今唯擧其著稱者。

一、可與梵本對照者、

道行般若波羅蜜經十卷、 漢支婁迦讖譯。婁迦讖、亦直云支讖、月支國人、桓靈之世、遊于洛陽、譯經二十餘部、此經爲般若部初譯、凡三十品、與大般若經第四分同、而多常啼曇無竭二菩薩事。縮刷藏經般若部月帙第六冊、明藏般若部淡函。

大明度無極經六卷、 吳支謙譯。與前經同本。縮刷藏經般若部月帙第八冊、明藏般若部潛函。

放光般若波羅蜜經三十卷、 西晉無叉羅共竺叔蘭譯。其梵本、元是潁川朱士行至于闐鈔寫得、遣弟子弗如檀(法饒)等送達洛陽、士行後卒於于闐。無叉羅、本于闐人、晉時在陳留、叔蘭、本天竺人、父達摩尸羅(法首)、避亂奔晉、生叔蘭、朱士行所送梵本、轉至陳留水南寺、衆請二人譯出、此經九十品、與大般若經第二分同本、而多常啼法上二品。縮刷藏經般若部月帙第一第二冊、明藏般若部菜重芥三函。

摩訶般若波羅蜜經二十七卷、 姚秦鳩摩羅什共僧叡譯。此亦九十品、與前經同本、而文較順暢。縮刷藏經般若部月帙第三第四冊、明藏般若部醬海鹹三函。

小品般若波羅蜜經十卷、 姚秦鳩摩羅什譯。二十九品、與道行般若經大明度經同本、縮刷藏經般若部月帙第六冊、明藏般若鱗函。

金剛般若波羅蜜經一卷、 姚秦鳩摩羅什譯。與大般若經第九能斷金剛分同、而擧世流通、釋智顗有疏、此經異譯、世傳五本、後魏菩提留支、陳眞諦、皆題曰金剛般若波羅蜜經、隋達摩笈多、題曰金剛能斷般若波羅蜜經、唐玄奘、義淨、共題曰能斷金剛般若波羅蜜多經、玄奘所譯、卽大般若經第九抄出別行者也。五本皆在縮刷藏經月帙第九冊、明藏羽翔函、此經梵本、題曰 Vajrakkhedikâ prajñâpâramitâ、瑪克斯牟勒氏、收入 Anecdota Oxoniensia, Aryan Series, 第一冊、印行、S. Beal 以英文譯之、載在王國亞細亞協會雜誌一八六四—五年第一篇。縮刷藏經般若部月帙第九冊、明藏般若部羽函。

大般若波羅蜜多經六百卷、 唐釋玄奘譯。此經十六分、初分七十九品四百卷、梵名 Sata-sahasrikâ prajñâpâramitâ, 第二分八十五品七十八卷、梵名 Pañchaviṁśati-sahasrikâ prajñâpâramitâ, 第三分三十一品五十九卷、梵名 Ashtâdaśasahasrikâ prajñâpâramitâ, 第四分二十九品十八卷、梵名 Daśasahasrikâ prajñâpâramitâ, 第五分二十四品十卷、梵名 Ashtasahasrikâ prajñâpâramitâ, 第六分十七品八卷、以上六分、佛在鷲峯說、第七曼殊室利分二卷、第八那伽室利分一卷、第九能斷金剛分一卷、以上三分、佛在給孤獨園說、第十般若理趣分一卷、佛在他化自在天王宮說、第十一布施波羅蜜多分五卷、第十二淨戒波羅蜜多分五卷、第十三安忍波羅蜜多分一卷、第十四精進波羅蜜多分一卷、以上四分、亦佛在給孤獨園說、第十五靜慮波羅蜜多分二卷、亦佛在鷲峯說、第十六般若波羅蜜多分八卷、佛在竹林白鷺池側說、第一分第二分第五分、皆有梵本、見和濟遜梵本目錄、第一分第五分、無異譯、第二分初譯、有無叉羅放光般若經、鳩摩羅什摩訶般若經、第四分、與支婁迦讖道行經、支謙大明度經、鳩摩羅什小品般若經同、此經之成、蓋在初二分之前、文辭稍簡可與初二分梵本對較、第九分、與鳩摩羅什金剛般若經等同、有梵本英譯本、已見前。縮刷藏經般若部洪荒日帙三十冊、明藏般若部天至奈六十函。

摩訶般若波羅蜜大明咒經一卷、 姚秦鳩摩羅什譯。梵本題曰 Prajñâpâramitâ-hridaya-sûtra. 見瑪克斯牟勒氏 Selected Essays 第二冊、及 Anecdota Oxoniensia 第一冊。縮刷藏經般若部月帙第九冊、明藏般若部翔函。

般若波羅蜜多心經一卷、 唐釋玄奘譯。與前經同本、文約義富、擧世流通、S. Beal 以英文譯之、載於一八六四—五年王國亞細亞協會雜誌第二章、縮刷藏經般若部月帙第九冊、明藏般若部翔函。

無量淸淨平等覺經四卷、 漢支婁迦讖譯。梵名 Amitâyusha-vyûha. 有梵本、題曰 Sukhâvatî-vyûha. 見一八八〇年王國亞細亞協會雜誌、瑪克斯牟勒氏 Selected Essays 第二冊、和濟遜梵本目錄、與漢譯對較、頗有異同。縮刷藏經方等部地帙第八冊、明藏寶積部乃函。

無量壽經二卷、 魏康僧鎧譯。與前經同、僧鎧、印度人、嘉平中、於洛陽白馬寺、譯郁伽長者所問經等三部。縮刷藏經方等部地帙第八冊、明藏寶積部乃函。

阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經二卷、 吳支謙譯。與前經同。縮刷藏經方等部地帙第八冊、明藏寶積部乃函。

大寶積經見下**第五無量壽如來會二卷、** 唐菩提流志譯。與前經同。

大乘無量壽莊嚴經三卷、 宋法賢譯。與前經同。但此經有慈氏問答尤妙、而四十八願、止說三十六、以上五本、互有小差異、較之梵本、亦無一全同者。縮刷藏經方等部地帙第八冊、明藏宋元入藏諸經部命函。

阿彌陀經一卷、 姚秦鳩摩羅什譯。其梵本 Sukhâvatî-vyûha, 存於皇國南條文雄氏以鈔本遺英國牛津大學、瑪克斯牟羅氏以英文譯之、幷梵文譯文注釋、載之一八八〇年王國亞細亞協會雜誌第十二冊、後又載其譯文注釋于 Selected Essays 第二冊、今泉山田二氏、以法文譯之、幷其原文、載之 Annales du Musée Guimes 第二冊。明治十八年、南條文雄氏撰梵文阿彌陀經音義兩譯一卷、日下痴龍秀英舍印刷。縮刷藏經方等部地帙第十二冊、明藏大乘重譯經部貞函。

稱讚淨土佛攝受經一卷、 唐釋玄奘譯。與前經同本、而有十方佛勸信。縮刷藏經方等部地帙第十二册、明藏大乘重譯經部貞函。

正法華經十卷、 西晉竺法護譯。凡二十八品、此法華經之初譯也、梵本現存、曰 Saddharma-puṇḍarîka. 有二十七品、漢譯第十二提婆達多品、於梵本則併于第十一見寶塔品爲一品、第二十一品以下、次第又少異、H. Kern 氏、譯以英文、加序說注解、瑪克斯牟羅氏收入東方聖書第十二册。縮刷藏經法華部盈帙第二册、明藏大乘重譯經部木函。

妙法蓮華經七卷、 姚秦鳩摩羅什譯。與前經同、而前經末尾囑累品、在此本則爲第二十二品。縮刷藏經法華部盈帙第一册、明藏大乘重譯經部草函。

添品妙法蓮華經八卷、 隋闍那崛多共達摩笈多譯。所用梵本有二種、一爲貝葉本、蓋竺法護所據也、一爲龜玆本、蓋鳩摩羅什所據也、此譯多用羅什文、而稍加刪補、提婆達多品、合入見寶塔品、故爲二十七品、陀羅尼品、於法護在第二十五、於羅什在第二十六、而於此譯則爲第二十一品、囑累品在末尾、與法護同、現存梵本、瑪克斯牟羅所譯品次全與此本合。縮刷藏經法華部盈帙第二册、明藏大乘重譯經部賴函。

觀世音菩薩普門品一卷、 姚秦鳩摩羅什譯長行、隋闍那崛多譯重頌。此卽妙法蓮華經第二十五品也。S. Beal 譯以英文、收入 Catena of Buddhist Scriptures from the Chinese. 明藏大乘重譯經部草函。

撰集百緣經十卷、 吳支謙譯。原名 Avadâna-śataka. 凡十品、每品十緣、故有百條、梵本現在、見和濟遜梵本目。縮刷藏經小乘經部宿帙第十册、明藏西土雜藏部承函。

摩登伽經二卷、 吳竺律炎共支謙譯。律炎、印度人、與維祇難同遊吳境。此經原名 Mataṅgasûtra 可與梵本 Divyâvadâna 參較、見和濟遜梵本目錄。縮刷藏經小乘經部宿帙第六册、明藏阿含部慶函。

舍頭諫經一卷、 西晉竺法護譯。卽前經異出。縮刷藏經小乘經部宿帙第六册、明藏阿含部敬函。

普曜經八卷、 西晉竺法護譯。原名 Lalitavistara. 與下經同本、而品有開合。縮刷藏經方等部宙帙第四册、明藏大乘重譯經部大函。

方廣大莊嚴經十二卷、 唐地婆訶羅譯。地婆訶羅、唐言日照、中印度人、此經一名神通遊戲、有梵本及西番譯本、今皆現在、印度人 Rajendralâla Mitra, 以梵本 Lalitavistara. 收入 Bibliotheca Indica, Ord Series. 印行、又見和濟遜梵本目錄、西番譯本、「有法國人 Foucaux 重譯。縮刷藏經方等部宙帙第四册、明藏大乘重譯經部四大二函。

文殊師利現寶藏經二卷、 西晉竺法護譯。原名 Ratnakâraṇḍakavyûha-sûtra. 梵本現在、見和濟遜梵本目錄。縮刷藏經方等部宇帙第十册、明藏大乘重譯經部恭函。

大方廣篋經三卷、 宋求那跋陀羅譯。卽前經異出。縮刷藏經方等部宇帙第一册、明藏大乘重譯經部恭函。

悲華經十卷、 北涼曇無讖譯。原名 Karuṇapuṇḍarîka. 有梵本、見和濟遜梵本目錄。縮刷藏經方等部宙帙第三册、明藏大乘重譯經部及函。

大乘大悲芬陀利經八卷、 失譯人名、附三秦錄、與前經同、而前經六品、此分爲三十品。縮刷藏經方等部宙帙第三册、明藏大乘重譯經部敢函。

佛所行讚五卷、 已見第一類、此經凡二十八品、原名 Buddha-Karita-kâvya. 梵本僅十七品、大抵與此經初十七品合、見和濟遜梵本目錄、S. Beal 以英文譯之 收入東方聖書第十九册。

楞伽阿跋多羅寶經四卷、 宋求那跋陀羅譯。達磨大師、指此謂可以印心、故獨流通於世、然較之下經、少初品及後二品、原名。Laṅkâvatârasûtra. 縮刷藏經方等部黃帙第六册、明藏大乘重譯經部惟函。

入楞伽經十卷、 後魏菩提留支譯。菩提留支、魏言道希、北印度人、此經十八品、較上經詳備、梵本 Laṅkâvatâra 與之稍合、見和濟遜梵本目錄。縮刷藏經方等部黃帙第六册、明藏大乘重譯經部鞠函。

大乘入楞伽經七卷、 唐實叉難陀譯。實叉難陀、唐言學喜、于闐國人、此經與上經同、而有十品、文筆順暢。縮刷藏經方等部黃帙第六册、明藏大乘重譯經部養函。

金光明經四卷、 北涼曇無讖譯。與下經同本、而譯未全。縮刷藏經方等部黃帙第九册、明藏大乘重譯經部化函。

金光明最勝王經十卷、 唐釋義淨譯。原名 Suvarṇaprabhâsottamarâja-sûtra. 梵本現在、見和濟遜梵本目錄。縮刷藏經方等部黃帙第九册、明藏大乘重譯經部場函。

孔雀王咒經二卷、 梁僧伽婆羅譯。僧伽婆羅、梁言衆鎧、亦云僧養、扶南國人、此經原名 Mahâmayûrî-vidyâ. 與次經同、而稍略。縮刷藏經祕密部成帙第七册、明藏大乘重譯經部過函。

大孔雀王經三卷、 唐釋義淨譯。與前後經同、而華梵音聲有別。縮刷藏經祕密部成帙第七册、明藏大乘重譯經部知函。

佛母大孔雀明王經三卷、 唐阿目佉跋折羅譯。阿目佉跋折羅、唐言不空金剛、或略云不空、北印度人、此經衆譯中、不空所譯最流通、有梵本、曰 Mahâmâyûrî. 見和濟遜梵本目錄、右三經之外、有東晉帛尸羅蜜多羅譯大孔雀王神咒經、同人重譯大孔雀王雜神咒經、大金色孔雀王咒經、皆經中之少分。縮刷藏經祕密部閏帙第六册、明藏重譯經部知函。

金七十論三卷、 陳波羅末陀譯。波羅末陀、陳言眞諦、或云拘羅那陀、陳言親依、西印度優禪尼國人、梁時到建康、此經舊題迦毘羅仙人造、蓋迦毘羅之意、而般尸訶述之、稱舊有六萬偈、自在黑略抄爲七十偈、卽今本是也、原名云 Sâṅkhyakârikâ-bhâshya. 自在黑所著梵本 Sâṅkhyakârikâ 現存、Colebrooke 譯以英文、又有 Gauḍapâda 所著 Bhâshya. 卽論釋也、Wilson 譯之、於牛津印行、皆可與此論參較。縮刷藏經印度雜部附外道論藏帙第十册、明藏宋元入藏諸論部疑函、

大雲請雨經一卷、 周闍那耶舍譯。闍那耶舍、周言藏稱、亦曰勝名、摩伽陀國人、隋闍那崛多譯大方等大雲請雨經、隋那連提黎耶舍譯大雲輪請雨經、唐不空金剛譯大雲輪請雨經、皆與此經同本、原名曰 Mahâmegha-sûtra. 有梵本、見和濟遜梵本目錄。縮刷藏經祕密部成帙第六册、明藏大乘重譯經部毀函。

金剛針論一卷、 印度達磨耶舍(法稱)菩薩撰趙宋釋法賢譯。此論破婆羅門四韋陀論、原名曰 Vajrasûchi. 有梵本、見和濟遜梵本目錄。縮刷藏經印度小乘論藏帙第四册、明藏宋元入藏諸論部星函、

法集名數經一卷、 趙宋釋施護譯。和濟遜梵本目錄、載梵本 Dharmasaṅgraha. 可此經參較縮刷藏經大乘宗經論部暑帙第五册、明藏宋元入藏諸經部則函、

菩薩本生鬘論九卷、 印度聖勇尊者等撰、趙宋釋慧詢紹德等譯、原名曰 Jâtakamâlâ. 有梵本、見和濟遜梵本目錄。縮刷藏經大乘宗經論部暑帙第五册、明藏宋元入藏諸論部右函。

二、可與波黎本參較者、

增壹阿含經五十一卷、 苻秦曇摩難提譯。曇摩難提、干言法喜、兜佉勒國人、秦建元末、遊于長安、後還西域、不知所終、此經原名曰 Ekottarâgama-sûtra. 有波黎本號 Aṅguttara-Nikâya. 見東方聖書第十册第二十八頁。縮刷藏經小乘經部昃帙第一二三册、明藏阿含部形至空五函。

中阿含經六十卷、 已入第一類、此經梵名曰 Madhyamâgama-sûtra. 有波黎本、號 Majjhima-Nikâya. 見東方聖書第十册第二十八頁。

長阿含經二十二卷、 已入第一類、原名曰 Dîrghâgama-sûtra 有波黎本、號 Dîgha-Nikâya. 見東方聖書第十册第二十八頁。

佛般泥洹經二卷、大般涅槃經三卷、般泥洹經二卷、 皆已入第一類、三經皆長阿含經第一分遊行經異譯、原名 Mahâparinirvâṇa-sûtra 有波黎本、號 Mahâparinibbâna-suttanta 可與此

諸經對較、見東方聖書第十一冊第三十六至九頁。

大樓炭經六卷起世經十卷、起世因本經十卷、皆已入第一類、三經皆長阿含經第四分世記經異譯。

雜阿含經五十卷、宋求那跋陀羅譯。原名 Saṁyuktâgama-sûtra. 有波黎本、號 Saṁyutta-nikâya. 見東方聖書第十冊第二十八頁。縮刷藏經小乘經部辰帙第二三四冊、明藏阿含部谷至堂五函。

轉法輪經一卷、漢安世高譯、此經出雜阿含經第五卷、原名 Dharmacakra-pravartana. 有波黎本、曰 Dhammacakka-ppavattana-sutta. 其英譯文、見東方聖書第十一冊。縮刷藏經小乘經部辰帙第六冊、明藏阿含部慶函。

三轉法輪經一卷、唐釋義淨譯、與前經同本。縮刷藏經小乘經部辰帙第六冊、明藏阿含部慶函。

法句經二卷、印度達磨多羅尊者撰、吳維祇難譯。達磨多羅、譯云法救、世友尊者母舅也。維祇難、吳云障礙、本印度人、世奉異道、以火祠爲上、後捨其所事、出家學佛、與竺律炎共至江左、譯阿差末菩薩經及此經、而二人未善方言、翻梵之際、頗有不盡、志存義本、辭近朴實、此經又名曇鉢偈、即次經中三十九品法句也、法句、梵言 Dharmapada. 波黎云 Dhammapada. 見 S. Beal 所著 Dhammapada from the Buddhist Canon. 及東方聖書第十冊 Introduction to Dhammapada. 縮刷藏經印度雜部藏帙第六冊、明藏西土雜藏部羣函。

法句譬喻經四卷、印度法救尊者撰、西晉釋法立與釋法炬譯。大抵與前經同、而有解釋、東方聖書第十冊法句序論、亦可參考。縮刷藏經印度雜部藏帙第六冊、明藏西土雜藏部亦函。

出曜經二十卷、印度法救尊者撰、姚秦竺佛念譯。譯成在符秦建元二十年、僧伽跋澄等執梵本、佛念譯傳、慧嵩筆受、大意與前經同而加詳、且次弟不同、瑪克斯牟勒氏以波黎本 Dhammapada. 譯爲英文、見東方聖書第十冊。縮刷藏經印度雜部藏帙第五第六冊、明藏西土雜藏部廣內二函、

那先比丘經三卷、失譯人名。附東晉錄。佛滅度後、有彌蘭王、與那先（Nâgasena）比丘問答、蓋與波黎本 Milinda-pañho 相同、博士 Trenckner 編刊 Pâli Miscellany 第一部、有波黎本及英譯文。縮刷藏經印度雜部藏帙第八冊、明藏西土雜藏部槃函。

佛教部第三類

支那著述之書、可以考佛教東流之狀者、悉收於此、法藏目錄類亦附焉。

東觀漢紀卷七楚王英傳云「英奉　送黃縑三十五匹白紈五匹　以贖、楚相以聞。詔書還　入贖縑紈　以助　伊蒲塞桑門之盛饌」。

後漢紀見漢部卷　明帝永平　年有

後漢書郊祀志、楚王英傳、西域傳論贊、並有佛教事。

高僧法顯傳一卷、又名佛國記。見印度部。

宋書夷蠻傳。

洛陽伽藍記五卷、東魏武定中、楊衒之撰。漢魏叢書載籍部、古今逸史分志部、津逮祕書第十集、學津討原第七集。吳若準校刊本、附集證五卷。地理類古蹟。

魏書釋老志。

弘明集十四卷、梁釋僧祐編。明刻單行本、校訂藏經護教部露帙第四冊、明藏此土著述部八縣二函。釋家類、

出三藏記集十五卷、梁釋僧祐撰。校訂藏經目錄部結帙第一冊、明藏此土著述部戶封二函。

比丘尼傳四卷、梁釋寶唱撰。述晉宋齊梁四代尼行。校訂藏經傳記部致帙第十一冊、明藏此土著述部微函。

高僧傳十三卷、附錄一卷、梁釋慧皎撰。自後漢至梁。海山仙館叢書。四朝高僧傳、校訂藏經傳記部致秩第二冊、明藏此土著述部伊尹二函。

梁書諸夷傳

歷代三寶記十五卷、隋費長房撰。校訂藏經傳記部致帙第六冊、明藏此土著述部曾桓二函。

隋衆經目錄七卷、隋釋宗經等撰。校訂藏經目錄部結帙第一冊。明藏此土著述部宗函。

隋書經籍志佛經部、

南史夷貊傳、

釋迦方志三卷、唐釋道宣撰。校訂藏經傳記部致帙第一冊、明藏此土著述部璧函。

大唐內典錄十六卷、唐釋道宣撰。校訂藏經目錄部結帙第二冊、明藏此土著述部修富二函。

集古今佛道論衡四卷、唐釋道宣撰。校訂藏經護教部路帙第七冊、明藏此土著述部璧函。

續高僧傳三十卷、唐釋道宣撰、自梁至唐貞觀中。四朝高僧傳、校訂藏經傳記部致帙第二三四冊、明藏此土著述部佐至衡四函。

廣弘明集三十卷、唐釋道宣編。明吳勉學刻本、校訂藏經護教部露帙第五第六冊、明藏此土著述部家至兵四函。釋家類。

古今譯經圖記四卷、唐釋靖邁撰。校訂藏經目錄部結帙第三冊、明藏此土著述部輕函。

法苑珠林一百卷、唐釋道世撰。校訂藏經纂集部雨帙第五至第十冊、明藏此土著述部高祿十函。清燕蔣氏刻本作一百二十卷。釋家類。

大慈恩寺三藏法師傳十卷、唐釋慧立撰。釋彥悰續。校訂藏經諸宗部法相宗陽帙第二冊、明藏此土著述部奄函。

大唐西域求法高僧傳二卷、唐釋義淨從西國還在南海室利佛逝撰。校訂藏經傳記部致帙第七冊、明藏此土著述部尹函。

南海寄歸內法傳四卷、唐釋義淨在室利佛逝撰。明治　年文學博士高楠順次郎氏用英文譯之。校訂藏經傳記部致帙第七冊、明藏此土著述部尹函。

開元釋教錄二十卷、唐釋智昇撰。校訂藏經目錄部結帙第四第五冊、明藏此土著述部車駕肥三函。釋家類。

開元釋教錄略出五卷、唐釋智昇撰。校訂藏經目錄部結帙第五冊、明藏此土著述部輕函。

續集古今佛道論衡一卷、唐釋智昇撰。校訂藏經護教部露帙第七冊、明藏此土著述部壁函。

貞元新定釋教目錄三十卷、唐釋圓照撰。校訂藏經目錄部結帙第六第七冊。

一切經音義一百卷、唐釋慧琳撰。元文二年獅子谷白蓮社刻本、校訂藏經音義部爲帙第八至第十冊。

舊唐書經籍志道家類。

宋高僧傳三十卷、宋太平興國七年、釋贊寧等奉勅撰。端拱元年告成、續唐釋道宣續高僧傳。四朝高僧傳、校訂藏經傳記部致帙第四第五冊、明藏此土著述部宅曲阜三函。釋家類。

僧史略　卷、宋釋贊寧撰。

新雕大藏校正別錄三十卷、高麗僧守其等奉敕撰。縮刷藏經目錄部結帙第九第十冊。

景德傳燈錄三十卷、宋釋道原撰。校　藏經諸宗部禪宗雲帙第五第六冊、明藏此土著述部合濟弱三函。

寛永十七年京都書坊刻本。

釋氏要覽三卷、宋天禧中釋道世撰。寛永十年中野道伴刊本惡。

僧寶傳三十二卷、宋釋慧洪撰。其第三十一卷爲補禪林僧寶傳、題曰舟峯庵僧慶老撰、蓋北宋人也、第三十二卷、爲臨濟宗旨、亦慧洪所撰。釋家類。

翻譯名義集二十卷、宋紹興十三年釋法雲撰。校訂藏經纂集部雨帙第十一冊、明藏明入藏諸集部貢新二函、清雲棲寺刊本、俱作十四卷。寛永五年刊本惡。

五燈會元二十卷、宋釋普濟撰。取釋道原景德傳燈錄、李遵勗天聖廣燈錄、釋惟白建中靖國續傳燈錄、釋道明聯燈會要、釋正受嘉泰普燈錄、撮其要旨、彙爲一編、故以五燈爲名。釋家類。

佛祖統紀五十四卷、宋釋志磐撰。政和中、釋元穎作宗元錄、慶元中、吳克己作釋門正統、嘉定間、釋景遷因克己之書、作宗源錄、嘉熙初、釋宗鑑又取釋門正統重修之、志磐以其皆未盡善、乃參取諸書、撰爲此編、校訂藏經傳記部致帙第八第九冊、明北藏缺南藏城至碣四函。釋家類存目。

文獻通考卷　經籍孝子部佛家類、

宋史藝文志

釋氏稽古略四卷、元釋覺岸撰。釋家類。

佛祖歷代通載三十六卷、元釋念常撰。校訂藏經傳記部致帙第十第十一冊、明藏明入藏諸集部畝我藝黍四函。釋家類。

元史釋老傳

神僧傳九卷、明成祖御撰。校訂藏經傳記部致帙第十一冊、明藏此土著述部城函。釋家類存目。

元史紀事本末卷三佛教之崇

明高僧傳六卷、明釋如惺撰。續釋贊寧等宋高僧傳、四朝高僧傳、明藏此土著述部○函。

明三藏聖教目錄四卷、明太祖敕刊南藏目錄也、本作三卷、萬曆中、釋密藏緇刻北藏、因紛補此錄爲四卷、明治十六年南條文雄氏、用英文譯補。校訂藏經目錄結帙第八冊。

大藏一覽十卷、明陳實原撰。釋家類存目。

閱藏知津四十四卷、目錄四卷、明釋知旭撰。清康熙三年夏之鼎原刻、四十八年朱岸登補刻。天明二年毛利高標緇刻夏本、以朱本參考。

南宋元明僧寶傳十五卷、清釋自融撰。續宋釋慧洪僧寶傳。門人性磊補輯。釋家類存目。

古今圖書集成神異典釋教部佛經部僧寺部僧部尼部等、四庫全書總目提要見載籍部子部釋家類。

論說考訂部、

論衡三十卷、漢王充撰。漢魏叢書子餘部、明刻單行本、寛永三年京都書坊刊本。四庫書目雜家類雜說之屬、

獨斷二卷、漢蔡邕撰。百川學海甲集、漢魏叢書經翼部、抱經堂彙刻書、聊城楊氏刻蔡中郎集、皇國刻本。雜家類雜考之屬。

風俗通義十卷、漢應劭撰。漢魏叢書載籍部、仿宋單行本。雜家類雜說之屬、有附錄一卷、輯姓氏篇佚文。

補風俗通姓氏篇一卷、清張澍輯。二酉堂叢書、錢大昕輯本二卷、在抱經堂彙刻書羣書拾補中。

古今注三卷、晉崔豹撰。漢魏叢書載籍部、古今逸史合志部、寛延二年京都書坊刊本。雜家類雜考之屬。

中華古今注三卷、五代馬縞撰。說郛第十二弓、古今逸史合志部、續百川學海。雜家類雜考之屬、附崔豹古今注後。

史通通釋二十卷、唐劉子玄撰、清浦起龍通釋。乾隆中梁溪浦氏刻本、江左書林石印。史評類。十駕齋養新錄卷十三有評。

封氏見聞記十卷、唐封演撰。學海類編集餘記述部、雅雨堂叢書、學津討原第十三集、指海第十九集。雜家類雜說。

資暇集三卷、唐李匡乂撰。續百川學海集、學海類編集餘考據部、墨海金壺子部。雜家類雜考。

蘇氏演義二卷、唐蘇鶚撰。藝海珠塵竹集、函海第二函、榕園叢書丙集。雜家類雜考。

夢溪筆談二十六卷、補筆談二卷、續筆談一卷、宋沈括撰。津逮祕書第十五集、學津討原第十三集、稗海第四函、止二十七卷。雜家類雜說。

靖康緗素雜記十卷、宋黃朝英撰。唐宋叢書子餘部、寶顏堂祕笈彙集、學海類編集餘考據部、墨海金壺子部、守山閣叢書子部。雜家類雜考。

能改齋漫錄十八卷、宋吳曾撰。武英殿聚珍版書、福州緇刻本、墨海金壺子部、守山閣叢書子部。

西溪叢語三卷、宋姚寛撰。津逮祕書第八集、學津討原第十二集。雜家類雜考。

六朝通鑑博議十卷、宋李燾撰。史評類。

容齋隨筆三筆四筆各十六卷、五筆十卷、合七十四卷、宋洪邁撰。通行本。雜家類雜考。

考古編十卷、宋程大昌撰。明刻單行本、函海第三函、學津討原第十二集。雜家類雜考。

野客叢書三十卷、附野老記聞一卷、宋王楙撰。唐宋叢書子餘部、稗海第九函、寶顏堂祕笈本止十二卷、刪削不完。承應二年京都書坊緇刻祕笈本。雜家類雜考。

考古質疑六卷、宋葉大慶撰。武英殿聚珍版書、杭州福州緇刻本、海山仙館叢書、享和二年重刻聚珍本。雜家類雜考。

梁溪漫志十卷、宋費衮撰。學海類編集餘記述部、知不足齋叢書第二集影宋鈔本。雜家類雜說。

老學菴筆記十卷、續筆記二卷、宋陸游撰。稗海第五函、津逮祕書第十集、學津討原第十五集、崇文書局彙刻書。雜家類雜說。

賓退錄十卷、宋趙與告撰。仿宋單刻本、學海類編集餘記述部。雜家類雜考。

困學紀聞七箋附集證二十卷、宋王應麟撰、清閻若璩全祖望程瑤田何焯錢大昕屠繼序箋、萬希槐集證。通行本。雜家類雜考之屬、閻若璩何焯校注本。

翁注困學紀聞二十卷、清翁元圻注。翁氏刻本、長沙重刻巾箱本。

敬齋古今黈八卷、元李冶撰。武英殿聚珍版書、杭州福州緇刻本、海山仙館叢書。雜家類雜說。

震澤紀聞二卷、明王鏊撰。借月山房彙鈔第十三集、指海第十五集。

震澤長語二卷、明王鏊撰。寶顏堂祕笈普集、紀錄彙編、借月山房彙鈔第十三集、指海第一集。雜家類雜考。

井觀瑣言三卷、明鄭瑗撰。唐宋叢書載籍部、寶顏堂祕笈續集、學海類編集餘記述部。雜家類雜說。

丹鉛總錄二十七卷、明楊愼撰、門人梁佐重編。楊氏敦忠堂刻本、楊愼所錄、舊有丹鉛餘錄十七卷、續錄十二卷、閏錄九卷、愼又自摘其要爲摘錄十三卷、後張士佩重刊升菴集刪併諸錄爲四十一卷、附于集後、名外集、與梁佐所編總錄並行。寶顏堂祕笈廣集、收丹鉛續錄八卷。函海第十八函、又編刻丹鉛雜錄十卷。雜家類雜考。

譚苑醍醐九卷、明楊愼撰。升菴集、函海第十三函。雜家類雜考。
正楊四卷、明陳耀文撰。雜家類雜考。
筆乘六卷、明焦竑撰。粵雅堂叢書第一集。雜家類雜說、存目。
筆叢正集三十二卷續集十六卷、明胡應麟撰。正集爲書十種、經籍會通四卷、史書佔畢六卷、九流緒論三卷、四部正譌三卷、三墳補遺二卷、二酉綴遺三卷、華陽博議二卷、莊嶽委譚二卷、玉壺遐覽四卷、雙樹幻鈔三卷、續集爲書二種、丹鉛新錄八卷、藝林學山八卷。明刻本。雜家類雜編。
史糾六卷、明朱明鎬撰。桐華館史翼八種、指海第五集。史評類。
讀書雜記二卷、明胡震亨撰。雜家類雜說、存目。
通雅五十二卷、明方以智撰。此藏軒刻本　雜家類雜考。
巵林十卷、附補遺一卷、明周嬰撰。清嘉慶二十四年蕭山陳春編刊湖海樓叢書。雜家類雜考。
日知錄集釋三十二卷、明顧炎武撰、清黃汝成箋。廣州述古堂刻本、武昌書局刻本。原刻本無集釋。雜家類雜考。
讀通鑑論三十卷、宋論十五卷、明王夫之撰。清同治間湘鄉曾氏重刊王船山遺書史類。
羣書疑辨十二卷、清萬斯同撰。刻本。
義府二卷、清黃生撰。家刻本、指海第二集。雜家類雜考。
潛邱劄記六卷、清閻若璩撰。山陽吳玉搢删定本。若璩孫閻學林原刻本未盡善。雜家類雜考。
庸言錄無卷數、清姚際恒撰。雜家類雜說、存目。
曝書亭集　卷、清朱彝尊撰。

池北偶談二十六卷、清王士禎撰。單行本、漁洋山人著述。雜家類雜說。
居易錄三十四卷、清王士禎撰。單行本、漁洋山人著述。雜家類雜說。
白田雜著八卷、清王懋竑撰。刻本。雜家類雜考。
管城碩記三十卷、清徐文靖撰。乾隆九年刻本牛皈園徐位山六種。雜家類雜考。
諸史然疑一卷、清杭世駿撰。自刊杭堇浦七種。
松崖筆記二卷、清惠棟撰。道光二年刻本。
四庫全書總目提要見載籍部　史部史評類、子部雜家類雜考

雜說之屬。

韓門綴學五卷、續編一卷、清汪師韓撰。上湖文編附刻本、叢睦汪氏遺書。
空山堂十七史論　卷、清牛運震撰。自刻本。
經史問答十卷、清全祖望撰。鮚埼亭集附刻本。
鍾山札記四卷、龍城札記四卷、清盧文弨撰。抱經堂彙刻書、式訓堂叢書第二集。
十七史商榷一百卷、清王鳴盛撰。乾隆五十二年刻本。
蛾術編一百卷、清王鳴盛撰。陸氏刻本未足。
通俗編三十八卷、清翟灝撰。無不宜齋刻本、函海第二十三函作二十五卷。
二十二史考異一百卷、清錢大昕撰。潛研堂全書史部。
三史拾遺五卷、諸史拾遺五卷、清錢大昕撰。潛研堂全書史部。史學叢書第十八册三史、第一册諸史。

十駕齋養新錄二十卷、餘錄三卷、清錢大昕撰。潛研堂全書子部抽印行單行本。
恒言錄十卷、清錢大昕撰。阮氏編刻文選樓叢書。
潛研堂文集見文藝部卷十二十三諸史答問。
二十二史劄記三十六卷、清趙翼撰。乾隆六十年刻單行本、自刊甌北全集、四川翻刻本、文久元年江戶書坊刻本。
陔餘叢考四十三卷、清趙翼撰。原刻單行本、甌北全集。
漑亭述古錄二卷、清錢塘撰。文選樓叢書、清經解卷七百十七八。
讀書脞錄七卷、清孫志祖撰。嘉慶四年刻本、清經解卷四百九十一至四、止四卷。
南江札記四卷、清邵晉涵撰。刻本。
讀書雜志六十八卷、志餘二卷、清王念孫撰。高郵王氏五種之一。
瞥記七卷、清梁玉繩撰。清白士集。
庭立紀聞四卷、清梁學昌輯。清白士集。
札樸十卷、清桂馥撰。原刻本。
曉讀書齋雜錄四卷、清洪亮吉撰。洪北江全集、集外奕氏刻本。
炳燭編四卷、清李賡芸撰。光緒三年吳縣潘祖蔭校刊滂喜齋叢書第一函。
考古錄四卷、清鍾襄撰。阮氏刻本。
文史通義八卷、清章學誠撰。原刻本、粵雅堂叢書第五集。

筠軒讀書叢錄二十四卷、台州札記十二卷、清洪頤煊撰。自刊傳經堂叢書。
癸巳類稾十五卷、清俞正燮撰。何氏刻本。
癸巳存稾十五卷、清俞正燮撰。連筠簃叢書。
史林測義三十八卷、清計大受撰。自刻本。
落颿樓文稾六卷、清沈垚撰。連筠簃叢書。
書林觶揚二卷、清方東樹撰。盱眙吳氏刻本。
古書疑義舉例七卷、清俞樾撰。春在堂全書。
開卷偶得十卷、清林春溥撰。道光二十九年自刊、其第二卷爲尙書、第四卷爲春秋、第九卷爲史部。竹柏山房十五種。
歷代史論卷、明張溥編。増補史論一編。
東塾讀書記十五卷、清陳澧撰。光緒二十四年、紐蘭書館用廣州本重刻。

類書類

皇覽一卷、魏繆襲撰、清孫馮翼輯。問經堂叢書。
藝文類聚一百卷、唐歐陽詢等撰。明仿宋小字本、明王元貞校大字本、四庫書目類書類。
北堂書鈔一百六十卷、唐虞世南撰、明陳禹謨删補。通行刻本、海嚴可均校明初寫本北堂書鈔五十五卷、未經明人竄亂、四錄堂本罕見。類書類。

初學記三十卷、唐徐堅等奉敕撰。明無錫安氏仿宋本、古香齋袖珍十種。類書類。

元和姓纂十八卷、唐林寶撰。淸嘉慶七年洪氏刻本。類書類。

白孔六帖一百卷、唐白居易撰、宋孔傳續。通行本。類書類。

古今姓氏書辨證四十卷、校勘記三卷、宋鄧名世撰。守山閣叢書子部。類書類。

太平御覽一千卷、宋李昉等奉敕撰。明隆慶中活字印本、鮑廷博校刻宋小字本、張氏刻大字本。江左書林仿鮑本。四十八圖、石印十圖類書類。

冊府元龜一千卷、宋王欽若楊億等奉敕撰。明崇禎間李嗣京刻本。類書類。

事物紀原十卷、宋高承撰。明正統間南昌簡敬刊本。類書類。

事文類聚前集六十卷、後集五十卷、續集二十八卷、別集三十二卷、新集三十六卷、外集十五卷、遺集十五卷、合二百三十六卷、前後續別四集、宋祝穆撰、新集外集、元富大用撰、遺集、元祝淵撰。類書類。

山堂考索前集六十六卷、後集六十五卷、續集五十六卷、別集二十五卷、合二百十二卷、宋章如愚撰。明正德間愼獨齋刻本。類書類。

古今合璧事類備要前集六十九卷、後集八十一卷、續集五十六卷、別集九十四卷、外集六十六卷、合三百六十六卷、宋謝維新編。明刻本。類書類。

玉海二百卷、宋王應麟撰。明正德間南京國子監刊本、修版至淸乾隆間。嘉慶十一年興縣康基田校刊于江寧藩署、版藏江寧府學、遭亂燬失、光緒十年、浙江書局重刊。原附詞學指南四卷、又附刻十三種、其目列後。詩考一卷、詩地理考六卷、漢藝文志考證十卷、通鑑地理通釋十四卷、漢制考四卷、急就篇四卷、姓氏急就篇二卷、周易鄭注一卷、王會解注一卷、踐阼篇一卷、小學紺珠十卷、六經天文篇二卷、通鑑答問五卷、類書類。

天中記五十卷、明陳耀文撰。明刻本罕見。四庫書目類書類、六十卷、卽晩年足本。

圖書編一百二十七卷、明章潢撰。類書類。

山堂肆考二百二十八卷、補遺十二卷、明彭大翼撰。類書類。

唐類函二百卷、明俞安期撰。類書類存目。

淵鑑類函四百五十卷、淸康熙四十九年敕撰、依俞安期唐類函增纂。鴻寶齋倣殿版、埽葉山房江左書林。

駢字類編二百四十卷、淸康熙五十八年敕撰、雍正四年告成。鴻寶齋倣殿版、江左書林石印、類書類。

子史精華一百六十卷、淸康熙六十年敕撰、雍正五年告成。鴻寶齋倣殿版本。

佩文韻府四百四十三卷、韻府拾遺一百十二卷、淸康熙四十三年敕撰。五十九年敕拾遺。殿本。江左書林、廣東本、江西本、石印、明治二十四年共益商社活字印本。類書類。

格致鏡原一百卷、淸陳元龍撰。原刻本、埽葉山房江西本、鴻寶齋本、六先書局石印。

古今圖書集成六彙編三十二典六千一百九部一萬卷、淸聖祖欽定、蔣廷錫等、奉勅校讐增訂、雍正三年告竣。光緒十七年上海圖書集成局重刊、江左書林石印。

古今圖書集成經籍典類書部。

四庫全書總目提要見載籍部子部類書類。

經籍纂詁、埽葉山房本、江左書林本、石印。

別號錄九卷、淸葛萬里撰。類書類。

姓氏五書、淸張澍撰。姓韻　卷、遼金元三史姓錄附西夏姓　卷、姓氏辨誤　卷、姓名尋源　卷、古今姓氏書目考證　卷、辨誤尋源二種之外未刊。

載籍部

漢藝文志考證十卷、宋王應麟撰。玉海附刻本。目錄類經籍之屬。

劉向別錄一卷、七略一卷、淸洪頤煊輯。重訂問經堂叢書。

補續漢書藝文志二卷、淸錢大昭撰。可廬著述十種、昭代叢書作一卷。

補後漢藝文志四卷、淸侯康撰。嶺南叢書第五集。

補三國藝文志四卷、淸侯康撰。嶺南叢書第五集。裴松之三國志注書引書目見二十二史劄記第六

廣弘明集第三卷、梁阮孝緒七錄序目。

隋經籍志考證十三卷、淸章宗源撰。崇文書局彙刻書。

經典釋文第一卷敘錄、於目錄之學甚要。唐陸德明撰。經典釋文三十卷、考證三十卷、淸錢塘盧文弨撰。抱經堂彙書刻書、湖北書局緐刻本、成都書局緐刻本。

舊唐書經籍志、新唐書藝文志。

太平御覽卷首引用書目。

崇文總目輯釋五卷、補遺一卷、宋王堯臣等奉敕撰、淸錢東垣等輯補。粵雅堂叢書第十五集、四庫書目目錄類經籍之屬。四庫館補輯本十二卷。

衢州本郡齋讀書志二十卷、宋晁公武撰、姚應績編。汪士鍾校刻本。四庫未收書目提要。

袁州本郡齋讀書志四卷、後志二卷、考異一卷、附志一卷、讀書志、宋晁公武撰。後志、公武撰、趙希弁重編。考異附志、希弁撰。淸海寧陳氏刻本、道光十年公武裔孫晁貽端編刊晁氏叢書。目錄類經籍之屬。

通志藝文略、校讎略、圖譜略。

史略六卷、宋高似孫撰。

子略四卷、目錄一卷、宋高似孫撰。百川學海巳集、學津討原第八集。目錄類經籍。

直齋書錄解題二十二卷、宋陳振孫撰。武英殿聚珍版書、福州緐刻本、江西緐刻本、浙江緐刻巾箱本。目錄類經籍。

文献通考經籍考。

宋史藝文志。

補遼金元三史藝文志　卷、淸倪燦撰。抱經堂彙刻書中書拾補之一。昭代叢書庚集有金門詔補遼金元藝文志一卷、與此異。

補元史藝文志四卷、淸錢大昕撰。潛研堂全書史部、又附江蘇書局重刻殿本遼金元三史後。

授經圖二十卷、明朱睦㮮撰、清黃虞稷龔翔麟校補。康熙間錢塘龔翔麟編玉玲瓏閣叢刻、惜陰軒叢書第四函。

目錄類經籍。

歷代載籍足徵錄一卷、清莊述祖撰。訓纂堂叢書。

千頃堂書目三十二卷、清黃虞稷撰。

明史藝文志。

經義考三百卷、清朱彝尊撰。揚州馬氏刻本、重刻通本。

古今僞書考一卷、清姚際恒撰。知不足齋叢書第二十三集。

續通志、清通志藝文略校讎略圖譜略、續文獻通考、清文獻通考經籍考。

四庫全書總目提要二百卷、清乾隆四十七年敕撰。武英殿刻大字本、揚州小字本、廣州小字本。

四庫全書簡明目錄二十卷、清乾隆四十九年敕撰。武英殿刻大字本、揚州小字本、廣州小字本。繙閱較便、惟提要歸存目者、簡明目錄無之、亦間有與提要不合者。

經義考補正十二卷、清翁方綱撰。翁氏蘇齋叢書、粵雅堂叢書第六集、錢東垣補經義考四十卷、續經義考二十卷、未刊。

四庫未收書目提要五卷、清阮元撰。即研經室外集、在研經室集末。

潛研堂文集第二十四至第三十二卷、群書序跋。

通志堂經解目錄一卷、清翁方綱注。翁氏蘇齋叢書、粵雅堂叢書第十五集。

十駕齋養新錄第十三第十四卷。

彙刻書目二十冊、清仁和朱氏增訂。光緒十五年上海福瀛書局刊本。

書目答問無卷數、清張之洞撰。光緒二十一年上海蜚英館石印。

彙刻書

十三經注疏、清乾隆四年、武英殿刻、每卷各附考證。同治十年廣州書局覆刻。

又、宋建本修版至明正德間、每半頁十行、世稱爲十行本、清嘉慶二十年、儀徵阮元校刻於南昌、每卷各附校勘記、阮本最於學者有益、凡有關校勘處、旁有一圈、依圈檢之、精妙全在於此、四川書坊繙刻阮本、譌謬太甚、且削去其圈、尤謬。

又、明正德間、御史李元陽刻於閩中、每半頁九行、世稱爲閩本、亦稱九行本、後其版取入南雍、萬曆間、祭酒李長春等、刻於北京國子監、世稱爲北監本、修版至清康熙間、崇禎間、常熟毛晉校刻、世稱爲汲古閣本、其版後歸東倉街席氏、清嘉慶間、蘇州書坊繙刻汲古閣本、今其版在淮南書局。以上三本、均有脫誤、分卷與武英殿本不同。

監本五經四書、明正統間、內府刻本、明刻巾箱本、版心署恕堂藏版、崇禎十四年、海虞毛晉訂正本、版心署文公祠崇道堂藏版、清康熙十六年、朱子十七世孫朱錫旂刻本、又長洲尤侗重訂本、版心署聖業堂刻本、乾隆元年武英殿刻本、又七年怡邸明善堂刻巾箱本。嘉慶間揚州鮑氏刻本、同治四年浙江書局刻本、五年金陵書局刻本、七年湖北崇文書局刻本。

二十四史、清乾隆四年、欽定此二十四部、皆爲正史、命武英殿校刻、每卷各附考證、同治元年、新會陳氏覆刻殿本、道光十七年、武英殿重修、并刻遼金元三史、附國語解、同治十三年成都書局重刻史記漢書後漢書三國志新五代史、陳本有脫誤。

又、同治間金陵江蘇淮南浙江湖北五書局合刻彙印本、金陵書局、依汲古閣本、刊自史記至周書十二史及南北史、淮南書局、依汲閣本刊隋書、每卷各附考異、浙江書局、依江都岑氏懼盈齋本刊舊唐書、依汲古閣本刊新唐書、依武英殿本刊宋史、湖北書局依武英殿本刊書五代史及明史、依汲古閣本刊新五代史、江蘇局、依道光十七年武英殿本刊遼金元三史、附清乾隆敕撰、三史國語解四十六卷、清厲鶚遼史拾遺二十四卷、清楊復吉遼史拾遺補五卷清錢大昕元史氏族表三卷、補元史藝文史四卷。

明南監本二十一史、明嘉靖間、祭酒余有丁等、取宋元舊版輳集而成、並刻史記漢書後漢書及遼金元三史、至萬曆間、祭酒馮夢禎校刻三國志、注作大字。

明北監本二十一史、明萬曆間、奉敕合刻、版式與十三經注疏同、有脫誤。

汲古閣十七史、明崇禎間常熟毛氏刻本、後其版歸蘇州席氏埽葉山房、清嘉慶間蘇州趙氏書業堂繙刻。

三通、清乾隆十二年、武英殿奉敕刊、每卷各附考證、咸豐九年、江西崇仁謝氏繙刻殿本、又廣州有活字印本、唐杜佑通典二百卷、宋鄭樵通志二百卷、元馬端臨文獻通考三百四十八卷。

續三通、清武英殿刻本、近年浙江書局重刻、續通典一百四十四卷、續通志五百二十七卷、續文獻通考二百五十二卷。

清三通、清武英殿刻本、光緒七年、浙江書局重刻、清通典一百卷、清通志二百卷、清文獻通考二百六十六卷。

四朝別史、清乾隆六十年、蘇州席氏埽葉山房刻本、宋王偁東都事略一百三十卷、明錢士升南宋書六十卷、宋葉隆禮契丹志二十七卷、宋宇文懋昭大金國志四十卷、清邵遠平元史類編四十二卷。

桐華館史翼八種、清嘉慶間桐鄉金德輿校刊、東觀漢紀二十四卷、宋熊方補後漢書年表十卷、宋錢文子補漢兵志一卷、三國志辨誤一卷、宋孫甫唐史論斷三卷、宋呂夏卿唐書直筆四卷、宋李心傳舊聞證誤四卷、明朱明鎬史糾十五卷。

通鑑全書、清同治十年、蘇州書局彙印本、宋司馬光資治通鑑二百九十四卷、元胡三省釋文辨誤十二卷、鄱陽胡克家繙元刻本、宋司馬光資治通鑑目錄三十卷、繙宋刻本、宋劉恕通鑑外紀十卷、目錄五卷、胡克家注補、清畢沅續資治通鑑二百二十卷、桐鄉馮集梧家刻本、清陳鶴明紀六十卷。

通鑑綱目全書。

紀事本末五種、清同治十二年、江西書局依明張溥論正本、繙刻通鑑宋元三種紀事本末、并刻左傳明史紀事本末、清高士奇左傳紀事本末五十三卷、宋袁樞通鑑紀事本末二百三十九卷、明馮琦陳邦瞻宋史紀事本末一百九卷、明陳邦瞻元史紀事本末二十七卷、清谷應泰明史紀事本末八十卷。

地志四書、清光緒七年金陵書局合刻本、唐李吉甫元和郡縣志四十卷、拾遺二卷、繙岱南閣本、宋樂史太平寰宇記一百九十三卷、據仁和朱氏鈔本、宋王存等元豐九域志十卷、繙桐鄉馮氏刻本、

說郛一百二十卷、續說郛四十六卷、元天台陶宗儀纂、清順治四年、姚安陶珽重編、其續編、則珽纂之、與前書合刻、順治間兩浙督學周南李際期重刊、原本一百卷、後佚其三十卷、明弘治中上海郁文博仍補爲一百卷、陶珽所刊、又增爲一百二十卷、凡一千二百餘種、是書仿宋曾慥類說之例、每書略存大概、不必求全、亦有原本久亡、而從類書之中、鈔合其文、以備一種者、採摭雖富、體例殊未盡善、然古書之不傳於今者、斷簡殘編往々而存、故考史傳者、時有採焉、至陶珽所續五百二十七種、皆明人餖飣之詞、全書尙不足觀、摘錄益無可取、今以其附刻前書、特存其目說郛入四庫書目雜家類雜纂之屬。

百川學海十二集一百六十八卷、宋古鄮山人左圭編、有錢福序、明正德間、無錫華珵重刊、所收一百種、晉人書三種、唐人書十一種、漢梁蜀後唐人書各一種、其八十二種、皆宋人書也。

續百川學海、十二集一百四種、明吳永編刊。

廣百川學海、十二集一百十九種、明馮可賓編刊、四庫書目雜家類雜纂之屬存目、十集一百三十種、云皆出於正續說郛。

古今說海一百四十二卷說選部　種說、明嘉靖中雲間陸楫編刊、清乾隆間蘇州書坊、道光間苕溪邵氏、皆有繙刻、是編輯錄前代至明小說一百三十五種略有刪節、然削其浮文、尙存始末、視說郛爲詳贍、四庫

書目雜家類雜纂之屬。

漢魏叢書、七十六種、明括蒼何鏜輯、舊目原有一百種、萬曆二十年新安程榮始刊其三十八種、而版旋燬、崇禎間、武林何允中增刊爲七十六種、清乾隆五十六年、金谿王謨、自漢唐宋叢書中、摭取十種增入、稍換其次第種刊、題曰訂正漢魏叢書沿何氏舊本、分爲四類經翼二十種、別史十六種、子餘二十二種、載籍二十八種、合八十六種、後又增爲九十四種、名廣漢魏叢書、編校不善、現在江西新刊巾箱本、盛行、卷帙雖繁不可盡据也。

古今逸史、五十五種、明新安吳琯校刊。

唐宋叢書三十二冊、八十九種、明武林鍾人傑張遂辰編刊、仿漢魏叢書之例、分爲四類、經翼七種、別史十五種、子餘十九種、載籍四十八種、所錄諸書、往々有摘鈔者、體例殊未盡善、

稗海、明會稽商維濬編刊。

津逮祕書無卷數十五集、一百三十七種、明崇禎間、常熟毛晉校刊、有海鹽胡震亨序、震亨初刻祕冊彙函、未成而燬於火、因以殘版歸晉、晉增爲此編、晉家富藏書又所與遊者、多博雅之士故較他家叢書、去取有條理、四庫書目雜家類雜編之屬存目。

鄭開陽雜著十一卷、十種、明嘉靖中鄭若曾撰、清康熙中、其五世孫起泓及子定遠重編、刊行書目見外紀部。

紀錄彙編二百十六卷、一百二十七種、明沈節甫纂、四庫書目雜家類雜編之屬存目。

明季稗史彙編、十六種、清京琉璃廠前集二七四卷、後集二十二卷、說鈴清康熙間石門吳震方編刊、嘉慶四年重刊巾箱本、二集五十三種、留雲居士攝印本、書目見明部、

學海類編無卷數、四百二十八種、經翼二十九種、史參四十種、子類四十三種、集餘三百十八種、清康熙中檇李曹溶編、門人陶越增輯、道光十一年六安晁氏聚珍版印行。

武英殿聚珍版書、一百三十八種、清乾隆三十八年至四十八年、奉敕印行、閩中向有繙刻不全、今其版猶在。江西繙刻五十四種、今其版在書局、浙江刻第一單巾箱本三十八種、江寧亦有第一單、僅八種。

抱經堂彙刻書、十九種、清乾隆間錢塘文弨校刊。

經訓堂叢書、二十三種、清乾隆間、鎭洋畢沅校刻、

文道十書、清陳景雲著、乾隆初、其子黃中編刊。

讀書齋叢書、八集四十六種、清石門顧脩編刊。

藝海珠塵六十四冊、八集一百六十五種、清乾隆間、南匯吳省蘭編刊、

知不足齋叢書二百四十冊、三十集一百九十九種每、集八冊、清乾隆四十一年至道光三年、歙縣鮑廷博校刊、版已漫漶、近爲廣州某書坊購去、修版過半、

重訂函海、四十函百五十五種、清乾隆四十七年、羅江李調元編刊光緒八年廣漢鍾登甲重刊巾箱本、道光乙酉其子朝夔補刊、爲百四十冊。

漢晉遺書鈔、清金谿王謨輯刊、前編四冊、後編八冊、刊版已燬、流傳甚尠。

佚存叢書、六帙十六種、寬政九年江戶林衡編刊、清光緒五年吳門活字版印行。

學津討原、二十集一百七十二種、清嘉慶十年、海虞張海鵬校梓子照曠閣。

墨海金壺、經部二十二種、史部二十九種、子部六十一種、集部二種合一百十四種、清嘉慶十七海虞張海鵬校梓、旋燬于火、其殘版後歸金山錢氏守山閣。

士禮居黃氏叢書、二十一種、清嘉慶間、吳縣黃丕烈校刊。

岱南閣叢書、十六種、清嘉慶間、陽湖孫星衍校刊。

平津館叢書、十二集四十二種、清嘉慶間、陽湖孫星衍校刊。

得用簃叢書、初刻十種次刻十種、滿洲榮譽校刊。

龍威祕書八十冊、十集一百六十種每集八冊、清石門馬俊良編刊。

潛研堂全書、經三種、史二十三種、子四種集三種、合三十三種、清嘉定錢大昕著、嘉慶間自刊、未盡、光緒十年湖南湘遠書局繙刻、較原版多四種。

可廬著述十種、清嘉定錢大昭著。

洪北江全集、十五種、清陽湖洪亮吉著、嘉慶間刊九種、光緒四年、武昌重刊、較初刻多六種、洪氏著書、此外尙多、

借月山房彙鈔、十六集一百三十五種、清嘉慶間、昭文張海鵬編刊、道光初、上海陳璜購得其殘版、重編並補刊若干種、更名澤古齋叢鈔、未久其版又歸金山錢氏。

守山閣叢書、經部十八種、史部二十九種、子部六十一種、集部四種、合一百十二種、此卽墨海金壺之燼餘、道光初、金山錢熙祚得其殘版、並補刊五十六種、改題今名、咸豐十年、又燬于粵寇、其墨海所刊未善者、別爲珠叢別錄。

指海、二十集一百三十七種、此亦海虞張氏所刊澤古齋叢鈔之燼餘。道光初、金山錢熙祚得其殘版、並補刊若干種、改題今名。

清經解一千四百十二卷、二百十三種、清道光間、儀徵阮元編刊、版藏廣東學海堂、咸豐七年兵亂殘闕、十一年善化勞崇光補刊。

嶺南叢書、六集五十九種、清道光十一年南海伍元薇編刊。

別下齋叢書、初集二十五種、清道光十七年海寧蔣光煦編刊、咸豐六年重編本二十八種、並編刊涉聞梓舊。

勝朝遺事、初編三十二種、二編十八種、合五十種、清道光二十二年南海吳彌光輯刊、初編六卷、二編八卷。

昭代叢書合刻五百卷、清康熙間、歙縣張潮編甲乙丙三集、而刻本無丙集、乾隆四十一年、震澤楊復吉輯新續廣埤別五編、未刻、至道光十三年、吳江沈楙悳取楊本、易爲丁戊己庚辛五集、與張本合刻、二十四年、續輯壬癸二集、凡十集、集各五十卷、每卷一種、仍張例也、八集刻竣、因嘉興沈維鐈言、刪去六十種、別補如數、四庫書目雜家類雜編之屬存目、止集。

惜陰軒叢書、十六函三十六種、合五十種、清道光二十二年南海吳彌光輯刊、初編六卷、二編八卷。

海山仙館叢書、五十六種、清道光間番禺潘仕成編刊。

粵雅堂叢書、二十集一百二十種、清道光間、南海伍崇曜編刊。

三長物齋叢書二百五十九卷附刻八卷、二十五種、清道光間、長沙黃本驥編刊、其所收、多本驥著書。

連筠簃叢書、十三種、清道光間、靈石楊尙文校刊、今其版在京師。

二酉堂叢書、三十六種、清道光間、武威張澍輯刊。

琳琅祕室叢書、五集三十六種、清咸豐三年、仁和胡珽編校、用活字版印行。

梅瑞軒十種古逸書、清道光間高郵茆泮林輯、玉函山房輯佚書第六百三十二種。

竹柏山房十五種、清閩中林春溥著、咸豐五年彙印。

粵雅堂叢書續集、五十種、清咸豐十年、南海伍氏編刊。

李申耆五種、清同治五年合肥李氏刻本、李兆洛歷代地理志韻編今釋二十卷、同氏清輿地韻編二卷、同氏門人六承嚴如歷代地理沿革圖一卷、六承嚴如清輿地圖一卷、李兆洛歷代紀元編三卷。

古經解彙函、二十三種、清同治十年鍾謙鈞編刻。

崇文書局彙刻書、三十三種、淸光緒三年湖北刊本。

式訓堂叢書、二集二十四種、淸光緒六年十二年、會稽章氏編刊。

榕園叢書、三集五十九種、淸光緒九年、儀徵丙炎編刊。

後知不足齋叢書六十四册、四函二十五種、淸光緒十年常熟鮑廷爵編刊。

邵武徐氏叢書初刻。

槐廬叢書、五編五十六種、淸光緒十三年、吳縣朱記榮編刊。

訓纂堂叢書、五種、淸光緒間、貴筑楊氏編刊。

淸經解續編一千四百三十卷、淸光緒十四年、江蘇學政王先謙編刊、二百九種三百二十册。

校訂大藏經四十帙、四百十八册、一千九百十六部、八千五百三十四卷、明治十三年、弘敎書院取高麗本宋本元本明本四藏、對校審訂、以活字版縮刷、十八年告成。

通志堂經解、易三十九種、書十九種、詩十一種、春秋三十三種、三禮十二種、孝經四種、論語二種、孟子三種、四書八種、總經解七種、合一百三十八種、淸康熙間、崑山徐乾學校、納蘭成德刊、後其版在江寧藩署、同治十年廣州補刻。

文字部

爾雅註疏十卷、晉郭璞注、宋邢昺疏。淸武英殿刻十三經注疏、廣州書局覆刻殿本、阮元刻本。四庫書目小學類訓詁之屬。

爾雅漢注三卷、淸臧庸輯。問經堂叢書、以槐廬叢書三編。

爾雅古義十二卷、淸黃奭輯。黃奭刻漢學堂叢書、榕園叢書甲集。

爾雅補郭二卷、淸翟灝撰。自刻本、咫進齋叢書第三集。

爾雅釋義十卷、釋地以下四篇注四卷。淸錢坫撰。錢氏四種。

爾雅正義二十卷、淸邵晉涵撰。原刻重刻通行本、淸經解第五百四至二十三卷。

爾雅義疏二十卷、淸郝懿行撰。其孫郝聯薇校刻足本。沔陽陸氏刻本、淸經解第一千二百五十七至七十六卷、皆不足。

倉頡篇三卷、淸孫星衍輯。岱南閣叢書。

急就篇四卷、漢史游撰、唐顏師古注、宋王應麟補注。或稱急就章、故其字謂之章草。玉海附刻本、津逮祕書第三集、學津討原第四集。小學類字書。

急就章考異一卷、淸孫星衍撰。岱南閣巾箱本叢書、小學類彙函。

說文解字十五卷、漢許愼撰、宋徐鉉校補附字。孫氏平津館叢書丁集小字本、小學彙函重刻孫本、毛氏汲古閣五次剜改大字本、朱校大字本卽毛本、藤花榭額氏刻中字本、廣州新刻、陳昌治編錄一篆一行本。孫本最善、陳本最便。小學類字書。

說文繫傳四十卷、附校勘記三卷、南唐徐鍇撰、淸苗夔校。壽陽祁刻本、歸安姚氏繙祁本、小學彙函重刻祁本。汪憲校本馬本不善。小學類字書。

說文解字篆韻譜五卷、南唐徐鍇撰。蘇州馮氏刻本、小學彙函。函海本不善。小學類字書。

說文解字段氏注三十卷、六書音韻表二卷、淸段玉裁撰。原刻本、蘇州重刻本、淸經解第六百四十一至六十卷。武昌書局刻本附段氏汲古閣說文訂一卷。

汲古閣說文訂一卷、淸段玉裁撰。袁廷檮刻本、咫進齋叢書第三集武昌書局附刻段注說文後。

說文校議三十卷、淸姚文田嚴可均同撰。原刻本、歸安姚氏咫進齋重刻本、李氏半畝園叢書。

說文通檢十四卷、淸　撰。同治十二年廣州新刻本、附說文後。

說文段注訂八卷、淸鈕樹玉撰。原刻本、武昌書局刻本。

說文新附考六卷、續考一卷、淸鈕樹玉撰。原刻本、武昌書局刻本、益雅堂叢書。

說文釋例二十卷、說文句讀三十卷、說文繫傳校錄三十卷、淸王筠撰。自刻本。

說文新附考六卷、淸鄭珍撰。咫進齋叢書第六集、益雅堂叢書。

漢石經、漢熹平四年刻、殘字六百七十五字、淸大興翁方綱重摹南昌府學石本、紹興府學再摹石本。錄此以見漢刻體勢、若遺文、則隸釋續爲詳。

唐石經、唐開成二年刻、乾符中修改、後梁補刻、明王堯惠補缺、十三經無孟子、明人補刻。西安府學石本。漢唐蜀石經、亦詳王昶金石萃編中。

汗簡三卷、目錄叙略一卷、宋郭忠恕撰。汪啓淑刻本、汪立名一隅草堂。此書多沿誤、鄭珍汗簡箋正七卷極精、未刊。小學類字書。

薛氏鐘鼎款識二十卷、宋薛尙功撰。淸嘉慶二年儀徵阮氏刻本。小學類字書。

復古編二卷、宋張有撰。張氏刻本。小學類字書。

隸釋二十七卷、隸續二十一卷、宋洪适撰。淸乾隆四十三年汪氏刻本、江寧洪氏刻本附正誤、又曹寅揚州詩局單刻隸續。目錄類金石。

隸韻十卷、考證二卷、碑目考證一卷、宋劉球撰、淸翁方綱考證。嘉慶二十三年江都秦恩復石研齋刊書八種之一。四庫未收書目提要。

漢隸字原六卷、宋婁機撰。毛氏汲古閣刻本。小學類字書。

葉裏

隸辨八卷、淸顧藹吉撰。通行本。小學類字書。

書畫篆刻部

古畫品錄一卷、南齊謝赫撰。津逮祕書第七集。四庫書目藝術類書畫之屬。

書品一卷、梁庾肩吾撰。漢魏叢書載籍部。又唐張彥遠法書要錄第　卷已收此書。

續畫品一卷、陳姚最撰。津逮祕書第七集。

貞觀公私畫史一卷、唐裴孝源撰。續百川學海、唐宋叢書載籍部。

書譜一卷、唐孫過庭撰。百川學海辛集、安氏石刻附釋文、寬政二年京都書坊。

書斷三卷、唐張懷瓘撰。此書收入法、與宋姜夔續書合刻。

法書要錄十卷、唐張彥遠撰。津逮祕書第六集、學津討原第十一集。

歷代名畫記十卷、唐張彥遠撰。自上古至唐會昌中。津逮祕書第七集、學津討原第十一集。

圖畫見聞志六卷、宋郭若虛撰。自唐會昌中至宋熙寧中。津逮祕書第七集、學津討原第十一集。

墨池編二十卷、宋朱長文撰。明靑州李氏刻本、淸雍正元年長文裔孫朱之勵刻本。

廣川書跋十卷、宋董逌撰。汲古閣刻本、津逮祕書第六集、槐廬叢書四編。

畫繼十卷、宋鄧椿撰。自宋熙寧中至乾道中。津逮祕書第七集、學津討原第十一集。

翰墨志一卷、宋高宗御撰。百川學海辛集。

續書譜一卷、宋姜夔撰。百川學海辛集、寛政二年京都書坊、與孫過庭書譜合刻。

法帖譜系二卷、宋曹士勉撰。百川學海、青照堂。目錄金石之屬。

法書考八卷、元盛熙明撰。其字源一門、所列梵書、頗足資考證、葢熙明色目人、能通六國書也。

圖繪寶鑑六卷、續編一卷、元夏文彥撰。自上古至元明韓昂續、自明初至嘉靖間。津逮祕書第七集、榕園祕書丙集。

書史會要九卷、補遺一卷、續編一卷、明陶宗儀撰、朱謀垔續、三續百川學海。

佩文齋書畫譜一百卷、淸康熙四十七年敕撰。內府本。藝術類書畫。

淳化閣帖考正十二卷、淸王澍撰。乾隆三十三年刻本。目錄類金石。

虛舟題跋十卷、補原三卷、淸王澍撰。乾隆間刻本、海山仙館叢書本止四卷。四庫書目目錄類金石之屬、竹雲題跋四卷。

續三十五擧一卷、淸桂馥撰。乾隆十四年重定自刻本、借月山房彙鈔第十二集、指海第十七集、海山仙館叢書、昭代叢書己集、繆篆分韻五卷、淸桂馥撰、自刻本。

校正淳化閣帖釋文十卷、淸乾隆三十四年金簡奉敕編錄。武英殿聚珍版書福州繙刻本。目錄類金石。

讀畫錄四卷、淸周亮工撰。自明末至淸初。自刻本、海山仙館叢書。四庫書目全書簡明錄藝術類書畫之屬。

蘇齋題跋二卷、淸翁方綱撰。涉閱梓舊、此書於書眞蹟多所考訂。

畫徵錄三卷、續錄二卷、淸張庚撰。自淸初至乾隆初。通行本。名畫記以下六種畫史、皆考證歷代畫家、大略相續而成。近人有畫史彙傳、自上古至道光人數不少、與證無多。

法帖題跋三卷、淸姚鼐撰。自刊惜抱軒十種、同治間武昌重刊本。

南薰殿圖象考一卷、淸胡敬撰。自刻四種之一。

金石古器部

漢石經、漢熹平四年刻、殘字六百七十五字、淸大興翁方綱重摹南昌府學石本、紹興府學再摹石本、錄此以見漢刻體勢、若遺文、則隸釋隸續爲詳。

唐石經、唐開成二年刻、乾符中修改、後梁補刻。明王堯惠補缺、十三經無孟子、明人增刻、西安府學石本。漢唐蜀石經、詳王昶金石萃編中。

古今刀劒錄一卷、梁陶弘景撰。百川學海壬集。漢魏叢書載籍部、龍威祕書第一集、指海第十三集。譜錄器物之屬。

文房四譜五卷、宋蘇易簡撰。學海類編藝能部。譜錄器物。

集古錄跋尾十卷、目錄五卷、宋歐陽修撰。集古錄目、其子棐編。三長物齋叢書。歐陽文忠公全集無目錄。

金石錄三十卷、宋趙明誠撰。淸德州盧見曾雅雨堂別行本。又三長物齋叢書本、凡歐陽集古錄所有者、旁加疊圍、便於檢核。目錄類金石。

東觀餘論三卷、宋黃伯思撰、其子訒編。有法帖刊誤、古器說及論辨題跋、其精博勝集古錄多矣。明項氏萬卷樓仿宋刻本、津逮祕書第六集、學津討原第十三集。雜家類雜考。

考古圖十卷、續考古圖五卷、釋文一卷、考古圖及釋文、宋呂大臨撰。續圖蓋南宋人所作、而佚其名。通行本、明萬曆中石林吳萬化、以考古圖十卷與宣和博古圖及元朱德潤古玉圖二卷合刊、淸乾隆中亦政堂重刊、題曰三古圖。譜錄類器物。

嘯堂集古錄二卷、宋王俅撰。明刻本、譜錄類器物。

宣和博古圖三十卷、宋大觀中王黼等奉敕撰、其稱宣和者、徽宗未改號宣和以前、先有宣和殿也。明萬曆中吳萬化刻本、淸亦政堂三古圖。譜錄類器物。

古玉圖譜三十二卷、舊題宋乾道元年龍大淵等奉敕撰、葢依託也。淸余文儀重刻本。四庫書目譜錄類器物之屬存目一百卷、

古玉圖三卷、元朱德潤撰。得月簃叢書初刻。

薛氏鐘鼎款識二十卷、宋薛尙功撰。淸嘉慶二年儀徵阮氏刻本。小學類字書。

隸釋二十七卷、隸續二十一卷、宋洪适撰。乾隆四十三年江氏刻本、江甯洪氏刻本、附正誤、又曹寅揚州詩局單刻隸續二十一卷金石。

隸韻十卷、考證二卷、碑目考證一卷、宋劉球撰、淸翁方綱考證。嘉慶二十三年江都秦恩復石研齋刊書八種之一。四庫未收書目提要。

漢隸字源六卷、宋婁機撰。汲古閣刻本、小學類字書。

洞天淸錄一卷、宋趙希鵠撰。所論皆鑑別古器之事。曹溶續藝圃搜奇、讀畫齋叢書丁集、海山仙館叢書、唐宋叢書所載蓋贋本也、文化七年江戶官刻本有鮑氏跋、再閱、雜品之屬。

寶刻叢編二十卷、宋陳思撰。大興翁氏刻本。目錄類金石。

輿地碑記目四卷、宋王象之撰。粵雅堂叢書續集。目錄類金石。

寶刻類編八卷、南宋人撰。劉喜海刻本、粵雅堂叢書續集。目錄類金石。

雲煙過眼錄四卷、續錄一卷、宋周密撰。就所見書畫古器評其優劣、其續錄則湯允謨所作也。

唐宋叢書載籍部、寶顏堂祕笈、廣百川學海、學津討原第十五集。藝術類篆刻之屬。

古刻叢鈔一卷、明陶宗儀撰。平津館叢書己集、知不足齋叢書第二十六集。目錄類金石。

格古要論三卷、明曹昭撰。

金石文字記六卷、淸顧炎武撰。亭林遺書、借月山房彙鈔第三集、指海第十二集。目錄類金石。

石經考一卷、淸顧炎武撰。亭林遺書借月山房彙鈔第三集指海第一集、金石、

石經考一卷、淸萬斯同撰。乾隆間長洲蔣光弼校刊省吾堂四種之一、昭代叢書丙集作漢魏石經考唐宋石經考各一卷。金石。

繆篆分韻五卷、淸桂馥撰。自刻本、

續三十五擧一卷、淸桂馥撰。乾隆十四重定自刻本、借月山房彙鈔第十二集、指海第十七集、海山仙館叢書、昭代叢書已集、

西淸古鑑四十卷、淸乾隆十四年敕撰。武英殿本。譜錄類器物。

錢錄十六卷、淸乾隆十五年敕撰。武英殿本。嚴可均古今錢圖三十卷、淸倜列代錢幣圖考二十卷未刊。譜錄類器

物。

續通志、清通志六書略金石略、

隸辨八卷、清顧藹吉撰。小學類字書。通行本。

金石經眼錄一卷、清褚峻摹圖、牛運震補說。即金石圖上卷。金石。原刻本、

石經考異二卷、清杭世駿撰。杭董浦七種、金石。自刊

韻石齋筆談二卷、清姜紹書撰。知不足齋叢書第一集。

漢石經殘字考一卷、清翁方綱撰。後知不足齋叢書第二函。復初齋集、

兩漢金石記二十二卷、清翁方綱撰。翁氏蘇齋叢書。

金石萃編一百六十卷、清王昶撰。有嘉慶十年自序、原刻本、第一至第三卷三代、第四卷秦、第五至第二十二卷漢、第二十三四卷魏吳、第二十五卷晉、第二十六卷梁、第二十七至第三十二卷後魏、第三十三四五卷北齊、第三十六七卷周、第三十八九四十卷隋、第四十一至第百十八卷唐、第百十九至第百二十二卷五代、第百二十三至第百五十二卷宋、第百五十三遼、第百五十四至九卷金、第百六十卷南詔大理。

蜀石經殘字一卷、清王昶撰。摹刻版本。廣州學海堂校經義叢鈔內。

潛研堂金石跋尾二十五卷、清錢大昕撰。潛研堂全書史部。

十駕齋養新第十五卷、

金石索十二卷、清馮雲鵬撰。道光元年刻本。

魏三體石經殘字考一卷、清孫星衍撰。平津館叢書甲集。

寰宇訪碑錄十二卷、清孫星衍、邢澍撰。平津館叢書丙集。

積古齋鐘鼎彝器款識十卷、清阮元撰。嘉慶九年阮氏刻本、後知不足齋叢書第三函、清經解第一千五十七八卷、宋摹篆文。

唐石經考文十卷、清嚴可均撰。自刊鐵橋四種、四錄堂類集。

平津館讀碑記十二卷、清洪頤煊撰。自刊傳經堂叢書、槐廬叢書二編。

筠清館金文　卷、清吳榮光撰。自刻本。

石經補考十二卷、清馮登府撰。自刊石經閣叢書、清經解第一千四百一至六卷、石經考異、止六卷。

金石綜例四卷、清馮登府撰。自刊石經閣叢書、與園全集、槐廬叢書五編。

金石錄補二十七卷、續跋七卷、清葉奕苞撰。別下齋叢書初集、涉聞梓舊、槐廬叢書。

寰宇訪碑錄補十二卷、清趙之謙撰。自刻本。槐廬叢書三編。沈樹鏞校本六卷。

魏六朝唐代金石例四卷、清吳鎬撰。道光二十九年海虞顧氏玲瓏山館叢刻、後知不足齋叢書第三函。

漢魏六朝墓銘纂例四卷、清李富孫撰。別下齋叢書、槐廬叢書三編。

金石三例、長洲王芑孫評本。光緒四年讀有用書齋刊。

金石例十卷、元潘昂霄撰。墓銘舉例四卷、明王行撰。

金石要例一卷、清黃宗羲撰。

財政部

史記平準書、漢書食貨志、晉書食貨志、

補宋書食貨志一卷、清郝懿行撰、郝蘭皋著述。

魏書食貨志、隋書食貨志。

通典食貨部。

舊唐書、新唐書、舊五代志食貨志。

通志食貨略。

文献通考田賦錢幣戶口職役征榷市糴土貢國用考。

宋遼金元四史食貨志。

錢通三十二卷、明胡我琨撰。政書類邦計之屬。

日知錄第十至第十二卷。

明志食貨志。

續通典清通典食貨部、續通志清通志食貨略、續文献通考清文献通考田賦錢幣戶口職役征榷市糴土貢國用考。

兵制部

司馬法三卷、附逸文、指海、又清邢澍輯注浙江刻本、又張澍輯二酉堂叢書一卷。

漢書刑法志。

補漢兵志一卷、宋錢文子撰。知不足齋叢書第五集、栩華館史翼八種。政書類軍政。

補晉兵志一卷、清錢儀吉撰。衎石齋記事初藁、訓纂堂叢書。

通典兵部、

新唐書兵志、

歷代兵制八卷、宋陳傅良撰。墨海金壺史部、守山閣叢書史部、咸豐初江夏童和豫瓶華書屋所刊書之一。政書類軍政。

文献通考兵考、

宋史兵志、遼史營衛志兵衛志、金史兵志、

元史兵志、

馬政記十二卷、明楊時喬撰。政書類軍政。

武備志、

明史兵志、

續通典兵部、續文献通考兵考。

八旗通志初集二百五十卷、清雍正五年敕撰、乾隆四年告成。志七十四卷、表五十四卷、列傳一百二十二卷。政書類軍政。

清通典兵部、清文献通考兵考。

刑法部

漢書刑法志、晉書刑法志。
補宋書刑法志一卷、清郝懿行撰、郝蘭臯著述。
魏書刑罰志、隋書刑法志、
唐律疏議三十卷、唐長孫無忌等奉敕撰、元柳贇校刊。岱南閣叢書仿元刻本。政書類法令。
通典刑法部、
舊唐書刑法志、舊五代史刑法志、
通志刑法略、文獻通考刑考、
宋史刑法志、遼史刑法志、金史刑法志、
永徽法經三十卷、元鄭汝翼撰。政書類法令之屬存目。
至正條格二十三卷、元至正五年阿魯圖等奉敕撰。政書類法令之屬存目。
元史刑法志、
明律三十卷、明洪武七年劉惟謙等奉敕撰。明刻本、享保七年繙刻本。政書類法令之屬存目。
明史刑法志、
續通典刑法部、續通志刑法略、續文獻通考刑考、
清律例四十七卷、清乾隆五年三泰等奉敕撰。政書類法令。道元三年山陰姚潤纂修新增律例統纂集成四十卷。
清通典刑法部、清通志刑法略、清文獻通考刑考。

制度部

史記禮書、漢書禮樂志。
漢官舊儀一卷、補遺一卷、漢衛宏撰。武英殿聚珍版書別刻本、江西繙刻本、浙江繙刻本巾箱本、榕園叢書乙集。政書類典禮。
漢官六種、清孫星衍輯。平津館叢書田集。漢官一卷、胡廣漢官解詁一卷、衛宏漢舊儀二卷、附孫星衍補遺二卷、應劭漢官儀二卷、蔡質漢官典職儀式一卷、丁孚漢儀一卷。
後漢書禮儀志、百官志、輿服志。
西漢會要七十卷、宋徐天麟撰。武英殿聚珍版書、福州繙刻本、江瀚校胡森刻本、蘇州活字版本。政書類通制。
東漢會要四十卷、撰者諸本皆同上、寶慶二年進。政書類通制。
漢制考四卷、宋王應麟撰。玉海附刻本、津逮祕書第三集、學津討原第八集、政書類通制。
後漢郡國令長考一卷、清錢大昭刻。
三國職官表三卷、清洪飴孫撰。道光元年李兆洛與梁疆城志合刻。
三國會要　卷、清錢儀吉撰。未刻。序例一卷在衎石齋記事初藳中。
晉書禮志職官志輿服志、晉書見晉部

宋書禮志百官志、齊書禮志百官志輿服志、魏書禮志官氏志、隋書禮儀志百官志、四書見南北朝部、
唐六典三十卷、唐玄宗御撰、李吉甫等奉敕注。明刻本、天保七年江戶書坊繙刻本。職官類制。
通典二百卷、唐杜佑撰。明刻本、武英殿三通合刻本、崇仁謝氏繙刻殿本、廣州活字印刻。政書類通制。
刊誤二卷、唐李涪撰。學津討原第十二集、青照堂本、榕園叢書丙集。雜家類雜考。
舊唐書禮儀志職官志輿服志。見唐部、
唐會要一百卷、宋王溥撰。武英殿聚珍版書、福州繙刻本。政書類通制。
新唐書禮樂志儀衛志車服志選擧志百官志、見唐部。
五代會要三十卷、宋王溥撰。武英殿聚珍版書、福州繙刻本、墨海金壺史部。政書類通制。
舊五代史禮志選擧志職官志、見五代部。
謚法四卷、宋蘇洵撰。墨海金壺、錢熙祚刻珠叢別錄。政書類典禮。
麟臺故事五卷、宋程俱撰。紹興元年奏上。武英殿聚珍版書、杭州福州繙刻本、榕園叢書乙集。職官類官制。
翰苑群書二卷、宋洪遵撰。有乾道九年自跋。知不足齋叢書第十三集。職官類官制。
宋朝事實二十卷、宋李攸撰。武英殿聚珍版書、福州繙刻本、江西繙刻本、墨海金壺史部。政書類通制。
通志禮略謚略器服略職官略選擧略、見通史部。
通志略二十卷、宋鄭樵撰。明刻本、金壇于氏金匱山房重刻本、此本止刻其二十略、非刪節也、讀通志者、以此爲便與他刪本不同。

愧郯錄十五卷、宋岳珂撰。學海類編事功部、知不足齋叢書第六集、雜說。
朝野類要五卷、宋趙昇撰。武英殿聚珍版書、知不足齋叢書第十三集、榕園叢書丙集。雜家類雜考。
文獻通考三百四十八卷、元馬端臨撰。明刻本、武英殿三通合刻本、崇仁謝氏繙刻殿本、廣州活字印本。政書類通制。
宋史禮志儀衛志輿服志選擧志職官志、見宋部。
宋會要一百卷、清徐松輯。未刊。
遼史百官志禮志儀衛志、金史禮志儀衛志輿服志選擧志百官志、見遼金部。
元史禮樂志輿服志選擧志百官志、見元部。
明集禮五十三卷、明洪武三年徐一夔等奉敕撰、正德四年李東陽等重校。政書類典禮。
明會典一百八十卷、明弘治十年徐溥等奉敕撰。原刻本。政類書通制。
科場條貫一卷、明陸深撰。其子楫編刊儼山外集。紀錄彙編。政書類典禮之屬存目。
翰林記二十卷、明黃佐撰。嶺南叢書第一集。職官類官制之屬。
觚不觚錄一卷、明王世貞撰。勝朝遺事二編、借月山房彙鈔第十四集、指海第九集。小說家類雜事。
日知錄第八第九卷、第十四至第十七卷、
明史禮志儀衛志輿服志選擧志職官志、見明部。
明內廷規制考三卷、淸人撰。借月山房彙鈔第十集。
續通典一百四十四卷、清乾隆三十二年敕撰。武英殿續三通合刻本、浙江書局重刻本。政書類通

制。

續通志禮略諡略器服略職官略選擧略　見通史部。

續文献通考二百五十二卷、　清乾隆十二年敕撰。三十七年告成。武英殿續三通合刻本、浙江書局重刻本、政書類通制。

清會典一百卷、會典則例一百八十卷、

清通典一百卷、　清乾隆三十二年敕撰。以下三書武英殿淸三通合刻本、浙江書局重刻本。政書類通制。

清通志二百卷、　清乾隆三十二年敕撰。政書類通制。

清文献通考二百六十六卷、　清乾隆十二年敕撰、三十七年告成。政書類通制。

南臺舊聞十六卷、　清黄叔璥撰。刻本。職官類官制之屬存目。

清會典圖說事例一千一百三十二卷、　清嘉慶二十三年第四次敕撰。武英殿刻禮部印行。康熙三十三年本、雍正五年本、皆止會典一百卷、乾隆二十九年本、會典一百卷、會典則例一百八十卷。坊行巾箱本、單刻會典一百卷、政書類通制。

清通禮五十四卷、　清道光四年敕重修。武英殿本、貴陽重刻官本。政書類典禮之屬。乾隆二十一年五十卷。

清禮器圖式二十八卷、　清乾隆二十四年敕撰、三十一年重修。武英殿本。政書類典禮。

歷代職官表六十三卷、　清乾隆四十五年敕撰。武英殿本、三長物齋叢書作六卷、即黄本驥節約之本也、職官類官制。

十駕齋養新錄第十卷、

內閣小識一卷、附內閣故事、　清葉鳳毛撰。指海。

讀禮通考一百二十卷、　清徐乾學撰。原刻通行本。禮類儀禮之屬附錄。

典禮部

儀禮注疏十七卷、　漢鄭玄注、唐賈公彥疏。殿本十三經注疏、廣州書局覆刻本、阮元校刻本、蘇州汪氏校刻影宋景德本儀禮疏五十卷。四庫書目禮類儀禮之屬。

儀禮義疏四十八卷、　清乾隆十三年敕撰。三禮義疏之第二部也。武英殿本、江西浙江湖北各書局緒刻本。禮類儀禮之屬。

儀禮鄭注句讀十七卷、附監本、正誤一卷、石經正誤一卷、　清張爾岐撰。通行本、禮類儀禮。

儀禮釋宮增注一卷、　宋左如圭撰。朱子大全集誤編錄之、世遂以爲朱熹作。清江永增注。指海第三集。禮類儀禮。

儀禮圖六卷、　清張惠言撰。阮刻單行本、湖北書局縮刻本。宋楊復有儀禮圖十七卷、收入通志堂經解、大遜此書。

禮記注疏六十三卷、　漢鄭玄注、唐孔穎達等正義。殿本十三經注疏、廣州書局覆刻本、阮元校刻本、和氏刻惠棟校本。禮類禮記。

禮記集說一百六十卷、　宋衛湜撰。通志堂經解三禮部。禮類禮記。

禮記義疏八十二卷、　清乾隆十三年敕撰、三禮義疏之第三部也。武英殿本、江西浙江湖北各書局緒刻本。禮類禮記。

公羊逸禮考徵一卷、　清陳奐撰、滂喜齋叢書。槐廬叢書初編。

七國考見上古部卷　羣禮喪制

墨子

荀子禮論篇。

史記禮書封禪書。

漢書禮樂志郊祀志。

白虎通義四卷、　漢班固撰。抱經堂彙刻書、武英殿聚珍版書、福州刻本。雜家類雜考。

漢官舊儀一卷、補遺一卷、　漢衛宏撰、清四庫館補遺。武英殿聚珍版書別刻本、江西緒刻本、浙江緒刻巾箱本、榕園叢書乙集。政書類典禮。

後漢書禮儀志。

晉書禮志。

宋書禮志、齋書禮志、魏書禮志、隋書禮儀志。

唐開元禮一百五十卷、　唐蕭嵩等奉敕撰。政書類典禮。

通典見制度部禮部。

舊唐書禮儀志。

舊五代史禮志。

新唐書禮樂志。

諡法四卷。

禮書一百五十卷、　宋陳祥道撰。禮類通禮。

政和五禮新儀二百二十卷、　宋鄭居中等奉敕撰。傳鈔本。政書類典禮。

通志見通史部、禮略諡略。

儀禮經傳通解三十七卷、續二十九卷、　宋朱熹撰、黄幹楊復續、禮類通禮。

文献通考見制度部、郊社考宗廟考王禮考、

宋史禮志。

遼史禮志。

金集禮四十卷、　金明昌六年張暐等奉進。傳鈔本、政書類典禮。

金史禮志。

廟學典禮六卷、　元人撰。政書類典禮之屬。

元史禮樂志。

明集禮五十三卷、　明洪武三年徐一夔等奉敕撰。正德四年李東陽等重校。明刻本　政書類典禮。

明會典見制度部、

明宮史五卷、　明呂毖撰。學津討原第八集。政書類典禮。

日知錄見論說考訂部、卷五卷十四卷十五。

明史禮志。

明內廷規制考三卷、　清人撰。借月山房彙鈔第十集。

古今圖書集成禮儀典。

續通典見制度部、禮部。

續通志見通史部、禮略諡略。

續文献通考見制度部、郊社考宗廟考王禮考。

清通禮五十四卷、清乾隆元年敕撰、二十一年告成、道光四年敕重修。武英殿刻本、貴陽重刻官本。四庫書目政書類典禮之屬、乾隆本五十卷。

清禮器圖式二十八卷、清乾隆二十四年敕撰、三十一年重修。武英殿刻本。政書類典禮。

清通典見制度部禮略諡略。

清文献通考見制度部郊社考宗廟考羣廟考王禮考。

清宮史三十六卷、清乾隆七年敕撰、二十四年重修。政書類典禮。

滿洲祭神祭天典禮六卷、清乾隆十二年敕以滿洲文撰、四十二年譯爲漢文。政書類典禮之屬。

讀禮通考一百二十卷、清徐乾學撰。原刻通行本、四庫書目禮類禮之屬附錄。

禮書綱目八十五卷、清江永撰。禮類通禮。

五禮通考二百六十二卷、清秦蕙田撰。原刻本。禮類通禮。

四庫全書總目提要見載籍部、經部禮類、史部政書類典禮之屬。

文廟祀典考

學校選舉部

史記卷　儒林傳序。

漢書卷　儒林傳。

通典卷　選舉門。

新唐書選舉志。

舊五代史選舉志。

通志選舉略卷

文獻通考卷選舉考卷　學校考。

宋史選舉志、金史選舉志。

元史選舉志。

科場條貫一卷、明陸深撰。其子楫編刊儼山外集、紀錄彙編。四庫書目政書類典禮之屬存目。

日知錄見論説考訂部、第十六第十七卷。

明史選舉志。

古今圖書集成經濟彙編官常典國子監部、督學部、選舉典學校部、敎化部、養士部、士習部、太學生部。

續通典卷、選舉典。

續通志卷　選舉略。

續文献通考卷　選舉考、卷　學校考。

清通典卷　選舉典。

清通志卷　選舉略。

清文獻通考卷　選舉考、卷　學校考。

學政全書　卷。

輿服部

車制圖考一卷、清阮元撰。較錢坫車制考尤核。揅經室集、清經解第一千五十五六卷。

考工輪輿私箋二卷、附圖一卷、清鄭珍撰。附圖、同治七年莫氏刻本。

爾雅釋服一卷、清宋翔鳳撰。道光間自刊浮溪舍叢書。

七國考見上古部、第　卷器服。

後漢書輿服志。

晉書輿服志。

齊書輿服志。

舊唐書輿服志、新唐書車服志。

通志器服略。

文献通考王禮考冠服。

宋史輿服志。

金史輿服志。

元史輿服志。

明史輿服志。

古今圖書集成經濟彙編禮儀典冠服部、冠冕部、衣服部等、考工典車輿部。

工藝部

考工記圖二卷、清戴震撰。戴氏遺書、清經解第五百六十三四卷。

考工創物小記四卷、磬折古義一卷、清程瑤田撰。嘉慶八年自刊通藝錄、清經解第五百三十六至四十卷。

爾雅注疏見字學部、釋宮第五器第六。

儀禮釋宮

文献通考樂考度量衡。

四庫全書總目提要見載籍部、史部政書類考工之屬、子部譜錄類器物之屬。

風俗時令部

春秋左傳風俗、見上古部。

爾雅釋服一卷、清宋翔鳳撰。道光間自刊浮溪精舍叢書。

荊楚歲時記一卷、梁宗懍撰。漢魏叢書載籍部、寶顏堂祕笈廣集。地理類雜記。

唐月令注一卷、唐李林甫等、梅瑞軒十種古逸書、

東京夢華錄十卷、宋孟元老撰。唐宋叢書別史部、津逮祕書第十集、學津討原第七集。地理類雜記、

醉翁談錄五卷、宋金盈之撰。四庫未收書目提要。

都城紀勝一卷、宋人撰。成於端平二年。地理雜記。

歲時廣記四十二卷、宋陳元靚撰。十萬卷樓叢書二編足本、學海類編考據部及四庫書目時令類、止四卷。

夢粱錄二十卷、宋吳自牧撰、學海類編遊覽部、學津討原第七集、知不足齋叢書第二十八集。宋末元初、地理雜記。

武林舊事十卷、宋周密撰。唐宋叢書別史部、寶顏堂祕笈廣集、知不足齋叢第十六集足本。地理雜記。

歲華紀麗譜一卷、附箋紙譜一卷、蜀錦譜一卷、元費著撰。寶顏堂祕笈廣集、續百川學海、墨海金壺史部。地理雜記。

說郛第六十九弓、荊楚歲時記、歲華紀麗譜之外、猶有漢崔寔四民月令、隋杜臺卿玉燭寶典、唐孫思邈千金月令、宋周密乾淳歲時記、□李淖秦中歲時記、□呂原明歲時雜記、無名氏輦下歲時記、四時寶鏡、影燈記、皆摘本也。

月令輯要二十四卷、圖說一卷、清康熙五十四年敕撰、依明馮應京載任所輯。月令廣義刪補。時令類。

湖壖雜記一卷、清陸次雲撰。陸雲士雜著、說鈴、龍威祕書第七集。地理類雜記之屬存目。

婚禮記一卷、清陳鼎撰。昭代叢書丙集。

板橋雜記三卷、清余懷撰。四庫書目小說家類瑣語之屬存目。

音樂部

律呂正義五卷、清康熙五十二年敕撰。殿本。

樂縣考二卷、清江藩撰。粵雅堂叢書第十八集。

燕樂考原六卷、清淩廷堪撰。校禮堂集、指海第十九集、粵雅堂叢書第八集。

東洋史學要書目錄　終

雜著

皇朝官位比較表

淳仁帝天平寶字四年 清和帝貞觀六

改緋
直大參
直廣參
直大肆
直廣肆

色
勤大壹
勤廣壹
勤大貳
勤廣貳

赤紫色
淨正四位下
淨從四位上
淨從四位下
淨正五位上
淨正五位下
淨從五位上
淨從五位下

（大夫）服色淺緋
直正五位上 外正五位上 勤五等 傳燈修行法師位 法橋上人位（律師階）
直正五位下 外正五位下
直從五位上 外從五位上 勤六等
直從五位下 外從五位下

勤冠四階 服色
勤正六位上 外正六位上 勤七等 傳燈修行滿位
勤正六位下 外正六位下
勤從六位上 外從六位上 勤八等

本表は明治十一二年頃の作にかゝる。固より先生の精力を注がれたる大作にはあらざらんも、先生の學風の一面たる精緻の長所を窺ふべきものにして、而も遺書收むる所皆先生の壯年以後の作なるに、本表は青年時代の作たるの點に於ても、亦之を割愛すべからざるものなれば、本表公刊の如き、或は先生の本志にあらざらんも、敢てこゝに收錄する所以なり。且つ本表もと特に題名を記さず、こゝに記する所の題名は編者の私意に出づ。讀者請ふ之を諒察せられよ。

皇朝官位比較表

推古帝十三年、始行冠位。六色十二階。每冠有大小二階
大德　小德　大仁　小仁　大禮　小禮　大信　小信　大義　小義　大智　小智

孝德帝大化三年、制冠位。七色十三階。建武之外、每冠有大小二階
大織冠　小織冠（服色深紫）
大繡冠　小繡冠（服色深紫）
大紫冠　小紫冠（服色淺紫）
大錦冠　小錦冠（服色眞緋）
大青冠　小青冠（服色紺）
大黑冠　小黑冠（服色綠）
建武冠　又名立身

孝德帝大化五年、更制冠位。七色十九階。立身之外、每冠有大小、大小華山乙六階又各有上下二階
大織　小織　大繡　小繡　大紫　小紫
大華上　大華下　小華上　小華下
大山上　大山下　小山上　小山下
大乙上　大乙下　小乙上　小乙下
立身

天智帝三年、始換冠位階名。七色二十六階、（十年、施行冠位法度之事。置皇親位階、自位。下、之別。）每冠有大小、大小錦山乙六階又各有上中下三階
大織　小織　大縫　小縫　大紫　小紫
大錦上　大錦中　大錦下　小錦上　小錦中　小錦下
大山上　大山中　大山下　小山上　小山中　小山下
大乙上　大乙中　大乙下　小乙上　小乙中　小乙下
大建　小建

天武帝十四年、改爵位之號、始加階級。
皇親冠位二色十二階。明位二階、淨位四階、各有大廣二階。
明大壹　明廣壹　明大貳　明廣貳（服色朱華）
淨大壹　淨廣壹　淨大貳　淨廣貳　淨大參　淨廣參　淨大肆　淨廣肆（服色朱華）
諸臣冠位六色四十八階。（持統帝四年四月、詔改正位直位追位進位之服色）、每四階有大廣、各二階。
正大壹　正廣壹　正大貳　正廣貳　正大參　正廣參　正大肆　正廣肆（服色赤紫　後改深紫）
直大壹　直廣壹　直大貳　直廣貳　直大參　直廣參　直大肆　直廣肆（服色淺紫　後改爲緋）
勤大壹　勤廣壹　勤大貳　勤廣貳　勤大參　勤廣參　勤大肆　勤廣肆（服色深綠）
務大壹　務廣壹　務大貳　務廣貳　務大參　務廣參　務大肆　務廣肆（服色淺綠）
追大壹　追廣壹　追大貳　追廣貳　追大參　追廣參　追大肆　追廣肆（服色深蒲萄　後改深縹）
進大壹　進廣壹　進大貳　進廣貳　進大參　進廣參　進大肆　進廣肆（服色淺蒲萄　後改淺縹）

文武帝大寶元年三月、始依新令、改制位號、始停賜冠、易以位記。五月始改勤位以下之號。八月律令成、遂廢冠號。
皇親位號二冠十八階。親王明冠四階、王淨冠十四階、每位有正從、四位五位各有上下二階。
親王明冠四階：明一品　明二品　明三品　明四品（服色黑紫）
淨正一位　淨從一位（服色黑紫）
淨正二位　淨從二位　淨正三位　淨從三位　淨正四位上　淨正四位下　淨從四位上　淨從四位下　淨正五位上　淨正五位下　淨從五位上　淨從五位下（服色赤紫）
諸臣位號六冠九位三十階。每位有正從、初位則曰大小、四位以下、正從各有上下二階。
正冠三位六階（公卿）
正一位　從一位（服色黑紫）
正二位　從二位　正三位　從三位（服色赤紫）
直冠八位八階（大夫）
直正四位上　直正四位下　直從四位上　直從四位下（服色深緋）
直正五位上　直正五位下　直從五位上　直從五位下（服色淺緋）
奏授
勤冠四階　服色深綠：勤正六位上　勤正六位下　勤從六位上　勤從六位下
務冠四階　服色淺綠：務正七位上　務正七位下　務從七位上　務從七位下
追冠四階　服色深縹：追正八位上　追正八位下　追從八位上　追從八位下
判授
進冠四階　服色淺縹：進大初位上　進大初位下　進少初位上　進少初位下
外位二十階
外正五位上　外正五位下　外從五位上　外從五位下
外正六位上　外正六位下　外從六位上　外從六位下
外正七位上　外正七位下　外從七位上　外從七位下
外正八位上　外正八位下　外從八位上　外從八位下
外大初位上　外大初位下　外少初位上　外少初位下
勳位十二等
勳一等　勳二等　勳三等　勳四等　勳五等　勳六等　勳七等　勳八等　勳九等　勳十等　勳十一等　勳十二等

淳仁帝天平寶字四年、始設僧位九階。傳燈位、修行位、各五階、而首階則同稱大法師。
大法師位
傳燈法師位　修行法師位
傳燈滿位　修行滿位
傳燈住位　修行住位
傳燈入位　修行入位

清貞年定位

皇朝官位比較表

推古帝十三年、行冠位。色十二階。冠有大小

大德　小德　大仁　小仁　大禮　小禮　大信　小信　大義　小義　大智　小智

孝德帝大化三年、制冠位。七色十三階。建武之外、每冠有大小二階

大織冠　小織冠　大繡冠　小繡冠（服色用深紫）
大紫冠　小紫冠（服色用淺紫）
大錦冠　小錦冠（服色用眞緋）
大青冠　小青冠（服色用紺）
大黑冠　小黑冠（服色用綠）
建武冠（又名立身）

孝德帝大化五年、更制冠位。七色十九階。立身之外、每冠有大小、大小華山乙、又各有上下六二階

大織　小織　大繡　小繡　大紫　小紫　大華上　大華下　小華上　小華下　大山上　大山下　小山上　小山下　大乙上　大乙下　小乙上　小乙下　立身

天智帝三年、換冠位階名。七色二十六階。（十年、施行冠位法度之事。置皇親位。下位、階、之別。）每冠有大小、大小錦山乙六階、又各有上中下三階

大織　小織　大縫　小縫　大紫　小紫　大錦上　大錦中　大錦下　小錦上　小錦中　小錦下　大山上　大山中　大山下　小山上　小山中　小山下　大乙上　大乙中　大乙下　小乙上　小乙中　小乙下　大建　小建

天武帝十四年、改爵位之號、增加階級。

皇親冠位二色十二階。明位二階、淨位四階、各有大廣二階。

明大壹　明廣壹　明大貳　明廣貳（服色朱華）
淨大壹　淨廣壹　淨大貳　淨廣貳　淨大參　淨廣參　淨大肆　淨廣肆（服色朱華）

諸臣冠位六色四十八階。（持統帝四年四月、詔改正位直位之追位服色）進位每四階、有大廣二階。

正大壹　正廣壹　正大貳　正廣貳　正大參　正廣參　正大肆　正廣肆（服色深紫　後改赤紫）
直大壹　直廣壹　直大貳　直廣貳　直大參　直廣參　直大肆　直廣肆（服色淺紫　後改爲緋）
勤大壹　勤廣壹　勤大貳　勤廣貳　勤大參　勤廣參　勤大肆　勤廣肆（服色深綠）
務大壹　務廣壹　務大貳　務廣貳　務大參　務廣參　務大肆　務廣肆（服色淺綠）
追大壹　追廣壹　追大貳　追廣貳　追大參　追廣參　追大肆　追廣肆（服色深蒲色　後改爲深縹）
進大壹　進廣壹　進大貳　進廣貳　進大參　進廣參　進大肆　進廣肆（服色淺蒲色　後改爲淺縹）

文武帝大寶元年三月、始依新令、改制位號、始停賜冠、易以位記。五月始改勤位以下之號。八月頒令成、遂廢冠號。

皇親位號十八階。親王明冠四階、王淨冠十四階、諸王十四位、每位有正從、五位四位、各有上下二階

親王明冠四階（服色黑紫）：明一品　明二品　明三品　明四品
淨正一位　淨從一位（服色黑紫）
淨正二位　淨從二位　淨正三位　淨從三位　淨正四位上　淨正四位下　淨從四位上　淨從四位下　淨正五位上　淨正五位下　淨從五位上　淨從五位下（服色赤紫）

諸臣位號三十階。每位有正從、初位曰大小、四位以下、則各有上下二階。

正冠三位六階（公卿）：
正正一位　正從一位（服色黑紫）
正正二位　正從二位　正正三位　正從三位（服色赤紫）

直冠位八階（大夫）：
直正四位上　直正四位下　直從四位上　直從四位下（服色深緋）
直正五位上　直正五位下　直從五位上　直從五位下（服色淺緋）

奏授：
勤冠四階（服色深綠）：勤正六位上　勤正六位下　勤從六位上　勤從六位下
務冠四階（服色淺綠）：務正七位上　務正七位下　務從七位上　務從七位下
追冠四階（服色深縹）：追正八位上　追正八位下　追從八位上　追從八位下

判授：
進冠四階（服色淺縹）：進大初位上　進大初位下　進少初位上　進少初位下

外位二十階

外正五位上　外正五位下　外從五位上　外從五位下　外正六位上　外正六位下　外從六位上　外從六位下　外正七位上　外正七位下　外從七位上　外從七位下　外正八位上　外正八位下　外從八位上　外從八位下　外大初位上　外大初位下　外少初位上　外少初位下

勳位十二等

勳一等　勳二等　勳三等　勳四等　勳五等　勳六等　勳七等　勳八等　勳九等　勳十等　勳十一等　勳十二等

淳仁帝天平寶字四年、始設僧位九階。傳燈位、修行位、各五階、而首階則同稱大法師。

大法師位
傳燈法師位　修行法師位
傳燈滿位　修行滿位
傳燈住位　修行住位
傳燈入位　修行入位

清和帝貞觀六年、制定僧綱位階。

法印大和尚位（僧正階）
法眼和上位（僧都階）
法橋上人位（律師階）

周紀補訂

本篇は周の貞王より顯王に至るまでの周紀を補訂したるもの、春秋戰國の事を研究するものにとりて有益なる一篇にして、蓋し明治二十七八年の作なり。

周紀補訂

貞王

元年、越王句踐使后庸聘于魯、且言邾田、封于駘上。二月、盟于平陽、魯三子從。季康子病之、言及子贛、曰「若在此、吾不及此夫」。孟武伯曰「然何不召」。曰「固將召之」。叔孫文子曰「他日請念」。四月、魯季康子卒。哀公弔焉降禮。晉荀瑤帥師伐鄭、次于桐丘。鄭駟弘請救于齊。陳成子救鄭、及濮雨、不涉。國參曰「大國在敝邑之宇下、是以告急。今師不行、恐無及也」。成子衣製杖戈、立于阪上、馬不出者、助之鞭之。知伯聞之乃還、曰「我卜伐鄭、不卜伐齊」。使謂成子曰「大夫陳子、陳之自出。陳之不祀、鄭之罪也。故寡君使瑤察陳衷焉。謂大夫、其恤陳乎。若利本之顚、瑤何有焉」。成子怒曰「多陵人者、皆不在。知伯其能久乎」。魯哀公患三桓之侈也、欲以諸侯去之、三桓亦患公之妄也、故君臣多閒。公游于陵阪、遇孟武伯於孟氏之衢、曰「請有問於子、余及死乎」。對曰「臣無由知之」。三問、卒辭不對。公欲以越伐魯而去三桓。八月甲戌、公如公孫有陘氏、因孫于邾、遂如越。國人施公孫有山氏。左傳。尋迎哀公復歸而薨、子悼公寧立。時公室微弱、卑於三桓之家。魯世家。年表、哀公卒、在明年。

二年。

三年。

四年、燕獻公薨、孝公立。年表。越王句踐既幷吳、欲霸中國、徙都瑯琊、水經注。起觀臺、周七里、以望東海。吳越春秋。

十一月、句踐薨、子鹿郢左傳作適郢、世家作鼫與。立。越世家索隱引紀年、在晉出公十年。

五年、晉知襄子帥師圍鄭、門于桔柣之門。知伯謂趙襄子入之。對曰「主在此」。知伯曰「惡而無勇、何以爲子」。對曰「以能忍耻、庶無害趙宗乎」。知伯不悛。趙孟由是惎知伯。（左傳。）初趙簡子之子、長曰伯魯、幼曰無恤。將置後、不知所立。乃書訓戒之辭於二簡、以授二子、曰「謹識之」。三年而問之、伯魯不能擧其辭、求其簡、已失之矣。問無恤、誦其辭甚習、求其簡、出諸袖中而奏之。於是簡子以無恤爲賢、立以爲後、是爲趙襄子。簡子使尹鐸爲晉陽。請曰「以爲繭絲乎。抑爲保障乎」。簡子曰「保障哉」。尹鐸損其戶數。簡子謂襄子曰「晉國有難、而無以尹鐸爲少、無以晉陽爲遠、必以爲歸」。

六年、鄭聲公薨、子哀公易立。（年表。）

七年。

八年、秦塹河旁、伐大荔、取其王城。（秦本紀。）

九年。

十年、越王鹿郢薨、子不壽立。（越世家索隱引紀年「鹿郢立六年卒」。史記無年。）

十一年、晉知襄子與趙・韓・魏、分范・中行氏之地、以爲己邑。（年表趙世家、並在後四年。）出公怒、告齊・魯、欲以伐四卿。四卿恐、遂反攻公。公奔齊、道死。（索隱引紀年云「出公二十三年奔楚」、在後六年。）知伯欲盡幷晉、未敢、乃立昭公曾孫驕、是爲懿公。（懿、本誤作哀、今從年表、趙世家、索隱引世本。紀年作敬公。）是時晉政皆決於知伯。知伯遂有范・中行地、最强。（晉世家。）

十二年、蔡聲侯薨、子元侯立。（年表。）知伯欲伐衞、遺衞君野馬四百、白璧一。南文子（公孫彌牟）曰「此小國之禮、而大國致之、君其圖之」。衞君以其言告邊境。知伯果起兵襲衞、至境而反、曰「衞有賢人、先知吾謀也」。已而又欲襲衞、亡其太子、使奔衞。南文子曰「太子顏甚有寵、亡必有故」。使人迎之於境、曰「車過五乘、愼勿納」。知伯乃止。（衞策。）知伯還自衞、與韓康子魏桓子宴於藍臺。知伯戲康子而侮段規。知國聞之、諫曰「主不備、難必至矣」。知伯曰「難將由我。我不爲難、誰敢興之」。對曰「不然。夏書有之『一人三失、怨豈在明、不見是圖』。夫君子能勤小物、故無大患。今主一宴、而耻人之君相、又弗備、曰『不敢興難』、無乃不可乎。蜹蟻蜂蠆、皆能害人、況君相乎」。弗聽。（國語。下言「自是五年、乃有晉陽之難」。）

十三年、秦初縣頻陽。（秦本紀。）晉取秦武城。（秦本紀。水經洛水注引紀年云「晉出公十九年、晉・韓龐取盧氏城」。）秦厲共公帥師與緜諸戰。（年表。）齊平公薨、子宣公積立。（年表、齊世家。）是時齊政皆歸陳氏、封邑大於平公之所食。陳成子後宮以百數、賓客舍人、出入後宮者不禁。及成子卒、有七十餘男。子盤代立、是爲田襄子。（田世家。）

十四年。知襄子爲室美、士茁夕焉。知伯曰「室美夫」。對曰「美則美矣。抑臣亦有懼也。志有之、曰『高山峻原、不生草木。松栢之地、其土不肥』。今土木勝、臣懼其不能安人也」。（國語。其下云「室成三年、而知氏亡」。）鄭人弒哀公、而立聲公弟丑、是爲共公。（鄭世家。）

十五年。知伯請地於韓康子、康子欲弗與。段規曰「知伯好利而愎。不與、將伐我。不如與之。彼狃於得地、必請於他人。他人不與、必嚮之以兵。然則我得免於患、而待事之變矣」。康子曰「善」。使使者致萬家之邑一於知伯。知伯悅、又求地於魏桓子、桓子欲弗與。任章曰「何故弗與」。桓子曰「無故索地、故弗與」。任章曰「無故索地、諸大夫必懼。吾與之地、知伯必驕。彼驕而輕敵、此懼而相親。以相親之兵、待輕敵之人、知氏之命必不長矣。周書曰『將欲敗之、必姑輔之。將欲取之、必姑與之』。主不如與之、以驕知伯。然後可以擇交而圖知氏矣。奈何獨以吾爲知氏質乎」。桓子曰「善」。復與之萬家之邑一。知伯又求蔡皐狼之地於趙襄子、襄子弗與。知伯怒、帥韓・魏之甲、以攻趙氏。襄子將出、曰「吾何走乎」。從者曰「長子近、且城厚完」。襄子曰「民力能以完之、又斃死以守之、其誰與我」。從者曰「邯鄲之倉庫實」。襄子曰「浚民之膏澤以實之、又因而殺之、其誰與我。其晉陽乎。先主之所屬也。尹鐸之所寬也。民必和矣」。乃走晉陽。三家以國人、圍而灌之。城不浸者三版、

沈竈產鼃、民無叛意。

十六年、知伯行水、魏桓子御、韓康子驂乘。知伯曰「吾乃今知水可以亡人國也」。桓子肘康子、康子履桓子之跗。以絳水可以灌安邑、汾水可以灌平陽也。絺疵謂知伯曰「韓・魏必反矣」。知伯曰「子何以知之」。絺疵曰「以人事知之。夫從韓・魏之兵以攻趙、趙亡、難必及韓・魏矣。今約勝趙而三分其地、城不沒者三版、人馬相食、城降有日、而二子無喜志、有憂色。是非反而何」。明日、知伯以絺疵之言告二子。二子曰「此夫讒人、欲爲趙氏游說、使主疑於二家、而懈於攻趙氏也。不然、夫二家豈不利朝夕分趙氏之田、而欲爲此危難不可成之事乎」。二子出、絺疵入曰「主何以臣之言告二子也」。知伯曰「子何以知之」。對曰「臣見其視臣端而趨疾、知臣得其情故也」。知伯不悛。絺疵請使於齊。趙襄子使張孟談潛出見二子、曰「臣聞、脣亡則齒寒。今知伯、帥韓・魏以攻趙。趙亡、則韓魏爲之次矣」。二子曰「我心知其然也。恐事未遂而謀泄、則禍立至矣」。張孟談曰「謀出二主之口、入臣之耳、何傷也」。二子乃潛與張孟談約、爲之期日而遣之。襄子夜使人殺守隄之吏、而決水灌知伯軍。知伯軍救水而亂。韓・魏翼而擊之、襄子將卒犯其前、大敗知伯之衆、遂殺知伯、盡滅知氏之族、而分其地。初知宣子將以瑤爲後。知果曰「不如宵也。瑤之賢於人者五、其不逮者一也。美鬢長大則賢、射御足力則賢、伎藝畢給則賢、巧文辯慧則賢、彊毅果敢則賢。如是而甚不仁。夫以其五賢陵人、而以不仁行之、其誰能待之。若果立瑤也、知宗必滅」。弗聽。知果別族於太史、爲輔氏。及知氏之滅、唯輔果在。張孟談既固趙宗、告襄子納地釋事、而耕於負親之丘。趙策。趙襄子漆知伯之頭、以爲飲器。知伯之臣豫讓、欲爲之報仇、乃詐爲刑人挾匕首、入襄子宮中、塗廁。襄子如廁、心動、索之獲豫讓。左右欲殺之。襄子曰「知伯死無後、而此人欲爲報仇、眞義士也。吾謹避之耳」。乃舍之。豫讓又漆身爲癩、呑炭爲啞、行乞於市、其妻不識也。行見其友、其友識之、爲之泣曰「以子之才、臣事趙孟、必得近幸。子乃爲所欲爲、顧不易邪。何乃自苦如此。求以報仇、不亦難乎」。豫讓曰「既已委質爲臣、而又求殺之、是二心也。凡吾所爲者、極難耳。然所以爲此者、將以愧天下後世之爲人臣懷二心者也」。襄子出、豫讓伏於橋下。襄子至橋、馬驚。索之得豫讓、遂殺之。齊田襄子相宣公、及三晉滅知氏、襄子使其兄弟宗人、盡爲齊都邑大夫、與三晉通使、且以有齊國。襄子卒、子白立、是爲田莊子。田世家。

十七年、晉知開率其邑人奔秦。年表、秦本紀。

十八年、秦左庶長城南鄭。年表。衞悼公亹、子敬公弗立。年表、衞世家。蔡元侯薨、子齊立。年表、管蔡世家。

十九年、燕孝公薨、成公載立。年表、燕世家。

二十年、越王不壽被殺。朱句立。索隱引紀年云「不壽立十年被殺、云云」。朱句、越世家作子王翁。

二十一年、晉知寬率其邑人奔秦。年表。

二十二年、楚滅蔡、蔡侯齊亡。管蔡世家。

二十三年。

二十四年、楚滅杞、與秦平。是時越已幷吳、而不能正江淮北。楚東侵、廣地至泗上。楚世家。

二十五年、秦伐義渠、虜其王。秦本紀。當是時趙踰句注而有幷代、以臨胡貉。韓・魏伐伊洛陰戎滅之、餘種西走。

自此中國無戎寇、唯餘義渠一種焉、築城郭以自守。

二十六年、秦厲共公薨、子躁公立。秦本紀。

二十七年。

二十八年、貞王崩、長子去疾立、是爲哀王。哀王立三月、弟叔襲殺哀王而自立、是爲思王。思王立五月、少弟嵬攻殺思王而自立、是爲考王。考王之時、封弟揭於河南、以續周公之官職、是爲周桓公。周本紀。桓公名揭、據世本。

秦南鄭反。年表、秦本紀。

考王

元年。
二年、
三年、晉懿公薨、子幽公柳立。幽公之時、晉畏、反朝韓・魏・趙之君、獨有絳曲沃、餘皆入三晉。晉世家。年從年表。
四年。
五年。
六年。
七年、燕成公薨、閔公立。
八年、楚自西陽遷于郢。楚曾侯鐘文。
九年、楚惠王薨、子簡王中立。楚世家。 衞敬公薨、子昭公糾立。是時三晉彊、衞如小矦屬之。
十年、楚滅莒。年表、楚世家。 魯悼公薨、子元公嘉立。魯世家。年據漢書律曆志。年表在後二年。 悼公之喪、季昭子問於孟敬子曰「爲公何食」。敬子曰「食粥、天下之達禮也。吾三臣者之不能居公室也、四方莫不聞矣。勉而爲瘠、則吾能毋乃使人疑夫不以情居瘠者乎哉。我則食食」。禮記檀弓。
十一年、義渠伐秦、侵至渭陽。年表。秦本紀作渭南。
十二年、秦躁公薨、弟懷公立。秦本紀。
十三年。

十四年。
十五年、考王崩、太子午立、是爲威烈王。周本紀。 衞公子亹弑昭公而自立、是爲懷公。

威烈王

趙襄子爲伯魯之不立也、有子五人、不肯置後。封伯魯之子周於代、曰代成君、早卒、取其子浣、立爲太子。
元年、襄子卒、太子浣立、是爲趙獻子。獻子少卽位、治中牟。獻子、史作獻矦。今從水經沁水注引紀年。 襄子弟嘉、逐獻子而自立、是爲趙桓子。世本以桓子爲襄子之子。 秦庶長鼂、與大臣圍懷公、懷公自殺。懷公太子曰昭子、蚤死。大臣乃立昭子之子、是爲靈公。秦本紀。 鄭共公薨、子幽公已立。鄭世家。 韓康子卒、子啓章立、是爲韓武子。韓世家。武子名啓章據世本。 都平陽。水經汾水注引紀年。
魏桓子卒、子斯立、是爲魏文矦。年表。魏世家、斯作都、爲桓子之孫。今從世本。 文矦以卜子夏田子方爲師、每過段干木之廬、必式。四方賢士多歸之。文矦與羣臣飲酒樂、而天雨、命駕將適野。左右曰「今日飲酒樂、天又雨、君將安之」。文矦曰「吾與虞人期獵、雖樂、豈可無一會期哉」。乃往、身自罷之。韓借師於魏、以伐趙。文矦曰「寡人與趙兄弟也、不敢聞命」。趙借師於魏、以伐韓。文矦應之亦然。二國皆怒而去。已而知文矦以講於己也、皆朝于魏。魏於是始大於三晉、諸矦莫能與之爭。文矦與田子方飲酒而稱樂。文矦曰「鐘聲不比乎、左高」。田子方笑。文矦曰「何笑」。子方曰「臣聞之、君明樂官、不明樂音。今君審於音、臣恐其聾於官也」。文矦曰「善」。
二年。趙桓子卒。趙氏之人曰「桓子立、非襄主意」。乃共殺其子、復迎獻子而立之。
三年。韓武子伐鄭殺幽公。鄭人立其弟駘、是爲繻公。韓・鄭世家。
四年。
五年。

六年、晉夫人秦嬴賊幽公于高寢之上。晉世家索隱引紀年。年從年表。　魏文侯以兵誅晉亂、立幽公子止、是爲烈公。晉世家。表作幽公弟止。

七年、魏城少梁、年表、魏世家。　秦擊之。秦本紀。

八年、秦與魏戰于少梁。年表。

九年、魏復城少梁。年表。　秦城塹河瀕。年表。

十年。

十一年、秦補龐城、城籍姑。年表。　衞公孫頹弑懷公而自立、是爲愼公。愼公、敬公之孫也。衞世家。　秦靈公薨、太子師隰不得立、立靈公季父簡公。簡公、昭子之弟、而懷公子也。秦本紀。年從年表。　越滅滕。索隱引紀年「朱句三十四年滅滕」。蓋滅而復興也。

十二年、中山武公初立。年表、趙世家。　越滅郯、以郯子鴣歸。水經沂水注引紀年、在晉烈公四年。索隱引紀年、云「朱句三十五年、滅郯」、卽當是年。案、紀年、晉烈公十一年、當齊宣公五十一年、則烈公元年、當宣公四十一年、威烈王十一年、後年表四年、而烈公四年、當威烈王十四年、與朱句三十五年之語不合。不知孰是。烈公立年之說、見下二十一年田悼子卒條。

十三年、齊伐晉、毀黃城、圍陽狐。年表、田世家。　秦與晉戰、敗于鄭下。年表。　楚人伐晉南鄙、至于上洛。水經丹水注引紀年、在晉烈公三年、當此年。

十四年、齊伐魯莒及安陽。年表。田世家作「伐魯葛及安陵」。　魏文侯使公子擊圍繁龐、出其民。年表、魏世家。　越王朱句薨、子翳立。索隱引紀年「三十七年朱句卒」云云。

十五年、齊伐魯取一城。田世家。　趙城平邑。年表、趙世家、水經漯水注引紀年。　田公子居思伐趙、圍平邑。水經河水注引紀年、在晉烈公五年、卽當此年。　齊田莊子卒。索隱引紀年、在齊宣公之十五年、然宣公十五年、當貞王二十八年、而田世家、威烈王時、有齊連伐晉魯之事、繫「莊子卒」於「伐魯取一城」之下、則考王威烈王之世、莊子猶在。紀年所稱「宣公之十五年」、「之」字蓋「四」之譌、而莊子之卒、在宣公四十五年、卽當此年也。

十六年、魯元公薨、子穆公顯立。魯世家、漢書律曆志。年表在後二年。　齊田悼子立。田世家云「莊子卒、子太公和立」。索隱云「按、汲冢紀年、齊宣公之十五年、田莊子卒、明年立悼子。悼子卒乃次立和。是莊子後有悼子。蓋立年無幾、是以世本及史記不得錄也」。今按、史記偶脫悼子一世、誤以悼子立、卽爲太公立也。　赴莊子喪於魯。魯人欲勿哭。穆公召縣子而問焉。縣子曰「古之大夫、束脩之問不出境、雖欲哭之、安得而哭之。今之大夫、交政於中國、雖欲勿哭、焉得而勿哭。且臣聞之、哭有二道、有愛而哭之、有畏而哭之」。於是與哭諸縣氏。禮記檀弓。

十七年、秦初令吏帶劍。年表、秦本紀。　魏伐秦、築臨晉元里。年表、魏世家。　韓武子卒、子虔立、是爲韓景侯。年表、韓世家、世本紀年、皆作景子。　趙獻子卒、子籍立、是爲趙烈侯。

十八年、魏文侯使樂羊伐中山、克之、以封其子擊。文侯問於羣臣曰「我何如主」。皆曰「仁君」。任座曰「君得中山、不以封君之弟、而以封君之子、何謂仁君」。文侯怒、任座趨出。次問翟璜。對曰「仁君」。文侯曰「何以知之」。對曰「臣聞、君仁則臣直。嚮者任座之言直、臣是以知之」。文侯悅、使翟璜召任座而反之、親下堂迎之、以爲上客。子擊出遭田子方於道、下車伏謁。子方不爲禮。子擊怒、謂子方曰「富貴者驕人乎。貧賤者驕人乎」。子方曰「亦貧賤者驕人耳。富貴者安敢驕人。國君而驕人、則失其國。大夫而驕人、則失其家。失其國者、未聞有以國待之者也。失其家者、未聞有以家待之者也。夫士貧賤者、言不用、行不合、則納履而去耳。安往而不得貧賤哉」。子擊乃謝之。　秦塹洛城重泉。年表。秦本紀在前一年。　初租禾。年表。　魏伐秦、至鄭而還、築洛陰合陽。年表、魏世家。水經河水注引紀年、作汾陰郃縣、在前一年。　楚簡王薨、子聲王當立。年表、楚世家。　韓景侯伐鄭、取雍丘。鄭城京。年表、韓世家、鄭世家。　齊取魯之郕。年表、田世家。

十九年、鄭伐韓、敗韓兵于負黍。年表、鄭韓世家。　齊宣公與鄭人會于西城、伐衞取毋丘。年表、田世家。　孔伋、字子思、孔子之孫也、孔子世家。　時居於衞。或曰「寇至、盍去諸」。子思曰「如伋去、君誰與守」。蓋仕衞爲其臣也。孟子。按、此事在何年、不可的知。論語、子思之父伯魚死於顏淵之前、則孔子卒時、子思當不下十歲、而孔子卒後六十九年、魯穆公始立、尊禮子思。然則子思之被禮於魯、在八十歲之時、而其仕衞、則當在數年若數十年之前。然此年以前、衞有齊寇、年表世家、均無所記、故姑附於毋丘役下。　後歸於魯。魯穆公尊禮之、常使人侍於其側、孟子曰「魯穆公無人乎子思之側、則不能安子思」。　亟問、亟餽鼎肉。子思以爲鼎肉使己僕僕爾亟拜也、卒標使者、出諸大門之外、北面稽首再拜而不受、曰「今而後知君之犬馬畜伋」。蓋自是臺無餽也。穆公亟見於

子思、曰「古千乘之國、以友士、何如」。子思不悅、曰「古之人有言、曰事之云乎。豈曰友之云乎」。費惠公亦重子思、曰「吾於子思、則師之矣。吾於顏般、則友之矣。王順長息、則事我者也」。孟子。惠公、蓋季昭子之嗣、後僭稱諸侯也。

二十年、齊田汾及趙・韓舉戰于平邑敗之、獲韓舉、取平邑新城。水經河水注引紀年、在晉烈公十年。

二十一年、魏文侯謂李克曰「先生嘗有言、曰「家貧思良妻、國亂思良相」。今所置、非成則璜。二子何如」。對曰「卑不謀尊、疏不謀戚。臣在闕門之外、不敢當命」。文侯曰「先生臨事勿讓」。克曰「君弗察故也。居視其所親、富視其所與、達視其所舉、窮視其所不爲、貧視其所不取。五者足以定之矣、何待克哉」。文侯曰「先生就舍。吾之相定矣」。李克出、見翟璜。翟璜曰「今者聞君召先生而卜相。果誰爲之」。克曰「魏成」。翟璜忿然作色曰「西河守吳起、臣所進也。君內以鄴爲憂、臣進西門豹。君欲伐中山、臣進樂羊。中山已拔、無使守之、臣進先生。君之子無傅、臣進屈侯鮒。以耳目之所睹記、臣何負於魏成」。李克曰「子言克於子之君者、豈將比周以求大官哉。君問相於克、克之對如是。所以知君之必相魏成者、魏成、食祿千鍾、什九在外、什一在內、是以東得卜子夏、田子方、段干木。此三人者、君皆師之。子所進五人者、君皆臣之。子惡得與魏成比也」。翟璜逡巡再拜、曰「璜鄙人也、失對。願卒爲弟子」。吳起者、衞人、仕於魯。齊人伐魯、魯人欲以爲將。起取齊女爲妻、魯人疑之。起殺妻以求將、大破齊師。或譖之魯侯曰「起始事曾參、母死、不奔喪、曾參絕之。今又殺妻以求爲君將。起、殘忍薄行人也。且以魯國區區、而有勝敵之名、則諸侯圖魯矣」。起恐得罪、聞魏文侯賢、乃往歸之。文侯問諸李克。李克曰「起貪而好色。然用兵、司馬穰苴弗能過也」。於是文侯以爲將、擊秦、拔五城。起之爲將、與士卒最下者同衣食、臥不設席、行不騎乘、親裹贏糧、與士卒分勞苦。卒有病疽者、起爲吮之。卒母聞而哭之。人曰「子卒也、而將軍自吮其疽。何哭爲」。母曰「非然也。往年、吳公吮其父疽、其父戰不旋踵、遂死于敵。吳公今又吮其子、妾不知其死所矣。是以哭之」。　齊田悼子卒、田布殺其大夫公孫孫。公孫會以廩丘叛附于趙。田布圍廩丘。魏翟角趙孔屑韓師、救廩丘、及田布戰于龍澤敗之。水經瓠子河注引紀年、在晉烈公十一年。田世家索隱云「紀年、宣公五十一年、公孫會以廩丘叛于趙、十二月宣公薨」。六國年表、齊田兩世家、田會以廩丘反、皆在宣公五十一年。然則紀年所云烈公十一年、卽宣公五十一年、而其元年、當宣公四十一年、威烈王十一年、較史記在後四年。凡紀年所錄之事、以烈公之年紀之者、皆當依是推之也。　田和立、是爲田太公。田世家。年據紀年。

二十二年、王命韓景侯趙烈侯魏翟員伐齊、入長城。水經汶水注引紀年、在晉烈公十二年。景侯烈侯、原作景子烈子。　十二月、齊宣公薨、子康公貸立。年表、齊田世家。十二月據紀年。　宋昭公薨、子悼公購由立。年表、宋世家。

二十三年、九鼎震。年表、周本紀。　王命韓魏趙爲諸侯。周本紀、晉世家。　燕湣公薨、子僖公莊立。

二十四年、王崩、子安王驕立。盜殺楚聲王、國人立其子悼王疑。趙烈侯好音云云。趙世家。年據年表。

安王

元年、秦伐魏、至陽狐。

二年、魏・韓・趙伐楚、至乘丘。　鄭圍韓陽翟。　韓景侯薨、子烈侯取立。　趙烈侯薨、國人立其弟武侯。　秦簡公薨、子惠公立。

三年、王子定奔晉。　虢山崩壅河。　楚歸楡關于鄭。年表。

四年、楚伐周、又圍鄭。　鄭人殺其相駟子陽。

五年、魏文侯薨、太子擊立、是爲武侯。年表魏世家、文侯之卒、皆在後十年、安王十五年。然武侯以烈王五年卒、而魏世家索隱引紀年、云「武侯二十六年卒」。韓滅鄭、在烈王元年、而晉世家索隱引紀年、爲武侯二十二年事。依是推之、武侯元年、當安王六年、而文侯以此年卒、先史十年。紀年、魏國之史、於魏事不當有誤、故因改之。

六年、魏封公子緩。魏世家索隱引紀年、在魏武侯元年。　鄭駟子陽之黨弑繻公。而立其弟乙、是爲康公。　宋悼公薨、子休公田立。

八年、齊伐魯、取最。韓救魯。年表。　鄭負黍叛、復歸韓。

九年、魏伐鄭。

十年、

十一年、秦伐韓宜陽、取六邑。　齊康公淫於酒婦人、不聽政。田太公乃遷康公於海上、使食一城、以奉其先祀。

十二年、晉烈公薨、子桓公傾立。桓公、史作孝公。晉世家索隱云「紀年、以孝公爲桓公」。今從紀年。又烈公卒、史在前三年、安王九年。然魏武侯以烈王五年卒、而索隱引紀年、云「武侯以桓公十九年卒」、趙敬侯之卒、在烈王元年、而索隱又云「紀年、韓哀侯趙敬侯、並以桓公十五年卒」。然則桓公元年、當安王十三年、後史三年、而烈公以此年卒也。　秦・晉戰于武城。　齊伐魏、取襄陵。　魯敗齊師于平陸。

十三年、秦侵魏陰晉。田太公會魏侯楚人衞人于濁澤、求爲諸侯。魏侯爲之請於王及諸侯。王許之。

十四年。

十五年、蜀伐秦、取南鄭、通鑑從秦本紀、作「秦伐蜀取南鄭」。按、前此秦城南鄭及南鄭反、則南鄭非蜀土也。今從年表及稽古錄。　秦惠公薨、子出公立。　趙武侯薨、國人復立烈侯之太子章。是爲敬侯。　韓烈侯薨、子文侯立。

十六年、田太公始列爲諸侯。　趙公子朝作亂、奔魏、與魏襲邯鄲、不克。

十七年、秦庶長改、逆靈公之子師隰于河西而立之、是爲獻公。殺出公及其母、沈之淵旁。　齊伐魯破之。　韓伐鄭、取陽城、伐宋、執宋公。

十八年、

十九年、魏敗趙師于兎臺。　秦城櫟陽。年表、秦本紀。　田太公薨、田侯剡立。史記、太公和卒、子桓公午立、在前二年。田世家索隱引紀年、云「齊康公二十二年、田侯剡立」、則太公桓公之閒、有田剡一世、而太公以此年薨也。

二十年。

二十一年、魏武侯浮西河而下、中流顧謂吳起曰「美哉山河之固。此魏國之寶也」。對曰「在德不在險。昔三苗氏、左洞庭、右彭蠡。德義不修、禹滅之。夏桀之居、左河・濟、右泰・華、伊闕在其南、羊腸在其北。修政不仁、湯放之。商紂之國、左孟門、右太行、常山在其北、大河經其南。修政不德、武王殺之。由此觀之、在德不在險。若君不修德、舟中之人、皆敵國也」。武侯曰「善」。魏置相、相田文。吳起不悅、謂田文曰「請與子論功、可乎」。田文曰「可」。起曰「將三軍、使士卒樂死、敵國不敢謀、子孰與起」。文曰「不如子」。起曰「守西河、秦兵不敢東鄉、韓・趙賓從、子孰與起」。文曰「不如子」。起曰「治百官、親萬民、實府庫、子孰與起」。文曰「不如子」。—起曰「此三者、子皆出吾下、而位居吾上、何也」。文曰「主少國疑、大臣未附、百姓不信。方是之時、屬之子乎、屬之我乎」。起默然良久、曰「屬之子矣」。久之、魏相公叔、尙主、而害吳起。公叔之僕曰「起易去也。起爲人剛勁自喜。子先言於君曰「吳起賢人也、而君之國小、臣恐起之無留心也。君盍試延以女。起無留心、則必辭矣」。子因與起歸、而使公主辱子。起見公主之賤子也、必辭。則子之計中矣」。公叔從之。吳起果辭公主。武侯疑之而未信。起懼誅、遂奔楚。楚悼王素聞其賢、至則任之爲相。起明灋審令、捐不急之官、廢公族疏遠者、以撫養戰鬭之士、要在彊兵、破遊說之言從横者。於是南平百越、北却三晉、西伐秦、諸侯皆患楚之彊。而楚之貴戚大臣、多怨吳者。　楚悼王薨。貴戚大臣作亂、攻吳起。起走、之王尸而伏之。擊起之徒、因射刺起、幷中王尸。既葬、太子臧卽位、是爲肅王。使令尹盡誅爲亂者、坐起夷宗者、七十餘家。

二十二年、齊伐燕、取桑丘、魏・韓・趙伐齊、至桑丘。

二十三年、趙襲衞、不克。　越遷于吳。越世家索隱引紀年「越王翳三十三年、遷于吳」。

二十四年、狄敗魏師于澮。　魏韓趙伐齊、至靈丘。

二十五年、蜀伐楚、取茲方。楚爲扞關以拒之。　魯穆公薨、子共公奮立。　韓文侯薨、子哀侯立。

二十六年、王崩、子烈王喜立。 田午弒田侯及孺子喜而自立、是爲田桓公。田世家索隱云「紀年、齊康公五年、田侯午生。二十二年、田侯剡立。後十年、田午弒其君及孺子喜而爲公。春秋後傳、亦云「田午弒田侯及其孺子喜、是爲桓侯」」。按、齊康公五年、當安王二年、其二十二年、當安王十九年、則所謂「後十年」、似當烈王三年。然據索隱「梁惠王十三年、當齊桓公十八年」之文推之、桓公元年、當烈王元年、而田侯剡被弒、乃在此年。後十年之十疑七之誤。 七月、越太子諸咎、弒王翳。十月、越人殺諸咎。越滑吳人立孚錯枝爲君。既而越大夫寺區定越亂、立初無余之、是爲莽安。越世家索隱引紀年、在王翳三十六年。世家「王翳卒、子王之侯立」。索隱云「之侯卽無余之也」。

烈王

元年、趙敬侯薨、子成侯種立。韓滅鄭、哀侯入于鄭。紀年、見下。

二年、晉桓公邑韓哀侯于鄭。韓世家索隱引紀年「魏武侯二十二年、韓滅鄭、哀侯入于鄭。二十三年、晉桓公邑哀侯于鄭」。 韓傀史作俠累。古史云「俠累、傀字也」。相韓、嚴遂重於君、二人相害也。嚴遂亡至齊、聞軹人聶政之勇、以黃金百鎰爲政母壽、欲因以報仇。政不受曰「老母在、政身未敢以許人也」。及母死、仲子嚴遂字也。乃使政刺韓傀。韓適有東孟之會、君相皆在焉、兵衛甚衆。聶政直入上階刺傀。傀走抱哀侯。政刺之、兼中哀侯。因自皮面抉眼、屠腸以死。韓人暴其屍於市、購問、莫能識。其姊嫈、聞而往哭之、曰「是軹深井里聶政也、爲妾故、重自刑以絕從。妾奈何愛軀、滅賢弟之名」、亦自殺於屍下。此據韓策「重自刑以絕從」、及「妾奈何」句、參取刺客傳。韓策兩言哀侯、明爲哀侯時事。刺客傳、韓傀作俠累、云「嚴仲子事韓哀侯、與俠累有郤」、亦爲哀侯時事。而年表韓世家、皆云「列侯三年、聶政殺韓相俠累」、是史記自戾也。然其在哀侯何年、史策皆無明文。按韓策又云「東孟之會、聶政陽堅、刺相兼君。許異蹙哀侯而殪之、立以爲鄭君、許異終身相焉」。蓋哀侯被中時、許異蹙之、使佯死以免難。故哀侯都鄭、而君臨之、許異終身爲之相。然則所謂東孟之會、在哀侯都鄭之初、而年表世家列侯三年、必哀侯三年之誤也。故今係之是年。自通鑑據年表、書聶政事於烈侯三年、綱目大事記皆從之、鮑彪注戰國策、遂改哀爲列、吳師道校注、亦不駁正、皆誤也。 秦縣櫟陽。年表。縣、疑都字之誤。

三年、燕敗齊師於林狐。魯伐齊、入陽關。魏伐齊、至博陵。燕僖公薨、子桓公立。宋休公薨、子桓公辟兵立。宋世家作辟公辟兵。索隱云「紀年作桓侯璧兵」、因改辟爲桓。 衞愼公薨、子聲公訓立。

四年、趙伐衞、取都鄙七十三。魏敗趙師于北藺。

五年、魏伐楚、取魯陽。韓韓嚴弒哀侯、而子懿侯立。韓世家索隱云「紀年、韓山堅賊其君哀侯、而韓若山立。若山卽懿侯也」、則韓嚴爲韓山堅也」。晉世家索隱引紀年云「韓哀侯趙敬侯、並以桓公十五年卒」。桓公十五年、當烈王元年、則敬侯卒年、與年表趙世家合。哀侯卒年、較史在前四年。似爲死於聶政之難、恐非。 魏武侯薨、不立太子、子罃與公中緩爭立、國內亂。

六年、韓公孫頎謂懿侯曰「魏亂、可取也」。懿侯乃與趙成侯合兵伐魏、戰于濁澤、大破之、遂圍魏罃。成侯曰「殺罃立公中緩、割地而退、我二國之利也」。懿侯曰「不可。殺魏君、暴也。割地而退、貪也。不如兩分之。魏分爲兩、不彊於宋・衞、則我終無魏患矣」。趙人不聽。懿侯不悅、以其兵夜去。趙成侯亦去。罃遂殺公中緩而立、是爲惠王。濁澤之戰、年表趙世家、在明年。今從魏世家。水經沁水注、引紀年「趙成侯偃、韓懿侯若、伐我葵」、亦在是年。成侯名種、作偃疑誤。懿侯若、卽若山也。路史國名紀引紀年、葵作郛。又魏世家索隱引紀年云「武侯元年、封公子緩。趙侯種韓懿侯、伐我取蔡、而惠成王伐趙、圍濁陽。七年、公子緩如邯鄲以作難」。趙侯之上、疑脫「惠成王元年」字。濁陽、卽濁澤。七年緩作難、與魏世家異。 楚肅王薨、無子、立其弟良夫、是爲宣王。宋桓公薨、子剔成立。初趙韓魏分晉地、封晉桓公以端氏。是歲、韓趙奪晉端氏、遷桓公于屯留。按、晉世家「孝公十七年卒、子靜公俱酒立。靜公二年、魏韓趙滅晉、三分其地、靜公遷爲家人、晉絕不祀」。事在安王二十六年。然據紀年、孝公作桓公、烈王二年、有邑韓侯于鄭之事。是烈王時、桓公未死、靜公未立、晉祀未嘗絕也。趙世家 魏韓滅晉之後十七年「成侯十六年、與韓魏分晉、封晉君以端氏」、又後十年「肅侯元年、奪晉君端氏、徙處屯留」。不知晉君爲誰。水經濁漳水注引紀年「梁惠成王元年、韓共侯趙成侯、遷晉桓公于屯留」。晉世家索隱亦引云「桓公二十年、趙成侯韓共侯遷桓公于屯留。已後更無晉事」。共侯、卽懿侯、共字疑誤。據此則趙世家所謂晉君者、仍是桓公、奪端徙屯留、卽是年之事、而誤以魏惠王元年爲趙肅侯元年也。奪端氏在是年、則封端氏在前可知、而趙世家以爲成侯十六年、亦誤也。夫晉君之廢、必以漸其始分趙、蓋在烈王二年桓公邑韓侯于鄭之後、又數年、而遷于屯留、後十一年、而屯留又爲韓所奪、見顯王十年。

七年、王崩、弟扁立、是爲顯王。 魏大夫王錯出奔韓。魏敗韓師于馬陵。年表、韓魏世家。 敗趙師于懷。年表趙世家在前一年、惟魏世家在是年。按、前年魏方內亂、何暇伐人。是役與馬陵、蓋所以報濁澤之敗。故今從魏世家。又水經濁漳水注引紀年「惠成王元年、鄴師敗邯鄲師于平陽」、寰宇記相州臨漳道縣下亦引云「梁惠成王敗邯鄲之師于平陽」。恐是與懷之役一事、而傳聞異耳。 齊田壽伐趙取觀。水經河水注引紀年、在梁惠成王二年。魏世家云「齊敗我觀」、年表云「齊伐魏取觀津」、並在後一年。

顯王

元年、趙侵齊、至長城。初周桓公薨、子威公立。威公薨、子惠公立、周本紀。是爲西周君。周策。是年、趙・韓攻周。趙世家。

二年、趙•韓分周以爲兩。趙世家。於是周惠公封少子班于鞏、以奉王、號東周惠公、居洛陽。周本紀。東周惠公、名班居洛陽、據世本。身居洛陽、而采邑在鞏也。或曰「周威公被殺、公子朝嗣、弟子根以東周叛、分爲兩國」。呂氏春秋曰「威公薨殯、九月不得葬、周乃分爲二」。韓非子曰「周威公身殺、國分爲二」、又曰「公子朝、周太子也。弟子根甚有寵於君、君死、遂以東周叛、分爲兩國」。據此、則公子朝、卽西周惠公、子根、卽東周惠公班之字、而周本紀所謂「封其少子」、乃威公之子、非惠公之子、兩惠公兄弟同謚、非父子同謚也。

三年、魏•韓會于宅陽。秦敗魏師•韓師于洛陽。

四年、四月甲寅、魏徙都于大梁。水經渠水注引紀年、在梁惠成王六年。漢書高帝紀臣瓚注引紀年、亦在六年。魏世家集解、孟子疏引、並作九年。史記在後二十五年、顯王二十九年。魏伐宋、取儀臺。越寺區弟思弒其君莽安、而立無顓。索隱引紀年、在無余之立十二年。越世家云「王之侯卒、子無彊立」、無無顓一世。田桓公弒其君母。田世家索隱云「王劭按、記年、公十一年、弒其君母」。所謂君母蓋田侯剡之母也。

五年、秦章蟜與晉戰于石門、斬首六萬。王賀獻公以黼黻之服、獻公稱霸。

六年、魏伐趙、取列人、取肥。水經濁漳水注引紀年、在梁惠王八年。

七年、魏敗韓師趙師于澮。秦庶長國伐魏、戰于少梁、虜魏將公孫痤、取龐。衛聲公薨、子成侯速立。燕桓公薨、子文公立。秦獻公薨、子孝公立。孝公生二十一年矣。是時、河•山以東、彊國六、淮•泗之間、小國十餘。楚•魏與秦接界。魏築長城、自鄭濱洛、以北有上郡。楚自漢中、南有巴黔中。皆以夷翟遇秦、擯斥之、不得與中國之會盟。於是孝公發憤、布德修政、欲以彊秦。

八年孝公下令國中曰「昔我穆公、自岐雍之間、修德行武、東平晉亂、以河爲界、西霸戎翟、廣地千里、天子致伯、諸侯畢賀、爲後世開業、甚光美。會往者厲躁簡公出子之不寧、國家內憂、未遑外事、三晉攻奪我先君河西地、醜莫大焉。獻公卽位、鎮撫邊境、徙治櫟陽、且欲東伐、復穆公之故地、修穆公之政令。寡人思念先君之意、常痛於心。賓客羣臣、有能出奇計彊秦者、吾且尊官、與之分土」。於是乃出兵、東圍陝城、西斬戎之獂王。衛公孫鞅聞是令下、乃西入秦。公孫鞅者、衛之庶孫也。好刑名之學、事魏相公叔痤。痤知其賢、未及

進。會病、魏惠王往問之、曰「公叔病、如有不可諱、將柰社稷何」。公叔曰「痤之中庶子衛鞅、年雖少、有奇才、願君擧國而聽之」。王嘿然。公叔曰「君卽不聽用鞅、必殺之、無令出境」。王許諾而去。公叔召鞅、謝曰「吾先君而後臣。故先爲君謀、後以告子。子必速行矣」。鞅曰、「君不能用子之言任臣、又安能用子之言殺臣乎」。卒不去。王出、謂左右曰「公叔病甚、悲乎。欲令寡人以國聽衛鞅也、旣又勸寡人殺之、豈不悖哉」。公叔痤死、已葬、衛鞅至秦、因嬖臣景監、以求見孝公、說以富國彊兵之術。公大悅、與議國事。九年、王致文武胙于秦。年表、周本紀。

東周惠公薨。年表注、徐廣引紀年、作惠公傑。按惠公名班、非名傑。皇極經世、歷代紀事年表、二以傑爲惠公之子。攷東周策有文君、卽呂氏春秋所謂昭文公、淮南子漢書人表所謂昭文君、蓋惠公之嗣也。

十年、衛鞅欲變法、秦人不悅。衛鞅言於秦孝公曰「夫民、不可與慮始、而可與樂成。論至德者、不和於俗。成大功者、不謀於衆。是以聖人、苟可以彊國、不灋其故」。甘龍曰「不然。因民而敎者、不勞而成功。緣灋而治者、吏習而民安之」。衛鞅曰「常人安於故俗、學者溺於所聞。以此兩者、居官守灋、可也。非所與論於灋之外也」。知者作灋、愚者制焉。賢者更禮、不肖者拘焉」。公曰「善」。以衛鞅爲左庶長。卒定變法之令、令民爲什伍、而相收司連坐。不告姦者、腰斬。告姦者、與斬敵首同賞。匿姦者、與降敵同罰。民有二男以上、不分異者、倍其賦。有軍功者、各以率受上爵。爲私鬭者、各以輕重被刑。大小僇力、本業耕織。致粟帛多者、復其身。事末利、及怠而貧者、擧以爲收孥。宗室非有軍功論、不得爲屬籍。明尊卑爵秩等級、各以差次。名田宅臣妾衣服、以家次。有功者、顯榮。無功者、雖富無所芬華。令旣具、未布、恐民之不信。乃立三丈之木於國都市南門、募民、有能徙置北門者、予十金。民怪之、莫敢徙。復曰「能徙者予五十金」。有一人徙之、輒予五十金。乃下令。令行朞年、秦民之國都、言新令之不便者、以千數。於是太子犯法。衛鞅曰「法之不行、自上犯之。太子、君嗣也、不可施刑」。刑其傅公子虔、黥其師公孫賈。明日。秦人皆趨令。行之十年、秦國、道不拾遺、山無盜賊、民勇於公戰、怯於私鬭、鄉邑大治。秦民初言令不便者、有來言令便。衛鞅曰「此皆亂法

之民也」。盡遷之於邊。其後、民莫敢議令。魏龍賈帥師、築長城于西邊。水經濟水注引紀年、在梁惠成王十二年。年表、魏世家、魏築長城、塞固陽、在後七年。晉桓公旣遷于屯留、地悉入于三晉、惟國名僅存。桓公薨、子靜公俱酒立。是年、韓取晉屯留、靜公遷爲家人、晉絶不祀。晉世家、「靜公二年、魏韓趙分晉、靜公遷爲家人、晉絶不祀。」年表以爲安王二十六年事。然據紀年、魏武侯二十三年、晉桓公邑哀侯于鄭、在烈王二年、「梁惠成王元年、韓趙遷晉桓公于屯留」、在烈王六年、則烈王之世、烈祀未絶也。水經濁漳水注引紀年「梁惠成王十二年、鄭取屯留尙子涅」。太平寰宇記引紀年、尙子作長子、無涅字。屯留被取、則晉無復尺土。晉世家所謂靜公爲家人、晉絶祀者、當必在是年、故書之。趙世家、成侯十六年、「與韓・魏分晉、封晉君以端氏」、正當此年。蓋因此年有取屯留之事、誤以爲分晉地、而不知奪端氏徙屯留、必在取屯留之前、封端氏、又必在奪端氏之前也」。又年表韓世家、韓昭侯十年、「韓姬弑其君悼公」、在顯王二十年。索隱云「姬一作玘、紀年亦作玘、同晉怡。韓之大夫姓名。」按韓無悼公、未詳」。今按、悼公疑是晉之末君、靜公雖廢、而晉尙未全絶也」。趙世家、肅侯元年、「奪晉君端氏」、卽當其年。蓋因其年有弑晉君之事、誤以爲奪晉地也」。然則趙世家之誤年、皆有因而然。反覆參較、始可得發其實也」。然單文片辭、雖知其詳、故不敢書正文、附記其說於此。韓懿侯薨、子昭侯立。據韓世家索隱引紀年、昭侯名武。

十一年、秦敗韓師于西山。

十二年、魏・趙會于鄗。田桓公薨、子因齊嗣爲田侯、是爲齊威王。初齊康公薨、幽公立、至是十八年而薨、無子、奉邑皆入田氏。威王遂幷齊而有之、太公望之後絶祀。田世家云「齊桓公六年卒、子威王因齊立。是歲、故齊康公卒、絶無後、奉邑皆入田氏」。年表云「齊康公二十六年卒、田氏遂幷齊而有之、太公望之後絶祀」、齊世家同。皆爲安王二十三年事、在前二十二年。然田世家索隱云「紀年、梁惠王十三年、當齊桓公十八年、後威王始見、則桓公十九年而卒」、又魏世家索隱云「按紀年、齊幽公之十八年、而威王立」。據此、則康公之後有幽公。齊之末君、卽幽公、而非康公」。又梁惠王十三年、當顯王十一年、其明年、卽此年也。越王無顓薨、無疆立。越世家索隱引紀年、「無顓八年薨、是爲菼蠋卯。顓後、乃次無疆」。魯・衛・宋・韓朝于魏。年表魏世家、在後一年。魏世家索隱云「紀年、惠王十四年、魯恭侯宋桓侯衞成侯鄭釐侯來朝」。按史記、是時魯爲共公、宋桓公已死、剔成在位、鄭釐侯、卽韓昭侯也。紀年以韓爲鄭、昭侯皆作釐侯。韓策或作昭釐侯。

十三年、趙・燕會于阿。趙・齊・宋會于平陸。韓築長城、自卷逕陽武到密。水經濟水注云「竹書紀年、梁惠成王十二年、龍賈築長城于西邊。自亥谷以南、鄭所城矣」。竹書云「是梁惠王十五年築也」。郡國志曰「長城、自卷逕陽武到密」者是矣」。

十四年、齊威王、魏惠王、會田于郊。惠王曰「齊亦有寶乎」。威王曰「無有」。惠王曰「寡人國雖小、尙有徑寸之珠、照車前後各十二乘者十枚。豈以齊大國而無寶乎」。威王曰「寡人之所以爲寶者、與君異。吾臣有檀子者、使守南城、則楚人不敢爲寇、泗上十二諸侯皆來朝。吾臣有盼子者、使守高唐、則趙人不敢東漁于河。吾吏有黔夫者、使守徐州、則燕人祭北門、趙人祭西門、徙而從者七千餘家。吾臣有種首者、使備盜賊、則道不

拾遺。此四臣者、將照千里、豈特十二乘哉」。惠王有慙色。初威王卽位以來、委政卿大夫、國不治、諸侯並伐。於是威王召卽墨大夫、語之曰「自子之居卽墨也、毀言日至。然吾使人視卽墨、田野辟、人民給、官無留事、東方以寧。是子不事吾左右以求助也」。封之萬家。召阿大夫、語之曰「自子守阿、譽言日至。吾使人視阿、田野不辟、人民貧餒、昔日趙攻鄄、子不救、衞取薛陵、子不知。是子厚幣、事吾左右以求譽也」。是日、烹阿大夫、及左右嘗譽者。於是羣臣聳懼、莫敢飾詐、務盡其情、齊國大治、彊於天下。齊策、鄒忌見威王、「言王之所以多蔽」。王乃下令、羣臣吏民、能面刺君過者、受上賞、上書諫君者、受中賞、謗議於市朝、聞君耳者、受下賞。令初下、羣臣進諫、門庭如市。數月之後、時時而間進。期年之後、雖欲言、無可進者。燕・趙・韓・魏聞之、皆朝於齊。無封卽墨大夫烹阿大夫之事。魯共公薨、子康公毛立。趙伐衞、取漆富丘城之。水經濟水注引紀年、在梁惠成王十六年。秦孝公、魏惠王、會于杜平。

十五年、秦敗魏師于元里、斬首七千級、取少梁。魏惠王伐趙、圍邯鄲、楚王使景舍救趙。水經淮水注引紀年「齊侯使楚景舍來求成 公會齊宋之圍」。

十六年、齊威王使田忌救趙。初孫臏與龐涓、倶學兵法。龐涓仕魏爲將軍、自以能不及孫臏、乃召之。至則以法斷其兩足而黥之、欲使終身廢棄。齊使者至魏、孫臏以刑徒、陰見說齊使者。齊使者竊載、與之齊。田忌善而客待之、進於威王。威王問兵法、遂以爲師。於是威王謀救趙、以孫臏爲將、辭以刑餘之人不可。乃以田忌爲將、而孫子爲師、居輜車中、坐爲計謀。田忌欲引兵之趙。孫子曰「夫解雜亂紛糾者、不控拳。救鬭者不搏撠。批亢擣虛、形格勢禁、則自爲解耳。今梁・趙相攻、輕兵銳卒、必竭於外、老弱疲於內。子不若引兵疾走大梁、據其街路、衝其方虛。彼必釋趙以自救。是我一擧、解趙之圍、而收弊於魏也」。田忌從之。十月、邯鄲降魏。魏師還、與齊戰于桂陵。魏師大敗。齊策無孫子、桂陵之捷、出於段干綸之謀。田侯旣從段干綸之說、欲救趙、將起兵、軍於邯鄲之郊。段干綸曰「夫救邯鄲、軍於其郊、是趙不拔而魏全也。故不如南攻襄陵以敝魏、邯鄲拔而承魏之敝。是趙破而魏弱也」。田侯曰「善」。乃起兵南攻襄陵。七月、邯鄲拔。齊因承魏之敝、大破之桂陵。田世家據之、段干綸作段干明。水經淮水注引紀年「宋景公衞公孫倉會齊師、圍我襄陵」、濟水注引紀年「齊田期伐我東鄙、戰于桂陽、我師敗逋」。並爲梁惠成王十七年。孫吳傳索隱云「王劭按、紀年、梁惠王十七年、齊田忌敗梁桂陵」、皆在前一年。又淮水注引紀年「惠成王以韓師敗諸侯師于襄陵」、則在此年。襄陵之戰、乃在桂陵之戰之後、與齊策不合。又魏世家索隱引紀年云「惠王十八年、趙又敗魏桂陵」、蓋趙與齊合軍而敗之也。非桂陵有二役也。然

則紀年以田忌敗魏爲在前年者、恐非。　韓伐東周、取陵觀廩丘。　楚昭奚恤爲相。江乙言於楚王曰「人有愛其狗者。狗嘗溺井、其鄰人見、欲入言之、狗當門而噬之。今昭奚恤常惡臣之見、亦猶是也。且人有好揚人之善者、於王如何」。王曰「此君子也、近之」。江乙曰「好揚人之惡者、於王如何」。王曰「此小人也、遠之」。江乙曰「然則且有子殺其父、臣殺其主者、而王終己不知也。何者、以王好聞人之美、而惡聞人之惡也」。王曰「善。寡人願兩聞之」。

十七年、秦衞鞅爲大良造、將兵圍魏安邑、降之。諸侯圍魏襄陵。

十八年、秦衞鞅圍魏固陽、降之。魏人歸趙邯鄲、與趙人盟漳水上。　韓昭侯以申不害爲相。申不害者、鄭之賤臣也。學黃老刑名、以干昭侯。昭侯用以爲相、內修政敎、外應諸侯、十五年、終申子之身、國治兵彊。申子嘗請仕其從兄、昭侯不許。申子有怨色。昭侯曰「所爲學於子者、欲以治國也。今將聽子之謁、而廢子之道乎。又亡其行子之術、而廢子之請乎。子嘗敎寡人、循功勞、視次第。今有所私求、我將奚聽乎」。申子乃辟舍請罪、曰「君眞其人也」。昭侯有弊袴、命藏之。侍者曰「君亦不仁者矣。不賜左右而藏之」。昭侯曰「吾聞、明主愛一嚬一笑、嚬有爲嚬、笑有爲笑。今袴豈特嚬笑哉。吾必待有功者」。　齊築防、以爲長城。水經汶水注引紀年、在梁惠成王十九年、齊爲威王五年。蘇秦傳正義引爲齊閔王。又齊記云「齊宣王築長城、東至海、西至濟、以備楚」。均與此異。

十九年、秦衞鞅築冀闕宮庭於咸陽、徙都之。令民父子兄弟、同室內息者爲禁。幷諸小鄕聚、集爲一縣、縣置令丞、凡三十一縣。廢井田、開阡陌、平斗桶權衡丈尺。秦•魏遇于彤。　趙成侯薨、公子緤與太子語爭立。緤敗奔韓、語立、是爲肅侯。

二十年、韓姫弑其君悼公。年表、韓世家。

二十一年、秦衞鞅更爲賦稅法、行之。

二十二年、趙公子范襲邯鄲、不勝而死。

二十三年、齊殺其大夫牟辛。　魯康公薨、子景公偃立。　衞更貶號曰侯、服屬三晉。

二十五年、秦會諸侯于周。

二十六年、王致伯于秦。

二十七年、諸侯皆賀秦。　秦孝公使公子少官帥師、會諸侯于逢澤、以朝王、年表、秦本紀。

二十八年、魏龐涓伐韓、韓請救於齊。齊威王召大臣而謀曰「蚤救、孰與晩救」。成侯鄒忌曰「不如勿救」。田忌曰「弗救、則韓且折而入於魏矣。不如蚤救之」。孫臏曰「夫韓•魏之兵未弊、而救之、是吾代韓受魏之兵、顧反聽命於韓也。且魏有破國之志、韓見亡、必東面而愬於齊矣。吾因深結韓之親、而晩承魏之弊、則可以受重利而得尊名也」。王曰「善」。乃陰許韓使而遣之。韓因恃齊、五戰不勝、而東委國於齊。齊策、欲早救者、張丐、而非田忌。欲晩救者、田臣思、而非孫臏。鄒忌曰「不如勿救」、乃桂陵之役、而非此役。水經渠水注引紀年云「梁惠成王二十八年、穰疵帥師、及鄭孔夜戰于梁赫、鄭師敗逋」在前二年。　齊因起兵、使田忌田嬰•田盼將之、馬陵之將、齊策孫吳傳、唯舉田忌、田世家並舉田忌•田嬰、年表又加以田盼。魏世家索隱引紀年「惠王二十八年、與齊田盼戰于馬陵」、田世家索隱云「紀年、威王十四年、田盼伐梁戰馬陵」、並在前二年。肦卽盼也。魏策將太子申章又云「田盼、宿將也、而孫子善用兵」、似田盼爲主帥。　孫子爲師、以救韓、直走大梁。龐涓聞之、去韓而歸、齊師既已過而西矣。魏人大發兵、以太子申爲將、以禦齊師。孫子謂田忌曰「彼三晉之兵、素悍勇而輕齊、齊號爲怯。善戰者、因其勢兵利導而。兵灋、百里而趣利者、蹶上將、五十里而趣利者、軍半至」。乃使齊軍、入魏地爲十萬竈、明日、爲五萬竈、又明日、爲二萬竈。龐涓行三日、大喜曰「我固知齊軍怯。入吾地三日、士卒亡者過半矣」。乃棄其步軍、率輕銳、倍日幷行逐之。孫子度其行、暮當至馬陵道陿、而旁多阻隘、可伏兵。乃斫大樹、白而書之曰「龐涓死此樹下」。於是令齊師善射者、萬弩夾道而伏、期日暮見火擧而倶發。龐涓果夜到斫木下、見白書、以火燭之。讀未畢、萬弩倶發。魏師大亂相失。龐涓自知智窮兵敗乃自剄、曰「遂成豎子之名」。齊因乘勝、大破魏師、虜太子申。馬陵之戰、齊魏二策詳記之。孫子在軍中、亦見二策。然齊師過而西、竟不合於地理。減竈斫樹之談、蓋好事者爲之也。　成侯鄒忌、惡田忌、使人操十金卜於市、曰「我、田忌人之也。我爲將、三戰三勝。欲行大事、可乎」。

卜者出、因使人執之。田忌不能自明、率其徒攻臨淄、求成侯、不克、出奔楚。據齊策、孫子勸田忌以襲齊、而田忌不聽、與此異。

二十九年、衞鞅言於秦孝公曰「秦之與魏、譬若人有腹心之疾、非魏幷秦、秦卽幷魏。何者、魏居嶺阨之西、與秦界河、而獨擅山東之利。利則西侵秦、病則東收地。今以君之賢聖、國賴以盛、而魏往年大破於齊、諸侯畔之、可因此時伐魏。魏不支秦、必東徙。然後秦據河山之固、東鄕以制諸侯、此帝王之業也」。公從之、使衞鞅將兵伐魏。魏使公子卬將而禦之。軍既相距、衞鞅遺公子卬書、曰「吾始與公子驩。今俱爲兩國將、不忍相攻。可與公子面相見盟、樂飮而罷兵、以安秦魏之民」。公子卬以爲然、乃相與會盟。已飮、而衞鞅伏甲士、襲虜公子卬、因攻魏師、大破之。魏惠王恐、使使獻河西之地於秦以和。乃嘆曰「吾恨不用公叔之言」。秦封衞鞅商於十五邑、號曰商君。水經濁漳水注引紀年「梁惠成王三十年、秦封衞鞅於鄔、改名曰商」、在前一年。 齊趙伐魏、趙世家「肅侯十一年、趙伐魏」、疑衍一字。田世家云「三晉之王、皆因田嬰、朝齊王於博望、盟而去」、徐廣引表云「與趙會博望伐魏」。今表但云與趙會伐魏」、無博望二字。水經泗水注引紀年「梁惠成王二十九年齊田盼及宋人、伐我東鄙、圍平陽」、魏世家索隱引紀年、惠王二十九年五月 齊田盼伐我東鄙、十月 邯鄲伐我北鄙」、在前二年。五月與十月、相距五月、似齊趙各自伐魏、非會軍伐之」。 邳遷于薛、改名徐州。水經泗水注引紀年、在梁惠成王三十一年。魯世家索隱、孟嘗君傳正義、並引紀年、邳作下邳。 楚宣王薨、子威王商立。 韓昭侯薨、威侯立。韓世家索隱引紀年云「鄭昭侯武薨、次威侯立。威侯七年、與邯鄲圍襄陵。五月、梁惠王會威侯于巫沙。十月、鄭宣王朝梁。八年、梁敗趙將韓舉」。十月上、疑脫威侯薨事。所謂八年、宣王之八年、故八年敗韓舉、舉與表韓世家合。據此推之、韓昭侯以是年薨、明年爲威侯元年、威侯在位七年、以顯王三十六年薨、而宣王立。史脫威侯一世也。故補記焉。

三十年、秦與魏戰于岸門、秦本紀索隱引紀年。年據年表。 虜其將魏錯。秦本紀「孝公二十四年、與晉戰鴈門、虜其將魏錯」、在後一年。

三十一年、秦孝公薨、太子駟立、是爲惠文王。公子虔之徒、告商君欲反、發吏捕之。商君出亡、將止客舍。舍人曰「商君之法、舍人無驗者坐之」。商君歎曰「爲法之弊、一至此哉」。去之魏、魏人不受、復內之秦。商君乃與其徒之商於、發兵北擊鄭。秦人攻商君殺之、車裂以徇、盡滅其家。初商君相秦、用法嚴酷、嘗臨渭論囚、渭水盡赤。爲相十年、人多怨之。趙良見商君。商君問曰「子觀我治秦、孰與五羖大夫賢」。趙良曰「千人之諾諾、不如一士之諤諤。僕請終日正言、而無誅、可乎」。商君曰「諾」。趙良曰「五羖大夫、荆之鄙人也。穆公擧

之牛口之下、而加之百姓之上、秦國莫敢望焉。相秦六七年、而東伐鄭、三置晉君、一救荆禍、巴人致貢、八戎來服。其爲相也、勞不坐乘、暑不張蓋、行於國中、不從車乘、不操干戈。五羖大夫死、秦國男女流涕、童子不歌謠、舂者不相杵。今君之見也、因嬖人景監以爲主。其從政也、凌轢公族、殘傷百姓。公子虔杜門不出、已八年矣。君又殺祝懽、而黥公孫賈。詩曰「得人者興、失人者崩」。此數者、非所以得人也。君之出也、後車載甲、多力而駢脅者、爲驂乘、持矛而操闟戟者、旁車而趨。此一物不具、君固不出。書曰「恃德者昌、恃力者亡」。此數者、非恃德也。君之危若朝露、而尙貪商於之富、寵秦國之政、畜百姓之怨。秦君一旦捐賓客而不立朝、秦國之所以收君者、豈其微哉」。商君弗從。居五月而難作。

三十二年、韓申不害卒。 楚・韓・趙・蜀人朝于秦。

三十三年、王賀秦。年表、周秦本紀。

三十四年、

三十五年、齊威王與魏惠王、會于徐州、以相王。年表、齊魏世家。 魏改元稱一年。杜預左傳後序云「紀年篇、惠王三十六年改元、從一年始、至十六年而卒」。是以三十七年爲後元一年也。魏世家索隱云「惠成王後元十七年卒」、則三十六年、卽爲後元一年、似以稱王之前年已改元、恐非。 越王無彊伐齊。齊威王使人說之、以伐齊不如以伐楚利。越王遂伐楚。楚威王大敗之、殺王無彊、越世家索隱引紀年「無顓薨後十年、楚伐徐州」、卽指明年徐州之圍、在前十四年。索隱又云「紀年無楚敗越殺無彊之語」、路史亦云「楚威滅越盡有其地」。史云殺之、紀年無」與史大異。 盡取吳故地、東至于浙江。越以此散、諸公族爭立、或爲王、或爲君、濱於海上、朝服於楚。

三十六年、楚威王伐齊、圍徐州。韓威侯與趙圍魏襄陵。五月、魏惠王會威公于巫沙。威侯薨、宣惠王立。十月、宣惠王朝于魏。韓世家索隱引紀年、見上二十九年、韓昭侯薨條。宣惠王立年、據年表韓世家。 趙築長城。趙世家。 初洛陽人蘇秦、說秦惠王以兼天下之術、惠王不用其言。蘇秦乃去、說燕文公曰「燕之所以不犯寇被甲兵者、以趙之爲蔽其南也。且秦之攻燕也、戰於千里之外。趙之攻燕也、戰於百里之內。夫不憂百里之內、而重千里之外、計無過於此者。願君與趙從親、天

下爲一、則燕國必無患矣」。文公從之、資蘇秦車馬、以說趙肅侯曰「當今之時、山東之建國、莫彊於趙。秦之所害、亦莫如趙。然而秦不敢舉兵伐趙者、畏韓・魏之議其後也。秦之攻韓・魏也、無有名山大川之限、稍蠶食之、傳國都而止。韓・魏不能支秦、必入臣於秦。秦無韓魏之隔、則禍必中於趙矣。臣以天下圖案之、諸侯之地、五倍於秦、料度諸侯之卒、十倍於秦。六國爲一、幷力西鄉而攻秦、秦必破矣。夫衡人者皆欲割諸侯之地、以與秦成。與秦成、則其身富榮、國被秦患、而不與其憂。是以衡人日夜、務以秦權恐愓諸侯、以求割地。故願君熟計之也。竊爲君計、莫如一韓魏齊楚燕趙、爲從親、以畔秦、令天下之將相、會於洹水之上、通質結盟、約曰「秦攻一國、五國各出鋭師、或橈秦、或救之。有不如約者、五國共伐之」。六國從親以擯秦、秦甲必不敢出於函谷、以害山東矣」。肅侯大說、厚待蘇秦、尊寵賜賚之、以約於諸侯。於是蘇秦說韓宣惠王曰「韓地方九百餘里、帶甲數十萬、天下之彊弓勁弩利劍、皆從韓出。韓卒超足而射、百發不暇止。以韓卒之勇、被堅甲、蹠勁弩、帶利劍、一人當百、不足言也。君事秦、秦必求宜陽成皐。今玆効之、明年復來割地。與則無地以給之。不與則棄前功、受後禍。且君之地有盡、而秦求無已。以有盡之地、逆無已之求、此所謂市怨結禍者也。不戰、而地已削矣。鄙諺曰「寧爲雞口、無爲牛後」。夫以君之賢、挾彊韓之兵、而有牛後之名、臣竊爲君羞之」。宣惠王從其言。蘇秦說魏惠王曰「大王之地方千里、地名雖小、然而田舍廬廡之數、曾無所芻牧、人民之衆、車馬之多、日夜行不絶、輷輷殷殷、若有三軍之衆。臣竊量大王之國、不下楚。今竊聞大王之卒、武士二十萬、蒼頭二十萬、奮擊二十萬、廝徒十萬、車六百乘、騎五千匹。乃聽於羣臣之說、以欲臣事秦。故敝邑趙君、使臣効愚計、奉明約、在大王之詔詔之」。惠王聽之。蘇秦說趙威王曰「齊、四塞之國、地方二千餘里、帶甲數十萬、粟如丘山、三軍之良、五家之兵、進如鋒矢、戰如雷霆、解如風雨、卽有軍役、未嘗倍泰山、絶淸河、涉渤海也。臨淄之中七萬戶、臣竊度之、不下戶三男子。不待發於遠縣、而臨淄之卒、固已二十一萬矣。臨淄甚富而實、其民無闘不雞走狗、六博闒鞠者、臨淄之塗、車轂擊、人肩摩、連袵成帷、揮汗成雨。夫韓・魏之所以重畏秦者、爲與秦接境壤也。兵出而相當、不十日而勝負存亡之機決矣。韓・魏戰而勝秦、則兵半折、四境不守。戰而不勝、則國已危、亡隨其後。是韓・魏之所以重與秦戰、而輕爲之臣也。今秦之攻齊、則不然。倍韓魏之地、過衞陽晉之道、徑平亢父之險、車不得方軌、騎不得比行、百人守險、千人不能過也。秦雖欲深入、則狼顧、恐韓・魏之議其後也。是故恫疑虛喝、驕矜而不敢進、則秦之不能害齊亦明矣。夫不深料秦之無奈齊何、而欲西面而事之、是羣臣之計過也。今無臣事秦之名、而有彊國之實、臣是故願大王少留意計之」。威王許之。乃西南說楚威王曰「楚、天下之彊國也。地方五千餘里、帶甲百萬、車千乘、騎萬匹、粟支十年、此霸王之資也。秦之所害、莫如楚。楚彊則秦弱、秦彊則楚弱、其勢不兩立。故爲大王計、莫如從親以孤秦。臣請令山東之國、奉四時之獻、以則承大王之明詔、委社稷、奉宗廟、練士厲兵、在大王之所用之。故從親、則諸侯割地以事楚。衡合、則楚割地以事秦。此兩策者、相去遠矣。大王何居焉」。楚威王亦許之。於是蘇秦爲從約長、幷相六國、北報趙、車騎輜重、擬於王者。趙乃投約從書于秦、封蘇秦爲武安君。蘇秦傳。按秦策、趙封蘇秦、在說韓魏之前。燕文公薨、子易王立。

衞成侯薨、子平侯立。秦以陰晉人犀首爲大良造年表、秦本紀。使之伐魏、大敗其師四萬餘人、禽將龍賈、取雕陰。蘇秦傳、魏世家。年據年表。秦本紀云「惠文王七年、公子卬與魏戰、虜其將龍賈、斬首八萬」、在後二年。公子卬、蓋公孫衍之誤。魏世家在後三年。

三十七年、秦惠王使犀首欺齊・魏、與共伐趙、以敗從約。趙肅侯讓蘇秦。蘇秦恐、請使燕必報齊。蘇秦去趙、而從約皆解。蘇秦傳。年據年表田趙世家。趙人決河水、以灌齊・魏之師、齊・魏之師乃去。田趙世家。魏、以陰晉爲和於秦、寔華陰。

齊威王因燕喪伐燕、取十城、已而復歸之。

三十八年、義渠內亂。秦使庶長操將兵定之。年表。

三十九年、秦伐魏、圍焦曲沃。魏入少梁河西地於秦。年表、魏世家。秦本紀、圍焦在明年。

四十年、秦伐魏、度河、取汾陰皮氏、拔焦、與魏惠王會于應。楚威王薨、子懷王槐立。宋公剔成之弟偃、襲攻剔成。剔成奔齊、偃自立爲君。魏人張儀、初遊諸侯、無所遇、困於楚、遂入秦。秦惠王說之、以爲客卿。張儀傳。

四十一年、秦公子華與張儀、帥師圍魏蒲陽、取之。張儀言於惠王、請以蒲陽復與魏、而使公子繇質於魏。儀因說魏惠王曰「秦之遇魏甚厚、魏不可以無禮於秦」。魏因盡入上郡十五縣、以謝焉。張儀歸而相秦。

四十二年、秦縣義渠、以其君爲臣。秦歸焦曲沃於魏。

四十三年、趙肅侯薨、子雍立、是爲武靈王。

四十四年、趙以陽文君趙豹魏相。爲惠王與太子嗣、韓宣王與太子倉、朝于信宮。武靈王少、未能聽政、置博聞師三人、左右司過三人。及聽政、先問先君貴臣肥義、加其秩。四月、戊午、秦初稱王、以明年更爲元年、衞平侯薨、子嗣君立。衞有胥靡、亡之魏、因爲魏惠王之后治病。嗣君聞之、請以百金買之。五反。魏不與。乃以左氏易之。左右諫曰「夫以一都買一胥靡、可乎」。嗣君曰「非子所知也。夫治無小、亂無大。灋不立、誅不必、雖有十左氏無益也。灋立誅必、失十左氏無害也」。惠王聞之曰「人主之欲、不聽之不祥」。因載而往、徒獻之。

魏敗趙將韓舉趙護。韓世家索隱引紀年「鄭宣王八年、梁敗趙將韓舉」、在是年。年表、趙將作韓將。趙世家云「肅侯二十三年、韓舉與齊魏戰、死於桑丘」、在前二年。水經河水注引紀年、晉烈公十年 亦有趙將韓舉、距此己八十五年、蓋別人也。又年表云「趙武靈王元年、魏敗我趙護」。齊田嬰使於韓魏、韓・魏服于齊。嬰與韓宣王魏惠王、會齊威王于平阿南、盟而去。孟嘗君傳、韓宣王作昭侯、齊威王作宣王、平阿作東阿、爲齊宣王七年事、在前十一年。索隱云「紀年、當惠王之後元十一年、作平阿」。今據改。年表、齊魏世家、皆云「齊魏會平阿南」、無韓王。

四十五年、秦張儀帥師伐魏、取陝、築上郡塞。張儀傳。蘇秦通於燕文公之夫人、易王知之。蘇秦恐、乃說易王曰「臣居燕、不能使燕重、而在齊則燕重」。易王許之。乃僞得罪於燕而奔齊。齊威王以爲客卿。蘇秦說威王、高宮室、大苑囿、以明得意、欲以敝齊而爲燕。

四十六年、四月、齊封田嬰於薛、號曰靖郭君。靖郭君言於威王曰「五官之計、不可不日聽而數覽也」。王從之。已而厭之、悉以委靖郭君。靖郭君由是得專齊之權。靖郭君欲城薛。客謂靖郭君曰「君不聞海大魚乎。網不能止、鉤不能牽。蕩而失水、則螻蟻制焉。今夫齊、亦君之水也。君長有齊、奚以薛策。苟爲失齊、雖隆薛之城到於天、庸足恃乎」。乃不果城。齊策。史記、田嬰封於薛、在後二年。孟嘗君索隱引紀年「梁惠王後元十三年四月、齊威王封田嬰於薛、十月齊城薛」。今因移於此。但城薛、因客諫而輟、策文甚明、紀年似誤。楚柱國昭陽攻魏、破之于襄陵、取八邑。楚世家。韓燕皆稱王。年表、燕楚世家。韓爲王、秦本紀、在前二年、韓世家在後一年。趙武靈王獨不肯、曰「無其實、敢處其名乎」。令國人謂己曰君。秦張儀及齊楚之相、會齧桑。齊威王魏惠王會于甄。孟嘗君傳索隱引紀年、在惠王後元十三年、距平阿之會二年。孟嘗君傳、宣王七年、有東阿之會、明年。復與梁惠王會甄、是歲、惠梁王卒。年表齊魏世家皆同。蓋此二會、皆在惠王之末年。史記誤以惠王後元爲襄王之世、故竟以二會爲惠王三十五六年事也。

四十七年、秦張儀自齧桑還、而免相、相魏、欲令魏先事秦而諸侯効之。魏惠王不聽。秦惠王怒伐魏、取曲沃平周、復陰厚張儀益甚。儀慚無以歸報、留魏。

四十八年、王崩、子愼靚王定立。燕易王薨、子噲立。齊威王薨、子宣王辟彊立、封田嬰於彭城。孟嘗君傳索隱云「紀年以爲梁惠王後元十三年四月、齊威王封田嬰於薛、十月、齊城薛、十四年、薛子嬰來朝、十五年齊威王薨、嬰初封彭城。皆與此文異」。按史記、威王薨、在前二十二年。蓋史叙田氏世系、脫田悼子田侯剡二世、田桓公在位十九年、亦誤爲僅六年。故威王元年、當顯王十三年、而史則在前二十二年、安王二十四年。而在位三十六年、其數正與紀年合。初田嬰善齊貌辨、舍之上舍、令長子御之、旦暮進食數年。宣王立、田嬰被疏、辭而見薛。齊貌辨見宣王。王曰「子、靖郭君之所聽愛乎」。曰「愛則有之、聽則無有」。「王爲太子時、辨謂靖郭君曰「太子相不仁、不若廢之」。靖郭君泣曰「吾不忍也」。至於薛、昭陽請以數倍之地易薛、辨又勸之。靖郭君曰「受薛於先王。雖惡於後王、吾豈可先王之廟與楚乎」、又不聽。宣王太息曰「寡人少、殊不知之。客肯爲寡人來靖郭君乎」。辨曰「敬諾」。田嬰衣威王衣冠、帶其劍。宣王自迎於郊、望之而泣、因復相之。齊策。田嬰有子四十餘人、其賤妾之子曰文。文、通儻饒智略、說嬰以散財養士。嬰使文主家、待賓客。賓客爭譽其美、皆請嬰以文爲嗣。嬰許之。韓宣惠王、欲兩用公仲公叔爲政、問於樛留。對曰「不可。晉用六卿、而國分。齊簡公用陳成

子及闕止、而見殺。魏用犀首張儀、而西河之外亡。今君兩用之、其多力者內樹黨、其寡力者籍外權。羣臣有內樹黨以驕主、有外爲交以削地、君之國危矣」。

周紀補訂 終

元史列傳多闕漏

この一篇は其名の示すが如く元史列傳の闕漏を考證したるもの。蓋し明治二十六七年頃の作なり。元史は支那の正史二十四史中尤も疎漏紕繆多く、其頒行の時に當り、既に世の非難を受けたり。本篇は其闕漏の一端を考證したるもの、短篇なりといへども元史研究者之を精讀せば、必ず益する所あらん。

元史列傳多闕漏

元史之作、明初儒臣、草率竣事、舛漏頗多、顧炎武邵遠平、已指出列傳中有同人重出者、（列傳第八之速不台、即第九之雪不台、第十八之完者都、即第二十之完者拔都、第三十之石抹也先、即第三十九之石抹阿辛、又第十直脫兒傳、既載其從子忽剌出、後又有忽剌出傳、第十九杭忽思傳既載其子阿塔赤、後又有阿荅赤傳）趙翼又論人名地名用字不畫一、（宋史兀良合台、元史本紀解作帶、本傳作台、阿塔海傳作歹、朮赤台傳作兀里羊哈台、食貨志又作兀里羊哈歹、金史完顏合達、元史雪不台傳作合鞑靼、郭德海傳哈達、李冶傳作合荅、速不台已作雪不台、分爲兩傳、而按扎兒傳又作唆伯台、昔里鈐部傳又作速卜帶、土兀剌河見本紀、速不台傳作禿兀剌河、又禿剌河、巴而朮阿而忒傳作禿忽剌河、雪不台傳作篤列河、斑珠尼河見本紀及諸傳、雪不台傳作斑朱泥河、速哥傳作班朮居河、居蓋尼之誤寫、曷思麥里傳作斑眞河、耶律阿海傳作辨也河、耶律禿花傳作班朮河、如是之類、不暇枚擧、）其率略之甚者、則宗王功臣、有宜立傳而不立者也、據元朝祕史、也速該有六子、一曰帖木眞、（元史本紀作鐵木眞、蒙古源流作特穆津、）是爲太祖、二曰拙赤合撒兒、（本紀及別里古台傳作合撒兒、食貨志作搠只哈撒兒、忙哥撒兒傳搠作槊、李恆傳作合撒兒、宗室表作搠只哈兒、蓋脫撒也、蒙古源流作哈薩爾、）三曰合赤溫、（食貨志宗室表作哈赤温、蒙古源流作哈濟錦、）四曰帖木格斡惕赤斤、（本紀作斡赤斤、又斡陳那顏、食貨志作斡眞那顏、岳璘帖穆爾、撒吉思、王珍諸傳作斡眞、宗室表作鐵木哥斡赤斤、下云、所謂斡嗔那顏者也、蒙古源流作諤楚肯又鄂齊綿、丘長春西遊記、作斡辰、）五曰別克帖兒、（蒙古源流作伯克特爾、）六曰別勒古台、（本傳及宗室表作別里古台、太祖紀台或作臺、太宗紀作孛魯古帶、耶律留哥傳帶作台那、食貨志作孛羅古解、蒙古源流作伯勒格標依、）別克帖兒爲太祖所殺、本紀逸其事、宗室表並其名失之、遂以別勒古台爲烈祖（即也速該）第五子、合撒兒、別勒古台、俱從太祖百戰、摧鋒陷陣、不避艱險、太祖嘗曰、有哈撒兒之射、別里古台之力、此朕之所以取天下也、然則二王之武功、不可軒輊也、而元史獨爲別里古台立傳、而哈撒兒則無傳、斡眞那顏、勇武亞於哈撒兒、太祖征西域、斡眞受命監國、群部帖服、基業倚安、其功固不在從征諸將之下、可不爲立一傳乎、太祖長子朮赤、（本紀本傳宗室表等皆同、元朝祕史作拙赤、蒙古源流作珠齊、）次子、察合台、（太祖紀宗室表等同、太宗紀作茶合帶、博爾朮傳作察哈歹、祕史作察阿歹、源流作察干岱、）功侔名齊、俱膺大封、子孫君臨西域、各十餘世、今朮赤僅有傳、而其子拔都汗以下、歷世之事跡盡闕、至察合台王國、（以其祖之名爲國號也、）則併始封之君、不立其傳、世祖弟旭烈兀、（本紀諸傳或無兀字、）征服波斯、因封其國、號爲伊兒汗、與朮赤・察合台之裔、鼎峙於西域、其武略實出於二伯父之右、而亦無傳、此皆宗王之不可無傳者也、諸功臣事蹟、亦多闕漏、畏答兒及博羅歡傳、有十功臣之稱、不詳其爲誰、按元朝祕

史、太祖謂忽必來、（太祖紀作虎必來、）曰、汝與者勒篾（太祖紀作折里麥、忙哥撒兒傳作哲里馬、蒙古源流作濟勒蔑、）者別、（詳後）速別額台、（卽元史之速不台、源流作蘇伯格特依、）四人、偪强如猛狗、所向堅石可碎、深水可斷、吾以四人爲先鋒、孛斡兒出（本紀本傳作博爾朮、脅乃台傳作博兒朮、源流作博郭爾濟、）木合黎、（元史作木華黎、源流作摩和賚、或作穆郭里、）孛羅兀、（本傳作博爾忽、太祖紀作博羅渾、源流作博羅郭勒、）赤老溫、（元史同、源流作齊拉袞、）隨我、主兒扯歹（本傳作朮赤台、太祖紀作捕赤斛、畏答兒傳作朮徹台、源流作楚勒吉台、）忽亦勒答兒、（本傳作畏答兒、朮赤台傳作忽因荅兒、源流作貴里逵爾、又古里逵爾、）立我前、則使我心安、此十將、實太祖之所倚仗、則所謂十功臣者、亦謂是歟、孛斡兒出、木合黎、孛羅兀勒、赤老溫四人、元史作博兒朮・木華黎・博爾忽・赤老溫、號曰掇里班曲律、猶言四傑也、蒙古源流、又有九烏爾魯克之稱、謂親軍九隊之將博郭爾濟羅郭勒干沙剌、摩和賚、者別、蘇伯格特依、濟勒墨、錫吉呼圖克、哈剌乞拉果也（九烏爾魯克之人名、源流漢譯本脫之、今據西人所譯出、）太祖卽大汗位時、建一大纛懸以九白旄者、卽以表九隊也、元史則曰、建九斿白旗、九斿者、九旄之誤、旗者纛之誤、又誤以旄之白加之於旗、且不言其用九之故、疎矣、忽必來、元史作虎必來、源流不見其名、錫吉呼圖克、祕史作失乞忽都忽、而不列於十將、元史太祖紀、睿宗、畏答兒等傳、皆略曰忽都忽、據法朗西人都遜之蒙古史、忽都忽者、太祖養子也、合剌乞剌果之名、元史・祕史、並無所見、恐音有轉訛、托爾干沙剌、祕史作瑣兒罕失剌、卽赤老溫之父、父子俱有勳勞、父列於烏爾魯克、子列於掇里班曲律、而元史並無傳、故錢大昕曰、史旣不爲赤老溫立傳、而瑣兒罕失剌救太祖之事、亦不著於本紀、闕漏之甚者也、祕史之十將、與源流之九烏爾魯克、雖彼此有出入、不悉相合、蓋皆創業佐命之大功臣、而列傳不可闕者也、而元史有傳者、止於博爾朮、（祕史之孛斡兒出、源流之博郭爾濟、）木華黎、（祕史之木合黎、源流之摩和賚、）博爾忽、（祕史之孛羅兀勒、源流之博羅郭勒、）速不台、（祕史之速別額台、源流之蘇伯格特依、）朮赤台、（祕史之主兒扯歹、源流之楚勒吉台、）畏答兒、（祕史之忽亦勒答兒、源流之貴里逵兒、）六人、其他七將虎必來（祕史之忽必來、）忻里麥、（祕史之者勒篾、源流之濟勒墨、）者別、瑣兒罕失剌、赤老溫、忽都忽、哈剌乞拉果、僅見其名於紀傳文中、或全失其名、可不謂粗漏乎、然虎必來、折里麥等事蹟、不多傳於世、則其不立傳、亦出於不得已、至於者別、則勳業赫赫、不在木華黎、速不台之下、波斯人剌悉特受伊兒汗鄂勒哲圖之命、作編年纂錄、記者別、速不台以下諸將之戰功甚詳、而明人未及知之、故元史竟不爲者別立傳、且其名散出於紀傳者、岐互殊甚、太祖卽位以前作哲別、卽位以後作遮別、木華黎及耶律阿海傳作闍別、吾也而傳作折不那顏、曷思麥里傳作哲伯、速不台傳作只別、巴而朮阿而忒的斤傳作者必那演、布智兒傳作別那顏、寶玉傳作柘柏、故讀者觀此等名字、不察其實爲一人、遂使名將之偉蹟、破碎分散、失傳於世、非據西人之記載、則誰復知元初有此名將、是元史率略之尤甚者也。（明治　年　月發行支那學）

稱謂私言

本篇は明治二十七年二月十五日故那珂博士が大日本教育會の常集會に於て講演せられたるものにして、其口語文速記は同會雜誌第百四十二號に掲載せられたり。本篇は其口語を文語に改めて、二十七年三、四兩月の第一高等中學校の校友會雜誌に載せられたるものなり。主として和漢の尊號、官爵名字、及び擡頭平闕等の事を論じ、朝鮮の稱謂にも及びしものなれば、世の大義名分を論じ、制度を研究するものに缺く可からざる有益の一篇なり。

稱謂私言

○稱謂とは、己を呼び又人を呼ぶ總て官爵名號等に關する言葉を申したるにて、稱謂は即ち名なり。名のことは、古の聖人も「名正しからざれば言順ならず、言順ならざれば事成らず」と仰せられたることにて、名を正うすると云ふことは、大切のことなり、此の名の事に就て此の節世間にて用ふる言葉に正しからずと思はるるやうなることも大分見ゆる故に、其のことに就て少しく陳べんと思ふなり。箇條數も多ければ、さつさと走るべし。

○第一には、畏れ多きことなれ共、天皇陛下を指して申し上ぐる言葉に新聞其の他のものに折々見掛くる叡聖文武と申上ぐることなり。

天皇のことを叡聖文武天皇と申上げたることは、余の記憶する所に據れば、明治六七年頃の東京日日新聞に初めて見えたり。其の頃に或る投書家……何人なりしか、「日報社吾曹先生は、天皇のことを叡聖文武天皇と申上ぐるが、陛下は、何時さやうなる尊號を受けさせられたることありや」と云ふ投書の見えたることありしが、遂に其の儘になりて、其れより世間にて此の尊號を用ふること一般に行はれたり。それに就て尊號のことを一寸申し述ぶべし。尊號の起りは、支那に漢の哀帝といふ馬鹿天子ありて、陳聖劉太平皇帝と號したるより始まりて、其後南北朝の頃周の宣帝と云ふ道樂なる天子、この天子隱居して太子に位を讓りて自ら天元皇帝と云ふ尊號を稱へたり。是は、隱居の後の事なりき。其の後唐の世に至りて、名高き則天武后の初めて帝位に陞りたる時、群臣尊號を奉つて聖神皇帝と申したり。然るに聖神皇帝にては滿足せず、二三年を經て、佛經に見えたる金輪王と云ふ語を其の上に加へて、金輪聖神皇帝と號し、それにてもまだ足らずして、

其の上に慈氏越古と云ふ四字を加へ、其の次には慈氏越古を除きて天册と云ふ字を加へて、天册金輪聖神皇帝と稱へさせたり。これより歴代の帝王の尊號を附くること流行して、其の尊號の著きものは、唐の玄宗の卽位の初に開元神武皇帝、それより續きて其れの上に復た字を加へ、段々字を加へて、天寶十三載に至りて六遍目の尊號と云ふ時には、開元天地大寶聖文神武證道孝德皇帝と云へり。五代の世には、石敬瑭が契丹帝の援けを得て晉帝の位に卽きたる時に、契丹帝に十六字の尊號を奉りき。それより以後は、尊號益々長く、明清の尊號は、十六字或は二十字或は二十四字などの長き美號を附くるやうになれり。併し宋の仁宗、神宗抔云ふ明君は、尊號抔は受けたることなし。皇國の例にて云へば、皇朝は古より質朴を貴ばれて、尊號抔を受けたるお方は有らざれども、只孝謙天皇…畏れ多きことながら、歴代の帝王の中にて餘り明聖と申し奉り難き御方なるが、この天皇、始めて寶字稱德孝謙皇帝と云ふ尊號を受けさせられ、其の時の皇太后には天平應眞仁正皇太后と云ふ尊號を奉らしめ給へり。これは、皇朝にて唯一度尊號を受けさせられたる例なり。其孝謙天皇の尊號を受けさせられたるは、やがて唐の玄宗の盛に尊號を受けたる眞似をせられたるならん。其の後は、歴代の帝王に尊號を受けさせられたるお方は御一人もあらざりき。支那には歴代の帝王に色々の尊號ある中に、唐の憲宗と云ふ天子が、淮西の賊を平らげたるに就て、其の時に奉りたる尊號は、叡聖文武皇帝と申したり。淮西を平げたるは立派なる功業なれ共、此の天子は後には道樂をして、遂に國も亂れ、政事も破れ、遂に宦臣の陳弘志に殺されたれば帝王の中にては目出度もなき人なり。支那の北京の都に帝王廟と云ふものありて、三皇五帝以來の歴代帝王を皆併せ祠れり。其の内に國を亡したる天子や人に殺されたる天子は、祠られざる例なれば、卽ち唐の憲宗は帝王の廟よりも除かれたる人なり。かかる天子に附けたる尊號を世人は何故に珍重するか、甚不思議なり。尤も叡聖文武と云ふ字面は、立派なる字面なれども、聖德を讃美するに、此の熟字に限れることもあるべからず。然るに世間にて此の熟字を多く用ふるは、或は韓退之の佛骨表の中に「伏て惟るに叡聖文武帝皇帝陛下云云」と書きたるに由りて、その眞似をするにはあらざるか。佛骨表は憲宗に奉る者なれば、叡聖文武と云へるは當然の事なれども、韓退之の言なりとて、時と所とを辨へずに、其の眞似しては、不都合なり。昔馬鹿婿ありて、弔詞の言葉を敎へられて述べたるは善かりしが婚禮の席に又其の言葉を用ひて笑はれたりと云ふ話あり。憲宗の尊號を他の場合に用ふるは、婚禮の席に弔詞を述ぶると同じことなり。且支那にては、尊號と云ふものは、臣下より恣に附けて申上ぐることは出來ざる事なり。臣下より恣に附けては、尊號にあらずして綽號なり。若し左樣に天子へ勝手に綽號を付けて上奏などに書く人あらば、支那は刑罰の嚴酷なる所なれば、不敬の罪に當てらるべし。支那の法律は誠に亂暴なり。我が聖朝は總ての制度寬大なるが上に、殊に宮廷に於かせられては、斯の如き瑣末なる例抔は、お咎めなく、何事も寬大のお取扱になれり。さるからに始まりは新聞に見えたる位なりしが、今に至りては立派に貴族院の上奏と云ふものにも先づ此の語を用ふるを、上にては其の儘に受けさせらるゝ事と見ゆ。世の中は實に變りたるものなり。

○貴族院の上奏のことを云へば、僅かの事なれ共、其の上奏文の始まりに臣貴族院議員と書かれたり。衆議院の上奏には衆議院議長臣某等と書きたるが、貴族院のは、職名の上に臣と云ふ字を書きたるは、甚珍し。臣の字は官職の下姓名の上に挾むべきものにて、若し臣下の姓名を略して、其の役所全體より申上ぐる場合には、太政官謹奏、中務省謹奏など云ふ樣に、臣の字を書かざるは、昔の例なり。又君の前には臣名をいふと云へば、臣と云へる時は、其下に必姓名を書くべきなり。三百人を一々は書かれざれば、議長だけにても宜しからん。

上奏文の序でに猶一つ云はん。上奏文には闕字をし、又平出をすることあり。是は、公式令に、天皇とか皇后とか皇太后とか祖宗列聖抔云ふやうに、古今の天子の御身の上を直ちに指して申上ぐる場合には、平出と云ひて、前の行りの初の字と同じ高さに上げて書き、又詔勅とか綸言とか聖旨とか叡慮とか或は乘輿とか車駕とか云ふやうに、直ちに天子の御身を指すには非ずして。天子に關係したる事を申上ぐる場合には、闕字すると云ふことは、公式令に明文あり。明治維新以來、其の邊のことは、誠に簡略になりて、明治五年には、今上天皇の御諱睦の字、並に仁孝天皇の御諱恵の字、孝明天皇の御諱統の字抔は、本は闕畫にしたるを、今より闕畫には及ばずと云ふ御達しあり、又闕字平出等の事も、それに及ばぬ事となりしを、其後又宮內省の達か內規にて、闕字平出は、やがて公式令に依ることに至れりと云ふことを、此の頃或る人より聽きたり。それは、明治何年の事なりしか、確かに、知らざれども、若しさる達あらば、勿論其例に依らざる可べからず。然るに世間にては諸官省の命令を始めとして、公式令にも依らず、名々勝手の平出又は擡頭を爲す事となれり。擡頭と云ふは頭をもたぐると云ふ字にして、平出よりは猶ほ上へ上げて書くことなり。其の名々勝手に書く中に、衆議院の上奏抔には、謹て奏すと云ふ奏の字を擡頭にしてあり。此の奏とか表とか云ふ物は、臣下より奉るものなれども、上へ奉る故に上げねばならずと云ふ理窟を以て、今の清朝にては、其の書方を爲す事なれども、是れは、我が公式令には無き事なり。若し今の清朝の法に據りて書きたりと云ふことなれば、清朝の擡頭の仕方は、大變八釜しき物なり。支那は、誠にかかる儀式は倍々繁縟になりて、今の制に據れば、祖宗とか列聖とか皇太后とか申すには、三字上げねばならす、當今の皇帝皇后なれば、二字上げて、皇子、公主、皇貴妃、貴妃、妃、嬪などは、一字上ぐるなり。又公式令とは違ひて、聖旨にても車駕にても、總て至尊に關係したる者は、殘らず皆三字か二字擡頭せねばならず、山陵宗廟抔は御先祖に關係する故に、矢張三字上ぐるなり。これは、支那の制度なるが、誰もこの制度を用ふる人はあるべからず。其の制度を用ひざるに、衆議院の上奏の奏の字のみ支那風に書きたるは、餘程可笑しき事なり。一體書下しの和文なれば、平出も擡頭も一つも要せざれども、若し書下し文にても、上奏抔には勿體なきやうに思はゞ、公式に依りて然るべきことなり。來月は、銀婚式と云ふ目出たき御祝あるに就きては、諸方より祝文を奉ると云ふ様子見ゆるが、定めて其の時には、聖神皇帝とか叡聖文武天皇とか或は支那の擡頭の書方抔を種々様々に用ふるならん。時としては自分より差上ぐる物の方を上に上げ、或は至尊に關係する文字は、却つて闕字をせざるなど、かゝる不都合は澤山見えはせぬかと思はる。是等の事は、誠に文字上の禮儀にして、瑣末のことの様なれども、併し日本臣民として皇室に敬禮を盡すに就きては、其の位の注意は、僅かの時間にて取調べても分る事なれば、等閑にすべき事に非ず。さるを僅かの時間を惜みて、其れらの事は何れにても善しと云ふ人は、臣子の分を盡したりとは云ひ難し。日本臣民の皇室へ對して敬禮を盡す心は斯くまでも薄くなりしかと、余は竊に慷慨するなり。

又是は、新聞抔に見ゆることなるが、主上を指し奉りて明治天皇と書く事あり今の主上の事は、今上天皇と申すべき事にして、年號を加ふることは、昔の帝王に限れり。即ち崩御になりし帝王に非ざれば、年號を頭へ附くること無き例なれば、是も今上に對し奉りては不敬の言葉と思はる。

次は、天子のお名の事なり。天子のお名は、古は神武天皇を神日本磐余彥尊と申し、天智天皇を天命開別天皇と申したるが如きは、御名とは申せども、尊稱の如き御名なれば、誰にても其の御名を稱へ上げて宜しき事にて、是は諱には非ず。皇國には古は諱は無かりしが、奈良の朝以來支那風を眞似せられて、それより聖武天皇の諱は首と申されたるに依りて、意毘登と云ふ言葉を避けて、姓の首　意の字を省きて、毘登と改

めさせられたるが如き珍らしきことも起れり。それより歴代の帝王諱に同じき氏ゟ人の名などを、皆改めさせらるゝ習慣になれり。外國の眞似とは申しながら、其の後は、天子の御名は、諱にして、古の尊稱にはあらざれば、今となりては、御名を臣下より稱へ申すことは、勿論恐れ多きことにて、申す迄もなく、加之天子御自らも其御名を稱へさせらるることはあらざるなり。唯天子は、天つ神に對し奉り給ひての場合には、恰も子が父の前にて名乘ると同じ意味にて、天子も御名を稱へさせらるる事あり。卽ち之も支那の眞似なれども、桓武天皇よりこのかた天つ神に申し奉り給へる支那風の宣命に、天皇臣何某と仰せられたる事、續日本紀などに見えたり。天子は、天つ神に對し奉り給ひて臣と仰せらるる程なれば、御名をも稱へさせらるれども、其の他の場合に於ては、如何なる場合にても、天子は御名を書かせらるることなし。尤も古世の帝王の宸翰抔に御名の見えたる者あれども、是は併し表向きの詔勅には非ずして、御內々の書付なり。又勅願文抔の類に御名を書かせられたることあり。是は恐れ多きことながら、中昔より以來の帝王は、大抵御佛の前には、天つ神の前に畏み給ふと同じ御心にて敬ひ崇び給ひし故に、御名を書かせられたるならん。然るに近年に至りては、吾々臣民に下し賜はる詔勅に、天子の御名をかゝせらるゝことになれり。是れには吾々臣民實に恐縮の至りに堪へず。尤も睦仁と申す御名を直ちには拜見致し奉らざれども、其の詔勅の本書にお書きになれるに由りて、其の寫しは官報や何かに御名御璽として世に出づるなり。臣民へお下しになる詔勅に天子の御名を書かせらるゝことは、和漢の例にはなきことなれば、西洋の風の移りたる者なるべし。然るに西洋の名は、皇國の諱とは違ひて、頗る尊稱の意味を含めり。西洋は、名を稱ふるを以て名譽とする故に、ヸクトリヤ陛下の御世に開拓せられたる土地にはヸクトリヤと云ふ名を着けて、地名にも用ひ、ジョージ陛下の御世に開かせられたる土地にはジョールジャと云ふ地名を附くるが如き習慣あり。勿論かゝる意味の御名ならば、君主自から書かせらるゝ事も、怪むに足らざれども、まだ皇國には、恐れながら睦仁と云ふ御名を北海道の新開地に附せらるゝが如き事あらず。矢張御名は、天子の諱として、貴び奉るべく、諱み奉るべき御名なるに、臣民に下し給はる詔勅や勅令抔に屢御記しになることは、和漢の古例とは違ひて、甚だ恐れ多い次第なり。其の次には皇太子の御名。和漢の古今の例にては皇太子の御名も至尊の御名と同じことにて、臣民より稱へ奉ることは、決してあるべからず。即ち皇太子に牋を奉る場合には、皇太子殿下と申上ぐる事にて、決して御名を書くことなし。然るに近頃は、新聞抔に皇太子の御事を丁寧に委しく書く場合に、皇太子嘉仁親王殿下と書きたるを見たり。學習院より差上げたる御卒業證書抔にも然記し奉れりと聞けり。是も、昔の例とは大に違へることなり。

次は皇族方の御名稱に就きて。皇族方には、御名字は無けれども、我々には皆名字あり。此の名字は、今は華士族平民に皆あれども、昔は士族以上のみ名字を稱へて、平民は名字を稱ふること能はず、名許り申して三太とか權助とか云へる故に、名字の附くと云ふことは、人の面目となりて居たり。皇族方には此名字の無き代りに、親王又は王と申す稱號を附くるなり。皇族方に親王又は王と附くるは、人の名の下に何某公とか何某君とか云ひて崇めて附くる言葉の意味とは全く違へる者なり。故に人より稱へ奉るにも御自分より稱へらるゝにも親王とか王とか云ふことは略す可からざるものなり。是も甚だ恐れ多きことなれども、こゝより正面に見ゆる御額は、（講堂の額のことを謂ふ。）皇族の御書と見ゆれども、御名の下に親王の字なし、お名に仁の字ある故に、皇族なる事は直に分かれども、若し御名に仁の字の附かざる御方なりせば、昔の名許り稱へたる平民と更に區別なからん。此の外皇族のお書になれる物を度々拜見したるに、親王の語を省きてお書になれるもの多し。是はいかなる故ありての習慣ならん。昔の親王は、天子の前へお出しになる御書に

も、臣何某親王と仰せられて、親王の稱は決して略かせられざるをや。尤も篆額などは、字積りの都合もある故に略かせられたるかも知らねども、必ず然のみにはあらず、學校へ御通學せらる丶皇族方の御精書や御手帳抔にも其王とか女王とか云ふ稱號を省きてお名のみをお記しなさる丶事は、華族の學校にて大抵然り。

次は、朝鮮の事にて、是は外國の事なれば、何れにても宜しき樣なることなれど、朝鮮國の君主は、國王殿下と申して、御殘念ながら皇帝とも陛下とも申す事なし。是は、御自分の御家來達も陛下とは申上げず、其御沙汰をも詔勅とは云はず、お隱れになれる時には薨ずと申すなり。然るに新聞紙の京城彙報抔云ふ所に、大院君殿下とか、世子殿下とか、義和宮殿下とか云ふこと折に見ゆ。是は、人の國のことにはあれど、國王は殿下なるに、世子や王子を殿下と申すは皇國にて申せば、皇太子や親王方を皆陛下と申上ぐると同じことなり。朝鮮には殿下は一人のみなり。世子にても大院君にても、殿下の尊稱は附けられず。併し是は、間違ひたりとも、日本臣民としては、格別不都合なることも有るべからず。

次に人の姓名のことを云はん。横文字にて姓名を書くに、那珂通世と云ふ姓名を通世那珂と顚倒して書く人あり。外國敎師などの用ふる學校の出席帳の如きは、皆名の方を先きに書きて、名字を後とに附くるなり。或は名刺抔に、表には漢字にて那珂通世、裏には横文字にて通世那珂と書き、すまして居る人あり。是は、とんだ間違なり。西洋にては、名の方を先きに言ひて、姓の方を後とに云へども、皇國の習慣にては、名字を先きに言ひて、名を後とに云ふ故に、羅馬字にて書くとも、梵字にて書くとも、此の順序を更ふべき理なし。若し之を更ふるとせば、那珂通世抔は、通世那珂とも云ふべけれども、昔の人の名は、いかにすべき。楠多聞兵衛尉橘朝臣正成抔と云ふ人を西洋風に書く時は、正成、朝臣お ふ橘、多聞兵衛尉楠など丶云ふべきか。それにては矢張西洋風の姓名の順序にも適はざらん。或る人の云へるに、皇國人の姓名を横文字にて書くは、西洋文の中に入る丶が為なれば、西洋風に倒まに書きてもよからんと云へり、若し其の說に據りて、横文字にて書く故に、向ふ風の逆まにすると云ふことならば、西洋の人の名を皇國風にて漢字にて書く時には、矢つ張り逆まにせざればならぬ道理となるべし。其の事も既に行ひたる人あり。中村敬宇先生が西國立志篇の第何卷かの自序に、伊太利人マルコポーロを、字は確かに覺えざれども、波羅抹格と書けり。是は、或人の云へるが如き考へにて書きたるならん。其の外西班牙の人にて支那へ來て宣敎したるメテオリッシユと云ふ人あり。其の人支那へ來て、リッシユメテオと云ひ、漢字にては利瑪竇と書けり。是は、自ら支那へ來る程なれば、態と支那風を書きたる者ならん。併しながら是も、甘くは往き難し。メテオリッシユ抔は名と名字とたヾ二つなる故に逆にしても宜しけれども、ルイナポレオンボナパルトと云ふ名をボナパルトナポレオンルイと直したりとて、加藤虎之助淸正と云ふ樣にも聞えず、又これよりも長き名にて、羅馬の帝カイアス、ヂユリアス、シーザア、オクタヴアナス、オーガスタス抔云ふ場合になれば、オーガスタス、オクタヴアナス、シイザー、ジユリアス、カイアスとひつくり反したりとて、それにて楠多聞兵衛尉橘朝臣正成抔云ふ姓名の順序に協へりと云ふ譯にも非ざるなり。然れば、姓名は横文字にて書きても、日本人は矢張り名字名と云ふ方こそ宜しからめ。

次に、公卿と云ふ公の字の濫用。此の濫用は隨分古くより有る事にして、遙か古を申せば、三善の淸行朝臣は參議になれる丈なるに、それを善相公と古人も云ひ、其の外隨分三公にならぬ人を公と言ひし例もありしが、最も濫用の多くなれるは、日本外史などに、八幡殿を八幡公、新羅殿を新羅公、左馬頭の頭殿を頭公兵衛佐の佐殿を佐公と書き、又北條公、楠公、新田公等などもかきぬ、碑銘などには、つまらぬ人にも公の字を用ひ、又人を呼ぶには、昔より尊公貴公と言ひ、遂には熊公八公と云ふに至るまで公の字を附くるやう

になりて、隨分安く使ふことになれり。皇朝の昔の例に依れば、公と云ふ字は三公に限れる者なり。三公の下三位以上の人なれば卿、四位五位なれば即ち大夫と云へり。昔は攝政關白三大臣准大臣までは、公を附けたれ共、其以下の人には如何なるゑらき人にても、公とは云ふべからざる筈なり。德川幕府の世になりては、大名と云ふもの立派に構へて居たる故に、其の家來共は、皆自分の主人を公といふやうになりて、それより殿樣を公と言へば、御家老をば大夫といひ、又殿樣の隱れられたるを、薨ずと言ふ。三位以上ならば、薨ずと言ひて宜しけれども、四位にても五位にても構はずに皆薨と云へり。此等の事も、其の藩の內だけなれば善からめども、他へ出てゝは通用すべからず。其中最も名分を重んぜられたる藩の事を申せば、水戶の贈大納言光圀卿にても、贈大納言齊昭卿にても、總て三位以上の方なれば、卿と申上げて相當の事なるが、然るを水戶の藩士は其お國にて光圀卿を義公と諡し、齊昭卿を烈公と諡し、其他歷代の主君を皆何公と諡したり。かくて齊昭卿と云ふよりも、烈公と云ふ方分かり善きやうになりたれども、併し、何公と云ふ諡は、其の藩の內に限れる內所の名なり。皇國にて人臣に公と云ふ諡を附けられたるは、攝政良房公に忠仁公と云ふ諡を賜り、關白基經公に昭宣公と云ふ諡を賜はりたるが始まりにて、それより攝關大臣の位に昇りたる方に天子より賜はりたる者十人程あり。是等は、存生の時に三公なりし故に、薨じて後も公と云ふ諡を賜はりたるなり。武家の世になりて、大名の戒名は、所謂私諡なれば、只內所の時には義公烈公とも云ふべけれ共、公けの文書抔に義公烈公と書くことは憚るべき事なり。隨分水戶の人が他の人に向ひて私の國の烈公などゝ申すは、少しく耳障りの事なり。是は、尊王の志甚だ厚くして朝廷の名爵を重んぜられたる光圀卿や齊昭卿の思召にも適はぬ事ならんと思はるゝなり。

是までは、公の字の濫用を說きたるが、猶一言せば、今度は公の字卿の字を附くべき者に附けざるも、余

は不都合なりと思ふ。即ち德川家康公とか水戶の光圀卿とか言ふべき所を、家康光圀など、公も卿も附けざるは、少し失禮の言なり。小學校に通ふ小供が「家康は餘程ずるいやつだ、正成はなかなか感心な男だ」抔と云へるを聞けり、先生よりは忠君愛國の心を養成せられて居る故に、口はぞんざいにても心は宜しきかは知らざれども、其の言葉つきを聞けば、大臣にても忠臣にても眞に尊敬しては居らざるかと思はる。さて小學校の小供の家康はどうだとか云ふは、無理ならぬ事にて、其の讀む本に、やがてその如き風に書き、鎌足、道眞、家康、正成と呼び捨てに書きたるを讀み慣るゝ故に、つい言葉にも公とか卿とか言はぬ譯なるべし。さて本に家康公とか正成卿とか書くことは如何と云ふことは、一つの疑問なり。或人は、「歷史の文には、それは無理ならん」と云ひたれども、余が考ふるには、皇國の昔よりの習慣にては、歷史にても何にても、皆三公以上は公を附け、三位以上には卿を附くるは、一般の習慣なりき。それを附けざるやうになれるは、何如なる故かといふに、是は、漢文の歷史の流行してよりの事なり。即ち又日本外史が引合に出づるが漢文の中に信長公とか秀吉公とか書きては支那風に非ずして面白からぬ故に、支那の歷史を眞似して公卿の尊稱を除きたるものなり。支那の歷史には、一般に尊稱を附くる事なし。何故に尊稱を附けぬと云ふに、支那は、御承知の通り始終革命ありて、次の代になりて歷史を書く故に、前代の將相大臣抔を崇むるにも及ばざる筈なり。然れども當代の事蹟を當代の人の書く時には……即ち朱子の名臣言行錄などには、當代の大臣をば韓魏公とか、范文正公とか、司馬溫公とか書きて、決して韓琦、范仲淹、司馬光などゝ書くことなし。こゝに一つの取除は、實錄體の歷史なり。實錄は、天子の一代記にて、唐の太宗實錄と云へば、太宗一代の事蹟を記したるものなれば、其の時の臣子の姓名を呼び捨に書くは相當の事なれども、私の歷史となれば、それとは違ふなり。さて皇國にては、何如なる例かと云ふに、六國史などは實錄體のものなれば、公卿の稱は附けら

れざりき。それにてすら古代の榮稱としたる尸などは必ず略かずに附けて書かれたり。神皇正統記の如き私の歴史に至りては、公は公、卿は卿と書くは常なり。皇國は萬世一系の御國なれば、開闢以來數千年間の公卿大臣の事を、なる丈朱子が宋代の事を書きたる筆法を以て書きたきものなり。尤公卿の稱は、公なる故に公を附け、卿なる故に卿を附けるにて、樣の字抔を附けるとは意味が違ひ、低き人を高くするにはあらで、其の人に備はれる位を呼ぶものなり。其の事の尤も確かなる證據は、神皇正統記の中に、鎭守府大將軍源の顯家卿と書けり。其顯家卿は、正統記を書きたる北畠准后親房公の子なり。自分の子を何故に卿と書くかと云ふに、自分の子ながらも、天子の公卿なるが故なり。これは、皇國の昔よりの習慣なり。其の外公式令に就きて云ふべきあれども、委しき事は略して、大抵皇國にては公卿以上の人を呼下しには書かず、呼ばざる習慣になりたり。恐れ入りたることなれ共、列聖の詔勅や御言葉にて公卿のことを仰せらるゝに、例へば鎌足公ならば大織冠とか、藤原の内大臣とか仰せられ、不比等公ならば、藤原贈太政大臣とか、淡海公とか仰せられ、又淡山神社、北野天滿宮、東照宮などには御參拜もせられ、又は御代拜を御差立になる程なるに、小學校のはな垂し小僧が、鎌足、道眞、家康などゝ呼び捨てに云ふは、上に對し奉りて甚恐れ多き事と思ふなり。それに就きて又今の大臣はいかに申して宜しきかと云ふに、今の大臣は、昔の三公とは別なれば、公を附くるには及ばず、又三位以上を卿と云ふことも、明治三年の官制御改正の後は、朝廷に於ても餘り用ひさせられぬ樣になりたれば、今は卿も附くるに及ばざらん。而して五等の爵出てたれば、爵ある人をば某侯とか某伯とか言ひ、爵の無ならば、姓名又は官姓名を書きて宜しき事なり。

次は夫人の濫用、夫人といふは、よめと云ふ字を書きたる婦人とは違ひて、公卿の奥方に限りたる名稱なるが、此節の案内狀を見れば、吾々のお神さんをも令夫人と書きてくることあり。世俗の一般に稱ふる名に

ても、御息所、御臺所を始めとして、奥方、奥樣、御新造、お神さん、山の神抔と云ふやうに夫々段階ある事なるに、それをお神さんにても山の神にても構はずに皆夫人と云ふ日には、追々には熊公夫婦の招待狀に熊公閣下、同令夫人抔と云ふやうになる事ならん。

又閣下の稱は、本支那て臺閣に奉職する顯官にて、皇國ならば先づ勅任以上と云ふやうなる人を指す言葉なりしが、今は吾々どもへくる手紙にも此稱の附きたる事あり。必ずしも支那の用法に拘るには及ぶまじけれども、併し九尺二間同樣の家に住み居る者の處に閣下と書きて遣しては、餘り不釣合にて、人を馬鹿にしたる樣に當るべし。近頃名稱の濫用の可笑一例は、或人より文章を見て呉れと云ふ手紙に、乙夜の覽に供すと書きてありたるが、まさかに乙夜の意味を知りて書きたるにはあるまじ。

○萬歳を稱ふることは、天子の外には用ひられずとか用ひられるとか云ふ論は、新聞紙に先頃見えたるやうなるが、和漢の先例より申せば、是は全く濫用なり。然らば天子の外には壽を祝する事無きかと云ふに、支那の例にては、諸侯には千歳を祝するなり。それに就きて奇談あり。五代の時に武平の節度使馬希廣と云ふ人、自分の弟の武安の節度使馬希崇と云ふ者と不和にて、之を毒殺せんと思ひ、自分の邸に誘ひて饗應し、杯を弟へ指して卿の壽千歳を祝すと申したり。其の時弟は其杯につがれたる酒を何やら怪しと思ひて、其の酒を呑まずに「願はくば兄さんと五百歳づゝを分たん」と云ひて兄さん半分呑めと勸めたれば、兄は答ふる辭なく、一座白けて見えたりしが宦官に忠義なる奴ありて、進みて其杯をひつたくり、一人にて千歳を引受けて呑みたりといふ事あり。されば支那にては諸侯を祝する時には千歳と云ふなり。併し是を皇國に行ふ事も難かるべし。いかにと云ふに、先づ政黨の首領などを千歳と祝する日には、其子分なる河野とか島田とか云ふ人をば五百歳とか三百歳とか云ふべき勘定になれども、左樣に段階を附くる事も、可笑しかるべし。實は

萬歲を唱ふる事の近年に至りて流行したるは、漢和の古例に依りたるには非ずして、洋語のロングリーブを萬歲と譯したる者と見ゆれば、和漢の例を引きて、餘り八釜しく云ふにも及ばざる事かも知らず。併しながら西洋にてもロングリーブは不斷使ひにはせず、日本にて政黨員が臨席すれば萬歲、演說者が現はるれば萬歲と云ふ樣には遣らずと聞けり。日本にても、何とか萬歲は非常特別の場合に限ることになしたき者なり。且又萬歲はロングリーブの譯語にても、其萬歲と云ふ字面は、昔は天子に限りたる言葉なりと云ふことは、心得置くべき事なり。

又新聞紙などの言葉咎めをしては限りもなき事なるが、總理大臣の婿を末松駙馬殿などと書けるを折々見たり。是は戯れに書きたる者か。新聞屋は、若くは駙馬と云ふことは天子の婿君のことを言ふことを知らざるには非ずや。知りて書けりとすれば甚だ不敬なることなり。末松が駙馬ならば伊藤伯は天子なるべし。かく樣なる不都合なることは、數へきれざる程ありて、今の世は實に名分紊亂したりと云ひても宜しからん。畢竟を云へば、世間の民黨とか云ふ人達などは、皇室をば尊ぶが、役人をばイジメルと云ふ樣に申しては居れども、實は今の御政體になりてより、皇室の尊嚴は幾分か減じたる樣に思はるるなり。何故なれば、前に述べたるが如き名分を誤りたることを稱へても、それを怪む人は無くなりたる樣なり。偶それを怪みて、余が今晩此處にて述べたる事を後に雜誌などに出したらんには詰らぬ繁文縟禮を並べて小言を言ふ可笑しき男なりと云ひて、屹度笑ひを受くるならんと余は覺悟して居るなり。

前篇の補遺

過日常集會にて、稱謂の事に付て演說したる時、平出闕字の事は、一旦罷められて、其の後又公式令に依る事となりたれども、其の年月は知らずと申したりしが、今それらの官令等を小中村義象君の書き拔き置きたる者を得たれば、左に其の沿革を述べて、過日の演說の不備を補ひ、稱謂を謹む心ある人の參考に供せんとす。

明治元年十月九日太政官の御達に、「惠統睦右三字御諱に付名字等に相用申間布儀は勿論刻本等には闕書可致候事」とありしを、五年正月二十七日の御達に、「御名睦字自今闕書に不及候事但惠統二字可爲同樣事」とありて闕書の制は罷められたれども、御名の字を名字等に用ゐざる事は舊の儘なり。同年六月十三日、明法寮より式部寮に對し、「別紙稱謂夫々擡頭平出闕字の儀御規則も可有之哉且天子天皇詔書勅旨等御歷代同樣に闕字等可致哉又は御幾代前よりは不及其儀候哉右は此節記錄類編修致し淨書取掛候に付御寮御取扱振致承知度此段及御問合候也」、別紙に「先帝天子天皇皇帝陛下至尊天皇諡皇太后皇后大社陵號乘輿車駕詔書勅旨被仰出被仰付宣下御沙汰朝廷皇國」と列記して問合せたれば、式部寮は更に左院へ問合せたり。其時左院の答儀に「別紙明法寮より伺出候稱謂擡頭平出闕字等の儀熟儀勘辨仕候處闕字平出の例は支那六朝以前には見及ばず隋唐代より初めて著令となりしを本邦之に模倣して大寶令にも著されしなりされど舍人親王の日本書紀太安麻呂の古事記共に此例を用ひず 六國史中文德實錄以下始て平闕あり 二書は大寶後の著なれども猶かくの如し然らば令文は虛設にて世間通用に非ざりしを知るべし 此事に限らずすべて大寶令は唐六典等を摸したる迄にて實事に行はれざる事多きなり 水戶藩大日本史を編するに及て平闕の例を除きしは紀記の體に基づきしと云ふ 或說に刊行の書は別段なりと雖も古文書又は公卿方の家記日記などにも此例あるを見ず 夫れ平闕は臣子上を敬するの意より出づれば必ずしも禁止するには及ばじ但之を定令するときは誤て犯すものは不敬に陷る若し一々其誤犯を正さば事務の障害を生ずべし古語に[illegible]諱と云へり且つ文字は言語を寫すものならずや言語に平闕なければ文字に限り平闕するの理なし況や和漢共に中古以前に之無く全く後世繁文縟禮より起りし事なれば自今此例を除

て古禮の易簡に復し候方可然と存候事」とありたるに由りて、八月七日、式部寮は明法寮に向ひ、「先般擡頭闕字之儀御問合有之候處右は御一新後未だ一定之御規則も無之自今記錄には左院見込之通總て擡頭平闕等は不相用樣御治定相成候條及御回答候也」とて、左院答儀を添へて答へられたり、此等の問答の文に據れば、明治五年に平闕を罷められたりと云ふは、記錄の類に限れる事にて、章奏公文の類には關らざりしなり。次に六年二月二十八日、正院の御達に「御歷代御諱幷御名の文字自今人民一般相名乘候儀不及憚事但熟字の儘相用候儀は不相成候事」とあり。この御達に據れば、歷代天皇の御名にて諱と申し奉る分、即ち奈良の朝以來の御名は、總て熟字の儘姓名に相用うる事は相成らざる筈なるに、大炊御門氏の大炊の二字は淳仁天皇の御諱を犯し、神野と云ふ字は嵯峨天皇の御諱を犯し、余が知れる人に安藤定省鍵屋守平高橋邦治と云ふ人あり。此の三人の名は、宇多天皇圓融天皇後二條天皇の御諱に同じ。然るに此等の姓名を改むること無く、今も然稱へ居れば、六年の御達の但書も實際には行はれざりしなり。次に同年五月二十八日東京府より正院へあて「本年第百十八號御布告に付自今御歷代御諱並に御名の文字相名乘不及憚但熟字の儘相用候儀は不相成云々就ては御歷代の御謚號熟字の儘相用候儀は如何可心得哉至急御指令被下度此段上申候也」と伺ひ出でたるに、六月九日正院の指令に「伺之趣御歷代の御謚號は熟字の儘相用不苦候事」とあり。次に八年に至りて宮内大少丞より正院の内史に、「聖上兩后宮御稱呼幷に御動作に關し候儀及詔勅御沙汰等の文字書式平出闕字不出闕の區別等御一定之制規も候はゞ委詳御調越相成度此段御依賴旁及御掛合候也」と問合せたるに、三月三日、内史の答書に「聖上兩皇后御稱呼云々御問合之趣致了承候右は維新以還一定の御規程は無之候得共現今公式令に依據し致書記候儀に候此段及御回答候也但記錄上には闕字平出不致候此段御承知相成度候也」とあり。此の答書に據れば、記錄上に平闕を用ひざるは、五年八月式部寮の決定に同じくして、記錄の外諸公

文の平闕は公式令に據りたる趣なり。然るに近年に至りて官省の命令を始めとして諸公文の平闕擡頭の法は公式令に據れるにも非ず、今の清朝の制に倣へるにも非ず、銘々勝手の書方と爲れることは、過日の演說に述べたるが如し。

支那正統論考

本篇は明治三十年三月發行の東亞學會雜誌第二號に揭載せられ、易姓革命の國にして、又分裂僭僞の朝廷も少からざりし支那には自然興るべき正統と閏位の說を評論せられたるものにして、和洋の事にも論及せられたれば、世の國體を論ずるものゝ必讀すべき卓說なり。

支那正統論考

「支那の正統の論は、漢代に始まり、宋代に至りて喧くなれり」。唐堯の虞舜に讓り、虞舜の夏后禹に讓り、商王成湯の夏后桀を放ち、周の武王の商王紂を滅ぼしゝが如きは、皆前代終りて、後代之に繼ぎ、其の間に兩朝並び立ちて、國を爭ひし事なければ、正統論の興るべき由なし」。支那には古くより、五德終始の說と云へる說ありて、「五行更る〱旺し、終始して相生ず。王者は五行の德に法り、其の革易は、必ず五行相生の序に從ふ」と云ひ、又齊の騶衍は、王者の革易は、五行相生には非ずして、五行相勝の序に從ふ者なりと云へり。五行相生の序は、木火土金水なりと云ひ、五行相勝の序は、木金火水土なりと云ひ、何れも取るに足らざる說なり。されども秦始皇は、五行相勝の說に依り、周を以て火德とし、水は火に勝つが故に、秦を水德と定め、漢の武帝も、此の說に從ひ土は水に勝つが故に、漢を土德と定めたりき。然るに「漢の高祖は赤帝の子なり」と云へる傳說あるが上に、劉氏は、堯の苗裔にして、堯は、五行相生の說に於ては、火德なりと云へるが故に、漢人は、遂に漢を火德と改め、木は火を生ずと云ふに依りて、直に周の木德を繼げりと爲せり。是に於て、「秦は、木火の間にありて、五德の運に入らずとて、之を閏位として黜けたりき。これ、帝統の正閏ありと云へる始めなり。

「劉氏亡ぶるに及びて、漢土分れて三帝國と爲り、其の君各至尊と稱して相下らざりしが、晉の陳壽、三國志を作り、魏帝を以て正統の君と爲して本紀に列し、吳蜀を黜けて、其の君を列傳に下したり。其の後東晉の習鑿齒、漢晉春秋を著し、蜀漢を以て漢の正統を承けたる者と爲し、魏を黜けて、吳と同じく僭僞の國と爲したれども、其の說未だ大に世に行はれざりき。

南北朝の際、支那又分れて二帝國となれり。兩朝皆國史ありて、宋書齊書は、後魏を黜けて、索虜魏虜と爲し、魏書は、宋齊を貶して島夷を爲したるが如きは、宋の司爲光の謂へる如く、「此皆私己之偏辭、非大公之通論也。」唐の太宗の時、南朝の梁書陳書、北朝の北齊書周書隋書を撰したるに、南朝の史に於ては、南を正として北を僞とし、北朝の史に於ては之に反し、恰も各朝の史官、自ら之を撰したるが如し。正ならば、正とすべし。僞ならば、僞とすべし。既に正として、又之を僞とし、褒貶定らず、唐人にして、或は梁陳人となり、或は北齊周隋人と爲り、更に唐人たる定見なし。これ皆宋齊魏書の舊習に沿ひ、誤りて尊內卑外を以て紀傳の體と心得たるなり。然れども兩朝を帝として、敢て輕重を其の間に加へざるは、陳壽習鑿齒の偏論に愈れり、李延壽は、一人にて南史北史を撰したれば、兩朝の史官に代りて筆を執れるが如き書法を廢すべき筈なるに、これ又南北八部の舊史に依りて、之を增損したるのみにて、尊內卑外の書法を用ひたること、舊史に異らず、而して兩朝を帝として、敢て輕重せざることも、亦舊史に同じ。

然れども唐人は、大抵三國に於ては、魏を正統とし、南北朝に於ては、北朝を正統として、敢て異議を挾む者なし。蓋唐は隋に代り、隋は周に代り、周は後魏に代り、唐の高祖の父祖は、世々魏周に仕へたれば、魏周を正統とするは、勢然らざるを得ず。南北朝に於て北朝を正統とすれば、三國に於て魏を正統とするも、亦勢然らざることを得ざるなり。

又五德終始の說は、漢魏以來諸儒の深く迷信したる說にして、魏と吳とは土德を以て漢の火德を承けたりと云ひ、晉は、金德を以て魏の土德を承けたりと云ひ、南朝の宋齊梁陳は、五行相生の序に於て、各々水木火土なりと云へり。後魏の道武帝の時、群臣の奏に「國家承黃帝之後、宜爲土德」と有て、一たび土德と定めたりしが、孝文帝太和十六年に羣臣に命じて、五行の次を議せしめたるに、中書監高閭は、「晉承魏爲金、趙承晉爲水、燕承趙爲木、秦承燕爲火、秦之既亡、魏乃稱制玄朔、且魏之得姓、出於軒轅、臣愚以爲宜爲土德」と云ひ、祕書監李彪著作郎崔光等は「神元與晉武、往來通好、至于桓穆、志輔晉室、是則司馬祚終於郟鄏、而拓跋受命於雲代、昔秦幷天下、漢猶比之共工、卒繼周爲火德、況劉石苻氏、地褊世促、魏承其弊、豈可捨晉而爲土邪」と云ひ、司空穆亮等は、皆李彪等の議に從はんと請ひしに由りて、遂に改めて晉を承けて水德と定めたりき。其の後北齊と周とは、皆魏を受けて木德なりと云ひ、隋は、周を承けて火德なりと云ひしに由りて、唐の運歷を論ずる者は、皆唐は隋を承けて土德なりと云へり。されば唐人は、魏周を以て正統と爲すに非ずば、自ら正統の後を承けたりと稱することを得ざるなり。今歷代の五德相承の序を、諸儒の說に依りて列記すれば、左の表の如し。

木德木生火　火德火生土　土德土生金　金德金生水　水德水生木

かくて魏と北朝とを正統とするは、唐人普通の說なれども、史學に精通せる劉知幾の如きは、世の五行家輩とは異にして、敢て一偏の論に局せず。其の史通稱謂篇に「論王道、則曹逆而劉順、語國祚、則魏促而吳長、但以地處函夏、人傳正朔、度長絜短、魏實居多、二方之於上國、亦猶秦繆楚莊、與文襄而並霸、逮作者之書事也、乃沒吳蜀號謚、呼權備姓名、方於魏邦、懸隔頓爾、懲惡勸善、其義安歸」と云へるは、魏の正統を黜けたるには非ざれども、史家の偏私にして、稱謂の不敬なるを咎め、又其の探賾篇に陳壽が曹公文帝の罪惡を貶せざるを咎めて、さて「劉主地居漢宗伏順而起、夷險不撓、終始無瑕、方諸帝王、可比少康光武、譬以侯伯、宜輩秦繆楚莊、而壽評抑其所長、攻其所短、是則以魏爲正朔之國、典午攸承、蜀乃僭僞之君、中朝所嫉、故曲稱曹美、而虛說劉非」と云ひ、「習鑿齒之撰漢晋春秋、不以劉爲僞國者、此蓋定邪正之途、明順逆之理耳」と云へるを見れば、陳壽の蜀を僞國としたるには、甚不服なりしなり。

梁の太祖、盜賊より興りて、唐の位を簒ひたれば、後唐の莊宗は、大盜と看做して、朱溫と斥言し、梁帝などゝは云ふも更なり、梁主とすらも呼びしこと無し。梁を滅して帝位に陞るに及びては、自ら唐に繼ぎたりと稱し、梁をば有窮氏の夏を簒ひ、王莽の漢を簒ひしに比して、之を帝王には數へざりき。然るに宋の薛居正等、五代史を撰し、歐陽修、又新五代史を撰し、皆梁を帝として五代に列したり。修の論に「欲著其罪於後世、在乎不沒其實、其實嘗爲君矣、其實簒也、書其簒、各傳其實、而使後世信之、則其罪不可得而掩爾、使爲君者不得掩其惡、然後人知惡名不可逃、則爲惡者庶乎其息矣」と云へり。時に章望之、明統論を著して、修の說を駁し「魏は、天下を一にすること能はず、晋と朱梁とは簒奪を以て國を得たれば、何れも正統とすべからず」と云ひ、蘇軾、又正統論を著し、歐陽修に與して、章望之を駁し、「秦漢魏晋隋唐五代、皆正統なり」と論じ是よりして正統の論甚喧しくなれり。

司馬光の資治通鑑を撰する時、其の僚佐劉恕、嘗て蜀を以て東晋に比し、漢の正統を紹がしめんと欲し、司馬光と力爭したれども從はざりし事、劉恕の子義仲の裒錄したる通鑑問擬に見ゆ。かくて通鑑魏紀漢中王即皇帝位の條の史論に「竊以爲苟不能使九州合爲一統、皆有天子之名、而無其實者也、雖華夷仁暴大小强弱、或時不同、要皆與古之列國無異、豈得獨尊奬一國、謂之正統、其餘皆爲僭僞哉云々、周秦漢晋隋唐、皆嘗混壹九州傳祚於後、子孫雖微弱播遷、猶承祖宗之業、有紹復之望、四方與之爭衡者、皆其故臣也、故全用天子之制以臨之、其餘地醜德齊、莫能相壹、名號不異、本非君臣者皆以列國之制處之、彼此均敵、無所抑揚、庶幾不誣事實、近於至公、然天下離析之際、不可無歲時月日、以識事之先後、據漢傳於魏、而晋受之、晋傳於宋、以至於陳、而隋取之、唐傳於梁、以至於周、而大宋承之、故不得不取魏宋齊梁陳後梁後唐後晋後漢後周年號、以紀諸國之事、非尊此而卑彼、有正閏之辨也、昭烈之於漢、雖云中山靖王之後、而族屬疎遠、不能紀其世數名位、亦猶宋高祖稱楚元王後、南唐烈祖稱吳王恪後、是非難辨、故不敢以光武及晋元帝爲比、使得紹漢氏之遺統也」と云ひて、正統に關する論難の衝を避けたり。此の論頗る公平なるが如し。然るに通鑑の本文を觀るに、三國南北朝五代の際、魏南朝五代は、啻に其の年號を用ひたるのみならず、其の君を帝と云ひ、吳蜀北朝の君及び五代列國の帝と稱するものは、皆某主と稱し、其の交戰の如きも、前者には征といひ、後者には寇といひ、初より正閏の別を立てたるが如き筆法を用ひたり。いかでか之を「彼此均敵、無所抑揚」と云ふべけん。

朱熹は、春秋の義に本づき、舊史の書法を正して、前代君臣の事蹟を襃貶せんと欲し、資治通鑑に依りて、綱目を作れり。其の凡例に「凡正統、謂周（起篇首威烈王二十三年、盡赧王五十九年、）秦（起始二十六年、盡二世三年、）漢（起高祖五年、盡炎興元年、此用習鑿齒及程子說、自建安二十五年、以後、黜魏年、而繫漢統、與司馬氏異、）晋（起太康元年、盡元熙二年、）隋（起開皇九年、盡大業十三年、）唐（起武德六年、盡大祐四年」「僭國、謂乘亂簒位、或據土者、（如漢之魏吳晋之漢趙諸燕二魏二秦成漢代諸涼西秦

夏之屬内二秦以上爲大國、成漢以下爲小國」「無統、謂周秦之間。秦楚燕魏韓趙齊代八大國凡二十四年、秦漢之間、楚西楚漢三大國、雍以下爲小國、凡四年、漢晉之間、魏吳晉三大國、凡十六年、晉隋之間、宋魏齊梁北齊後周陳隋爲大國、西秦夏涼北燕後涼爲小國、凡一百七十年隋唐之間、隋唐魏夏梁涼秦定楊吳楚鄭北梁漢東以上、凡五年、五代、梁唐晉漢周爲大國、二蜀晉岐吳南漢吳越楚荊閩南唐殷北漢爲小國、凡五十三年」と云ひて、「漢の魏吳二大國は、晉の五胡諸國と共に僭國と名づけ、南北八朝及五代は、皆當時割據の諸小國と共に、無統と名づけ、凡一百七十年、年號は、唯正統のみ、歲干支の下に大書し、僭國無統の世は兩行に細書し、帝と云ひ崩と云ふは、正統の君に限り、僭國無統の君をば、某主と云ひ、其の死は、僭國なれば卒といひ、無統なれば殂と云ひ、其の他義例極めて詳細にして、十九門百三十七條に至れり。故にその書法の嚴密なることは從來の諸史と、大に其の面目を異にし、朱熹の學を講ずる者は、之を以て深く春秋の法に合へりとし、綱目を重んずること、經典の如し。

朱熹と同時に、張栻、經世紀年を作り、朱熹の後、黃震、古今紀要を作り、皆魏を黜けて、蜀を帝とし、李杞は、三國志の魏を帝とするを嫌ひて、改修三國志を作り、蕭常は、更に續後漢書を作り、元の郝經も、宋人に拘留せられたる間に、續後漢書を作り、明の吳尙儉謝陛は、季漢書を作り、何れも昭烈を尊びて正統の君と爲せり。

朱熹の學盛に行はれてより、蜀を正統とし、南北朝五代を無統の世とすること、學者の通論と爲り、唯元の胡一桂が古今通要に、通鑑の魏を帝とするを可として、綱目の蜀を帝とするを否としたる、明の王褘が大事記續編に、蜀の年號を、魏吳と同じく分註に書きて、所謂無統の例を用ひたる、明の方孝孺張自勵等の秦晉隋にも正統を與へざる如きは、僅に例外の事にして、史を作る者も、史を論ずる者も、大抵綱目の義例を以て金科玉條と爲せり。

然れども朱熹の所謂正統なる者は、支那を混一したる者を云へるにて漢唐の盛世と雖も、其の末だ混一せざる間は、無統の世に屬せり。故に周秦漢晉隋唐宋七代の間、其の兩代の間には、必ず多少の無統の世ありて、前代と後代と隔絕し一も接續する者なければ正閏の論は、さて置き、系統なる者更に存せざるなり。されば、綱目の正統は、其の實は、正統に非ずして、一統の世なり。其は猶後段に云ふべし。

元の世祖、史臣に命じて、宋遼金三史を纂修せしめ、仁宗文宗の世、又屢詔して修撰せしめたりしが、義例定まらざるが爲に、其の書久しく成らざりき。或は宋を以て世紀となし、遼金を以て載記と爲さんと欲し、或は遼の國を立つるは宋の先に在るが故に、遼金を北史と爲し、宋の太祖より欽宗までを宋史と爲し、高宗以後を南宋史と爲さんと欲し、各々論を持して決せざりしが、順定の時に至り、丞相脫々等に命じて、宋遼金三朝を各一史と爲さしめ、其の書始めて成れり。蓋遼金を載記と爲さんとしたるは、晉書の十六國載記の例に依り、遼金を北史となさんとしたるは、李延壽が北史の例に依り、三朝を各々一史と爲したるは、唐の梁陳北齊周隋書の例に依れるなり。晉書の載記は善からざるに非ざれども、遼金は皆堂々なる大國にして、五胡諸國の匹儔に非ざれば、之を載記に黜くるは、固より其の當を得ず。三朝を各々一史として、皆其の帝國たる實を全ふせしむるは、公平の見なり。但此の三史は、皆三朝の舊史に據りて、刪訂の十分ならざる書なれば、其の互に詆排することは、唐人の南北五史にも過ぎて殆んど北人の自ら撰したる宋齊魏書の偏僻に似たり。

明は、漢人を以て、蒙古を逐ひて、國を建てしが故に、遼金元を貶黜すること殊に甚しくして、唐人の北朝を重んずるとは全く反對なり。陳桱通鑑續編を著し、宋を以て正統と爲し、遼金を以て僭國と爲し、劉石慕容苻姚の徒に比せり。又宋史本紀は、德祐帝に終りて、景炎祥興二帝を錄せざりしが、陳桱は朱熹が蜀漢を帝としたる例に倣ひて、二帝を正統の天子と爲し、至元十七年前なる蒙古諸帝は、其の名を指斥して、

蒙古主某と云ひ、其の帝たることを許さず。其の商輅等の通鑑綱目續編、薛應旂の元資通治鑑、皆陳桱の書法に從へり。

陳桱等の書は、何れも編年史なれども、柯維騏に至りては、紀傳の史までも遼金の獨立を嫌ひ宋遼金を合せて一史と爲し、宋史新編と名づけ、宋を以て主と爲し、遼金の事を附錄し、且宋末二帝を以て本紀に列したり。明史柯維騏傳には、此の書を許して、「褒貶去取、義例頗嚴」と云へれども、四庫全書總目は、元史の「本紀終瀛國公而不錄二王、及遼金兩朝、各自爲史、而不用島夷索虜互相附錄之例」を以て最も理ある者と爲し、維騏の之に從はざるを譏りて、其の書を存目に貶したり。其の論に云く「至於元破臨安、宋統已絕、二王崎嶇海島、建號於斷檣壞之間、偸息於魚鼈黿鼉之窟、此而以帝統歸之、則淳維遠遁以後、武庚構亂之初、彼獨非夏商嫡冢、神明之胄乎、何以三代以來序正統者不及也、他如遼起滑鹽、金興肅愼、並受天明命、跨有中原、必似元經帝魏、盡黜南朝固屬一偏、若夫南北分史、則李延壽之例、雖朱子生於南宋、其作通鑑綱目、亦沿其舊軌、未以爲非、元人三史竝修、誠定論也、而維騏强援蜀漢增以景炎祥興、又以遼金二朝、置之外國、與西夏高麗同列、又豈公論乎、大綱之謬如是、則區々補苴之功、其亦不足道也已」と云へり。此論大に謬れり。淳維武庚は、未だ嘗て帝王の位に陞らず。いかんぞ宋末二帝に比すべけん。二帝は、微弱にして播遷すと雖、宋の羣臣奉戴して主とせる間は、宋帝に非ずと云ふべき理なし。遼金二朝は、宋と對等匹敵の國なれば、二朝の事蹟を宋史の附錄とすべからざるは、さる事ながら「受天明命」と云へる事はいかゞ。遼金皆天の明命を受けたらば、宋は所謂僭僞の國なるか。若又宋も遼金も皆天の明命を受けたりと云はゞ、天に代りて民に臨む者、同時に二人あることと爲りて、從來諸儒の主張せる正統の說は、根底より仆るべし。又朱熹の綱目は、李延壽の舊軌に沿へるに非ず、延壽は南北兩朝を皆帝としたりしに、朱熹は、之を列國と看做して、決して帝號を與へざりき。宋の隆盛なりしことは、漢唐に似たりと雖、國初より北朝と並び立ちて實に混一したることなければ、綱目の義例にては、所謂無統の世にて宋も遼金も、皆列國となるべし。若遼の占領せる燕雲十餘州は、彈丸黑子の地にして、宋の正統たるを妨げずと云はゞ、遼は、夷狄の例に入りて、高麗交趾と異ならず、南宋は、蜀漢東晉と同じく、微弱なれども、猶正統を紹ぎ、金と蒙古とは、强大なりと雖魏吳劉石慕容苻姚と同じく、僭國たるを免れざらん。いづれにしても、綱目の義例に據れば、遼金皆天の明命を受けたりなどと稱すべき由なし。

按ふに淸人の此の論をなすは實に已むことを得ざるに出でたるなり。淸の明に代りたるは、恰も元の宋に代りたるに似たり。其の人種を考ふれば、滿洲なる淸人は、女眞なる金人と、同種なり。契丹なる遼人は人種に於ては女眞蒙古の間にありて其の國を建てしは、金元二代の先驅を爲せり。契丹女眞を夷狄とすれば、滿洲も夷狄と爲り、金と元初とを僭國とすれば、淸の太祖太宗も、僭國の君と爲る。故續三通、各省通志の如き官撰の書を初として、之を尊崇すること、唐宋の諸帝に異ならず。これ皆本朝の祖宗を尊ばんが爲めに、前代に及ぼせるなり。

然れども支那の學者は、古來の正統論に拘束せられ、綱目の義例を壞りて、兩帝並立を明言する勇なければ、編年史を作るに當りては、又遼金蒙古の諸帝を帝とすること能はず、高宗御批の通鑑輯覽、徐乾學の通鑑後編、畢阮の續通鑑の類何れも遼主某、金主集、蒙古主某と書きて、宋滅ぶるに及びて、始めて元の世祖を帝とせり。此の義列に據れば、淸の祖宗と雖、明統の存する間は僭君たるを免れず。故に明史に、淸の世祖順治元年明の毅宗の崩を以て明亡びたりとし、安宗紹宗永曆三帝は、其の帝號を除きて、福王唐王桂王とし、明統を十六年減縮せり。通鑑輯覽、通鑑綱目三編の類、皆然り。宋末二帝の情況は、恰も明末三帝に似

たり。明末三帝を黜くれば、宋末二帝も黜けざることを得ず、遂に淳維武庚の譬を設けて、詭辯曲說を爲するに至れり。これ又明清革易の年を早めんが爲に、其の論を宋元革易の際に及ぼせるなり。

四庫全書總目に、陳壽の三國志を評して、「其書以魏爲正統、至習鑿齒作漢晉春秋、始立異議、自朱子以來、無不是鑿齒而非壽、然以理而論、壽之謬、萬々無辭、以勢而論、則鑿齒帝漢、順而易、壽欲帝漢、逆而難、蓋鑿齒時、晉己南渡、其事有類乎蜀、爲偏安者爭正統、此孚於當代之論者也、壽則身爲晉武之臣、而晉武承魏之統、僞魏是僞晉矣、其能行於當代哉、此猶宋太祖簒立、近於魏、而北漢南唐、蹟近於蜀、故北宋、諸儒皆有所避、而不僞魏、高宗以後偏安江左、近於蜀、而中原魏地、全入於金、故南宋諸儒、乃紛々起而帝蜀、此皆當論其世、未可以一格繩也」と云へり。此の論、誠に妙なり。凡て古今の史論は、道理に基づくよりも、時勢に制せらるゝこと多し、其は晉宋の史家のみならず、かく論ずる總目の撰者も、時勢に制せらるゝ一人たることを免れず。明人の遼金元を抑ふるは、漢人を以て胡人に代りたるが故に、胡人を讐敵視するなり。淸人の遼金元を揚ぐるは、胡人を以て漢人に代りたるが故に同類として最負するなり。かゝる偏私の心を去りて公平に考察することは、外國人に非ざれば能はず。これ豈正統に關する論のみならんや。

抑正統とは、何をか云ふ。統系の眞直に連續する事なり。朱熹の所謂正統は、正統に非ずして、一統の世なり。正統の統は、時間に關する語にして縱の連續なり。一統の統は、空間に關する語にして、橫の合一なり。朱熹の義例に從ふ者は、一統を以て正統と爲すが故に、兩國對立の世、兩代革易の際に於て、常に正統の所在を定むるに苦しむなり。我が皇國は、天祖より今上天皇まで百二十餘代、一系相承けて、亂賊の神器を覬覦せし者すら有らず、此の後千萬世と雖、亦此の如くなるべければ、これ正統の最も長くして世界に例なき者なり。其の間、不幸にして皇統二つに分れたる時は、正閏の別は起りたれども、嘗て統系の中絕したることと無し。支那の如き革易頻繁の國にては、正統の絕ゆること屢なり。先づ唐虞夏商周は或は禪讓に由り、或は放伐に由り、國號は屢變じたれども、正統は長く連續したりしが、周亡びて、正統始めて絕えたり。秦の正統は、新に創まれる者にして前代の統を紹ぎたるには非ず。漢の秦に於けるも、亦然り。漢衰へて魏之に代りてより、陳に至るまで、姦雄代る〴〵起り簒奪相踵ぎ國の廣狹も屢變じたれども、其の國の繼續する間は、正統も絕えざるなり。正統は仁義の國に限らず。姦雄（魏晉宋齊梁陳の如き、）盜賊（梁太祖明太祖の如き）夷狄（拓抜、宇文、耶律、完顏の如き）孰れか正統たらざらん。我が正統の尊きは、正統の尊きに非ず、國體の尊きなり。國體尊からざれば、正統も尊ぶに足らず。昭烈は漢の中山靖王の後なりと云へども、國は新造にして、二世にして亡び、前に受くる所なく、後に傳ふる所なく、統なきに近し。然れども君子の無統は、姦雄の正統より尊し。

支那の史家は、魏を帝とすれば、吳蜀を僞とし、蜀を帝とすれば魏吳を僞とし、同時に二帝あることを許さず。南北朝の世に於ても、五代及宋と遼金蒙古との間に於ても、皆然り。何故に二帝あるべからざるかと云ふに、支那人の意にては、天子は、支那一國の君主に非ず、天の明命を受けて、四海に君臨する者なれば、廣き世界に一人より外あらずと思へり。古語に「天無二日、土無二王」と云ひ、「溥天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣」と云へるも、此の意なり。不幸にして天下分崩し、帝と稱する者二人以上ある時は、支那の史家は、其の中一人を以て、天命を受けたる者とし、又は一人も天命を受けたる者なくして、正統絕えたりと考ふるなり。然れども支那一統の時にても、其の天子は、固より一國の主にして世界の主にあらざるを、兩朝分立又は三國鼎峙の如き場合に其の一人を尊びて、天命の歸したる世界の主とするは、甚だ無理なる事なり。且三國の主は、本より君臣に非ず、各其國に帝として、勢力相敵したれば、統の有無に拘らず、後世よりも又は他國よりも、之を僭僞と名づけて、其の帝號を貶黜すべき理なし。

劉石慕容苻姚の徒は、本皆晉國の臣にして、亂に乘じて、其の土に竊據したる者なれば、僭僞の國たること論なし。拓跋氏に至りては、北方より起りて、中原に據り、禍亂を戡定して、大國を開きたれば、支那を一統せずと雖、自ら正統の例に入るべし。周隋之に繼ぎて、南朝と對峙すること二百年、南北各々統ありて繼承し、軒輊すべきなければ、いかでか之を無統と名づけて、其の帝號を除くべけん。遼金元淸は皆塞外に國を建てて、後に中原に入り、其の形勢、稍後魏に同じく、本皆前代の叛臣に非ざれば、誰を憚りてか、之を僭國に貶すべけん。然るを屑々然として、宋を揚げて遼金元を抑へんと欲するは明人の偏見なり。元淸の祖宗は、宋明の諸帝と同時に帝號を享くることを得べしとすれば、彼の淸人の、筆を極めて宋末二帝明末三帝を貶するは、殆ど無益の勞にあらずや。

然らば宋元の改革は、何れの年に在るか。宋元の際は、夏亡びて商興り、商亡びて周興りしとは異なり。元の太祖は、宋の孝宗の時に興り、寧宗開禧二年に帝位に陞り、宋の祥興帝は、元の世祖至元十六年に崩じて、宋亡び元の太祖の即位より宋の亡ぶるまで七十三年を歷たり。宋亡ぶる前に、元の祖宗は旣に金夏回々欽察諸國を平げて、古今無比の大國となりたれば、元朝は始より自立の帝國にして、宋の統を承けたる者に非ず。何ぞ宋元革易の年といふべき年あらんや。然るを明人は、區々たる江南又は嶺南の降附せざるに由りて、元の諸帝の帝號を貶せんとするは偏見も亦甚し。明淸の際は、殆ど宋元の際に同じ。元の宋統を受けざるを知らば、淸の明統を受けざるも知るべし。明淸の際に統の連續なければ、淸の世祖順治元年を以て明淸改易の年と定めんとする淸人の議論は、全く無用の辨なり。

支那歷代の中、正統の朝即ち獨立帝國と稱すべきもの左の如し。秦蜀呉遼金元明淸の八代は、皆前後に連續せず。此等は、各其の一代の中に於て正統の繼承ありしのみにして、前に受くる所なく、後に傳ふる所なき者なり。細字を以て書きたる者は、正統の朝より分れたる支派なり。正統の外には、周末列國、秦末列國、晉の五胡十六國、隋末諸僭國、五代列國、元末諸僭國等あれども、皆略せり。

唐═虞═夏═商═周　秦　漢═魏═晉═宋═齊═梁═陳
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└後梁
　　　　　　　　蜀漢　後魏═西魏═周═隋
　　　　　　　　　　　　└東魏──北齊
　　　　　　　　呉

唐═後梁　後唐═後晉　後漢═後周═宋
　　　　　　　　　　　└北漢
　　遼　　　　　　　　　金　元　明　淸

因に云ふ、近世の人、支那の帝王を記するに、正統僭國の別なく、凡て其の廟號諡號を黜けて、某主某と其の姓名を稱する者あり。こは大日本史の書法に基きたるなり。支那人は、古より「士無二二王一」即ち世界に二人の天子なしと云へる妄想を懷きて、外國をば凡て夷狄と賤め、外國の君主に皇帝と稱する者ありとも、決して之を認めざる習慣なりしかば、皇國のことを記するにも、天皇の御事を倭王と云ひ、崩御を死と云ひ、いかにも無禮なる書方なれども、皇國の人は、其等の事に頓着せず、上下擧りて漢風を喜べる時代には、彼の國を華夏中國と崇び、其の國號を呼ぶには、大唐大明など云ひ習はしゝが、本居宣長氏は、戎國の王を天子など云ふまじきことを痛論し、水戸の大日本史は、務めて内外の分を正し、唐の太宗を唐主李世民、元の世祖を元主忽必烈など書き、其の崩をば殂と改め、日本外史も、之に倣ひ、明の神宗を明主朱翊鈞、朝鮮の宣祖を韓王李昭と云へり。これより内外を顚倒する弊風全く已みて、外國の君主を貶黜することを皇國に忠

義なるが如く心得るに至れり。然しながら今日より考ふるれば、彼より無禮を加へたるに由りて、我よりも其の報復として、彼の天下を呼下しにせんと云ふは、いかにも大人げなき爲方なり。且報復ならば被害の度に相應せざるべからず。彼は我を夷狄として、天皇の崩を死と云ひたるに、我は、殂を以て之に報ひては、割の合はぬ咄なり。通鑑の書法にては、四海を奄有する者には崩と書き、分治する者には殂と書き、綱目の凡例崩葬の條には「正統曰崩、僣國之君稱帝者、曰某主姓某卒、無統之君稱帝者曰某主某殂、蠻夷君長曰死、盗賊酋帥曰死」とあり。大日本史は、支那の天子を何と見たるか。僣國之君ならば、卒と云ふべし、無統之君ならば、上に天子なきなり。通鑑の分治者も、義同じ。天皇儼然として上にましませるに、分治無統の例を用ひば、支那の天子を帝とせざるのみならず、天皇をも認めざる事とならん。

方今各國の交際益々親密になり、外國の君主の事を記するに、キングも、ロハも、シャーも、スルタンも皆皇帝と譯して、天皇の御事を記するが如き尊敬の語を用ふる事となりたるに、支那の前代の帝王を記するにのみ、大日本史の筆法を用ふるはいかゞ。前代の帝王に關しては、何方よりも不足を訴へらるゝ氣遣なけれども、死人の屍を鞭うつが如きは、勇者の事に非ず、朝鮮國の先王の事も、日本外史の韓王李昖などは已めて、宣祖とか昭敬王とか云ふべきなり。これらは、今の王室の祖宗なれば李昭など云ひては今の王室に對して不敬なり。

支那婦人纒足の起原

本篇は明治三十一年六月發行の史學雜誌第九編第六號に掲載せられたるものにして、考證精密、支那風俗史研究者の必ず參考すべきものなり

支那婦人纒足ノ起源

支那ノ男子ノ辮髮ト婦人ノ纒足トハ、世界ノ開明諸國ノ風俗ノ中ニテ最モ奇異ナル者ニシテ、其起原沿革等ヲ考究スルハ、頗ル興味アル事ナリ。辮髮ハ鮮卑・突厥・女眞・蒙古ノ舊俗ニシテ、金ノ太宗ノ時一タビ辮髮ノ令ヲ布キテ、漢人ヲシテ其ノ俗ニ從ハシメント欲シタリシカドモ、十分ニ行ハレズシテ止ミタリシガ、清朝興ルニ及ビテ、城ヲ降シ地ヲ略スル每ニ、薙髮ヲ以テ降服ノ證トシ、薙髮セズンバ、大清ノ義民タルコトヲ許サズト令シ、誅殺ヲ以テ脅迫セシガ故ニ、所謂歸正ノ漢民等ハ、ギウノネモ出シ得ズシテ、我レ先キニトチヤン〳〵坊主ニナリ、「五帝三王自立ノ中國」、衣冠禮樂ヲ誇レル「華夏」數千萬ノ民、哀レニモ十餘年ノ間ニ辮髮胡服ノ俗ニ化シ了レリ、此等ノ事ハ、史傳ニ委シク見エテ、昭々タル事蹟ナレバ、今ハ詳述セズ。

婦人纒足ノ事ハ、紀傳ニモ編年ニモ別史雜史等ニモ見エザレバ、其ノ起原ノ時代モ分明ナラズ。此ノ俗ハ一國ノ風俗ノ上ニ於テ頗ル重大ナル事ナレバ、社會ノ事體ニ注意スル者ノ等閑ニスベカラザル筈ナルニ、彼ノ國ノ史家ハ、國ノ治亂興廢ニ直接ノ關係アル事ヲノミ重ンジテ、女ノ足ナドノ事ハ、臙脂白粉ト同樣ニ心得、閨幃ノ瑣事トシテ顧ミズ。サレバ其ノ起原沿革ヲ考ヘンニハ、稗史小説ノ類ニ求メザルコトヲ得ズ。

先ヅ明ノ商維濬ガ稗海ニ收メタル宋ノ張邦基ガ墨莊漫錄第八卷ニ云ク、「婦人之纒足、起於近世、前世書傳、皆無所自、南史、齊東昏侯、爲潘貴妃鑿金爲蓮華以帖地、令妃行其上、曰此步々生蓮華、然亦不言其弓小也、如古樂府玉臺新詠、皆六朝詞人纖艶之言、類多體狀美人容色之殊麗、又言妝飾之華、眉目脣口腰肢手指之類、無一言稱纒足者、如唐之杜牧・李白・李商隱之徒、作詩多言閨幃之事、亦無及之者、惟韓偓香奩集、有詠屧子詩云、「六寸膚圓光緻々」、唐尺短、以今校之、亦自小也、而不言其弓」ト云ヘリ。余ノ見タル所ニテハ、此レゾ纒

足ノ名ノ書ニ見エタル始メナル。緊縛セラレタル足ノ形ヲ弓形ト云フモ、此ノ文ヨリ始マレリ。張邦基ハ宋ノ宣和・紹興ノ頃ノ人ナレバ、南宋ノ初ニハ此ノ俗ノ行ハレタルコト明カナレドモ、此ノ説ニ據レバ、唐末マデハ、縱令足ノ小キヲ好ムトモ、縛リテ弓形ニスルコトハ無カリシ趣ナリ。

然ルニ宋ノ阮閲ノ編輯セル詩話總龜ニ、唐ノ明皇、蜀ヨリ回リテ、楊貴妃ノ遺セル羅襪ノ銘ヲ作レルコトヲ載セ、其ノ銘ニ「羅襪羅襪、香塵生不絶、細々圓々、地下得瓊鉤、窄々弓々、手中弄初月、又如脫履露纖圓、恰似同衾見時節、方知淸夢事非虛、暗引相思、幾時歇」トアリ。細々圓々ト云ヒ、窄々弓々ト云ヒ、初月ト云ヒ、纖圓ト云フハ、何レモ羅襪ヲ形容セル辭ナレドモ、羅襪ノ弓纖ナルハ、直チニ足ノ弓纖ナルコトヲ證スベシ。此ノ書ハ、宣和五年ニ成リテ、墨莊漫錄ヨリモ早ケレドモ、此ノ銘ノ事ハ、趙翼ノ陔餘叢考ニモ後人附會ノ詞ナラントアリテ、玄宗老後ノ自製トモ思ハレザレバ、纏足ノ證ニハ取リ難シ。

又元ノ林坤ガ誠齋雜記(津逮祕書第九集)ハ、誠ニツマラヌ書ナルガ、其ノ中ニ、杜牧ノ詩ナル「鈿尺裁量減四分、纖々玉笋裹輕雲、五陵年少欺他醉、笑把花前出畫裙」ヲ引キテ「若曰纖々玉笋、似此時已纏足矣」ト云ヘリ。此ノ詩モ、前ノ韓偓ノ詩ト同ジク、足ノ纖小ヲ賞メタルニ似タリ。(陔餘叢考ニ此ノ詩ヲ引キテ、「周達觀引之、以爲唐人亦裹足之證」ト云ヘリ。其ハ誠齋雜記ニ周達卿ノ序アルヲ見テ、フト著者ト誤リ、又達卿ノ名ヲ眞臘風土記ノ著者ナル周達觀ニ誤リタルナリ。)

又明ノ陶宗儀ガ輟耕錄第十卷ニ纏足ト題シテ、墨莊漫錄ノ文ヲ引キテ、サテ其ノ次ニ「道山新聞云、李後主宮嬪窅娘、纖麗善舞、後主作金蓮高六尺、飾以寶物細帶纓絡、蓮中作品色瑞蓮、令窅娘以帛繞脚、令纖小屈上、作新月狀、素襪舞雲中、回旋有凌雲之態、唐鎬詩曰、「蓮中花更好、雲裏月長新」、因窅娘作也、由是人皆效之、以纖弓爲妙、以此知札脚、自五代以來方爲之、如熙寧元豐以前、人猶爲者少、近年則人々相效、以不爲

者爲恥也」ト云ヘリ。道山新聞ノ文ハ、以纖弓爲妙マデニシテ、纏足ノ起原ヲ南唐後主李煜ノ時ト定メタル説ナリ。「以此知」ヨリ以下ハ、陶宗儀自家ノ辭ナリ。宗儀ハ明ニ仕ヘタレドモ、輟耕錄ヲ作リシハ、元末ノ事ナレバ、元末ノ世ニハ、既ニ人々相傚ヒ、爲サヾルヲ恥ヅル程ニ爲レリト見ユ。

カヽル流行ノ中ニ在リテモ、毅然トシテ古風ヲ守リ、薄俗ニ從ハザリシ人モ有リト見エテ、元ノ白珽ガ湛淵靜語第一卷(知不足齋叢書第九集)ニ「伊川先生六代孫淮、咸淳間爲安慶倅云々、淮之族尙蕃居池陽、婦人不纏足、不貫耳、至今守之」トアリ。サスガハ道統ノ傳ヲ繼ゲリト稱セラルヽ大儒ノ苗裔、サモアルベキ事ナリ。サレド此レモ、唯昔ノ咄トナリテ、今ハ程朱ノ子孫ハ、言フマデモ無ク、曲阜ノ聖裔スラモ、男ハ辮髮、女ハ纏足、古風蕩然トシテ地ヲ拂ヘリ。

元ノ伊世珍ガ瑯環記中卷(津逮祕書第九集)ニ、姚鸞尺牘ヲ引キテ、「馬嵬老媼、拾得太眞襪以致富、其女名玉飛、得雀頭履一隻、眞珠飾口以薄檀爲苴、長僅三寸、玉飛奉爲異寶、不輕示人、則纏足必在貴妃之先、足下所記女子纏足起于李後主窅娘新月狀、似未深考矣」。又修竹閣女訓ヲ引キテ、「李壽問于母曰、富貴家女子必纏足、何也、其母曰、吾聞之、聖人重女、而使之不輕擧也、是以裹其足、故所居不過閨閾之中、欲出則有帷車之載、是無事于足者也、聖人如是防閑、而後世猶有桑中之行、臨邛之奔、范雎曰、裹足不入秦、用女喩也」トアリ。姚鸞ノ尺牘ハ、輟耕錄ニ引ケル道山新聞ノ著者ニ遺レル手紙ノ趣ナリ。此ノ二説ニ據レバ、纏足ノ俗ハ唐ノ世ニ行ハレタルノミナラズ、聖人ノ制ニシテ、上古ヨリ行ハレタリト云フナリ。然レドモ姚鸞モ李壽母子モ、何人ナルカモ明カナラズ、其ノ尺牘ト云ヒ、修竹閣女訓ト云ヘルモ、有無ノ程モ覺束ナシ。四庫全書總目子部雜家類雜纂之屬存目ニ瑯環記ヲ評シテ、「舊本題元伊世珍撰、語皆荒誕猥瑣云々、所引書名、大抵眞僞相雜、蓋亦雲仙散錄之類、錢希言戲瑕、以爲明桑懌所僞託、其必有所據矣」ト云ヘル如ク、此ノ書ハ、イカニモ怪

シキ書ナレバ、聖人ノ制ト云ヘルハ、更ニモ云ハズ、楊貴妃ノ履ノ話モ、信ズルニ足ラズ。

明ノ學者ニハ、纏足ノ起原ヲ述ベタル人頗ル多シ。中ニモ楊愼ハ、著述極メテ多キ人ニテ、其ノ書中往々纏足ニ說キ及ベリ。楊愼ハ、嘉靖中大禮ノ議ヲ爭ヒテ、雲南ニ竄セラレ、其ノ謫居ノ間ニ、丹鉛餘錄十七卷丹鉛續錄十二卷、丹鉛閏錄九卷ヲ著シ、又諸錄ノ要ヲ摘ミテ、丹鉛摘錄十三卷ヲ作リシガ、後其ノ門人梁佐、諸錄ヲ裒メテ一編トナシ、重複ヲ刪除シテ、二十八類ニ分ケ、題シテ丹鉛總錄ト云ヘリ。愼又別ニ譚苑醍醐九卷ヲ著セリ。此レモ、丹鉛諸錄ト相似タル書ナリ。

サテ婦女ノ足ニ關シテハ、丹鉛總錄（楊氏敎忠堂刻本）第十七卷身體類ノ處ニ、素足女ト題シテ、「太白浣沙女詩、「一雙金履齒、兩足白如霜」、又越女詞云、「屐上足如霜、不著鴉頭襪」、又云、「東陽素足女、會稽素舸郎」、予嘗戲謂、「太白何致情廻盼此素足至再三」、張愈光戲答云、「太白可謂能書不擇筆矣」、聊記以餉一笑、予嘗題浣女圖詩、純用太白語意、「紅頭素足女、兩足白如霜、不著鴉頭襪、山花屐齒香、天然去雕飾、梅岑山月糙、肯學邯鄲步、匍匐壽陵傍」、蓋竊病近學詩者、拘束蹈襲、取姸於拙、不若質任自然耳」ト云ヒ、又同書第十八卷詩話類ノ處ニ、「李白詩、「東陽素足女、會稽素舸郎、相看月未墮、白地斷肝腸」、按謝靈運有江中贈答二首云「可憐誰家婦、綠流洗素足、明月在雲間、迢々不可得」、答詩云「可憐誰家郎、綠流乘素舸、但問情若爲、月就雲中墮」太白蓋全祖之也、而注不知引」ト云ヘリ。

此等ハ、謝・李ノ詩ニ見エタル素足ノ故事ヲ擧ゲタルノミニテ、當時纏足ノ有無ニハ論及セザレドモ、同書第二十五卷項語類ノ處ニハ、「墨莊漫錄、載婦人弓足、始于五代李後主、非也、予觀六朝樂府、有雙行纏、其辭云、「新羅繡行纏、足趺如春姸、他人不言好、獨我知可憐」、唐李牧詩云、「鈿尺裁量減四分、碧琉璃滑裹春雲、五陵年少欺他醉、笑把花前出畫裙」、段成式詩云、「醉袂幾侵魚子纈、彩纓長戛鳳凰釵、知君欲作閑情賦、應願將身作錦鞋」、花間集詞云、「慢移弓底繡羅鞋」、則此飾不始于五代也、或謂起于妲己、乃瞽史以欺閭巷者、士大夫或信以爲眞、赤可笑哉」」ト云ヘリ。李後主ノ談ハ、道山新聞ニ見エタル事ナルヲ、墨莊漫錄ト云ヒタルハ輟耕錄ノ文ヲ讀ミテ、フト見誤リタルナリ。雙行纏又妲己ノ事ハ後ニ云フベシ。

又譚苑醍醐第三卷（函海第十二函）ニハ、弓足ト題シテ、猶許多ノ例證ヲ擧ゲタリ、其ノ文ニ云ク、「墨莊漫錄、考婦女弓足、起於李後主、予按樂府雙行纏、知其起於六朝、張愚山云、「史記云、「臨淄女子彈弦躧屣」、又云、「搖修袖、躡利屣」、意古已有之」、再考襄陽耆舊傳云、盜發楚王冢、得宮人玉屐、張平子賦云、「金華之寫、動趾遺光」、又云、「履躡華英」、又云、「羅襪躡蹀而容與」、曹子建賦、「羅襪生塵」、焦仲卿妻詩、「足躡花文履」、繁欽詩、「何以釋憂愁、足下雙遠遊」、梁武帝莫愁歌、「足下絲履五文章」、卞蘭美人賦、「金蕖承華足」、陶潛賦、「願在絲而爲履、附素足以周旋」、崔豹古今注、晉世履有鳳頭重臺分稍之制、唐詩、「便脫鸞靴出翠帷」、又麗情集、載章仇公鎭成都、有眞珠之惑、或上詩以諷云、「神女初離碧玉階、彤雲猶擁牡丹鞋、應知子建憐羅襪、顧步裵衣拾墜釵」、李義山詩、「浣花牋紙桃花色、好々題詩詠玉鉤、陶南村謂、唐人題詠、略不及之、蓋亦未之博考也」ト云ヘリ。「臨淄女子、彈弦躧屣」、又「搖修袖、躡利屣」トアルハ、史記貨殖傳ニ「倡優女子、鼓鳴瑟跕屣」、又「趙衞女子、揄長袂、躡利屣」ト云ヘルヲ誤リタルナリ。「唐人題詠、略不及之」トハ、陶宗儀ガ引キタル墨莊漫錄ノ語ヲ指シタルナリ。此ノ文ハ、婦女ノ履屣鞋襪ノ例ヲ數多擧ゲタレドモ、李商隱ノ玉鉤ノ外ハ弓足ノ事ヲ詠ジタル者ナシ。鞋襪ノ制ニ就キテハ喧シキ論アル事ナレバ、鞋襪ハ弓足ニ限ルト云フコト確定セザル間ハ例證イカニ多クトモ、其レヲ以テ直ニ纏足ノ證トハ爲シ難シ。

明ノ胡應麟ガ少室山房筆叢ノ續集ニ丹鉛新錄十卷アリ。此ノ書ハ專ラ楊愼ノ丹鉛諸錄ノ說ヲ駁センガ爲ニ作リタル者ナレバ、纏足ノ起原ニツキテモ、辨難數千言ニ及ベリ。其ノ論叫囂ニ近ケレドモ、纏足鞋襪ノ故

實ニ關シテ叙述頗ル詳明ナレバ、其ノ要旨ヲ左ニ引カン。

丹鉛新錄第八卷ニ、雙行纏ト題シテ、楊愼ガ六朝樂府以下ノ詩ヲ擧ゲタル一章ヲ引キテ之ヲ駁シ、「樂府雙行纏、蓋婦人以裹襪中者、卽俗談裹脚也、唐以前、婦人未知札足、勢必用此、與男子同、男子以帛、婦人則羅爲之、加文繡爲美觀、以蔽於襪中、故他人不言好、獨所懽知之、語意明甚、考御覽履詩云、「足躡承雲履、豐趺皎春錦」、夫足趺不言小而言豐、則古婦人不纏札、可決千載之疑矣。

「杜牧之詩、「纖々玉筍裹春雲」、見合璧事類、楊作碧琉璃滑、誤也婦人纏足、實當起于此時、幷楊所引花間詞商隱絕可證、然合璧引杜詩、乃入襪類、恐唐人自以足指爲玉筍、非必以弓纖也、（牧集亦作詠襪詩、楊誤。）自墨莊漫錄、以纏足始五代、諸小說所見皆同、余舊頗疑之、因考古昔詩詞、如螓首蛾眉、犀齒蟬鬢、桃腮杏臉、櫻口柳肢、凡婦人一身、靡頂放踵、亡不極意形容、而足者、當今自面目外、便爲第一義、宋元間詠婦人、擧筆關涉、六朝前文士、詎容全置弗言、宋玉登徒賦、婦人之陋極矣、而不云其足之巨、陳思甄后賦、婦人之姸極矣、而不云其足之纖、又史傳所載古今美婦人、必有大異于衆者、果六代前知纏足、則積習之久、其創意出奇、豈無一二殊絕、而史傳杳不聞、又楚宮之腰、漢宮之髻、皆以風俗崇尙、昭灼簡書、至足之弓小、今五尺童子、咸知艷美、當時寧無一酷好者、而靈運太白、沾々素足之女、俾千載風流之案、迨老鈇而發耶、觀木蘭歌、始終改服、足則其變革之大者、而俱置之、餘可概見矣。

「唐以前、婦人足與男子無異、則足之服製可知、子建所稱羅襪、成式所賦錦鞋、大槩與男子同、或加文繡耳、今世纏足已久、不稱則衆揶揄之、當六代前、不以爲人妖乎、莊周云、「四者孰知正色」誠然哉自昔人以羅襪詠詩女子、六代相承、唐詩尤衆、至楊妃馬嵬所遺、足徵唐世婦人皆著襪、無疑也、然今婦人纏足、其上亦有半襪罩之謂膝褲、恐古羅襪或此類、載考唐人雜說云、「崔彥昭與王凝、中表有隙、後彥昭相、其母勅婢、多製襪履、

曰「吾妹必與子皆逐、吾將共行」、彥昭因不敢爲怨」、夫男子之行多則敝、使如今之膝褲、卽遠行、何以多爲、據崔母所言、則唐世婦人之襪、誠與男子無異、而兩京六代皆瞭然矣、（「玉階生白露、夜久侵羅襪」、「淥水不沾衣、香塵惜羅襪」、皆唐詩、餘尙衆。）曹子建賦、「踐遠遊之文履」、又繁欽詩、「足下雙遠遊」、蓋魏晉間、履名遠遊也、夫今之婦人、足尙弓小、卽跬步難之、豈宜以遠遊名履著第令婦人纖足善走、然深居壺閣、亦不宜名履、遠遊蓋據男子履名、婦人共之、繁詩曹賦、因寄之題詠耳。

「又御覽云、「昔製履、婦人圓頭、男子方頭、蓋作意欲別男女也、太康婦人、皆方頭履、男子無異」、按今婦人履、與男子絕殊、卽欲爲方頭、與男子同、何可得、而御覽之言若此、則六代前婦人之履斷可識矣、道山新聞云、「李後主宮嬪窅娘、纖麗善舞、以帛繞脚、屈上如新月狀、由是人皆效之、以此知札脚五代以來方有之、如熙寧元豐前、人猶爲者少、近年則人々相效、以不爲者爲耻也」、右墨莊漫錄所引、據此、則宋初婦人、尙多不纏足者、蓋至勝國、而詩詞曲據、亡不以此爲言、于今而極、然美色愈無問矣」ト云ヘリ。コヽニ墨莊漫錄ト云ヘルハ、輟耕錄ノ誤リナリ。又「以此知」ヨリ以下ハ、陶宗儀ノ附記シタル語ナルヲ、コレヲモ道山新聞ノ語トシタルハ誤レリ。

又同卷ニ、素足女ト題シテ、彼ノ詩話類ニ收メタル一條ヲ駁シ、「按謝・李之題素足、又皆本陶「願在絲而爲履、附素足以周旋也」、卽此知晉・唐婦人不纏足無疑、夫足素則不纖、纖則不素未有既纏之足、濯諸綠流者也。「昔題婦人足、不曰素潔、則曰豐姸、（「豐趺皎春錦」、「足趺如春姸」、是也。）夫今婦人纏足、美觀則可、其體質乾枯、腥穢特甚、使謝・李輩舍其弓纖、而誣以潔素、一何舛哉」ト咎メタリ。此ノ論ハ、少シク無理ナリ。楊愼ハ、謝・李輩ガ弓纖ノ足ヲ素足ト詠ジタリト云ヘルニハ非ズ。晉唐ノ世ニ既ニ纏足ノ行ハレタレバトテ、村里ノ婦女マデ、悉ク弓纖ト爲レルコトハ有ルベカラザレバ、「素則不纖、纖則不素」ナドト窮屈ニ考フルニハ及ブマジ。楊愼ノ意ハ、

纏足ノ風俗ノ中ニテ、素足ノ珍シキガ故ニ、李白ノ廻眄ヲ致セリト思ヒタルナリ。其ハ、愼ガ作レル浣女ノ詩ヲ見テ知ルベシ。サレドモ余ハ、楊愼ノ說ヲ善シトスルニハ非ラズ。素足ノ珍シキコトハ、纏足ノ風俗ノ中ニ限レル事ニモ非ズ、カヽル穢ハシキ風俗ノ行ハレザル我ガ國ニテモ、久米ノ仙人ガ通力ヲ失ヒシ談モアレバ、謝・李ガ素足ヲ詠ジタリトテ、當時纏足ノ行ハレタル證トハ爲スベカラズ。

次ニ太白浣沙女詩云々ト張愈光ノ戯語トヲ引キテ、之ヲ駁シ、其ノ末ニ「古今制度創革、誠有大不同者、如書籍之雕板、婦人之纏足、皆唐末五代始之、盛于宋、極于元、而又極盛于今、二事顚末絕相類、纏足、本閭韓瑣屑、故學者多忽之、因歴考其說如右、顧六代前、載籍浩瀚、或他有確證可盡破羣疑者、余固不敢執以始于唐末也、博極君子、幸共詳焉」ト云ヘリ。

又同卷ニ、弓足ト題シテ、彼ノ譚苑醍醐ノ文ヲ擧ゲテ、「卽揚此條所引、益見唐以前婦人無札足者也」ト云ヒ、且「履也屣也屧也屩也、四者小異而大同、古男子婦人共之、蓋其形製、不甚懸絕、自唐宋五代纏足、遂專以弓鞋屬之婦人、而履屣屧屩、皆歸之男子、考用修所引秦漢六朝語、躧屣、利履、玉屧、鴛靴、金華、遠遊花文章、重臺諸製、並男子同、無及于弓纖者、當時婦人足可槩見雖、鳳頭牡丹等號、類今女子所爲、然率是履上加以文繡花鳥、作此名耳、惟義山詩、較似近之、實溫・杜一時事也」ト辨ジタリ、溫・杜ノ溫ハ、溫庭筠、杜ハ杜牧ナリ。杜牧ノ詩ハ、前ニ屢引カレ、溫庭筠ハ段成式ノ詩ニ答ヘテ、錦鞋賦ヲ作リタルガ、其ノ賦中ニ纏足ノ事ヲ證スベキ字句アリ。文長ケレバ、コヽニ引カズ。楊愼ノ藝林伐山（函海第十二函）ニ見ユ。

サテ其ノ次ニ、「唐以前言婦人履屩、尙有及考者、補錄下方、其製作無大異于丈夫、亦隨代足證云」ト云ヒテ、周禮以下諸書ニ見エタル婦女ノ履屩ノ事ヲ列擧セリ。又丹鉛續錄（陳眉公祕笈）ニ履考一篇アリ、應麟其ノ遺漏多キヲ言ヒテ、雜史傳記說部ノ書ヨリ、履名履事ニ關スル文辭一百數十條ヲ引キ、其ノ末段ニ「六朝前、率草爲履、古稱芒屩、蓋賤者之服、大抵皆然、唐張志和以稷爲履、至五代蒲履盛行、九國志云「江南李昪、常履蒲靸」、是也、然當時婦人履、亦有用蒲者、劉克明嘗賦詩云「吳江々上白蒲春、越女初挑一樣新、纔自繡窓離玉指、便隨羅襪步香塵、石榴裙下從容久、玳瑁筵前整頓頻、今日高樓鴛瓦上、不知拋擲是何人」、此詩通篇詠婦人履、殊不見弓纖意、知五代女子、尙不皆纏足也、今世蒲鞋盛行海內、然皆男子服、婦人以纏足故、絕無用之者矣」ト論結セリ。

右胡應麟ノ說ハ、考證極メテ詳明ナレドモ、猶滿足セザル人アリト見エテ、沈德符ノ野獲編ニ應麟ノ說ヲ駁シタル論文一篇アリ。其ノ文ハ後ニ引ク事トシテ、コヽニハ先ヅ德符ガ弓足ノ考ヲ引クベシ。

野獲編第二十三卷婦女ノ部ニ、婦人弓足ト題シテ、「婦人纏足不知始自何時、或云始於齊東昏、則以步々生蓮一語也、然余向年覩唐文皇長孫后繡履圖、則與男子無異、友人陳眉公姚叔祥、俱有說爲證明、又見則天后畫像、其芳趺亦不下長孫、可見唐初大抵俱然、惟大曆中、夏侯審詠被中睡鞋云、「雲裏蟾鉤落鳳窩、玉郎沈醉也摩挲」、蓋弓足始見此、至杜牧詩云、「鈿尺纔量減四分、纖々玉筍裹輕雲」、又韓偓詩云、「六寸膚圓光緻々」、唐尺只抵今製七寸、則六寸當爲今四寸二分、亦弓足之尋常者矣、因思此法當始於唐之中葉、今又南唐後主爲宮婢窅娘作新月樣、以爲始於此時、似亦未然也、向聞今禁掖中、凡被選之女、一登籍入內、卽解去足紈、別作宮樣、蓋取便御前奔趨、無顚蹶之患、全與民間初製不侔、予向寓京師、隆冬遇掃雪軍士從內出、拾得宮婦敝履、相視始信其說不誣」。此ノ說ニ據レバ、釆女ノ宮樣ハ、民間ノ弓足ノ如ク緊縛セザル趣ナリ。「近年薊岡瞿徵君九思、建議御夷、中有一說、欲誘化其俗、令彼婦人習中國法、俱束縛雙足爲弓樣、使男子惑溺、減其精力、惰於擊刺、以爲此弱夷制虜妙策、予亦不知此計果有濟否、但隆慶元年、北虜攻陷山西石州、擄所得婦女、驅之出塞、惛其不能隨馬疾馳、盡則其雙足、以車載歸、百無一活、世固有不愛雙纏者、瞿君此策、亦未爲廟

勝也」。ナント恐レ入リタル妙策ニ非ズヤ。日清戰爭ノ際ニ、謀士雲ノ如クアリシカドモ、コレ程ノ妙策ヲ案出シタル人ハ無カリシ樣ナリ。ソレヲ沈德符ハ、マジメニ「瞿君此策、未爲廟勝」ト云ルモ、バカゲタル話ナリ。楊愼ハ、浣女ノ天然去雕飾ヲ讃シ、胡應麟ハ、體質乾枯、腥穢殊甚ト云ヘルニ、德符ハ、北虜ノ雙纏ヲ愛セザルヲ異シム。蓼食フ蟲モ、己ガスキ〳〵ナリ。人情不相遠ト云フハ、信ズベカラズ。

猶前文ノ續キ「近日刻雜事祕辛、紀後漢選閱梁冀妹事、因中有約束如禁中一語、遂以爲始於東漢、不知此書本楊用修僞撰、托名王仲文得之土酋家者、楊不過一時游戲、後人信書太眞、遂爲所惑耳」トアリ。約束如禁中ハ、漢雜事祕辛（津逮祕書第十集）ノ文ニ「足長八寸、踁跗豐妍、底平指斂、約縑迫袜、收束微如禁中」トアリテ、縑ヲ以テ足ヲ縛リテ禁中ノ風ニ爲セリトノ意ナリ。此ノ書ハ、楊愼ノ題辭ニ依レバ、王仲文ガ土酋家ニ得タリト云ヘルニハ非ズ、王ノ遺シタル書ヲ楊ガ土酋家ヨリ得タリト云ヘルナリ。

楊愼ノ題辭ハ下ノ如シ。「漢雜事一卷、得于安寧州土知州董氏、前有義烏王子充印、蓋子充使雲南時篋中書也、然御覽諸書、亦有漢雜事、而略不見收、此特、載漢桓帝獻梁皇后被選、及六禮冊立事、而吳姁入后燕處審視一段、最爲奇豔、但太穢褻耳、不謂冀威赫震人、猶得濆選如此、卷首有祕辛二字、不可解、要是卷帙甲乙名目、余嘗搜考弓足原始不得、及見約縑迫袜、收束微如禁中語、則纏足、後漢已自有之、言脫于口、追駟不及聊志于此、用塞疎漏之誚」。楊愼ハ旣ニ樂府ノ雙行纏ニ由リ弓足ノ六朝ヨリ始レル事ヲ言ヒタレドモ猶張愈光ノ說ニ從ヒ、史記ノ躧屣利履マデモ弓足ノ證トサ爲ント欲セシガ故ニ、更ニ確證ヲ示シテ、其ノ說ヲ成リ立タシメンガ爲ニ、此ノ書ヲ僞作セシニ似タリ。胡震亨、其ノ題辭ノ後ニ一論ヲ添ヘ、此ノ書ノ事蹟、正史ト舛誤セル者數條ヲ擧ゲテ、此ノ書ノ疑フベキ事ヲ辨ジ、又姚士粦ノ跋ハ、此ノ書ヲ僞作トハ云ハザレドモ、猶事蹟ノ正史ニ違ヘルコトヲ指摘セリ。サレバ四庫書目小說家類雜事之屬ニ、「漢雜事祕辛一卷、不著撰人名氏、楊愼序稱得於安甯土知州萬氏、沈德符敝帚軒剩語曰、卽愼所僞作也、叙漢桓帝懿德皇后被選及冊立之事、其與史舛謬之處、明胡震亨姚士粦二跋、辨之甚詳、其文淫艷、亦類傳奇、漢人無是體裁也」ト云ヒテ、存目ノ部ニ黜ケタリ。

然レドモ明末ニハ、此ノ書ヲ信ジタル人モ多カリキト見エテ、四庫書目雜家類雜說之屬存目ニハ、謝肇淛ノ文海披沙ヲ評シテ、「纏足一條、引雜事祕辛、亦不知爲楊愼依託」ト云ヒ、又雜家類雜考之屬存目ニハ、錢希言ノ戲瑕ヲ評シテ、「是書皆考證之文、…書中頗以博識自負、而所言茫昧無徵、如婦人纏足一條、不知祕辛爲楊愼僞撰、已爲失考、復云、「余見一書、稱纏足始於帝辛妲己、妲己狐妖、故纏其足、此說最古、要必有據云々」、…不知一書者竟何書也」ト云ヘリ。（戲瑕ハ、余未ダ見ズ。陶珽ノ摘說郛第二十五ニ、收載シタレドモ、鈔錄ニシテ全書ニ非ザレバ、纏足ノ條モ見エズ。尤四庫書目ノ評ノ如クナレバ、全書ヲ見ル必要モナシ。）妲己纏足ノ談ハ其ノ書名ヲ擧ゲザルヲ見レバ、錢希言ガ想像ノ說ニシテ、一書ト言ヘルハ、依託ノ言ナルベシ。然レバ丹鉛總錄ノ弓足ノ條ニ「或謂起于妲己云々」ト云ヘルハ、此ノ戲瑕ノ言ヲ指シタルニテ、楊愼ヨリ後ニ出デタル說ナリ。彼ノ語ハ、楊愼自編ノ丹鉛諸錄ニハ見エズシテ、梁佐ガ哀集セル總錄ニノミ見ユレバ、梁佐ノ附記シテ、戲瑕ノ說ヲ駁シタル者ナルベシ。

雜事祕辛ノ爲ニ、談ハ稍橫道ニ入リタリシガ、今一度野獲編ニ立戾ルベシ。婦人弓足ノ章ノ次ニ、胡元瑞論纏足ト題シテ、「楊用修謂、婦人纏足、始於六朝、以樂府雙行纏爲據、其說誠誤、友人胡元瑞駁之、不遺餘力、因引晉人男方頭履女圓頭履爲證、又云、「宋齊以後、題詠婦人足者甚多、並不及其纖小」、然無實證以折之、按梁武帝弟臨川王蕭宏、與帝女永興公主私通、遂謀弒逆、許事捷以爲皇后、永興主使二僮衣婢服入弒、及升階、僮踰限失屨、閤帥令輿人八人抱而擒之、搜僮得刀、乃殺二僮、夫僮可爲婢服且失屨、則足之與男子同可知、當時梁去唐不遠、是一大證佐、而元瑞未之及也、元瑞又引道山新聞、以爲始於李後主宮嬪窅娘、似不始

於中唐、則又與自所引杜牧詩相背馳矣、一人持論、尙游移無定見乃爾、何以駁正前人耶、予已紀弓足、因再閱元瑞説、又訂之如此」ト云ヘリ。此ノ論ハ、撃ツコトハ强ク撃チタレドモ、狙ヒハ迯レタリ。德符ノ一大證佐ト誇レル事モ、見樣ニ由リテハ、證佐トナラズ。一僮ガ婢服ヲ衣タリトテ、足マデ婢ノ屨ヲ穿キタリトハ見エズ。宮女ノ衣服ハ、長クシテ足ヲ覆ヘズ、屨ハ男子ノヲ用ヒテゴマカシタルニハ非ズヤ、屨ヲ失ヒタルトタンニ見附ケラレタリトスレバ、却テ足ノ同ジカラザル證佐トモ爲ルベシ。胡應麟ハ、實ニ道山新聞ノ語ヲ引キタリ。サレドモ其ハ、宵娘ニ始マレリト云フ説ヲ取レルニ非ズ、「如熙寧・元豐以前、人猶爲者少」ノ語ニ由リテ、「宋初婦人、尙多不纏足者」ト云ハンガ爲ナリ。下文ニ「唐末五代始之、盛于宋、極于元」ト云ヘルヲ見テモ、其ノ持論ノ游移セザルヲ知ルベシ。應麟ハ、又劉克明ノ蒲履ノ詩ヲ引キテ、「五代女子、尙不皆纏足」ト云ヘリ。コレモ「皆」ノ字ニ注意セズバ、持論游移ノ疑ヒヲ起スベシ。畢竟應麟ノ唐末ト云フモ、德符ノ中唐ト云フモ、相去ルコト遠カラズシテ、楊愼ノ六朝説ヲ非トスルハ同一ナレバ、後者ハ前者ヲ賛シテ、其ノ不備ヲ補フベキ筈ナルニ、同説ノ友人ニ對シテ、カヽル駁撃ヲ加ヘタルハ、德符ガ人ノ論文ヲ精讀セザリシ過チナリ。

序ニ野獲編ニ見エタルチヤン〱ノ穢キ話ヲ一言スベシ。同ジ第二十三卷妓女ノ部ニ、妓鞋行酒ト題シテ、「元楊鐵厓、好以妓鞵纖小者行酒、此亦用宋人例、而倪元鎭以爲穢、每見之輒大怒避席去、隆慶中、雲間何元朗、覔得南院王賽玉紅鞋、每出以觴客、坐中多因之酩酊、王弇州至作長歌以紀之、元鎭潔癖、固宜有此、晚年受張士誠囊漬之酷、可似引滿香尖時否」トアリ。履雖鮮不加於枕ト云フ古諺ヲ知レル國民ニシテ、妓女ノ舊鞋ヲ觴ニ用フルトハ、アキレ果テタル話ナラズヤ。然ルヲ嘉靖七才子ノ巨擘ト稱セラルル王世貞マデ、之ガ長歌ヲ作リテ得意ガルニ至リテ、實ニ批評ノ下シ樣ナシ。カヽル連中ハ、名妓ノ虎子ニテモ得タランニハ喜ビテ飯櫃ニ用フルナラン。沈德符ハ、此ノ事ヲ記シテ、風俗ノ卑陋ヲ慨歎スルカト思ヘバ、サニハ非ズシテ、倪元鎭ヲ潔癖ト名ヅケ、詼謔ノ詞ヲ用ヒテ謿笑セリ。サレバ德符モ、臭穢ヲ知ラザル蛆蟲ノ連中ナルベシ。

清ノ世ニ至リテハ、莆田ノ余懷ガ婦人鞋襪考アリテ、檀几叢書第三十一卷ニ載セタリ。此ノ考ノ材料ハ、多クハ楊愼・胡應麟ニ出デ、纏足ノ起原ハ、輟耕錄ノ説ニ從ヒテ、李後主ノ時トシ、夏侯審・杜牧・温庭筠・李商隱等ノ詩句ヲモ考ヘズ、考證疎漏ニシテ取ルベキ所ナシ。又此ノ考ノ後ニ、費錫璜ノ跋アリ。余懷ノ説ヲ疑ヒテ、纏足ノ古俗ナルコトヲ述ベタレドモ、主トシテ引用セル書ハ、雜事祕辛、瑯環記ノ類ニシテ、確證トスベキ者更ニ無ク、其ノ價値ナキコトハ、余懷ノ考ニ異ナラズ。

高士奇ノ天祿識餘上卷説鈴後集第十二卷ニモ弓足ノ論アリ。先ヅ纏足ノ新古ニ關スル諸説ヲ引キテ、次ニ「相傳起於東昏使潘妃以帛纏足、金蓮貼地、行其上、謂步々生蓮花、然石崇屑沈香爲塵、使姬人步之無迹、殆己先之矣、又如引史記所云利屣者、以屣首之尖銳言之也、則纏足之風、由來己久、如唐詩所云六寸膚圓光緻々、但不如後世之極纖小耳、至於弓足之稱、言纏足中斷、彎如弓形、殊不知燕趙女子、三四歲卽纏、天然纖小、並無弓形、其弓形者、嗤爲鷩頭脚、不足貴矣」トアリ。高士奇ハ有名ナル學者ナレドモ、此ノ書ハ、極メテ粗末ニテ、四庫書目雜家類雜考ノ存目ニ「是書雜採宋明人説部、綴輯成編、輾轉裨販、了無新解、舛誤之處尤多」ト云ヘル如ク、弓足ノ論モ見ルニ足ラズ。潘妃ノ故事ニ以帛纏足ノ四字ヲ加ヘタルハ、杜撰ナリ。香屑ノ迹ナキモ屧首ノ尖銳ナルモ、纏足ノ證トハ爲シ難シ。唯鷩頭脚ノ事ハ、稍異聞ニ屬スルガ故ニ、此ノ文ヲ引キタルナリ。

趙翼ノ陔餘叢考第三十一卷ニモ、「弓足ノ考アリ。先ヅ陶宗儀・胡應麟ノ説ヲ引キテ、「此皆主弓足始於五代之

說也」トシ、次ニ瑯嬛記ナル姚鷟尺牘、詩話總龜ナル羅襪ノ銘、楊愼ノ說、雜事祕辛、天祿識餘ヲ引キテ、「此主弓足起於秦・漢之說也」トシ、サテ「是二說、固皆有所據、然瑯嬛記及詩話總龜所云、恐係後人附會之說、而李白之詠素足、則確有明據、卽杜牧詩之尺減四分、韓偓詩之六寸膚圓、亦尙未纖小也、第詩家已詠其長短、則是時俗尙已漸以纖小爲貴、可知至於五代、盛行札脚耳、湛園靜語、謂「程伊川六代孫淮居池陽、婦人不裹足、不貫耳、至今守之」、輟耕錄、謂「札脚、五代以來方爲之、熙寧元豐之間、爲之者猶少」、此二說、皆在宋元之間、去五代猶未遠、必有所見聞、固非臆說也」ト云ヘリ。胡應麟ハ唐末ヲ主トシタルヲ、趙翼ガ五代ヲ主トシタルガ如ク言ヘルハ、稍違ヘリ、杜牧・韓偓ノ詩ハ、弓足ノ確證ト爲シ難クトモ、夏侯審ノ雲裏蟾鉤、李商隱ノ玉鉤、花間集ノ弓底繡羅鞋、溫庭筠ノ錦鞋賦ノ如キハ、皆弓足ノ意ヲ表出セルニ、趙翼ノ看過シテ、輟耕錄ヲノミ採レルハ、何ゾヤ。要スルニ此ノ考モ、別ニ發明セル所ナキナリ。此ノ外、淸人ニテ弓足ヲ論ジタル者アレドモ、大抵前人ノ緒論ヲ繰リ返スニ過ギザレバ、之ヲ略ス。

扨纏足ノ俗ハ宋元ノ世ヨリ盛ニ行ハレテ、明人ニ至リテハ、此ノ俗ヲ北虜ニ弘メテ、男子ヲシテ惑溺セシメント思フマデニ、其ノ形ヲ珍重シタレドモ、世固ヨリ双纏ヲ愛セザル者アリ。滿洲政府ノ目ニハ、奇異ノ感、寧醜穢ノ感ヲ與ヘタリシニヤ、康熙ノ初ニ、一タビ之ヲ嚴禁シタル事アリキ。其ハ李王逋ノ蚓菴瑣語(說鈴後集第七卷)ニ「康熙七年七月、禮部題爲恭請酌復舊典、以昭政典事、覆左都王熙琉內開、「一、順治十八年以前、民間之女、未禁裹足、康熙三年、遵奉上諭、議政王貝勒大臣九卿科道官員會議、元年以後所生之女、禁止裹足、其禁止法、該部議覆等、因于本年正月內臣部議定、「元年以後所生之女、若有違法裹足者、其女父有官者、交吏兵二部議處、兵民交付刑部、責四十板流徙、十家長不行稽察、枷一箇月、責四十板、該管督撫以下、文職官員、有疎忽失于覺察者、聽吏兵二部議處在案」、査立法太嚴、或混將元年以前所生者、捏爲元年以後、誣妄出首、牽連無辜、受害亦未可知、相應免禁止可也」。(他ノ一條ハ、康熙二年八月ノ上諭ニ因リ、鄕會試ニ八股文ヲ停止シタルヲ、來年ヨリ復八股文ヲ用ヒンコトヲ請ヘルナリ。コヽニ用ナケレバ略ス)俱奉旨依議」トアリ。此ノ文ニ據レバ、纏足ノ俗ハ、康熙三年ニ一度禁令ヲ下シタレドモ、七年ニ至リ、都察左都御史王熙ノ建議ニ依リ、禮部ヨリ議覆奏請シテ、其ノ禁ヲ解キタルナリ。東華全錄ニハ、康熙二年八月癸卯ノ條ニ、八股文ヲ停止シタルコトヲ載セ、七年七月壬寅ノ條ニ、八股文ヲ復シタルコトヲ載セタレドモ、一般ノ風俗ニ關スル此ノ大切ナル禁令ノ事ハ、一語モ言ハザルハ、異シムベシ。

此ノ禁令モ、朝令暮改ニテ、纏足ノ風ハ、依然トシテ全國ニ行ハルレドモ、邊裔ノ地ニハ、今モ猶其ノ俗ニ染マラザル處アリ。李調元ノ南越筆記(函海第二十四函)第一卷ニ「粵俗、婦女尙高髻短裙、春時以踏青鬪草爲戲、非士大夫家、大抵足皆不襪」トアリ、廣東人ノ纏足セザルコトハ、臺灣ニ居ル客家ノ風俗ヲ見テモ知ルベシ。又前ニ引キタル陔餘叢考ノ文ノ續キニ「今俗裹足已遍天下、而兩廣之民、惟省會效之、鄕村則皆不裹、滇黔之猓苗獠夷亦然、蘇州城中女子、以足小爲貴、而城外鄕婦、皆赤脚種田、尙不纏裹、蓋各隨其風土、不可以一律論也」トアリ。此ニ據レバ、兩廣ノミナラズ、蘇州ニテモ鄕婦ハ纏足セザルナリ、蘇州ハ、此ノ片輪ノ名所トモ云フベキ處ニテ、鞋ノ製作ニ最モ力ヲ盡セリ。余懷ノ婦人鞋襪考ニ「至於高底之製、前古未聞、於今獨絕、吳下婦人、有以異香爲底、圍以精綾者、有鑿花玲瓏、囊以香麝、行步霏々、印香在地者、此則服妖」トアリカヽル風俗ノ地ニテモ、其ノ周圍ニハ赤脚ノ鄕婦アルヲ見レバ、胡應麟ガ素足女ノ詩ニ據リテ、「晉唐婦人不纏足無疑」ト云ヒ、趙翼ガ「李白之詠素足、則確有明據」ト云ヘルハ拘說ナリ。唐初婦人ノ纏足セザルコトヲ知ルハ、素足女アルガ爲ニ非ズ、唐初ノ詩人、一語モ足ノ纖小ヲ詠ジタル者ナキガ故ナリ。

纏足ハ、世界ニ珍シキ奇異ノ風俗ナレバ、外國人ノ東遊シテ支那ノ事ヲ記述セル紀行地誌ノ類ニハ、此ノ俗ヲ記セザル者ナキ程ナリ。サレドモ中古ノ東遊セル西客ノ記錄ニハ、アラビヤ人ワハブ、アブザイド、イ

タリヤ人マルコポーロノ如キモ、纏足ノ事ヲ一語モ言ハザリシガ、フライアルオドリクニ至リテ、始メテ此ノ奇俗ニ注目シテ、其ノ紀行ニ載錄セリ。其ハ、蠻子ノ一富人ノ奢侈ノ狀ヲ述ベタル後ニ、「且ツ此ノ國ニテハ、爪ヲ長クスルコトハ、縉紳ノ印ニシテ、或ル人ハ拇指ノ爪ヲ伸バシテ、手ヲ環ラシムルニ至レリ。而シテ婦人ノ甚ダ美ナルハ、足ノ小キニ在リ。是ノ故ニ女子生ルレバ母ハ、直チニ其ノ足ヲ緊シク縛リテ、小シモ長ズルコト能ハザラシムルヲ習慣トセリ」ト云ヘリ(コロネルノカセイ　第一冊オドリク紀行第四十六章)。オドリクハ、西暦千三百二十四五年ノ頃(元ノ泰定帝ノ時、我ガ後醍醐天皇正中嘉暦ノ間)、支那ニ至リテ、大都ニ三年間留マリ、國ニ歸リテ後、千三百三十一年(元ノ文宗至順二年)ニ死シタレバ、其ノ纏足ノ紀事ハ、輟耕錄ヨリモ古クシテ、墨莊漫錄ニ次ギタル舊記ナリ。

纏足ノ起原ヲ述ベタル序ニ、現今ノ有樣ヲ一言シテ筆ヲ擱カン。此ノ俗ハ、既ニ數百年間モ世ニ行ハレテ、人心ニ染ミ込ミタレバ、清朝隆興ノ際ニ當リテ、政府ノ權力ヲ以テ、之ヲ禁ゼント欲シタレドモ、能ハザリキ。サレドモ文明ノ風潮ハ、イカデカ此ノ蠻風ヲ永ク看過スベケン。先年上海ニ於テ、外國ノ宣教師等、天足會ナル者ヲ設ケテ、纏足ノ天理ニ乖ケルコトヲ痛論セリ。然ルニ時運未ダ至ラズシテ、支那人ノ此ノ論ニ耳ヲ傾クル者モアラザリシガ、日清戰爭以來、支那人モ漸ク目ヲ覺マシ、政治ニモ風俗ニモ、改革ノ聲喧シク、遂ニ纏足ヲ罷メントスル論起レリ、明治二十九年、上海ノ紳士某々等主唱シテ、不纏足會ト云フ協會ヲ設ケタリ。其ノ規約ノ要點ハ、此ノ會ニ入ル者ハ、女子ハ纏足スルコトヲ得ズ、男子ハ纏足ノ女ヲ娶ルコトヲ得ズト云フニ在リ。但成長セル男女ハ、遽ニ此ノ約ニ遵ヒ難キニヨリ、八歳以上ノ男女ハ、問ハザル事トシ、會員ノ子女、現時八歳未滿ノ者ヨリシテ之ヲ實行セシムルナリ。此ノ會ノ始メテ起リシ時ハ、子女ノ婚嫁ノ不便ヲ氣遣ヒテ、入會スル者甚少カリシガ、昨秋以後、會員漸ク加ハリタレバ、子女成長ノ後、配偶ヲ擇ブニモ、サホド不便ヲ感ゼザルニ至ルベキ模樣ナリ。其ノ上昨年ヨリハ　武昌ニモ禁纏足會ト云ヘル者起リ、東西相應ジテ蠻風ヲ排擊スル事トナリタレバ、此等ノ主唱ハ、最早書生ノ空論ニテ終ル者ニハ非ザルベシ。

纏足ハ、漢人ノ舊俗ニシテ、滿淸ノ新制ニ非ザルガ故ニ、漢人ノ悟リ次第ニテ、自ラ奮發シテ之ヲ改ムルコトヲ得レドモ、辮髮ハ、滿洲ノ舊俗ニシテ、清朝ノ定制ナレバ、假令漢人ノ之ヲ厭フ者アリトモ、清朝ノ續カン限リハ、之ヲ改ムルコト能ハザルベシ。

（那珂通世遺書奥附）
非賣品

大正四年八月十二日印刷
大正四年八月十五日發行

編輯者　東京市小石川區原町百三番地
故那珂博士功績紀念會
右代表者　三宅米吉

發行兼印刷者　東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地
大日本圖書株式會社
代表者　専務取締役　宮川保全

發行所　東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地
大日本圖書株式會社
郵便振替貯金口座東京二一九番

不許複製

終